

---

Be Ambitious!!

ミラージュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B e A m b i t i o u s ! !

### 【Nコード】

N 2 5 3 7 D

### 【作者名】

ミラージュ

### 【あらすじ】

男子真っ青の空手少女・那奈、予測不可能な超天然ガール・小夜、冗談だらけの適当娘・翼、帰国子女のプチセレブ・千夏の四人を中心に進んでいく青春ドタバタストーリーです。内容の半分以上がコメディで出来てますのでお時間がありましたら気軽にご覧下さい。

## 第1話 ヨーイドン

四月、まだ朝方は肌寒い。

春休みの気たるさもまだ抜けきらず着慣れないブレザーの学生服も何か動き辛く重く感じる。

「……………なんか馴染まないなあ……………」

私の名前は渡瀬那奈、中学一年生。口は悪いがれっきとした女子である。あまり女性であるという実感はもっていないが。

私の日常はいつもまず通学路とは逆の方向に歩いていく。近所に住む幼なじみを迎えにいく為だ。

「あつ、那奈ー！ おはよー！！」

朝の気だるさを吹き飛ばすバカ元気な声。私を見つけて一直線に駆けつけてくる。

「小夜、走んなくていいって！ また転ぶから！」

ドターン！！ 顔面から見事に転倒。

「痛い」

「……ったく言わんこっちゃない、大丈夫？ 怪我不い？」

「膝すりむいたー」

「……全く、これくらいの怪我で済んだからいいけど……」

私は転んでついた学生服の砂をパタパタと丁寧に払ってやった。こんな事を毎日やっているから本当に危なっかしい。

「エヘヘッ、ありがと那奈！」

この娘は真中小夜、中学一年生。同い年の女子だけど小さい頃からドジで天然。それもハンパなレベルじゃない。

外に出れば車にハネられ川に落ちるし、家の中にいればストーブの前でうたた寝して髪の毛を燃やすし、命が幾つあっても足りないドジを平気でやらかす。

「学校着いたらちゃんと保健室行って絆創膏貰って貼つときなさいよ」

「イテテ、うん、貰ってくる！ あっ、でも杉本先生朝早くいるか

なー？」

「……ハア？」

私の呆れた顔を見ても、全く自分の言った言葉に気づかずに小夜は喋り続ける。

「だって保険の杉本先生いつも九時に学校に来るって言ってたよ？  
この前聞いたもん！」

「……あんた杉本先生って、それ小学校の保健室の先生でしょ？」

「……ほえ？」

「アンタ、どこに登校するつもり？ あたし達もう中学生なのよ？  
私達が行くのは中学校！」

「……あつ、間違えちゃった、エヘッ」

危ない危ない。この娘、本当に小学校に通学するつもりだったみたいだ。

「……エヘッ、じゃないわよ全く、間違えて小学校行っちゃうんじゃないかと思って、念の為に近くまで迎えに来るようにしたけど、まさか本当に心配通里になるなんてねえ……」

「あつ、そーなんだ！ だから那奈、いつも迎えに来てくれてんだ！  
ありがとうー！」

「……アンタねえ、勘弁してよ……」

毎度この調子である。これで今まで大きな怪我も無く生きてこれるのがホント奇跡だ。

というか、いつも私がフォローに回るからなんとかなってるのだが。

私達は子供の頃から姉妹の様に育ってきた。麋で遊ぶ時も、外で遊ぶ時もいつも私の側には小夜がいた。

私にとって小夜は妹の様な存在である。小学校でもどという巡り合わせか、六年間すべて同じクラスになった。

中学に入っても当然の様に私と小夜は同じクラスである。誰か内部で意図的に私達をくっつけてるとしか思えない偶然だ。

「ねーねー那奈、翔ちゃんは？」

「……先に行つたわよ」

「えっーなんでー？ みんなで一緒に行つた方が楽しいのにー？」

「もう中学生なんだから、みんなで仲良くお手でつないでなんてやつてられないでしょ？ クラスも違うしそれぞれ友達だっているだろっし」

「……ふーん、そうなんだー」

「そついうもんよ、男子なんて」

小夜はしばらく考え込んだ後、何かを思い付いた様に手を叩いた。

「あつ、そつだ！でもでもー、あたしと那奈はいつもお手で繋いで仲良くだよねー？」

「あーのーねー、そりゃアンタを一人にしたらどこに飛んでっちゃうかわからないからでしょ？」

「那奈はあたしの他にお手で繋いで登校するお友達いないのー？」

バシッ！！

私は小夜の頭を平手でひっぱたいた。どの口がそんな生意気な事を言うか。

「痛ーい」

「……全く、アンタは本当に……」

正直本当に頭にくる時もあるが、本人には全く悪気がない様なので不思議とあまり憎めない。小夜が小さい頃からこんな調子なので、

私が頑張って色々フォローしなくてはならない。

そのせいか周りの大人達に私が『しっかり者』というイメージを持つたらしく、よくクラスやチームのリーダーをやらされた。

正直損な役回りばかりだが、かといって他の人にこの爆弾娘の世話をさせるのは申し訳ない。もうお姉さんというより完全に保護者だ。

朝から頭痛の種を引きずりながら中学校への道のりを約三十分。結構家から遠いのだが、こんな会話をしてるうちに気付くと着いていたりするものだ。

「おつ、今日も二人で通学かい、仲がええの〜?」

「あつ、翼だー！ おつはよー!」

「……ちょ、ちょっと、いちいち抱きつかんでええちゅーねんオマエは朝から」

小夜だけでも疲れるのに、また一人やかましい女が来た。

「ねーねー、何でいつも翼も先に学校に行っちゃうの？ みんなで一緒に行こーよー?」

「アホか、朝っぱらからオマエに付きおうてられるか！ ましてや毎日なんてこっちの身が持たんわ!」

「ひどーい！ 翼冷たいよー！ ねー、那奈?」



私に話を振るな、このバカ娘。

「コイツまで一緒に通学したらアンタの面倒とコイツの話し相手、  
まとめて私が見なきゃいけないでしょ？ 勘弁してよ、全く…  
…」

「オイオイ聞いたか？ コイツの方がよっぽど冷たいわ、ウチはみんなに笑顔になって欲しくて、毎日毎日一生懸命喋つとんのに」

くだらない話にいちいち噛みついてくる。しかもコイツが言った通りわざわざ毎日毎日。

「それがウザいんだっつーの！」

「とかなんとか言つてホンマはいなきゃいけないで寂し〜んやろ、那奈ちや〜ん？」

馴れ馴れしく私の頬を指でツンツン突いてくる。私は赤ん坊の様に小さい手をバシッと払いのけて翼を睨んだ。

「ハア？ いっぺん死んでみる？」

「お〜お〜コワイコワイ、とても女の子の言葉とは思えへんわあ」

このウザいチビ娘は松本翼。中学一年生女子。コイツも小学校からの幼なじみの同級生で、しかも親同士が知り合いなので昔からよく家族で出掛けたりした。

大好きな父親が関西弁を喋るので小さい頃からそれを真似している。関西生まれでもないのにこの喋り方だから聞いてて本当に気持ちが悪いくらい。

「……アンタさあ、いい加減にその変な関西弁やめなって、聞いてて物凄く不快なんだけど？」

「はい？ 何でやねんな？ ウチはちっこい頃からこの喋り方なんやで？ いまさら今更直るかいな」

しかも人が真面目に話をしても、ふざけたりからかったりする天の邪鬼。質悪過ぎ。

「第一、ウチのオトンがこの喋り方なんやで？ これでウチが普通に喋ったらオトン号泣するわ」

「アンタの家庭の事情なんかどうでもいい！ 私が聞いててうっとうしいからやめろって言うてるの！」

「そう来るんやったらウチだってオマエの事情なんかどうでもええわ、那奈よりオトンとのコミュニケーションの方が大事やっちゅーねん！」

あー言えばこう言う、こう言えばあー言う。全く、口のやかましさ  
だけなら立派に関西人合格だ。

「……中学生にもなつてどんだけファザコン？　だからいつまでた  
っても心も身体も成長しないんだよ、チビ！」

「ちょちょちょ、ちょっと待てや！　ファザコンはええとして身体  
の成長の話は関係あらへんやろ！　何やチビってコラア！」

翼が言われてカチンとくる話はこれ。身長なら私は絶対に負けない。

「そりゃオマエはすんなり背が伸びたかも知れんがな、そんなもん  
は個人それぞれ差があるもんなんや！」

翼は身長145cmと中学生と言うにはびっくりする程に背が小さ  
く、おまけに幼女のようにペタンコな貧乳である。

対して私は女子ながら既に165cm以上の長身になった。並んで  
立つと翼の頭が私の肘掛けに丁度良い。

「オマエら見とけやホンマに、ウチはこれからグングン成長して中  
学卒業する頃には八頭身のナイスバディになったるねん！」

「ないすばてい？」

小夜が合いの手を入れる。いちいち話を膨らませなくてよろしいっ  
つの。

「おうナイスバディや！ ムチムチプリプリのバツ、キュン、ボ  
ンやで！」

「ばっ、きゅん、ぼーん？」

「そや！ 手始めにまずバストは90！」

「おー！」

「ヒップも90！」

「おー！」

「ウエストも90」

「ふとーい！」

すかさず私がオチをつける。毎度毎度の私達の常連ネタだ。……私  
達はダ ヨウ倶楽部か。

「何でやねん！ アホかお前ら！ それじゃドラム缶かビール樽や  
ないか、どアホ！」

「いいじゃない、ムッチムチカッチカチのナイスバディで」

「やかましいわ、ボケッ！」

小学生の頃からいつもこんなノリで、私は小夜の天然ボケと翼のしよーもないボケに毎日さらされている。こんな激務を義務付けられた悲劇の中学生は世界でも私一人ぐらいだろうなあ……。

「あー!!！」

「な、なんやねんな！ いきなりデカい声出して！」

小夜が突然大声をあげた。普通に喋れないのかねこの娘は？ 本当、心臓に悪いし耳の鼓膜が痛い。

「翔ちゃん発見ー！」

「あつ、ホンマや」

……悲劇の中学生、そういえばもう一人いた。

「翔ちゃんー！」

小夜は大声で名前を呼びながら、玄関で上履きに履き替えている男子学生に向かって一直線に走って行った。

ガッツ！

「ほえ？」

しかし下駄箱前のすのこに足を引っ掛け、そのまま勢いよく男子学生もろとも下駄箱に激突した。

ガンッ！ドスッ！！

「ぐえっ！！」

「イテテ、エヘッ、おはよー翔ちゃん！」

「……エヘッ、じゃねえよ小夜！ 殺す気がオマエは！ ああ、痛てえ……」

風間翔太、同い年の幼なじみの男子。私と翔太の関係はちよつと他の人間には無い訳ありなものだ。

翔太とは家庭内の事情があり、昔からお互いの家族全員で一つの家

に同居をしている。

その為、私と翔太はまるで双子の様に育てられてきた。もちろん小学校も同じだった。

そうそう、一言付け加えておくと、翔太と小夜は母親同士が姉妹なので従兄妹の関係になる。

「朝っぱらから災難やなあ翔太、ウヒヒッ」

翼がもつれて倒れ込んでいる二人を見て、楽しそうにニヤニヤしている。

何だよ、お前らもいたのかよ！　だったらボツ！と見てないで小夜の暴走を未然で止めてくれよ！」

……未然で止められたら地震予知マシンなんていらねーっての。もう神のみぞ知る天災レベルなんだから。

「ねーねーねー、何で翔ちゃんも先に学校に行っちゃうのー？　みんな一緒にいった方が楽しいじゃないん！」

「何でだよ、何でお前らと一緒に行かなきゃいけないんだよ、イヤだよ！」

「小学校の時はみんな一緒に行ってたじゃない！　なんでイヤなの？」

私は倒れ込んでいる小夜を起こして、下履きから上履きに履き替えた。

「いいじゃない小夜、翔太がイヤだって言っただから放って置けば？」

「だってみんな一緒じゃなきゃ寂しいもん！　那奈は翔ちゃんとバラバラで寂しくないの？」

「ハア？　私が？　何言っただの勘弁してよ」

「一緒に住んでのに寂しくなんか無いわなあ、那奈？　プププ」

「うるさい！」

この手の話になると喜んで余計な合いの手を入れてくるチビ翼。本当にウザったい。

「つーか翔太、たまにはアンタが小夜を学校に連れて行ってよ！」

「ハア？　何で俺が？　小夜と一緒に登校するのは那奈が自分で勝手に始めた事だろ？」

「私だって一人で気軽に通学したいの、小夜を一人で行かせたら危ないのはアンタだってよくわかってるでしょ？」



「知らねーよ、そんな事！」

「アンタ従兄妹でしょ？ 親戚なんだからちゃんと保護者しなさいよ！」

「それはいつも那奈の役目じゃなか！」

「いつから私の役目になったのよ！」

翔太と口げんかしていたら、目線よりも下から手を叩く音が聞こえてきた。

「ハイハイハイ、お二人さん、仲がええのはよくわかったから、喧嘩はこれ位にしてさっさと教室行こか、続きはお家でゆっくりやったらええかな？」

「うるさいっ！」

翔太とハモってしまった。それを見て翼はさらにニヤニヤして先に教室に向かった。

「おーおー怖いので、プププ」

私は翼と翔太とは別のクラスの一組、翔太は三組。しかし翼は隣の二組なので体育の時間は一組二組で一緒に授業を行う。

先週の授業では、男女別々に組別リレーをして私達一組が勝った。

「今日の体育のリレーでリベンジや！ 今週はウチらがキツチリ勝たしてもらおうで！」

「授業二週続けてリレー？ まさか、無いでしょ？」

そんな会話をしながら私達はそれぞれの教室に入った。

小学校と比べて、着ている服が変わっても学校に勉強しに来ている事は変わらない。

他に変わった事をいえば教室の窓から見える景色が変わったくらいか。

この学校は小高い丘の上に建っているので景色だけは非常に良い。

「退屈だなあ……」

時間が経って日も高くなり、肌寒かった気温も次第にぽかぽか陽気になって非常に眠くなる。

新学期早々にこんなに緊張感が無いのは私くらいなのだろうか。

「……じゃ次の文、真中」

「……くかー」

「……真中！ 真中小夜！」

……他に一名、私以上に緊張感が無い人間を確認。

「おい！ 真中！！！」

「……ほえ？」

「何寝てるんだお前！ 起きろ！！！」

「えっ、あつ！ご、ごめんなさい、おとーさん！」

「……お父さん？ 何だ、寝ぼけてるのかお前？」

「……あつ、間違えた……」

「ブハハハハハハ……」

教室内が笑い声に包まれる。何をやってんだかあの娘は……。

「……エヘヘッ」

「……ハア、全くもう……」

そんなこんなで二時間目が終わり、次は体育の授業。一組の教室で

男子が着替え、私達女子は二組の教室で着替える。

「へっへっん、覚悟せえよ那奈、今日はウチら二組には新戦力がおんねん」

「新戦力？」

「おう、今日転校生が来たんよ、ウチのクラス」

「えー！ 転校生！うそー！！」

小夜はその話を聞いて教室中を背伸びして見渡した。私も軽く周りを見渡したが、それっぽい生徒は見当たらない。

「なにその転校生、私より足速いの？」

「おう、間違いなく速いで〜！ なんてったって陸上選手やで！」

「……マジ？」

転校生と言っ言葉に反応した私達を見て、翼は自分の事でもないのに何か得意気に喋り始めた。

「……つかアレやでオマエら、転校生の名前聞いたらブツたまげるで？」

「えー、何で？ あたし達が知ってる人？」

「……小夜は覚えてへんやろな、昨日の夜に何食べたか忘れるくらいやし、ウチは名前聞いてすぐにピンと思い出したわ」

小夜は覚えていない、という事は最近会った人間では無いということ事だろうか？

「……誰よ？」

「まあまあ、運動場に行けばわかるわ、何か先週のリレーの話したらメツチャやる気満々になつてな、先に着替えてもう運動場に行つてしもたみたいやけどな」

「……だから誰よ？」

「会えばわかるって言つとるやろ？ オマエの反応が楽しみやなあ、ウヒヒッ」

ニヤニヤと含み笑いをしながら翼は教室から出て行った。

「……何なの？ 誰……？」

なんか変な不安と同時に、何か新しい事が始まるんじゃないかと少

しワクワクしている自分がいた。

「小夜、早く来なよ！ 授業始まっちゃうよ！」

「待ってー！ 待ってよ那奈！」

着替え終わった私達は運動場に出て背の順に整列をした。私は背が高く一番後ろなので、女子全員を簡単に見渡す事が出来る。

が、しかし、見渡す必要も無く例の転校生はすぐ隣に並んでいた。

背は私より少し小さいが長身で体格はスラッとしており足が長い。しかし、それよりも目立つのは、この学校には同じタイプが居そうに無いその容姿。

転校生特有の他校の体操着は別として、茶髪がかった長い髪を左右に束ね、整列中からして何かモデル立ち。

いかにもギャル系、いや、今というプチセレブといったところか。

私が一番苦手なタイプだ。

(……見ても誰だか全然わかんないなあ……)

翼は会えばわかると言っていたが、私には過去にも現在にも思い当たる人間が全くいない。

しばらく横目でチラチラと彼女を見ていたら、こちらの視線に気づいたみたいで突然私の方にクルッと振り向いた。

「アンタ、渡瀬那奈、でしょ？」

名乗ってもいないのに彼女は私の名前を知っている。どうやら向こうは私の事をしっかり覚えているみたいだ。

「……………そう、だけど……………」

「やっぱりねえ、翼が一番背の高い娘だと言ってたからすぐわかったわよ、でも思ってたより背が高いのね、見てビックリしちゃった」

翼に言われて私だとわかったって事は、やはり最近の話では無いか。かなり昔の小さい時の話だろうか。

「……………悪いんだけどさあ、誰？ 私よく覚えてないんだけど」

「えっ、覚えてないのお？ なんか超ショックって感じ」

……………うわっ、うぜえ、この喋り方……………

「まあ、しょうがないかなあ、ちっちゃい頃の話だし、そんなに話もしなかったしねえ、確か翔太君のお父さんのお葬式の時だったかしら？」

翔太の事まで知っていると。お葬式？　もう十年近くも昔の話だ。

「後ろ！　何喋ってる！」

私達の喋り声が大きかったみたいで、先生から注意を受けてしまった。

「ハイ、すいませ〜ん、じゃ、またあ・と・で！」

……何なんだこのキャラは。もう全然誰だかわからない。私の頭の中はさらに混乱してきた。

結局、誰だかわからないまま授業が始まった。二人一組になって小夜とストレッチをしてる間も私の頭の中は何かもやもやしていた。

「ねーねーねー、那奈、転校生の娘と喋った？　誰だかわかった？」

「……いや、全然わかんない……」

「えー！　だって翼は会えばわかるって言ってたじゃん！」

「……そんな事言っただってわからないものはわからないって！」

イラッときた私は足を広げて柔軟体操をしている小夜の背中を少し



強く押した。

「イタイイタイイタイ！ 那奈痛いよー！」

「アンタ、本当に身体堅いね……」

ふと、例の転校生の方を見ると、彼女は翼と仲良く喋りながらストレッチをしている。

どうやら二人は意気投合したみたいだ。多分、翼はすでに彼女が誰だかもうわかってるんだろうけど。

「……全然思い出せないな……」

その後の授業ではなかなか彼女と接触するが無く、結局誰だかわからずじまい。二時間あった体育授業も終わりの時間が近づいてきた。

「……じゃあ、最後はこの前やった組別リレーをまたやるか！」

……先週やったのにまたやるの？ ちゃんと授業は進んでいるのかな？

「よっしゃ！ この時を待ってたで！ 再齧はきっちりベンジしたるわ！」

翼のテンションが高い。いちいち付き合ってられないよ全く……。

やる気の無い私をよそに、先に男子のリレーが始まった。その間に私達一組女子は集まって走る順番を相談していた。

「ねえ、どうしようか」

「渡瀬さん、順番決めちゃってよ」

新学期早々から、私はいつの間にかこのクラスでもリーダーにされてしまった。私の何に期待してんのかこのクラスメイト達は。

「……この前とっしよでいいんじゃない？ とりあえず小夜までにみんなで少しリード作ってよ、最後は私が走るから」

「はい、小夜、了解しましたー！」

「アンタが一番問題なんだよ！」

男子のリレーが終わった。どうやら二組が勝つたらしい。何かクラス全体でリベンジに向けて気合いが入っている。

一組の方が足の速い女子生徒が多いので負けるなんて事は無いと思うが、何といっても前回の例がある。

前回のリレー、途中で小夜が思いつきりすつ転んで二組に追いつかれた。しかし最後は私と翼が一騎打ちで走ってなんとか私が勝った。翼はあんな小さい身体に似合わず運動神経が良く、サッカーをやっていたりするので足が速い。

しかしアンカーで私が翼を抑えればまず勝利は確定。問題はあの転校生がどれくらいの実力者なのか。

「……陸上選手だつて言つてたけど本当かな……」

パアアアン!!

わざわざスターターガンまで用意して華々しくリレーが始まった。やはり一組の方が足が速く、次第に二組とのリードが広がっていく。

「小夜、アンタの番だよ！ 今日には転ばないでよね！」

「うん！ 頑張る！」

小夜はラインの上に立ってスタンディングスタートの準備をした。が、しかし……。

「……小夜、手が逆だよ……」

「……ほえ？」

右手と右足を一緒に前に出している。いい加減にしてよ、もう……。

「ウヒヒツ、転んでも転ばんでも今日はオマエらの負けやで」

へなちょこスタートの準備をしている小夜の隣に、翼が手足をブラブラしながらスタートラインに並んだ。

「えっー、何でー？ 翼、アンカーじゃないのー！？」

「アホか小夜、どうせオマエらの考えてる事なんかお見通しや、小夜が足引っ張った分、最後に那奈が挽回する寸法やろ？」

……全くもってその通り。っーかそれしか勝つ方法が無いっっーの。

「ここで先にウチが小夜をブツちぎったるねん！」

「えっー！ ムリむり無理だよー！ あたし、翼になんか勝てないよー！」

スタートライン上で小夜がドタバタし始めた。バトンを持った前の走者がもうそこまで来ている。

「小夜、いいから走って！ ほら、バトン来たよ！」

「えっー！？」

「ほら、前向いて走れ走れ走れ！！」

バトンを渡された小夜がなんとか走り始めた。しかしやはり足は遅い、わかってはいたが遅い。

「よっしゃ！ 再齧はウチらの勝ちやな、那奈！」

遅れてバトンを受け取った翼が全力で小夜を追いかけ始めた。全く、小夜相手に大人気ない。  
しかし、かなりのリードがあるとはいえ、この速さの差なら間違いなく小夜は私の前で抜かれる。

「翼がアンカーじゃないということは、やっぱり……」

予想通り、二組のアンカーはあの転校生だった。私は無言でスターラインに並んで準備運動をした。

「アンタ、足速いんだってねえ、翼から聞いてるわよ」

「……………」

「アタシ、陸上やってるからハンパなく足速いわよ、勝てるかしら？」

しかし、私が気になるのは足の速さよりも彼女の正体。

「……ねえ、本当に誰だかわからないからいい加減教えてよ、アンタ誰なの？」

「えっ、まだわからないの？　じゃあヒントあげよっかな？」

「ヒント？」

「そう、重大ヒントよ、アタシね、千夏って名前なんだけど、名字『三島』っていつのよね」

「……………！」

はいはいはいはい、ああ、なるほど。その名字を聞いて私はすぐに理解した。私の記憶の中で『三島』という名字はあの人物しか思い浮かばない。

同い年の女の子がいるとは聞いた事があったけど、こんな娘だったとは。それよりも、同じ学校に転校してくるなんて夢にも思わなかった。

でも、これですっかり胸の支えは取れた。が、しかしリレーの戦況は極めて困難な状況になっていた。あれだけあったリードはみるみるうちに縮まり、小夜のすぐ真後ろに翼が迫っていた。

「……ハア、ハア、ハア、ハア……」

「……追いついた！ もろたで、小夜！」

……これはマズい、こうなったら奥の手を使うしかない。

「小夜、小夜！ 後ろ、後ろ！ この前の鬼チワワ犬が来てるよ！」

「……ハア！？」

全生徒が『何じゃそりや？』って顔をして私を見ている。私だってわかるかそんなもん、しかし、ちゃんと小夜には通じた。

「えっー！ うそー！ー！」

「振り向いちゃダメ！ 速く、速く走って！ 速くしないとお尻かじられちゃうよー！」

「イヤ　　ーッー！」

脅し作戦大成功。小夜はさっきよりも倍近い速さで走り始めた、というか逃げ始めた。

「何やてゝ!?!」

「うそぉゝ!?!」

翼が絶叫したのに続いて、隣で転校生も驚きの声をあげた。まあ、無理もない、これが全世界が震撼する『小夜のバカ力』なのだから。

「ほら、速く私にバトン渡して!!」

「やだヤダやだヤダやだヤダやだヤダ　――!!」

私は逃げ惑う小夜を捕まえ、無理やりバトンを奪って走り出した。

「……おい!　きつたないで、那奈!!」

「いいわ、翼!　これくらいハンデよハンデ!!」

彼女も翼からバトンを受け取り凄く速さで私を追いかけてきた。

最初はどうでもよかった組別リレーの勝敗。しかし、転校生の正体



がわかった今、私は彼女に負けたくなくなつた。  
別に私と彼女の間には何か因縁がある訳でもないしライバル視もしていない。

もしかしたら、この『負けたくない』という感情は、私達それぞれが父親から譲り受けた血の本能なのかもしれない。

私は久し振りに全力で走つた。しかし、後ろから徐々に彼女が近づいて来てるのがわかつた。

「……この娘、速い！ 速すぎる！！」

『小夜のバカ力』で出来たリードもなくなり、彼女にぴったりと真横に並ばれた。

「……捕まえたわ！」

「……くっ！」

私もこのまま抜かれる訳にはいかない。うまくカーブの内側に入つて彼女に行かれるのを必死でブロックする。

「……っもっ！しゅといわね！！」

最後の直線、私は全力で一気に駆け抜けた。ゴールの辺りで彼女に

並べたのはわかったが、どっちが勝ったかまではわからなかった。  
酸欠になった私はそのままぼったりとコースに倒れ込んだ。まとも  
に息が出来なくなる程に体力を消耗していた。

「…………ハア、ハア、ハア…………」

久しぶりに全力を出し尽くした気がする。勝ったとしても負けたと  
しても、なんか清々しい気分だ。

「…………思ってたより速いじゃない、Good job!」

「…………ハア、ハア…………」

私は差し出された手に捕まり起き上がった。しかし、こっちは虫の  
息なのに、彼女は普通に立っていて呼吸もしっかりしている。どう  
やら陸上選手というのは本当の話みたいだ。

「しっかしアンタ、負けず嫌いよねえ、きっちりインを塞いでプロ  
ツクまでしてさ」

「…………まあね」

「お父さんの影響？」

「…………さあ？」

彼女もわかっていたみたいだ。私の父親と彼女の父親の関係を。

「アタシは負けんの大っ嫌いだけどね、その辺はパパによく似てるって言われるわ」

「…………で、素人相手に全力疾走？」

「素人だろうが関係ないわよそんな事、アタシは勝てればそれでいいの」

結果優先主義か。確かに父親と良く似ているかも知れない。

「で、一組と二組、どっちが勝ったの？ 必死だったから全然わかんないんだけど…………」

「アタシはゴール前で追い抜いたつもりなんだけどなあ、どうだったのかしら？」

私達が喋っているその頃、ゴール前では翼が先生に向かってわめき散らかしていた。

「うちの勝ちやろ！ 最後絶対追い抜いたで！ なあ、先生！？」

「……正直わからん、わからんから引き分けでいいかな？」

「えっー！？ そりゃないわ！ 絶対ウチらが勝ったって！！」

翼が飛び跳ねながら必死にアピールしているが、背が小さいので他の生徒の影に隠れてしまい、先生に全く相手にされていない。

「……私達以上に勝負にこだわってるヤツがいるね……」

「……まあいいかなあ、再齧は勝ち負けどっちでもね、一部の人は三島と渡瀬、どっちが勝ったかあいまいの方がいいんじゃない？」

「……まあ、確かにどうでもいいけどね」

先生の判定に納得出来ない翼がズカズカと私達に近づいてきた。

「オイ、那奈！ 今日絶対ウチら二組の勝ちやで！ ゴール前で千夏がオマエを追い抜いたのをウチはしっかりと見とったからな！」

「……うるさいよ翼、アンタいちいちさあ」

「……ハア！？」

「勝とうが負けようがどっちだっていいわよ、そんなもん」

騒がしい翼を無視して、私はタオルで汗を拭いた。

「ちょっと待てや！ さつき小夜使ってあんなズルして勝ちを狙いにいっとなやないか！？ それを棚に上げて何やその態度は！？」

あつ、そつだ、すっかり忘れてた。あの天然娘。

「なあ、千夏！ ウチら絶対勝ったよな、勝ったよな！？ なあ！？」

「さあ、ねえ？ ギャーギャー騒いでる翼を見てたら何かシラケてきちゃった」

「何や何や何や、オマエまで！ めっちゃ腹立つわ、ウチ一人だけこんなに必死かい！ そもそもリレー絶対勝ちたい言い出したんは千夏オマエやろが！！」

「……翼、ちよつと黙れ」

私は翼の選挙広報車並みにうるさい口にズボッとタオルを突っ込んだ。

「ふっ、がっ……！ 何をすんねんオマエは！」

「……あのさ、アンタ達、小夜がどこ行っただか知らない？」

「……あれ？」

その日の放課後、二組の教室の掃除ロッカーに号泣しながら隠れていた小夜を掃除当番が見つけた。

私、小夜、翼。ただでさえ個性の濃いこの三人の輪に千夏が馴染むのに時間はかからなかった。

こうして私達の物語は賑やかに幕を開けた。

## 第2話 雨のち晴れ

千夏が転校してきて一ヶ月、私達はすぐに打ち解けて放課後や休日でもよくつるんで行動するようになった。

千夏はすごく積極的で、どちらかといえば最初の頃は私達の方が少し気を使っていた。しかし、派手な見た目とは違って、千夏は礼儀を弁える優しい性格だった。

小夜の事も気に入ったらしく、まるで犬や猫を撫で回す様に面倒を見てくれる。つくづく人を見た目だけで判断してはいけないな、と思った。

「しっかし何や、アレやな、こつ、雨が続くと憂鬱な気持ちになつてアカンな」

「……ねえ、翼……」

「やっぱアレやな、カンカンのお日様の光を全身にパツと浴びてやな」

「……あのさ、翼！」

「こつ、思いっきり背伸びして綺麗で新鮮な空気を胸いっぱい」

ガツンッ！！

私は思いっきり椅子に座っている翼の後頭部を足蹴した。

「アンタ、ホントいい加減にしな！ 一体誰の為に今日、私達がアンタの家で食事の準備してると思ってるの！？」

「……痛ったあゝ」

「つまらない事をブツブツ言ってる暇があったら手伝いなよ！」

「……蹴らんでもええやんオマエは……」

そう、私達は今日、翼の家にいる。なぜかというと、今日は翼の両親の結婚記念日なのだ。

久しぶりに二人だけでデートしてもらいたいと翼が企画してレストランの予約を取ったらしい。

ところが実際、自分達の食事の準備や、年の離れた妹・岬の世話をするのが面倒くさくなったらしく、私達に助けを求めてきた。

今日は土曜日、明日は休日なので私達も遊び感覚で気楽に引き受けてしまったのだが……。

「翼、アンタさっきから何にもやってないじゃない！ 家政婦やってんじゃないんだよ私達は！」

「……オマエかてテーブルに皿並べてるだけやんか」



「な、何だつて！」

このザマである。料理の準備を私と千夏にやらせるどころか、岬の風呂の世話を小夜に押し付け、当人は椅子に座ってお気楽テレビ鑑賞。

「……アッタマきた、もう帰る！！」

「あつそ、別に那奈居らんでもええよ、ほなサイナラ、外、大雨やから氣いつけてな」

「……この……！！」

しかも外はこの大雨、最悪だ、最悪の日だ。私の怒りは沸点に達し、いつ翼の胸ぐらを掴んでボコボコに殴り倒すか時間の問題だった。

「……いいんじゃない、別に、手伝って貰わなくても」

私の怒りをなだめる様に、千夏が余裕の態度を見せた。さつきから千夏はキッチンでエプロンを着けて淡々と料理をしている。

「ハア？ 何ですよ？ この馬鹿アホちびが助けて欲しいって言い出したから、私達はわざわざコイツの家まで来て手伝いに来てるのにさ！」

「うーん、まあ那奈は嫌々手伝ってるのかも知れないけど、アタシは楽しんでやってるから別に気にならないけどね、それにアタシは料理得意だし、人に食べて貰うのも好きだし」

「おお、さつすが千夏さんは違うなあ、どっかの暴力ブチギレ女とは比べもんにならないなあ」

翼は座っていた椅子を後ろに向けて、何事も無かった様に千夏と喋り出した。本当、調子のいいヤツだ。

「て、いうくか、料理のセンスの無い人間に手伝って貰っても意味無いしい」

「……センス無いって何やねん、ウチの事かいな？」

「さあねえ？ 誰の事かしら？」

千夏が姑息なイヤミを言い始めた。さつきまで頭にきていた私からすればいい気味だ。

「ちょっと待て待て、あのな、ウチもやらないイカン時はちゃんとやるんやで！ オカンが仕事とかで忙しい時は、ウチが岬に料理作って食べさせてんねんやから！」

「へえ、そうなんだあ？ でさ、翼はどんな料理作るの？」

千夏に質問された翼は、困った様に頭をポリポリと掻いた。

「……いや、それはなあ、例えば目玉焼き焼いたり、ウインナー焼いたりとか、あっ！ あとアレや、お好み焼きとか焼きそば、チャーハンも出来るで！」

「……ふーん、あっ、そう」

千夏は余裕な顔をして翼の話を聞いていた。その間も料理の手は常に動いていて器用なものだ。

「どうや、ウチも結構料理のレパートリーあるやろ？ なっ、なっ？」

「でもねー、見事にフライパン一枚で出来る料理ばかりよねえー、翼の料理」

「ブブブッ」

私は我慢仕切れずについ吹き出してしまった。

「……なに笑とんねん那奈、オマエ……」

「……いや、別に？」

「……なんかオマエら感じ悪っ」

千夏の毒舌が的確だったのでついつい笑ってしまった。そのせいか、おかげでイライラしていた私の気分も少し晴れた。

「ねえねえ那奈、小夜とみーたんお風呂長くない？　ちょっと気になるんだけど？」

千夏が時計を見ながら心配そうに私に話し掛けてきた。

「……ん、そう？　まあ、あの娘はいつも長風呂だからね」

「……大丈夫やるな？　中で岬と一緒にのぼせてたり溺れてたりしてないやるな？」

心配ならオマエが風呂に入れてやれってのこのダメ姉貴。

「……小さい頃ならともかく、もう中学生なんだから大丈夫でしょ？　家でもちゃんと一人でお風呂入ってるんだろっしさ」

「……勘弁せえよ、『女子中学生と幼女、風呂場で変死体で発見』なんてニュース……」

「……ちょっと様子見てくる」

こんな冗談が笑い事にならないのが小夜クオリティ。心配になった私と翼は、小夜と岬の様子を確認する為に風呂場に入った。

「小夜ねーたん、もうあついよー、そとにでたいよー！」

「ダメ！ちゃんと肩まで浸かって温まんなきゃダメだよ、みータン！」

二人の話し声が聞こえてきた。ホッ、良かった生きてた……。まあ、普通は当たり前なのだが。

「小夜、大丈夫よね？のぼせてたりしてない？」

「えっ？あつ、うん、大丈夫だよー！どうしたの？那奈もお風呂一緒に入るのー？」

「……私はいいわよ、ちょっとお風呂が長かったから、のぼせてないか気になっただけ」

「おねーたん！あつついよー、もうでたいよー！」

「熱い熱いうるさいねん、岬！中途半端に入ってたらまた寝冷えして風邪引くで！」

「うー、おねーさんのいじわるー!」

でも、そろそろ出てきて貰わないと千夏の料理が出来上がってしまう。

「小夜、もうそろそろお風呂出なさいよ、ご飯の用意が出来るから」

「はい!」

私が風呂場から出ようとすると、翼がまたイタズラ心で小夜をいじくり始めた。

「あれ、小夜! 浴槽の後ろになんかおるで!」

「えっ! なになになに!?!」

「この前の鬼チワワ犬とちやうか!?!」

「えー!? ヤダやだヤダやだー!!」

小夜は岬そつちのけで浴槽の中でアタフタし始めた。浴槽のお湯がジャボジャボ波立って水しぶきがこちらにまで飛んでくる。

「翼！ くだらない事でからかうなって、もう！」

「ウヒヒッ」

「小夜、そんなのいないからちゃんとお風呂入りなさい」

「いない？ ホントにいない？」

こんなバカな事で涙目になってる小夜を、岬は不思議そうに眺めている。

「大丈夫、いないから安心しなさい」

「……なんかコワイよー！」

怖がる小夜をなだめ、私達はリビングに戻った。翼は小夜をいじくって気分爽快の様だ。

「……全く、翼！ つまんない事で小夜を脅かすなって！」

「それよりな、何やねん鬼子ワワ犬て？ 何か名前だけなら全然怖くなさそうやん？」

「……夢に出てきたんだって」

「…何やて？ 夢？」

私は小夜から聞いた夢の話をした。この話を読んでいる皆さん、少しの間、『小夜の奇妙な世界』にお付き合い下さい。

「なんかね、夢の中で小夜が竜宮城に鬼退治をしに、犬と猿と亀と……」

「……ちよつと待て待て待て！ 話が頭からおかしいわ、竜宮城に鬼退治って何やねん？」

「……小夜がそう言っただからしょうがないじゃない」

「……ああ、そうかい、まあええわ、それでそれで？」

「で、犬と猿と亀と私とアンタで竜宮城に着いたら……」

「……ウチらもお供なんかい、で、着いたら？」

「鬼がみんな怖い顔してるんだけど体はチワワ犬で、それがたくさんしっぽ振りながらエイリンみたいに口をパカパカして、お尻をかじられそうになっただって」

「……何やて？」

「しかも鳴き声は『インコ臭い、インコ臭い！』って鳴くんだった」

「……病院連れてった方がええんとちゃうんか？」



「……医者が困るじゃない」

小夜のバカな話をしながらリビングに戻ると、キッチンから美味しそうな匂いが漂ってきた。

「おっ、なんか美味そうな匂いだな」

「失礼ね、美味そうじゃなくてちゃんと食べても美味しいの」

千夏は出来上がった料理をお皿に盛り付けていった。どうやらパスタ料理の様だが、ソースは手作りで本格的だ。

「しかし千夏、アンタ器用よね、家でもよく料理してんの？」

「もちろん！ 毎日作ってるわよ、ちゃんと家族全員分ね」

「スゴいじゃん！ しかし何や、オマエのオカンは料理とか何にもしてくれんの？」

「とんでもない！ あたしのママ料理ハンパなく美味しいわよ！ もうプロだって真っ青よ、ママは掃除も洗濯も仕事も全部カンペキなんだから！」

「……へえ、凄いじゃない」

「アタシが家事をやっているのはママからの試練！ つまり修行な

のよ!」

「仙人みたいやな、千夏のオカン」

千夏はさらに雄弁と言葉を続ける。

「今は男女平等で家事も分割なんて時代みたいだけど、やっぱり男の人には外で元気良く仕事して貰って、家に残った女性がしっかりと家庭を守る、これがアタシのママの幸せの法則なのよ!」

「……はあ、なるほど……」

「て、いうーか、女性としてやる事をキッチリやっておけば、その後は仕事したって遊んでたって誰からも文句言われないじゃない? そうでしょ?」

「……何や、物凄い鬼嫁で姑キラーって感じやな、千夏のオカン」

「かもね、でも、一番間違いない奥様ライフよ!」

なるほど、やる事きっちりやっとならば確かに文句は言われない。一見大変そうだが、堅実な生き方だろう。千夏のママ、私の母から聞いた通りかなりのやり手のスーパーウーマンだ。

「……でもさ、那奈のママも凄い人よね、超お偉い様なんでしょ?」

「……まあ、確かに凄いつていえば凄いくけど……」

私の母親と千夏の母親は学生時代からの友達だったらしく、母さんからよく昔話を聞いた事がある。

私の母親は千夏の母親と違って仕事一辺倒な人で、いつも海外で仕事をしていて年に二、三回位しか日本に帰って来ない。

「……それよりなあ、オマエら、オカン同士の話よりオトン同士の話はどーなんよ、気にならんのか？」

そう、今、翼が言った通り、私達の母親同士は親友だが、父親同士はちょっとした因縁がある。

私の父親も千夏の父親も、昔は世界で活躍する二輪車のプロライダーで、数々の名レースを繰り広げたライバルだった。

当時はテレビでもレース中継がされていて、国内、海外問わず多くのファンがたくさんいた。

現在でも二人を尊敬してプロレーサーになった人も多く、昔に比べれば少しは熱が冷めたものの、未だに『渡瀬と三島、どちらか速かったのか』という論争がファンの間で絶えない。

しかし、その娘である私からしたら、そんな話はどーでもいい。

「……別に？ 父さんは父さん、私は私だもの、だって、三島の娘だからって私が千夏に対抗意識を持つのも変じゃない？ それに第一、私がバイクとかレースとかに全く興味無いしね」

「あつ、アタシも一緒〜！ アタシさあ、ママとはよく一緒に買い物行ったりご飯食べに行ったりするんだけど、パパとは話しづらいもん、もういい年なのにさ、まだ日本でバイク乗ってるし、どこにも遊び連れてってくれないし、ホントもうアタシのパパはウザい！」

私も千夏も、どうやらお互いに父親の事は全然気にしていないみたいだ。

「何や面白くないなあ、オマエらを引き寄せたら何かトラブル起こらんかな、ってウチはワクワクしてたのになあ〜」

「あらまあ、それは残念でした」

「自分らのオトン達みたいに、レース場でやった取っ組み合いのケンカとかせえよ、つまらんなあ〜」

「……するかよ、バカ」

そうそう、何と千夏は小学生まで、つまり最近までイギリスに住んでいたらしい。

父親が国際レーサーだったって事もあるが、それ以上に例のやり手ママが世界でも有名なデザイナーで、あちこちの国でファッションショーを成功させている。

再齟、自分のお店を日本で出す事になったらしく、千夏を連れて日本に帰ってきた訳だ。

「ねえねえ、翼も小さい頃は海外に住んでたんでしょ？」

「おう、まあ、オトンの取材でイタリアに居たんやで。」

これも事実。こんな変な言葉を喋る女が、本当にイタリアにいた事があるのだ。

「スゴーい！ねえ、翼！ちよつとイタリア語喋つてみてよ！ねえねえ！」

「……それがな、一言も喋れへんねん、覚えてんのは『ボーノ』ぐらいや」

これもまた事実。言葉が喋れないどころか、住んでいた街の風景すら危うい記憶。

「えっ、何それ！ 超最悪なんだけど」

「しゃーないやろ！　ウチがイタリアに居たのはメチャメチャच्च  
ちゃい頃の話しやで？　今の岬よりもちゅちゃい頃やで？　言葉な  
んか覚えてるかいな！」

「…… たって挨拶くらい喋れないのお？ 超つまんない」

ん？ 今の岬より小さかった頃の翼？ 私は変な所に気が付いた。

「あのさ、今のアンタより小さい頃って大きさどの位？ 小型犬くらい？」

「オイ、コラ！」

「手のひらサイズくらいかな？」

「あのなあ、那奈オマエ……」

「何か気をつけないと踏んづけちゃいそうね？」

千夏が話に絡んできた。なかなか千夏も空気が読める人間の様だ。

「オマエら、ホンマええ加減に……」

「肉眼じゃ確認出来ないかしら？」

「顕微鏡ならで見えるかな？」

「ウチはミジンコか！ オマエら、クソミソにバカにしゃがって！」

さっきまでのお返しだ。私と千夏は翼を一気に攻め立てた。

「中学卒業までにはナイスバディになるんでしょ？　だつたら別にいいじゃない？」

「へえ、そうなんだ？　ガンバってね、翼！」

「……オマエら、ホンマに覚えとけよ！　いつかみんな上から見下したるからな！　ったく、ホンマ腹立つわ……」

さすがの翼もちよつと頭にきたみたいだ。やり過ぎちゃったかな。でもまあ、翼から仕掛けた事なんだから自業自得か。

そんなこんなで翼をからかっていたら小夜と岬がお風呂から出てきた。風呂上がりの二人の体からは湯気が立っていた。

「お風呂終わったよー、那奈！」

「うわー、なんかいいにおいー！」

小夜と岬はクンクンと匂いを嗅ぎながらキッチンを覗いた。

「ご飯出来たわよ！　美味しいパスタ作ったからねー！　アタシの自信作よ！」

「おいしそー！」

「美味しそうだね、みータン！」

「みータンのは食べやすいようにパスタ柔らかくしておいたからねっ！」

「千夏優しいー！ 良かったね、みータン！」

小夜が振り向くと、岬は様子のおかしい自分の姉を方をジッと見ていた。

「……どうしたの、みータン？ 何かあったの？」

「……おねーたん、おこってる……」

「……怒ってへんわ」

いやいやいや、誰がどう見ても怒っている様にしか見えないうて翼。

「えー、翼怒ってるの？ 何で、何でー？」

「怒ってへん言ってるやろ！」

劇物注意、火気厳禁、か。ここはこれ以上刺激しない方が良さそう  
だ。私は小夜と岬を翼から引き離れた。



「……まあまあ、それより岬、ちゃんとお風呂で温まった？」

「うん！ ぷぷぷ」

「何？ 何か面白い事でもあったの？」

「へへへ、あのね、小夜ねーたんね、うちのおねーたんよりおっぱいおきいんだよ！」

プッチーー ーーン

何かがキレた音がした。

「やだー！ みータンたら、恥ずかしいよー！」

「えへへっ！」

「……何やと、コラ」

翼が鬼の形相で岬に突っかかっていった。何かマズい雰囲気だ。

「何や岬、オマエ姉貴にケンカ売っとんのかゴラァー！」

「ほら、やっぱりおねーたんおこってるー！」

「何で怒ってんの翼？ そんなに怒ったらみータン可哀想だよー！」

「うるさいんじゃない小夜、オマエはぁ！」

翼の怒りの矛先が岬から小夜に向いた。

「小夜、オマエー！ ウチかて一生懸命頑張っで大きくなろう思てんのに、何の努力も無しに自分だけすすく成長しやがってコンニャローー！！」

「えー！ 何の話？ 何だかよくわかんないよー、翼！？」

これはマズい、止めないと本当にケンカになりそうだ。私と千夏は急いで翼を取り押さえた。

「翼！ 小夜！ 何やってんのアンタ達！？」

「ちよつとやだ翼！ 落ち着きなって！」

「憎い、憎い！ オマエが憎いー！ 普通に喋つとる時やってそうや！ ウチが頭フル回転で面白い事言うても、ムチャクチャなボケでおいしい所を全部持って行きやがってー！！」

「うわー！ 那奈！ 翼が怖いよー！」

「翼！ 落ち着けっつーの！！」

「うわああああん！！」

……それからしばらくして、日が沈んだ頃には雨も小降りになり、外は随分静かになった。

翼の家はマンションの六階なので窓から見える景色が綺麗だ。

「どう、アタシのパスタ料理、美味しいでしょ？」

「うん！ 美味しい！ ねー、みータン！」

「うん！ おいしー！」

小夜や岬がパクパク料理を食べている横で、翼はテーブルに頭を突っ伏して黙り込んでいる。

「…ねえ翼、料理食べないの？」

「……………」

「いつまでふてくされてんのよ？ 元々はアンタが私達に仕事全部押し付けて、調子乗ってふざけてるからこんな事に……」

「何や！ みんなウチが悪いんかあ！」

半ベソの翼の手に、千夏が優しくフォークを持たせてあげた。

「ハイハイ、もう機嫌直してパスタ食べてよ翼、味は保証するからさ」

「……………」

半ベソかきながら翼はパスタを一口食べた。子供か全く……。

「でもホントに美味しい！ 千夏、お料理上手なんだね！」

小夜が目をキラキラさせながら千夏を見つめていた。

「ウフツ、小夜ありがと！」

「これなら千夏はすぐにでもお嫁さんになれるね！」

「そうねえ、お嫁さんねえ、いつかは素敵な男性と結婚したいわよねえ」

千夏は何かを想像しながら乙女のようにウットリしていた。ちょっと気持ち悪い。

「あたしもー！ あたしもカワイイお嫁さんになりたーい！」

「翼のご両親みたいに結婚してからも二人でデートって素敵よねえ  
」！」

……何を夢見てるのかね、この二人は。現実をちゃんと見なさいつて。

「……お嫁さんって、まだまだ先の話しじゃない、特に小夜、アンタはお嫁さんになりたいならもっとしっかりして貰わないとダメだよ！ アンタと結婚する相手が苦労する事になるでしょ？」

「うー、那奈ヒドいよー！」

小夜を説教していたら、私を舐め回す様なイヤゝな視線を感じた。その視線の先にはニヤニヤしている千夏がいた。

「さすがねえゝ、那奈、やっぱりすでに結婚相手がいる人は言う事が違うわねえゝ？」

「……ハア？」

千夏はイヤらしい笑みを浮かべながら私の顔をジロジロ覗き込む。

まるでワイドショー好きのおばさんみたいだ。

「またまた、わかってるクセして、もう婚約者みたいもんなんでしょ？ 翔・太・く・ん！」

「……ちょっと、何言ってるの？ 全然違う！ 私と翔太はそんなんじゃないし……」

「えー？ でも実際に二人とも一緒に住んでるんでしょ？ 一つ屋根のし・た・で！ ウフツ」

「……だーかーらー！ それは昔から色々と家庭の事情があって……」

「ねえねえ、同い年の男の子と一緒に暮らすってどんな感じ？ やっぱ毎日ドキドキしちゃったりするの？」

「バカッ！ 私と翔太は小学校に入る前から一緒に住んでるんだよ？ だからもう双子みたいなもので、結婚とか恋愛とかそんなもんじゃ……」

「一緒におママゴトとかやってたらしいで」

「えっ！ ヤダ！ ホントに！」

それまでふてくされてた翼が、突然私と千夏の会話に割り込んできた。

「いきなり話に入ってくるな！ さっきまでドップリ落ち込んでたクセに！ しかも余計な事をベラベラと！」

「何か面白そうな感じになってきたからな、ウチも混ぜて混ぜて」

翼の乱入に刺激された様に、千夏の質問は次第にエスカレートしていった。

「ねえねえ那奈！ おママゴトって事は、二人で『ご飯にする？ お風呂にする？』とかやってたの？ ねえねえねえ！？」

「『それともアタシにする？』とかなあ？ ウヒヒッ」

「きゃー！ イヤーン！ 翼ったらエツチー！」

……勝手に話を作って盛り上がるな！ ここはきつちりと負けないで対抗しないと。

「アンタ達バカじゃないの！？ あのね、別に私達二人だけじゃなくて、いつも小夜だっ一緒だったの！ 小夜がママゴトしたいって言うから私達は嫌々付き合ってたの！」

私と翔太の話になると、いつもこういった方向に持っていかれる。全く、毎回毎回飽きないのだろうか？

「へえ、そうかいそうかい、そういう事なら小夜に直接聞いてみよか？」

翼と千夏は小夜を挟む様に椅子をずらしてズリズリと移動した。

「ねえねえねえ小夜！ 小さい頃さ、小夜と那奈と翔太くんの三人でおママゴトしてたの？」

「おママゴト？ うん、してたよー！」

「コラ小夜！ 余計な事をベラベラ喋るな！」

私は立ち上がって小夜の口を塞ごうとしたが、翼がそれを阻止する様に小夜を椅子ごとテーブルの反対側にずらした。

「取り調べ中や！ 部外者立ち入り禁止やで！」

「三人の中で小夜は何役だったの？ お嫁さん役？」

「えっーとねー、あたしはいつも赤ちゃん役だったよー！ お母さん役だつてやりたかったのに、那奈がいつもやらしてくれないんだもん！」

「じゃあ、那奈がオカン役で翔太がオトン役やな？」



「ヤダ〜！　那奈と翔太君ってその頃からもう夫婦じゃ〜ん！」

大昔の話をこつもまあベラベラと……。くだらない質問全てを説明しなければならぬ私も次第に口が疲れてきた。

「……だから違うつつの！　小夜が幼いから赤ちゃん役にしてただけで、別に私がお母さん役をやらせなかった訳じゃないって！」

「あつ、そうだ！　お風呂も三人で一緒に入ってたよー！」

「バカッー！ー！ー！」

バシバシバシッ！ー！

恥ずかしさが頂点に達した私は、思わず小夜の頭を数発平手で叩いた。

「キヤーキヤーキヤー！　ヤダー！　お風呂だつて翼ー！」

「キタキタキタキター！　キマシたでえ！　千夏はんー！」

「ねえねえ、小夜！　三人で？　三人で一緒に入ってたの？　ヤダー！ー！ー！」

「お風呂ですっぽんぽんパラダイスやー!!」

一番喋ったら盛り上がってしまう事を、このバカ娘は全く……。私の頭の中は真っ白になってきた。

「……あ、あ、あのね!一緒に入ってたっていうのはもう大昔の話でしょ!?別に今も一緒に入ってる訳でも何でもないじゃない!!」

「ヤダー!那奈、顔真っ赤ー!キャハハハ!」

「当たり前やアホ!今も一緒に風呂入っとったらさすがにドン引きするわ!」

「あー!」

小夜が何かを思い出した様に大声を出した。もう勘弁してよ全く!

「でもねー、あたしこの前も一緒にお風呂入ったよー?」

「……は、ハア!」

この前?一緒に?いつの事?全く思い当たる節が無い。いつたい何の話なのよ!?

「……この前って、おいおい、ホンマか？」

「えっ、いつ？ この前っていつの話？」

翼と千夏も次第に顔から笑いが消えていった。鸞かイヤな予感がする。『恐怖の小夜ミラクル』の予感……。

「……うーんとねー、確か、小学校五年生ぐらいの時だったかなー？」

そんなバカな。そんな記憶、私の頭の中には無い。そんな事実は一切無い！

「……五年生ではアカンやろ、那奈……」

「……入ってない……」

「ヤダー！ 那奈、さすがにそれはエッチ過ぎる！」

「入ってない！ 絶対入ってない！ 小夜！ アンタの記憶おかしい！ 絶対間違ってる！！」

「えー、入ったよー！ あたしちゃんと覚えてるもーん！」

どうせ小夜の事だから夢でも見たんだろう。こればかりは完全に否定しなくてはならない。そうしなければ私の人生に未来は無い！

「嘘つくな、小夜！ 正直に言わないと本当に怒るよ！！」

「えー！ そんなー！？ 那奈怖いよー！」

私達の大騒ぎを全く気にせず、岬は美味しそうに口の周りを汚しながらパスタを頬張っている。

「ちょ、ちよつと待てや那奈！ 一息入れよや！」

翼は私達に冷たいお茶を配って一息休憩を取った。しかし、私はお茶が喉を通る余裕は無い。

「つまりや、小夜が言うには五年生まで三人一緒に風呂に入ってたって事なんか？」

「うっん、違うよー？」

「えっー！？ じゃあ、那奈と翔太くんが一緒に入ってたって事？」

「そんな訳ないでしょ！ バカ言わないでよ千夏！！」

「それも違うよー？」

三人一緒でも無い。私と翔太でも無い。と、いう事はつまり……。

「……ねえ、もしかしてさ、私とアンタが一緒にお風呂入ったって話なの？」

私の話を聞いて、翼と千夏は気が抜けた様に椅子にグダグダグダグダつともたれた。

「あつゝ、何だゝ！そういう事なんだゝ」

「勘弁せえよ小夜、ちょっとビビったわゝ」

私もとりあえず一段落した。でも、変な誤解も解けたし、まあ、いいか……。  
なんて思っていた。この後の小夜の言葉を聞くまでは。

「うつん、それも違うよー？」

小夜のまさかの答えに、落ち着きを取り戻し始めていた部屋中の空気が一瞬で凍りついた。

「……ウソ？　ちょっと待ってよ、じゃあ、つまり……」

「……小夜が五年生の時に、一緒に風呂入った相手っちゅうんわ……」

「……翔太なの！？」

「うん、そうだよ！　あのね、五年生の時に那奈とお母さんが風邪引いちゃってお風呂に入れなかったから、代わりに翔ちゃんが一緒にお風呂入ってくれたんだよー！」

「……………」

啞然、茫然。私達は全ての言葉に忘れた様に声を失った。そんな私達に構わず、小夜はニコニコしながら話を続ける。

「でもね、今はあたしも一人でお風呂入れるようになったんだよー！　ねー、みータン！」

「うん！　小夜ねーたんすごい！」

全ての真実を知った私達は気の抜けたマヌケな顔をして顔を見合わせた。

「……ねえ、那奈、これって翔太君さあ……」

「……アウトやろ、アイツ、とんでもないスケベやな……」

「……翔太、あの野郎……」

小夜ミラクルナパームボム投下。理性も常識も焼け野原にされて意気消沈している私達を見て小夜がキョトンとしている。

「……どうしたの、みんな？ 何かあったの？」

「……………」

その後、翼の両親が帰ってくるまで、私達の間には何とも言えない気まずい空気が漂っていた。

これは家に帰ったら早速強制尋問の必要がありそうだ。

「……翔太、絶対許さない……」

久し振りに腕が鳴る。私は帰りにコンビニに寄ってドリンク剤を買って一気に飲み干した。うー、ファイト一発！ 覚悟しろ翔太！

### 第3話 シーソーゲーム

「スケベ」

「何だよいきなり……」

家に帰った私は、キッチンで食事の準備をしていた翔太を無理やりテーブルの椅子に座らせて問いただした。もちろん内容はさっき翼の家で小夜から聞いた『爆弾発言』の話だ。

「翔太！ アンタさあ、何考えてるの？ 一般常識無いの？ 頭おかしいんじゃないの？」

「……ちょ、ちょっと待てよ、何？ 何の話だよ？」

私は小夜が話した事を正確に、丁寧に、わかりやすく、隅々まで詳しく翔太に伝えた。

「……は、は、ハア？」

「……ハア？ じゃないよ。事実なの？ どうなの？ 嘘つかないですよ？」



「……い、いや、それは……」

「……入ったの？ 小夜と一緒に？ お風呂に？」

「……あづみ叔母さんにどうしてもって頼まれたから……」

うわぁ、最悪だこの男。ドン引きした。正直ドン引きした。激しくドン引きした。

「……入ったんだ、最っ低……」

「……だっ、だつてしょうがないだろ！？ あの時はおづみ叔母さんも風邪引いてたし、お前だつて熱出して寝込んでたじゃないか！」

翔太は私の前で手をあたふたさせながら必死に説明をしている。見苦しい、何て見苦しい姿だろう。

「だからってさぁ、普通一緒に入る！？ 小学校五年生でしょ！？ 物事の分別もつかない年齢じゃないじゃん！」

私はテーブルを思い切り叩いて翔太に怒鳴りつけた。私が叩いた弾みで、テーブルの上に置いてあった調味料の入れ物が仲良く一斉にジャンプした。

「お、俺だつて最初は断つたよ！ でも、あづみ叔母さんがどうしても小夜一人じゃ心配だから、一緒に入って欲しいって頭下げて頼まれて……」

「……あーもう最悪！ 最低！ 不潔！ 下品！ スケベ！！ もう私と小夜に五メートル以内近づくな！！」

余りにも非常識で信じられない事实に、完全に怒り狂つた私は翔太を無視して二階にある自分の部屋に戻ろうとした。

「ちょ、ちよつと待てつて！ 那奈！」

「やつ、やだつ、触るな！ 野蛮人！」

焦つた翔太は私の服の袖口を掴んで引き留めようとした。馴れ馴れしく触るな！ 汚らしい！

「那奈、お前おかしいつて！ そもそもさあ、俺と小夜は従兄妹同士なんだよ！？ スケベとか野蛮とか全然意味わかんねーよ！！」

確かにその通り。前にも話したように、小夜の母親のあづみさんと翔太の母親のいづみさんが姉妹なので、二人は従兄妹同士になる。翔太といづみさんは私達渡瀬家と一緒に一つの家に同居していて、真中家もこの家からすぐの所に住んでいる。

親戚同士、近所同士だった私達三人小さい頃からお互いの家に行き

来して遊んでいたりしていた。

「親戚同士が小さい頃に一緒に風呂に入るってそんなにおかしな事かよ！　どの家庭にだってある話だろ！」

「……最近是从兄妹どころか実兄妹同士だって安心出来ないわよ……」

確かにどの家庭でもある話なのかも知れない。しかし私が言いたいのはそんな事じゃない。

ある程度体も心も成長して、『これはマズい』という意識があつたにも関わらず、翔太が欲望に屈して小夜と一緒に風呂に入ってしまった。

こんな事では私はおろか小夜の身でさえ危ない。小夜を守るのは私だけなのだから。

「……じゃ、じゃあさ、俺はどうすれば良かったんだよ！？　っていうか第一、何で那奈がそんなに怒るんだよ！？　俺って一体何なの！？」

「あのね！　私は別にアンタが誰と一緒に風呂に入ったってどうでもいいの！　小夜をそういった卑猥な目にあわせたくないだけ！」

「卑猥ってなんだよ！　俺が何かいやらしい事でも考えてたって言うのかよー！！」

考えていない？ そんな言葉は絶対に信じない。必ずこのゲス男の面を剥いで本性を現せてやる。

「だって、お風呂に入ってたって事は、翔太も小夜も、二人とも裸でしょ？」

「ま、まあ、そりゃあ……」

「……見たんでしょ？」

「……な、何を？」

「だーから！ 見たんでしょ？ 小夜の裸！」

「……はい……」

あっさりと本性現しやがったこのエロ馬鹿。結局、男ってみんなこうなのか。頼まれたなんて綺麗事抜かして、頭の中はエロモード全開じゃない！

「……翔太って最低、ホント最低、死ね」

「……じ、じゃあ、どうやって見ないで風呂入れるんだよ！ 目隠しでもして風呂入れて言うのかよ！！」

拳げ句の果てにこのザマ、鸞て醜い生き物なんだろうこのバカは。

男は女に対して誰にでもスケベでエロな事ばかり考えてるのだろうか？ あー、もう、嫌だ嫌だ嫌だ！

「なに逆ギレしてんの！？ この変態！！」

「そつだ！ この変態！！」

「このスケベ！！」

「スケベ！！」

「エロ馬鹿！！」

「エロ馬鹿！！」

「お姉」

「何？」

「帰って来たんならただいまぐらい言つてよ！！」

「おう！ ただいま〜！」

「……全く、この人は……」

突然話に入り込んできたお気楽な女性。信じられないかも知れないが、私の一番の恩人だ。  
名前は渡瀬優歌。六歳上の私の姉である。姉といっても、実際私達

は血が繋がってない。

父さんと母さんが結婚した時に養子として迎えられ、その後私が産まれたのだ。

仕事で忙しく家にほとんどいない両親に代わって小さい頃から全ての面倒を見てくれて、私にとっては姉というより母親の様な存在でもある。

私自身もこの人を血の繋がりなんてもの以上に心から尊敬しており、私は親しみを込めて彼女を『お姉』と呼んでいる。

「んでよ、何をもてんだよ御兩人、お姉様に何でも話して御覧なさい？」

「……いや、別に……」

「……別に、ってな訳ねえだろ、なあ、どうしたんだよ翔太？ 話してみ？」

「……いや、本当に別に……」

「話せよ」

「……はい、わかりました……」

ちなみにお姉は小さい頃から空手を習っており、中学生ですでに女子世界王者にまで上り詰める程の剛腕である。

現在も大学には進学せずにバイトをしながらプロの女子格闘技団体で試合に出ている。

私もお姉に触発されて小さい頃から空手を始め、小学生で地区王者

になったが、お姉の業績の足元にも及ばない。

その名声は格闘技界どころか、中学高校時代の数々の武勇伝や悪行によって県内中の有名人になり、私も『渡瀬優歌の妹』というだけで学校の先生達から徹底マークをされる程だ。

そんな人間にシラを切り通す事はまず不可能。私達は嫌々ながらもお姉に事の詳細を話した。

「ブッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ……!!」

「……お姉、あのさ……」

「はー、はー、ハー、ハラ、腹イタイ、ブッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ……!!」

近所中に響き渡りそうな大爆笑。とても女性の笑い声とは思えない。おかげで近所中の犬が遠吠えし始めた。

「笑い事じゃないよお姉! もう、全く!」

「いやいやいや、スマンスマン、あー、久し振りに爆笑したわ、あーあ、んで、何の話だった?」

「お姉!!」

わざとだ。100%わかってやっているこの人は。

「……あー、そうかそうか、風呂の話な、そうだったそうだった、  
んで、どうだったんだよ翔太？」

お姉は翔太の首に手を回してグイッと顔を自分の方に引き寄せた。

「な、何がっスか、優歌さん？」

「何とぼけてんだよ、てめえ、決まってるだろ、どうだったんだよ？  
小夜のおっぱい、触ったのか？ 揉んだのか？ あん？」

「なななな、何言ってるんスカ優歌さん！？ 俺がそんな事する訳無い  
じゃないスカ！？」

翔太は顔を真っ赤にして否定した。私が翔太を問い詰める筈が、いつの間にやら完全にお姉の世界に引きずり込まれてしまった。

「まあ、小夜も小学五年生じゃまだペッタンコだろうな、まあ、そう  
だな、ウンウン」

「お姉！ そういう問題じゃないでしょ！？ 小学五年生だろうとペッ  
タンコだろうとこれは翔太のモラルの問題であって……」

「うるせーな、いいじゃねーか那奈、おめーだって小さい頃、翔太と  
風呂入ったり、一緒のベットで寝てたりしてたら？」



人の話なんて全然最後まで聞かない。こうなるともうお姉のペースから抜け出す事は難しい。

「そ、そんなのもう大昔の話でしょ！」

「おめーもあづみさんも風邪引いてたらよ、あと翔太しか小夜と一緒に入ってやる人間いねーじゃねえか、そうだろ？」

この手の話で人をいじくるのが大好きなお姉は、目をギラギラさせて楽しそうに喋っている。本当にこの人は悪魔だ。

「だ、だから、私が言いたいののはね、そういう事があったのなら、私に話をしてくれれば翔太に代わって私が一緒に小夜とお風呂入るっていうのにさ、だから……」

「無理に風呂入って小夜に風邪移ったらどーすんだ？ おめーが余計に風邪こじらしたらどーすんだ？ あん？」

「……まあ、入る入らないは別として、そういう事があったら普通はまず私に報告するでしょ！？ 翔太のヤツ、私に何も言わないでずっと隠してたんだよ！？」

「な〜にい？ やっちまったなあ！ 翔太！」

ニヤニヤしていたお姉が途端に怖い顔をして捕まえていた翔太の頭をグイグイ締め上げて額を平手でバツバシ叩いた。

「ええっ！ 何で、何で！？ イタイイタイイタイ！！」

「そうでしょお姉！？ 明らかに確信犯だよね、翔太！？」

「うん、イカン、イカンなあ翔太！ それはもう立派な浮気だ！」

あれ、浮気？ 何か変な方向に話が進んでいる。どうもマズいパターンだ。

「は、ハア？ う、浮気？ 優歌さん、何の話ですか？」

「いいか翔太！ そういうイヤラシイ事をしてしまったんなら、ちゃんと将来の奥様に報告して謝るのが男としてせめてもの償いってもんなんだぞ！」

「な、な、な、何言ってるのお姉！？ 何よ奥様って！？ 誰の事！？ 私の事！？」

ニヤニヤと怖い笑顔を浮かべてお姉は私を見た。怖いってその笑顔……。

「おっ、よく自覚してるじゃないか那奈！ これならいつでも嫁に

出してやれるなあ！ 大事にしてやってくれよ、翔太！」

お姉は捕まえていた翔太の頭を離すとおでこをポーン！ と手のひらで叩いた。と言うか、ほぼ掌底に近い打撃だ。

「痛っ！ ちょ、ちょっと優歌さ〜ん！」

「何言ってるの！？ いい加減にしてよ、お姉！」

「おーおーおー、二人して顔が真っ赤だぞお、二人並んで仲良くさくらんぼってか？ 確かそんな歌あったよな？ ブツヒヤツヒヤツヒヤツ！」

朝でも夜でも酔ってもシラフでも普段でも毎度毎度この悪ノリである。未成年ながら酒、タバコ、ケンカ、下ネタ何でもアリ。一体、誰を手本にしたらこんな人間になってしまうのやら……。

まあ、おかげで私はお姉を反面教師としてこれまで真面目に育ててこれたのだが。

「おお、そうだ！ 『さくらんぼ』と言えばアレだ、翔太！」

「……な、何スか？」

「…お前さあ、まだ、アレだろ？ チェリーだろ？」

あー、始まってしまったお姉の下ネタ攻撃。再び翔太の頭を捕まえたお姉は強引に自分の胸に顔をグイグイ押しつけた。

「…え？　ちょ、ちょっと優歌さん？」

「なあ翔太、どうなんだよ？　那奈以外にお前のチェリーくれてやつてもいい女、学校にいるのかよ？　どうなんだ？」

「…ちよつと、お姉！　何の話してんのよ！？」

「何だ、わかんねーのか？　じゃあ、もうちよつとわかりやすく丁寧に話してやろうか？」

「……いや、いいです、結構です……」

お姉が口を開けば辺り一面があつという間にR18指定。私達が中学生だろうと一切お構い無しだ。

「なあ翔太、あたしもさあ、ぶつちやけた話すると今まで何人かチエリーは頂いてきたけどさあ、どいつもこいつも最初は威勢がいいクセに、いざとなったらみんなビビっちまってカワイくねえんだよなあ……」

「……ちょ、ちよつと優歌さん……？」

「ホントは小夜と風呂入ってた時も下の方は限界ギリギリだったんじゃないねえのか？　あん？」

お姉の手が次第に翔太の下半身に伸びていった。お姉、やり過ぎだ  
ってば！

「……な、何言ってるんすか？ 勘弁して下さいよ……」

「お前のだったら喜んで貰ってもいいぜ？ この優歌お姉様がお  
めーに優しく『女』ってヤツをタツプリ教えてやるよ、楽しいぜえ  
〜？」

もうさすがに限界！ 私は翔太に伸びていったお姉の手をグイッと  
掴んで引き寄せた。

「お姉！ いい加減にしてよ！ 変な誘惑をして翔太をこれ以上刺  
激しないでよ！！」

するとお姉は掴んだ私の手を払って、その手で翔太の顔をベタベタ  
撫で回し始めた。

「何でよ、別にいいじゃん？ あたしと翔太の話だぜ？ 何かおめ  
ーに問題あんのか？」

「あーのーね！ そうやってイタズラに翔太を誘惑して、もし本当  
に翔太が何か変な事に興味持ち出したらどうすんの？」

「ヘンな事おゝ？ 何だよ那奈、ヘンな事つてよゝ？」

お姉はイヤらしい目をして私をジロツと見た。完全に獲物を狙う雌豹の目だ。

「……いや、だから、その、それは……」

「あのよ、翔太だつてもう年頃の男なんだぜ？ あたしが手を出さなくなつて、いずれは今よりもどスケベな男になっていくんだぜ？」

「……どスケベ、今よりつてそんな失礼な……」

文句を言つた翔太の頬をパチパチ叩いてお姉の独壇場はさらに続く。

「それによ、翔太がどスケベになつて、何かおめーが困る事でもあるのかよ？」

「……いや、あの……」

「まさか『私、襲われちゃうかも知れない、困っちゃう』とか言うんじゃないだろうなあ？ おい？」

「ば、バカ言わないでよ！ そんな事言つ訳無いでしょ！！」

「じゃあ、翔太はこの優歌様が頂いちゃっても問題無いよな？ い

いんだろ、那奈？」

「……いや、あの、その……」

そんな、ちょっと待ってよお姉！　いきなりそんな事言われたって……。私が返答に困っていると、それを見ていたお姉の表情が次第にニヤニヤと崩れてきた。

「……ブッヒャッヒャッヒャッヒャッ！！　ジョーダン！　冗談だよ那奈！！」

お姉は捕まえていた翔太を後ろに放っぱり出して、床にのた打ち回って爆笑していた。

「……お姉、あのねえ……」

鬼だ、本当に鬼だ、この人は。自分の快樂の為なら手段も選ばない。

「可愛い可愛い妹を差し置いてそんな阿漕な事する訳ねえだろ？　ちゃんと翔太の貞操はおめーにくれてやるよ！　ブッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッ！！」

「お姉！　もういい加減にしてよ！！」

投げ飛ばされた翔太はテーブルに掴まって立ち上がり、力無く椅子に座り込んだ。

「……ホッ、助かった、ヤバかった、どうなるかと思った……」

「……助かったじゃないよ！ 元々は翔太、アンタが全ての原因なんだからね！」

「……もう勘弁してくれよ……」

散々笑い転げて満足したお姉は、自分の空腹に気付いたらしく椅子に座ってお腹をさすり始めた。

「そーいや腹減ったなあ、翔太、メシは？」

「……えっ？ あっ、はい、今持ってきます！ って俺、何でこんな執事みたいになってんだろ……？」

翔太が立ち上がってキッチンに入ろうとしたその時、玄関のドアが開く音が聞こえてきた。

「ただいまー」



お姉が作り出したピンク一色のイケない空気を切り裂く様にいづみさんの声が聞こえた。仕事が終わって家に帰ってきたみたいだ。

「チツ、邪魔が入ったな、もうちょっとからかってやろうと思ってたのによ」

ホッ、助かった……。舌打ちするお姉の横で、私は大きな溜め息を一つ吐いた。

「母さん、お帰り」

「いづみさん、お帰りなさい」

「いづみちゃん、おかえり」

いづみさんは自分より早く帰っていたお姉に目を丸くして驚いた。

「何、優歌も帰ってたの？ 随分と早いわね？」

「たまにはいづみちゃんと一緒にご飯食べたいな、って」

「アホ」

「……そんなバツサリ言わなくてもよ……」

さすがはいづみさん、相手がお姉でも一歩も引かない。そういえばいづみさんも若い頃はかなりやんちゃだったって父さんも話してたなあ。

上着を脱いだいづみさんは持っていたバックをテーブルに置いて椅子に座った。かなりお疲れのご様子。

「母さん、今、ちょうど優歌さんの食事も準備してたところだから、そのまま母さんも座っててよ、二人分まとめて持っていくからさ」

「あ、そう、ありがと翔太、それより、翔太と那奈はもう夕飯は食べたの？」

「うん、俺は先に食べたよ」

「私は翼の家で食べてきたから」

「ふーん、じゃあこのまま翔太に甘えちゃおうかなあ、しかし今日は酷い雨だったわよねえ……」

翼の家から帰る頃には小雨になってたが、もう今は完全に止んだ様だ。あの大雨の中を仕事に行ってたんだからタフだよねえ、いづみさんは。

そんないづみさんも今でこそ生命保険会社で外交員として元気良く働いているが、ちょっと前までは病院に入院していて仕事なんて出来る状態ではなかった。

旦那さんで翔太の父親でもある貴之さんが事故で亡くなり、精神衰

弱で倒れてしまったからだ。

貴之さんは私の父親・虎太郎や千夏の父親の三島勇次朗さんと同じ国際プロ二輪レーサーだった。

父さんと貴之さんは同じチームに所属していた戦友で、レース場以外でも二人は親友だった。当時はいづみさんも同じチームのピットクルーとして二人と一緒にだった。

父さんが突然の病気で現役を引退した後は、貴之さんはチームのエンジニアとして活躍する筈だった。

しかしレース中に私やいづみさんや翔太の前で転倒事故を起こし、そのまま帰らぬ人になってしまったのだ。

当時このチームの責任者だった私の母親・麗奈は、未だに貴之さんの事故の責任は未然に防げなかった自分にあると思い込んでしまっている。

その忌まわしい事故から約十年経って、いづみさんも体調が随分良くなって仕事ができるまで回復した。しかし、まだ精神的な不安が拭いきれないみたいだ。

なぜなら、翔太が貴之さんの後を継ぎ、その事故の後から父さんの教えを受けてプロライダーを目指して活動しているからだ。

翔太の意志を知った母さんもチームの勝利、いや、翔太の夢の為に『100%安全かつ速くレースに勝てるマシン』を造るべく海外にある二輪車メーカーの工場に籠もって毎日研究と開発に明け暮れている。

その為、母さんは家に帰って来る事がほとんど無くなり、いづみさんも入院していた時期があったので、父さんは身寄りの無い翔太を引き取り私達は一つの家に同居する事になったのだ。

「そつえば、家に入ってくる時に随分と中が騒がしかったけど、

何かあったの？ 近所の犬も吠えまくってるし」

余計な話をぶり返す、空気読んでよ、いづみさん……。私と翔太はお姉が点けて鎮火しきれていない小火の火消しに回った。

「……いや、別に何でもないです……」

「……か、母さん、今日の夕飯、魚焼いたからさ、あと、昨日の残った煮物でいいかな？」

私達は何とか話題をそらそうと必死に喋った。お姉はそんな私達を見て笑いをこらえてニヤニヤしている。

「あつ、翔太ありがと、じゃあ、いただきます」

「……ど、どうかな？ ちゃんと上手く焼けたと思うんだけど……？」

「……あつ、お茶が無いよね？ 今、入れてきます……」

あまりに不自然な私達の行動を見て、お姉は必死に笑いをこらえていた。これ以上この人に喋らせてはならない。ましてやいづみさんの前であんな話……。

「……クククッ……」

「何よ、翔太も那奈も、こんなに氣遣ってどうしたの？ 何かあったの？ それより、何で笑ってんのよ、優歌は？」

「……いや、別に、なあ、那奈？」

「……うん、別に、何にもなかったですから……」

しかし、私達の苦勞も虚しく、ついにこの時が来てしまった。

「……ブッヒャッヒャッヒャッ！ 無理無理、もう無理！」

ついに限界を迎えたお姉が爆笑し始めた。お姉の笑い声に釣られて再び近所の犬が一齐に吠えだした。

「……ちよつと、お姉……！」

「何？ 何よ、優歌？ 一体どうしたの？」

話題変更作戦失敗。お姉は永き封印から解き放たれた大魔王が暴れまくるが如くの勢いで喋り始めた。

「いやいやいや、いづみちゃん！ 大変ですよ、お宅の息子さん！」

「……息子？ 翔太の事？」

「優歌さん！ もう勘弁して下さい！」

翔太が懇願しようとも、一度封印を解かれた大魔王は静まらない。

「この息子さん、那奈という将来を約束する相手が居るにも関わらず、小学五年生の時に小夜と一緒に風呂入ってイヤラシイ事ばかり考えちゃってたらしいですよ！ ブッヒャッヒャッヒャッヒャッ！」

ついに全てを喋られてしまった。絶望する私達と大笑いするお姉を見て、いづみさんはポカーンとしていた。

「…何それ、何の話？ 風呂？ 小夜？ 一体何なのよ、翔太？」

もう、こうなってしまったら後の祭りだが、変な誤解が無い様に私達はいづみさんに説明した。

「……いや、前に那奈が風邪ひいた時にあづみ叔母さんに頼まれてさ、小夜と一緒に風呂入った事があって……」

「……それで何よ、いやらしい事って？ 小夜に何かしたの？ や

めてよね、私とあづみ姉さんを泣かす様な真似しないでよ？」

「してねーよ！ そんな事する訳ねーだろ！？」

「……まあ、アンタと那奈がイヤラシイ事する分には文句は無いし、むしろ私は応援するけどね」

またこの方向に話を持っていく！ いつもいつもいつも全くもう！！

「ちょ、ちよっと、いづみさん！！！」

「何を言い出してんだよ、母さん！！！」

「まーた二人とも顔が真っ赤だぞお！ ブッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！！」

お姉といい、いづみさんといい、家族だけじゃなく小夜も翼も千夏もみんなして私と翔太をくつつけたがる。ただの幼なじみで一緒に住んでいるだけなのに、全く……。あれ、もしかしてそれが一番いけないのかな……。

「ああ、そうそう、思い出したわ、那奈が高熱出して倒れた日よね、あった、あったわ、そんな事」

「そつだよ母さん、あの日だよ」

いづみさんがその日の事を思い出したみたいだ。実は正直言つと、私は高熱を出していたのでその日の事は全然覚えていない。

「あの日は大変だったのよね、冬の寒い日で雪まで降ってきてさ、麗奈は帰ってこないし、虎太郎は那奈を病院に連れて行っちゃうし、あの時、家には私と姉さんしか居なくてね」

「……そうだったの？ 父さんが私を病気に連れて行ってくれたんだ……」

いづみさんの記憶が鮮明になってきたみたいで、次々とその日に起こった話をしてくれた。

「そうそう、二人の帰りが遅くて心配になって、その後、私も翔太を置いて病院に行っちゃったのよね」

「そうだよ！ それであづみ叔母さんも風邪引いてたから、小夜の風呂の面倒を見れるのは俺しかいなかったんだよ！」

「じゃあ、あづみ姉さんも本当に困ってやむなく翔太にお願いしたのかな？ 恐らく、それ以外の方法が無くてしょうがなかったのかもね？ 迷惑かけたわね、翔太」

そうだったんだ、そんな経緯があったのか。話を聞いた私は少し納得した。再齣の話はもう忘れる事にしようと思った。



しかし、一度思い出したいづみさんの記憶の旅は終わらない。線路の先にはとんでもない終着駅、まさかの真実があった。

「あつ、そうそう、その日、さつさと家から逃げたのよね、優歌、アンタ一人だけ」

「……へっ？ あたし？」

逃げた？ お姉が逃げた？ 何、この急展開は？ いづみさんの話はさらに続く。

「那奈を病院に連れて行かなきゃいけないかも知れないから、その時は翔太と小夜の面倒お願いね、ってアンタに頼んだのにさ、その日、仲間とカラオケに行つて朝まで帰って来なかったのよね、そうよね、優歌？」

「……お姉？」

「……優歌さん？」

「……そ、そうだったっけ？」

いづみさんが思い出さなかったら全くわからなかった新事実。やはり全ての悪の連鎖はこの人から始まっていたのだ。

「……じゃあさ、優歌さんが居てくれているれば、俺は小夜と風呂入る必要無かったって訳だね……」

「……お姉、どういう事？」

「……あー、何か今日はすごい疲れたな、先に風呂入ってサッパリしようかな？」

完全にシラ切って逃げるつもりなのかこの悪魔は？ 散々、私達を笑いの種にして！

「……おめーら、良かったら一緒に風呂入るか？」

「入んねーよ!!」

あまりに無茶苦茶で血の繋がりの無い不思議な家庭環境。でも、私にとっては一番大切な唯一の家族なのである。

## 第4話 Wake me up!

「暑いな、ホンマに」

「暑い、もう、死にそう」

「暑いよー、息苦しいよー」

「……うるさいなあ……」

六月中旬、梅雨も終わりに近づき日に日に日差しが強く差し込んでくる。学校の昼休み、私達はこの蒸し暑さから少しでも逃れる為に校舎の裏にある記念樹の影に潜んでいた。

しかし、いくら日陰に入っているといえども、梅雨独特のジメジメした湿気と、太陽に熱しられた地面からの熱でちっとも涼しくなっていない。

「……こういう事やねんな、この暑さは！ まだ初夏にもなってるのに25 越えてるやん？ ありえへんかな！ なあ、千夏？」

「Oh, No! Unbelievable! 日本の夏は蒸し暑いて聞いてたけど、こんなのありえないわ！ ここは砂漠？ それともジャングル？ 人間が住める環境じゃないわよ！ ねえ、小夜？」

「暑いよー、しんどいよー、エアコンの風に当たりたいよー、ねー、那奈？」

「……あのさあ、アンタ達ちよつと黙りなよ？　ただでさえクソ暑いのに、グダグダ文句言われたら余計にイライラすんだけど？」

不快指数100%。額や体から滝の様に流れ出る汗は、制服ににじんでシャツが背中にベッタリくっついてくる。

「……暑いんやからしゃーないやろ？　こんだけ暑けりゃ文句も出るわー！」

「文句言ったって涼しくなんてならないでしょ！？　いちいちつまらない事喋らせないでよ、全く……」

喋れば喋る程暑い。怒れば怒る程暑い。怒鳴れば怒鳴る程暑い。最悪の不快スパイラルだ。

「Shit!　Shit!　Shit!　早く帰ってシャワー浴びでサッパリしたい！」

「だからうるさいっつーの、千夏！」

「のど乾いたよー、何か冷たい物飲みたいよー！」

「あー、もう！　喉乾いたんなら水飲め！　バカ小夜！」

ジリジリジリジリ。昼間になってさらに日差しは強くなってきた。それに併せて地面の温度も急上昇。

「暑ーいー!!」

私達はあまりの暑さに地面に寝転んだ。とても他人には見せられない酷い格好だ。

「あ、そや」

翼が何かを思い出した様にポケットを探り始めた。

「実は今日な、オカンから小遣い貰ったねん」

「へえー、いくら貰ったの？」

スカートのポケットから小銭の音がチャラチャラ鳴っている。

「ほら、六百円や！ 暑いやろっから帰りにみんなでジュース飲みなさい、ってくれたんや」

「うそー、ホントにー？」

「えっ、何で何で？ どうしたの？」

翼が貰った小遣いを見せるなんて初めてかも知れない。いつもは人にたかってばかりなのに。

「この前、オトンとオカンの結婚記念日に家の用事手伝って貰ったやろ？ オカンな、ホンマはもつとちゃんとしたお返しをしたかったらしいんやけど、なかなか機会無かったからとりあえず、って持たせてくれたんや！」

「まあ、翼のお母様ったらステキ！」

「わーい！ ジュースだジュースだ！」

小夜と千夏は飛び上がって喜んでいるけど、私は何か申し訳無い気持ちになった。別に大した事をしていないのに。

「美香さんもそんな気を使う事なんて無いのに、昔から家族ぐるみの付き合いなんだから……」

「じゃあ那奈、オマエはジュースいらんのやな？」

「……アンタ、殴られたい？」

六百円か。それなら帰りに四人でペットボトル一本ずつ買えるな。ぴったり勘定して小遣いを出すところはさすがは節約家の翼の才力ン、美香さん。

「だけでもだっけっど、や」

「何よ、翼？」

翼が何か企んでいる。バカな事考えなきゃいいけど……。

「……オマエら、帰りまでジュース買うの我慢出来るか？ 実際、オマエらも限界やろ？」

「えっ、どういう事？ アタシ良くわかんないけど？ What？」

「今からこっそりジュース買いに行かへんか？」

やっぱり見事にバカな企み。何を考えてるのかこの女は。

「……アンタ、何言ってるの？ 授業まだ終わって無いのに、そんな事したら校則違反じゃないのよ？」

「そーだよ、翼。那奈の言う通りだよ！ 悪い事しちゃダメだよー

！」

私と小夜は翼の企みを止めようとしたが、翼の屁理屈はさらに続く。

「アホかオマエら、よく考えてみいや！ 本校の高等部の先輩方々は自販機はともかく校食まで買えんのに、何でウチら中等部は校舎内で買い食いしたらアカンねんな？」

「…そういえばおかしいわよねえ、これって差別よねえ？」

早速千夏が翼の屁理屈に沈んだ。って言うか、千夏は最初から賛成派か。

「そんな事言っただけでしょうがないじゃない？ 校則は校則だし、私達中等部の校舎には自販機なんて一台も置いてないんだから！」

「そーだよ、そーだよ！ 向こうの校舎に行かないと買い物出来ないよー！」

反対派二名、賛成派二名。私達は見事に二手に分かれた。

「せやから、今、小夜が言った通り、思い切って高等部の校舎に忍び込むねん！」



「ハア？ バカ言わないでよ！ 見つかったらどうすんの？ 職員室呼び出し確定じゃない！」

「まあまあまあ、那奈も小夜もウチの話を聞けや、なっ？」

翼はそう言つと私達を円を囲む様に集めてヒソヒソと話し始めた。まるで脱走犯の集まりみたいだ。

「ええか、ウチら中等部は高等部と制服が若干違うから、忍び込んで見つかったらまずバレるわな？」

「そんなの当たり前じゃない？ 探偵みたいに変装でもして忍び込むの？」

「話を聞けや千夏！ そうじゃなくて、下手にコソコソしないで普通に堂々と入んねん！」

……ハア？ 何かたいそうな作戦でもあるのかと思つたら正面突破？

「んでな、飯に見つかつてしまたら、『道に迷っちゃって間違つて来ちゃいました』、エヘッ』って言って誤魔化して逃げる」

……玉碎覚悟かよ、作戦でも何でも無いじゃん……。

「……ねえ、翼、いくら何でも単純すぎない？ さすがにアタシも

何か幻滅してきちゃったんだけど？」

「ええねん、ええねん別に！ 失敗して見つかったも先生にお金没収される訳でも無いし、どのみち学校帰りにはジュース飲めるんやから、ダメで元々や！」

わかった、翼が何でこんな馬鹿な事を言い出してきたのか。

「……翼、アンタさあ、さっきから暑さで頭やられて適当な事言っ  
てない？」

「……もうどこでもええねん！ 限界やって！ オマエらも冷たい  
ジュースグビグビ飲みたいやろ！？ やせ我慢するなや！」

「ハ―イ！ あたし飲みたい―い！」

「バカ！ 小夜は黙ってな！」

すると翼は小銭全額を小夜に手渡した。

「よしっ！ ほな頼んだで、小夜！」

「…ほえ？」

「ちょっと、小夜に何をさせる気なのよ、翼！―！」

小夜にお金を渡したら何をするかわからない。私はすぐに小夜の手から小銭を取り上げて翼に返した。

「あ的那奈、こういう天然ボケが必要な役割は小夜が適任やねん！ 小夜やったら飯に見つかっても、そんなに先生達からお目玉食らう事も無さそうな感じするし、何か小夜ならミラクル起こして上手く普通にジューズ買って来れそうな気するやろ！？」

「バカ言ってるじゃないよ翼！ ダメだよ、絶対ダメ！ 小夜にそんな危ない事をやらせたくないし、第一、パシリみたいなマネ絶対にさせない！！」

「そんな堅っ苦しい事言うなや〜！ ホンマにつまらんなあオマエは！？」

「ねえ〜、どおすんの〜？ 買うのお？ 買わないのお？」

翼が何と言おうと、千夏が駄々をこねようと、絶対にそんな事は許さない。

「ダメ！ ダメったらダメ！ 今回のアンタ達の話は無し！ 小夜もわかった！？ 暑くてジューズ飲みたいかも知れないけど、帰りに間違いないく飲めるんだから今は……、って、あれ？ 小夜？」

振り向くと小夜の姿がどこにも無い。どこに行ってしまったのだろ

うか。何か嫌な予感がする……。

「あれ？ 小夜？ どこ行っちゃったの？」

「……なあ、もしかして小夜のヤツ、ホンマに高等部に行ってもたんちゃうか？」

翼の言葉に私達は顔を見合わせた。

「…ウソ、でしょ？」

「…あれ、お金は？ 翼、さっき小夜にお金渡してたよね？」

「…お金なら那奈に取り上げられて、今はウチの手の中やで？」

「お金も持たずに行っちゃったの？ ちょっと待つてよ！ ウソでしょー！！」

飛んで行ってしまった小夜を捕まえるのは逃げ出した猫を捕まえるよりも困難。焦った私達はこの暑い中、小夜を探しに校庭内を必死に走り回った。

「んもおー！ 翼が変な事を言い出すからこんな事になったんだよー！！」

「千夏かてノリノリやったやないか！　そもそもあんなアホ話を真に受けて、金も持たずに行ってしまう小夜がアホなんやろが！！　せやからこの前、病院連れてけって言うたやろ、那奈！？」

「あんな超天然ボケを治せる医者がこの世に居る訳無いでしょ！　翼のバカ！！」

私達の悪い予感は的中した。私達が探し回っていた時、小夜は高等部に侵入して校庭の中を歩いていた。

「こんにちはー！」

「……あつ、こんにちは」

「こんにちはー！」

「……こんにちは……」

何の悪気も無く校庭内を歩き回り、諸先輩方々に挨拶をしながら満面の笑みを振りまく。

「……あの娘の制服、中等部だよな……？」

「……そうよね……？」

「……何で中等部の生徒がここにいるんだ……？」

「……先生に呼び出されたとかかな……？」

翼の玉碎作戦通り、高等部校舎内に入った小夜は中等部の生徒である事はバれていた。が、あまりにも普通に自然に歩いていていた為、何か特別な用件があるからではないか、と周囲は完全に誤解していた。自然、といっても、小夜自体は決して演技をしてる訳でもない。それどころか我を忘れて見慣れない校舎にワクワクと目をキラキラ輝かせながら歩き回っていた。

「スゴーい！ 高等部の校舎って綺麗で広いなー！」

校舎の探索に気を取られ、最初の目的であったジュース購入の件は完全に頭の中から消去されていた。

「……やっぱり、ここかな……」

小夜を追いかけてきた私達は、少し遅れて高等部の校門に到着した。

「……で、どーすんの翼？ 三人で探すの？」

「……三人もズカズカ入っていったら、ウチらが先に見つかって追い出されるで、那奈、どうしよか？」

「……ここは誰か一人で探そう、出来る限り騒ぎにならない様にしなきゃいけないし、もしかしたらすれ違いで小夜が外に出て来るかも知れないから、ここで待つてる人間もいないと……」

三人でしばらく考え込んでいると、意を決して翼が先を切った。

「小夜をけしかけたのはウチやからな、ここはキツチリ責任取ってウチが探しに行くで！」

しかしすぐに千夏が続く。

「何言ってるのよ？ 翼じゃ小さい見た目だけですぐに中学部だつてバレちゃうでしょ？ だからここはアタシに任せて！」

しかし小夜の事だ。先回り先回りしていかないと捕まらない。

「無理よ、アンタ達じゃ小夜の行動予測つかないでしょ？ 私は昔からずっと小夜と一緒にいるんだから、ここは慣れてる私が行く！」

「どつぞどつぞどつぞ」

キツチリ二人でハモリやがって……。

「……アンタ達さ、最初から行く気ゼロでしょ？」

「那奈、行つてらっしゃーい！」

「……全く、もう！」

私が小夜を探しに高等部校舎に入った頃、当の本人は体育館裏の日陰の中を歩いていた。

「……うわー、ここ、ヒンヤリしてて涼しいなー！」

小夜は背伸びをしながら大きく深呼吸をして、体育館裏の奥へとどんどん進んで行った。

すると、奥の角隅に数人の女子生徒がいるのが見えた。

「あつ、涼しい所だから、みんなの人気の場所なのかな？ あたし、見つかったちゃったらマズいのかな？」

しかし、よく見ると、高等部女子生徒の中に一人、中等部の小さい女子生徒が混じっていた。

「ほら、さっさと出せよー！」



「チンタラしてんじゃないよ、オイ！」

「……はい、すみません……」

小声でそう言うと中等部女子はカバンの中からお金を取り出した。

「……三千円しか無いじゃん？　ねえ、お前ナメてんの？」

「こんだけ人に迷惑かけといてさあ、たったこれっぽっち？」

納得しない高等部生徒達が、ジリジリと女子に迫っていく。

「……すいません、私、そんな大金持つてません、これで今月の私のお小遣い全部なんです！　許して下さい！」

ついに高等部生徒の一人が女子の服を掴んでドンドンと体育館の壁に叩きつける様に揺さぶり始めた。

「ぶざけんじゃないよ！　お前、自分がやった事ちゃんとわかってんの？」

「……ちょっと、ねえ……」

「こんな汚れた制服で私達に残りの授業やらせるつもりなのかよ！  
ちゃんと責任取れよ、オイ！」

「……ねえ、ねえってば……」

そのうち、その中の生徒二人がリーダー格の怒っている生徒を止め始めた。

「……何よ、アンタ達、さっきから！」

「……あれ、あれ」

「……えっ？」

さっきからずっと小夜が見てるのに気づいたみたいだ。三人の高等部生徒は小夜の方に振り向いてギロツと睨んだ。

「……あんだ、誰？」

「こんにちはー！」

「……ハア？」

シリアスな空気に似合わない小夜の明るい挨拶に、高等部生徒達は出鼻を挫かれた。

「ここって、涼しくっていいですよっ！ 皆さんもここに涼みに来たんですか？」

「……何、コイツ……？」

「……ここにも中等部がいるじゃん……」

「……何、アンタ？ここに何か用？」

気を取り直した高等部生徒三人は再び冷たい目つきで小夜を睨みつけた。

「……あつ、えーと、あの、あれ？ あたし、ここに何しに来たんだっけ……？」

当初の目的をすっかり忘れていた小夜は、自分が何でここにいるのか全然わかっていなかった。

「……何コイツ、ウザくね？私達、見られちゃったよ……？」

「……どうしようかあ、コイツもやつちやおつか……？」

「……そうだねえ、一人ぐらい増えたって問題ないね……」

その言葉を聞いた中等部女子は高等部生徒達を押しつけて、小夜に向かって大声で叫んだ。

「……逃げて！ 逃げて下さい！！」

「……ほえ？」

しかし彼女はすぐに三人に捕まり、またもや力ずくで壁に叩きつけられた。

「てめえ、なに言っただよ！ コラ！」

「この女捕まえといて！ 私があっちの生徒捕まえてくるから！」

「あいよ！」

一人の生徒がゆっくりと小夜に向かって歩いてくる。

「……お前さ、ちょっと来なよ、こっちに……」

「……？」

何が起こっているのかわかっていない小夜が捕まりそうになったそ

の時、

「小夜！ 何やってるの！？」

私は間一髪間に合った。一緒にいた中等部女子の『逃げて！』という大声で小夜達の居場所がわかったのだ。

「あつ、那奈だー！ あたしね、スゴく涼しい場所見つけたよー！」

「バカッ！ アンタ、勝手にどこ行ってるのよー！」

小夜を捕まえようとしていた高等部生徒達は、私が現れたのを見てジリジリと下がり始めた。

「……二人か、マズいじゃん……」

「……どうする、やる……？」

「……面倒くさいね、とりあえず移動するよ……」

高校部生徒達は中等部女子を壁に押し付けたままにして、一人の生徒がこちらに向かって歩いて来た。

「あんた達さあ、中等部の生徒でしょ？ 何でここにいるの？ 勝手に高校部入ったらいけないって聞いてないの？」 勝

先輩とはいえ高圧的で嫌な態度だ。私は少しカチンときたが、ここで事を荒げるのは私達にとって良いとは言えない。

「……あつ、はい、すみません……」

「あつ、はい、すみません！」

私が頭を下げて謝ったのに続いて、小夜も真似して頭を下げた。

「アンタ達、今回の事は先生達に黙っててあげるからさ、わかったらさっさと中等部に戻んな！」

「……はい、すみません、小夜、行くよ」

「う、うん！」

本来の目的である小夜の救出は済んだが、そのままこの状況を見て見ぬ振りをする訳にはいかない。

「……ねえ、その女子、アンタも外に出るんだよ」

「……!!」

高等部生徒達の顔色が変わった。私に声をかけられた中等部女子はキョトンとしていた。

「……えっ、私ですか……？」

「アンタも中等部でしょ？　ここにいたら校則違反になるよ？」

「……は、はい……」

小夜と小さい女子生徒を連れて、私は早足で翼と千夏が待つ校門へと向かった。

「あーあ、さっきの場所、涼しくて良かったのになー」

バシッ！！

全く反省していないのか、それとも何もわかっていないのか、とりあえず私は小夜の頭を平手でひっぱたいた。

「バカ」

「痛いよー、那奈！」

私達と一緒にについて来ている女子は、何か申し訳なさそうに口を開いた。

「……あ、あの……」

「……何？」

「……ど、どうもありがとございました……」

素直に感謝されると何か照れる。照れ隠しに私はちよつとつれない態度を取った。

「……私は別にアンタを助けに来た訳じゃないよ。このおバカを探しに来ただけだから……」

「エヘッ！」

この娘は何で私に怒られてるのかわかってるのだろうか。反省態度ゼロで小夜はペロツと舌を出して笑った。

翼や千夏と合流した私達は、休み時間も終わりが近づいていたので



教室に戻る事にした。結局ジュースを買う事には失敗したが、小夜はそれ以上の恰好の獲物を見つけたみたいだ。

「ねーねーねー、麻美ちゃんはいつもどんなテレビ見てるの？」

「……えっ？ いや、あの、特に決まってないけど、大体バラエティ番組とか……」

「ねーねーねー、じゃあ、お笑い芸人のネタでどれが一番好き？」

「……いや、あの、特には……」

「あたしはね、『そんなの関係ねえ！』とか『どんだけ〜』とか大好き！　どんだけ〜！」

「……は、はあ……」

私が小夜と一緒に助けた女子は偶然にも同い年の生徒だった。名前は遠藤麻美子、クラスは一年四組。

地味で度の強そうな丸い眼鏡をかけていて、背は小さく髪型は三つ編み。喋る声もか細く弱気な感じでいかにもイジメられっこといった印象だ。

どうやらそんな麻美子に小夜が淒く興味を持ったらしく、さっきから集中的に地獄の質問責めにあっている。

「ねーねーねー、麻美ちゃんはお風呂好き？」

「……え？ま、まあ、嫌いじゃないですけど……」

「あたしねー、ちょっと前までお風呂怖くて一人で入れなかったんだー、何でかつ言つと昔ね、お外で遊んでたら道路で車にはねられてねー」

「……えっ？」

「でねー、そのまま飛ばされて川に落ちて溺れちゃったのー、でもねー、その時は一緒にいた那奈のお父さんがあたしを助けてくれたんだけど、それからは水が怖くなっちゃってお風呂も入れなかったのー」

「……はあ……」

「でもねー、今はちゃんと一人でお風呂に入れるようになったよー！この前だつて翼の妹さんのみータンをお風呂に入れてあげたんだよー！」

「……す、すごいね……」

「イエーイ！　どんだけー！」

かなり参っているみたいだ。まあ、私も毎日小夜を相手にしてるから何となく気持ちはわかる。

「……疲れた？　どうする？　何だったらもうやめさせようか？」

「那奈に止めてもらいや、あと二時間はこのペースやで？」

「……いえ、あの……」

私達に気遣って本音が言えないのかな。まあ、さっき初めて会ったばかりなんだから当然か。初対面でこれだけ喋りまくる小夜がおかしい。

「えっーと、あとねー」

こりゃダメだ。もうキリがない。強制的に黙らせるしかないか。

「小夜、今から五分黙れ」

「えー、何でー？」

「いいから黙れ！ ハイ、スタート！」

「……………」

小夜が黙ると校内の他の生徒達の話し声が良く聴こえる。外を走っている車のエンジン音も鮮明だ。

「……あゝ、何か凄い静かになった」

千夏が安息の静けさにリラックスする様に背伸びをした。

しかし、さっきの高等部生徒達。一体あの体育館の裏で何があったのだろうか。

「……ねえ、アンタさ、何であんな所にいたの？」

「……えっ、いや、それは……」

麻美子から詳しい事情を聞き出そうとしたとたんに、

「えっー！ 那奈、ズルーい！ あたしはちゃんと黙ってるのに、  
那奈は麻美ちゃんと喋ってるー！」

「だ ま れ」

「……………」

全く、少し気を許すとすぐこれだ。私は仕切直してもう一度麻美子に質問した。

「でさ、アンタを取り囲んでた先輩連中は誰？ どういう関係なの

「？」

「…………それは…………」

歯切れが悪い。口止めされているのだろうか。

「イジメられてるの？」

「…………いや、そういう訳では…………」

「じゃあ何やねん？」

「話してみたら？ 楽になるよ？」

翼と千夏も会話に参加してきた。この二人もかなりののでしゃばりだなあ。

「…………でも、私が喋ったら、皆さんまで巻き込んでしまつかもしれないから…………」

気を使っているのか、なかなか麻美子は口を割らない。これはお姉の様にちよつと強めの態度で喋らせるしか無さそうだ。

「いいから全部話さない！」

「……は、はい！」

麻美子はその場所では何があったのか話し始めた。聞く感じだと、特に慢性的にイジメられてる訳では無さそうだ。

彼女も高等部の校舎内に目的があったらしく、昼休み中にコッソリ忍び込んでいたらしい。

「んで、目的は何やねん？　ウチらと一緒に買い食いか？」

「……いいえ、違います……」

「翼と同じ発想をする様なおバカな子には見えないけどね？」

「やかましいわ！　オマエも黙っとけ千夏！」

麻美子は恥ずかしそうにもじもじしながら理由を話した。

「……音楽室に行きたかったんです……」

「……音楽室？　そんなもん中等部の校舎にだってあるじゃない？」

意外な理由だった。高等部の音楽室に何があるというのか？　中等部の音楽室と何か違うのだろうか？

「……高等部の音楽室にはピアノがあって……」

「ピアノ？ そんなもん中等部の音楽室にもあるかな？」

「グランドピアノの事？」

「あっ、はい！」

千夏が話を理解したみたいだ。グランドピアノ？ 名前からして何か大きそうだ。

「何やねん、それ？ 何か違うんか？」

「……中等部の音楽室にあるピアノは電子ピアノで、グランドピアノのは違う物なんです……」

確かに中等部の音楽室にあるピアノは小さい。私もさっき翼や千夏が言っていた通り、何か高等部との違いに差別を感じてきた。

「……何や、中等部にあるのは偽物ピアノって事かいな？」

「……いや、偽物って訳じゃないんですけど……」

「音の質感が違う、とかそんな感じ？」

「……簡単に言えば、そうです……」

現物を良く知っているのか、千夏がジエスチャーで解説をし始めた。

「大きいよね、ピアノ本体が、後ろがビロ〜ンって長い！」

「あゝ、アレや、何か変な屋根が付いてるヤツやな？」

私も何となくどんな物かわかってきた。ピアノと言っても色々種類があるのか、知らなかった。ちょっと勉強。

しかし、ピアノの種類はわかってても、そのピアノに何の目的があったというのか？

「……でも、何だよ？ ピアノ弾きたいの？ アンタ、ピアノでも習ってるの？」

「……いえ、習ってはいないんですけど……」

「じゃあ、何だよ？」

私が詰め寄ると、麻美子はゆっくりと詳細と理由を語り始めた。

「……私、子供の頃に小さいキーボードをお父さんが買ってくれて、ずっと家の中で弾いてたんです、一緒に遊んでくれる友達、一人も



いなかったんで……」

「……そのキーボードじゃイヤだったの？」

「……いえ、そういう訳じゃないんですけど、ただ私、まだ一度もピアノは弾いた事が無くて、どこかでピアノ弾ける所ないかな、って色々探していて……」

「……そしたら、高等部の音楽室にピアノがある、って聞いた訳ね？」

千夏が解説を入れてくれる。しかし、転校してきたのに千夏はなぜか学校の内部の事情に詳しい。

「……はい、高等部に入るのはいけない事だっけってわかってたんですけど、ピアノがあるって聞いたなら居ても経ってもいらなくて……」

ピアノに憧れるがあまりにやってしまった暴走か。気が小さそうなのにやる事は随分と大胆だ。

「……無茶しやがって、ピアノなんかどっか他でも弾ける場所があったんとちゃうんか？」

「……はい、全くその通りです……」

翼が正論だ。どこか他の教育施設や地区センターにも置いてありそうだし、そんなに弾きたかったらピアノ教室に通えばいいのに。

しかし、私が一番気になるのはピアノの事じゃなくて麻美子を取り囲んでいたあの連中。

「……で、さっきの高等部の生徒は何なの？」

「……音楽室に行こうとしたら階段で先生達に見つかりそうになって、走って逃げたんです、そしたら、出会い頭にあの人たちとぶつかってしまって……」

「……ぶつかっただけ？」

「……いえ、ぶつかった弾みでその人達が持っていたパンのケチャップを制服に付けてしまって……」

あるある。急いでいる時に限ってこういったトラブルがよく重なるものだ。

「……それで私、誤ろうと思って頭を下げたら、お尻が後ろにいたもう一人の人にぶつかって、持っていた紙コップのお茶を制服にかけてしまった……」

あーあ、運が悪い時はよく続いて悪い事引き寄せてしまうものだ。

「……それで私、ハンカチで汚れを拭き取ろうとしたら、シミがもつと大きくなっちゃって……」

……これはひどい。このドジっ振りは小夜並み、いやそれ以上かも知れない。なぜ小夜のお友達アンテナに麻美子が引かなかったのか少しわかる気がする。

「……しかも、その人のお父さんはPTAの役員さんらしくて、告げ口するぞ、って脅されて……」

完全に蟻地獄、いや蜘蛛の巣状態か。もがけばもがく程脱出不可能のドツボだ。

「……で、連中に無理やり体育館裏に連れ出されたって事？」

「……告げ口されたく無ければ、クリーニング代三万円、今すぐ払えって……」

「……アンタが悪いとはいえ、ちょっとそれは酷いね……」

「なぐんだ、たったの三万円じゃない？」

「あのなあ、千夏、セレブの感覚で物を喋るなや？」

いくら何でも三万円はひどい。これじゃ、ただのカツアゲだ。

「……私、そんなお金持つてなくて、手持ちのお金で何とか許して貰おうとお願いしたんですけど……」

「……許して貰えなかったと、そこに小夜と私が来た訳ね」

これは彼女を助けて正解だった。いくら何でもこんなイジメみたいな事は私は無視出来ない。

「……248、249、250……」

「……ちょっと那奈、小夜がご丁寧に五分数えてるけど……」

あつ、忘れてた。そういえば小夜に黙れって言ったつけ。千夏に言われるまで気づかなかった。

「251！ 425！ 658！ 1583！」

「……あー、もー！ 翼のせいで数がわかんなくなったー！ 翼のイジワルー！！」

「小夜！ もう一回、1から数えなさい！」

「……うー」

また静かになったところで、そろそろ話をまとめるとしよう。午後からの授業の時間も近づいてきている。

「……で、これからどうすんのよアンタ？」

「……えっ？どうするって言われても……」

「何か、こういうタイプってしつこそうよねえ？」

「帰りに校門とかで待ち伏せしてそんな感じやな？」

「……えっ、そんな、どうしよう……」

翼と千夏の脅しを真に受けて、麻美子は困った顔をした。しかし脅しで済みそうに無い。本当にやられそうな気がする。

「……アンタさ、今日は私達と一緒に帰りなよ？」

「……えっ、でも……」

助けておいてそのまま放っておく訳にもいかない。現場を目撃した小夜も狙われてないか心配だ。

「……でも、そんな事になったら皆さんに迷惑が……」

「気にせんでええって、この那奈って女は普通じゃないから、ビリーズブートキャンプを一週間ぶっ続けでやりこなす化け物やし」

「アンタに化け物なんて言われくないね、この目玉のオヤジが」

「まあ、ここは千夏ちゃんと愉快的仲間達にお任せあれ！」

「……でも、私……」

「いまいち連れないな。それなら、千夏じゃないけど Give a n d t a k e でいきますか。」

「じゃあさ、その代わりに一つ、アンタに頼みがあるんだけど」

「……な、何ですか!？」

「……299、300!! 那奈、五分経ったよー! 十分が60秒で、その半分だから300! ちゃんと1から数えたよー!」

「……今日一日、この娘の相手お願いね」

「……は、はあ……」

「……ほえ? 何、あたしの事?」

私達は揃って校舎を出れる様に、待ち合わせ場所と時間を決めてそれぞれの教室に戻った。

一日世話役を頼まれた麻美子は、休み時間終了ギリギリまで小夜に捕まり教室に返して貰えず、結局、先生に怒られたらしい。合掌。

## 第5話    i n n o c e n t    w o r l d

午後の授業も無事終わり、最後のホームルームもまとめに入った時、予想外の展開が私を待っていた。

「渡瀬」

「はい先生、何ですか？」

「ちょっと聞きたい事があるから、帰りに職員室に来てくれ」

「……………えっ？」

「忘れて帰るなよ」

……………参ったな、こんな時に。正直言つて職員室に呼び出される覚えは無いが、だからといって無視する訳にもいかない。

「小夜、翼や千夏と一緒に四組に行つて、あの娘を迎えに行つてあげて」

「えー、那奈はどうすんの？」

「大した話じゃ無いと思うから、すぐに後から行く、校門で先にみ



「なんと待っててね」

「はい、了解！」

小夜は何故か私に向かって敬礼をした。まるで一日署長さんみたいだ。

「……いい？　くれぐれも先に勝手に帰っちゃダメだからね！」

「はい！」

……やれやれ、返事だけは一人前だ。早いところ用件を済ませる為に、私は急いで階段を駆け降り一階の職員室へと向かった。

「一年一組、渡瀬入ります」

職員室に入って辺りを見渡すと、すでに先生は椅子に座ってスタンバっていた。

「ああ、来たか渡瀬、早速確認したい事があるんだか、お前今日、高等部の校舎に立ち入ったらしいな？」

「……えっ？」

「高等部の生徒から、中等部の生徒が校舎内に入り込んでいると報告があつてな、長い髪のポニーテールで、背の高い女子だったって事でな……」

どうやら、結局あの連中にチクられたみたいだ。ちょっとマズい事になった。

「その話を聞いて、俺はすぐにお前の名前が頭の中に浮かんでな、入ったのはお前なのか？ 校舎内に立ち入ったのか？」

これは認めてしまうと面倒な事になりそうだ。どうやら犯人が私だと確定されてない様なので、思い切ってシラを切り通す事にした。

「……いいえ、行つてません」

「……本当か？」

「はい、背の高く髪長い女子なら他にもいると思いますが、なぜ私だと？」

「……いや、まあ、それはな……」

この調子だと何とかいけそうだ。もっと強気に攻めてみよう。

「……私の姉が不良の常習犯だったからですか？」

「……いや、そういう訳では無いが、なあ……」

「とにかく、私ではありません、他の生徒だと思えます。」

「……そうか、わかった、疑ってすまなかったな、気をつけて帰れよ」

「……はい」

我ながら何という演技。冷静沈着に嘘をつく自分がちょっと怖くなった。この面の厚さは親から受け継いだ遺伝なのだろうか。先生、ごめんなさい。でも今は急がないといけない。

職員室を出て急いで下駄箱に向かうと、翼と千夏が私を待っていた。しかし、小夜と麻美子の姿がない。

「なにしとんねん那奈！　一緒に帰ってやるんじゃないかなかったんかい！」

「職員室に呼ばれてたの！　ねえ、小夜は？　あの娘は？」

「それがいないのよ！　小夜が廊下から二組の教室を覗いてたのを見たんだけど……」

しばらくしたらいつの間にか小夜の姿は消えてしまったらしい。あ

れほど一人で行くなって言ったのに……。

「うちのクラスのホームルーム長いねん！　くだらん話をグダグダ喋って！」

「ホームルーム終わって外に出たら、もうどこにもいなかったの！　あの四組の娘も教室にいなかったし……」

「これはマズいなあ……」

「例の連中に連れていかれてなければええんやけどな……」

私達が小夜の安否を心配していると、良く見慣れた男子生徒が何かに見つからない様にコソコソと隠れながら、階段を登って校舎別館の二階に上がって行くのが見えた。

「……あれ？」

「……どうしたの、那奈？」

「どないした？　誰かおつたんか？　小夜か？」

「……翔太？」

私達が小夜と麻美子を探していた頃、当の本人達は人気の無い別館の廊下を歩いていた。

「……ねえ、真中さん、みんなと一緒にいなくて大丈夫なの？」

「うん！　だつて那奈も翼も千夏も、みーんなこっちで待ってるみたいだよ？」

「そうだよ、みんな待ってるから呼んできて欲しいって頼まれたんだ」

小夜達の前に道案内をする男子生徒が一人。その制服は明らかに中等部のもとは違う高等部のもの。

麻美子は違いに気づいて不安がっているが、小夜は全くお構い無しでついて行ってしまう。

「……真中さん、あの人の制服、高等部の……」

「大丈夫だよ！　知らない人にはついて行っちゃいけないって言われてるけど、同じ学校の先輩だもん、悪い人じゃないよ！　多分」

「……多分、って、何か嫌な予感が……」

突き当たりの教室の前まで来ると、扉の前に別の茶髪の男子が二人立っていた。

「おっ、来た来た、こっち、こっちだよ！」

「おお、結構カワイイじゃんこの女子！ ヒューヒュー！」

どこからどう見てもいい人には見えない外見。麻美子の恐怖心は限界に近く、すでに足が震えだしていた。

「……真中さん、逃げた方が、っていうか、逃げようよ……」

「えー、なんでー？ 大丈夫だよ麻美ちゃん、みんな待ってるよ！」

怪しい男子生徒達は教室の扉を開けて二人を迎え入れた。

「この中でみんな待ってるから入りなよ！」

「はい！ ありがとう！ 失礼しまーす！」

「……真中さん、ダメだよ……」

「さあ、どうぞどうぞ……」

小夜達を教室に入れると、男子生徒達は一人を外に残して扉を閉めた。

「……見張っとけよ……」

「…………おっ……」

放課後で使われてない視聴覚室。中は電気が点いてなくて真っ暗だった。

「あれー、真っ暗だよー？　那奈、翼、千夏、みんなどこー？」

突然、教室の明かりがバツと点いた。小夜達は光に目が眩んで最初は誰がいるのかわからなかったが、次第に目が慣れてきて教室の中がハッキリと見えた。

「あれー？　違ーう！　那奈達じゃないよー？」

「…………えっ、やだ、まさか…………」

教室の中で待っていたのはさっき麻美子を脅していた高等部の女子生徒三人組だった。

「…………やあ、アンタ達、待ってたよ」

「あっ、わかった！　お昼休みの時の人達だ！」

「…………そんな、やっぱり…………」

中等部の校舎を出るまでは安全だと思っていた麻美子は、小夜の制服の肩をギュッと掴んで後ろに隠れた。

「……………どうして？どうして高等部の生徒が中等部の校舎に入ってくるの……………」

麻美子の質問を聞いて女子生徒達は顔を見合わせてクスクスと笑い始めた。

「……………んなもんチヨロいよねえ？」

「アタシ達も昔はこの校舎に毎日来てたんだよ？中に忍び込める場所なんてみんな知ってるよ！」

「この教室の周りは放課後になったらまず先生も生徒も通らないからね、助けは来ないって思った方がいいよ」

「…ほえ？助け？」

「……………真中さん、どうしよう……………」

小夜と麻美子、絶体絶命。逃げようにも教室の扉の前には仲間の男子生徒が立っていて外に出れない。



「で、アンタ達、どうすんの？ さっきの三千円で許して貰えるなんて思ってたじゃないでしょうね？」

「まさかこの程度の弁償でアタシ達が納得すると思う？」

「しかも無断で高校部に立ち入ってたんだろ？ これはマズいよなあゝ？」

扉の前にいる男子生徒達が会話に入ってきた。教室の真ん中に立っている小夜達の周りをクルクル回りながらジロジロと顔を覗き込む。

「……アタシのお父さんに全部話しちゃってもいいんだよ？ アンタ達、退学にしてもらうように頼んじゃおうかな？」

連中のリーダーと思しき女子生徒が父親に携帯電話をかけるフリをして麻美子を脅した。

「……お、お願いします！ 許して下さい！ お金なら、お金なら家に帰って持って来ますから！ 必ず払いますから！」

麻美子は女子生徒達に頭を下げて必死に謝った。しかし、女子生徒達の態度は全く変わらない。

「とか何とか言って本当は逃げるつもりなんだろう？ お前、甘いんだよバーカ！」

「逃げられちゃ困るんでね、アンタの家までアタシ達も一緒に行かせてもらっよ！ 嫌だとは言わせないからね、わかった！？」

「……はい、わかりました……」

もう逃げられない。でも、今日会ったばかりの他人を巻き込む訳にもいかない。覚悟を決めた麻美はグツと唇を噛み締めて返事をした。

「……でも、真中さんは逃がしてあげて下さい！ この人は何も関係ありませんから！」

「……ほえ？ 逃げる？ 麻美ちゃん、何の事？」

しかし、帰ってきた返事は非常に冷たい言葉だった。

「アンタ、バカだね、ダメに決まってるでしょ？ 現場見られちゃってるんだから、そのポケットとしてるアンタも一緒に来るんだよ！」

「……そんな……」

麻美子はガックリと肩を落とした。眼鏡の奥にある瞳には、うつす

ら涙がにじんでいた。

「……ごめんなさい、真中さん、ごめんなさい……」

「……麻美ちゃん、泣いてるの……？」

麻美子が絶望的な現実には打ちひしがれているその時、突然教室の扉がガラツと開いて見張りをしていた男子生徒が入ってきた。

「……おい、何かヘンな奴が来たぞ？」

「ハア？ 何だよ、誰？」

扉の前にいた男子生徒達をはねのけて、一人の中等部の制服を着た男子が飛び込んできた。

「小夜！ お前、何やってんだよ！」

「あつー！ 翔ちゃんだー！」

教室に飛び込んできた生徒は翔太だった。人気の無い場所に連れていかれる小夜達の後を追って助けに来たのだ。

「…何、アンタ、誰？ この娘の彼氏？」

「従兄妹だよ！ つーか、お前達、何なんだよ！」

翔太は勇敢に高等部の連中に立ち向かった。しかし、相変わらず小夜には全く緊張感が無い。

「麻美ちゃん、紹介するね！ 従兄妹の翔ちゃん！ あたし達と同じ年なんだよー！」

「……おい、小夜……」

「……真中さん、今はそんな事を言ってる場合じゃ……」

翔太が助けに入ったとはいえ、人数は相手の方が上。ピンチである事には変わらない。それどころか外にいた男子生徒も加わってきて一斉に周りを取り囲まれた。

「あのさ、被害者はアタシ達なのよ？ ちゃんと心のこもった賠償を求めているだけなのよ？ これって悪い事かしら？」

「へへへッ、そういう事なんだよ、ボウズ！」

「……触るんじゃないよ！ 離せ！」

馴れ馴れしく頭を撫でてくる男子生徒の手を払い、翔太は小夜と麻美子を背中に回して二人をかばう様にして前に立った。

「小夜、一体何があったんだ？ 何でお前が狙われてんだよ！」

「うーんとねえ、えーとねえ、どこから話せばいいかなー？」

小夜と話をしていた翔太の腕を、麻美子がギュツと掴んで大声で叫んだ。

「全部私が悪いんです！ 真中さんは関係ありません！ お願いします！ 真中さんを連れて逃げて下さい！」

その言葉を聞いた小夜は翔太の腕を掴んでいた麻美子の手を払い、両手でガシツとその手を握った。

「……………どーして？」

「……………えっ？」

小夜の表情が変わった。いつものホワツとした雰囲気は無くなり、麻美子を見つめる目は真剣そのものだった。

「……どーして関係ないの？ どーしてあたしに謝るの？ どーして麻美ちゃんを置いてあたしだけ逃げなきゃいけないの？」

「……真中、さん……？」

「麻美ちゃんはこの人達に悪い事しちゃったかも知れないけど、すぐにちゃんと謝ったでしょ？ ごめんなさいって言ったでしょ？ それじゃダメなの？」

小夜の気迫に麻美子は啞然としていた。周りにいる高等部生徒達も呆気を取られていた。

「……ちよつと、何言つてんのコイツ……」

「謝って済むんだつたら警察なんていらねーんだよ、バーカ！」

「突然キレてんじゃねーよ！ ボコボコにイジメちまうぞ！」

高等部の連中はバカにした様に小夜をからかった。しかし、小夜は負けなかった。さらに気持ちを込めて言葉を続けた。

「だって、麻美ちゃんはわざとやった訳じゃないでしょ？ ちゃんと汚しちゃった服をキレイにするって約束したでしょ？ 何でそれじゃダメなの？」

「……おい、小夜……？」

今まで見せた事の無い小夜の物凄い気迫。そばにいた翔太でさえもその空気に圧倒された。

「どーしてみんな麻美ちゃんを信じてあげないの？ どーしてバカって言うの？ どーして麻美ちゃんが泣かなきゃいけないの？」

「……おいおい、コイツ、リアルにバカかよ？」

「何か面倒くせえな、まとめてやっちまえばいいじゃん？」

「……そうだね、ちょっとお仕置きして黙らせようか、大声出されて人が来たら困るしね」

リーダー格の女子生徒を中心に、小夜達三人を囲んでいる輪は徐々に狭まってくる。麻美子は恐怖で涙を堪えられずに目からポロポロと滴が落ちた。

「……お願い、お願いです、真中さん、逃げて……」

「ダメッ!!」

「……えっ？」

「おい、小夜!？」

驚いている麻美子の両肩を掴んで小夜は力強く言い放った。

「友達を置いて逃げるなんてダメッ！ そんなの一番いけない事だもん！ 那奈だってあたしが困ってる時に逃げたりなんてしなかったもん！」

「……友達……？」

「そうだよ、友達だよ！ 麻美ちゃんはおたしの友達だもん！ バカって言われたって友達だもん！ だから、あたしは逃げない！ 友達を置いて一人で逃げたりしないもん！！」

「……真中さん……」

小夜は麻美子を力強く励まして優しくニツコリと笑った。麻美子の瞳から怖さから流していたものとは違う暖かい涙が湧き出てきた。

「ねえ、もうお芝居終わった？ いちいちお友達ごっこに付き合ってられないんだけど？」

「痛くないからよ、ちょっと苦しいだけで終わるぜ、ヘッヘッヘッ！」

お涙頂戴なんてクソくらえとばかりに連中は小夜達のすぐ目の前まで迫っていた。



(……何とか、小夜とこの娘だけでも逃がさないと……!)

翔太は小夜達を背中にかばいながらジリジリと後ろに下がった。自分を犠牲にしても何とか小夜達を逃がす術を必死に考えていたその時、男子生徒の後ろに一人の人影が見えた。

ガツツツツ!!

「痛ええええええええええ!!!!!!」

鈍い衝撃音と男子生徒の断末魔。教室にいた人間全員が、一体何が起こったのかと騒然とした。

「な、何!?!」

「だ、誰、アンタ!?!」

うろたえる連中の前に立ち塞がる一人の人影。奴らが先生にチクつた、背の高い、長い髪でポニーテールの女子。

「……エラいよ、小夜、よく言った」

「……那奈!!」

「那奈だー! やっぱり那奈が来てくれたー!!」

再び間一髪間に合った。階段を登っていく翔太の後を追ってきて大正解だった。

「……翔太が何か拳動不審にウロウロしてるのが見えてね、助かったよ、翔太、アンタもたまには役に立つんだね」

「……拳動不審、ってヒドいぞお前! 小夜が知らない人についていったから、何か変だと思って後ろをつけてたんだよ!」

「あつそ、でも一步間違えたらストーカーだよ、凄い気持ち悪かった」

「……あのなあ」

翔太も私の姿を見て一安心したみたいだ。まあ、翔太じゃこの人数を倒すのはまず無理だろう。私には簡単な事だけど。

「痛ええええ! 痛ええええよおお!!」

男子生徒が私の下で足を押さえながらのたうち回っていた。よく見

ると目を真っ赤にして涙目になっている。

「……足の甲を思いっきり踏んづけただけでしょ？ 骨は折れてないと思うから安心しなよ、まあ、二、三日は痛むかも知れないけどね」

雑魚には用は無い。私が狙っている首はただ一つ、あの態度の悪いリーダー格のクソ女。

「……またアンタ？ アンタいったい何者なのよ!？」

「……この娘の保護者、みたいなものかな？」

「……何だよ、この女……」

「……何か、ヤバそうだぜ……」

痛みにもがき苦しんでる仲間を見て、連れの男子生徒達も怯んでしまった様だ。

賢明だと思うよ。痛い目に遭いたくなければ引っ込んでおいた方がいい。

「……あのさ、アンタ達の制服を汚してしまったのは悪いと思ってるけど、ちょっとばかりやり方が汚いんじゃない、先輩方？ 私さ、こっいうのって大っ嫌いなんだよね」

先輩だろうか何だろうか容赦しない。理不尽な力を誇示して弱い物ばかりを叩く人間は絶対に許さない。

「……その二人に手を出したら、悪いけどいくら先輩でも女でも手加減しないよ？ 覚悟はいい？ そんなに痛くしないからさ」

こちらは戦闘準備万端。私は指をポキポキと鳴らしながらゆっくりとクソ女の元へと歩み寄った。しかしその時、私の目の前にいきなり人影が入り込んできた。

「控えーい！！ 控えい控えい！ 控えーい！！」

「……！？」

翼と千夏が突然教室に飛び込んできたのだ。二人は私の両端に立ち、翼の手にはそれぞれの家族で一緒に行った昔の旅行の写真が写っている携帯電話があつた。

「こちらに居られる方を何方と心得る！？ 恐れ多くも、元・女番長『渡瀬優歌』様の妹君、渡瀬那奈様なるぞ！！」

「……バカッ、翼！その名前は……！！」

翼の話と写真に写っているお姉の姿を見た男子生徒達の顔色が一気に青ざめた。

「……………渡瀬、優歌……………！」

「……………おい、まさか……………！」

「……………あの……………！」

「渡瀬先輩……！」

やっぱり知っていたか、お姉の事を……。この連中もお姉に絞られた事があるのだろうか……………？

「たった一人で500人の不良をブチ倒した渡瀬先輩……！」

「一日足らずで不良から500万円巻き上げた渡瀬先輩……！」

「高校三年間で500人の男の童貞を奪い取った渡瀬先輩……！」

男子生徒達は尻もちをついてズルズル後ずさりし始めた。その目は恐怖に震える小型犬の様に潤んでいた。

「皆の者！ その渡瀬先輩の妹君の御前である！ 頭が高い！ 控

えおろーっ!!」

「ヒイイイイイイ!!」

男子生徒達は何かに追われる様に一目散で教室から逃げ去った。

「……ちょっと、アンタ達！ 何逃げてるのよ！ アタシを裏切るの？ ちょっと！」

教室に残ったのは私達と女子生徒三人。しかもクソ女以外の二人は震えて丸くなっていた。

「……控えるどころかみんな逃げてもうたなあ……」

「……翼、アンタさあ……」

「これでまた一つ伝説が出来たなあ、那奈、ウヒヒッ」

「……全く、何て事してくれるのよ……」

この学校で一番出していない名前を……。生徒はおるか、先生方々ですら裸足で逃げていくというのに……。

「一体何なのよアンタ達！ アタシのお父さんはPTA役員の副会

長なのよ！ アンタ達なんかみんな……！」

「へえ、そうなんだ、ちなみにアタシのママってさ、この学校の設立資金を出した出資者だったりするんだけどなあ……」

「……えっ？」

まさかまさかの新事実。千夏のお母さんがお金持ちなのは知っていたけど、そんな事夢にも思っていなかった。

「……千夏、それって本当の話なの？」

「……この学校の設立に、千夏ちゃんのお母さんが一役買ってるって事？」

「その通り！ 簡単に言えばスポンサーって事、だからアタシはこの学校に転校してきたんだもん！」

……言われてみれば確かに納得出来る。私の母さんは最初からこの学校に私と翔太を入学させたがっていた。

小夜や翼も、この学校に入学したのは同じ理由で親から薦められたからかも知れない。

転校してまだ日が浅いのに、千夏がやたらと学校の詳細に詳しいのはそういう事だったのか。

「アタシのママがその気になったら、PTA役員はおろか、校長先

生まで一気にフルチェンジする事が出来るんじゃないかなあ……？」

「……これはコワイ、コワすぎる。もしかしたらお姉の悪評よりもコワイ存在かも知れない。」

「……マヂですか？千夏さん、これからもウチと仲良くして～なっ！」

「いいわよ、みんなの事はアタシとママが守ってア・ゲ・ル！ウフッ」

「……千夏のママ、本当にスゴいママね……」

女子生徒達は魂が抜けた様に白目を剥いて口をあんぐりとしていた。ちよつとヤバいかも。

「……どうする？　まだやる？　アンタ達、卒業すら出来なくなるかも知れないけど……」

「……いいえ、もういいです、すみませんでした……」

「制服はどうする？　クリーニングに出してあげようか？」

「……いえ、それも結構です……」



震えていた二人に至っては涙と一緒に鼻水まで垂れ流している。これ以上やったら今度は私達がイジメっこになってしまいそうだ。

「じゃあ、この話は先生に黙っというてあげるからさ、わかったらさっさと高等部に帰りな！」

私の一喝を聞いて、女子生徒達は放心状態でトボトボと帰っていった。これでもう悪さをする事は無いだろう。

「一時はどうなるかと思うんだけど、まあ、一件落着かな！ カッカツカ！」

「……落着じゃないよ全く、翼のせいで今まで以上に『お姉の妹』ってだけで先生達からマークされちゃうよ……」

「那奈のお姉さんてスゴすぎ！ 是非、一度会ってみたいなあ……」

「……チャレンジャーやなあ、千夏は……」

「……お姉より千夏の方が普通じゃないよ……」

「でも、みんなと一緒に帰る事が出来てよかったねー！」

今回の大騒動の張本人はさっきの威勢はどこ吹く風でニコニコ笑っていた。カチンときた私はさっきよりも強く小夜の頭をパンとひ

っぱいたいた。

「痛いよー、那奈！」

「バカ！アンタ本当に全く……！」

「……ウェーン、ごめんなさい……」

小夜は泣き真似をして私に謝った。もう二、三発殴ってやりたかったけど、もういいか。

「……でも、まあいいや！今日は許す！」

「ホントに？ ヤッター！ 那奈、ありがとう！」

「おつ、何や何や、随分と機嫌がええやないか、那奈？」

「……そう？ そうかな……？」

色々とあって大変だったけど、翼が言う通り私は凄く上機嫌だった。

小夜が麻美子を励ましてあげたあの一言。あの時、私は初めて小夜が頼もしく見えた。

小夜もしっかりと優しい人間として成長しているんだな、としみじみと実感した。

「ああゝ暑い！ 喉乾いたわあゝ！」

「早く冷たいジュース飲もおよゝ！ もう限界いゝ！」

そういえばすっかり暑さを忘れていた。翼と千夏の絶叫を聞いた途端、一気に周りの気温が急上昇した気分になった。

「……言わなきゃ忘れてたのに、このバカ共が……」

全身から汗がドツと吹き出してきた。暑さに苦しんでいる私達に比べて、小夜の元気な事といったら……。

「ねーねーねー！ 六百円あればジュース五人分買えるよね？ ねっ、那奈！」

「あっ、そうだね、自販機の缶ジュースなら六百円で五本買えるね」

そう、五人。小夜が必死になって守ろうとした大切な友達。

「…えっ？ もしかして、私の分ですか？」

「そーだよ！ 麻美ちゃんも一緒にジュース飲もうよー！」

「……でも、私、皆さんに迷惑かけて……」

麻美子は申し訳なさそうにうつむいて下を見た。でも、もう遠慮なんてする必要は無い。

「別に迷惑じゃないよ、今まで小夜が起こしたトラブルに比べれば、今日のは大した事でも無いしね」

「小夜の大事な友達なんやろ？ だったらおごらん訳にはイカンわなあ？」

「お小遣い全部渡しちゃったんでしょ？ 暑い我慢すると脱水症状になっちゃうわよお？」

「一緒に帰ろうよ麻美ちゃん！ あたしも麻美ちゃんも那奈も翼も千夏もみんな友達！！」

私達の言葉を聞いて、また麻美子の地味な眼鏡の奥から涙がこぼれた。やれやれ、この娘は小夜以上の泣き虫かも。

「言ったでしょ？ 今日は小夜の相手をキッチリ勤めてもらうからね、約束よ？」

「……皆さん、ありがとございます……」

眼鏡を取って涙を拭いた。そんな麻美子に小夜はハンカチを手渡してあげた。

「麻美ちゃん、これ使っていいよ！」

「……ありがとう、真中さん……」

「……でも『真中さん』って何か変なのー？ いつもみんなから『小夜』って呼ばれてるから、『真中さん』じゃあたしの事なのかどうかわかんない？」

「……えっ？ じゃあ、『小夜ちゃん』でいい？」

「うん！ いいよー！ 『麻美ちゃん』と『小夜ちゃん』、何か似てるねー！ エヘヘッ！」

「……エヘヘッ！」

友達か、もしかして小夜から話しかけて仲良くなった友達は麻美子が初めてかも知れない。仲良く喋っている二人を見て、私も自然に笑顔が込み上げてきた。

友達が増えて、帰りにジュースを飲んで、翼の言った通りこれにて一件落着！

……なんて思っていたら私達の背後に影の薄い男子が一人いた。

「……あのー」

そうだった。翔太がいたのをすっかり忘れていた。

「……まだいたの？」

「……いや、まだいたの？　じゃなくてさ、俺の分のジュースって無いの？」

ジュース？　何を生意気な事を言い出してるのかこの男。

「何でオマエにおごらなアカンねん？」

「翔太君、お金持つてるでしょ？」

「自分で買えば？」

私達は翔太を無視して外にある自販機でジュースをきっちり五本買った。

「……ちょっと待ってよ、俺だって少しは役に立つたろ？」

「第一な、女と平気で風呂入るスケベに飲ませるもんなんか無いわ」

「ハア？　何でそれを翼が知ってんだよ？」

「あつ、そうだった、何か超ガツカリ、翔太君って最低」

「ちょっと、千夏ちゃんまで……」

「まあ、当然の報いよね」

「だから那奈にはワザとじゃない、ってこの前説明……」

「わーい！ 翔ちゃんのエッチー！」

「おい小夜！ 元々はお前のせいで……！」

どんな理由があろうと決して犯した罪が消える事はない。

「翔太君のスケベ！」

「そんな」

「翔太の変態！」

「ヒドい」

「翔ちゃんのエッチ！」

「何で」

「いつそ死んだら？」

「あんまりだろ！」

正に集中砲火。私達の言葉の鉛玉は翔太を跡形も無く蜂の巣にした。

「もうこんな変態ほつといて早よ帰ろうや〜」

「何か気持ち悪〜い、家に帰ってさっぱりとシャワー浴びよつと」

「冷たいジュース美味しー！ 麻美ちゃんも飲んで飲んで！」

「ねえ麻美子、このスケベに近寄っちゃダメだよ、何をされるかわかったもんじゃないから」

「……はあ、肝に命じておきます……」

「だから全部誤解だし不可抗力だししかも変態でもスケベでもないし、ってオーイ……」

スケベ男の遠吠えは炎天下の青空に虚しく消えていった。

しかし本当に暑い。夏休みが待ち遠しい。



## 第6話 メインストリートに行く

ミーンミンミンミンミン

夏本番。大きな白い雲が浮かぶ真つ青な空に、けたたましくセミの鳴き声が響きわたっている。

「みくんみんなみんみくん」

「翼ウザい、いちいち真似するなっつーの」

「いやあ、しかしあれやねえ、那奈はんに千夏はん、今年の暑は夏いねえ」

「今年の夏は暑い、でしょ？ 日本語変よ？」

「確かにそうとも言っなあ」

夏休みに入って八月上旬、私達の学校はこの時期だけ高校部校舎の一部がオープンキャンパスとなり、一般の人でも自由に出入りが出来るようになる。

以前に麻美子が侵入に失敗した例の音楽室へも行けるようなので、今日は小夜の家で待ち合わせてみんなで学校へ行く予定だ。

小夜の家は私の家の近所にある。私と翼は小さい頃に何度も小夜の家へ行っているで場所は良く知っているが、千夏は初めてで道に迷うかも知れないので私と翼は千夏を最寄りの駅まで迎えに行った。

「那奈の住んでる街って正にベッドタウンって感じね、どちらかっていうとマンションよりも一戸建ての方が多いのねえ」

「そうだね、まだ歴史が浅い街だからね、多分、これからバンバン建設していくんじゃない？」

「そつえばウチらってまだ千夏の家行った事ないなあ、学校出資者の家ってのは一体どんな感じやねん？」

「え、ただの三十階建て高層マンションの最上階だけよ？」

「……やっぱりセレブリティやなあ、オイ」

翼が言った通り、千夏の私服はセレブっぽいとても中学生とは思えない程オシャレでセクシーなものだ。

ファッションセンスは勿論、余程自分のボディスタイルに自信がないと着れないだろう。

とてもじゃないが私はこんな服はお金を貰ったってお断りだ。

「でも、そんな千夏でも呆れるわよ、小夜の家には」

広いバス通りから路地を曲がって歩いていくと、イヤでも目に入っ

てくる永遠に続いていきそうな長い仕切り壁と巨大な玄関門。

「……What……?」

「……どうや？ 言うところでは皇居とちゃうで?」

小夜の家は常識的には考えられない程広く立派な豪邸である。

大きな鉄製の門の奥には、何かスポーツ競技でも開催出来そうなくらいに広い庭。

庭の中には観賞用の大きな水場と全季節対応の温水プール。

そしてその真ん中に建っている広くて一面ガラス張りの綺麗でお洒落な家。

「……Oh, my God, Unbelievable……」

「……どや、千夏？ 何かミサイル基地でもありそうな感じやろ?」

『ピンポン』

自分よりもワンランク上のセレブ豪邸を見て呆気にとられている千夏を後目に、私は真中邸のインターホンを押した。

「はい、もしもし？ どなた様ですかー?」

「……あのさ小夜、電話かけてる訳じゃないんだからさ……」

「あー！ 那奈だ！ 今行くねー！」

小夜はそう答えると一方的にインターホンをブツツと切った。

『ピンポーン』

「はい、もしもし……」

「オートロック開けなさい！ 中に入れないでしょ！」

「あつ、忘れてた、エヘヘッ！」

ガシャと門の鍵が開いた。毎回毎回開けるのを忘れてインターホンを切ってしまう。マイペースもいいとこだ、全く……。

私達は立派な玄関の門を通って庭を抜けて家の前で小夜が出て来るのを待った。

この場所からでも庭中に取り付けられた何台もの防犯カメラを確認する事が出来る。セキュリティも万全で正に要塞だ。

「……この家を建てるのに一体いくらかったのかしら……」

「千夏、知つとるか？ こんなバカでかい家にほとんど毎日2人暮

らしやで、真中家って」

「えっー！ ウソー！ たった二人でこの広さ！？」

小夜の父親の真中啓介さんはギタリストとして芸能界にデビューし、その後音楽プロデューサーとして大成功して、毎年長者番付に名前が載る程の大富豪である。

世界中を相手にした仕事の関係で非常に多忙な人で、私の母と同様に一年のほとんどを海外で過ごししており、日本に帰ってくる事が少ない。

その為、この家に住んでいるのは小夜と母親のあづみさんの二人だけなのだ。

啓介さんだけではなく、あづみさんも小夜を産む前は歌手として芸能界で活躍していた『歌姫』で、その二人から生まれた小夜は音楽一家のサラブレッドな訳だ。

「……サラブレッドのハズなんやけどなあ、何でやる？」

「……そうよねえ、リコーダーすらもまともに吹けないし……」

私と翼が小夜の思い出話をしていると、玄関の扉がガチャッと開いて家の中から小夜と麻美子が元気良く飛び出してきた。玄関の奥にはあづみさんの姿もあった。

「みんな、おはよー！」

「おはようございますー！」

「あれ、麻美子じゃない？ 先に来てたのお？」

「うん、昨日、小夜ちゃんの家にお泊まりさせてもらったから……」

今や麻美子は真中家の常連だ。何にも知らなかったのは千夏だけだった様だ。

「最近はお私よりも麻美子の方が真中家に立ち入ってる数が多いわよ」

「麻美子もうすっかり小夜のお気に入りやなあ」

「エヘッ、だって麻美ちゃんはお友達だもん！」

みんなとしばらく喋っていたら、玄関の奥にいたあづみさんも外に出て来た。

「あら、皆さんいらっしやうい」

「あつ、おはようございます、あづみさん」

「……………」

「…………… 那奈です」

「あゝ、那奈ちゃんねゝ、おはよゝ、いつも小夜と遊んでくれてありがとうねゝ」

「……小夜のオカン、相変わらずなんか抜けとるなあ……」

小夜の天然も相当だが、このあづみさん空気もハンパではない。あつという間に周りの時間が超スローモーションになる。

「初めまして、三島千夏です、いつも小夜さんと仲良くさせていただいてます」

「あらゝ、あなたが千夏ちゃんねゝ、初めましてゝ、松本さんのところの娘さんよねゝ？」

「……いやいやいや、それは千夏やなくてウチの事やから……」

「これからも小夜と仲良くしてあげてねゝ、千夏ちゃん」

「……は、はあ……」

「……話、全然聞いてへんしな……」

もうゴチャゴチャだ。翼と千夏は体中の力抜けたみたいにガツクリ肩を落とした。

「じゃあ、行ってくるね、お母さん！」

「はい、行つてらっしゃい小夜ちゃん、夕方にはちゃんと帰ってくるのよ」

「……いろいろとご馳走になって、ありがとうございました！ お邪魔しました！」

「いいのよ麻美ちゃん、また遊びにいらっしゃい？」

「じゃあ、夕方には小夜を連れて帰ってきますから」

「……………」

「……那奈です」

「那奈ちゃん、小夜をよろしくね」

「……はい……」

あづみさんの雰囲気にはいつも脱力させられる。話を聞いているのかいないのか、アタマの中が全然想像出来ない。この親あってこの子あり、とはこの親子の事を言うのだろうか。

「……一ヶ月も会わないと名前すら忘れられちゃうからね……」

「あの調子やと、多分ウチと千夏の区別ついてへんで、絶対」



「……そうみたいね、アタシと翼はアウトね、でも、麻美は覚えてもらったみたいじゃない？」

「……名前覚えてもらうのに三日間かかりました……」

「あつという間に忘れるから気をつけてね、十四年面識ある私すら忘れられたんだから」

この緊張感の無さは遺伝なのだろうか。しかし、妹のいづみさんはしっかり者だから、やはり育った環境によって変わるのかな。

「ねーねーねー、みんな今日はどこ遊びに行くー？」

「学校に行くってさっき話したでしょうが！ 全く、言ってるそばから……」

私服で通学路を歩いて行くのは意外と新鮮な気分で、いつもと同じ景色なのに暑い中歩いていてもあまり苦にならない。

途中でコンビニに寄って、みんなとアイスを食べながら歩いていたあつという間に学校が見えてきた。

「学校が見えたー！ 着いた着いたー！」

先に学校に向かって走り出した小夜を追って、私達は学校の校門に着いた。

「へえ、結構人いるじゃん！」

千夏が言った通り、広い校庭には学生以外にもたくさんの一般客が見学に来ていた。

「毎年人気あるみたいですよ、入学予定の人とか、卒業者の人とか、家族連れで来る人もいるみたいです」

「まあ入るだけならタダやしな、暇つぶしにはもってこいやな」

最近麻美子も小夜だけではなく私達とも結構普通に喋る様になった。翼と小さい同士で歩きながら喋っているが、やはり翼の方が背が低い。

「何かこうやってスナリ高等部に入れちゃうと、この前の騒動が何だったんだろうと思えちゃうね」

「無茶せんでもこんな簡単に入れてたのになあ、那奈？」

「……すいません……」

申し訳なさそうに体を縮める麻美子の後ろに回りこんだ小夜が、両肩を掴んで急かす様に麻美子を押して走った。

「麻美ちゃん、やっとピアノ弾けるね！　ねーねー、早く行こうよー！」

「……ちょ、ちょっと待ってよ小夜ちゃん！　無理やり押さないでよー！」

「小夜、走んないの！　また転ぶよ！」

「急がなくてもピアノは逃げないのにねえ？」

「ムチャクチャ暑いのにホンマ元気やなあアイツは……」

オープンキャンパスに合わせて校舎内では色々なイベントがあり、高等部の先輩達が忙しそうに動き回っている。他の学校で言えば一足早い文化祭みたいなものだろうか。

「でも、これとは別に秋にちゃんとした文化祭があるみたいですね」

「今回ののは主に部活動中心の出し物なんやろな」

今の翼と麻美子の話にも出て来たこの学校の部活動は、体育会系や文化系全部含めるとかなりの数と種類があり、まるで大学のサークルのような感じだ。

「私達も進学したら参加する事になるんだろうね」

「うわぁ、何か楽しそう！早く高校生になりたい！」

校舎内に入って廊下を歩いていくと、教室の中に文化系部を中心として活動している出し物やお店、部活動紹介ブースがたくさんあった。

色々と教室を見学しながら歩いて行くと、私達のお目当ての音楽室が前方に見えてきた。

「あー！麻美ちゃん、音楽室あったよー！」

「……本当だ、何かドキドキしてきちゃった……」

「さあ、麻美子！憧れのグランドピアノとのご対面ね！」

「でもアレやな、千夏、これで入り口カギ閉まっとしたら大笑いだな」

「えっ？」

「コラ翼！いちいち嫌な事を言っつーの！」

駆け足で音楽室に向かった小夜が、入り口の扉を開くかどうか慎重に確かめた。

ガラガラッ！

「あつ、大丈夫だよ！ ドア開くよ！ さあ麻美ちゃん、どうぞど  
うぞ！」

「……ドキドキ、それじゃあ、失礼します……」

音楽室に入ると、まず広さが中等部のものと全然違う事に気がつ  
いた。中等部の音楽室の二倍近くあるだろうか。

「……うわぁ……」

「すごい！ おっきなピアノー！」

目的のグランドピアノは音楽室の隅に置いてあった。確かに中等部  
の電子ピアノとは比べ物にならない立派なもので、発表会やオーケ  
ストラなどで見かけるあのピアノだ。

「……うわぁ、やっぱりすごいなあ……」

麻美子は周りをグルグル回りながらピアノを見つめていた。その瞳  
は眼鏡のレンズ越しからでもわかる程キラキラと輝いていた。

「ウチらの他には誰もおらんみたいやなあ、音楽系の出し物はやってへんのかなあ？」

「でも扉が開いてるんだから、別に入っちゃっても問題ないんじゃないの？」

「誰もいないんだから、思いっきり好きなだけ弾いちゃったら？何かあったらアタシのママに助けて貰えばいいじゃない？」

「そーだよ、麻美ちゃん！ ピアノガンガン弾いちゃおうよ！」

「……本当に、いいんですか？ 何か、怒られたりしないですよね……？」

とりあえず夏休み中なんだから先生達が見張っている事も無いだろう。もし本当に何かあったら千夏ママにお願いすればいいか。

「アタシ達が観客ね！ セレブの耳は手強いわよ！ ゆっくり聞かせて貰おうっと！」

「よっ、今日の主役！ 待ってました！ これで演奏グダグダやつたら入場料返してもらおうで〜！」

「質の悪い観客達だねえ、全く、麻美子、私達なんか気にしないで好きな曲弾きなよ」

「あたし、麻美ちゃんの演奏、家で聞いた事あるもん！ スッゴい上手だよ！ みんなビックリするよー！」

「ほお、小夜のヤツ何気にハードル上げよったなあ、こりや楽しみだわ、ウヒヒッ」

「はいはいはい、黙りなさいアンタ達！ 麻美子が演奏出来ないでしょ！」

オーケストラよりやかましい不協和音のお喋りをやめて、真面目に演奏を聴く為に私達は椅子に座って背筋を伸ばした。

「それじゃ、あの、私が良く弾く曲で、その、みんなも知ってるかも知れない有名な曲を……」

ちよつと緊張で動きが固い麻美は椅子に腰を下ろしピアノの鍵盤の蓋を上げ、深呼吸をしてゆっくりと白い鍵盤に両手を置いた。

（……麻美子、何かスゴい雰囲気があるな……）

私がそう思った時、麻美子の演奏が始まった。その演奏の腕前は半端なものでは無かった。

広い音楽室に響き渡る綺麗なピアノの音色。うっとりとし聞き惚れてしまう優しいメロデー！

私達音楽素人が聴いても麻美子の演奏は常人のレベルを軽く超えたものだった。

(……何よこれ、スゴくない……?)

私を始め、ここにいる全員がピアノの音色に没頭していた。時間の流れを忘れてしまったと言っても言い過ぎでは無かった。

音楽空間の脳内旅行。私達が我に返った頃には麻美の演奏はすでに終わっていた。

「……こ、こんな感じですけど、どうですか……」

「麻美ちゃんスゴい！ スゴく上手だったよー！」

「あー、緊張したー！ 上手く弾けて良かった！ やっぱりピアノの音、綺麗で素敵ですね！ 何か夢見たい……」

私達は呆気にとられてボツ！としていた。一体何が起こったのか全く理解出来なかった。

「……確かに、どこかで聴いた事のある曲だったけどねえ？」

「……こんなん、普通に弾けんやろ？ しかも楽譜とか無しでやで？」

「……麻美子、アンタ本当にピアノとか他の音楽とか習ってないの？」



小夜を除いた私達三人はこの現実をともに受け止める事が出来なかった。

何かトリックがあるか、もしくは麻美子が嘘をついているか、とにかく疑う事しか出来なかった。

「……えっ？あつ、はい、音楽教室とかに習いに行つた事は一度も無いです……」

「……本当に？」

「……あつ、でもこの前、小夜ちゃんの家でちょっとだけ弾かせて貰つて、その時に少し小夜ちゃんのお母さんに教えて貰つた事はあります……」

確かに小夜の家にはピアノでは無いがオルガンの様な楽器がリビングに置いてある。小さい頃よくあづみさんがそれで曲を弾いてくれた。

「……ねえ、ちなみに今のつて何て曲なの？」

「……シヨパンの曲です、私、大好きな曲で……」

「……名前言われてもサッパリわからん、何や、シヨパンて？」

私達が顔が揃えて首を捻っていると、小夜が突然立ち上がってリク

エストをした。

「ねーねーねー、麻美ちゃん！ この前弾いてくれたやつやってよー！ あのスゴいヤツ！」

「……じゃ、じゃあ、もう一曲弾いていいですか？ またショパンなんですけど……」

「……名前言われてもわかんないから何でもいいよ、ショパンだから知らないけど」

「……そ、それじゃあ、弾かせて貰います……」

再び麻美子は鍵盤に手を置いた。次の瞬間、私達のアタマの中は真っ白になった。

テレビとかで聞いた事のある有名な曲。しかしその曲がハンパなく難しそうな事は聞くだけで想像出来る。

序盤からいきなり始まる早いメロディーに私達は聴覚以外の五感を奪われてしまい、まるで何か幻想を見せられている感じだった。

「……あ、あの、こんな感じですけど……」

「わー！ 麻美ちゃんスゴい！ スゴいよー！」

小夜の大きな声に私は現実に戻された。気がつくやうに演奏はすでに終わってしまっていた。

「……………」

私達三人は無言のまま再び顔を見合わせた。何が何だかさっぱりわからない。

「……麻美子、アンタさあ、一体何者？」

「……えっ？ な、何ですか那奈さん？」

「……よくわからんけど、尋常で無いのは確かやわ」

「……っ、翼さん？」

「……何かウソついてない？ あるいは隠し事とか」

「……千夏さんまで、そんな……」

麻美子は背中を丸めてうつむいてしまった。本当に気の弱い娘だ。

「別に怒ってる訳じゃないよ、ただね、習ってもないのにここまで弾けるなんて一体どうしたら……」

「……絶対音感だよ」

「……!？」

男性の声がした。音楽室の扉の方を見ると、いつの間にか眼鏡を掛けた男性が一人立っていた。

「……誰？」

「……井上さん？」

井上さん？どうやら麻美子はこの男性の事を知っているみたいだ。

「こんな所まで押しかけてすまないね、お家に電話してみたら、こちらの学校に来ているって聞いてね」

謎の男性が現れて、私達の周りの空気は一瞬固まった。その男性はゆっくりと私達の元に歩み寄ってきた。

「久しぶりだね、小夜ちゃん、元気そうだね」

「……ほえ？ 誰？」

「……あれ？ 忘れちゃったかな？ まあ、しょうがないかな、最後に会ったのはずいぶん前の話だしね」

……小夜の事も知ってるって、一体誰？　少なくとも私にはこの男性に覚えが無い。

「僕は決して怪しい者ではないよ、あつ、そうそう、自己紹介が遅れてすまない、僕はこういう者だ」

そう言つと男性は上着の内ポケットから一枚の名刺を取り出して私に渡した。

「……サンライズ・ファクトリー、チーフディレクター、井上和彦……」

『サンライズ・ファクトリー』、その名前を聞いて私はピンときた。

「えっ！　サンライズ・ファクトリーってあの有名な音楽事務所じゃない！」

「……なるほどなあ、そういう事かいな」

「えっ、何？　どういう事？」

千夏はわからないみたいだが、それはまあしょうがないだろう。しかし私と翼は昔から良く知ってる名前だ。

「……あの、井上さん、今日は……?」

「……この前会った時の事を『マスター』に話してね、とても君に興味を持ったらいいんだ、是非一度、自分の目と耳で直接確認したくなったらしくてね、多忙なスケジュールの中、わざわざ時間を割いて……」

「……別にわざわざではない」

「あー！ この声！」

小夜が聞こえてきた声に反応した時、開いている扉からまた一人男性が教室に入ってきた。

背が高く細身の体に、夏なのに黒尽くめのコートにレザーパンツ、そしてサングラス。久し振りに見る姿だが、私はすぐにそれが誰だかわかった。

「やっぱりそうだー！ おとーさんだー！」

「えっ？ 小夜のパパって事はつまり……」

私達の前に現れた男性。それは小夜の父親であり、国内のみならず世界の音楽界でも活躍しているサングラス・ファクトリー創始者、真中啓介だった。

「ワイ！ おとーさんだおとーさんだ！！」

小夜は飛び出す様に駆け寄り、そのまま父親にギュッと抱きついた。

「おとーさん、お帰りなさい！」

「……ああ、ただいま、小夜、元気だったか？」

「ねーねーねー、おとーさん！ いつ日本に帰ってきたのー？ 電話無かったからわかんなかったよー！」

久し振りの父娘の再会。しかしそれが許される時間は限られてるようだ。

「……すまない、小夜、長くは居られないんだ、すぐにまた戻らなければならぬ」

「えー！？ ヤダヤダヤダ！ お家に一緒に帰ろうよー！ お母さんも待つてるよー！？」

「……すまない、小夜、お友達と少し話をさせてくれるか？」

「ヤダヤダヤダヤダー！！」

「……小夜、こっちにおいで」

「……うー」

私は嫌がる小夜を何とか啓介さんから引き離した。小夜から解放された啓介さんはピアノの前にいる麻美子の元へ歩いていった。

「……初めまして、真中啓介です」

「……は、はい！ え、遠藤麻美子です……」

麻美子は緊張のせいか案山子の様にピーンと真っ直ぐになって直立していた。

「……話は井上から大体聞いている、しかし、私の予想以上の才能の持ち主の様だ」

「……えっ、そ、そうですか……？」

「……君は絶対音感という言葉を知っているかな？」

「……はい」

「……絶対音感って何かどうかで聞いた事あるなあ、何やつけ？」

翼が額を指でカリカリかきながら何か思い出そうとしていた。絶対音楽、私も何か聞き覚えがある。



「絶対音感とは、簡単に言えば音を聴くだけでその音の音階がわかる能力の事だよ、誰もか持てる能力ではない、君が楽譜も無しにシヨパンを弾いてみせたのは、曲を聴いてその能力で音程を覚えたからだろう」

「……で、なければ先程の演奏は説明が出来ない、井上から聞いた通り、君は絶対音感を持っているみたいだな、自覚はあったのか？」

「……あの、その、うつすらですけど、ありました……」

井上という人も会話に加わって、麻美子の才能の話をしている。私達には全然わからない内容だ。

「……どんな事でその能力に気付いた？」

「……小さい頃からテレビから聴こえる音とか、学校のチャイムやケータイのメロディーとかの音が音階で聴こえる様になって……」

「……ほう」

「……最初、私は何か耳の病気なのかなって思っていました、でも、今度は人が喋ってる声まで音階で聴こえてきて、怖くなってあまり人と喋れなくなって……」

麻美子と啓介さんの話を聞いてわかった。なぜ麻美子が引っ込み思

案な性格になってしまったのか。そんな話があったなんて全然知らなかった。

「辛い事を聞くようだけど、君の前の、いや、実のお父さんは国内では有名な音楽家だったそうだね」

「……はい、そうです」

井上さんの言葉に私達は驚いた。実の父親？　どういう事なんだろう。確か麻美子には今もちゃんと父親がいると聞いていたのだが。

「……父親の仕事の影響で小さい頃から音楽に慣れ親しんでいた訳か、なるほどな、井上、よく調べたな」

「ええ、仕事ですから」

「……でも、お父さん、私が八才の時、病気で死んじゃって……」

音楽室の中の空気が凍りついた。麻美子はとても悲しそうな顔をして辛い過去を話し始めた。

「……お父さん、家にいる時はいつも私と一緒にピアノを弾いてくれました、私が音の聴こえ方が人と違うのも理解してくれてました……」

「お父さんはわかっていたのかも知れないね、君の才能を……」

「……辛い記憶を思い出させてしまつてすまない」

「……いえ……」

啓介さんはかけていたサングラスを取つてコートの胸ポケットにしまった。

「……時間が無いので本題に入る、遠藤麻美子、君はこれから音楽を続けていく気はあるか？」

「……えっ？ ど、どういう事ですか？」

「……ピアノでも歌でも何でも良い、もし、音楽を続けていく気があるのなら、是非とも我々に手伝わせて欲しい」

予想もしてない突然の話に、麻美子本人はおろか話を聞いていた私達も目を丸くして驚いた。

「えー？ おとーさん達の会社に麻美ちゃんが入るのー？」

「簡単に言えばそういう事だね、我々の事務所と契約をして欲しいって事だよ」

社長の娘のくせに話を全くつかめていない小夜に井上さんは優しく説明してくれた。

「……君は未成年でまだ学生だ、君だけではなくて、君の御両親ともお話をしなければならぬ事だが、君自身の気持ちを知りたかった、本当に、音楽を愛しているのかどうかを……」

「……………」

麻美子は黙り込んでしまった。あまりに突然の話で困惑しているのだろう。

「……すぐに答えなくて良い、もしすこしでも音楽に興味があるなら、ここにいる井上に話してくれ」

そう言うと啓介さんは音楽室にある時計をチラリと見た。

「マスター、時間ですか？」

「……ああ、すまない、井上、後を頼む」

「わかりました、後はお任せ下さい」

「えー！ おとーさん、もう行っちゃうのー!?」

二人の会話の内容を聞いた小夜は啓介さんを引き留める様に抱きついていた。

「……小夜、すまない、今度帰ってくる時は必ず連絡する」

「じゃあ途中まで一緒に行くー！ おとーさんともっとお喋りしたいもん！！」

「小夜ちゃん、お父さん時間が無いんだ、話してあげてくれないか？」

「ヤダー！ ヤダヤダヤダー！！」

井上さんの説得も聞かず、小夜は啓介さんの体に顔を擦り付けた。

「……小夜、お母さんに宜しく伝えてくれ」

啓介さんは小夜の頭を撫でると私と翼の方を振り向いた。

「……那奈、翼、お前達の父親は元気か？」

「はい、御陰様で年甲斐もなく馬鹿ばかりやってます」

「オトンもすっかり回復したで！ もうピンピンしとるわ！」

「……そうか、良かった、二人に宜しく伝えてくれ」

啓介さんはしがみついている小夜を名残惜しそうに引き離して再び頭を撫でた。

「……小夜、必ずまた帰ってくるから、いい子にするんだぞ」

「……うん……」

「……それでは失礼する」

啓介さんは振り向く事なく音楽室を出て行った。相変わらず忙しい人だ。

「……小夜、お父さんと会えただけでもいいじゃない？ 元気出しなよ？」

「……うー」

半ベソをかいている小夜を私はギュッと抱きしめた。

「……ここからは僕が説明しよう」

残った井上さんは啓介さんが行っているアーティスト育成のプロジエクトを私達に説明してくれた。

幼い頃から音楽に親しむ事で才能を開花させ、その後、英才教育によりレベルの高いアーティストを誕生させて世界に送り出していく。すでに何人かの有能なアーティストの卵が育っているらしいが、その人達と比べても麻美子の才能は勝るとも劣らない物らしい。

「プロジェクト参加にはすでに年齢制限を越えてしまっているが、君の今の才能でも十分に通用するだろう」

「……何が何だか全然わかんないんだけど、つまりこれってスカウトかしら？」

さすがは芸能界にも興味津々の千夏。ミィハー心に火が点いたらしく、井上さんに質問をぶつけ始めた。

「そうだね、簡単に言えばそういう事かな」

「えっ！ 麻美子スゴいじゃん！ スカウトだよスカウト！ プロデビューとかしちゃうかも知れないよ！」

「……………」

「……………麻美子？」

興奮しまくる千夏とは対照的に、麻美子の表情は曇っていた。

「……どうやらこの前と気持ちは変わっていないみたいだね……」

「……はい……」

「えっ、何で？ 麻美子、イヤなの？ 亡くなったお父さんみたいに音楽家になれるかも知れないの？」

興奮で見境無くなった千夏が見事な失言で麻美子の古傷に触れた。これだからセレブってヤツは……。

「……お父さんが死んじゃった後、お母さん別の人と再婚したんです、小さい診療所をしているお医者さんで、すごく優しい人なんですけど……」

父親がいるって言っていたのは母親の再婚相手の事だったようだ。

「……いつも患者さんがいっぱいいて忙しくて、お母さんも看護婦をして手伝ってるけどそれでも人手が足らなくて……」

麻美子はピアノの鍵盤を撫でながら話を続けた。



「……私、お仕事手伝えないから、せめてお母さんに迷惑かけない様にしたくて、ピアノ弾きたいなんてとても言えなくて……」

「……………」

私達は麻美子の事情を聞いていて胸が痛くなった。麻美子なりに親孝行がしたかったのだろう。

「……家で電子ピアノ弾く時も、イヤホンして弾くんです、患者さんに迷惑だし、お母さんも死んだお父さん思い出してしまうかも知れないし、そしたら今のお父さんも嫌な思いをするんじゃないかって……」

しかし親孝行ってそういうものだろうか。何か違う気がする。

「そんな、考え過ぎよ麻美子!」

「オトンとオカンにはちゃんと話したんか? 反対されてる訳や無いんやろ?」

「麻美子、アンタ自身はどうしたいの? ピアノ、続けたいの?」

「……………それは……………」

自分が本当にやりたいのならそれを諦めてしまつてはいけない。自分が求める道を進んでいくのが本当の親孝行だと私は思った。

「ピアノ弾くの好きなんでしょ？ 音楽好きなんでしょ？ だからこの音楽室に来てピアノ弾きたかつたんでしょ？」

「……………」

私は必死に麻美子を説得した。しかし、麻美子から返事が返ってくる事は無かった。

「……先程『マスター』が行った通り、返事はいつても構わない、君の気持ちが続いた時に話をしてくれればいいから」

そう言つと井上さんは上着のポケットから名刺を出してペンで何かを書き始めた。

「僕のスタジオの住所と電話番号を覚えておこう、何か聞きたい事があつたらここに連絡してくれ、もちろん、遊びに来るだけでも結構だ、君の大好きなグランドピアノもあるしね」

「えっ！　じゃあピアノを弾く為だけでも行つていいの！？」

沈み込んでいた空気を吹き飛ばす様に、小夜が話に反応した。

「ん？ うん、まあ構わないよ？」

「やったー！ 麻美ちゃんやったね！ これからはいつでもピアノ弾けるよ！ もう音楽室に忍び込まなくてもいいんだよー！」

「……えっ？ さ、小夜ちゃん、私、まだ……」

「ねーねーねー、井上さんだっけ？ 別におとーさんの会社に入んなくったって、ピアノ弾きに行くだけでもいいんだよね？ 遊びに行くだけでもいいんだよね？」

「……ま、まあね……」

「麻美ちゃん、大丈夫だよ！ おとーさんの仕事の話は抜きにして、ピアノだけ弾きに行こうよ！」

「……は、はあ、いいんですかね……？」

小夜の勢いに麻美子も井上さんもタジタジになっていた。まあ、井上さんからしたら相手は社長令嬢だから文句は言えないだろうけど。

「つーか小夜、オマエん家ピアノ無かったっけ？ オトン持ってへんのかい？」

「えーとね、あるんだけどー、あたしが小さい頃おとーさんのスタジオで遊んでたら、楽器いっぱい壊しちゃって……」

「……それから、関係者以外スタジオ出入り禁止になったのよね、総額一千万円がパアになったそうよ」

「そうでーす！ エヘッ」

「……色んな意味で凄い御令嬢だね、僕のスタジオは大丈夫かな……？」

井上さんは私達に名刺を残して教室から出て行った。色々なサプライズが重なって、何か嵐が過ぎ去った後の様だ。

「何か、スゴい事になってきたね」

「小夜のオトンも相変わらずやな」

私と翼が笑いながら喋っていると、千夏が羨ましそうな顔をして問い詰めてきた。

「ねえねえ、二人とも真中啓介の知り合いなの？」

「おう、まあな」

「お父さんが、ね」

「えっ、いいなあ、あつ、しまった！ サイン貰えば良かった

！あゝん、失敗！」

千夏は悔しそうにじたんだを踏んだ。

「ホンマにミィハーやなあ、千夏は」

「まあ、どこかでまた会えるかもよ」

音楽室の窓から見える空は真っ赤に暮れていた。私達は学校を出て朝来た道に戻ってそれぞれの家に向かった。

「良かったね麻美ちゃん！これでいつでもピアノが弾けるね！」

「……いいのかなあ？ ピアノ弾くだけで伺っちゃったりして……」

「いいのいいの！ もしそれで意地悪な事言ってきたら、あたしがおとーさんを怒ってあげる！」

頼もしい社長令嬢なこと。しかし前科があるので何か心配だ。

「……小夜、向こうのスタジオでも楽器壊さないでよ？」

「エヘヘッ、大丈夫！」

「どうだかねえ、この前だって学校でチャンバラごっこやってリコーダー壊したじゃない？」

「小夜には絶対音楽センスは無いわ、真中家も可哀想やなあ？」

「ねえねえ、小夜！ 今度小夜のパパのサイン貰ってきてよ！ もしくは所属してるアーティストのでもいいわよ！」

「じゃあ、麻実ちゃんのサインでいい？ 麻実ちゃん、今の内にサインの練習しとこーよ！」

「……だ、だから私はまだ決めてないですから！ サインとか絶対無理です〜！」

小夜に追い回されて、麻美子は必死になって逃げ回っていた。

夕暮れに吹くそよ風は、何か綺麗な音を奏でる楽器の音色の様に私達の耳元を通り過ぎていった。

## 第7話    o n e   t w o   t h r e e

夏休みも終わり、二学期になって一週間経った。本格的に時間割通りの授業が始まり、今日は夏休みに出された宿題の提出日になる。

「でねー、井上さんのスタジオ行ったらスゴいいっぱい楽器があつてねー？」

あのオープンキャンパスの日から、小夜と麻美子は迷惑を省みず毎日の様に井上さんのスタジオに行ってピアノをガンガン弾きまくっているらしい。

「ピアノの大きいのがデーンと置いてあつてね、麻美ちゃんもピアノ弾いてスゴく楽しそうだったよー！」

遊ぶのは結構。しかし、何か大事な事を忘れていないかい？

「……それで、夏休み中ずっと遊び呆けて宿題全部やり忘れた訳？」

「……えーとねー」

「そんでもってその宿題を昨日の晩に私に徹夜で手伝わせた訳？」

「……んーとねー」

「拳げ句の果てに忘れた本人はぐっすり眠っちゃって、残りを全部私一人でやらなきゃいけなくなった訳!？」

「……エヘヘッ、その通りです!」

バシッ!バシバシバシッ!!

私は思いつ切り小夜の頭を両手で数発ひっぱたいた。もう昨日の夜からずっと叩き過ぎてこっちの手が方が痛い。

「エヘヘッ、じゃないよ! いい加減にしな小夜! バカ!」

「……」  
「ごめんなさい」

何とか宿題を終わらせる事は出来たが、おかげで私は徹夜明けなので今日は眠いし体がダルい。

「まだ三時間目か、キツいなあ……」

正直言うと、このまま保健室に逃げ込みたい心境だったが、教育に小夜を一人にすると何を仕出かすかわからない。



欠席や早退なんてもつての他。保護者という立場は何てこんなにもキツイものなのだろうか。

「那奈！ 次の授業、音楽だよ！ 音楽室に行かなきゃ！」

「……移動するの？ はあ、辛いなあ……」

私は机から音楽の教科書とリコーダーを取り出して移動の準備をした。

「小夜、今日はちゃんとリコーダー持ってきたわよね？」

「ジャーン！ ほら、ちゃんと持ってきたよー！ 学校に行く前にちゃんとカバンの中を確認したもん！」

「……ならいいけどさ、やめてよ今日は、『あつ！ 忘れた！』とか……」

「あつー！……」

「……ちよつと……」

「……教科書、忘れちゃった……」

「……嘘でしょー！……」

最悪、最低、最凶の日だ。私はクタクタの体に鞭打ち教科書を借り  
に二組の教室に向かった。

「ねえ翼、千夏、音楽の教科書持ってない？」

「そんなん持ってる訳ないやろ？ 今日にはウチら音楽の授業なんて  
無いもん」

「アタシも授業の無い分の教科書は家に持って帰っちゃうタイプだ  
から持って無い」

「……何や、また小夜の分かいは？」

「……………」

「……ご愁傷様……………」

寝不足でアタマがふらつく。足取りも重い。それでも私は歯を食い  
しばって次は四組の教科書へと向かった。

「……麻美子、音楽の教科書持ってない？」

「……えっ、音楽の教科書ですか？ えっと、無いですね……………」

「……あっそ、ありがと……………」

「……でも、家に帰ればありますけど……………」

「……いや、いい、取りになんて行けないし……」

いけない、何かめまいがしてきた。もう早く横になりたい。しかしここで倒れる訳にもいけないので、私は最後の力を振り絞って三組の教室へ向かった。

「……翔太」

「うわっ！　那奈、顔真っ青だぞ！　大丈夫か!？」

「……それより、音楽の教科書……」

「お、音楽の教科書？　持ってないよ、今日は音楽の授業は無いし……」

「……」

私は力無くその場に座り込んでしまった。終わった。もう完全に終わった。

「……お、おい、大丈夫か……?」

翔太が私を心配して立ち上がらせようとした時、救いの神の声が聞こえた。

「音楽の教科書？ だったら俺が持つてるよ！」

その声には力を取り戻した。まるで絶望の暗闇に一筋の光が射し込んできたみたいに目の前が明るくなった。

「……か、貸して！ 友達が教科書忘れて……」

眩い光の中にいる救世主の姿を見て、私は一瞬声が詰まってしまった。

茶髪がかった髪、首元まで絞めていないだらしないネクタイ、足を組んで上履きを爪先でプラプラ。私が一番毛嫌いする男のタイプだ。

「いいよいいよ！ 俺ってばいつも教科書全部学校に置きっぱなしにしちゃってるから全教科持つてるけど、何冊レンタルする？」

「……いや、音楽だけでいいから……」

「えっー、いいの？ 二泊三日間何冊借りても料金タダだよ？ 延長料金も無いよ？」

「……いや、いらなから……」

「じゃあ、今ならオマケでリコーダーと体操着と習字道具も付けち

やおう！ 持ってけドロボー！」

「……いらねーって言ってんだろ……」

良く喋るウザい男子生徒の話を振り払って、音楽の教科書を持って音楽室へ向かった。

小夜に教科書を渡した後、私は完全に力尽きて授業中バツタリと居眠りをしてしまった。

「……プププッ」

「……何よ？」

「那奈、顔に寝跡付いてるー！」

「うるさいっ！ つーか、アンタちゃんと感謝してよ！ 私が教科書借りてきたおかげでちゃんと授業受けられたんだから！」

「うん、感謝してるよー！ ありがとう、那奈！」

「……何で私に返すの？ アンタが借りた人間に直接返しに行ってお礼言うんだよ！ 当たり前でしょー！」

「わーん、那奈怖いよー！」

半ば強引に小夜を引っ張って教科書を返しに三組の教室へ向かった。

「翔太、ありがとう、助かったよ」

「翔ちゃん、ありがとうー!」

「……いや、俺の教科書じゃないし……」

教室に入ってきた私達を見て、翔太は何か不機嫌そうな顔をした。

「あのさあ、前から言おうと思ってたんだけど、何でお前ら他の教室に普通にズカズカ入って来るの? 特に那奈!」

「何だよ、おかしい?」

「少しはためえよ、お前さ、いつも教科書とか借りに真っ直ぐ俺の所に来るだろ? このクラスの生徒達から『あの娘、風間君とどいう関係?』って言われてるぞ?」

「しょうがないじゃない、小夜が毎度毎度忘れ物するんだから、何か迷惑なの?」

「……いや、迷惑って訳じゃないけどな……」

相手にされない小夜が、私と翔太の会話に無理やり入り込んできた。

「ねーねーねー、翔ちゃん! この教科書って誰に返せばいいの?」

「ああ、今、多分トイレに行ってると思う、あつ、来た来た、おい、薫！」

「かおる？」

翔太が呼んだ先程のウルサイ男子は、小夜の姿を見て一目散にすっ飛んできた。

「おおおっ！ すっげえかわいい子発見！ 君はどここのクラス？ 何年？ 何組？ 何座？ 何型？ 何時何分何秒？」

「……ほえ？」

「……小夜、相手にしちゃダメよ」

これはダメだ。私が思っていたよりずっとウザい。あまりに軽すぎる人間の様だ。

「なんだよお翔太あ！ お前、こんなかわいい子を何でもつと早く紹介しないんだよあ！ まさかお前の彼女なんて言ったら夜道に背後から襲うぞあー！！」

「……俺達、従兄妹だから……」

「なーんだ、そうか、それならー安心だね」

……何このテンション？ ただてさえ寝不足なのに、この男の声を聞いているだけで頭が痛くなってきた。

「あつ、そうだった！ これ、教科書貸してくれてありがとうございます！」

「えっー、そんな、そんな事言われたら何か照れちゃうなあー、あつ、そうそう、お礼なんていらないからね、いらないからね、絶対にいらないからね！」

コイツ、絶対に欲しがってるだろう？ 私の正拳突きでも一発顔面にくれてやろうかな？

「でも、こんなかわいい子に使ってもらったら、この教科書も感無量だろうなあ？ なあ、航？」

「……………俺、教科書じゃないから知らない」

やかましい男子の後ろの机に座っているもう一人、丸刈りで無口の全く対象的なタイプの男子生徒がいた。

「なんだよお、冷たいじゃんかよお、もうちょっと話にノッてくれたっていいじゃんかよお」



「……………興味無い」

しかしこっちの男子はびっくりするほど背が高い。座高だけでも翼の身長と同じくらいの高さじゃないだろうか。立ち上がったら軽く180cmは越えそうだ。

「ねーねーねー、何で男の子なのに『かおる』って名前なのー?」

「……………ちよつと、小夜、やめなつて……………」

人を疑う事を知らない注意力ゼロの無邪気っ娘。防犯ブザーを渡しても全く意味が無さそうだ。

「男で『薫』って、何か美少年っぽくてカッコいいだろう? シャキーン!」

「うつん、変なのー!」

「うわあはあ! 変って言われたあ! 俺、変かなああ? どうなんだろう航う!?!」

「……………変」

「……………もう首吊るしかねえなあ、シヨボーン」

「……………勝手に吊れ」

ウザい。ウザいウザいウザい本当にウザい。髪の毛を掴んで床に叩き落とし、馬乗りになってボコボコに殴り倒したい気分になってきた。

「……………」

「……那奈、何となく気持ちはわかるけど、ここは抑えて……」

「……小夜、教室に帰るよ……」

「うん、帰ろう！　じゃあみんな、バイバイ！」

「……もう忘れ物するなよ、小夜」

「小夜ちゃん！　バイバイキーン！　航さんも何か一言どうぞ！」

「……………どうも」

全くもって不愉快だ。背の高い坊主の男子はいいとして、あの良く喋る茶髪男。何であんなにも馴れ馴れしいのか。

翼や千夏も個性的だが、出来ればあいつた人間達に小夜を近寄らせたくない。汚い色に染まって欲しくない。

全く、翔太は一体何を考えているのだろうか、学校ではあんな連中しか友達がいらないのだろうか。

「楽しい人達だったねー、那奈！」

「……………」

「……那奈、怒ってるの？」

「……別に……………」

せつかく居眠りして少しは楽になったのに、さっきの会話で一気に気分が悪くなった。昼休みに入っても私の頭痛は治まらなかった。

「……ほお、それはクドいなあ、えらい災難やったなあ、那奈」

「……翼にクドいって言われてもねえ……………」

「何でやねん！　こんなウチみたいな喉越しサラサラの現役中学生、めったに手に入らない上玉やで！」

「炭酸飲料並みに一気飲み出来ないわよね、喉にいちいちつかかりそう」

「何やと千夏、この微炭酸娘め！　ほっペプニブニ！」

「いや〜ん！　お触りはダ・メ・よ！」

コイツらのクドさはもう慣れたが、さっきみたいな全く内容の無い

クドい会話だけではどうもダメだ。

「でもあの人達って、翔ちゃんのお友達なのかな？」

「……さあ？ どうでもいいよ……」

「お友達だったら翔ちゃんのお家に遊びに来るかも知れないね！  
そしたら一緒に住んでる那奈も一緒に遊ぶの？」

「……怖い事言わないでよ、速攻追い返すわよ、お姉もいるし……」

昼休みが終わり、手洗いをしようと流しに行ったら、先に手を洗っていた翔太とバツタリ出会った。

「……おう、那奈か」

「……いちいち話かけないでよ……」

「さっき、顔色悪かったけど大丈夫か？」

「……うん、まあね、ねえ、あの連中、アンタの友達なの？」

「……連中？ 航と薫の事か？」

「……名前はよく知らないけど、デカいのとうるさいの二人……」

「まあ、友達といえば友達かな、放課後も良く一緒に遊び行ったり

するし」

「……ふーん……」

「……軽蔑してるだろ？　那奈の嫌いなタイプの人間だもんな、特に薫は」

やはり翔太も私の機嫌の悪さに気づいていた様だ。同じ生活をしているからかな？　うるさいのはお姉と父さんだけで充分だ。

「確かに薫はうるさいし、航は喋らないし、第一印象は悪いかも知れないけど、付き合ってみると意外に結構いいヤツらだったりするんだよな」

「……あつ、そう……」

「それにさ、二人とも親を亡くしてるとか居候しているとか、家庭環境も俺と似てたりするから何か気持ちが分かり合えるっていうか……」

「……えっ……？」

キンコーンカーンコーン

授業開始のチャイムが鳴って、廊下にいた生徒達が一斉に教室の中に入っていた。

「風間、授業始めるぞ！ 教室に戻れ！」

「やべっ！ じゃあ俺、教室戻るわ、じゃあな」

「……………」

あの二人は翔太と同じ様に親を亡くしていたのか。そんな不幸を背負った人間には見えなかった。いや、もしかしたらそう見せていなかったのかも知れない。  
また私は見た目だけで人を判断してしまっていたみたいだ。かといって、あまり深く付き合いたくないタイプな事には間違いないが。

（…………つか、もう限界、頭痛い、早く帰りたい…………）

授業中に居眠りしてしまった事もあったが、何とか今日の授業も全部終わって下校時間になった。

「…………今日はさすがにキツかった…………」

「那奈、大丈夫？ 授業終わったから早く帰ろーよー！」

…………誰のせいで私がこんなに苦しんでいるのか全然わかっていないなこの娘は…………。

「……先、行つてて、すぐ行くから……」

「うん！　じゃあ先に行つてるね！　待つてるよー！」

……親の心子知らずとはこういう事を言うんだろっなあ。自分も気づかない内に父さん母さんお姉に迷惑かけてるかも知れない。ちょっと自己反省。

ガンガン痛む頭を押さえながら、何とか残りの力を振り絞つてみんなが待つ下駄箱へと向かおうとした。

「……おいおい、何や那奈！　もうバテバテやないか！」

「……マジで辛そうだけど大丈夫？　保健室寄つとく？」

先に行つていると思つていた翼と千夏がフラフラしている私を後ろから追いかけてきた。なぜ二人がここにいるの？

「……あれ？　アンタ達、何で？　遅くない？」

「またホームルーム延長やで！　何でウチのクラスは毎回こうやねん？　あのアホ担任！」

「ねえ那奈、小夜はどうしたの？」

ちよつと前までならここで大慌てだが、今は大丈夫。最終列でゴールを守る優秀なキーパーがいるのだから……。

「……先に行つたよ、多分今頃、麻美子と一緒に……」

「あつー！ 良かった、追いついたー！ ハア、ハア……」

「……えっ……？」

聞き覚えのあるか細い声と地味な丸眼鏡。何でキーパーがここにいるの？

「何や何や麻美子！ 今日はおマエも随分と遅いやないか？」

「ねえ、小夜は？ 麻美子と一緒にじゃないの？」

「……何か、お財布盗まれたって言い出した生徒がいて、ホームルーム長引いちゃって、急いでみんなを追いかけてきて、ハア、ハア……」

「とりあえず深呼吸して落ち着けや、何を言ってるかサッパリわからん」

「じゃあ、小夜とは会ってないの？ まさか、また一人で先に行っちゃったの？」



……もう探し回る体力なんて少しも残っていない。完全に燃え尽きた。真っ白な灰みたいによ……。

「……もう、無理……」

「おいおい那奈、ホンマに大丈夫か？」

……そうだ。私は一人じゃない。心を通い合える、最高の友達がいるにも……。

「……みんな、後、お願い、小夜の面倒……」

「うん、さすがにそれは断るわ」

「アタシも勘弁」

「……私じゃ多分、力不足じゃないかと……」

「……アンタ達ねえ……」

……友達に恵まれない私がガツクリと肩を落としたその時、校門の方から小夜の大声が聞こえてきた。

「あー！ 翔ちゃん、那奈達来たよー！ みんなこっちこっち！」

「……那奈、本当に大丈夫か？　また顔色悪いぞ？」

華麗に全員スルーかと思っていた小夜の弾丸ボールを、最後の最後に受け止めてくれたリベロがここにいた。

「……良かった、翔太が小夜を捕まえてくれたんだね……」

「うん！　あたしもみんながいたから寂しくなかったよー！」

「……みんな？」

小夜の後ろに、翔太以外の男子生徒が二人。背の高い坊主頭にニヤニヤと笑っている茶髪頭の男子。

「おお！　これは皆さんお揃いで！　これは素敵で楽しい下校時間になりそうだねえ！　なあ、航！」

「……えっ、航君？」

「………やあ、麻美ちゃん」

最悪の対面。運命とは何て非常なものなんだろう。

「コイツらかいな？　那奈がさっき言うてたクドいつてのは？」

「……悪い、那奈、俺達ここで小夜とバツタリ出会ってさ、丁度俺らも今から帰るところで……」

「……最悪だ……」

私の頭痛は更に痛みを増してもう気絶寸前。本当に頭痛が痛い。頭痛が痛い？　ヤバい、思考回路が壊れ始めてる。

「えっ！　薫ちゃんってハーフなの？　何人と何人のミックス？」

「よくぞ聞いてくれました！　パパンが日本人で、ママンがドイツ人なのさ！」

「ほお、せやったらドイツ語喋ってみいや、ドイツ語！」

「メルセデスベエント、フォルクスワーゲン、ハイネケエン、ジャーマンウインナー、OK？」

「何やねんなそれ！　結局オマエも喋れんのやろ！？」

「えっ！　薫ちゃんも喋れないのお！　もう最悪！」

「ワタシ、ドイツゴシャベレナイアルヨ」

「どこの国の人やねん！　ホンマにクドすぎるわオマエは！」

……真つ青な顔をして歩いている私を後目に、翼と千夏はうるさい茶髪頭と仲良く喋っている。何が楽しいのかこんな会話？

「えー！　じゃあ、麻美ちゃんの診療所に航くんも住んでるんだー！？」

「……………まあ、そういう事」

「……………私の今のお父さん航君達のお父さんが知り合いなの、航君は今、ある事情でお父さんと暮らす事が出来ないから私達と一緒に住んでるんだよ」

「へー！　なんか那奈と翔ちゃんの家族みたいなお家だねー！」

「……………俺らはどうせ患者みたいなものだから、入院だよ」

「……………航君！　そんな事言っちゃ駄目だよ！」

「……………えー？　何の話？　どーゆう意味？」

こちらはこちらで別パーティーが完成していた。麻美子と坊主頭は訳ありの関係の様で、小夜がその話に興味を持ったみたいだ。

「……………何か、みんな意気投合しちゃったみたいだな……………」

「……………」

おまけに私の隣には翔太までいるし、もう最悪。私の心配を踏みに  
じる様にペラペラ楽しそうに喋り始めたこの連中。もう知らん、も  
う勝手にしてくれ。

「さっきも言ったけどさ、決して悪いヤツらじゃ無いから心配す  
なよ、那奈」

「……もういい、どうでもいい……」

背が高く無口な方の男子は名前は栗山航と言っらしい。勿論クラス  
は翔太と同じ三組。

小さい頃に実の母親を病気で亡くし、小さい頃は幼児施設で暮ら  
していたらしい。

その後、麻美子のお母さんの再婚相手である遠藤先生に引き取られ、  
今は麻美子の家族と一緒に生活している。ここら辺なんかは、ちょ  
っと私と翔太の関係と似ている。

「ねーねーねー、翔ちゃん！　いつから航クンと薫ちゃんと仲良し  
になったのー？」

そういえば私も小夜も翔太の友人関係には全く興味が無かった。私  
達と別に登校下校していたのは彼らと一緒にだったからだろう。

「えっと、最初の席順で俺達三人縦一列に並んで、休み時間とかに良く喋るようになって、それからかな？」

「……………つまり入学してすぐの話」

「いやあ、俺達はいつも翔太さんにお世話になりっぱなしでねえ、本当に俺は素敵な友人に巡り会えて良かったなあ、グスッ」

「……………いちいちやかましいだよ薫は……………」

「なんだよう、素直に感謝の言葉を述べてるだけじゃんかよう、有り難く受け取れよう」

「……………はいはい、そりゃどうも」

そして、こっちのいちいちやかましい茶髪頭の名前は桐原薫。クラスはもちろん三組。

茶髪に染めているのかと思っていたが、本人が言った通り本当にハーフのようで、髪の毛が茶色がかっているのは地毛らしい。

この男も小さい時に両親を亡くし、祖父に育てられて寂しい少年時代を送っていたそうだ。

この軽すぎるノリはその小さい頃の反動なのだろうか。それともハーフというのはみんなこんな感じなのだろうか。

「でも那奈、家に帰ったらちょっとでもいいから休めよ？ この後、別に予定とか無いんだろ？」

「……………うん、今日は空手の稽古無いからちょっと休む……………」

「ええー！ お嬢様って空手やってらしゃるんですかあ！？ 薫ちゃん興味津々〜！」

「……何よ、お嬢様って、私の事……？」

「俺がちゃんと押さえてるからさ、ちょっとこのカバンに一発蹴りを叩き込んでみてちょーだい！ 現役空手家ってヤツのマジ蹴り見てみたいッス！」

……何だと？ ナメてんのかこの男は？ この具合の悪い時に……。

「……おい、薫、やめとけて……」

「……オマエ、間違いなく死ぬで？」

「俺ってこれでも意外に丈夫に出来てるのさ！ さあ、お嬢様！ 加減なくこのカバンに向かってキツついのを一発お見舞いして……」

ドコッッッ！……！！！！

さっきまでの怒りを乗せて、私は容赦なくカバンごと薫の顔面に上段廻し蹴りを叩き込んでやった。

「あべしっつっ!」

鼻から血を噴き出して、薫はそのままバツタリと大の字で地面に倒れた。

「……無茶しやがって、あのアホ……」

「……バカね、薫ちゃんって……」

翼と千夏が吹っ飛んだ薫を哀れみの目で眺めている横で、私の蹴りを見た麻美子は小夜の後ろに隠れて震えていた。

「……気持ちはわかるけどよ、これはやっちゃダメだろ？ あれは痛いって……」

「……ごめん、頭が痛いところに力チンときて、一切加減できなかった……」

一般人を本気で蹴ったのは翔太以来か。さすがに翔太は私の廻し蹴りの威力を良くわかっている。

「ねえねえ翼、薫ちゃんどおする？ 何かピクピク痙攣してんだけど？」



「見てわかるやる千夏？　もう手遅れや、そのままそつと寝かしたれ」

大の字に倒れた薫を置いてしばらく下校路を歩いて行くと、いつも横を通る広い公園が見えてきた。

「ねーねーねー！　麻美ちゃん、麻美ちゃん！」

「何？　どうしたの、小夜ちゃん？」

「……あそこにいる女の子、もしかして泣いてるのかな？」

「……えっ？」

小夜が指差す方向を見ると、大きな木の下で小さい女の子がしゃがみ込んで泣いていた。

「……まあ、子供が泣くのは仕事みたいなもんやからな」

「ケンカでもしたんじゃないの？」

翼と千夏の言う通り、公園で遊んでいる子供が泣いているなんて良くある風景だ。しかし、それを放って置けないのが小夜の性格。

「あたし、ちよつと見てくる！」

「ちよ、ちよつと小夜ちゃん！」

「……あの娘はまた余計な事を……」

今日はもうさすがに限界、ここは麻美子に任せよう。小夜は子供に駆け寄りしゃがみ込んで優しく話しかけた。

「どーしたの？　なんかあったの？　どこか痛いなの？」

「……ウエ、ヒックヒック、ウエーン」

「泣いてちゃわかんないよー、お姉ちゃんに何があったか教えて、ねっ？」

「……おぼっし……」

「……お帽子？」

「おぼっしがひっかかったのー」

上を見ると、木の枝にかわいい黄色の帽子が引っかかっている。投げて遊んでいたのか、風に吹き飛ばされたのか、女の子が泣いてる原因はどうやらこれのようだ。

「……ちょっと高すぎですね……」

「……どーしよう麻美ちゃん？ 木に登って取れないかなー？」

帽子を取る方法を考えている小夜と麻美子の後ろからスツと大きな影が現れた。航だった。航は少し背伸びをすると、引っかかっている帽子を簡単に木の枝から外し取ってみせた。

「……はい、どうぞ」

「わーいわーい！ありがとう、おにいちゃん！」

「……どういたしまして」

「良かったね！ 今度は無くしちゃダメだよ！」

「うんー！」

小夜に負けない程の元気な笑顔を見せて、女の子は帽子を被って元気良く駆け出して行った。

「航くん、ありがとう！ あたしからもお礼言わせて！」

「……いいよ、別に」

「航くんは背が大きいから高い所の物を取る時って便利だね、麻

美ちゃん!？」

「……便利、って小夜ちゃんそれは……」

「……………まあね」

小夜はニコニコ笑って航の顔を見上げていた。あそこにあつた帽子を背伸びだけで取ってしまうのだから、航の背の高さはすでに中学生規格外だ。

「……………なあ」

「……………ん？」

どこから声が出たのか最初わからなかったみたいで辺りをキョロキョロ見渡していた航だが、下を覗き込むと小さい小さい翼が立っていた。

「……………オマエ、身長何センチあんなん？」

「……………185cm」

「げっ！　　ウチより40cmも高いんかい！　　少しウチに分けるや  
く！」

まるで子供と大人、この二人なら親子でも充分通用しそうだ。

「うへえ、145cmしかねえのかよ！ 小っちええ！ しかもペツタンコー！」

倒した筈の薫がいきなりすっ飛んで戻ってきた。コイツはジェイソンかそれともフレディか？

「どっから湧いてきたんやオマエは！？ オマエかて大して背え高くないやろがぁ！ しかもペツタンコやと？ どこ見てんねんこのスケベ！」

「ウォー！ アナタベリベリーチッチャイデスネー！ コンパクトタイプ！」

「やかましいわこのどアホ！ このスケベインチキ外国人が！」

ただでさえメチャクチャ頭が痛いのに、ついにこのやかましい同士が二人でくだらない事をベラベラ喋り始めた。私は次第に殺気に近い苛立ちを感じてきた。

「やっぱりクドい同士気が合うのねえ、翼と薫ちゃんって」

「……俺も昔からこの二人は引き合わせない方がいいかなって思っていたんだけどさ……」

千夏と翔太が呆れて見ている中、二人は周りの冷めた空気も読まずに持ちネタの応酬を始めた。

「ワタシインチキ外国人アルヨ！ シャチョーサンヤスイヨヨッテツテヨ！」

「ネタが古っ！ 何年前の芸人やオマエは！ 吉本行つて勉強してこいやボケ！」

「マイドオオニキモウカリマツカ？ ボチボチデンナア！」

「何やそのヘタレ関西弁は！？ オマエみたいなヤツは道頓堀で鵜飼でもしとけや！」

なぜだかわからないが、最後は二人でなぜかオラジコントになつてしまった。

「道頓堀で鵜飼をやった！」

「ワオ！ 採れた獲物は阪神のメガホン」

「武勇伝、武勇伝！ 武勇デندنデندن、ヒィウィゴー！」

「お嬢の蹴りを顔面で受けた！」

「ワオ！　那奈のパンツの色は白やで！」

「武勇伝、武勇伝！　武勇デンデンデンデン…」

「やかまし　　い！！」

ドスツツッ！！！！  
バキツツッ！！！！

「ひでぶううう！！！」

我慢の限界。頭にきた私は翼と薫、二人まとめて容赦なく上段後ろ廻し蹴りを叩きこんだ。

「……少し黙ってるオマエら……」

公園内にいた子供達まで怖がって黙り込んでしまった。中には子供を連れて逃げていくお母さんまでいた。

「……どうやら、これから相当騒がしい事になりそうだな……」

翔太の予想通り、私達の学生生活はこれからさらに騒がしい事になっていった。

あー、頭痛い。明日は翔太に小夜を任せて学校休んじやおうかな？



## 第8話 ラララ

「いやはや、手足が凍える辛い時期になりましたなあ、皆さん」

「ホントよねえ薫ちゃん、この前まで暑い暑い、って言ってたのがウソみたい」

「千夏の言う通りやわ、日が暮れるのが早よなったわなあ、何か下校時間の時点で結構暗くなってるしなあ」

航と薫に出会ってから二ヶ月、私達は八人は結局、毎日一緒に下校する様になった。

正直言うと私は最初の頃は一緒に帰るのが面倒くさかったのだが、翔太が居てくれるのでいつも私が見ていた小夜の世話を二人で分担する事が出来る様になった。

しかも翼と千夏は相変わらず薫と仲が良く、麻美と航は帰る家が一緒なので、むしろみんなと一緒に帰った方が都合が良く、私も楽が出来るので最近はこの日課になってきた。

「ねーねーねー、麻美ちゃんは温かい食べ物で何が一番好き？」

「……うーん、そうだなあ、おでんとか好きかなあ？ あとお鍋とかシチューとか」

「そーだね、シチューとか美味しいよね！ お野菜いっぱい入れて

ね！」

「ところで小夜ちゃんはどうな食べ物が好きなの？」

「あたしは麻婆豆腐だーい好き！」

「……それって別に寒くなくても食べられる料理だよね……？」

途中みんなでコンビニに寄りそれぞれ温かい飲み物を買って飲んだ。一口飲んだ後に吐く息が若干白く変わる。冬はもうそこまで来ているのを実感する。

「……なあ、そんな事より、一つ言わせてもろうてええかな、薫？」

「ハイハイ、何でもございましょう、翼姫様？」

「お前、何で缶コーヒー飲む時に小指が立ってんねん？」

「ああ、これね？」

「何かめっちゃめっちゃオヤジ臭いわ、なあ、千夏？」

「うわあ、薫ちゃん、それはちょっと気持ち悪い！」

翼と千夏は薫を避ける様にそばを離れた。しかしなぜか薫はニコニコして喋り出した。

「これさ、何で小指が立つちゃうか知ってる？」

「……まあ、良く立ってる人おるけど、何か理由があるんかいな？」

「えっ、なにに？　何か興味津々、何か肉体的や精神的に係あるとか？」

「コレね、小指じゃなくて親指を離したら缶コーヒー支えられなくなつて落つことしちゃうからなんだよ」

「……うわっ、くだらへん、その為にわざわざウチらに指を見せてたんかい！」

「……えっ、何か物凄い最悪なんだけど」

「しかもこのネタね、人が話してるの聞いてパクった」

「ネタはくだらないわ、挙げ句はパクってるわでもう最悪やわホンマに……」

私達はいつもこんなくだらない会話を交わしながら学校から最寄り駅まで歩いて行く。

私と小夜と翔太は電車に乗って帰る必要は無いが、ついついみんなと長話になって駅まで見送る事が多い。と、いうかほとんど毎回駅まで見送ってる。

そんな楽しい下校時間の中、私は一つだけ気がかりな事がある。航が全く私達の会話に参加してこない事だ。

私達の後をちゃんとついてくるのだが、ほとんど喋りかけてくる事が無い。こちらから話しかけるとすっかり返事はするが会話が終わるとすぐに黙ってしまう。

「……あつ、そうだ、なあ航、この前上履きのサイズが合わないって言ってたけど、あの話ってもう解決したのか？」

「……………新しい上履きに替えた」

「……………そっか」

いつもこんな感じだ。私達女子との会話どころか、翔太との会話でも全く盛り上がらない。

「まだまだ成長期なんですか航は、牛乳ばかり飲んでるしねえ」

「……………ホンマかい薫？ このノッポ、これからまだデカくなるんかい……………」

「翼、少し航ちゃんから成長ホルモン分けて貰ったらあゝ？」

「やかましいわ千夏！ ほっとけや！」

本当に薫とは対照的だ。うるさいのも困るが、デカくて目立つのに無口過ぎるのも困ったものだ。  
航が何でこんな無口なのか気になって私の心はどうもパツと晴れな

い。余計なお世話だろうか。

そんな事を考えながら温かい飲み物を飲んで歩いていると、いつもの駅前の交差点の信号に着いた。

「おーい、那奈！ 早くしないと信号が変わっちゃまうぞ！」

「那奈、早くー！ 信号変わっちゃうよー！？」

「…えっ？ あ、あれ？」

翔太と小夜の声が聞こえてきた時には信号は赤に変わってしまった。考え事をしていてどうやら私だけ置いて行かれてしまったみたいだ。……いや、私以上にトロくて渡りそびれた人間が一名隣にいた。麻美子だ。

「……み、みんな早いよ、ハア、ハア……」

見た目通りに運動神経の無い娘だ。もしかしたら小夜よりも足が遅いかも知れない。

「那奈、先に駅まで行ってるよ」

「うん、翔太、先に行ってて」

「麻美ちゃん！ ゆっくりでいいからねー！」

「……は、はい、ハア、ハア……」

待っていた翔太達を先に行かせて、私と麻美子は信号が変わるのを待った。しかし、ここの信号はなかなか変わらない。ジツと待っている空気が少しもどかしくなってきたので、私は隣にいる麻美子に話しかけた。

「あのさあ麻美子、ちょっといい？」

「は、はい！ な、何ですか！？」

「……そんな緊張しなくていいからさ、大した話じゃないし」

「……あつ、そうですか、ごめんなさい……」

「……謝らなくても無いからさ」

「……あつ、はい、すいません……」

「だから謝るなっつーの！」

どうやらこの前、私がうるさかった翼と薫をシメたのを見て、完全に麻美子に怖がられてしまったみたいだ。また変な誤解をさせてしまったなあ……。

「あのさ、ちょっと聞きだいんだけど、航っていつも家でもあんな無口なの？」

「……えっ、航君ですか？」

「アンタの家で一緒に住んでるんでしょ？ 家の中で家族の人と話したりするなんて事ないの？」

「……そうですね、一緒に住んでるっていつでも航君はあまり私達と一緒に行動したくないみたいで、いつも一定の距離を置いてるし……」

どうやら誰に対しても素っ気ない態度を取るみたいだ。やはり過去に親を亡くした影響とかがあるのだろうか。

「余計な事を聞くかも知れないけど、何で麻美子の家族と航が一緒に暮らす事になったの？」

「……私のお母さんと今のお父さんが再婚する前からの事情で……」

「……何か、あまり話をしたくなさそうだね……」

「……航君に確認を取らないで、私が話してしまっているのかどうかって……」

麻美子の表情から察するとかかなり重たい事情があるみたいだ。何か聞くのが申し訳無くなってきた。

「……那奈さん、気になりますか……？」

「……いや、気になるっていうかね、私と翔太の事情とちょっと似てるから何か理由があるのかなって」

「……そうですね、言われてみれば良く似てますよね……」

「あまりこういった家庭環境って他じゃそんなにないから、どんなものか知りたくてね、余計な事を聞いてごめんね」

まあ、人それぞれ誰もが色々な事情を持っているものだ。これ以上出歯亀みたいなマネは止めておこう。

「……あつ、で、でも言っておきますけど、私と航君是那奈さんや翔太君みたいな仲じゃないですから！」

「……何それ、どういう意味？」

「……い、いや、あの、その、特に深い意味は……」

余計な一言が入ったが、とりあえず航の無口は何かしらの理由があるのはわかった。この話はここで止めておこう。



ちょうど信号も青に変わったので、私と麻美子は横断歩道を渡りみんなの後を追った。しかし麻美子が私から逃げる様に少し早足なのが気になる。

「あー、来た来た！ 麻美ちゃん、こっちこっちー！」

「……ごめんね小夜ちゃん、待たせちゃって……」

やっとこさ駅に到着したら、翼と千夏と薫のお喋り三人組の姿が無い。

「あれ？ 翔太、翼達は？」

「ああ、ちょうど電車が到着しちゃったからもう乗って帰っちゃったよ」

「……薄情だねえ、アイツらは……」

まあいいか、これで少し静かになったし。見送りの済んだ事だから家に帰ろうと思ったら、小夜が麻美子と遊びの予定をし始めた。

「ねーねーねー、麻美ちゃん！ 今度のお休み、また井上さんのスタジオ行かない？」

「……スタジオもいいけど小夜ちゃん、今度は私の家に遊びに来て

よ！」

「えっ？ 麻美ちゃんのお家に？」

「うん！ いつも小夜ちゃんの家に来て行って貰ったり、井上さんのスタジオに連れて行って貰ったりしたから、今度は小夜ちゃんを家に招待してあげたくて……」

麻美子の家か。確か診療所だっけ聞いてるけど、小夜なんか行って大丈夫だろうか？ また何か壊さなければいいけど……。

「私のお母さんも、一度小夜ちゃんに会ってお礼が言いたって言うてるから、もし小夜ちゃんが良かったら家で遊ぼうよ！」

「うん、いいよ！ じゃあ麻実ちゃんのお家にお邪魔するね！」

「本当！？ 良かったー！ 航君、邪魔しないから安心してね！」

「……………了解」

小夜と麻美子は手を繋いでキャッキャッと飛び跳ねて喜んでるが、私は何か不安だ。小夜が医療薬品などをブチ撒けてバイオハザードとか起こさなければいいが……。

「……………でも、麻美ちゃんのお家って、どこなの？」

「……この駅から6つ先の駅なんだけど、わかる？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫！ 那奈と一緒にいくから平気平気！」

「……ハア！？」

突然、私の名前が出て来てビックリした。何で私が一緒に行かなければならないのか？

「那奈、一緒に行こうよー！ 今度のお休み、空いてるでしょ？」

「……小夜、アンタさあ、そんなの一人で行きなさいよ……」

「だってあたし一人で電車に乗った事無いんだもん！」

「……私はアンタのママじゃ無いっつーの！」

「えー？ 一緒に行こうよ那奈ー！」

「あーもう！ うるさいうるさいーい！」

……しかし結局、週末の休日に私は小夜と一緒に麻美の家に行く事になった。小夜の言う通り私には特に予定は無かったし、第一、診療所が小夜に破壊されないか心配だったからだ。

「那奈！ 早くー！ 早く行こうよー！」

「……アンタさあ、人を巻き込んでおいてさっさと先に行くなって！ 私以外の人間だったら今頃大激怒だよ！」

「だって電車来ちゃったら乗り遅れちゃうよー！」

「まだ来ないから心配すんなっつーの！」

逸る小夜をなだめながら、私達は小銭を用意して切符の自販機へと向かった。

「小夜、六つ先の駅だよ、わかる？」

「うん！ 切符は前にお母さんと買った事あるから大丈夫！ まずはこれ押して……」

「ちよつとちよつとちよつと！ 『こども』ボタンを押すな！ アンタ中学生なんだからもう大人料金でしょ！？」

「あつ、そうだった、間違えちゃった、エヘッ！」

「……エヘッ、じゃないよアンタ！ 一歩間違えたらキセルだよ……」

もしかしたら一緒に行って正解だったかも知れない。この調子じゃ目的地を忘れてどこに飛んで行ってしまいかわかったもんじゃない。

「うわー、すごい！ 走ってる車より早いよ那奈ー！」

「後ろ向いて膝を立てて座るな！ ちゃんと前向いて座って静かにしなさい！」

散々車内の他のお客さんに迷惑をかけながら無事に目的地の駅に着くと、家までの道案内の為に麻美が改札の前で待っていてくれた。

「あつ！ 麻美ちゃんだー！ 麻美ちゃん！」

「小夜ちゃん、那奈さん、いらっしやーい！」

「悪いね麻美子、随時待たせちゃったかな？」

「いえ、大丈夫です、私も今来たところですから、じゃあ、家まで案内しますね！」

やはり六つも駅を移動すると、街の景色はかなり変わる。ここの街は私達の街よりどこか古い歴史があり、緑も多く見える。

「……はつきり言えばちょっと田舎なんですよね、この辺」

「でもいいじゃない、何か落ち着いてていい感じだよ、海も結構近いしね」

「わー、那奈！ 八百屋さんとかお魚屋さんがあるよー！ スゴ  
い！」

「私達の家の近くじゃ商店街みたいな通りはないからね、大体買い  
物は駅前のスーパーマーケットぐらいだしね」

商店街を抜けてしばらく歩いていくと、小高い丘の登り階段の先に  
とても大きな公園があった。

「わー、公園だー！ 那奈、ちょっと寄っていきようー！」

「……全く、ホント元気だねえ小夜は……」

「この公園、春になると桜がいっぱい咲いて綺麗なんですよ」

「へえ、じゃあ今度は春にみんなでお花見に来たいね」

公園内を走り回る小夜の後を、私と麻美子は青々と茂った木々を眺  
めながら歩いた。

公園を抜け、小さい坂道のバス通りからさらに小さい横道に入ると、  
大きな駐車場の先に一軒の診療所が見えて来た。

「あそこです、あれが私の家です」

「わー！ 真っ白なお家だー！」

「『遠藤医院』って看板があるね、本当にお医者さんだったんだね、お父さん」

「……あれ？」

麻美子の家に向かおうとすると、小夜が突然立ち止まって一点をジツと見つめていた。

「……どうしたの、小夜？」

「……小夜ちゃん？」

「……今ね、麻実ちゃんのお家の二階の窓から誰かがこっちを見ていた様な気がして……」

「……えっ、誰か？」

「……二階の、窓？」

「……うん……」

私と麻美子は小夜が言う二階の窓を見上げてみたが、カーテンが風に揺らいでいるだけで人影は見えなかった。

「……誰もいないみたいだけど本当に見たの？ 小夜の気のせいじゃないの？」

「……気のせい、かなあ……？」

小夜は不思議そうに首を傾げた。でもまあこの娘の事だ、何か妖精さんでも見えたのだろう。

「……と、とりあえず小夜ちゃんも那奈さんも家の中にどうぞ！今日は診療所お休みだから患者さんもないし……」

「じゃあ麻美子、お邪魔させて貰うね」

「……確かに誰か見てたのになあ……？」

「小夜！早くおいで！」

「……あつ、はい！」

診療所の入り口から建物の裏を回って住居用の玄関の前へと行くと、二人の女性がせっせと箒を持って掃除をしていた。

「お母さん、ただいま！みんなを連れてきたよ！」

「……えつ、もう来ちゃったのかい？お母さんまだ掃除終わってないよ……」



頭に三角斤を被ってエプロン姿に突っかけサンダル。麻美子のお母さんはいかにも日本のお母さんといった格好をしていた。

「初めまして、渡瀬那奈です、小夜、ちゃんと自己紹介しなさい」

「えーと、初めまして、真中小夜です！ 宜しくお願いします！」

「初めまして、いらっしやい、麻美子の母の美代子です、ごめんなさいね、おばサンまだ掃除も終わってなくて、汚い家で本当にごめんなさいね？」

「……お母さん、もういいから、ねっ？」

「何を言ってるんだい、麻美子が向こうのお家でいろいろお世話になったんだろう？ こんなんじゃ失礼じゃないか、二人とも本当にごめんなさいね、大したお出迎えも出来なくて……」

何て腰の低いお母さんだろう。話を聞いているだけで優しい人なんだろうな、と推測出来るいいお母さんだ。私の家には絶対に有り得ない環境だ。

「あの、結構ですからそんなに気にしないで下さい」

「気にしないで下さい！」

「小夜！ アンタが言うな！」

「痛いよー、那奈！ パチパチ叩かないでよー！」

私達が美代子さんと話していると、玄関の奥からひよろつと背の高い人影が見えた。

「……………じゃあ、今から買い物行つてきます」

「あら航君、ごめんねえ、お使い頼んじやつたりして」

「……………ごめんね航君、本当は私が行かなきゃいけないのに…」

「……………いや、いいよ別に」

出て来たのは航だった。麻美子が言った通り、本当にこの家に同居しているみたいだ。どうやら麻美子の代わりに買い物を頼まれたらしい。

「航、悪いね、お邪魔するね」

「航くん、こんにちはー！」

「……………やあ」

航は言葉少なげに私達に返事をする、自転車にまたがり商店街へ走っていった。

「相変わらずだね、航は……」

「……でも、色々と手伝ってくれるんで、私達は助かってます……」

私の麻美子が喋っている後ろで、美代子さんはせつせと玄関の靴を揃えて私達の分の隙間を作ってくれた。

「あんまり大したものを用意出来なかったけど、もし良かったら二人とも上がって行つてね」

「どうぞ、二人とも上がって下さい」

「はい！ お邪魔します！」

「ちゃんと靴を揃えて脱ぎなさい、小夜！」

麻美子に案内されて玄関から居間に入ると、ちゃぶ台の上にたくさんのお菓子や飲み物が並んでいた。

「うわー！ すごーい！」

「おばさん、こんなものしか用意出来なかったけど良かったらいっぱい食べていつてね？」

「すみません、何かこんなに……」

恐縮する私をよそに、小夜は目の前のお菓子を夢中になって眺めていた。

「……あとね、小夜ちゃんが好きだって言ってたから、私、麻婆豆腐作ってみたの！ お口に合えばいいんだけど……」

「わー！ 麻婆豆腐だー！ おいしそー！」

「小夜、少しは遠慮しなさいよ……」

遠慮を知らないのか素直過ぎるのか、小夜は落ち着きなくあれやらこれやら食べ物物を物色し始めた。  
と、思ったら、何か自分が座っている畳に興味を持ち出してザラザラ触り始めた。

「……あれー？」

「何よ小夜、どうしたの？」

「ここの床、変なのー？ 何か草が生えているみたーい！」

「くら小夜！ 口を慎みなさい！」

「……そっか、小夜ちゃんは畳って知らないんだね、そうだよね、

小夜ちゃんのお家って全部フローリングだもんね……」

「ごめんなさいお母さん、ごめんね麻美子、小夜が失礼な事を言うて……」

「いいのよいいのよ、気にしないで頂戴、古い家なのはおばさんも麻美子も良くわかってるからね」

美代子さんはクスクスと笑って話を受け流してくれた。やっぱり良  
いお母さんだ。

「でもこの床、何かフカフカしてて気持ちいいー！」

「良かった、何か小夜ちゃんに気に入ってもらえたみたい」

「全く、もう……」

小夜の発言にビクビクしながら私もお菓子を頂いていると、居間の  
隣の部屋から何かカバンの支度をしている音が聞こえてきた。誰  
かいるのだろうか。

「……あら？　ちょっとごめんなさいね……」

美代子さんはそそくさと立ち上がって、スリッパをパタパタ鳴らし  
ながら隣の部屋へと向かっていった。

ボーン、ボーン、ボーン

麻美子の家の居間にある古い振り子時計が私達に時間を知らせた。  
その音は、何か懐かしさを感じさせてくれる。

緩やかに、穏やかに流れる休日の午後。しかし突然の嵐は私達のすぐそこまで近づいていた。

## 第9話 Bird Cage

休院日のはずの遠藤医院、なぜか診察室から物音が聞こえてくる。私達は耳を澄ませてその音を聞いていた。

「……あら、あなた？ 一体どうなさったんですか？」

美代子さんの声が聞こえた。誰かと喋っているみたいだ。私と小夜は顔を一瞬見合わせてもう一度耳を澄ませた。

「……ほえ？ 何だろう？」

「……他に誰かいるのかな？」

「……お父さん、かなあ……？」

麻美子も気になるのか、居間の入り口から頭を出して隣の部屋を覗いていた。そしたら、隣の診察室から美代子さんと男性の会話がはつきりと聞こえてきた。

「……急診ですか？」

「……ああ、山田の婆さん、昨日から熱が下がらないらしい、もしかしたら肺炎をこじらしたかもしれない……」

「……そうですか、じゃあさっきの電話は山田さんの娘さんから？」

「ああ、他に頼れる所が無いみたいだな」

「……わかりました、でも、貴方も無理なさらないで下さいね？」

「ああ、わかっているよ、それじゃあ、行ってくる」

隣りの部屋から白衣を纏った男の人が出てきて、私達がいる居間の前の廊下を横切った。どうやら麻美が言ってたお医者さんのお父さんの様だ。  
居間にいる私達を見て、忙しそうなのにわざわざ笑顔で挨拶をしてくれた。

「やあ、皆さんいらっしやい」

「……あつ、お邪魔してます」

「こんにちはー！」

麻美子は忙しく出発の準備をしている父親を心配そうに見つめていた。



「……お父さん、お仕事なの？」

「ああ、ちよつと急ぎの診察が入ってね、せつかくお友達が遊びに来てくれてるのにすまない」

「いえ、私達はお気になさらずに……」

「お父さん、いつてらっしゃーい！」

「バカ！ 小夜、いい加減にしなさい！」

今年に入って何発目だろう、他の家族が見ている中で、私は小夜の頭をいつもの様にひっぱたいた。

「ハハハ、元気でいいね、それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい、お父さん」

「ちよつと玄関まで送ってきますから、皆さん気にせずに楽しんでつて下さいね」

そう言う和美代子さんは遠慮先生を見送りに玄関へと向かった。

「……麻美子のお父さん、忙しそうだね」

「……困ってる患者さんを見ると、じっとしてられないみたいで…

…」

いつ急病人が出るかわからない。休院日があるとはいえほとんど年中無休みたいなものだろう。

お医者さんと聞くとお金持ちというイメージがあるが、本当の名医とはお金も時間も省みずに病人の為に汗を流して走り回る人の事を言うのだろう。

「麻美ちゃん、麻婆豆腐美味しいよー！」

「ホント！？ 良かったー！」

「……遠慮しろって言っただけなのに……」

そんな事は全くお構い無しで食べ物を漁りまくるこの小怪物は何とかならないのかねえ、全く……。

この後、麻美子は私達に立派なお医者さんであるお父さんの話をしてくれた。

麻美子のお父さんは昔は大きな病院に勤めていて難しい手術もこなすスーパードクターだった。

しかし、患者さんの医療の方針で病院のお偉いさんともめてしまい、病院を辞める事になってしまったらしい。

その後、もっと多くの苦しい患者さんを救ってあげる為にこの診療所を開いたそうだ。

「……私の本当のお父さんも、今のお父さんが病気を診てくれたんです……」

「……ふーん」

「……その病院にお母さんも看護婦さんとして勤めていて、お父さんの病気を治してくれるんじゃないかと先生を頼って入院させたらしくて……」

美代子さんは何とか前の旦那さんの命を助けたかったのだろう。だから同じ病院にいたスーパードクターに希望を託した……。

「……でも結局、助けてあげる事が出来なくて、今のお父さん、凄く悔しかったって……」

自分を頼って命を預けられるってどんなに重圧があるだろうか。ましてや自分が良く知っている仕事仲間の大切な人の命を……。

「……お父さんが亡くなった後に先生は病院を辞めて診療所を開いて、そこに昔お世話になったから、ってお母さんがここに勤めるようになったって……」

「なるほどね、そしてその後二人は再婚したって訳ね」

「……きっと、私達の事を考えて、二人とも再婚してくれたんじゃない」

ないかなって……」

何か悲しいけど少し心が暖まる話。本当に、人の人生はどういう縁があるかわからないものだ。

「……優しいね」

「は、はい！今のお父さん、とても優しくしてくれて……」

「……いや、そうじゃ無くて、麻美子も」

「……えっ？」

「アンタがピアノの事を両親に言い出せなかったのも、何かわかる気がするよ、お父さんとお母さんの邪魔になりたくなかったんでしょ？」

「……はい……」

「もういいよ、麻美子、あんまり話すと死んだお父さん思い出しちゃって辛いでしょ？」

「……グスッ、ごめんなさい……」

鼻をすすって涙を堪える麻美子の背中を私は優しくさすってあげた。しかし、こんなに暖かい空気を全く読まずにお菓子をガツガツ食い

まくつてる娘が一人。

「ねーねーねー、麻美ちゃん！ このオレンジジュース飲んでいいー？」

「……うん、どうぞ……」

「じゃあ、いただきまーす！」

「……小夜、アンタねえ……」

遠慮もなくジュースの栓を空けようとする小夜を一喝しようとしたその時、突然小夜が立ち上がって大声を出した。

「あっー！」

「何！？ 何よ！？」

「……トイレ行きたい……」

「……あちゃー……」

私は呆れて手で顔を押さえた。もうダメだこりゃ、この娘に涙話や人情話は全く無縁の様だ。

「……小夜ちゃん、トイレは廊下を出て突き当たり真っ直ぐだから……」

「はい！ お借りします！」

ダダダツと小夜は小走りで居間から出て行った。こんな訪問客は遠藤家にとって初めての事だろう。

「……麻美子、私が代わりに謝るよ、本当にごめんね……」

「……いえ、大丈夫です、もう私も小夜ちゃんには慣れましたから……」

私達が溜め息をついてガツクリしていると、先生を見送りに行っていた美代子さんが居間に帰ってきた。

「……ごめんなさいねえ、せっかく皆さんに来てもらったのにドタバタしちゃって、って、あら？ 小夜ちゃんはどこに行っちゃったのかしら？」

「……すいません、本当にすいません……」

「……那奈ちゃん、何で謝ってるの？ 麻美子、何かあったの？」

「……うつん、何でもない……」

私達の苦悩に全く気付いていないだろう小夜は、トイレで用事を済ませて心も体もスッキリしていた。

「あー、スッキリした！ 戻ってさっきのオレンジジュース飲もう  
っと！」

ギギギッ

「……ほえ？ 何の音？」

何かが軋む物音がした。どうやら上から音が聞こえてきたみたいだ。

「……そういえば、さっき二階に人が……」

どうしてもさっき見た人影が気になってしまふ。一度こんな風に好奇心に火が点くと止まる事が出来ないのが小夜の悪い性格。そのままトイレの横にある階段を登って、音が聞こえてきた二階へと上がって行ってしまった。

「……誰かいますかー？」

小夜は呼び掛けてみたが何も返事は無い。麻美子の家の二階には三つ部屋があり、内二つは扉が閉まっていたが、一つだけ開けっぱなしになっている部屋があった。

「…………お邪魔しまーす…………」

入り口に垂れ下がっている白いレースをくぐって部屋の中に入ると、ベッドの上に座って窓の外を見ている小さい女の子がいた。

「あっ……………!」

「……………!?!」

小夜の声に気付いた女の子は、驚いて足元に掛けていた布団を被って隠れてしまった。

「…………ご、ごめんね!脅かすつもりじゃなかったんだけど…………」

「……………」

頭を下げて謝る小夜を、女の子は布団を被ったまま黙り込んでジッ―と見ていた。



「……あ、あたしね、真中小夜！ 麻美ちゃんのお友達なんだ！」

「……………」

「……誰だろう？ 麻美ちゃんに妹さんっていたっけかなあ？」

小夜が考えてる間も、女の子はジッと見つめたまま何も喋ろうとはしなかった。

「……怖がられてるのかなあ？」

小夜は部屋の中を見渡すと、床にウサギのぬいぐるみが落ちているのを見つけた。

「……よし、じゃあこれで……」

小夜はぬいぐるみを掴み取り、怖がらせない様にゆっくりと女の子に近づいていった。

「こんにちはー！」

小夜はぬいぐるみを手で操り、ウサギのキャラクターになりきって女の子の気を引こうとした。

「ボク、ウサちゃんだよ！ 君のお名前は何て言うの？ 良かった僕に教えて！？」

「……………」

しかし、それでも女の子からの返事は無かった。

「…………あれ？ もしかしてこのウサちゃんって女の子だったのかな…………？」

小夜が二階に上がっていたその頃、下では買い物に行っていた航が家に帰ってきた。

「……………ただいま」

「あつ、航君、お帰りなさい、ごめんなさいね、お買い物なんか頼んじゃってね」

「……………いえ、別に」

「航君、お帰りなさい」

「……………ただいま」

美代子さんや麻美子の言葉にも、航はいつもの様な素っ気ない返事をした。

「航君もし良かったらみんなと一緒に菓子食べていたらどう？」

「……………いや、いいです」

「……………じゃあ、またご飯の時に呼ぶから、その時は二階から降りて来てね？」

「……………はい」

美代子さんの気遣いを突っぱねる様にして、航は居間を出て二階に上がって行こうとした。

「……………そういえば、小夜ちゃん遅いわねえ、トイレに行ったんでしょ、麻美子？」

「……………あつ、そういえばそうだね、どこか別の所に行っちゃったのかな？」

何か嫌な予感がする。変な問題を起こさなければいいのだが…………。

「何やってんのかな、あの娘は？ 他の部屋とか二階にとかに勝手に入り込んで無ければいいけどねえ、全く……」

「……………！」

私達の話聞いた航は、何かに気付いた様に廊下を走って階段を一気に駆け上がった。いった。

「……………ちよつと、航君！？」

「えっ？ 何よ、何なのよ航！？」

その頃二階の部屋では、小夜がウサギのぬいぐるみをベッドの上でダンスをさせていた。

「うさタンダンス、ぴよんぴよんぴよん　一緒に踊ろっ、ぴよん  
ぴよんぴよん」

「……………」

相変わらず女の子は笑顔も見せず一言も喋ってくれないが、次第に小夜が操るウサギが気になってきた様でゆっくりと小夜の方に顔を近づけていった。

「ぴょんぴょんぴょんぴょん      ぴょんぴょんぴょん！」

小夜はウサギを跳ねさせて、最後はウサギの後ろから自分の顔をスツと出して女の子にニコツと笑顔を見せた。

「……………」

「…………えっ？」

すると、女の子は無言のままゆっくりと手を伸ばし、ぬいぐるみを通り越し、女の子の手は小夜の顔を触ろうとした。そして、あともう少しで手が小夜の頬に触れそうになったその時、小夜の後ろから人の声が聞こえた。

「……………何をやってるんだ？」

「…………えっ？」

部屋の入り口に航が立っていた。その顔はいつものポーカーフェイスからは想像の出来ない様な怒りの形相だった。

「…………あの、航くん、あたし……………」

「…………ここで何をやってるんだ!！」

初めて聞いた航の怒鳴り声。その大声を聞いた小夜は驚いて完全に怯んでしまった。

航の尋常でない怒鳴り声を聞いた私と麻美子は航を追って急いで二階に駆け上がった。

「小夜！ アンタ勝手にどこに行ってるのよ！」

「……那奈、あの、あたし……」

小夜はどうしていいのかわらなくなってしまうている様だった。航は困惑する小夜を押しつけて女の子をベッドから抱き抱えた。

「……わ、航君、落ち着いてよ？ 小夜ちゃんもわざと部屋に入っただ訳じゃ……」

「……出てっくれ」

「……えっ？」

「今すぐ全員この部屋から出てっくれ！！」

麻美子の弁解も聞く耳も持たない。航の怒りは全く収まりそうになり様子だ。

「……小夜、こっち！ 下に降りるよ！」

私は茫然としている小夜を強引に部屋から引きずり出した。麻美子は何とか航の怒りを沈めようとしたが、結局航に部屋を追いつけられなかった。

「……わ、航君、話を聞いて……！」

ボタン！！！！

大きな音を立てて部屋のドアが閉まった。私達は階段の途中で顔を見合わせて一つ溜め息をついた。

「……小夜、アンター一体二階で何をしてたの？」

「……………」

「……小夜？」

その後は、とてもみんなで喋っていたような雰囲気では無かった。これ以上騒ぎを大きくしたくなかったので私と小夜は家に帰る事にした。

「……二人ともごめんなさいね、麻美子にしてくれたお礼をしたかったのに、ろくなお出迎えも出来なかったどころか嫌な思いまでさせちゃって……」

「……いえ、こちらこそ勝手に二階に上がったりしてすみませんでした……」

「……………」

美代子さんと話をしている間も、小夜は黙ったまま茫然としていた。

「……小夜、お礼は？」

「……………」

落ち込んでいる小夜が心配になったみたいで、麻美子はずっと小夜の背中をさすってあげていた。

「……お母さん、私、二人を駅までお見送りしてくるね……」

「……うん、麻美子、そうしてあげて……」

私達は靴を履き、家の外に出てもう一度美代子さんにお礼を言った。しかし、小夜は口を結んだままだった。



「……那奈ちゃん、小夜ちゃん、もし良かったらまたお家に来て下さいね……」

「はい、それじゃ、お邪魔しました」

「……………」

駅までの帰り道でも、小夜は黙ったままでうつむいて歩いていた。私はあの時何が起こったのかわからなくて、思い切って麻美子に質問した。

「……ねえ、麻美子、さっきの女の子……」

「……瑠璃ちゃんです……」

「……るり？」

「……航君の、妹さんなんです……」

麻美子は重い口を開いて航の昔話を聞かせてくれた。その話の内容はとても辛いものだった。

航の実の母親は、航が生まれてすぐに病気で亡くなってしまった。しばらくは残った父親と二人だけで暮らしていたが、父親に新しい女性が現れて再婚し、その後には瑠璃が生まれた。

「……新しいお母さんもすごく優しい人だったそうです、本当の母親みたいだったって航君が言っていました……」

改めて幸せな家庭を作ろうとした矢先、父親の勤めていた会社が倒産して、責任連帯者だった父親自身も多額の借金を負う事になってしまった。

それでも何とか借金を返そうと母親も仕事に出て一生懸命働いた。その間は航とまだ喋る事も歩く事も出来ない幼い瑠璃の二人だけで家の留守番をしていた。

「……でも、思う通りに借金が返せなくて、疲れたお父さんが段々お酒を良く飲む様になって……」

ついに父親はアルコール依存症になってしまい、仕事をしなくなってしまうたどころか一人で一生懸命働いている奥さんや、止めに入った航にまで暴力を振るう様になった。

「……で、その後、どうなったの？」

「……………」

「……麻美子？」

「……ある日、お母さんはお父さんの事が本当に怖くなって、航君や瑠璃ちゃんを守ろうとして二人の前で包丁を……」

「……！！」

「……でも、お父さんに抵抗されて、倒れた反動で包丁がお母さんのお腹に刺さって……」

航達の母親は、その事故で命を落としてしまった。不慮の事故だったとはいえ、人を殺めてしまった父親は裁判で実刑を受け、現在も刑務所に服役中しているそうだ。

「……それから、航君と瑠璃ちゃんは親戚の家とかにたらい回しにされて、犯罪者の子供なんて要らないって……」

麻美子の声は震えていた。聞いている私も胸が痛くなってきた。

「……その後、幼児施設とかを転々としてた時に診察に訪れた私のお父さんと出会って、何とか保護者になってあげたいって二人を引き取って……」

「……………」

もう言葉が出なかった。こんな悲劇が本当にあるなんて、しかもこんな身近に……。

「……瑠璃ちゃん、その時のショックでもう五才になるのにまだ喋る事も歩く事も出来なくて、ずっと二階のベッドから外の景色を見ただけで……」

五才、翼の妹の岬より一個上だったのか。岬はあんなに元気良く喋って走り回っているのに……。

「……航君も心を閉ざしてしまって、周りの人達から瑠璃ちゃんを遠ざける様になって……」

航があんな性格になってしまったのは当然なのかも知れない。父親から暴力を受け、目の前で母親が死んで、親戚も助けてくれずに自分一人の力で妹を守らなければならなかったのだから。

「……私達、一生懸命航君達の家族になろうと頑張ってるんだけど、なかなか2人にその気持ち伝わらなくて……」

麻美子はずいに泣き出してしまった。私は随分と辛い話をさせてしまったみたいだ。

「……麻美子、話してくれてありがとう、話してて苦しかったよね……」

「……ごめんなさい、もっと早くみんなに話すべきだったんだけど、航君が言わないのに私が先に話すなんて事とても出来なくて……」

私は泣いている麻美子の肩を慰める様にポンポンと叩いた。私もシヨックでそんな程度ぐらいしかしてあげられなかった。

その話の間も、小夜はずっと黙ったままだった。駅に着いても、うつむいたままで一言も喋ろうとはしなかった。

「麻美子、わざわざ見送ってくれてありがとう、もう寒いから家に帰って」

「……うん、それじゃあここで……」

麻美子は心配そうに小夜を見つめていた。しかし、小夜は下を向いて麻美子の顔を見る事はなかった。

「……小夜ちゃん、本当にごめんね。こんなつもりじゃなかったんだけど……」

「……………」

「……小夜……」

私達が話しかけても、小夜の反応は無い。

「……それじゃ、麻美子、また明日学校でね」

「……はい、また明日……」

「……………」

電車の中でも、小夜は黙ったままだった。行きの電車の中で見せた元気の良さは影を潜め、静かに椅子に座ってうつむいていた。

「……………」

「……小夜、わかってるよね？ アンタが勝手に二階に上がって妹さんと話をしたから航は怒ったんだよ？」

「……してないもん……」

「えっ？ 何？」

「……お話、してないもん……」

「それはまあ、あの子は喋れないらしいけど、私が言いたいのはね……………」

「……可愛いそうだよ……………」

「……小夜？　話聞いてる？」

小夜は突然顔を上げて大声で話し始めた。その顔はすでに半ベソをかいて目に涙を浮かべていた。

「あんなの可哀想だよ！　お外へも出れないで、お喋りも出来ないなんて！」

「小夜、それはね……」

「お母さんもお父さんもいなくて、お友達もいなくて、そんなの寂しい！　寂しすぎるよ！」

「小夜！　落ち着きなさい！　他のお客さんもいるんだから！」

「あの子と航クン、可哀想だよ！　こんなの可哀想すぎるよ！」

「小夜！」

パシッ！……！！

小夜を落ち着かせようと体が勝手に反応して、私は小夜の頬を思い切り叩いてしまった。

「……………」

「……あつ、小夜、ごめん……」

「うわぁーーーーん!!」

小夜が大声で泣きじゃくる姿を久しぶりに見た。よほど航達の話がショックだったのだろう。私も言葉に表せない、苦しくやるせない気持ちを胸に抱えていた。

秋も深くなってきたこの時期、電車から外へ出た時の空気が体にも心にも物凄く冷たく感じた。



## 第10話 クラスメイト

あの日以来、航は私達を避ける様になった。クラスでは翔太や薫達と一緒にいるみたいだが、帰りは一人だけで帰って行ってしまう。小夜もあれから元気が無く、学校に来て黙ってうつむいたままで中には調子を崩して休んでしまう日もあった。

家まで様子を見に行っても布団にくるまったままで、私が声をかけても一言も返事をしない。

「俺が航と瑠璃ちゃんに会ったのは今から二年前くらいだったかな、施設にボランティアに行った時に同年代の男の子がいるって介護士さんから聞いて、俺から話しかけたんだ」

薫は幼児施設にいた頃の航と瑠璃の事を私達に話してくれた。その内容はこの前、麻美子に聞いた話よりももっとショッキングで、悲惨なものだった。

「あの時の航は今よりもっと無口で、スゴく冷たい目をしてた、俺達が会った施設は優しい人達がいっぱいいて良かったんだけど、その前にいた施設の中には酷い扱いをする所もあったみたいで、その時に看護師から暴力を受けた時の傷やアザが航の額や腕に付いてたんだ、そして瑠璃ちゃんはいつとも人を怖がって航の膝に座って震えていたよ」

「……そんな、ヒドい……」

千夏が話の内容に耐えられずしゃがみ込んでしまった。隣にいる翼の顔も若干青ざめていた。

「その後、診察に来たあるお医者さんが二人を心配して身柄を引き取ったって聞いてたけど、その引受人が麻美子ちゃんのお父さんだったとはね……」

「……はい、そうです、私のお父さん、遠藤和夫です……」

「……しかし、聞けば聞くほど胸が苦しいな、何も知らなかったよ……」

翔太もここまでの話は聞いていなかったみたいで、悔しそうに自分の頭を叩いた。

「まっ、それが俺と航の出会いの馴れ初めの話だよん」

「……ふーん……」

「何か疑問がありそうだねえ、翼、何か俺に聞きたい事ある？」

「……航の話はともかく、薫がボランティアとかやってるってのがウチは全く信用できん、しかも二年前って小学生やんか？」

「確かにそうね、薫ちゃんはとてもそんなキャラに見えないわねえ

「？」

「……ここまで真面目にシリアスな話をしてきたっていうのに、またこのお喋り三人組は雰囲気をブチ壊す……」。

「何をおっしゃられますか、こう見えてもこの薫ちゃんはご老人や小さいお子さまに明るく楽しく激しいスーパービューティフルトークで大人気なんすよ？ 日本中、いや世界中に笑顔の種を振りまくのさ！」

「……失笑の種やろ？」

「あるいは笑顔の押し売りよねえ？」

「上手い事言うな千夏、そならウチも！ 薫、それは『笑顔の暴力』やで！」

「えっ？ ウソおっくん！」

とりあえずバカ共は無視しよう。あの日、私達が帰った後に遠藤家はどうなってしまったのだろうか。

「……麻美子、航は家の中ではどうなの？」

「……相変わらず、あまり私達とは話してくれません……」

「……………」

私と小夜は何か余計な事をしてしまったのかも知れない。決して触れてはいけない、航達のタブーに……。

「……………」あの、那奈さん、小夜ちゃんの方は……………」

「……………」こつちもダメ……………」

十二月になって二学期も終わりが近付き、明日にはもう冬休みに入ってしまう。少なくとも最後ぐらいはちゃんと学校に行かせないといけない。私は放課後に家まで小夜を説得しに行った。

「……………」小夜、終業式ぐらい行こうよ？」

「……………」

「アンタがいじけてたっしょうがないでしょ？ 航はちゃんと学校に来てるし、麻美子やみんなも心配してるよ？」

「……………」

「アンタから笑顔が無くなっちゃったら何が残るのよ？ その笑顔であの子を笑わせようとしたんでしょ？ そんな事じゃいつまで経ってもまたあの子に会えないよ？」

「……そう、そうだね、笑わないとダメだよね……」

やっと返事をしてくれた。少し表情に緩みが出てきた小夜を見て、私は見本になれる様に精一杯の笑顔を小夜に見せた。

「いいね、小夜！ 私が朝迎えに来るから、ちゃんと学校に行くんだよ！」

「……うん！」

眠る前、私は少し考え事をしていた。どうして小夜はあの子にあんなに反応したんだろう？ どうして航達にあんなに同情したんだろう？ 結局、その答えはわからないまま私は眠りについた。

次の日の朝、私は小夜を連れて学校に向かった。しかし、小夜は何か眠たそうに目をパチパチさせてフラフラ歩いていた。よく見ると、手の指にはあちこちに絆創膏が貼ってある。

「……小夜、アンタ手の指どうしたの？ 怪我でもしたの？」

「……ほえ？ あっ、うん……」

「……寝てないの？ ねえ、何かあったの？」

「……ううん、大丈夫だよ！ エヘヘッ……」

小夜は笑ってごまかしたが、いつもの様な元気な笑顔ではない。顔が若干引きつっていて、目の下にはうつすらと隈がある。

「おう、小夜、おはよう！」

「あつー、翔ちゃんだ！」

学校の通学路の途中で翔太が待っていた。こんなケースは今まで一度も無かったのに。

「あれ？ 翔太、先に学校に行ったんじゃないの？」

「やっぱり小夜が心配になっちゃってね、ここで待ってたんだ。小夜！ 今日で二学期も終わりだから楽しく行こうぜ！」

「……うん！」

「ほら、いつもみたいに元気良く行こうよ！」

「……くかー」

「小夜！ 起きなさいって！」

「……絶対寝ぼけてるぞ、小夜のヤツ……」

待っていたのは翔太だけではなかった。学校の校門まで歩いて行くと、中でみんなが私達を待っていてくれた。

「あつ、皆さん！ 小夜ちゃんが来ました！」

「おーおー、来たで来たで！ 登校拒否娘の登場や！」

「小夜！ Good morning！」

「これはこれは真中様！ お待ちしておりました！ さあ、どうぞこちらへ！」

麻美子が中心になって翼と千夏、そして薫と校門で待ち合わせる予定を立ててくれていたらしい。普段はバカばかりやってるのによればちゃんと出来るんじゃない、コイツら。

「……みんな……」

「……みんな小夜を待っていてくれたんだよ！ ほら、小夜ももっと元気出して！」

「……うん！ あたし頑張る！」

みんなの姿を見て、小夜も少し元気になっていてきて笑顔も戻ってきた。しかし、校門の前に航の姿は無かった。

「……やっぱり、航はいないのか……」

小夜がみんなとじゃれ合っているのを見ながら、翔太が寂しそうにポツリと小さい声で呟いた。もしかしたら航にはもう私達の声は届かないのかも知れない。

「……くかー」

「終業式で居眠りする人間初めて見たよ、全くもう……」

体育館での全校朝礼も終わり、残すは各教室でのホームルームだけになった。

「ねーねーねー、那奈！ 明日ってクリスマスだよね！」

居眠りして少し眠気が覚めたのか、教室での小夜はいつもの様な元気な話し声になっていた。

「そういえばそうだね、まあ、私の家はクリスマスも正月も全然関係ないけどねえ」

「あのね、明日ね、麻美ちゃんのお家でクリスマスパーティーやるんだって！ この前のお詫びとかで麻美ちゃんのお母さんからのお



誘いなんだよ！ 那奈も一緒に行こうよ！」

「……クリスマスパーティーねえ……」

「翔ちゃんも一緒に行くよー！」

「……翔太も？」

「ホントは翼も千夏も薫ちゃんもみんな来て欲しかったんだけど、他に予定があるみたいで……」

「……うーん……」

私はパーティーとかっていうのは正直あまり得意じゃない。クリスマスだろうと誕生日だろうとあまり気にはしないタイプなのだ。

ただ、今年は中学生になって色々な出来事もあったので、ここは一緒に行って今年の打ち上げて事でまとめるのも悪くない。

「……わかった、私も行くよ、多分、お姉もどっか遊びに行っちゃうだろうし、父さんといづみさんには出掛けるって話しておくから」

「

「ホント？ わーい、やったー！」

それ以上に私が気になったのは、この前あんな事があったにも関わらず再び麻美子が私達を家に招待した事だ。  
普通なら有り得ない事だし、もしかしたら麻美子は何か航との関係

を修復する手だてがあるのかも知れない。  
メンバーに翔太がいるのも、麻美子の話を聞き一役買ってパーティーに参加した可能性が高い。

「わーい！ パーティー、パーティー！」

何か裏があろうが無かろうが、とりあえず小夜の喜ぶ笑顔を見て私は少しホッとした。

ホームルームも無事終わり、二学期の授業は全て終了した。そして今年最後の帰り道、やっぱり航は私達と一緒に帰る事は無かった。あまり喋る事が無く目立たない存在だったとはいえ、今まで一緒にいた仲間がいないのは何だかんだ言って少し寂しい。

「千夏、年末海外に行くんやって？」

「もちろん！ やっぱりお正月はワ・イ・ハよねえ」

「オマエの家は芸能人一家かい！？」

「そういう翼はどうするの？ お正月何か予定あるの？」

「ウチはクリスマスもお正月も家族と一緒にやで！ オトンといっぱい遊びに行くんやでえ！」

「ホントにパパ大好きよね、翼って」

航の事はどこ吹く風でこの二人はケラケラ笑いながら喋っている。これも性格の違いだろうか。私が神経質過ぎるのかな？

「身も心もお子ちゃまですなあ、翼ちゃまは」

「やかましいわ！　つーか薫はどうすんねん？　里帰りでもするんかい？」

「里帰りって訳じゃないけど、俺だって国内脱出組なんですぜ！」

「何やどいつもこいつも海外、海外！　国内で結果も出さずによその国ばかり見よって！」

「コノボウシ、『ドイツ』ンダ？　『オランダ』！　H A H A H A  
！」

「桐原薫、貴君に一生国外追放の刑を申し渡す」

「ウソおゝん！？」

みんなそれぞれ年末は予定があるらしい。ちょっと羨ましい気もするが、もし私の家族で旅行に行くとしたら、想像するだけでとても恐ろしい事になりそうだ。

「翔太、明日の麻美子の家でのクリスマスパーティーの事なんだけど…」

「うん、聞いてるよ、麻美ちゃんはこの後、家に帰ったら航にパーティーの事を話して参加して貰える様に説得するみたいだね……」

「……やっぱりそういう裏があつたのね……」

「下手な小細工すると逆に航を傷つける事になるかも知れないから、単刀直入に誘ってみるしか無いだろうね、後は俺達の気持ちちが航に届くかどうか……」

「……当たって砕けろか、それしか無いだろうね……」

私は小夜と一緒に笑いながら喋っている麻美子を見た。この娘も頼り無さそうに見えて一生懸命色々と考えてくれているみたいだ。私達も麻美子がつってくれたチャンスが無駄にしない様にしないといけないなあ。もうこうなつた以上は考えこんだつてしょうがないし。

あの日、小夜も決して悪気があつて航の妹さんに近付いた訳では無い。航の態度にしたつて、例えばそれが親切心だとしても人には触れられたくない事情というものはある。

航達の心の傷は私達には測り知る事は出来ないし、出来る事なら私達も力になってあげられればいいけど、それを望まれていなければ只のお節介になつてしまう。

航達には麻美子のお父さんやお母さんがついてくれている訳だし、今回はダメだったとしてもいつかはまた航と仲良く出来る時が来るかも知れない。

私は頭の中で自分に精一杯そう言い聞かせた。そう思い込まないと、

私は明日のパーティーをドタキャンして逃げてしまうかも知れないと弱気になっていたからだ。

「ほなら、みんなまた来年な〜！　さいなら〜！」

「じゃあね〜！　那奈、小夜、翔太君、Merry Christmas and happy new year！」

「それでは皆さん良いお年を〜！　バイバイキーン！」

「じゃあ小夜ちゃん、また明日ね！　待ってるからね！」

「うん、絶対行くからね！　みんなバイバーイ！」

駅で翼達が乗った電車を見送って、私と小夜と翔太の三人で家に帰ろうとした時、前方から背の高い男子生徒がこちらに向かって歩いてきていた。

「あっ……」

「どうしたの？　小夜？」

「……航くん……」

駅に向かっていた航とバツタリ出会った。私達はお互いに立ち止まり、相手の様子を探る様に向かい合った。

「……悪い、航、先に帰っちゃったのかと思ってたよ……」

「……職員室に寄ってた」

「……そうか……」

クラスが一緒の翔太でさえも会話がし辛そうだ。とても私と小夜は話しかけれそうに無い。

「……航、色々迷惑かけて悪いな……」

「……いや、別に、気にしてないから」

航はそれだけポツリと言うと、私達の横をすれ違って駅へと歩きだした。その時、黙り込んでいた小夜が突然意を決した様に航に声を掛けた。

「……あ、あの、航くん！」

「………？」

航は小夜の呼び掛けに反応してこちらに振り向いた。しかし、その顔は無表情でとても冷え切った目をしていた。

「……あの、あのね、この前はごめんなさい……」

「………いいよ、別に気にしてないから」

「……でも……」

「………もう、いって」

航は小夜の言葉を聞き捨てる様に背中を向けて再び駅へと歩き出した。小夜はそれでも何とか航に話を聞いて貰おうと後を追いかけた。

「……あの、航くん、あの子に……」

「……小夜、もうやめなさい、また航を怒らせる事になるよ」

「………」

その後、航が私達の方に振り返る事は無かった。その後の家までの帰り道、小夜はまた元気無く下を向いて黙り込んでしまった。

「………決してさ、迷惑って事じゃないと思うんだ、小夜の事……」

「………航の話？」

小夜を家に送り届けた後、帰り道で翔太が私に話し掛けてきた。

「那奈も最初さ、小夜が航や薫と仲良くなるの、嫌がったろ？」

「……まあね、小夜に悪い虫とかあまり近寄らせたくなかったからね」

「多分、一緒だと思うんだよ、航が妹さんに人を近寄らない理由って、大切に守ってあげたいが為に、近寄る者全てをはね除けてしまうつーか……」

私と一緒に。確かにそう考えれば良くわかる気がする。納得している私の横で、翔太はさらに話を続けた。

「素直じゃないって言えばそうだけど、航も好きでそういう性格になった訳じゃないと思うんだ、人に助けて貰ったり、頼ったりする事が今まで無かっただけでさ……」

「……人を信じられないって事？」

「うん、だってやっぱりさ、あんな辛い過去があって、誰も助けくれなかったら自分達の殻に閉じこもっちゃうのは仕方がないよ……」

「……翔太もそうだったの？ お父さんが目の前でいなくなっ……」



「……俺？ いや、俺には母さんもいたし、親父さんや麗奈さんや優歌さんや那奈もいたから寂しくは無かったけど、もし俺が航と同じ立場だったら、きっと同じ様に心を閉ざしてしまうんじゃないかな……」

「……そうだね……」

「やっぱりさ、人間って支えあっていかないと生きていけないじゃないかなって思う、それが明日、航に伝わってくれば良いんだけどな……」

「……翔太……」

ヤバい、グツときた。翔太も段々大人の男として成長しているんだな……。小夜や航の事を心配しなきゃいけないのに、私の頭の中は何か真っ白になってしまった。

「……って、この前親父さんが俺に説教した時に言ってた」

「……ハア？」

一気に目が覚めた。あんだだけ格好いい台詞が全部父さんの言葉！？

「親父さんも生まれてすぐに両親がいなくなって、寂しいがあまりに学生時代はひねくれて悪さしまくってたって言ってたよ」

「……それは私も父さんから聞いたけど、何？ さっきまでの言葉、  
アンタの言葉じゃないの？」

「……この前、親父さんと話してて聞いた言葉をそのままパクった  
んだけど、何かマズい？」

はい、前言撤回。撤回撤回撤回！絶望した。コイツにはとことん  
絶望した！

「……うわぁ、何かもうスッゴいガッカリ……」

「えっ、何が？ 何でよ？」

「いい事言っなぁ、少し見直したなぁ、って思ったのになぁ、あー  
もうホントガッカリ！」

「……ちょ、ちょっと、何が？ 何で？」

パーティーに参加する事を決めたのも麻美子に頼まれて鼻の下を伸  
ばして軽い気持ちで受けたに違いない。そっだそっだ間違い無い。

「もういい、アンタとは喋りたくない、スゴい絶望した、さような  
ら」

「エッー！ 何で何で何で!？」

何であんな変な気持ちになってしまったのだろう、つくづく自分が嫌になる。あー、恥ずかしい。

しかし、自分の気持ちでさえもわからないのに私に人の気持ち、しかも深い傷を受けた心を理解する事なんて出来るのだろうか。

## 第11話 Simple

近所の家々が綺麗なイルミネーションを窓に飾り付け、サンタクロースが迷わない様に道標を立てている。

しかしサンタクロースだって人間、忙しくて全部の家の子供達にプレゼントをあげられる訳ではない。

だったらいつそ来なくて結構です。プレゼントもケーキも結構。七面鳥より鍋の方がよっぽど温まるしお腹も膨らむ。

クリスマスイブの夕方、ネギを千切りしてちつともクリスマスらしくない夕飯の準備をしていると、頭をガリガリとかきむしりながらお姉がバイトから帰ってきた。何かヤバそうな雰囲気だ。

「うぐああゝ、腹立つわあゝ！ チキシヨウ！」

「……何？ どうしたのお姉？」

「明日は一日中お祭り騒ぎしてやろうと思ったら、アタシの昔の舎弟達どもが生意気に『クリスマス予定があって行けません』だだよ！ ぐああゝ腹立つ！！」

誰がこんな怪物とクリスマスを過ごすというのか？ 付き合ったらフォウグラにされるアヒルの様に強引に食べ物や酒を胃袋に詰め込まれるのが目に見えている。

「……まあ、逃げられるのも当然だと思っけど……」

「何だつて？ 何か言ったか？」

「……別に、で、お姉は明日どうするの？ 私は友達の家に行くんだけど」

「おう、代わりにバイト先の連中拉致して朝まで騒いで来るから心配すんなって」

「……ナイトメアー・ビフォー・クリスマスだね、連れていかれる人たちは……」

……死人が出なければいいのだが。私が出る事はそのバイト仲間の人達が無事に年を越せる様に祈るだけだ。

「と、いう事で翔太！ オマエも付き合え！」

「……いや、俺も友達の家……」

「オメエもかよお！ ふざけんじゃねえよお、一発殴らせろ！」

「……イヤですよ……」

とりあえずお姉の予定さえわかっていれば大丈夫。母さんは年内中は帰って来ないみたいだし、後は父さんといづみさんには連絡して

おいて各自で食事取ってくれればいいか。

「……クリスマス、か……」

私にはクリスマスの思い出なんてものはほとんど無い。翔太のお父さんが亡くなってからは父さんも母さんも家にいる事が少なくなつて、だいたいは小夜の家に行つてパーティーをやったぐらいだ。

ウチでもパーティーをやりたいと思つてた時期もあったが、無理を行つて父さん母さんを困らせる様な事はしなくなつたし、お姉に一番迷惑をかける事になりそうだったので我慢してきた。

お姉だつて家族みんなで楽しく過ごしたいと思つた事があるはずなのに、文句を言わずに私達の世話をしてくれていたのだから。

そんな事を考えていたら、予想もしない意外な人物、いや出来れば歸つて来て欲しくない人物が家に歸つてきた。

「いよおー、お前らメリークリスマスだバカやろう」

「父さん！」

「親父さん！」

「あらら、どうしたの虎太郎ちゃん？」

私も翔太もお姉も父さんが歸ってくるなんて聞いていなかったし、予想もしてない。実際に私は父さん分の食事の準備はしてないし。

「何だあ？ 帰ってきちや悪いのかあ？ 仕事の目処が付いたからたまには家でゆっくりしようかと思って帰ってきたのによお？」

渡瀬虎太郎。私の父親で渡瀬家一番の問題児だ。前にも話した通り、こんないい加減な人でも立派な元2輪ロードレース世界チャンピオンである。

観客を魅了する圧倒的なスピードと強さで一時代を築いた英雄だが、転倒やリタイアも多い両極端なライダーだった。

そのせいか、転倒による頭部へのダメージの蓄積により脳に小さな腫瘍が出来てしまい、それが原因で若くして現役を引退した。

現在はバイク便の経営者をしながら国内のレースチームの代表をしている。翔太もこのチームの一員として父さんの指導を受けている。

「何でもこうも年末ってえのは毎年毎年忙しないのかねえ？ 丸々ヶ月休み無しのフル回転だぞオイ！ こんな事ならいつそまだ現役で走ってた方が健康的なんじゃねえのかって話だよなあ！？」  
「つーか何で経営者っていう立場にいる俺が必死こいて外回りしなきゃならんのだあ！？」  
「人手足りねえ、時間も足りねえ、やっとこさ仕事終えたらくつたたくたに疲れて事務所でバタンキュー、朝になつて目が覚めたら今日もお仕事明日もお仕事、って毎日やってられるかつうんだよバカ野郎！！」

「痛っ！ 何で俺を叩くんスか親父さん！」

「……で、言いたい事全部言い切ってスッキリした？」

「まあね！」

「……あー、うるさい……」

読者の皆様にもわかって頂けただろうか？ このおっさん、何しろうるさい。父さんに比べれば小夜も翼も薫もお姉も可愛いものだ。

「虎太郎ちゃんド疲れちゃん、今年もいっぱいお仕事頑張ったねえ、優歌ちゃんがいい子いい子してあげようか？」

「だが断る」

「……可愛くねえなあ、オイ」

するとまた玄関のドアが開く音が聞こえた。あと帰ってくるとしたらいづみさんだろう。たまに帰ってくるタイミングというのはみんなピッタリ合ってしまったたりする。

「ただいま〜って、アララ？ 虎太郎じゃない、どうしたの？ 仕事クビになった？」

「俺ったら社長だもん」

「あら、そうだったっけ？」



いづみさんまで帰ってきて、一気に家の中が騒がしくなってきた。  
これでもし母さんまで帰ってきたらサンタでさえ裸足で逃げ出す程  
の大祭りになるだろう。

「翔太、父さんもいづみさんもいるし、明日の予定話しておいた方  
がいいんじゃない？」

「ああ、そうだな、母さん、親父さん、俺と那奈は明日……」

「二人で外泊など許さんぞ」

「違うっつーの！ 話聞いてよ父さん！」

「友達の家にクリスマスパーティーに行くから、夕飯それぞれで済  
ませてくれるかな？」

「えっー、聞いてなーい」

「お姉にはさっき話したから」

「そうだったけ？」

「えっー、聞いてなーい」

「父さんには今話したから！」

「そうだったけ？」

あー、相手にするのが面倒くさい。血の繋がりも無いのに何なんだこのコンビネーションは？本当はお姉が実子で私の方が養子なんじゃないだろうか？

「……このバカ二人は放っておいていいわよ、わかったわ、行っくらっしゃい、楽しんで来なさいよ」

「ありがとう、母さん」

「それじゃ、いづみさん宜しくお願いします」

「……あつ、そうだ、私も仕事終わったら姉さんの所に遊びに行こうかな？ ついでに夕飯ご馳走になっちゃおうかな？」

「うん、たまには母さんも遊びに行ったっていいんじゃない？」

せつかく話がまとまったのにそれをまた散らかそうとするガキのおっさんが出しゃばってきた。

「何だ、俺達を置いてお前らだけで美味しいもん食いに行くのかコラ」

「だからクリスマスパーティーだって……」

「えっー、聞いてなーい」

「……もついい……」

食事と片付けを終えた後、自分の部屋に戻ってふと思った。やっぱり我が家でクリスマスパーティーなんてやらない方がいいかもしれない。何かヒドい事になりそうなのが目に見えている。

「……まあいいか、明日から学校も休みだしゆっくり寝よう、って、何よこの布団のふくらみ……」

バサツと布団をめくるといつの間に入ってたんだよこのバカ二人は！？

「メリークリスマス那奈ちゃん！ パパサンタの登場だよ〜ん！」

「お姉トナカイさんもいるよ〜ん！」

「今すぐ出てけっー！！！」

……昨晚の騒ぎのせいか寝起きが悪い。何か頭痛がする。まあいいや、どうせパーティーは夕方からなんだし、準備は麻美子や翔太に任せてもう一眠り……、なんて思ったのもつかの間。

「那奈、那奈！ねーねー、早く起きてー！早く麻美ちゃん家に行こーよー！」

「……なんで、小夜が、ここにいの……？」

誰だ、こんなやかましい小怪獣を放し飼いにしてるのは……。ベツドから叩き起こされた私は、半分眠りながら小夜に家の外へと引きずり出された。

「いつまでウトウトしてんのー？ もうお昼になっちゃうよー？」

「……アンタさあ、冬休みの初日ぐらいのんびりさせてよね……」

玄関に座り込んで、頭を押さえて眠たそうに突っ伏している人間がもう一人いた。

「……那奈、お前も叩き起こされたのか……」

……翔太、アンタも小夜に無理やり叩き起こされたみたいだね……」

「さあー！ みんな元気よく麻美ちゃんの家に行ってクリスマスパーティーの準備しようー！」

「……はあ……」

今日の小夜の元気っぷりはいつも以上でそのテンションは半端では無い。この前までの落ち込んでいた様子がまるで嘘の様だ。

「……もう、航や妹さんの事はわすれちゃったのかな？」

「……でもまあ、落ち込んでるよりマシだろ？ いい方に考えようぜ」

しかし私は一つ気になる事がある。小夜がパンパンのリュックを背負っていて、中には何か入っているみたいだ。

「……小夜、そのリュックは何なの？ 何か入ってるの？」

「あつ、これ？ みんなへのクリスマスプレゼントだよー！ サンタさんみたいでしょ？」

「……山でも登るつもり？」

麻美子の家に向かう電車の中で、電車の振動でふらふら揺れる小夜のリュック。みんなへのプレゼントと言っていたから、もしかしたら航やあの子の分も用意してきたのだろう。

「麻美ちゃん、こんにちはー！」

「小夜ちゃん、いらっしやい！ で、そのリュックは何？ 危ない物じゃないよね……？」

麻美子の家に到着すると、さっそく小夜は背中からリュックを下ろ

してジッ〜つとチャックを開いた。パンパンのリュックから色々とモコモコした物体が飛び出てくる。

「エヘヘッ、みんなへのプレゼントなんだよ！ ちょっと待ってね……」

そう言う和小夜はリュックの奥を弄り白い物体を一つ取り出した。それは動物の姿がデフォルメされた可愛いぬいぐるみだった。

「はい！ 麻美ちゃんには羊さんのぬいぐるみ！」

「……えっ、私に？ 小夜ちゃん、どうしたの？ このぬいぐるみ……？」

「エヘヘンツ！ あたしが作ったんだよー！」

「えっ、本当に？ これ小夜が作ったの！？」

私は小夜の意外な才能に驚いた。こんな物も作れる様になったんだ。なるほど、終業式の日の手の傷と寝不足はこれを作っていたからか。まあ多分、ほとんどはあづみさんに手伝って貰ったんだろうけど……。

「那奈と翔ちゃん、航クンと瑠璃ちゃんの分もあるよー！ 那奈がライオンさんで、翔ちゃんがシマウマさん！」

「……私、ライオン……?」

「……ライオンとシマウマって、俺が喰われちゃうじゃん……」

「……とりあえず、ありがとう……」

「エヘヘッ、どういたしまして!」

しかし、まだこれからパーティーの準備をするというのに、今ここでみんなにプレゼント手渡してどうするんだろ。普通はパーティーの最中に渡す物だと思うのだが。

「ねーねーねー、ちゃんと良く出来てるでしょ? ねっ?」

まあいいや、小夜の嬉しそうな顔を見ていたらそんな事はどうでもよくなってきた。

せっかく早い時間に麻美子の家に来た訳だし、お邪魔するだけでは失礼なので私達もパーティーの準備を色々手伝う事にした。

「ごめんなさいね、那奈ちゃん、この前に続いて色々迷惑かけちゃって……」

「いえいえ、お母さん、思いつ切りこのヘタレ男をこき使ってやってください」

「……俺の話!？」

美代子さんに翔太をレンタルさせて、私は廊下にあるクリスマスツリーに飾りをつけながら、居間にいる小夜には聞こえないように麻美子に話し掛けた。

「……麻美子、昨日、航に話はしてみたの？ 反応はどうだった？」

「……………」

「……やっぱりダメ？」

「……すいません、断られました……………」

話すらも聞いてくれなかったらしい。途中で遠藤先生までも介入して航を説得してくれたらしいけど返事は貰えなかったそうだ。そして今日、航は私達が麻美子の家に到着する前に朝早くに瑠璃を背負って外に出て行ってしまったそうだ。

「……アンタのせいじゃないよ麻美子、航達が帰ってきたらもう一度私達と一緒に誘ってみようよ」

「……はい、そうですね……………」



気を取り直して居間の掃除とパーティーの飾り付けの準備をしに行こうとしたら、なぜかその居間の中から寝息が聞こえてくる。

「……くかー」

「……小夜ちゃん、寝ちゃってますけど……」

「……どんだけ寝るの、この娘？」

しかも大事そうにさっきのリュックを抱いて丸くなっている。この前来た時に初めて触った畳の感触が余程お気に召したのか、ちゃぶ台をズラして居間のド真ん中でスヤスヤ眠っている。

「ほら小夜！　起きなさい！」

「……ほえ？」

「ほえ？　じゃないわよ！　準備するの！？　しないの！？　どの道ここで寝られたら邪魔なのよ！」

寝ぼけている小夜を叩き起こそうと頬をペチペチ叩いてみたが、座りながらも目をつぶってしまふ。

そんな小夜を気遣って、美代子さんが居間に入ってきて後ろから脇に手を入れて優しく小夜を抱き起こしてくれた。

「小夜ちゃん、もし良かったらおばさん達のお部屋でお昼寝してね？ 小夜ちゃんが眠っている間に準備済ませて、パーティー始まったら起こしてあげるから」

「……はい、お母さん、航くんはゾウさんと瑠璃ちゃんはお揃いのウサちゃん……」

やっぱり寝ぼけてる。自分が誰の家にいるかもわかっていない小夜を、美代子さんは支える様に寄り添って2階の部屋へと連れて行ってあげてくれた。

寝ぼけているにもかかわらず、小夜はしっかりとリュックを抱いたままだった。盗む人間なんかないんだから置いていけばいいものを……。

「……すいません、お母さん、色々お世話になって……」

「いいのよ、那奈ちゃん、いつも麻美子が同じ様にお世話になっているから、おばさんからお返しよ」

ますますいいお母さんだ。是非とも我が家にもこんなお母さんが1人欲しい。今度のクリスマスでサンタさんをお願いしてみようかな。

ボン　ボン　ボン　ボン

麻美子の家にある古い時計が時間を教えてくれた。もう4時だ。窓

から外を見ると、すでに日が暮れ始めて風も窓ガラスを揺らすほど強くなってきた。

「……航君達、どこまで行っちゃったのかな……」

麻美子が時計を見て心配した時、玄関の戸がガラガラッと開いた。どうやら、航達が帰ってきたみたいだ。

「航君、瑠璃ちゃん、お帰りなさい！　こんな寒い日に外に出て行っちゃったから、おばさん心配したわよ？」

「………すみません」

「……あらあら、瑠璃ちゃん鼻水出してるじゃない？　もし良かったら、下のお部屋で暖まりなさいよ？」

「………いや、いいです、邪魔になるでしょうから」

そう言うとき航は瑠璃を背負ったまま2階に上がり、自分達の部屋に入っていつてしまった。それを見た私と麻美子は顔を見合わせてガツクリと肩を落とした。

「……話し掛けるチャンスすら無さそうだね……」

「………そうですね……」

とりあえずパーティーの飾り付けの準備も終わり、後は美代子さんが作ってくれる料理を待つだけになった。  
一段落ついて私達が居間で休んでいると、診療を終えた遠藤先生がわざわざこちらまで顔を出してきてくれた。

「やあ、いらっしやい皆さん、綺麗に飾り付けしてくれたみたいだね、どうもありがとう」

「いえいえ、そんな、お仕事お疲れ様です、先生」

「お父さん、お仕事お疲れ様」

「おや、男の子までいるのか、麻美子は随时と人気者なんだな」

「……あつ、どうも初めまして、風間です」

「……やだ、お父さん、そんな事無いってば……」

先生も混じってしばらく談笑していると、美代子さんが出来上がった料理を持ってきてくれた。

「あら、あなた、お疲れ様です、食事はちゃんと分けて作ってありますから」

「ああ、ありがとう、さすがに私はパーティーをする様な歳では無

いからな。ところで、航はどうした？」

先生の言葉に、私達は答える事が出来ずに黙ってうつむいてしまった。

「……そうか、なら仕方ないな……」

先生までもが無言になって、部屋がシーンと静まり返ってしまった。その時、2階から誰かが階段を降りてくる音が聞こえた。

「……誰？ 航かな？ それとも小夜が起きたのかな？」

背の高い人影が見えた。航の様だ。どうやらトイレに行ったらしい。

「……ちよつと失礼する……」

「……あなた、どちらへ？」

遠藤先生はスクツ立ち上がると、居間を出て航が向かったトイレの方向へ進んでいった。何やら緊迫した空気になってきた。

「……航、ちよつと待て」

トイレから出てきた航を呼び止め、遠藤先生は説教に近い剣幕で説得し始めた。

「いいか航、私がこの家にお前達を連れてきたのは、出来るだけもつとお前達に多くの人を接触して欲しいからだぞ！？ お前達を助けてくれる人達もちゃんという事を知ってもらいたかったからだぞ！？」

「……………」

「なのにお前は、自分から人を避けてしまっている、人の優しさをはねのけてしまっている！ どうしてそんな事をするんだ！ こんなに優しい友達がたくさんいるのに！？」

私達は居間から壁越しに遠藤先生と航の会話を黙って聞いていた。とても私達だけでパーティーをしていられる様な雰囲気では無かった。

「航、心を開け！ 俺達は味方だ、お前達の味方だ！ お前達はどう？ 一人じゃない、もうそんなに苦しまなくていいんだぞ！？ その為に俺はお前達をここに連れてきたんだ！」

しかし航は、遠藤先生の言葉を避ける様に無言で二階に上がろうとした。それを見た遠藤先生は急いで航の腕を掴みそれを阻止した。

「航、いい加減にしろ！ このパーティーはお前と瑠璃の為にみんなが用意してくれた物なんだぞ！」

「……………いりません、そんなもの」

「待て、航！ 瑠璃はどうする！？ お前はそのまま歩く事も喋る事も出来ない瑠璃をずっと閉じ込めておくつもりか！？」

聞いていて胸が苦しかった。さすがにもう限界、心配になった私達は居間を出て急いで階段へと向かった。

「航！」

「航君！」

私達の声聞いた航は階段の途中で一度止まりこちらを見た。その目はとても寂しそうで、悲しそうだった。何て話しかければいいかわからない私の前に翔太が出てきて航の顔を見上げ、なだめる様に優しく話しかけた。

「……………航、俺達、学校で約束しただろう？ 何かあったら助け合おうぜって、俺と、航と、薫でさ……」

「……………翔太」

「航、信じてくれよ俺達を！ 那奈や小夜や翼や千夏、麻美ちゃんとそのお父さん、お母さんを！俺達はお前の仲間だよ！ 家族だよ！ 友達なんだよ！」

翔太の言葉に、航はうつむいて下唇を噛みじめ、そして、顔を上げてポツリと呟いた。

「……………そんな人間、いる訳が無い」

「……………航！？」

「……………心の底から、人を想ってくれる人なんている訳が無い、そんなの上辺だけだ」

航は先生に掴まれた腕を振り払い、再び二階に向かって階段を上がり始めた。

「……………航、待つて！ 小夜もこのパーティーを楽しみにしていたの！ プレゼントも航や妹さんの分まで夜遅くまで頑張って作ったの！ お願い、小夜の気持ちだけでもわかってあげて！」

私はどう思われてもいい。せめて小夜だけは、小夜の事だけは嫌ってほしくなかった。もう、あんなに苦しんでいる小夜を見たくなかったから……………。



「小夜？ それはもしかしてこの前の元気な娘さんか？ その娘はどこにいるんだ？」

遠藤先生が美代子さんに質問した。そういえば今日は小夜は遠藤先生にまだ挨拶をしていなかった。

「……それが、準備中に眠くなってしまったみたいで、今、私達の部屋で休んでもらっているんですけど……」

「……………！！」

美代子さんの話を聞いた航は血相を変えて階段を駆け上がった。その姿を見た私はこの前のあの出来事を思い出した。

「……………小夜、まさか！？」

航の後を追って階段を上がると、美代子さんが小夜を連れて行った部屋の扉が開いていた。そして、中は真っ暗で誰もいない。

「……………瑠璃！」

航は凄いい剣幕で部屋の入り口にいた私を跳ね飛ばし、瑠璃がいる自分達の部屋の扉を壁に叩きつける勢いで開けた。  
もしまた小夜がこの部屋に入っていたら、航はまた激怒するだろう。そうなれば、今度こそ私達と航の友情は終わる……。

「いい加減に……！」

部屋に入り、怒鳴りつけようとしていた航の言葉が突然止まった。  
口を開けたまま、部屋の中を見て啞然としている。何があったのか？

「……小夜！」

起き上がらせてくれた翔太や麻美子と一緒に航の後ろから部屋の中を覗き込むと、そこには、私達も驚く光景、いや、何かとても、心が洗われる様な美しい光景があった。

「……くかー」

怖がって一切人に近づかなかった筈の瑠璃が、白いベッドの上で小夜と仲良く並んで手を繋ぎながら眠っていた。  
2人とも似たようなウサギのぬいぐるみを抱いていて、どうやらついさっきまで遊んでいた様な形跡まであった。

「……私達が知らぬ間に、小夜はこっこの部屋に来てたんだ……」

「……瑠璃ちゃん、航君以外の人がいたら、怖がって絶対に寝なかつたのに……」

麻美子の驚いている顔を見て、私はあの小夜が私達がどんなに頑張っても出来なかった、何かとんでもない事をやってのけたしまったのを理解した。

麻美子だけではなく、後から二階に上がってきた遠藤先生と美代子さんもその二人を見て驚きを隠せなかった。

「……あなた、これ……」

「……奇跡が起こったかも知れん……」

奇跡、そう言った遠藤先生の表情は大真面目で、決してその言葉が大袈裟なものではない事を物語っていた。本当に、今まで起こり得なかった事が今、この部屋の中で起こったのかも知れない。

「……航、小夜は、俺達は味方だよ、これでわかってくれたか……？」

「……………ああ」

翔太の問い掛けに航は静かに頷いた。やっと、航の心に私達の声が

届いた。穏やかな表情に戻った航を見て、私と麻美子は顔を見合わせてニコツと笑いあった。

この時の小夜と瑠璃の寝顔はとても安らかで、私の記憶に鮮明に残った。まるで、天使の姉妹が雲の上で揃って眠っているみたいだった。

## 第12話 空風の帰り道

年が明け、三学期が始まり早くも二ヶ月が経ってしまった。私達もあつという間にもうすぐ二年生だ。

「何か一年間が短く感じたわ、やっぱりアレやな、小学生の頃に比べると色々とイベントもあつたもんなあ、なあ千夏？」

「そうよねえ、もう少しでアタシも日本に来て一年になるんだねえ、何かホントにあつという間だったなあ……」

「このまま知らず知らずの間に年を取って二人ともすっかりオバちゃんになっていくんだろうなあ……」

「オマエが言うな！ オマエが！」

「何で薰ちゃんにアタシ達の将来心配されなきゃいけないのよ!? バーカ！」

「バカって言われたく、ヒドいやヒドいや！」

相も変わらず、私達は一緒に連んで下校している。毎日毎日同じ顔を揃えてよく飽きないものだ。もちろん、私も含めて。

「二年生になったら、クラス替えどうなるかな？ みんな、何組になるのかな？」

「私は悪いけど翔太とだけは一緒になりたくないね」

「何だよいきなり、一緒のクラスになりたいだなんて言っただろ？」

「ここ最近はお私と翔太とお喋り三人組で帰る事が多くなった。先に言うておくが別にケンカをしてバラバラに帰っている訳では無い。なぜなら、相変わらず翼と千夏のクラスはホームルームの終了時間が遅く、その間に小夜と麻美子と航は待ちきれずに先に帰ってしまうからだ。」

「小夜はまた麻美ちゃんの家そのまま遊びに行っちゃったのか？」

「……みたいね、もうロケットミサイルに一直線よ、制服も着替えないで」

「たまたま二組の終了時間が早くてみんなで一緒に帰っても、小夜はそのまま麻美子達と一緒に電車に乗っていつてしまう。」

「しっかしもう完全に入り浸りやなあ、麻美子の家族に迷惑とかかけてなきゃええけどなあ？」

「大歓迎なんだってさ、麻美ちゃんのお父さん直々に小夜ちゃんに

来てもらえる様をお願いしたらしいよ」

「詳しいわねえ、薫ちゃん、さすがは本校のパパラッチね」

「しっかしあの小夜が重宝されるとは、人はどんな事で役に立つかどうかなんてわからんもんやなあ……」

クリスマスのあの日以来、小夜は毎日の様に麻美子の家に遊びに行っている。それは麻美子と遊ぶ為ではなく、航の妹・瑠璃に会いに行く為だ。

一緒に住んでいる麻美子達でさえ全く心を開かなかった瑠璃が、なぜか小夜にはあの日以降も良く懐いて、その後から瑠璃の行動や表情にも色々と変化が出てくる様になった。

その様子を見て、遠藤先生は治療も兼ねて瑠璃ともっとコミュニケーションを取って欲しいと小夜に頼んできたのだ。

航も遠藤先生の考えに納得して、小夜に対してだけは瑠璃から突き放したり事なく静かにその様子を見守る様になった。

さつき翼が言った通り、長年小夜と一緒にいた私でさえもこんな展開は予想もしていなかった。まさかあの小夜が1人の子供の閉じてしまった心を開くとは……。

「瑠璃ちゃんが興味を示す相手って小夜だけなんだろう？ 何なのかな、小夜は特別な何かを持ってるのかな？」

私も最初は翔太が言ったのと同じ事を考えていた。あの天然バカパワ―には何か凄い力でもあるのかと。

「小夜が見た目からアホっぽいから、『コイツなら大丈夫』って思ったんちゃうか？」

「ヒドいわねえ、違うでしょ？ ピュアなのよピュア、翼と違って小夜の心が純粹だから受け入れてくれたのよ！」

「千夏ちゃんの言う通り！ 透明でピュアな心、まるで俺と一緒にだね！」

「薫はピュアや無くて間違いないくアホやで」

「ウソおーん！？」

私は最近、小夜と瑠璃を見ていて思い出した事がある。今でこそ小夜は誰にも挨拶をして明るく元気だが、小さい頃はひどい人見知りで気が小さく、いつも私の背中に隠れていた。

どこに行くにもいつも後ろについてきて、私がいないとお使いもお出掛けも何も出来ない、そんな弱い子だった。

瑠璃みたいに言葉が喋れないなどの障害があつた訳ではないが、人を怖がってしまっている所などは当時の小夜と良く似ている。

「……ねえ、アンタ達、この後ヒマ？」

「えっ、アタシ達？ 何かあるの那奈？」

「何やねん、何やねん？ 何か楽しそうな物でもあるんかい？」



ふと思いついた事をそのまま言葉にしてみた。もしかしたらちょっと前の私なら絶対に言い出さなかった事だろう。

「……ちよつと、みんなで行ってみない？ 麻美子の家に」

「えっ、もしかして瑠璃ちゃんに会いに行くのか？」

翔太が私の言いたかった事を言ってくれた。私達も何か航や瑠璃に何かしてあげられる事はないか、そんな事を私は考えていた。

「オイオイオイ、待てや那奈？ 何でウチらが行かなアカンねん！？」

「いやいやお嬢、それイーネっ！ みんなで明るく楽しく騒いでもっと瑠璃ちゃんに喜んでもらおう！」

「アタシも賛成〜！ 今度ママに可愛い子供服を作って貰う為に、瑠璃ちゃんの服のサイズの寸法調べておかないとねっ！」

「……おいおい、千夏も薰もやる気満々かい……」

翼一人だけがあまりその気が無い。翼自身も小さい妹の面倒を見ているせいか、幼児アレルギーでも持っているのかな？

「でもさ那奈、みんなで押しかけたら逆に怖がられるんじゃないか？　大丈夫かな？」

「別に騒ぐ必要は無いでしょ？　まあ、そう言ってる翔太と薫が一番怖がられるだろうけどね」

「オマエら、何をボランティア気分になっとんねん？　ウチらが行ったってしてやれる事なんか何一つ……」

「行く人手え挙げて」

翼の文句をバツサリ遮る様に薫が多数決を取り始めた。もちろん、結果は翼を除いた全員が手を挙げた。

「アタシ行ってみた〜い！」

「俺も別に予定無いから行くよ！」

「……まあ、私は言い出しっぺだからもちろん賛成」

「はい四対一！　多数決により遠藤医院にお伺いする事が決定いたしました！　ウハッ！」

結果に納得出来ない背の小さい野党がギャーギャー騒いで抗議を始めた。本当にこんな感じの野党と党首とか居そう感じた。

「何でやねん！ ほならウチも行かなアカンのかい！？」

「それは多数決ですから、多数派が勝ち組の民主主義ですから」

「数に物言わせて少数派の意見潰すんのイクナイ！ 反対や！」

こうして私達は制服姿のまま電車に乗って遠藤医院へと向かった。  
二月下旬と言ってもまだまだ肌寒く、道の途中にある公園の木々は  
まだ桜のつばみも見当たらず裸木のままだ。

「あれっ？ ねえ那奈、この木ってもしかして桜の木？」

「そうみたいよ、麻美子が言ってたけど、春になると公園一面に桜  
が咲くんだったって」

「ウソー！ 見てみた〜い！ アタシまだ桜って目の前で咲いてる  
の見た事無いもん！」

「そういえばそうやな、千夏が日本に来た時はもう桜は散っとった  
しなあ」

「花見客とかでこった返しますぜ〜！ あっちこっち酔っ払いがウ  
ジャウジャゲロゲロ」

「ヤダ〜！ 薫ちゃん、もう最っ低〜！」

千夏みたいに外国にいた人間が日本の文化であるお花見を見たらど

う思うのかな？ 花を見て酒飲んで酔っ払う民族なんて他にはいないだろうし。

「……桜が咲き出すのはあと一ヶ月くらいかかるかな……」

どれくらいの桜が咲くのか今から楽しみだ。その為にはもうちょっと気候が暖かくなってくれないと難しいかなあ。

「……あれ？あれって……」

「どしたん、薫？」

「あれ、あそこにいるの、航じゃない？」

薫が指差した公園の奥を覗き込むと、確か公園の垣根の裏に頭が一つポコンと飛び出していた。

「あんだだけデカいと見間違えようがないって！ 間違いなく航だよ！」

「……あのな薫、ウチには全然見えへんねんけど……」

「アタシが肩車してあげようか、翼？」

「結構や！ いちいち絡むな千夏！」

確認する為に私達は公園の中に入っていった。背の高い坊主頭。間違いない、航だ。

「おーい、航！」

翔太の呼び声が聞こえたみたいで、航は私達を見てこちらに向かって手を振ってきた。垣根の裏に回ると麻美子も一緒にいて、私達の方に駆け寄ってきた。

「……みんな、どうしたの？ 制服姿のままで……」

「邪魔でなければみんなで明るく楽しく激しく瑠璃ちゃんを盛り上げようと思ってね！」

「激しくしてどないすんねん！ 麻美子、薫の言ってる事は無視してええで」

「航の迷惑にならなければ、私達にも何か瑠璃ちゃんに出来る事がないかなって思ってさ、私がみんなに呼びかけてみたんだ」

「……………迷惑なんて事は無いよ、ありがとう、那奈」

航の表情は初めて出会った時よりもずいぶん優しくなってきた。航も少しずつ私達に心を開き始めてくれたみたいで、心配していた私

もホッとした。

「ところで二人とも、小夜はどこ？」

「……あそこにいますよ、瑠璃ちゃんと一緒に……」

「……えっ？」

麻美子はこの公園の真ん中にある一番大きな桜の木を指差した。その木の下には小夜が瑠璃を抱きかかえて、二人で木の枝を見上げている姿があつた。

「瑠璃ちゃん、この木のお名前はさ・く・らって言うんだよ！」

「……………」

「あともう少しすると、キレイなピンク色のお花がいっぱい咲くんだよ！」

「……………」

瑠璃はまだ喋る事が出来ないから返事こそは無いが、間違いなく小夜の言葉に反応してマジマジと桜の木を見つめていた。  
理由はわからないが、やはり瑠璃は小夜にだけは完全に心を開いてくれているみたいだ。

「……もう、外へも出れる様になっただね、良かった……」

「……まだ歩く事が出来ないから、航君におんぶされながらですけどね……」

クリスマス前にどうしたらいいのか麻美子と一緒に悩んでいたのが嘘みたいだ。瑠璃を抱いて笑っている小夜を見て、私と麻美子はホツとして顔を見合わせニコツと笑った。

「何かアレやな、あの子まるで赤ん坊みたいやなあ？」

「ホントね、何か小夜がママみたいに見えてきちゃった」

「……そうですね、赤ちゃんですよ、生まれてすぐにお父さんもお母さんもいなくなつて、誰にも何も教えて貰えずに大きくなつちやつたんですから……」

麻美子の言葉を聞いて、軽い気持ちで喋っていた翼と千夏が申し訳なさそうに下を向いた。私達が大変だったあの時、この2人は何にもしないで冬休みを堪能していたからねえ……。

「あー！ 那奈だー！ 翔ちゃんも翼も千夏も薫ちゃんもみんないるー！」

小夜が私達に気付いて、瑠璃を抱いたままこちらにチョコチョコと早足で近づいてきた。

重そうにしている小夜を気遣ってか、航が小夜に近づいて瑠璃を受け取ろうとした。

「……………代わるよ、今度は俺が瑠璃をおんぶするから」

「あつ、はい！　お願いしまーす！　じゃあ瑠璃ちゃん、お兄ちゃんと交代ねっ！」

航は小夜から瑠璃を受け取り、慣れた手つきでスツと背中におぶった。おんぶされた瑠璃は少し名残惜しそうに小夜をジッと見ていた。

「ねーねーねー、みんなどうしてここにいるの？　学校で何かあったの？」

「……………アンタがヘマしたりバカやってないかどうか心配で見に来たの！」

「えー、ヒドいよー！　あたし一生懸命瑠璃ちゃんの為に頑張ってるのに、那奈は全然あたしの事を信用してくれてない！」

「アンタのこれまでのドジッぷりを今までずっと見てこさせられて、どうやってアンタを信用しろって言うのよ？」

「んー、全くや全くや！　那奈の言う通り、どんだけウチらが迷惑



受けてきたと思てんねん！　どんだけ〜！」

「うー、那奈も翼もいじわるー！」

合流した私達はみんなと一緒に公園を出て麻美子の家へと歩いていった。その道の途中でも小夜は弾き飛びそうなくらい元気で、瑠璃、麻美子、航を相手に1人で勝手に喋りまくっている。

「でねー、その時テレビ出ていた芸人さんがスゴく面白くてねー、長い髪の毛持ってこうやって『卑弥呼様ー！』ってやってて……」

「小夜、ちよつとアンター人で喋りすぎ！　この前みたいにまた五分黙りなさい！」

「えー、何でー！？　那奈はどうしていつもあたしだけ……」

「だーまーれー!!」

「……………」

「あつ、やつぱり静かになったわねえ〜、小夜の騒音って何デシベルかしら？」

「『竹や竿だけ』よりやかましいのは確かやなあ」

麻美子の家に到着すると、航は瑠璃を寝かしつける為に二階に上がっていった。その間、居間でみんなと一息ついていると、休憩中だ

った遠藤先生が昔の航達の事を私達に話してくれた。

「……私が航と瑠璃に会ったのは、今から一年半前に診察で訪れた幼児施設だったな……」

当時、大きな病院に勤めていた遠藤先生は、非番の日に友達の町医者が風邪で倒れたので代わりに診察に行ってほしいと頼まれたらしい。

その診察を頼まれた幼児施設に、親戚や他の施設などにあちこちにたらい回しにされていた航達がいた。

「……初めて二人を見た時は正直驚いたよ、航はげっそりと痩せていて、体のあちこちに傷やアザがあった、実の父親から小さい時に受けた傷もあったが、それ以外のほとんどは以前にいた施設の心無い職員達の仕業によるものだったんだ」

子供を守るべきはずの施設が行っていた非道な行動に怒りと驚きを隠せなかったそうだ。しかし、先生が一番驚いたのは瑠璃の心理状態だった。

「肉体的には確かに年相応に成長しているが、精神的な成長が全く無かった、最初は何か先天性の病気ではないかとも思ったが、どうもそういう訳でもない、何か、本人が成長するのを拒んでいる様な……」

遠藤先生は航達を何とか引き取って貰おうと二人の親族を回り頭を下げて何度もお願いし続けた。

このまま施設にいては何も解決しない、二人には家族が必要なんだ、愛情が必要なんだと必死に懇願した。

しかし、それでも航達を引き取ってくれる親族は一軒もいなかった。

「心理学の先生や知り合いの精神科医にも相談したが、なかなかいい方法が見つからなかった、かといって、私はこの子達を見捨てる事は出来なかったんだよ、あの子達の父親は私の高校時代の同級生でね……」

誰も助けてくれないのならば、自分が子供達を守る。実の父親が社会復帰出来るまで、先生は航達を引き取る事に決めたそうだ。

「……何かさ、人生人それぞれ色々な関わり合いがあるんだね……」

「……俺ってさ、ツイてたって言うか何か恵まれてるんだな、ってつくづく思ったよ……」

私と翔太が何不自由なく生活できるのは運が良いただけではなく、私達を一生懸命守ってくれている父さん達の力があるからなんだと実感した。

「那奈、悪いけどウチらもう帰るで」

「何よ、翼も千夏ももう帰るの？」

「だって小夜も航ちゃんも二階に瑠璃ちゃん寝かしに行ったらま帰ってこないんだもん、もう飽きちゃった」

確かに小夜も二階に行ったらま全然下りてこない。瑠璃と遊ぶのが楽しいのはわかるけど、待たされるこちらはとしては困ったものだ。

「俺もあまり遅いと家から閉め出されちゃうからお先するよん、麻美ちゃんバイバイキーン！」

「はい、翼さんも千夏さんも薫君もお気をつけて」

翼達はさっさと帰ってしまったが、私と翔太は小夜が帰るまで待つ事にした。日が暮れて結構暗くなってきたので、小夜一人だけで帰らせるのはちょっと怖いのもあるし。

「那奈ちゃん、翔太君、もう遅いからもし良かったらおばさん達と一緒に夕食食べていくかい？ 遠慮しなくていいんだよ？」

「いえいえ、お構いなく、俺らも家に帰って夕食用意しないと怖い人がいるんで」

「小夜はいつもこんな遅くまでいるんですか？ 何か迷惑になって

「まさなか？」

「そんな事無いわよ、小夜ちゃんが来てくれてから、航君も瑠璃ちゃんも私達に心を開いてくれる様になったし、それにあんなに内気だった麻美子が毎日笑顔になって、おばさんにとってこんなに嬉しい事はないわ、おばさんが小夜ちゃんにお礼を言いたいくらいなんだから」

美代子さんは本当に嬉しそうに笑顔で私達にそう語ってくれた。あのドジで天然で手がかかる小夜がこんなにも人から感謝されている。本当に、人と人の繋がりというのは不思議で、どこで誰と関わるかなんてわからないものなんだなと痛感した。それと同時に、私は小夜が少し誇らしく思えた。

「…………あのー、那奈さん、ちょっと…………」

二階に上がっていた麻美子が階段の途中からが困った顔をして私を呼んだ。

「ん？ どうしたの麻美子？」

「…………あの、小夜ちゃんが…………」

私達は二階に上がって航達の部屋を覗き込んだ。すると、またもや小夜が瑠璃と一緒にベッドで爆睡していた。

ほんのさつきまで小夜がクリスマスの時に作ったウサギのぬいぐるみと、瑠璃が持っていた古いウサギのぬいぐるみで二人仲良く遊んでいたそうだが……。

「……くかー」

「……また寝てるよ、この娘は……」

「……これじゃどっちが子供かわからないよな……」

私と翔太は呆れて一つ溜め息をついた。でも瑠璃も眠った事だしいいチャンスだ。私は航に瑠璃を起こさずに小夜を下に連れてきて貰えるように頼んだ。

「悪いね航、お願いね」

「………了解」

私達は先に麻美子の家から外に出て、航と小夜が出てくるのを待った。しばらくすると、家の中から小夜の声が聞こえてきた。

「皆さん、お邪魔しました！また来ます！」

「またいらっしやいね小夜ちゃん、気をつけて帰ってね」

「じゃあ、ちょっと寒いかも知れないけど、駅まで一緒に行こうね  
瑠璃ちゃん！」

「…えっ？ 瑠璃？」

確か瑠璃は寝かしつけたはずなのに、小夜と一緒に家から出てきた  
航の背中にはなぜか瑠璃がしっかりとおんぶされていた。

「……どうしたの、航？ 何で瑠璃がいるの？」

「………起きちゃいました」

「……あちゃー……」

駅に向かう帰り道はすでに日が落ちて真っ暗になっていた。昼間は暖  
かくなってきたとはいえ、夜になるとやはりまだまだ寒い。特に今  
日は風が冷たく、指先が凍える。

「うわっ、風冷たい！ 小夜、ちゃんと上着のボタン止めなよ！」

「うわー、寒いよー！ 風が冷たいよー！」

「航、瑠璃ちゃん大丈夫か？ 寒がつてないか？」

「………大丈夫だよ翔太、とりあえず厚手の服を上に着させて来  
たから、寒くないだろ、瑠璃？」

大きなダウンコートに包まれている瑠璃は航の問いかけに答える様にコクツと小さく頷いた。

「瑠璃ちゃん頷いた！ エヘヘッ、かわいいー！」

「……人の言葉はわかるみたいなんですよね、後は喋れる様になれば……」

「あつ、そーだ！ 麻美ちゃん、ちよつとカバン持ッてて！」

麻美子にカバンを手渡した小夜は何かを思いついた様に自分が着ていたコートを脱ぎだした。

「小夜、何する気なのよ？」

「エヘヘッ、那奈が昔やってたヤツだよ！ 航くん、瑠璃ちゃんをあたしにおんぶさせて！」

「……………はい、大丈夫？ 重くない？」

「……ヨイシヨ！ うん、大丈夫！ じゃあ今度は、この上からあたしのコートを掛けて！」

航は小夜の背中に瑠璃を背負わせると、瑠璃の体がスッポリ入る様



にコートを被せた。

「ほら、瑠璃ちゃん暖かいでしょ？ これなら寒くないよー！」

二人羽織みたいになった小夜と瑠璃は、嬉しそうに顔を見合わせてニコツと笑った。何か本当の姉妹みたく見えてきた。

「……何か懐かしいな、那奈……」

「……そうだね……」

私と翔太は子供の頃を思い出していた。二人で上からコートを被る方法は昔良く私が小夜をおぶった時にやっていた防寒策だった。

家までの帰り道、翔太と交代しながら眠ってしまった小夜をおんぶして帰ったものだ。

小夜ももう誰かのお姉さん役が出来る様になったんだな。小夜の逞しくなった姿を見て、嬉しい様な、寂しい様な、何か複雑な気持ちになった。

「寒いしさ、何か暖かい物飲みたくね？」

「いいねそれ、じゃあ翔太買ってきて」

「……やっぱり買いに行くのは俺なのか……」

「言い出しっぺでしょ？　じゃあみんなの分お願いね」

ちようど近くに自販機もあるので、翔太に人数の飲み物を買わせに行かせようとしたら航と麻美子が気を利かせて翔太の後を追った。

「……あ、熱くて持ちにくいでしょうから、私も一緒に買いに行きます！」

「……俺も行く、瑠璃が飲めそうかどうか現物見てみないとわからないし」

「じゃあ翔太、私と小夜はゆっくり先に行ってるからね」

「ああ、先に行ってくれよ、すぐに追いつくから」

私は小夜と一緒にゆっくり駅へと向かった。駅までの道は若干上り坂で、瑠璃を背負っている小夜はちよつと辛そうだ。

「小夜、大丈夫？　疲れたんじゃない？」

「……ん、大丈夫だもん！　ヨイシヨ！」

おんぶされてる瑠璃が心配そうな表情で小夜の顔を覗き込んでいた。私はその仕草がとても可愛く見えた。

「とにかく小夜、無理しちゃダメだよ、限界だったらちゃんと私に言いなさいよ？」

「……うん！」

何とか坂道を登って人一人分しか歩けない様な狭い歩道を通って行くと、やっと駅前の信号が見えてきた。  
私が駅近くに到着した時、飲み物を買っていた翔太達はまだ上り坂の途中を歩いていた。

「あちゃあちゃあちゃあちゃ、手え火傷する手え火傷する！」

「翔太君、缶をポケットに入れたらどうですか？ それなら多分熱くないですよ？」

「……ああ、言われてみればそうだね、麻美ちゃんは手袋着けてるから熱くないんだね」

「……翔太、俺、先に行って飲み物渡して来る」

「えっ、急がなくなっちゃって多分、駅で追いつくぜ、航？」

「……瑠璃が心配、そろそろ重いはず」

「ああ、そうだな、さっきから小夜がおんぶしっぱなしだろうしな、じゃあ、ついでに那奈と小夜の分の飲み物を持ってってくれよ」

「……………了解」

航は翔太から飲み物を受け取ると、長い足で坂道を早足でスタスタと歩いていった。

「……………素手で持つて行っちゃったよ、アイツ、熱くないのかなあ？」

「……………航君は我慢強いですからね……………」

「……………ちょっと待って麻美ちゃん、それって俺が弱いつて事？」

「……………いや、そういう意味じゃないですけど……………」

航が上がってきている坂道の上で、私と小夜は交差点の横断歩道を渡っている途中だった。

「キャッ！」

横断歩道の真ん中で、小夜が躓いて瑠璃を背負ったまま前のめりに倒れてしまった。

「痛い」

「ちょっと小夜！　大丈夫！？　怪我無い！？」

「……いてて、エヘッ、大丈夫だよ！　あつ、そうだ！　瑠璃ちゃん大丈夫！？　どこか痛い！？」

小夜が見事に顔から転んだので、瑠璃には小夜の体がクッションになって怪我は無さそうだ。でも、さすがにビックリした顔をしている。

小夜が体を入れ替えて瑠璃を抱き上げようとしたその時、私達にははっきりとその声が聞こえた。

「……ううゝあ……」

驚いた私と小夜は一瞬言葉を失い、顔を見合わせた。

「……瑠璃ちゃん？」

「……今の声、瑠璃の声だね……」

次の瞬間、私達の左側から急に眩しい光が射し込んできた。

プップッププッー！！

車が来た。気がつくとすでに歩行者信号は赤に変わっていた。

「小夜、車が来たよ！ 早く渡って！」

「えっ！ でも、瑠璃ちゃんが……」

小夜は急いで瑠璃を担ごうとしたが、慌てて上手く担ぐ事が出来ない。

「小夜！ 何やってんの！ 早く！」

プップップップー！！

けたたましくクラクションを鳴らしながら車はかなり速いスピードで突っ込んでくる。全く止まりそうな気配がない。

「えっー！ どうしよう！」

「小夜！」

あまりに突然の事で私も体が動かない。ただ立ち尽くして大声を出す事しか出来なかった。

「……………!!」

キキキキキイイイイ!!

「小夜!!」

空気を切り裂く様なブレーキ音とタイヤが摩擦して出た白い煙。その瞬間、私は頭を抱えて目をつぶってしまった。

(……………ダメ!　いくら奇跡的に小さな怪我で済んできた小夜でも、今回は……………!)

私の胸の中に絶望感と罪悪感が渦巻いていた。小夜を守れなかった、助けてあげる事が出来なかった……。

「バカヤロー!　何ボツーとしてんだよ!　死にたいのか!!」

運転手の罵声に恐る恐る目を空けると、急ブレーキを掛けて止まった車の横に大きな人影が倒れていた。その人影はゆっくりと立ち上がると、両脇に抱えていた小夜と瑠璃をゆっくりと歩道の縁に座らせた。

「…………航？」

間一髪二人を助けたのは航だった。私は小夜のそばに駆け寄り怪我が無いかどうか確認していると、小夜は大声で泣きながら私に抱きついてきた。

「わーん、那奈！ 怖かった、怖かったよー！」

「バカっ！ アンタは本当に全く…………！」

恐怖で震えている小夜を私は力強く抱き締めた。しばらくして少し落ち着いた小夜は、何かを思い出した様に辺りをキョロキョロと見渡していた。

「…………瑠璃ちゃん、瑠璃ちゃんは!？」

「…………大丈夫、瑠璃も無事だよ…………」

私達の隣で瑠璃は航の胸にしがみつくように抱きついていた。

「那奈！ 小夜！ 航！ 大丈夫か!？」

「小夜ちゃん！ 大丈夫!？」



翔太と麻美子も車の大きなブレーキ音を聞いて急いで私達の元に駆けつけてきてくれた。突然のブレーキ音に近くにいた人達も何事かと集まってこちらを覗き込んでいた。

「コラア！ ガキども！ 道路の真ん中で座り込みやがって！ 轢かれたいのかバカヤロー！！」

いかにも質の悪そうな運転手が車から降りてこちらにガンを飛ばしながら向かってくる。背中を丸めて手足をブラブラしながら歩く姿はまるでヤクザのようだ。

（……あんなバカみたいなスピード出して……！）

怒りを覚えた私は立ち上がって運転手を睨みつけようとした。しかし、それより先に航が瑠璃を歩道の上に座らせて立ち上がり、運転手の方に向かってゆっくり歩き出した。

「お、おい、何だテメエ、やるのか！？」

まだ中学生とはいえ、航は車の運転手よりも遥かに背が高かった。しかもその雰囲気はさっきまでの穏やかなものではなく、前に私達を怒鳴りつけたあの時の様な恐ろしい目つきに変わっていた。

「お、おい、何なんだよテメエはよ!？」

「おい、やめろって航!」

「航君!」

「航!」

私達の声を無視する様に、航は運転手の目の前に立ち、上からギロツと睨みつけた。その迫力に運転手の先程の威勢は消え、航を見上げて完全に怯えてしまっていた。

「……ひっ……!」

「……航クン、ダメだよ……」

小夜の声が聞こえたのか、次の瞬間、さっきまでの航のピリピリした雰囲気はパツと消えて、丁寧に運転手に向かって深々と頭を下げた。

「………どうも、すみませんでした」

「………へっ?」

運転手は拍子抜けを喰らった様にカクツと躓いたが、頭を下げている航を見てすぐに最初の様なデカい態度に戻った。しかし、まだちょつとビビっているみたいだ。

「わ、わわわ、わかってりゃいいんだよ！ 車道を歩いちゃってたら危ねえだろうが！ 次からは気をつけろよ！」

「……………はい、すみませんでした」

運転手は車に飛び乗ると急発進して走り去っていった。車が見えなくなるまで、航はずっと頭を下げていた。

「航、大丈夫か？ 怪我無いか？」

「……………うん、大丈夫」

「小夜ちゃん、瑠璃ちゃん、大丈夫！？ どこにも怪我無い！？」

「……………エヘヘッ、転んでおでこ打っちゃった」

翔太と麻美子は慌てた表情をして航と小夜を気遣った。改めてみんな無事だった事を確認した私は一気に感情が込み上げてきた。

「小夜のバカッ！ アンタ、今度こそ本当にダメかと思ったじゃない

い！ 心臓止まるどころじゃなかったわよ！」

「……………ごめんなさい……………」

「全く、もう……………」

涙が出そうになった。私は涙ぐんでるのを悟られないように、小夜を思い切りギュッと抱きしめた。

「……………瑠璃、おいで」

航が歩道に座っていた瑠璃を抱え上げて軽々と背中におぶった。危ないところを救ってくれたのに、航は何事も無かった様にサバサバとしていた。

「……………航、ありがとう、助かったよ」

「航くん！ ありがとうー！」

「……………いいよ、別に」

小夜は航に駆け寄り、背中にいる瑠璃の顔を覗き込んだ。どうやら瑠璃にも怪我は無さそうだ。

「瑠璃ちゃんごめんね、怖かったよね？ ホントにごめんね……」

赤い鼻で半べそをかきながら謝る小夜の頬を、瑠璃が手を伸ばして触った撫でた。

「……ありがとう、瑠璃ちゃん……」

小夜がニコツと笑うと、それを見た瑠璃が嬉しそうに手足を動かしてはしゃいだ。

「……寒いから、早く帰ろうよ……」

私達は再び駅に向かって歩き出した。すると翔太が航のコートのポケットを探つて缶を一つ取り出した。そういえば暖かい飲み物を買ってきて貰う様に頼んだっけ。

「これ、那奈の分な、さつき航に頼んで渡して貰うつもりだったんだ」

「……何でコーンスープ？ 普通はお茶とか紅茶とかコーヒーでしょ？ どういうセンスしてんのよ、メチャメチャ飲みづらいじゃない？」

「……いや、その方が暖まるかなって思っただけ……」

「最悪」

「……買ってきて貰っておいてそれは無いだろう!？」

まあいいか、コーンスープだろうと何だろうと暖かければそれでいいや。ちよつと不満だけど。

「コーンスープの缶ってコーンの粒が出てこなくてイライラするよね?」

「あー、小夜ちゃんわかる! スゴくわかる!」

小夜と麻美子の話を聞いて、私は昔の恥ずかしい記憶を思い出した。どうやら小夜も同じ事を思い出したらしく、口止めする前にペラペラと喋り始めた。

「那奈は昔にコーンを無理して取ろうとして、指が缶の穴から抜けなくなっちゃった事あったよね?」

「コラ小夜! 余計な事をペラペラ喋るな!」

「エヘヘッ!」

捕まえて頭を叩こうとした私に対して、小夜はニコニコと笑いなが

ら辺りを逃げ回った。

その姿を見て翔太と麻美子は声をあげて笑い、航と瑠璃は仲良く暖かい飲み物を二人で分けて飲んでいた。

空気が澄んでいて良く見える綺麗な星空。まだまだ夜は寒いけど、間違いない春はもうそこまで来ている。

## 第13話 Children's World

先輩達の卒業式も終わり、時間割も半日授業に変わって私達の終業式も間近になってきた。あと数日で私達も中学二年生だ。

「んまあ、そんな事はどうでもいいんだわ、どうでもな」

私の父親、虎太郎が家に帰ってきて私と翔太の前で昼食の出前の井をガツガツと口にかき込んでいる。

「親父さん、大事な話って何ですか？」

「あのなあ、今週か来週か再来週かそのまた来週かの日曜日」

「……それっていつよ？」

相変わらずいい加減な話。何が大事な話なのかサッパリわからない。しかし父さんはそんな事も気にせずに口に食べ物が入ったまま翔太に喋り続ける。

「国際、国内、つーか全ての主要ロードチームの合同開催で今年のニューマシンのテスト及び御披露目をやるんだがな」



「……何か、凄そうなイベントですね……」

「翔太、お前も参加しろ、これは命令だ」

「えっ、マジっスか？」

「うちのチームの今年の新型、お前に乗らせてやるよ」

「えっー！ 俺、乗っちゃっていいんですか！？ 大丈夫なんスか！？」

翔太の目がキラキラと輝いた。しかし、翔太の年齢でそんなバイクに乗っていいのだろうか？

「ヘルメット被っちゃえば誰が乗ってるかなんてわかりやしねえよ、ミニバイクだけじゃつまんねえだろ？ 今の内にホンモノってヤツを経験しとけ」

「……またそんな無茶な事をして大丈夫なの、父さん？」

「それにな、今回は各メーカーのお偉いさん達も見に来る、今のうちに『風間翔太』の名前をあちこちに売り込んどけ、順調に行けば二年後には全日本戦デビューなんだからな」

「……はい、わかりました……」

私の話なんか全然聞いちゃいない。全く、バイクのどこがそんなに楽しいのやら。

「話によるとな、あの『悪魔』も久し振りに日本に帰って来るらしいぞ」

「……親父さん、悪魔ってまさか……！」

「……母さん！？」

「……悪魔でわかるのか、お前らもヒドい奴らだな、あれでもとりあえずは俺の嫁なんだぞ？」

「……父さんが一番、悪魔、悪魔って言ってない？」

『悪魔』ねえ、母さんもヒドいニツクネームをつけられたもんだ。しかし本当に周りの人達から怖がられているのは確かだけど。

「えー、なにに？　麗奈ママ帰って来るのかい？　それじゃアタシ達も一緒に行きたいなあ、久し振りにあの凍てつく様な毒舌を聞きたいよ」

母さんの話を聞いたお姉が食後の歯磨きをしながら部屋に入ってきた。凄い地獄耳だ。

「怖いもの見たさか、まあ好きにしろ、つーか優歌、暇なら午後から仕事手伝え」

「悪いけどあたし、バイクの免許なんか持ってねーし」

「自力で走って配れ、あるいはチャリンコに乗れよ」

「お断りだね、アタシもそろそろ試合が近いんだ、不毛な労働は御免だよ」

食事制限をしたり夜中にランニングをしたり、最近体が引き締まってきたのはそういう事だったのか。その割にあれだけのお菓子をたった一人で……、ってその話は後でいいか。

「……試合ねえ、大きな怪我しない様にしてよ、お姉」

「おう、任せろ、きつちり無傷で仕留めてやるよ」

「人をぶん殴って金貰える、全くもっていい商売だなあ、優歌」

「ホント、アタシにとったらこんな天職他に無いよ」

「……何、この親子の会話……？」

食事を終えた父さんとお姉は嵐が通り過ぎる様に家を出て行った。まあちょうどいい、こちらも予定があるので都合だ。

私達今日、昼から遠藤医院の近くの公園でちよつと早いお花見をやる予定だ。まだ桜は八分咲きだけど、満開にもなると他の花見客でごった返す可能性が高い。

そうなると瑠璃が人ごみを怖がってしまうかも知れないので、いっそ人の少ない今の内にやってしまおうという魂胆だ。

駅で翼、千夏、薫と待ち合わせて、現地で麻美子、航、瑠璃と合流する。時間のロスも無い賢い待ち合わせ方だ。

「なぐんて話をしたらオカンに岬を押し付けられたわ……」

「おーはなみー！ おーはなみー！」

よそ行きの可愛い服を着た岬がガツクリと肩を落とす姉の手を取って元氣良く振り回している。保護者とは常に大変な仕事だ。

「いいじゃない翼、たくさんいた方が楽しくていいわよ、ねえ、みータン！」

「……他人事やと思うて気楽やなあ、千夏は……」

千夏が落ち込んでいる翼の頭を撫でていると、後ろから小夜が駆け寄り岬の空いている方の手を取って優しく話しかけた。

「ねーねーねー、みータン！ あのね、向こうに着いたらみータンに新しいお友達を紹介するから仲良くしてあげてね！」

「おともだちー？」

「うん、瑠璃ちゃんって言うの！ ちょっと色々あって恥ずかしがり屋さんだから優しくしてあげてね！」

「うん！ 小夜ねーたんのおともだちならみータンもなかよくするー！」

岬は嬉しそうに笑ってピョンピョン飛び上がった。岬を見ていると、瑠璃も普通の生活が出来ていれば同じ様に元気に遊んでいたのにな、とちよつと残念な気持ちになってしまう。

「そうだねえ、みータンなら瑠璃ちゃんと年も近いし、仲良くなれそうですなあ」

「……薫にみータンって言われるとめっちゃ腹立つわ……」

「瑠璃ちゃんにとってもいい刺激になるかもね、翼、岬を連れて来たの正解だったんじゃない？」

「まあな、翔太に言われんでもウチはちゃんとそこまで考えて連れて来たんやで」

「今さっき押し付けられたって言ってたクセに」

「覚えてへんなあ、何の話やねん千夏？」

公園に着くとやはりと言うかさすがに時期が早過ぎて花見客なんて全くないかった。しかし桜はかなり咲いていて、公園一面鮮やかなピンク色に染まっていた。

「W o h ! V e r y v e r y b e a u t i f u l !」

「わー！　きれーい！」

桜を自分の目で初めて見る千夏はうつとりと桜の花を見つめ、見慣れている筈の小夜も公園内を嬉しそうにグルグルと走り回った。両極端な反応だ。

「……思ってたよりも結構咲いてるな……」

「……最近、暖かくなってたから一斉に咲いたのかな？」

翔太と話しながら公園の奥の広場に行くと、麻美子と瑠璃をおんぶした航、それと眼鏡をかけた見慣れない男性がいた。

眼鏡という事でこの前音楽室で会った井上さんかと思ったが、よく見ると違う人の様だ。

「瑠璃ちゃん！　来たよー！」

小夜の声に反応した瑠璃は、航の背中から落ちそうなくらいに乗り出して小夜に手を伸ばした。

「……………瑠璃、落ちるから暴れるな、落ち着け」

必死に手を伸ばす瑠璃を落ち着かせて、航は駆け寄ってきた小夜に瑠璃をゆつくりと手渡した。

「ほら瑠璃ちゃん、言った通りでしょ？　綺麗なお花が咲いたでしょ？」

瑠璃を抱き上げ一緒に桜の花を見上げる小夜の元に麻美子がニコニコ笑いながら歩み寄り、嬉しそうに話しかけた。

「小夜ちゃん待ってたよ！　今日、晴れて良かったね！」

「うん！　桜、いっぱい咲いたね！　スゴく綺麗だね！」

すると、麻美子達と一緒にいた男性が軽く会釈をして私達に歩み寄ってきた。白いワイシャツに薄い色のジーンズ、若者の定番の格好だ。

「どうも、皆さん初めまして」

「……どうも、初めまして……」

初対面の挨拶を終えると、麻美子があたふたしながら私達と男性の間に入り込んできた。

「あ、あ、あの、この人、神崎彰宏さん！ お父さんの大学の後輩でお医者さんなの！」

遠藤先生の後輩だったのか。それにしても結構若そうだ。年齢は見たところだいたい二十代前半だろうか。

それより何より、何か急に麻美子に全く落ち着きが無くなったのが物凄く気になる。

「いやいや、まだまだ医者なんて名乗れるレベルじゃないよ、見習いみたいなもんさ」

「……彰宏兄ちゃんはお母さんとも昔から知り合いで、私にとってお兄さんみたいな存在で……」

「えっ、お医者さんなんですか？ もしかしてえ、もう彼女とかいらっしやるんですかあ？」

「おっ、早々に小悪魔モード全開やな、千夏」



セレブの嗅覚か、医者と聞いて千夏が麻美子を突き飛ばし彰宏さんに対していきなりプッシュを開始した。紹介を途中でブチ切られた麻美子の眼鏡が一瞬で曇った。

「ハハハ、残念ならいないよ、そんなヒマが無くってね」

「えっ、そおなんですかあ？ お忙しいんですねえ、じゃあ、もし良かったら」

「で、で、あのですね！ 彰宏兄ちゃんには保護者としてお花見に参加してもらおう事になりました！」

今後は麻美子が千夏を突き飛ばし途中だった説明を始めた。

「……麻美子、何で急にそんな大声になってんの？」

「……いや、別に深い意味は……」

「あー！ そうだ！」

狼狽する麻美子をよそに、小夜は瑠璃を航の腕に渡すと翼の横にいた岬の手を引いて瑠璃の前に連れていった。

「瑠璃ちゃん、今日は新しいお友達と一緒に連れてきたよ！ み・さ・きちちゃんって言うの！ みータン、挨拶してあげて！」

「こんにちはー！」

「……………瑠璃、何でもいいから返事をして」

航の声を聞いて、瑠璃は航にしがみつきながら岬に向かって照れくさそうに小さく手を降った。しかし、それを見た岬は不思議そうに首を傾げ、翼の袖をクイクイと引っ張った。

「おねーたん、この子どーしてあいさつできないのー？」

「コラ岬！ 言葉を慎まんかい！」

岬を怒鳴りつける翼を押しつけて、小夜は岬の前しゃがみ込み両手を握って優しく説明をした。

「あのね、瑠璃ちゃんは訳あってお喋りが出来ないの、でも仲良くしてあげて？ みータンなら出来るよね？」

「……………うん！ るりタンよろしくね！ みータンだよ！」

岬は瑠璃に向かって手を伸ばして握手を求めた。

「……………ほら瑠璃、手を出して」

航に言われて瑠璃は恐る恐ると手を伸ばし岬と握手した。

「わーい、おともだちー！ おともだちー！」

「良かったねー、瑠璃ちゃん！ 新しいお友達出来たね！」

新しい友達が増えて岬と小夜は大喜びした。しかし岬が握手した手をブンブン振り回すので瑠璃はちよつと怖がっていた。

「すまんなあ、航、コイツちよつと態度がデカいかも知れんけど堪忍してや」

「……………いや、大丈夫、お姉さんを見ればわかる」

「何やとゴラァ！」

兄妹揃って全く性格が正反対だが、まあ上手くやってくれるだろう。それにしても微笑ましい光景だった。何か見ていて心が暖かくなった。

「じゃあ、さっそくお花見といこうか、休憩所にマットを引いて場所を取っておいたから、みんな適当に空いてる所に座ってよ」

彰宏さんは公園の端にある休憩用のテーブルと長椅子を確保してくれていた。確かにいい場所だ。

「わーい！ おはなみー、おはなみー！」

「わーい！ お花見ー、お花見ー！」

小夜と岬はすっ飛んでテーブルへと走って行った。

「……随分と元気な子達だね……」

その無邪気すぎる姿に彰宏さんはさっそく呆れた様に呟いた。このメンバーの保護者を買って出るとは、知らなかったとはいえ不幸な人だ。

「椅子に座り切れない人は下にもマットを轢いたからそこに座つてよ」

「……誰がマットに座るかはわかってるわよね？ まさか女子や子供や年上の人に下に座らせようなんて思っただけよね？」

「……俺達なのね……」

翔太と薫をマットに座らせて、私達は各自それぞれ持ち合わせた食べ物や飲み物を出してテーブルに広げた。

「うわー！ 麻美ちゃんのお弁当スゴい！ 全部麻美ちゃんが作ったの？」

「……お母さんが前に作ってたのを真似して作ってみたんだけど、皆さんのお口に合うかなあ……」

「大丈夫、スゴく美味しそうだよ！ これなら麻美ちゃんはいつでもお嫁さんになれるね！」

「……そんな、小夜ちゃん、お嫁さんだなんて……」

今日の麻美子は随分と気合いは入っている。お弁当といい、見慣れない可愛い服といい、いつもの麻美子とは一味違う。

「良かったな、麻美子、みんなに誉めてもらって」

「……えっ、そんな、彰宏兄ちゃん、あの……」

「でもあー、料理は見た目だけじゃダメよねえー、やっぱり味が美味しくないかねえー？」

「……………」

再び麻美子の眼鏡が曇った。何かヤバい、今日の麻美子と千夏の間は女同士の火花がバチバチあがっている。

「……千夏もやな女やなあ、怖っ……」

「それではこの薫ちゃんが黄金の舌でもってお味見を！」

「あっー!!」

「モグモグモグ、うん！ 頂きました、星三つですっ！！ ウハッ！」

「わーい！ 星三つだよ麻美ちゃん！ 何だっけ？ ミシ、ミス、ミシュ、えーと、ナントカガイドで紹介されるよ！」

「……本当は一番最初は彰宏兄ちゃんに食べて欲しかったのにな……」

麻美子が残念そうにポツリと呟いた。頑張っ作つたのに、よりによつて一口目が薫とは可哀想な麻美子……。

「ところで何や、那奈と翔太は手ぶらで来たんかい？ 食うだけ食つて帰るなんてヒドい話やなあ？」

「持つて来るつもりだったの！ 昨日買い物までして準備してたんだから！」

「ほなら何で今日のこの日にそれが無いねん？」

「……食べられた……」

「えっ、何やて？」

「……昨日、お姉に全部食べられた……」

十人分近く用意していたお菓子をたった一夜でペロリと平らげられてしまっていた。何が食事制限だ、あの大怪物……。

予定よりもお菓子の量は減ってしまったが、花より団子とは良く言ったもので私達は桜そっちのけでしばらく食事と会話に没頭していた。

岬も元気良くおにぎりを頬張り、瑠璃も航の膝の上で少しではあるがお菓子などを食べていた。

「神崎先生は普段大きな病院に勤めてらっしゃるんですかあ？」

「うん、和夫さん、つまり麻美子のお父さんが昔勤めていた病院にいるんだ、本当は自分の病院を継ぎたかったんだけどね……」

「……彰宏兄ちゃんのお父さん、大きな病院の院長さんだったんです……」

彰宏さんと麻美子の表情から笑顔が消えた。何か訳ありの様だ。

「……その病院で何かあったんですか？」

「……汚職事件があつてね、父さんも関わつて、院長の座を追われたんだ……」

しまった、聞くんじゃなかった。今更ながら私は自分の行動を後悔した。

「……何か、余計な事聞いちゃいましたね、すみません……」

「いや、いいんだ、自業自得だからね、父さんが医療の世界を汚してしまった分、今度は僕が頑張つて患者さん達の信用を取り戻したいんだ」

「……何かステキですう……」

話を横で聞いていた千夏が視線キラキラモードで彰宏さんにぴったりに寄り添ってきた。もちろん、隣では麻美子が眼鏡を曇らせて殺気をビンビン飛ばしている。

「……で、で！ 彰宏兄ちゃんは一生涯懸命勉強頑張つて、お医者さんになつたんです！」

「……だから何で大声なの？」



「……もう那奈さんもいちいち聞かないで下さい……」

「薫ちゃん、もう一個麻美ちゃん製おにぎり食べまーす!」

「もーう!薫君、食べ過ぎです!」

ドンッ!……!

「ぐえつつつ!」

力加減無く麻美子に突き飛ばされた薫は一直線に桜の木にすっ飛んだ。その弾みで桜の木から花びらが一枚、ひらひらと瑠璃の鼻の上に落ちた。

「アハハ! 瑠璃ちゃんの鼻の上に桜の花びらが乗ってるー! 可愛いー!」

「……………ほら瑠璃、桜の花びらだよ、キレイだろ?」

「……………?」

航は瑠璃の鼻から花びらを取って瑠璃の手のひらに置いた。花びらを手渡された瑠璃は物珍しそうにジッと見つめていた。

「瑠璃ちゃん、これが桜の花びらだよ！ さ・く・ら！ ピンク色で綺麗でしょ？」

「……？」

「ほら、裏も表もピンク色！」

小夜が瑠璃に花びらの裏側を見せようとした時、小夜の肘がジュースのペットボトルに当たって倒れてしまい中身がドバドバと流れ出した。

「キャッ！ ヤダ、小夜冷たい！！」

「何をしとんねんなオマエは！！」

「小夜！ しっかりしなさいよ、全く！！」

「……ごめんなさい……」

立派なお姉さん役を演じるつもりだった小夜は私達に怒られて背中を丸めて小さくなった。少しは成長して大人しくなったと思ったのにね……。

気がつくと次第に空も真っ赤に暮れ始め、公園内の電灯がポツポツ点きだした。夜桜見学は私達にはまだ早い。

「……さて、もうお開きかな、そろそろ帰る準備をしようか？」

彰宏さんの締め言葉に合わせて、私達はゴミの片付けを始めた。せつかくこんな近くにお花見スポットがあるんだから綺麗にしておかないと。

「ちゃんとゴミ片付けてよ？ 忘れ物無い様にね？」

「那奈に言われんでもわかつとるわ、お〜い岬、片付け終わったらもう帰るで〜」

「……う〜ん……」

「あらっ、みータンもうお眠かしら？」

翼と千夏が椅子に座っている岬の顔を覗き込むと、小さい頭をこっくりこっくりと揺らしてウトウトしていた。これでは自力で歩いて帰るのは難しそうだ。

「よーし、じゃあ薫お兄タンがみータンをおんぶしてあげよう！」

「失せる変質者、警察呼ぶで？」

「ウソお〜ん、ひでえ〜よ！」

「あー、楽しかったね瑠璃ちゃん！ またお花見しようね！」

「……………」

小夜の問いかけにも反応せず、航におんぶされた瑠璃は手に何かを持ってジッと眺めている。

「瑠璃ちゃん、それなーに？」

「……………さっきの桜の花びらだよ」

「……………気に入ったのかな？ 凄い興味津々みたい……………」

桜の花びらに異様な興味を示している瑠璃を見て、小夜と麻美子は嬉しそうに笑っていた。

「……………しかし、和夫さんの言ってた通りだね、瑠璃ちゃんは状態はいい方向に進んでいるみたいだ」

瑠璃の変化に彰宏さんも嬉しそうに航の肩をポンと叩いた。

「航君、良かったな、いっぱいいい友達に巡り会えて」

「……………はい」

私達は自分達のゴミを片付けて、桜咲く公園を後にした。また来年もここでお花見したいな。元気になった瑠璃と一緒に……。

私はそんな事を考えていた。この後に起こる想像を遥かに超える出来事を予想もせずに。

## 第14話 Sign

みんなで楽しく喋って笑ったちょっと早いお花見会。家に帰ってきても瑠璃はまだベッドの上で公園で拾った桜の花びらをジッと眺めていた。

「……随分と夢中だな、こんな姿は私も初めて見たよ」

「和夫さん、瑠璃ちゃん桜を見た事は無かったんですかね？」

「じつくりと見た事は無いんだろうな、あの様子だと」

瑠璃に気づかれない様に、遠藤先生と彰宏さんは部屋の外から瑠璃の反応を伺っていた。そして瑠璃の変化に併せる様に、航も心を開いて遠藤先生に昔にあった出来事を打ち明けた。

「……………昔、俺達が住んでいた家の近くに桜の木がありました」

「それは初耳だな、いつの話だ？」

「……………瑠璃が生まれてすぐです、でもその後、家は借金のかたに取られました」

「……………そうか、普通なら覚えて無いだろうが、何か記憶の片隅に桜

の花が残っているのかもしれない……、航、話してくれてありがとう」

「……………いえ」

「…………でも良かったです、久し振りに航君と瑠璃ちゃんに会って、二人とも元気そうで、良い友達にも恵まれてるみたいだし…………」

彰宏さんの言葉に、航は照れくさそうにちょこんと頷いた。すると、廊下をパタパタとスリッパが歩く音が聞こえてきて、階段の下から美代子さんと麻美子が顔を出した。

「和夫さん、お食事の準備が出来ましたよ、もし良かったら彰ちゃんも一緒に食べて行つて頂戴？」

「彰宏兄ちゃんの好きなお魚焼いたんです！」

「…………えっ、い、いや、その、俺は…………」

「もし時間があるなら食べて行けよ彰宏、多分お前の分も作ってしまつたんだろうしな」

遠藤家からの誘いに、彰宏さんは困つた様に指で耳の裏を掻いた。

「そつよ彰ちゃん、麻美子が一生懸命作つたんだから食べてあげて？」

「……ちょ、ちょっとお母さん……」

恥ずかしがって服を引っ張る麻美子を見て、美代子さんは嬉しそうに笑った。

「……それじゃ、お言葉に甘えて、頂きます」

根負けした彰宏さんは申し訳なさそうに頭を掻きながら階段を降りた。その姿を見てニコツと笑った美代子は二階にいる航に対して優しく話しかけた。

「航ちゃんと瑠璃ちゃんのご飯、今、おばさんが二階に持っていくからちょっと待っててね？」

「………はい、すみません」

「……じゃあ彰宏、もう部屋に行って座ってるよ、ほら麻美子、彰宏を案内してやってくれ」

遠藤先生はどうしていいかわからずキョロキョロとしている彰宏さんともじもじしている麻美子をけしかける様に声をかけると、その声を聞いた麻美子は驚き一瞬ピヨンと飛び上がった。



「あつ、は、は、はい！　あ、彰宏兄ちゃん、こ、こちらにどうぞ！」

「……うん、じゃあ失礼するね」

居間に入っていく麻美子と彰宏さんを見届けた遠藤先生は、航の方に振り返り、この前の鬼気迫った感じとは違って優しく表情をしながら語りかけた。

「……航、そろそろ下でみんなと一緒に食事しないか？　瑠璃ももう下に降ろしても大丈夫だろう？」

「……はい、じゃあまた近い内に」

「……そうか、わかった、約束だぞ」

遠藤先生は航の言葉を聞いて、安心した様に笑顔で頷いて一階へと階段を降りていった。

そして、部屋に戻った航はまだベッドの上で桜の花びらを見つめている瑠璃を抱きかかえてテーブルの横にある食事用の座椅子に座らせた。

座椅子に座っても、瑠璃はまだジッと花びらを見ている。

「……瑠璃、もうご飯だよ、そろそろその花びらをそのテーブルに置いて……」

「……………ら」

「……………瑠璃？」

「……………よ」

「……………！」

その頃一階では麻美子と美代子さんが航達の食事を御盆に乗せて二階に運ぶところだった。

ご飯、味噌汁、煮物、漬け物、焼き魚…。いかにも日本食の王道だが、味噌汁はこぼすと熱そうだ。

「お母さん、大丈夫？ 私が持つて行こうか？」

「ありがとう麻美子、でもね、お母さんだつてまだまだ元気なんだから！ これくらい平気よ！」

二人は食事を運ぶには少々狭い階段を何とか上に登り、無事に航達の部屋に御盆をひっくり返す事なく到着した。

「航君、瑠璃ちゃん、お待たせ、ご飯よ、ってあら……………」

「……………二人とも、いない……………」

いつの間にか部屋から航と瑠璃の姿が消えていた。部屋に小夜から貰ったウサギとゾウのぬいぐるみを残して……。

遠藤家で起こっている出来事なんて知らずに、こちらの渡瀬家は家中が人でこった返していた。

「……あのさ、小夜のデカイ家ならともかく、何でアンタ達はこんな狭い家にみんなして詰めかける訳？」

「狭い家とはまたまたおもしろい御冗談を言ってくれますな、十分に広いがな」

「何かこれぞ一般的な日本家屋って感じいゝ、アタシは何かこういう家って超いい感じいゝ」

「奥の畳居間の襖が超いい感じって感じいゝ」

「何で薰までいるんだよ！ 翼も千夏ちゃんも何の用だよ！？」

そのまま電車に乗って帰ればいいのに、何を思ったかこのお喋り三人組はお花見をしたのテンションのまま私の家に転がり込んできた。勝手に家の中をドタバタ歩き回って、私と翔太からしたら迷惑この上ない。まるで動物園だ。

「まあまあまあ、細かい事はいいじゃないですか翔太の旦那、一度旦那のスイートホームをこの目でルッキングしたかったんだぜ！」

「那奈と翔太の愛の巣を一見したかったんやな、うんうんわかるわ  
かる」

「違うつつの！ さつさと帰れこの白アリ共！」

「いいじゃねーか那奈、こんなに素直でかわいい後輩達ならアタシ  
も大歓迎だぜ」

「そお〜ですよねえ、お姉様！」

お姉までもを巻き込んで、このくだらない祭りはどうも勝手に盛  
り上がっていく。しかし千夏のヤツ、うまくお姉に媚び売りやがっ  
て……。

「……岬もソファで爆睡してるし……」

「……しかもさあ、なぜかあづみ叔母さんまでいるし……」

翔太が座っている椅子の後ろで、あづみいづみ姉妹がちゃぶ台を挟  
んで仲良く向き合ってお茶を飲んでいる。

「皆さ〜ん、お今晚は〜」

「私達がくつろいでいたのに翔太達が勝手に押し掛けてきたんでし  
よ？ 私とあづみ姉さんのせいじゃないわよ！」

「ねーねーねー、お母さん！ 今日ねー、桜がとても綺麗だったんだよ！」

「あらー、良かったわねー、小夜ちゃん、お母さんもお桜見たかったわー」

トドメに小夜まで加わってもう戦場だ。盆と暮れと正月とクリスマスとゴールデンウィークと閏年と世紀末が一遍にやってきたかの様だ。

ブルルルルル……

ただでさえドタバタの部屋の中に、まるで空襲警報の様にうるさい電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「もう！ お次は何よ！」

「虎太郎ちゃんだったりしてな、ウツヒヤッヒヤッヒヤッ！」

「もう止めてよ、お姉も！」

「ちょっと！ 翔太か那奈か電話取ってよ！ 私とあづみ姉さんは電話から遠い所にいるんだから！」

「……はいはいはいはい！」

いづみさんにあづみさんにお姉に小夜に翼に千夏に薫にあーもう頭痛い！ これで電話が父さんだったら気が狂いそう！

電話に出ようとしていた翔太を思い切り突き飛ばし、私は半ばキレ気味で受話器を取った。

「……はい、もしもし？ 渡瀬ですけど？ どちら様！？」

「……あ、あ、あの、すみません、私、遠藤と申しまして……」

「……麻美子？ 何よ、どうしたの？」

「……あつ、那奈さん？ 良かった、小夜ちゃんの家で電話しても誰も出なくて……」

「何、どうしたのよ？ 何をそんなに慌ててるの？」

「……航君が、航君と瑠璃ちゃんが、突然いなくなっちゃって……」

「……航と瑠璃がいなくなっただけ！？」

突然の大声に、それまでどんちゃん騒ぎをしていた全員が黙り込んで心配そうに私を見ていた。

特に一番驚いていたのは小夜で、手に持っていたガラスのコップを落として割ってしまうほどの狼狽ぶりだった。

「……俺達も航達を捜そう！」

翔太の一声にみんなが立ち上がった。お姉達に家の留守番を頼んで、私達は遠藤医院へと急いだ。出来れば焦っている小夜は家に置いて行きたかったのだが、説得しても全く言う事を聞かず強引についてきてしまった。

「…………瑠璃ちゃん…………」

電車の中でも小夜に落ち着きは無かった。クリスマスの時にお互に分け合ったウサギのぬいぐるみを手に持ち、ソワソワと外を眺めていた。

「…………小夜、大丈夫だから、落ち着いて」

「…………うん、でも…………」

私の声は今の小夜には届いていないかも知れない。それくらい小夜は冷静さを失っている。

「そうやで、今ここで小夜がそわそわしたってしゃーないやろ？」

「航と一緒にんだから、大丈夫だって！ シャキツとしろよ小夜！」

「瑠璃ちゃんが一人でいなくなったって言うんならマズいかも知れ

ないけどねえ？」

「薫ちゃんの言う通りよ、二人でちょっと夜の散歩に行ってるだけかも知れないし、ねっ？」

みんなで沈み込んでいる小夜を励ましたが、元気になるところか余計にうつむいてしまった。

「……小夜、大丈夫だよ、遠藤先生や彰宏さんが捜してくれているらしいから、すぐに二人とも見つかるって」

「……でも、でも……」

もし、何かあったらそれは自分のせいかも知れない。本当は誰にも関わって欲しく無かったのに、自分は強引に二人の居場所に入り込んでしまったのかも知れない。

本当は不安で不安で仕方がない、自分がした事が正しい事だったのかどうかかわからない。気づかぬ間に、二人を傷つけてしまっているかも知れない……。

普段の会話から出てくる少ない弱気な言葉、不意に見せる困った様な表情、そんな小さな事からでも私は小夜の気持ちを理解する事が出来た。

勝手に部屋に入って航に怒鳴られた時、遠藤先生から昔の航と瑠璃の辛い過去を聞かされた時、純粋な小夜は航達の苦しみや寂しさを感じ取っていたのだろう。

そんな小夜を見て、私は昔の出来事を思い出していた。



「ヤダヤダヤダダー！」

「小夜ちゃん、どうして？ プレゼントもケーキもあって、お母さんや那奈ちゃんもいるでしょ？ なのにどうしてそんなに泣くの？」

「そうだよ小夜！ これだけいっぱい小夜の為に用意したんだよ！ 何が嫌なの！？」

「ケーキもいらない！ プレゼントもいらない！ おとーさんに、おとーさんに会いたい！ 会いたいよー！！」

何不自由なく、小夜の欲しい物は全て揃っていると思っていた。ただ一つ、仕事で帰って来れない父親に会いたい。幼い小夜は、そのたった一つの願いが叶わなくて塞ぎ込んでしまっていた。

『こんなの可哀想すぎるよ！』

あの日、電車の中で小夜が叫んだ言葉。もしかしたら小夜は、寂しくて心を閉ざしてしまった瑠璃と昔の自分を重ねて見てたのかも知れない。

同じ寂しい想いをさせたくなくて、小夜は一生懸命瑠璃に対して優しく接していたのかも知れない。

「……瑠璃ちゃん……」

小夜は駅に着くまでずっとウサギのぬいぐるみを抱きしめていた。まるで瑠璃を抱きしめる様に。

「麻美子！」

「……那奈さん！みんな！」

私達が遠藤医院に着いた時には夜の九時を回っていた。もちろん辺りはすでに真っ暗になっていた。

「航は、瑠璃ちゃんは、見つかったんですか！？」

「今、うちの人と彰ちゃんで見つけているんだけど……」

「いなくなったのは何時頃なの！？」

「ご飯前だから七時過ぎぐらい……」

翔太は美代子さんから、薫は麻美子から状況を詳しく聞いていた。二人も遠藤先生達と合流して探しに行くつもりなのだろう。しかし、二人がいなくなってもう二時間も経っている……。

「……あの、警察とかには……」

「何言うとんねん千夏！ 誘拐事件とちやうねんぞ！？」

「全ての可能性を考えなきゃダメだよ！ 出来る限り手を打たないと！」

「……まあ、そりゃそうやけどなあ、薫にマジで言われると何か調子狂うわ……」

「……おばさんは和夫さんと彰ちゃんが帰ってきたら通報しようかって思っているんだけど……」

相談し合っている私達とは離れて、ポツンと立ち尽くしている小夜を気遣い麻美子が手を握って励ました。

「……小夜ちゃん、大丈夫だよ……」

しかし、この緊迫した空気も相まって、小夜の表情はどんどん青ざめていく。

「……どうしよう、麻美ちゃん……」

「……小夜ちゃん？」

「……あたしの、せいだよ……？」

「……小夜ちゃん？ 違うよ、違うよ小夜ちゃん！」

「……あたしが、余計な事したから、二人とも、きつと嫌になって……」

「そんな事ない！ 小夜ちゃん、一生懸命頑張って瑠璃ちゃんに優しくしてくれたでしょ！？ 航君だって凄く喜んでたんだよ！？」

「……でも、でも、あたし……」

麻美子は目に涙を浮かべながら小夜を必死で励ましていたが、小夜の動揺は止まらない。もうダメだ、これ以上見てられない。

「小夜、小夜！ しっかりしなさい！」

「……だって、だって！」

「小夜！」

私の両手を掴んで、小夜はついに泣き崩れてしまった。その姿に二人を探す方法を相談していた翔太達も黙り込んでしまった。

「……航、どこに行ったんだ……？」

翔太が辺りを見渡すと、通りの向こうから遠藤先生が急ぐ様に早足

でこちらに歩いてきた。

「和夫さん！」

「お父さん！ 二人は見つかったの！？」

麻美子や美代子さんの問いかけに、遠藤先生は口を真一文字に結んで残念そうに首を横に振った。

「……ダメだ、見つからない。駅や繁華街の方まで捜してみたんだが……」

「……そんな……」

その言葉に、麻美子はガクツと膝を落として地面に座り込んだ。遠藤先生はそんな麻美子の肩を抱いて立ち上がらせると、意を決した様に私達に話しかけた。

「……そろそろ、警察に連絡しようと思っているんだが……」

警察。最後の手段を聞いた小夜は一瞬ビクツと反応した。

「……瑠璃ちゃん……」

「……小夜……」

その時、私達の沈黙を切り裂く様に診療所内の電話の音が真つ暗な夜空に響き渡った。美代子さんは急いで家に入り震える手で受話器を取った。

「……はい、もしもし、彰ちゃんなの！　どうしたの！？」

電話の相手はどうやら彰宏さんみたいだ。二人が無事でありますように、私は両手を握り額につけ必死で天に祈った。

「……えっ、見つかった？　二人とも見つかったの！？」

その言葉を聞いてみんなの緊張が一気に緩んだ。翼と千夏はその場にヘナヘナと座り込んでしまい、受話器を持っていた美代子さんもぐったりと廊下に座り込んでしまった。

「和夫さん！　みんな！　見つかったわよ！　二人とも無事だったよ！」

「……そうか、良かった、彰宏に感謝しなくてはな……」

「……心配させやがって、アイツ……」

「……もう懲り懲りだよ、こんな騒ぎは……」

翔太と薫もさすがに疲れたみたいで、二人揃って膝に手をつき大きな溜め息をついた。

「……良かったね、小夜ちゃん……」

「……小夜……」

小夜の顔からやっと緊張感が抜けた。麻美子是小夜の隣りで泣き崩れ、私は優しく小夜の体を抱きしめてあげた。

「……で、彰ちゃんは今どこにいるの？ えっ、公園？」

美代子さんが電話で彰宏さんから聞いた公園。私達は航達を迎えにあの桜の咲く公園へと向かった。

「……あっ、いた！ みんな、いたわよ！」

「おったおった、おったでー！」

普段はこういった事に無関心な翼と千夏が先立って公園内に走って

いった。今回はさすがにみんな必死だった。

「……小夜、ほら、二人ともいたよ……」

「……瑠璃ちゃん！」

公園の真ん中にある大きな桜の木の下に、彰宏さんと瑠璃をおんぶした航が立っていた。

「………みんな」

「……さあ、航君、みんなに見せてあげて」

私達の前で、航は瑠璃を抱えてゆつくりと地面に下ろした。手を離された瑠璃は、そのまま地面に座り込んでボツーとしている。突然の事で驚いた私達は、小夜を先頭にすぐさま瑠璃の元へ駆け寄ろうとした。

「……瑠璃ちゃん？　瑠璃ちゃん！」

「おい！　何やってんだ航！？　瑠璃ちゃんはまだ歩けない……」

「……えっ？　ちょっと待って翔太！」



次の瞬間、私達の周りの時間が止まった。まるで夢の様な奇跡が起ったのだ。

「……瑠璃、ちゃん？」

「……小夜、小夜！？」

「……小夜、見てみるよ小夜！？」

その信じられない光景に、私達の後ろにいる四人もその場に立ち尽くしていた。

「……ウソでしょ……」

「……なんや、コレ……」

「……奇跡だ、奇跡だよこれは！」

「……瑠璃ちゃんが、瑠璃ちゃんが、歩いてる……」

ゆっくりと立ち上がり、おぼつかない足取りながら、瑠璃は一步步ずつこちらに向かって歩いてくる。暗くなつた公園内に街灯の明かりが入り込んで、その姿はまるでステージのスポットライトに照らされている様だった。

「……瑠璃ちゃん、瑠璃ちゃん！」

小夜は近くまで駆け寄り、瑠璃に向かって手を差し伸べた。

「瑠璃ちゃん、頑張って！　おいで、頑張ってここまでおいで！」

小夜の呼び掛けに答える様に、瑠璃は少しずつ、少しずつ小夜に向かって近づいてくる。

「……頑張れ、頑張れ瑠璃ちゃん！」

「……神よ、我らに奇跡を……！」

翔太と薫が必死になって祈った。

「……もう少し、もう少しや！」

「……やだ、もうアタシ見てられない……」

「……頑張って、瑠璃ちゃん……」

翼も千夏も麻美子も一生懸命願った。

「小夜！ 瑠璃の事をちゃんと受けとめてあげて！」

私は小夜の背中を涙を流しながら全力で支えた。

「瑠璃ちゃん、もう少し、もう少し、おいで、おいで、おいで！」

そしてついに、瑠璃は小夜の手の中にたどり着いた。

「瑠璃ちゃん！」

「やったあ！」

「よっしゃー！」

みんなが一斉に飛び跳ねてハイタッチをした。この喜びはとても言葉だけでは表せないものだった。

「……やった、やったよ小夜……」

「瑠璃ちゃん！ スゴいよ、スゴいよ！ 頑張ったね、ホントによく頑張ったね……」

小夜は涙をポロポロ流しながら瑠璃を抱きしめ、私も泣きながら二人を抱きしめた。麻美子も千夏も、涙を堪えきれずに号泣していた。

「アホ！ 何で千夏が泣いてんねん！」

「……だって、だってこんなの……」

「……でも、良かった、本当に良かった……」

翔太が小夜の肩をさすっていると、瑠璃が小夜の顔の前に両手を差し出した。

「……どうしたの、瑠璃ちゃん……？」

瑠璃はその手を静かに広げた。その小さな手の中にはこぼれ落ちそうなくらいのたくさんの桜の花びらがあった。

「……瑠璃、ちゃん？」

小夜が瑠璃を見つめると、その時、小さい口がゆっくりと開いた。

「……た、よ……」

「……………」

確かに聞こえた。私達全員、確かに聞いた。瑠璃の声を。

「……おい、みんな聞こえたか……………」

「……やだ、翔太君、ウソでしょ……………」

「……ウソじゃないよ千夏ちゃん！ 喋ったよ、今喋ったよ！」

「……聞こえた、『た・よ』って確かに言っただ！ なあ、麻美子！」

「……もしかして、もしかしてそれって……………」

そう、瑠璃が覚えた最初の言葉。私達の会話を聞いて覚えた一番大好きな人の名前。

「……小夜、アンタだよ！ 『さよ』って言ったんだよ！ 瑠璃は今、アンタの名前を呼んだんだよ！」

小夜は何が起こったのかわからずに茫然としていた。そんな小夜に聞いて貰いたいかの様に、瑠璃は一生懸命言葉を喋り続けた。

「……た、よ、た、く、ら……」

「……さくら……?」

しっかり聞き取れる。瑠璃の声を。私達は耳を澄ませて瑠璃の言葉を聞き漏らさずに受け止めた。

「アンタが教えた言葉だよ！ アンタが瑠璃に言葉を喋らしたんだよ！ 小夜!!」

「……う、うう、うわーん!!」

小夜は瑠璃を抱きしめたまま号泣した。私も人目をはばからずに小夜と一緒に泣き崩れた。

「……た、よ、た、く、ら……」

間違っ てなかった。小夜の気持ちはしっかりと瑠璃の心に伝わっていた。瑠璃は、その感謝の気持ちを行動と言葉で表してくれたのだ。

「……何という事だ、信じられん……」

「……あるんですね和夫さん、本当にこんな事が……」

遠藤先生は彰宏さんと航の元に歩み寄り、その奇跡の瞬間を見届けていた。

「……航、どうしてここに瑠璃を連れて来たんだ……？」

「……いっぱい、見せてあげたくなっただんです、瑠璃に桜を……」

遠藤先生の問いかけに、航は桜の木を見上げながら嬉しそうに答えた。

桜の満開にはまだ早いこの日、私達には忘れる事が出来ない記念日になった。

## 第15話 友とコーヒーと嘘と胃袋

桜の木の奇跡から数日後、私達は無事に中学二年生になった。教室も担任もクラスメイトも一新、私も心機一転で新年度に望もうと思つてドキドキしながらクラス分け表を見たらもうガツカリ。

「……………何でこうなるの……………」

「那奈、元気ないよー？ どうしたのー？」

まだいまいち慣れなくて違和感のある椅子に座り机に膝をついてグツタリしていると、毎日見慣れている脳天気娘が私の顔を覗き込む。

「……………小夜、アンタは別にいいのよ、アンタと同じクラスになるのは毎年のお約束だから、でもね……………」

小夜がいるのは想定内。問題は私と小夜以外に名簿に書かれていた残りの名前。

「……………何でアンタ達とも一緒のクラスにならなきゃいけないの!？」



見事にメンバー勢揃い。翼、千夏、麻美子、航、薫、翔太……。まだ新学期始まって一日目だっていうのに、私の周りには人の輪が出来る上がっていた。

「ええやないか別に、愉快で楽しい一年間になるで〜！」

「ど〜せ帰りはみんな一緒に帰るんだしい〜、これならわざわざ待ち合わせしなくて済むじゃない？」

「これからは授業も一緒に受けられるね、小夜ちゃん！」

「やったねー！これからも学校終わったら麻美ちゃんの家遊びに行つていい？」

「もちろん！……でも小夜ちゃん、井上さんのスタジオに行くのも忘れないでね、何か小夜ちゃん、すでに私のピアノの事を忘れてそうで……」

「ねーねーねー、航くん！またお家に行ったら瑠璃ちゃんと遊んでいーい！？」

「……………どうぞ」

「わーい、やったー！」

「……………やっぱり忘れてるよね……………」

私の視界の右側で女子軍団のやかましい喋り声。そして左側にはむ

さ苦しい大、中、小のズツコケ三人組。

「……………天井が狭い」

「…前の教室と変わってないでしょ？ 航の背が伸びたの！」

「しかしこういう事って本当にあるんだなあ、ビックリしたよ」

「…………私はガツカリだよ、翔太だけは一緒のクラスになりたくなくなつたのに…………」

「またウマい事言っちゃって！ こうなつたからには一年間、寂しい思いはさせませんですよ、お嬢！」

「だから誰やお嬢って！？ 私の事！？ 変なあだ名勝手につけないでよ！ つーか何で薫達の話に私がいちいち合いの手入れなきやいけないのよ！？」「」

二年三組、多分世界で一番うるさくて迷惑なクラスだろう。担任になる先生の体調が心配だ。一年間保つだろうか？

ただでさえ帰り道だけでもやかましいのに、これからは授業中まで毎日このメンツと顔を合わせなければならぬとは…………。

「…………特に翔太！ もう一度言うけど、よりによって何でアンタと一緒にのクラスにならなきゃいけないの？」

「ハア？ 俺？ 何でだよ？」

「朝は家で昼は学校で家に帰って夜寝るまで、何で一日中アンタの顔見て過ごさなきゃならない訳？ 冗談じゃないわよ……」

「何だそれ！ 俺だって同じだよ！ こっちだって別に好きで那奈と同じクラスになった訳でもねーし、好きで一緒に住んでる訳でもねーよ！」

「じゃあ出て行きなさいよ！？ アンタのウザい顔をこれ以上見たくないの！」

「それは母さんに言えよ！？ 母さんがあの家に住むって言ったから俺も一緒にいるだけだよ！」

「じゃあアンタだけ出てけばいいじゃない！ いづみさんは別に関係無いんだし！」

「ハア！？ 関係無いって何だよ！ だって俺は……！」

私達の口喧嘩を邪魔する様に、翼が後ろで私の髪をクイクイと引っ張る。うつつしい、一体何なのよ！？

「……ご兩人、注目されてまっせ」

「……えっ？」

翼に言われて教室内を見渡すと、椅子から立ち上がっているのは私

と翔太だけで、クラスメイト全員の視線がこちらに集中していた。

……ヒソヒソ、ヒソヒソ……

「……ねえ、あの二人って何……？」

「……一緒に住んでるとか言ってるぜ……」

「……付き合ってたのかな……？」

「……中学生なのに同棲ってちょっとヤバくねえ……？」

廊下からも別のクラスの生徒達が開いている扉や窓からこちらを見  
ていた。初日からいきなり大量の人間に変な誤解をされてしまった  
様だ。

「……あ、あの、騒いですいません……」

「……皆さんどうぞ、お気になさらずに……」

私と翔太は真っ赤になって静かに席に座った。周りを見ると、さっ  
きまで私を取り囲んでいた小夜達は何事も無かった様に自分達の席  
に座っている。薄情なヤツらだ。

始業式も赤っ恥をかいだホームルームも終わり、ドタバタだった中

学二年生最初の授業が終わった。半日授業だったっていうのに、すでに私は精魂尽き果てクタクタになっていた。

「……はあ……」

「那奈、大丈夫？ 今日一日ずっと元気ないよー？ 具合でも悪いのー？」

「……別に、疲れてるだけだから……」

それもこれも全部アンタ達のせいだけだね。グッタリしている私を後目に、残りの連中は楽しそうにこの後の予定について話しあっている。

「ねえ翼、何かこのまま普通に家に帰るのってつまんなくない？ どこかみんなでお茶しない？」

「それ、ええなあ！ セやったら千夏、どっかええ店知らん？」

「それなら私めにお任せを！ 素敵なお店をご紹介しますよぞぞ！」

「えっ？ 薫ちゃん、それってどんなお店なの？」

「珈琲と紅茶とケーキが美味しくて、海外情緒たっぷりの素敵なおみ・せ！」

「いや〜ん！ 何かもうそれだけでグラッて来ちゃう！」

千夏が体をクネクネさせて薫の言葉に反応した。

「薫、それだけ言うといて行った先の店のマスコットが舌出してるヤツやったらメチャメチャ怒るで？」

「ええ〜！？」

「オイオイ、ホンマに『不家』かい！？」

「うつそびよ〜ん」

「…………腹立つわ、コイツ…………」

スイーツとか隠れ家的とかロハス的生活などの女性誌の見出しに載っている言葉が大好きそうな二人は軽々と薫の誘いに乗った。しかし、私にはこれらのキーワードには全く興味が湧かない。子供の頃から父さんやお姉と一緒に牛井屋ばかり行っていたからだろうか。

「ねえねえ、小夜と麻美子も一緒にアタシ達とお茶しようよ〜？ ついでに航ちゃんも連れていっていいから！」

「えー？ でもあたしは早く瑠璃ちゃんの所に行きたいなー！」

「……小夜ちゃん、今日、瑠璃ちゃんは家にいないよ？　この前お家に来た時に小夜ちゃんにも話したでしょ？」

「……………市立病院に入院中」

「あつ、そうだった！　瑠璃ちゃん、病院でお泊まり検査中なんだよね……………」

麻美子と航が言った通り、あの日以降の瑠璃の容態は極めて良好で、月に一度大きな病院に入院して医学的検査を受けながら、専門家の教育指導を受けている。

歩く事や喋る事などの基本的な行動の成長はやはりかなり遅れているみたいだが、これからの治療と教育によつては年頃の子と変わらない生活が過ごせる様になれるらしい。

「たまには小夜も瑠璃ちゃんの事を忘れて自分が楽しまなきゃダメよ？　薰ちゃんオススメのお店がステキだったら、今度は小夜が瑠璃ちゃんを連れて行ってあげればいいじゃない？」

「うん！　じゃあ、あたしも千夏達と一緒に行くー！　麻美ちゃんも航クンも那奈も一緒に行こうよー！」

「……………何よ、私も？」

「那奈も一緒に行くのー！　一緒に行こう！　ねっ、ねっ、ねっ！」

小夜は疲れている私の体を掴んで右へ左へブンブン振り回してくれ

る。さすがに今日は頭をひっぱたく気力すらない。

「……はいはい、わかりました……、翔太、アンタも付き合いなさいよ、一人だけ逃げるなんて許さないわよ？」

「……マジかよ？ 瑠璃ちゃんがいないとわがままな子供に逆戻りだな、小夜は……」

駅で二番目に安い切符を買って、私達は薫の案内に従い電車に乗った。すると、翼が疑問を感じて千夏に尋ねた。

「……なあ、千夏、これってウチらがいつも帰るコースとちゃうか？」

「……そうよねえ、こっち側の駅の周辺にどこか有名なお店なんてあったかしら？」

「まあまあまあ、お二人とも期待は裏切りませんから、安心しなされ、ウハッ！」

薫に説得されるがままに電車で揺られて目的の駅に着いたが、駅の名前を見てまたも翼と千夏は首を傾げた。

「この駅、いつも薫が降りる駅やろ！？ ここの周辺なんか古い喫茶店しか無いやないか！？」



「ねえ、ホントに美味しくお店なんてあるの？　これで薫ちゃんかウソついてたらロープで縛って逆さ吊りにするわよ？」

「だからビリーブミーって言ってるじゃないですか！？　……っ！　か、千夏ちゃんって女王様タイプなんですわねえ……」

駅を降りてしばらく道なりに歩いていくと、レンガ舗装の細くて長い上り坂が現れた。その長い道のりを見て、疲れている私と歩くのが嫌いな小夜は坂を登る前から音上げた。

「もう結構歩いたよー？　疲れて来ちゃったよー！」

「薫、本当にこんな所にお店なんてあるの？　周りを見た感じ一軒家しか無いじゃない！？」

「大丈夫、大丈夫！　きっと皆様満足して頂ける事をお約束いたしますよ！」

徐々に重たくなっていく自分の足を引きずりながら渋々と坂道を登っていくと、薫はまるで約束の地を見つけた預言者の様に坂の上を指差し大声で叫んだ。

「……皆の者、あれを見よ！　あれこそが我らが目指してきた目的地なるぞ！」

やっと着いた！ と私達が薫の指差した方を見上げると、お店こ  
ろかゴルフ打ちっ放し場の大きなネットがデーンと建っているだけ  
だった。

「航、このアホを坂の下に思いつ切り投げ落としたれや」

「……………了解」

「ちよちよちよ、ちよつと待って！ 翼も航も話を最後まで聞いて  
よ！ この打ちっ放し場の裏にお店があるの！ 見えてきたって言  
ったのは目印の事だって！」

とりあえず逃げられない様に航に薫を捕まえさせておいて、私達  
は薫の言う通りその打ちっ放し場の裏の道をグルッと回ってみた。  
すると、他の家の間の細道の奥に木造の小さい喫茶店らしき建物が  
に隠れて地味にちよこんと建っていた。

「……………確かに何かお洒落っぽいけ感じはするけどねえ？」

「……………入り口に看板すらもあらへんで？ 商売する気あるんかいな、  
このお店？」

予想していたお店の外見とは違っていたみたいで、千夏と翼は文句  
を言いながら口を尖らしていた。

「隠れ家的喫茶店って感じでしょ？ さあさあ、皆さんどうぞこちらへ〜！」

「……お店の雰囲気といい、薫の人格といい、何かどれもこれも胡散臭いんだよなあ……？」

「……お嬢、それってもう思いつ切り名誉毀損ですよ、シヨボーン」

薫の誘導に従い、私達は恐る恐る喫茶店のドアを開けてみた。とても外目からでは営業している様には見えないのだが……。

キィ〜、カランカランコロン

「……いらつしゃいませ〜、って何よ、薫じゃないの？」

「ハ〜イ、ただいまユリア！」

店の奥にあるカウンターの内側に、背が高くスタイルの良い外国人の女性が立っていた。しかし、それ以上に今の薫が言った一言、翼も千夏もまずそこに食いついた。

「えっ？ 薫ちゃん、ただいまってどういう事よ？」

「もしかして、この店って薫が住んでる家なんか？」

「ピンポン、大正解！ 二人には景品としてこのお店のストローあげちゃう！」

「そんなもんいらんがな！」

「へえ、薫ちゃんの家って喫茶店やってたんだあ？」

店内をグルグルと眺めていると、先程の女性が薫に近づいてきた。ピッチとしたボディラインくっきりのＴシャツにローライズジーンズ。間近で見るとさすがは外国人といったプロポーションだ。

「……薫、学校のお友達、よね？」

「うん、そうだよ、美味しいお茶とお菓子が食べたいって言っていたからここに連れてきたんだ」

薫と話している女性は、私よりも背が高く白い肌に青い瞳、金髪の長い髪を後ろで一つに束ね、見た目こそは正に外国人だが、ビックリするほど日本語が達者である。

「いらっしゃい、皆さん、薫がいつもお世話になっているみたいね」

「……あつ、いや、お世話だなんてそんな……」

「……何で照れてんのよ、翔太？」

鼻の下をベロ〜ンと伸ばして真っ赤な顔をしているスケベ男。翔太の視線はこの女性の胸元に行っているのが見てるだけでも良くわかる。

「そんでもってこのジンガイのチャンネーは何やねん？ 薫とどういう関係なんや？」

「……まさか、薫ちゃんのお姉さん、じゃないわよねえ……？」

翼と千夏が不思議そうにその女性を見つめていると、薫は自分の前髪をスツと手で掻き上げ、格好つける様にその手を額に置きポツリと渋い声で呟いた。

「……実は、彼女は僕のフィアンセなんだ……」

「えっ……！！！」

突然の薫の告白に私達は一斉に驚いたが、

「はい！うつそぴょん！」

そのヒドいオチに驚きは鋭い殺氣に変わって店内全体をあっという間に呑み込んだ。

「航、やっぱりコイツを坂の下にノーバウンドで投げ捨てたれや」

「……………了解」

「ちょちょちょ、ちょっと待ってって！そんな事されたら死んじやうから！暴力はんたゝい！」

どうしようもない嘘つきバカを逆さにして店の柱に縛りつけ、私達は改めて彼女に挨拶をした。

彼女の名前は『ユリア』と言って、ポーランドの出身らしい。年は二十四歳でお姉よりも年上だ。十代で来日してからずっと日本に住んでいて、その為か日本語がペラペラで庶民文化にも詳しい様だ。

「俺の両親はすでに死んでしまつて、今は祖父さんが俺の保護者をしてくれているんだけど、その祖父さんが普段は外国にいるんだよね、生活費だけはしっかりと日本に送つて来てくれるんだけどね」

ちゃんと真面目に語っていますけど、今、喋っている男はまだ逆さ吊りのままです。悪しからず。

「……そこで、お祖父様と昔から縁のある私が薫の後見人としてお世話をしている訳よ」

「千夏ちゃんが言った通り、ユリアが俺のお姉さんって言うのはあながち間違っでは無いかもね」

なるほど、やはり人によって色々と事情があるものなんだなと改めて気付いた。だからといって薫を許して下に降ろしてやろうという気には全然ならないけど。

「……で、せっかくなんだからみんなご注文は？ 薫の友達なら代金は結構よ」

「えっ？ それはさすがは申し訳ないですから……」

私が困った顔をして断ると、ユリアは慣れた手つきでチツチツチツと人差し指を横に振った。やはり外国人がやるジェスチャーは何か格好いい。

「ちゃんと薫のお小遣いから引いておくから大丈夫よ、気にしないで注文して」

「えっ！ そりゃねーよユリア！？」

ならば一切遠慮はしない。みんな次々とユリアに飲み物を注文した。

「そうと聞いたらガンガンいくで、ウチはカフェオレ!」

「アタシはミルクティー please?」

「あたしはオレンジジュース! 麻美ちゃんは?」

「……じ、じゃあ、私もジュースで……」

テーブル席に座っている四人が注文を終えた。私も何か注文するか  
な。

「私はコーヒーをお願いします」

「じゃあ俺も」

「……やっぱり紅茶で」

「何だよ、一緒じゃ嫌なのかよ?」

ただでさえ家もクラスも一緒なのに飲み物まで翔太と同じなんて冗  
談じゃない。

「……………俺、牛乳」



カウンター席に膝が入り切らない航の呆れた注文。まだカルシウムを採る気なのか……。

「……あのー、トイレ行きたいんでそろそろ降ろして頂けませんでしょうか？ もし、降ろしてくれないならいつそこで……」

「あゝ、もう、やかましいわ！ もうさっさとトイレでもどこでも行けや！」

「バイバイキーン！」

翼に紐を解いて貰った薫はグルグルと回りながら店の裏に入っていた。何かやらないと動けないのかな、この男は？

薫がいなくなつて周りの空気も落ち着いてきたので、出された紅茶を飲みながら店内の見渡してみると色々と珍しい物が飾り付けてある。

「……何か、年期の入った写真がいっぱい飾つてあるね……」

「……どこかの外国の景色かな？ ずいぶん色褪せてるけど……」

かなりセピア色にくすんでいる写真。どうやら外国の山の写真のようだがどこの国のものか私も翔太も良くわからない。

「ヨーロッパにある山岳地帯の風景よ、今から四十年ぐらい前の写真なの」

世界の土地勘が全く無い私達にユリアが細かく説明してくれた。四十年前という事は父さん達が生まれた時と同じくらいか。

「みんな薫のお祖父様の置いていった物ばかりよ、ゴミみたい見えるけど大切な物なんですって、だから捨てる訳にはいけないのでこゝして店内に飾ってるのよ」

「……でも、アンティークな感じでスゴいオシャレ、アタシは何かこゝういの好きだな」

千夏がテーブル席から立ち上がって店内をブラブラと探索し始めた。すると、一緒にいた翼が透明なガラスボードに入れられて壁に飾られている一枚の紙に注目した。

「……何やコレ？　どこかの島の地図かいな？　それとも国かいな？」

「……何か書いてあるけど、何語なんだろう？　全然読めない……」

「千夏ハンは学力が乏しいなあ、可哀想なやつचनाあ」

「何よ、イタリア語も英語も全然わからないクセして！　じゃあ翼

はこれが何だかわかるの？」

「……これはアレやで、ズバリ、宝の地図や！」

もちろんそんな訳が無い。こんなくだらない話にもユリアは優しく答えてくれた。

「残念ね、確かに地図だけどそんな夢のある物では無いわ、まあ、人によってはある意味、宝の地図なのかも知れないけどね」

「全然違っじゃない！ ホントに適當よね、翼は」

「何を今更言うてんねん千夏、適當、それがウチの代名詞やで？」

二人の話を聞きながらゆったりと紅茶を飲んでいると、小夜が私の制服の袖をクイクイと引っ張った。

「……ねーねーねー、那奈……」

「……何よ小夜、そんな小声でどうしたの？」

「……麻美ちゃんとも話したんだけど、あっちにいる別のお客さん……」

小夜が言った方向を見ると、店内の奥のテーブル席に男女ペア

のお客さんがいた。

「……あの人達、絶対日本人じゃないですよね……」

彫りの深い顔、ブラウン色の目、大きな体、そして金髪。麻美子が言う通りそのお客さん達が日本人でない事は見て明らかだった。

「……私が日本に詳しいから、よく旅行で来た人達が観光スポットとかに訪ねに来るのよ、このお店は海外のガイドブックにも載っているのよ」

ユリアは私達が思っている疑問を見通している様に丁寧に答えてくれた。外目は地味なのにガイドブックに載るほど有名なお店だったのか。

「……インターナショナルなんですネ、ちょっと驚きました……」

「何かすぐ近くに外人さんがいるってドキドキするね、麻美ちゃん」  
「！」

「小夜、アンタ、外国人相手にバカやらないでよ？ 日本の恥になるわよ？」

「あら、とりあえず薰だってハーフなのよ？ 毎日、国際的じゃないの？」

あつ、そうだった、すっかり忘れてた。確かにユリアみたいな人がいれば毎日新鮮な驚きがあるかも知れないけど、薫が相手じゃつまらないギャグがウザったいだけだ。

「もし良かったらこれも食べてね、私からのお近づきの印よ」

そう言つとユリアは私達のテーブルに丸々一つ分のケーキを持ってきてくれた。

「うわー、まんまるー！ 真ん中に穴があつておつきなドーナツみたいーい！」

「パウンドケーキっぽいわね？ でもスゴく美味しそう！」

「小腹が減つてたからナイスタイミングやで！ ほなら、いただきまゝす！」

「ちょっとアンタ達、ストップ、ストップ、ストップ！ 一体どれだけご馳走になるつもりなのよ！？ 少しは遠慮しなさい！」

私が次々とケーキに伸びてくる手をバシバシ叩いていると、ユリアは再びチツチツチツと人差し指を横に振った。いちいち格好いい。

「いいのよ、これが海外での一般的なお客様へのおもてなしなんだ

から、これだけ人数がいれば全部食べれちゃうでしょ？」

「えっ？ でも、こんな丸々1ついいんですか？」

「おお！ 美味しい美味しい！ 結構イケるで！」

「あっ、わかった！ クグロフみたいな感じね！ この食感、超いい感じ〜！」

「ふわふわしてて美味しー！ 麻美ちゃん、スッゴい美味しいよ！」

「……じゃあ、すみません、頂きます……」

「コラッー！ アンタ達は遠慮つてもんが無いのか！？」

私の言葉も聞かずにケーキをガツガツ食べまくっている女子軍団を叱っていると、カウンター席にも一切れずつお皿に乗ってケーキが置かれた。まさか男子は甘い物なんて興味無いだろうと思ったら……。

「もし良かったらお好みに合わせてジャムがあるからつけて食べてね」

「じゃあ俺はブルーベリージャム頂きます、航は何にする？」

「……………蜂蜜」

……最低、呆れて物が言えない。まるで獲物に食いつくハイエナの様だ。もしくは新宿街の朝方のゴミをあさるカラスか……？

「那奈は食べないのー？ あたしが那奈の分もお皿に取ってあげるから食べなよー？」

「……ちゃんと自分の分あるからいいよ……」

ユリアの予想通り、このハイエナ達は軽々とケーキ1つ平らげてしまった。全く、遠慮が無いと言うか、がめついと言うか……。

「あー、おいしかった！ ごちそうさまー！」

「いやあ、満足満足！ もうお腹一杯やで！」

「定番のスイーツって感じじゃなかったけど、それが逆に高ポイントよね！」

……この半端ない食いつぶり、他のお客さんにどう思われたらどうか？ ましてや相手はみんな外国人。切腹ぐらいしないと日本人の名誉は挽回出来ない様な気がする。

「みんな満足して頂けたかしら？ だとしたら嬉しいわ」

「……本当にすいません、何か色々のご馳走になって……」

「あなたは謙虚なのね、気にしないでいいのよ、どうせ全部残り物なんだから」

「えっ……！！！」

「……冗談よ、うちは偽造とかしてないから安心して」

……見事に全員騙された。さすがは薫の後見人を名乗るだけある人だ。冗談キツすぎ……。

気を取り直して紅茶を飲み干し一息ついてふと後ろを振り向くと、さっきまでケーキをパクパク食べていた翼がグラスの下に置いてあったコースターをジッと見ていた。

「どうしたの翼？ 何か気になる事でもあるの？」

「……うん……」

「何よ、黙り込んで気持ち悪いなあ、何なのよ一体？」

「……いやな、もしかしたらうち、この文字どっかで見た事あるかも知れんねん……」

翼の意外な一言に私達全員がそのコースターに視線を向けた。何かの建物の様な絵の下に、見た事のない難しそうな文字が書かれている。



「えっ、この何語かわからない文字？ さっき、宝の地図とか言  
ってふざけてたじゃない？」

千夏の言葉に答える事なく、翼は腕を組み難しそうな顔をして不思議な文字を見つめている。ふざけている訳でも無さそうだ。

無知な私達が考え込んでも仕方ない。私は思い切ってこの文字の事をユリアに聞いてみた。

「この文字ってポーランド語とかなんですか？」

「……いいえ違うわ、昔にヨーロッパで使われてた古い文字か何か  
だと思うけど？」

「……そうですか……」

「ほとんどが薫のお祖父様の物だから私もよくわからないの、詳しく  
答えられなくてごめんなさいね」

「……いえ、そんな、お構いなく……」

「……だから何で翔太が答えてるのよ!？」

「痛い!!」

デレデレと鼻の下を伸ばす翔太の太股に思い切り膝を叩き込んでや

った。全く、美人だと国籍関係なく反応しやがって……。

「……どこで見たんやっけなあ、この文字、あと、こっちのコースターのこの星形模様……」

何かを必死に思い出そうする翼を、ユリアが少し落ち着き無さそうに見ていた。その時、突然カウンター裏の扉が開いて、何か化け物の様な物が突然飛び出してきた。

「お待ちしました〜！ いらっしやいませ、ご主人様〜！」

「……ゲツ！」

勢い良く飛び出してきたのは薫だった。が、制服から着替えたその姿を見て私達は絶句した。

「メイドのかおるでえ〜す！ 今日のご主人様にいっ〜ぱい喜んでもらう為にガンバリんこだプー！」

「Oh, Japanese maido san！」

「Akihhabara, Akihhabara！」

一瞬食べたケーキが逆流しそうになった。なぜか他に店内にいた外

国人観光客達はカメラを持って薫の恥ずかしすぎる姿をバシバシ写真に撮っている。

「……これってメイド服ですよね……？」

「……しかも猫耳まで付けとるで……」

「……薫ちゃん、最低……」

「でもちよつとかわいいかもー！」

「……小夜、黙りなさい」

「………帰ろう」

「………そうだな、帰るか……」

私達は何事も無かった様に、何も見なかった様に荷物をまとめて席を立った。

「あれ？ 皆さーん、物凄く目線が冷たいですよ？ もっと楽しく盛り上がっていきましようよ？」

「どうもご馳走様でした」

「これに懲りずにまたお店に来てね、みんな」

「ちょちょちょ、ちょっとちょっと、祭りはこれからだぜ？ 俺達の冒険はこれからだ！ なんちゃって」

手を振って見送るユリアに、私達はペコリと頭を下げ、店の扉を開いた。

「いや、そんな、ちょっと、寂しいじゃん！ なんか突っ込むとか一緒に悪ノリするとか、ちょっとぐらい付き合ってくれた方がいいんじゃない？ みんなに楽しんでもらおうと思ってこんな格好まで用意したんだからさあ？ ねえ、ねえ、ねえってば」

「航、このアホを隣のゴルフボールが飛び交う打ちっぱなしのネットの中にブチ込んだれや」

「……………了解」

「だからそんな事したら死んじゃうってば！ ヒiiiiiiiiii!」

キィ、カランカランコロソ

何か胃が重い。新年度早々エライ物を食べた、いや、見てしまった様な気がする。

吸い込まれそうな青い空、呆気に取られるくらいに大きな雲、都会では考えられないほどの鮮やかな緑の山々、そんな景色に鳴り響く耳をつん裂く様な大爆音。

「いやあゝ、久々に来たけど、やっぱりいいなサーキット場は！  
何か興奮しちまうぜえ！」

「……よくこんなにやかましい所が好きになれるよね、お姉は……」

「あん？ 何だって？ 周りがうるさくてよく聞こえねーよ？」

今日、私達はこの前に父さんが話していたバイクのテスト会場になる都会から遠く離れた地方のサーキット場に来ている。

私がここに来たのは、父さんのチームと翔太が参加するのを見にきたのもあるが、海外に仕事で行ったきりの私の母・麗奈がこのイベントの為に久し振りに日本に帰って来ると聞いたからだ。

「何かお偉いさんだけでお忍びでやるのかと思ったら、観客席開けて一般公開してやがんのな、きつちりと商売しやがってよ」

「……ねえ、お姉、コース内に何かマスコミみたいのもいるね、カメラとか抱えて走り回ってるよ」

「雑誌か新聞かの取材じゃねーのか？ 2輪車メーカーお膝元のサ  
ーキット場だから依頼があつて見にきたんじゃねーか？」

プウアアアアアン！！

再び私達の前を一台のバイクがけたたましいエンジン音を立ててサ  
ーキットコースを走っていった。

「あー、もううるさい！ 耳がおかしくなりそう！」

「バイクのエンジン音が嫌いじゃ困っちゃうなあ、それでも渡瀬家  
の娘かよ？」

前にも話したが、私はバイクに興味は無い、というか嫌いだ。小さ  
い時に目の前で見てしまった翔太のお父さん・貴之さんの死亡事故。  
あれが今も私のトラウマとなり、バイクはもちろん車やジェットコ  
ースターといったスピードの出る乗り物が全て苦手になってしまっ  
た。

「正直、母さんが来るって聞いてなければ来なかったよ、こんな所  
……」

「ほーう？ じゃあ苦肉の決断の末にここに来る事を決めた那奈さ  
んに感謝しないとなあ？ なあ、お前ら！」

「イエーイ!!」

私とお姉の後ろに陣取っている翔太以外のいつものメンバー。もう誰かいるかなんて説明する必要も無いだろう。いつの間にかやらの連中もお姉の舎弟と化していた。

「あたしもサーキット場に来るの久し振りー! まだ小学校の三年生が四年生くらいだったかなあー?」

「小夜、アレやる? ウチも一緒に見に行った時やる? 小さいバイクやったけど、あれでも立派な全日本戦だったらしいなあ?」

「実はアタシ、サーキット場初体験なの! パパと一緒にするのがイヤだったから、ずっ〜と行かなかったんだ! こんなに広い所んだねえ〜!?!」

「キャンペーンガールはどこ? レースクイーンはどこ? 薰ちゃん今日の日の為に新しいデジカメ買った〜! ウハッ!」

「……………空が綺麗だな」

私達がサーキット場に行くのを聞いて、羨ましがって小夜達がお姉におねだりしたらしい。その話が父さんに伝わって、『どうせ行くなら大人数で楽しくやろうぜ!』って事になってみんなついてきてしまった。

「でも麻美ちゃんと瑠璃ちゃんも一緒に連れて来たかったなー、残念だなー」

「麻美子は乗り物酔いがヒドいんやろ？　せやったら六時間の長距離移動はさすがに無理やで？」

「……………さすがに瑠璃の遠出もまだ無理」

「だからその分、小夜が頑張っていっぱい写真を撮らなくちゃいけないわね！」

「うん！あたし、いっぱい撮るー！」

「……………ねえアンタ達、完全に観光気分じゃ浸ってない？」

「レースクイーンとかいないの？　どこどこどこ？」

「……………オマエはもう帰れ！」

テスト走行も本格的に始まり、数台のバイクがコース内を走り始めた。そのエンジン音はテレビとかで聴くような軽い音ではなく、何かお腹の底から体を揺さぶられる様な物凄い爆音である。

「おーい、優歌、那奈！　こっちだこっち！」

「おっ、橋本のオツさんじゃねえか！　那奈、覚えてるだろ？」



「……えーと、何となく……」

「忘れちゃったのかよ？　まあ、おめーはまだ小さかったからしょうがねえかな？」

観客席のフェンスを挟んで、髭顔の恰幅の良い繋ぎの作業服を着た中年の男性がニコニコ笑いながら私とお姉に話しかけてきた。

「お前らもすっかり大きくなっちゃったなあ、ちよつと前までは俺を腰ぐらいの高さぐらい小さかったのになあ？」

「オッさんまだ現役やってんのかよ？　いい加減に落ち着いて真面目に仕事に集中しろよ？」

「バカ言うな、バイクをいじんのが俺の本業だ、一番落ち着きが足りないのはお前達の親父だよ」

「そりゃそうだ、確かに違いないね」

「俺はアッチの方だってまだまだバリバリ現役なんだぜ？」

「デカイ腹して何を見栄張ってんだよ、この死にぞこないが」

これが中年男性と二十歳を迎えた女性の会話だろうか？　お姉の口の悪さはこういった人達に鍛えられて身に付いたのだろう。私には到底真似できない。

「今日はかわいいギャラリーがたくさん来ているって聞いてな、特別に特等席を用意してやったぜ」

橋本さんに案内されるがままにその特等席とやらに行ってみると、とんでもない場所に連れてこられてしまった。

「……ここつてさ、もうピットルームじゃん……？」

「いいのかよオツさん？ アタシ達みたいな部外者のガキがこんな所をウロウロしちゃってよ？」

「別に今日はレースつて訳じゃねえし、簡単に言えばお祭りみたいなもんだから気にすんな、足が疲れたら適当にタイヤとかホイールとかに座れよ」

そんないい加減なエスコートを受けていると、ピット内からもう一人作業服を着た男性が現れてお姉に話しかけてきた。

「おっ、優歌じゃねーか！ 久し振りだな、すっかりいい女になっちまってよー！」

「おう、竹田ちゃんじゃなか！ 相変わらず冴えねえ顔してんなあ？ 三十歳にもなつてまだ独身なんだって？ 虎太郎ちゃんから聞いてるぜ？」

「手厳しい事言うなよ、だったらこんな女運の無い俺に愛の手を差し伸べてくれよ？」

「悪いけど、バイクいじるしか能の無い男にはさっぱり興味が無いなあ？」

どうやらお姉はこのチームのほとんどの人間と顔見知りの様だ。確かに昔から良く父さんと一緒に遊びに行っていたしなあ……。

私やお姉には子供の頃から良く見慣れている風景なので今更驚く様な事はほとんど無いが、普段サーキット場に縁の無い一般の人間達には好奇心をくすぐる宝の山の様である。

「うひょおー！ 見てみい千夏！ ウチの目線と同じ高さでバイクが走っとるでー！」

「キャー！ ライダーの男の人達とかイケメン多過ぎいー！ もうドキドキしちゃーう！」

「キャンペーンガール発見！ まあ、何てイヤらしい衣装なんですよー！ 太股とか胸の谷間とかもっと思わせてー！？」

「えー！ 薫ちゃんばかり写真撮ってズルいよー！ 航クン、あつちで走ってるバイクを撮りたいから肩車してー？」

「……………了解」

他のチームのピットクルー達が何事かとこちらを覗いている。多分迷惑かけているんだろうなあ。まあ、このチームの代表者自体が大変に迷惑な人だから別に気にしなくていいのかな？

私はお姉と並んでタイヤに座り、爆音に耳を塞ぎながらしばらくコースを眺めていたら、後ろのピットルーム内のクルーが走り回ってザワザワと騒がしくなってきた。

「おつ、何だ何だ？ 竹田ちゃん、何か面白い事でも始めるのかい？」

「おう、優歌、俺達の出番だ！ 橋本さん、マシンは問題無くコースに入って行っただぜ！」

「よしっ！ 全日本国民期待の星、うちの若大将の御披露目だ！」

「……期待の星？ それってまさか……？」

私と同時にお姉もわかったみたいで、ピッ！ と指笛を吹いてバラバラに散らばっていた小夜達を集合させた。

「キタキタキター！ おめー達支度しな！ この優歌様の一番舎弟、風間翔太の参上だよ！！！」

「イエーイ！！！」

橋本さんに先導されて、私達はコースに出来る限り近づける場所まで行ってコース内に目を凝らした。

「いいか、俺がOKを出すまでそこから勝手に動くなよ！ 後ろ側のコースにもバイクが走って来る事があるからな！」

橋本さんは私達に丁寧に注意をしてくれたが、この一般人達は翔太の姿を一目見ようと金網のフェンスにかじりついて全く話を聞いていない。

「おいおい、一体、翔太はどこやねん？ ウチは小さいんやから一番前で見させろや！」

「えっ？ ヘルメット被っているから誰だか全然わかんない？ ちょっと薰ちゃん、邪魔だからどいてよぉ！？」

「イタイイタイタイ千夏ちゃんヒールで踏んでる踏んでるって足踏んでる」

「全然見えないよー？ 航クン、また肩車してー！？」

「……………了解」

コース内には色々なカラーリングが施されているバイクが数台走っており、どのバイクに誰が乗っているかなんて私達には全然わからない。

「オッさん、翔太が乗ってるバイクってどんなのよ？ 大きさは？ 色は？」

「虎太郎や翔太の親父が乗ってたクラスと一緒に物だぜ、色も親父と同じ白にカラーリングに青いストライプだよ、次にこっちに走って来るヤツだ」

「えっ、マジであのクラスのマシンに乗らしたのかよ？ 相変わらず無茶させやがってよお、虎太郎ちゃんは」

お姉と橋本さんの話を聞いて私の頭の中に不安がよぎった。同じクラスってどういう事？

「ちょ、ちょっと待ってよお姉！ 私は話を聞いても実際どんなバイクなのか全然わかんないんだけど？」

翔太は中学生になってから原動付自転車をレース様に改造したミニバイクに乗っているのは知っていたが、それよりもクラスが上、つまり速いバイクって事だろうか？

「……………何か来た」

「……………ホントだー！ 那奈、何かこっちに来るよー！」

航と肩車されている小夜がそれらしきバイクを見つけたみたいだ。

「えっ？ どこ……」

ヒュン！

「……えっ！？」

コースに目を向けた私の前を、音とともに何かが一瞬で過ぎ去って行った。そしてその後、

ブアアバババアン！！！！  
バリバリバリバリッ！！！！

「……うわぁ！！」

鼓膜が破れそうな空気を切り裂く大爆音が後から遅れて私達の耳に遅いかかってきた。それと同時に、物凄い暴風が私達の服や髪の毛を巻き上げた。

「久し振りにうるせえー！！」

「うわー！ 風もすごいー！！」

「何やねんや、今のは！？」

「ヤダッ！ 音もスゴいけど風でスカートが……！！」

「キター！ シャッターチャンスー！！」

「…………薰、バイクを撮れ」

私達の目の前を一瞬で通り過ぎていった何かの白い物体。私はそれが何だったのかはつきりと確認する事すら出来なかった。

「ひええー、久し振りに間近で見たけどやっぱり速えなあー！！」

「…………お姉、何よ？ 何なのよ今の！？」

「小さい時にウチらが見てたバイクとは全く別物やないか！？」

「翔ちゃんスゴーい！ 本物のバイクに乗っているみたいー！！」

呆気に取られる私達と小夜の子供みtainな発言を聞いて、橋本さんはニヤニヤ笑いながら私達の疑問に答えた。

「まあ、そりゃ本物だもんよ、実際に全日本戦などのレースに参戦



する今年の新型モデルだからな、翔太が昔に乗っていたポケバイや排気量の少ないミニバイクとは全くの別物だぜ！」

ちよつと待つてよ、体の成長に合わせてクラスを上げていくのは良  
いけど、かといっていきなりこんなスピードの出るバイクに乗せる  
なんて…。

こんな無茶なやり方に納得出来ない私は、周囲の安全も確認せずに  
父さんがいるピットルームへと歩き出した。

「おい那奈！　どこ行くだよ！　オイ！」

「おいおいおい！　勝手に歩き回るなって言っただろ！」

私はお姉や橋本さんの制止なんて聞く耳も持たず、ピット内で椅子  
に寄っ掛かり帽子を顔に置いてうたた寝している父さんの前に立っ  
た。

「父さん！！」

「……ん？　おう、何だ那奈か？　どうだ、久々のサーキット場、  
きつちり楽しんでるかあ？」

「どういう事なの！？　何よ、あのバイク！？　今までは小さくて  
スピードの出ない物に乗っていたのに、何でいきなりあんな……！」

「……ハア？　何の話だ？」

「……翔太の話！ 翔太が乗っていたバイクの話よ！」

怒り狂う私をチラッと一瞥すると、父さんは起き上がってタバコをくわえてジッポライターで火をつけた。

「……なんでえ、そんな事かよ？ 翔太なら普段からバイクに乗ってるだろうよ？」

「……普段からって、あのバイクに！？」

「いつもの練習用はスツカスカのボロバイクだが、今日は特別でな、あれは実際にメインでやってるクラスのマシンで、昔、俺達が走っていたクラスだ」

「……な、何でそんな物に乗せるのよ！」

「言ってんだろ？ 練習だ練習、いずれアイツもこのクラスで行くんだ、早い内にこのスピードを経験しておいた方がいい、ちよっと前にお前もいる時に家で話したろ？」

私をバカにする様に、父さんはタバコの煙りを鼻からフーンと吹き出した。

「そんな無茶をさせて、もしも翔太に何かあったらどうすんのよ！」

「無茶じゃねえよ」

「……でも！」

「アイツが自分から望んだ事なんだぞ？」

「……！」

そう言われてしまったら何も言い返せない。言葉に詰まった私に父さんは容赦なく言葉を続ける。

「それにな、スピード出ささないかにしても乗っている翔太が決めてやってる事だ、今日はレースじゃねえんだから俺らがいちいち指示を出してる訳じゃねえ」

「……………」

「つまりそういう事だ、納得したか、お嬢さんよ？」

「……おい那奈、邪魔になるからこっちに來てろ」

「……………」

見るに見かねたお姉が私の手を取り父さんから引き離れた。完全に私の完敗だ。

やりきれないイラつきを持て余していると、大きなエンジン音を立てながら一台の青いバイクがピットルームに帰って來た。翔太だ。

「お疲れさーん、翔太！ どうだ、スッゲー速えだろ？」

「……………」

「……まずはヘルメット取れよ、そんでもって冷たい物でも一杯飲んでゆっくりしろや」

「……はい……」

橋本さんと竹田さんに出迎えられ、カラフルなバイクスーツに身を包んでいる翔太は、私達には目もくれずにヘルメットを脱ぎながら父さんの元へと歩いて行った。

「……どうだ、初体験は？ 気持ち良かったか？」

「……ヤバいつスよ、体、バラバラになるかと思った……」

「今までのGとは比べ物にならんだろうな、これが俺やお前の親父が生きてきた本物の世界だ」

「……ハンパないなあ……」

「……おいおい、何だ、ビビったのか？」

「……いえ、そんな事ないです……」

翔太は精一杯の意地を張っていたが、父さんはその心境を全てを見通していた。

「その割には一周目が随分と慎重すぎやしかったか？」

「……いや、そりゃだって……」

弱気になった翔太のお尻をパスン！ と父さんのキックが決まった。

「しつかりしろよ、肝っ玉小せえなあオイ！ 俺なんか初乗りから全開でぶっ放して全日本ランカーをぶっちぎってやったんだぞ？」

私も母さんから聞いた事がある。昔の武勇伝に橋本さんが懐かしそうに話に加わってきた。

「懐かしい話だなあ、虎太郎、確かにあの時は俺達も見ててひっくり返ったよ、あんな芸当、生まれつきの天才か余程のバカじゃなきゃ出来ねえよなあ？」

「まあ、つまり俺は天才だったって事だ」

「さあ？ どうだったんろうなあ？」

私の心配をよそに、あのバイクバカ達はヘラヘラと笑いながら楽しそうに喋っている。私がトラウマになったあの事故、翔太だって一緒に見ていた筈だ。

あれだけの悲惨な事故で、ましてや自分の父親が目の前で亡くなったのに、なぜ自らこの危険な世界に足を踏み入れていくのか。怖くないのだろうか。私には全く理解出来なかった。

「……………これだから男って……………」

翔太はしばらく父さん達と談笑していたが、空気を読んだお姉がヘッドロックを決められて私の前に引きずられてきた。

「イタイ、イタイ、イタイ！ 何スか何スか優歌さん！」

「オッさん共となんか話してねえでこっちに来いよ！ 今日はおマエのファンがいっぱい詰め掛けて来てくれてんだぜ！？」

お姉は翔太の背中をバチーンと叩いて私の目の前に押し出した。

「ほれ、翔太！ 無事に帰ってきた事を那奈に報告しな！ コイツな、オマエの事が心配で心配で虎太郎ちゃんに喰って掛かっていったんだぜ！？」

「……………なっ！ちよ、ちよっと、お姉それは違う……………！」

「『翔太に何かあったらどうすんのよ!』って怒っちゃって必死だったんだぜ!? ウッヒヤヒヤヒヤ!」

「…………お姉!」

話を聞いた翔太が申し訳なさそうに頭を掻いていた。余計な事を言っ  
つて、お姉ったら…………。

「…………別に、そんな事、言っていないから…………」

「…………何か、ごめん…………」

「…………心配なんかしてないっつーの!」

私は翔太に背を向けてその場を離れようとしたら、後ろで話を聞いていた翼と千夏が私の顔を見てニヤニヤしていた。

「…………何よ?」

「イイエ、ベツニ?」

「ナンデモ、アリマヘンガナ?」

「何よ、その喋り方!? アツタマくる!」

バカにする二人をひっぱたいてやろうとしたら、突然、ピットルームがザワザワとざわめき始めた。うちのチームだけではなく、サーキット内全ての空気が一気に緊張感に包まれていった。

「……おい、来たぞ……」

「……来た来た来た……！」

「……やっぱり来た……」

「……あの噂、本当だったのか……？」

あちこちでクルーの人達やチーム関係者の人達がひそひそと立ち話をしている。そしてササツとその場を立ち去り慌てて手元の作業を始めた。

「……何や、この雰囲気？ 何かあったんか……？」

「……何か、みんな急に仕事に集中し始めたけど……？」

辺りを不思議そうに見渡す翼と千夏の横で、お姉は私の肩をポンと叩きピットルームの先を親指で指した。

「……那奈、来たぜ！ 荒くれライダーでさえも裸足で逃げ出す恐



怖の悪魔が……！」

ピットルームの中でも竹田さんが父さんの元に駆け寄って報告をした。

「渡瀬さん、橋本さん、やっぱり来ましたよ！」

「……久々のご登場だな、虎太郎……？」

「……ダース・ベイダーの登場曲が聞こえてきそうだなあ？」

「……母さん……」

後ろに各メーカーの役員や広報担当を引き連れ、スーツをビシッと着こなした女性が裏の通路を歩いていた。

間違いない、私の母、このメーカーのエンジン開発の全ての実権を握る『モンスター・メーカー』、渡瀬麗奈だ。

「あー！ 那奈のおばさんだー！」

「……バカッ！ 小夜、空気読め！」

周りの人間が驚いた顔をして私達を見ていた。場の空気を考えない小夜の声に、母さんは一瞬だけ反応してこちらに笑顔で軽く手を振ったが、すぐに厳しい顔に戻り多くの人達を連れて別のピットル―

ムへと歩いて行った。

「……あれ？ 行っちゃいましたね、渡瀬さん……？」

「竹田、良く考える？ ヤツのメインは国際組のワークスチームだろ？ 俺達みたいな国内の金無しチームには用はねえって事だよ」

あの人相手にヤツ呼ばわり出来るのはこの人だけだろう。まあ、と  
りあえずは夫婦だしね、これでも……。

「じゃあ、こつちには麗奈ママ来ないのかい？ せっかく会いに来たのにつまんねーの！」

お姉はつまらなそうに倒れているタイヤに座り込み口を尖らせた。  
小夜の口を塞いでいた私はいつもの様に思いつ切り小夜の頭をひっぱたいた。

「……小夜！ 本当にいい加減にしてよ！？」

「……ごめんなさい、エヘッ！」

「……全く……」

久し振りに見た母さんは全然変わっていなかった。近寄りがたい張

り詰めた雰囲気、仕事に取り組む鋭い視線、昔と何一つ変わっていない。

「……でも、何か服がオイル臭くなってイヤになってきちゃった、見てるだけでこっちまでベトベトしてきそう」

千夏が愚痴を漏らし始めた。まあ、この女にはここは無縁の世界だろう、父親は立派な国際ライダーなのだ。

「オイオイオイ、オマエ、仮にも三島の娘なんだろう？　世界王者の親父の名が泣くぜ？」

「だってえ、うるさいし同じ所くるくる回ってるだけで全然面白く無いんだもん、こんな事に熱中出来る人の気が知れないって感じ」

「……世界を巻き込んで激戦繰り広げた男達の娘二人がこれじゃあ報われねえなあ、お姉さんは涙が出るよ……」

お姉は私と千夏を見て残念そうに頭を抱えた。ハイハイ、そうですよ、二代目がこんな女達でどうもすいませんね。

「別にいいんだもん、アタシが興味無くたって弟がバイクやってい

「えっ、千夏、弟がいるんかい？ 初めて聞いたわ」

「うん、一つ下にね、千秋って言っただけど」

「……千秋やってよ、聞いたか、薫……？」

「……男なのに千秋、何か同情するねえ、可哀想に……」

千夏達が話していると、それを横で聞いていた翔太が会話に加わってきた。

「俺、知ってるよ、あの三島千秋だろ？」

「あれっ、もしかして翔太君は千秋に会ったことあるの？」

「会ったも何も、この前まで同じレースで一瞬に走ってたんだよ、どんどん速くなって、この前は本当に負けるかと思ったよ」

「でも結局は翔太君が勝ったんでしょ？ さすが全日本チャンピオンよね」

「ポケバイの世界での話だよ、この先もアイツとな争って行くんだろうね」

その横で、翼が顎に人差し指をつけながら何かを考え込んでポツリと呟いた。

「……千夏、千秋、と言う事は、オカンの名前は大体予想がつかない……」

「……千春、よね？」

「ヒエッ！」

「母さん！」

いつの間にか私達の後ろに母さんが立っていた。さっきまでいた取り巻きはいなくなっているの、もう目的の要件はすでに済んだのだろう。

「……あなたが千春の娘さんね、確かに何か面影があるわね……」

「……あつ、そ、そうですか……？」

「うん、何かウザったい態度とかいちいち鼻につく喋り方とかもうそっくりよ」

「……………」

まずは千夏が母さんの毒牙にかかった。

「……で、さっき大声出してたのが小夜だから、あなたが翼ね、小

「さいわね、本当に中学生？」

「……ほっというてんか……」

続いて翼が餌食になった。

「……残りの2人は……」

「あつ、どうも初めまして薫ちゃんです！」

「……初めまして」

「……どうでもいいわね」

「ええー！？」

「………そうですか」

航と薫をまとめて切って捨てると、母さんはクルリと振り返り翔太に歩み寄った。

「翔太、見てたわよ、なかなかいい走りだったわ」

「………どうも、ありがとございます……」

「最初の一周目の腰抜けっ振りを見たときは一時どうなるかと思っ

ただね」

「……バレてる……」

「ハッハッハ、やっぱり見られてたなあ、翔太……グエツ！」

横で笑っている橋本さんの腹を持っていたファイルでバチンと叩くと、母さんはチラリと父さんがいる方を見て溜め息混じりに呟いた。

「……まあ、初乗りでいきなり無茶苦茶やらかしたバカよりよっぽどマシだけどね」

「……あの、そのバカってもしかして……」

「いい、翔太？ 私はあなたの夢を実現させる為にこの世界に残ったのよ、あなたの夢を叶える事が貴之といづみに私がしてあげれる唯一の償い……」

「……麗奈さん……」

「その為にはあなたが順調に、無事に、自分の力で一つ一つ世界に向かってステップアップしていく事が大切なのよ、足りない物は私達が全て用意する、あなたは自分の力を信じて突き進みなさい、いいわね？」

「……はい、わかりました……」

母さんは翔太の返事を聞いて、なかなか見せる事のない優しい笑顔を見せて翔太の頭を撫でた。

「麗奈ママ、久し振り〜！ 元気だった？」

「あら、この不良娘はどちら様？」

「キツツイねえ、相変わらずさあ、それじゃあ若い男にモテないぜ？ せつかくの美貌が台無しだよ」

「見た目だけの無能な坊や達にちやほやされても嬉しくないわね、アンタみたいな男好きじゃあるまいし」

「……………毒吐きまくり……………」

お姉でさえも舌を巻く。これが『悪魔』と言われる母さんの凍てつく嫌み攻撃だ。

「さて、仕事と一通り終わった事だし、那奈、ちょっと付き合いなさい」

「えっ、は、はい……………」

「麗奈ママ〜！ 虎太郎ちゃんとは喋らないの〜！？」

母さんはお姉に『いない』とばかりに手を横に振って私を連れて



休憩所へ向かった。

「……この一年で色々あったみたいね、電話でいづみから聞いたわ」

母さんは缶コーヒーを一口飲んだ後、タバコに火をつけて休憩所の椅子に座った。

「優歌みたいに世間様に迷惑をかけた訳じゃなくて、ちゃんと人の役に立っただから私も鼻が高いわ」

「……でも、あれは小夜の手柄だから……」

「小夜の保護者はあなたみたいなんなんですよ？　だったらそれはあなたが導いたものよ」

「……そうかなあ……？」

「立派な事だと思うわ、胸を張りなさい」

母さんは二、三回タバコに口を付けると忙しく火をもみ消して灰皿に捨てた。そして、バックの中からバイブ振動をしている携帯電話を取り出した。

「……携帯が鳴ってるわ、一服するヒマも無いわね、全く……」

母さんは缶コーヒーを一気に飲み干し、続いて空き缶をゴミ箱に投げ捨てた。

「ごめんなさいね、那奈、もう行かなきゃ」

「……うん、わかった、母さん、体には気をつけてね」

「……………」

「……母さん？」

母さんは一つ溜め息をつくとき、苦笑いをして私の顔を見た。

「……あなたには、何一つ母親らしい事をしてあげられて無いわね……………」

「……………」

「私の人生には色々と後悔が多いけど、あなたのそばに居てあげられなかったのも後悔の一つよ」

「……いいよ、母さん、わかってるから……………」

「……まあ、私の最大の後悔はあの男と結婚した事だけだね」

「……あつ、そうですか……」

ならば、その二人から生まれた私は一体何なんだろう？ そんな疑問をよそに、母さんは私の頭を優しく撫でると再び自分の仕事の世界へと戻っていった。

「……とりあえず、元気そうで良かった……」

確かに、母親としては不合格なのかも知れない。でも私は、あの人が自分の母親である事を誇りに思っている。

人生を犠牲にしながらも、責任を全うしようとする姿。並みの人間に出来る事ではないだろう。

誰か何と言おうと私の母親はあの人だけなのだ。私もいつかは、あの人みたいな強い人間になりたいと思った。

「おい、那奈！ そろそろ撤収だってよ、帰る準備しとけー！」

「あつ、はい！」

休憩所から帰ってきた私を捕まえて、お姉は羨ましそうに私に聞いてきた。

「麗奈ママと何を話してたんだよ？ あたしにも教えるよ？」

「別に大した話じゃないよ」

「何だよ、水くせえなあ」

帰る準備をしなければいけないのに、残りのメンバーが散らばったままですぐ揃っていない。置いていかない様に集合をかけないと。

「小夜、帰る準備して、みんなを集めといてね」

「ねーねーねー、那奈、翔ちゃんと薫ちゃんがいないよー？」

「そついや、さつきからスケベライダーと盗撮野郎がおらんなどどこ行つてもたん？」

「ねえねえ、航ちゃん、あの2人どこに行つたか知らな〜い？」

「……………あそこ」

航が指差す先に、物陰に隠れてしゃがみ込み何かを見ている翔太と薫がいた。

「どーよ、バッチリ撮れてるだろ？ このキャンギヤルの胸元の谷間たまんねえ〜！」

「お前、何しにここに来たんだよ、こんなもんばっかり撮ってたのか？」

「こんなもん言いながら顔がニヤけてますぜ、翔太の旦那？」

「に、ニヤけてねーよ！」

「じゃあキミはもうこのデジカメ見なくていいよね？」

「ちょちょちょ、ちょっと待ってって、そういう事を言ってる訳じゃ……」

「……じゃあ、どういう事を言ってる訳？」

「……那奈！！！」

「このスケベライダー！！！」

「ヒイイイイイ！！！」

もちろん、このデジカメは没収させてもらった。しかし、内容を消去していなかった為、思い出写真として小夜から見させられた麻美子はあまりの卑猥な画像にショックして失神してしまったらしい。

## 第17話 傘の下の君に告ぐ

5月上旬、ゴールデンウィーク真っ只中で人がごった返す繁華街、夏の気配が近づくこの時期、流行を先取らんとばかりに元気良く街中を飛び回る乙女が2人。

「キヤー！ このキヤミかわいい〜！ ねえ、翼、やっぱり今年の夏は絶対こういった淡いピンク色が来ると思うの〜、そう思わない？ 思うでしょ？」

「……そうなん？ 言わせて貰うけどな千夏、ピンクなんていつの時期でも流行つとるがな？ 今年は鮮やかな原色系やで！」

「えっ〜、何でしょ？ だってほら、このスカートと合わせたら超かわいくない？」

「せやったら絶対こっちのワンピースで！ このフリフリが最高やん！？」

カリスマ店員のオススメも聞かず、ゲリラの様にあちらこちらのお店に顔を出し、服を見漁っては嵐の過ぎ去っていく。そう、彼女達の目的はショッピングではない。

「……っーか千夏、オマエ、結局はさんざん服見て一着も買わんで

「帰るんやろ？」

「そ〜よ！ だってアタシの服はみ〜んなママが作ってくれるもん！ ショッピングする必要なんてNothingよ！」

「ほなら、何でいちいち街に繰り出してあちこち店を回んねん？」

「ヤダ〜！ 宣伝よ宣伝！ コマーシャル！」

「……宣伝？」

「そおよ、アタシが着ている服はいつもママの最新作なんだから！ つまり、アタシが街に出て注目されて、『ヤダ〜、あの娘の着てる服かわい〜！ どのブランドなのかしら？』って話になるじゃない？」

「……歩く広告塔って訳かい……」

「そ〜ゆう事！ アタシはママのブランドの専属モデルってところかしら？」

「そんなコマーシャルに付き合わせる方はたまったもんじゃない。お供にされてる翼はふてくされて口を尖らせた。」

「ウチはその付き添いかい！ ちっとも面白くないがな！」

「じゃあ翼の服もママに頼んであげようかなあ？ 子供服専門モデルって事だね！？」

「やかましいわ！　今日は帰りにお茶ぐらいおぐれや！？」

普段からも翼と千夏はよく一緒に街に出掛ける。千夏のファッションセンスと翼の情報収集力の相性は抜群で、よく私達にも最新の流行を教えてくれたり、人気のグッズをいち早く手にしてプレゼントしてくれたりする程だ。

小夜と麻美子はとても喜んでいるが、ファッションに興味の無い私からすると若干余計なお世話でもある。

「でもさあ、アタシはママから今の流行とか教えてもらったりするけど、翼はどこから情報仕入れてるのお？」

「そりやもう片っ端からテレビ、雑誌、ネット使ってかき集めやで、ウチは何か気になるといっちい調べんと気が済まんねん」

「えっ、部屋に籠もってパソコンとかいじってたりする訳？　何か陰気って感じ」

「ウチのどんな姿を想像しとんねんなオマエは！　ネットで情報収集は現代生活で欠かせへんアイテムやで！」

あらゆるお店を冷やかして目的の宣伝を終えた二人は、駅のホームで帰りの電車を待っているとさすがはゴールデンウィーク、次第にホーム内に人が溢れかえってきた。



「……何やエライ混んできたなあ……」

「……ここが日本の一番キライなところなのよね、何でこんなに狭い場所にわざわざうじゃうじゃ集まって来るの？」

「それが島国日本って国やねん、日本人ってもんやねん」

「ユナイテッド・キングダムだって島国なのよ？ 何よこの文化の違い……？」

人ゴミでいっぱいになったホームに電車が到着した。が、もちろんこちらの中もぎゅうぎゅうの満車鮎詰め状態。

「……ねえ、これホントに乗るのお？ どこかでお茶とかして時間潰して待たない？」

「……確かにこれはアカンなあ、一時非難した方が良さそうやなあ、千夏、何かおこってや？」

翼と千夏は何とかホームから脱出しようと階段に向かってみたが、そちらからやってくる大量の人波がそれを許してはくれなかった。

「……ちょ、ちょっと押さないでよ！ 乗らないから……！」

「全然、前が見えへん、前が見えへん！ どこに向かってるかサッパリわからへんって！」

結局、そのまま人波に呑み込まれてそのまま乗車率200%オーバーの電車の車内に強引に押し込まれてしまった。

「イタイ、イタイ、イタイ！ 潰れるっちゅーねん！ つーかウチの頭の上にカバンを置いとんのは誰や!？」

「暑いし狭いし臭いしもう最悪！ 一体何なのよこの国は!？」

一つ大きな駅を越えると乗客も少なくなり、やっとともに車内で立っていられる様になったが、すでに二人の疲労と不満はピークに達していた。

「もう信じらんない！ 何なのよ一体！ アタシ達は何したって言うのよ！ あゝ、もう！ 服もグシャグシャゝ！」

「……千夏、オマエ、ようそんなに怒れる元気あるなあ？ ウチはもうクタクタのヘトヘトやで、あー、気持ち悪っ……」

ストレスで怒りMAX状態の千夏を、心境をさらに逆撫でる出来事が次の到着駅で起こってしまった。

ドンッ!!

「キャッ！」

電車の扉が開いて車内に入ってきたヘッドホンを掛けた若者が、扉側に立っていた千夏を突き飛ばして通り過ぎて行ったのだ。

「……痛あゝい！ ちょっと 안타！ 人にぶつかつて一言も無し！？ 謝りなさいよ！！」

しかしヘッドホンの大音量で千夏の声は若者に全く聞こえて無い様で、何事も無く車内の奥にある空席に向かって歩いていった。この態度がさらに千夏の怒りの炎に燃料を投下する形になってしまった。

「ちょっと待ちなさいよ、 안타！ 冗談じゃないわよ！」

「……オイオイオイ、千夏！」

怒りに我を忘れた千夏はそのまま通り過ぎようとしていた若者を捕まえ、ボサボサパーマの頭にかけていたヘッドホンを無理矢理外した。

もちろん、いきなり外された若者は一瞬驚いたが、すぐに千夏の行動に対して怒りの反応を見せた。

「……おい、何すんだよ！ 何だよテメエはよ！」

「アンタさあ、人にぶつかつといて謝る事も出来ないの！？ どういう教育受けてんのよ！？」

「……オイ、千夏、やめとけや……」

その若者は千夏よりも体が大きく、身なりはボサボサの頭にだらしない腰パン、いかにもケンカっ早そうな最近の若者だ。

危険を感じた翼が何とか千夏の怒りを治めようと説得するが、一度火が点いた貴高いセレブはそう簡単には止まらない。

「何の話だよ！？ テメエが入り口でボケツと突っ立ってるのが悪いんだろ！？ 変な言いがかりつけてんじゃねえぞ、コラ！？」

「何、アンタ！？ それがレディに対する言葉使い！？ これだから日本の男って……！」

「……レディ？ 何だ、この女？ アタマおかしいんじゃないの？ チャラチャラした変な服着やがって、気持ち悪い……」

「……何ですって……？」

「千夏、やめれって！」

千夏が最も嫌う日本語「チャラチャラ」。内面的な性格人格を知らずともせず、外見の見た目だけで人を判断して否定する人間を

千夏は徹底的に嫌う。

この若者の発言で、千夏の怒りケージはついにMAXを通り越しリミッターを振り切ってしまう、完全にコントロール不能となった。

「……じゃあ、アンタのそのファッションは何？ 変なゴミみたいな髪の毛にボロボロの腰履きジーンズ、それでかっこいいとも思ってる訳？ 勘違いもほどほどにしてよ？ バカはアンタよ、アンタこそ気持ち悪い！！」

「……あゝあ、もうウチ知らんで……」

「……て、て、テメエ、いい加減にしろよコラア！ 言いたい事言いやがってこのクソ女！！」

千夏の挑発に若者も完全にアタマにきてしまった様だ。しかし、それでも千夏の勢いは全く止まらない。

「何、殴んの？ やれるもんならやってみなさいよ！ 女を暴力でねじ伏せる事しか出来ないクソ男！！」

「……テメエ！！」

「……コレコレ、二人とも、ケンカは止めなさいよ……」

事の一部始終を見ていた車内にいたお婆さんが、見るに見かねて仲裁に入ってきた。しかし、ここまで来てしまったら火に油を注ぐ様

なもの。

「何だ、ババア！ 勝手に入り込んでんじゃねえよ！ 引っ込んでる！！」

「アンタ、目上の人に対して何て言葉使いよ！ どれだけ常識が無いのよこの男は！？」

「……なあ、お婆はん、引っ込んでいた方がええって、怪我するかな……」

止めに入ろうとした翼に老婆はニコリと笑うと、車内で迷惑を省みずに怒鳴り合うダメな若者二人を諭す様に話し始めた。

「……先にぶつかって迷惑かけたのはお兄さんの方でしょ？ 確かにこの娘の言葉も悪かったかも知れないけど、お兄さんは男の子なんだから、女の子に優しくしてあげないとダメだよ」

正に正論。お婆さんの言い分はごもつともだが、それで納得するほど最近の若者は賢くはなかった。

「うるせえんだよババア！ テメエは引っ込んでけよ！！」

「ヒヤア……」

若者は力加減無くお婆さん突き飛ばした。その勢いで、お婆さんは電車内の長椅子と角に腰を打ちつけてうずくまってしまった。

「……ちよつと何すんのよ!? ホントにアタマおかしいんじゃないのアンタ!?」

「ちよつとちよつとちよつと、これはアカン! 誰か人呼んできて!」

怒り狂った若者は見境無く暴れ回り、止めに入った乗客達も押し飛ばして千夏に突っかかっていった。

「テメエ、タダで済むと思うなよ! 女だろうと関係ねえぞ!」

「……!」

若者は千夏に掴みかかろうとしたその時、突然、若者の体がクルンと180度回転し千夏に背を向けた。いや、強引に向けさせられたのだ。

「……何だ!?」

「……えっ……?」

千夏の若者を挟んだ向こう側に、一人の学生服を着た体の大きな男子学生がドンと立っていた。

「それくらいで止めておけよ」

「……な、何だデメエはよ!？」

「……誰!？」

若者は男子学生に喰ってかかろうとしたが、体が動かない。男子学生が若者の胸ぐらをガツチリと大きな右手で掴んでいたからだ。若者はすぐにその手を振り払おうとしたが、その握力は半端なものではなかった。

「どうだ、動けるか？」

「……な、何なんだよ、デメエ……?」

それでも何とか若者は必死に掴まれた手を振り払おうとしたが、男子学生の腕はビクともしない。そのガタイのいい体は若者よりも遥かに大きく、完全に圧倒していた。

「どうする、やるのか？ 加減はしてやるが、怪我をしても保証は出来ないぞ?」



「……わ、わかったよ！ もういいから離せよ……！」

その声を聞いた男子学生はゆっくりと手を離した。車内のお客の視線を一齐に浴びた若者は、バツが悪そうに別の車両へと逃げていった。

「……………」

「……はあ、一時はどうなるかと思ったわあ……」

千夏は啞然とし、翼は力無くへろへろと座席に座り込んだ。助けてくれた男子学生はその二人を無視して倒れたお婆さんに手を差し伸べて起こしてあげた。

「大丈夫ですか？ どこか痛い所はありませんか？」

「……イタタタ、ごめんなさいねえ、ちょっと腰が悪いもんでねえ……………」

「次の駅で降りて救急車を呼びましょう、俺が外までおぶっていきます」

「……ごめんなさいねえ本当に、ついついでしゃばっちゃってね……………」

男子学生は軽々とお婆さんを担ぎ上げ背中に背負った。その勇敢で優しい姿に車内のお客さんからは自然と拍手が挙がった。

「……ねえ、ちよつと 안타……」

「何だ？」

「……とりあえず、ありがとう、助けてくれて……」

千夏は自分を助けてくれた男子学生に向かって軽く頭を下げた。しかし、次にその男子学生から出てきた言葉は千夏の予想外のものだった。

「お前の為じゃない、俺はこのお婆さんを助けたかっただけだ」

「……ハア？」

「そもそもお前があのお男に大声を出して突っかからなければ、こんな馬鹿みたいな事は起こらなかった」

「……ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 元々はあのお男がアタシを突き飛ばして……！」

「散々喧嘩文句を並べるだけ並べて、結局自分で収集出来ずに関係の無い人が痛い目を見た、このお婆さんの怪我はお前のせいだ」

「何よそれ！ 全部アタシが悪い訳！？ アタシが黙っていればこんな事にならなかったって事！？ 冗談じゃないわよー！！」

「そもそもそんなふざけたチャラチャラした格好をしてるのが悪いもつと清楚で大人しい格好をしていればあの男の態度も違ってかもしれない」

「は、は、ハア！？ あ、あ、あ、アンタアンタアンタ……」

千夏の口から出てくる言葉はもう言葉になっていなかった。怒りのあまりに呂律が全く回っていない。そうこうしてる内に電車は駅に到着した。

「恥を知れ」

男子学生は千夏にそう言い残し、お婆さんを背負って電車を降りていった。

「……Oh, shit! ピー（禁）ー!!」

怒りの余りに千夏の口から出てきた汚い英語の数々、申し訳ありませんがここでは文章にする事が出来ません。悪しからず。

「……これはまた、面白い事になったなあ、ウヒヒッ」

連休が終わろうと千夏の怒りは収まらない。怒りの発散口は学校にいる私達に向いた。

「こんな失礼な話ありえると思う！？ 何で見ず知らずの人間にここまで言われなきゃいけないのよ！！」

「……いや、それはねえ、まあねえ……？」

特に集中砲火を受けているのは男子陣。ヘタレな翔太は言われたい放題になっている。

「でも、千夏も翼も怪我がなくて良かったー！ そのお婆さん大丈夫だったのかなー？」

「……私だったら震え上がってます……」

「小夜や麻美子の言う通りだよ千夏、頭にきてカッーっときたかも知れないけどさ、その時、もし助けが入んなかったらアンタどうするつもりだったのよ？」

負けず嫌いは結構だが、周りの巻き込まれる人間はたまったもんじやない。

「ホンマやで！ 隣にいたウチの小っさい小っさいピュアハートはもうバクバクもんやつたで！？」

「これぞ正に身長が縮む思いだね！」

「寿命やアホ！ また逆さ吊りにするでこの変態メイドが！」

「ご主人様あゝ！」

「翼も薫ちゃんも真面目に聞きなさいよ！ 那奈の言ってる事もわかるけど、だからといって許せるものと許せないものがあるでしょ！？ 言いたい事を言えないで泣き寝入りなんて冗談じゃないわよ！ アタシは絶対に間違つてなんかない！！！」

「……はいはい、これだからセレブってヤツは……。とりあえず私達は千夏の頭から噴き出す火山灰を払いながら、その噴火が治まるのを待った。」

授業中終始愚痴をこぼしまくっていた千夏だが、少し気が晴れたのか放課後の時間にはすっかりいつもの様なご機嫌なハイテンションに戻っていた。

「……でねえ、この新作のバックが超かわいいのあゝ！ 絶対チエックよね、マジでヤバいから！」

「新作、新作言うなや！ ウチのオトンの名前『新作』やねん！ オトンの皮で出来たバックみたいやないか！」

「翼はパパの話になるとホントにうるさいわねえ、じゃあ『お二ユー』ならいいかしら？　って、いうくかあ、もうこのキラキラ感がたまんない！　持ち歩いてたら絶対注目の的よ！　超チエキ、チエキ、チエキよ！」

……切り替わりが早過ぎ。どこまで本気で怒ってるのかサッパリわからない。でも、まあいいか、機嫌よくなってくれた訳だし。

「麻美子もそんな地味なヘアスタイルとかしてもつたいない！　せつかく髪が長いんだから、もっと可愛くすればいいのに？」

「……えっ？　いや、その、私は、私は別に……」

今度は上機嫌で他人にお節介。目立たない様に隠れていた麻美子を引っ張り出して色々といじくり始めた。

「ねえねえ、今度アタシにコーディネートさせてよ？　麻美子にぴったりの可愛い服を用意して、アタシ行きつけの美容室行って、もうメチャメチャかわいく変身させてあげるから！」

「……いや、ホントいいですから！　私なんて……」

「麻美ちゃん、やってもらいなよー！　麻美ちゃんだったらきつと可愛くなるよー！」

「よし！　じゃあ小夜も麻美子と一緒に可愛く大変身させてあげ

る！」

「わーい！ 麻美ちゃん、一緒に大变身しよー！」

「む、無理ですうゝ！」

今日も全員、放課後には予定がなかったのでみんなでまた薫の家の喫茶店に行く事にした。

「……うわぁ……」

「……何よ？ アイツら……」

私と翔太は絶句した。駅から電車に乗ると、いかにも質の悪そうな若者達が床にベタ座りをして車内の一角を占拠していた。周りのお客も迷惑そうな顔をしていたが、怖いのか誰も注意出来る人はいないみたいだ。この電車の車掌は何をしているのか？

「……もう、ホント、ああいうの最っ低！」

「今日はやめてな千夏、突っかって行かんでくれや？」

「別にアタシに迷惑かけないなら関係ないわよ、最初からあんなバカみたいな連中なんて相手にする気ないもん」

それならいいのだか……。私も前に小夜と麻美子を助けたあの日から、先生達の監視が厳しくなっているのであまりめ事は勘弁してほしい。

「そうそうそう、触らぬ神に祟り無しと言うからねえ、日本語とは実に奥深い」

「……薫君の言う通りですけど、それでも何か怖いです……」

「大丈夫だよ、麻美ちゃん！今日は那奈も翔ちゃんも航くんもいるもん！」

遠目から恥知らずの若者連中を眺めていると、電車が次の駅に到着した。すると、ホームから帽子を被った子供達三人が車内に乗り込んできた。私立の小学生だろうか。

「あつー！ひとがいてとおれないよー！」

「このひとたちいけないんだー！ゆかにすわってるよー！？」

「どけよー、みんなとおれないだろー！」

「……空気読めやガキどもが……」

翼が自分の頭を押さえてポツリと呟いた。翼だけでなく、この車両に乗っていた乗客全員がそう思っただろう。



確かに子供達の言い分は正論でこもつともなのだが、そんな事でキツパリと改心するほど最近の若者達は人間が出来上がっていない。

「あぁん？ 何だコラくそガキ！」

「生意気な事言ってるといじめちまうぞコラ！」

「さっさ消えろ！ 家に帰ってママと遊んでろよバーカ！」

言葉の内容はまるで同レベル。余りのヒドさに聞いていた私は一瞬笑いが吹き出しそうになったが、何とかこらえて下を向いていた。

「う、う、うわーん！！」

「あっー！ なかしたー！」

「いーけないんだー、いーけないんだー！」

ここでタイミング良く、子供の一人が泣き出してしまった。その泣き声に車内がざわざわと騒がしくなってきたが、やはり誰も止めに入る人はいない。

その時だった。千夏が連中を見ていきなり指を差して大声を出した。

「あっー！ アイツ！ この前アタシに食って掛かってきたクソ男、

「アイツだ！」

千夏が指差す先には、ボサボサパーマの汚らしい服をだらしく着た若者がいた。

「……ホンマや、この前のアイツやで、アレ」

「えっ？ さっさ千夏が話してたヤツ？」

私とその若者を見ながら翼と小声で話していると、その私達を押しつけて千夏がズカズカと連中の方向へ歩いていつてしまった。

「ちょっとアンタ、いい加減にきなさいよ！」

「ちょ、ちよつと、千夏？」

私達の制止も全く聞かない。すでに千夏のマグマは噴火寸前だった。

「アンタ、まだこんなバカな事やってんの？ この子達よりアンタ達の方がよっぽどくそガキじゃない！」

「何だ、テメエ！？」

「あつ、この前のクソ女！ テメエ、何の用だよ！？」

「ヒュ、かわいいじゃん！　なあなあ、どこの学校なんだよネー  
チャン！？」

馴れ馴れしく近づく若者の手をバシッと振り払い、千夏の雄弁はまだまだ続く。

「アンタ達みたいな見た目も性格も汚いクソ男に名乗る訳無いでしょ！？　何を勘違いしてんの、気持ち悪い！」

「何だとコラア！！」

若者達も全員立ち上がって臨戦態勢になった。さっきの子供達を押しつけて、完全に千夏対若者連中の構図が出来上がっていた。

「……何しとんねん千夏！　あのアホが……！」

「ヤバくねー？　千夏ちゃん、超ヤバくねー？」

「翼、薫ちゃん、どうすんのー！？　那奈、千夏が危ないよー！ど  
うしょー！？」

「……全く、もう！」

ここで暴れたら、間違いなく私はまた『渡瀬優歌の妹』の汚名を世

間に広めてしまう事になる。しかし、小夜は涙目で私の服を引っ張るし、若者連中も完全にやる気になってるし、どうやらそんな事を言っている余裕は無さそうだ。

「翔太！ ちょっと手伝って！」

「えっ？ 俺もかよ!？」

千夏の救出の為に私と翔太で若者達に歩み寄ろうとしたその時、千夏に食い掛かろうとしていたボサボサパーマの若者がクルリと180度回ってこちらに背中を向けた。……いや、またも強引に向けさせられたのだ。

「またお前か」

「……へえっ？」

「……あっー！ アンタこの前の……！」

若者達に立ちはだかった制服姿の背の高いゴツイ男子学生、それは、あの時千夏を助けた後にクソミソに言い潰したあの男子学生だった。そして相手の若者は、今度は胸ぐらではなくボサボサの髪の毛を右手でガツチリと掴まれていた。

「どうする？ このまま筆りたいか？」

「い、い、痛え……！」

突然の巨大な敵の登場に、残りの若者達は驚いて立ち尽くしていた。

「お、おい！ 何なんだよテメエは！？」

「……あれ、お前、まさか、澤村一茶か！」

一人の若者が男子学生を見て後退りし始めた。どうやらこの男子学生と面識がある様だ。

「ああ、先輩じゃないですか、久し振りですね、部活動を逃げ出してから何をしてるのかと思ってましたよ」

その話の間にも、髪を掴まれたボサボサパーマは目に涙を浮かべながら足をジタバタしている。よく見ると少し足が浮き上がっていた。

「痛え、痛え、痛え！ 何だよ、お前この化け物の事を知ってんのかよ！？」

「ヤベえ！ コイツ、柔道の全日本王者だぞ！ かなう訳が無え、逃げるぞ……！」

「お、おい！　ちょっと待てよ！　おい！」

「……髪を掴まれてる俺を置いていくなあ！」

怯んでしまった連中を見て、男子学生は掴んでいた若者の髪をゆつくりと離してやった。

「仏の顔も三度までと言うことわざがあるが、俺は決して仏ではない、次は無いと思え」

「ヒ、ヒイイイイ！！」

電車が駅に着いて扉が空くと、若者達は車両から飛び出て一目散に改札へと逃げていった。

「どうしようもない奴らだな、子供達、怪我は無いか？」

「うん、だいじょうぶだよ！おにいちちゃんって、つよいね！」

泣いていた子供達の頭を撫でながら、男子学生のゴツイ顔が一瞬だけ笑顔になった。

「……澤村、澤村一茶！？　お前、一茶なのか！？」

若者連中が言っていた名前を聞いて、翔太が男子学生に向かって駆け寄っていった。

「確かにそうだが、お前は誰だ？」

「風間翔太だよ！ 覚えてないか？ 幼稚園の時の……」

「翔太？ お前、翔太か？」

「そうだよ、翔太だよ！ 覚えていてくれたか、久し振りだなあ！」

どうやら翔太とこの男子学生は古い知り合いの様だ。しかし、私はこの学生の名前に聞き覚えが無いので、まだ翔太が渡瀬家に居候に来る前の話なのだろうか？

「確かに言われてみれば翔太だな、顔にまだ少し面影がある、雰囲気は変わっていないな」

「お前は、……変わったなあ……、俺と身長とかあまり変わらなかったのにな……」

「それは幼稚園の時の話だろう、今のこの体は毎日の柔道の稽古の成果だ」

「ああ、そうか、やっぱりお父さんから習っているんだな、柔道を」

柔道やら幼稚園やらというキーワードが出ているが、横で聞いててもよくわからない。悪い人間では無さそうなので少し話して見る事にした。

「……ねえ、話してるところ悪いんだけどさ、翔太はこの学生と知り合いなの？ 何なのか全然わかんないんだけど？」

「ああ、那奈は知らないだろうけど、幼稚園の時に一緒だったんだ、澤村一茶って言って……」

「そんな事はどうでもいい！！」

突然すっ飛んできた千夏は喋っている私と翔太を突き飛ばし、デカい男子学生の前にドン！ っと仁王立ちした。

「アンタ、この前はよくもメチャクチャに言ってくれたわね！ 柔道王者か何だか知らないけど、アンター一体何様……！！？」

「この歩くやかましい電飾花輪は翔太、お前の連れか？ この前からチャラチャラと目障りでうっとうしいのだが」

「なっ、はっ、はな、はなわ、花輪ってアンタアンタアンタ……」

「この前の時もそうだが、お前を助けに来た訳ではない、子供達が泣いていたから助けに來ただけだ、つまり俺はお前に文句を言われる事はしていないし、言われる筋合いも無い」



「……グアツグイグ＋－×÷¥\$%#＊　　　　〒ガコグギツ……」

「……あーあ、もうアレは完全に頭の中がショートしとるで、千夏……」

「……あまり近づかない方が良さそうね……」

もう言葉になっていない。千夏の髪が今にも逆立ちそうになっていた。

「ここで降りる、機会があつたらまた会おう、翔太」

「……あ、ああ、柔道、頑張れよ一茶……」

「お前もな」

もちろんこれで治まる訳がない。千夏は周囲に怒りの電磁波を放ちながら鬼の様な形相で男子学生に詰め寄ろうとした。

「ちちちちちちちょっと、まままままちなさいよおおおおお！」

「一つ、お前に言い忘れた事がある」

「……？」

「恥を知れ」

「グワアアアアアアアアアア！……！！！」

千夏、完全崩壊。周りにいた子供達や他のお客も千夏の周囲5メートル以内から全員避難してしまった。

「……どうすんのよ、コレ？ 誰がなだめるの？」

「翔太、あの柔道ゴリラの知り合いなんやろ？ 何とかせえよ？」

「何でだよ！ つーかもう近寄れないだろ、臨界点突破してるって……」

「ねーねーねー、麻美ちゃん、千夏どうしたの？ アタマから煙りが出てるよー？」

「……小夜ちゃん、シッ……」

「………触らぬ神に祟り無し」

「巧い事言っね、航、正にその通り、日本語とは実に奥深い」

怒りの紅に染まった千夏を、慰めるヤツはもういない。世紀の大噴火の前に人間とは何て無力なものなのだろうか。

「Oh, shit! ピー(禁)ピー(禁)ピー(禁)ー(禁)!!」

「……あちゃー……」

この日から約1ヶ月、千夏の火山灰は延々と私達の頭の上に降り積もり続けた。

## 第18話 言わせてみてえもんだ

夏休みも間近になった頃、翼から予想もしないお誘いがあった。

「ウチのオトンがな、来週の休みにみんなを連れて郊外のキャンプ場へ泊まりがけで遊びに連れて行ってあげたいって言うてんねん、せやから特別にオマエらも誘ったるわ」

いつもの女仲良し軍団だけならともかく、俺ら男連中にも声が掛かるとは思っていなかったが…。

「……さて、どうしたもんかなあ……？」

えっ？ いつもと進行の言葉口調が違うって？ それは今回は俺、風間翔太が進行担当だからね。つーか、今回の話はあまり女子には知られたくない話なんだけど……。

「お悩みご無用！これは行くでしょ、行くしかないでしょ！？せつかくのお誘いですよ、翔太の旦那！」

この話を聞いて一番最初に食いついてきたのはやはり薫だった。も

うすでに登山服や歯ブラシなどのお泊まりセットまで用意しているとか……。

「……って言ってもなあ、何か俺達さ、面倒くさい仕事を押し付けられて終わりって気が……」

「なぐんてネガティブシンキングな生き方なんでしょう！ そんな事を言っていたら、あなたに幸せは一生訪れませんよ！　なあ、航！」

「…………断るのは失礼」

「何だよ航、お前まで行く気満々かよ？」

「…………瑠璃も同伴で構わないと言ってくれている、色んな場所に連れて行って色々と経験させてやりたい、みんなが一緒なら瑠璃も喜ぶ」

「……そっか、瑠璃ちゃんか、なるほどな、そういう事なら俺も一緒に行った方がいいのかなあ…………？」

「多少の雑用係りも何のその！　行きましよう、行きましよう！　あなたについてどこまでも、家来になって行きましよう！」

「…………俺ら、犬、キジ、猿か？」

一度、小さい頃に翼のお父さんには今回の様なキャンプに連れて行って貰った事があるが、あの時は最悪だった。

途中で小夜がへたっておんぶするハメになったり、翼には食事の用意を全て押し付けられたり、挙げ句は那奈にわざとではないのに着替えているところを目撃してしまい殴られて蹴られてスケベ呼ばわり……。

「今回は我々がもっと楽しい思い出をあなたにプレゼントフォーユー！」

「……それが一番不安なんだよ！」

まあそれはともかくとして、今日は一学期最後の体育の授業で体育館を二つに分割して男子はバスケット、女子はバレーボールをやる事になった。

俺達三人はすでに一試合やり終わって、体育館の端に座って他の試合を見ながら一休みしていた。

「何で休み前の体育の授業っていつもお遊びみたいになっちゃうのかねえ？ まあ楽しいからいいんだけど」

「薫はバスケットをやると本当に楽しそうにやるよな？」

「そりゃ俺ってこれでもバスケットボール部員なんだぜ？ まあ、全然部活動に出てないけどね」

「でもさ、お前、スリーポイントシュートばかり狙うなよ、たまにはこっちにもボール渡せよ」

「だってスリーポイント失敗したって間違いなく航がリバウンド取ってくれるしい〜」

「……………ゴール下しか仕事が無い」

「……………確かに、航のデカさは反則だよな、お前がバスケットやればいいのに」

「……………興味ない」

隣のコートでは女子がキャーキャー声をあげながらバレーボールを楽しんでいる。それを見た薫は、ニヤニヤしながら俺にヒソヒソと小声で話しかけてきた。

「……………ちょっと昔の頃って女子生徒は体育の時間、『ブルマ』って物を履いていたらしいでっせ、翔太の旦那？」

「……………何だよ、急に、何の話だよ……………」

「しかしこうしてじっくり観察すると、女子は同じ年齢でも人それぞれ体つきのあちこちに違いがあるもんですなあ、ウヘヘ」

「……………また、何か変な話に俺を巻き込もうとしてるだろ？」

「何をおっしゃいますか、そんな変な話が大好きなクセしてイヤらしい」

「大好きじゃねーよ！ 変な言いがかりつけんなよ、お前はいつも

……！」

「そんな事言いながら、目線は飛び跳ねてる女子のある身体の一部に釘付けなんじゃありませんか旦那？　グヘヘ」

「見てねーっつーの……！」

イヤらしいのどっちだよ、女子の体つきとか体の一部とか、そんな事を言っている薫の方がよっぽどイヤらしいじゃねーかよ！　まあ、俺も全然興味がない訳じゃないけど……。

「本当に素直じゃないねえ、旦那は、この時期に男子が女子に対して色々興味を持つ事は自然の成り行き、つまり第二次成長期、当たり前の事なんだせえ？」

「だからっってお前みたいにエロ丸出しになれる訳がないだろ！」

男女でお泊まりキャンプの話に触発されたのか、今日の薫のエロ話はどんどん加速していく。今度は俺と那奈の關係に踏み入ってきた。

「それとも旦那はすでに那奈お嬢とあんな事やこんな事をやり済ませて、今更他の女子には興味無いとでもおっしゃりますか？」

「バ、バ、バカかお前！　そんな事してる訳ねーだろ！　何で俺が那奈と……！」



「ええ、じゃあ旦那は女子より男子の体に興奮するんですか！  
？ ヤバあい！ 俺ピーンチ！！」

「お前、本当にバカじゃねーの！？」

ピッ  
！！

こちらに向かって笛が鳴らされた。あまりのくだらない話について  
い大声になってしまい、喋っているのが先生にバレてしまったのだ。

「そこ、うるさいぞ！ 喋るんだつたら外に出て喋ってろ！！」

「……………すみません……………」

俺達が体育館の端で先生に怒られてるのを、那奈達はバレーボール  
のコートの中でプレーをしながら見ていた。

「……………おいおい、何か怒られとるで、アイツら……………」

「……………ヤダ、何かカッコ悪い……………」

「……………何をお喋りしてたのかなー？ ねっ、麻美ちゃん？」

「……………さ、さあ……………？」

「……どうせあの二人だったらスケベな話か何かじゃないの？　よく飽きないよね、全く……」

全く持つて那奈の予想通り。薫は怒られたのも懲りずに先生に気付かれない様にまた俺にヒソヒソと小声で話しかけてきた。

「……ちなみにさ、翔太は誰がいいんだよ、あのメンバーの中で……？」

「……えっ、何がだよ？」

「……だから、いつものあのメンバーの中で付き合うなら誰がいい？　って事だよ」

「ハア？　何を言い出してんだよ、お前は？」

「だって那奈お嬢とは付き合ってる訳じゃないんだろ？　じゃあ、誰が一番なんだって話だよ」

薫はさらにニヤニヤと笑いながらウザくてクドいスケベ顔を俺に近付けてきた。俺が相手では無くて女性だったら完全にセクハラだ。その間、航は俺達の話聞いてるのかいないのか、足元にあるバスケットボールを床の上でクルクルと回している。

「別にそういうつもりでみんなと一緒にいる訳じゃねーよ！　ただの友達って事で……！」

「シッー！声がデカいつて！　また怒られるぞ！」

興奮する俺をなだめると、薫は軽く咳払いをしてゆっくりと静かに話し始めた。

「……いいか、翔太？『例えば』の話だよ、もしあの女子メンバー全員から告白されたら誰を選ぶかって事さ」

「……想像つかねーよ……」

「……何だよ、決められないって事？　本当にあなたって人は何て優柔不断な御方なんでしょう……」

「……いや、だからそうじゃなくてよ、あのメンバーから告白されるって話自体が……」

「よし、じゃあ消去法で行こう！」

困惑する俺を置いて、薫は容赦なくズカズカ話を進めていった。人の話なんぞちつとも聞いちゃいない。

「じゃあ、まずはキミが良く知っているであろう那奈お嬢から！翔太から見ても嬢はどうなのよ？」

「……だからよ、どうだって言われてもな……」

「いくら双子みたいに育てられたって言っても、旦那は男でお嬢は女、何も感じないって事は無いでしょが？」

「……うーん、そうだなあ……」

薫の言葉に上手い事乗せられて、俺も次第にその気になってこのくだらない話に付き合ってしまった。

「……みんなには気が強くて暴力的だけどさイメージだろうけど、那奈はああ見えても優しい所があつて、責任感が強くて、でもそれが逆に俺としては何か心配だったりするんだよね、頑張り過ぎちゃつてゐるって言うか……」

「……いやいやいや、そういう事を聞きたいんじゃない、女性としてどうなんだって事なんだけどなあ？」

「……女子として、って？」

「つまりルッキングフェイスやボディプロポーションの事さ！」

アホか、何がボディプロポーションだ、このスケベ野郎が！

「……あのなあ、俺はそんな所に注目なんて今まで一度も……」

「一緒に住んでいて、風呂に入ってるのを覗きたいとか思わないの

かよ？ 男としておかしくね？」

「ねーよ！ ある訳ねーだろー！！」

「お互い男女の付き合いになったらあんな事そんな事したいと思わないの？ 別に血縁がある訳でも無いのに一緒に生活出来るって余程の好意がないと苦しくねえ？」

「そんなんじゃないっつーんだよ！ 俺は那奈に対してエロ目線もねーし、ましてや個人的な好意なんて……」

「んじゃ、顔も見たくないほど嫌いって事？ そーいう事でファイナルアンサー？」

「……あのなあ、そんな極端な話……」

「……じゃあ、何て答えりゃいいんだよ。薫のマシガンのような質問攻撃に俺は自分の耳が熱くなってきたのが自分でわかった。

「……ふむふむ、どうやら旦那にお嬢の事を聞くのは愚問だったね、こりゃ失礼、失礼」

「……何だよ、どういう意味だよ、それ！？」

「さてさて、じゃあ次の話にいきますかね」

薫は俺の心の底を見透かす様に横目でこちらを見てニヤリと笑い、

さつさと次の話を続けた。

「んじゃ、次は小夜ちゃん！ 翔太の旦那はどう見ますか、小夜ちゃんの事は？」

「……俺と小夜は従兄妹なんだけどな……」

「だーから、『例えば』って言ってんだろがこのムツツリスケベ」

「お前……！」

「普通に1人の男として素直に考えろよ、俺は小夜ちゃんは可愛いし優しいし純粹だし最高だと思うぜ？ そーいう事だよ」

こんな頭の悪い話をあつけらかんとした顔でペラペラ喋る。桐原薫、コイツは筋金入りの女好きの様だ。しかし、マジで小夜が最高なのか？

「えっ、何？ お前、小夜の事を狙ってんの？」

「た・と・え・ば」

……例えばねえ、まあ、そりゃそうだろう。本当にそんな事になったら間違いない薫は那奈に殺されるだろう。

「航さんはどうですか？ 小夜ちゃん、可愛いと思うだろ？」

「……………じゃない？」

突然の薫の無茶な質問に航ははつきりと答えた。正直驚いた、聞いていない振りしてしっかり話を聞いてやがる…………。

「…………航、マジで？」

「……………ルックスなら普通にそう思う、けど」

「……………けど？」

「……………そんな事とは別に、小夜ちゃんには瑠璃の事とか色々と感謝している」

「……………じゃあ、航だったら小夜を選ぶって事かよ？」

「……………例えば」

「そうそう、『例えば』なっ？」

「……………」

……………また例えばかよ、何て便利な言葉なんだろう。何か妙に変な緊張をしている俺の両肩を後ろから揉みリラックスさせて薫は質問を続けた。

「もっと肩の力を抜いてさ、気軽に考えればいいんだって」

「……気軽に？」

「そうそう」

「……………そうそう」

……何か、上手く二人に乘せられている感じがするが、まあ、いいか。別に本人達に聴こえる訳では無いし……。

「……まあ、あくまで『例えば』だけど、小夜は確かに俺も見た目は可愛いと思うよ、しかしなあ……………」

その頃、バレーボールをしている女子コートでは、

「小夜！ ボールそっちに行ったよ！」

ボカーン！！

「那奈、痛いよー」



「頭でボール受けてどうすんのよ！ バカッ!!」

……やっぱりなあ、こうなるよなあ……。

「……実際さ、小夜と付き合ったりしたらムチャクチャ苦労するぞ？ 色々……」

「……全くとって同意見、やはり見る所はちゃんと見てますなあ、旦那？ じゃあ次、翼は？」

「……全員言うのかよ？ 面倒くせーな、翼？」

その頃、バレーボールをしている女子コートでは、

「翼！足でボールを蹴るなっつーの!」

「ブロックしてもネットまで手が届かへんし、スパイクしようにもやっぱり届かへんし、もうつまらへんねん!」

……やっぱりなあ、こうなるよなあ……。

「……翼は論外だよ、あの喋りにしろ態度にしろ、正直彼女って考えると俺にはキツいな……」

「……ふん、そう？」

「……何だよ薫、何か文句あんのかよ？」

「いや別に、じゃあ次、千夏ちゃん！」

「……サクサク行くなあ、千夏ちゃんかあ？ 確かに可愛くてオシヤレで男子にも人気あるよなあ……」

「おつ、キタキタ、キマした好印象！」

その頃、バレーボールをしている女子コートでは、

「いゃん、ボール怖い！」

「千夏！ ちゃんと真面目にやれっつーの！」

……でもね、真の姿はね……。

「たださあ、この前の電車内でのあの一件を見ちゃってからさあ……」

「……コワいっすよねえ、千夏ちゃん……」

俺と薫が震え上がっているその頃、バレーボールをしている女子コ

ートでは、

「今のって絶対にアウトでしょ〜!?　こんな不公平なジャッジありえないんだけど〜!？」

「千夏！　いちいちキレるなっつーの！」

……やっぱりなあ、こうなるよなあ……。

「じゃあ最後、麻美ちゃんは？」

「……うーん、一番おとなしくて女の子らしいけどさ……」

その頃、まだバレーボールをやっている女子コートでは、

「……あのさ麻美子、何でアンタさっきからずっと私の真後ろに隠れてんの？」

「……だ、だ、だ、だって、ボール怖いんですもん……」

……やっぱりなあ、こうなるよなあ……。

「……怖がり過ぎだよね、下手に近寄るとどこかへ逃げに行っちゃ

いそうで……」

「……うーん……」

だから想像なんてつくかつて言っただよ、『例えば』もクソもあるもんか。まあ、とても本人達の前では言えないけど。

一通り話を聞いた薫は、あごに手を当てて真面目な顔をして黙り込んだ。コイツがこういった仕草をする時は大概ろくな事を考えてはいない。

「つまりは旦那、キミはあそこにいる女子全員、自分の彼女にするには不適切と言いたい訳か、この贅沢者めが」

「……何でそうなるんだよ……？」

「でもそんな事言っちゃって、誰かが『翔太くん、好き』なんて言われたら有頂天になっちゃうクセしてコノコノ！」

「あー、うつとしい！ ほっぺプニプニするな！ だから何が言いたいんだよお前は！？」

「……風間！ー！」

俺の声が大きすぎて、再び先生に怒られてしまった。周りを見ると生徒全員が静まりかえっていて、その視線は俺一人に集中していた。

「……風間、お前、本当にいい加減にしろよ……」

「……すいません……」

俺は残りの体育の授業中、ずっと体育館の隅に立たされる羽目になった。その姿を見て、那奈達が指を差して笑っている。

「翔ちゃん、また怒られてるよー、麻美ちゃん！」

「……そ、そうみたいだね……」

「ヤダ、翔太君ったらカッコ悪い！」

「ホンマにやかましい男やな、アイツは」

「……バーカ」

そんな笑い者の俺の横には、卑劣な罠にハマてくれた心優しい親友が両端に寄り添ってくれた。

「興奮しすぎですぜ、翔太の旦那！　ウハッ！」

「……私語は厳禁」

「……お前ら、覚えとけよ……」

その日、家に帰ってから非常にヤバい状態になった。あれから教室に戻ってから薫がイヤらしい話ばかりをするから、俺は変に那奈を意識してしまった。

「じゃあお姉、今日夕飯いらないの？」

「おう、この前の試合の勝利のご褒美に代表が美味いもんご馳走してくれるらしいからよ、腹一杯食ってくるわ」

「……人を殴ってボコボコにKOして勝ってご馳走、もったまんないでしょ？ お姉……」

「全くだな、天国だぜ、カッカッカ！」

「……相手、いなくなりそうだね……」

那奈と優歌さんが喋っている間も、俺の頭の中はモヤモヤしていた。

（……彼女とか男女交際とか、あまり真面目に考えた事なんて今まで無かったなあ……）

なんて事をテーブルの椅子に座ってポツと新聞を読みながら考えていたら、

「……何をボツ！つとアホな顔して考え込んでんだ、コラ？」

「……うわっ！」

いつの間にか俺の真横に優歌さんが立っていた。驚き慌てふためく俺の顔を見て優歌さんはニヤニヤしている。

「何だよ何だよ、真面目な顔して考え込んで、悩み事が、オイ？」

「……いや、別に、これといって悩みは……」

「そんな訳ねえだろ？ 新聞読むフリして何か考えてたろ、オイ？」

「……いや、本当に別に……」

俺は優歌さんの鋭い突っ込みから気を紛らわす為に、テーブルの上のコップに入った冷たいお茶を口に含んだ。

「……ズバリ、言い当ててやろうか？ おめー、今、メチャクチャエロい事を考えてたろ？」

「ブホッ！！」

反応してしまった俺は口に含んだお茶を吹き出しそうになった。

「ウツヒヤツヒヤツヒヤツ！ 翔太、おめーは本当に素直だなあ！  
？ あー、おもしれえ」

「……勘弁して下さいよ……」

「……で、どんなエロい事を考えてたんだよ？ この優歌様に話して御覧なさい？」

「……いや、その、それは……」

「あれ？ お姉、集合時間って六時じゃないの？ もう五時半だよ？」

「あつ、やべえ！」

俺が優歌さんにまた強制尋問されそうになった時、風呂場で制服から私服に着替えてきた那奈が部屋に入ってきた。  
すると、那奈の一声で時間に気づいた優歌さんは、俺を放つぼりだして急いで出発の準備をし始めた。……何とか尋問は避ける事が出来た様だ。

「んじゃ、行ってくるわ、留守番よろしくな」

「行つてらっしゃーい、お姉」

「……い、行つてらっしゃい……」



「あー、そうだ、おい翔太、耳貸せ」

「……な、何スか？」

「……二人つきりだからって那奈を押し倒すなよ？」

「なっ……!!」

「んじやな、バイバーイ！」

優歌さんは俺に余計な事を耳打ちして出掛けて行った。もちろん、那奈には話の内容が聞こえてなかったみたいで、物凄く軽蔑する様な冷たい目線で俺を見ている。

「……何の話？ 今の……？」

「……い、いや、別に大した事じゃ……」

「……大した事じゃ、ね、ふーん……」

何か納得しない顔をしながら那奈は台所に入って行った。とりあえずは優歌さんもいなくなっただし一安心。

「……今日さ、私と翔太といづみさんだけだから、夕飯、簡単にチャーハンにしちゃうけど文句無いよね？」

「……あ、ああ、いいんじゃない？」

「文句あっても聞かないけどね」

「……じゃあ、聞くなよ……」

「いいなあ、お姉、何をご馳走になってくるのかな？ 羨ましいなあ……」

俺は新聞を読んでいるフリをしながら、横目で台所に立つ那奈の後ろ姿をチラチラと見ていた。

俺のモヤモヤしている気持ちを後押しする様に、那奈の格好はＴシャツにシヨートパンツとかなりの軽装でちよつと目のやり場に困る。……じゃあ見るな、って話だが……。

（……那奈の姿を改めて見ると、小学生の時より明らかにスタイルとか変わってきてるよなあ、何か大人っぽくなってきたっていうか……）

……イカン、完全に頭がエロモードに入っている。ちよつと深呼吸して落ち着こう。俺は気持ちを切り替えて邪念を取り払おうとしたが、その邪念をさらに加速させるものが視線に入ってしまった。

（……あれ？ ブラ、透けてる！？）

白いTシャツの下にうつすらと『それっぽいもの』が透けて見えた。那奈が後ろを向いてるのを良いことに、俺はドッキリとその『それっぽいもの』に見入ってしまった。

（ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバい！ 完全に思考回路が暴走してる！）

新聞の記事に目を落としてみたものの、文字の内容など全く頭に入らない。すぐに視線はチラチラと那奈の後ろ姿に向いてしまう。

（……でも、那奈もそういう物を着ける様になったんだな……）

そんなバカな事でノスタルジックな気分に戻っていたら、

「……翔太！」

「は、はははは、はいっ!？」

突然、那奈に名前を呼ばれて返事の声が裏返ってしまった。

「……何、今の声？」

「いや、いや、いや！ 何でもない、何でもない、何でもない！  
で、何か用？」

「……あのさ、いづみさんもお昼に暑い中を汗かいて仕事してるんだろ？ しょうから、シャワーよりもお風呂を沸かしてあげた方がいいかな、って思っただけど……？」

「はい、はい、はい！ 風呂掃除だね！ 俺に任せてくれよ！」

「……本当に大丈夫？ 何かあったの？」

「全っ然、何にもない！ じゃあ、掃除してきまーす！」

「……？」

ちょうど良かった、一度部屋から離れて頭を冷やそう。何でこんなバカな事に思考が支配されてしまっているのか……。

「……薫と優歌さんのせいだな……」

一つ深呼吸をして邪念を振り払い、気持ち切り替えて脱衣場に入った。すると、一番見てはならない物が洗濯機の上に置いてあった。

「……！！！」

綺麗に畳まれた服の間に白いブラジャーが一つ、まるで俺を待ち受ける様にそこにあった。

(……そついえばさっき、那奈がここで着替えて……)

いけない事とはわかっているが、頭も体も言うことを聞いてくれない。思考回路は全て焼き付き、頭の中は完全にブラの色と同じ真っ白になっていた。

(……落ち着け！ 落ち着け翔太！ こんなところを見られたら、俺は本当にスケベライダーになっちまうぞ……！)

しかし男の本能が軽く理性を上回ってしまっていた。俺の手は為すがままに次第に白いブラに伸びていった。あと1cmで手が届く、その時だった。

「ただいま」

「……！！」

家に帰って来た母さんの声で俺は我に帰った。危ない危ない、もう少しで取り返しのつかない事を仕出かすところだった……。

「いづみさん、お帰りなさい、汗だくでしょ？」

「暑いわねえ、もうベトベトよ」

「シャワーだけじゃ疲れ取れないでしょ？　今、翔太がお風呂洗ってくれてるから後で湯船に浸かって？」

「サンキュ、気が利くじゃない？　じゃあ、後でお風呂沸いたら入らせて貰うわ」

しかし、こんな物が置いてある近くでノロノロしていたら変な誤解を生みかねない。俺はさっさと風呂場を掃除して二人がいるリビングに戻った。

「翔太、ただいま、お掃除ありがとね」

「……う、うん、お、お帰り、母さん……」

「……何よ、どうしたのアンタ？　随分と疲れてるみたいだけど大丈夫？」

母さんが息切れしている俺を見て心配そうに言った。そりゃ全力で急いで掃除しましたから、邪念を振り払う為に……。

「……何か、翔太のヤツ、さっきからずっとおかしいの、ちょっと怖いんだけど……？」

「……まあ、この時期の男の子は色々あるからねえ、なんかあったらキツチリ相手をしてあげてよ、那奈？」

「何よ、何かって！ 変な事を言わないでよ、いづみさん！」

「……ハ、ハハハ……」

俺は苦笑いをしてやり過ごした。しかし、母さんの冗談のおかげで少し気が紛れ、何とか自分の理性を取り戻す事が出来た様だ。一時はどうなるかと思ったが…。

「……あつ、そうだ、いづみさん？」

「ん？ 何？」

「いづみさんの服とか下着とか、洗濯して脱衣場の洗濯機の上に置いておいたから、後で持っていてね」

「あつ、そう、サンキュー！」

「……えっ？ じゃあ、さっきのブラの持ち主は、俺が赤ん坊の時に母乳を飲ませてくれた女性の物なの？」

「……何よ、翔太？ 何をそんなにガツカリしてんの？」

「……いづみさん、やっぱり翔太、何かおかしいでしょ？ 病院連れて行く？」

「……いや、何でもない、何でもないです……」

思春期とは実に苦く、甘酸っぱい物だと痛感した一日だった。トホホ……。



## 第19話 HERO

真夏の観光地へ向かう人と車の渋滞を避ける様に、一台のワンボックスカーが高速道路を北西へと向かっていた。

都会のビル群や住宅地は次第に姿を消し、変わりに緑豊かな山々が周りを覆い始め、青く晴れた空には大きな雲が浮かんでいる。

「うほほーい！ 車の窓を空けてみーや、メツチャええ風が入ってくるでー！」

「うわあー、いい風ー！ 超涼しいー！」

「最高やろ、千夏！？ ウチと友達なのを感謝せーよ！」

私達は夏休みを利用して、翼の父親・新作さんと一緒に郊外のキャンプ場に一日泊まりがけで遊びに行く事になった。

山の奥にあるキャンプ場に向けて、新作さんが運転する車は渋滞に捕まることなくスイスイと順調に走っている。

「翼、気が済んだらそろそろ窓閉めえや？」

「えっ、何でやねんオトン？ メチャメチャ風が入って気持ちええのにー」

「後ろ見ても、ちっちゃい子」

「……あつ……」

新作さんの言葉を聞いて振り向くと、後ろの座席で航の膝に座っている瑠璃が震えていた。どうやら、車内に入ってくる風が寒いみたいだ。

「すまんなあ、寒いやる？ 今、窓閉めるさかいに」

「……気づかんですまんなあ航、瑠璃は大丈夫やるか？」

「……窓閉まったから、もう大丈夫」

「でも、瑠璃ちゃん鼻水が出てるよー？ はい、お鼻をティッシュで押さえてあげるからチーンってして？」

小夜の声に合わせて、瑠璃は思い切り鼻をかんだ。すっかり小夜もお姉さん気分の様だ。

「翼、もうちょい周りに気配らん様にならんとアカンなあ？ そんな事ではいい女にはなれへんで？」

「おねーたん、なれへんでー」

「じゃかましいわ岬は！？ しっかしオトンはホンマに良う周りに

気が利くなあ、こんな気遣いを毎日して貰えるオカンの事がウチは羨ましいわ」

「翼も美香ちゃんぐらいかわいい女になったら、俺がいつぱい気遣ってメチャメチャ可愛がつてやるで！」

「いやーん、そないな事オトンに言われたらウチ困るう」

後ろの座席に私達がいるにも関わらず、翼は助手席で人目もはばからずにモジモジと体をくねらせながら照れていた。

「……本当、絵に描いた様なファザコンだね……」

高速道路を降り、山の斜面に沿って人気の無い登り坂を車で走って行くと、森の側道の奥にキャンプ場入口の看板が見えてきた。

「ワイー、到着！ 到着したよ、麻美ちゃん！」

「……もう限界なんで早く降りたいです、ウプッ……」

「車で入れるんはここまでや、ここからはちょっと歩いて行くから気合い入れえよ？」

岬と手を繋いでいる新作さんと翼を先頭に、私達は車の中からそれぞれの荷物を持ってコテージがあるキャンプベースへの山道を登っ

て行つた。

しかし、重たい荷物を背負いながら登っていくにはこの山道の斜面が私達中学生には結構キツイものだった。

「……結構、あるね、道……」

「……何よ、翔太君へばつたの？ アタシは普段から陸上やってるから全然平気よ……」

「……ホンマか千夏、オマエちょっと息切れてへんか……？」

「……何言つてんのよ、全っ然平気っ……」

陸上で鍛えている千夏でさえバテてるのだから残りのメンバーはもうフラフラだ。私も翔太ももう結構足にきている。

そんな私達に気づいてか、先頭の新作さんは立ち止まって私達の様子を坂の上から心配そうに眺めた。

「……みんな、大丈夫か？ ちゃんとして来とるか？」

私の真後ろには瑠璃を背中に背負ってリュックを前に担いでいる航がいた。二つ合わせて間違いなく20kgは超えているだろう。

「……航、平気？ 瑠璃と荷物をいっぺんに担いで……？」

「……………いつも慣れてるから平気」

その航の後ろには不必要と思えるほどパンパンに荷物を詰め込んだリュックを背負った薫がいた。何か痛むのか先程から右足を随分と気にしている。

「……………何、どうしたの薫、足痛いのか？」

「……………イテテ、ううん全然平気、ピンピンしてまっせ！」

「……………まあ、アンタは少し痛がるか疲れてる方が静かでもいいけど……………」

後は一番不安な運動神経ゼロでドジっ子なあのコンビ。果たして無事についてきているだろうか？

「小夜、麻美子！ 二人とも大丈夫！？」

薫から遥か離れた後ろに二人の影が見えた。車酔いの影響も響いてか、あっという間に麻美子がバテた。その麻美子を小夜が一生懸命後ろから背中リュックごと押している。

「……………麻美ちゃん！ ほら、ガンバレ、ガンバレ！」

「……ハア、ハア、ハア、ごめんね、小夜ちゃん……」

……こりゃダメだ。このまま二人を置いていたら間違いなく遭難する。仮に坂道を登ってこれたとしても、誰かが見張っていないと絶対に道に迷う。この二人なら100%あり得る。

「新作さん、私は小夜達と後からついて行きますから、みんなで行って下さい」

「おう、承知した、氣い付けろよ那奈、ゆっくりでええからな」

私はせっかく登ってきた坂道を下って小夜と麻美子の元に向かった。一方、上の方では新作さんとまだ少し元気な翔太が列を引っ張っていた。

「……新作さん、体は大丈夫ですか？　少しは良くなったって聞いてますけど……」

「おう、大丈夫や翔太、無理やったらここまで来えへんて、任せとけ、少なくともお前らの足手まといにはならんつもりやで」

「当ったり前やないか翔太！　オトンはそんなヤワな男とちゃうで！　世界のあちこちで命を削って真実を報道してきたジャーナリストやぞ！　こんな所でくたばるかいな！」

「……何で心配しただけなのに怒られんの？　しかも何で翼に……」

すると、新作さんを困らせる様に、おんぶして貰っている瑠璃を見て岬が駄々をこね始めた。

「パパー、もうつかれたよー、あるけないよー！」

「……しゃあないなあ、ホレ岬、パパが抱っこしたるわ」

「わーい、抱っこ抱っこー！」

「……えっ、ちょっと無茶やるオトン？　オイ岬！　オマエ、オトンに無理さすなや！」

「大丈夫や、後ろで中学生が同じ事をやって登って来てんねん、俺が音を上げられるかいな！　さあ、行くで翼！」

「……きつたないわあ岬、ええなあ……」

指をくわえて羨ましがる翼の後ろから、ニユゥと怪しい人影が迫っていた。

「……どうしたの？　翼ちゃん？　抱っこして欲しいのお？」

「やつかましいわ、千夏！　オマエはさっさと登らんかい！！」

「キャハハ！　翼ってホントにお子ちゃまねー！？」

新作さんはさつき翼が話した通り、世界中を飛び回り様々な事件や事故を記事や映像にして、マスコミを通じて全世界に報道するジャーナリストの仕事をしている。

見た目こそは元気そうな新作さんだが、実は若い頃から心臓を蝕む難病に犯されていて、医者からは長くても三十歳までは生きられないと診断されていた。

それでも持ち前のタフな精神力と家族の支えで医者之余命宣告を遥かに越えてすでもう四十三歳になる。本当にスゴい人だ。

現在はジャーナリスト活動を休業して、日本で奥さんの美香さんや娘の翼、岬と共に穏やかな日々を過ごしている。

私達も小さい頃、良く互いの親達と一緒にあちこち色々と旅行に出掛けていた。しかし、最近は新作さんの体調が優れなくて、みんなで出掛ける事はほとんど無くなっていた。

今回は新作さんの体調がかなり良好になってきたので、久し振りに私達、それと中学から知り合った千夏達も一緒に連れて行ってあげたいと新作さん直々のリクエストがあって実現したキャンプなのだ。

「那奈、良かったね！ 翼のお父さん元気になって！」

「そうだねえ、一時期は本当に危なかったらしいから回復してくれてホッとしたよ、私だけじゃなく父さんも随分心配してたしね」

小夜と一緒に坂道を登りながら新作さんの話をしていたら、ついつい自分達の父親の話になってしまった。私と小夜と翼、この三人に



は切っても切れない縁が親の世代からあるのだ。

「そう言えば去年、学校の音楽室であたしのおとーさんが那奈や翼のお父さんに『よろしく』って言ってたよね、覚えてる？」

「……そう言えばそんな事があったね、すっかり父さんに伝え忘れてたな……」

私の父親・渡瀬虎太郎と小夜の父親・真中、いや婿養子入り前だから仲田啓介、翼の父親・松本新作の3人は同じ幼児施設で青春時代を過ごした『家族』なのだ。

それぞれ幼い時に親を亡くしていたり、親から捨てられたりして集められた孤児で、寂しかった少年時代を共に手を取り合って生きてきた。

外でも学校でも施設内でもいつも三人は一緒に行動していて、子供の頃からその絆はとも強く幼なじみと言うよりもほとんど兄弟に近い。

三人が社会に出て、それぞれの仕事を成功させた後もその関係は決して途切れる事はなく、こうして私達二代目世代にもその絆は続いている。

「……本当に面白い関係だよね、私達の父親って」

「本当だよー！」

「……ハア、ハア、ハア……」

さっきから私と小夜の会話の間に聞こえてくる息切れ声。そうだった、昔話に夢中になってすっかり忘れてた。

「……ごめん麻美子！ 荷物重くない？ 大丈夫？」

「……あつ、そうだ、麻美ちゃんごめんね！ 麻美ちゃんの前で父さんの話とかしちゃって……」

「……大丈夫だよ小夜ちゃん、私も今は素敵なお父さんがいるから気にしないで……」

「……そうだね、遠藤先生みたいな素敵なお父さんはそうはいないもんね……」

「……それより那奈さん、ハア、ハア、目的地、まだですかあ？ ハア、ハア……」

「まだまだ半分も行っていないわよ！ ほら、ちゃんと顔を上げて歩け、歩け！」

「麻美ちゃん、ガンバレ、ガンバレ！」

「……ふえ……」

へ口へ口の麻美子を二人で引っ張りながら山道を登って行くと、先に行っていたはずの新作さん達が足を止めてその場に立ち尽くして

いた。何かあったのだろうか。

「ちょっと、どうしたの？ みんな、何でここで止まってんの？」

「あれのせいだよ、アレアレ」

翔太が指差す方向を見ると、この先にあるはずだった橋が川に流されてバラバラに崩れてしまっていた。

「……そついや昨日、山の方に大雨が降ったとは聞いたけど、まさかここまでヒドかったとはなあ、大失敗やわ……」

さすがの新作さんも被っている帽子に手を当てて困り果てていた。おまけにかけている眼鏡を何度もかけ直して二度見三度見しているが、見えている現実が変わる訳がない。新作さん、横山や しじや ないんだから……。

「……なあ、オトンどないする？ うちら引き返すしか方法ないんかなあ？」

「まあまあ、落ち着きやキー坊、ここはワシに任しときや」

「誰がキー坊やねん、ウチは出目金とちゃうで、やすしクン！」

「ほら見てみい、向こうからヤッコさんが歩いて来とるで！」

「……あつ、お客さん、すいませーん！」

私達が崩れた橋を眺めて立ち尽くしていると、キャンプ場の名前が入ったウインドブレーカーを着たガイドさんらしい人がこちらに近づいてきた。

「お客さんすいませんね、昨日の大雨でここの橋が流されて通れなくなっちゃったんですよ」

「えっ、じゃあどないすんねん？　ここまで登ってきたのに来た道を引き返すんかい！？　あんまりやで、金返せや！」

「キー坊、お前はちよつと黙つとれ」

新作さんは翼が被っている麦藁帽子を上からギュツと押し付けてやかましい口を黙らせた。

「……お兄さんよ、他に向こう側に渡れる道は無いんかいな？」

「……まあ、ある事はあるんですけど……」

「……けど？」

ガイドさんに案内されて到着した場所は、私達の予想を超えたスリ

リングでアクロバティックな所だった。

「……昔、あその橋が出来る前はここの岩場を川を渡る通り道にしていたんですよ、ほら、落下防止のロープが張ってあるのが見えますか？」

「……これはまたステキな岩場やな、風雲たし城みたいや……」

言われてみれば確かにここだけは川が浅く、足場になりそうな岩がゴロゴロ転がっている。滑らない様に足場には金具も取り付けられており、確かに落下防止用のロープも張ってある。

「……どないしよか？ 一人でも怖くてイヤやって言う人間がおつたら止めとこや、俺も大事なお子さんを預かっておいて危険な目にあわせたくないしな」

ただ、ここまで来て引き返すのも何かかったるい。危なそうな人間が二人ほどいるけど……。

「こんなん楽勝やん、金具付いてる所を渡ればええんやろ？ ウチは渡るで！」

「アタシも全然大丈夫！ 陸上で鍛えた脚力を見せてあげるわ！」

まあ、私も全く問題は無い。男子も大丈夫だと思うが、瑠璃を背負っている航とさつきから右足を気にしている薫が気がかりだ。

「航、薫、大丈夫か？ 瑠璃ちゃんは怖がってないか？」

「お任せあれ旦那！ 俺なんてぜーんぜん……」

「……………瑠璃は俺がそのままおぶって行くから大丈夫」

「そうか、じゃあ大丈夫だな、新作さん、俺達OKです！」

「…………俺の答え聞かないの？ ねえねえねえ…………」

男子チームは翔太がまとめてくれた。後は大問題のお荷物コンビ。

「麻美子、大丈夫？ 覚悟は出来た？」

「…………ふえゝ、これ渡るんですか？」

「大丈夫だよ麻美ちゃん、下を見なければ怖くないよ！

岬を抱っこした新作さんを先頭に、翼、千夏、翔太と一人ずつ順調に岩場を通って川の向こう岸へと渡って行った。

薫も右足をかばう様な感じながらも無事に渡りきった。

「……………瑠璃、ちゃんと掴まって」

「……………うん……………」

不安だった航と瑠璃も意外にスイスイと岩場を渡ってしまった。その姿は小猿を抱きかかえて木の枝を渡って行く親猿ぐらいの安定感があった。

「麻美子、しっかり前を向いて背筋を伸ばして！」

「……………神様、絶対に悪い事しませんから助けて下さい……………」

先に背負っている荷物を向こう岸に運び、岩場の途中で翔太に待っていてもらう作戦で麻美子を渡らせる事にした。

「ほら、麻美ちゃん頑張れ！俺の手に掴まって！」

「……………怖いよ、翔太君、変なところ触らないで下さいね……………」

「触んねーっつーの！」

麻美子もへっぴり腰ながらも何とか翔太の元まで辿り着き岩場を渡り切った。残りは私と小夜だけだ。

「大丈夫よね、小夜？ ふざけたりはしゃいだりしないでよね？」

「うん、大丈夫だよ！ 瑠璃ちゃん、今行くねー！」

私が先行して安全な岩場を選んで通って、その後を小夜に通らせる様にした。これなら小夜が危ない場所を通る心配もない、一番の方法だ。

これでみんな無事に渡る事が出来た、そう思っで一息ついた時、それは起こってしまった。

「キャッー!!」

「……小夜、大丈夫!？」

小夜が岩場に躓いて転んでしまった。落下防止用のロープがあったので川に落ちる事は無かったが、怪我がないか心配だ。

「小夜、怪我は無い!? 立てる?」

「うん、大丈夫だよ！ 大丈夫、大丈夫……」

小夜の様子がおかしい。立ち上がる事が出来ずに、岩場の間を流れる川の水を見て顔がどんどん青ざめていつている。しまった、そうだった。すっかり忘れてしまっていた。



「小夜、下を見ちゃダメ！ 前を向いて！」

「……あ、あ……」

小夜の最大の弱点、それは水。幼い時に車に跳ね飛ばされて川に落ち、溺れている所を私の父さんに助けられた事があった。

奇跡的に大きな怪我こそ無かったものの、車にぶつかった事よりも川で溺れかけた記憶の方が恐怖として脳裏に刻まれて水の中に入れなくなってしまった。

それ以来、海やプールはもちろん、少し前までは一人でお風呂にも入る事が出来なかった。水で顔を洗う事すらも拒否していた時期もあった。

最近は少しずつ恐怖も薄らいできてお風呂にも入れる様になったが、岩場の間を勢い良く流れていく川の水が目線に入って、その時の恐怖心が蘇ってしまったみたいだ。

「……那奈、あたし、ムリ……」

「小夜、下を見ちゃダメ！ こっちを見なさい！ ほら、私の手を掴んで！」

「……ムリ、ムリだよ、怖いよ……」

小夜は力無くその場にへたり込み膝を抱えて丸まってしまった。麻美子に『下を見るな』って言うという自分が下見て怖がっちゃうんだから、全くもう……。

「何や、どないした那奈！？ 何かあったんか！？」

「オトン、小夜や！ 小夜が途中でへたり込んでしもたんや！」

異変に気づいた新作さんが向こう岸から私達の姿を見て心配していた。さっきまでのふざけた空気は完全に消えていた。

「ねえ、小夜どうしたの？ 薫ちゃん、一体何があったのよ！？」

「俺に聞かれてもわからないよ、翔太、説明して」

「……千夏ちゃん達は知らないかもしれないけど、小夜は水がダメなんだ、チクシヨウ、何でこんな時に思い出しちゃうんだよ！」

「小夜ちゃん、頑張つて！ 頑張つて那奈さんの所まで行つて！」

翔太や麻美子だけでなく、航に背負われてる瑠璃も出来る限りの声を出して小夜を呼んでいた。

「……たーよ、たーよ……」

「………瑠璃？」

向こう岸にいるみんなが一生懸命小夜を励ましてくれているが、この状態では立ち上がってここを渡らせるのはとても無理だ。小夜は震え上がってもう泣き出す寸前だった。

「……怖い、怖いよ、おとーさん、お母さん……」

進む事も出来ない、かといって戻る事も出来ない。ダメだ、このままじゃどうにもならない。私は覚悟を決めて持っていた荷物を向こう岸にいる翔太に預けた。

「翔太、私の荷物お願い！」

「お、おい那奈！ お前、何するつもりだよ！？」

「私が小夜を背負ってそっちまで渡る！」

小夜を背負うのは子供の頃から慣れているとはいえ、この岩場を渡っていくのはかなり危険かもしれない。でも、もうそれしか方法が無い。

「アホな事言うなや那奈！ そんなムチャクチャ出来る訳がないやろ！？ 俺が今そっち行くから待つとれや！！」

心配した新作さんが抱っこしていた岬を下ろしてこちらへ渡ろうと

準備しし始めた。

もちろん新作さんの方が女の私より力はあるだろうけど、せつかく体調が良くなってきたのにここで無理をしたら……。

「アカンてオトン！　せつかく体が良くなってきたのにそないなマネしたら……！」

「翼、そんな事を言うてる場合か！？　お前らに何かあったら俺が虎太郎や啓介に合わす顔が無くななん！　ええか那奈、俺がそっち行くまで待つとれや！」

「……新作さん……」

でも、これでもし新作さんの病気が悪化してしまったらそれは私達のせいだ。そうなたら今度は私達が父さん達に何て言えればいいんだろう……。

「……怖いよう、渡れないよう……」

「……たーよ……」

岩場の真ん中で震える小夜を見て、瑠璃が心配そうにこちらを見ている。その姿はまるで、小夜の無事を天に祈っている様だった。

「……瑠璃」

新作さんは手に担いでいた荷物も下ろして、私達がいる岩場の方に戻って来ようとした。

「よし、準備出来たで！ 今行くから待つとけや！！」

その時、それを遮る様に長い腕が新作さんの前にスツと現れた。

「……………俺が行きます」

「……………航！」

航は一言そう言つと背負っていた瑠璃を翔太の腕の中に預けた。

「おい航、お前、何する気だよ！？」

「……………荷物は薰に」

「……………うわっ、結構重てえ！」

身軽になった航はスタスタと岩場を渡っていった。しかし、誰が小夜を背負ったって危ない事には変わらない。

「ちょっと待てや、君も一緒やで！　これで下手に怪我とかされたら君らの御両親に会わす顔が……！？」

「……………大丈夫です、親なんていませんから」

新作さんの制止も軽く受け流すと、航は長い足であっという間に岩場を渡って私がいる所までやって来た。

「……………ちょっと航、どうする気……！？」

「……………邪魔だから先に向こう岸に行って」

「……………じゃ、邪魔？」

航は邪魔と言われてポカーンとしている私の横を通り過ぎ、小夜がしゃがみ込んで動けなくなっている岩場まで辿り着いた。

「……………怖いよ、怖いよう……………」

「……………もう大丈夫、怖くないよ」

次の瞬間、航の行動を見て私達は開いた口が塞がらなかった。小夜をスツと抱えると、何と軽々と持ち上げてお姫様だっこしてみせたのだ。誰がこんな担ぎ方を予想しただろうか。

「キャッ！」

「……………大丈夫だよ、絶対に落とさないから」

しかし、いくら軽々と担いでいると言ってもこの岩場を渡っていくのは難しいだろうと思っていた私達は、次の航の行動を見て再び啞然となった。

「……………航！ アンタ、足が！」

航は小夜が塗れない様に高く抱きかかえ、岩場を無視して川の浅い所に足を突っ込んでジャボジャボと歩き始めたのだ。確かにこれなら転倒落下する心配は無いが、航の膝から下は完全に水に浸かってしまっている。

「……………」

呆気にと取られている私達の元に辿り着いた航は、抱えていた小夜を静かに地面に下ろして茫然とする翔太から瑠璃を受け取り再び背中に背負った。

「……………着いたよ、もう大丈夫」

「……何、この男、どこのレスキュー隊？ 私達は突然の救出劇にしばらく言葉が出なかった。助けて貰った本人である小夜に至っては、何が起こったのかわかっていない様で目がまんまるになってパチクリしている。」

「おい、兄ちゃん大丈夫か？ 那奈、小夜、お前らも怪我とか無いやろな？」

「……………俺は大丈夫です」

「小夜、小夜！」

「……………ほえ？」

私の新作さんの呼び掛けに反応した小夜だが、いまいち目の視点が合っていない。

「もう大丈夫だよ！ 川は通り過ぎたから、怖くないよ！」

「……………川？」

小夜はまだ状況を把握出来ない様だ。しかもそれどころか、



「……小夜、アンタもしかして、腰が抜けてない？」

「……あれ？ 立てないよ……？」

立ち上がるうとしても足が震えてしまっているし、腰の踏ん張りも効かない。恐怖心がピークにまで達したのだろう。これはしばらく動けそうにない。

「……新作さん、小夜は私が背負って行きますから、みんなで先に行って下さい」

「……ああ、承知したわ、でも那奈、無理したらアカンぞ、ゆっくりでええからな」

「翔太、私の荷物を一緒に持つていつてくれる？」

「……ああ、いいけど、大丈夫なのか那奈？ 本当に無理するなよ！」

「よし、コテージまでもうすぐや、みんな、ゆっくりでええからちゃんとついて来るんやで！」

新作さんはそう言うつとフと一息つき、再び岬を抱っこしながら荷物を背負って山道を登りだした。

「……おい航、預かってた荷物返すよ、重いよコレ……」

「……………薫、ありがとう」

「つか、靴もズボンもズブ濡れじゃん、気持ち悪くね？」

「……………歩いていれば勝手に乾くから」

しかし驚いた、航にこんな一面があったなんて。小夜に対しては瑠璃の事とかで色々世話になったという思いはあっただろうが、まさかここまでやるとは…………。

「スゴい！ 航ちゃんって何か王子様みたい！ 超カッコ良かったよ！」

「ウチもオトンにあんな風に抱っこされてみたいわ〜！」

「……………私は、あの、彰宏兄ちゃんに……………」

「えっ〜？ 今、麻美子何か言った〜？」

「……………何でもないです……………」

他の女子メンバーからも高評価だ。この一件で航は一気に男の株を上げたかもしれない。

「航、ありがとう！ 本当に助かったよ！ ほら、小夜もお礼を言

って！」

「……あ、ありがとう航くん！」

「……………別に、どう致しまして」

「たーよ、たーよ！」

素っ気ない航の返事に代わって、瑠璃が嬉しそうに小夜の名前を呼びながら手を振っていた。そんな瑠璃の姿を見て、やっと小夜にも笑顔が戻った。

「……本当、航に感謝しなさいよ、小夜」

「……………うん！」

そういえば前にもこんな事があった。遠藤医院から駅までの帰り道、車に轢かれそうになった小夜を救ったのも航だった。

あの時は瑠璃も一緒だったとはいえ、自分を犠牲にしても助けようとしたあの姿勢。もしかしたらこれらの行動は航の小夜に対する精一杯の恩返しなのかもしれない。自分達兄妹に優しさをくれた恩返し……………。

「……那奈、本当に大丈夫か？」

「うん、少し休んでから行くから、気にしないでいいよ、先に行っ

てて」

「……わかった、荷物はちゃんと持っていくから、でも無理すんなよ」

荷物は翔太が持っていてくれたから、少しゆっくりしよう。ちょっと気疲れしちゃった。

「……瑠璃ちゃんに情けないところ見せちゃったなあ、エヘッ！」

小夜と瑠璃と航の関係、何かスゴくいい感じになってきているみたいだ。航になら、小夜の全てを任せてもいいかな、私はそんな気がしてきた。

## 第20話 蘇生

翼の父親・新作さんが連れてきてくれた郊外のキャンプ場。川を渡るのに小夜が怖じ気づいてしまつて少々手こずつたが、航の活躍で何とかみんな無事に渡り切る事が出来た。少し休憩をとつて『さあ、行くか』と意気込んでみたのはいいのだが……。

「……やっぱり立てないよう……」

……やれやれ。結局、小夜は立ち上がる事が出来なかった。置いていく訳にもいかないので、やはりと言うか予定通り私が小夜を背負う事になった。

「……アンタ、結構重くなつたね……」

「えー、太つてないよー!? ヒドいよ、那奈!」

太つたつて訳ではないと思うが、やっぱり子供の頃におんぶしてたのとは随分と勝手が違う。しかもこの山道。後を追います、なんて軽々しく言つてしまつたが、ちょっと後悔している。もう腕が痛い。

「おーい、那奈! 小夜!」

山道の上から翔太が走ってこちらに降りてきた。持っていた荷物が無いので、どうやら頂上に到着してそこに置いてきてからわざわざ引き返してきてくれたみたいだ。

「……那奈、キツくないか？　ここからは俺が小夜を背負っていくよ！」

「……いや、大丈夫だよ、これくらい……」

「いいから休めって！　小夜、那奈から降りろ！　俺の背中に乗れ！」

翔太は声を荒げて小夜を下に降ろすと、私から奪い取る様に小夜を背負った。翔太に体力が限界に近かったのを見透かされてしまったみたいだ。

「……よし、小夜、行くぞ！」

「よし、翔ちゃん号発進！」

「……元気があるなら歩け！」

「前方視界良好ー！」

そういえば翔太はさつきからずっと私の事を気遣ってくれていた。  
今回も私の事を心配して降りて来てくれたのかな……。  
この時の翔太はとても遅しく見えた。たまにこういった男らしい姿  
を見せられるとどうしていいか対応に困ってしまう。

が、今日はいつも以上に化けの皮が剥がれるのが早かった。異変に  
気づくには十分な反応を私は見逃さなかった。

「……ねえ翔太、アンタさ、何でそんなに口元がニヤニヤしてんの  
？」

「えっ？ な、何が？」

「……何かさ、また良からぬ事を考えてない？」

「ハア？ な、な、何をだよ？」

背負っている姿を良く見ると、翔太の背中の上に小夜の胸の部分が  
ピッタリと密着している。なるほどね、原因はこれか。

「……そんなに嬉しい？ 従兄妹でも背中にピッタリと『もの』が  
当たると……」

「は、は、ハア？ な、な、な、何を根拠にそんな……」

焦って首を横に振りまくるのは翔太が目星を食らった証拠。実にわ

かりやすい反応を見せてくれるのでこの男の嘘を見抜くのは楽勝だ。

「……小夜、あんまり翔太にひつつかない方がいいわよ、コイツやっぱり変態だわ」

「……ほえ？ 変態？」

「ば、ば、ば、馬鹿な事を言つなよ！ 何で俺がそんな事……」

「……つか、やっぱり小夜は私が背負うわ、翔太に預けたら何をされるかわかないし」

「違う、違う、違う！ 誤解だつてば、那奈！」

「……全く、男ってヤツはこれだから……」

……少しぐらいウツトリさせろよ、このスケベ男。私は小夜を翔太から強制的に奪い取り、齒を食いしばって何とか山道を登って行くと木々が開けた広場に出た。

どうやら頂上に到着したみたいだ。木製のコテージが何軒か横一列に並んで立っており、料理をする為のレンガで出来た釜戸もあった。

「おい！ ここやで、ここ！」

翼の声が聞こえた方向を見ると、一番手前のコテージにみんなが集まっていた。周りでは航に掴まりながら岬と遊んでいる瑠璃の姿も



見える。

「那奈、お疲れやったなあ、小夜、もう大丈夫か？」

「はい、大丈夫です！」

「新作さん、色々心配かけてすみませんでした」

先に到着していた新作さんはすでに薪を割って釜戸にくべ、火を点ける準備をしていた。海外放流生活が長いだけあって、その手つきは手慣れたものだった。

「何を言うてんねん、ちゃんと昨日の山の天気まで確認しなかった俺の責任や、俺らは相当無茶したチャレンジャーやったみたいやな、頂上着いたら他に客が一人もおらへんがな」

確かに周りを見ると頂上まで来たお客は私達だけみたいだ。経験豊富なのに面倒臭がつて確認をしない、これも新作さんの特徴。昔、お酒の席でも良く父さんに『詰めが甘い』って言われていたっけ。

「まあ、丸々貸し切りやと思うてみんなでノビノビとさせて貰うかなあ？ 釜戸も流しも風呂も便所も使いたい放題やで！」

新作さんと話をしていたその時、木々に止まっていた野鳥達が一斉

に羽ばたいて飛んで行った。そして、

「キャアアアアア!!」

女性の悲鳴が聞こえてきた。場所はとうやらさっき翼がいたコテージの中、この声は千夏か!?!  
悲鳴に合わせて中から翼と麻美子が飛び出してきて、悲鳴の主である千夏は尻餅について部屋の中を見て真っ青な顔をしている。

「何や翼、どないした!?!」

「た、た、た、大変やでオトン!!」

「何だよ、どうしたんだよ麻美ちゃん!」

「……あわわわわ、翔太君、大変です……」

「何よ千夏、何があつたのよ!?!」

「……Oh my god, oh my god, oh my god……!」

狼狽する千夏の前に、コテージの中から薫がビクリした顔して飛び出してきた。まさか何か変な事でも仕出かしたのか!?!

「何だよ千夏ちゃん、どうしたの!？」

「か、か、薫ちゃん、アンタ、アンタ、アンタだってば!!」

千夏は震えながらコテージから出てきた薫の右足指差していた。それを見た瞬間、私達は驚愕した。

「うわあああああ!!」

絶対に有り得ない光景。何と薫の右の足首が真後ろ、つまり180度回転しているではないか!

「どうしたんやその足! 骨折か、脱臼か!? どちらにしる終わったあ、俺は終わったあ! 家族の方々に何てお詫びしたらええんやあ!？」

新作さんは膝を落とし頭を抱えてしまった。そりゃそうだ、全員無事に到着出来たって思ったのに、こんな酷い結末……。

が、しかし、当の本人である薫は慌てふためく私達とは対照的に非常に落ち着いている。痛がる素振りすらない。まさか、もう足首の感覚すらも無くなっているのでは……?

「……やっぱりダメか、木の枝をストッパー代わりに差し込んでみたけど、補修にもならないや」

「……ハア？ 補修？」

薫は床に座り込んであぐらをかくと、平然とした顔をして手でその足首を掴んで360度クルクル回転させ始めた。常識で考えられないビックリ仰天映像に私達は絶叫した。

「うわあああああ！！！」

「あーあ、みんなにバレちゃったよ、今まで隠してきたのに参ったなあ」

……えっ、バレた？ 何が？ 何の事かサッパリわからない私達の顔を見て、薫は申し訳なさそうに頭を掻いて苦笑いした。

「脅かしてごめん、これさ、義足なんだ」

「……ぎ、義足？」

「……じゃ、じゃあ、怪我したとちゃうねんな！？ 違うねんな！？ フウ、心臓止まるかと思たわ……」

「何をかましとんねんな薫！ オトンの心臓止まったらどないしてくれんねん！？」

「……いやいや申し訳ない、失敬、失敬」

突然の話で言葉だけでは理解するのに苦労したが、みんなで恐る恐る靴下を脱いだ薫の右足を見てみると、確かに足首から下は金具やプラスチックなどで作られた義足になっていた。普段あまり見慣れない器具を見た私達は啞然とした。

「昔、小さい時に爆発事故に巻き込まれちゃってね、その事故で俺の両親は死んじゃって、一緒にいた俺も右の足首から下を爆風で吹っ飛ばされちゃったんだよ」

爆発事故とか両親が死んだとか足を吹っ飛ばされたとか、結構衝撃的な過去を薫はケロッとした顔をして話し始めた。しかもその話の最中も壊れた右足をクルクルクル回している。見てて怖いから止めてよ……。

「足首から下だけで済んだ、って事もあるんだけど、医学や補助器具の進化でかなり最近の義足は性能が良くてね、おかげ様で一般男子並みに歩いたり走ったりと通常生活が出来るんだよ〜ん」

「……だよ〜ん、じゃねーよ!? そんな足でキャンプ場に来るなんて自殺行為じゃねーかよ!？」

「……翔太の仰る通りだよ、やっぱり山登りはちよつと無謀だったね、実は山道の途中ですでに足首のストッパーが壊れちゃって、バレない様に歩くのがしんどかったんだよ、トホホ」

……言われてみれば、さつきから右足をしきりに気にしていたのはそのせいだ。学校や外ではいつも靴下を履いているから外見からじやとても区別がつかなかった。

でも今になって良く考えると、学校の水泳の授業を休んだり、夏なのにサンダルなどを履かないで蒸しそうな靴を履いていたり怪しい点はいくつかあった。

薫が事故に巻き込まれて義足をつける事になったいきさつは良くわかった。でも、そんな事はどうでもいい。私にはどうしても納得いかない事が一点ある。

「……つか、何でそんな大事な事を今まで私達に黙ってたのよ？いきなりこんな事になったらビックリするし、もしアンタに何かあったらどうすんのよ!？」

私の言葉に翔太も続いた。

「そうだぞ薫！ 新作さんが言ってた通り、お前の義足が壊れて川に落ちたなんて話になったら家族に謝るところじゃ済まないんだぞ!？」

すると薫からニヤニヤした笑顔は消えて、普段あまり見せない真面目な顔をして静かに語り始めた。

「……障害者みたいに思われたくなかったんだよね、特別扱いされたり、行動制限されたりするのが……」

薫が初めて私達に話してくれた本音。確かに薫の気持ちはわからない訳でもない。でも……。

「隠したままだったら、アンタが本当に困った時に誰も助けてあげられないじゃない！ 私達に話してないって事は学校や周りの人達にも話してないんでしょ？」

「……知っているのは俺の祖父さんとユリアとこの義足を作ってくれた先生ぐらいだよ、後は誰にも話してない」

「俺達は別に特別扱いとかひいき目なんて絶対にしないぜ？ だって実際に薫自身は毎日こんなに元気で生活してんだから何も問題ないじゃないか？」

私と翔太の言葉を否定する様に薫は口を真一文字に結んでうつむいた。そして、下を向いたまま元氣なく私達に語った。

「……そうもいかないんだよ、社会の中で生きていくにはね、ハンデがあるだけで出来ないスポーツや入る事さえ出来ない場所、そして、学力や知識があってもなれない職種だってあるんだ、どんなに普通に体を動かす事が出来ても、それがあるだけで人生そのものを制限されてしまう……」

『バリアフリー』なんて言葉が一時流行語みたいになつたが、まだまだ全ての場所や規則にその思想が行き渡っている訳ではない、と何かのテレビ番組で見た記憶がある。

何不自由ない健康体の私にとってはあまり関係の無い事だと思つていたが、まさか私の周りに実際にハンデと戦っている人がいるとは全く考えてなかった。

「……他にもちよつと言い出せなかった理由があるんだけど、とにかく、みんなの俺を見る視線が変わってしまうのだけはイヤだったんだ、みんなと一緒に走り回って、バカやって、楽しく過ごしてきたかったから……」

「……ウチらの見方が変わる、って、そんな訳ないやろ!? 義足つけとつたって、別に何か危ないもん持つてる訳でもないし、化けモン扱いする訳でも……!」

薫の話を聞いて黙り込んでしまった私達の代わりに、今度は翼が前に出て薫に詰め寄った。翼の隣にいる新作さんは、ただ黙って私達の話の聞いていた。

「……でも、みんな正直言つて俺のこの足見てビビつたる? 翼だつて逃げたし、千夏ちゃんなんて悲鳴をあげたし……」

「……そ、それはアレやで、ウチら何もその話を聞いてへんかったから……」



「…………ふう…………」

言葉に詰まる翼を横目に新作さんは深く溜め息をつくど、さっきまでいた釜戸に戻って薪に火を点ける準備をし始めた。

「…………なかなか、面白い事を言うてくれるなあ、オマエさんは」

「…………オトン？」

「…………面白い、事…………？」

釜戸の前に座りこちらに背を向けている新作さんの言葉に、薫はピクリと反応した。

「ひいき目されるのが嫌か、そうかそうか、せやなあ、障害持ちやつてカミングアウトしても最初はみんな『大丈夫、大丈夫？』なんてチャホヤしてくれるかもしれへんけど、火事やら地震やらが起きたら結局みんな一目散に逃げてもうて助けてくれる人なんておらへんかもしれへんもんなあ？」

「…………そうですね…………」

薫は床に座ったまま新作さんの話を返事をした。しかし、その言葉に不快感を感じたのか、その表現は冴えない。

「せやったらアレやで、自分、どうせやったら義足だけやのうて、  
いつそ全身改造人間になって手も首もクルクル回せたりロケットパ  
ンチやビームライフルとか撃てる様になったら、差別も気にならな  
いもつと素敵な人生になったかもしれんなあ？」

「……！」

「……オトン、それはアカンて……！」

中学生の私達でも感じ取ることが出来た。さすがにこの新作さんの  
発言は薫の心境を逆撫でする、あまりに酷すぎるものではないか  
と。

確かに新作さんは私の父さんの様にふざけたりおちよくったりする  
事が好きな人で、たまにはキツイ冗談も言う。

しかし、仮にも世界中の不都合な真実を自分の眼で見てきたジャー  
ナリスト、そんな人が言うには余りにも軽率な発言だと私は思った。

「……俺、別に強くなりたくて義足つけてる訳じゃありませんから  
……」

薫は明らかに不快な顔をしてボソツと言い捨てた。こんな笑えない  
冗談では楯突く様な返事になってしまうのも当然だろう。

「ほう、そうかい、でも自分の身体が好きな様に改造出来たらえ

えなあ、って想像した事とか無いか？ そしたら差別も制限もな  
んも無いのになあ、ってな？」

「……何が言いたいんですか？ 俺の事、バカにしてるんですか？  
面倒臭い人間を連れてきてしまつて、それで俺を……！？」

「まあ、まあ、まあ、最後まで話を聞けや、なっ？」

床から立ち上がり怒りを露わにして突つかかる薫をなだめて、新作  
さんは火のついた釜戸に薪をくべながら話を続けた。

「……俺はな、考えた事があるで、この体を自由気ままに改造出来  
たらええなあつて、そしたら、好きなサッカーを思いつ切りやる事  
が出来たし、每晚眠りにつく度に、俺は明日ちゃんと目が覚めるん  
かなあ？ もしかしたらこのまま死んでしまうんやないかなあ？  
なぐんで思わんで済むやろ？」

「……！」

そうだった。新作さんだつて大きな障害を抱えてここまで生きてき  
た人だった。いつ死ぬかも知れない難病に身体を蝕れながらも、今  
まで一生懸命頑張ってきたんだつた……。

「俺も昔はお前さんと一緒に、人からひいき目で見られんのは常  
識イヤやったわ、純粹に助けてあげたいって思ってくれている人の  
優しさも、どうせ上っ面だけの同情だつて疑ってひねくれて突っぱ

ねてしまったりなあ？」

「……………」

薫から怒りの表情が消えた。黙って新作さんの前に立ち、その話に聞き入っていた。

ふざけている事が多い二人の普段見せないシリアスな雰囲気、私達も息を呑んで静かにその会話を聞いていた。

「俺もな、お前さんがさっき言った通り、やりたい事とか叶えたい夢とか、そういった人生の選択肢を自分で決められんのがイヤやっ  
たし腹立つてなあ、あれダメですよー、これダメですよー、それや  
ったら死にますよーってな、そんなんの繰り返しばかりでもう嫌  
気がさしてもうてなあ……………」

新作さんの言葉を聞いて思った。もし薫が私達に初めてあつた時に  
足の事を話してくれていたとしたら、果たして私達は薫を特別扱い  
せずに接してあげる事が出来ただろうか。

新作さんの話みたい、薫の意志も考えずに危険だと判断したもの  
から強制的に遠ざけ、その先にある無限の可能性を根絶やしにして  
しまっていたかもしれない。今回のこのキャンプだって……。

「夢も希望もズツタズタに引き裂かれたわ、それでもな、それでも  
俺は今まで楽しい人生を送ってこれたで、可愛い嫁さんを貰って、  
子供も二人恵まれてなあ」

新作さんは膝の上に乗ってきた岬の頭を撫でながら話を続けた。

「しかしや、その幸せは自分の力だけで手にしたものと違う、愛する人や、友達や、仲間が俺を支えてきてくれたからや、俺が自分の力だけでは越えられない障害を、みんなが力を分けてくれて助けてくれたからや」

みんなとは父さん達の事だろうか。確かに父さんは新作さんの病状が悪化した時も決して動揺する事は無かった。『アイツはそんな簡単に死ぬ男じゃない』と言って、心の底から新作さんを信じていた。

「自分が持ってしまったハンデがあるなら、それを話さな、素直にならな、助けてくれて言わな誰も助けてくれへんねん、助けられへんねん」

中学生の子供達に体調を心配されながら山を登るなんて新作さんとしては本当は本望ではないだろう。もしかしたらとても失礼な事だと怒られてしまうかもしれない。

それでも、新作さんは私達の気持ちを突っぱねる事なくしつかりと受け止めてくれた。それは、ちゃんと自分の限界をわかっているから。人の優しさを素直に感じる事が出来るから……。

「ハンデあったってええやん、助けてもらたらええやん、足が痛いから助けてくれて先に言うてくれてればその義足かてそこまで壊

れんでも済んだやろうに」

新作さんの言葉は心のこもった、私達の胸に突き刺さるものだった。本当に苦しんだ人だからこそ言える、重みのある言葉……。

「助けて貰うのは悪い事とちゃうねん、その分、今度は自分が出る事があればそれで困ってる人を助けてあげればええねん、なっ？」

「……はい……」

薫の返事を聞いて、新作さんは振り向いてニコツと微笑んだ。薫の薫にも笑みが戻ってきた。

「……わかってくれればええねん、これからはそないに氣い張らずにみんなを信じてキツかったら助けて貰えや、ええな？」

そつだ。私達が全てを受け止める気持ちが無ければ薫は心から頼る事が出来ない。

「……そつだよ薫、これからは意地張らないでちゃんと話してよ！」

「俺ら何かあったら助け合おうって約束しただろ？ ヤバい事があったら相談してくれよ！」

「そーだよそーだよ！ みんなで薫ちゃんの事を助けてあげるよ！  
今度はあたしが薫ちゃんをおんぶしてあげる！」

「……………翔太と同意見、それに瑠璃の時の借りもある」

「……………らしくないわよ薫ちゃん！ 元々はいいい加減キャラなんだから真面目に考え込むなんて似合わないわよ！」

「……………私もどれだけ力になれるかわからないですけど、出来るだけ頑張りますから……………」

翔太、小夜、航、千夏、麻美子、みんなの気持ちも私と同じだった。良かった……。でも、まだ薫に声をかけていない人間が一人いる。

「……………ホンマに、とことんアホやなコイツは……………」

最後の一人、翼は薫や新作さんがいる釜戸の方に歩いていくと、腰に手を置いて照れ隠しする様に胸を張って偉そうに喋り出した。

「ええな薫、オトンの顔を立ってウチも色々と手助けしてやるわ！  
オマエの為やないで、オトンの為や！ オトンに心から感謝せよ！？」

「……………みんな、ごめん、ありがとう……………」

薫がいつもの笑顔に戻った。翼の言葉を聞いた新作さんもととても嬉しそうに私達を見つめていた。

事故で失った足と病気に犯された心臓、障害を抱えている場所は違くても、それと向かい合って戦いながら、でもそれと共存しながら生きていかなければならないのは薫も新作さんも一緒なのかもしれない。その点、この二人は良く似ている。

これは何も、障害を持っている人だけではなく、全ての人に当てはまる事なのだと思う。

親切も手助けも相手の気持ちにならなければただのお節介になってしまう。

相手の事を良く理解してその人の身になって行動しなければいけないと改めて勉強させられた。

「すまんなあ、何かわかった様な口振りで説教臭くなってなあ、堪忍してや」

「……いえ、こちらこそ色々と迷惑かけてすみませんでした」

でも、薫にとつては良い相談役が出来たみたいだ。新作さんなら薫の良い見本になってくれるだろうなあ。……なんて思ったのも束の間、悪夢は起こってしまった。

「……しかし改造人間かあ、ホンマに出来たら楽しいやろなあ、なあなあ、もしホンマに自由に体の改造が出来るんやったらお前らどうする?」



「……ハア？」

……あれっ？ 何か雰囲気ガラツと変わった。この空気は新作さんと父さんがエロ話をする時に二人が醸し出す妙な空気。新作さんのかけている眼鏡が怪しい光沢を発し始めた。

「俺はアレやな、女になつてみたいんや、一度」

「あつ、いいっすねそれ！ その気持ちメチャクチャわかりますよ！」

「おお、そうかそうかお前さんもか！ んでアレやで、メッチャナイスバディのええ女になつて、メチャメチャエロい服を着て男を誘惑してみたいわなあ！？」

薫と新作さんの共通点、もう一つあった。それは周りがドン引きする程のどスケベで女好き。お互いのエロセンサーが見事に同調してしまった様だ。

「いいっすね、いいっすね〜！ んで絶対にバストはFカップ以上でぶるんぶるん揺らしたいですね〜！」

「そうや、そうや、そうや！ やっぱり女になるからにはおっぱいがデカないと面白くないわなあ！？」

「そうですね、やっぱりおっぱいですよおっぱい！ おっぱいこそ命の証ですとも！」

「おう、そうやそうや！おっぱいこそ文化、おっぱいこそ芸術、おっぱいには男の夢がギッシリ詰まっている！ この世の中は全ておっぱいで出来てるんやあー！」

ダメだ、もうついていけない。完全にこのキャンプ場はこの二人のスケベ脳御披露目自慢ステージと化してしまった。

「おっぱい最高！ おっぱい万歳！ あなたこそ、あなた様こそおっぱい大王ですー！」

「そうや、俺はおっぱい大王や！ そして今日からお前をおっぱい王子と命名するー！」

「ありがたき幸せー！今ここにおっぱい王国の誕生だあー！」

「俺についてこい！おっぱい祭りの始まりじゃー！ おっぱいおっぱいおっぱいおっぱいー！」

「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱいー！」

あーあ、もう言葉が出ない。さっきまでの大真面目な話は一体何だったんだろ。何か一気に全てがバカらしくなってきた。呆れる女子をよそに、おっぱいバカ二人は火の点いた釜戸の周りを踊りながらグルグル回っている。

「……何なのよコレ？ 翼、アンタこんなパパが好きなの？」

「……違うねん千夏、こんなんちゃうねん、本当のオトンはこんなんちゃう……」

茫然とする千夏にガツクリと膝を落とす翼、小夜と麻美子と航に至つては途中から会話を抜け出し他人顔で岬や瑠璃と遊んでいた。

「……言われてみれば、新作さんの奥さんの美香さんも巨乳だった様な気が……」

「あつゝ、大王！ ここにも一人おっばい国民がいました！」

「おお、翔太！ お前もおっばい国民やな！ 来る者は拒まへんで、ウエルカム・トゥー・ザ・オッパイワールド！！」

「違います、違いますって！！」

「おっばいおっばいおっばいおっばい！！ おっばいバンザイ！！」

必死に首を横に振つて否定する翔太も巻き込まれ、全員で三人になったおっばい王国はその誕生を祝つて釜戸の火を中心にしていつまでも踊り続けた。

「…………これだから男ってヤツは…………」

……史上最低のオチだ。さっきまでの良い話が全部ぶち壊し。今日私は、どんなに困った素振りをしててもこの二人だけは今まで通り容赦なく接していこうと心に誓った。

ちなみに、この後は風呂場や寢床を襲われない様にこの三人はきちりと一番端のコテージに鍵をかけて一晩中幽閉しておいた。男とは何てバカで愚かな生き物なのだろうか。

第21話 PIANO MAN

あーあ、夏休みもあつという間に終わっちゃったなー。翼のお父さんにキャンプ場に連れて行って貰ってー、女の子だけでプールにも行ったなー。

あと、麻美ちゃんにあたしの家にお泊まりして貰っていっぱい遊んでー、今度は麻美ちゃんの家に行つて瑠璃ちゃんともいっぱい遊んでー、あーあ、もっと夏休みがいっぱいあればいいのになー。

皆さんこんにちはー、真中小夜でーす！ えーと、今回は何か良くわかんないけどあたしが進行役しまーす！

何かねー、那奈がいっぱい夏休みの宿題やつて疲れちゃったんだってー。やっぱり宿題は後に残さすにキッチリやつちゃうのが一番だよね！

「……誰の宿題をやるハメになったと思つてんの、アンタ……」

「……はーい、すいませーん……」

今年もまた宿題忘れちゃった。夏休みは毎日楽しいからつい忘れちゃうんだよね、反省、反省！

「アンタ絶対反省してないでしょ、してないよね？」

この話は置いてー、えーとねー、今日はスゴいんだよ！ 学校に来たら麻美ちゃんが朝から元気いっぱい、あたし達にどうしても宣言したい事があるんだって！

「……あ、あの、私、音楽を本格的にやろって決めたんです！」

突然のお話にあたしも那奈もみんなもビックリしちゃったけど、今までの麻美ちゃんとは違って気合い充分！ 眼鏡の奥の瞳からメラメラと炎が上がってたよ！

「……お家や病院で頑張って言葉を勉強している瑠璃ちゃんや、その瑠璃ちゃんの為に頑張っている小夜ちゃんの姿を見て、私も自分で出来る事を一生懸命やってみたくなっただんです！ このまま何もしないで諦めちゃいけないって……」

「……って事は、ご両親に話した訳ね、自分の叶えたい夢を」

「はい！ 正直に話したら、お母さんもお父さんも喜んで賛成してくれました！ ありがとうございます、那奈さん！」

「せやから言ったやろ？ 一人で考え込まんとちゃんと話せば協力してくれるってな？」

「……はい、翼さんの言う通りでした、お父さんから『何でもっと早く話してくれなかったんだ』って言われました……」

「でもこれで麻美子もプロデビューね！是非ともステージ衣装は『CHIHARU・MISHIMA』でお願いね〜!？」

「そ、そんな千夏さん、話が早すぎますって!」

那奈も翼も千夏もみんな嬉しそう！よし、こうなったら麻美ちゃんが一日も早く立派な音楽家になれる様にいっぱい応援しなきゃ！

「じゃあ麻美ちゃん、今日学校終わったら久し振りに井上さんのスタジオ行こーよ!」

「……えっ、帰りに?」

「今日は那奈も翼も千夏も一緒に行こーよ！井上さんのスタジオつて中も外もスゴイキレイなんだよー!」

「……ハア？私も？アンタのお陰でヘトヘトなだけと……」

「そない連れない事言っなや那奈、音楽スタジオ潜入なんて経験そうそう出来んで?」

「いや〜ん、契約ミュージシャンと鉢合わせになったらどうしよう、そのままお互いに一目惚れしちゃってfallin' loveとかあ〜」

翼も千夏も行く気満々！よし、みんなで井上さんに麻美ちゃんをトップアーティストにして貰える様にアピールしよう！

「さあ麻美ちゃん、プロデビューの一步をみんなで踏み出そうよ！」

「……ちよつと小夜ちゃん！　あまり無茶な事しないで！」

「少しは私の話も聞きなさい！　ちよつと、小夜！」

でもねー、井上さんのスタジオつて遠いんだよねー。麻美ちゃんの家より電車に乗らなきゃいけないんだよねー。この前は座席でうつかり眠っちゃって、麻美ちゃんに慌てて起こされちゃった！

「……小夜、小夜！　起きなさい！　もう着いたよ！」

「……ほえ？」

また眠っちゃった。今度は那奈に怒られちゃった。でも電車の中つて眠くなるよね？　振動でフラフラ揺られてると段々気持ち良くなつてきちゃうんだよねー。

でも、もう大丈夫、ちゃんと目が覚めたもん！　那奈のゲンコツでいつつも那奈はあたしの頭ばかり叩くんだもん、本当に痛いんだよー！？

「……ねえ、ホントにこんな丘の上にスタジオなんてあるの？　見たところ一軒家しかないじゃない？」



「何か薰んとこの喫茶店みたいな雰囲気やな？ そろそろ打ちっ放し場のネットが出てくるとちゃうか？」

「……小夜、本当にこっちで合ってるの？ もしも道を間違ってたら私、もう歩く元気ないよ……？」

「大丈夫だよ、もう何回も行ってるもん！ 絶対に間違ってるないよ、ねー、麻美ちゃん！？」

「……初日は道に迷いまくって着くまでに二時間かかったけど……」

ちよつと長い登り坂を歩いていくと、ホラ、あつた！ 真っ白な建物で大きなガラス窓！

「……あつ、あそこです、二階の正面が全面ガラス張りの建物です」

「へえ、何か周りの他の建物とは一線引く様なお洒落なスタジオだね」

「金がかつてそうな感じやな、きっと中も防音対策とかバッチリなんやろなあ？」

「キヤー！ スゴいステキなスタジオー！ こんなスタイルの別荘とかあつてもいい感じー！」

井上さんのスタジオってあたしの家と形が良く似てるんだよね。前

に井上さんが遊びに来た時に、家の形がスゴく気に入ったらしくて、同じ建築家さんに頼んで作って貰ったんだって。だから入り口のインターホンも同じ形なんだよー！

ピンポーン

「……はい、サンライズ・ファクトリーです」

インターホンを押すといつも同じ女の人の声が聞こえてくる。でもあたし、この声の人の顔を見た事がないんだよなー、きつと向こうからはカメラであたし達の顔が見えてるんだろうけど。

「……あ、あの、遠藤と申しますが、井上さんは……？」

「……はいはい、麻美子さんね、ちょっと待ってね……」

待ってる間、何かインターホンから男の人の声で『ダメ、ダメ』とか『忙しいから』とか小さい声で聞こえてくる。この声って井上さんかなあ？

「……何か忙しいそうだね、私達迷惑なんじゃないの？」

「……アポすら取ってへんしな、小夜がいつも電話なんかしてないって言うたから取らんかったけど……」

「えっ、門前払い？　ここまで頑張ってやってきたのに？」

「……私だけだと良くあります、予定が変わったからまた今度にして欲しいとか……」

しばらく待つてるとまたさっきの女の人の声が聞こえてきた。まだ入り口のオートロック開けてくれないのかなあ？

「……ごめんなさいね麻美子さん、今日はちょっと井上が忙しくて手が放せないって……」

「えっー！？　ヒドいよそんなのー！　麻美ちゃんが音楽いっぱい頑張るって言ったから井上さんにもそれを伝えに来たのにー！」

あたしが文句を言うと、またインターホンの奥から男の人の声がボソボソ聞こえてきた。

『……開けてやってくれ……』

『……宜しいんですか……？』

『……社長令嬢相手に帰れなんて言えんだろ……？』

「……今、開けますからどうぞ……」

カシャって音がした、ロックスが開いたみたい。いつもみたいにすぐに開けてくれればいいのに、井上さんのイジワル！

「……明らかに私達って迷惑かけてない？」

「……小夜の声聞いた瞬間に態度がコロッと変わったで、カメラで見えへんかったんかなあ……？」

「……きつと死角に入ってたのよ、見えてたら即オープンって感じよね、さすがご令嬢……」

「……やっぱり井上さん、小夜ちゃんには頭が上がらないみたいですよ……」

何かみんなが後ろでゴニョゴニョお話してるけど、まあいいや！  
ガラスの扉を開けてエレベーターで二階に上ると大きなオフィスがあつて社員の人々が忙しそうにお仕事してる。みんなおとーさんの会社の人なんだよ！

「こんにちはー！」

「……………」

あれー？ 誰も返事してくれない。もう、みんな元気ないなー、もう一回挨拶してみようかなー？ って思ってたら那奈に耳を引っ

張られちゃった。

「……みんな仕事中でしょ！？ 大きな声を出すんじゃないの！  
井上さん、頭抱えて困ってるじゃない！？」

オフィスの奥の別の部屋に行くと、いっぱい書類みたいのが散らかったデスクに井上さんが座っていた。なーんだ、やっぱりいるじゃん！ 忙しいなんてウソつき！

「……すみません井上さん、凄く忙しそうな時に……」

「……これからは来る前に一本連絡をしてくれないか、遠藤君……？」

あれ？ 何で麻美ちゃんはこんなに井上さんに頭をペコペコ下げてるのかなあ？ 何か悪い事でもしたのかなあ？

「……で、今日の用件は何だい？ ピアノの演奏なら出来ればまた今度に……」

「あのねー、麻美ちゃんがこれから一生懸命音楽頑張りたいって決めたんだってー！ だから井上さんも……」

「五分黙ってろー！」

ボタン！！

……那奈に怒られて部屋から閉め出されちゃった。何でー？ ヒド  
いよー！？ あたし何も悪い事してないのにー！

「……なるほどな、そういう事が、良く決断してくれた、ありがと  
う遠藤君」

扉のガラス窓から中を見ると、みんなが井上さんの何か喋ってる。  
いいなー、あたしもお話に入りたいなー、入りたいなー、入りたい  
なー！

ガチャ！

「……小夜、大声出さないって約束出来る？」

「うん！ 約束するー！！ 絶対に大声出さないー！！ ちゃんと  
約束するから中に入れて、那奈！？」

ボタン！！

「えー、何でー！？ 何でまた閉めるのー！？ ちゃんと大声出さ

ないって約束したのにー!!」

……結局、お話が終わるまであたしは井上さんの部屋に入れて貰えなかった。扉にしゃがみ込んでふてくされてると、社員の人達にはジロジロ見られるし、あたしだけ除け者にしてズルいよみんな……。

「……前回の模擬レッスンの際、君の音楽センスを詳しくアメリカにあるデータと参照して調べさせて貰ったんだ、絶対音感があるとはいえ、それが才能に反映するとは限らないからね」

那奈にやつと部屋に入れて貰うと、井上さんはカラフルな円グラフや棒グラフみたいのが載った書類を見せてくれた。この紙に書かれてるのが麻美ちゃんの音楽の成績の全てなんだって。

「……何だかぜーんぜんわかんない?」

「アンタはわからなくていいの!」

「全文英語で書かれててわからへんなあ、千夏、通訳してや?」

「……何か歌声の音質とか、音階聴力のレベルとか書いてあるわ、ただ何を基準にグラフ化されてるのかわからないからアタシもサッパリだけどね」

書類を渡された麻美ちゃんは何か難しそうな顔をしていた。そうだ

よねー、読めないよねー？ あたしもサッパリわかんない。

「……予想以上に案外だったね、遠藤君の場合、音楽を理解する能力は長けているが、はっきり言わせて貰うとあまりに音楽の基礎知識が無さ過ぎる」

「……はあ……」

えー、どういう事なんだろう？ おとーさんだって麻美ちゃんの才能はスゴいって言うてたのにー！ 麻美ちゃん、何か肩を落としてガッガリしてるよー？

「即ち、君の一つの希望でもあったピアニストを目指すにはあまりに時間がかかってしまうだろう、十年、いや二十年と言っても言い過ぎではない」

「……えっ、そんなにかかるんですか……？」

「……世界や国内で活躍するピアニストのほとんどは幼少時代から英才教育を受けていた人間だ、ごく稀に天才的な才能を持つ人間も現れるが、君の才能はそこまでのものでは無いという事だ」

そんな、あんまりだよ、麻美ちゃんの力なら絶対スゴいピアニストになれると思ったのに。絶対音感ってそれほどスゴい才能じゃ無いのかな？



「……そういえば麻美子、アンタこの前の音楽の成績って酷かったよね……」

「……何かメチャメチャ凄い才能あるから『5』評価かと思ったら『2』やったもんなあ……」

「……アタシよりも下だったもん、何でこんな事になっちゃうのかしらねえ……？」

那奈も翼も千夏もみんな揃って首を傾げる。そんなに麻美ちゃんの成績って悪いかなー？ あたしなんか音楽『1』だったのにー。

「……私、楽譜が全然読めないんです、色々と教本買って家でも勉強したんですけど、いざテストになると、記号の文字が小さくて眼鏡をかけてる私には読めなくて……」

そうか、麻美ちゃん、目が悪いから音符とかが書かれている五線紙が読めないんだ。目さえ良ければ素敵なピアニストになれていたかもしれないのに、そんなの可哀想だよ……。

「……井上さん、はっきりと言って下さってありがとうございます、私、何か勘違いして舞い上がっちゃって、色々ご迷惑かけてすみませんでした……」

何か、麻美ちゃん泣き出しそう。スゴいショックだったんだろっな  
あ、一緒にいる那奈達も落ち込んだし、何とかならないのか  
なあ、おとーさんの力でもどうにもならないのかなあ？

「……結論を語るのはまだ早いよ、このデータで君にはもう一つの  
才能がある事がわかったんだ」

「……えっ？ もう一つの才能、ですか……？」

「そう、もう一つの才能、単純に説明すると君はとても歌が上手い、  
音質、音量、音階、共に良好だ」

麻美ちゃんの顔がキリーンと笑顔に戻ったー！ そーだよ、そーだ  
よ、麻美ちゃんはとても歌が上手いんだよ！ カラオケに行った時  
も歌採点90点代連発だったもん！

「ねーねーねー！ じゃあ井上さん、麻美ちゃんはピアニストじゃ  
なくて歌手が向いてるって事だよ、そーだよ、ねー？」

「つまりそういう事だね、君には歌手やシンガーソングライターの方  
が遥かに成功する可能性がある、その道を選ぶかは君時代だけど  
ね」

やったー！ やっぱ麻美ちゃんには素敵な音楽の才能があったん  
だ！ おとーさんの言っていた通りだったんだ！

「麻美ちゃん、歌手だよ歌手！ 歌も歌えてピアノの弾ける、カッコいい歌手になろうよ！」

「……えっ？ でも歌手だなんて私には……」

弱気になっている麻美ちゃんの肩を那奈がポンツって叩いた。翼と千夏も嬉しそうな顔をして麻美ちゃんの顔を覗き込んだ。

「麻美子、悩む必要無いじゃない、アンタの才能を目一杯披露出来る場所が見つかったのよ？」

「まさか怖じ気づいた訳とちゃうやろな？ デビューしたらCDいっぱい買ったるで！ 領収書は『真中』で切るけどな」

「いや〜ん、デビューしたら音楽番組とか出れるかもしれないのよね？ ミュージシャンのサインとママの衣装を忘れないでね〜！？」

みんな、ニコニコ笑顔で嬉しそう！ 麻美ちゃんもすっかり立ち直ってみんなと同じニコニコ笑顔！

「麻美ちゃん、早くデビュー出来る様に頑張ろうよ！ お歌の練習、ピアノの練習、あたしいっぱい手助けしてあげるからね！」

「……小夜ちゃん、みんな、本当にありがとう！ 遠藤麻美子、精一杯頑張ってみます！」

「……頑張ってくれるのは僕達も嬉しい限りだが、スタジオに来る時は必ず連絡をしてくれよ……？」

こうして、麻美ちゃん歌手デビュー計画は華々しくスタートしました！ いつデビュー出来るのかなあ、どんなお歌を歌うのかなあ？ 麻美ちゃんよりもあたしの方がドキドキしてきちゃった！ 楽しみだなあ、エヘッ！

……あつ、そうだ。えーとねー、このお話は後から井上さんに聞いたんだけどー、麻美ちゃんの事をおとーさんに教えてあげたのは麻美ちゃんのピアノの演奏を聞いたあたしのお母さんだったんだって。お母さんも麻美ちゃんと同じ様な特殊な才能を持っているらしくて、麻美ちゃんなら素敵なミュージシャンになれるって紹介してあげたんだって！おとーさんもお母さんもスゴいなー！

でも、何であたしには音楽の才能が無いのかなー？ ピアノとか弾けたら瑠璃ちゃんにも聴かせてあげられるのかなー？ ちよつと残念、でもまあいいや！ 以上、真中小夜でした！ バイバーイ！

「……本当にこんな進行で良かったのかな？ 次回は私、渡瀬那奈に戻ります、あー、寝不足で頭痛い……」

## 第22話    Another    mind

「……今日、完全警戒態勢なんです、遠藤家……」

学校に登校していきなりこの話。最近、麻美子の周辺がやたらと慌ただしい。一体今度は何が起きたというのか。

「……航君のお父さんが今日、仮出所の予定で……」

航の父親、栗山遼司さん。突発的な事故だったとはいえ、瑠璃の実の母親を殺めてしまい刑務所に服役していた。それはエライ事だ。

「……そりゃ警戒態勢にもなるわよね……」

「……だから今日、航はここにいないのか……」

無遅刻無欠席、いつも私と翔太の後ろにいる背の高い坊主頭が今日はいない。何か背景にポツカリ穴が空いてしまった様な、慣れ親しんでた建物が潰されてしまった感覚だ。

「しかしやで麻美子、何でそんなビッグイベントを今までウチらに

黙々とんたんや？」

「そうよ、水臭いわね、そんなに隠さなきゃいけない理由でもあるのぉ？」

「……航君の前ではお父さんの話をするのは無理だから、みんなにも話すチャンスが無くて……」

翼と千夏の問い掛けに麻美子は申し訳なさそうに答えた。本来なら刑務所の外で久し振りの親子の対面、うまくいけばまた家族一緒に生活していけるし、父親の社会復帰だって夢ではない話なのだが。

「……でも航君は、航君はお父さんの事を……」

「……嫌っているよね、間違いなく……」

声が詰まってきた話し辛そうな麻美子をサポートする様に、続きを薫が語り出した。そうだった、薫も過去の航の事を知っていたんだっけ。

「……昔さ、俺が施設であつた航はいつも父親を憎んでいたよ、新しい家族と幸せを掴もうとしていた母親を殺して、自分や瑠璃ちゃんの人人生を滅茶苦茶にした最低の人間だ、ってね」

しかし、あの時の航の父親・遼司さんは精神衰弱と共にアルコール

依存症を引き起こしていたらしい。航がその事を理解してくれていればいいのだか、麻美子や薫の話を聞く感じではそれも難しそうだ。

「……………」

「……どうしたのよ小夜、黙り込んでるじゃって？」

「……瑠璃ちゃん、大丈夫かな……」

そういえば瑠璃は父親の事を覚えているのだろうか。精神的な障害を起こした原因は母親が刺された現場を見てしまったからではないかって遠藤先生は言っていたけど。

「……今回は瑠璃ちゃんには対面させないってお父さんが言ってきた、せっかく順調に元気になってきたのだから下手に刺激を与えない方が良いつて……」

確かにその方が良さそう。父親の顔を覚えているがどうかはわからないけど、何か記憶の隅に残っているトラウマを呼び戻してしまうとまた心を閉ざしてしまうかもしれない。

「……瑠璃ちゃん……」

小夜は胸に手を当てて心配そうにうつむいた。すぐにでもそばに飛

んで行ってあげたい、小夜の心の叫び声が私達には聴こえていた。

でも、今回の件は私達が勝手に踏み入ってしまったてはいけない様な気がする。これはあくまでも一つの家族内の問題であって、家族同士が分かり合えない限り解決はしないと思う。

兄妹二人しかないならともかく、そばにはちゃんと遠藤先生や美代子さんがついていている訳だし、今日の予定を聞いて麻美子が想いを寄せている彰宏さんも家に駆けつけてくれているらしい。

この話は私達の様な子供が余計な横槍を入れるべきではない。黙って見守るしかないのだ。

「……小夜、大丈夫だから、心配しないで」

「……うん……」

私は出来るだけ小夜の心から不安を取り除こうと励まし続けたが、学校にいる間、終始小夜の笑顔が現れることは無かった。

私達が学校で授業を受けているその頃、航と遠藤先生は仮出所してきた遼司さんを刑務所まで車で迎えに行っていた。

「……やっと仮出所だな、お疲れさん、遼司……」

「……和夫、色々と迷惑をかけてしまったな、すまない……」

償いの心労でボロボロに痩せこけ髪の毛も髭も白髪混じりになった



自分の父親を、航は何か『物』を見るような冷たい目線で見つめていた。

「……………」

「……航、すまなかったな……」

「……………先生、早く帰りましょう」

父親から話しかけられた航は何も返事をする事なく車に乗り込んでしまった。その姿を見た遼司さんは黙り込んでその場立ち尽くし、遠藤先生は一つ深い溜め息をついた。

「……遼司、さあ乗ってくれ、大した事はしてあげられないが俺のカミさんが料理を作って家で待っていてくれるんだ」

「……………すまない、和夫……………」

車に乗り込んでからも、航は遼司さんの顔を一切見る事もなくずっと黙り込んで窓から外を見ていた。遠藤先生と遼司さんが喋っている、会話に入ってくる事は無かった。

私達は学校の授業も全て終わり、下校路を歩いていた。しかし、何か気分が上がらずに大して会話も盛り上がらないまま駅に到着してしまった。

「……じゃあ私、心配なんで急いで帰ります……」

麻美子は駅の時計を見て急いで改札口への階段を上っていった。いつもならみんな笑顔で別れるこの場所、私達は心の奥に何かもどかしい感情を抱いていた。

「……待つて、待つて麻美ちゃん！」

突然、小夜が帰ろうとする麻美子を止めた。その声に麻美子の後ろから階段を上り始めていた翼と千夏と薫も足を止めた。

「……えっ、どうしたの小夜ちゃん？」

「……あたし、やっぱり麻美ちゃんの家に行く！一緒に連れて行って！」

やはり小夜が気持ちを抑えきれずに暴走気味になってしまっている。その気持ちがわからない訳ではないが、さすがに今日ばかりはそれを許す訳にはいかない。

「小夜、何を言い出してるのよ!？」

「だって、だって！瑠璃ちゃんと航クン、二人とも心配だもん！」

「小夜、いい加減にしなさい！ アンタが行ったって役に立てる事なんてないの！ むしろ邪魔になるのよ！？」

私が声を荒げて説得していると、次第に小夜の瞳は潤んできてしまった。その姿を見て、私も胸が苦しくなってきた。

「……でも航くん、お父さんの事を憎んでるって言ってたから……」

「……小夜、それはね、家族間の問題であって私達のような他人が口を出せる事じゃないのよ……？」

「でも、何かイヤな予感がするの！ このまま二人を放っておいちゃいけないって気が……」

「……小夜……」

私だって苦しい。何か出来る事があるなら力になってあげたい。でもどうすれば良いのだろう、一体何が出来るのだろう。私は言葉に詰まり、これ以上小夜を説得する事が出来なくなってしまった。

私だけではない。階段を下りてそばまで駆け寄っていた麻美子も、横で話を聞いていた翼も千夏も薫も、何も言い出せずに黙り込んでいた。きつとみんな、私と同じ心境だったのだろう。

「……よし、じゃあ行こう、小夜！」

「……本当に！？ 翔ちゃん、一緒に行ってくれるの！？」

沈黙を切り裂いたのは翔太だった。何かを決意した様に気合いを入れて、力強く小夜の肩をポンと叩いた。

「ちょっと翔太、アンタ、何を考えてるのよ？」

「……父親を憎むなんてそんな辛い話ないだろ、もし本当に航がそんな事を思っているなら俺は放っておけないよ……」

『父親』と言うキーワードが翔太の心を動かした。幼い頃に貴之さんを事故で亡くした翔太からすれば、父親を憎むなんて事は聞くに堪えない話だったのかもしれない。

「……そうだね、困ったり苦しい時は助け合って約束したしね……」

翔太に触発されて薫も動き出した。これが女には良くわからない男同士の友情ってヤツなのか。

「……オトンを憎むなんてウチからしてもありえへんな、そんな親不孝な真似するんやったらウチも見て見ぬ振り出来へんわ」

「アタシのパパの事はそんなに好きじゃないけど憎むのはいけない

と思うし、やっぱり a t h o m e が一番よね、小夜！」

「……小夜ちゃん、今回は瑠璃ちゃんには父親と会わせないみたいだから、もし良かったら瑠璃ちゃんの相手をしてあげてよ！ きっとお父さんもお母さんも喜んでくれるよ！」

「……みんな……」

……やれやれ、みんなお人好しと言うか、身の程知らずと言うか、私達が行って出来る事なんて何も無いとは思っけど……。

「……全くもう、しょうがないわね、でも邪魔にならない様に何事も無かったら挨拶だけしてとっとと引き返すからね、いいわね、小夜！？」

「……うん、わかった！ みんな、ありがとう！」

私達が全員で駅から電車に乗り込んだ時、すでに遠藤先生が運転する車は診療所に到着していた。

「お帰りなさい、和夫さん」

「ああただいま、遼司、紹介するよ、妻の美代子だ」

「栗山さん、長い間お疲れ様でした、お帰りなさい」

「……色々とお世話になりました、航と瑠璃の面倒を見て頂いて  
るみたいで……」

遼司さんは必要以上に深々と頭を下げた。元々はとても腰の低い優  
しい人だったそうだ。しかし、遼司さんと美代子さんが初対面の挨拶  
をしている時も、航は一切父親を見ないでただ黙り込んでいた。

「……お帰り航君、また今日一日お邪魔させて貰うけど宜しくね」

「……………どうも」

航は遠藤家に来ていた彰宏さんの挨拶も適当に受け流すと、外にい  
る父親達の存在を無視して一人だけ先に家に入り二階の自分の部屋  
へと上がっていつてしまった。

「……おい航、ちょっと待て!」

航を止めようと遠藤先生が声をかけたが、航はこの声に振り向く事  
は無かった。

「……いい、いいんだ和夫、航の好きにさせてやってくれ……」

「……しかしだな、遼司……」

「……俺は、子供達の大切な物を奪って傷付けてしまった、許して貰える事ではないんだ……」

うなだれる遼司さんを見て、遠藤先生は再び深い溜め息を一つついた。しかし、気持ちを切り替えて一緒に出迎えてをしてくれた彰宏さんの元へと歩み寄った。

「……彰宏、非番の日にすまないな、悪いが、航を二階から下に降りてくる様に呼んできてくれないか？」

「……はい、わかりました、瑠璃ちゃんはどうしますか？」

「今日は瑠璃には会わせないつもりだ、そのまま二階にいて相手をしてやってくれ」

その間も、遼司さんはうつむいたまま立ち尽くしていた。その表情からは過去への後悔と懺悔の念が滲み出ている。

「……外も何ですから良かったら中にどうぞ、大したおもてなしも出来ないかも知れませんが……」

「……すみません……」

見かねた美代子さんが声をかけて家の中に案内した。しかし、遼司さんの返事の声はすでにうわずっていて、唇を噛んで悔しさと苦し

みの涙を必死に堪えていた。

「…………おにい、ちゃん…………？」

その頃、二階に上がった航は自分達の部屋の扉を締め切って、ベッドの上で瑠璃を膝の上に乗せ背中からギュッと抱きしめていた。まるで、何かから瑠璃を守る様に。

「…………どうしたの、おにいちゃん…………？」

『おにいちゃん』、会話が出来る様になってきた瑠璃に、一生懸命小夜が教えてあげた二番目の言葉だ。

「…………大丈夫だよ、何でもない」

「…………だれか、きたの…………？」

「…………気にしなくていい、瑠璃の知らない人だよ」

航は瑠璃を心配させまいと自分の気持ちを押し殺して出来るだけの笑顔を見せた。すると、トントンと部屋の扉を叩く音が二人の耳に聞こえてきた。



「……航君、中に入っていていいかな……？」

航を呼びに彰宏さんが部屋の扉を開けて部屋に入って来た。その瞬間、航の顔は瑠璃に見せた笑顔は消えて再び冷たい目つきに戻ってしまった。

「……和夫さんが、嫌かもしれないけど下に来なさいって言ってるから、瑠璃ちゃんを部屋に残して一階に降りてきてよ……」

「……………」

「……瑠璃ちゃんは俺が責任持つて相手をするから……」

「……………わかりました」

航は瑠璃の頭を優しく撫でるとベッドを降りて部屋の扉へと向かった。普段とは違う家の空気に瑠璃は心配そうに兄の背中を見つめていた。

「……………いいか瑠璃、絶対にこの部屋から出たら駄目だぞ、彰宏さんと遊んでなさい」

「……………うん……………」

瑠璃は小夜とお揃いのあの白いウサギのぬいぐるみをギュッと抱き

しめていた。まるで、自分の不安を小夜に伝えようとしているかの様に……。

その頃、最寄り駅に到着した私達は急いで遠藤医院に向かっていた。瑠璃の不安を感じ取ったかの様に、気持ちを抑えきれない小夜が突然走り出したのだ。

「……小夜、落ち着きなさい！ そんなに走ったらまた転ぶよ！」

「……みんな、早く急いで、お願い！ 何かイヤな予感がするの、すごくイヤな予感が……！」

体育の授業では見た事がない様な小夜の全力疾走。その姿を見て、私も何か嫌な胸騒ぎを感じていた。

出所祝いとばかりに美代子さんが用意したちやぶ台に置き切れない程の沢山のご馳走。しかし、誰もそれに手をつけようとしなかった。とても、そんな雰囲気では無かった。

「……遼司、食べるよ、久し振りだろこんな食事は？」

「こんなものしか用意出来なくてごめんなさいね、お口に合えばいいんですけど……」

遠藤先生も美代子さんも、一言言って再び黙り込んだ。ちやぶ台を

挟んだ近くて遠い距離、遼司さんと航の間には物凄く重く冷たい空気が漂っていた。

「……………」

その空気に耐えられず、美代子さんが何とか空気を変えようとして話題を持ち出した。

「……あの、栗山さん、航君には学校に凄く仲のいい友達がいるんですよ、遠くのサーキット場に連れて行って貰ったり、この前は泊まりがけでキャンプ場に行って遊んで来たんですって、ねえ、航君？」

「……………はい」

私達の話でやっと出来た沈黙の突破口に遠藤先生も続いた。

「……俺も会った事があるけど、とても良い友達だよ、航や瑠璃の為に夜遅くまで探し回ってくれたり、学校帰りでも家まで遊びに来てくれたりな……………」

「……そうか、良かった、航には良い友達が出来たんだな……………」

少し遼司さんの緊張が緩んだ。この話題ならいける、そう思ったの

だろう。遼司さんは意を決して航に話しかけた。

「……航、学校は楽しいか？ 勉強は楽しいか……？」

しかし、次の航の返事は溶けかかっていた家族のわだかまりを再び凍りつかせてしまった。

「……あなたに話す事なんて無い」

「……航！」

「航君、そんな事を言っちゃ駄目よ、お父さんはずっとあなた達の事を心配して頑張ってきたのよ？」

遠藤先生と美代子さんは何とか航の心を開こうと諭したが、航は再び黙り込み遼司さんの顔から目をそらした。

「……ハア……」

この拭いきれない倦怠した『嫌悪感』と言う深い霧の前に、遠藤先生は困った様に溜め息をついてお茶を一口飲んだ。そして、話題を切り替えて遼司さんに話しかけた。

「……遼司、航と瑠璃のこれからについてなんだがな……」

「……ああ……」

「まだしばらくの間は俺の方で預かっておくぞ、お前がすっかり社会復帰をして立ち直った時、ここに二人を迎えに来てくれれば……」

「……断ります」

遠藤先生と遼司さんの会話を遮る様に航は冷たい結論を突きつけた。気持ちが少しずつ緩んできていた遼司さんは、航の答えを聞いてまでも唇を噛みしめてうつむいた。

「航、もう許してやれよ、お前だってあれは事故だったってわかっているだろう？」

「航君、あなたのお父さんが罪を償って帰って来たのよ？ 家族なんだからちゃんと迎えてあげて頂戴？」

「………いません」

「何？ 今、何て言った？」

「………俺達に父親なんていません」

航の言葉に遠藤先生はついに憤慨し、立ち上がって航の元に詰め寄った。

「航、いい加減にしろ！ お前達も今まで苦しい思いをしてきただろうけど、その分遼司だって同じ位の苦しみを一人で耐えてきたんだぞ！ それをそんな……！」

「……和夫、もう止めてくれ……」

「……何を言い出してるんだ遼司！ お前がそんな事で……！」

「……いいんだ、もう、いいんだ……」

立ち上がり大声をあげる遠藤先生を抑えて、遼司さんは航の前に正座をして頭を畳につけて土下座をした。

「……航、すまない、すまなかった……」

遼司さんは泣いていた。床にこすりつけている額の下目の目からは大粒の涙が流れ落ちて畳の上にシミが出来ていた。

「……俺は、報いの無い人生に嫌気がさして酒に溺れて何の罪も無いお前達を傷付け、挙げ句の果てにはお前達の大切な優しい母親までもこの手で奪ってしまった、お前達の人生を滅茶苦茶にしてしまった！」

「……………」

航は黙って微動だにせず謝り続ける父親を見ていた。その親子の姿はそばにいる遠藤先生や美代子さんの心にグサリと刺さる辛い光景だった。

「……謝って済む事ではないのはわかっている、この先一生、俺の全てを掛けてお前達に償い続ける！ この通りだ、すまなかった！」

遼司さんはさらに畳に頭をこすりつけて航に謝罪した。しかし、それでも航の凍りついた心が開く事は無かった。

「……もういいです、何もいりませんから俺達の前から消えて下さい、二度と現れないで下さい」

「航！ お前、父親に向かって何て事を……！」

「……航君、どんな事があってもあなたの前にいる人はお父さんなのよ？ たった一人のお父さんなのよ？」

周りの言葉はこの親子にはもう届かなかった。深く、大きく亀裂が入ってしまった家族の愛情はもう戻らない。

「……あなたの顔を見ると辛い記憶が戻って来るんです、俺達を本当に想ってくれているならもう俺達兄妹に関わらないで下さい、

二度と嫌な事を思い出させないで下さい」

「……そうか、そつだよな、わかったよ航、すまない……」

遼司さんはゆっくりと頭を上げた。その顔は涙でグシャグシャになり、哀れな絶望的を漂わせていた。

「……和夫さん、一体何が……？」

「……お前は出てこなくていい……」

尋常でない一階の雰囲気、心配になった彰宏さんが下に降りてきてしまった。しかも、二階の扉を開けっ放しにして。

「……航、ただ一つだけ、一つだけ教えてくれ、瑠璃は、瑠璃は元気なのか？」

「……！」

遼司さんの口から出た瑠璃の名前を聞いて、航の顔は凶変した。何か殺意に近い空気が部屋中を包んでいった。

「言葉はどれくらい喋れる様になったんだ？ 一人でどれくらい歩ける様になったんだ？ 頼む航、それだけ教えてくれ！」



「……………お前に教える事なんて一つも無い」

「航、何て言葉使いだ！ 父親に対してお前などと……………！」

「父親なんていらぬ！！！」

航は肩を掴んだ遠藤先生の手を振り払い、その勢いでちゃぶ台を左手で思いつき叩いた。その叩いた反動で上に並べられていた料理のお皿が何枚か床に落ちてしまった。

「誰のせいで瑠璃があんな事になったと思ってるんだ！ 本当だったら今頃、周りの同じ位の子供達と元気に小学校に通って、友達を作って、いっぱい勉強して……………！」

「……………航……………」

航の気迫に、誰も止めに入れる人はいなかった。何年も苦しみ耐えてきた息子の怒りに、遼司さんはただ黙って聞いている事しか出来なかった。

「瑠璃は今でも学校にも行けなくて、毎月病院に行って訳のわからない器具をつけられて辛い検査を受けているんだ！ 言葉も喋れないで、行きたい所にも自由に行けなくて、ずっと寂しい思いをしてきたんだ！ 自分の母親の顔すらも覚えてないんだぞ！ 何で瑠璃だけ、何で俺達だけこんな辛い思いをしてこなきゃならないんだ！

「？」

「……すまない、航、本当にすまない……」

航の積年積もり続けた苦しみの叫びを聞いた遼司さんは、ボロボロと泣き崩れて何度も何度も航に対して頭を下げた。

「……航君……」

彰宏さんはやりきれない気持ちを吐き捨てる様に言葉を漏らしたその時、後ろで何かカタカタと物音が聴こえてきた。

その音が聴こえた方を振り向くと、そこには階段を四つん這いになりながらした下まで降りてきてしまった瑠璃がいた。

「……おにい、ちゃん？……」

「……瑠璃ちゃん！ まさか、降りて来ちゃったのか！？」

「……彰宏！ だから上にいて瑠璃を見ているとあれほど……！」

遠藤先生と彰宏さんはすぐに瑠璃を止めようとしたが、もうその時にはすでに瑠璃は下まで降りてきてしまい、そのまま四つん這いになりながら航の元へと近づいていった。そして、その姿は遼司さんの目にも写った。

「……瑠璃、瑠璃なのか!？」

「瑠璃に、触るなあぁ!!」

航は瑠璃に近寄ろうとした遼司さんを思い切り突き飛ばし、そのまま台所へと向かっていった。

押し飛ばされた遼司さんはちゃぶ台の上に倒れ込み、料理が乗っていたお皿は全てひっくり返ってしまった。

「航、何をする気だ!？」

航が台所から帰ってくると、その手には包丁が握られていた。そして、瑠璃を背中に庇い近付かせない様に遼司さんに刃先を向けて突きつけた。

「……航、瑠璃……」

「……………絶対に、お前を瑠璃には近寄らせない」

この最悪の状況に美代子さんは震え上がり、遠藤先生と彰宏さんは何とか航に思い止まらせようと必死に説得した。

「航! 馬鹿な真似はやめろ!」

「……航君、その包丁を離すんだ、航君！」

しかし、逆上した航の耳には二人の声は全く届かなかった。

「………お前が、お前さえいなければ………」

「……航………」

すると、遼司さんは包丁を向けているを航の前に静かに座り込んだ。

「……航、俺を、俺を殺してくれ………」

「………！」

突然の遼司さんの行動に航は一瞬驚いた。驚愕した遠藤先生は遼司さんの両肩を掴んで体を揺さぶって一喝した。

「遼司！ お前、何を言い出しているんだ……！」

「……俺はもう取り返しのつかない事をしてしまった、どんなに謝ってもどんなに頑張っても償い切れない、それならば、もし航達が俺を殺したいほど憎んでいるならば、俺はそれを拒む事は出来ない………」

「そんな事をさせてどうするんだ！？ お前は自分の息子にまでも過ちを犯させるつもりなのか！？」

遼司さんは両肩にかかっている遠藤先生の手を静かに離すと、再び航の前に正座をして座った。

「……航、俺を、殺せ……」

「やめろ航！ 殺しちゃいかん！」

「航君、ダメよ！ 包丁を離しなさい！」

自分の前で涙を流しながら懇願する父親を見て、航は覚悟を決めた。遠藤先生の声も美代子さんの声ももう航には届かなかった。航は瑠璃の見ている前で立ち上がって包丁を両手に持ち、遼司さんの頭の上に刃を突き立てた。

「……おにい、ちゃん……？」

「……これ以上瑠璃を傷つけさせない、その為なら……！」

「……航、瑠璃……！」

「やめてくれ、航……！」

「きゃあー!!」

航は父親に向かって憎しみの刃を振り下ろした。誰もか惨事を覚悟したその時、玄関の戸が開いて家の中に飛び込んできた一人の少女が二人の間に立ち塞がった。

「ダメーーーーー!!」

「……!」

航の手が止まった。航と遼司さんの二人の間に、手を大きく広げた小夜が立っていた。家に駆け込んだ小夜が航を止めたのだ。

「ダメだよ! 人殺しなんてしたら絶対にダメだよ!!」

「……人、殺し……」

「そんな事する航クンを見たって瑠璃ちゃんは絶対に喜ばないよ! だって瑠璃ちゃんが大好きなおにいちゃんは、困った人を助けてくれる優しいおにいちゃんだもん! 大きくて、強くて、優しいおにいちゃんだもん!!」

「……」

大きな瞳から大粒の涙を流しながら、小夜は航の目を力強く見つめ

ていた。その純粹で陰りの無い氣迫に航はおるか、周りにも声も失った。

「たーよ、たーよ、たーよ」

小夜の姿を見た瑠璃はハイハイ歩きをしながら近づき足元にしがみついて立ち上がった。

「たーよ、たーよ」

「……………」

その姿を見て航は我に帰り、振り上げていた包丁を静かに下に降ろした。

「…………航君、包丁をこっちに渡して、いいね…………？」

彰宏さんに促された航は静かに手に持っていた包丁を渡した。もう抵抗をする素振りは一切せず、ただその場に立ち尽くした。

「小夜！！」

「小夜！航！」

一足遅れて私達が診療所に到着すると、航は私達を突き飛ばして突然外へと走り出していつてしまった。

「航は俺と薫で追いかけるから、那奈達は小夜を頼む！」

「わかった！ 翔太、航をお願い！」

私が玄関から居間に駆け入ると、小夜は畳にペタッと座り込んで茫然としていた。

「たーよ、たーよ」

そのそばでは、瑠璃が心配そうに小夜の顔をペタペタ手で触っていた。

「小夜、小夜！」

「小夜ちゃん、しっかりして小夜ちゃん！」

私と麻美子の呼びかけに気づいた小夜は、今になって恐怖が襲ってきたのか私の胸に飛び込んできた。



「うわーん！！ 怖かったよー！！」

「……全く、アンタは本当にいつもいつも……」

私は大声を出して泣き出した小夜のいつもの様に数発ぺちぺちとひっぱたいた。怪我が無かったから良かったものを……。その私達の姿を見て、瑠璃が不思議そうに小夜の顔を覗き込んでいた。やはりあの悪い予感瑠璃が教えてくれたのだろうか。

「……たーよ？」

「……大丈夫だよ、小夜は痛くて泣いてる訳じゃないよ……」

私達の横では、落ち着きを取り戻した遠藤先生達がお互いの無事を確かめあっていた。

「遼司、怪我は無いか！？ みんなは！？」

「お母さん、彰宏兄ちゃん、大丈夫だった？ 怪我とかしてないよね！？」

「……麻美子帰ってきてたのね、お母さん、腰が抜けちゃって……」

「……俺、台所に包丁をしまってます……」

部屋中に散らかった料理と食器と折れてしまったちゃぶ台。ここで  
どれだけの修羅場があったか見るだけで充分に推測出来た。  
遼司さんは座り込んだまま、泣いている小夜の頭をいいこいいこし  
て撫でている瑠璃の姿を涙を流して見つめていた。

「ところで、航はどこへ行っただ？」

「翔太君と薫ちゃんが追いかけて行っただけですけど……」

「……どこまで行っただんやろな、アイツら……？」

遠藤先生に尋ねられた翼と千夏は心配そうに玄関から外を見ていた。  
もう外は日が暮れかけて赤く染まっていた。

最悪の結末を止められたとはいえ、結局私達は一つの家族の問題に  
足を突っ込んだしまった。

それが良かった事なのか、悪かった事なのか、この時私にはまだわ  
からなかった。どうしようもない不安が心の中に渦巻いていた。

「みんな、航君が見つかったそうです！」

散らかった居間を掃除して完全に日が暮れて外が暗くなった頃、航  
を探しに行っていた翔太達から連絡があった。麻美子に呼ばれて玄  
関から外を見ると、翔太と薫が航を連れて帰ってきた。

「翔太！」

「那奈、小夜は？」

「うん大丈夫、中で瑠璃と遊んでるよ」

「そうか、良かった」

結局、航は春にみんなでお花見をしたあの『桜の公園』にいた。翔太と薫が見つけた時には航も落ち着きを取り戻していたらしい。

憎しみのあまりにしてしまった自分の行動への恐怖心と、それを止めてくれた小夜や周りの人達への罪悪感から耐えられなくなつてその場を逃げ出してしまったそうだ。

こちらに歩いてくる航の表情はいつものポーカーフェイスに戻っていた。もうさつきみたいに暴れ出す様な事は無いだろう。

しかし、三人が無事に帰ってきたのはいいが何か様子がおかしい。つて言うか、見て明らかにおかしい。

「……なあ、追っかけて行つた薫が何で航におぶられて帰ってきてんねん？」

「……まだこの前に壊れた義足の修理が終わってなくて、緊急用のスペアつけてたらそれがまた壊れたの！」

薫の右足の義足を見てみると、今度はストッパーどころか足首の部

分が完全にもげていた。何も知らない人が見たらビックリするだろうなあ。

壊れてしまったのはしょうがないにしても、探しに行った人間がその行方不明者に担がれて帰ってくるとは何てヘタレな搜索救助隊だろうか。

「ヤダ、薫ちゃんったらダツサ〜イ！」

「……航、もういいから降ろしてくれよ、翼にも千夏ちゃんにもバカにされるし、メチャクチャ恥ずかしい……」

「……………了解」

合図に合わせて航はいきなりサツと手を離したので、薫はお尻から勢い良くドスンと落ちた。最後の最後にしようもないオチをわざわざつけてくれる。

「痛え!!」

「……何をしに来たんやオマエは……？」

すると、外の声を聞いて家の中からみんなが出てきた。小夜も瑠璃の手を引いて航の前に立った。

「……航君、お帰り」

「…………お帰りなさい、航君」

「……………迷惑かけて、すみませんでした」

優しく迎えてくれた美代子さんと彰宏さんに対して、航は深々と頭を下げた。もう、自分がやってしまった事を反省出来るほど落ち着いたみたいだ。

「…………おにい、ちゃん…………？」

「そっだよ瑠璃ちゃん、おにいちゃんが帰ってきたよ！」

小夜にも笑顔が戻っていた。二人は並んで航に笑いかけて呼吸を合わせた。

「せーの、おにいちゃん、おかえりなさい！」

いつも通り、何事も無かった様に小夜と瑠璃は声を揃えて航を笑顔で迎え入れた。その姿を見て航の表情にもやっと笑みがこぼれた。

「……………ただいま、ありがとう」

「エヘヘッ、航くん、お帰りなさい！」

「おにいちゃん、おかえりなさい！」

小夜と瑠璃は顔を見合わせてニコツと笑った。それを見た私達も一安心して全員笑顔になった。

この笑顔を見た時、私の心の中の不安は消え去った。今回は不安が先走り動かなかった私より、二人を助けたいという強い想いを持つて駆けつけた小夜の判断が正しかった。

いや、この兄妹に対してはそれが一番の正解なのかもしれない。裏も表も無い、真っ直ぐな想いこそが二人を救う事が出来るのだろう。私はどうやらこの件だけは小夜に一本取られた様だ。

「……ところで那奈、航のお父さんは？」

「……あれ、先生もいなくなね？」

「……翔太達が帰って来る前に、二人て車に乗ってどこかに行っちゃったよ……」

その頃、暗くなった国道を走っていく車の中で、遼司さんは顔を抑えて涙を流していた。ダッシュボードに頭をつけて、愛する子供達の事を想いながら。

「……遼司、航は心底からお前を憎んでいる訳じゃない、お前が誕生日にくれてやったギター、アイツはまだ大事に持っているんだ」

「……………」

嗚咽する遼司さんにハンカチを渡した遠藤先生は、車を運転しながら話を続けた。

「……一人で一生懸命練習してな、瑠璃に聴かせてやってるんだよ、お前が学生時代に歌っていた、お前が航に教えた歌をな……」

「……航……」

「……今は無理かも知れないが、いつかあの子達もお前の事をわかってくれる時が来る、それまでにお前はしっかりと立ち直って二人を迎えに来い、それまでは命をかけて俺があの子達を守るから……」

「……すまない、和夫……」

車は秋の夜空の下を走り抜け、暗闇へと消えていった。その後、この日は夜から明け方まで雨が降り続いた。

秋の雨空の様な何か物悲しい一日、私達はこの世には簡単には解決しない複雑で様々な事情がある事を改めて痛感させられた。

## 第23話    C E N T E R    O F    U N I V E R S E

「全競技全制覇よ！    もうここまで来たらこれしかないでしょ！？」

季節は十月体育の秋、頼みもしないのにどこかの応援団長並みにテンションの高い負けず嫌いの女が大声を出して一人で大騒ぎしている。

「……千夏、アンタ一人だけお祭り騒ぎだよ、自粛しなさいって恥ずかしい……」

「自分の競技の前までは真っ青な顔してガチガチに緊張しとったのになぁ、終わったら途端にいきなりハイテンションモードやで、困ったもんや」

「いいじゃない、ちゃんときっちり結果出したでしょ！    ホラ、このメダルが目に入らぬか！」

参加競技が無くてシラケまくっている私と翼に『どうだ！』とばかりに首にかけた玩具みたいな勲章を目の前にチラチラと見せびらかしてくるなんちゃってアスリート。はつきり言って目障りだ。コイツは私達に何か催眠術でもかけるつもりか。



「たかだか県大会の競技で偉そうに、しかもこんな玩具みたいなちっさいメダルごときで」

「ちよつとちよつとちよつと、気安く触らないで頂戴！ 汚らしい、手垢がつくじゃないのよ！」

今日、私達は県内で有名な競技場に学校生徒全員でやってきている。今、翼が言った通りここでは県教育会が主催のスポーツ大会なるものが行われており、学年別競技別でそれぞれの学校の代表者が日頃の練習の成果を出して競い合っている。

陸上競技は午前中にほとんど終了してしまい、午後からは体育館内での室内競技が行われる。まあ、千夏以外は部活動不参加者だからの私達には全く関係のないイベントなんだが。

「……そういえばさ、千夏って陸上部なのは知ってるんだけど何の競技をやってるの？」

「えっ、何よ何よ、知らなかったのお？　じゃあどうしようかなあ、みんなに教えてあげようかなあ？」

「……いや、別にいいよ、興味ないし……」

Listen! Listen! Listen!

……結局、聞いて欲しいのかよこのかまってちゃんは。あー、面倒臭い……。臭い……。

「……………何よ？」

「ダ～メ！ 心がこもってない！」

「……………えゝ、ナニナニ？ スッゴい知りたゝい……………」

「それじゃあ、当・て・て・み・て！ ウフツ」

「……………もういいや……………」

カチンときた私達は無視してさっさと体育館に移動しようとしたら、いちいち前方に回り込んで行く手を遮ってくるしつこいかまってちゃん。

「じゃ、じゃあヒントヒント、ヒントあげちゃうから当ててみて！  
？ 『走り さあ、な～んだ？』」

相手をしてやらないと当分しつこくまとわりついてきそうな感じだ。物好きな読者の人達にも知って貰える様にここはとりあえず答えてやるとするか。

「……………じゃあ、幅跳び？」

「ブー！ じゃあ次は翔太君答えて？」

「……オレ？　じゃあ、三段跳び？」

「ブー！　はい、次は麻美子！」

「……棒高跳び、ですか？」

「惜しい！　さあ、小夜答えて！？」

「砲丸投げー！」

「……何で？」

「んじゃ円盤投げやな、間違いないわ」

「いやいや、ハンマー投げでしょう？　投げて『ウオオ』って」

「『投げ』から離れなさい！　翼と薫ちゃんじゃダメね、最後に航ちゃん、お願いだから当てて！？」

「……競歩」

「あゝもう、違う違う違う！　走り高跳びよ、『はしりたかとび』！」

全員に答えさせて、これだけ尺使ってそのオチかよ、つまんない。どうした作者、ネタ切れか？

「何かしらオチつけるや、何の為のコメディーやねん、アホ」

「何でオチなんかつけなきゃいけないのよ！ アタシがやっている競技は陸上のスーパーモデルが集う美女の競技、走り高跳びなのよ！」

だ、そうだ。モデルうんたらの話は知らないが、何だかんだ言っ学校代表に選ばれて大会で優勝するくらいなんだから大したものだ。

「その世界の中でほら見て御覧なさい、この胸元に輝く頂点の証、金メダルよ！ アナタ達がどう頑張っても辿り着けない領域……！」

「玩具みたいなちっさいメダルごときで」

「Be quiet！ go home！」

その自慢の五百円玉みたいな小さなメダルをさっきから小さな娘にベタベタ触られまくっている。この程度の金物じゃ質屋に持っているっても100円にもならないだろうなあ。

「……でもまあ、県内一位なんだから結構凄いつて言えば凄いわよねえ」

「千夏、スゴくかつこ良かったよー！ タッタッタッって走ってピョーンって飛んで背中からクルッて回ってキレイだったよー！」

「……小夜が喋ると何の競技だかサッパリわからんなあ？ ピョンとかバツ！とかダツ！とか」

「ちょっと待ちなさいよ、アンタ達ちゃんとアタシの競技を見てたんじゃない！何でさっきはその競技の名前がすんなり出てこないのよ！？ バカにしてるでしょ！？」

千夏は元々は短距離の選手を目指してイギリスにいた頃から陸上をやっていたらしいのだが、ちょっとしたお遊びで棒高跳びに挑戦したところ、なかなかセンスがあると現役のアスリートに誉められたんだそうだ。

一度誉められて有頂天になった千夏はその後、走り高跳び一本に目標を定めて日本に来てからも部活動で練習をしている。日本の中学生で専門的に走り高跳びをやっている選手はまだ少ないのでこういった大会ではいつもいい結果を出しているみたいだ。

しかし、あんまり必死に練習に打ち込んでいる様には見えないと担当の先生が言っていたのを聞いた事がある。つまり、天から授かった才能だけで跳んでいる訳だ。

「バカにしてるとイタイ目見るわよ！？ アタシは美しく跳ぶ為に生まれてきた天才ジャンパーなんだから！」

……やれやれ、勘違いも程度を超えると自己暗示になるみたいだ。もしかしたらさっきからメダルを振り回しているのは自分に催眠でもかけているのだろうか？

そんな千夏を始め、私達の学校の生徒は全競技で成績のいい選手が多く、かなりの数のメダルを取っている。高等部がスポーツや学問に力を入れていて名門校と呼ばれているのは知っていたが、中等部もかなりレベルが高いみたいだ。

「陸上競技部隊はしつかり結果出したんだから、この調子で室内競技もアタシ達の学校がバツチリ優勝頂くわよ！」

だからアンタは応援団長かつーの。別に室内競技の部活動に私の知り合いなんて誰もいないんだから、そんな千夏みたいに熱く応援する気になんてとてもなれないのだが……。

体育館に入ると、すぐ目の前のコートでバスケットの試合が行われていた。しかもタイミングの良い事に次は私達の学校の出番だ。

「あれ？　なあ薫、お前この前バスケット部だと言ってなかったっけ？」

そっぴやインチキアスリートがもう一人いた。部活に専念せずに近くの女子ばかり見ている毎日欠席のピーピングトム。

「……ベンチに入るところか部員である事も忘れ去られてますが何か？」

「……………もう辞めればいいのにね」

男子がこんなものだから私達女子は全く盛り上がらない。学校行事で義務参加とはいえ下手な動物園に遠足に行くよりつまらない。

「ハイハイハイ、応援しても大して力になれない男子はみんな後ろ！ アタシ達女子は黄色い声援で後押しするわよ！」

千夏の一声で何やらボソボソと喋っている男子三人は後ろの席に追いやられ、私達女子五人は観戦しやすい前列の席に並んで座った。

「いつけえ〜！ パスよ、シュートよ、ダンクよ！ もう何でもいから勝ちなさい！！」

どの生徒もみんなおとなしく席に座っているというのに、隣にいる周りの空気が読めないバカ女は一人席に立ち上がって応援している。バスケットのルールも良くわかっていないクセにて、いい加減で勝手な声援とピョンピョン飛び跳ねるその姿たるや、まあ目立つ事目立つ事……。

「……千夏さあ、頼むからおとなしくしてよ、側にいる私まで恥ずかしい……」

「何を言ってるのよ那奈！ アタシ達の代表がその身を削って戦っているのよ！ アンタ達も立って精一杯応援しなさいよ！！」

「……オイ千夏、もう試合とつくに終わっとるで？　うちの学校ボロ負けや」

「えっ、ウソッ！　応援に気を取られて試合の事すっかり忘れちゃってたわ！　信じられない、もう最悪！　翼達がちゃんと応援しないから負けたのよ！？」

……イヤイヤイヤ、明らかこの女うるさい声援が原因だろう。コートにいる人間達よりもデカい声を出して作戦のサインをかき消してしまっし、全くルール無視のアドバイスをして集中力を失わせるし、もう選手が可哀想だ。

「何よ、だらしないわね！　これで全競技制覇の目標が消えちゃったじゃない！　もうバスケット部は廃部よ廃部！」

「……いつから全制覇が私達の学校の目標になったのよ？　つか、アンタ何様？」

「それよりもアンタ達は何なのよ、そのやる気の無さは？　ちゃんと応援しないから負けたのよ、もうちょっと盛り上げなさいよ！」

あー、うるせえ。興味の無い物は無いっつーの。小夜達は持参してきたお菓子食べてるし、翔太と薫のエロコンビは他校の女子生徒ウオッチングに夢中だし、私と翼は大あくび。誰も千夏のテンションにはついてこない。



「あーもう、いいわよ！ みんな勝手にすれば！？ つまらないならさっさと帰ればいいじゃない！？ フン！」

連れない私達に千夏は一人でカツカと怒り出し、こちらに背を向けて大会の予定プログラムをペラペラと捲り始めた。

「……えーと、この後の目玉競技は、あつ！」

何か気になる競技でも見つかったのか、千夏はニヤニヤしながらつまらなそうにしている翼の肩を揺すって話しかけた。

「ねえねえ翼、この前学校の廊下でアタシに声かけてきたあの男子生徒、覚えてる？」

「……男子生徒？ ああ、あの関取みたいにデブってて汗かいててキモいやツやつたっけか？」

「そうそうそう！ アタシに『も、も、もし良かったら友達でいいんで付き合って下さい！』って言うてきたあのデブ」

「それがどないしたん？ キツパリ断ったんやろ、あんなデブ？」

「そ・れ・が！ 話を聞いたらあんなデブのクセにアタシ達の学校の柔道部の重量級のエースらしくて、この大会にも選手として出場するんだって、あのデブ！」

「……ほお、あんなデブのくせに」

「そうなの、あんなデブのくせに」

……デブデブ、ってヒドいなあこの二人は。重量級を目指しているから太っているだけかもしれないのにね……。

「……でね、やっぱり出来るだけ室内競技でもアタシ達の学校に活躍してもらいたいじゃない？　だ・か・ら……」

「うえ！　オ、オマエまさか了承したんか、あんなデブの告白!？」

「だって、『お友達』でいいんでしょ、何て事ないじゃない？」

来た来た、千夏の小悪魔モード。この手の話になると途端に目つきが黒猫の様に鋭くなり、お尻から尖った悪魔のしっぽが見え隠れする。

「お友達って事はちょっと喋ってあげたり、一緒に下校してあげるぐらいでいいんでしょう？　それでいい結果が出れば安いもんじゃない?。」

「……うへえ、怖い女やなあ……」

「それに今はブクブクのデブでも、とりあえずはスポーツをやっている訳だからもしかしたらこの先痩せてカッコ良くなるかも知れない

じゃない？ この大会がきっかけで将来一流アスリートに成長したら物凄くいい買い物したと思わない？」

そりゃ結果が出ればの話であって、そうならなかったらどうやって収拾をつけるつもりなのだろうか。

「……千夏、アンタさあ、それでその男子が負けたらどうすんの？  
ちゃんと断れるの？」

「何言ってるのよ那奈ったら、負けたらそんな約束は水の泡よ、  
アタシは弱い男には用は無いのよ！」

「千夏、オマエは何て悪い女なんやあ！ 敵に回さんで正解やった  
わ、これからもウチと仲良くしよな！？」

……最低、最悪の女だ。多分この女はこれから先、私達が成人にな  
っても次々て男を手玉に取って私腹を肥やしていくのだろう。翼の  
言う通り、敵に回すとヒドい目に合いそうだ。

「あつ、そろそろ柔道の試合の時間だわー！ アタシの奴隷ちゃん  
の活躍を見てあげなくちゃねー、ウフッ！」

世紀の悪女、千夏に先導されて私達はバスケットコート隣の会場  
に移った。そこは畳がひかれていて柔道の試合が出来る様に整備が  
整っていた。

観客席にはすでに私達の学校の生徒達が何人が観戦していて、そのほとんどが男子生徒。隣のコートに比べると雰囲気は結構盛り上がっていた。

その盛り上がっている男子生徒の群の真ん中に、中学生離れた妖しい色気を振り撒いて千夏が試合情報を聞き出しに割り込んでいった。

「ねえねえ、今やってる試合って何試合目なの？　うちの学校の選手残ってるの？　アタシにも教えて〜？」

「……あ、ああ、残ってるよ！　次は重量級の決勝だよ！」

「木村って奴、スゲーよな！　あんなにデブのくせしてもう決勝だぜ？　やっぱり強いんだな！」

デブのくせに、と聞いてピーンときた。どうやらその選手が千夏が言っていた奴隷ちゃんの様だ。木村と言う名前らしい。

「へえ、あのデブ、木村って名字なんや？」

「ビックリするわよ翼！？　あのデブ、『木村卓哉』って名前なんだって！　爆笑よね、超ウケるでしょ〜？」

「……うわあ、可哀想に、世界は何て残酷なんだあ……」

薫が頭を抱えて同情するのもわかる。私だって長澤ま　みや上　彩

とかと同姓同名だったら嫌だ。時に沢尻工　カとかは本当に勘弁……。

「……で、試合は？　もう始まつてるのかな、見えるか航？」

「……………あそこ、もう始まつてる」

「えーどこどこ、見えないよー？　翔ちゃん、航くん、どこー？」

「ヤッダ、アタシ達試合が見えない！　ねえねえ、みんな前の席譲って、お・ね・が・い！」

千夏の誘惑ウインクの連射砲でたちまち混乱状態に陥った男子生徒達は即座に私達に前を譲ってくれた。ちよつとウザいがやはりこういうキャラが味方にいると色々と便利ではある。

「わーい！　見えた見えた！　ここなら良く見えるよ麻美ちゃん！」

「……あつ、あのデブ、じゃなくて、大きな選手ですかね、千夏さんの言っていた人……？」

「そうよ、あれがアタシの奴隷ちゃんよ！　この世界のセレブ、三島千夏様とお付き合いがしたくて決勝まで上がってきたおデブちゃん……………」

千夏が自慢げに周りにいる人々に雄弁をたれていたその時、私達の

目に写ったその太った柔道選手は会場の畳の上で完全に逆さまにな  
って宙に浮いていた。

ズドオオオオオン！！

「……い、一本！！」

叩きつける様なけたたましい重低音と共に、デカい図体が畳の上で  
大の字にひっくり返り主審の声が館内に響いた。投げられた当人も  
何が起こったのかわかっていない様子で、豆鉄砲を食らった様に目  
をパチクリしていた。

「勝者、赤！　これまで、礼！」

衝撃的な映像と結果に私達は啞然とした。体重100kg以上はあ  
るかという太った巨体が軽く一瞬で宙に投げられたのだ。

「……ちよつと千夏、あのおデブ負けちゃったじゃない……」

「……あんだだけデブってても投げられる事があるんやな、さすがに  
驚いたわ……」

「あのおデブさん、ポーンって跳ね上がって飛んだよね！　麻美ち  
ゃんも見えた！？」

「……何か、スゴい物を見ました、残念でしたね、千夏さん……」

「もう何よ、だらしない！こんな事じゃアタシの奴隷なんて百年早いわね、失格よ失格！！」

千夏の態度の変わり様に私達が呆れた溜め息をもらしていると、後ろで男子三人が興味深い話をし始めた。

「……でもさ、あの巨体を軽々投げちゃうんだから、相手はどんなバケモンですかね？ 航くらい体格立派じゃないとね？」

「……………俺と同じ位大きな中学生って事かな」

そういえばそうだ。簡単に投げられる訳の無い巨体があつさりと投げられたのだから、それを投げた中学生とは一体どんな化け物だというのか。そんな事を考えていると、航と薫の話を聞いていた翔太が黙って何か考え込んでいた。

「……何よ、どうしたの翔太？」

「……いや、俺さ、思い当たる人間が一人いるんだけど……」

「思い当たる人間？ 何の？」

「……あんな巨体を軽々と投げ飛ばす中学生柔道選手って……」

翔太の言葉に私達全員の頭の中の記憶に同一の人物が浮かんだ。ハッとして試合会場に目を向けた私達の視界に入ってきたその選手は、予想通りこの前電車内で出会ったゴツイクセしてやたらと口達者なあのゴリラーマン。

「あつーーー!!」

千夏が指を差して大声で叫んだ。忘れる訳が無い、あらゆる男子を跪かせてきたセレブ女を軽く鼻で笑い一蹴した因縁の相手。

「オイ、みんな見てみ! あの時のゴリラやゴリラ!」

「あたし達や小さい子供を助けてくれた人だー!」

「千夏ちゃんをコテンパンにヘコませた人じゃないですかー!」

「……確か、あの人の名前は、何でしたっけ?」

「……………忘れた」

……結局誰も名前覚えてないんじゃない。まあそう言う私も良く覚えてないけど。確か、柔道のチャンピオンか何かで河村? 山村? 変な名前だったのは覚えているけど……。



「一茶だよ、澤村一茶！俺と同じ幼稚園で一家全員柔道家一族で全日本王者だよ！」

ああ、そうだ。澤村一茶だ。思い出せなくてモヤモヤしていた胸の支えが取れて私達がスッキリしていると、何か突然隣にいる女が静電気みたいな電波をバチバチ放ちながら観客席の最前列まで飛んできた。

「なななな何でああああの男がここにいるのよおおおお！！」

「……アカン！千夏がまたショートするで！」

翼の言葉通り完全に制御機能を失った千夏は暴走して、二階の観客席から最前列の手すりに登って下の会場に飛び降りようとしていた。

「ちよっとちよっと千夏！待ちなさいって！落ち着きなさいよ！」

「ダメだよ、危ないよ千夏ー！落っこちちゃうよー！」

「オマエ、こんな所から飛び降りたら怪我するで！何をトチ狂ったんねん！」

私達が止めても全くお構い無し。周りにいる生徒達はもちろん、下

にいる大会関係者も何事かとこちらを覗いていた。

「ここであつたが百年目！ 今日こそキッチリ積年の恨み晴らしてくれるー！！」

大騒ぎしている観客席を澤村一茶は軽く一瞥すると翔太の姿に気付いたのか、ニヤリと笑ってこちらに向けて軽く指でキザっぽく敬礼した。

「何よあれ！ ムカつくー！！」

ちなみに、試合に負けたおデブ『木村卓也』はみんなから完全に忘れられていた。勝者と敗者、つくづくついてない哀れな人間がいるものなんだな……。

## 第24話 ランニングハイ

途端に修羅場と化した競技場。セレブ人生史上最大の宿敵を前にした千夏の勢いは止まらない。

「このまま無事に帰らせる訳がないでしょ！ 今日こそはギャフンと言わせてとつちめてやるわよ！！」

ギャフンとかとつちめるとか、父親から教わった変な日本語を言い始めて周りの人達がドン引きしているのも気にせずに、千夏はズカズカと観客席から出て行って下の選手控え室に向かった。

さっきまで優雅に振る舞っていたセレブなお嬢様モードは完全に消え去り、あの時に電車の中で見せた脳天大噴火女と化していた。

「良くやってくれたな、澤村！」

「お前は俺達の学校の宝だよ！ 後で未来の金メダリストのサインくれよ！」

「悪いな澤村、お前はこんなレベルの大会に出る様な選手じゃないのに無理に参加させてしまつてな……」

その頃、試合を終えて見事優勝を決めた一茶は自分の学校の生徒や

先生達に囲まれて祝福を受けていた。

「いえ、問題ありません、次の大会の良いイメージトレーニングになりましたから」

「……とりあえず怪我が無くて良かった、何かあったらお前の親父さんに何て言われるか……」

勝利に沸いている控え室に、何やら不穏な空気が漂い始めた。周りにいた生徒達は何かを避ける様にバラバラに散っていき、悪魔の様な女の叫び声が聞こえてくる。

「このゴリラああああ！ 待ちなさいよおおおお！！」

「千夏！ いい加減にしろってのアンタは！」

必死で止めようとしている私達を強引に引きずりながら、千夏は一茶に向かってジリジリと歩み寄っていった。

「もう面倒や！ 航、千夏を抱えて持ち上げてしまえや！ 下に降ろさん方がええ！」

「……………了解」

「下ろせえええええ！ 今すぐ下ろせえええええ！！」

後ろから航に持ち上げられても、千夏はまだ足をバタつかせて一茶に食いかかろうとしていた。もうプライドもクソも無い、怒りに我を忘れたその姿はまるで腹を空かせた野犬の様だ。

「……すまない一茶、何かメチャクチャな事になっちゃって……」

「翔太、また会ったな、観客席にいたのがこちらからでも見えたぞ」

「……悪いな、本当に騒がしくて、はつきり言って俺達迷惑だよな？」

「ああ、迷惑だ、しかしお前のせいでは無いのだから気にするな」

この前の電車の中の時よりも若干、一茶の勝負師の様な研ぎ澄まされた雰囲気は緩んでいた。試合後で緊張感が解けているからだろうか。

「しかしスゴい内股投げだったな、あんな巨体を軽々投げちまうなんて、やっぱり柔道一家期待の星なんだなあ」

「あの程度なら大した事ではない、体が大きいだけなら日本にも世界にもゴロゴロいる、重い大きいの問題ではない」

「……さすが次回のオリンピック代表候補だよなあ、あれからお前の記事をスポーツ新聞とかで調べてビビったよ、すでに成人男性選

手と大差無い実力なんだってな？」

「そんな話は所詮ただの新聞の宣伝文句だ、実際にオリンピックに行くにはまだまだ俺には稽古も経験も足りない」

「目指す規模がデカいよなあ、世界の頂点だもんなあ……」

翔太と一茶は同じ幼稚園に通っていたのはこの前話した通り。どちらも父親が世界で活躍するアスリートで、その縁からか二人は仲が良かったそうだ。

しかし、貴之さんが事故で亡くなった後、翔太は渡瀬家に居候になる事になったので離ればなれになってしまった。つまりこの前の再会は二人にとって十年以来の再会だったのだ。

「ところで翔太、お前の方はどうなんだ？」

「俺か？ ああ、とりあえずバイクに乗ってるよ、父さんが残してくれた唯一の形見だしね」

「そうか、あんな不運な事故があったのにも関わらずお前は強いな」

「翔ちゃんはバイクの全日本チャンピオンなんだよー！」

初対面だろうと面識が無かろうとお構い無しの無防備娘が翔太の脇の下から頭を出した。

「うわっ、小夜かよ！ 余計な事を喋らなくていいっつーの！」

「誰だ？」

「……いや、俺の従兄妹なんだけどさ……」

「こんにちは、真中小夜です！ この前、電車の中で助けてくれたよね、ありがとう！」

「こんにちは、桐原薫です！ この前、電車の中で助けてくれたよね、ありがとう！」

「オマエは引っ込んでけや！」

「ぐえっ！！」

翼に襟首を後ろから引っ張られた薫はそのまま後ろに仰向けになってぶっ倒れた。しかもいい具合に他校女子生徒の足元に頭が落ちてスカートの中を覗くにはベストポジションになった。

「おお！ 何てシャッターチャンス！！」

「キヤー！ 変態！！」

女子生徒達にボコボコに蹴られて袋にされている薫を見て、一茶は半ば呆れた様に翔太に話しかけた。

「この前のお前の連れか？」

「……うん、まあな、とりあえず……」

「そうか、お前は随分とハイカラな学生生活を送っている様だな」

「……ハ、ハイカラ？」

「しかし、そんな軟派な生活の中でも自分の道を極めようと切磋琢磨し立派に全日本王者か、共に目標は世界だな、さすがは俺が認めた男だ」

「……お前、相変わらずオッサン臭い喋り方だな……」

しかし中学生にしては体のデカイ男子だ。身長は航の方が少し高いみたいだが、横幅は一回り大きい。全身ガチガチの筋肉質で腕や足や胴回りがプロレスラーみたいな太さだ。

「……いかにしても体育会系って感じだね、お姉が見たら喜んで対戦を申し込みそうだよ……」

「ん？ 女にしては随分と背が高いな、これは誰だ？」

「翔太の女やで」

「バカ翼！ 違うわよ！」



どこから湧いてきたんだこのチビは！ 何かあれば定番の様にまたこの話を持ち出す！

「オンナ？」

「一茶、違う違う！ ただ一緒に住んでるだけで……」

「なっ、もう同棲までしとんねん」

「違うっつーの！ 翼は黙ってる！」

「翔太も誤解されそうな言い方しないでよ！ ちゃんと説明してよ！」

翼のくだらない嘘を否定するのに翔太が渡瀬家に住む事になった理由を全部説明しなければいけなくなった。余計な事を言いやがって、全く……。

「なるほど、そういう事が、それは色々と大変だったな、そんな複雑な状況下でも世界を目指して走っているのだからやはりお前は俺が認めた男だ」

「……もうそれはいいからさ……」

「それより翔太、一つ質問がある」

「な、何だよ？」

「さっきからお前達以外の女の声がいずこから聞こえてくるんだが、一体どこにいる？」

「……真横を探したってその巨体じゃ見えません。横じゃなくて下だよ、下。」

「ここやボケエ！ オマエ失礼やぞ、ブタゴリラの分際で！」

「ん？ ああ下が、すまん、小さすぎて見えなかった」

「うぎいゝ！」

翼にしたら航に続き二回目の屈辱だ。これだけの身長差で同い年なのだから『効果は個人差』なんて言葉がいかにもいい加減なものかわかる。

「翔太、もう一つ質問がある」

「……次は何だよ？」

「さっきから怒鳴りっ放しのやかましい女がいるんだが、それはどこにいる？」

……探さなくなつてわかるでしょ？ 後ろ後ろ、私達の後ろで航に羽交い締めされてるこの女。

「勝負しろおゴリラ男おおおお！ グッチャグチャにやつつけてやるううううー！」

「みんなズルですよー！ 私と航君だけで千夏さんを任せっきりで！」

「……………もう離していい？」

千夏は疲れる事なくまだ手足をひっくり返された昆虫の様にジタバタ振り回していた。可哀想に正面から千夏を抑えている麻美子は顔や体をボコボコ殴られたり蹴られたりしている。

「ん？」

すると、一茶は何かに気づいた様に座っていたパイプ椅子から立ち上がり、堂々とした足取りでゆっくりと千夏達に近づいていった。

「ついに来たわねこのゴリラ！ このアタシと勝負つけようって言うの！？ 上等じゃない！ 女だと思ってナメてかかったら……！」

「お前、なかなかいい体つきをしているな」

「……What? 何よ、何なのよ!? 何を言い出してんのこの男!? バカじゃないのアンタ……!」

「それだけの身長があれば基本を覚えればすぐに中学生レベルで通用するだろうな、どうだ、お前も柔道をやってみる気は無いか?」

「……ハア?」

突然の言葉に真っ赤になって茫然としている千夏だが、どうも話しかけてくる一茶の目線の位置がおかしい。自分の顔ではなく、何かもつと上の方を見ている様な……。その後ろには、千夏を掴まえている航がいた。

「……柔道には興味が無い」

「そうか、残念だ、もし気が変わったら声をかけてくれ」

「航ちゃんの事!? 何よ、このバカああああ!!」

うわあ、恥ずかしい。これは恥ずかしい。千夏の怒りが飛び火しない様に私と翔太は必死で笑いをこらえているのに、翼のヤツは床に倒れて大爆笑している。

「ん?」

再び何かに気づいた様に一茶は今度こそまじまじと千夏の胸元を真面目な顔をして眺めていた。

「な、何よ！ 今度は何なのよ！」

「この首から下げているメダルは何だ？ 一体どこから盗んだ？」

「ぬ、盗んだ！？ 失礼にも程があるわよこのバカゴリラ！ アタシが実力で取ったメダルよ！ この大会の走り高跳びで優勝した証よ！ このバカッ！！」

「ほお」

千夏の話を聞いた一茶は、何か驚いた様に屈んでいた体を起こし厚い胸板の前で太い両腕を組んだ。

「こんな『ふざけた形』をしていても一応はスポーツアスリートという訳か、ふむふむ、俺の常識では有り得ない話だな」

「……アンタねえ、この前から人を外見だけで判断して勝手に見下して、一体全体何様なのよ！ 大体アンタはアタシの……！？」

「見下されたくなければ、そんな薄っぺらい人間だと思われない様な行儀と風格を身につければいいだけの話だ」

「アンタの頭の中の常識だけで勝手にベラベラ説教たれてんじやな

いわよ！ 第一、外見と競技成績と何の関係があるのよ！？ Wh  
y!？」

「お前はこのメダルの為に遊ぶ暇すらも無く毎日キツイ練習に耐えている他の選手達の事を一度でも考えた事があるか？」

「……ハ、ハア？」

一茶の言葉を聞いて千夏の動きがおとなしくなり暴れるのを止めた。それを確認した航と麻美子はやっとお役目御用となり静かに千夏を地面に降ろした。

「はつきりと言わせて貰うが、俺はお前が真面目な気持ちで競技に取り組んでるとはとも思えない、ただ単に学生生活のお遊びの一つとしてやっている自己満足だ」

「……お、お遊びなんてそんな事……！」

「人には生まれ持った才能が各個人個人違う、今まではそれでたまにいい結果が出てたかも知れないが、最後に笑うのは人一倍努力してきた人間だ、そんな事もわからずにこれ見よがしに勲章を胸に掲げて、影で努力している人間達を蔑む奴は俺は絶対に許せない」

「……これは、その、そんなつもりじゃなくて……」

確かに一茶は優勝して貰ったはずのあの小さいメダルを首から下げてはいなかった。関係の無い私達にまで見せびらかしていた千夏と

はまるで正反対だ。

「人は精神を磨けば必ずそれは外見にも美しい形として出る物だと俺は教わってきた、しかし、お前からそういった美しさは俺には全く感じ取れない」

「……それは……」

「遊び心だけで競技をやっているのなら中学生でやめる事だな、そんなやる気の無い人間がこれから生き残っていける程この世界は甘くは無い、いずれは泣きを見るぞ」

「……………」

さっきまで大騒ぎしていたのが嘘の様に千夏は完全に黙り込んでしまった。あまりにも正確に凶星を突かれて言い返す事が出来なくなってしまったみたいだ。

「……おい澤村、そろそろ帰るぞ、遅れるな」

「はい、今行きます」

学校の先生に呼ばれた一茶はあっさりと千夏に背を向けて床に置いていた荷物を持って控え室から出ていく準備を始めた。

「また会おう翔太、今度は世界でな」

「ああ、頑張れよ一茶」

「お前もな」

澤村一茶は最後まで堂々とした風格で控え室から出て行った。結局、千夏は悔しそうに黙り込み、去っていく一茶に何も言えなかった。千夏、再び澤村一茶に敗北。しかも今回はかなりダメージが大きいみたいで、競技場から帰りの電車の中でも喋る事なく終始下を向いていた。

「……千夏、しっかりしなよ」

「そうやで、あんなゴリラの戯言まともに受けるなや」

「千夏頑張ったよー、あたし達ちゃんと観てたもーん！」

私達の励ましにも無反応。こんなに落ち込んだ千夏を見たのはもしかしたら初めてかもしれない。

「……一茶はさ、お父さんが物凄く厳しい人だから千夏ちゃん達のやり方が理解出来ないんだよ、何も別に全てを否定している訳じゃ……」

「……ううん、いいの、もういいの……」



翔太の説明に千夏はボソツと吐き捨てる様に言った。さっきまでの怒鳴り声からは想像が出来ない程の元気の無い声だった。

「……スゴく悔しいけど、あの男の言う通りだと思う、アタシ陸上ナメてた、運動してればスタイルキープ出来るなんて事ぐらいしか考えてなかった、イギリスに居た時にちょこつといい結果が出たくらいでアスリート面していい気になってた……」

千夏の瞳は潤んでいた。歯を食いしばり、必死に涙を堪えていた。

「何も言い返せなかった、全部見透かされてた、悔しい、言い返せない自分が悔しい……」

千夏はこちらに顔が見えない様に下を向いていたが、私には涙が一粒彼女の膝の上に落ちるのが見えた。相当ショックだったのだろう。この後、千夏は私達と喋る無く電車を降りていった。

それから少し経った日の放課後、掃除当番だった私達は他の生徒がいなくなった教室で作業分担してさっさと掃除を片づけていた。

「わーい、お掃除終わりー！　ねーねーねー、みんな早く帰ろうよー！」

「あれ、千夏は今日もいないの？」

「那奈、アソコやアソコ」

教室の窓から校庭を見ると、部活動の練習に汗を流している千夏の姿があった。今までとは比べ物にならない、気合いの入った表情だった。

「……負けず嫌いだね、千夏は本当に……」

「でも何か千夏楽しそうだね！ スゴイイキイキしてるよ！」

「そのおかげでウチは遊びに行けなくてめっちゃめっちゃストレス溜まつとるでホンマに……」

「ならば私めがお供致しましょうかお嬢様？」

「……でも、荷物持ちなら薫君より航君の方が役に立つんじゃないですかね、翼さん？」

「……………断る」

「やっぱり千夏ちゃんも三島勇次朗さんの娘なんだな……」

翔太の言った通り、否定しても千夏もどこか父親から引き継いだ『負けず嫌い』の才能を引き継いでいるのかもしれない。  
じゃあ、私は父さんや母さんから何を引き継いだのかな。いや、や

っぱりいいや、考えるだけでも憂鬱になりそうだ。

夕焼けが綺麗に空を赤く染めている。日も短くなりそろそろ北風が冷たくなってきた。今年もあつという間に年の瀬が迫ってきている。

## 第25話 手を出すな！

二学期も終わりクリスマススイブの日に、夏に続いてまたも松本家から意外なご招待があった。何と今日、プロのサッカー選手達と会う事が出来るどころか一緒にサッカーが出来るイベントがあるらしい。それを聞いた翔太達男子陣は大喜び。千夏もイケメン選手目的で話に飛びつき、小夜も麻美子や瑠璃を強引に連れてきて大はしゃぎしている。

「うわー！ ほらほら那奈、広くてキレイなグラウンドがあるよー！」

「広いグラウンドだねえ、ニュースで完成したって聞いた事があつたけど、こんなに広いんだ……」

国内有数の超高層ビルや高層マンションが並び立つ新興都市の中を、私達はこの前と同じく新作さんが運転するワンボックスカーにすし詰めにされて普段はなかなかお目にかかれない敷地内へと入っていた。

「だって本物のJリーグチームのクラブハウスなんでしょ？ 作るのに相当お金が掛かってるわよねえ、VIPな扱いって感じ！」

「そうやでえ！ 一般ピープルが簡単に入れへん超VIPな場所やで！ オマエら、ホンマにウチやオトンに感謝せーよ！」

次々と開発が進んでいる海沿いの埋め立て地に出来た新興都市に、強豪プロサッカーチームのクラブハウスがこの度完成した。翼は女子なのに小学生の頃からこのチームのユースクラブ会員に入っていて、毎週休み事無くきっちりと練習に通っている。

「……しかしホンマに立派なクラブハウスが出来たもんやな、俺らの時代からは予想もつかん話やで……」

車から降りた新作さんは感慨深く草が生え揃った緑色のグラウンドを眺めていた。その瞳は嬉しそうな反面、何か昔を懐かしむ様な遠い目をしていた。

「この前も世界のクラブチームが日本遠征の際にここで練習やってたらしいなあ」

「オトン、それホンマに！？ どんな選手が来たんやろ、写真とかサインとか残ってへんかなあ！？」

新作さんは病気にかかる前はプロのサッカー選手を目指していた。学生の頃から世界のクラブにも注目される程の選手だったらしいのだが、病気のせいで医者に激しい運動を止められてしまい、その夢を諦める事になった。

それでもサッカーが大好きだった新作さんは生まれたばかりの翼にサッカーボールをプレゼントして、いつもそのボールで遊んであげていたので次第に娘もサッカー少女として育っていった訳だ。

「なるほどなるほど、だから女の子なのに『翼』って名前な訳だね、災難ですなあ、ウハッ」

「『薫』なんてへなちょこ名前つけられたオマエに言われたないわ、ボケッ」

「妹まで『岬』って名前だもんね、新作さんどんだけって感じだよ」

「よう知つとるなあ翔太、俺はバリバリあの漫画の世代やねん、堪忍してえな」

「瑠璃ちゃん、どんだけだって！　ミータンも一緒に、せーの、どんだけ〜！」

「どんだけー！」

サッカーに夢中になつてゐる松本親子の変わりに小夜が瑠璃と岬の面倒をまとめて見てくれている。小夜にサッカーをやらせると何を仕出かすかわからないのでこのまま子守をしてもらうとしよう。車酔いして真っ青になっている眼鏡と一緒に。

「麻美ちゃん、大丈夫？」

「……だから嫌だったのに、ウブッ……」

今日行われるイベントではユース会員だけではなく参加したい一般の子供達もチーム所属選手やOB選手、指導者にサッカーを教わる事が出来るらしい。まあ、簡単に言えばファン感謝デーみたいなものだろうか。

「……ところで、お前らの中に翼以外でサッカー経験者っているんか？ いるんやったら手を挙げい」

全員、見事に無反応。学校の体育の授業でボールを蹴ったぐらいはあるけど、まず女子にはあまり縁の無いスポーツだし。男子陣も手を挙げるべきか否か迷っていた。

「イギリスではFootballが盛んだけど、女の子がするスポーツじゃ無かったわねえ、日本はどうなの那奈？」

「日本だつて一緒よ、新作さん、さすがに私と千夏にはサッカー経験なんて無いですよ……」

私達の話聞いた新作さんは一息つくといまいち反応の鈍い男子陣に話を振った。

「何や何や、兄ちゃん達はどないした？ サッカーやった事無いな

「んてこのご時世ありえへんやろ？」

「……俺達も学校の時に遊びでやっていたぐらいだよな？」

「ボール蹴ったりしたら義足も一緒に飛んでいつちやうかもしれないし」

「……サッカーも興味ない」

ダメダメ男子の頼りなさに『あちゃー』とばかりに頭を押さえる新作さんの隣で、腕を組んだ翼が小さい胸を精一杯張って偉そうに私達を見渡して言い放った。

「ええやんかオトン、今日はこの松本翼大先生様がオマエら残念なヘタレどもにきっちりサッカーってもんがどんなもんか教えてやるわ、感謝せえよ!？」

「……いちいち腹立つな、コイツ……」

一人だけやる気満々の翼に案内されて、私達はクラブハウス内のロッカーームでレンタルのユニフォームに着替えた。レンタルといっても胸のロゴにはチームの名前がしっかり入っていて、ちよつと「リーガー」になった気分だ。

「……あれ、何で航だけ一人半袖なのよ？ 寒くないの？」



「……那奈、これ長袖なんだよ、これでも……」

「……………合うサイズがありません」

「……………あつ、そう……」

そういえば参加受付でも航だけ『成人は参加出来ません』って言われてたっけ。翔太の隣にいる航の上半身のユニフォームはピッチピチに伸びきって胴の長も足りなくガリガリの腹が出てしまっている。

「ヤダ、航ちゃん何それ！ 超気持ち悪い！」

「何を仰りますか千夏ちゃん！ 来シーズンのJリーグで流行するヘソ出しルックですよ！？」

「そんなもん一発でレッドカードや、アホ！」

クラブハウスから外に出て横にあるグラウンドに向かうと、すでに色々なサッカーユニフォームを着た私達と同じくらいの少年少女や子供達、それらの保護者を思いき大人達がたくさん集まっていた。

「おい、綾！ オマエもやっぱり来とったんか！？」

「やつぽー、翼！ 当ったり前じゃん！ ずっと楽しみにしていたもんね！」

翼が手を振る方向から短めの髪を頭の上でちょこんとゴム紐で結いた女の子が歩いてきた。この子も翼と同じ背番号入りのユースチームのユニフォームを着ている。どうやらチームメイトの様だ。

「あれ？　ねえ翼、後ろにるのは翼の友達なの？」

「まあ、ちょっとした腐れ縁やで、サッカー素人ばかりやから綾もガンガンいじめたりや〜！」

身長は小夜よりちょっと高いくらいだろうか。翼と違ってちゃんと礼儀をわきまえてるみたいで私達に向かってペコリと頭を下げた。

「どうも初めまして、翼と同じユースに入ってる吉田綾です！」

「初めまして、私は渡瀬那奈と……」

「おかしいな、君とは初めてあつた感じがしない、もしかしたら僕達は前世に恋人同士だったんじゃないかな……」

ドカツ！！

「へぶしいiiiiい！！」

話を邪魔されてぶん殴ろうとした私よりも早く、翼は足元にあったボールをリフティングで上げてつまらん冗談をかました薫の顔面に向かって思いっきりシュートをぶち込んだ。わざわざバカな男の為に手を汚す事なくて済んだ。

「……アホは放っておいて、トップチームの選手達とプレー出来るの久し振りやから楽しみやな、綾！」

「……そ、そうだねえ……」

倒れてノビている薫の処理は航にゴミ箱にでも捨てて貰って、さっさとグラウンド内に向かうとしますか。私と翔太と千夏は翼達と一緒ににクラブのコーチが指導してくれる準備練習に参加した。

簡単なストレッチからボールを使ってパスやヘディングの練習、ここまでは難なくこなせたが次に待っていたリフティングの練習、ここでサッカー初心者私達の私達は見事に躓いた。

「うわっ、見てる以上に凄いい！ 十回も続けるなんて無理！」

「何で〜!? このボール変な所にばかり飛んでいっちゃうわよ！ 超ム力つく〜！」

「ぐわあ〜！ 九回までなんとか続けたのに、最後の一回で失敗した〜！」

「何や何や、那奈や千夏はしゃあないとして、翔太は男のクセして

リフティングも出来へんのかい？ ショボいやつぢゃなあ〜？」

慣れない運動に苦戦している私達をよそに、翼は器用に両足を使って軽々とボールをリフティングしている。同じクラブの会員である綾も上手く出来ていた。

「こんな程度ウチからしたらチョロいよなあ、綾？」

「そりゃ私と翼はいつも練習してるからでしょ？ 誰だっていきなり出来るもんじゃないって」

「そ〜か？ ウチは最初っからヒョイヒョイ出来たで〜？ なんてったってウチとボールは友達やからな！」

「……ハイハイ、言ってる言ってる」

調子に乗った翼はリフティング中に足を入れ替えたり頭や肩を使って色々と技を披露し始めた。小さい体のお陰なのかその動作は素早く中学生離れしたかなりのテクニックだった。

「ど〜や、見てみ綾！ 和製ロナウジーニョ、女版メッシとはウチの事やで！」

お昼が近くなり休憩時間になった。ピンピンしているユース選手二人とは対照的に、ボールを追いかけていた私達はかなり体力

を消耗していた。

「……やっと、休憩……」

「……思ってたより、キツイな……」

「……はあ、結構汗かいたわねえ……」

普段から別のスポーツで体を鍛えているこの三人ですらクタクタなのだから、小夜や麻美子にはまず無理だろう。外で瑠璃、岬コンビのお子様相手をやらしておいて正解だった。

「オマエらはホンマにだらしないなあ？ これくらいでへばっている様やったらとても九十分間フルタイムで走ってられへんで？」

「多分、使っている筋肉が違うから疲れるんじゃないかな？ 私や翼が他のスポーツをやったら同じ様にへばるわよ？」

冷静に解析して私達をかばう綾の話を真つ向否定する様に手を横に振る翼の雄弁はまだ続く。みんな疲れて座り込んでいるのに、翼一人だけ立ち上がって見下す様に説教をたれてくる。

「アホか、そんなもんはメンタルの問題やで！ 楽しいと思つてやれば疲れなんて感じへんねん！ なぁオトン、そつやる！？」

翼は同意を求めて後ろを振り向くと、さっきまでそこにいた新作さんの姿が無い。それどころか練習に参加している女子に対してあちこち声をかけてまくっていた薫の姿も見当たらない。二人とも一体どこに行ってしまったのだろうか。

「あれー？ 翼のお父さんと薫ちゃんがないよー？ 航くん、立ち上がって二人の姿見えるー？」

「……………いた、あそこ」

そこには、緑の防護ネットにしがみついて小さな子供の面倒を見ている若奥様達を覗き込む二人の姿があった。

「……………見よ、おっぱい王子！ あの若奥様軍団の豊満なおっぱいを！」

「おお、おっぱい王よ！ 何てイケないおっぱいなんでしょう！ あれでママなのですか！？ 人妻だというのですか！？」

「良いか王子、若奥様は赤ちゃんにおっぱいをあげなければならぬのだ！ その為に普段よりおっぱいの張りが倍増しておるのだぞ！」

「何という事だ！ まさかサッカー少女達以外にこんな場所でおっぱいを堪能出来るなんて！」

「人妻はええでえ！ 女の顔と母の顔、二つの顔を備えおるんや！」

「これこそ一口で二回美味しいお得なおっぱいパックやでえ！」

「このおっぱい王子こと桐原薫、目からウロコが落ちたでござる！」

その後ろ姿たるや何と滑稽な事が……。誰かー、警察呼んで下さい。ここに変質者がいます。

「……翔太、アンタも仲間でしょ？ 一緒に捕まったら？」

「……いや、遠慮します……」

さっきまで鼻息荒かった翼はガツクリと座り込み手について沈んでいた。どうしてもエロモード時のオトンは好きになれないみたいである。

「……もうイヤや、あんなオトン見たくない……」

休憩時間が終わり、午後からは試合方式の練習が始まった。参加している子供達はそれぞれ好きな選手がいるチームや仲の良いグループで各チームに散らばっていった。

「ねえ那奈、アタシ達どっちのチームに入る？ どっちが強いのかしら？ 翔太君、知ってる有名選手とかいないのお？」

「俺もあんまりサッカーは詳しくないんだよ、どっちが強いかなんて聞かれてもなあ……?」

「別に適当でいいじゃない、真ん中からこっち側にいるんだから私達はこっちチームに入ろうよ」

参加している全人数を二つのチームに平均して分けると、素人集団の私達を避ける様に翼と綾はちゃっかりと相手のチームに入っていた。

「何よ翼！　ちょっとあんまりじゃない?」

「何だよ、友達がいが無いなあ」

「超最悪〜！　アタシと翼の友情ってそんなに薄っぺらいものだったのね!？」

私達から非難を受けまくっている翼はその声を無視する様に小指で耳の穴をほじくってその指についたカスを息をフツと吹いて空に飛ばした。

「……一番最初に言っただろ？　今日はオマエらにきっちりサッカーしてもんを教えたるってな!」

「みんなゴメンね、やっぱり私は翼とコンビを組むのに慣れてるか



らね」

主審のホイッスルが鳴って試合が始まった。各チームにはサッカー経験者であるユース選手や一部のOB選手、現役選手などが混じってはいるが、大半は小さい子供や素人ばかりなので内容はほとんど学校とかで遊びでやってる様な簡単なものだった。

出場選手枠もクソもない、一体何人の人間がピッチの中に入っているだろうか。まるでバトルロイヤル戦の様に人が入り混じり団子になってボールを追いかけてまわっている。

「千夏！　ボールそっちに行っちゃたよ！」

ボールが転がっていく方向に子供達が駆け寄ってくる。ボールを足で止めた千夏はあつという間に人だかりに囲まれた。

「えっ、ちよつとちよつとヤダッ！？　超怖いってばッ！　翔太君、お願い！」

「えっ、何で俺にパスすんだよ！？　無理だって無理だって！　那奈、頼んだ！」

「ちよつと、こっちに回さないでよ！？　どうすればいいのよ！」

千夏、翔太と順に真横に回されてきたボールは私の足元に転がってきた。そのボールを目掛けて子供達が津波の様に一斉に襲いかかっ

てきた。

「那奈、あっちあっち！ あっちにいる選手に渡しちゃえ！」

翔太に言われた方向には現役選手らしき人が私に向かって手を挙げていた。翔太も千夏も頼りにならないし、ここはあの人にパスするのが正解だ。逆サイドでちょっと遠いけど思い切り蹴れば届くかもしれない。

「ボール渡します！ 受け取って下さい！」

私は空手の前蹴りの要領で思い切りボールを蹴った。ボールちゃんと思った方向に飛んでいってくれたが、目標の選手の前に小さい人影が入り込んできた。

「いただきやで、アホッ！」

私が蹴ったボールの行方を予測していた翼が巧みに足を伸ばしてパスカットした。完全に動きを読まれてしまっていたみたいだ。

「あっー！ 何よ翼！」

「パスを出す人間に対して声をかけてどないすんねん？ カットし

て下さいって言っている様なもんやで！」

翼は穏やかな試合の流れを無視する様に追いかけてくる子供達を引きちぎり、そのまま私達の後ろにあるゴールに向かってドリブルで上がっていった。

「まずは千夏、オマエや！　オマエなんか軽々く抜き去ったるで！」

「Oh, Shit!　バカにするんじゃないわよ！　アタシだって日頃から陸上やって運動神経はいいんだからね！」

意気込んで敵意丸出しで立ち向かう千夏の前を、翼は一瞬ボールを蹴ろうとするフェイントの後、逆足のつま先を使って見事に千夏の股の下にボールを通して抜き去った。

「……What!?　what do you doing!？」

「まずは一人！」

その翼のテクニクを師匠である新作さんはグラウンドの外でネット越しに眼鏡を光らせジツと観戦していた。

「……クライフターンで切り返してから股抜きか、まああのキレイな上出来やな……」

千夏を抜き去った翼は次の獲物に翔太をロックオンした。

「オマエなんかケチヨンケチヨンにしたるわ、このスケベライダー  
！」

「……スケベライダーって言うな！ 俺だっここで男の意地を見せてやる！」

翼は不敵な笑みを浮かべると、次はボールを中心に左右の両足をパ  
パツと素早く入れ替えて困惑している翔太をあつという間に抜き去  
った。

「ゲツ、速え！ 何だよ今の！？」

「これで二人目や！」

「……シザースフエイントか、小さい選手が身につけるにはうって  
つけの技やな、なかなか良う出来とるやないか……」

姉のボールテクニックに見とれている岬の頭を撫でながら、新作さ  
んは満足そうにニヤリと笑った。

「次はオマエや那奈！ 日頃からウチの事をチビチビ言いよって！

この屈辱、ここできつちり晴らしたるで！」

翼は私に向かつて真っ直ぐ突っ込んでくる。しかし私だつて空手を習っているんだ、テクニクは無くとも、ボールを見る動態視力なら絶対に負けない。

「ナメンじゃないよ翼！ 返り討ちにしてやる！」

「ならば、その勇気を称えてスペシャルな技でブチ抜いたるで！」

すると翼は少し強めにボールを蹴り出し、私の近くに転がしてきた。ドリブルミスだろうか、でも今なら取れる、私は懸命にボールに向かつて足を伸ばした。

しかし次の瞬間、翼がボールを中心にクルリと一回転して私の横をすり抜けていった。さっき目の前にあった筈のボールもいつの間にか足元から消えていた。

「えっ、何なの？ どうなってるの！？」

「これで3人目や！」

翼が次々と魅せる技のオンパレードに会場で試合を観戦しているお客さん達からも驚きの歓声が上がった。軽くあしなわれた私達三人はただその場にボツと立ち尽くすしかなかった。

「……マルセイユルーレットまでやりよるとはなあ、これは面白くなってきたで……」

外で見ていた新作さんは何かウズウズする様にジャージの上着を抜き出すと、それを一緒にいた小夜や麻美子に手渡しグラウンドへと向かって歩き出した。

「よっしゃ！ このままゴールゲットやで！」

その頃、私達を抜き去った翼はそのままゴールに向かって爆走していた。

「しかーし！ その快進撃もここまでだな！ この先は武蔵坊弁慶こと栗山航と、美貌の牛若丸ことこの俺、桐原薫様がここを通さん……」

ドカツ！！

容赦ない翼のシュートが薫の顔面を直撃した。薫はそのまま反り上がって頭から倒れ込み、弾かれたボールは上手く翼の元に戻っていた。

「ぶべらつつつっ!!」

「はい、これで4人目や!」

「……こんなの技じゃないやい、ガクッ……」

しかし、ゴール前には航を始めまだ数人選手が残って守りを固めている。

「サッカーはなあ、一人でやるスポーツとはちやうねんで!」

翼はディフェンスの裏を突く様にサイド側にパスを出した。そこには後ろから勢いよくパートナーの綾がボールに合わせてオーバーラップしてきていた。

「よっしゃ翼! クロス上げるよ!」

綾の声に反応する様に翼は人壁をスルスルとすり抜けてゴール前へと走り込んだ。しかし、一人冷静だった航は翼に合わせて上がってくるボールの着地点に回り込んだ。

「航、クリアクリア! 外に出せ!」

背の高さなら負ける訳がない。航は翔太の指示を聞いて飛び抜けて高いその身長を利用してヘディングでボールを弾き出そうとした。

「甘いでデカブツ！ 身長の手はすでに克服済みや！」

すると翼は航の肩に手を置いて跳び箱の様に高く飛び込み、航よりも早く頭でボールを足元に叩き落とした。

「……………あれ？」

「ちょっと翼！ それって反則じゃない！？」

「アホか那奈、主審が笛吹かんかったら何でもOKじゃ！ これでオマエら全滅、ウチらの勝ちやで！」

翼はそのまま下に落ちたボールのバウンドに合わせて空中でボレーシュートを放った。

翼のプレーに釣られて前に出てきてしまっていたキーパーの手をかすめて、ボールはゴールネットに向かって飛んでいった。

「……………あれ？」

するとゴール目前で一人の人間がそのシュートをピシッと足元に吸い付く様な綺麗なトラップでカットした。



「……オトン？」

シュートを止めたのは新作さんだった。掛けていた眼鏡も外し、ボールを右足で踏みつけ腕を組みゴール前で仁王立ちしていた。

「……なかなかやる様になったやないか翼、正直驚いたわ」

……確か成人は試合参加不可能だったはずだったと思うけど、何で勝手に乱入してるんだらうこの人は。

「しっかり練習しとるんやなあ、関心関心、わざわざクラブユースに入れてやった甲斐があったってもんや、俺は鼻高々やで」

「……えっ、ホンマに？ そないにオトンに誉めてもらえると、何かウチは照れるけどメツチャ嬉しいわ〜！」

もじもじデレデレと体をくねらす翼に対して、新作さんは途端に鬼コーチの表情に変わってピシッと指を差して説教を始めた。

「しっかーし！ まだまだプレーに無駄な動きがある、素人相手に通用しても世界を目指すにはこんなんではダメダメや！ そないな事ではとても『なでしこジャパン』には選ばれへんぞ、翼！」

「ガーン!!」

「ええか翼、これがホンマもののサッカーや！ 全力で行くから意地でも食らいついてこいや！ しっかりと俺の技をその目に焼き付けるんやで！」

新作さんは制御するスタッフを無視してボールを蹴り出し逆側のゴールへと走り出した。だから大人は参加禁止だって言ってるのに……。

「よっしゃ！ しつかりとついて行くでオトン！」

新作さんを追って翼は本来攻めるべき方向とは逆方向に走り出していつてしまった。突然のトラブルにピッチ内の選手は困惑してグラウンドの外もざわめき立った。

「ちょ、ちょっと！ 何をやってんのよあの二人!？」

「何で新作さんが乱入してんだよ!? もう滅茶苦茶だよ!」

「こんなのありえない！ 何がどうなってる訳!？」

「何で翼まで行っちゃうの!? 攻める方向が逆でしようがバカー!」

私達はともかく、同じチームだった彩まで置き去りにして新作さんと翼はあつという間にドリブルで横を通り過ぎていくとOBや現役選手達が集まっている集団に突っ込んで行った。

「おい、何だよあのおっさん！？ 真っ直ぐこっちに突っ込んで来るぞ！」

「とりあえず止めるしかないだろ！？ プレスかけるプレス！」

ドリブルを仕掛ける新作さんに対して複数の選手が一斉にプレスをかけてきた。、それに対して新作さんは神業とも思えるボールテクニクを私達に見せつけた。

「……早え！！！」

「……うわっ！！！」

「……何だぁ！！！」

「……まさかこの男！？」

「……松本、新作か！？」

「五人抜き！ これぞ神の領域や！！！」

新作さんはさつき翼がやったフェイント技をいとも簡単に、しかも五人連続で軽やかにやってのけた。その動きは翼よりも速くスムーズで、よくテレビで世界のトッププレイヤーが見せるスーパープレイそのものだった。

「おい、誰か止める！」

次々と襲いかかってくる選手達の裏を突き、新作さんはノールックパスで横にいる翼にボールを渡した。

「ワンツーパースで前に出すんや、翼！」

「OK！ バッチリお膳立てするでオトン！」

翼が出したスルーパーパスに合わせてディフェンスの裏に飛び出した新作さんはゴールに向かって思いつ切りシュートを蹴りこんだ。ゴールまでの距離は二十メートルは離れているだろうか。地を這う様な強烈なミドルシュートだが、その軌道は真っ直ぐキーパーへと向かっていつてしまっていた。

「アカンやんオトン、真正面やーん!？」

「……騒ぐな翼、良う見とけ……」

ゴールを守るキーパーはそのシュートをキャッチしようと身構えた瞬間、ボールは物理上有り得ない様なカーブを描いてゴール横隅のネットにズバンツと勢い良く突き刺さった。

とんでもないシュートにキーパーは全く反応する事が出来なかったみたいで、その場に呆然と立ち尽くしてゴールに転がるボールを見つめていた。

「……何だ？　何なんだ今のは……？」

「……まさか、今のつてアレじゃないか……？」

「……間違いない、無回転シュートだぜ……」

「無回転！　マジかよ！？　俺、初めて生で見た、あんなシュート打てる日本人、プロ以外にいるのかよ……」

現役選手達までもがその光景を見て驚き興奮して喋っていた。素人の私が見たつてあのシュートのトリックがわからない。とても尋常ではない、まるで漫画の世界の様なシュートだった。

「……あのさ、さっきから無回転、無回転って何の話？」

「……ボールに回転を与えずにシュートを打ったのよ、それによってボールは空気抵抗や引力の力で通常有り得ない変化が掛かったりするの、でも、私もあんなの初めて見た……」

状況が掴めない私に彩は丁寧に仕組みを教えてくれた。それでも何だか良くわからないけど、彩や選手達の驚いた顔を見るかぎり物凄いプレーなんだという事は理解出来た。

「どうや翼、しっかり見とったか！？　これが俺のスーパープレーやでー！」

「オトン、格好良すぎるわー！　やっぱりウチのオトンは世界最高プレーヤーやでー！」

突然の試合乱入とスーパープレイのダブルショックで会場にいた人達は黙り込んでしまった。そんな事もお構いなしに松本親子は仲良く手を繋いで観客の元へ走り出し手を振ってパフォーマンスを始めた。

「……伝説の選手、松本新作か、懐かしいな、俺はアイツと同期だったよ、高校の選手権ではコテンパンにされたぜ……」

「国立で見たあのシユートは凄かったな、それがまたここで再び見れるとは思ひもなかった」

「やはり時代が早すぎたんだな、あと十年遅く生まれていれば、医学も進歩して日本サッカー界を背負っていく存在になれたはずなのにな……」

側にいるOB選手達が新作さんの事を話しているのが聞こえてきた。

父さんから昔話を聞いていたけど、やっぱり凄い選手だったんだ。病気にさえならなければもしかしたらサッカー日本代表に選ばれたかも知れないし、プロ選手として海外のクラブチームでプレーして、今頃はどこかのチームの監督とかやっていたかも知れない……。

「やっぱりオトンはスゴいわ！ めっちゃ胸がキュンってきたで〜！  
ウチの事をギュッて抱きしめてチューしてや〜！？」

「……オイオイ、抱きつくなや重いわ、ええか翼、俺の意志はお前がしっかり受け継ぐんやで！？」

「もちろんや！ 皆さ〜ん、今さっきシュートを決めたんはウチのオトン、松本新作やで〜！！」

何故か会場全体から大きな拍手が挙がった。呆れてピッチに立ち尽くす私達をよそに二人は周りにいる観客とハイタッチをしてグラウンド内を走り回っていた。

「……新作さん、あんなに動いて体は大丈夫なのかな？」

翔太に言われて思い出した。あの人確か医者から激しい運動止められてるはずなんだけどな……。

「……私の出番ってこれっきりのかなあ……？」

彩の再登場は読者様からの反応に任せるとして、バカバカしくなった私達が私服に着替えて車に戻ると中で爆睡する小夜とガキ二人、それと後部座席でエチケット袋を持ってうずくまる麻美子の姿があった。

「……………あーあ、何かもう最悪……………」

クリスマススイブの北風は汗をかいた私達には非常に冷たく、ちょっと嘔吐臭かった。



## 第26話 マシンガンをぶっ放せ

無事に年も明けて寒さも収まり少しずつ日も長くなってそろそろ春の訪れが近いと思われてた三月始め、一昨日から急に寒が戻って季節外れの大雪が関東圏内を直撃した。

この大雪のお陰でこの二日間は交通機関は完全に麻痺してしまうし、通学下校時は頭や肩に雪が積もって手足は冷たいし、学校内はストーブも効かずに無茶苦茶寒いし、かなり酷い目にあった。

今日になるとやっと雪も止み、厚い雲に覆われていた太陽が久し振りに顔を出した。人も車もまばらだった大通りもようやくいつもの活気が戻りつつあった。

しかし二日間降り続いた大雪の残骸はまだまだたくさんあちこちに残っていて、いつもの学校からの帰り道にもたっぷりと白い塊が積もっている。

「ねーねーねー、雪合戦！ みんなで雪合戦しよーよ！」

長靴履いても足先が冷たくてビリビリする学校の帰り道、小夜の子供みtainな発想でみんな雪合戦をやる事になってしまった。

こんな大雪で外を走り回りたいのは犬と小夜ぐらいだろう。こんな寒い日は早く家に帰ってコタツで丸くなりたいのに全く……。

「そっやなあ、女子と男子でチームに分かれようや、5対3でハン

デにはちょうどええやろ？」

「……えっ？ あ、あの、私も参加しなきゃいけないんですか……？」

「当然じゃない！ いいわね麻美子、やるからには絶対アタシ達が勝つわよ！ 逃げたら承知しないんだから！」

「……怖いですよ、千夏さん……」

翼や千夏達電車帰宅組もなぜかやる気満々。乗り気でない麻美子や航を無理やり引き連れていつもの駅を通り越して寄り道決行。

「よし、そんなじゃお互い陣地に分けられるとしますかね、雪玉ぶつけられたら即退場、当たったら正直に申告する事でファイナルアンサー！？」

「そう言つとる薫が『正直』とか一番信用出来んちゅーねん」

結局、戦場は私の家の前にある広い空き地の中と決まった。元氣ハツラツのハイテンション組の後を、私を含めたやる気無し組はトボトボとついていった。

「……ここまで来たならもう家に帰りたいんだけど……」

「……だよなあ、雪合戦なんて何で今さらって感じだよ……」

「那奈も翔ちゃんも早くー！ 動けば暖かくなるから大丈夫だよー！」

ここは元々はマンションの建築が予定されていた場所だったが、色々大人の諸事情があって工事はストップして荒れ放題の空き地と化していた。侵入防止のバリケードも倒れてしまっており完全な無法地帯だ。

雪合戦をするにはちょうどいい大きさの広場で、中には色々と廃材やドラム缶、鉄筋や地盤用の杭になる体がつぽり入る穴の空いた鉄管が置いてあって盾や隠れ場所するにはもってこいだ。

バンバン投げ合う雪合戦というよりも、ちょっとしたサバイバルゲームの様相になりそうな感じだ。女子と男子にチームを分けて、それぞれの陣地を決めて全滅か陣地占領を勝利条件として合戦は始まった。

「いいかい翔太の旦那、裏切りは無しだぜ！ 俺達是一心同体、死ぬ時はみんな一緒だぜ！」

「だから薫、お前が一番信用出来ねーんだよ！ 誰かと連んでんじやねーだらーな？」

女子軍の陣地に揃ってじわじわと近づいていた男子軍の頭の上の鉄骨に、突然雪玉が『バシャー！』と音を立ててぶつかった。

「うわっ、襲撃だ！ メーデーメーデー！」

「みんなおつたで千夏！ そっちに逃げたから先回りして挟み撃ちにするんや！」

「イエッサ！ 荒野の狼とはアタシの事よ！ みんなまとめて仕留めてやるわ！」

翼と千夏、左右からの挟み撃ち奇襲に男子軍はいきなり大ピンチになって飛んでくる雪玉から逃げ回った。

「何で居場所がバレたんだあ！ ちゃんと隠れてたのにい！」

「こんなに簡単に見つかったてどうすんだよ薰！ お前やつぱり情報流してるだろ！？」

「……………小さくなつてたのになあ」

「俺のせいじゃないよ翔太！ 航だ、航がデカすぎて丸見えなんだよ！」

どんなに障害物があろうとも大台190cmにあと一步まで迫った航の頭は良く目立つ。昔にも大きすぎて狙われて沈んだ日本の戦艦もあつたと歴史の授業で習った事がある。

「あそこあそこ！ あそここの穴の中に隠れようぜ！」

翔太の機転で何とか近くにあった大きな鉄管の中に逃げ込み難を逃れたが、窮地に追い詰められている事には変わらない。何せ鉄管の中では反撃に使える雪が全く無いし、両方の穴から挟み撃ちされたら一気に全滅だ。

「ちょっと、三人ともどこに隠れたのよ!? 無駄な抵抗は止めて出てきなさい!」

千夏の声が鉄管の中に響き渡る。男子軍は声が聴こえない様にひそひそと作戦会議を開いた。

「どーすんだよ薫、このままじゃ見つかるのも時間の問題だぞ?」

「……………投降する?」

「投降したって雪ぶつけられるのがオチだろ!?!」

「まあまあ待ちなさいなお二人とも、こんな事もあるのかと思って、この天才司令官こと桐原薫ちゃんはしっかりと下準備をしてあるのさっ!」

「……………下準備?」

薫はニヤリと笑って鉄管の出口の方を見た。そこには男子軍にはいないはずのスカート姿の小さい人影が一つ。

「……ゲツ、翼!？」

「そつやで! 予定通りやな薫!」

「そつそつ、順調だね!」

その頃、何も知らない千夏は男子軍を追いかけて広場の隅までやってきていた。

「……あれ、おつかしいわねえ? こつちに逃げ込んできたはずなのに、翼もいなくなっちゃうし……」

千夏がドラム缶の裏などを調べていると、『ドシャ、ドシャ!』つと予想外の雪玉攻撃が背後から襲って来た。

「キャツ! 何、何なの!? 何で後ろから!？」

千夏は知らぬ間に雪玉を持った翔太達に囲まれていた。そして、その上の鉄管の上には翼が腕を組んで千夏を見下ろしていた。

「……残念やったなあ千夏、ここで朽ち果ててもらうで」

「……翼！ 何よどういう事なの！？」

翼は狼狽える千夏に対して敬礼してニヤリと笑った。何かの有名なアニメで見た事があるシーン。

「君は良い友人だったが、君の『セレブのクセして何もおごってくれないケチな性格』がイケないのだよ！ アッハッハッハッハッハッ！」

「翼！ 謀ったわね翼！！」

時すでに遅し、逃げ場のない千夏は男子軍からの雪玉攻撃の直撃を食らった。

「千夏ちゃん、その首貰ったぜえ！ ウハッ！」

「……やられたくないならやるしかないんだ！ 千夏ちゃん、ごめん！」

「……………とりあえず、合掌」

「きゃああああ！！」

果敢に戦陣を切った千夏は友の裏切りによりあえなく戦死した。なぜだ！？

「…………お嬢ちゃまだからや」

決戦前から翼と薫はグルだった。翼が一人ずつ女子を連れていって畏にかけて始末していく戦術だったのだ。

「…………やりすぎだろ、これ？ お前ら友達無くすぞ？」

「何を言つか旦那、ここは戦場だぜ！ 次はこっちの番だ！ 攻め込むぜ旦那、航！」

「……………了解」

「…………この話聞いたら絶対に那奈が怒るぞ…………？」

ノリノリの薫とシラッとしている航に呆れた顔をして翔太はしぶしぶ後を追った。

「じゃあ翼、あとは予定通り頼んだぜ！」

「任しとき！ 薫、約束通り後で缶コーヒーおごれや！？」

男子軍とは別方向に向かって翼は陣地に戻ろうとした。次の獲物を捕まえる為に。



「どう考えたってこんな寒い日は友情よりも温かい缶コーヒーの方がポツカボカやもんなあ？ すまんなあ千夏、安らかに眠れや……」

翼がボソボソと独り言を喋りながら歩いていると、先の鉄骨の影に誰か人が隠れていた。油断していた翼は飛び上がって驚いた。

「……翼さん……」

「ひっ！ ま、麻美子やないか？ 幽霊かと思たわ……」

まるで亡霊の様に麻美子が影から翼を見つめていた。しかも眼鏡が薄く曇っていて雰囲気がちよっと怖い。

「……『缶コーヒー』って何の話ですか……？」

「……な、なななな何でもないで！ つーか、オマエ何でここにおんねん？」

「……千夏さんの悲鳴が聞こえてきて心配でここまで来たんですけど……」

「……ち、千夏！？ そ、そうかいな！ あっそや、そういえばさつき薫達が向こうに逃げてったで！ 一緒に行っちゃったろうや、なっ！？」

翼は何とかその場をしのぐと強引に話を変えて立ち去ろうとしたが、麻美子の眼鏡はますます曇って空気はどんどん冷たくなっていく。背中を見せた翼の後ろにピッタリとついた麻美子はボソボソと耳元で囁いた。

「……私、見ちゃったんです、裏切ったんですよ、千夏さんの事……？」

「……は、ハア？　ちよつと、麻美子怖いわ……」

「……薫君と連携して、大切な友達をたった一本の缶コーヒーに買収されて畏にはめるなんて、何てヒドい人……」

「ギョエー！　バレてるう！　許してやー！？」

「全国の小さい子供達の教育に良くない行動はいけませーん！！」

麻美子は背中に隠していた制裁の雪玉を翼の顔面に向かって思い切り投げつけた。

「うぎゃああああ！！」

裏切り者、翼撃沈。数的優位だった女子軍の二人が消えた事で三対三のイーブンになってしまった。しかし、これで卑怯な内通者はい

なくなった。

「……………翼が消えたってさ」

「心配ないね、それも予定通りさ！」

「……………薫、お前本当に友達いなくなるぞ？」

男子三人が影に潜んで狙いを定めている女子軍陣地、何本も縦に立てられていた土管の中に私と小夜は隠れていた。

「……………麻美ちゃん心配だなー、どこまで行っちゃったんだろ？」

「……………何でこんなクソ寒い中でジツとしてなきゃいけないのよ！？ さつさとみんなやつつけて、さつさと終わらせて、さつさと帰るよ、小夜！」

「えっー！ 外に出たら危ないよー！ 那奈一人で行かないでよー！ 麻美ちゃんが帰ってくるまでここに一緒にいよーよ！」

「……………全く、もう……………」

雪合戦やりたいたって言い出しっぺの小夜の護衛の為に私は攻め込む事が出来ずにいた。あんなヘタレ男子が三人揃っていようと私一人で蹴散らしてやるのに……………。

「翔ちゃん達、どこから攻めてくるのかな？ ドキドキするけどちよっと怖いよー！」

「……シッー！ 小夜、ちよっと黙って……！」

……ギユツ、ギユツ、ギユツ……

耳を澄ますと雪の上を人が歩いて来る足音が聞こえてくる。誰だろう、帰ってきた麻美子か、それとも攻めてきた翔太達だろうか。私は小夜の頭と口を押さえてその足音の数を聞き分けようと神経を集中した。

「……那奈、誰か来てるよー？」

「……シッー！ 静かに……！」

その足音は間違いなくこちらに真っ直ぐ向かってきている。しかもその数は一人ではなく、複数の足音が聴こえてくる。間違いない、アイツらが攻め込んできた。

「……小夜、そこから顔を出すんじゃないよ、私がまとめて一斉にやっつけるから！」

土管の中にあつた雪を数個丸めて雪玉を用意し、迎撃しようと勢い良く頭を出して振りかぶつたのだが、そこにいたのは意外な人物だった。

「……那奈、おめー何やってんだ……？」

「……何よ、雪合戦？　こんな寒い日に元気よね……」

「……あれ？」

モグラ叩きの様に頭を出した私をお姉といづみさんが二人並んで呆れて見ていた。手にはビニール袋をぶら下げていて、どうやら買い物のかりの様だ。空き地の中の異様な雰囲気になって見に来たらしい。

「……ほおー、雪合戦かよ、何か面白そうだな、ウツヒヤッヒヤッ」

「私も若い頃、貴之や虎太郎達と雪合戦やってたっけかな、毎回手加減無しで至近距離からぶつけ合ってたっけ……」

お姉はニヤリと笑って指をポキポキ鳴らし始め、いづみさんはビニール袋を下に置いて腕を回し始めた。新旧大問題娘のこの雰囲気、何か凄く嫌な予感がする。

「いづみちゃん、あたし達もひと暴れしようぜ！　あんたの錆びつ

いた不良娘っぷり、この優歌様に見せてみな!？」

「ふん、ガキがナメた事言ってんじゃねーよコラ! 私はこのまま女子軍に入るわよ! 優歌と一緒に翔太もまとめてぶっ潰してやるから肝据えな!？」

「よーし! じゃあ、あたしは男子軍に入るぜ! 那奈、手加減しねえから覚悟しろよ!？」

何かエラい事になってきた。もう遊びというか戦争に近い殺気が漂い始めてきた。

「それじゃあ、はいスタート! 那奈、小夜、攻撃開始! 優歌をぶっ潰せ!」

いづみさんを先頭にして私達はお姉に向かって一斉に雪玉を投げつけた。いきなりの再開に男子軍に合流出来ていないお姉は飛び上がって逃げ出した。

「ちょっとオイオイオイ、いきなりかよ! 少し時間くれたっていいじゃんか、汚えぞいづみちゃん!」

お姉は一斉攻撃を間一髪かい潜って翔太達が隠れていた鉄管の裏に逃げ込んだ。

「うわっ！ 何でここに優歌さんが！？」

「……………敵？」

「敵なんですかあ！？ ひいゝ、怖いよゝ！」

「……………違う違う！ あたしはおめー達の仲間だよ！ あの野郎ども、いきなり攻撃してしゃがつて……………」

このゴタゴタの間に様子を見に行っていた麻美子も戻って来て、女子軍も男子軍も一人ずつ増えて四対四になった。土管から四人が潜んでいる鉄管までは約十メートル、攻め手がない両軍は相手の動きを読みあつて膠着状態になった。

「……………どうするんですかいづみさん？ 男子軍の陣地はがら空きだから私一人で奇襲をかけるとか……………」

「……………ダメね、そんな事したら数的不利でここが先にやられるわ、これは戦いは動いた方の負けよ……………」

男子軍でも同じ様な作戦会議が行われていた。

「……………どうするんすか優歌さん？ このままじゃラチが開かないっスよ……………」

「……そうだなあ、もうちょっと近づけねえと難しいなあ、せめて近くに盾になる物があればいいんだけどなあ……？」

「……案ずるな、この戦場はすでに我の手の中にある」

「……うわっ！ 何やってんだよ虎太郎ちゃん！？」

どこからやって来たのやら、いつの間にか男子軍の後ろに父さんが潜んでいた。女子軍陣地からでもその暇そうな姿は確認する事が出来た。

「……何で父さんまでここに……？」

「……あの男はちゃんと仕事してんのかねえ？ 困ったもんよね……」

私といづみさんで呆れて見ていると、父さんを先頭に男子軍はコソコソと場所を移動して私達の視界から消えた。

「なあなあ、虎太郎ちゃん、何か秘策でもあんのかい？」

「優歌、あれを見る！ これぞ戦場を生き抜く為に俺様が作った要塞だ！」

お姉達が父さんの指差す方を見ると、いつの間に作ったのやら、私



達女子軍が陣取る土管の前に大きなかまぐらの様な雪の固まりが出来あがっていた。

「あそこからなら相手の攻撃から身を守れるし、すぐに身を乗り出して反撃も出来る！ 全員、速やかに要塞の中に移動せよ！」

「……あの、これって親父さんがわざわざ作ったんスか……？」

本当にバカバカしい話なのだが実際これと戦わなければいけない私達からしたらたまったもんじゃ無い。まるで戦場にある『トーチ力』の様に覗き穴まで開いていて、中に潜んでいてもこちらの動きが丸見えだ。

「攻撃開始！ 出力最大、砲撃手用意！ 打て打て打てええええ！！」

「

要塞の上に立つ父さんの管制に合わせて男子軍が一齐にこちらに向かって雪を投げて攻撃してきた。とても土管から顔を出して反撃出来る余裕は無いし、土管の中を狙って山なり軌道の雪玉まで上から降ってくる。

「ちよつとちよつとちよつと！ 父さん、お姉、翔太！ 本当にバカじゃないのあの連中！！」

「怖いよ麻美ちゃん！ 雪がいっぱい飛んで来るよー！！」

「もうイヤー！ 誰か助けて下さーい！！」

「虎太郎、いい加減にしなよ！ こっちは人数的にも不利なのに！  
」

近くに落ちていた木の板で蓋をして、何とか砲撃から身を守ってきたが、ほとんどイジメに近い圧倒的な戦力の差にに段々嫌気がさしてきた。

「打ち方やめーい！！」

父さんの声で攻撃が止んだ。一安心した私達はゆっくりと土管から顔を出した。

「お前達に勝ち目は無い！ おとなしく投降せよ！ そうすれば命の保証ぐらいはしてやるぞ！」

どこから持ってきたのか、メガホンを持った父さんは要塞の上に仁王立ちして私達に降参するように呼びかけてきた。

「……命の保証って何の話よ、父さん！ 何でアナタがここにいるのかもわかんないし、いい大人がたかだか雪合戦でやりすぎじゃないの！？」

「良いか娘よ、体はオッサンでも心は永遠のガラスの少年、それが渡瀬虎太郎様じゃあ！　よく覚えとけやコラァ！！」

……最悪だ。何で私はこんな父親の元に生まれてきてしまったのだろう。軽く自殺したい気持ちになった。

「……那奈、アンタ本当に可哀想だね、強く生きていきなよ……」

「……同情なんてしないで下さいいづみさん、余計にへこみます……」

まるでどこかの国の暴君の様に、さらに父さんは鼻息荒く言葉を続けた。

「今すぐ投降すれば、この寒空の下で海パン一丁で『おっぱっぴー』の刑で済ませてやるぞ！　速やかに投降せよ！」

何よそれ、私達女子に対する完全なセクハラじゃない？　愕然として言葉の出ない私の胸の内をいづみさんが代弁してくれた。

「冗談じゃないわよ！　アンタになんか死んでも投降するか！　このバカ虎太郎！！」

「……それでも潔く戦って死ぬ道を選ぶか、まあそれもいいだろう」

そう言つと父さんは下に降りて雪の要塞の中に隠れた。

「攻撃開始じゃあ!!」

ドサッ、ドサッ、ドサッ、ドサッ!!

私達のいる土管めがけて再び次々と雪が投げつけられてきた。降参はしたくないが、もうさすがに我慢の限界だ。

「もういい加減にしてよ、父さん!」

「こつなつたら那奈、玉碎覚悟で反撃するよ!」

「えっ? でもいづみさん、この攻撃の中でどうやって!??」

「とにかくあの男の思い通りにやられるのは絶対に御免よ! 相打ちになつても必ず仕留めてやる!!」

頭を抱えて怖がっている小夜と麻美子を置いて、私といづみさんは覚悟を決めてタイミングを見計らい反撃に出ようと土管から頭を出した。すると、私達と男子軍の間に一人の女性が水道ホースを持つ

て立ち塞がっていた。

バシャーーーーーー！！！！

「うおっ！ 何だ何だ、何が起こった!?」

「うわっ、冷てえ！ 親父さん、水っスよ水！」

「虎太郎ちゃん、放水だよ！ こっちに向かって水ぶっかけられてるよー!!」

想定外の攻撃に男子軍は全然要塞に隠れて攻撃を止めた。それに併せて放水も止まって戦場は一瞬沈黙状態になった。

「優歌、翔太、今の攻撃はどこからだ！ 一体誰の仕業だ!!」

父さんは再び要塞の上に立って辺りを見渡した。女性が持つホースの元を辿ると、私の家の外にある水道口に繋がっていた。まさかこの人……。

「……何やってんの、アンタ達……?」

「……この声は！ 貴様か、貴様なのかあ!？」

そこには、庭の水まき用の放水トリガーの着いたホースを父さんに向けている母さんが立っていた。

「えっー！　ちょ、ちよつと母さん！？」

「マジで！？　何で麗奈さんまでここにいるんスカ！？」

「っーか、いつ帰って来たんだよ、麗奈ママ！！」

突然の帰宅に驚いている私達を後目に、いづみさんは土管に座って頭を押さえて大きく溜め息をついた。

「……帰って来るんだったらちゃんと連絡してよ、麗奈……」

家の玄関の前には翼一人分スッポリ入りそうな大きなアタッシュケースが二つも置いてあった。正にたった今さっき家に帰って来たみたいだ。

「……少し時間が出来て久し振りに家でも帰ろうと思ったら、天候悪化で飛行機が飛ばなくて空港に何時間もカンズメにされるし、やっと日本に着いたらこの大雪でタクシーは家の前まで入って来れないし、重いカバンを引きずりながらやっと家に帰って来たら何よこのザマは！？　いい歳して雪合戦なんてやってんじゃないわよアンタ達！！」

……ヤバい、これは相当ご立腹のご様子。私やお姉よりも怒らせてはならない人を怒らせてしまった。

「覚悟なさい！ アンタ達全員、一人残らず墜としてやる！！」

そう言々と母さんはホースに付いているトリガーを構えて噴射口を回して水の勢いを最大限にまで絞った。

ドバアアツツツ！！

勢い良く飛び出した水は雪の要塞を削り取る様にジワジワと表面を溶かしていった。

「ヤバいよヤバいよ、虎太郎ちゃん！ 雪がどんどん溶けていつてるぜ！？」

「このままじゃ俺達全員ズブ濡れになりますよ、親父さん！？」

「今さらノコノコと現れよって、渡瀬家の亡霊め！」

怯んでいる男子軍の様子を見て、放水を止めた母さんはさっきの父さんの様に最終警告を出した。

「……少し猶予を与えてやる、抵抗せず苦しまずに死ぬか、それとも戦って苦しんで死ぬか、好きな方を選べ！」

「……暗黒の化身、渡瀬麗奈！　よくも我が輩の目論見を邪魔してくれたな！　お前に帰る家など無いわ！！」

「黙れ下等！　昼間からろくに仕事もせず、四十を越えて未だに雪合戦など、恥を知れ、俗物が！！」

……何この夫婦の会話、こんな言葉を交わす一家が他にあるだろうか？　実の娘の私でさえこの二人の関係が一体何なのかサッパリ理解出来ない。しかもどこかで聞いた様なセリフ回し。

「どうする？　これで終わりにするか、続けるか、虎太郎！？」

「何を言う！　そんな権限がお前にあるのか！？」

「口の効き方に気をつけて貰おう！！」

もちろん交渉決裂。母さんは再び放水を開始した。父さんはすぐに雪の中に隠れたが、その手作り要塞はみるみるうちに呆気なく溶けて、屋根の半分近くがボロボロ崩れ落ちてきた。

「ええい、これ以上破壊されてたまるか！！」



「って言ってもどうすんのよ虎太郎ちゃん!? これじゃさすがにあたし達も身動きとれないぜ!？」

「まだだ、まだ終わらんよ! 俺が外に出てヤツを誘導する、お前達はその隙に一氣に相手陣内に攻め込み、敵の全滅及び水道ホースの栓を止めて無力化せよ!」

「えっ? でもそんな事したら、下手すれば親父さんがズブ濡れになりますよ!？」

「構うな翔太! お前達が未来を切り開くのだ! 新しい時代を創るのは老人ではない!！」

「……あの、さっきから喋り方が何かおかしくないっすか?」

「……今の私は渡瀬虎太郎だ、それ以上でもそれ以下でもない……」

「……コロニー落としとしないで下さいよ?」

翔太の話を半分も聞かずに、父さんは陥落寸前の要塞から果敢に飛び出してきた。

「うおおおおお!！」

もちろんその姿は母さんからも丸見え。突っ込んでくる元サーキットの彗星に対してきっちり狙いを定めた。

「終わりだ！ 墜ちろ、虎太郎！！」

「うおっ！！」

放水をジャンプして避けた父さんは着地した時に母さんが撒いた水と雪で滑って、その転んだ勢いのまま私達がいる土管の近くまでツルツルと滑ってきた。

「……よし、結果オーライだ！ 相手陣内に侵入したぞ！ 今から全軍総攻撃を開始しろ……！」

「那奈のおじさーん！」

「……ん？」

倒れている父さんの前にある土管から小夜が笑顔で顔を出した。

「いめんなさーい！」

小夜は土管の中で作っていたボーリング玉ぐらいに大きい雪の塊を父さんに向かって投げつけた。

「ぐわああああ!!」

「父さーん!!」

「親父さーん!!」

「虎太郎ちゃーん!!」

「……認めたく無いものだな、自分の若さ故の過ちというものを……」

サーキットの彗星、圧死。痛いだろうなあ、あんな大きい雪の塊……。

「……哀れなものだな、最凶の暴君も地に墜ちたものだ……」

父さんの死に様を見届けた母さんは顔色一つ変えず鬼の様に崩れ落ちた雪の山に向かって放水を続けた。男子軍の周りの雪は水浸しになりほとんど溶けてしまっていた。

「優歌、翔太、その他の俗物！ お前達はどうする？ 死ぬならヤツのように潔く散って死ね！」

「お断りしますー!!」

「麗奈ママもう勘弁してよ！ もう投降するからさ！」

完全に勝負がついたその時、母さんが持っていたトリガーが水圧に負けて壊れてしまい、制御不能になったホースは蛇の様に暴れまくりあちらこちらに水が飛び散った。女子軍の私やいづみさんにも放水が襲いかかってきた。

「キヤー!!!」

「うわっ、ちよつと母さん、冷たいよ!!!」

「麗奈、ホース捕まえてよ! こつちにまで水が飛んで来てるってば!!!」

しかし水圧最大限まで開けられてるホースはそう簡単に捕まらない。捕まえにくる人間を次々とびしょ濡れにしまくっていった。

「うわぁ、メチャクチャ冷てーよー! ウハッ!!!」

「……誰か、誰か止めて下さーい! イヤー!!!」

「端にいるウチらにまで水がかかってきたでえ!!!」

「航ちゃん、水道止めてよ! H u r r y u p!!!」

「……………了解」

さんざん辺りを水浸しにしたホースはやっと収まり静かになったが、  
そんなの後の祭り。私達は一人残らず下着まで浸水した。

「……頭からズブ濡れだよ、トホホ……」

「わーい！ 翔ちゃんもびしょ濡れー！ 楽しかったなー！ 那奈  
も雪が積もったらまた雪合戦やろうね！」

「……冗談じゃないよ、全くー！」

次の日、小夜と航以外の人間は見事に風邪をひいた。 は風邪を  
ひかないと良く言うけど、決して都市伝説ではないみたいだ。  
病院で医者から『なぜに寒い中でびしょ濡れになったのか』と問診  
されても私は恥ずかしくて答える事が出来なかった。ハア、頭痛い  
よ……。

## 第27話 ファスナー

新学期が始まり中学最後の三年生、同じクラスだった私達は今度は見事にバラバラになった。私と小夜は三組で偶然か宿命か小中学義務教育期間九年間全て同じクラスになったが、翼と翔太と薫は一組、千夏と航と麻美子は二組になった。

「イヤやなあ、何でウチがこのスケベコンビと同じクラスにならなアカンねん？」

「だからスケベじゃねえって言うてんだろ！ しつこいぞ翼！」

「いやいやいや翔太の旦那、下手に抵抗するよりいつその事俺みたいに認めちまった方が楽ですぜ？ 『アイアムスケベライダー！』  
つてね！」

「ふざけんなよ！何がスケベライダーだ、冗談じゃねーぞ！」

初日から早速クドい翼、薫コンビにいじくられまくっている翔太。さぞかしこの一年はストレスが溜まるだろうなあ。

「麻美ちゃんや航クンとバラバラになっちゃったー！ でも、帰道はみんな一緒に帰ってくれるよね？」

「もちろんだよ小夜ちゃん、これからも仲良く一緒に帰ろう！ 航君もOKだよね？」

「……………問題ない」

「わーい、良かったー！ これでまた瑠璃ちゃんとも遊べるー！」

「……………小夜ちゃん、私の音楽のレッスンにも忘れずに付き合ってよ……………」

結局、部活動不参加で放課後が暇な人間ばかりなので今まで通り下校時はこのメンバーで連んで帰る事になりそうだ。良く考えたら一年生の時とそんなに変わりは無いかなあ。

「いいわよねえ暇な人間は、ゆつたりと帰る時間があつてさ」

新学期で浮かれ気味の私達に千夏が冷や水をかける様に呆れて吐き捨てる様に呟いた。背伸びをしながら挙げた手を頭の後ろで組んで、普段なら一番ハイテンションで飛び跳ねてる女が珍しい反応だ。

「何よ千夏、アンタ何か忙しい事でもあるの？」

「何言つてんの？ アタシ陸上部よ、練習よ練習！ アタシはアスリートなのよ？ 日々日頃の練習が大切なんだから、サボってなんていられないの！」

「おやおや、こりゃ余程この前のゴリラの言葉がアタマにきたみたいやなあ、あん時はメソメソ泣いてたクセに」

「何よ翼！ 何か言った!？」

「いゝや？ なゝんも言うてへんで？ ウッヒッヒ」

そうそう、そういえば今日は朝から千夏が私達の放課後の予定を確認して回っていた。どうやら何か企んでいるみたいなのだが……。

「ところで千夏、朝からちょこまかとウチら全員の予定確認して一体何用やねん？」

「人に予定を聞くだけ聞いて何の説明も無くニヤニヤして、何か企んでいるだったら白状しなさいよ!？」

「Don't worry! 那奈も翼も細かい事は気にしないの！ 校門まで行けばわかるから、みんなアタシについてきて!？」  
come on!」

千夏の言われるままに校門まで歩いていくと、綺麗なロングカールの茶色い髪にお洒落な柄のパーカー、スマートなローライズジーンズを履いたスタイルのいい女性が待ちくたびれた様に門に寄りかかって立っていた。

「Hi, mama! お待たせ!」



「……ママ？」

千夏の声に反応したその女性は、やっと来たかとばかりに大きく首を傾げてため息をついた。

「……んもう、千夏、いつまで待たせるのよ？ 今日学校午前中で終わるんじゃないの？ もうお昼よ？」

「ゴメンね、始業式の後が結構時間かかったのよ」

「そんなもの途中で抜け出しちゃえばいいのよ、どうせまたつまらない大人のグダグダ話でも聞かされたんでしょう？ そんな胡散臭い教育はもう時代遅れなのよ！」

来た、ついに来た。噂に聞く千夏御自慢のスーパーミラクルインターナショナルセレブリティママ、この学校の出資者でもある三島千春さんだ。

確か千夏の話だと、世界でも人気の自社ブランドの社長さんで、海外で幾つものファッションショーを成功させてきた『世界で輝く女性トップ10』にも選ばれた超売れっ子デザイナー！。

その話を聞いていた私はすっかり成金の化粧のケバいおばさんの姿を予想していたのだから、それを根底からひっくり返される様な凄いキュートでスマートな格好いい女性の印象。

しかも、確かこの人は私の母さんと同じ年なのだからすでに年齢は四十歳を過ぎているハズなのに、見た目からはとてもそんな風には見えない。三十代、いや二十代と言っても普通に通用するんじゃない

いだろうか。

「……あの、本当に千夏ちゃんのお母さんなんですか？」

「……………綺麗なお方ですね」

「ウォー！ 素晴らしい！ ベリベリビューティホーですよお母様  
！」

男子陣は千春さんの姿を見て完全に舞い上がっていた。相変わらずスケベ揃いだがそれもしようがないかもしれない。こんなに綺麗な母親がいたらそりや自慢もしたくなるだろう。

「……うはあ、ウチのオカンも結構年の割には若いけど、これはさすがにかなわんわ」

「スゴーい！ 千夏とお母さん、まるでお姉さんと妹みたい！  
ねー、麻美ちゃん！？」

「……私のお母さんとは比べ物になりません……」

女子陣も全員大絶賛だ。女性もこんなに素敵に年を重ねていけるのか、さすがに同世代の奥様方からカリスマ扱いされる訳だ。

「あらやだ、こんなに誉められちゃって嬉しいわー！ みんな素直

でいい子ばかりなのね、気にいったわ」

「確かにアタシとママは良く姉妹に間違えられるわよ！ 『アタシのママです』 って紹介するとみんなビックリするわ！」

「だから『ママ』なんて言わなくていいのよ、そのままお姉さんって思われて結構なのにな」

千春さん、見た目だけではなく気持ちも相当若そうだ。前にも私の母さんが言っていた通り、確かにこの親子は雰囲気や身振り手振り、喋り方が良く似ている。これでは知らない人が見たら誰もが姉妹と勘違いするだろう。

「ウフフツ、今日は私がみんなに美味しい料理やスイーツのお店に連れて行ってあげるわ！ いつも千夏がお世話になっているちょっとしたお礼よ！」

「この前、翼にケチ呼ばわりされたから今日はたっぷりと楽しませてあげるわよ！ アタシとママに感謝しなさい！」

「……何や、結構根に持ってたんかい、しつこいな……」

「ワイワイ！ 那奈、那奈、お料理だってお料理！」

「……小夜、とりあえずアンタもご令嬢でしょ？ ちょっとは弁えなさいよ……」

大好きな母親にあつて途端に張り切り始めた千夏に先導されて、私達は学校の裏道に停めてあつた千春さんの車に乗り込んだ。しかしこの車がまた凄い。

千春さんの女性らしい服装とは正反対の男臭い大きな真つ赤のオフロード4WDで、その迫力は半端ない。車内もとても広く、航の身長も苦にする事なく軽々と私達全員を収納してしまった。

こんなに大きな車のハンドルを女性の細い腕一本で操っているのは何かギャップがあつて凄く格好いい。

「……あなた、麗奈の娘さんでしょ？ どう、麗奈は元気にしてる？」

やはり来たこの質問。千春さんはバックミラー越しに後部座席にいる私に話しかけてきた。

「……とりあえず元気です、この前、久し振りに家に帰って来てゆっくり話が出来ました、でもまたすぐに仕事で海外に戻っちゃいましたけど……」

「……そう、相変わらずジツとしてられないみたいね、あの人は……」

私の母さんと千春さんは学生時代からの親友らしい。こんな事になるならこの前の時に母さんから何かしら昔の話を聞いておけばよかったなあ。

「那奈のママもスゴい人だけど、アタシのママも同じくらいスゴいでしょ？ レディとして憧れちゃうライフスタイルよね？」

助手席にいる千夏はニコニコして後ろを振り返ってきた。千夏といい翼といい、このメンバーは親子仲良しの家庭が多いなあ。まあ、航は例外だが。

「千夏に誉められたって何にも出ないわよ、でも麗奈も元氣そうで良かったわ、また久し振りに二人だけでどこかに出掛ける時間があるといいんだけどなあ……」

バックミラーに千春さんの昔を懐かしむ様な優しい瞳が見えた。母さんと千春さん、一体どんな青春時代を送ってきたのだろう。いつかは私達もこんな風に今のこの時を懐かしむ日が来るのかな。

「さあ着いたわよ、私は駐車場に車を入れてくるから先に行っててね、千夏、ちゃんとみんなを案内してあげてね？」

「Yes mom! じゃあ、みんなで先にお店に行って待ってるね!」

都会の繁華街に出来たばかりの最近流行の人気スポットの超高層ビル。平日だというのにスーツ姿のサラリーマンやOL、学生の若者などたくさんの人が周辺の歩道を行き来していた。

昼間でもきらびやかな照明や飾り付けが目立ち入り口にある大きなオブジェがいやでも目に入ってくる。建物の中に入るとカメラを持った外国人の旅行者の姿もチラホラ見える。

「うわー、見て見て麻美ちゃん！ このエレベーターってガラス張りで外が丸見えだよー！」

「……ちょっと、高くて下を見ると怖いですね……」

「ヤダ〜！ 麻美子ったら高所恐怖症なのお？」

「……や、やだっ、千夏さん、あんまり押さないで下さい……！」

千夏はこの景色に慣れているみたいで怯える麻美子を窓の近くに押し込み意地悪をした。真下を覗くと地上の人が豆粒の様に小さくなり、辺り一面のビル群が良く見渡せる、……らしい。

「高所恐怖症？ セやったら千夏、この中にもっとヒドい人間がいるで！ なぁ、那奈！？」

「……………」

「……あのさ、目をつむってたら余計に怖くないか……？」

翼や翔太に何と言われようと見れないもの見れない！ 速い乗り物嫌いと連動しているのか、私は高い所もメチャクチャ苦手だ。

軽く三十階はあるだろうこの超高層ビル、エレベーターをシースル―にして一体誰が喜ぶというのか。このビルを造った建築家の頭の中がサッパリ理解出来ない。

しばらく目をつぶって我慢していると、やっと目的の階に着いた。でもエレベーターから降りるまで油断は出来ない。私は周囲から異様な目つきで見られながら、目をつぶったまま手探りで出口を見つけて這ってエレベーターを降りた。

「お嬢の意外な弱点が露出しましたなあ、背が高いのに高所恐怖症なんて何て皮肉な、ウハハッ！」

「……………普通、あり得ないよね」

……覚えとけ、バカエロハーフに灯台男。地上に降りたら速攻で尻を蹴っ飛ばしてやる……！

「みんな、こつちよこつち！　まずはママのお店を紹介するわ！」

車を駐車しに行った千春さんの到着を待つ間に、千夏は日本でも徐々に人気が出始めた噂のブランド『チハル・ミシマ』の逆輸入第一号店を紹介してくれた。

同じ階にある色々なお店と比べても非常に大きな面積の店舗で、キラキラした店内には可愛らしい洋服や小物、アクセサリーやコスメがずらりと並んでいる。

「皆さんお疲れ様です！ 三島千夏、入ります！」

「いらっしやいませえ〜！ って、ヤダ〜！ 千夏ちゃんじゃない！」

「えっ〜、ウソオ〜！ 今日は学生服なの〜？ でもその学生服も超可愛い〜！」

「可愛いでしょ〜？ これだってママがデザインしたんだから！  
Made in 『チハル・ミシマ』 なんだから〜！」

「えっ〜、マジでえ〜？ スッゴいかわい〜い！」

「やっぱり社長ってステキ〜！ アタシー生ついてくって感じい〜！」

……うわあ、来たよギャル系会話のこのノリ。正しくテレビで最近人気のある女芸人の物まねネタそのまんまだ。店員みんなが全く同じ喋り方で何か千夏が大量発生したみたいだ。私には何が超で何がマジなのかサッパリわからない。

それにしても、内にいる店員さん達は雑誌で良く見るモデル店員みたいな人達ばかりで、みんな化粧は濃いが綺麗でスタイルがいい。お客さんも数人店内で商品を物色しているが、その形はほとんどがギャル系女性。やはり私にはちよつと敷居が高い世界だ。

「あつ、そうだ！ ねえねえ、この前麻美子を可愛く変身させてあげるってアタシ言っただでしょ？ 色々とファッションアドバイスし



てあげるからちよつと着替えてみて？」

「……えっ、わ、私ですか？ い、いやいや無理です！ こんなかわいくて素敵なお洋服、私になんてとても似合いません……！」

千夏の突然の誘いに驚いた麻美子は両手を振りながらズルズルと後ずさりし始めた。しかし時すでに遅し、腰が引ける麻美子の後ろから強引に小夜が背中を押した。

「ワイー、変身変身！ 麻美ちゃん、ちよつと着替えてみよーよ！」

「無理無理無理、無理でーす！ 小夜ちゃん、千夏さん、許して下さいー！ 誰か助けてー！」

店員の女性達にも捕まった麻美子はそのまズルズルと試着室へと連行されていった。その姿はまるで大人に連行される宇宙人の様だ。

「ねえねえ、那奈も試着してみない？ アタシ一度那奈をコーディネートしてみたかったの！」

「えっ、私？ ちよつと、嘘でしょ？」

店内を見渡すと今まで縁の無い女の子っぽいヒラヒラのついた洋服やパンツ丸見えになりそうなミニスカートばかり。ジーンズしか履いた事の無い私にはとてもチャレンジ出来る勇氣なんてない。まし

てや翔太の前でそんな姿……。

「……悪いけど遠慮するわ、私には無理だつて……」

「No problem! アタシがプロデュースするから遠慮なんてNothing! Here we go!」

「ちょ、ちよつと冗談でしょ千夏!? やだつ、絶対嫌だつてば!」

……結局、私まで強引に試着室に連れていかれてしまった。千夏から色んな服をあてがわれている間も、試着室のカーテン越しに翼達の喋り声が聞こえてくる。

「……何を緊張しとんねん翔太? そないに那奈の格好が気になるんか? ウヒヒッ」

「ば、馬鹿言つてんじゃねーよ!? そんな訳ねーだろ!?!」

「……あつ、旦那! 今お嬢がスカート脱いだの見たぜ!」

「えっ、マジかよ!? どどこ!?!」

「ウソぴょん!」

「……薰、てめえ!?!」

翔太が翼と薫にバカにされている。あーもうヤダ！ 出来れば早くここから逃げ出したい……！

「……Yes, Perfect!! 我ながら惚れ惚れするわ！  
Everybody, show time! これが真の渡瀬那奈の  
姿、アタシの自信作の御披露目よ！」

「おー!!」

上はピンク色のニットと派手なロゴの入った白いシャツを着られ、スカートは完全に両膝が丸見えのファスナーのついた短いスカート。こんな格好小さい子供の時にしかした事が無い。学生服のスカートだって最初は抵抗があつたのに……。

「ワオ、セクシービューティー！ これなら男はイチコロですぞお嬢！」

「なかなかええ感じやないか那奈！？ これはウチの予想以上の出来やで！」

「でしょー！？ この千夏様にかかればどんな女性でも素敵な魔法もかけてあげるわ！ どう那奈、気に入った!?」

気に入る訳ないでしょ！？ こんな格好してこんなたくさんの人間に見られて、もう顔から火が出るほど恥ずかしい……！

「……お願いだから、あまり見ないでよ……」

「……………」

「……旦那？ 固まってますよ、どうしました？」

「……こりゃアカンな薰、翔太のヤツ完全に頭がブツ飛んでるで？」

生きていて今まで経験した事のない恥ずかしさに耐えられずに私は急いで試着室のカーテンを閉めた。自分で鏡を見てさらに恥ずかしくなった。女子だけならともかく、男子にまでこんな格好を見られた。しかも翔太にまで……。

「……Woh , excellent ! unbelievable  
! ! !」

私が恥ずかしがって試着室の中で丸まっていると、隣の試着室を覗いた千夏が驚きの声を上げた。確か隣にいるのは同じく無理やり試着させられている麻美子がいるはずだが。

「これはお世辞なく素晴らしいわ！ Hey , everybody  
！ 新しく生まれ変わった麻美子の姿、どうぞご覧あれ！」

「おおー!!」

歓声に釣られてカーテンから顔だけ出して隣の試着室を覗くと、いつもは三つ編みにしていた髪を下ろしてストレートにし、眼鏡を外してかわいい服を着た麻美子の姿があった。

あのドジで頼りなさそうな雰囲気は消え去り、幼いイメージから一転して非常に大人びた女性の空気を感じさせる姿に大変身していた。

「……………こ、こんな感じになっちゃったんですけど、どうなんですかね、皆さん……………」

「ワオ、ベリベリキュート！ 俺、麻美ちゃん好きだー！ 付き合ってー！？」

「調子良すぎんねん薰！ つーか、メチャメチャかわいいで麻美子！ これは那奈よりビックリしたわ！ なぁ翔太！？」

「……………これは驚いたって言うより、何だろう？ 言葉が出ない……………」

私の時よりも鼻の下をデレーツと伸ばしている翔太に一瞬力チンときたが、それも少し納得出来る。女の私が見ても麻美子のその姿は素敵だと思った。

「……………そ、そうですかね？ 私自身、あまり変わったっていう実感は無いんですけど……………」

麻美子は恥ずかしがりながらも嬉しそうに自分の姿を鏡で確認していた。こんな楽しそうな麻美子の表情は初めて見た。何より、この企画を成功させた千夏の方が誰よりも喜んでいた。

「だから言っただでしょ？ 麻美子は絶対に可愛くなれるって！ これなら愛しい神崎先生のハートも驚掴みね！」

「……いやそんな、違います！ 彰宏兄ちゃんとはそんな関係じゃなくて……！」

「……うん、良いんじゃない？ とても素敵に出来上がってるわよ、千夏」

「……あつ、ママ！」

いつの間にか千春さんが駐車場からお店に到着して翔太達の後ろに立っていた。千夏と一緒にキャピキャピ飛び跳ねていたギャル店員達は一斉に静まり、社長の登場に頭を下げて出迎えた。

「おはようございます！」

お店の空気がガラッと真剣モードに変わった。さすがは日本のファッション界のカリスマ、買い物に来ていたお客さん達もキャーキャー言いながらケータイで写真を撮っていた。

「ふんふん、なかなか良いセンスじゃない？ 凄く女の子らしくな  
ったわね、似合ってるわよ」

恥ずかしくて緊張している私と麻美子の姿をマジマジと見つめた千  
春さんは嬉しそうに千夏の頭をナデナデした。

「私抜きでこれだけのコーディネートが出来るなら上出来よ、やっ  
ぱり私の最高傑作作品、私の娘ね！ちゃんと成長してるのね、千夏？」

「でも麻美子のコーディネートはみんなでやったのよ？ アタシー  
人の力じゃないわ」

「わかってるわよ、ここにみんなは全員私の自慢の弟子なのよ  
？ これくらい出来て当然、ねえ、みんな？」

「はい、ありがとうございます！」

「うん、良い返事、宜しい！」

一つのチームとしてガッチリと団結が出来ているみたいに店員みん  
なが仲が良い。これも千春さんの力の象徴だろうか。

「麗奈の娘さんは元からスタイルが良いから想像ついたけど、この  
子は随分と印象が変わったわね」

千春さんは特に麻美子の姿が気に入ったらしく、何度も色んな角度からチェックを入れていた。

「さっきまでは地味な田舎っ子みたいだったけど、元が可愛いからこんなかわいい衣装も淒く似合ってるわ」

「……いやあの、そんな、私……」

「お気に召したかしら？ もし良かったらこのまま食事に行きましよう？」

「……えっ！？ でも私、こんな素敵な服を買えるお金なんて……」

突然の話に困ってオドオドする麻美子に対して、千春さんはウインクしながらチッチッチと指を立てて横に振った。

「いいのよそんなもの、いつも千夏がお世話になっているお礼をするって言ったでしょ？ 喜んであなたにプレゼントするわ！」

これまた突然のプレゼントに麻美子は瞳をまんまるにして驚き、身に着けている服に目を落とした。

「……そんな、いいんですか？ こんな高そうな服を貰っちゃって……」



「良かったじゃない麻美子！ ママから気持ちだから受け取ってよ！ これで今度神崎先生に会う時はこの服でキマリね！」

「……だから千夏さん、違いますってばー！」

千夏の冷やかに真つ赤な顔をして必死に否定している麻美子を見て、千春さんはとても嬉しそうな顔をして微笑んだ。

「ええなあ麻美子、ウチも何か新しい服欲しいわー！」

「翼にはこの前アタシがプレゼントしたでしょ？ アタシがケチじやなくてアンタががめついなのよ！」

「……何やケチ」

翼を一蹴した千夏は試着室に顔を出して端っこで小さくなっている私にニヤニヤしながら話しかけてきた。

「ねえねえ、那奈はどうする？ もし良かったらその格好のまま一緒に行くよ!?」

「……やだ、制服に着替える……」

「えっ、何でよ!? もったいないー！」

「着替えるったら着替えるの！ もつづるさいー！」

「着替えるんだって、つまんないの、ねえ、翔太君？」

カーテンの隙間から残念そうに肩を落とす翔太の姿がチラッと見えた。冗談じゃないこのスケベ男、二度とこんな姿見せてやらないんだから！

「……あれ、そういえば小夜がいないけどどうしたのかしら？」

「えっ、小夜がいない？」

制服に着替え終わった私と千夏が辺りを見渡すと、何か真っ黒な化け物がこっちに向かって走ってきた。

「わーい！ 那奈、千夏、お姉さん達からギャル系メイクして貰っちゃったー！ ねーねー、似合ってる！？」

……それはギャル系じゃなくてガングロメイク。何かもう小夜の良い所を完全に打ち消してしまう様な酷い変身ぶりだ。こんな姿、もしあづみさんが見たら……。

「……一緒に付き添ってた航ちゃんの感想は？」

「……………瑠璃が泣く」

「……小夜、今すぐ顔洗ってきなさい……」

私達女子三人で洗面所で小夜の顔を強引に洗った後、気を取り直してみんなでさらに上の階にあるレストランフロアへと移動した。

「わーい、またエレベーターだー！ スゴい高いよ那奈！」

「飛び跳ねるなっつーの、このバカー！！」

命からがらエレベーターを降りると、フロアはお昼の休憩時間と重なったせいかどのお店も順番待ちのお客さんで混んでいた。食事にありつくまでにはかなり時間かかりそうな感じた。

「えー、お腹空いたー！ もう待ってられないよー！」

駄々をこねる小夜をあやす様に、ここでも余裕の千春さんは私達にウインクしながらチツチツと指を横に振った。

「心配無用よ、ちゃんと予約席を取ってあるからNo waitよ！」

「さすがアタシのママ、Perfectね！」

仲良く腕を組んで先を歩く千夏と千春さんに案内されて、私達は予約を取っているという高級そうなレストランに入った。  
その店内は貸切パーティーでも出来そうなくらい綺麗で広く、奥の個室の様な場所にその予約席があった。

「このレストランにはたくさんメニューがあるから好きな物を選んで良いわよ！」

「もちろんみんなママのおごりだから遠慮なくたくさん注文してね！？」

……そりやこの親子はいつもこんな所で食事してるから慣れてるかもしれないけど、私にはメニューを見ても何の料理だかさっぱりわからない。

「……なあ那奈、俺らどっちかっていったらラーメン屋とかどんぶり屋の方が注文しやすいよな……？」

全くである。私と翔太からすると子供の頃から外食と言えば大体は吉家とかマツとかだ。同じ国際レーサーが父親のはずなのに、この育ちの違いは一体何なんだろうか……？

「じゃあねー、あたしカレーライスがいい！」

「さすがにお好み焼きとかはあらへんかなあ？」

「……………とりあえず牛乳」

「まだカルシウム取るんですか、航先生！？」

どうやら周りも一般的な生活をしてきた人間ばかりの様だ。何か仲間が出来たみたいでホッとした。

「…………えーと、うーんと、どうしよう…………？」

洋服をプレゼントされた麻美子はこの衣装がかなり気に入ったらしく、千春さんのお誘い通り制服をカバンに詰め込みその格好の姿で席に座ってメニューを見ていた。

いつもだったらこんな場所に来るとアタフタとし始めるのに、何かとても落ち着いている様に見えた。人は外見が変わるだけでこんなにも変貌する事が出来るものなのだろうか。

「…………麻美ちゃん、何かかわいいなあ…………」

「えっ、何か言った！？」

「…………いえ、何でもありません…………」

さっきから翔太が麻美子を見てデレデレしまくっている。こんな事

だったら私もさっきの衣装で来れば良かったかなあ？ …… いや冗談、絶対無理です。

「……………ん？」

とりあえずメニューを決めて料理を待っていると、座高も高い航が何かに気づいたみたいでレストランの奥の席を覗き込んでいた。航の隣にいた麻美子も航の様子に気づいて小さい体で精一杯その方向を覗き込んだ。

「……………どうしたの航君、誰かいたの？」

「……………あれ、あそこにいる人」

「……………！！」

麻美子は椅子から立ち上がってその方向を背伸びしながら覗くと、さっきまでの楽しそうな表情から一転、真っ青な顔をして口に手を押さえてまた椅子に座り込んだ。

「どうしたの麻美子、何かあったの？」

「麻美ちゃんどうしたのー？ 航くん、誰かいるのー？」

麻美子の尋常ではない反応を見て後ろを振り向き奥の席を覗くと、そこには麻美子が心から慕っている神崎彰宏さんの姿があった。しかも、向かいあった席には一緒に綺麗な女性がいて、楽しそうに会話をしていた。

「あらら、あれは麻美子愛しの神崎先生やないか、隣におんのはもしかして彼女なんかなあ？」

「うへえ、デート、デートなのかあ！？ いいなあ、俺もあんな綺麗でナイスバティな女性とデートしたいなあー！？」

「バカッ！ 翼も薫も少しは空気読みなよ！」

「……………あつ」

麻美子は意気消沈して下を向いたまま黙り込んでしまった。何ともいえない切ない空気が辺りを包んだ。

「……………ね、ねえ麻美子、今日はとりあえず美味しい料理いっぱい食べようよ、ねっ？」

「……………」

千夏の機転の言葉も落ち込んだ空気を打ち消す事が出来ず、もの苦しい雰囲気のまま私達は食事を終えた。  
彰宏さんの目を避ける様にみんなと一緒にレストランを出た後も麻

美子は一言も喋らないでうつむいたままだった。

「……麻美ちゃん、元気出して！ いつもみたいにニコツて笑おうよ！？」

「……………」

小夜の呼びかけにも反応しない。どうやら、私達は見えてはいけないものを見てしまったみたいだ。

「……麻美子ちゃん、だったかしら？」

心に傷を負って落ち込んでいる姿を励ます様に、千春さんは麻美子の両肩に手を掛けて優しく微笑んだ。

「……いい事？ あなたはさつきも言った通り、とても可愛くて素敵な女の子だからしつかりと自信を持ちなさい？ 今はまだ相手に自分の気持ちが届かないかもしれないけど、あなたはいつか彼を見返す事が出来るわ！ この私が言うんだから間違いないわよ！」

「……はい、ありがとうございます……………」

麻美子の瞳から涙がポロリとこぼれた。千春さんはそんな麻美子の頬を優しく撫でて、ギュッと抱きしめた。



小さい少女の大きな失恋。 レストランで食べた大人の味は、ちょっと苦くて切なかった。

## 第28話 Loveはじめました

ゴールデンウィーク明けの五月のポカポカ陽気、寝不足も相まってウチの頭の中は真っ白け。いくつになってもひなたぼっこってものは気持ちいいもんやなあ。

あつそや、今回はみんなのアイドル、松本翼ちゃんが話の話の進行をさせて貰うで。那奈ばかりじゃつまらんやろっし、小夜じゃ何の話をしてるんかわからんしなあ。一回くらいはキュートで楽しい関西弁に付き合ってな!?

んでな、さっきの話に出てた寝不足っちゅーんはな、この前の連休の時にウチはエライ怖い夢を見たんや。幽霊とかホラーとかそんなとちやうで、事もあるうに何とウチとあのアホスケベの薫が結婚する話になっとなん!

夢とはいえ『ハア?』って話やで。ウチは一度も薫をそんな対象として見た事なんて無いし、近場の男子なら翔太や航かているのによりよって何で薫やねん?

しかもオトンもオカンも夢の中にいてメチャメチャ喜んどるし、岬の背もウチより高くなってもう訳がわからん。結局何も理解出来んまま協会やらどこやかわからん場所に連れていかれて、牧師みたいな白いヒゲの爺さんがどっかの外国語みないな言葉喋って、そんなでもって誓いのキス……!

うわあ、こんなアホな夢、さっさと覚めてくれっと思ってたら、肝心の薫がいないねん。嫌な予感して横振り向いたら、ウチそつちのけでオトンと二人で式に来ていた他の女を外からガラス越しに覗いてたんや……。

目が覚めたら体中汗びしょびしょやった。昼過ぎまで寝とつたからオカンは岬を連れて買い物に行ってしまったみたいで部屋には誰もおらんかった。

この最悪な夢を早いとこ忘れよう思っただけでシャワー浴びにバスルームに入ろうとしたら、何やら玄関から話し声が聴こえてきたんや。

「……邪魔しました、それじゃあ、失礼します」

「また何か難しい話が出てきたらいつでも相談せえよ、気軽に俺に話せや」

……何で？ 何でオトンと薫がこんなに親しく話したんねん？ 何の話や？ つーかウチが部屋で寝ていた間、コイツ家の中におったんかい！？ 一体、ウチの知らない間に何かエライ事が勝手に進捗しとるとちやうやろな！？

「……何や、起きとつたんか翼、おはようさん」

壁から顔だけ出して覗き込んだウチにオトンはニコニコしながら話しかけてきた。いつもやったら愛しいオトンの笑顔が、この時ばかりはメツチャ怖かった。

それからや、またあんなアホな夢を見るんやないかと思っただけでウチは熟睡出来なくなっただけでしもうたんや。もちろん学校でも夢の出演者である薫の顔をまともに見るの嫌やし、喋るのも嫌や。

今までやつたら千夏と話してたら大概の嫌な事は忘れる事が出来たのに、クラスが別になってなかなか会う事が出来へん。今のクラスの女子はみんなおとなしい娘が多くて、ウチがこの言葉口調で喋りかけるとなぜか逃げていってしまうんやなあ。関西弁、そんなに怖いかなあ？

「あららら、またお昼寝ですか姫様？ やはり眠れる森の美女は王子様のキスが必要なんでしょうかねえ？」

……来たわ、この感に触る丁寧語とアホな言い分。ウチの苦悩を知ってか知らずか、机に突っ伏して返事もしないウチに対して前の机の椅子に座り込んで顔を覗き込もうとするうざったい茶髪。

「千夏ちゃんと別のクラスになったって寂しくなんてないぜ？ なんてったって今世紀最高の色男、この桐原薫王子様がクラスメイトなんだぜえ！？」

「……今世紀って、まだ十年も経ってへんやないかアホ」

みんながおった二年生の時はそれほど気にもならなかったけど、クラスが変わって薫も話し相手がおらんのか毎日中身の無いくだらん話をウチに喋ってくる。あんな悪夢を見たのは多分このしつこい粘着体質のせいなんやろな。

「……寝る子は育つって良く言うやろ？ 今は大事な成長時期やね

ん、ほつとけや……」

「その割には成長結果が出てないみたいだけどねえ、プププのプ」

「あーもう、やかましいねんオマエは！ 休み時間ぐらいゆっくり寝かせてーなあ……」

「休み時間だから喋ってんのにー、冷たいなあ、もっとフレンドリィでポップな会話を楽しもうぜいー！？ ウィー！」

今度は立ち上がって小島よ おの様に胸を突き出して踊り始めた。ウチかて自分で余計でお喋りな人間やと自覚しとるけど、薫のテンションには時たまついていけないくなる時がある。

「俺さ、今日すげえハッピーな気分なんだぜ！ ねえねえ、何があったか聞いてみてよ、ねえねえねえ！？」

「……何か大事な話やったら聞いたるけどなあ、またどうせくだらん話なんやろ？ 隣のクラスの女子に可愛い子がいたとか、電車に乗った時にセクシーなOLがいたとか」

「くだらないとは失礼な！ そんな小さい幸せがこの俺にとって一番の生きがいなのさっ！」

再び椅子に座ってウチが顔を背ける方に併せて覗き込んでくるウザい男。一体何やねん、コイツはウチに何を求めとんねん？ まあ確かに、アホな事喋らんで黙っておけば女子にモテそうナルツクスは

してるんやけどなあ。これこそ正に『喋らなければいい男』の見本みたいな感じやな。

「……んで、ハッピーな感じって何やねん？　とりあえず聞いてやるわ」

「よくぞ聞いてくれました！　実は今日、駅の階段を登っていたら女子高生のパンツが見えたのさ！　五月の青空の様な素敵なおスカイブルーだったぜベイビー！」

「……もうええわ、寝る……」

あの夢を見る前から、ウチはみんなとおるときは薫と一緒に那奈や千夏をからかうのが楽しいんやけど、いざ薫と二人だけで喋るってのはどうも昔から苦手なんやなあ。

何でかっていう特別な理由はないんやけど、まあ簡単に言えば馴れ馴れしいと言いかしつこいと言いか、決して嫌いやないんやけど何か嫌やねん。それと同士に照れくさいってのもあるし。

しかもコイツ、全然人の空気を讀まへん。呆れれて机に肘ついて外を眺めているウチの視線の中にちっとも懲りずに顔をひよこひよこと出してくる。

「人と喋る時はちゃんと人の目を見て喋りましようね、翼ちゃん？　ご両親や先生からも教わったでしょ？」

「『ちゃん』つけるな、気持ち悪っ！　何でオマエの顔なんか見なきゃならんねん！」

「それが最低限の礼儀つてもんですぜ？ 昔から言うじゃん、『親しき仲にも礼儀アリ』ってね？」

「……ハア、しゃーないなあ、ホンマに……」

んで、言われた通りにチラリと薰に目を向けると、今度は指を口や鼻の穴に突っ込んでバカな顔をわざわざ作って待っている。

「……プツ、もうええっちゅうねん……」

「あつ、笑った！ ちょっと笑ったよね！？ ねえねえ、この顔面白い？ この顔この顔、ねえねえねえ！？」

「もうやめれっちゅーねん！ いちいちくだらへんねんオマエは！？ もう勘弁してや……」

毎日この調子や。人が笑うまでいちいちくだらんネタを何度も仕掛けてくる。あまりにしつこいから結局最後はウチが笑ってしまうんやけど、そのウチの顔を見て物凄い嬉しそうな笑顔を見せるから何か憎めへん。

まあ多分、この打たれ強くて人懐っこい性格やからウチ以外の女にも同じ様な事をしてご機嫌取っているんやろうけど、あんな夢見た後やから何か変に意識してまう。

「……あつ、ほらほら翼！ 愉快で楽しい獲物がやってきたよ！」

「……獲物？」

そんな事を考えとつたら翔太がトイレから帰ってきて近くの席に座った。これは気分転換の絶好のチャンスや、久し振りにいじりまくってちよいとストレス発散させてもらおうかな。

「……何だよお前ら、揃って何をジロジロ見てんだよ？」

何かウチらの視線を感じ取ってメチャメチャ警戒してるみたいやな。まるで肉食獣に狙われたインパラの様や、ウヒヒツ。

「女子トイレでも覗きに行つてたですか、翔太の旦那？」

「ハア？ ふざけんなよ薰！ そんな馬鹿な事する訳ねえだろ！」

「いやいや、なんせスケベライダーやからなあ、覗きや盗撮なんぞお手の物やろ、なあ翔太？」

「てめえらしい加減しろよ！ 何かにつけてスケベライダー、スケベライダー言いやがつてよ！」

ホンマに翔太は真面目やなあ。こんなくだらん話にも顔真つ赤にしてみキになつて立ち向かつてくるやもんなあ。これだから翔太イジリはやめられんへんわ。



「えっ、翼さん、そんな事を言ったら翔太君が可哀想！ スケベライダーとかそういうイジメって良くないと思います！」

「そうなんやなあ、薫の言う通りやで、実はウチらもそろそろ翔太の事をバカに出来なくなってきたんや」

「あんなにたくさんの子からそういわれちゃったら、俺らもどうする事も出来ないしねえ」

「……ハア？ 何だよ突然、何の話だよ！？」

ウヒヒツ、獲物が興味津々に餌に食いついて来よった。キレた翔太を胸上げる様に持ち上げるだけ持ち上げてそこから一気に叩き落とす。ウチと薫のいつものアイコンタクトの発動や。

「実はな翔太、オマエ結構女子生徒から人気あるんやで、知らんかったやろ？」

「……えっ、マジ？ マジで？」

「そうそう、俺なんかこの前、後輩の女子生徒に『あのう、風間先輩って彼女とかいるんですかあ？』って聞かれたぜ！」

「ウチなんかクラス中の女子全員に聞かれたわ、モテモテやん、翔太！」

「……えっ、マジかよ、参ったな……」

アホやなあコイツ、周りの女子見渡して本気で照れとる。この醜態を楽しむだけ楽しんで、ウチと薫は目を合わせてきっちりタイミン  
グを計って声を揃えた。

「ウソだぴょーん！」

「……ハア？」

この鳩が豆鉄砲食らった様なマヌケな顔ときたらもう最高や。さっ  
きまで眠気は吹っ飛んでウチと薫は机を叩いて大爆笑した。

「そんな訳あるかいなアホ！　むっつりスケベライダーの分際で、  
この顔が！」

「いやいやいや、毎度毎度くだらないドッキリに引っかけってくれ  
る旦那は素晴らしいエンターテイナー、さすがでございますよ、あ  
あ腹痛え」

「……いい加減にしろ！　ふざけんなこの野郎、マジでキレるぞお  
めえら！！」

唾を飛ばしながら怒鳴りまくってマジ切れしている翔太を見て、ウ  
チと薫は椅子から転げ落ちて腹を抱えてさらに大爆笑した。腹筋が

つりそうなほど痛くて、笑い過ぎて涙まで出てきたわ。  
こういう時に嘘に嘘を重ねて話を面白くしてくれる薫はホンマにいいパートナーやなって思うわ。素人漫才大賞とか出たら何か優勝出来そうな気がするで。

「でも、旦那は他の女子からモテる必要は無いよね？ なんてったって旦那には那奈お嬢という大切なお人がいる訳だし」

「そういえばそやなあ、翔太がモテモテになったら那奈のヤツ怒り狂って大暴れするやろなあ、ウヒヒッ」

「……今度はその話かよ！ もう勘弁してくれよ……」

今さら何を言うか、このネタは春夏秋冬年中無休で翔太をイジれる鉄板やで。まだまだ翔太の愉快なりアクションの可能性を新たにウチらが開拓してやろうって事や、ありがたく思え。

「この前な、他のクラスの生徒からオマエらの事を聞かれたから『付き合ってるどころか高校卒業したらすぐに結婚するらしいで』って教えといたわ」

「そうそうそう、『双方の親公認の許嫁同士なんだよ』ってね！『お嬢のお腹の中にはもう赤ちゃんがいるんだぜ』とも付け足していたよ、完璧だろ？」

「ふざけんなよめえら、適当な事ばかり言いやがって！ これで本当に聞いた人間が信じたらどうしてくれんだよ！！」

うわぁ、今年一番の最高のリアクションや。目は血走っとるし、鼻の穴がメチャメチャ広がっとるし、芸人真っ青の不細工な面やなあ。笑いでよじれる腹を押さえつつ、何とか薫とアイコンタクトして再びいつもの合い言葉。

「ウソだぴょーん！」

「……もうやだ……」

アカン、翔太のヤツ机に突っ伏していじけ始めたわ。これ以上イジメたらいよいよ泣き出すかも知れんなあ。そろそろここらへんで勘弁したるかな。

「そないへこむなや翔太、いつものお約束やん！ オマエはいちいち真面目過ぎんねん！」

「まあ、それが旦那の素晴らしいところですけど、いつも俺達を笑顔にしてくれて本当にありがとう！」

殺さん程度で弄ぶのがウチらのスタイル、猫がネズミをコロコロ転がすのと一緒に。イジメとちゃうで、ちゃんと愛があるもん。これくらいやったらかわいいもんやろ？

「じゃあね旦那、この呪縛から解かれる方法をこの薫ちゃんが教えてあげようかな？ 聞きたい、聞きたい？」

「……今度は何だよ、もう許してくれよ……」

三日干しされた干物の様にグッタリとしとる翔太の肩に手を回して、薫は周りに聞こえない小さなヒソヒソ声で喋り始めた。もちろんウチもその話に顔を近づけて聞き耳立てた。

「簡単ですがな、さっきの話を真実にしちゃえばいいんだよ」

「……さっきの話？ 真実？ 何の話だよ？」

「だからさ、旦那とお嬢が正式に交際しちゃえばいいんだよ」

「……は、は、ハア？」

翔太は驚いてさっきよりもヒドい不細工顔で椅子から転げ落ちた。また極端な話をし出すもんやなあ、このインチキ外人は。

「おま、おま、お前、何をバカな事を……！！」

「バカじゃねえって、誰がどう見ても旦那もお嬢もお互いガンガンに意識し合ってんじゃない？ 中学からの付き合いの俺から見たってそうなんだから、翼なんかもう確証してるんじゃないの、ねえ翼？」

「……ま、まあ確かにウチもそうは思っどるけどなあ……？」

そりゃこの二人が両想いなのは誰が見たって明確な話やけど、いざホンマに付き合いたしたら何かそれはそれで抵抗あるなあ。

ウチは今まで恋愛とか恋人とかとは全然無縁な生活をしてきた訳やし、女も男も友達としてしか見てないから実際に目の前で那奈と翔太が帰り道にイチチャイチヤし出したら何かテンション下がるやろうしなあ……。

「旦那とお嬢がラブラブになったって誰も文句言わないのに、何をそんなにビビってんのかね？ ちんたらしてたら他の男子にお嬢を取られちまうぜ、快速のスケベライダーさんよ？」

「『スケベライダー』って言うの止めろって言うてんだろ！？ あのなあ、お前が考えてるよりも俺と那奈の関係はかなり複雑な話なんだよ！ 母さんの事とか、親父さんや麗奈さん、あと優歌さんと色々な人間関係があって……！」

「複雑なお話と来ましたか、じゃあその複雑な関係が解消されたら今すぐにでもお嬢に告白するって事でファイナルアンサー？」

「……い、いや、それは、あの……」

頭に血が上ってるせいか、いとも簡単に翔太がボ口を出した。まあ、頑なに本音を隠してもウチらには丸見えやったけどな。狼狽えてる翔太に対して薫は裁判所の弁護士みたいに核心を掘り下げでいきよった。意外と性格悪いな、コイツ。

「誰か家族の中に二人が恋人同士になる事を嫌がっている人間でもいるのかい？ そんな訳ないでしょ、旦那さんアナタ、それを理由に自分の気持ちから逃げてるんじゃないやありませんか！？」

「……いや、その、それは、つまりはそのアレだ、あの……」

「旦那、アナタはもしお嬢が他の誰かに告白されて交際する事になったら静かに黙って見ている事が出来るんですか！？ どうぞお答え下さい！」

ガンガン突き進む薫とは対照的に、ウチはイマイチ乗り気になれなかった。もちろん、別にウチが翔太に特別な感情を持つてる訳じゃないのうて、そういった恋愛事情が入り込んでくる事によってウチらの友情に歪みや軋みが出てくるんじゃないかと不安やったんや。

「……別の男子って、そんなヤツいるのかよ？ あんな気が強くてすぐに蹴っ飛ばしてくる暴力女……！」

「自分しか相手が務まらないと仰られるつもりか！？ 何と傲慢で浅はかな思考だろうか！？ そんな事では恋愛はおろか、学業もバイクも全然ダメダメだあ！ もうダメのダメのダメ二乗のダメダメ男一直線ですなあ、ウハハッ！」

「うるせー！ お前にダメダメ言われたくねーよ、このスケベ野郎！」

両手を仰向けにして挙げ首を横に振る薫に対して翔太はまたも立ち上がった怒り始めた。シラケとるウチを置き去りにしてこのアホ二人は良う喋る事喋る事、何かさっきの眠気が戻ってきた感じでメチャメチャ眠くなってきたわ。

「そんな人間じゃお嬢があんまりに惨めだぜ、ここは旦那に代わって俺がお嬢を世界で一番幸せな女性にしてあげるとしますかなあ？」

「……ハア？ 薫、お前、何言い出してんだよ？」

「……えっ、何や薫、オマエ那奈の事好きやったんか？」

突然の発言に翔太だけやなくウチも立ち上がって薫を問い詰めた。そんなアホな、薫は那奈よりどっちがって言ったらウチに気があるんやないかと思ってたのに……。

「だって旦那は告る勇気が無いんだろ？ じゃあ俺が先にお嬢に愛を語りかけたって問題ないだろベイビー？」

「……いや、それは、その……」

翔太のテンションが一気にガクーンと下がった。同時にウチの心の中も何か変な感じに渦巻いてた。寂しいと言つか、切ないと言つか、今まで経験した事の無い空虚感。何やるこの気持ち……。



「その、何だよ旦那さんよ？」

「……それは、困る……」

「じゃあ、さつさと告れって話だよ、旦那とお嬢のラブロマンス、誰も邪魔する悪役はいないぜえ!？」

「……薫、お前は？ さつきの話は……？」

「ウソだぴょん！ いい加減に見抜けよ、このバーカ！」

「……てめえ、この野郎!!」

……何やくだらん、ウチも完全に騙されてしまったわ。あんな変な夢を見たせいかなあ。頭脳戦なら百戦錬磨やったこの松本翼、一生の不覚やで、アイタタタ……。

しかし、これで完全にプツンしてしもうた翔太は休み時間が終わって先生が教室に入ってきたのにそれに気づかずには逃げる薫を追いかけて回しとった。お約束通り二人は廊下に立たされよった、ホンマにアホやなあ。

「……でもこれで、翔太が那奈の事が好きなのはもう確定したなあ……」

んでもって、那奈も翔太に対してピンピンに意識し取るのも小さい頃から見てて良いわかつとる。他の男子と手を繋ぐ事に全然抵抗の

無いあの女が、ある日を境に突然翔太にだけは触れられる事を嫌がり始めたのをウチはきっちりチェックしとったんや。

さっきの不安もよくよく落ち着いて考えてみたら、あの二人なら親の関係もある訳やから別れ話云々の面倒臭い話とは無縁っぽいし、これはなかなか面白い事になるかもしれんなあ。帰り道が楽しみやわ、ウヒヒ……。

「……何よ、何でずっと黙り込んでんのよ翔太？」

「……別に、何でもない……」

「さっきも廊下に立たされてたみたいだし、ケンカでもしたの？  
翼も薫もニヤニヤして気持ち悪いし、一体何なのよ？」

「何でもないって、あんまりつかないでくれ……」

「……何よ、気持ち悪い……」

帰り道早々に那奈が異変に気づいて翔太に詰め寄っていきよった。勘ぐる女に必死に隠す男、この二人は結婚してからこんな関係になるんやろなあ。あの後、翔太からさんざん口止めされたけど、想像してたらメチャクチャ可笑しくなってきたわ。

「……何がそんなに可笑しいのよ翼!？」

「へっ？　なななな何や？」

アカーン、笑いを堪えられずに那奈に見つかったもった！ オマケに返事も舌が回らずに嚙んでしまうし、もう最悪。那奈の鋭い目が翔太からウチに移って完全に絶体絶命や！

「何か隠しているんだったら正直に話さない、でないと頭を叩きまくってもっと身長を縮めるよ！？」

「……いやそんな、暴力による尋問は宜しく無いで、なあ翔太！？」

答えに困って翔太の顔を見たら、今まで見た事ない様なメチャクチャ怖い顔をして『喋るな！』と言わんばかりにウチを睨んどる。アカン、これはマジや、喋ったら何されるかわからん。

話を他にそらそうと思っても、千夏は先を歩いて麻美子とファッションの話をしとるし、小夜も航もこっちの話には興味無く千夏達の話の聞いとるし、隣にいる薫は全然助け舟出してくれそうな気配ゼ口やし……。

「……翼、口を割らないんだつら無理やり吐かせるしかないみたいだね、拷問に耐える覚悟は出来た？」

かといって喋らんかったら間違いなく那奈に殺される！ 四面楚歌や、逃げる場所がどこにも無いで、誰か助けてやー！！

「……あつ、そや！ 薫、ウチより薫がこの話の詳細を良く知つと

るで！　なあ薫、後は頼んだで！？」

ウチのとつさの機転で那奈と翔太の冷たい視線は一斉に話を押し付けた薫に向いた。スマンなあ薫、ウチの代わりに綺麗サッパリ那奈に殺されてくれ、成仏しいや。

狙いから外れたウチはバレない様に那奈から遠ざかろうと静かに忍び足で逃げ出した。しかしや、あともうちよいの所で那奈に後ろから襟首を掴まれてしもうた。

「じゃあ、とりあえず薫から尋問してあげるわ、これで何も出なかったら翼、次はアンタの番だよ」

……うわあ、何てこった。拷問を食らう事が確定したばかりか、薫の返答次第ではウチらまとめて那奈と翔太からボコボコにリンチされるかもしれん。

まさか今日がウチの命日になってしまっやなんて。さようならオトン、ウチはオトンの娘に生まれて幸せでした……。

「いやさ、教室でいつか翔太と一緒にどこかへ行こうかなくて話をしてたんだよ、マジでマジで」

おっ、どうやらこの場に及んでも薫のヤツは嘘を突き通すみたいやな。親友をかばってウチも助ける、とってもいいヤツやないか！  
でも、こんなベタな言い訳、那奈に通じるんかなあ？

「……嘘でしょ？ とても薫の話は信用出来ないのよね、正直に話すなら今の内だよ？」

「ウソじゃないですって、とても楽しそうじゃありませんか、四人でダブルデートって？」

「……ハア？」

事情を知つとるウチや翔太はもちろん、薫の襟首掴んで詰め寄つてた那奈も突然の話にポカーンと口開きつ放しになってしもた。翔太と那奈がデートならわかるけど、ダブルって何や？ もう一組は一体誰と誰やねん？

「だから、お嬢と翔太の旦那、そして俺と翼でダブルデートだぜい！ この提案どおう！？ 好き、嫌い、好き、嫌い、好き？ 嫌いじゃない、嫌いじゃないけど……」

「生理的に無理やアホオ！！」

何で？ 那奈と翔太はともかく、何でウチと薫がデートせなアカンねん！？ 何を考えてんなコイツは！？

「薫、てめえ！ 何でもベラベラ喋りやがってこの野郎！！ さっき廊下で言つてた約束と違うじゃねーかよー！？」

「ちょっと何よ何の話！？ 何よ約束って、何よデートって！？  
翔太、ちゃんと私にわかる様に説明しなさいよ！？」

「いや、あの、それは……」

この二人の戯れ言は本人達に決着つけてもらうとして、問題はウチと薫の話や！

「……デートってそんな、薫はウチの事をどない思っとなねんな！  
？」

「そりゃあ、プリティーでラブリーだと思ってますよ姫様！ 俺は  
気づいたのさ、おっぱいが大きいだけが愛じゃないってね！？」

「ウソやー！？ そんなん絶対ウソやあああ！？」

アカン、アカンアカン、いつも強がって生意気な事言うところけど、  
ふざけた言い方とはいえ男子に告白されるなんてウチには初めての  
経験なんやで！？

しかもその相手が一番良く連んどうる薫やなんて、ウチは一体どんな  
反応すればええねん？ もう頭の中が甲子園球場みたいに風船ピュ  
ーピュー飛びまくって大騒ぎになっとなる！！

「ヤダ〜！ やっぱ翼と薫ちゃんってそーいう仲だったのね！？  
ちよっと焼けちゃうぞ、ピューピュー！」

「ウザいわ千夏！ さっきまで知らん顔しとったクセして、つまらん冷やかし入れんなや！」

「ねーねーねー、ダブルデートってなーに？ 何かダブルバーガーみたいで美味しそう！」

「……………食べ物ではありません」

「…………デートですか、私も彰宏兄ちゃんとデートしたかったです、ハア…………」

千夏だけやのうて小夜も航も麻美子も、コイツらまとめて散々冷やかしてまた何も無かった様に背中向けて歩き出しよった。後ろでは那奈と翔太が言い争ってるし、やっぱり四面楚歌、ウチは一人ぼっちやー！

「そんな事ないぜダーリン！ きつと俺達は素敵なステディになれるさ！？ チュ〜〜！」

「失せる変態！ ウチは絶対にオトン以外の男に唇を許したりせえへんで！？ ここからいなくなれー！！」

「ぶべらつつつつ…！」

迫ってくる薫を側道の溝に蹴り込み、ウチは全力でダッシュして逃げた。もう明日からの学校が地獄やわ、こうなったら登校拒否して一日中ベッドに潜り込んでようかなあ？

あつ、でもアカン、寝たらまたあの悪夢が遅いかかってくるわ。お願い神様、正夢にならんといて下さい。松本翼、ちゃんとええ子になりますから……。



広い会場に多くの観客。そして白い胴着に身を包んだ勇ましい風格の男女が舞台の上で稽古の成果を見せようと力と技を競っている。

「セイヤーーーー!!」

「ヤッーーーー!!」

ついに訪れた私の中学生最大のイベント、空手全日本選手権。私も周りの選手の様に背中に『渡瀬』の刺繍が入っている稽古で着慣れた白い胴着に身を包んで、今か今かと試合の時を待っていた。

「那奈、表情が硬いぜ？　もっと力抜けて気軽に行けよ」

私よりも前にこの大会を優勝して、そのまま世界選手権までもを制したお姉が私の世話役として会場についてきてくれた。物凄く頼もしい反面、何か無茶苦茶な事でもやらかさないか不安でもある。

「那奈、おめーの腕なら全日本でも充分通用するんだぜ？　若い力や勢いを武器にしてよ、ガチムチのババアやデカいだけのピザデブを突いて突いて突きまくってスクラップにしちまえよ！」

「そんな簡単に言わないでよお姉、私だって久し振りの実戦の組み手だし、全日本なんて大きな規模の大会なんて初めて参加するんだから……」

随分前にこの大会に参加する事は決まっていた。去年の始め、中学生最後の一年に一つ大きなタイトルに挑戦をしようと道場の師範代から話を持ちかけられた。最初私はちよつと迷ったが、せっかく空手を習っているのだから自分の力がどこまで通用するか知りたくなつたし、第一参加しないなんて言ったら隣にいる世界王者が許してくれなかつただろう。

「おつ、あそこの観客席にいるのいづみちゃん達じゃねーか？」

お姉が指差した方向を見ると、いづみさんとあづみさん姉妹、それに翼のお母さんの美香さん、そしていつもの同級生メンバーが観客席に座つて私に手を降っていた。

「那奈！ 頑張つてね！」

「全員KOやで！ 負けたらウチらが承知せえへんで〜！」

小夜と翼の声が聞こえてきた。私はその声援に応える様に軽く手を振った。よく見ると航と瑠璃、そして薫までいる。

「こりや絶対に負けられないぜ、負けたらみんなから入場料返せって言われちまうぞ、那奈!？」

「……嫌なプレッシャーかけないでよお姉、背中の『渡瀬』の名前だけでも充分重圧なのに……」

私が登録したカテゴリーは女子一般クラス。私の年齢ならまだジュニアクラスでも出れるのだが『生温い事言ってんじゃねえよ、トップでやれや!』というお姉の一言で飛び級のこのクラスで高校生や成人の選手達と戦う事になった。

「あたしが今のおめーと同じ年の時に余裕で優勝出来たんだぜ、妹であるおめーが優勝出来ない訳がねえ、この優歌様が言うんだから間違いねえ」

「……あのね、自分を物差しにして話をしないでよ、お姉自体が人類の人知を超えた規格外なんだからさ……」

お姉からの執拗なプレッシャーを誤魔化す様に私は準備運動さながらのストレッチを始めた。何か異様に口の中が乾く。やっぱり少し緊張しているのかな。

試合はトーナメント方式で決勝に辿り着くまでには五回戦闘わなければならぬ。とりあえず、試合中に大きな怪我だけはしない様に気をつけないと優勝なんて言っただけだ。丁寧な手足の先まで伸ばしていると、そろそろ私の試合の出番が近づいてきた。

「よし、行ける所まで行つてやる！」

私は自分の頬を両手でパチーンと叩いて気合いを入れ直した。とりあえず優勝とかお姉の戦歴とは忘れて、目の前の一戦一戦を悔いなく戦い抜かなければ！

その頃、二階にある観客席では観戦に来てくれたみんなが他の舞台で行われている試合を見て、その凄い迫力に目を釘付けにされていた。

「うわっ、今の蹴り凄い痛そう！ 美香、今の見た？ よくあんな無茶な事が出来るよね……」

「……そうよね、何か怖くてまともに見てられないわ、何でわざわざあんな怪我しそうな事をするのかしら……？」

いづみさんと美香さんは小さい頃からの幼なじみで今でもとても仲が良い。行動派のいづみさんと慎重派の美香さん、バランスが取れていいコンビだ。

「でも、いづみちゃんも昔はあんな様なケンカを良くしてたじゃない？ 男の子をみんなグーでボコボコに殴つて？」

「ちょ、ちょっとやめてよ姉さん！ いくらなんでもあんな空手み

たいな事まではやってないってば！」

保護者三人は男子成人選手のガチ組み手を生で見えて荒れてた学生時代を思い出す様に興奮していた。その前の席には小夜と麻美子、それと瑠璃を膝に乗せた航が座っていた。

「那奈、勝てるかなー？ 怪我とかしないかなー？ 大丈夫かなー？」

「……大丈夫だよ小夜ちゃん、那奈さんだったらきつと優勝出来るよ、ねっ、航君？」

「……………心配無用、必勝祈願、家内安全、悪霊退散」

「けんかじょうとう」

「……………瑠璃ちゃん、そんな言葉どこで…………？」

小夜達が座っている席から少し離れた所で、翼と千夏と薫が売店で買ってきたポップコーンを三人で仲良くバリバリ食べていた。どうやらこの三人は若干試合を見る視点が違うみたいだ。

「何で女子選手だけ胴着の下にシャツを着てマスク？ あれじゃおっぱいチラリなんて期待出来ませんデース、シヨボーン」

「薫はどこにいてもそればかりやなあ？ 見えたって女子もみ

んな大胸筋ガチムチの筋肉の塊やろ？ ほれ、男の乳首やったらあ  
つちの試合会場で見放題やで！？」

「うほっ、いい男！ ってそんな趣味はありませーん」

「翼も薫ちゃんも、もうちよつとスポーツをシリアスな目線で観戦  
しなさい！ 選手はみんな毎日汗と血を流して苦しい鍛錬に耐えて  
るのよ！？ ちゃんと応援しなさいよ、このJ a p m o n k e y  
！」

「オマエかてジャップやろが！ つーか何や、すっかりアスリート  
気取りやないか？ この前までスポーツをナメてたなんちゃって女  
のクセに、なあ薫？」

「千夏ちゃんの走り高跳びの競技の時もちゃんとおっぱいチェック  
するからバッチグーデース！」

「F u c k o f f ! ! !」

「オーマイガー」

「日本語で喋れや、どアホども」

そのどアホどもが喋っている間に会場では次の試合の準備が始まっ  
ていた。先ほどまでとは違う雰囲気小夜は椅子から立ち上がって  
下の試合舞台を覗き込んだ。

「あつ、那奈だー！ みんな、那奈の試合の順番が来たよー！」

ついにこの時が来た、私の出番だ。みんなの期待を背負い一つ溜め息をついて舞台上がろうとしたら、突然真横から私に向かって数台のカメラのフラッシュが焚かれた。

「えっ、何これ？ お姉、この人達ってどこかの記者？」

「あたしが事前に新聞社や出版社に連絡しておいてやったのさ、『期待の新人、渡瀬優歌の妹、全国デビュー』ってな！ 明日の一面が楽しみだな、ウツヒヤツヒヤツ！」

「……余計な事しないでよ、全く……」

まるで注目選手のような扱いを受けて私のプレッシャーはさらに高まった。せつかく気合いを入れたのにもう台無し。何かキリキリと胃が痛くなってきた。

初戦の相手は年は高校生くらいの背の小さな選手。参加選手はゴツいおばさんばかりだと思っていたので意外。最近はこんな可愛らしい女子も空手をやる世の中になったみたいだ。

「始めっ……！」

主審の掛け声に合わせて私は構えて冷静に相手の様子を見ながら攻撃を開始した。お互いに体に正拳突きを入れながら間合いを取って蹴りを入れる。

相手は年上だが体は私の方が大きい。相手の攻撃も大して馬力が無いし、これなら楽勝だ。相手が疲れてきたところを見て私は一気にラッシュをかけて会場隅まで攻め立てた。

「そこまでっ!!」

主審の声が上がった。試合時間が終了し、勝負は主審と二人の副審による判定になった。私の帯の色は白。白が二本以上上がれば私の勝ちだ。

「白、白、白！ 白三本！」

自分でも確信していたが、結果は私の圧勝だった。緊張でちよつといつもより動きが堅かったけど、とりあえず初戦を突破する事が出来た。

「礼！」

舞台を降りて自分の休憩用の椅子に戻ると、お姉がニコニコしながら私に飲み物を渡してくれた。

「初戦突破おめでとさん、もしここで躓いてたらボコボコにシメてやるところだったかなあ」



……これ、多分冗談じゃないな。試合中からでも外から私の動きをチェックしているお姉の視線を感じ取る事が出来た。はつきり言って相手選手の圧力よりお姉の圧力の方が怖かった。

「ちよつときこちねえ感じだったが、でもまあいいか、内容自体は圧倒的だったしな、これで少しは緊張が取れたか？」

「……うん、少しはね、始まった時はちよつと怖かったけど……」

私はお姉がくれたスポーツドリンクを飲んで一息ついた。相手が弱かったとはいえ、やはり正式の大会、本気の勝負。道場で練習組み手をやるのとは全然スケールが違う。

「安心しろ那奈、ちゃんとおめーは強くなってるぜ？ このあたしが太鼓判押してやるから自信持ってやれよ！」

会場を見渡すと観客席が次第に人で埋まってきてるのがわかった。すでに観客は千人近くいるだろうか、これが全日本という大会の規模の大きさなのか。

勝者と敗者、希望と絶望、期待と歓声、色んな感情が入り乱れる会場を眺めながら私は小学生の頃を思い出していた。

初めてたくさんの人ばかりを見たあの日、私が小学四年生の時に訪れた都会から遠く離れた郊外の大きなサーキット場。私は小夜や翼

と一緒に、翔太が出場したポケバイの全日本選手権が行われていた。大人のライダーが参加するクラスがあったり、小さい子供達で競うクラスがあったりと参加者も多く、会場には出店まであって人の行列が出来て小さい私達はまともに歩く事すら出来ない。まるでどこかの国のお祭りの様に賑わっていた。

そんな多くの観戦者が注目している中で、翔太は私と同じ小学校四年生という若い年齢ながら自分より年上の子供達相手にジュニアクラスで優勝してみせた。

突然彗星の様に現れた天才児、その正体は世界中に惜しまれながら天国に旅立った風間貴之の実男、しかも師匠はあのバイクレース界の暴君、渡瀬虎太郎。メディアが持ち上げるには充分過ぎる生い立ち。

この一日だけで翔太はバイク界で一躍有名な存在となり、日本の期待の星と呼ばれる様になった。父さんも母さんも、いづみさんも小夜も翼も、翔太の活躍に大喜びだった。でもあの時、私の心境は複雑だった。

レーサーになる事によって切っても切れない事故による怪我の心配、確かにそれもある。しかしそれ以上にこのレースを期に家でも外でもいつも私と一緒にだった翔太がどこか遠くに行ってしまう様な気がした。

凄く焦った。このままじゃ置いていかれる。私は何をやってるんだろう、どこに向かっているんだろう。翔太は自分が歩んで行く道を見つけて夢に向かって一步一步踏み出しているのに……。

翔太が次々とレースで活躍していく度に、私の不安はどんどん大きくなっていった。負けたくない、置いて行かれない、私も何か頑張らなくちゃいけない。

その時、私の目に空手の舞台上で圧倒的な強さを誇っていたお姉の姿が写った。いつも私達を守ってくれたその背中では私の憧れだった。そうだ、私もこの人みたいになりたい、強くなりたい。そうすれば

きつと翔太に追いつく事が出来る。そして、私も父さんや母さんが自慢に思える存在になる事が出来る……。

そうして私は空手を習い始めた。しかしこの世界は思っていた以上に厳しいものだった。日々の鍛錬に拳は血が滲み、足は切り裂け、体中にはアザが出来た。

決して女の子がやる様なスポーツではない。それでも、翔太に負けたくない、お姉みたいに強くなりたい、その気持ちだけで私はこれまで頑張ってきた……。

「……おい那奈、何ボツーとしてんだ？ 頭でも打ったかー？」

「……えっ？」

お姉の声で私は我に帰った。いけないいけない、何か最近昔の事を思い出す事が多いな。あの頃まではいつも一緒に仲が良かったのに……。気がつくと、もう二回戦の試合の時間が近づいてきていた。

「次の相手はおめーよりデカいみたいだが、まあデカいって言うても横幅だけだな」

次の相手は重量級の相手だ。お姉の言葉を借りると、つまり太った選手である。

「正面からぶつかるなんてバカなマネすんじゃないぞ？ グルグル

回ってあの大根みたいな足をバカバカ蹴りまくって帰りは車椅子で帰してやれ！ あつ、でもあのデブじゃケツが入る車椅子がねえかな？ ウツヒヤツヒヤツ！」

「シツ！ お姉、相手に声が聴こえるってば！」

こんなに人がたくさん見ている中でも、翔太もお姉も戦ってきたんだ、勝ち上がってきたんだ。どんな相手だろうと負ける訳にはいかない。私がこの大会に出場を決めた最後の理由は、少しでもその二人に近づきたいと思ったからなんだから。

「じゃあお姉、行ってきます！」

「おう、一発ガツンとぶちかましてこいや！」

私が試合をしているその時、観戦に来る予定だった翔太はまだ会場に到着していなかった。今日はバイクチームのミーティングの日と重なってしまい、メンバーである翔太はそちらに参加していた。試合会場に父さんが来ていないのもその為だ。

「じゃあ渡瀬さん、お疲れーっす！」

「虎太郎、翔太、次回は七月の夏合宿だな、忘れるなよ？ お疲れさーん！」

ミーティングはいつも休みで社員のいない父さんの会社の会議室を使って行つ。打ち合わせが終わつて橋本さんや竹田さん達メンバーはその場で各自解散をしていった。

「親父さん、お疲れッス」

「おう、ど疲れちゃ〜ん」

椅子に座つて競馬中継を見ながらコーヒーを飲んでいる父さんの横で、翔太は上着を羽織つてそそくさと出発をする準備をしていた。

「……ん？ 何をそんなに急いでんだ、お前？」

「……あつ、いやちよつと、約束があつて……」

「……ふうん、約束ねえ……」

時間が気になるみたいで、翔太は何度も時計をチラチラ見ていた。

「お前まさか、女を待たしてる訳じゃねえだろうな？ ああ、コラ？」

「な、何言つてんすか？ 違いますよ！ 今日つて那奈の空手の大会の日つて親父さんも知ってるでしょ？ 母さんとかみんな先に行つて俺を待つてくれているみたいで……」

「何い！？ やっぱり女を待たしてるじゃねえか！？ しかもその相手は俺の可愛い可愛い娘だとお！？」

「えっー！ 何でそうなるんですか！？ 勘弁して下さいよ！？」

理不尽な因縁をつけられうるたえる翔太に、父さんは黙って数枚の千円札を翔太の手に握らせた。

「な、何ですかこれ？」

「普通免許をまだ取って無いのに早まってバイクに乗って警察沙汰になったら困るんでな、どっかでタクシー捕まえて乗ってけや」

「……あ、ありがとうございます、でも、親父さんは会場に行かないんですか……？」

「この虎太郎様に相応しい場所じゃねえよ、あっちの世界は優歌の専売特許だ、それに俺が行ったら昔の喧嘩心に火がついちまうからな」

そう言うとう父さんは再び椅子に座り込んで机に置いてあるスポーツ新聞を広げて再びテレビに目をやった。

「第一、俺は家族や女よりもバイク優先主義なもんでな、お前もそんな予定があるなら大したミーティングでもねえんだから休めば良

かったのによ？」

「……お、俺だって、バイク優先主義ですから！」

「ほう、それは本音か？　じゃあよ、大事なレースの日に那奈が事故に巻き込まれて瀕死の状態で病院担ぎ込まれたら翔太、お前どうすんだ？」

翔太に究極の選択を浴びせた父さんはくわえたタバコに火を点けてふうふうと一服した。

「……親父さんはどうするんですか……？」

「俺か？　さっき答えた通りだ、さあ、お前はどうする？」

「……俺は、俺は……」

「へっくしゅん……！」

迷って悩んでいた翔太の気を散らす様に、父さんは大きな声でくしやみをした。挙げ句はティッシュペーパーを数枚取って下品な音を立てて鼻を噛み始めた。緊張に包まれていた空気はあつという間にぶち壊された。

「……親父さん、ちょっと勘弁して下さいよ……」

「……おお、スマンスマン、まあ、あまり考え込むな、お前はまだレーサーである前にヘタレな一男子学生だ、色々と人生勉強を重ねる事だな」

「……ハア……」

「つーか翔太、お前時間大丈夫なのか？」

「あつ、やべえ！」

翔太は時計をチラッと見て、急いで部屋のドアを開けた。

「じゃあ、親父さんスイマセン！ お金、間違いなく大事に使わせて貰いますから！」

「おう、焦らないで気をつけて行けよ、那奈の応援頼んだぞ」

翔太が急いで部屋を出ていくのを見送ると、父さんは自分の机に飾ってある古い写真立てを眺めた。その写真には、バイクスーツに身を包んだ現役時代の父さんと貴之さんが仲良く肩を組んでいる姿があった。

「……全く、親父に似てクソ真面目な男だな、アイツは……」

翔太がこちらに向かっている間、私がいる試合会場の方はすでに昼



休憩も過ぎて大会も大詰めになってきた。それに合わせて観客席もお客さんで埋まり、空席はほとんど埋まっていた。

次はついに決勝戦、私は何とかここまで勝ち抜いてこれた。お姉が連れてきた取材スタッフもまさか私がここまで残るとは予想していなかったみたいで、慌てて写真を撮ったり取材ノートを取り始めている。

「だから優勝するって言ってやってたのによ、今さらバタバタしやがってコイツら」

張り詰めた空気に一人だけ余裕のお姉は、椅子に足を広げてデーンと座り込みチビチビとミネラルウォーターを飲んでいた。

「しかしアレだな、これで間違いなくスポーツ欄掲載は確実だぜ、優勝したら一面トップも夢じゃねえぞ那奈？ ウッヒャッヒャッ！」

「……………」

「……どうした、ヤバいのか？ 足痛むか？」

私はお姉の言葉に相槌を打つのが精一杯だった。これまでの連戦で手の甲のたこは潰れ、体には相手から受けた拳のアザが出来ていた。特に酷かったのは右足で、すねは真っ赤になって腫れ上がり血が滲んでいた。

全ての試合で突破口として下段蹴りを使い過ぎた報いだった。歩くの立つのも辛い。痛くて膝も曲がらない。椅子に座る事すら出来な

い。私は床に足を伸ばして座り込んでいた。

「いいか那奈、あと一戦だ、相手だって無傷でここまで上がって来た訳じゃない、あとは我慢比べだ、精神の勝負だぜ！」

お姉の声は聴こえていたし、言っている内容の意味もわかっている。でも、弱音を吐かしてもらうともう体も心も限界に来ていた。意識も朦朧としている。

『おめーは強い』このお姉の励まし一つを支えに私は勝ち上がってきた。しかし、相手はみんな私よりも年上で、体がしっかり成長した選手ばかり。

まだ成長過程の私の幼い体は、これだけの連戦に耐えられるほど出来上がっていなかったのだろう。やはり、あまりに無謀な挑戦だったのかも……。

「……もう、ここまでなのかな……」

無意識の内に私はつい弱音を漏らしてしまった。その言葉を聞いた瞬間、さっきまで優しい笑顔で私を気遣ってくれていたお姉の顔がみるみるうちに鬼の形相に変わった。

バッチャー……ン！！

情けなくうつむいていた私の頬を、お姉は平手で思いっ切りブツ叩

いた。その張り手は威力は今まで闘ってきたどの選手の打撃よりも強く、意識が一瞬飛びそうになった。

「ピヨってんじゃねえぞ、てめー!!」

「……お、お姉……?」

お姉は胴着の胸ぐらを掴み立てなくなった私を力ずくで持ち上げると、そのまま側にある通路の壁に叩きつけた。今までもお姉には何度が怒られてきたが、こんなに怖いのは初めてだった。

「てめー、ここに何しに来たんだ! 自分の可能性を知りたくてここに来たんじゃねえのか!? 日頃の努力の成果をみんな見せに来たんじゃねえのか!？」

……わかつている、わかつているよお姉。でも、もう体が動かない。気持ちがあっても体がちつとも言う事を聞いてくれない……。

「てめー、これで満足なのか!? これが渡瀬那奈の全力か!? その程度の実力でな、あたしみたいに強くなりたいなんて気軽に言ってんじゃねえよ!!」

「……お姉……」

「あたしも虎太郎ちゃんも、麗奈ママも翔太もみんな苦しんで頂点

目指して勝ち残ってきたんだよ！ 自分でここまでだっと思ってたら  
そこで終わり、自分の心の中の弱い自分との勝負なんだよ！！」

「……………」

……………そうだった。私の相手は他の選手じゃない、自分の無力さと弱  
い心だ。自分に負けたくなくてここに来たんだ、お姉や翔太に負け  
たくなくてここに来たんだ！

「……………お姉、ありがとう、出来るだけやってみる……………」

「よし、それでいい！ それでこそ、この優歌様の妹だ！ 渡瀬虎  
太郎と麗奈という絶対にありえない夫婦から産まれた奇跡の娘だ！  
！」

「……………あの、そんな事、別にいいから……………」

私は痛む足を引きずりながら何とか歩き出し、決勝の相手が待つ試  
合の舞台へと向かった。

「いいか那奈、試合の勝ち負けなんて関係ねえ、自分に勝て！ 絶  
対に自分から試合を投げるなよ！！？」

決勝の相手は前回大会の王者だった。ガタイの良い成人の女性でか  
なりの実力者の様だ。ボロボロになりながら勝ち上がってきた私と

比べて、相手は序盤を一本勝ちなどで順調に勝ち上がり、かなり体力を温存しているみたいだ。

「お互い、礼！」

相手には私が足を痛めているのを知られているだろう。しかし、どんなに蹴られても殴られても、私は倒れる訳にはいかない。例え判定で負けたとしても、絶対に倒れない、自分に負けない！

「始め！」

観客席にいる小夜達は、全員椅子から立ち上がり通路の一番前まで移動してフェンスにかじりついて観戦していた。

「ねーねーねー、那奈大丈夫かな？ 何か足引きずってるよー！？」

「これはさすがにアカンなあ、もう満身創痍やないか……」

「やだ、何か惨すぎるわ、アタシ見てられない……」

普段見せない苦悶の表情をする私を見て、小夜、翼、千夏の三人はその痛みを感じ合う様に私の無事を祈ってくれていた。

「あつ、来た来た、翔太到着！　おゝい、こつちだこつち！」

「……………翔太、ここ、ここ」

そこにやつと翔太が会場に到着した。航は他の観客の後ろからでも見える様に薫を持ち上げて居場所を知らせてくれた。目印にするには十分な高さ、翔太はすぐにみんなを居場所を見つけて急いで駆け寄ってきた。

「遅いじゃない翔太、何やってたのよ！？　那奈は頑張って決勝まで勝ち上がってきてるのにこのバカ息子は！」

「着いて早速無茶言わないでくれよ母さん！　それでも親父さんからお金貰ってタクシーですっ飛んで来たんだよ！？」

「……………虎太郎がお金を？　あらやだ、珍しい……………」

いづみさんの説教を振り切り、翔太は小夜達が占拠している最前列に無理やり割り込んだ。

「小夜、どうなんだ？　那奈の状態は？」

「那奈、足引きずってるよー！　スゴい痛そうだよー！」

「……………足？」

翔太は会場で試合をしている私を見て、痛めている右足の異常を確認した。

「……マジかよ、ヤバいじゃんか……」

「翔ちゃんどうしよう！？ このままじゃ那奈が負けちゃうよー！？」

「……俺達が出来る事は応援してあげる事しかない！ みんな、ついてきてくれ！ もっと近くで那奈に声が届く様に応援するんだ！」

その頃、右足を中心に攻められまくっていた私は相手の攻撃を何とか歯を食いしばり耐えていたが、反撃出来る力は少しも残ってなかった。立っているのが精一杯だった。

足が動かない。蹴りはおろか、前に出る事も下がる事も出来ない。何とか拳を出しても、潰れたマメが痛くて思い切り突く事が出来ない。容赦なく叩き込まれてくる相手の打撃に私の心は折れかかっていた。

もう倒れたい、休みたい。ここまで頑張ったけど、もう手段が無い。もう無理、これ以上闘えない、ここが私の限界。みんな、応援に来てくれたのにごめんね。お姉、あんなに励ましてくれたのにごめんなさい。私はやっぱりお姉みたいな強い人間にはなれないんだ……。

「那奈ーーーーー！！！」

意識を失いかけていたその時、観客席から私の名前を叫ぶ大声が聴こえてきた。小さい頃から聞き慣れた、親しみのある暖かい声……。

「……………翔太……………？」

観客席を見渡す余裕は無かった。でも、私はその声が翔太のものだとはつきりと確信する事が出来た。切れかかっていた意識も戻り、少しずつ周りの声援が聴こえる様になった。

「那奈、諦めるんじゃないやねえぞ！ 気力だ、勝ちたいと思う気持ちが強い方が勝つんだぞ！」

後ろから聴こえるお姉の励ましの声に、私は再び歯を食いしばって相手に立ち向かった。しかし、さすがに相手は前大会の王者。試合後半になっても攻撃は止まる事は無く、私の体や痛めた足を狙って容赦なく拳や蹴りを入れてくる。

「……………ぐあ……………！！！」

全身に痛みが走る。意識も再び薄れてきた。でも、でも倒れる訳にはいかない。絶対にお姉と翔太の前で倒れる訳にはいかない！



「那奈、那奈！ 頑張れ、頑張れー！！」

翔太の声が聴こえてくる。声を枯らして、精一杯大声で応援してくれている。

「那奈！ 頑張ってー！ 那奈なら絶対勝てるよー！！」

これは小夜の声だ。そうだった、こんな弱い私でも信じて慕ってくれる人間がいたんだ。

「そうやで那奈！ 翔太が駆けつけたからには勇気百倍やる！？  
ここで一発、女の気合いを見せたれや！」

関西弁、翼かな。勇気百倍ってアンパ マンじゃないんだからさ、  
それに女の気合いって何よ？

「そうよ那奈！ ここで那奈と翔太君の愛の力をみんなに見せつけるチャンスよ！」

……千夏？ 愛の力？ あれ、また変な方向に話が傾き始めてきた。

「『パワー・オブ・ラブ』ですぞお嬢！ 愛は、愛こそが世界を救う

「……さあ、栗山兄妹も一言どうぞ!？」

「………相思相愛、恋愛成就、滋養強壮、安産祈願」

「やきにくていしょく」

「……ちよつとアンタ達、こんなにたくさんの観客がいる場所でまたそんな誤解される様な話を……。」

「ここで負けたらこの私が翔太の嫁として認めないからね! 鬼姑になって那奈、アンタをイジメまくってやるからね!」

「……いづみさんまで。何か観客席が変な空気でざわざわし始めてるじゃない!? この話、どう収集つけばいいのよ!？」

「優勝したら翔太から祝福のチューをしてもらえや! アツアツで羨ましいなあおめー達は!?! ウツヒヤツヒヤツヒヤツ!?!」

「……お姉も、みんなして寄ってたかって本当にいつもいつもいつも!」

「翔太の旦那、今、必死で闘っている愛しのマイダーリンに向かつて何か一言どうぞ!」

「……えっ？ あ、あの、頑張つて欲しいと思います……」

「否定しろ、バカー……！！」

ドカツ！！

「……あれっ？」

興奮した私は怒りに任せていつの間にか痛めていた右足で相手の頭部側面に上段廻し蹴りをカウンターで見事にクリーンヒットさせていた。意識のぶっ飛んだ相手の選手は一撃で膝からガクンと崩れ落ち倒れ込んで白目を剥いて失神していた。

「……一本！ そこまで！！」

ウオォー……！！！！

会場全体から物凄い歓声が上がった。観客は全員立ち上がって私に向かって拍手をしてくれていた。

「……えっ、私が勝つたの？」

意識を取り戻した相手を試合終了の礼を済ませた後、事態を把握出来ないまま舞台を降りるとお姉が嬉しそうに私に抱きついてきた。

「やったな那奈！ 見事な大逆転一本勝ちだぜ！ さすがおめーはこの優歌様のたった一人の妹だな！！」

「…………えっ、何？ 何この展開…………？」

ボツーとしている私と大興奮しているお姉を取材カメラがバシバシフラッシュを焚いて写真を取りまくっていた。

「おめー達、よく覚えとけよ！ この女の名前は渡瀬那奈！ この渡瀬優歌様の可愛い妹で、あの渡瀬虎太郎の愛娘だ！ この華麗なる一族の前にひれ伏しやがれコラア！！」

次の日、一面とはいかなかったが私の活躍は新聞のスポーツ記事に載った。しかし肝心の写真には私の姿はお姉に被って一つもまともに写っている物が無かった。

結局、この大会で私が得た物は『渡瀬優歌の妹』という悪名と翔太との変な誤解をさらに世間に広めてしまっただけだった。あーあ、私は一体何やってんだろう……。

### 第30話 ALIVE

夏休み前にビックリするニュースが入ってきた。私達を色々な場所に遊びに連れて行ってくれた翼の父親、新作さんが突然倒れて入院したというのだ。

「……本当にビックリしました、父さんに連絡したら『いよいよお迎えが来たか』なんて言い出すし……」

「いやいや、すまんなあ那奈、わざわざ見舞いまでさせてしもうてなあ、しかし虎太郎も随分と薄情やなあ」

一時期は危なかった様態も今は良好に向かって、病院のベッドに座ってニコニコしている。ベッドに乗っかってる岬と遊ぶ姿を見てとりあえずは一安心した。

「……ホンマにあの時どうなるかと思たで、ウチの目の前でいきなり胸押さえてバターンって倒れるんやもん！ こっちの心臓が止まると思たわ！」

「いやあ、あの時はそばに翼がおらんかったら今頃俺はお空の上やっただけかもしれなあ？ ホンマおおきにな翼、愛しとるで」

「またそんな言われたらウチたまらうん！ もう心臓ドキドキし

ておかしくなつてまうわあゝ！」

……真つ赤になつた顔を両手で押さえてもじもじしながら飛び跳ねるチビツ子娘。全く、どこまでファザコンなんだかねこの女は？

「でも、あまり大騒ぎになるとみんなにご迷惑になるかもしれないから、早い内に連絡出来て良かったわ」

翼に合わせてベッドで飛び跳ねる岬を抱きかかえて美香さんが当時を振り返った。今日は日曜日で学校は休みだったが、何の予定も無く家にいたのは私だけだった。翔太は父さんとバイクの大会を観戦、小夜と麻美子と航は瑠璃を連れてお出かけ、千夏はママとお買い物、美香さんの迅速な対応で随分早くに新作さんが無事だという連絡は伝わってきたので、下手に大人数でお見舞いに押しかけるのは自粛して、みんな自分達の予定を優先したらしい。

「それでええねん、俺一人の事でみんなにいちいち迷惑かけたないからなあ？」

病院に行く前、父さんは私に言っていた。新作さんはつまらない心配されても決して喜ばない、下手に気を使って見舞いになんて行くんじゃないと。

父さんの言い分はわかつてはいたけど、何しろ今日私には何の予定も無かったし、どっちがと言ったら新作さんよりも翼の方がパニックになっているんじゃないかと思って心配になった。

でも、この楽しそうにはしゃいでいる姿を見る限りその気遣いもどうやら取り越し苦労だったみたいだ。

「せっかくの日曜日なのにわざわざお見舞いありがとう那奈ちゃん、この前の空手大会の怪我は治った？ 足はもう大丈夫なの？」

「はい美香さん、もう大丈夫です、この程度の生傷なんていつもの稽古で慣れっここですから」

「おおそや、翼から聞いたで、大会優勝したらしいやないか！ ええなあ、やっぱリスポーツして汗かくつてのは最高やもんなあ！？俺も早よここから出てひと暴れしたいわ〜！」

「オトンはアカンで！ この前のサッカーみたいに大暴れしたらまた倒れるやる！？」

「パパ、アカンでー！」

「うははっ、翼と岬に怒られてもうた、俺、涙目」

新作さんは笑いながら翼と岬の頭を優しく撫でた。その姿を奥さんの美香さんが嬉しそうに眺めていた。誰がどう見ても最高の家族だろう。新作さんの心臓に住み着き体を蝕み続けるあの病気さえいなければ……。

特発性拡張型心筋症。心臓の運動に支障をきたす難病。新作さんは高校生の時にこの病気を告知され、ずっとこの悪魔と戦ってきた。夢だったサッカー選手の道を断ち、絶望の人生の中、病気の進行を

抑える薬を飲みながら取材の仕事につき海外の隅から隅まで飛び回った。

そこで、自分よりも苦しい病気や人生を送っている人達を見て、自分も病気に負ける訳にはいかないと励まされて生きてきたそうだ。その勇気と決意で医者に余命約十年と言われた死の宣告に見事に打ち勝ち、すでに今年でもう闘病二十七年目に入った。

もちろん、それまでにはたくさん命が危険な時もあったし、生きていくのが苦しいと思った時もあった。無理をして、何度も何度も間一髪のところを病院に担ぎ込まれた。

でも、懸命に支え続ける美香さんの愛情や、翼や岬の笑顔がその度に新作さんを奮い立たせ、生きる力を与えてきたのだ。

「……でも那奈、ホンマにありがとな、オトンの為に見舞いに来てくれて……」

「……何よいきなり気持ち悪い、翼からそういう事言われると背筋がむずがゆくなるんだけど……」

「何やねん！ 素直に感謝の意を伝えてんねんからオマエも素直に受け止めろや！」

恥ずかしがりながら慣れない感情の弁を述べて、ちよつとからかったら突然キレてこれだ。でも、翼にも少しは女の子らしい可愛いところがあるんだなあと再確認した。

「そつだそつだー、第一、手ぶらでお見舞いに来るなんて失礼千万、せめて完熟マンゴーやマスクメロンくらいの見舞い品を持ってくる



のがモアベターってもんだぜ」

「うるさい！ つーか何でここに薫がいるのよ！？」

ベッドの奥にある椅子に生意気に座り込んでる茶髪野郎、マンガーやメロンなんていい店で買った何万円すると思ってんのかこの男は？

「オマエかて手ぶらで来たやないかボケツ！ 那奈はともかく何でオマエがさっきからここに居座つとんねん、サツサと帰れや暇人！」

「シッ！ 病院内ではお静かにして下さい、お休みになっている患者さんもいらっしゃるですよ？」

「……ホンマウザいわコイツ、この前から完全にストーカーやで……」

私や小夜は小さい頃から松本家とは交流があるからお見舞いに来るのは違和感が無いが、何で薫がお見舞いに来てるんだろ。コイツ、本物のストーカーか？

「ねえ、何で薫が見舞いに来てんのよ？ アンタと新作さんはキャンプの時と正月のサッカーの時にあっただけで大した面識ないじゃない？」

「何を仰られるか、大切なベストフレンドの家族の一大事ですぜ？

しかも新作さんは俺の足の障害を理解して励ましてくれた恩人だ  
って事を忘れちゃ困るなあ？」

「病室でクルクル義足を回すなアホ！ 見舞いとか言うてどうせ目的は看護婦のおっぱいなんやろ！？」

「甘い！ 甘い甘い、ベリベリスイートだねツバピーは、ナース服はパツンパツンのスカートのお尻が一番冴える制服なのさ！ ヒツプイズデリシャース！」

「ツバピー言うな！ 結局スケベ目的やないか、この変態！」

……病院でデカイ声出して喋るなっつーのこのバカ二人が。こんな所で、しかも貴重な日曜日なのに学校でやっているいつもの夫婦漫才なんか見たくないっつーの。

しかし、この桐原薫という男は一体何なんだろう？ この前は翼の事が好きみたいな事を言っておいて、実際にはその翼にはこれっぽちも無い女性の胸やお尻をやりたい目線で追いかける。言葉と行動が全く一致しないので真意が全然読み取れない。

「……ねえ薫、アンタこの前は翼と付き合いたって言ってたよね？ そんなバカな事やってたら女子から嫌われる一方だよ？」

「アホか那奈！ オマエ、オトン達の前で何を言い出しとんねん！？」

……あつ、しまった。そういえば松本家の人達はそんな事実を知る

訳が無い。知っているのはあの時の帰り道に一緒にいたいつものメンバーだけだったっけ。

これは大失態。失言に怒った翼がさっきから私の頭や顔を叩いてきたり足を蹴ってきたりしている。結構マジで照れてるみたいだ。でもまあいいや、少しはいつもいじられる私の気持ちもわかったか。

「オトン、今の話は何でもないで！ コイツら頭の中、虫が湧いてるからアホな事ばかり言うて……」

「何かそうらしいなあ翼、お前もやつと男から好かれる女になれたんやなあ、これで俺は一安心やで」

「えっ、何で？ 何でオトンが知つとんの！？」

一番知られたくない人からの意外な言葉。いつもは冷やかす立場の翼が事態を理解出来ずにアタフタしている。いつもは私が被害者になっているからたまには気楽に傍観者になってこの話の結末を見届けてみよっかな。

「薫君、この前は家の留守番をしてくれてありがとうね、おかげで助かったわ」

「る、留守番！？ 何やねん、オカンどういう事！？」

「かおるタン、またみータンとあそぼうねー！」

「オマエ、岬にまで手え出したんかコラァ！ やっぱリウチの知ら

「間に勝手に家に入り込んでたんやな!？」

「OKだぜみータン! また薫お兄ちゃんと一緒テレビゲームやろ  
うぜー!」

「犯罪やあ! これ絶対犯罪やあ!! 誰か警察に通報して〜!？」

もはや家族に味方無し。松本城、完全に堀を埋め立てられて陥落寸前。逆上した翼は花瓶に差してある花を抜き取り、薫に向けてバシバシ投げ始めた。看護婦さんが掃除に手間取るから散らかすなっつーの。

「翼、俺が聞く限りこの男の想いは本物やで? 女は恋をして綺麗になんねん、美香ちゃんも俺にいっぱい愛されてこんなに綺麗なナイスバディになったんやでえ? ウヘヘ」

「やだあ、新作くんったら子供の前で恥ずかしいじゃない、もうう!」

……仲の良い夫婦だこと。さすがに四十代目前で次女を産んじやつただけの事はある。お互いに仕事が忙しくて会えない時期が長かった分を取り戻す様なアツアツぶりだ。

しかし、この家族といい家の家族といい、子供が聞いているのになめかしい話もお構い無しだ。これで私達中学生が間違った方向に進んで行ってしまったらちゃんと責任取ってくれるのかなあ?

「ええか翼、男の愛情とスケベ心は全くもって別物やねん、口ではスケベな事を言っても、心はちゃんと愛しい女に向いてんねんで？ 恋愛とは心と心でするもんやからな！」

「さすがはこの我が輩が尊敬するおっぱい国王様、名言でございます！ 我が輩、また一つ男として賢くなりました！」

「……もうええわ、一体薫はウチの何が気に入ったんやろ？ 愛情とか全然感じへん……」

大好きなオトンにも愛する家族にも見放され、薫からは相変わらず真意が伝わってこない可哀想な翼。

何かちよつと同情してきた。やつぱり男子には好きなら好きでもう少し態度に出してもらいたいもんだよね、ちよつとふざけすぎだよ……。

「……那奈、ちよつと売店まで付き合つてや、気分転換したい……」

「……はいはい、しょうがないね、全く……」

「それではこの私めもご同行致しましょう姫様！ 喜んであなた様を守る騎士になりましょうぞ！」

「頼むからオマエは帰ってくれや！ 絶対にウチは薫を男として認めへん！」

「オーマイガー」

病室を出て売店に向かう通路を歩く翼の姿はいつもにも増して小さくなっていった。全く、エライ男に目をつけられたもんだ。しかし、本当に薫は翼のどこがそんなに気に入ったのかなあ、いまいち良くわからない。

「お互いに必要以上にお喋りだからフィーリングが合ったのかな？  
薫なら背も高くないし背格好も合うじゃない、もういつそ付き合  
っちゃいなよ？」

「アホかボケツ！ あんな得体の知らない男と付き合えるかいな！  
ウチの将来真っ暗やわ！」

「でも、ある意味薫は千夏よりも翼を選んだんだから名誉な事じゃない？ 実際アンタ達いつも喋って仲良いんだからもうはつきりし  
ちやいなよ？」

「那奈に言われたくないわなあ、調子こいてると明日は我が身やで  
く？」

「……何よそれ、どういう意味……？」

私達が売店で買い物をしていたその頃、新作さんの病室には意外な訪問者がやって来ていた。ダンダンダーン！！ と非常に迷惑なノックをして。

「……あのどちら様ですか？ 扉、開いてますけど……」

「……おお！　そういえば全開に開いてたなあ、ミカミカに言われるまで気づかなかったぜ！」

「あー！　こたろうおじタンだー！」

人に見舞いに行くなと言っておいて結局やってきた迷惑オヤジ。突然のハイテンションな来客にナースステーションがザワザワとざわつき始めた。

「またやかましいのが来ったなあ、これじゃまた看護婦さんに怒られてしまうわ」

「てめえで呼び出しておいて何だその言いぐさは、ナメた事言つてるとこの虎太郎様直々に拳で心臓マッサージすんぞコラ」

「俺は看護婦さんのおっぱいマッサージの方がええなあ、このゴッドフィンガーで心臓バクバクさせたるのになあ」

渡瀬虎太郎と松本新作、学生時代からの大問題児コンビだ。非道なイタズラと理不尽なセクハラでこれまで泣かしてきた女は数知れず。正に女の大敵だ。

「看護婦ごときにうつつ抜かしてんじゃねえよ、てめえはよ？　こんなにボインボインのおっぱいちゃんな力ミさんが居てまだ物足りねえって言うのかよ？」

「いやいや充分、充分過ぎるで！　せやから俺も張り切っちゃってこの歳で岬までこしらえてしもうたしなあ」

「ちょ、ちよつと新作くん！？　みんな聞いてるのに、もう……」

美香さんは焦って岬の耳を塞いだ。ちなみに私達は小さい頃からいつもこんな会話の中を生きて成長してきた。全く教育上相応しくない父親達だ。

「そうかそうか、そりや仕方がねえなあ！　この女好きが子供二人で済んでるのが不思議なくらいだぜ、ミカミカ、まだまだ休んでらんねえなあ？　ウツヒヤツヒヤツ！」

「よし、こうなったら高齢出産の世界記録に挑戦や！　どや岬、岬もお姉ちゃんになりたいか？　弟と妹、どっちがええ？　それともどっちも欲しいか？」

「もうーう！　新作くんも虎太郎さんも完全にセクハラ！　私も売店に行つてきます！」

岬を抱いて真っ赤な顔をして病室から逃げた美香さんを見て父さんと新作さんは大声でゲラゲラと笑った。さぞかし隣の病室の患者さんには迷惑だったろう。

「……さてと、予定通り誰もいなくなつたとこだし、本題に入つて



もらうか新作？」

「……ああ、虎太郎、ここにおけるこの坊やがこの前話した例の少年や……」

病室内の空気が一気に変わって深刻な雰囲気が始めた。病室にはまだ薫が椅子に座ったまま残っている。新作さんに紹介された薫の姿を見て、父さんは顎の無精髭をさすって物珍しそうに眺めていた。

「……あの、新作さん……」

「……心配すな、この前話した協力者や、俺が世界で一番信頼してる男やで」

初めて会う近づきがたく態度の悪い男性に薫は椅子から立ち上がり少し怯えながらも挨拶をして握手を求めた。

「……初めてまして、桐原薫です……」

しかし父さんはその手を無視して威圧的な目線で薫を見つめ、吐き捨てる様にボソツと言いつつ放った。

「……これが例の『運命の子』ねえ？ 見た目からしてもっと神々しいのかと思ったら、どこにでもいる様なくそガキじゃねえかよ、

『シオン』ちゃん、だっけか坊や？」

「……………!!」

その頃、私と翼は買い物を終えて病室に戻る途中だった。通路を歩いていると反対側から美香さんが岬を抱いてこちらに向かって来ているのが見えた。

「あれ、オカンも買い物？ 何や、欲しいもん言ってくれたらまとめて買ってきたのに」

「ごめんね翼、岬がジュース飲みたいって言い出したからママも売店に行こうと思ってね……………」

妹のワガママに困った様に頭を抱え、小さいお姉さんは一丁前に説教をし始めた。しかし何か威厳が無いなあ。

「岬、オマエジュース何杯目やねん!? そないに冷たいもん飲んだらまた寝小便するで!」

「えー! みータンジュースのみたいなんて言ってないもん!」

「こら岬! ジュース飲みたいって言ったでしょ!? 言ったよね!」

美香さんの態度がおかしい。何か岬に無理やり嘘をつかせようとしている様に見えた。通路の真ん中に立って、まるで私達を病室に戻さない様に道を塞いでいるような……。

「いまねー、こたろうおじタンがきてパパとかおるタンとおしゃべりしてるよー！」

「お願い岬！ もうこれ以上喋ったらママ怒るわよ！？」

美香さんは焦って岬の口を塞いだが、私達には全て言葉が聞こえてしまった。

「えっ、父さんが？ 父さんが来てるの？」

「それよりまだ薫のヤツは病室を占拠しとんのかいな！？ アツタマきた、ウチが無理やり追い出したる！」

ついに怒りが頂点に達した翼は美香さんを振り切って病室へと歩き始めた。何か異様な空気と父さんの登場で不安になった私も急いで翼の後を追った。

「翼お願い、待って！ 今、新作さんと虎太郎さんは大事なお話をしているのよ！ これは薫君にとっても大切な事で……！」

「何が大事な話やねん、どうせこの三人が話す事なんてスケベな話

に決まっとなるやんか！？ ガキの頃から何遍も聞かされてもうウンザリやつちゅーねん！」

病室の扉の前で必死に美香さんが岬を抱いたまま翼を後ろから捕まえている。おかしい、何かおかしい。この扉の奥で父さんと新作さんとの間で何が話されてるのだろうか。そして、薫と一体どんな関係が……。

「ナメた事言つてんじゃねえぞ、このくそガキ！」

突然、病室の中から聴こえてきた怒鳴り声。父さんの声？ その怒号に病室に入ろうとしていた翼もおとなしくなり、私と一緒に静かに部屋の中から聴こえてくる声に耳を澄ませた。

「迷惑かけたくない、他人を巻き込みたくないだあ？ ふざけんじやねえよ、てめえ！」

……父さんだ。やっぱり父さんの声だ。一体誰に怒鳴ってるの？ くそガキって、まさか薫の事？

「しつかり新作に全部話してきつちり巻き込んでしまってるじゃねえか！？ 嫁の美香まで巻き込んで、一家族丸々巻き込んでんじやねえか！？ それを今更、綺麗事抜かして善人ぶってんじゃねえぞコラア！」

「……それは、新作さんが全て話して欲しいって……」

「虎太郎、俺が嫌がる薫から無理やり聞き出した事なんだ、薫に罪は無い」

「……綺麗事？ 無理やり聞き出した話？ 何の話だか全然わからない。扉に耳を当てながら、私と翼は顔を見合わせて不可解な顔をした。」

「……あのなボウズ、俺はおめえが新作に事実を話した事を怒ってるんじゃない、おめえ自身がこの現実には立ち向かう度胸がねえ事に頭きてんだよ」

「……度胸……？」

「人間つてもんはな、どう頑張つても一人だけじゃ生きていけねえ生き物なんだよ、生まれてすぐに歩ける訳じゃねえし、いきなり肉や野菜をバリバリ食える訳じゃねえ、そんな事当たり前だ」

聞き耳を立てる私達の後ろから鼻をすする音が聴こえてきた。美香さんだ。泣いてるのかな、私達に背中を向けていて良くわからない。翼はそれに気づいていないみたいで夢中で部屋の中の会話を聴いていた。

「自分一人で解決出来ねえなら助けてもらえばいい、巻き込んだっ

ていいんだよ、ところがおめえは人に助けて貰うだけ貰っておいて、自分自身の運命から目を反らしているだけじゃねえか、逃げてるだけじゃねえか!？」

「……だつて、そんな事を言われても……」

「その分際で他人を巻き込みたくないなんてしゃらくせえ事を抜かすんじゃないよ!？」 新作が命がけでおめえの為に立ち向かってんだ、おめえも本腰入れて立ち向かえやコラア!!」

……薫の問題、一体どんなものなのだろうか。言われてみれば薫の周辺は色々と謎な事が多い。両親の死、他国にいる祖父、後見人のコリア、自宅の喫茶店の妙な飾り物、右足を失った爆発事故……。

「……虎太郎、もうそれくらいにしてやれや、コイツかて苦しんどんねや……」

説教の様にきつく当たる父さんとは対照的に新作さんの落ち着いた話し声が聴こえてきた。大好きな父親の声に翼は顔を上げてその声を聴いていた。

「……この子が背負つとる荷物は俺らの想像を遥かに超えたものなんや、しかも薫はまだ中学生、子供やで? 覚悟決める言つたつて出来る訳ないやろ?」

「……相変わらず甘いなあ、てめえはよ……」

誰かが椅子に座る音が聴こえる、父さんだろうか。部屋の中が静かになって、美香さん以外の人間が鼻をすする音が聴こえてきた。薫、もしかして泣いてる？

「薫、もう泣くな、お前は何にも間違つてへん」

ティッシュで鼻を咬む音。やっぱり薫は泣いていた。いつも場違いなハイテンションでふざけているあの姿から全く想像が出来ない話だ。

「……ええか薫、お前さんの荷物を代わりに持つてやる事は誰も出来へん、俺かて、ここに居る虎太郎かて無理や、でもな、それを一緒に持ち上げて手伝つてやる事は出来るんや」

「……でも……」

「でももへちまもあらへん、これからお前の前には色んな人間が現れる、その中から自分を助けてくれる人を見極めて一緒に歩いていく、これはお前だけやのうて俺達、この世界に生きる人間全て一緒にやねん」

「……一緒……？」

「さっき虎太郎が言つた通り、人は一人では生きていけへん、だから、人は仲間を作る、友達を作る、人生を共に歩く恋人を見つける

んや、だからみんな一緒や、お前は一人やない」

まるで生き字引の様な胸を突く新作さんの言葉。キャンプ場で私達の前で話したくれた様な心を洗われる人間の真実。外にいる私達もその話に吸い込まれていた。

「……でも俺、あれからずっと後悔してて、自分のせいで一緒にいてくれる仲間を危険な目に合わせてしまうんじゃないかって……」

「……お前が怖がっているのは大切な友達を巻き込んでしまう事なんやろ？ 大丈夫や、翼達は俺達が絶対に守ったから安心せい、お前がしつかりと世界を見極め、正しい道を歩んでいけば全て憎しみも苦しみも終わらせる事が出来るんやからな？」

……この世界の憎しみや苦しみ、何だろう、やっぱり話が全くわからない。ただ、この話は只事ではない事だけは理解出来た。薫には何か私達に話せない大きな秘密があるって事だけ……。

「しかし残念やな、どうやら俺はその世界をこの目で見る事は出来そうに無いみたいやなあ……」

「……えっ？」

翼が私の横で驚きの声を上げた。美香さんは岬を抱きしめて声を殺して泣いている。その後聴こえてきた新作さんの言葉、それを聴



いた私は自分の耳を疑った。

「薫、俺は出来るだけお前と一緒にいてお前の力になってやりたかったんやけど、どうやらここまでみたいやな」

「……新作さん、一体何の話ですか……？」

一瞬の間。そして、誰もが覚悟してはいても出来れば聞きたくなかったこの一言。

「……次、心臓発作が起こったら間違いなく俺は死ぬ」

新作さんの突然の言葉に翼は売店で買ってきたレジ袋を下に落とし、まるで自分が死ぬと言われたみたいに茫然として、顔色は真っ青になっていた。

「……そんな、そんな新作さん！ そんな事……！」

「……ええねん、こういうもんは自分でわかるんや、もう心臓が休みたいって言うてんのが聞こえてくるんや……」

今の医療技術なら新作さんの心臓は難しい手術ながらも助かる見込みはあるって聞いた。でも新作さんはそれを断り続けてきた。機械だらけのロボットみたいな生き方はしたくないって、それが運命だ

って……。

「……俺はもうじき死ぬやろうけど、薫、お前にはこれからや、一人で行かせる訳にはイカン、せやからお前の事をここにおる虎太郎に託したんや」

「……そういう事だボウズ、かつたるいがてめえの面倒は俺が見るやる、俺様には爆弾も銃も屁でもねえからなあ」

「体力的にも人脈的にも俺より頼りになる男やから安心せい、口は悪いがな」

「その分顔が良くて色男だろ？　だろ、だろ？　そうだって言えよコラこのくそガキ」

「なっ、タイプは全く一緒や、コイツも充分スケベやから話も合うで？　女を見る目は俺の方が上やけどな？」

こんな話の最中に冗談が言い合えるなんて、何てバカでスケベで遅い父親達なんだろう。本当にこの人達は強い絆で結ばれているんだなあ。

「……でもやつぱり俺、凄く怖いんです、俺が巻き込んだ人達もしかしたら不幸になってしまっくんじゃないかって……」

「幸か不幸か、それはお前がこれから先をどう生きていくか次第や、仲間と手を取り合って、しっかりと世界を見極めて、正しい道を選

んでいけば必ずホンマの答えに辿り着く、自分を、みんなを信じる  
んやで薫！」

「……新作、さん……」

「お前が正しい道を歩んでくれる事が俺の夢でもあるんや、頼んだ  
で、薫……」

結局、何の話だかわからなかったけど、新作さんが物凄い決意で私  
達に未来を託してくれているのがわかった。美香さんは泣き顔を隠  
しきれなくなって号泣し、私も釣られて少し涙ぐんでしまった。翼  
はただ黙って、新作さんの言葉を噛みしめる様に聴いていた。

「……じゃあ、俺は帰るぜ新作、邪魔したな」

「……おう、悪かったなあ虎太郎、わざわざこんな所まで呼び出し  
てな」

「……茶坊主、これから宜しくな、俺は新作ほど甘くねえからきつ  
ちり腹据えて覚悟しろよ？」

「……はい、宜しくお願いします！」

「……翔太よりいい返事だな、気に入ったぜ」

どうやら父さんが外に出てくるみたいだ。私がアタフタ慌てている  
と、美香さんが私と翼の手を引いて通路の横にある階段まで連れて

行った。

「……翼、那奈ちゃん、今日のこの話は聴かなかった事にしてお願ひ……」

涙ながらに懇願する美香さんを見て、とても私は断る事は出来なかった。それは翼も一緒だったみたいだ。

「……ウチは黙ってる、那奈、ウチからも頼むわ……」

「うん、わかったよ、誰にも言わないから……」

父さんが去った後、私達は何もなかった様に笑顔ではしゃいで買ってきた飲み物を渡した。

「……ホレ薫、これ……」

「……えっ、俺に？」

翼はビニール袋からレモンの炭酸ジュースを取り出すと照れながらそつぽを向いて薫に手渡した。余程意外だったのか、まだ目が赤い薫はマジマジとそのジュースを眺めていたが、突然何か吹っ切れた様にいつものハイテンションに切り替わった。

「おっー！ このプレゼントはつまり俺のアイラブユーに対するフ  
ィナルアンサーとして受けとっちゃっていいんですかあ！？ や  
ったぜベイビー！」

「違うわケツ！ とりあえず人数分の飲み物買ってきただけや！  
どんな勘違いをしとんねん！」

「ファーストキスはレモン味なんだよね、これが翼の唇の味なんだ  
ねー！？ うーん、甘酸っぱー！」

「変な言い方すんなこのスケベ！ レモン味とか例えが古過ぎんね  
んオマエは！」

「オーウ、ベリベリスウィートアンドデリシヤス！ 翼ちゃんチュ  
ッチュッチュッ！！」

「こっち見ながらペットボトルをしゃぶるなこの変態！ 頼むから  
サッサと帰れやアホー！！！」

翼は生け直した花瓶の花を再び抜き取り薫にバシバシ投げつけた。  
新作さんはその二人の姿を見てとても嬉しそうに笑っていたが、私  
には少し寂しそうに、そして名残惜しそうに見えた。

帰り道、一人になった私は父さんが帰り際に新作さんに言った言葉  
を思い出していた。それはとても力強く、そして切ない約束。

「……新作、また来るぞ、必ずな……」

「……ああ、待つとるで、必ずな……」

街路樹で蝉が鳴いている。また今年も夏休みがやってくる。楽しい夏休みになるといいな。

### 第31話 風 〈The wind knows how I feel〉

「はい、各自解散！」

「お疲れさんでしたー！」

夏休み中盤、俺はバイクの夏合宿で国際レースも開催される程日本有数の大きなサーキット場に来ていた。休む時間も惜しんで三日三晩ひたすら走り込んで、ついに最終日も日が暮れ始めて合宿終了の時間がやって来た。

「翔太、思う存分走ったか？ まだ走り足らねえんならお前一人でもう一泊してきていいんだぜ？」

「……勘弁して下さいよ親父さん、もう体もケツもあちこち痛くて限界ですって……」

那奈達が夏休みを遊んで満喫している時に、俺はこの夏合宿に自分から志願して参加した。親父さんからこのサーキット場で合宿をすると聞いて、いてもたってもいられなかったんだ。

俺はこのサーキット場にとっても大切な思い出がある。俺がバイクレーサーになると決意した思い出の場所。でも、残念ながらそれは楽しい思い出ではない。

今から十二年前、あの日もこんな晴天だった。ロードレース世界選手権開幕戦、それは日本のこのサーキット場で行われた。

「……翔太！ ちょっと、どこ行っちゃったのよ翔太！」

「いつもわたしといづみさんにめいわくばっかりかけて！ まったくもう！」

四月のぽかぽか陽気の中、俺は母さんや那奈の制止を振り切り観客席の柵を抜け、警備員に見つからない様にライダーやクルーが待機するピットルームに潜り込んだ。

その目的はもちろん、今シーズン優勝最有力候補と噂されている俺の父親、風間貴之に会いたかったからだ。

「しかしお前も随分暇そうだな虎太郎、相変わらず家でお気楽専業主夫やってるのか？」

「バカ言ってんじゃねえよ橋本ちゃん、お気楽なんてレベルじゃねえよ、優歌や那奈が汚した部屋とか掃除しなきゃいけないし、家族全員のパンツ洗わなきゃいけないし、もう最悪だぜ？」

「世界最凶の暴君と言われた男が今やパンツ洗いかよ、亭主関白とどこへやら、世の中も色々と変わっていくもんだな……」

「家族には俺が病人だって事を忘れられてるみてえだな、橋本ちゃんも少しは家事やって汗かけよ、そんな腹してたら将来糖尿病になっちゃうぜ？」



ピット裏に忍び込んで覗いてみると、親父さんが仲良くクルーの人達の喋っていた。以前にチームのライダーをやっていた人は辞めた後も自由にピットに出入り出来たりするのかなあ？ 羨ましいなあ……。

「……何やってんの、アンタここで……？」

「……えっ？」

いとも簡単に見つかってしまった。上手く隠れていたつもりだったのに。俺は服の襟首を掴まれてピットルームの中へと連れていかれた。

「おやチーフ、そのガキは何だい？　もしかして二人目の子供でも産んだのかい？」

「……橋本、殺されたいの？　私の子じゃないわよ、貴之といづみのところのガキよ」

「おいおい、こりゃ翔太じゃねえか、何でてめえがここにいるんだよコラ」

俺を捕まえたのは当時このチームの代表兼監督を勤めていた麗奈さんだった。麗奈さんは俺を親父さん達の前にストンと落とすと、パ

ンパンと両手を叩いた。

「……おじさん、おばさん、ごめんなさい、どうしてもおとうさんにあいたくて……」

俺の言い分を聞いた麗奈さんは呆れた様に溜め息をついた。俺は子供心ながら当時から麗奈さんの事を『怖い人』と認識していた。

「こんな子供が簡単に入り込んで来れるって、このサーキット場の警備はどうなっているのよ!? こんな場所で開幕戦やらせるなんて世界の笑い者になるわよ!」

「翔太、てめえ一人かよ? 那奈といづみは一緒じゃなかったのかコラ」

「……うん、ぼくひとりだけです……」

親父さんと麗奈さんに挟まれて、俺は怖くなって座り込んで小さく丸くなった。やっぱり怒られるのかなあ?

「翔太! おいおい、一体どこから入って来たんだお前!？」

「あつ、おとうさん! おとうさーん!」

フリー走行から帰ってきたバイクスーツ姿の父さんがヘルメットを脱いで俺に歩み寄ってきた。俺は親父さんや麗奈さん達から逃げ出す様に父さんに駆け寄り、助けを求めて足元にしがみついた。

「ダメだぞ翔太、ここは入ってきちゃいけない場所だし、バイクが走り回って危ないんだぞ？」

「……だって、おとうさんにあいたかったんだもん……」

最初は怒っていた父さんも、必死に抱きついてくる俺の姿を見てニコツと笑い、俺の小さい体を肩に担ぎ上げてくれた。

「ちょっと困るわよ貴之、子供だろうと何だろうとここは完全に部外者立ち入り禁止なんだから、下手にオフィシャルに見つかったらペナルティ喰らうわよ！？　すぐに観客席に戻しなさい！」

「そんな怒んないでくれよチーフ、翔太だって困らせようとして入ってきた訳じゃないし、こんなに小さいチームスパイがいる訳が無いだろ？」

「そういう問題じゃないの、これはケジメ！　各関係者それぞれのケジメの問題なのよ！　だからアンタはいつまでたってもレーサーとして甘いつて言われるのよ！」

麗奈は厳しい剣幕で俺と父さんを叱りつけた。俺が麗奈さんに話しかけられると今でも恐縮してしまうのは、こんな幼児体験があった

せいでもある。

「いいじゃねえかよ、たかがガキの一人や二人、別にバイクがぶつ壊れる訳じゃねえんだからよ、なあ貴之？」

「何十台もマシンを壊しまくってきた貴様が言うな！　そもそも、このチームの統括が乱れ始めた諸悪の根源は全て貴様がここに入ってきてから……！」

「おいおい、ここは軍隊か？　自衛隊か？　何でもかんでも規則規則って縛りつけやがって、ヒドい独裁主義だなオイ？　ここは自由の国、黄金の国ジパングだぜ？　独裁やりたきゃ隣の国でも行つてこいや、このヒス女」

「……拾ってやった恩も忘れて、挙げ句に養われてる分際で何て無礼な発言が出来るのか、この野良犬めが！　謝罪しろ、腹を切れ、今すぐ私の前に跪け！！」

親父さんが会話に仲介してきた事で、いつの間にか麗奈さんの怒りの矛先は俺達親子から外れて親父さんへと向いた。それを見て父さんは今がチャンスとばかりに俺を担いだまま、各チーム管制室のあるピットコースの前の中庭に逃げに行った。

「コラ貴之！　何を勝手な事してんのよ！　すぐに翔太を戻しなさい！　ちよつと聞いているの貴之！？」

麗奈さんの注意を無視して、父さんは無線機やコンピューターが並んでいる管制室の椅子に俺を座らせてくれた。まだ子供だった俺は見慣れない機材に興味津々で色んなスイッチやモニターに触りまくった。

「ほら翔太、頭にこのヘッドホン付けてみる」

「えーと、これでいい？」

「あーあー、こちらお父さんこちらお父さん、翔太聞こえますか？」

「あー、きこえた！ きこえたきこえたよ！」

「ウソだよ翔太！ 電源なんて入ってないよ！ お父さんの声が普通に翔太に聞こえているだけだよ！」

「あー、だましたー！ ずるいよおとうさん！」

「あはは、翔太、ごめんごめん」

親父さんの現役引退、昨年王者でライバルの三島勇次朗さんのチームの準備不足、そして史上最強と発表されたニユーマシンの完成と初の年間チャンピオンの可能性が一気に高まった大事なシーズンの開幕戦直前だというのに、父さんは俺を担いでレース場の色々な場所に連れて行ってくれた。

見通しのいい場所から見えるコーナーを爆音を立てて走っていくマシン、慌ただしくピット内を走り回るピットクルー、タイヤ交換やエンジン修理の細かい作業……。

どれも俺からしたら全て初めて見る物ばかりで、まるで夢の様な一時だった。今でも目を瞑ればその光景が浮かんでくる。

そして、あちこちと連れていってくれた最後に、父さんは俺に自分が今シーズンに乗る新しいバイクを見せてくれた。

「わー、すごい！　かつこいいー！」

「どうだ翔太、格好いいだろう？　これが今年お父さんが乗るバイクだぞ、那奈のお母さんが一生懸命作ってくれた出来たばかりの新しいバイクなんだぞ！」

「おとうさん、このバイクならことはかてるの？　チャンピオンになれるの？」

「ああ、なれる、なつてみせるとも！　那奈のお父さんでも出来なかった最高のクラスのチャンピオンになつてみせるぞ！」

「じゃあ、ぼくもおおきくなったらバイクにのる！　ぼくもおとうさんみたいなライダーになるんだ！」

「……そうか、そうだな、翔太、お前なら絶対になれる、その為にもまずはお父さんがチャンピオンにならなくちゃならないな」

「じゃあ、やくそく！　ゆびきりげんまん！」

「よし、約束だ！　男と男の約束だぞ！　破ったら針千本飲ますぞ！」

俺と父さんが指切りをしていると、不満そうに腕を組んでふてくされた麗奈さんが近づいてきた。麗奈さんの姿に怖くなった俺は父さんの肩に顔をくっつけてとりあえず隠れたつもりになった。

「……貴之、頼むからもういい加減にしてよ、これじゃ他のクルー達の示しにならないし、虎太郎が引退してこのチームにもやっと平和が訪れたんだから……」

「……そうだな、悪い、今すぐいづみに連絡して翔太を迎えに来て貰うから」

「アンタまで虎太郎化されたら私の身が持たないって、やっと二年かけてワークスチームとしてまとまり始めてきたんだから、これ以上かき乱さないでよ……」

「……苦勞が絶えないな、麗奈……」

「名前で呼ぶな！『チーフ』と呼びなさい！」

「……了解、チーフさん……」

父さんは広報を通して母さん呼び、俺を担いだまま迎えが来るのを待った。その間、父さんは横にいる親父さんと談笑していた。

「しかし興味心豊富なガキだなあ貴之、この歳で勝手にピットル―ムに忍び込むなんてこの俺様でもやった事ねえぜ？」

「俺に似たのかな？ 俺も何かに夢中になると周りが見えなくなつて見境が無くなつちゃうからなあ……」

「女に対してもそうだなあ、このガキも大きくなつたらてめえみたいな相当なむつつりスケベになつちまうんだろうなあ、オイ？」

「そりゃねーよ虎太郎！ 俺はお前が思つてる程スケベな男じゃねーよ！」

「ほお？ じゃあキヤスターに寝っ転がってバイクいじつてる振りにして千春とミカミカのパンツ覗いたのはどいつだっけなあ？ 間違つた振りして麗奈といづみが着替えてる更衣室に入り込んだのはどいつだっけなあ？ 真中家でいづみと勘違いして姉ちゃんの乳揉んだのはどこのどいつだっけなあ？ 全く、お前の家系は忍び込ませたら天下一だなあ、忍者の末裔かオイ！？」

「覗いてねーし、わざとじゃねーよ！ 本当に間違えたんだよ！ 揉んでもねーって！ もうその話は勘弁してくれよ、翔太に対して威厳が無くなるよ……」

その時、コース内を一台のバイクが爆音を立てて走って行った。父さんと親父さんは話を止めて、その音を楽しむ様にコースを眺めて耳を澄ませていた。

「……本当はまだ走り足りなかったんじゃないのか、虎太郎……？」

「……仕方がねえさ、まだ死ぬ訳にはいかねえからな、娘も作つち



まっ た事だし」

「……那奈の事が、おっ、そうだ翔太、お前良く那奈とママゴトとかしてるらしいけど、大きくなったら那奈と結婚するっていうのはどうだ？」

「えー、よくわかんない」

「そんなマネしてみろよ？ てめえが那奈に相応しい男になれるまで、この虎太郎様がビッシビシ鍛えてやるからな！？」

「わーん！ こわいよー、おとうさーん！」

「おいおい、怖がつてちゃダメだぞ？ そんな事じゃ立派なチャンピオンライダーになれないぞ、翔太！」

怖がつて再び顔を隠す俺を見て、父さんと親父さんは楽しそうに笑っていた。

「……しかし、本当に翔太と那奈が一緒になってくれたら俺は嬉しいな、最高の親友の娘と自分の息子が結婚するなんて、ちよつとした夢だよ……」

「……何が『夢』だよ、くっだらねえな、そんな事言ってねえで今年こそ一番の長年の夢を叶えてくれよ、晩年ベテランチャンピオン最有力候補さんよ！」

「ああ、今年こそ必ず栄冠を掴んでみせる！ お前や勇次朗みたい

に俺の名前をモータースポーツ史に残してみせる！ 最後のチャンスをものにしてみせるさ！」

「ついでにあの口うるせえ独裁ヒス女も黙らしちまえ！ うるせえのはベッドの上だけで充分だってな！？ ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ！」

周りに聴こえる様な大きな声で喋った親父さんはピットルームに向かってお尻を叩いて逃げていった。その後、そのピットルームから誰かが親父さんに向かってスパナやレンチやホイールやバイクから外したエンジンを投げつけていたのを覚えている。

「……しかし無茶苦茶な夫婦だな、いいか翔太、本当に那奈を嫁に貰うんだったらちゃんと覚悟をしておけよ……」

「……？」

しばらくすると、観客席の通路から母さんがやって来た。母さんの表情は明らかに怒っていて、俺は叱られる覚悟をした。

「……翔太！ アンタ勝手にどこに行ってたのよ！ 私がどれだけ心配してアンタを探してたのかわかってんの！？」

「……ごめんなさい、おかあさん……」

「ごめんなさいで済むなら警察いらないの！ いつもアンタはそう

やって迷惑かけて……！」

怒りが収まらない母さんを、父さんは俺を守る様に笑顔で母さんをなだめてくれた。

「いづみ、許してやってくれよ、翔太も困らせようとしてやった訳じゃないんだ、ただ、俺に会いたかっただけなんだからさ……」

「貴之がいつもそんな風に翔太をかばって、優しすぎるから言う事を聞かなくなるのよ！ これじゃ私が一生懸命しつめたって何の意味も無いじゃない!?」

「そうだな、確かにいづみの言う通りだな、ハハハ……」

「……父親なんだからもうちょっとしつかりしてよ、ハア……」

父さんは呆れている母さんに俺を渡して、大きな手で頭を優しく撫でてくれた。

「じゃあな翔太、ちゃんとおとなしく観客席で見てるんだぞ？」

「うん！ おとうさん、ゆうしょうしてね！ やくそくだよー！」

俺と父さんはもう一度指切りをした。その時の父さんの顔はとても優しい笑顔だった。

「じゃあ、頑張つてよ貴之！　ちゃんと見守っているからね！」

「ああ、行ってくるよ！　必ず優勝してみせるからね！」

笑顔で決意表明をした父さんは俺達に背中を向けてピットへと歩いて行った。俺と母さんはいつものレース前の様にその姿が見えなくなるまで見送っていた。

すると、父さんはなぜか途中で立ち止まった。立ち止まったまましばらくの間全く動かない。その姿を見て俺と母さんは首を傾げていると、突然父さんはこちらに振り向いて走ってきた。

「……………翔太！」

「……………えっ！？」

父さんは母さんから俺を取り上げると、力強く俺を抱き締めた。突然の行動に俺は驚いて何か何なのかわからなかった。後ろにいた母さんも驚いた表情をしていた。

「……………どうしたの、おとうさん……………？」

「……………翔太、立派な強い男になれ、俺よりも、虎太郎よりも、強い男になるんだぞ……………」

あまりにも強い力で抱き締められたので、俺は一瞬息が出来なくなった。子供だった俺はこの時父さんが言っていた言葉の意味が良くわかっていなかった。

「……お、おとうさん、いたいよ……」

「……あつ、ごめん、ごめんな……」

父さんは俺を持ち上げて母さんに手渡すと、今度は俺と母さんをまとめてギュッと抱き締めた。

「……いづみ、翔太を頼む……」

「……わ、わかってるわよそんなの、どうしたの貴之？ 何かあったの？」

「……いや、何でもない、何でもないんだ……」

さっきまで怒って笑って元気だった母さんが泣き出しそうな表情をしていた。この時の言葉にならない不安な感情は今の俺の記憶に残っている。

「……貴之、待ってるからね、ちゃんと私と翔太の元に帰ってきてね！？」

「……………」

「……おとうさん、どこにもいかないよね？　またあとであえるよね？」

父さんはしばらく目を瞑って黙り込んだ後、いつもの優しい笑顔を俺達に見せてくれた。

「……ああ、もちろんだとも！　いづみ、必ず戻ってくるよ！　翔太、後でまた会おうな！　それじゃあ風間貴之、行ってきます！」

「……うん！　行ってらっしゃい、貴之！」

「おとうさん、いつてらっしゃーい、がんばってー！」

すでにピットに向かって歩き出していた父さんは、俺の声に振り向く事なく左手をゆっくりと水平に上げて親指を立てて返事をしてくれた。その姿はとても格好良くて、俺は心から父さんに憧れた。そして決意した。いつかは父さんみたいな格好良くて優しく強いライダーになりたいって……。

「ゆうしようだよおとうさん、やくそくだからねー！！」

……それが、俺が見た父さんの最期の元気な姿だった。俺が次に会

った時は、父さんはあちら傷だらけで頭から血を流して冷たくなっていた。一言も喋らず白いベッドに横たわって……。

「……ここが、そうか……」

父さんが風になったコース終盤のS字コーナー。十二年の時を経て、俺は今そのコーナーに立っている。俺を名残惜しく抱き締めたあの時、もしかしたら父さんはこの後に自分に降りかかる悲劇を察していたのかもしれない。

「……まさかこんな所で逝っちまうとは思っても見なかったぜ、あの一周までは恐ろしい程に順調だったんだけどなあ……」

俺の隣でしゃがみ込んでいる親父さんがボソツと呟いた。確かにあの日、父さんの速さは尋常ではなかった。

回周を重ねる事にベストラップを更新し、必死で追い上げる三島さんや各ライバルを全く寄せ付けなかった。

その走りにピットクルーもマシンを設計した麗奈さんも、満足そうにピット内にあるテレビカメラを見つめていた。

しかし、残り五周になった時、父さんが乗っていたマシンに変化が起こった。アクセルスロットルが戻らず、コントロールが利かなくなっただ。

その為エンジンやブレーキに過度な負担がかかり、異常なスピードでコーナーをクリアしなくてはならなくなってしまった。このままではマシンはおろか、父さんの体までバラバラになってしまう。

ピットの下した判断はマシンストップだった。異常に気づき、不安を覚えた麗奈さんは無線で何度も父さんにリタイアする様に指示した。親父さんも空いているバイクに乗って乱入してレースを止めようと準備していた。

しかしそれでも、父さんはレースを諦めなかった。親父さんが引退した後を継いだエースの座、ファンやマスコミが騒ぎ立てる応援や批評の声、父さんには色々なプレッシャーがあつたのかもしれない。もしかしたら、一番のプレッシャーは俺との勝利の約束だったのかもしれない。俺との約束を守る為に、無茶を省みず全力で走り抜けたようにしたのかもしれない。

でも、父さんはゴルチェッカーを受ける事が出来ずに俺と母さんと那奈の目の前でこのコーナーのタイヤバリアーにバイクごと突っ込んでしまった……。

テレビや新聞は父さんの死を大きな記事にして世間に伝えた。その訃報は海を越え、海外のロードレースファンに衝撃を与えた。

この事故以来、ここのサーキット場にはたくさんの父さんのファンの人達が花を携えて訪れ、涙を流していた。俺はそれを見て、どれだけ父さんがみんなから愛された人間だったか改めて教わった気がした。

「……親父さん、俺、父さんみたいなライダーになれますかね……？」

「……知らねえよ、そんなもん」

親父さんは俺の問い掛けを適当に受け流すと、コーナーに手向けてあつた花瓶の花に自分が飲んでいたミネラルウォーターをドボドボ



注いだ。

「てめえがいいライダーになれるかどうか、それは全部お前次第だ、俺はただ、てめえの手伝いをしてやってるだけだからなあ……」

気がつくと空は完全に日が暮れて、サーキット場辺り一面は夕焼けで真っ赤に染まっていた。俺と親父さんの影が伸びていくのを見て、昔、父さんと手を繋いで夕焼けの中を公園から家まで一緒に帰った事を思い出した。

「……俺からてめえに言つてやれるのはただ一つ、死んだら全て終わりって事だけだ、死んじまったら世界チャンプもプロライダーもクソもねえ……」

俺の右手の小指にはまだあの時の感覚が残っている。父さんと交わした、男と男の約束……。

「翔太、お前は間違いなく成長してる、だからそう焦るな、貴之が本当に夢見ていた願いはてめえが幸せになる事なんだから……」

「……はい……」

父さんは決して約束を破った訳じゃない。だって父さんはずっと俺にとってのチャンピオンなのだから。どんなに速くなっても強くな

つても辿り着けない場所にいるんだから。  
だから、俺も必ず約束を守る。必ず、精一杯生きて、幸せになって  
いつかは世界チャンピオンになってみせる。

「……いい風が吹いてる、懐かしい風だな……」

「……これは、父さんの、風……？」

父さん、見ててくれ。俺を見守っていてくれ。父さんが辿り着けな  
かった頂点を、俺は必ずこの目で見届けてみせるから……。

### 第32話 CANDY

拝啓 皆様お元気ですか

夏の終わりに近づき、虫の音にも秋の気配を覚えるこの頃

やっぱりダメですね。もっとちゃんとした文法で書きたかったんですけど、どうやら私には無理の様です。

今回は、皆様に報告したい事があって手紙を書きました。

何と私、歌手デビューする事が決まりました！

前回、井上さんのスタジオに行って私の歌声を簡単にレコーディングしてくれたんですけど、そのデモテープを聞いて是非、今度のアニメ映画の主題歌に私を使いたいと言って下さったプロデューサーさんが現れたんです！

今日、井上さんから話を聞いた時、もう私、慌てちゃって興奮しちゃって、もう何が何だか良くわからなくなっちゃって……。

気がついたら失神してました。気を失っておいて気がついたらって言うのもおかしい話ですけど。

とにかく、今はもう夢の様な気分です。まるで、背中に羽が生えたみたいにとこでも飛んで行けそうな気分……。

お母さん、私を産んでくれてありがとう。

私、本当は小さい頃、音が変な感じに聞こえてきて、毎日外に出るのが凄く怖かった。

何で私だけこんな音が聞こえるんだろう？ 何で私だけこんなに苦しまなきゃいけないんだろう？ っていつも悩んでた。

本当に、もう死んじやいたい、生まれてこなければよかったってずっと思ってた……。

でも今は、生まれてきて本当によかった、って思ってる。もっといっぱい楽しく生きたい、って思ってる。

でも、お母さんの方がもっと辛かったよね？

お父さんが死んじやって、お母さん一人でお仕事も家事も頑張って、私の事を守ってくれていたんだよね？

ごめんね、お母さん。本当にごめんね。

私、お母さんの娘で生まれてきてよかった、って本当に思ってるよ！ 本当にありがとう！

お父さん、いつもお仕事お疲れ様です。

たくさんのお客さんの診察をして疲れている筈なのに、いつも私の話や悩み事を聞いてくれてありがとう。

私が航君や瑠璃ちゃんの事を心配している時、お父さんはいつも私の手助けをしてくれたよね？

航君と瑠璃ちゃんの事が上手いかわなくて、『麻美子、迷惑かけてすまない』って泣いて謝った事もあったよね？

ううん、迷惑なんかじゃないよ。私にとっても、航君と瑠璃ちゃんは大変なお友達だもん。

それにね、私、最近、お父さんの事も、航君や瑠璃ちゃんの事も、本当の家族みたいに思えてきたんだ！

これからもみんなと一緒に生きていきたい、過ごしていきたい！

見た目ほど頭良くなってドジな娘ですけど、お父さん、これからもよろしく願います！

本当のお父さん、私は元気です。

お父さんの膝の上でピアノの演奏を聴かせてくれた事、まだちゃんと覚えています。

あの時に私に見せてくれた笑顔、まだちゃんと覚えています。

お父さんのおかげで、私はみんなに負けない素敵な才能を持つ事が出来ました。

私、お父さんの娘でよかった、本当によかった……。

私、一生懸命生きていきます！　そしていつか、お父さんみたいな  
素敵な音楽家になりたい！

って、ちよつと言い過ぎちゃいました。

でも、いつかはそうなれる様に頑張ります！

あまりお父さんの話をする、今のお父さんが傷つくかも知れない  
のでここでやめておきます。

でも、お父さんの事は絶対に忘れません。ありがとう、お父さん。

小夜ちゃん、いつも友達でいてくれて本当にありがとう！

今の私がいるのは小夜ちゃんのおかげだと思っています。

あの時、小夜ちゃんと出会わなかったら、小夜ちゃんに助けて貰わ  
なかったら、小夜ちゃんに励まして貰わなかったら、私、どうなっ  
てたんだろう……？

きっと、みんなにいじめられて、ピアノに触れる事さえ出来なくて、  
自分の才能にも気づかないで、塞ぎ込んでたんだろうなあ……。

小夜ちゃんに友達、って言って貰えた時、本当に嬉しかった。本当  
の友達が出来た、って本当に凄く嬉しかった。

小夜ちゃんのおかげで、井上さんにも、プロデューサーさんにも、  
そして、小夜ちゃんのお父さんにも会おう事が出来た。

そして、私達が一番悩んでいた航君と瑠璃ちゃんの心を開いてくれ  
た……。

小夜ちゃん、あなたは私の恩人です。本当に、本当にありがとう！  
これからも、一番の友達でいさせてね！　ずっとずっと、友達でい

させてね！

でも、私、足遅いから、待ちきれずに引つ張るのだけはやめてね。  
あと、私の家で寝ちゃうのも……。

那奈さん、翼さん、千夏さん、翔太君、薫君、航君と瑠璃ちゃん、  
いつも友達でいてくれてありがとう！

こんなドジで役立たずな私と仲良くしてくれた人達はみんなが初めてでした。

学校に行くのがこんなに楽しいなんて思える様になったのはみんなのおかげです。

みんな、本当にありがとう！ 私も一生懸命頑張つて、みんなと一緒に学校も音楽も楽しくやっていきたい！

これからも、みんな友達でいてね！

えーと、何でいきなりこんな手紙を書いたかって言うと、えーと……。

ごめんなさい、紙に書くぐらいならすぐにスラスラ書けると思ったのに、何か色々と余計な事まで書いてちゃって……。

今、決心しました。ちゃんと書きます。

デビューの話聞いた井上さんのスタジオの帰り道、街で酔っ払っ

て倒れている彰宏兄ちゃんを見つけました。

自分で立ち上がる事も出来ないくらいに酔っ払っていて、このままじゃ警察のご用になってしまふと思つて、何とか彰宏兄ちゃんの肩を担いで、電車に乗つて家まで送つていきました。

彰宏兄ちゃん、泣いてました。とても、辛い事があつてみたいで……。

彰宏兄ちゃん、自分の病院の再建の為に、今の勤めている病院の副院長さんの娘さんと結婚する予定だったそうです。

私が千夏さんのママ、千春さんに連れて行つて貰つたあのレストラン、あそこで見た彰宏兄ちゃんのお相手がその女性だったそうです。

全ての準備も終わつて後は式を挙げるだけだったのに、彰宏兄ちゃん、その結婚話を断つてしまったんです。

自分の出世の為に、好きでもない女性と一緒になつて、人生を過ごしていくなんて耐えられないつて……。

凄く悩んだそうです。悩みすぎて食事も喉を通らず、口から血まで吐いたそうです。自分の母親、職場の仲間達、自分を慕つてくれている患者さん、寝る度に皆さんの顔が夢に出てきてとても苦しかったつて……。

でも、やっぱり自分の気持ちには嘘をつけなかった。そして、病院を辞めてしまったそうです。

でもこんな事、先輩で恩人であるお父さんには話せないつて、病院の再建を願っている自分のお母さんには話せないつて、ずっと街のお店でお酒に溺れて……。

皆様、彰宏兄ちゃん、間違つてましたか？ ダメでしたか？ もつと賢いやり方が他にありましたか？



私は、どっちでもいいです。ただ、泣き崩れる彰宏兄ちゃんが可哀想で……。

彰宏兄ちゃんは私の憧れでした。私が小さい頃、一人っ子の私を凄く可愛がってくれた。

病院にお母さんを迎えに行くと、いつも院長室で私と遊んでくれた。病院が無くなっちゃった後も、自分の方が大変なのに、お母さんや私の事を心配してくれた。

お母さんとお父さんが再婚した時も、私と一緒に家で結婚式の用意をしてくれた。

私にとって、彰宏兄ちゃんは本当のお兄ちゃん、いや、それ以上の存在でした。

私が音の聞こえ方に悩んでいた時も、友達が出来なくて寂しかった時も、いつかまた彰宏兄ちゃんに会えるかも知れない、その気持ちだけで頑張れた。

小さい頃に彰宏兄ちゃんが私にくれたお菓子のオマケに付いていた玩具の指輪、それを見ているだけで生きていけた。

いつか、本当の指輪を彰宏兄ちゃんから貰える事を夢見て……。

彰宏兄ちゃんとは私より十二歳も年上で、私はいつも子供扱いだった。中学生になっても、一緒にお花見に行っても、ピアノの演奏を聴いて貰った時も、私はただの子供だった。

だから、本当は、心の奥底ではもう諦めていたんです。届かない願いなんだ、って……。

でも、この前に千春さんから励まして貰ったあの言葉、自信をもって自分を信じる事……。

あの時、彰宏兄ちゃんの事を受け止められるのは私しかないと思  
った。守ってあげられるのは私だけだと思った。  
私なら、絶対に彰宏兄ちゃんを苦しめない、絶対に裏切らない、ど  
んな事だって許してあげる事が出来る。

だから、彰宏兄ちゃんの為に何かしてあげたかった、彰宏兄ちゃん  
の涙を拭ってあげたかった……。

お父さん、お母さん、ごめんなさい。

私、彰宏兄ちゃんに抱かれました。

でも、後悔してません。

ずっと想っていた人に大切な物をあげることが出来たから。  
寂しがっている彰宏兄ちゃんを慰めてあげる事が出来たから。

これが、私が書きたかった本当の話です。

私は今、この手紙を彰宏兄ちゃんの部屋で書いています。彰宏兄ち  
ゃんは今、ベッドで泣き疲れて寝ています。

この手紙は、私がずっと持っている事にします。

だってこんな事、お父さんやお母さんになんて話せない……。

この手紙をみんなに見せれる時は、私がちゃんと大人の女性として成長して、彰宏兄ちゃんのお嫁さんになれた時です！

それまでは、秘密にさせて下さい。

何か、変な事ばかり書いてちゃってすみません。あつ、見せないんだから謝っても意味ないかな？

とりあえず、色々あって私には忘れられない一日になりました。

これから、立派な音楽家になれる様に、素敵なお嫁さんになれる様に頑張っていきます！

じゃあ、最後だけちゃんとした文法で書きます！

皆様のますますのご多幸を心よりお祈り申し上げます。

敬具

八月三十日 遠藤麻美子



### 第33話 あんまり覚えてないや

「アッハッハッハッ、アッハッハッハッハッ〜!!」

放課後の教室内に響き渡る壮大な笑い声。まるで全世界のあらゆる秘宝を手に入れた女王様の様な高笑いである。

「バカな男よね〜？ たかだか柔道王者ごときがこのアタシに楯突くから天罰が下ったのよ〜！ アッハッハッハッハッ〜!!」

二学期が始まって早々、残念なニュースが私達の耳に入ってきた。翔太と幼稚園が一緒だったあの柔道家ゴリラマン、澤村一茶が練習中に左足首を痛めて病院に入院してしまったのだ。もちろん、参加を予定していた全日本柔道大会も余儀なく欠場となった。

「あゝ、いい気味よね〜！ 何が柔道界期待の星よ！ 何が金メダリスト候補よ！ 人の事ばかり皮肉ってるからこんな事になったのよ〜!!」

その話を聞いて、以前に澤村一茶から散々ダメ出しされくつた千夏は飛び上がって大喜び。優勝候補筆頭と言われた選手の無念の心境を考慮して言葉を自粛している私達の空気を読まずに言いたい放題

だ。

「いつその事、再起不能になる様な大怪我でもすれば良かったのに  
〜！ あ〜ん、もうそれだけが残念だわ！」

「……もういい加減にしろよ！！」

そんな千夏を見て、一茶と幼い頃から友達である翔太がついに怒り出してしまった。机を叩いて椅子から立ち上がり、普段はあまり見せない怒りの剣幕で千夏に向かって怒鳴りつけた。

「人の怪我がそんなに嬉しいのかよ！？ だとしても、何でそんな簡単に口に出せるんだよ！？」

「……えつ、ちょっと、翔太君……？」

「……ちょっと翔太、そんなに怒鳴らないでよ！」

私はいつも違う翔太の雰囲気焦って止めに入ったが、残りのメンバーは全く止めに入る気配が無い。何か呆れる様な冷たい視線で千夏を見つめている。

「千夏ちゃんだってアスリートだろ！？ 怪我の痛さや練習が出来ない、試合に出れない辛さだっただけわかるだろ！？ なのに、何でそんなに非情な事が言えるんだよ！？」

「……えっ、だって、その……」

「……千夏ちゃん、見損なっただよ……」

翔太は唇を噛みしめながら私達に背を向けて、机に下げていたカバンを持って教室を出ていってしまった。

「……ちよつと翔太！ どこに行くのよ!？」

「……病院だよ」

「……病院？」

何も言わずに教室を去った翔太の代わりに薫が問いに答えてくれた。どうやら翔太から事前に話を聞いていたらしい。

「澤村一茶が入院している病院がどこかわかったから、みんなで見舞いに行つて励ましてあげたいって翔太から頼まれてさ、俺と航はすでに了承して、後は女子メンバーに話をしようって事になったんだけど……」

「……お見舞い、そうだったんだ……」

薫の態度もいつもの明るいものとは違う。溜め息をついて頭を掻き、

明らかに不快な表情をしていた。

「……でも、もういいよ、俺らだけで行ってくる、翔太の言う通りだよ、千夏ちゃんの今回の反応はさすがに俺でもガツカリだね……」

「……いや、そんな、薫ちゃん……？」

「……俺と薫は翔太を追う、後はご自由に」

「……航ちゃんまで……」

千夏の困惑する姿をよそに、二人は席を立ってカバンに教科書をしまって出発する準備を始めた。すると、不安そうな表情で話を聞いていた小夜が何かを決意した様に立ち上がった。

「航くん、薫ちゃん、待つて！ その怪我した人ってこの前の電車の中で助けてくれた人だね！？ だったらあたしもお見舞いに行く！」

「……えっ、ちょっと小夜、アンタ本気で言ってるの！？」

「那奈が止めたって行くもん！ 翔ちゃんのお友達はあたし達のお友達だもん！」

「……小夜ちゃんが行くなら、私も行きます……」



「ちょっと、麻美子まで行くの？」

「……私も今回の千夏さんの言葉は酷すぎると思います、それに、私も小夜ちゃんと同じ様に助けて貰った人間の一人ですから……」

正に四面楚歌。千夏の味方をしてくれる仲間はい人もいなかった。親友である翼でさえも援護に入らない。私もさすがに今回は話を上手くまとめる自信がなかった。

「……よし！　じゃあ急いで翔太を追おうぜ！」

薫の一声で、小夜と麻美子も一緒に翔太の後を追って教室を出て行ってしまった。そして、教室に残されたのは私と翼と千夏の三人だけ。

「……千夏、翔太のヤツさ、昨日お姉に冷蔵庫の余った残り物を食べさせられて虫の居所が悪いのよ、だからあんまり気にしないで……」

「……別に、気になんてしてないから……」

私の言葉もちつともフォローにならない。みんなから激しく批評された千夏は悔しさのあまり気分を悪くしてしまった様だ。その表情は明らかにふてくされている。

「翼、アンタはどうすんの？」

「……そうやなあ、ウチも本音を言ったら見舞いに行くべきやと思うけどなあ？ 本人は助ける気なんか無かったかもしれないけど、あの時あのゴリラが居てくれへんかったらウチと千夏はどないなつてたかわからなかったからなあ、なあ千夏？」

「……………」

千夏は不機嫌そうに空いている座席に腰を下ろし、机に肘をついてこちらに顔を背けたまま返事をしなかった。もしかしたら今頃になつて自分の言つてしまった言葉を悔やんでいるのかもしれない。

「……あの千夏、出来ればウチは千夏やみんなと一緒に見舞いに行きたいねん、もしちよつとでも千夏にその気があるんやったら今から一緒に……………」

「……ハア！？ 行く訳ないでしょ！？ 何言つてんのよ翼、バツ力じゃないの！？」

千夏は強気な態度で翼の誘いを突っぱねた。後ろを向いているので表情はわからないが、その声は若干震えていた。

「行きたいんだつたら勝手に行けば！？ アタシがいなくなつて、別に翔太君達と一緒に行けばいいだけじゃない！？ 何でいちいち

アタシまで一緒じゃないといけないのよ、バツカみたい!!」

完全に逆ギレ状態。キリがないと見切りをつけたのか、翼は一つ溜め息について帰りの身支度を始めた。

「……そうかい、良うわかったわ、ほなら、ウチも翔太達と一緒に見舞い行ってくるわ……」

身支度の間、翼は何度も千夏の様子をうかがっていたが、千夏は黙ったままこちらを一切見なかった。本当に強情なんだから……。

「那奈、オマエはどないすんねん？　ウチらと一緒に見舞いに行くんか？」

「……うん、ちょっと考え中……」

本来なら行くべきだろう。だけど、私はこのまま千夏を一人にして放っておく事が出来なかった。

「……そっか、そやな、じゃあ、ウチは行ってくるわ……」

翼も教室から出て行って、残ったのはついに私と千夏だけになった。去っていく翼を見送る事もなく、千夏はずっと後ろを向いたまま黙

り込んでいた。

「……千夏……」

駅までの帰り道、普段あまり二人きりになる事の少ない珍しい私と千夏のツーショット。歩いている最中も何も会話は無く、千夏は黙って私の少し前を歩いていた。

「……じゃあ、那奈、また明日ね……」

千夏は一度も私の顔を見ないで駅への階段を駆け上がろうとした。あまりに幼稚、これじゃただの子供の意地っ張りだ、もうさすがに黙っていられない。私はすぐに千夏の手を掴み、階段の下に引き戻した。

「……千夏！ ちょっと待ちな！」

「……Don't touch! Let me alone! 気軽に引つ張らないでよ！ アンタ一体何様のつもり……！」

バシッ！！

私は思いつ切り千夏の左頬を平手打ちした。一切容赦なんてしない。

小夜ならともかく彼女には誰が悪かったのか、何が悪かったのか言わなかったってわかっているはずだ。

「……痛い……」

「……千夏、アンタ見苦しいよ、今のアンタ、物凄く格好悪い……」

「……一度も殴られた事なんて無かったのに……」

「……アンタさあ、この前澤村一茶にメチャクチャに言われて、悔しくて見返したくて本腰入れて陸上の練習始めたんじゃないの？  
見返してやろうって思ったんじゃないの！？」

千夏は私に殴られた頬を左手で押さえながら、うつむいて話を聞いていた。その顔はいつもの強気な表情ではなく、涙目になって今にも泣き出しそうな表情だった。

「自分が勝った訳でもないのに相手が怪我して大喜びして、それを人に批判されてふてくされて、それじゃアンタただの陰気なクソ女だよ！」

「……ママにだって、パパにだって殴られた事なんて無かったのに……」

「アンタの器ってその程度！？ 仮にも世界のデザイナー、三島千春の娘なんでしょ！？ 相手に塩を送るぐらいの余裕を見せてみなさいよ！」

私の言葉が余程気に触ったのか次の瞬間、千夏は顔を上げて私の顔をギッと睨みつけた。さっきまでの弱々しい態度とは一変した、いつもの貴高い負けず嫌いのあの表情だ。

「……そんな事、アンタごときに言われなくなっただけでわかってるわよ！！」

私に向かって噛みつく様な気迫で怒鳴りつけると、千夏はプンッと横を向いてドストドス音を立てて階段を上り始めた。

「ちょっと千夏！ どこに行くのよ！？」

「What!?! 決まってるでしょ!?! 病院よ!!！」

千夏は階段を上りながらおもむろにカバンから携帯電話を取り出すと、アドレスから翼の番号を探し出して電話をかけた。

「……Hello!?! 『ハア?』 じゃないわよ! もしかし翼!?! アンタどこにいるのよ!?! だーから、アンタ達が向かってる病院ってどこにあるのよ!?! 今すぐ答えなさい!!！」

……どうやら、スーパーセレブの品格とプライドを取り戻したらし

い。ちよつとばかり荒治療だったけど、何とか上手くいった様だ。

「ちよつと那奈！ 病院の場所がわかったからすぐに行くわよ！  
アンタは来るの、来ないの、どっちよ！？ はつきりしなさい！！」

「……はいはいはい、行きます、ちゃんと行きますよ！」

……全くもう、これだからセレブってヤツは面倒だねえ。良くアキ  
バ系の人間が言っている『ツンデレ』っていうのはコイツみたいな  
タイプの事を言うんだろうなあ、多分。

……えっ、私もそうだって？ まさかね、そんなバカな、ねえ……？

「澤村一茶様ですね？ 少々お待ち下さい……」

県内でも有名な大きい大学病院。私と千夏は翼が教えてくれた行き  
方を聞いて、電車とバスを乗り継いで何とかここに辿り着いた。後  
は病院の窓口で入院している病室の番号を聞くだけだ。

「……お越し頂いたところを申し訳ございません、こちらの病室は  
現在、面会謝絶となっております……」

内線電話で確認を取っていた受付担当から言われた予想外の答えに  
私と千夏は一瞬顔を見合わせて首を傾げた。面会謝絶ってそんな、  
おかしいなあ、私達より先に翔太達が来てるはずなのに……。

「えっ、何でよ!? アタシ達の前に学生が何人か来たでしょ! ? アタシ達はその友達なのよ! ?」

「千夏、声が大きいよ! ここは病院なんだから!」

「だって那奈、おかしいじゃない!? こんな遠くまでわざわざ見舞いに来たのに、面会謝絶って失礼過ぎるじゃない!? だからアタシは来たくなかったのよ! !」

病院内だろうとお構い無し、勝手気ままに大噴火するこの困った千夏火山諸島の火消しに手こずっていると私の後ろからおしとやかな女性の声が聞こえてきた。

「……もしかして、あなた方が那奈さんと千夏さんかしら?」

やかましい口を塞ごうと組んず解れつしている私達がその声に後ろを振り向くと、小柄な三十代後半位の着物姿の美しい女性が一人立っていた。

「……あつ、はい、そうですけど……?」

「良かったわ、ここであなた方を待っていたのよ、面会の件はすでに風間君から聞いているわ」



「……翔太、から？」

「……つか、おばさん誰？」

「口を慎みなさい、このバカ女！」

機嫌の悪い千夏の暴言やそれにツツコミを入れる私の姿を見て、顔色一つ変えずに『ウフフ』と笑い流したその女性はクルリときびすを返すと顔を斜に構えて静かに私達に呼びかけた。

「病室までご案内致しますわ、どうぞ私の後をついてきて下さいませ」

着物美人に案内されて、私達は面会者用のエレベーターに乗り込んだ。しかしこの女性、年増とはいえ本当に美人だ。何か正に古き良き時代の大和撫子といったところか。

「しかし、あの子にもこんな可愛い女の子のお友達がいらしたのね、本当に驚いたわ」

「……あの、聞くのは失礼かも知れませんが、あなたはまさか……？」

私は恐る恐るその女性の正体を聞いてみた。この口振りからして何となく答えは予想できていたけど、とてもご本人の口から聞かない

と確信が出来ない。

「申し遅れました、わたくし、澤村一茶の母の亜希子と申します」

その女性は深々と私達に頭を下げた。うわあ、やっぱりかい。わかつちやいたけど相当な衝撃力だ。

「Oh, my god! No way! こんな小柄な美人のLadyから、何であんなKingcongみたいなBeastが……!?!」

「ちよつと千夏! 口を慎めって言ってるでしょう!?!」

相変わらず空気を読まない失礼な女の口を再び塞いでいると、またも着物美人は『ウフフ』と口に手を当てて上品に笑った。

「元気な娘さん達なのね、周りの方々からも良く言われるわ、でも、あれでもわたくしにとっては自慢の息子なのよ」

「………すみません、失礼な事を言って………」

「いいのよ、気になさらないで頂戴、素直な人は私も好きよ」

この女性、麻美子のお母さんの美代子さんとはまた違うタイプの日

本のお母さんといった感じだ。礼儀と作法を身に付けた、まるで高級料亭の女将さんの様だ。

「先程はごめんなさいね、面会謝絶なんて言われて、驚いたでしょう？ 実は知り合いを装って侵入取材しようとする記者の方々が多くて、一般の方にはお帰り頂く様に受付に頼んでおいていたのよ」

「……そうだったんですか、さすがは将来を期待されている選手なんですネ……」

「……マスコミお断りなんて何様のつもりなのよ？ そういう事はもつと有名になって国民的なアスリートになってから言いなさいって感じよね？」

「……アンタさあ、さっきから口を慎めとあれほど……！」

「ウフフ」

言いたい放題のビッチ発言に肝を冷やして亜希子さんの顔色を伺いながら廊下を歩いていくと、病室の前に翔太が一人だけ立っていた。一緒に来ていたはずの小夜達の姿はどこにも無い。

「……あれ？ ねえ翔太、小夜とか翼達はどこに行ったの？」

「……あ、ああ、もう帰ったよ……」

「えっ、本当に？ つーか、何でそんなに言葉の齒切れが悪いのよ

「？」

「……いや、ねえ……」

何か言い出しにくそうな翔太の代わりにそばにいた亜希子さんが事の詳細を語ってくれた。

「一人、とても元気なお嬢さんがいらしてね、余程病室が珍しかったのかしら、ナースコールのボタンを押して看護婦さんを呼んでくれたのはいいのだけど、あまりに何度も何度もしつこくボタンを押すものだから、ついにはナースステーションから苦情が来て追い出されてしまったらしいのよ」

「……で、翼の指令で航に担がれてみんなそそくさと帰っていったって訳なんだ……」

……あーあ、何てこつたい。やはりそうだったか、千夏以上に病院という場所に不釣り合いな存在がもう一人いたわけ。さぞかし迷惑だったろうなあ……。

「……色々ご迷惑をお掛けしました……」

とりあえず、ナースステーションには何かお詫びの品でも送っておいただ方がいいかもしれない。もちろん領収書は『サンライズ・ファクトリー、真中啓介様』って書いて貰うけどね……。

「……さっきはごめんね千夏ちゃん、あんなに怒鳴っちゃって……」

学校での暴言に翔太が申し訳なさそうに苦笑いをして謝ると、千夏はあの時とは打って変わって余裕の態度でサラリと受け流した。

「Don't worry! 別に翔太君レベルの男に言われて傷つく様なアタシじゃないわ、一般PeopleのPoor boyに用は無いのよ!」

「……千夏アンタさ、自分がどんな失言吐いたかわかってんの?」

「何の話かしら? あんまり覚えてないわ?」

「……やっぱり千夏ちゃんを敵に回すべきではないなあ……」

いつの間にやら形勢逆転。一体どっちに非があつたかなんて全くお構い無し。機嫌が直ったのはいいが、まあ酷く高慢ちきな女だ事。

「……皆さん、ちょっと宜しいかしら?」

私達の後ろにいた亜希子さんは何か用があるみたいで私達にお願いをしてきた。千夏、ちよつとは物腰の低く丁寧な言葉使いの亜希子さんを見習いなさいよ……。

「ごめんなさいね、わたくし、一度家に帰らせて頂いて家族のお夕飯の準備をして参りますので、息子の一茶の事を宜しくお願い致します、風間君、一茶を宜しくお願いしますね」

「……あつ、はい、わかりました……」

あつ、そうか。亜希子さんは自分の息子と幼稚園が一緒だった翔太の事を覚えていたんだ。だから先に行ったみんなは面会を制限していた病院窓口もすぐにパス出来た訳か、なるほどね。

「じゃあさ、せっかくだから二人とも一茶に会ってあげてよ」

翔太の後を追って病室の中に入ろうとすると、千夏は腕を組んで廊下の壁に寄っ掛かったまま中に入ろうとしない。またも不満そうな顔をしてツーンとしている。

「……千夏、何やってるの？ もうここまで来たんだからつまんない意地を張らないで入んなさいよ？」

「Why? アタシが面会する必要なんてあるの？ 勝手に二人で会ってくればいいじゃない、Don't touch my heart!」

……はいはい。まあ、病院まで来ただけでも上出来かな。病室内でまたブチ切れて大きな声出されたら他の病室に迷惑だし、放っておきますか。

「ん、この前の背の高い女か？　今日は面会が随分と騒がしいな」

大きな一人部屋の病室の中、澤村一茶はデカイ体を窮屈そうにしてベッドに背中をつけて座っていた。怪我をした右足は固定器具を付けられて痛々しく天井のフックに吊られていた。

「……背の高い女ってやめてくれない？　とりあえず私にも渡瀬那奈って名前があるんだからさ……」

「ほお、渡瀬那奈か、覚えておこう、しかし翔太には多彩な知り合いがいるもんだな」

「……まあな、おかげで毎日退屈しないよ」

一茶自身にだって仲の良い友達はあるだろうが、私達ほと個々のキヤラ主張が強くやかましい人間はそうはいないだろう。いちいち疲れるけど、確かに翔太の言う通り退屈はしない。

「……靱帯を断裂したらしいけど、怪我が治ったらやっぱり柔道を続けるつもりなの？　また怪我するかもしれないのに怖くないの？」

「当然だ、俺には柔道しかない、第一、怪我を怖れていたらとても世界の頂点には辿り着けない」

診察結果は左足首靱帯断裂、全治六ヶ月の選手生命を脅かすくらいの大怪我だ。とても試合なんて出来る状態じゃないだろうし、退院してもしばらくはリハビリが必要だろう。

こんな大怪我を負ってまだ競技への執着心の炎が消えないとは、精神力も相当鍛えているみたいだ。この男、体格や口だけの見かけ倒しではなさそうだ。

「最近、稽古と試合の繰り返しで正直少し気疲れしていた、完治を待ちきれない親父はイライラしているが、俺自身は良い休息だと樂觀視している」

「そうだよな、突っ走るだけじゃ体が持たないって、こんな時ぐらいはゆっくり休めよ、一茶」

「翔太、お前もな」

「……いや、俺はちゃんと休んでいるから問題ねーよ……」

こうやって話している間も、千夏は病室に入らずにずっと外にいる。これは何か機転をきかせないとダメかな。

「翔太、売店で何か飲み物人数分買ってきてよ」



「……俺、またパシリかよ？」

「だから、千夏と一緒に、言ってる事わかるでしょ？」

「……ハア、はいはい……」

渋々ながら翔太は外にいる千夏を連れて売店へと向かっていった。  
何か最近反抗的だなあ。全く、生意気なヤツめ。

「翔太には力カア天下がお似合いの様だな、まあアイツがそれを望んでいるのならばそれも良いだろう」

「……何よそれ、どういう意味？」

一茶の発言の意味を問いただしているその頃、売店に行っていた翔太の体には異変が起こっていた。

「……は、腹痛え……」

「ヤダ、翔太君顔真つ青よ？ 昨日何を食べさせられたのよ？  
我慢しないでトイレ行ってきたら？」

「……うん、じゃあ悪いけど千夏ちゃん、この買った物を病室まで  
持って行って……」

「あつ、そうそう、ねえ翔太君、この後今日一日アタシのそばに寄

らないでね、何か汚いし臭くなりそう」

「……ヒドい言われ様だなあ、俺、昨日何食ったっけ？ 優歌さんに無理やり口の中に押し込まれたからあんまり覚えてないや……」

翔太の異常を知る由も無く私と一茶が病室で飲み物を待っているとビニール袋を下げた千夏が病室に入ってきた。しかし一緒に行ったはずの翔太の姿がそこにはない。

「はい那奈、ご注文の品よ」

「あれ、翔太は？」

「ト・イ・レ、お腹痛いんだって、一体昨日のDinnerは何を食べさせたのよ？ 毒キノコ？ 雑草？ それとも何か未知の生物？」

千夏は私にペットボトルのお茶を一本手渡すと、もう一本を一茶に渡す、と言うか膝元向けていい加減に投げつけた。

「ほら、これがアンタの餌よ！ このアタシから直々に与えてやるんだからありがたいと思いなさい、このFuck monkey！」

「ほう、無礼女、お前も来ていたのか、一体どういう風の吹き回しだ？ 悪い物でも食って気でも触れたか？」

「Shut, up! 別に好きで来たんじゃないわよ! 那奈や翔太君達が見舞いに行くって言うから嫌々ついてきただけよ! 勘違いすんじゃないわよ、Beast!」

やっぱりこうなるか。こちらがどんなに気を回してやってもこの二人は結局争い合う運命なのだろう。これは迷惑にならない内に早いとこ帰った方がいいかなあ……。

ピンポンパンポン

『ご面会の方のお呼び出しを致します、渡瀬那奈様、渡瀬那奈様、お電話が来ますので当階ナースステーションまでお越し下さい……』

「えっ、私?」

誰だろう、父さんもお姉もいづみさんもこの病院の事を話してないし、ここの電話番号だって知らないと思うけど……。

「……何だか良くわからないけど、ちょっと行ってくるね」

「えっ、那奈行っちゃうの? ヤダヤダ、ちょっと待ってよ!」

「ちょ、ちよつと離しなさいよ千夏！ 小夜みたいなワガママ言わないでよ！」

……何か嫌な予感、私の中の危険予知メーターの針がビンビン反応している。私は病室と言う檻にゴリラと取り残される千夏の手を払ってナースステーションへと向かった。

「……………」

病室に残された二人にももちろん会話は無い。千夏は膨れっ面でそばを向き、一茶も千夏には目もくれずに窓の外を眺めていた。

「そういえば、真面目に陸上の練習しているらしいじゃないか、翔太から聞いたぞ」

外を見ながら一茶が話しかけた。突然の会話に千夏はちよつと不意をつかれた様に一瞬怯んだが、すぐにツンツンした態度に戻って平常心を装った。

「……何よ、ホントに翔太君は余計な事ばかり喋るわね、男のクセに……………」

「何事も真面目に取り組み精進すれば、例え良い結果が出なくともその努力はいずれ己の血となり肉となる、決して無駄にはならん、

良い心掛けだな、少しは見直したぞ」

「……何よ、その昔のSamuraiみたいな言い回し？ ダッサイ、カッコいいとも思ってたんの？ 超オヤジ臭いんだけど？」

「侍か、まあそうだな、柔道家とはそういうものだ、日々鍛錬を重ね、最期まで辿り着く事の無いであろう己の真の完成形を目指して身を削っていく、その命が尽きるまでな」

「……くっだらない、バカじゃないの」

千夏はチラリと一瞬だけ一茶の痛んでいる左足を見た。見るからに痛々しい包帯と固定器具。もしこんな大怪我を自分が負っていたとしたらどうなっていただろう、人の怪我を軽率に捉えていた自分を悔やむ様に、千夏はうつむいて唇を噛み締めた。

「……足、痛むの……？」

「捻れば痛い、吊しておく分なら大した事は無い、心配か？」

「そんな訳無いでしょ！？ ホントにバツカじゃないの！？」

少し空気が穏やかになってきたせいか、一茶はこれまで胸の内に溜め込んでいた柔道への想いを千夏に語り始めた。

「常にプレッシャーとの戦いだった、相手選手はもちろん、家族の

期待、関係者の期待、応援してくれる人達の期待を背負って俺は今まで走ってきた、もしかしたらそのプレッシャーに足の靱帯が耐えきれなかったのかもしれない」

「……プレッシャーか、アタシには一切関係のない存在よね、過度な期待をされるのも楽じゃないわね……」

「だからスポーツそのものを苦しみではなく楽しんでやる、そんなお前達の事が俺は若干羨ましく思う時もある」

「ハア？ まだアタシのやってる事はお遊びだって言いたい訳？ 何よアンタ、結局周りを蔑んで一人だけ天才気取りじゃないのよ、気持ち悪い！」

いちいちカツとなって食いついてくる千夏を、一茶は冷静にフンと鼻で笑った。

「話の意味がわからぬ様だな、馬の耳に念仏、お前の歪んだ信念は何を言っても無駄と言う訳か」

「Shut up! 一人前な口叩かないでよ、ウザりたい！」

やっぱり衝突。一茶の言葉に千夏がふてくされて横を向くと、ベツドの横にある台の上に籠に入った果物の詰め合わせが置いてあった。

「何が面会謝絶よ、きっちりお見舞い品貰ってるじゃない？ 物だ

け置いていかせて門前払いなんて失礼な話よね！？」

チクリと嫌みを言いながらその台を良く見ると、小さなお皿の上に中途半端に皮を剥いたリンゴが果物ナイフと一緒に置いてあった。

「……何よコレ？ まさかアンタが剥いたの？」

「そうだ」

「ヤッダ、汚い剥き方！ しかもちつとも皮が剥けてないじゃない？ 何でこんなもつたいない事するのよ？」

「皮剥きに飽きた」

「……ハア？ 飽きた？」

「別に食べなくても困らない」

千夏の問いに一茶はさつさと受け流す様に矢継ぎ早に答えた。冷静さを装ってはいたが、微妙な空気の変化を千夏の小悪魔レーダーが見逃す事はなかった。

「……ふん、じゃあいらないのね、このリンゴ？」

「いらない」

「ホントにいらない？」

「い・ら・な・い」

「あつそ、じゃあアタシが食べちゃおうと！」

逆襲開始とばかりに器用な千夏はお皿の上で上手にリンゴの皮をナイフで剥き始めた。その間、一茶の顔は終始外を向いていたが、少し横目でチラチラとその様子を見ていた。

「バツカねえ、ホントは食べたかったクセに意地張っちゃって、そんなのスラッとお見通しよ！ もうこのリンゴはアタシの物だからね〜！」

中途半端に剥かれて身が真っ赤になっていたリンゴはあつという間に綺麗に残りの皮を剥かれ、芯もあつさり取り除かれて一口サイズに切り分けられた。

「じゃあ、いただきます！」

シャリツというリンゴのいい食感と適度な酸味と甘さに千夏はこの病院に来て初めての笑顔を見せた。

「ん〜、美味し〜い！ 日本のリンゴって瑞々しくて最高〜！」



Fruitsが美味しいのは日本の唯一良いところよね!」

千夏がリンゴの食感の余韻を味わっていると、なぜか横から聞こえてくるシャリツというリンゴを食べる音……。

「……何勝手に食べてんのよアンタ?」

「何だ、何か問題あるのか?」

そこには全く遠慮する素振りもなく切られたリンゴを器用にデカイ口に運ぶゴリラが一匹いた。

「何よアンタ、いらないつて言っただでしょ!?」

「知らん」

「ハア? 何をシラ切ってんのよ、言っただじゃない! アタシはちゃんとこの耳で『い・ら・な・い』って聞いたわよ!」

「覚えてない」

「……まさかアンタって、リンゴにしても梨にしても皮を剥いて切り分けて貰わないと食べられないの? ママに手伝って貰わないと何も出来ないの? うわぁヤダ、偉そうな事を言っておいて柔道以外は何も出来ないBaby childじゃない!?」

「違う」

「そうじゃない！ ホントはリング食べたかったんだけど、皮が剥けなくて困ってたんでしょ！？ ほら、素直に言いなさいよ！？」

「絶対に違う」

「うわぁ、何よこの男！？ 可愛くないわねえー！！」

「可愛いなんて思われたくもない」

「Oh, shit! Fuckin' monkey baby!!」

千夏と一茶がやりやつてる間、私は呼び出されたナースステーションに到着していた。アナウンスがトイレまで聴こえたのか、すでにそこにはげっそりした翔太が先回りして私を待っていた。

「……おう、那奈……」

「翔太、お腹大丈夫？ トイレ行ってたみたいだけど、生きてる？」

「……多分昨日、優歌さんに無理やり飲まされた賞味期限切れの牛乳が原因かと……」

「……何で牛乳ってわかったのよ？ うわぁヤダ、何か汚い、ちゃんと手洗った？ 今日一日絶対私に近寄らないでよ！」

「……那奈までもかよ、俺が悪い訳じゃないのに……」

ナースステーションの中で看護婦さんが電話の受話器を持って待っていてくれた。すでにその受話器からは相手側の声が漏れてここまで聴こえてくる。いつもの聞き覚えのある、大迷惑なトラブルメーカー娘の声……。

「……はい、もしもし？」

「あつ、もしもしー、那奈だよー！ あーね、うーんとね、みんなでバスで駅まで来たんだけどね、えーとね、電車がいつぱいあつてね、どれ乗ってきたか覚えてなくってね、うーんとね……」

「……頼むから落ち着いて喋りなさい！ 何言ってるかサッパリわからない！」

……つまりは駅に着いた方がいいが、私鉄線などか何本も行き交う乗り換え駅だったなので、どの電車に乗ったらいいかわからなくなってしまうらしい。何でいちいち通訳をしなくてはいけないのか、私の他に誰か小夜語を解読できる人はいないの！？

「みんなヒドいんだよ、あたしから離れていなくなっちゃうんだもん！ みんな迷子になっちゃって捜すの大変なんだよー！」

「みんなじゃなくて、アンター人が迷子になつてんの！ いい加減気づきなさい、このバカッ……！」

急いで病院を出て駅でウロウロしていた小夜を捕まえて案内所に行ってみると、案の定翼達がぐったりと待ちくたびれた様子で私達の到着を待っていた。何十回も呼び出しアナウンスをしてもらったらしいのだが、当の本人はそれに全然気づかなかったそうだ。全くもって迷惑な娘だねえ……。

ちなみに、澤村一茶の怪我は順調に回復し、現在は退院して通院治療でリハビリを続けているそうだ。今度みんなで何か快気祝いでも送ってあげようかな、ナースステーションと駅の案内所へのお詫びの品と一緒に……。

### 第34話 花言葉

十月、食欲の秋、体育の秋、そして、音楽の秋。プロデビューを控えた麻美子の歌声を生で聴くチャンスとばかりに、私と小夜は家にある啓介さんのスタジオに特別に入室許可を取ってちよつとした演奏会を開いて貰った。

「あれ、航くんそれなーに？」

「……………ギター、いつも家で弾いてるヤツ」

航が小さい時に実の母親から譲り受けた形見のアコースティックギター。今では唯一栗山家の幸せだった時期を物語ってくれる貴重な品だ。三十年以上弾かれ続けたその年期は木で出来たボディの傷や手垢に刻まれている。

「……………私が航クんに一緒に演奏して欲しいって頼んだんです、家では前にも電子ピアノでセッションしたので、グランドピアノでも一度やってみたくて……………」

昔から瑠璃がグズった時に二人で良く演奏を聴かせてあげていたらしい。そんな瑠璃も今日は観客として小夜の家へ航と一緒に訪れ、生まれて初めて見たであろう大きな家の室内に目をパチクリしてい

る。

「たーや、これ、なーに？」

「これはねー、えーと、何だっけ？」

「ミクスチャーって言う機械なのよ、この機械で楽器や歌声を一つにまとめて調整するものなのよ」

昔、スタジオ内の機材を壊しまくった前科のある小夜を無条件に再びスタジオに入れてくれる程、啓介さんも甘くはない。条件としてあづみさんが監視役として同伴し、私が小夜に徹底マークして機材に触れない様にブロックする事になった。

「小夜、あっちこっち適当に触っちゃダメだよ、瑠璃が真似するかね」

「はい、了解！」

今回の小夜はそばに瑠璃がいるのでバカな真似をしそうには無さそうだが、問題は小夜よりも無茶な事をやらかしそうなのこの怪物お姉様。

「やっぱりスゲエなトップアーティストのスタジオってのはよお！この機材全部で何千万円ぐらいするんだろぅなあ？ ウツヒヤツ

ヒヤッ！」

「……何でお姉までここにいるの？」

「今日やる事ねえんだからいいじゃねえか、ジムもバイトも休みなんだからよ、それとも真つ昼間から酒飲んだくれてベロベロに酔っ払ってやるつか？ あん？」

酔っ払ってもらうのも困るが、かといって暇つぶしについて来られるのも大迷惑だ。お姉と初対面になる麻美子に至ってはその豪快な一足一投石にいちいちビクビクしている。

「しかしよお、こんなひ弱そうな眼鏡娘が歌手デビューかよ？ 本当に芸能界なんかでやっていけるのかあ？」

お姉は馴れ馴れしく麻美子の頭を上から片手で掴むと時計回りにグルグルと回し始めた。とことん失礼な人だ。

「……だ、大丈夫です！ 私、やるって決めたんです、絶対にやりきってみせます！」

「学校みたいなガキのお遊びじゃねーぞ、芸能界ってのは華やかな反面、厳しくて汚くてイヤラシイ世界なんだぜ？ 一肌脱いで素っ裸になるぐらいの覚悟がおめーにあんのかよ、あん？」

「……そ、そんなもの、怖くなんてないですもん……！」

あれま、随分と強気な返答。何か今までの気の弱い麻美子からはともイメージが出来ない。本当にやる気満々なんだなあ。

「ほお、見た目以上に随分肝が座ってるじゃねえか、気に入ったぜ、てめー」

麻美子にお墨付きのデコピンを食らわせたお姉は満足そうにディレクターズチェアにドスンと座った。私は良くあのデコピン食らっているからもう慣れてるが、初めてやられた麻美子はちよつと涙目になっている。痛いよねえ……。

「……ごめんね麻美子、これがこの人の挨拶なのよ……」

「……那奈さんが何で逞しい女性になれたのかわかる気がします……」

気を取り直して、ピアノの椅子に座って軽い伴奏を弾き始めた麻美子に併せて、航がギターを抱えて長い指で弦を奏でた。

コード中心の演奏だったが航のギターテクニクも手慣れたもので、我流とはいえ小さい頃から弾いているだけの事はある。

演奏曲はほとんど童謡や簡単な歌謡曲だったが、聴き慣れている歌だけにこちらにも気軽な気持ちで楽しく聴く事が出来た。小夜の膝に乗っている瑠璃も手拍子をしてとても嬉しそうだ。



「麻美ちゃん、今度は私と一緒にセッションして下さるかしら？  
お邪魔にならない様に精一杯演奏しますから宜しくね？」

「お、お邪魔だなんてとんでもない！　こちらこそ宜しく願います、あづみさん！」

眠っていた音楽魂に火が点いてしまったのか、突如あづみさんの提案で旧歌姫と時期歌姫候補のピアノと歌のセッションが始まった。定番の歌謡曲から最新のポップチューンを次々とデュエットして、上機嫌なあづみさんは昔の自分の持ち歌までも歌い始めた。

「うひゃー！　あづみちゃんの代表曲、『コスモスの花言葉』だぜ！　懐かしいなあ、おめーら生まれてねーから知らねーだろ？　大ヒットしたんだぜこの曲！」

お姉は当時を思い出したのかノスタルジックな気分になってあづみさんの歌声に聞き惚れていた。でも私だってこの曲は知ってるよ、毎年この時期になると秋の代表曲としていつもテレビやラジオで聴こえてくるもの。

「麻美子、この前よりも演奏も歌も上手くなってない？」

「……そ、そうですか？　私自身はあまり実感ないんですけど……」

「だって麻美ちゃんはあれからずっと井上さんのスタジオでレッス

ンしてたもん！ あたし、麻美ちゃんと一緒に行ってたから知ってるよー！」

聞いた話によると井上さんのスタジオどころか、最近は今まで以上に麻美子が小夜の家遊びに来てあづみさんと一緒に歌やピアノの練習をしているらしい。多い時は週に三日程泊まりがけで遊びに行っていると言藤先生や美代子さんが言っていた。

しかし、私はその話を聞いた時、正直疑問で首を傾げた。なぜなら私の家と小夜の家はすぐ近所なのに麻美子がこの近くで歩いている姿を見た事が無いのだ。

私だけではなく翔太も見つた事が無いそう。毎週、しかも週三日も通っているならば一度くらいは買物に行く私や翔太と鉢合わせしてもおかしくない筈だ。

第一、昔は遊ぶ約束をしていれば小夜も麻美子も学校から自分の家に帰らずにそのまま制服姿で遊んでいたのに、必ず麻美子は電車に乗って一度家に帰る。

同じ家に帰っている航の話によると、家に帰ったあとは例の千春さんからプレゼントしてもらったお洒落な服装に身を包んで出掛けるらしい。

同性の親友の家に遊びに行くのにわざわざそんなお洒落な格好するのだろうか疑問に思ったが、千夏曰わく『それが女の子つてものなのよ！』との事。普通の事なのかなあ……？

「ほらほら瑠璃ちゃん、これって『キーボード』っていう楽器なんだよ！ ここを押すと音がピッって……」

「ダメだよ小夜ちゃん！ マスター、いやお父様から触っちゃダメ

だつて言われてるんでしょ？」

「……あつ、そうだった、エヘヘッ……」

それにしても最近の麻美子の変わり振りには驚かされる。昔みtainなアタフタした落ち着きの無さは消えて、何というか、大人の対応が出来る様になった。

私以上に小夜の暴走を上手くコントロール出来る様になったし、翼と薫ペアのくだらない冗談やおふざけも軽く受け流す。そして千夏からファッションやメイクの情報を聞いて、色々とお洒落になってきた。

全身から自信のオーラが漂っている。歌手デビューとはこれほどまでに人を変えてしまうのか。そうだね、もうすぐ芸能人だもんね……。

「……あの、皆さん！」

一演奏終えた麻美子がピアノの椅子から立ち上がって私達に声をかけてきた。

「何、どうしたの麻美子？」

麻美子は何か照れくさそうにもじもじしながら足元のカバンから一枚の楽譜ファイルを取り出すと、それを私達に見せつける様に両手で前にドンと突き出した。

「……これ、これなんです！　これが私のデビュー曲の楽譜なんです！」

「えっ？　アンタもうデビュー曲も決まったの？」

「わー！　麻美ちゃんスゴい！」

「……しかもこの曲ってマスター、いや真中啓介さんが作ってくれた曲なんです！」

啓介さん直々の作品とは驚いた。今までも余程の大物アーティストにしか曲を提供しないのに、麻美子に対してこの待遇なのだからかなり事務所から期待されているのだろう。

「啓介ちゃんのプロデュースだったらヒット確実じゃねえかよ！　何だよ眼鏡娘、おめースゲエじゃねえか！」

「……は、はい！　ありがとうございます！」

麻美子は滅多に人を誉めないお姉の激励に満面の笑みで応えた。横にいるあづみさんも嬉しそうに拍手をして喜んでいた。

「……そ、そこで、お世話になった皆さんにいち早く聴かせてあげたいと思ってこの楽譜を持ってきました！」

「……えっ、アンタ、そんな事して大丈夫なの？ 事務所のOK出てんの？」

「大丈夫だよ那奈！ 聴くのはあたし達だけだもん、誰にも言わなきゃバレないよー！」

「そうね、この家は全面防音設計だから外に音が漏れる事もないからいっぱい大きな声で歌えるわよ」

そのプロデューサー御夫人と御令嬢がそう言ってるんだからいいのかな。せっかくだから黙って聴かせて貰うでしょう。

「麻美ちゃん、緊張しないで、リラックスよ」

しかし、あづみさんの麻美子に対する可愛がり方はちょっとスゴい。長年顔を合わせている私達の名前は油断するとあつという間に忘れてしまうのに、麻美子の事は最初に覚えてから忘れる事がない。

実際、麻美子の音楽センスを一番最初に見抜いたのはあづみさんだったらしいし、二人とも同じ絶対音感という特殊な才能を持ち合わせている。

あづみさんも歌手をやっていた時期があったから色々と共通点が多い。もしかしたらあづみさんは麻美子が昔の自分とダブって見えたのかもしれない。

何か、小夜が瑠璃を見る目線と良く似ている。音楽の才能こそは遺伝しなかったが、誰かの為に一生懸命尽くす優しさはしっかりこの母娘の間に受け継がれているみたいだ。

「……じゃあ、遠藤麻美子、歌わせて頂きます……」

楽譜を開いて椅子に座り直し、背筋を伸ばして演奏の姿勢を取った。私達も大ヒットの予感がする新曲を聞き逃さない様にドキドキしながら耳を澄ませた。

しかしその時、予想もしていたかったまさかの展開が起こった。大きく深呼吸をした麻美子の顔色が真っ青に変わった。

「……ウプッ……！」

「……麻美子!？」

突然、麻美子が吐き気をもよおしたのだ。バタツとピアノの鍵盤にもたれ込んだ麻美子は、口を手で押さえて椅子から立ち上がって洗面所へとかけていった。

「麻美ちゃんどうしたの、大丈夫!？」

すぐに小夜が麻美子の後を追って洗面所に入り、洗面台の前で苦しんでいる麻美子の背中をさすってあげていた。心配になった私も麻美子に駆け寄り様子をうかがった。

「麻美子どうしたの、何かあったの？」

「……ごめんなさい、急に気持ち悪くなって……」

一目で体調が悪いと判断出来るほど麻美子の顔色は悪かった。私は麻美子の肩を抱いて一階のリビングにあるソファーまで連れていき、そこにゆっくりと座らせた。

「麻美ちゃん、大丈夫？　ここでゆっくり休んで落ち着いてね？」

「……おいおい、無茶すんなよ眼鏡娘？　デビュー前に張り切り過ぎてぶっ潰れたら今までの苦労が水の泡だぞ？」

あづみさんもお姉も私達を追ってリビングにやってきた。航も瑠璃を抱っこして、二人とも麻美子の姿を心配そうに見つめている。

「麻美ちゃん、何か変な物でも食べたの？　油っこい物とか腐っちゃってた物とか？」

「……あのね小夜、アンタじゃないんだからそんな事ある訳ないでしょ？」

いまいち筋違いな心配をして手を握っている小夜を見て、麻美子は苦しそうなながらもニコツと微笑んだ。

「……大丈夫だよ小夜ちゃん、もう大丈夫、もしかしたら私、ちょっと疲れてただのかな……？」

そりゃそうだろう。デビューが決まって意気込むのもいいが、スタジオのレッスン以外にもこの小夜の家に毎度毎度練習しに来てるのだから明らかにオーバーワークだろう。こんな小さい体でこれだけの練習量、体調を崩すのも当然だ。

「全く、スタジオでレッスンやって学校行って、また今度はここに来てあづみさんからレッスン受けてなんてやってたら体調おかしくなるの当たり前じゃない？ 麻美子、アンタはそんなに体が強い方じゃないんだから、あんまり無理すんじゃないわよ？」

「……そう、ですね、そうですね、気をつけます……」

「……この家でレッスン？ ほえ？」

私の言葉を聞いて小夜が不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。何で？ 何でアンタがそんな顔すんのよ？

「……小夜ちゃん、タオルを洗面所で水に浸して絞ってきて頂戴、麻美ちゃんのおでこを冷やしてあげないと……」

「あつ、はい、じゃあタオル取ってきてまーす！」



あづみさんに頼まれた小夜は元気良く洗面所へと向かっていった。  
その間、麻美子は何か不安そうな顔して、私の目を見ようとしなかった。

「……麻美子、どうしたの？」

「……………」

「……麻美ちゃんが自分で言った通りちょっと疲れちゃったのよね、元気になるまでしばらくはこのお家でのお泊まりはやめておきましよう、ねっ、麻美ちゃん？」

私と麻美子の会話に割って入る様にあづみさんが喋り出した。まあ、あづみさんはいつもここで麻美子と会っているのだから体調も充実に理解してくれているだろう。

「……いい？ 麻美子、絶対に無理をしたらダメよ、井上さんやあづみさんの言う事をちゃんと聞いて、練習もほどほどにしなさいよ？」

「……はい……………」

私の言葉に麻美子は小さく頷いた。具合が悪いのもあっただろうが、その返事は何か歯切れの悪い喉に引っ掛かる様なものだった。

もちろん、とても演奏会の続きなど出来る状態ではない。麻美子の体調を考慮して、今日はこれでお開きとする事になった。

「……ごめんなさい、皆さんにいち早く新曲を御披露目したかったんですけど……」

「いいのよ、具合が良くなったらまたいつでもいらっしやいね」

「じゃーねー瑠璃ちゃん！ 航くん、また明日学校で会おうねー！ 麻美ちゃん、今度はお泊まり遊びしよーねー！」

麻美子と航と瑠璃は駅へと向かって歩いて行った。麻美子も少し気分が良くなってきたのか、足取りもしっかりと戻っている様に見えた。

「……まあ、航も一緒にいるんだし、大丈夫かな……」

私とお姉も家に帰る事にした。しかし、さっきの小夜の疑問の言葉と麻美子の冴えない表情、そして普段とは違うあづみさんらしいくない慌てる様な態度。私は何かスッキリしない気分だった。

「……おい那奈、あの眼鏡娘って最近何か変わった出来事とかなかったか？」

「……えっ、変わった出来事？」

お姉が珍しく私の友達の事を聞いてきた。千夏や航や薫はパシリにこき使うだけ使ってほったらかしだったのに。

「……変わった出来事ねえ……？ でも何で？ 何か気になる事でもあるの？」

「……いや、別に、な……」

その時、私は久し振りにお姉の真面目に考え込む姿を見た。常にポジティブで全てを笑い飛ばして突っ走ってきたあのお姉が黙り込んでうつむいている。

そのお姉を見て、私は凄い胸騒ぎがした。それが良いものなのか悪いものなのかわからないけど、何か想像もつかない事が起きてしまいそんな予感が……。

「……何、この胸騒ぎ……？」

そして、その予感の後日見事に的中してしまった。私の予想を超えた、いや予想なんてとても出来なかった出来事が私達の元に空から舞い降りてきたのだ。

第35話    I t ' s   w o n d e r f u l   w o r l d

十二月二十四日、クリスマススイブ。二学期も終業式を迎え世間も年の瀬に向かって慌ただしくなってきた。

年に一度のビッグイベントとその後にやってくる新年に皆、期待と希望を抱いて煌びやかな街並みを歩いている中で、学校から家に帰る私達の顔に笑顔は無かった。

小夜の家で行われた演奏会、あの日から麻美子は一日も学校に登校して来ない。それどころか、最近は自分の部屋に引き籠もり、家族の呼びかけはおるか私達や航、小夜の呼びかけにも全く返事をしてくれなくなってしまったのだ。

歌手デビューの日が近づきレッスンや打ち合わせなどの予定もこなさなければならぬのに、井上さんや事務所関係者にも会おうともしない。

あの日以降に一体何があったのか、今、麻美子は何を考えているのか、私達にはサッパリわからなかった。夢だった音楽の仕事も決まって順風満帆だと思っていたのに……。

「ほなら、また来年な」

「みんな、元気出そうね！    G o o d   b y e !」

「良いお年を」

駅前で解散する全員の表情は暗く沈んでいた。いつもなら明るくバカな話をしている翼、千夏、薫の三人も口数が少ない。

「……航クン、麻美ちゃんに何かあったら教えてね？ あたし、電話の前で待つてるから……」

「……うん、わかった」

もちろん、麻美子と一番仲の良い小夜はこの事態に一番ショックを受けていた。遠藤医院まで行って瑠璃の部屋で遊んでいても、隣の部屋から麻美子が出てくる事は無かった。

今までの出来事には無かった経験の無い重苦しい雰囲気。何が起ったのか、何か出来る事はないのか、私達は未熟な経験と知識を頼りに必死で模索していた。

「……そうか、今日も学校来なかったのか……」

家に帰った私から話を聞いたお姉は、テーブルの椅子の背もたれに寄りかかり天井を見て一つ溜め息をついた。

「……お姉、あの日の帰り道に麻美子の事を心配してたよね、あれは何だったの？」

「……ん？ ああ、ちよつとな……」

普段は何も隠さず明け透けに喋るお姉が、この話題になると避ける様に私から目をそらす。何か思い当たりでもあるのか。

「……ねえお姉、何か麻美子に対して心当たりがあるなら私に話してよ、もしかしたらそれで何か麻美子の為に出来る事があるかもしれないから……」

「……ふう……」

何か物凄く話辛そうにお姉は手で自分の顔を塞いだ。今まで見た事が無いお姉の反応に、私は少し嫌な胸騒ぎがした。

「……いや、あのな、ちょっとあたしの昔の記憶とダブる事があったな……」

「……昔の記憶……?」

「……まあ、ちょっとな……」

それだけ言うと、お姉の口は再び硬く閉ざしてしまった。あまり触れられたくない話なのだろうか。

「……まさか優歌さん、麻美ちゃんをイジメたりカツアゲしたりしてないツスよね……?」

「してる訳ねえだろ！ 空気読みやがれこのスケベ童貞野郎が！！」

「痛えつつつ！！」

翔太の失礼極まりない心配に珍しくお姉がキレた。いつもなら軽く頭を叩いたりヘッドロックをかけたりにするのにな、今回は容赦なく翔太のお尻に廻し蹴りを喰らわせた。

「てめーは黙ってさっさと飯の下拵えしてりやいいんだよ！ くだらねえ横槍突っ込んでんとタマ蹴り潰すぞ！！」

「……そんなマジでキレなくても、痛え……」

「……これだから男ってヤツはよ、クソったれ……」

麻美子の引き籠もりとお姉の過去、一体どんな共通点があるのだろう。私には全くわからなかった。

もう少し詳しく話を聞かせて貰おうとお姉に詰め寄ろうと思った時、家の中に電話の呼び出し音がなった。翔太を蹴っ飛ばした勢いのまま立ち上がっていたお姉は乱暴気味に受話器を取った。

「あ？ もしもし？ 誰だお前？」

「……そんなおっかない返事しないでよ、お姉……」

相手の声を少し聞いたお姉は、持っていた受話器をスッと私に突き出した。

「小夜だ、小夜、おめー相手しろよ、面倒臭い」

「えっ、小夜？ 何だろう……？」

受話器を取ると確かにその話し声は小夜だとすぐにわかった。しかし、何か様子がおかしい。

「……あつ、那奈？ あのね、いづみ叔母さん、いる？」

「いづみさん？ いや、まだ仕事から帰ってきていないけど……」

「……あつ、そうなんだ……」

小夜の声に元気が無い。麻美子が学校を休み始めた時から元気は無かったが、それとは違う沈み様だった。

「いづみさんに用があるって事は、あづみさんからの伝言が何かなの？ もし後でも良かったら伝えておくけど？」

「……うん、あのね、お母さんに麻美ちゃんがまだ学校に来ないってお話したらね……」



そういえばあの日、あづみさんの様子も何かおかしかった。いつものホワッとした気の抜けた雰囲気ではなく、少し焦っていた感じだった。あづみさんは何か知っているのだろうか。

「……お母さんね、泣いてるの……」

「……あづみさんが、泣いてる……？」

私の胸騒ぎがさらに勢いを増した。おかしい、何か予想もつかない何かが起こっている。私の会話の内容を聞いていたお姉も、異常を感じて眉をひそめていた。

「那奈、あづみさんの所に行くよ、翔太、留守番頼んだぜ」

家に翔太を残し、私とお姉は小夜の家へと向かった。お姉は私より前についていくのがキツいぐらいの早足で歩いていた。色々わからない事が多すぎて、私の頭の中は混乱していた。

「あたしが話を聞くから、那奈は向こうで小夜の相手をしてるよ、いいな」

家に到着したお姉はリビングのソファで顔を押さえて泣いている

あづみさんの隣りに座り、心配している小夜と私を別の部屋へと追いやった。一体、あづみさんに何があったのだろうか。

「……麻美子の話をしたら泣き出した、ってどうして？ 小夜、アタ何話を話したのよ？」

「……普通に、またお休みしちゃってた、ってお話したただだよ？ そしたら、私のせいかもしれない、って泣き出しちゃったの、ずっと前から麻美ちゃんのお話するとお母さん何か苦しそうで……」

「……私の、せい……？」

そういえば、麻美子はちょっと前までこの家に良く泊まりがけであづみさんからレッスンを受けていると聞いた。その時に何かあったのだろうか。

「……麻美子は良く泊まりに来てあづみさんと音楽のレッスンしていたんでしょ？ その時に何かあった事とか小夜は知らないの？」

「……あのね、その……」

小夜は私から目をそらして困った様にうつむいた。そして、うつむいたまま私に本当の事を話し始めた。

「……麻美ちゃん、お泊まりになんて夏休みから来てないよ……」

「…………えっ？」

「……でもね、お母さんがそういう事にしてあげなさいって言ったの、大切なお友達ならそうしてあげなさいって……」

もう訳がわからなかった。今回の話の真実が一体何なのか私の頭では予測出来ない。もっと詳しい話を小夜から聞き出そうとした時、リビングの方から怒号が聞こえてきた。

「何でそんな真似したんだよ、あづみさん!!」

お姉の声だ。あづみさんから何か話を聞いたのか、その怒り声は広い家全体に響き渡る程の大声だった。

「アイツはまだ中学生なんだぞ！ 義務教育受けてるガキなんだぞ！  
あたし達大人が責任持つて面倒見てやらねえでどうすんだよ！  
！」

その切迫感漂う雰囲気私と小夜は急いでリビングへと向かった。そこには、立ち上がって息を荒らすお姉と、声を上げて床に泣き崩れるあづみさんの姿があった。

「何よ、お姉！ 何があつたの!？」

「お母さん！　どうしたの、どうして泣いてるの！？」

「……ごめんなさい、ごめんね小夜ちゃん、ごめんね麻美ちゃん……」

小夜はうずくまる母親に駆け寄り肩を抱いて一緒に泣き出してしまった。お姉はその姿を見て溜め息をついて天を仰いだ。

「……お姉……？」

「……嘘だったんだ……」

「……えっ……？」

「全部嘘だったんだよ、あづみさんがあの眼鏡娘にレッスンつけていたのも、この家に泊まっていたって話も……」

「……嘘？　じゃあ小夜がさっき言った通り麻美子はここには夏休み以来泊まりには来ていない、それどころか遊びにも来ていないって事なのか。」

「……そういう事にして欲しいって頼まれたんだとよ、あのクソガキに……」

母親や父親、そして私達に話を合わせる為にあづみさんに協力して貰える様に麻美子が頼んだらしい。小夜の家遊びに行く、この用件なら誰からも勘ぐりを入れられる事が無く外出する事が出来る。どうしても理由を作りたくて必死に助けを求めてきた麻美子を見て過去に自分も若い頃に親から自由を与えて貰えなかったあづみさんは同情して、悪い事だと思いつつ力を貸してしまっただけらしい。

「……でも何の為に？ あの実面目な麻美子が家族や私達に嘘までついてしたかった事って何なの？」

「……ごめんなさい、私も詳しくは聞けなかったの、麻美ちゃん、凄く困った顔をしていたから……」

これ以上、あづみさんから聞ける情報は無さそうだ。しかし、その真実がわかって私の頭は混乱していた。何で麻美子がそんな事を……。

「……那奈、あの眼鏡娘……」

お姉が私に何かを尋ねようとした時、私の携帯電話が着信音を上げた。この時、私の胸騒ぎは最高潮を迎えていた。

「……千夏？」

電話を取ると、私が返事をする前に千夏が焦った声で喋り出した。その千夏の喋り声は私が初めて聴く狼狽振りだった。

「那奈、那奈？ 大変、大変、大変よ！ どうしよう、どうしよう！？」

「ちょっと千夏、落ち着いて！ どうしたのよ、何かあったの！？」

私が落ち着かせようとしても千夏の話している事は良く聞き取れなかった。わかったのは今、千夏が翼と一緒に繁華街に遊びに行っていた事。それともう一つ、聞いた自分の耳を疑りたくなる様な信じられない話。

「……飛び降り自殺しようとしている女の子がビルの上にいて、それが良く見たら麻美子なの！！」

「……嘘でしょ！？」

バカな、そんなバカな！ 何で、何でなの！？ パニックになつて頭の中が真っ白になってしまった私から異変に気づいたお姉が携帯を奪い取り、その場所の詳しい位置と状況を聞き出していた。

「那奈、すぐ行くぞ！ もたもたしてたら手遅れになっちまう！！」

「麻美ちゃんどうしたの！？ あたしも一緒に行く！」

「勝手にしろ！　もたもたしてたら二人とも置いてくからな！！」

家から出て、近くの大通りでタクシーを捕まえて三人で乗り込んだ。突然の出来事に私と小夜は冷静さを失いお互いを励ます様に手握りあった。

「……那奈、アイツの事で聞きたい事があるんだけど……」

助手席に座ったお姉が背中越しに聞いてきた。車のサイドミラーに写るお姉の顔はさすがに不安そうな顔をしていた。

「……アイツに何か音楽以外で気になっている事は無いか？　何でもいいからよ」

「……えっ、気になっている事って？」

「だから何でもいいって言うてんだろ！？　家族でも学校でも金でも男でも何でもいいから話せ！！」

「……そんな事言われたって……」

その時、私の頭の中に一つの麻美子に関するキーワードが浮かんだ。いや、一つじゃない、一人だ。

「……男？」

でもまさか、あれはただの麻美子の一方的な憧れであつて、いわば血の繋がりの無い兄妹みたいなもの。あの二人がそんな関係になる訳が無い。

「男か？　男がいるんだな！？　おい那奈！？　」

だって麻美子はまだ中学生だし、相手は一流病院の医者のお卵。ましてや立派な成人で年も離れているのだからそれくらいの分別はしっかりとしていてる筈だ。

「おい那奈！　その男はどんな奴なんだ！？　あの眼鏡娘とはどれだけの仲なんだ！？　」

でも、麻美子に一番関係がある人なんてあの人以外に浮かばない。麻美子に自殺を決意させる程の影響のある人なんてあの人しか……。…。

「おい那奈、答えろ！　そいつは一体誰なんだ！？　」

「……神崎、彰宏さん……」



でも違う、そんな訳が無い。これは私の考え過ぎだ。第一、あの二人が男女交際をしている証拠なんて無いし、だからといってなぜ麻美子が塞ぎ込んでしまわなければならないのか。

麻美子が彰宏さんに対して好意を寄せているのは端から見ただって良くわかった。もし彰宏さんが麻美子を女性として見てくれたなら、それは麻美子にとって幸せな事なんじゃないのか。

「……那奈、あのね……」

考え込んでいた私の手を強く握りしめながら、小夜が涙目で小さい声で話しかけてきた。

「……彰宏先生、病院辞めちゃったんだって、麻美ちゃんから聞いたの……」

「……えっ、何で、何でよ!？」

「……わかんない、麻美ちゃん、誰にも言わないでって泣いてたの、凄く不安そうだった……」

全然わからない事ばかり。しかし、現実には私の知らない所で確実に動き始めている。その行き着く先が幸せへの道なのか、地獄への道なのか、私にはとても予測がつかなかった。

「……頼む、早まるな、間に合ってくれ……」

サイドミラー越しにお姉がイライラと指の爪を噛んでいるのが見えた。何か過去の自分の出来事を悔やんでいるかの様に……。

### 第36話 優しい歌

平日の繁華街の裏通り、そこは人の山で大混雑していた。一般の目撃者から通報を受けたパトカーと救急車、全員の目線が一軒の雑居ビルの屋上を見上げていた。

「翼、千夏！」

「那奈、小夜！ こっちょこっち！」

「あそこやあそこ！ あの屋上の縁から出てる人影見てみ！」

現場についた私達は翼と千夏が指差す屋上を見て絶句した。確かに誰か人が鉄柵の外に出てこちらに身を乗り出している。遠くからでもわかる丸い眼鏡と三つ編みの髪、人違いであってくれと祈った私の願いは跡形も無く打ち砕かれた。

「……麻美子！」

「麻美ちゃん！！」

周囲は警察によって侵入禁止のロープが張られ、ビルの下では衝撃吸収の為のバルーンを膨らます準備がされていた。周りの空気は凍

りつき、役に立たない野次馬達は大声で勝手な事をほざいている。

「何でやねん、何で麻美子があんな所におんねん！　もう訳わからんちゅーねん！」

「ねえ那奈、どうしよう！？　アタシ達どうすればいいの！？　このままじゃ麻美子が……！」

翼も千夏もパニックになっていた。ビルの高さは約八階建て、これが高さではなく水平な道の距離ならすぐに走って捕まえられるのに。

「……那奈、どうしよう、麻美ちゃんが……」

「……………」

私は動く事が出来なかった。小夜に手を引っ張られても、何も喋れない、何も出来ない、何も考えられない。今までに経験もした事も無い緊迫した状況に、無力な自分を露わにさらけ出してしまっていた。

「どけよ馬鹿野郎！　あたし達はあの娘の関係者なんだ！　道を開ける……！」

「何だ君は！？　このビル内は現在立ち入り禁止で……！」

「……しやらくせえ!!」

ビルの階段の前でお姉が警官が持っていた警棒を奪い取り、辺りを塞いでいた警官達を蹴散らしていた。その騒ぎに動けなくなっていた私は我に帰った。

「那奈、ついて来い！ おめーの友達なんだろう？ きつちり責任持って面倒見ろや!!」

「……は、はい!!」

お姉にけしかけられた私は、警官達が怯んでいる隙を見てお姉と一緒に古びて汚い階段を駆け上がった。お姉は登っている途中にいた警官や救助隊を次々と蹴散らし、最上階までの道を開いていった。

「翼、千夏ちゃん！ みんなを連れてきたよ！」

下では私達よりも一歩先に現場に来ていた薫が後から駆けつけてきた航や遠藤先生、美代子さんを導いてやってきた。その中には、汚く無精髭を生やしていた彰宏さんの姿もあった。

「麻美子!!」

「……部屋からいなくなっと思ったたら、こんな所に……!!」

娘の姿を見た美代子さんはその場に座り込んで震え上がり、遠藤先生は悔やむ様に拳を握りしめた。そして、啞然とする彰宏さんの前に立ち、グツと唇を噛みしめた。

「……お前、自分が何をしたかわかっているのか……!?!」

「……すみませんでした……」

麻美子の異常に気づいた遠藤先生は、家に閉じこもっていた彰宏さんを呼び出しすでに事の詳細を白状させていた。

自分の生き方と世間の価値観に困惑した彰宏さんはまとまっていた縁談を自ら断ち切り辞職してしまった。夢と将来に絶望した彰宏さんは我を見失い、街で酒を飲んで潰れていた。そこに、偶然麻美子が通りかかったのだ。

彰宏さんは落ちぶれた自分を昔と変わらず優しく接してくれた麻美子に心の安らぎを覚え、良くない事だとわかりながらもその優しさに甘えてしまった。

一度犯してしまった過ちに罪悪感を覚えつつも、全てを受け入れてくれる麻美子が恋しくなってしまう、そのままズルズルと今まで関係を引きずってしまったのだ。

「そんなもん自分の勝手な言い訳じゃないか！ アンタ、俺達よりも長く生きてきて何を学んできたんだよ!!」

詳しい話を電話で聞いた翔太も家を空けてここに飛んで来ていた。  
このやりきれない事情を聞いて、同じ男として許せなかったらしく  
彰宏さんの胸ぐらを掴んで突っかかっていった。

「翔太、今はそんな事してる場合じゃないだろ！？　麻美ちゃんの  
命が最優先だよ！」

「薫の言う通りや！　そんな人間のカスみたいんは放ってけ！　ウチ  
らで何か出来る事を考えるんや！」

すると、遠藤先生はさっき私達が上がっていった階段の方へと歩き  
出した。しかしそこにはお姉が蹴散らした警官達が再び道を塞いで  
いた。

「……私はあの子の父親です、あの子を救いたい、どうかここを通  
して下さい」

「……今度は何だ？　さっきはムチャクチャな女が突破していくし、  
これ以上事態を混乱されるなら公務執行妨害で……」

「あの子は私の大切な娘なんです！　必ず説得します！　その後逮  
捕でもなんでも罰は受けます！　だから、ここを通してくれ！！」

「……あ、ああ……」

遠藤先生の必死の叫びに警官達は道を空けてくれた。と言うより、その緊迫した雰囲気に関わらずに開けざるを得なかった。

「彰宏、一緒に来い！ お前に機会を与えてやる、男としての責任を取れ！！」

「……はい、わかりました……」

二人が上がってこようとしていた時、私達は何とか警官の制止を振り切り屋上の扉の前に辿り着いた。扉は開いていて、その先には鉄柵の向こう側に立って髪を風になびかせている麻美子がいた。

「……麻美子！」

「……那奈、さん……？」

間違いない、振り向いたその少女は麻美子だった。心のどこかで、信じたくないと思っていたのに……。

「アンタ、こんな所で何やってんのよ！？ 一体、何する気なのよ！？」

「……………」



麻美子から返事は無かった。ただ、悲しそうな目をして私を見つめていた。わかってる、何をする気なのか聞かなくなつてわかってる。でも何で、どうして、何があつたの、何がアンタをそこまで苦しめてるの？ 聞きたい事はいっぱいあつた。私達で聞ける話なら何でも聞いてあげたい。

でも、言葉が出ない。まるで呼吸が出来なくなつた様に何も言えない。体も動かない。今すぐにでもそばに駆け寄つてこっちに引き寄せたいのに、金縛りにあつた様に手も足も体の全てが全く動いてくれない。

「……那奈さん、ここまで来てくれてありがとう……」

麻美子は何も出来ない私に無理して笑顔を見せた。なぜかその姿を見て私の目から涙がこぼれた。

麻美子は黙つて私に背を向け、ビルの端へと足を進めた。その足はすでに靴を脱いでいて靴下の状態だった。

「……麻美子、ダメだよ……」

私の目の前で、友達が一人最悪の結末を迎えようとしている。なのに私は彼女を助けられない、手を差し伸べる事が出来ない、力になつてあげる事が出来ない。

麻美子と初めてあつた一年生の夏の日、私はみんなで守つてあげられて約束したのに、ずっと友達だよつて約束したのに……。

「……おい、ちょっと待てよ」

お姉の言葉に麻美子の足が止まった。固まって震え上がる私とは対称的に、お姉はさつき奪った警棒を肩に抱えてズカズカと階段から屋上の外へと歩いていった。

「……!？」

「……心配すんな、無理やり引つ張ったり押したり殴ったりしねえから落ち着けよ」

身構える麻美子を諭すと、お姉は警棒を下に置き屋上の真ん中にあるぐらをかいて座り込んだ。

「……おめーよ、死ぬ前にあたし達に何か伝えなきゃいけない事がまだ残ってんじゃないのか？」

「……………」

下を向き黙り込む麻美子の見ながら、お姉は上着ねジャンパーに入っているタバコを取り出しライターで火を点けた。

「……言いたくねえならあたしが当ててやるよ、おめーさあ、腹の中にガキがいるだろ？」

「……………!!」

麻美子の表現が驚きに変わった。嘘でしょ、麻美子が妊娠してるなんて嘘でしょ!?

「この前の吐き気は『つわり』だろ? 間違いないだろ、どうだ?」

お姉の指摘に麻美子は静かに頷いた。何かを観念した様に、麻美子は肩を落としてお姉を顔を見ていた。

「……………何でわかった、誰にも話して無いんだろ? おめーみたいなビビりが産婦人科に行った訳じゃねえよな?」

「……………薬局で検査機を買いました、それで自分で……………」

「……………なるほどなあ、まあそれも勇気がある行動だな、褒めてやるよ」

……………そんなまさか、私は衝撃の真実にその場に崩れ落ちた。じゃあ相手は、そのお腹の赤ちゃんの父親はやっぱり……………。

「……………相手の男がどんなヤツが知らねえけどよ、てめーの独りよがりですん坊まで道連れってのはあんまりだろ? ちゃんと男とは話

し合ったのかよ、あん？」

「……………」

麻美子は再びうつむき口を閉ざした。そして、眼鏡の奥の大きな瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「……望まれて、ないんです……」

「……何だって？」

「……私もこの子も、彰宏兄ちゃんに望まれてないんです……！」

私は麻美子のこの言葉をすぐに理解する事は出来なかった。しかし、それを聞いたお姉はくわえていたタバコを引きちぎり悔しそうに地面に投げつけた。

「……堕ろせ、って言われた訳か……」

「……彰宏兄ちゃん、新しいお仕事も決まっでなくて、とても私と子供の面倒なんて見れない、って……」

……酷い、そんなの酷すぎる。麻美子は純粋に彰宏さんの事を慕っていたのに、そんな心無い仕打ち……。

「……くっだらねえ、それで選んだ道が自殺かよ？　そんなくっだらねえ男を捨てて自分の力でガキを育てるって気はねえのかよ？　あるいは親でもあたし達にでも頼って助けて貰うとかよ？」

……お姉の言う通りだよ、私達は決して麻美子を見捨てたりはしない。一人の人間に見捨てられたくらいで死を選ぶなんてそんなのおかしい！

「……勝手に子供作って、勝手に産んで、それで皆さんに迷惑かけるなんて、私には出来ません……」

「……勝手っておめーなあ、だからよ、死ぬ以外にも色々方法があるだろ？　もうちょっと賢いやり方がよ……」

「……それだけじゃない、それだけじゃないんです！　私、自分の勝手な行動で沢山の人に迷惑をかけてしまった……」

麻美子は少し興奮して喋り始めた。強い風が吹くたびに麻美子の小さな体は揺らぎ、下の野次馬から悲鳴の様な叫び声が上がって私の心配を煽った。

「……私、こんな事になって今さら歌手デビューなんて出来ません！　産んでも墮ろしても事務所に迷惑をかけてしまう、お世話になった井上さんや私を認めてくれたプロデューサー、そして、私にチャンスを与えてくれた小夜ちゃんのお父さん、真中啓介さん……」

麻美子の顔は涙でグシャグシャになっていた。千夏のママ、千春さんから貰った服も、鉄柵を越える時に引っかけたのかスカートの端が破れていた。

「……それどころか、彰宏兄ちゃんに会う為にあづみさんにまで迷惑かけて、こうしてまたここで那奈さんやお姉さんに迷惑かけて……」

胸が痛かった。麻美子の苦しみがこちらにまで伝わってくるみたいだった。きっと部屋の中で一人きりでずっと悩んで、考え込んで、心を痛めてきたのだろう。

小さい心と小さい体で、沢山の人の期待や重圧や愛情や責任を背負ってボロボロになるまで苦しんできたのだろう……。

「……だから私、死にます、これ以上皆さんに迷惑かけない様に、お腹の子と一緒に死にます……」

ついに麻美子の口から『死ぬ』という言葉が出てきてしまった。扉に掴まり動けない私を余所に、お姉は黙って麻美子の話を聞いていた。

「……事務所だのデビューだの家族だの、おめーみたいなガキがいちいち考える話じゃねーつつんだよ、武士が切腹すのと訳が違う

だろ？」

お姉は麻美子の言い分を呆れた様に冷静に受け流すと、再び上着のポケットからタバコを取り出して火を点けようとしていた。しかし、風が強くてライターの花が点かない。それくらいこの屋上では強い風が吹き荒れていた。

「それにな、死なれたら逆に迷惑って事もあんだよ、おめーが自殺したら事務所もガンガン取材が押し込んでくるだろうしよ、目の前でおめーが脳ミソぶちまけるのを見て親や相手の男やあたし達はどうすりゃいいんだよ、あん？」

「……………」

「人が生きていく以上、何かしら誰かに迷惑かけて生きていくもんなんだよ、おめーのその迷惑一回を死で償わなきゃいけないんだつたらよ、あたしがこれまで人にかけてきた迷惑は一体何回死ねば許されるんだよ、あん？」

「……そうだよ、過ちは人間誰にだってある。死ぬ事によって当事者はその罪から解放されるかもしれないけど、残される人間達の傷は決して消える事はない。死んで罪を償うなんて一番やってはいけない事……」。

「とりあえず頭冷やしてもう一度考え直せよ、歌やら妊娠やらで頭パニックになってるかもしれねえけど、おめーには心配してくれる

家族や友達がいるんだからよ……」

お姉の説得を聞いても麻美子は鉄柵からこちらには戻って来なかった。まだ膨らんでいないお腹をさすり、か細い声で泣きながら私達に訴えた。

「……でも、この子はどうすればいいんですか？　この子を殺して私だけ生きていくなんて出来ません……」

麻美子の不安、それは自分の命ではなくお腹にいる新たな命。もしここで自分が捕まったらこの命はもしかしたら中絶されてしまうかもしれない。すでに麻美子の心境は愛する子供を守る母親の愛情そのものだった。

「だったら産めばいいじゃねーか？　もしおめーに反対するヤツはおめーの男だろうと家族だろうとあたしがコテンパンにノシてやるから心配すんなよ？　……っか、点かねえなこのライター……」

「この子が大きくなって生まれてくるのを望まれていなかったって知ったら？　父親が愛してくれていないって知ったら？　産んだ母親が自分の勝手な行動で多くの人に迷惑をかけた人間だって知ったら？」

「……あのなあおめー、そんな先の話よお、……っかライター……」



……いけない、麻美子は完全にパニック冗談になってる！ 現在その心にのしかかっている心配が増幅して、すでにこれから先の未来の不安までも巻き込んで心の暗闇の中に閉じこもってしまったんだ……！

「……私、この子を幸せにしてあげられる自信がありません、自分が自分自身やこの世界に絶望しているのに、そんな無責任な事……！」

「あー！ もう面倒臭え！！！」

お姉は突然立ち上がり点かないライターを床に叩きつけると何のためらいもなく鉄柵を越えて麻美子の腕を掴んだ。

「……掴んだ、掴んだぞ！」

「よし、そのまま離すな！ 保護するぞ！」

その姿を見た警官達は私を押しつけて屋上の広場に出てこようとした。その時、お姉はこちらに振り向き鬼の様な形相で警官達を睨みつけた。

「出てくんじゃねえよクソ野郎！！！」

その気迫に、警官達の足が一斉に止まった。その中には驚いて腰を抜かすヘタレ警官もいた。

「……離して下さい！ 潔く死なせて……！」

「……そうはいかねんだよ、このクソガキが」

「あなたに何がわかるですか！？ もう『私達』に構わないで……！」

「いつまでガキじみた事言っただよ、てめーはよ……！」

お姉の怒りの怒号は麻美子にも向かった。それまで興奮していた麻美子もさすがにお姉の声の前に怯んでしまった。

「……おめーよ、そうやって腹に子供を授かっただけでも幸せだっ  
て思えねえのかよ？」

「……えっ……」

取り乱す麻美子の腕をがっちり掴んだまま、お姉はついに私も知らなかった衝撃の過去の話語り始めた。

「……一緒なんだよ、おめーもあたしもよ、同じ過ちを犯しちまっ

「ただよ……」

「……！」

同じ過ち？ 何の事だろう、私は完全に混乱していた。茫然として  
いる私には目もくれず、お姉はそのまま語り続けた。

「……あたしもな、昔に下手こいてガキを孕んじまった事があつて  
な、しかもおめーで違って相手が多くて特定出来ねえでよ……」

……お姉が、妊娠……。お姉が学生の時に羽目を外し遊びまくって  
いたのは聞いている。しかし、まさか妊娠までしていたなんて考え  
もしていなかった。

「……養子の分際でそんな話を親には言えなくてよ、黙って一人で  
金集めて病院行って墮ろしたんだわ、そんな時はこれで清々したって  
思ってたんだけど後々になって胸が苦しくなつてよ、罰が当たるん  
じゃねえかな？ ってな……」

お姉はわかっていたんだ、あの日の麻美子の異変を。自分が経験し  
たからこそ、あれだけ心配していたんだ。私は何も気づかなかった  
……。

「そしたらよ、ちゃんと天罰が下ったんだ、金が安いからって選ん

だ病院がひどいやボでよ、中で炎症起こして死にかけちゃってな……」

お姉が病院に担ぎ込まれて緊急手術をしたのは私もうつすらと記憶にある。でもあの時は父さんから盲腸の手術だと聞かされていた。

「……何とか死なずに済んだけどな、医者から『もうあなたは子供を産む事が出来ませんよ』って言われちゃってよ……」

「……！！」

そんな、そんな事って……。あまりに衝撃的な事実にも麻美子も声を失った。

「……苦しんだよ、すげえ苦しんだ、子供を産んでやれなかった罪悪感と、女として失格の烙印押された絶望感でおめーみたいに死にたくなっただよ、自分は生きている価値が無いってな」

聞いているだけでも胸が締めつけられる様なこんなに苦しい過去を、お姉は涙も流さずに話していた。泣くどころか、麻美子を励ます様に顔を笑みを浮かべて。

「でもな、こんな迷惑の限りを尽くしたダメ人間でも慕ってくれるヤツらがいるんだよ、お姉、お姉ってな……」

……私の、事？ 私達の存在がお姉を救ったの……？

「コイツら置いて死んでらんねえなっと思ってよ、今も苦しいけど生きてんだ、無責任に死んだら迷惑だろ？ それはおめーだって一緒なんだぜ」

「……………」

「おめーを産んで一生懸命育てた母親はどうすんだ？ おめーを實の娘と思って支えてくれてる父親はどうすんだ？ おめーみたいな嘘つき女をバカみたいに信じている小夜はどうすりゃいいんだよ、余程こっちの方が迷惑だと思わねえか？」

麻美子の瞳からまた大粒の涙が流れ落ちた。お姉は一つ溜め息をついてニコリと笑った。

「麻美子！..」

一段落ついたと思った瞬間、階段の下から遠藤先生と彰宏さんが駆け上がってきた。その二人の姿を見て、落ち着きを取り戻していた麻美子は再び暴れ出した。

「……………やっぱり、離して下さい！ こんな姿、みんなに見せられな

い……！」

「チツ、余計な顔出しやがって、これだから男はよ……」

そんな状況もお構いなく、遠藤先生は必死に麻美子を説得し始めた。

「麻美子！ お前は私と美代子で守ってやる！ 子供が産みたいのなら彰宏を説得して私達も一緒に育てる！ 音楽事務所に迷惑がかかるなら私が変わりに謝ってやる！ だから頼む、生きてくれ！ 私達と一緒に生きてくれ！」

遠藤先生の気持ちもわかるけど、今はそんな言葉はかえって麻美子をいたずらに動揺させるだけだった。

「……あなたになんて、関係ない……」

「……麻美子？」

「……あなたは私のお父さんじゃない！ 私の本当のお父さんじゃないもの！」

血の繋がりの無い親子の会話を、彰宏さんは黙り込んで聞いていた。あなたのせいで苦しんでるんだよ？ 麻美子に何か優しい言葉でもかけてあげてよ……。

「……私、この子とお父さんの所へ逝きます、私とこの子とお父さんと三人で向こうで……」

「……向こう？ 向こうってどこだよ？」

予想外の展開でもお姉は慌てなかった。麻美子の手を掴んで離さずにジッと目を見つめていた。

「……それは、お父さんが旅立った世界に、天国かどこかはわからないけど……」

「……いねえよ、もうそんな所になんていねえよ」

「……何でそんな事がわかるんですか！？ じゃあ、お父さんは一体どこにいるんですか！？ 無責任な事言つて、あなたは答えられるんですかあ！？」

麻美子の絶叫に対して、お姉は今までの怒っていた怖い表情を緩ませ、とても優しい女性らしい笑顔で麻美子のお腹を指差した。

「……ああ、わかるさ、そこだよそこ、おめーのすぐ近くにいるじゃないかよ……」

「……えっ……？」

麻美子のお腹の中、つまり今生まれてこようと頑張って心臓を鼓動させている小さな命。小さな麻美子の体に宿った大切な命。

「……あたしは輪廻転生とか信じないタイプだけどよ、その子が父親の生まれ変わりって思ってたやれないか？ 弱くて泣き虫のおめーを守る為に、空から降りてきたって思ってたやれないか？」

「……！」

その言葉に麻美子は暴れるのをやめて、ゆっくりと自分のお腹を抱き包み込む様に両手を添えた。

「……なあ眼鏡娘、自分の人生はともかくその子の為に生きてやれよ、日本中の人間が聴けるはずだったおめーの優しい歌を子守歌として聴かせてやれよ、家族を信じろよ、友達を信じろよ、愛してやれよ？ それでも、どうしても生きていくのが苦しかったらその子供と一緒にどこでも行きゃいいさ、そんな時はこんなあたしでも良かったら付き合ってたやるからよ……」

「……あ、ああ、うわあああん！！」

麻美子は泣き崩れ、お姉の足にしがみついた。どうやらお姉の説得に応じて考え直してくれた様だ。



「コラア、眼鏡親父！　か弱い娘をしつかり受けとめてやれや！  
医者なんだからちゃんと良い産婦人科に連れて行ってやれよ！？」

鉄柵の中に戻ったお姉は泣きじやくる麻美子を遠藤先生に預けて二ヤツと笑い、さつき床に投げつけたライターを拾ってタバコに火を点けた。あんなに強く吹いていた風は止んで、空は綺麗な茜色に染まっていた。

「お父さん、ごめんなさい、ごめんなさい！」

「いいんだ、もういいんだ麻美子！」

美しい親子の愛を見届けたお姉は、無言ですれ違いざまに彰宏さんの顔を思い切り拳で殴りつけた。女の感ですぐにこの問題を起こした張本人が誰なのか読み取ったのだらう。

「……………ぐはっ！！」

「……………この優歌様の鉄拳制裁、ありがたく受け取れクソ野郎……………」

そして、屋上の入り口でへたり込んでいる私の手を取り、お姉はいつもの自信たっぷりなしたり笑顔でこちらを見下ろしていた。やっぱりこの人はすごい人だ。私も体中を縛られていた緊張が解けて立ち上がり、やっと笑顔になる事が出来た。

「……この世界もまだ捨てたもんじゃねえって事だな！　なあ那奈、おめーもそう思うだろ？」

「……お姉……」

が、しかし、私達姉妹の感動の再会の時間は階段の下から駆け上がってきた警官によってあつという間に終わってしまった。

「渡瀬優歌、公務執行妨害で現行犯逮捕する！」

「うつそーん！？」

その後、お姉はとりあえず留置場一泊だけで帰ってこれたが、荒れていた学生時代に面倒を見て貰っていた刑事さんに取り調べされてこつぴどく説教されたらしい。朝、家に帰ってきた時にはローラーにかけられた干物の様にペラペラに干上がっていた。さすがのお姉でも苦手な人物がいたんだねえ……。

この日から数日後、麻美子は家族や彰宏さんとしつかり話し合いをして子供を産む事を決意したそうだ。彰宏さんも責任を取って、早く新しい仕事を見つけて二人を養っていく事を約束してくれたらしい。

事務所の方にもあづみさんを通して啓介さんや井上さんにちゃんと説明するとの事。先々の不安はあるけれど、とりあえず最悪の事態だけは免れる事が出来た様だ。

でも、私達の心の中には何か寂しいやら悲しいやら、とても複雑な  
気持ちが残った。今年のサンタクロースは新しい命と共に難しい宿  
題を私達にプレゼントして去っていったのだ。

第37話―A s i d e ティーンエイジ・ドリーム（1）（前書き）

今回少し変わった事をしてみました。

一つのシーンにおいて、男と女は意外と違う事を考えているものです。

と、いう事でこちらは『彼女』からの視点でのお話になります。

### 第37話―Aside ティーンエイジ・ドリーム(1)―

『……何なんだろう、このもどかしい感情……?』

家の近くにある公園の中の滑り台の上、その滑り台に接続されているパイプの様な丸い筒の中。ただでさえ年明けで人通りが少ないのに、そこからさらに人目を避ける様に私はそこで丸くなって座っていた。

麻美子の一件やお姉の過去の話、色々と大人の事情や恋愛について考えさせられた去年の年末。そのせいだろうか、今までずっと心に支えていたある一つの想いが私の頭の中をさ迷っている。

『……恋をするって、人を愛するって、どういう事……?』

お姉も麻美子も、相手の男性に対して好意を持ったからこそ、人を愛したからこそその男性との間に命を授かった。それはいずれ私達にも訪れる男女の、生きる物全ての定め。そんな事は私にだってわかってる。

でも、愛情って何? どこまでが友情でどこからが愛情? ずっと側にいてほしいと思う相手が異性ならば、それは愛情なの? 自分が絶対に失いたくないという存在が異性ならば、それはやっぱり……?

実を言えば、私はその感情を持つのが少し怖い。私だって、一人の

異性に対して愛情に近い感情を昔から胸に抱いている。でも、その感情によってお互いの関係を壊したくない、それが恋心と認めるのが怖いと思っている自分がいる。

小さい頃から家族の様に一緒に育ち、いつも私の側にいた絶対的な存在。家にいる時も外で遊ぶ時もいつも隣にいた、私にとって唯一の友達以上の存在……。

「あれー？　那奈、翔ちゃんどこー！？　どこ行つたのー！？」

まだ小学生の頃、私達三人は良くこの公園でかくれんぼをしていた。小夜は運動オンチなので滑り台のこのパイプの場所まで登ってくる事が出来ず、外からも姿が見えないので絶好の隠れ場所だった。

「何で那奈もここにいるんだよ、この場所は俺が一番最初に見つけたんだぞ！」

「シッー！　大きな声出したら小夜に聞こえちゃうでしょ、翔太のバカ！」

小夜が鬼の時は、いつも決まって私と翔太はここで一緒に隠れていた。二人で隠れるには狭いパイプの中で体を寄せ合い、同じ場所にいる事をお互いにブツブツと文句を言いつつも、私は心の中でいつもこの時間を楽しんでいた。

「小夜が一生懸命探してるよ、翔太、早く出て行って捕まってあげ

なよ？」

「ヤダよ！ 那奈が行けよ、早くしないと小夜が泣いちゃうぞ？」

「絶好やーだ、小夜が泣いたら翔太のせいだからね！」

「きったねーぞ那奈、何で俺のせいなんだよ！」

「シッー！ 声大きいよ、バカッ！」

毎度毎度こんな口喧嘩をしながらも、私と翔太は並んで座ってニコニコと笑っていた。その姿はまるで双子の様な、私にとってかけがえの無い存在だった。

家の中でも、女の子の好きなお人形遊びとかに興味の無かった私は部屋で翔太と一緒にテレビゲームをやったり、プロレスごっこをして遊んでいた。

「イタイイタイイタイ！ 那奈、マジでイタイってー！」

「アハハハハ、翔太ギブアップするー？」

次第にエスカレートして最後はお互いに本気になって喧嘩になり、父さんやお姉に二人揃ってゲンコツを食らったり、冬の寒い夜に玄関に立たされたりしていたっけ……。

「……翔太のせいだからね、私は悪くなんかないもん……」

「何でだよ、那奈がマジで蹴つとばしてくるからいけないんだろー？」

喧嘩してムスツとしても、少し経てばそんな事も忘れて冷えた体を一緒にお風呂に入って温めた。浴槽に中で顔にお湯をかけ合っぴながら。

でも、小学校高年になった頃、私は次第に胸が膨らみ自分の体が翔太とは何か違う事に気づき始めた。私は女で翔太は男、その性別の壁が段々と大きく私達の間立ちふさがってきたのだ。

小さい頃は一緒に遊んでいた学校での休み時間でも、小夜や他の女子の味方になってあげないといけなかった私は女子チームの先頭に立って翔太達男子チームと向かい合う事になってしまった。

家でも一緒にお風呂に入る事なんて恥ずかしくなつてとても出来なくなつたし、バイクのポスターがいっぱい貼り付けてあつてどんな男の子っぽく変化していく翔太の部屋に入るのも抵抗感が現れてきた。

そして、中学に進学して私達の距離はさらに広がってしまう。私は普段でも履かないスカートを制服として着る事になり、ついに外見からでも私と翔太は女子と男子に分けられてしまったのだ。

さらにその微妙な関係を周りからカップルとか許嫁とかとからかわれて、次第にお互い一緒にいる事を避ける様になつて……。

一番近くて遠い存在になつてしまった大切な存在。私はただ一緒にいるだけで良かったのに、本当は昔みたいに二人で走り回って遊んでいたかっただけなのに……。



「わーん！ 那奈と翔ちゃんがないよー！ またあたしを置いて二人でどこか行っちゃったよー！」

「……あーあ、小夜が泣き出しちゃったよ、もうかくれんぼも終わりだな……」

「……そうだね、お喋りもおしまいだね……」

周りの目が気になりだした頃、公園の中にあるこのパイプの中が翔太と真っ直ぐな気持ちで向き合える最後の場所だった。二人だけで一緒にいられる、二人だけの秘密の場所。

でも、そんな大切な場所を私は中学生になってから一度も訪れていなかった。大人になっていくにつれ、色々と周りの出来事が多くてすっかりあの頃の純粋な気持ちを忘れてしまっていた……。

「……何でこんな風になっちゃったんだろう、私は、私は翔太の事を……」

背が伸びて、今の私には狭すぎる筒状の通路の中に誰も答えてくれない虚しい独り言が響いた。冷え込む冬の寒さに、私は体だけではなく心も冷たく凍えていた。何か世界で私だけが一人ぼっちになつてしまったみたいで……。

「……私の翔太に対するこの感情って、何？ 恋心、それとも友情……？」

小さい頃、私は父さんと貴之さんの熱い友情で結ばれた関係に憧れていた。いつかは、私は翔太とこの二人みたいな最高の親友同士になりたいと思っていた。

でも、今はちよつと違う。翔太がバイクの事や将来の夢を話していると何か寂しい気持ちになるし、私以外の女性とかにいやらしい事を考えていたりするとなぜか頭にくる。

「……これって嫉妬、だよね……？」

じゃあやつぱり、私の翔太に対するこの感情は恋心なのかな？ うん、違う。いや、違う。違うというよりも、そこに陥ってしまうのが私はとても怖い……。

だって、もし私が翔太に恋心を抱いてしまつたら、これまで通りに翔太に対して振る舞えるだろうか。第一、翔太は私の事を一人の女性として見てくれているだろうか。

もし、翔太も私に対して同じ恋心を抱いていてくれて、お互い恋仲になれたとしても、それを知った父さんや母さん、いづみさんは複雑な気持ちにならないだろうか、家族の輪にヒビが入ったりしないだろうか。

それだけじゃない、恋愛が決して甘いだけのものではないとこの前の麻美子の件で充分に思い知られた。仮に私と翔太が恋人同士になれたとしても、必ず将来胸を締め付けられる様な辛く苦しい事も私達の前に訪れるだろう。

その時、私と翔太は共にそれらに立ち向かっていけるだろうか。今よりも何倍も長い人生の道のりを、共に助け合いながら生きていけ

るだろうか……。

「……バカ、私、考え過ぎだって……」

もし、私が女ではなく男として生まれれば、きっと私と翔太は父さんと貴之さんみたいな何でも話し合える大親友になれただろう。そうだったら、こんなに悩まなくて済んだ。こんな苦しい思いをしなくて済んだのに、何で私は女に……。

「……ここにいたか、ずいぶん懐かしい場所にいたんだなあ……」

「……えっ、誰？ 翔太？」

「……声だけで良くわかったなあ、まあ、この場所知ってんのは俺だけしかないもんかな？」

滑り台のハシゴを登ってくる人の声。この声、この雰囲気、側にいるだけで私にはすぐに誰かわかる存在、翔太だ。

「……那奈が見つからないから探して欲しいって小夜から頼まれてさ、そういえば子供の頃に二人でここでかくれんぼしてたなんて思い出して来てみたんだけど……」

あっ、そうだった。今日は小夜と一緒に初詣に行く約束をしていた

んだっけ。考え事で頭がいっぱいになってすっかり忘れてしまっていた。

「……どうした？　何か元気無さそうだけど……？」

私の苦悩をまるで感じ取れていないみたいに、翔太はいつもの様なヘラヘラした笑顔でパイプの中に入って私の隣に座った。ここに二人揃って座るなんて何年振りだろう。

「……別に、何でもない……」

寒さで震えたい体が一気に熱くなってきた。もちろん、本人の目の前で今さっきまで考えていた事なんて話せる訳がない。私は翔太と目を合わせない様にそっぽを向き、赤く火照りそうな顔を必死に隠した。

「……何か懐かしいな、ここ……」

「……………」

「……っか、今の俺達にはもう狭いなあ……………」

「……………」

私は余計な事を喋ったりしない様に黙り込むので精一杯だった。いつも家でも学校でも一日中顔を合わせるのに、今は胸がドキドキしてその顔すら見れない。

「……那奈に限っては無いとは思うけど、何か悩み事？」

「……うるさい、喋りたくない……」

「……あつ、そう……」

苦しくて、嬉しくて、恥ずかしい私の心の中を駆け回る変な感情。私は狭いパイプの中で呼吸が少し荒くなってきたのを、体育座りした膝に頭をつけてバレない様にごまかしていた。それに対して、翔太は楽にあぐらをかいてボツとパイプの天井を見つめてる。翔太は私に対して特別な感情とか無いのかな、恋愛とか将来とか、やっぱり私の考え過ぎなのかな……。

「……もしかして、だけどさ、那奈の悩み事って……」

突然の翔太の切り出しに、私の緊張はピークに達した。十年近く一緒に暮らしている仲、もしかしたら見抜かれてしまったかもしれない。

この前のキャンプ場でも小夜を背負って歩くのに疲れていたのがバレたし、空手大会の時もあからさまに翔太が来てくれたのを喜んでしまったし……。

何か最近、翔太に対して感情を隠し通すのが難しくなってきた。も

うバレちゃったのかな、私の本当の気持ちを。こんな恥ずかしい感情を、ついに翔太に知られてしまった……！？

「……麻美ちゃんと神崎さんの事だろ？ それは俺達が悩んだってしょうがないって！ 後はあの二人と家族の人達が手を繋ぎ合って頑張っていくしか……」

「……バカ」

「……へっ、何で？ 何でバカ？」

翔太のバカ。相変わらず鈍感と言うか、どこかズレてると言うか、本当バカ。バカバカバーカ。男の人は女の人の考えている事が全く理解出来ないって良く聞くけど、正にその通り。

翔太のヒドい外的外れの予想に、私は少し緊張が解けてホッとした。カチカチに固まっていた背筋を伸ばして、狭い空間いっぱい両足を伸ばしすっかりリラックス。

「……あの二人なら大丈夫だよ、麻美子は強い子だし、彰宏さんもお姉の鉄拳受けて目が覚めたと思うよ」

「……そうだな、麻美ちゃんもすっかり落ち着きを取り戻したみたいだし、神崎さんも遠藤先生の診療所で働きながら新しい医療の仕事を探しているらしいね……」

あのクリスマスの日、家へ帰る私と小夜、翼と千夏は少し複雑な心

境になった。恋愛とか、妊娠とか出産とか、女性としてまだまだ先の話だと思っていた私達の前に突然降りかかってきた現実。

その『まだ先の将来』から一番遠い存在だと思っていた麻美子が私達よりも一歩先に大人への階段を登っていつてしまった。楽しかったはずの学生生活も、歌手デビューの夢も見向きもせず……。

麻美子はなぜ全てを捨てる覚悟で彰宏さんとの恋に身を投じたのか。命を捨てようとしてまで恋心を貫き通そうとしたのか。私はそれに触発されて、クリスマスから年が明けた今日までずっと考え込んでいた。

『……恋って、何？』

「……麻美子は恋をしたんだよね、彰宏さんの事が好きだから、全てを捧げたんだよね……？」

「……えっ……？」

緊張が解けた私は、つい軽い気持ちで胸に支えていた疑問を翔太にぶつけてしまった。しまった、と思った時はすでに遅かった。だって、自分の頭の中には答えは見つからないし、私の心のタンクはすでに限界を超えて溢れ出す感情を留めておく事が出来なくなっていた。

「……そりゃ、そうだろう？ 神崎さんの事が好きだから、そういう関係になって赤ちゃんを身ごもったんじゃないの？」

「……そうだよね、そりゃそうだよね……」

「……何だよ急に、そんな話……?」

ありつただけの勇気を振り絞り、私は顔を上げて翔太の顔を見た。見つめるだけで体の底から湧き上がってくる胸を締め付けられる様な切ない感情。でも、もう目を反らす事は出来ない。私はどうしても翔太の言葉を聞きたかった。

「……恋愛とか、結婚とか、翔太は考えた事、ある……?」

「……えっ……?」

「……例えば、人を好きになったりとか、気になったりとか……」

公園の中に吹いてくる突き刺す様な冷たい風、その寒さを表現する様な私達が吐く白い息。この狭い空間の中で、私は自分の高鳴る鼓動が翔太に聴こえない様に矢継ぎ早に質問した。

翔太に聞いたって自分の疑問の答えがわかる訳じゃないかもしれない。でも、それでも聞いてみたかった。例えば自分の気持ちが翔太に伝わってしまうとしても。

「……そりゃ、俺達ももうすぐ高校生になる訳だし、考えた事が無いって言ったら嘘になるけど……」

「……じゃあ、翔太は今、誰か好きな人、いる……?」



「……えっ？ いや、それは……」

少し意地悪な質問をした。今、翔太に特別な女子がないのは一緒に住んでいるのだから良くわかつている。知りたかったのは恋心のような感情を翔太も持っているのかどうか、翔太も私と同じ様な、言葉に表せないもどかしさを誰かに抱いているのかどうか……。

「……いる……」

「……いるの……？」

「……うん、いるよ……」

「……それって、それって、誰……？」

もう止まらなかった。翔太の気持ちを知りたい。言葉に詰まって苦しんでいる横顔、それだけで何となく感情は伝わってきた。でも聞きたい、翔太の口から、翔太の言葉で、翔太の気持ちを。

自分で答えの出ない感情を相手に押しつけて、私は勝手な人間だろう。でも、自分からなんてとも言えない。そうなんだ、私はやっぱり女の子で、翔太に抱いているこの感情は、やっぱり……。

「……それは、それは……」

黙ってうつむいていた翔太が突然顔を上げて私の顔を見た。小学生だったあの頃とは違う、凛々しく何かを決意した真剣な眼差し。私はその目に視線を奪われ、一瞬心臓が止まるくらいの緊張を覚えた。そして同時に、ずっと私を悩ませていたこの感情の答えを見つける事が出来た。

『……やっぱり、この気持ちは恋、私は、私は翔太の事が……』

疑問が確信に変わり、私の鼓動は今まで経験のないくらい激しく高鳴った。膝を丸め、胸に手を当て心臓がはちきれそうになるのを必死で抑えながら、私は翔太の言葉を待った。翔太の口から私の名前が出てくるのを信じて……。

「あー！ 那奈と翔ちゃん見つけた！」

「うわっー！？」

頭が真っ白になっていたところに突然小夜がパイプの外から顔を出してきた。不意を突かれた私と翔太は飛び上がって驚き、パイプの天井に頭をぶつけてしまった。

「……いったい……」

「……俺の真上、金具だよ金具！ 頭割れたかも……」

……何で？ 何でこのタイミングで小夜が出てくるの？ 神様、これは小夜との約束を忘れた私への罰ですか？ だとしたらあんまりだよ……。

「やっぱりここだと思ったんだ、大当たりー！ 昔からいつも二人ともここに隠れてたの覚えてるもん！ もうあたしだってここまで登って来れるようになったもん！」

いきなりの小夜の出現でさっきまでの緊張感はどこかに吹き飛んでしまい、とても話の続きを出来る空気ではなくなってしまった。まさか小夜の前であんな女の子しちゃってる姿なんて見せられないし……。  
それにしても、私は何て大胆な事を翔太から聞き出そうとしていたんだろうか。両手で顔を押さえると頬もおでこも耳の先までカッパと熱くなっていた。今考えると凄じい恥ずかしい……。

「ねーねーねー、那奈も翔ちゃんも早く初詣行こうよー！ おみくじ売り切れて無くなっちゃうよー！」

「……あーあ、ついに小夜にもこの場所が見つかったか、かくれんぼも終わりだな……」

「……そうだね、お喋りも終わりだね……」

初詣までの行き道、私は後からついてくる翔太の存在を背中で感じ

ながら歩いた。何か不思議な糸で繋がっている様な特別な存在。私はすっかりあのクリスマスの日、いや、もっと昔から私の心に取り憑いていた全てのわだかまりが消えて清々しい気持ちになっていた。ずっと胸に潜めていた甘くて切ない不思議な気持ち。怖くて触れる事が出来なかった翔太への想い。その感情が全てが合わさって今日、私の中で音を立てながら歯車が回り始めたのがわかった。

もう押さえられない、隠しきれない。これは友情ではなくて愛情、恋心。私は恋をしている、私は翔太が好きなんだ。もう戻れない。幼かったあの頃の二人には戻れないんだと悟った決意の一日だった。

「……………んでさ、那奈は何を願ったんだ？」

……………女の子に普通聞くんか？ 何てデリカシーの無いバカ男。この天然ヘタレバカさえ直ってくれば文句無いんだけどなあ……………。

第37話―A s i d e ティーンエイジ・ドリーム(1) (後書き)

こちらが読み終わりましたら、ぜひB i s i d eの方も読んでみて下さい。

マヌケな年頃の男子の下心が露わになっております。

第37話―B s i d e ティーンエイジ・ドリーム(2) (前書き)

こちらは『彼』からの視点になります。

同じシーンでも考えている事はこんなに違うものなんですね。

A、Bお互いを見比べると結構面白いかと思えます。

それでは。

第37話―B s i d e ティーンエイジ・ドリーム(2)―

ピンポーン

正月早々からやかましく鳴り響くインターホン。母さんも親父さんも麗奈さんも優歌さんもいなくて、お氣樂にコタツに入ってゴロゴロしてたつてのによ、面倒くせえなあ……。

ピンポン　ピンポン　ピンポン　ピンポーン

「……はいはいはい！　今出ます、今出ます、今出ますって！」

こんなに無作為にインターホンを連打するのは小夜に決まっている。つか、こんな失礼な客は小夜以外考えられない。どうせ那奈に用があるんだろうが、今日はなぜか朝から外に出ていったきり戻ってこない。

「あつ、翔ちゃん！　明けましておめでとーう！」

「……何だよ、那奈ならいないぞ？」

「えっー、何でー！？　一緒に初詣に行くなって約束してたのにー！」

「？」

「…………約束？」

那奈が小夜との約束を忘れるなんて珍しい。そういえば、今日は朝から那奈の様子が変だった。何かあったのだろうか。

「翔ちゃんも一緒に那奈を捜してよー？ ケータイも繋がらないんだよー！？」

いや、今日に限った事じゃない。麻美ちゃんが飛び降り自殺未遂騒動を起こしたあのクリスマスの日から、那奈の言動が急におかしくなった。

何か凄く悩み込んでいて、俺や家族のみんなと一定の距離を置く様によそよそしい態度。まさか小夜にまでそんな態度を取るなんて、さすがに少し心配になってきた。

「…………わかったよ、ちよつと捜してくる…………」

何かあった、といえばそりやたくさんあった。振り返ってみるとこの中学生の三年間、小学生の時とは比べ物にならないくらいに俺達の周りには色々な出会いがあつて様々な出来事があった。

千夏ちゃんや航や薫、麻美ちゃんとの出会い、小夜と瑠璃ちゃんのこと、航の家庭事情、薫の義足の話、一茶との再会、新作さんの体調悪化、そして麻美ちゃんと神崎さんの話、俺も那奈も知らなかった



優歌さんの過去……。

たくさんの喜びとたくさんの悲しみ。どんな時も那奈は俺達の先頭に立って、それらの問題と立ち向かってくれていたのを覚えている。持ち前の強い責任感と友達を思いやる優しい心で。

『じゃあその時、俺は何をしていた？』

中学に上がって、那奈の連れない態度に対抗して俺は那奈だけではなく小夜、翼とも一線引いて学生生活を過ごしていた。那奈を避ける様に、那奈から遠ざかる様に、その方が那奈の為だと思っていたから……。

でも、次第に仲間が増えて一緒に活動する様になってから、俺はそんな那奈の姿を後ろで見ていて凄く心配になった。無理をしていないだろうか、全て自分だけで背負いこんでいないだろうか、何か力になってあげられる事はないか、と。

『それはなぜ？ 俺は那奈の事をどう想っているんだ？』

その感情は時間が過ぎていくにつれて、子供の頃に抱いていた友情から憧れや好意に変わっていき、いつの間にか女性として恋心を抱く様になっていった。

以前、体育館で薫と話した通りルックスやスタイル云々の話ではない。那奈の存在は俺の中で特別な存在として大きくなり、いつしか頭の中は那奈の事でいっぱいになった。

心配という感情は次第に守ってあげたいという感情に変わり、必要以上に那奈に構いたくなってしまった。那奈の力になってあげたく

なっていました。

『じゃあ、俺是那奈の為に何が出来た？ 一度でも助けてあげられた事があるのか？』

いや、出来てない。それをする事によって周りの声が俺達を茶化してくるのが嫌だった。少し嬉しいと思ってしまう反面、とても困った顔をする那奈を見ると胸が苦しくなった。

ただ、親の都合で一緒に住んでいるだけなのに、話の話題にされて嫌がっているんじゃないか、嫌われているんじゃないか、いつもそんな事ばかり考えていた。

『大切な存在とか茶化されるとか、それは今に始まった事か？ もっとずっと前から、そんな事は気付いていたはずだろう？』

そうだな、今に始まった事じゃない。これは全部俺の言い訳だ。那奈は俺にとって昔から大切な存在だった。家族とも兄弟とも親友とも違う、世界で一番大切な存在。

俺はただそれを那奈に知られるのが怖くて、人にかかわれるのが怖くて、那奈に嫌われたくなくて逃げていただけ。那奈の言う通り、俺はヘタレな男だったただけなんだ……。

「……搜すって言っちゃったけど、どこに行けば良いんだろう……？」

だから、那奈が今悩んでいる事に対しても俺はその懐に入る事を躊躇してしまった。苦しんでもがいている那奈の姿を見て見ぬ振りをしてしまった。

男として潔く薫とあんな勝負を約束したのに、いざ那奈の前に立つと弱い自分が顔を出して本当の気持ちを伝えられなかった。

いつも毎日、家でも学校でも顔を合わせてチャンスは幾らでもあったのに、時間ばかり無駄に過ぎて自分に苛立つて勝手に疲れてしまっていた……。

『じゃあ、どうすればいいんだよ？ もうわかってんだろ？』

そうだ、わかってる。もう逃げてる場合じゃない、誤魔化している場合じゃない、照れてる場合じゃない。俺は那奈を守りたい、那奈を助けたい、那奈の特別な存在になりたい。だって俺は、那奈の事が……。

「……この公園、懐かしいな……」

そんな事を自問自答しながら歩いていたら、小さい頃に那奈や小夜とかくれんぼをしていた公園に辿り着いていた。別に意識する事もなく、ただ自然に、勝手に足がここに向かっていた。

「……まさか、ここにはいないと思うけどなあ……」

二人で小夜から隠れるのに良く使った滑り台と繋がっているパイプの通路。僅かな期待を抱きながら、ハシゴを登って上に昇ると中に人の気配があつた。

「……………那奈……………」

俺達が小さかつた頃には広く感じたこの空間。あれから数年経つた今では体を屈めなければ入れない、狭い場所に座っている女子にしては背の高いいつも見慣れたその姿。

「……………ここにいたか、ずいぶん懐かしい場所にいたんだなあ……………」

「……………えっ、誰？ 翔太……………」

「……………声だけで良くわかつたなあ、まあ、この場所知ってんのは俺だけしかないもんな？」

パイプの中を覗くと、那奈が体育座りをして丸くなっていた。でも、その表情は俺が今まで一度も見つた事が無いくらいに曇っていた。那奈がこんな弱気な顔を見せるなんて、一体何があつたんだろう……………。

「……………那奈が見つからないから探して欲しいって小夜から頼まれてさ、そういえば子供の頃に二人でここでかくれんぼしてたなんて思い出して来てみたんだけど……………」

俺は何とか那奈の不安を吹き飛ばそうと懸命に最高の笑顔を作って那奈の隣に座った。しかし、那奈はそんな俺を避ける様に顔を背けてしまった。どうやら最初の作戦は大失敗に終わってしまった様だ……。

「……どうした？ 何か元気無さそうだけど……？」

「……別に、何でもない……」

優しい声掛け作戦も撃沈。そっぽを向いたまま吐き捨てる様に言われてしまった。やっぱり、那奈は俺と一緒にいるのは嫌なのかなあ。ちょっと胸にグサリときた。

しかし、今日は逃げない。嫌われてるかもしれない、避けられてるかもしれない。でも、もしかしてこの場所なら、昔の那奈みたいに俺に胸の内を打ち明けてくれるかもしれない。俺はそこか細い期待に一途の望みを賭けたみた。

「……何か懐かしいな、ここ……」

「……………」

「……つーか、今の俺達にはもう狭いなあ……」

「……………」

次は無視されてしまった。そんな上手くはいかないよなあ。打ち明けてくれるどころか、那奈は何かここから逃げたいかの如くソワソワと動き始めた。俺から遠ざかりたいのかなあ、やっぱり俺、嫌われてる？

「……那奈に限っては無いと思うけど、何か悩み事？」

「……うるさい、喋りたくない……」

「……あつ、そう……」

うるさい、ですか。そうですか。ついには膝に顔を埋めて塞ぎ込まれてしまった。ハア、もう昔みたいに二人で仲良く話す事なんて無理なのかな。ヒドい嫌われ様だなあ……。

『でも、決めたんだろう？ もう逃げないって』

そうだ、どんなに那奈に避けられていようが、今日は逃げる訳にはいかないんだ。こんなに苦しんでいる那奈を見過ごす事は出来ない。例えこれ以上嫌われたとしても、今日こそ那奈の力になってみせる……。

こんな俺でも、那奈が何をそんなに悩んでいるのは大体わかっていくつもりだ。伊達に子供の頃から一緒に生活している訳ではない。親父さんよりも、麗奈さんよりも、優歌さんよりも、小夜や翼や千

夏ちゃん、いや世界中の誰よりも那奈の事を知っているのは俺だけ……。

「……もしかして、だけどさ、那奈の悩み事って……」

ピクリと那奈が俺の声に反応した。間違いない、責任感が強くて真面目で優しい那奈の事だ、きっと間違いない。俺だって那奈と同じ様に、あの日からずっと気にかかっているんだ。

「……麻美ちゃんと神崎さんの事じゃないのか？」

那奈の事だ、あんな事になったのは自分達のせいだと思い込んでしまっているのだろう。でも、俺だって予想だになかった出来事だったんだ。みんなまだまだ先の話だと思い込んで気付きもしなかったんだ。これは那奈の責任なんかじゃない。

しかし、こんな未知の問題に対して自分達がどう接すればいいのか悩む気持ちは良くわかる。那奈らしいと言えば那奈らしい悩み事。でも、いつまでも引きずってちゃ前には進めない。俺は精一杯の強気を見せて那奈を励ました。

「それは俺達が悩んだってしょうがないって！ 後はあの二人と家族の人達が手を繋ぎ合って頑張っていくしか……」

「……バカ」

「……へっ、何で？ 何でバカ？」

えっ、違うの？ あの出来事を気に病んで落ち込んでたんじゃないの？ 『的外れもいいところ』とばかりに那奈はいつもの表情に戻って背伸びをしていた。世界中で一番那奈の事をわかっていると思いい込んでその気になっていた俺、大撃沈……。

「……あの二人なら大丈夫だよ、麻美子は強い子だし、彰宏さんもお姉の鉄拳受けて目が覚めたと思うよ」

「……そうだな、麻美ちゃんもすっかり落ち着きを取り戻したみたいだし、神崎さんも遠藤先生の診療所で働きながら新しい医療の仕事を探しているらしいね……」

逆に俺が那奈に励まされてしまった。俺ってどこまでヘタレ男なんだろう、何かもう自分自身があまりに哀れで軽く死にたくなってきた。トホホ……。

でも、那奈にいつもの元気が戻ってきた気がする。笑顔でパイプの外を眺める那奈の横顔が一瞬幼かった頃的那奈の姿とオーバーラップして、俺はしばらくその横顔に見とれてしまった。少しも変わってなんていない、那奈はいつでも那奈で、俺の大切な存在……。

「ん？ じゃあ那奈は一体何をそんなに悩んでたんだ？」

那奈の姿に目を釘付けにされてのぼせている俺に、冷や水をぶっか



けられる様な一つの疑問が頭の中を駆け巡った。すると、改めて悩み事を聞き出そうとする俺よりも先に那奈がいきなりこちらに意味深な質問をしてきた。

「……麻美子は恋をしたんだよね、彰宏さんの事が好きだから、全てを捧げたんだよね……？」

「……えっ……？」

最初、何を言い出しているのか良くわからなかった。そんな事、誰が考えたってわかる事だろう。那奈の予想もしない突然の質問に俺は少し動揺した。

「……そりゃ、そうだろう？ 神崎さんの事が好きだから、そういう関係になって赤ちゃんを身ごもったんじゃないの？」

「……そうだよね、そりゃそうだよね……」

「……何だよ急に、そんな話……？」

すると那奈は、顔を上げて『女の子』の表情をして俺の顔を見つめてきた。真っ赤に頬を赤らめ、ウルウルと潤んだ大きな瞳。こんな那奈の姿を見るのは生まれて初めてだった。

何か、得体の知れない存在から助けを求める様な切ない表情。いつもの男子顔負けの強気な雰囲気は微塵もない。俺は一瞬で頭が真っ白になって反射的に目を反らしてしまった。

「……恋愛とか、結婚とか、翔太は考えた事、ある……？」

「……えっ……？」

「……例えば、人を好きになったりとか、気になったりとか……」

「……どういう意味？ これってどういう意味！？ 那奈は一体俺に何を聞き出そうとしているの？ 何を言わせたいの！？ まさかまさかの超展開に、俺の頭の中の制御コンピューターは一瞬にして完全ショートしてしまった。」

「……そりゃ、俺達ももうすぐ高校生になる訳だし、考えた事が無いって言ったら嘘になるけど……」

「……じゃあ、翔太は今、誰か好きな人、いる……？」

「……えっ？ いや、それは……」

「……ここで言えって言ってますか？ ずっと昔から心にしまい込んでいたこの感情を、この想いを？ 全国の男性達に聞きたい、これってイッちゃっていいんですか？ 思いつ切りイッちゃっていいんですかあ！？」

「……いる……」

「……いるの……？」

なんて答えを聞く前に暴発してしまった俺。イッてしまった、ついにイッてしまった。今の俺には会話の駆け引きをする余裕なんてこれっぽっちもありません。ただ聞かれるがままに返答する自動道案内板と化してしまいました。

「……うん、いるよ……」

「……それって、それって、誰……？」

誰って、誰って、誰って！ そんなの言わなくたってわかるだろう！？ 俺がずっと見てきた女性は一人しかいないんだよ！ 自分にとって一番大切な存在だと悟った、たった一人の女性だけ……！

『覚悟を決める翔太！ お前は一生ヘタレ男で終わるつもりか！！』

そうだ、俺は決めたんだ。那奈を守る男になりたいって、那奈を助けてあげられる人間になりたいって、那奈にとって特別な存在になるって、この心に誓ったんだ！

人目に晒される事も無く、立ち聞きされる心配も無い二人だけの空間。もう、今しかない。自分の本当の気持ちを伝える絶好のチャンスは今しかないんだ！

「…………それは…………」

那奈の事だよ！　那奈が好きだ、好きだ、好きだ！　心の中で何回  
念じても、その言葉がどうしても出てこない。もし、俺達がそうい  
う仲になったら家族はどう思うだろうか、母さんは、麗奈さんは、  
優歌さんは？　それより何より、俺は親父さんにこれからどんな顔  
して会えばいいんだろう？

『…………下手すりゃぶっ殺されるよなあ…………』

押し潰されそうな凄まじいプレッシャーと将来への絶大な不安。酸  
欠になって気を失いそうだ。でも、そんな俺を那奈が目をもたせて  
見つめている。今にも泣き出してしまいそうなその表情。もう逃げ  
る事は出来ない、俺は一体どうすればいいんだあ！

「…………翔太、立派な強い男になれ、俺よりも、虎太郎よりも、強い  
男になるんだぞ…………」

父さんの最後の言葉が俺の心の奥底から聴こえてきた。強い男、そ  
うだ、逃げない、俺はもう逃げない！　例え親父さんにボコボコに  
殴られても、麗奈さんに毒舌責めされようと、優歌さんに奴隷扱い  
されようと、母さんから絶縁されようと、俺は、俺は那奈の事が好  
きだ……！

「…………それは…………」

それが俺が男として生まれてきた責任。愛する女性を命をかけて守る責任。『強い男になれ』、これは父さんが俺に託した大切な遺言なんだ！俺は父さんが望む様な、強い男になるんだ！父さんにも親父さんにも負けない、強い男になるんだ！！

言うぞ、絶対に言う。今日こそ告白する！俺が世界中で一番大切な人の名前を、いつもずっと一緒にいてくれた大切な人の名前を、隣で俺の言葉を待っていてくれる大切な人の名前を！俺は、俺は、俺は那奈の事が…………！！

「あー！那奈と翔ちゃん見つけた！」

「うわっー！？」

えっー！嘘だろお！？何でこのタイミングで小夜がここに来る！？この場所は俺と那奈だけの秘密の場所だったのに！しかも驚いて飛び上がったらガチーンって、何か固い物が脳天に突き刺さってハンパなく痛い！！

「…………いったい…………」

「…………俺の真上、金具だよ金具！頭割れたかも…………」

どうやら那奈も頭をぶつけてしまったらしい。でも、那奈の真上はプラスチックだからまだマシ。俺なんてあまりの衝撃に目がチカチカする……。

「やっぱりここだと思ったんだ、大当たりー！ 昔からいつも二人ともここに隠れてたの覚えてるもん！ もうあたしだってここまで登って来れるようになったもん！」

そんな事お構いなしで小夜が飛び上がって喜んでいた。そっか、そうだな。もうここには小夜だって上がって来れる様になったんだ。元々は小夜に頼まれて那奈を捜しに来たんだし、さすがにこれは怒れないよな……。

「ねーねーねー、那奈も翔ちゃんも早く初詣行こうよー！ おみくじ売り切れて無くなっちゃうよー！」

「……あーあ、ついに小夜にもこの場所が見つかったか、かくれんぼも終わりだな……」

「……そうだね、お喋りも終わりだね……」

せつかくの一生一代の大チャンス逃してしまった俺は渋々二人と一緒に初詣に行った。ウジウジと女々しくふてくされる俺とは対照的に、那奈の機嫌は良くなったみたいで小夜と手を繋いでとても楽しそうに見えた。

賽銭箱の前で隣で長々と願い事をしている那奈を横目で見ながら、

俺は今年の決意を胸に刻み込んだ。今年こそ自分の気持ちをしっかりと伝えて那奈の頼りになれる様な強い男になると。

「……んでさ、那奈は何を願ったんだ？」

「……普通聞く？ バカじゃないの？ それより、ちゃんとバイクの上達と安全祈願したの？」

「……忘れてた、バイクの事。ヤバい、こんな事では絶対に罰が当たる。とりあえず交通安全祈願の御守りは買っておかないとな。恋愛成就なんて願ってる場合じゃねーや、トホホ……」。

第38話    youthful    days

二月、北風が強く関東圏外では記録的な大雪が降り、人も犬も猫も経済も冷え込んでいるこの季節に熱く燃え上がる小さな胸に希望と不安を抱えて活発に走り回るのは若く逞しき大和撫子。

そう、一年に一度の女子の勇氣と技量が試される裁判のあの日、バレンタインデーがもうそこまでやってきているのだ。

「今年は何にしようかしら？    ロイズ？    ゴディバ？    ピエールマルコリーニもいいかしら？    いやん、どれも美味しそうで困っちゃう〜！」

「千夏が食べる訳とちゃうやろ？    どうせ全部義理チョコなんやから安いもん買い占めてバラまきやええやないか？」

「や〜ねえ翼ったら、義理じゃないわよ、全部本気チョコよ！    一人残らずみんなにアタシの美貌と慈愛をプレゼントしてあげるの！    それがセレブの余裕ってもののよ！」

「オマエの場合、『慈愛』やのうて『自愛』やろがポケッ！」

「もちろん、男の子だけじゃなくて翼や那奈や小夜にもプレゼントしてあげるからね！    みんな愛してるわ、I love you！」

やたらテンションの高い千夏のように学校の教室内でも女子同士の話



し声もいつもより活気があって、それを男子達もそわそわしながら聞き耳を立てる様に一見一句チェックしていた。

「今年は一体何百何千個のチョコレートが俺の元に届くのかな？  
これだから色男は苦勞するぜ……」

自称学園のジャーニーズ・とほざく薫が前髪をいじりながら生意気に足を組んで椅子に座っている。すると、その勘違い男の顔面に黒板消しがボツツと直撃した。もちろん、投げたのは翼だ。

「何が何百何千個やねん！ 去年だって手渡ししてくれる女はおるか、ロッカーや下駄箱に一つもチョコが入つとらんでショボーンとしとったやないか？ 負け犬が見栄張るなやアホ！」

「何を仰られますかこのお子ちゃまは？ あれから俺の家にはたくさんチョコレートが全国から贈られてきてたんだぜえ？ でも全部代金引換で送料着払いだったけどね」

「せやからそれも『贈られてきた』とちゃうねん！ オマエ自身が通販で『買った』んやろが！？」

「えっ、まさかそれってヤキモチですか？ 大丈夫だよ翼、今年は何からの愛情チョコ一つしか一切受け取らないぜダーリン！」

「ダーリン言うな、気持ち悪い！ オマエに食わせるチョコは無え！ 僕はオトン一人に世界でたった一つの特製ラブラブチョコをプレゼントするんや！」

帰り道にある駅前商店街もあちこちの店でバレンタインデーを狙ったチョコの特売セールが開かれていて、私達の学校の女子生徒以外に他校の女子生徒達も商品を色々漁っていた。

ちよつとこの前まではあちらこちらにサンタクロースやトナカイが飾られていたというのに、たった二カ月の間であつという間に街はバレンタインデー一色に染まっていた。

「ねえねえ、小夜はバレンタインデーどうするのぉ？ 誰にチョコを贈るのかもう決まってるのぉ？」

「えっーとね、あたしは麻美ちゃんの家で麻美ちゃんと一緒に手作りチョコ作るんだー！ あげる人はねー、麻美ちゃんが彰宏お兄さんにあげて、あたしは瑠璃ちゃんと航クンにプレゼントしてあげるの！」

あのクリスマスの日以来、麻美子は体調と精神状態を考慮して学校を休んでいる。毎日一緒にいたメンバーがいないのはちよつと寂しいけど、麻美子の事を想えばこれで良いのだと思う。

下手に外に出て何も事情の知らない心無い人間達から非難を受ける事も無いし、家では愛する彰宏さんといつも一緒にいれる訳なのだから今の麻美子にとってはこの環境が一番だろう。

小夜もちよくちよく遠藤家に行つて瑠璃も連れて一緒に公園に遊んだりしているらしいし、小夜から話を聞くかぎりでは体調も良好らしいのでとりあえずは一安心。

「手作りチョコ作るの楽しみだなー！ 瑠璃ちゃん、喜んでくれるかなー！？」

小夜と手作りチョコか、そういえば小夜は昔から私と翔太宛てに毎年果敢に手作りチョコ作りに挑戦するのだが、ハート型にしようとするとか顔の尖った悪魔みたいな形になってしまったり、見様見真似でトリュフを挑戦したらただのカチカチチョコボールになってしまったりと散々だったがはたして今年は大丈夫なんだろうか。

「……………中身はただのチョコレート、食べて死ぬ訳じゃないから」

まあ、今年の毒味は航が務めてくれるから私の口に回ってくる事は無さそうだな。いや、無いと祈りたい。航なら何か何を食べても体調を崩しそうな気がしないし、この大きな口ならカチカチチョコボールでも難なく噛み砕くだろう。

「えっ！？ 航先生一人で小夜ちゃんの手作りチョコを独り占めですかあ！？ いいなあいいなあ、俺も小夜ちゃんの手作りチョコ食べたーい！」

何も知らない哀れな男め、小夜の殺人クッキングの犠牲になった事がないからそんな戯言を叩けるんだ。市販のチョコを溶かして型で固めるだけの簡単作業のはずが、それが小夜の魔法の手にかかればあつという間に猛毒スイーツの出来上がり。精神的にストレスを感じて腹痛を引き起こす魔のチョコレートだというのに……。

「大丈夫だよー！　じゃあ薫ちゃんの方もあたしが作ってあげる！」

「マジで！？　ヒヤッホーイ！　これで今年は小夜ちゃんと千夏ちゃんの分で二人分のチョコ確定だぜえ！」

「……何百何千個の話はどこに行っ たんやオマエは……？」

「もちろんまだまだチョコプレゼントの募集は受け付けてるぜえ！　翼もつまらない意地なんて張らないで、頭にリボンを付けて生まれたままの姿で俺の腕の中に飛び込んできなベイビー……！」

「中　産の農薬たっぷりアーモンドチョコなら山ほど食わしたるで」

「ちょ、ちよっと、それ笑えないっス」

まあ、わざわざ農薬なんて持ってこなくてもコイツは小夜のチョコ爆発であの世行き決定。可哀想かもしれないけど、本人が望んでいるのだからしょうがない。安らかにお眠り下さい、アーメン。

「もちろん、那奈の分もいつも通りちゃんと作るから楽しみにしててねー！？」

「……い、いや、私は今年、遠慮しとく……」

「えっー、何でー！？」

ちなみに私にとってはバレンタインデーなんてものは特別な日でも何でもない。毎年、小夜からチョコを貰っているくらいで自分から男子や家族にチョコをあげた事なんて一度も無い。

だって、誰からも欲しいなんて言われた事が無いし、女の子だから男の子にあげなければいけないなんて義務みたいに決めつけられる風習がどうも好きになれなかった。バレンタインなんてただのお菓子メーカーの売り文句であって、クリスマスにケーキが売れるのと同じようなものだ。

それに、毎年この日は私にとっては憂鬱な日に他ならない。たださえ誤解されやすい私と翔太の関係を、さらに他人から冷やかされまくる魔の一日。

毎年あちらこちらの大人達から『彼にはチョコあげたの?』とか『良いわね、毎年チョコをあげられる相手がいて』とか余計な事ばかり言われる。

あまりにしつこいのでそんなもの渡してないと説明すると、『何であげないの?』とか『照れてるの?』なんてこれまた余計な勘ぐりを入れられて非常に迷惑な思い出しかない。

翔太にチョコをプレゼントするなんて事はこれまで私の頭の中では絶対に有り得ない事だったし、かといって翔太以外の人間に義理チョコなどを贈ったら逆に意識して避けていると思われかねない。

だから、私はバレンタインデーは誰にもチョコを贈らない事に決めた。そうすれば周りに変な誤解を与える事も無いし、冷やかされる事も無い。それで毎年このうつつといういい記念日を何とか切り抜けてきた。

でも、今年は何か決意が鈍ってしまっている。今までならそんな話には自分には関係ないと迷わず否定出来たのに、心の中に引っ掛かる一つの想いが膨らみ過ぎてそれを消し去る事が出来ない。

「翔ちゃんは男の子だからチョコ欲しいでしょ？ だから今年も翔ちゃんの分はあたしがちゃんと作ってあげるから待っててね、翔ちゃん！」

「……えっ、俺の分？ あ、ああ……」

「どうしたのー？ 翔ちゃんまでチョコいらなのー？」

「……いや、そういう訳じゃねーけど……」

「何か翔ちゃん、最近元気ないよー？ 翔ちゃんおかしいよー、ねー那奈？」

「……えっ？ う、うん、そうだね……」

「あれー？ 何か那奈も元気ない、二人ともどうしたのー？」

「……いや、別に……」

「……うん、別に……」

「何か変なのー」

学校でも家でも、私は翔太とともに会話が出来なくなってしまう。父さんやいづみさん、お姉がいる時にはまだ一つの部屋に一緒にいれるけど、二人きりになってしまうと私達の間にある微妙な空気に耐えられずに私は自分の部屋に逃げてしまう。それは翔太も同

じみたいで、何の用も無いはずなのに外に出て行ってしまったりする。

麻美子が一人の男性との恋に命をかけたあの行動。それを目の辺りにした私の心に芽生えた、いや、昔から胸の奥に抱えていながらずっと隠し通してきた胸がキュンと痛くなる苦しみに似た感情。

翔太の顔が見れない、翔太の目を見る事が出来ない。もし翔太と見つめ合ってしまったら、きつと心に無理やりしまい込んでいるこの気持ちを見透かされてしまいそう。

翔太に話しかけられない、翔太と会話を交わす事が出来ない。もし翔太に話しかけられたら、喉の奥に仕えている本心の言葉が出て来てしまいそう。

「じゃーね二人とも、また明日ねー！」

翼達を駅で見送り、小夜を家まで送り届けて二人だけの五分足らずの帰り道、私と翔太は横に並んで黙り込んだまま歩いていた。

二月上旬の冷たい空気の中、寒さなんかちっとも感じない。心拍数は上がり、顔や耳は必要以上に火照り、呼吸をするのも息苦しい。首に巻いたマフラーで口を隠して、息遣いを見られない様にしても吐いた息が白くなって前が曇って見える。

「……那奈？」

一瞬、心臓が止まりそうになった。久し振りに聞いた翔太の呼び声。

でも、なぜかうまく言葉が出てこない。焦った私は前を向いたまま小さく頷いて何とか返事をした。

「……あのさ、唐突な話なんだけどさ……」

「……う、うん……？」

「……五年前のバレンタインデーって、覚えてる？」

「……えっ？ 五年、前？」

五年前、というと私と翔太がまだ小学校四年生だった時の話。まだ恋愛なんてものを全く考えもなかった無邪気だった頃、一つの家に同居する事にも慣れてきた私達は家でも学校でもはしゃぎ回って遊んでいた。一緒に通学して勉強して、帰ってきてゲームとかして遊んで、食事を済ませてまた夜遅くまで一緒に遊んで……。とても楽しかった思い出ばかりだ。

「……あの日さ、母さんもまだ入院してて、親父さんは騒動起こして警察に保護された優歌さんを迎えに行つて、俺と那奈だけで夕飯の弁当買いに行つたじゃんか？」

あの頃はお姉が荒れていていづみさんもいなかったの二人だけで夕飯を済ます事が良くあった。そういう日は部屋で飛び回って遊んでいても怒る人がいなかったから、私はどんな遊びをして翔太を困らせてやろつかワクワクしながら食事をしていたのを覚えている。



「……弁当買って帰る途中に、えーと、誰だっけ、真理ちゃんだったけ？ 小学校の途中で引越しちゃったあの子……」

「……あつ、天野真理かな？ 覚えてるよ、二年生の頃から私達と同じクラスだった子でしょ？」

「……いたいた、天野真理。懐かしいな、彼女は私と同じくらい運動神経が良く、気が強い子だったなあ。体育の授業や休み時間の時は私や翔太と争い事になって良く口喧嘩したっけ。」

「……あの子が引越す前日に弁当屋の前にいた俺の元まで走ってきて、最後の思い出って事で俺にチョコを渡してくれたんだよね、『本当はずっと好きだった』って……」

「……うん、そういえばそんな事あったね、側にいた私もビックリした……」

懐かしい昔話に力チ力チになっていた私の心の緊張は少し解けて、久し振りに翔太とまともな会話をする事が出来た。何か、小さかったころの自分に戻った様な感じだった。

「……俺さ、初めて母さん以外の女性からチョコを貰えて有頂天になっちゃって、大事に弁当のビニール袋と一緒にに入れて帰ってヘラヘラ浮かれていたら、那奈がうっかりその袋ごと電子レンジに入れ

て暖めちゃったんだよな……」

「……ああ、あれ、うん、あれね……」

「俺もそれまですつかりチョコの事を忘れてて、何か甘い匂いがしてきてやつとそれに気付いて急いでレンジを止めたけど、見事に弁当の容器がチョコレートコーティングされて……」

「……うん、覚えてる、うん……」

「気付かなかった俺も悪いけど、那奈のあのチョンボはヒドいよ？ お陰で弁当はグチャグチャだし、それを親父さんに話したらメチャクチャ起こられて真理ちゃんにはお詫びの手紙書かなきゃいけなくなつたし、もうバレンタインデーチョコなんて懲り懲りだつて思つたよ……」

「……ごめんね、翔太。あれ、実はワザとなんだ。そうなる事をわかつて私はあの袋をレンジに入れた。特別真理に恨みがあつた訳じゃないけど、幼かつた私は喜ぶ翔太を見て頭にきてしまった。みんなに馬鹿にされるのが嫌でチョコを渡せない私を差し置き、翔太が他の女子から告白されるのが許せなくて、とても不安だった。翔太が私の側から離れてどこかに行つてしまいそうな気がして凄く怖かった。今考えると、なんて嫌な女だったんだろう私……」

「……んで、その事なんだけどさ……」

「……な、何？」

「……結局その後さ、那奈から謝罪の一つもないんだけど……？」

「……じゃ、謝罪？」

「……どういう事？ いまいち翔太の言っている事が私には良くわからなかった。でも、翔太の態度がさっきまでと違う。何かを言いたげな迫ってくる雰囲気になり私は頭が真っ白になってきた。」

「だ、だってあれから俺は毎年誰からもチョコ貰えなくなっちゃったんだぞ？ これはきつとチョコの神様の祟りだよ、間違いない、絶対そうだ！」

「な、何よ祟りって？ チョコを貰えないのは翔太がモテないからでしょ？ 私のせいだって言うの！？」

何か変な口喧嘩に発展してしまった。確かに悪いのは私だけど、ワザとやったなんてとも言えない。そんな事言ったら、翔太に私の気持ち伝わっちゃう。何とか、何とか話をそらさない……。

「だっ、だってそうだろう？ あの事故は明らかに那奈の責任じゃないか！？ 何かずつとうやむやにされてきて、俺は納得してないんだからな！？」

「……な、何をそんな古い話にいつまでもこだわってんのよ！ 今更そんな事言われたって、じゃあ私はどうすればいいの、謝れば気が済むの！？」

……ダメ、売り言葉に買い言葉で全然話題を変える事が出来ない。  
いつもだったらこんな話冷たく突き放せるのに、翔太の気迫に押さ  
れて金縛りにあったみたいに動けない……。

「これでもあのチョコは俺の大切な子供の思い出の一つだった  
んだぞ！ 謝らなくてもいいから、弁償してくれよ弁償！？」

「……べん、しょう……？」

「……い、いや、あの、弁償っていうか、その……」

突然訪れた沈黙。さっきまで威勢の良かった翔太が口にしてしまっ  
た言葉を恥ずかしがる様に下を向いて黙り込んでしまった。

私は『弁償』という言葉に最初は少し戸惑ったけど、すぐにその言  
葉に含まれる『意味』がわかってしまった。それはつまり、翔太は  
私の……。

次の瞬間、私は一気に頭に血が上って顔から火が出そうくらい真  
っ赤になって、同時に心臓の鼓動も高鳴りまともに翔太の顔を見れ  
なくなった。

「……弁償、すればいいの……？」

「……えっ？」

「……弁償って、同じ物を返す事だよね、同じ物って、チョコだよ

ね……？」

「……いや、あの、それは、その……」

恥ずかしさを押し殺して恐る恐る上目遣いで翔太の顔を見ると、物凄く困った表情をしてモジモジしていた。私から視線を反らし、言葉に詰まってうつむくその顔は少し赤く染まっているように見えた。

「……私が、翔太にチョコを渡せばいいの？　そうしたら、翔太は私の事を許してくれるの……？」

「……いや、許すとかそんな事じゃなくて、だからその……」

あと少し歩けば家の玄関なのに、冷たい風が吹く曇り空の下で私はこの場所から動く事が出来なかった。足に根っこでも生えたみたいに動けない。でも、決して寒くなんてない。生まれて初めて体験する強い心臓の鼓動に体中が熱くなり、足元のアスファルトが溶けてしまいそうだった。

「……真理と同じチョコなんて用意出来ないよ？　全く同じ物なんて返せないよ？　それでもいいの……？」

「……いや、真理ちゃんの事なんて、別にその……」

「……私の、チョコでいい？」

言葉を選べずに単刀直入に聞いてしまった。恥ずかしくて消えてしまいたいくらい苦しいけど、もう引く事なんて出来ない。私は真っ赤に照れた顔を見られない様に巻いているマフラーに顔を半分以上うずめて翔太の答えに耳を澄ました。どんな言葉でも絶対に聞き漏らさない様に……。

「……俺、那奈のチョコが、ほ、ほ、ほ……！」

「……ほ？」

「ほ、ほ、星見えるかな、今夜!？」

「……ハア？」

「……えっ？ どういう事？ 何で急に星の話になる訳？ 全然理解出来ない、何が言いたいのだよ!？」

「……何それ、意味わかんない……」

「……ほ、ほら、俺って結構星空眺めるの好きじゃん!? どっちかつつーと俺は夏の夜空より冬の夜空の方が好きなんだよな、何っーか、空気が澄んでて綺麗に見えるっつーか……」

翔太の目が完全に泳いでる。逃げた、またコイツ逃げやがった! 人にここまで覚悟させてここまで言わせといて、あんまりだよ、あ

んまり過ぎる！ それでも 玉付いてんのかよこの腰抜け男！！

「ほ、ほら、冬にしか見れない星座とかあるじゃん？ 俺はオリオン座とか好きだなー、あの砂時計みたいにくびれている所とか良いよなー？ あつ、そうそう、砂時計って言えば今度映画やるじゃん？ 何かあの話ってさ……」

「……最っ低……」

「えっ？ な、何どうしたの？ 那奈、もしかして怒ってんのか？」

期待させるだけさせられて一気に谷底に叩き落とされた私はすっかり熱も冷めきつて涙はおるか溜め息すらも出なかった。何が砂時計だバカヤロー、もう一切翔太に期待なんてしてやらない！ 私は頭を掻いてヘラヘラしている翔太を無視して玄関の鍵を開けて家の中に入った。

「……ちょ、ちよつと、何で玄関閉めようとしてんだよ那奈？ 俺、入れないじゃん！？」

「いいよ、入んなくて」

「いやいやいやいや、寒いつて！ 凍死しちゃうつて！ 頼むから俺も家に入れてくれよ那奈！？」

「バイバーイ」

「えっー！？ マジで鍵閉めてるし！ ちょっと、冗談だろ！？  
オーイ！！」

二階の自分の部屋に戻った私は一息ついてベッドに寝転んだ。やっぱりそうだったんだ、この胸の苦しみは今に始まった事じゃない。もっと昔から確実に私の中に芽生えていた感情だったんだ。

「……………もしもし、小夜？ 私だけど……………」

あの時の弁償、ちゃんと翔太に返そう。何であんな事をしてしまったのか、そして今、私が翔太に対してどんな感情を抱いているのか、全部一緒にまとめて翔太に……………。

「……………今度のチョコ作り、私も参加していいかな……………？」

ケータイ越しの小夜の喜ぶ声が何となく心地良かった。もう苦しむのはやめよう。悩むのはやめよう。自分に嘘をつくのはやめよう。私はやっぱり女の子で、恋をするのはいけない事では無いのだから……………。

「那奈ー！ 俺がずっと一緒におっちゃん！！ だから開けてー！！？」

「凍死して星にでも砂にでもなっちゃえ、このバカーー！！」



「痛つてええええええ！！」

窓から投げた目覚まし時計が翔太の顔面に直撃して『チン』という  
良い音を立てて地面に落ちた。アンタなんかこの時計で充分、ベル  
が鳴る設定時間まで外で反省してなさい！

一大発起したからにはもう逃がさないんだから。物凄く恥ずかしい物凄く不安だけど、目一杯女の意地を見せてやるから覚悟しろよ、風間翔太！

### 第39話 君が好き

「ほら、ちゃんとしつかり混ぜないと固まっちゃうよ!? 味見なんかしてる場合じゃないでしょ小夜!？」

「だって味見しないと美味しいかどうかわかんないもん! ペロツ、やっぱり甘くて美味しーい!」

「市販のチョコ溶かしたただけなんだから当たり前じゃない!? アンタは作りに来たの、食べに来たの!？」

ずいぶん久しぶりにやってきた遠藤家の台所。バレンタインデー当日の日曜日、私は小夜や麻美子と一瞬に手作りチョコレートの創作に取りかかっていた。まあ、手作りって言ったってチョコを溶かして型に流し込むだけの簡単なものだが。

「……でも、まさか那奈さんまで手伝ってくれるなんて思ってたませんでした、那奈さんも誰か男の人にチョコをあげるんですか?」

「……いや、あの、それはね……」

「……あつ、那奈さんがチョコあげる人なんて一人しか考えられないのに、何か野暮な事聞いちゃいましたね、ごめんなさい、ウフフ」

「……麻美子、アンタ少しずつ性格悪くなってきたくない?」

「えっ、そうですか？ そんな事ないと思いますよ、那奈さんが意識し過ぎてるんじゃないですか？ ウフフ」

「……このヤロー……」

あのクリスマスの日以来に再会した麻美子は思っていたよりも元気で明るく楽しそうだった。体の調子も良く、お腹の赤ちゃんも順調に育っているらしい。

現在妊娠五ヶ月。一時的の体調不良からは脱出して安定期に入りつつある。見た目でも若干お腹が膨らみ始めて、小柄な体ながらも妊婦さんなんだなっとなる様になってきた。しかしそれ以上に何か全体的に……。

「……っ！ 麻美子、アンタちょっとさ……」

「えっ、何ですか？」

「……太った？」

「……あゝ！ 那奈さんにも言われた〜！ この前も彰宏兄ちゃんに言われてショックだったのに〜！」

「……そんな、泣かなくなっただけいいじゃない？ 食欲がある事は良い事なんだからさ……」

「……だって、だってみんなしていっぱい食べないとお腹の子供が大きくなれないって言うから〜、好きで太った訳じゃないのに〜！」

「いいなー、いいなー！ 麻美ちゃんご飯いっぱい食べれていいな  
ー！ でもこれからお腹の赤ちゃんもどんどん大きくなるから、麻  
美ちゃんもつとおデブさんになっちゃうねー！？」

「……う、うう、うわーん！！」

「小夜！ アンタ少しは言葉を選びなさい！」

やれやれ、妊婦さんは精神的にもずいぶんとデリケートの様だ。し  
かし、あの麻美子が本当にお母さんになるなんて今でも信じられな  
い。ついこの前まで一緒に学校に通っていたというのに。

「……で、学校はどうするつもりなの？ 中等部はともかく、もう  
じき私達も高等部進級だよ？」

「そーだよ麻美ちゃん！ 学校に麻美ちゃんがいないと寂しいよー  
！ 赤ちゃん産んだらまたあたし達と一緒に学校行こうよー！？」

手のひらがチヨコまみれの小夜に両手を握られた麻美子は一瞬寂し  
そうな顔をしたが、すぐにニコツと微笑んで小夜と私の顔を見て明  
るい声で喋りだした。

「……学校、辞めるつもりです、もちろん音楽も……」

「えー、そんなー！？　麻美ちゃんそんなのヤダよー！？」

突然の決意の言葉に小夜が必死に抵抗したが、麻美子はすでに自分の人生の歩む道を決めたみたいで、その決断が揺らぐ事は無かった。

「……確かに高校までは行きなさいってお母さんもお父さんも彰宏兄ちゃんも言ってくれたんですけど、どうしてもこの子を置いて学校に行くなんて考えられなくて、いつもちゃんとそばにいてあげたくて……」

麻美子は下に目を落として自分のお腹を見て両手で包み込む様にゆつくりと手を添えた。その優しい目はすでに母親の瞳をしていた。

「……音楽の事も井上さんとちゃんとお話して、真中啓介さんにも伝えていただきました、決まっていたお仕事もちゃんと丁寧にお断りして……」

「……でもね麻美子、ちょっと不安な話になるけどさ、音楽はともかく学校は中卒だと色々これから苦労する事があると思うよ？　アンタ本当にそれでいいの？」

私の余計な不安を吹き飛ばす様に麻美子はニコツと満面の笑みを浮かべて自信たっぷりにその問いに答えた。

「大丈夫です、私、一人じゃないから、彰宏兄ちゃんがそばにいてくれますから！」

……なるほど、これが愛の力ってやつか、あんなに誰に対してもオドオドしてた麻美子がこれだけ強い女性になれるんだから効果は相당한ものなんだろう。私のつまらない心配など不要だったようだ。

ところで、その肝心の旦那様であの時は見事なダメ男っ振りを発揮して株を下げた彰宏さんだが、改めて麻美子と一緒に力を併せて生きていく事を決意して新たな仕事を探していたところに意外な所から就職のお声がかかった。

「……彰宏兄ちゃん、仕事先でイジメられてないですよ？ この前も体にアザが出来てたんですけど、大丈夫ですよ……？」

「……それは、多分『かわいがり』ってやつじゃないかな、お姉の言葉で言うところの……」

事もあるうちに、あのひ弱そうな彰宏さんがお姉が所属している格闘技団体の専属ドクターとして再就職したのだ。もちろん話を持ちかけたのはお姉なのだが、偶然にもその話を聞いた団体の社長さんが遠藤先生とは昔からの知り合いで、麻美子への同情とあまりにへたしな彰宏さんを心配して雇ってくれたのだ。

そして今は格闘家の怪我とはどんなもののかを学ぶ為に代表さんやお姉、その他の選手達にリングの上でその身をもって学習させられているらしい。『アイツの為だ』とお姉は笑いながら私に話したが、彰宏さん本人は毎日青アザが絶えないようだ。

「……本当に優歌さんには心から感謝しています、私達の恩人です、赤ちゃんが産まれたら一番最初に優歌さんに見せてあげたくて……」

「……『鬼』の好物は赤子だっていうから、食べられないように気をつけてね……」

お姉が恩人ねえ。あの人のせいで人生が狂ってしまった被害者は何人かいるらしいが、恩人なんて言ってくれる人を見るのは初めてかもしれない。こんな話はめったに無いだろうしとてもありがたい話だ。

でも、私は麻美子の気持ちをお姉の前で話せる勇気がない。多分お姉はこの話を聞いて喜んでくれるかもしれないけど、同時に辛い思いをさせてしまうかもしれない、お姉の過去を知ってしまった今ではとても私には……。

「……那奈、麻美ちゃん、出来たよー！ チョコを全部型に注いだよー、後は冷やして固めるだけだねー！」

そうこうしてたらいつの間にか手作りチョコの行程は完了していた。溶かしたチョコが若干余ったが、無事に予定通りの数の形に隙間なくちつきりと流し込む事が出来た。後は冷蔵庫に入れてしっかりと固まった完成品を待つのみ。

「チョコ、チョコ、チョコーたべたーい！」

「瑠璃ちゃん、チョコもうすぐ出来るよー！　ちゃんと瑠璃ちゃんの分も作ったからねー！」

二階から瑠璃とそれを追って航が降りてきた。調理中に瑠璃がつまみ食いしないように航に食い止めてもらっていたのだが、隙を見て降りてきてしまった様だ。

「チョコまだー？　いまたべたい、いまたべたい、いまたべたいー！！」

「じゃあ瑠璃ちゃん、この余ったチョコなら食べてもいいよー！」

「わーい！　チョコあまーい、おいしー！」

「……………瑠璃、食べ過ぎだ、鼻血が出るぞ」

「指ですくって舐めるんじゃないの、行儀悪い！　ちゃんとスプーンか何かで食べなさい！　ちよつと聞いているの？　小夜、瑠璃！？」

やれやれ、瑠璃ももうすっかり普通の女の子みたいに元気になって、小夜の影響かちよつとずつイタズラ好きになってきたみたいだ。歩く事も喋る事も出来なかった頃を忘れてしまうくらい、今では家の中を小夜と一緒にドタドタ駆けずり回っている。

これならもうじき普通の子供と同じ様に学校に行って勉強や運動が出来る様になるだろう。遠藤先生の言葉を借りるようだが、本当にこの回復振りは奇跡としか言わざるおえない。



「どっしようかなー？ あたし一人でチョコ全部食べちゃおうかなー！？」

「たーよ、ズルいー！ るりもたべたいー！」

逃げる小夜、追う瑠璃、そして瑠璃が転ばないように後ろを追いかける航。時計の針の様にクルクル家中を追いかけてくしている三人を眺めながら、麻美子と最近の学校の出来事を話していたらあっという間に三十分が過ぎた。もうそろそろ冷蔵庫から出して型を外してもいいだろう。

「うわー、麻美ちゃんのチョコ可愛ーい！ ハートのデザインの中に男の子と女の子がいるよー！」

「……一応、私と彰宏兄ちゃんのつもりなんです、このチョコみにとろけちゃうような関係でいられたらいいな、なんて、エヘッ」

「はいはい、どうもご馳走様」

もうすっかり新婚さん気分の様だ。見てるこっちが妬けてしまって恥ずかしくなっちゃう。日頃仕事でお姉達にボロボロにされてる彰宏さん、喜ぶだろうなあ。

「……ところで、小夜ちゃんはどんな型にしたの？」

「あたしねー、ウサギさんとゾウさんとキリンさん！ ちゃんと出てくるかなー？」

「コラコラ！ そうやって無理やりバキバキ型を外すんじゃないの！ もっと丁寧にやりなさい、って、あーあ……」

叩いたり振ったり型を強引に外すもんだから、まあ予想通りと言うか見事なヒドい出来映え。ウサギは耳がポツキリ割れてスフィンクスみたいになってるし、ゾウは鼻がなくなって耳の怪物、キリンに至っては首が真つ二つ、何て残酷な風景だろうか。

市販の型を使いチョコを流し込むだけの単純な作業にもかかわらず、毎年この完成度なのだから本当に小夜の芸術才能には恐れ入る。これじゃとても食欲が湧かない。

「……だからあれほど最後まで丁寧にやりなさいって言ったのに……」

「あれー、おかしいなー？ でもとりあえず完成！ ウサギさんは瑠璃ちゃんに、ゾウさんは航クンにあげるね！ あっ、でも航クンは背が高いからキリンさんの方がいいかなー？」

「……キリンさんが好きです、でもゾウさんはもっと好きです」  
「キリンさんおいしいー！」

「……ちよつとアンタ達、もう食べちゃうの？ つーか、何で違和感なくそんなにパクパク食べられるの？」

……うーむ、作った小夜も相当だが、それを平気な顔して食べてしまふ栗山兄妹恐るべし。まあ、元は市販のチョコだから不味くは無いだろーし、作った本人や貰った人間が嬉しそうにしてるから別にいいのかな？

小夜達は早々に出来たばかりのチョコをその場で仲良く平らげてしまったが、私と麻美子は人にあげる為に作ったのだから食べてしまふ訳にはいかない。出来たチョコをに箱に入れて本に書いてあったラッピングを真似して丁寧に包んだ。

「……さっきは隠れて見えなかったんですけど、那奈さんはどんな型のチョコにしたんですか？」

「……内緒……」

「えっ、内緒だなんてちょっと意外です、那奈さんも女の子みたいな可愛いところがあるんですね！ ウフフ」

「もう、うるさいなあ！ 千夏みたいなツツコミしないでよ！」

ついに麻美子にもニヤニヤしながら冷やかされる様になっちゃったか。この話を聞かれたら学校で翼や千夏に散々イジくり回されるんだろうなあ。でも仕方ない、自分でこの煮え切らない気持ちに終止符を打って決めたんだ。もう迷わない、度胸だけなら他の女子に負けない自信があるもの！

「……那奈さん、一緒にこれを持って行って下さい！」

夕方になって家に帰ろうとした私達を呼び止め、麻美子が玄関まで見送りに来てくれた。その手には彰宏さんにあげるチョコとは違う、別のラッピングがされた箱があった。

「……これ、優歌さんに渡して下さい！ 女の子同士でチョコを渡すなんておかしい話ですけど、どうしてもこの前のお礼がしたくて一緒に作っただんです！」

「お姉に？ うんわかった、渡しておくね」

きつと麻美子はもっとちゃんとしたお礼がしたかったんだろうが、今のこの体じゃ出来る事は制限されるだろうし、お姉もあまりかしこまったお礼をされると『うぜえ』と嫌がるだろう。甘い物辛い物何でも問わず食べ物が好きな人だからこれくらいのプレゼントが一番良いのかもしれない。

「那奈の作ったチョコ見てみたいよー！ 食べないでどこかに飾ってくれたら見に行くのにー！」

「飾ったってアンタが来たら食べちゃうんでしょ？ これは小夜に分じゃないからダメー！」

「うー、那奈のイジワルー！」

帰りの電車の中でも小夜が指をくわえてチョコの入った箱をジッと見つめている。隙を見せたら食べられてしまいそうで怖い。駅から帰り道、小夜の頭を押さえてチョコを奪われない様に家路を歩いた。

他人にあげる物なのにそれを必死になつて守る自分、こんな事初めてかもしれない。自分の無意識にした行動にちよつと不思議で気恥ずかしい気持ちになった。

でも、それもそうだよ。このチョコには今の私の精一杯の想いが詰まっているんだから、小夜に食べられてたまるか！

「……帰ってきちゃったなあ……」

小夜と別れて家の玄関の前に着いた私は緊張のピークに達していた。この時間ならもう翔太はいつものバイクの練習から帰ってきているはず。

どんな顔してチョコを渡せばいいんだろう。どんな言葉でこの気持ちを伝えたらいいんだろう。そんな事より、翔太はちゃんと私の気持ちを受け取ってくれるのかな。これから私と翔太は今までみたいに仲良く出来るのかな……。

色んな期待と不安が私の心の中を巡り廻って、押しつぶされちゃうくらいに怖くなった。でも、もう逃げたくない。誤魔化したくない。これ以上自分自身に嘘をつき続けるなんて出来ない。震える両足を手でパンパンと叩いて気合いを入れて、私は玄関のドアを開いた。でも次の瞬間、私の気合いは見事に空回りした。いつも見慣れた男性用のスニーカーが玄関の靴置き場に無い。外に出て車庫を覗いてみてもバイクやヘルメットなど用品も持ち出されたままだった。

「……あれ、まだ帰ってない……？」

確か今日の練習は父さんと一緒に近場の駐車場を借りてターン中心の予定だったはず。いつもなら暗くなる前には練習を終えて帰ってくるはずなのに、私が家に到着した時はすでに夕方五時半を回っている。何かあったのだろうか。

「……ああ那奈か、お帰り……」

「……お姉？ 何、どうしたの……？」

おかしい、明らかにおかしい。一人で留守番していたら寂しくていきなり飛びついてちよっかいを出すお姉が暗い部屋の中でテーブルの椅子に腰掛けてうつむいていた。凄い嫌な胸騒ぎがする。まさか、まさか……？

「……ねえ、お姉？ 何かあったの？ まさか父さんや翔太に何か……！？」

「……翔太が、事故った……」

「……えっ！？」

「……さっき、虎太郎ちゃんから電話があったんだ、すぐに病院に担ぎ込まれたらしいんだけど……」

私の頭の中に貴之さんの事故の映像がフラッシュバックした。狭い場所で練習してただけなんだからそんな大きな怪我じゃないはず。でも、でも、もし転倒した時に打ち所が悪かったりしたら……。

「……病院って……、やだ、そんな大きな事故じゃないんでしょ！  
？ 車道走ってた訳じゃないんだから、命に関わる様な話じゃないんでしょ！？」

「……那奈、落ち着け！ 辛いかもしれねーけど、ちゃんとあたしの顔を見て話を聞きな！」

何それ、辛いつて、何よそれ！？ 翔太に何があったの！？ ……  
まさか、死んだ……？ そんな、そんなの嘘だ！

「……嘘でしょ、嘘だよお姉！？ 冗談でしょ！？ だって父さんだって一緒だったんでしょ！？ いつも安全第一で練習してたじゃない、なのにそんなの嘘でしょ！？」

「那奈、頼むから落ち着け！ これは現実なんだよ！ どうしようもねーんだよ！ アイツがバイクの世界に生きる事を選んだ時からあたし達だって覚悟していた事だろう！？」

「だって翔太は貴之さんの叶えられなかった夢を引き継いで今まで走ってきたんだよ！？ 貴之さんがいづみさんや私達に残してくれたたった一つの忘れ形見なんだよ！？ それに、まだプロデビューー

だつてしてないし、まだ私と同じ中学生なんだよ！？　まだまだこれからいっぱい色んな事をして、色んな人達と出会って、色んな場所に行つて、……まだ、まだ何もしていないじゃん！！」

「……もう止める那奈！　あたしだつて辛いんだ……！」

……お姉の反応に私は茫然としてその場に座り込んだ。手に持っていたチョコの箱も下に落としてしまい、ラッピングで付けた星形の飾りが床に飛び散った。

一番、一番私が恐れていた事。あの時、翔太やいづみさんと目の前で見た貴之さんの事故。翔太がバイクに乗りたいたいと言いつ出した時、私が最初に頭に浮かんだあの惨劇。

あの二の舞になつてほしくない。練習でもレースでも無事で帰ってきてほしい。私が、父さんより、母さんより、お姉よりいづみさんよりも心配して気遣つてきた翔太のバイクでの事故。ついにそれが今日、起こってしまった。

「……だから、ずっと無茶はしないでって言つてきたのに……」

一年間の夏、サーキットで翔太が大きなバイクに乗った時からこんな事になりはしないかとずっと不安だった。それから、翔太が父さん達と郊外に練習に行った時も、私は家でずっと無事を祈つてきた。なのに私は、その気持ちを翔太に対して恥ずかしくて素直に表現する事が出来なかった。本当は無事に帰ってきてくれて嬉しいのに、いつも意地を張って冷たくあしらつたり嫌みばかり言つてしまった。もし、あの夏の日に翔太に素直な気持ちを伝えて改めて無理をしないように頼んでいれば、この事故は防げたかもしれない。いや、そ



の後でももつと早く翔太に自分の気持ちを言えたら、『翔太が一番大切なんだ』って言えたら、少しは翔太も加減して練習してくれたかも知れないのに。こんな事になるんだったら、もつと早く……。

「……何で言えなかったんだろう、ちゃんと『好き』って伝えれば良かった、翔太、翔太……」

涙が止まらない。苦しさ、悔しさと、寂しさが入り混じって私の心を突き刺してくる。世界で一番大切な人をなくしてから今更気付くなんて、何て私はバカな人間なんだろう。せめてもう一度だけ翔太に会いたかった……。

「……ブツ」

……ブツ？ 跪いて涙をこぼす私の頭の上から何か空気が漏れる様な音が聴こえてきた。その音にふと上を見ると、さっきまで真面目な表情を演じていた地上最低の女が笑い顔を隠しながら嬉しそうに肩を上下に揺らしていた。

「……ヒ、ヒ、ブツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！ 何を簡単に騙されてんだよおめーはよお！？ たかだか狭い駐車場での練習で転んだぐらいで致命傷になる訳ねえだろ！？ アホがおめーは！？」

「……えっ？」

「ほんつとおめーは翔太の話になると食いつきが良いよなあ！？  
こんな下らねえ嘘に引っかけたてピーピー泣いちまってよお！ 可  
愛いじゃねえか那奈ちゃん！ アヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ  
ッ！！」

……やーらーれーたー！！ こんな下らない幼稚な小芝居を、翔太  
にチヨコを手渡す事で頭が真つ白なっていて見抜く事が出来なかつ  
た。言われて見ればそりや確かにそうだ。サーキット場ならともか  
く、時速十キロ程度しか出ない狭い駐車場で転んだって怪我などた  
かが知れてる。

「まさかおめーが今持つてるその箱の中身は、涙が出ちゃうほど愛  
しくて大好きな翔太キュンへのチヨコレートかよ！？ 何だかんだ  
いっておめーら、やっぱりラブラブなんじゃねえか！？ お姉様は  
妬けちまうぜバカヤロー！ ブッヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ！！」

「……最っ低……」

「そうかそうか！ だったらよお那奈、泣くほど翔太が好きなら今  
から病院まで行ってチヨコでも処女でも渡しちまえ！ どっかに空  
いてる病室があつたら鍵閉めてしっぽりしまちえよ！？ この優歌  
様の妹名乗るんだつたら、それ位の女気を翔太や虎太郎ちゃんに見  
せつけてやりな！ あー、腹痛え」

「バカ！ お姉のバカ！ バカバカバカー！！」

麻美子から預けられていたお姉宛てのチョコを思いつ切り嘘つき女に投げつけて、私は翔太が治療を受けている病院へと走った。もちろん、私が作ったチョコが入っているプレゼントの箱を握りしめてまんまと騙されたのは淒く悔しいけど、お姉のお陰で緊張が解けたと言つか、胸に支えていた最後のわだかまりが取れた気がした。

もう後悔なんかしたくない。家族の事とか、仲間の事とかなんてもう関係ない。父さん、母さん、いづみさんから怒られても、お姉や翼や千夏に冷やかされても構わない。

翔太は私にとってかけがえのない大切な人。世界で一番大好きな人。もしかしたらフラれちゃうかもしれないけど、絶対にこの気持ちを翔太に伝えたい……！

「……おう、那奈じゃねえか、何だ？ そんなに息切らして、何かあったのか？」

病院に到着すると、喫煙所のソファーに足を組んでタバコを吸って座っている父さんがいた。私はその父さん緊張感の無い顔を見て、翔太の怪我が大したものではないと感じ取る事が出来た。

「おう、何だその箱？ おお、そうか！ そういや今日はバレンタインデーだったな！ わざわざ急いで俺の為にチョコを届けに来てくれたって訳だな？ 何て父親思いの娘なんだお前は！ パパはそんなお前が大好きだぞお！！」

「……あつ、ごめん、父さんの分、作るの忘れてた……」

「な、ナンダッテー！？」

そうだった、父さんの分をすっかり忘れてしまっていた。今まで一度も父さんにもチヨコをあげた事がなかったから、今回くらい一緒に作ってあげれば良かったかなあ……。

「かつ！ おめえも優歌も親孝行って言葉を知らんのか、この罰当たり者があ！ アツタマきた、もう帰る！ キヤバクラ行つてバイトのお姉ちゃん達にチヨコ催促するからいいんだもん！ 翔太の面倒はおめえが責任もって見やがれ、プンプクプンのっプーン！」

まるで子供の様な捨て台詞を吐き、頬を膨らませて足をバタバタ鳴らし歩きながら父さんは病院から出ていった。ふざけた態度をとっていたけど、きっと父さんは私が持っているチヨコの贈り主が誰だかわかっていて、あえて空気を読んでこの場から立ち去ってくれたのかもしれない。

結局、父さんもお姉も私と翔太の事を思っただけながら応援してくれていたのかな。なかなか素直になれなかった私達を見守っていてくれていたのかな。父さん、ありがとう。市販のチヨコで良かったら明日プレゼントするよ。お姉、ありがとう。でも今回の嘘は絶対に許さないけど。

「……じゃあ風間さん、お大事に」

「いきなり押しかけて診察してもらってすみませんでした、どうもありがとうございます……」

診察室の扉が開き、中から翔太が出てきた。右手の肘に包帯を巻き、右足もビッコを引いて思ったよりも痛々しい姿だった。でも、命に別状は無さそうでホッとした。無事な翔太の姿を見て、私の胸はキーンとして息が止まりそうになった。今すぐにでも翔太に気持ちを伝えたかった。なのに、なのに私は……。

「……あれ、那奈？　どうしてここに……？」

「バカッ！！」

……やってしまった、見事な逆噴射。チョコや優しい言葉を贈る前に、思い切り翔太の顔をひっぱたいてしまった。あれだけ心配してたのに、当の本人が私の顔を見て何事も無かった様にポケットといっているのに腹が立って我慢出来なくしまった。

「……痛え！　何だよいきなり、何でぶっ叩かれなきゃいけないんだよ！？」

「……バカッ！　下らない事やって怪我して、恥ずかしいと思わないのアンタは！？」

……違うよ、違う。私の言いたい事はこんな言葉じゃない。もっと伝えたい大切な気持ちがあるのに、口が、体が、言う事を聞いてくれない……。

「下らないって何だよ！？ バイクの練習して怪我すんのがそんなに下らない事かよ！？ 俺にとってバイクは父さんが俺に残してくれた唯一の形見なんだよ！ それを下らない事って、いくら那奈でもそんな言われ方俺は絶対許さないぞ！？」

「下らないじゃない！！ ただ同じコースをグルグル回るだけのお遊びに馬鹿みたいに夢中になって、挙げ句の果てには命まで放り投げて！ 翔太も父さんも貴之さんもバカよ！ バカバカバカッ！！」

「……那奈！ お前……！！！」

「無事に帰ってくれる事を祈って待っている女達がどれだけ苦しい思いをしてるか知ってるの！？ 母さんやいづみさんがどれだけ心配してるか知ってるの！？ 何にも知らないで走る事ばかりに夢中になって、全然私達の気持ちをわかってくれないじゃん！！」

「……な、那奈……？」

翔太が驚いた顔をしている。私の気迫に負けた？ いや違う、そうじゃない。私の顔をじっと見つめて、切なく表情をして目を潤ませている。

「……あれ……？」

私の手に、一粒の滴が落ちた。泣いてた。いつの間にか私の目から

大量の涙が流れていた。ずっと、ずっと今まで胸に秘めていた気持ちや言葉、想いや願いや祈りが、一斉に涙として噴き出してきた。

「……小夜だって、翼だって千夏だって、航だって薫だって麻美子だって、みんな翔太の事を心配してるんだよ？　大きな怪我をしないように、いつまでも一緒にいられますように……」

ずっと支えていた心の扉が涙とともに溶けていった。私はありったけの想いを伝えた。震える体で、震える心で、そして、ちっとも私らしくない情けない小さな震える声に精一杯の気持ちを込めて……。

「……うつん、みんななんかより、何倍も、何十倍も、ずっと昔から、私は翔太の事を心配してきたんだよ、ずっとずっと、祈ってたんだよ……」

「……那奈……」

「……だって、だって私、翔太の事が好きだもん、誰よりも一番、翔太の事が好きだもん、これからずっと、翔太と一緒にいたいよ、翔太と離れたくないよ、だから、だから……」

最後は声がかすれてしまった。長年積もりに積もった言葉は、振り絞って喉から声にして出すにはとても大きなものだったみたいだ。

「……那奈、ごめんね、心配かけて本当にごめん……」

涙で翔太の顔をはっきり見る事が出来なかったけど、多分翔太も半ベソをかいていたと思う。だって少し、鼻声だったし。

「……俺、絶対に父さんみたいに死んだりしない、必ず那奈のところに帰ってくるよ、約束する……」

ボロボロに泣いて服の袖で涙を拭っていた私の両手を、翔太は力強く握ってくれた。小さい頃からずっと私の側にいてくれた暖かい温もり、私達はやっと、あの頃の二人に戻れた様な気がした。

「……俺も那奈の事、ずっと好きだったんだ、でも怖くて言い出せなくて、ごめん、本当にごめん……」

「……うん、私も凄く怖かった、今までごめんね……」

私も翔太も鼻声で声がかすれて言葉が聞き取り辛かったけど、そんな事は気にならなかった。だってお互いに何を伝えたかったか、繋いだ手からちゃんと伝わってきたし、真っ赤に目を腫らした顔同士を見て笑いあった時に全てを分かり合えた気がしたから。

「……じゃあ改めて、那奈、俺と付き合ってくれ！」

「……どうしようっかな……」



「……何だよそれ……」

それからしばらく、私と翔太は待合室のソファーに並んで座ってずっと手を繋いでいた。こんなに長く、強く手を繋いだのはいつ以来だろう。やっぱり私にとって翔太はとても大切で、一番の存在だったんだ。それを今日、心から実感する事が出来た。告白して本当に良かった……。

「……あつ、そうだ、これ……」

夢中になりすぎて握りしめてしまっていたバレンタインのチョコの箱。ちよっとしわくちゃになったけど、人生初めてのバレンタインチョコを翔太の膝の上に置いた。

「……えっ、何これ？」

「……弁償、チョコ作ってみた……」

「……マジ？ マジで？ 俺に!？」

「……そうだよ、ほ、欲しかったんでしょ？」

「ちよちよちよ、ちよっと待って!？ これってつまりこれってこれってつまりあのつまりあれあれあれって、えっ!？」

「何をそんなに慌ててんのよ!? 恥ずかしいしみつともないでしょ!?! もう!」

「うわぁー、マジだ、マジだこれ、すげえー、何かすげえー」

……目を血走らせて箱を両手で持ってクルクル回して見つめてる。  
たかがチョコ一つごときで何をこんなに興奮してんだか。こんな調子じゃ何か先が思いやられるなあ、全く……。

「……あ、あのさ、今ここで開けていい?」

「スケベ」

「えっ、何で?」

「……ご自由にどうぞ!」

「じゃ、じゃあ早速!」

「ちょ、ちょっと! そんな雑にラッピング外さないでよ!?!」

せっかく綺麗に仕上げたラッピングなのに慌てまくって解けずに最後はビリビリ破り始めちゃったこのバカ。あーあ、何かスッゴいガツカリ。さっきまでのドキドキ感は何だったんだろう? 本当にムードぶち壊しなんだから……。

「……うわぁー、結構本格派じゃん、ありがとう……」

驚いている翔太の顔を見て『やった!』と思った。そりやそうだよ、なんてったって私が自分でわざわざ型を作って完成させた自信作だもん。でもそのチョコが私の永遠の恋のライバルになるだろうバイクの型になっているのはちょっと皮肉だけだね。

「……でも、何でボクシンググローブ？」

「えっ、そんな!？ 何で何でー!？」

……慌てていたのは翔太じゃなく私の方だった。事もあるうちに私はさっきのお姉の冗談に動揺して麻美子のチョコの箱と間違えて持ってきてしまったのだ。ラッピングの柄も外見も全く違うのにそれに全然気づかないなんて、これは明日から早々に翼や千夏の話のネタにされてしまいそうだ。

「おお、お帰りお二人さん、さっきのチョコ美味かったぜ、あの眼鏡娘に礼を言つといてくれよなっ？」

……肝心のバイク型のチョコ？ 聞かなくなつてわかるでしょ、とつくにあの女怪獣のお腹の中ですよ。やっぱり、慣れない事はするべきじゃなかったなあ、ハア……。

## 第40話 PADDLE

三月、私達は無事に卒業式の日を迎える事が出来た。心配だった天気にも恵まれ、校内にある桜の木にもキレイなピンク色の花びらが咲き乱れている。三年間通い続けたこの校舎も今日でさよなら、来月からはここよりももっと広い高等部校舎へと移る事になる。

「……ハア……」

そんな大切な卒業式の日、私は少し寝不足でボツ〜っとしていた。すべては昨日の夜、私が翔太にしてしまったあまりに軽率な行動……。

「そんなに巨乳の谷間に興味があるの!? 結局女だったら誰でもいい訳!? やっぱリアンタの頭の中はスケベな事ばかりじゃない、このバカ!」

「バ、バカ違うよ! ちょっとテレビに見とれてただけだろ!? 話に興味があっただけで別に谷間を見ていた訳じゃ……!」

「見てーた! 絶対に見てた! 本当もう信じられない! スケベ! 変態! エロ河童! アンタなんか大っ嫌い!!」

父さんもお姉もいづみさんもない二人だけの夕食、今までとは違う何か変にドキドキする雰囲気の中、全ては沈黙に耐えられなくなった私がテレビのスイッチを点けた事から始まった。

バラエティ番組に出演しているセクシーな衣装を着たグラビアアイドルの胸元がアップで映った瞬間、翔太の箸がピタリと止まって視線が画面に釘づけになった。

こんな場面は今までだって何回もあったのに、この時だけはなぜか私は許す事が出来なかった。つまり、嫉妬してしまったのだ。

「ちょっと待てよ那奈、誤解だって！ 俺の話を聞いてくれよ！？」

頭に血が上ってしまった私は食事も適当に終わらせ、翔太の制止を振り切って自分の部屋に戻った。しばらくベッドに寝転んで布団丸まっていると、私は次第に冷静さを取り戻し自分がしてしまった行動を悔やんだ。

「……私のバカ、何であんな事言っちゃったんだろう……」

テレビや雑誌で他の女性の姿を見るくらい自由なのに、『恋人』という観点に捕らわれた私は勝手にそれを裏切りだと判断してしまった。これじゃただの束縛女、自分が一番嫌いなタイプの人間に気づかない内になってしまっていた。

「……明日、ちゃんと謝らなきゃ、でも、素直に謝まれるかな、翔太が許してくれるかな……？」

……トントン……

布団に丸まって落ちこんでいると扉をノックする音が聞こえた。家にはまだ誰も帰ってきた様子はない。じゃあ、扉の向こう側にいるのは翔太……？

「……那奈、さっき、ごめん……」

ゆっくりと扉を開けると、元氣無くうなだれている翔太がいた。いつもだったらお互いに意地を張ってなかなか謝らなかったのに、私を心配して素直に謝ってくれた。本当に悪いのは私の方なのに……。

「……私の方こそごめんね、あんな事で子供みたいに怒って……」

「……うん、でも俺……」

何か、凄く嬉しかった。それは先に謝ってくれた事じゃなくて、私の事を気遣ってくれているのが翔太の表情から心に伝わってきたから。私の事を、ちゃんと大切にしてくれているっっている気持ちがとても嬉しくて……。

「……!!」

切ない表情でうつむく翔太の姿を見て、心の奥底から一気に噴き出してきた熱い気持ちと自分のつまらない嫉妬で罵声を浴びせて挙げ句は先に謝らせてしまった謝罪の気持ち。

言葉に出来ない感情を抑えられなくなった私は翔太の首に手を回して、子供の頃にした『遊び』ではない『本物』のキスをした。やっぱり、私のファーストキスの相手は翔太だったんだ。

「……これで、許してくれる……？」

「……………」

私の暴走に近い突然の行動に、翔太は目をパチクリして茫然としていた。私はキスをする瞬間よりも、キスをしてしまったという現実に恥ずかしさがいっぱいになって心臓が張り裂けそうだった。顔も耳も全身が火照って翔太の顔がまともに見る事が出来ない。

「……もう一回……」

「……えっ？」

「……お、俺、今さ、準備とかしてなかったから全然実感が無いんだよ！　だ、だから那奈、あともう一回だけ……」

「……な、何言ってるの！？　そんなの、出来る訳ないでしょ！？　もうダメ！　今日はもうこれ以上はダメ！！」

「お願いだよ那奈！ もう一回、もう一回だけ！！」

「バカ！ バカバカバカバカバーカ！ もう絶対バカ！ バーーーーカ！！」

生まれて初めて体験する激しい鼓動と、全身が焼けつく様な熱さに耐えられなくなった私は急いで部屋の扉を閉めた。そのままベッドに入り込んで布団に丸まっていると隣の翔太の部屋から何語かわからない喜び叫ぶ声とベッドで飛び跳ねる音が聴こえてきた。

「いやっほーい！ すげー、何かもう ￥\$%#&〒@ ぐらいすげー！ すっげー嬉しい！ やったー！！」

「……もう、バカ、本当にバカなんだから……」

興奮のあまり翌朝は完全に寝不足。何とかいつもの登校時間に起きたものの頭の中は半分眠ったままだった。

「……おはよー」

「……うん、おはよー」

洗面所には先に翔太がいた。こちらもどうやら寝不足気味の様でまだ寝ぼけているみたいだった。私達はいつもの様に何の違和感もな



く二人でパジャマ姿のまま鏡に並んで歯ブラシを取った。

「……………」

歯ブラシに歯磨き粉をつけたその時、私は急に昨晚の出来事を思い出して一気に目が覚めた。それは翔太も同じだった様で、私達は一瞬顔を見合わせたが恥ずかしくてこれ以上顔が見れなかった。寝起きで低かった血圧が急上昇して軽く目眩がしそう。

「……………あのさ那奈、昨日の……………」

「……………知らない」

「いや、まだ何も喋ってないけど……………」

「知らない！ 知らないったら知らない！ もうバカバカバカ！」

思い出すだけで鼻血が吹き出しそうな恥ずかしい場面を洗い流す様に、私は歯茎から血が出るまで思いつ切り強く丁寧に歯を磨いた。一方、翔太はその間も歯を磨こうかどうか迷っているみたいだった。何考えているのよ、本当にバカなんだから、全く……………。

「那奈、翔ちゃん、おっはよー！」

「……………小夜、大声やめて、頭に響く……………」

「どうしたのー？ 頭痛いのー？ じゃあ今日はあたし静かにしまーす！ お母さんから『二人の邪魔しちゃダメよ』って言われているから、今日は那奈と翔ちゃんで仲良く手を繋いでねー！」

「おい、小夜！」

「バカッ！ アンタは今日一日中ずっと黙ってなさい！」

「……ふえーん、また那奈に頭叩かれたー、あたし何か悪い事言ったのかなー？」

……でも、昨日はキスだけで済んだけど、これからずっと翔太とは同じ屋根の下で一緒に暮らしていく訳だし、また父さん達が家にいなくて二人きりになる時もあるだろう。その時、私は翔太に対してどんな態度を取ればいいのかなあ……。

私も翔太ももう高校生になる訳だし、恋人同士がキスを交わしたその後に進む行為の先に何が待っているかぐらいわかっている。少なくとも男子である翔太はそれに凄く興味があるだろうし、私だって興味がないと言ったら嘘になる。

でもやっぱり、その時が来るのが少し怖い。翔太に私の全てを晒すなんて恥ずかし過ぎてとても考えられない。でも、でもやっぱり私は翔太の事が好きだし、翔太が私を求めてくれるのならそれはそれで凄く嬉しい。本気で翔太に迫られたら、きっと私は拒みきれない様な気がする。そうになったら、そうなっちゃったら……。

「……何考えてんだろ、私……」

いけない、いけないいけない！ 完全に思考回路が暴走してる！  
落ち着け、落ち着け那奈！ ただでさえ翔太がどスケベな大暴走タ  
イプなのに、私までそんななっちゃってどうすんのよ！ それに、  
もし私がこんな事を考えているなんて小夜や翼や千夏に知れたら…  
…！

「那奈どうしたのー？ さっきから自分の頭をカバンでバンバン叩  
いて、やっぱり頭痛いのー？」

「……えっ？ いやあの、うん、何でもない……」

小夜の声で我に帰った。私がバカな妄想をしてる間に、すでに卒業  
式のスケジュールは全て終わっていた。今はポカポカ陽気の桜舞う  
中、私達は卒業表彰が入っている筒を持って帰り道を歩いている途  
中。私の前では翼と千夏が楽しそうにお喋りをして、小夜と航は筒  
でチャンバラごっこをしていた。

「これでついに、あれダメこれダメ、ダメダメづくし校則の中等部  
とはオサラバや！ 高等部に進級すれば自販機でジュース飲み放題、  
学食でカレーも菓子パンもプリンも食べれるし、これぞ正にくだ  
おれパラダイスやでー！」

「やつとアタシもあの Beautifulで Amazingな Cam  
pus にデビューする事が出来るのね！？ 何だか恋の予感がす  
るわ、この世界の Super Girl、チナツ・ミシマにふさ  
わしい青春ストーリーの幕開けよ！ もう全校生徒の視線を独り占

めしちゃうんだから！」

……ふう、どうやらこのうるさい女達にはこちらの様子を探られてはいないみたいだ。この前のバレンタインの後はずいぶんこの二人に『手ぐらい繋いで歩けや！』とか『アツアツのキスはまだあゝ？』とか色々と弄ばれたしなあ……。

「……いけない、ちゃんと現実を見なきゃね……」

深呼吸をして一息ついた私は後ろにいる翔太の姿を伺った。すると、あの出歯亀男・薫に肩を組まれて何やら小声でヒソヒソと色々質問されている。何か嫌な予感がする……。

「なあなあ翔太の旦那、いざ幼なじみから恋人同士になった気分ってどんな感じ？ やっぱ毎日ウハウハの天国気分なんですかい？  
ウへへ」

「さっきからうるせーな、そんな急に実感なんてねーよ！ 別に学校だろうと家の中だろうと……」

「おーおー、そうでしたなあ！ お二人はすでに同棲生活なんでしたなあ！？ 家に誰もいなくて二人ぼっちになった時とかどうすんの？ やっぱ邪魔者がいない訳だから、お互い熱くなつて火照っちゃってあゝんな事やこゝんな事しちゃったりすんの？」

「……バ、バ力野郎！ お前、何を馬鹿な事を言い出してんだよ！

？ 第一、あんな事やこんな事って……！」

「んもう、わかってるクセに？ もう抱き合ったりしたの？ キスしたの？ 一緒にお風呂とか入ったの？ 裸姿見た？ おっぱい揉んだ？ 下着脱がした？ あるいはもう、すでにチヨメチヨメしちゃってたりするんですかぁー！？」

「くたばれ変態野郎！！」

「ぐばあああああ！！」

私は翔太が答える前に薫の伸びきった鼻っぱな目掛けて加減無く飛び膝蹴りを叩き込んでやった。大きな声で喋りやがって、こっちにまで話が筒抜けなんだよ、このエロ男め！

「翔太、いちいちバカみたいな話に付き合わないでよ！ からかわれてるってわかってるんでしょ！？」

「そりゃわかってるよ！ だけど、学校でもずっと薫がしつこく聞いてくるもんだから、何かもうイライラしてきて……」

「……余計な事、喋ってないよね……？」

「……よ、余計な事って……？」

「……昨日の、夜の事……」

「……そ、そりゃもちろん……」

あー、やっぱり恥ずかしい。自分からしてしまった事とはいえ、こんな話誰にも聞かれたくない。うっかり翔太が口を滑らせないかちよつと心配……。

「……『昨日の夜』って何の話やねん、ご両人!？」

「うわっ!？」

……しまった! いつの間にか翼が小さい体を利用して私達の間に入り込んで会話に聞き耳を立てていた。学校一の突撃レポーター、まるで隠密の様な身のこなし、CIAやKGBのスパイも顔負けの地獄耳だ。

「ヤッダ〜! 『昨日の夜』って何かエッチな響き〜! 何したの  
お? ねえ、何したの二人ともお〜!？」

隠密から瓦版への華麗なる連携。今度は千夏が私達の周りに張り付いてしつこく質問してくる。人のスキャンダルがそんなに好きか、このビッチセレブめ!

「千夏、もしかしたらさつき薫が言ってた様にすでにコイツらチヨメチヨメしてもうたんちゃうか!? 男と女の関係になってもたんとちゃうか〜!？」

「イヤ〜ン！ チョメチョメとか男女の関係って卑猥な日本語〜！  
つまりはM a k e i n g L o v eって事ね！？ おマセでイケ  
ない中学生だわ、ねえねえ那奈、『女』になるってどんな感じなの  
お〜！？」

「バ、バカじゃないのアンタ達！？ 昨日はただちよつとキスした  
だけで、そんな事までする訳ないでしょ！？」

「……お、おい、那奈！！」

「……あつ！！」

……やってしまった、見事な自爆劇。まんまと翼と千夏が仕掛けた  
ブービートラップを思い切り踏んづけてしまった。あーもう、私の  
バカ！ バカバカバカッ！！

「キャ〜！ キスしたんだ〜！ 聞〜いちゃった、聞いちゃった！  
皆さ〜ん、この二人まだ中学生なのに昨日の夜キスしました〜！  
祝福してあげて下さ〜い！！」

「コイツ、コイツ生粋のアホや！ 自分の口から思いつ切りカミン  
グアウトしたで！ これはもうチョメチョメも時間の問題やなあ！  
？ P T Aが聞いたら激怒してまうで！？ とんでもなくエロいカ  
ップルが誕生したもんやなあ、顔真っ赤っ赤やで那奈、ブハハッ！  
！」

……もう、何も言葉が出ない。私の頭は完全にオーバーヒートしてまとも立っている事すら出来ない。火照った体の熱さと高まる鼓動で、私はまるで高熱を出したみたいに全身の力が抜けてその場にヘナヘナと座り込んでしまった。

「……おい、那奈、大丈夫か……？」

翔太の優しい気遣いも今の私には逆効果。余計にドキドキしてしまう。今まで男勝りの気の強さが売りだったいつもの性格はどこかに吹き飛び、私はどこにでもある普通のか弱い女の子になってしまっていた。そんな産まれたばかりの小鹿の様に震える私を、容赦なく狩り捕る牝ライオンの様にパパラッチコンビはネチネチと痛めつける。

「あらら、これは腰が抜けてしもたんとちゃうか？　おいコラ王子様、ちゃんとお姫様を守ってやらんかい！」

「ここはお姫様抱っこをして目覚めのキッスしかないわ！　まるでデイズニーの世界みたい、何てR o m a n t i cなのかしら！」

「早よキッスせいやオマエら！？　あつ、それキッス、キッス、キッス、キッス……！」

……手拍子まで始めやがった。もういいや、好きにしてよ。もうこっとなっちゃうと何も抵抗出来ない。一つも言い返す事が出来ない。どうせ私は愚かな女ですよ……。



「……那奈、立てないなら俺に掴まって、大丈夫だから……」

「……えっ？ やだ翔太、顔が近いよ……」

……あれ？ 何か翔太の目が本気っぽい。お姫様抱っこなんてやめてよ。本当に？ 本当にここでみんなの前ですか？ ダメ、ダメだよ、今の私、抵抗出来ないってば……。

「『チッス』と聞いてブッ飛んで参りましたー！！」

「うわぁー！！」

突然、さつき仕留めたはずの薫が後ろから私と翔太の間を割ってすっ飛んできた。バカが乱入してくれたお陰で私にかけられていた変な魔法は解かれ、一瞬にして場の空気がデイズニーからお笑いライブ場に変わった。

「いいなあ、いいなあ、チッスいいなあ、羨ましいぜベイビー！  
よーし、俺も負けねえ！ 翼、俺達も翔太達と一緒にダブルチッスしようぜえ！」

「ハア！？ 突然出てきて何やねんオマエは！？ 何でウチとオマエがキスせなアカンねん、このどアホー！！」

「チッス、ステップ、チヨメチヨメだせベイビー！ お嬢や翔太よりも先に、俺達だけであの虹の彼方へ飛び出そうぜダーリン！？」

「ふざけんなアホオ！ オマエみたいな得体の知れへん変態にオトンから貰ったこの大切なナイスバディをくれてやる訳ないやろ！！コイツ変態やで、誰か警察に通報してや！！？」

「この想いは雲を突き抜けて時を越えて銀河の遥か先へと駆け上っていくのさ！ 一万年と二千年前から愛してるぅ！！！」

「古っ！！！」

見るからに危険な男がロリっ子を追いかけて走っていつてしまった。一步間違つと幼女を拉致しようとする変態男に見えなくもない。本当に通報されないかちょっと心配だ。

「何よもう！ もう少しでステキなキスシーンが見れると思ったのに、翼と薫ちゃんのバーカ！！！」

……やれやれ、千夏一人相手ならもう大丈夫だ。薫に助けられたのかな？ とりあえず私はいつもの自分を何とか取り戻し、スカートについた砂を払って立ち上がった。

「……翔太、アンタさっき何かしようとしたでしょ？」

「……えっ？ いやそれはあの……」

「バーカ」

あーあ、危うくともない赤っ恥をかかされるところだった。しかし、翼や千夏に煽られてその気になっちゃう翔太のスケベさはハンプなく危険。これは私がちゃんと翔太をコントロールしないとダメみたい。全く、世話が焼けるんだから……。

私に一喝されてしょんぼりと意気消沈してうなだれる翔太を置き去りにして歩いていると、横で一部始終見ていた小夜が目を丸くして私を見つめていた。これまた何か嫌な予感が……。

「……何よ小夜、何か用？」

「ねーねーねー、さっきから翼や薫ちゃんが言ってる『チヨメチヨメ』ってなーに？」

「バ、バカッ！ アンタそんな言葉……」

……あちゃー、一番聞いていちゃいけないお子様の耳に入ってしまった大人の言葉。困ったな、何て答えればいいんだろう。まるで子供から『赤ちゃんはどこから産まれてくるの？』と質問された母親の心境だ。

「……アンタはまだそんな事知らなくていいの、忘れなさい」

「えー！？ そんなのやだー！ あたしも知りたーい！ ねーねー  
ねー、『チヨメチヨメ』って、『チヨメチヨメ』ってなーに！？」

「あーもう！ 大きな声で喋るな！ だからその、何て言うか、恋人同士や結婚して夫婦になった男の人と女の人が仲良くする事をそう言うの！」

「…………結婚か、ふーん…………」

かなり適当だったけど、何とか誤魔化せたみたいだ。こういった無知で無邪気な質問が一番困ってしまう。さすがに小夜にはまだまだこの手の話は早い様な気がする。下手に教えたりすると何を仕出かすかわからないから、これで良かった、と思う……。

「あつ、わかった！ ねーねーねー、那奈！」

まだ続くの！？ もういい加減してよ、翔太に翼に千夏に薫に、みんなの相手をしてクタクタだっていうのに……。

「お母さんに聞いたんだけど、もしあたしが将来男の人と結婚してその人に兄弟がいたらあたしにとっても義理の兄弟になるんだよね？」

「…………まあ、そうだけど、それがどうしたの？」

「じゃああたし、航クンと結婚するー！ 航クンのお嫁さんになっ

て航クンと『チヨメチヨメ』するー！」

「……バ、バカッ、アンタねー！？」

何て事だろう、完全に意味をはき違えているしこの言葉に対して全く羞恥心が無い。何を言い出すかと思えば航と結婚したいって、それってアンタただ瑠璃の為だけじゃないの！？

「だって航クンと結婚したらあたしは瑠璃ちゃんのお姉さんになれるんだよね？　ねーねー航クン、あたし瑠璃ちゃんのお姉さんになりたーい！　だからあたしと結婚して『チヨメチヨメ』しよー！？　いいでしょ、ねーねーねー！？」

……やっぱりか、やっぱりそうか。小夜の考えてる事だから容易に予想出来たけど、義理のお姉さんになりたいだけで簡単に結婚したいだなんて、この子には全く常識力や恋愛感情とかつてものは備わってないのかな？　航、ここはしっかり小夜の教育の為に一つガツンと言ってやって！

「……………どうぞ自由に」

「ちょ、ちよつと航！？」

「わーい、やったー！　これであたし、瑠璃ちゃんのお姉さんになる事が出来るよー！　やったやったー！！」

……ダメだこの二人。小夜どころか肝心の航までもが自分達の発言の重大さに全然気付いていない。これじゃ幼稚園児のおママゴトと一緒にだよ、参ったなあ……。

「翔太、アンタ従兄妹でしょ？ 何とかしてよ、もう私には手に負えないよ……」

「……た、多分航はちゃんと理解していると思うよ？ アイツは意外としつかりした常識人だし、喜ぶ小夜を傷つけない為にあんな返事をしたんだと思うけど……？」

まあ確かに、今まで航が小夜を傷つけた事なんて一度も無かったし、小夜にとって航はボディガード兼お嬢様の執事兼家庭教師のお兄さんみたいな存在だから、環境に優しく無害で大丈夫、かな……？

「那奈、あたしちゃんと瑠璃ちゃんとの約束守ったよー！ これであたしも一人前のお姉さんだね、エヘヘッ！」

「……アンタの場合、その前にちゃんとお嫁さんになれるかどうか心配だよ……」

「チョメチョメ、チョメチョメ、わーいわーい！ これであたしと航クンも『チョメチョメ』だねー！」

「だから黙りなさいって言ってんでしょ小夜！ お願いだからこれ以上喋らないでよ……！」

麻美子の妊娠騒ぎから何かとんでもない展開になってきた。まさかこの面子で恋愛や結婚云々の話になるなんて夢にも思わなかった。と、言っても片方は幼稚なおママゴト、もう片方は一方的なストーリーだが。

「やゝね、みんな急に色気付いちゃって、見る目が無いわねえ？ アタシはちゃんとこの目で男を見極めて、みんなよりもっとステキな恋愛をしてカッコいいセレブをGetしちゃうんだから！」

一人蚊帳の外にされた千夏が尖った尻尾をフリフリして、これから先の高校生活に向けて恋の毒矢を磨いていた。でも、実はネタバレしちゃうとこの小悪魔の恋の野望は高校の入学式当日にやってくる野獣によって見事木っ端微塵にされちゃうんだけどね。その話は次回までのお楽しみ。

「……高校生、か……」

将来の期待と不安が入り乱れる不思議な気持ち。私達はこれからどんな人達に出会い、どんな出来事が待っているのかな。とりあえず、勉強も恋愛も一生懸命頑張っていこうと！

「……あつ、俺まだ親父さんに那奈との事を正式に報告してなかった、やべえ、殴られるかも……」

「……そういえば、私も母さんやいづみさんにまだ何も話してなかったっけ、何かいづみさんからいじめられそうな予感……」

……結婚なんてまだまだ遙か遠く先の話。家に帰ったらこの連中よりも恐ろしい愛すべき家族が手ぐすね引いて待っている。はたして私と翔太の、渡瀬家の将来は如何に。ハア、何か先が思いやられるなあ……。



## 第41話 CROSS ROAD

「……何よ、何でジッとこっち見てんの？」

「……いやさ、制服変わって少し感じが変わったなって思って……」

「……ただ色が変わっただけでしょ？ 恥ずかしいからあんまりジロジロ見ないでよ……」

「……ご、ごめん……」

桜も満開になった四月、私達は無事に高校生に進学した。三年間袖を制服も変わり、今までの濃い目の朱色の物から鮮やかな紺色になり気分も心機一転。しかし相変わらずスカートの丈が短くちよつと困っている。

「あらま、ずいぶんとアツアツなのねえ二人とも、ちよつと心配してたけど取り越し苦労みたいね、結婚式が楽しみだわ」

「ちょ、ちよつといづみさん！」

「母さん、気が早いつて……」

入学式という事もあって、今日は父兄同伴での登校が許されている。

しかし母さんは相変わらず仕事で日本にいないし、父さんは本業の配達、この学校の卒業生であるお姉は過去の問題とかで事実上出入り禁止になっているのでいづみさんが翔太と私の保護者をまとめて請け負ってくれた。

「いいわよね学生さんは、恋愛に勉強にスポーツに全力で打ち込めてさ、あーあ、私も学生に戻りたいなあ」

そんないづみさんも今日はウキウキ。なぜなら今日の入学式には小夜、翼、千夏の保護者としてそれぞれの母親達が来るからだ。姉のあづみさんや美香さんとは休日によく一緒に遊びに行ったりしているが、千春さんと会うのは久しぶりの様で昨日から私達相手に昔話を聞かせてくれた。

「那奈、翔ちゃん、おっはよー！」

家からしばらく歩いていると、後ろから小夜がこちらに向かって走ってきた。何か以前にも見た事のある光景……。

「だから走らなくなったっていいって小夜！ また転ぶ……！」

ドターンー！！

……毎度宜しくつんのめって顔面から着地。あーあ、言わんこつちやない。中学三年間、この娘は全然成長していない様だ。

「痛い……」

「……あのさ、アンタまさかわざとやってないよね？ 『お約束』とか空気読まなくてもいいんだよ？」

「……お約束？ 何の約束の事？ 良くわかんない！」

「……やっぱり天然でやってるのね、何でもないわ……」

せつかくの新しい制服を早速砂だらけにした小夜の体を払ってやっている、ゆつたりのほほんとしたあづみさんが小さくあくびをしながらこちらに歩いてきた。相変わらず緊張感のない人だ。

「こんな早い時間から登校なんて、学生さんは大変なのね、関心しちゃうわ」

「……っーか姉さん、もう朝八時よ？ いつも何時まで寝てんのよ？」

「あらあら小夜ちゃん、またお転びしちゃったのね？ お母さんが『痛い痛いのとんでけ』ってしてあげますからね」

「……姉さん、話聞してる？」

高校生になったとはいえ、通学路は今までは何ら変わらない。ただ一つ違うのは校舎への入り口、中等部時代には立ち入りを禁止されていたあの広くて綺麗な高等部校舎で三年間の青春を過ごす事になる。いよいよ私達もメインストリートに突入だ。

「……って言ってるそばからどこ行くのよ小夜！ そっちは中等部でしょ！？」

「何で姉さんまでそっちに行ってるのよ！？ 私は姉さんの保護者までしなきゃいけない訳！？」

「……何か初日から力抜けるなあ、あの親子と同じ血が俺の体にも流れてるなんて信じられないよ……」

私も翔太も登校だけでもうクタクタ、やる気も何も全てが見事に空回り。全く、この真中親子の天然破壊力は並みではない。

「わーいわーい！ 大きな学校と大きな校庭！ クラス分けの表の前にたくさん生徒が集まってるよー！ 那奈も翔ちゃんも早く早くー！！」

「あらあらうふふ、小夜ちゃんったら元気いっぱいね、また三年間小夜をお願いしますね、あの……」

「……那奈です」

「那奈ちゃん、宜しくね」

……また三年間、私は小夜の保護者を担わなければいけないのか。もうこれは友情とか因縁とかを超えて完全に義務化されている。これから的高校生活、すでに私の頭の中は期待よりも不安の方が大きくなってきた。

「おい、そこのおのけバカップル！ 入学式から何をイチャイチャしとんねん！」

「いや〜ん、さつそくHigh school lifeでCan vas love？ イケない、何て甘酸っぱくてイケないお年頃なのかしら？ もうドキドキしちゃう！」

「しかも親子同伴で登校ですぜ！ もう完全に公認カップルだね！ 結婚年齢制限以外、もうこの二人を妨げるものは世界に一つもないのさ！」

あーもう、うるさいのが揃ってやってきた。高校初日から大きな声でしゃべくり回って、他の生徒達に聞かれたらどうすんのよ！

「何よバカップルって！？ 別にイチャイチャなんてしてないでしょ、このバカ！」

「こんなに人がいる前で余計な事を喋るなよ！ この先三年間、俺達変な目で見られちゃうだろ！」

私と翔太、二人並んで真っ赤な顔して怒鳴ってコイツらの思うつぼ。翼と薫は爆笑してるし、千夏はいやらしい顔してニヤニヤしてるし、もう最悪。いづみさんやあづみさんのいる前で、あーもう恥ずかしい……。

「おはよー航クン！　ちゃんと航クンの体にも合う制服のサイズもあつたんだねー！」

「……………特注で作ってもらった」

こちらも相変わらずマイペース。確かに身長190cm近い学生なんて他にはそうそういないだろう。これ以上大きくならなければいいのだが。

「このサイズは海外でもそうはいないのよ、世界に一つ、彼だけのオリジナル作品なんだから！」

翼達の後ろからゆっくりと千春さんと美香さんがやってきた。入学式の晴れの舞台に合わせて、美香さんは作家さんらしい落ち着いたスカートのスーツにハイヒール、いかにも年相応のファッション。それに対して千春さんの格好が……。

「……………見てみ翔太の旦那、今回はヘソ出しですぜ？　なんか俺、千

夏ちゃんのママのファンになりそう……」

「……すげーな千春さん、絶対四十代に見えねえ、俺達学生には目の毒だよな……」

翔太や薫どころか、そばにいる男子生徒全員がその姿に釘付けだった。白の短いシャツの上に真っ赤な皮のスーツ、そして美しいヒップラインを強調したローライズジーンズにピンヒール、女である私でさえ目のやり場に困る。

「キヤー！ いづみにあづみさんじゃない！ 二人とも元気だった？ 美香とも会えたし、今日は最高ね！」

「千春久し振りー！ って、何なのよその格好……」

「……千春、変わってないでしょ？ 私もさつき会ってすぐに誰だかわかったわ……」

確がいづみさんも美香さんも千春さんも同い年だったっけ。みんな歳より若く見えるけど、それでも千春さんの姿はやはり一人浮いている。入学式を何かのパーティーと間違えているんじゃないかと……。

「千春ちゃんはいつまでも若いわね、私も負けずにおへソ出してみようかしら？」

「……姉さん、お願いだからやめて……」

私達子供を置き去りにして、保護者の皆様は久し振りの再会で昔話に夢中になっていた。歳を取っても心は乙女か、何か四人の笑顔がいつもよりも幼く、そして可愛く見えた。

「とりあえずオカン達はこのままおいといて、ウチらも早いところラス分け表を見に行こうや？　みんなバラけとんのかそれとも一緒に、スッゴい楽しみやなあ！？」

校舎の入り口前に張り出されているクラス分け表の前にはたくさんの人だかりが出来ていた。この中には私達のように中等部から自動進学した生徒だけではなく、他中学校から入学してきた生徒もいる。この学校は勉学も文化もスポーツもかなり力を入れているので結構人気校なのだ。

「ねえねえ、何で制服が変わったか知りたくない？　この制服にはちゃんとした意味があるのよ、興味あるでしょ、ねえねえねえ！？」

人ごみでなかなか表の前に行けない間、ずっとここく千夏が横でこの学校のトリビアを披露したがついていた。どうせこの制服も千春さんが作った物なのだろう。全く、自社ブランドの宣伝はもういいっつーの。



「……若干デザインが変わったけど、後は朱色から紺色に色が変わっただけでしょ？ 他に何があんのよ？」

「やだ最低、朱色じゃなくてヴァーミリオン、紺色じゃなくてウルトラマリンって呼びなさいよ、センス無いわね」

中等部時代の制服は『晴天の朝焼けの空』をイメージしたらしくて、一日の始まり、つまり青春のスタートを表したデザイン。それに対して高等部の制服は『地中海の青い海』、つまり世界の海への旅立ちをイメージして作ったそうだ。

「この色はあのラピスラズリの色を限りなく正確に再現した最高傑作なのよ！ こんな鮮やかブルーを身に纏えるのはこの学校だけなんだから！」

「あつそ」

「何よ、那奈！ 無知なアンタ達にわざわざ教えてあげてるのにその態度はどういう事！？」

「結局、ラピスだろうと紺色だろうと青やないか？ そないにこだわる所かここ？」

「Shut up！ アンタ達にはこの制服を着る資格は無いわ！ 二人とも今すぐここで脱ぎなさい！！」

あー、うるせえ。このバカセレブやウザい関西弁ともあと三年間我

慢しなければいけないのか。せめて一年生くらいは別のクラスにならないかなあ……？

「ねーねーねー那奈、『らびすらずり』ってなーに？」

「青い色の石の事よ、日本語で言うと……、『瑠璃』かな？」

「えー！ この色って瑠璃ちゃん色なんだー！ ねーねーねー航クン、この制服って瑠璃ちゃん色なんだよー！」

そういえばこの四月からあの瑠璃がやっと小学校に入学出来る様になった。病院や施設で受けていた基礎教育も終了し、遠藤夫妻から新しいランドセルも買って貰ったらしい。これで晴れてみんなと同じ小学生の仲間入りだ。

「……………特別学級だけだね」

それでも昔の瑠璃を考えたら素晴らしい事だろう。喋る事も歩く事も出来なかったあの子がランドセルを背負って学校に通えるなんて、あの頃から考えればまるで夢の様な奇跡だろう。

「わーいわーい！ これから毎日瑠璃ちゃん色の制服が着れるよー！ 瑠璃ちゃんも大きくなったらこの制服着るのかなー？ 瑠璃ちゃんも瑠璃ちゃん色の制服着たら、えーと、何ちゃん色？」

「……さっきから何を言ってるのよ？ お姉さんになりたいんですよ？ アンタも瑠璃を見習って少しは成長しなさいよ……」

しばらく立ち話をしていたら人だかりが少しずつ減ってきた。しかし、まだ肉眼で名前を確認するにはちよつと遠い。

「どう、翔太見える？ 自分の名前とか私達の名前とか確認出来ない？」

「那奈が見えないんじゃ俺も見えないって、どうだ航、お前なら見えないか？」

「……………まだ見えない、そっちは見える？」

「オマエが見えんでウチが見える訳ないやろがこのポケッ！ おちよくつとんのかコラア！！」

中学生から全く身長が伸びない『永遠の145cm』、翼が完全に人波に沈没していた。窒息しないか心配だ。

「薫と翔太はいつものエロズーム使って何とか名前を読み取る事出来へんのかい？ 使えへんヤツらやなあ！？」

「人を盗撮カメラみたいに言うんじゃないよ！ そんなもんある訳ねーだろ！ なあ、薫！？」

「ワオ！　ここから五人前の右から三番目にすっげえ可愛い眼鏡っ子のおっぱいちゃん発見！　いいないいなー、あんなステキなプリティガールと一緒に朝まで生命の神秘について語り合いたいデスネー！」

「えっ、どこどこ、どこだよ！？　薫、お前だけ見つけるなんて汚えぞー！」

「……翔太？」

「……すみません、少しはしゃぎ過ぎました……」

「……全く、相変わらずこのバカ達の頭の中はスケベな事でいっぱいじゃない、いい加減にしてよ！　何が眼鏡っ子よ、何がおっぱいちゃんよ！　これでも私だって四人の中では結構ある方なのに……、って何を言わせんのよこのスケベライダーが！！」

「痛い痛い痛い痛い！　何で？　何で何にも言わないで俺の足を踏んでるんだよ那奈！？　痛いって……！」

少しでも高い位置に立ってクラス表を見やすくする為よ、我慢しなさいそれくらい。しかし、眼鏡っ子、か……。やっぱり、いつものこのメンバーにあの娘がいないと、どうしても少し寂しさが込み上げてくる。でもそれは私以上に、隣にいる彼女の一番の親友がその寂しさを感じ取っていたみたいだ。

「……やっぱり、麻美ちゃんと一緒に高校生になりたかったな……」

小夜の言葉が私達全員の心境を代弁してくれていた。八人全員で高等部に進級出来ると思っていた去年の今頃。昔、無茶な侵入をしてまでこの校舎の音楽室にあるグランドピアノを弾きたがっていた体も気も小さい眼鏡をかけた彼女の姿はここには無い。

「……やっぱり、居らんと寂しいもんやな……」

「……いつも一緒だったから、尚更よね……」

新しい性格に色めき立っていた私達の心に覆い被さる一つの無念。一人分ポツカリと空いた隙間はまだ埋まる事はなく、私達の心に空白を残していた。

「……麻美ちゃん……」

今にも泣き出しそうな小夜の肩を、航が優しくポンと叩いた。そして、私達にも普段見せない笑顔をを見せて励ます様に喋りかけてきた。

「……麻美ちゃんなら大丈夫だよ、もうお母さんになるんだから」

……そうだね、これは麻美子が自分で選んだ道。決して残念な事じゃない、麻美子が高校生活を送れない分、私達が目一杯楽しまなければいけない。

「……小夜、学校であつた事を麻美子に色々話してあげなよ、家に行けば毎日会えるんだから……」

「……うん！」

小夜の顔にも笑顔が戻った。これからの三年間、新たな出会いが私達を待っているだろう。だから、決して寂しくなんかない。

「きっとこの空白にはアタシのステキな王子様が現れるのね！ イケメンセレブな男子が入ってきたら翔太君達の出番はもう無いわね、ウフフッ！」

「……好きな事言つてろ、おバカセレブが……」

どongoのビッチプリンスを夢見るバカ女は放っておいて、目的のクラス分け表まではあと少し。次第に名前がうつすらと見えてきた。

「……ちょっと、どいてどいてー！ 前を通してよー！」

すると真つ正面の人ごみから聞こえてくる女子の大声。何やら早速新しい出会いの予感？ と、言うか以前にどこかで一度聞き覚えのあるこの声。一体誰？

「翼！ やつと見つけたよー！」

「ゲツ！ 綾やないか！ オマエ何でこんな所に……！」

「おかしいな、君とは初めて会った気がしない、もしかして僕達は……」

「この前会ったやろが！ 同じネタ繰り返すなやボケ薰！」

「キャイイイイン……！」

あー、そうだ。サッカーのクラブハウスで会った翼と同じユース所属のあの娘。あの時も薰がつまらん冗談かましてボールぶつけられてたけど、今日は自分の股間のボールを蹴られるとはね……。

「小さいから探すのに苦労したのよ！ 物凄く背の高い男子がいたからまさかと思ってここまで来たんだからね！」

「小さいは余計じゃアホ！ つーかオマエもこの学校に入学してきたんかい！？」

予想していなかった再会にサッカー娘二人は痛みで股間を押さえて

うずくまる変態の横でピョンピョン飛び跳ねていた。出番ないかも、  
って心配してたもんね、良かったね、吉田綾。

「えっ！ アタシの王子様の登場はマダ！？」

「……まだ言ってるの千夏？」

そうこうしている間に人ごみかなり減り、やっとクラス分け表の  
真ん前までたどり着いた。さて、さっそく何組かチェックしないと。

「オイ見てみ！ ウチと千夏と綾は同じクラスやで！ これは楽し  
い高校生活になりそうやなあ！」

「おいおい、俺達男子三人同じクラス？ 航はいいとして、また薫  
と一緒に……」

「わーい！ あたしと那奈はまた同じクラスだよー！ これからも  
よろしくね那奈！」

……やっぱりねえ。私と小夜は何が何でも同じクラスになる様に裏  
で設定されているんだな。そうだ、絶対にそうだ。

「……あれ、どこのクラスかな、えーと……」



新顔の綾が表を見て何かを探していた。翼と千夏と同じクラスのはずなのに、一体何を探しているのか。

「どないしたん綾？ 誰か他に知り合いの名前でも探してるんか？」

「いや、知り合いじゃないんだけど、何か凄い期待されてるスポーツ選手がこの学校に入学してきたんだって！」

「キヤー！ 来たわイケメンスポーツ選手！ きつとテニスかゴルフの選手だわ、アタシにピッタりの王子様の登場ね！？」

……私の脳裏に一抹の不安がよぎった。千夏の夢の高校生活を打ち砕く、何か嵐の予感が……。

「有名なスポーツ選手？ 私達の同年で？ 何の選手なの？」

「えっとね、将来の金メダル候補で……、柔道選手だったっけ？ 何か変わった名前の……」

一同、一斉に沈黙。恐る恐る千夏の方に顔を向けると、さっきまでの華やかなお姫様オーラは消え失せて体中から謎の毒電波を放っていた。

「……………クラス分け表、よく見てみ」

航が指差す先には男子三人が一緒になったクラスの表。五十音ずつ名前が列んでいる。

風間翔太

桐原薫

栗山航

問題はその下にある名前……。

「……澤村、一茶……？」

「よお、翔太」

「……うわぁ！」

私達の後ろにいつの間にか現れたデカイ物体。とても同い年とは思えない巨体と同じ人類とは思えないゴリラ顔。間違えようがない、この男、あの……。

「さ・わ・む・ら・い・っ・さ！ このBeast！ 何でアンタまでこの学校にいるのよおおお！？」

「入学式早々から大声を出し怒鳴り散らかして、お前には相変わらず一般常識というものが備わっていないみたいだな、全く迷惑な人間だ」

「Oh, shit! Shit, up! Japanese be  
ast monkey!!」

「ちよつと千夏、落ち着きなさいってアンタ!」

やはり始まってしまった千夏の大噴火。必死で取り押さえる私達をお構い無しに啞然としている他の生徒達から校庭まで辺り一面を火山灰で埋め尽くし始めた。

「こりや傑作やで薰! これまたエラくゴツツイ王子様がやってきたもんやなあ! ブヒヤヒヤヒヤヒヤ!」

「何ですかこの超展開? これは楽しい高校生活になりますぜ! 腹痛えく、ウハハッ!!」

「ちよつとそこの二人! 笑い転げてないで手伝いなさいよ!」

……辺り真つ白雪景色。結局千夏が燃え尽きるまでこの噴火は止まる事はなかった。

「やれやれ、予想は大体出来てはいたが、酷くやかましくて疲れる連中だな、こんな輩と共に学生生活を送ってきた翔太、お前の精神力には恐れ入る」

「……いやいや、これだけ目の前で千夏ちゃんにクソミソ言われて

もケロッとしてる一茶の無神経さの方が恐れ入るよ……」

「Fuck , fuck , f u u u u u c k ! ! ! ! !」

「学校内で放送禁止用語を連発するな、このバカ女ー! !」

予想外の展開に楽しい入学式は一転焼け野原と化した。このメンバーでこの高校三年間を過ごしていかなくてはならないなんて、果たして私の体は保つのだろうか？ 早く卒業式にならないかなあ……。

第42話 ありふれたLove Story 〜男女問題はいつも面倒だ〜

「Oh, my god! Why!? どういう事なの!? アタシの王子様はどこに行ったのよ!? これから始まるシンデレラストーリーの舞台に、誰がこんなゴリラの着ぐるみを送りつけてきた訳!? 冗談じゃないわ! Shit! Damn! Suck that!」

…… あーあ、酷いキレまくり様だ。澤村一茶が入学してきて高校生活が始まり三日目、千夏は毎日この調子。入学式であれほど噴火したにもかかわらず、その怒りのマグマはいまだに脳天から噴き出している。

「実にやかましくくだらない戯れ言だ、こんなにギャーギャー鳴きまくるメス犬と一緒に行動していたお前達の気が知れん、充分に騒音被害として法廷に告発出来るレベルだな」

「Shit the fuck up! Crazy monkeyが一丁前に言葉喋るんじゃないわよ、このScrab! You suck! Kick your ass! Fuckin Jap!」

「もういい加減にしなさいよ二人とも! 一茶、アンタちよつと黙つてな! 千夏もいちいち反応しない! 英語で言えば何言ってもいいって訳じゃないのよ!？」

第一お前も日本人だろうが！？　って話だよ全く。ただでさえこれまで引き合わせるだけで大問題になってきた二人が、これから毎日学校で顔を合わせる事になるのだからたまったもんじゃない。特に周りにいる私達には……。

「ファツキンジャップぐらいわかるよバカヤロー！」

「……何やねんそれ、物真似のつもりかいな？　全然似てへんがな、気持ち悪っ」

「バカヤロー、松村コノヤロー、ビックリしたなあもう、コマネチコマネチ！」

「今宵あなたと伊香保温泉」

「さんまちゃん見つけ！」

「うわ、見つかっちゃった！　って何をさせんねんオマエは」

これから先の高校生活を不安視して頭を抱える私の横で、翼薫アホコンビは千夏を茶化す様にふざけまくっている。それにしても似てない物真似、つかネタが古過ぎて最近の子達にはわかんないって……。

「どうせ一茶も駅から電車で帰るんだろ？　どうせ俺達も駅まで行

くんだから今日ぐらい一緒に帰ろうぜ？」

「翔太の誘いなら断る理由はない、鼓膜に障害が出ないか心配だが、喜んで同伴しよう」

「No! No, no, no, nooooo!!」

「だから黙れって言ってんでしょ千夏! こっちまで頭が痛くなってくるよ!」

高校生になっても結局帰り道は一緒。今まで通りみんなで集まって帰るのだから仲間が一人二人増えたって大して変わらない。来るものは拒まず、私達は今まで誰に対してもそうしてきたのだから。まあ、千夏は気にいらないかもしれないけど、残りのメンバーは別に一茶を嫌う理由は全く無いし、私の他に航と一茶のツインタワーがいれば帰り道や駅で変な不良達に因縁つけられたりもしないだろうからむしろ大歓迎だ。

「……じゃあ、私はここでバイバイだね、翼、また明日」

「えっ、何やねん綾!? せっかく同じ学校になったのに何で一緒に行かへんねん!？」

「だってそっちに行く私の家には遠回りになっちゃうんだもん、私はバス通学だから……」

他校からの入学組には進級組の私達に比べて家から遠い通学路を通

つてくる人間が結構多い。学校の裏通りにはバス停があつて、そこを通るバスは私達が行く駅とは違う別の私鉄の駅に到着する。綾もこの通学路で帰る生徒の一人らしい。

「何や、友達がいの無いヤツやで、こんな事ではウチと綾の友情も風前の灯火やなあ？」

「……えつ、ちょっと翼？」

「せっかく主要メンバーの一人としてこれから出番も増えてくるかもしれないのに、自らそのチャンスを逃してしまうなんて勿体無い話ですなあ？」

「……薫君？」

「いやゝん、残念だわゝ！ 綾とは同じクラスになってステキな Best friendになれると思つてたのにゝ！ じゃあね綾、Have a nice day！」

「ちよつとヤダ、嘘でしょ？」

「……… 八千代の別れ」

「綾ちゃんバイバイ！ 元気でねー！？」

「嘘でしょー！？」

……新顔を新学期早々寄つて集つていじめんなつーの。おかげで



涙目になって帰れなくなってるんじゃない。せつかく新しい活躍の舞台を貰えたっていうのに……。

「わ、わ、私、これでもう出番なしとかないよね！？ 私もいつかは活躍出来る話の回が来るよね！？　ねえ、ねえ、ねえ！？」

「……活躍出来るかどうかは知らないけど、帰り道が違うくらいで絶交なんて無いから安心して、大丈夫だから」

「那奈、ホントに？　主人公の言う事だから信じていいよね？　約束だよ、ホントに約束だよ！？」

「……いいから早く帰れ！」

私達と別れた後も、裏門からバス停に向かう綾は何度もこちらを振り向いて心配そうに見つめていた。まあ何と云うか、主人公の私から言わせるといまいちキャラが薄いよねあの娘。また出番があれば良いけど。

「ねーねーねー、一茶君は何でこの学校に入学してきたの？　学校が広くてキレイだから？　翔ちゃんやあたし達と一緒に勉強したかったから？　それとも食堂でプリンが買えるからかなー？　あとはえっーと……」

久し振りに八人での帰り道、以前麻美子にやった様に小夜が興味津々で一茶にまわりついて質問責めをしている。デカい体を見上げ

て周りをクルクル回る姿は航と一緒にの時とは感じの違う、休日のパークで遊んでいる父娘の様だ。

「翔太、これは三択クイズなのか？ 俺はの中から一つ正解を選ばなければいけないのか？」

「……いや、そういう訳じゃなくて、とりあえず『何でこの学校を選んだのか』って聞きたいだけだと思うけど……」

「そうか、わかった」

幼なじみの翔太を通さないと話しかけられない様な独特の冷めた雰囲気。どちらかと言えば無口だろうが、航とは違って口達者で反応がいちいち嫌みっぽい。

しかも一流アスリートらしくプライドが高そうでかなりの負けず嫌いの様だ。動作や仕草が若干キザっぽいし、良く考えてみると少し千夏と似ているかもしれない。まあ、やかましさのレベルは段違いだが。

「ねーねーねー、学校、あたし達、プリン、どれー？」

……いつの間にか本当にクイズになってるし……。

「ブー、どれも不正解です」

「えー、じゃあ答えはなーに!? 教えて教えてー!?!」

「……結構ノリノリじゃねーかよ一茶……」

なるほど、冗談が嫌いなタイプでは無さそうだ。プライドが高いと言っても千夏とは違ってずいぶん余裕がある。取り乱す事も無いし、さすがは将来の金メダル候補だ。

「私達と関係が無いのなら、どうしてこの学校を選んだのよ? やっぱ柔道に関係があるの?」

「鋭いな、その通りだ、俺がこの学校に入学したのは父親や母親と各関係者との話し合いで決めた事なんだ」

話によると、最初は中学高校はマスコミの取材から身を避ける為にあえて小さい無名の学校に入学して自宅にある稽古場を中心に練習して、高校卒業後に練習施設が豊富な有名大学に入るつもりだったそう。

しかし、通っていた中学校の関係者達から何度か柔道大会の参加を頼まれて、嫌々ながら試合に出場しなければならぬ事態になってしまったらしい。私達も見に行ったあのスポーツ県大会も元々は出る必要のない大会だったのだ。

「最初の頃は実戦練習の一部と思って軽く受けてしまったのだが、次第にその回数が多くなってスケジュールが狂ってきてしまったんだ」

これに味をしめた学校側はマスコミへの露出を抑えるという家族側からの要望を無視して各柔道大会に次から次へと一茶に出場を懇願して学校の売名行為を始めた。

これにより家族側と学校側との間に不協和音が起こり本来出場する予定だった大会への準備期間が短くなってしまふなどのトラブルが生じてしまった。そして無理がたたって去年のあの怪我が起こってしまった。

「そういえば、もう足の方は大丈夫なのかいー茶親分？」

「『親分』？」

「薫は何か良うわからんけど人の名前の後にいちいち変なあだ名をつけんのがクセみたいやねん」

「私は『お嬢』」

「俺なんか『旦那』だぜ？」

「…………俺、『先生』」

「んでウチが『姫』や、くだらんから気にせんでええで」

「翼は『ダーリン』に昇格だぜベイビー！」

「お断りやアホ！」

「えー、あたしはあだ名無いよー？ 薫ちゃん、あたしはー？」

「小夜ちゃんは『天使』さ！」

「アタシはどうなってるのよ薫ちゃん！ ステキな名前つけないと承知しないわよ！」

「そうだな、千夏ちゃんは……」

「オマエなんぞ『くそビッチ』で充分やで」

「ほう、なるほど、確かに異論は無いな」

「Fuck! Fuck, fuck, fuuuuuuck!」

「もううるさい！ アンタ達、話が脱線し過ぎ！」

……全く、良くもまあこれだけお喋りが集まるもんだ。仕切り役をやらなきゃいけない私の身にもなったよ……。

「……で、もう足は平気なの？ 普通に歩いているように見えるけど……」

「歩く事は問題ない、しかしまだ全ての靱帯が繋がった訳ではない、試合はもちろん練習再開もまだ時間がかかるな」

「……って事はしばらくの間は俺達と一緒に帰れるって事だな？ またお前と話が出来て嬉しいよ」

「ああ、そうだな翔太、俺と同じく世界を目指す人間と会話が出来  
る事はとても貴重な時間だ」

翔太に話しかけられて一茶はやっと少し笑顔を見せた。この二人は  
私の知らない幼稚園からの付き合いだったっけ。本当に仲がいいん  
だなあ。

……でも、認め合うのはいいけどあんまり仲良すぎるのも何か気持  
ち悪い。あまり女性に興味がある様には見えないし、ガチムチ系だ  
し、ついつい変な想像が膨らんでしまう。翔太が道を外さないか心  
配だ。

「でも、これでまた八人になったねー！ 今度麻美ちゃんにも一茶  
君の事教えてあげようっと！」

「麻美？ ああ、この前病院に見舞いに来てくれた眼鏡の女子が、  
そういえば姿がないな、他校に転入したのか？」

一茶の問いに私達は一斉に下を向いてしまった。決してやましい事  
じゃないのに、どうも言葉に詰まってしまっ。何て説明すれば良い  
のか、どんな言葉を選べば誤解無く正しく、麻美子を傷つける事な  
く伝えられるのか……。

「……色々、あったんだよ、色々……、麻美ちゃんは自分で幸せに  
なる道を見つけて歩き出したんだよ……」

「……翔太の言う通りやで、ちょっとした男女問題があっただけや、ウチら置いてアイツ一人で大人の世界に行ってもうた、それだけや……」

「そうか、他人の男女問題に口を出すものではないな、これ以上聞くのは自粛しよう」

これで出刃亀みたくしつこく迫ってきたら薫以下の最低男だったのだが、澤村一茶、ちゃんと空気も読める男の様だ。ひとまず安心……、何て思っていた次の瞬間、その最低ボーダーラインギリギリの変態男が火を噴いた。

「おおっと、男女問題と言えば一茶親分が知らない内に大変な事になってるお二人がいらっしゃるんですよ、ここには！」

「大変な事？」

「……バカッ！ 薫、頭叩き割るよアンタ！」

「薫てめえ！ マジで黙ってるよお前！」

皆まで言わなくても何を喋ろうとしているかぐらいわかってる。私と翔太は揃って薫を捕まえてその軽すぎる口を塞いだ。全く、何で麻美子の話から私達の話に切り替わる訳！？

「翔太、なぜにそんな焦っている？ 何か喋られては困る事でも仕

出かしたのか？」

「い、いや、大した事じゃないんだ一茶！ 気にしないでくれ！」

「そや、大した事やないで、この二人がホンマに付き合っ様になつて家で毎日イチャイチャちくり合ってるだけの話や」

「バカッ！ 翼アンタ殺すよ！？」

しまった、薫を捕まえる事に必死になつてもう一人の密告者を抑え忘れていた。むしろ先に黙らせなければならなかった人間だったはず。

と、いうよりもこれはすでに打ち合わせ済みのコンビプレー、私達はいつもの様にこの二人の術中にハマってしまっていた訳だ。

「『ちくり合っ』とは、些か健全ではないな」

それを聞いた一茶はふう、と一つ溜め息をついて残念そうに肩を落とした。そして静かに腰に手を置き、上から見下ろす様に翔太の顔を見た。

「堕ちたな風間翔太、哀れなものだ」

「……ハア？ 何だよいきなり……」

「己の道を踏み外し、欲望に身を任せ色気に流されるとは男の風上



にも置けぬ女々しき者、俺は失望したぞ、腑抜けめ」

「……あのなあ、お前はいちいち話が太褻なんだよ！」

……古風と言えば聞こえは良いが、何か非常にオッサン臭い言い回しだ。昭和四十年代のスポ根ドラマの臭いがプンプンする。柔道家ってみんなこんな感じなのだろうか？

「物欲、我欲、色欲、全ての邪念を振り払い自らの心と体を磨き精進してきた者こそが本当の名声を得る事が出来ると俺は小さい頃から父親から教わってきた、それこそが真の勝負師の道、男の道と言うものだ、私欲に負け女の肌に溺れた今のお前にはその道を歩む資格は無い、終わったな、翔太」

「ちょ、ちょ、ちょっと待てよ！？俺達はまだ色欲とかそんなレベルまで行っていないって！翼達が言ってる事を真に受けるなよ！それにさ、高校生になって男女交際なんて今の時代普通の事だろ！？お前の柔道の先輩にだって女性と交際したり結婚してる人だっているだろう！？」

「それは一理ある、人生の荒波に立ち向かう男を女が支え、そして新しい命を天から貰い受け大切に育て後の時代へとその血を繋いでいく、それは素晴らしい事だ、しかし、お前はどうか？若さ故の過ちを言い訳にして、色事に身を投じているのではないのか？」

「オイオイオイ！俺が女遊びをしてるって言いたいのか！？違うよバカ！俺はそんなつもりで那奈と付き合ってる訳じゃ……！」

……あれ、何か妙な展開になってきた。何だろう、決死の翔太の言葉に胸がドキドキしてきた。うわぁ、何かヤダ、凄い変な恥ずかしい予感が……。

「それは本心か？ 遊び心で無いと言うのなら、お前はこの先もその女とともにこの長い人生を歩んでいく決意があると言うのだな？ 決して邪念や物欲では無く、心の目で必要な存在だと悟った訳なのだな？」

「……だからお前さ、話が極端過ぎんだよ……」

「風間翔太、俺が認めた男ならばこの目を見て問いに答えてみる！」

「……はいはいはいはい、そうですそうです！ 俺にとって那奈は必要不可欠なんです！！」

「ちょ、ちよつとヤダ、やめてよ翔太……！」

……必要って、うわぁヤダ恥ずかしい！ 何で事を大きな声で人前で言ってるのよバカバカバカッ！！

「ほぉ、それではお前は将来この女を所帯して貰い受けると言うのだな、結婚すると宣言出来るのだな？」

「……け、けっ、結婚……？」

「見苦しいぞ、風間翔太！ 男なら潔く腹を据えろ！」

「わかりましたわかりました！ 結婚しますって！ 一生涯大切にします！」

「バカー！！ もうバカバカバカバカーーーー！！」

……もうダメ、立っててられない。今の私、きつと真っ赤になってヒドい顔してるんだろ？。とてもみんなに見せられないよお……。

「結婚宣言キタで〜！ みんなちゃんと聞いたやる！？ これはエライこっちゃやでえ〜！！」

「俺達が二人の恋の生き証人、あなた方の愛の宣告は確かに天に伝えました〜！ これからも愛し合う二人に神の御加護を！！」

「イヤン、これだけアツアツだともうアタシ妬けちゃう！ 那奈、早くアタシに幸せのブーケを投げてちょうだい！？」

「那奈、翔ちゃん、おめでとー！ あたしは絶対二人が結婚するって思ってたよー！！」

「…………… 婚礼祝言、大安吉日、寒川神社」

……あーもう、みんなに聞かれた。涙が出てきちゃったよう。翔太

のバカ、ここまで言っちゃったらもう取り返しつかないじゃん、本当にバカ、ちゃんと責任取ってよ……？

「この年齢ですでに伴侶を見つけ、二人三脚で険しい人生の道のりを歩んでいく決意をしているとはさすがは男の中の男、風間翔太だな、俺の目は間違っていないかった、見直したぞ」

「……お前なあ、遊びなんて言ったら俺が親父さんに殺されるのわかってるクセして……」

「渡瀬那奈、この男を頼んだぞ、是非ともお前の内助の功でこの男を世界の頂点へと導いてやってくれ」

「……内助の功って、アンタ絶対的亭主関白主義？」

「ところで俺がこの学校に入学してきた理由の話が途中なのだが、その続きを話していいか？」

「……もう勝手にしろ！　どこまで話してたかなんて全然覚えてないよ全く！　あまりに恥ずかしくて足に力が入らず千鳥足の私を見てみんなはゲラゲラ笑っているのに相変わらず無表情でサラツと受け流しやがって！　絶対私達が冷やかされるのを計算してあんな事を言い出したのに違いがない、この男、想像以上に腹黒くて質が悪い！

「弱小な学校に見切りをつけた親父は俺の高校進学にもっと協力的な学校を探した、そこにこの学校の関係者が家に訪れてきたんだ」

一茶の話を聞きながらやつと駅前の交差点まで辿り着いた。自分達には縁の無い将来を期待されているヒーローの裏事情にみんなが耳を傾けてる間も、千夏はふてくされた顔をして後からつまんなそうについて来ていた。本当にこの二人、仲が悪いなあ……。

「突然の派手な格好をした訪問者に親父はかなり警戒していたが、しつかりと裏付けのある契約に最後は観念してしぶしぶ納得していたのを良く覚えている」

学校の出資者を名乗るド派手な衣装を身に着けた謎の女性。一茶の活躍に目をつけて手厚い援助と選手中心のスケジュールを優先する条件で入学の勧誘をしてきた。つまりはスカウトだ。

「出場する全大会でこの学校と社会人になった時にスポンサーとしてその女性が本業として経営している会社のブランド名を背負う代わりに、こちらの事情を全て鵜呑みにしてくれただけではなく学校内の練習場や器具の使用、専属のトレーニングアドバイザーまで付けて貰える約束までしてくれた、こちらからすれば断る理由の無い最高の好条件だ」

「……それ、すげー特別待遇じゃねーかよ、俺達の学校ってマジですげーよな、どんな金持ちがこの学校の出資を……」

翔太の言葉が途中で止まった。それと同時に、私達全員の頭の中に一抹の不安がよぎった。この学校の出資者？ 女性？ 経営する会

社？　ちよつと待つてよ、それつてまさか……？

「……オイ千夏、どないしたん？」

何かに気づいた千夏が私達から距離を取つて真つ青な顔をして携帯で電話をかけている。再び嵐の予感、噴火予報発令？

「……一茶親分、もしかしてその女性つて派手なヘソ出しルックの服装じゃないですかい？」

「……んでもつてアレや、スタイル抜群の奇跡の四十代で……」

「……キレイな茶色のストレートヘアで」

「おっきなカッコいい4WDの車ー！」

「……一茶、その女性の名前つて……」

「……三島、千春さん？」

「ほお、良くわかつたな、お前達も知り合いなのか？」

「Nooooooooooooooooo!!」

唖然とする私達の後ろから千夏の断末魔が聞こえてきた。どうやら現在ママとお話中のご様子。

「Why, why, why!? どうして、どうしてママ!? 何でママが愛するアタシに対してこんなひどい仕打ちをするの!?」  
『何の事?』って、ひどいわママ!？」

……あちゃー、そりゃこんな娘の小さい事情なんて世界中飛び回って忙しいママが知る訳ないよねえ。千春さんはちゃんとビジネスとして正しく一茶に投資しただけなのだから。

「えっ? 『忙しいから後で』って、あんまりだわママ!? アタシの事が可愛くないの!? ママはアタシを愛してないの!? アタシ、良い子になるからお願い、話を聞いてママ!? ママ――  
――!」

……ツー、ツー、ツー、ツー……

電話が切れたと同時に千夏がキレた。こちらに振り向いた千夏の顔は今までの怒りの変貌を超えた『第二段階』へとバ―ジョンアップしていた。

「オラアてめえ一体アタシのママに何しやがったんだよこのブタゴリラア!!! ナメた事抜かしてんとシバリあげてコンクリート詰めで東京湾埋めんどゴラア!!!」

「ちょ、ちよつと千夏……」

「わーん、怖いよ那奈！ 千夏じゃない千夏がいるよー！！」

「人格変わり過ぎやろオマエ……」

もう腹を空かせた牝ライオンのレベルではない。何かSFホラーに出てくる得体の知れないモンスターと化していて私達にはとても近づける勇氣はない。エイリオンやプレクターも絶滅させられそうな勢いだ。

「そついえばお前は俺が入学してきたのが気に食わないみたいだが、残念ながら俺にはその出資者との間で交わした契約書がある、無駄な抵抗だな」

「てめえん家どこだゴラア！！ その契約書ともども家族全員丸焦げにして焼け野原にしてやるわボケカスがあー！！」

「哀れな女だ、恥を知れ」

「Fuuuuuuuuuuuck！！！！」

「もういい加減にしなさいよ二人とも！！」

……さすがの澤村一茶もそのスポンサーの娘がこの毒々モンスターだったとは知らなかった訳か。あー、しんどい。これからこれが毎日続いていく事になるんだね、新学期早々登校拒否になりそう……。





### 第43話 ジェラシー

春、咲き誇った桜の花もちらほらと散り始め、日の暖かさを感じるようになった五月初めのゴールデンウィーク。巷を襲う花粉症などなんのその、アレルギー知らずの強い体に産まれた私にはマスクなんて全くの無縁。

雲一つ無い透き抜ける様な真つ青な空、心を丸洗いした様な気分にさせてくれるたぐさんの緑と新鮮な空気、『生活』と言うしがらみから抜け出しリフレッシュした私は背伸びをしながら深呼吸して春の風を胸いっぱい……。

ブウワアアアアアン!!

「……うるさい！ 出来るかバカー!!」

私は今日、せっかくの日曜日を潰されて近畿地方山奥のサーキット場に連れてこられてしまった。なぜかと言うと、今日このサーキット場で全日本ロードレース選手権の今季開幕戦が行われるからだ。

「相変わらず、那奈はバイクの排気音が苦手みたいだな？ やっぱり女子にはこの心を揺さぶられる様な衝動は理解してもらえないのかなあ？」

「排気音どころかバイクそのものが大嫌いなのに、遠くでさえ耳が切り裂かれそうなくらいうるさいのに、それにまたがって走るレーサーの感覚の方がよっぽど理解出来ない！」

「……ハア、そうですね、『バイクの排気音は俺にとって子守歌みたいなもの』なんてセリフ言ったらカッコいいかなって思ってたけど、やっぱりやめときます……」

隣でバイクスーツに身を包み、マシンにまたがりエンジンを空ぶかしている翔太が困った様に苦笑して頭を掻いている。子守歌？ だっさ、そんな事真顔で言われたらマジで引く。つーか速攻別れる。一体誰の言葉を真似しようとしていたのかわからないけど、相変わらずいまいちセンスが無いなあ。

「オイオイ、先代チーフじゃあるまいし、数少ない所属ライダーに對してそんなに冷たくあしらわないでくれよ？ ついにやってきた俺達バイク野郎の期待の星、風間翔太の全日本デビュー戦なんだぜ？ もっと暖かい言葉で送り出してやってくれよ、二代目さん？」

私と翔太の会話を聞いていたバイクチームの副代表、橋本さんがピットの奥から出てきて後ろから私の肩をポンと叩いた。そう、私はある事情でサーキット場に来れない父さんの代わりに『一日代表』を命じられてしまったのだ。

「……二代目なんてやめて下さい、私はこの世界には全然興味ありませんから」

「そうなのか？　なんでえ勿体ねえなあ、ピットの入り口で腕を組んで仁王立ちする後ろ姿、チームのエースを一喝して震え上がらせる男勝りのその迫力、正に先代チーフ様に瓜二つだぜ、なあ竹田？」

「ええ、ヤバいッスよ！　マジであの悪魔、いや、麗奈さんがまたここに戻ってきたのかと思いましたよ！　俺も一瞬勘違いしてビビりましたもん……」

橋本さんどころか竹田さんまで……。全く、何で私が父さんの代わりをしなきゃいけない訳？　副代表なんだから橋本さんが仕切ってくれば問題ないじゃん？　本当にここの大人達はみんな無責任な人ばかり。

私、まだ学生なんだよ？　しかも学校でも小夜の面倒や翼の下らない話に付き合わされて、最近は千夏の暴走も止めなきゃいけないし、もう忙しくて大変なんだから！　高校生活も始まったばかりで心体共に疲れ気味なのに、ただ父さんと母さんの娘だからってこんな所まで連れてこられて、せつかくの連休を何でこんな事に費やさなきゃいけないのか……。

「しかし、わざわざ渡瀬家のDNAを引き継いだ姫様がご観戦されてるんだから、屁っ放り腰なレースは出来ねえぞ翔太！　日本モータースポーツ界が待ちに待った期待の新人、全世界中にお前の名前を轟かせる機会がやって来たんだぜ？」

「やめてくださいよ橋本さん！　いくら何でも全日本戦、しかも初戦っスよ？　世界で走ってた経験がある有名ライダーもたくさんエントリーしてるし、今までみたいに上手くないっスよ……」

「……まったく、弱気なのか謙虚なのか、そういう闘争心の無いところは貴之にそっくり似ちまったなあ？ 少しは虎太郎の爪の垢でも飲んで、心臓やのどちんこに毛でも生やしてギラギラしやがれってんだ！」

「……いや、強くはなりたいですけど、親父さんみたいのはちょっと……」

……でもまあ本音を言うと、ついに国内トップクラスの大会にデビューする事になった翔太が変に緊張したりしないか心配だったし、レース中に転倒とかして怪我をするなどのアクシデントに巻き込まれないか不安だった。

それに、国内のトップレーサーの仲間入りを果たした翔太の晴れ姿をちょっとと見てみたかったってのもあるし、翔太と都会を離れて遠くに出掛けるのもいいかなってのも思ったのもあるし、それ以上に出来る限り翔太と一緒にいたかったってのもあるし……。

「……那奈お嬢さん、顔が真っ赤に火照ってる様だけど、大丈夫かい？ 熱射病？」

「……えっ？ う、うつん、な、何でもない、何でもないです！」

「無理しちゃいけませんぜ、お嬢さんに何かあったら俺と橋本さんが虎太郎さんにシバかれちゃいますからねえ」

……何よ私、最後完全にノロケに入ってるじゃない。いつまでアツのデレデレ気分に乗ってたんのよ、この恋愛バカ！

いくら嫌々引き受ける事になったとはいえ、とりあえず今日私はこのチームの臨時代表なんだから浮かれてる場合じゃないでしょ！？

私情は無用、今日は一切おノロケ禁止！

竹田さんにバカな妄想を止めてもらえて良かった。あつ、でも、もしかしたら竹田さんに翔太を見てデレデレしていた姿を見られちゃったかもしれない。

ヤバいなあ、そんな事がもし翔太に知れたらどうしよう。恥ずかしくてとてもここにいられないよお……、って言ってるそばから何考えてんのよ私は！？

でも、何か不思議。自分がこの場に立つてみるとつくづく思う。父さんと母さんは若い頃に同じチームのライダーと監督として、レース中どんな感情でお互い向き合ってたんだろう？

父さんが引退するちょっと前から二人は恋人同士の関係になったってお姉から聞いた。と、いう事は少なくとも数回二人は恋愛中ながらも仕事のパートナーとして言葉を交わしたはず。

その時、二人の間にはグクシャクした空気は流れなかったのかなあ？ 今の私みたいに私情が絡んじやったりしなかったのかなあ？

「よし、じゃあレース前に先代の儀式を受け継いで、那奈には翔太のケツを思いつ切り蹴っ飛ばして気合いを入れてもらうか！ 『運』を漏らさない様にな、ガハハッ！」

「お嬢さん、コツは爪先ですよ！ ヒールの爪先を思いつ切りケツの穴にねじ込む、これが全世界の男が震え上がった麗奈さん必殺の『アースキック』ですぜ！ 『earth』と『Ass』をかけてるんですぜ？」

「ちょ、ちよつと、勘弁して下さいよ二人とも！俺は親父さんほど丈夫じゃないし、那奈はマジで空手やってるんっスよ！？バイクまたがる前から俺のケツ破壊されますよ！？」

……儀式？ しかも『アースキック』とかって……。うん、無いね。多分あの二人の辞書にはノロケなんて言葉は存在しない。それどころか恋愛感情や互いを思いやる優しさなんてものも無かったと思う。私が生まれる前から二人を知っている人達から話を聞く限り、そう予想出来る。

じゃあ、何であの二人は結婚したの？ 何で私が生まれてこれたの？ しかも結婚してそろそろ二十年も経とうかという今、何でまだあの二人はあんなに仲が悪いのに離婚しないで夫婦でいるの？

何か、もう訳わかんない。あの夫婦、あまりに謎過ぎる。きっとこの謎を解明するには、『自分が何の為に生まれてきたのか』という全人類最大の謎を追い求めるのと同じぐらい大変なものに違いない。絶対そうだ、うん。

「……この世に生まれてこれた事、神様に感謝しなきゃなあ……」

でも、実は私の体の中を流れる血、父方と母方双方の家系にはもつと大きな謎がある。私も中学に上がった時に母さんから聞かされて驚いたのだけれど、父さんと母さんは最初から全く赤の他人という訳ではなかった。私は他の人に理解してもらうには非常に難しい因縁じみた血の宿命の元に生まれた人間だったのだ。

その話は、私にとって先祖になる二人の男性と一人の女性が繰り広げた悲しい愛憎劇から始まった。その運命に巻き込まれ、復讐を果

たす為に孤独を糧に成り上がった男が、同じ運命を背負った若き日の二人の前に立ちほだかり、全世界のモータースポーツ界を震え上がらせたあの事件。私の知らない、二十年近く前の話……。

「……あれ？ 橋本さん、あの人……」

関係者用の入り口からこちらのピットに歩いてくる白いジャケットにジーンズ姿の男性。決して大柄ではないその姿に竹田さんが気づくと、この場所だけではなく周りの他のピットルームの人間達もザワザワと声をあげた。

父さんや母さんと共に『あの時代』を生きてきた橋本さん達には忘れる事の出来ない『戦友』適存在。そして私にとってもとても深い関係のある、久し振りに見る日本バイク界のスーパースターであるその姿。

「……オイ、あれ、新悟じゃねえか？」

「……えっ、新悟さん？」

奥井新悟、現役世界ロードレーサーで日本人ライダー黄金期を作ったもう一人のカリスマ。全くの無名の十代から一気に世界戦にデビューした伝説の人で、父さんが引退した後に風間貴之さん、三島勇次朗さんと共に『新・三強時代』を造り上げた、世界のバイク界の歴史上でも十本の指に数えられるトップライダーだ。



「どうも橋本さん、お久しぶりですね、雑誌の取材も兼ねてこのサーキットに来ていたのでちょっと寄らせてもらいました」

「全くだ、久しぶりだなあ新悟！まさかここでお前に会えるなんて夢にも思ってたぜ！」

久しぶりの再会に橋本さんは新悟さんに馴れ馴れしく抱きついて喜んだ。突然の大物来客に竹田さんを始めこのピット内のクルーはもちろん、他のピットにいる関係者達も一斉に周りを囲んでこちらを眺めている。中には携帯電話で写真を撮っている人もいた。

「ところで橋本さん、兄さんはどこにいますか？」

「ああ、残念だな、実はアイツ、今日はここに来てないんだよ、例の件で今度は沖縄まで飛んで行っちゃったらしくてなあ……」

「……そうですか、久しぶりに会えると思ってたんですが、残念ですね」

新悟さんの表情が一瞬曇った。やっぱり、目的はそれだったんだ。そんなにあの人に会いたいなんて、私からするとちよつと不思議だ。あんなやかましくて大人になりきれないおっさんのどこに惹かれてるのやら。あつ、そう、新悟さんが『兄さん』と呼んだ人はズバリ……。

「代わりに那奈が来てくれるけどな、ほら、お前の横」

「……那奈？ ああ、本当だ、那奈じゃないか、すっかり大きくなつたんだな……」

橋本さんに紹介された新悟さんは私の姿を見て、少し驚いた顔をしてこちらに近づいてきた。確か私が最後に新悟さんに会ったのは中学校に上がる前の事だからもう四、五年前になる。あれから私も十センチ近く背が伸びちゃったから、驚かれるのかもしれないか。

「新悟さん、お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだな、そうだよな、うちの娘が来年高校生になるんだから那奈も大きくなってる訳だね、もうすっかり一人前の女性だね」

『兄さん』。そう、新悟さんの兄とはあの私の父親、虎太郎なのだ。乱暴な態度の父と冷静で穏やかな新悟さん、性格が思いつ切り真逆な為、正直兄弟とはとても思えないのだが、これはきつちりと登録されている明らかな事実。

と、言っても、その関係は普通の兄弟ではなく、産まれてきた母親の違う遠く離れて育った十歳近く歳の離れた兄弟なのだ。なぜ二人が腹違いで離れ離れで暮らしていかなくてはならなかったのかと言つと、これまた説明の難しい血の宿命が絡んでいる訳で……。

「……あのー……」

私と新悟さんの間に割り込む様に翔太が顔を覗かせた。翔太からすれば新悟さんはバイク界の大先輩であり、父さんや貴之さんと同じ雲の上の存在の様な人物だ。

「……俺の事って、覚えてくれてたりします？ い、いや、覚えてないんじゃないんです！ あ、あの俺、今日、デ、デ、デ、デビュー、あの、全日本戦にエントリーする事になりました、あのー」

「風間翔太、だろ？ もちろん覚えてるさ、君も随分立派なライダーに成長したんだね」

「マ、マ、マジっスか！？ 覚えてくれてたんですか！？ うわっ、すげえ、超嬉しい！」

「露頭に迷い苦しんでいた俺に、救いの手を差し伸べてくれた恩人の残した子供の事を忘れる訳がないだろう？ ましてやあの兄さんが全霊をかけて育成に力を入れている大切な未来のホープ、君の知名度はすでに全国区だよ、それに、面影が風間さんに良く似てきた」

父さんが引退し、入れ替わる様に新悟さんは世界ロードレース選手権に現れた新しいヒーローだった。当時まだ若干十九歳、デビューイヤーから世界の名だたる強豪ライダー達を押し付け、貴之さんや勇次朗さんと熾烈な三つ巴で中型クラスのチャンピオンを争った。当時はまだ結婚して婿入りをする前で父さんと同じ渡瀬姪を名乗っていた事もあり、マスコミの間では『渡瀬の再来』と呼ばれ世界中のファンを虜にした。

後先考えないで最初から全開でぶっ飛ばす『野生』の渡瀬、レース

の流れを読み上手く集団から抜け出す『混戦』の風間、周を重ねる度に速さが増し強烈な追い込みをかける『怒涛』の三島の三人とは一味違う、天性的で正確無比なライン取りをしタイムロスを最小限に止める理想的なライディングテクニクは世界を魅了し、『ジエネシス（天才）』の異名で呼ばれるほどだった。

レースの花形、大排気量クラスに鞍替えしてからもその実力は色褪せる事はなく、全シーズン覇者の三島勇次郎に続くトップクラス日本人二人目二年連続のワールドチャンピオンになり、同じクラスを走っていた風間貴之が不慮の事故で亡くなった後も日本のバイクレース界を引っ張ってきた偉人なのだ。

「ついに風間さんの意志を受け継いだ君が世界に向けて羽ばたく時がやってきたんだね、この全日本戦での君の走り、とても期待してるよ」

「……世界なんてそんな、まだまだ先の話ですよ？ さすがに全日本戦はそんな易々と勝たせてもらえるレベルじゃない事は重々理解してますから……」

「当然だよ、易々と勝たせてもらえる訳が無い、全日本クラスとなれば今まで君が走ってきた子供のレースとはまるで別物、ここは戦場だよ、その中で勝ち上がってこれるかどうかで君の本当の実力が試されるんだ、君の言葉からは、まだ少し甘さが垣間見える気がする」

「……戦場……」

「世界を、そして頂点を目指しているのは何も君だけでは無いという事だ、君は生まれながらにして恵まれた環境にいる、せっかくの

虎太郎兄さんからの教え、決して無駄にしては駄目だぞ」

「……はい……」

喋り声のトーンとは裏腹にキツイお言葉を頂いた翔太は背中を丸めて小さくなっていた。

確かに、翔太は小さい頃から色々なレースに出場してたくさん優勝してきたが、父さんは一度も翔太を誉めてあげる事がなかったなあ。それでも、『驕り』というものは知らない内に身についてしまうのか、それを見抜いた新悟さんはやっぱり凄い。私もちょっと甘く考えてたかもしれない、深く反対します……。

そんな新悟さんも最近是世界戦はおろか実戦すら二年近く走っていない。参加車両のレギュレーションの変化やチーム別に差が出てきた資金元とスポンサーの金銭問題、英才教育を受けて次々と送り込まれてくる他国の若く実力のある強豪ライダーの台頭、そして新悟さん自身の加齢による体力と技術力の衰退。そこに更なる追い打ちが加わる。

新悟さんにとっては同じ日本人ライダーの先輩であり、三強の一人だった三島勇次朗さんが世界戦の第一線から退き、日本人最後の砦として挑んだ翌年のシーズン開幕戦では連続転倒事故に巻き込まれて両足の膝の骨を複雑骨折するというアクシデントに見舞われた。現役復帰は不可能と言われるほどの大怪我。このまま現役を引退して、婿入り先を継ぐ為に経済学の勉強を始めた、なんてゴシップを書かれた事もあった。しかし、新悟さんは懸命にリハビリを続け、現在はモータースポーツ誌のインタビュアーの仕事を請け負いながら復活の時を淡々と待ち続けている。

中型クラスの渡瀬、風間、三島の三強、そしてトップクラスの三島、

奥井以来、一向に誕生しない日本人チャンピオン。あの輝かしい黄金期を取り戻そうと、日本モータースポーツ界関係者は彼らの後継者となる才能豊かな若いライダーの発掘と育成に力を入れてきた。そこに現れた『あの時代』の忘れ形見、風間翔太は彼らの期待を一心に背負った待望の救世主という訳なのだ。

「風間さんが叶えられなかったトップクラスでのワールドチャンピオンの夢、それを掴み取れるのはその息子である君だけだ、虎太郎兄さんや麗奈さん、そして風間さん、三島さんがこじ開けてくれた世界の頂点への道、決して過去の産物にしないでほしい、今度が君がその道を歩んでいくんだ、いいね」

「……はい、必ず、必ず……」

新悟さんを見つめる翔太の瞳がキラキラと輝いていた。と言うより少し涙ぐんでる様に見えた。それもそうだね、憧れの存在の人にこれだけ熱い声援を直接貰ったら、心が揺り動かされるのも当然か。プレッシャーよりも先に感動が押し寄せてきたって訳ね。ちよつとだけ、翔太がバイクに没頭する理由がわかった気がする。

……でも、半分それが気にいらない私もそこにいた。もう何年も一緒にいて様々な翔太の表情を見てきたっていうのに、私はこんなにキラキラした満面の笑顔をしている翔太を見た事が無い。新悟さんに完敗して嫉妬しまくっている私、無理矢理笑顔を作っているけど顔が引きつってたりしてないよね……？

「オイオイ新悟、あまり翔太を独り占めしているとヤバイぜ？ 隣で可愛い姪っ子がジェラシー満タンで目がキラキラしてるぞ？」

……バレたー！　なるべく顔に出ないように頑張ってたけど、目に出たの！？　ギラギラってそんな、橋本さん例えがヒドいよ！

「ち、違います！　別に私、そんなつもりじゃ……！」

「おやおや、二人ともお互いにそんな感情を抱くようになったんだね、ごめんね那奈、彼氏はちゃんと返すよ」

「……いや、あのその、彼氏とかってそんな、これはその……」

「何で翔太がしどろもどろになつてんのよ！？　恥ずかしいのは私の方なんだからね！？」

「な、何でだよ！？　那奈が変な嫉妬するからいけないんだろ！？　そんな真っ赤な顔してたらバレるの当たり前じゃないか！？」

「バカ！　嫉妬なんてしてないわよ！！　何を勘違いしてんのよ、このバカ！　バカ！　バーカ！！」

「二人とも、良い感じに青春を楽しんでるみたいで安心したよ、でも、虎太郎兄さんからしたら愛娘と教え子が恋人になってしまって、父親としてはちょっと複雑な心境かもね？」

そんなバカな、あの人がこんな事ぐらいでヘコむ訳ないでしょ！？　私と翔太が交際を始めたって告白したら、お姉と一緒に床に転がりながらゲラゲラ笑い出して、それから顔を合わせる度に『悪阻は

「マダー？」とか『腹膨らんできたんじゃないか？』ってセクハラ発言しまくってくる変態オヤジだよ！？ 娘の貞操を心配する様な人間じゃ無いって！ 第一、私と翔太はまだそんな関係じゃないんだから！

「恋愛にも愛情にもご無沙汰で干上がっちゃまつてる俺らオッサン達には目の毒だあ！ ここに来る間も車の中で仲良く二人でイチヤイチヤしてたもんなあ、なあ竹田？」

「二人とも、いい加減にしろー！！」

「うわっ、橋本さん！ 今のお嬢さんの言い方、麗奈さんにまんまとっくりっスよ！ ヤバいっス、ケツ蹴り上げられますよ、逃げましょう！」

橋本さんと竹田さんどころかピット内の全クルーが驚いて私のそばから離れていってしまった。全く、何でサーキット場まで来て冷やかされなきゃいけないのよ！？ つーか私、そんなに母さんに似てたかなあ？ えっ、それはマズいよ、ちよつとシヨックだなあ……。

「しかし、久し振りに兄さんに会えると思ったんだけど残念だよ、色々話したい事がたくさんあったんだけどね……」

そうそう、新悟さんが会いたがっているあの変態オヤジのその行方。チーム代表という立場のクセに、手塩にかけて育てた愛弟子の大事



なデビュー戦を放ったらかして、突然三日前に遠く離れた南の島、沖縄まで旅立ってしまったのだ。

『一週間くらい帰ってこないからあとヨロピク、帰ってきたら亥の一番にお祖父ちゃまに可愛い孫を抱かせてちょんまげ』

『一週間で産めるかアホ！　つーか妊娠もしないしする予定もありません！　このバカ！』

そんなセクハラ発言を残してさっさと家を出て行ってしまった父さん。本業のバイク便の仕事も部下に丸々押しつけたみたいで、まるで観光気分でウキウキワクワクしていたのを良く覚えている。

でも、父さんがはるばる沖縄まで行ったのにはある特別な事情がある。父さんは幼児期を真中啓介さんや松本新作さんと共に育った孤児院を出た頃から、ある一人の男性を追って情報を得ては日本全国を飛び回っているのだ。父さんが執拗に追いかけるその人は、父さんの娘である私にも、そして、血を分けた兄弟である新悟さんにもとても深い関係がある人物……。

「兄さんも随分と執念深いな、俺はもう、あの人はすでにこの世にいないものだと思って忘れようとしているのに……」

その尋ね人の名は、渡瀬義明。

渡瀬虎太郎と奥井新悟、二人の實の父親であり、現在行方不明の男

性。私からすれば生まれてから一度も会った事の無い、祖父にあたる人物。

戦後の経済成長期の時代の日本、その義明氏は百合子という女性との間に一人の男の子を授かった。その子は虎太郎という名づけられ、美しい母親の愛情を受けてすくすくと育っていった。

しかし、父親である義明氏は全く育児に関わらないどころか、定職にも就かずギャンブルと酒に溺れる毎日。日々の生活費は百合子が子育てをしながら空いている時間を使って働き食いつないでいたそうだった。

そんな無理な生活に心労が溜まっていった百合子は、父さんが三歳の時に病魔に犯されこの世から旅立ってしまった。そして残った義明氏はまだ小さい我が子を孤児院に預け、行方を眩ませてしまったのだ。

母親を見殺しにして、自分を捨てた憎き父親。成長して孤児院を出た父さんはその恨みを晴らす為に、義明氏の足跡を追って全国各地を探し回った。スクラップ場で部品を集め組み立てたバイクにまたがり、ある時は都会の真夜中の高速、ある時は人里離れた奥地の山道、父さんのライディングテクニクはこの時に身に付いたものだった。

プロのライダーとなり世界中のレース場で活躍する様になっても、父さんは諦める事なく義明氏を探した。世界のロードレース戦に挑戦する事を決めた理由も、もしかしたら海外に渡ったかもしれない義明氏を探す為だったのかも。

父さんのその執念は非常に固く、現役を引退し結婚して私が生まれた後も義明氏の情報が入ればすぐさまその場所へと向かっていった。今回沖縄に向かったのも、以前に義明氏がそこに住んでいたという話を聞きつけたからである。

「……でも、兄さんをそうさせてしまっているのは俺のせいかな、俺の分まで、兄さんは何かを背負ってしまっているのかもしれない……」

父さんの執念に拍手をかけたのが新悟さんの存在だった。まだ現役だった頃に初めて会った腹違いの弟を見て、父さんは酷く狼狽したらしい。母と自分を捨てた男が、自分の知らない所で別の女を作り子供を産ませた。その信じがたい事実には義明氏への恨みはさらに募っていった。

しかし、新悟さんも決して幸せな幼少時代を送ってきた訳ではない。父さんの母・百合子同様、新悟さんの母親も義明氏に捨てられる運命を辿る事になり、女手一つで新悟さんを育てていかなくてはならなくなったのだ。

後に自分達の幼児期が似ている事を知った父さんと新悟さんは次第に兄弟の強い絆で結ばれる様になったが、出会った最初の頃はお互いの存在を意識して対立していた時期もあったそうだ。一人の男によって人生を狂わされた二人にとって、義明氏は忘れてくても忘れる事の出来ない存在なのだ。

「……父さんはどうして、ここまでして実の父親を追い続けるんだろう？ 新悟さんの言う通り、もうすでに亡くなってるかもしれないのに……」

「……昔、兄さんが死ぬ前に一度思い切り殴ってやりたいって言うてたのを覚えてる、気持ちわかるよ、俺だって出来る事なら殴ってやりたい、あの男に人生をメチャクチャにされて恨んでいる人間

は他にたくさんいる、あの男さえいなければ、過去のあんな騒動や確執は起こらずに済んだはずなのにね……」

義明氏が関わっているのは父さんや新悟さんの出生だけではない。その無責任で勝手な行動は、私の母・麗奈の出生にまで繋がっている。

それにより、人生全ての歯車を狂わされてしまった人物がいる。

新悟さんが父さんと出会い、同じ道を歩んでいったのは偶然ではなく、ある大物人物によって仕組まれたものだった。その人物は二人と同じ様に義明氏に怨念を抱き、その血を受け継いでいる父さんと自分にとって脅威の存在だった母さんに対し新悟さんやその絶大な権力と資産を利用して積年の恨みを晴らそうとしたのだ。

「……実は今日、義父さんをここに呼び寄せているんだ、兄さんと話をして最終的な和解が出来ればと思ったんだけど、余計な事をしてしまったかもしれない……」

「……義父さんって、新悟さん！？ まさか、嘘でしょ！？」

それは渡瀬の血とある巨大財閥一族の決して消える事の無い深い因縁。世界中の経済界とモータースポーツ界を巻き込み、大混乱に陥れた触れてはならない暗黒史。サーキット場全体に、重苦しい空気が漂い始めた。

「……は、は、橋本さん！ あの人、こっちに向かってくる真っ黒い黒服集団の真ん中にいる白髪の爺さん、あの人って……！」

「……奥井、奥井幹ノ介！ あの糞ジジイ、今更どの面下げてここにやって来やがったんだ！？ 人を飯の種にしか考えていない銭ゲバ野郎め……！」

橋本さんと竹田さんが指差す先には、多くの黒服を従え堂々と人だかりを割って、杖を突きながらこちらに歩いてくる灰色のスーツと黒いコートを着た年老いた男性の姿があった。日本国内はおるか、世界の財界の頂点に長年君臨し続ける巨大財閥の頭首。そして、渡瀬家にとって最大の宿敵であり永遠に縁の切る事が出来ない因縁のその人物……。

「……お待ちしておりました、お義父さん……」

「……汚れた空気で噎せ返りそうだ、相変わらず不快な場所だな……」

新悟さんが深々と老人に頭を下げた。一瞬で凍りついた周辺の空気。決して一筋縄では済まなそうなその雰囲気、私の緊張は一気に頂点に達した。

## 第44話 血の管

「……いちいち頭など下げんでも良い、周りが何事かと不安がるではないか」

「……失礼しました、お義父さん……」

予想もしていなかった突然の財界の大物の登場に、過去の悪夢を知るレース関係者はおろか、周りをうるついていたスポーツ紙記者や野次馬達も皆静まり返った。灰色のスーツに身を包むその老人は頭を深々と下げている新悟さんの肩を叩くと頭を上げさせ、サーキット場全体を懐かしむ様に一瞥した。

「……サーキット場に足を運んだのは何十年振りか、何もかもが皆懐かしい……」

その老人の名は奥井幹ノ介氏、新悟さんの奥様である奥井和美さんの父親、そして、私にとって系図上では大叔父にあたる人。しかし、私以外の一般人から見ればこの人は雲の上の存在。その真の姿は日本の経済界に身を置く人間ならば誰もが知る日経連現会長。金融、鉄鋼、生産、販売、そして世界の経済の流れをも牛耳る巨大財閥、奥井グループの二代目首領なのだ。

「……お義父さんにわざわざこんな所まで足を運ばせて申し訳ありませんでした、長い道中、さぞかしお疲れかと……」

「……何、会合で近くのホテルまで来ていたのだから大した事ではない、たまにはこんな気晴らしもいいものだ、それに、お前との約束を破る訳にはいかんからな」

「……ありがとうございます、久々のサーキット場の感覚、いかがですか？」

「……この鼓膜を切り裂く様な酷い雑音、鼻を突くガソリンとオイルの刺激臭、相変わらず、私には全く理解し難い世界だな……」

日本のバイクレース界、いや世界中の、と言って良いだろう。この幹ノ介氏とはとても深い因縁がある。まだ私達が生まれる前の話、父さんが現役ライダーとして活躍していた時代に、幹ノ介氏は財閥の莫大な資金を武器に世界中の二輪車企業の部品生産工場や傘下企業に対し悪質な敵対買収行為を仕掛けたのだ。

あまりに唐突で身勝手とは思えない強引なその買収劇は、日本国内はおろか世界のロードレース界に参戦するワークスチームやスポンサー企業の経営に大きな悪影響を与え、最終的にはMFJ（全日本モータースポーツ協会）やFIM（国際モーターサイクリズム連盟）までもを巻き込み国際スポーツ仲裁機構を動かす大問題へと進展し、世界中で開催されている二輪車モータースポーツの各大会全ての運営すらも危ぶまれる最悪の状態に陥りかけた。

詳細は後で話すとして、この買収劇は父さんや貴之さんら当時のトップライダーやレース関係者、ロードレースをこよなく愛する世界中のファンや奥井のやり方に反発した他の大企業の力により未遂に防ぐ事が出来たのだが、もう二十年近く経った現在でもその時のト

ラウマから幹ノ介氏や奥井財閥を嫌うレース関係者は多く、その危機を乗り越えてきた体験者にとっては決して忘れる事が出来ない憎き人物でもある。

「……あのクソジジイ、ここに何しに来やがった！　また俺達の邪魔でもしようっていうのか！？」

特に橋本さんは父さんと共にその混乱の中を戦い抜いてきた生き証人。こちらに杖を突きながら近づいてくる幹ノ介氏を睨みつけるその眼差しはギラギラと殺気すら漂っている。なんせ橋本さんは一番間近で、世界中を巻き込む壮絶な父さんと幹ノ介氏との『血の争い』をその目で見てきたのだから……。

「……ん？　新悟、あやつの姿が見当たらんがどうした？　今日はチームの代表として、このサーキット場に来ているはずじゃないのか？」

「……自分の確認ミスでした、残念ながら、今日兄さんはここではなく別の用件で他の場所に行ってしまったらしく……」

「……私が来たのは取り越し苦労だった訳か、とんだ肩透かしだな」

「……申し訳ありません、忙しいところを寄り道して頂いたのに……」

その騒動の後、幹ノ介氏は世界から反感を買う様な無謀な買収劇を



行った理由を、自身の財閥グループの強化と世界進出、並びにそれによる日本経済の向上と発展だと説明したが、これはただの表向きの辻褄合わせの言い訳にしか過ぎない、と橋本さんを始めバイク関係者は口を揃える。

幹ノ介氏本人は決して認めてはいないのでこちらの言い分も関係者の間とマスコミや世間で噂される程度の憶測でしか過ぎない話なのだが、その本当の目的は幹ノ介氏が幼少時代から抱いていた自らの積年の恨みを果たす復讐の為に、当時世界王者として君臨し輝いていた父さん、渡瀬虎太郎を社会的に抹殺しようとした、と言われている。なぜ幹ノ介氏が父さんを失脚させようとしたのか、もちろんそれには理由となる裏付けがある訳で……。

「……おや、君は確か……、那奈、だったか？ 私と最後に会ったのはまだ小さい、小学生の頃か、すっかりと大きくなって、懐かしいものだな……」

「……あの、お久しぶり、です、叔父さん……」

こちらに気付いた幹ノ介氏はすぐに私が虎太郎の娘だと思い出したらしく、顎をさすりながら昔の面影を確かめるように私の姿をマジマジと眺めていた。先程の言葉通り、私と幹ノ介氏は初対面ではない。もう十年近くも前の話になるけど、貴之さんのお葬式の会場で一度父さんや母さんと一緒に対面した事がある。

あの時も黒塗りの高級車で側近を連れて来場した幹ノ介氏は、参列していた関係者や詰めかけてきたファン達には歓迎されずに罵倒の言葉や物を投げつけられていた。

その後、献花台に花を添えると父さんや母さんと一言交わしただけでそそくさとその場から立ち去っていった。涙一つも流さずに、ま

るで流れ作業の様に事を済ませた冷徹な雰囲気、そして、自分の多忙を優先するみたいに表情一つ変えずに立ち去っていくその姿。それを見たせいなのか、それともこの体を通れる血が拒むのか、私は幼い頃からこの人の姿をテレビや新聞で見る度にあまり良い気分がしない。それは、高校生になった今でも変わってはいない。こうやって、画面越しではなく直接顔を合わせても。なぜ？ 私とこの人には同じ血が流れているはずなのに……。

「……あやつは、虎太郎は元気にしとるか？」

「……はい、お陰様で、ゴキブリみたいに生命力があります」

「……フツ、ゴキブリか、わからなくもないな、さすがもあやつも娘には害虫扱いか」

冗談を言うつもりはなかったが、自然と出た言葉に幹ノ介氏は外部の人間にはめったに見せない微笑みを見せた。そのお陰か私達と幹ノ介氏との間にあったピリピリした緊張感は少し和らぎ、横目で様子を探っていた新悟さんは静かに一つ溜め息をついていた。

「実は、この前仕事中に偶然君の母さんと出くわしてな、少し話をしたんだがあつの話になると途端に機嫌が悪くなってとつとどこかに行ってしまうよってなあ、相変わらず不思議な夫婦だな、あいつらは……」

「……………」

何だか、不思議な気分になった。あの騒動で幹ノ介氏と父さん、母さんはお互いを憎み合うほど対立していたと色々な人達から聞いているのに、今は昔を懐かしむように少し顔に笑みを浮かべながら喋っている幹ノ介氏がそこにいる。

確かに、父さんも母さんも当時の話を私の前でする事はほとんど無い。そして、幹ノ介氏を批判するような言葉も聞いた事が無い。もうお互いにとっては過去の話だという事なのだろうか。

でも、橋本さんを始めまだ奥井グループや幹ノ介氏を毛嫌う人間がいるのも事実で、あの騒動で被害を受けた人達がいたのも事実。一体、何が本当の真実で誰の言っている事が正しいのか、私はそれがずっと気になっていた。

「……ところで、君は何か聞きたげな表情をしているな？ 何事が気になる事でもあるのではないか？」

「……えっ？ あの、それは……」

いとも簡単に見抜かれてしまった。さすがは世界の頂点に立つ偉人の直感か、あるいはそれほど考えている事が顔に出るタイプなのだろうか、幹ノ介氏の気まぐれの様な私への質問に場の空気を読んでいた新悟さんの雰囲気はピーンと張り詰め、私の背後にいるバイク人間達の殺気が更に増した気がした。

「……君が、一体何を気にとめているのかは大体予想はつく、私と、君の両親との過去の出来事が知りたいのだろう？」

「……それは、あの……」

「オイ、那奈！ そのジジイと話をするな！ どうせお前の事を上手く丸め込んでてめえの都合の良い様に嘯くに違いねえんだ！ 相手にするな！」

「お、お義父さん！ ここで立ち話もなんですから、とりあえず那奈も一緒にもつと落ち着いた場所でお話するのはいかがですが？ その方が那奈にとつても……」

「まあまあ、お互いに落ち着きなさい、私はまだ未成年の子供に対して難しい話をするつもりはないし、ましてや嘘偽りを話すつもりもない、この後の予定も特にはないし、焦る事もなかるう」

周辺がザワザワとざわめき出した。それもそうだろう、天下の財閥王が対立し続けた相手の娘に対して過去の大事件の真実を公然の前で語ろうとしている。当時と関係の無い野次馬やマスコミにしても、スクープになるかもしれない興味をそそられる貴重な展開だ。

「さあ、遠慮無く何でも聞きなさい、私の立場や肩書きなど気にする必要はない、君は私の姪っ子なのだし、第一、君には真実を知る権利がある」

「……いや、あの……」

「単刀直入には聞きづらいか、ならば君がどれだけ私の事を知っているのか、親から聞いた、あるいは他の人間から聞いた事でも良い、

私に教えてはくれないか？」

「……はい……」

私の体の中を流れる二つの血の祖先、奥井家と渡瀬家、この二つの家系の間には避けて通る事の出来ない、深く悲しい遺恨がある。それは幹ノ介氏や父さん、母さん達が生まれる前の時代まで遡る話になる。

幹ノ介氏の父親、初代奥井財閥当主である奥井武蔵氏たけそうは若い頃に第二次世界大戦中に徴兵され、フィリピン沖諸島で日本軍の作戦に参加していた。

しかし、敵の襲撃を受けて負傷した武蔵氏は命からがら援軍に助けられて終戦を待たずして日本へと帰国した。その時に同じ軍隊に所属していた心を通わせた戦友の形見を持って。

その戦友の名は、渡瀬義明。

同年ながらも先に前線の兵士として活躍し階級も上だった義明氏は武蔵氏にとっては良い上官であり兄貴分、そして最高の親友だったそうだ。

敵の襲撃の際、負傷した武蔵氏を背負い援軍の待つ陣地まで退却した義明氏は負傷帰国する武蔵氏に形見の手紙と一枚の女性が写っている写真を手渡し、再び戦場へと戻っていった。

『もし、自分が帰ってこなかったら、代わりにこの人を守ってあげてくれ』

そして終戦、武蔵氏はひたすら義明氏の帰りを待った。しかし、義明氏が日本に帰ってきた形跡は無く、その後の義明氏の消息を知る人間は誰もいなかった。

武蔵氏は恩人である友との約束を守る為、銃で撃たれた足を引きずりながら焼け野原と化した日本中の街や村を訪ね、写真の女性を探し回った。

そして、ついにその女性を見つけた。

女性の名は百合子。幼き頃から義明氏と許嫁の関係にあり、彼女もまた義明氏の無事を願って帰りを待ち続けていた。白い肌にうっすらと首筋に血の管が写るとても美しい娘だったという。

その美しさの前に一瞬で恋に落ちた武蔵氏は義明氏との約束の話と戦中での話を百合子に伝え、彼女を支える力になる為に戦後の復興と共に一から経済学を学び会社を設立、たった一代で日本を代表する巨大財閥を作り上げたのだ。

巨万の富と名声を手に入れた武蔵氏は堂々と百合子を妻として迎え、後に二人の間には一人の男子を儲けた。その子供こそが今私の目の前にいる奥井財閥二代目、幹ノ介氏である。

何不自由ない豊かな生活、そして跡取りにも恵まれた奥井家の安泰は末永く続くものだと思っていた。しかし、その奥井家に突然現れた人物によってその幸せは一瞬にして碎かれてしまう。

戦死したと思われていた義明氏が、命からがら生きて日本に戻ってきていたのだ。

身寄りを無くし突然奥井家を訪れた恩人を武蔵氏は喜んで迎え入れた。そして、共に日本の更なる経済発展と世界の頂点を目指そうと

グループ内の反対の声を押し切り義明氏を財閥の重要ポストに任命した。

しかし、その一つ決断により、奥井家の幸福に暗雲が立ち込める事になる。

それから十数年後、経営上の思考の違いから武蔵氏と義明氏是对立し、いつしかお互いグループ内に派閥が出来上がるほどの深い因縁へと発展していった。奥井グループの強かった団結力は次第に綻びが見え始め、あわや分裂の危機にまで悪化した。

この混乱を避ける為、創立者であり最大権力者であった武蔵氏はわざと事業を失敗させて、義明氏を責任を押し付けグループ内から追い出す裏工作を取った。これにより義明氏は奥井家から追い出される形となり、奥井財閥の内紛は一先ず沈静化した。

これが全ての遺恨の始まりだった。歯車の狂った運命の悪戯は、一気に混沌へと加速していく。

武蔵氏による義明氏追放の事実を知って百合子は、胸にしまい込んでいた義明氏への想いを抑える事が出来なくなり、富と名声とまだ中学生だった幹ノ介氏を捨て義明氏の後を追いつ奥井家を出て行ってしまったのだ。奥井家からの追跡から逃れた二つの間には、一人の男の子が産まれたという。

「……その男の子の名前は、虎太郎……」

「その通りだ、つまり、私と君の父親、虎太郎は同じ母親から産まれた父親違いの兄弟と言う訳になる」

父親であり創立者である武蔵氏が戦後の絶望の縁から命を削って愛する人の為に作り上げた幸福と、まだ物心もついていない幼い自分を捨てた女とそれを奪った男の息子。幹ノ介氏が父さんを憎む動機はそれだけで充分だっただろう。

あろう事かその息子が世界の二輪車レース界で大活躍して、日本だけでなく世界でも賞賛されるライダーへと成り上がり自分の目線の中に入ってきたのだから良い気分がする訳がない。

「……そこで叔父さん、あなたは父さんを失脚させる為にあの騒動を起こしたと……」

「……ふむ、私と虎太郎の生い立ちまでの話は君の話した通りだが、しかし、最後のその見解は事実と反しておる」

私の話を遮る様に、途中で幹ノ介氏が言葉を差しキツパリと否定した。長い話になると察したのか、幹ノ介氏は連れ添いの人間が持ち合わせていた携帯用の椅子に座り、鋭い眼差しで私の顔をジッと見つめている。

「……最後のその部分は、大凡周りのバイク連中から吹き込まれた話だろう、しかし、それは真実とは程遠い偏見にしか過ぎん……」

その瞳は年齢のせいかな若干白く濁っているが、財界の長に長年君臨しているだけあってとても鋭く、冷たいものだった。まるで心の中を全て見通されてしまいそうな恐怖感に近い迫力に、私の緊張はす



でに限界を超えて足が少し震えだしてしまっていた。

「このまま誤解を引きずられて訳にはいくまい、私達の血を引き、これからの将来を担う君の為にも、本当の真実を話しておくべきだろうな」

幹ノ介氏は一つ溜め息をつく、私の目を見つめたまま言葉を続けた。

「……これまで何度も言ってきたが、私は虎太郎や渡瀬家に対して憎しみや嫉妬などといった邪念は一度たりとも抱いた事など無い、嘘や偽りは断じて無い、これは本心からだ」

「……本当ですか？ 本当に、一度も無かったんですか……？」

「当たり前だろう？ 仮にも、あやつは私と半分は血を分けた兄弟、大切な弟を陥れようとする兄がどこにおる？ そんな馬鹿げた話は全てマスコミや野次馬が面白がつて勝手に持ち上げた噂話、ただのゴシップだ」

やはり、幹ノ介氏から帰ってきた言葉は予想していたものだった。あの騒動に対し長年幹ノ介氏が言い続けてきたいつもの弁解。私は決して幹ノ介氏を信じていない訳ではない、でも、その弁解では全く納得しない人達がたくさんいるのも事実で……。

「ちょっと待て！ 何偉そうに嘘八百語ってんだクソジジイ！ 全てはてめえの勝手な私念だけで引き起こした騒動だろうが！？」

「ちょっと、もうやめて下さいよ橋本さん！ 偉そうにつて、相手は本当にお偉いさんじゃないッスか！ それに、橋本さんだつてもう年齢的にはもういいジジイッスよ？ ジジイがジジイに対してジジイつて……」

「何だとお竹田！ 俺はまだまだバリバリ現役だぞお！ 離せ、あのジジイは一発殴つてやらないと気が済まねえ！！」

私が幹ノ介氏に説き伏せられてしまわないか心配した橋本さんが間に割り込んできた。今にも幹ノ介氏に掴みかかつてしまいそうな雰囲気。竹田さん始めチームクルーはみんな橋本さんを囲んで必死に押さえ込んでいる。

「那奈が子供だからつてそんなふざけた話が通用するとも思つてんのか！？ てめえの都合の良いように丸め込んでんじゃないぞコラァ！！」

「お義父さん！ お言葉ですが自分はこの話は今ここですべきではないと思います！ この続きはまた那奈ちゃんが成人になり物事の判断がつくようになった時にでも、虎太郎兄さんや麗奈さん達と一緒に……」

「……待つて下さい！」

私は大声を上げて暴れる橋本さんや止めに入った新悟さんを制した。今まで、怖くて父さんや母さんに聞く事が出来なかった禁断の領域。私にこの先生きていくにおいても決して避ける事が出来ない過去の出来事。その真実を一番良く知る人物が今、私の目の前にいる。

私は知らなければいけない、本当の真実を、奥井を憎む者や外野が騒ぐ一方的な話だけではなく、私達が生まれる前に起きた出来事を、その当事者の口から。

「……叔父さん、教えて下さい、あの時何があったのか、何である事をしたのか……」

「……うむ、どうやら君は周りの愚かな大人達と違い、話の分別が出来る立派な子の様だな、そのあたりの性格は良く母親に似ておる……」

母さんを引き合いに出した幹ノ介氏は黒服の執事からコップを一杯受け取り口を潤すと、一度空を見上げて溜め息をつくと重苦しそうに口を開き語り出した。

「……なぜ、私があの時突然この二輪車産業に介入をしたのか、企業の買収を始めたのか、それはただ一つ、ビジネスだからだ」

「……ビジネス？」

「そう、ビジネスだ、一つの企業、グループを治める経営者にとって一番大切な才能は時代の流れを読む事、当時日本は君の父親達の活躍により熱烈なバイクブーム、その波に乗った二輪車産業の景気

の上げ潮は我々奥井グループにとっても魅力的な商業市場だった、  
そもそもあの頃、我々は世界の経済界への戦略の為に自動車産業へ  
の介入を考えていたところだね」

確かに奥井財閥の力は現在日本や世界の商業や工業、ありとあらゆる  
経済の頂点に立ち、その影響はマスコミや政界にも及ぶと言われ  
ている。もちろんそれは自動車や鉄道、航空機など重工においても  
同様で、多数の鉄鋼や自動車を扱う企業の大株主でもある。

父さんが現役だった時は世界でも一大バイクブームが起こり、市場  
の景気はとても良かったらしい。そんな魅力的な市場を放っておく  
のは勿体無い、手間のかかる新規参入より企業買収を仕掛けてこの  
市場に参入して、財閥の力を更に強大なものにしたいと言う幹ノ介  
氏の言い分は経営者として当然の事だろう。それは私にだってわか  
る。でも……。

「……どうしてもわからない事があります、普通企業買収を行うと  
しても、お互いの企業がしっかりと話し合いを重ねて契約を結ぶの  
はどの世界だって常識のはずではないんですか？ それなのに、あ  
の時奥井グループが行った買収劇は乗っ取りの様な非道なやり方で、  
それによって多くの失業者や経済の混乱を起こしたと聞いています、  
それに、周りにいるみんなと同じバイクの世界に携わる人達も多大  
な損害がかかったって……」

「……ほう、そこまで自分で調べ上げているのか、最近の高校生は  
若い頃から様々な雑学を調べる事が出来て羨ましい限りだな、私が  
若い頃はインターネットはおろか、世界の情報やまともな教材すら  
も手に入らなかったものだ……」

「話をそらさないで下さい、私の質問に……！」

「まあまあ、落ち着きなさい、せっかく今まで冷静な対応が出来ていたのに、この程度の事でいちいち声を荒げている様だと賢明な大人にはなれんぞ？ そのあたりの性格は父親譲りの様だな」

「……………」

「まあ、まだ学生の立場ながら私とこうして会話のやり取りが出来るのは立派なものだ、それだけの心構えを身に付けているのなら、君には部外の人間にはまだ話してないもう一つの理由を教えてやるわ」

私を軽く窘めた幹ノ介氏はあの騒動に隠されたもう一つの真実を語り始めた。それは渡瀬家と奥井家の遺恨が生み出したもう一つの因縁。私をこの世に産んだ母親、旧姓、滝澤麗奈の出生にも関わる話……。

「……あの時奥井の力がな、以前の父やあの男の時の様に分裂をしかけたのだよ、私が初代の後を継ぎ、精魂かけて再び繋ぎ止めた鉄の鎖の様な強靱な奥井の力が、君の母親の存在でな……」

義明氏と百合子が出ていった後の奥井家の悲劇はこれで終わらなかつた。愛する女性を奪われた武蔵氏はその寂しさを紛らわすように富代という新たな妻に取り、二人の間には一人の女の子が生まれた。その子は伊織と名付けられた。傷心していた武蔵氏は娘の誕生に喜び、その娘を溺愛するあまりにグループの経営を部下達に放り投げ

育児に没頭し出してしまった。

新妻である富江も余りある財を無駄に食い荒らす消費家で、伊織を武蔵氏に押し付けては外で贅沢三昧の日々を過ごし、一人残された幹ノ介氏には誰も見向きもしなくなってしまうたそうだ。

それでも、幹ノ介氏は奥井の衰退を止める為に学問に励み、一流大学を筆頭で卒業した後、武蔵氏に代わり影の経営者として荒れだしていた財閥内の復旧に取り組んだ。

しかし、更なる悲劇が奥井家と幹ノ介氏に襲いかかる。

武蔵氏の愛情や資産を存分に受けて育ったはずの伊織は、その異常なまでの父親の束縛に嫌気を差して、まだ高校生の身分ながら家を飛び出し同級生で恋人だった滝澤一義と言う男性の元へと去ってしまったのだ。

再び愛する女性を別の男に奪われた武蔵氏は激昂し娘を取り戻そうとしたが、すでに伊織は一義の子供を腹に宿しており、その子供を出産する際に感染症を引き起こしわずか十八歳の若さで亡くなってしまったのだ。

最愛の娘の死に絶望した武蔵氏は精神衰弱を起こし廃人状態になってしまい、伊織の死から数年後、後を追う様に息をひきとった。日本の経済界を支えた名高い偉人の最期にしては寂しく哀れなものだったそうだ。

奥井の家を幹ノ介氏に継がせる事が気に入らなかった先代の妻、富江は伊織の残した娘を跡継ぎに迎え入れようと企んだが、『この子は奥井家と関わらせないで欲しい』という伊織の遺言を守りたい滝澤一義と幹ノ介氏の猛反発を受けた。

その確執は次第に奥井グループ内で幹ノ介氏派、富代派という二つの派閥に別れ始め、再び分裂の危機が訪れた。その争いは結局富代の死去まで続き、最期まで富江は自分の孫娘の事を諦めなかったという。しかし、最後まで滝澤一義は奥井家に子供の親権を譲る事は

なかった。

そして、滝澤一義に育てられたその娘は父親の仕事であり趣味でもあった自動二輪車の修理や改造の虜になり、暇さえあればエンジンをを組み立てたり改造したりするバイク少女へと成長していった。それから数年後、一義が突然の病魔に倒れてしまった後、その父親が代表を務めていたバイクチームの跡を継ぎ、ただの一般参加の小さなチームを世界のレースの大舞台で活躍するにまで育て上げ、数々のモンスターマシンを開発、製作し所属ライダーであった渡瀬虎太郎や風間貴之を世界のスーパースターへとの上上げたのだ。

その娘の名は、滝澤麗奈。後に渡瀬虎太郎と結婚して渡瀬姪になった私の母さんである。

「この市場への参入を会議していた時に、君の母親の存在がグループ内で話題になってしまつてね、すっかり消滅したと思つていた義母の亡霊が再び私の前に現れたのだよ……」

奥井グループ独自の戦略で参入を進めていた幹ノ介氏派と、すでにこの世界で成功をしていた母さんのチームと提携を結び参入する事を訴える麗奈派の対立により三度グループ内に亀裂が入る事を恐れた幹ノ介氏は、明確な方針を決めなければならなくなつてしまった。

「そこで私は、半ば強引な戦略を立ててあの買収劇を行わなくてはならなくなつたという訳だ……」

本来なら一つの家系図で済んだはずの奥井家の血脈、それがたった一人の『渡瀬義明』という男の存在で複雑に絡み合い、たくさんの因縁と確執を生み出してしまった。

しかも、その乱れを正す為に動いた幹ノ介氏に立ちはだかったのは、諸悪の根源である渡瀬義明の血を受け継ぐ父さんと、それによつて別れてしまった『もう一つの奥井』の血を受け継ぐ母さんだった。

「その複雑な事情を聞きつけたマスコミが、勝手な憶測をでっち上げて騒ぎ立てた訳だ、那奈、君が聞いてきた話はほとんどが偽りの真実、奴らの茶番だ」

「……………」

「もちろん、君が言うようにこの騒動により無関係の人々を巻き込んでしまったのは私も重々承知している、申し訳ないとは思っている、しかしだな、ビジネスとは常に戦場、弱肉強食の非情な世界なのだよ、やらなければこちらが食われる、一人の経営者として私にも守らなければならない人々をたくさん抱えておるのだ、それだけはわかって貰いたい……………」

私だってバカじゃない。

父さんや母さん、小夜のお父さんの啓介さんや千夏のお母さんの千春さんの仕事を見ていれば幹ノ介氏の言っている事は理解出来る。出来るけど、本当にそんな無茶なやり方をしなければならなかったの？ 本当にこの人は父さんと母さんに対して何の恨みは無かったの？ だったら何で、もっとみんなが笑い合えるような手段を取れなかったの？ 私の頭の中は混乱していた。



「何が、申し訳なかった、だ！ そんな都合のいい話をでっち上げてんのはてめえの方だろうが！ あの時、一体どれだけの人間が苦しんだと思ってんだ！ どれだけの人間の人生狂わせて、拳げ句には自殺者まで出たんだぞ！」

明かされていなかったもう一つの真実の詳細を聞いても橋本さん達の怒りは収まらなかった。あの時、たくさんのレース関係者がその身を追われ、多くの将来有望な日本人ライダー達が夢への道を閉ざされたと聞いた事がある。必死に幹ノ介氏に食いかかろうとする橋本さんの目にはうつすら悔し涙が浮かんでいた。

「私は、当時を知らない若者達に本当の事実を伝え、間違った認識を正し誤解を解きたかったただだよ、あれは資本主義における経営学の一つの方法であつてな……」

「馬鹿言つてんじゃねえ、何が経営学だ！ 那奈、こんな奴の話なんて信じるなよ！ コイツは自分の復讐と私腹を満たす為に虎太郎や麗奈や俺達を陥れようとした金の亡者だ！」

「そこまで私が渡瀬の血に恨みを持つていふ言うならば、虎太郎と同じ渡瀬の血が流れる新悟を自分の娘の婿として迎え入れた件はどう説明出来る？、私はここにいる新悟に、この奥井の名を譲るつもりなのだぞ？」

幹ノ介氏の言葉に、新悟さんは唇を噛み締めて黙ってうつむいていた。その表情はみんなに申し訳なさそうに暗く沈んでいた。

『アイツは、俺に対抗する為に送り込まれてきたようなものだからな、全く、アイツが一番辛い立場だろうよ』

昔、父さんが新悟さんの事を話していたを思い出した。父さんも新悟さんもお互いの存在なんて知らなかった。幹ノ介氏が買収し出資しているワークスチームに新悟さんを連れてくるまでは。

当時、幹ノ介氏が新悟さんの父親が義明氏だと知っていたかどうかは定かではない。しかし、二人が初めて会った時、新悟さんは父さんの事を憎んでいたという。自分が辛い幼少期を過ごす事になったのは父さんのせいなのだ。

誰かその様な話を新悟さんに吹き込んだのかはわからない。しかし、その裏では幹ノ介氏を始めとする奥井家の影があったのは事実だろう。渡瀬虎太郎と滝澤麗奈を陥れようとした何か強力な存在があったとは思えないのが実際のところで……。

「……お義父さん、もう止めましょう、ここでこれ以上あの時の話をして、余計な混乱を引き起こすだけです……」

「……そうだな、少し私もお喋りが過ぎた様だな」

橋本さんが上げる怒鳴り声を聞いた野次馬達が次々と周りに集まり始めた。新悟さんの言う通り、これ以上ここで話を続けると余計な騒動が起こりかねない。

「……那奈、もう止めようよ、橋本さんだけじゃなくて他のクルーの人達も何かイライラしてるし……」

「……うん、わかってる、ごめんね翔太、橋本さんに蹴られたりしなかった？」

橋本さんを止める為にメチャクチャにされていた翔太が私を気遣ってそばに来てくれた。その姿を確認した新悟さんは幹ノ介氏が椅子から立ち上がるのに肩を貸すと、出来るだけ早くこの場から立ち去ろうと背の曲がった老人の背中に手を添えた。

「……叔父さん、色々と教えて頂いてありがとうございました、お時間取らせてすみません……」

私なりに、幹ノ介氏に対して誠意を伝えるつもりだった。礼儀を弁えたお礼を言おうとしただけだった。でも、これが余計な一言になってしまった。そのまま静かに引き上げるべきだったんだ。私の言葉に未だ疑いを持っていると思ったのか、立ち去ろうとした幹ノ介氏はこちらに振り返りさらに念を押すように私に話しかけてきた。

「……最後にもう一度言わせて貰うが、君にわかっておいて欲しかったのはあの出来事が一個人のつまらん妬みや復讐などではなく、ただのビジネスの一部だったという事だけだ、これが全ての真実……」

ガンッ！！

「……！」

何か金属の様な物が幹ノ介氏に向かって投げつけられてきた。幸い、本人に当たる事はなかったが、突然のハプニングに黒服のボディガード達は幹ノ介氏の周りを囲い辺りは騒然となった。誰かこんな事をしたのかは定かではないけど、その光景を見た奥井を嫌う人達は導火線に火がついた様に一斉に幹ノ介氏に対して罵倒し始めた。

「さっさと帰れ、この馬鹿野郎！」

「二度と俺達の前にその面を見せるな！」

「ここはお前みたいな守銭奴が来る場所じゃねーんだよ！ とつとと消えやがれ！」

溜まりに溜まった怒りが爆発したバイク関係者達が私達の周りに集まり幹ノ介氏にブーイングの嵐を浴びせた。それに触発されて、橋本さんも酷い言葉を幹ノ介氏にぶつける。

「てめえは災いを連れてくる疫病神だ！ 人の面を被った悪魔なんだよ！ これ以上那奈を惑わさせるような事をするんなら、てめえのキンタマ蹴り潰してやるから覚悟しやがれ！」

「……黙らっしゃい!!」

ついに堪忍袋の尾が切れた幹ノ介氏の鬼神の様な剣幕に、辺り周辺の空気が一瞬で凍りついた。それまで冷静だったその表情は真つ赤に染まり、杖を持つ手は怒りのあまり震え出していた。

「……黙って聞いておれば好き勝手な事ばかり口にしようって！ 貴様ら底辺のバイク野郎共は身分も弁えずに人を侮辱する言葉しか喋る事が出来んのか！？ 恥を恐れ恥を!!」

「何だと、このクソジジイ!!」

「お義父さん！ もう止めて下さい！ 子供達も見ているんです、帰りましょう！」

新悟さんの説得も耳に入らない。怒りに支配された幹ノ介氏は迫り寄ってくる野次馬達に対しさらに言葉を続けた。

「貴様ら連中はどいつもこいつも物事の損得もわからん馬鹿ばかり、あの時も貴様らがつまらん抵抗さえしなければ私の全ての経済戦略は成功を収め、この市場も更なる発展が見込めたはずだったのだ！ その努力を虎太郎や麗奈や貴様らは寄ってたかって無駄にしようて！ 信頼達の友情だのと戯言を並べて、私を最後の最後に裏切ったあの男の様に地獄に堕ちるがいい!!」

「……!!」

私の横で、ギョツと厚手の布が軋む音が聞こえた。翔太だ。翔太がライダーグローブを握り締め、拳を震わせていた。この顔は今まで私が見た事の無い、鬼神の様な怖い表情をしていた。

「……今、何て言っただけ……？」

「……何？ 何だ貴様は？ 子供の分際で、貴様も私に楯突くつもりか！？」

「今、何て言っただけ……！！！！？」

「翔太……！！」

ボディーガードの制止を潜り抜けた翔太はそのままの勢いで幹ノ介氏を突き倒すと、胸ぐらを掴み上げて睨みつけた。突然の暴動に周りの野次馬達は呆気に取られ、ざわついていた雰囲気は一気に静まり返った。

「……地獄に堕ちただけ……？ 人として正しい事をした人間が、何で地獄に堕ちなきゃいけないんだ！？ 大切な仲間を守ろうとした人間が、何でそんな言われ様されなきゃいけないんだ！？」

幹ノ介氏が最後に例えに出した人物、それは翔太にとって永遠の憧れの存在であり一番大切な思い出がある忘れる事の出来ない人。あ

の時、幹ノ介氏から世界チャンピオンになれる機会と代わりにチーム買収の協力を囁かれながらも、その誘惑を打ち絶ち親友である父さんや母さん達チームの仲間、そしてレースを愛するファン達を守る為に奥井の暗躍を世界中に告発した勇者。たくさんのファンに愛され、惜しまれつつ風となったあの伝説のライダー……。

「例え財界のトップだろうと、総理大臣や大統領だろうと、父さんを侮辱するヤツは誰か相手でも絶対に許さない！ 相手が親父さんだって許さない！ 絶対に、絶対に許さない！！」

「……まさかお前、風間の、息子……？」

「何やってんのよ翔太！？ 暴力はダメ！ ダメだってば！？」

「翔太君、今すぐお義父さんから手を離すんだ！ でないと、君は警察に連行されてしまうかもしれないんだぞ！？」

私と新悟さんが何とか引き離そうとするが、翔太はその手を緩めようとはしてくれない。驚いて言葉を失う幹ノ介氏を睨みつけたまま、怒りが収まりそうな気配はなかった。

「手を離さない！ 君はこのお方が誰がわかってこの様な暴力を働くのか！？」

「いいぞ翔太、やっちまえ！ お前ら、あの黒服連中から翔太を守るんだ！！」

翔太を引き離そうとするボディガードと、橋本さんにハッパをかけられたクルー達の間で大乱闘が勃発してしまった。穏やかに進行するはずだった全日本ロードレース開幕戦は一転して修羅場と化し、チームの臨時代表を任せられた私にはとても手に負えない騒動になってしまった。

『……父さん、母さん、私は一体どうしたらいいの……？』

怒り狂ったみんなを止められるのは、きっと昔の騒動を良く知っていて、父さん達と共にあの時代を生き抜いてきた人間にしか出来ないだろう。私の様な子供ではなく、父さんや母さん同じくらいの力リスマを持った人にしか……。

ブバン！　ブバンブバン！！　ブバババババアアンン！！！！

突然、鼓膜が破れそうな程の爆音が辺り周辺にこだました。それと同時に真っ黒い排気ガスがこちらに舞い上がってきて、私を始め怒っていた翔太や他のバイク野郎達もさすがに噎せ返り、一斉にその煙の先に目をやった。

「随分と盛り上がっているみたいだな、でも、少しオイタが過ぎるんじゃないのか？」

『……誰？　まさか父さん……？』



いや、違う。スタイリッシュなレザーのジャケットとパンツに身を包み、長身の長い足で翔太のバイクにまたがるその姿、父さんとはまるで別人。

「……天下の奥井グループの当主でもあるお方が、こんな田舎のサーキット場で子供と喧嘩など、マスコミのいいネタにされてしますよ、日経連会長殿？」

その人は、父さんや貴之さんと一緒に日本のバイクレース界を引っ張ってきた先駆者の一人。そして今も、世界中のライダーやファンから『走る伝説』として崇められる現役世界ロードレーサー。父さんと並ぶ、もう一人の絶対的カリスマ。

「……三島か、これはまた懐かしい顔が現れたものだ……」

暴君・渡瀬虎太郎最大のライバルでありあの千春さんの夫、そしてあの千夏の父親、三島勇次朗。この人の登場でまた一つ私達の知らない過去の真実が明かされる事となる。

## 第45話 タイムマシンに乗って

「……三島、勇次郎……」

黒服のボディガード達に支えられ立ち上がった幹ノ介氏の前に歩み寄ってきた背の高い一人の男性。自分のトレードカラーである真っ赤なキャップを被り、その端からは少し長めの茶色く染めた後ろ髪がはみ出し風になびいている。

そして、赤いレザーのバイクジャケットを羽織り下は長い足をさらに魅せるフィット系の黒いレザerpantツにアメリカンな深めの皮のブーツ。面倒臭がつてジャージ姿でどこでも出掛けてしまう父さんとは全く正反対の、いかにもちよいワル親父スタイルのその佇まいはバイク界のみならず、スポーツや芸能に詳しい人間なら知らない人はいないであろう国民的ライダーで、渡瀬虎太郎や風間貴之と共に一時代を築き世界中のファンを狂喜の渦に巻き込んだ。今現在も現役を続ける生きるカリスマ、それがこの人、三島勇次郎さんなのだ。

「世界経済、地球号の主舵を握るお方が、こんな平民のお遊び会場に何かご用ですか？　すでにブームも去って落ち目のこの世界に、あなたの様な偉人の興味の琴線に触れるものは何もありませんよ？」

世界を認めさせた天才ライダー奥井新悟、世界をその手に収める財閥の長である奥井幹ノ介、そして世界の頂点を制した伝説の王者である三島勇次郎。次から次へとサーキット場に現れる大物の登場に

周辺はお祭り騒ぎになってしまい、続々とマスコミ関係者が集まり出してカメラのフラッシュをバシバシ焚きまくった。中にはテレビカメラを取り出して取材中継を始めようとしたしてる人達もいた。

「……このツーショットとこの光景、同じだ、私が図書館で調べた昔の新聞記事に載っていた写真と一緒に……」

順調に予定が進行していた全日本ロードレース開幕戦は突然、十数年に世間を騒がせた例の買収問題を彷彿とさせる修羅場と化し、私はまるでタイムマシーンで過去の当時にタイムリープした様な錯覚すら覚えた。目に見える光景がセピア色に感じてくる。

「……奥井会長、先程あなたに対して無礼な罵声や暴行があった事は自分が代表して謝罪をさせて頂きます、しかし、それに対する先程のあなたの言動は少し失言に近いものではなかったでしょうか？  
すでに他界した人物を蔑む様な発言を、ましてやその人物の家族や友人の前で……」

「……うむ……」

「それに、例え当時あなたに個人的な考えであの騒動を起こした訳ではなかったとしても、実際あの時のあなたの選択した行動で人生の全てを失った人間がいるのは事実です、今のあなたの言葉を聞いたら、病室で床に臥せる父はとても残念がるでしょう」

「……また、その話が……」

奥井の強引な買収劇で最も大きなダメージを追ったのは、当時勇次朗さんが所属していたバイクチームだった。幹ノ介氏はこの世界に参入する際にオリジナルの新規参入チームを作る為、そのチームにエンジンや部品、データ提供をしていた企業や工場の株を買い占め、丸々略奪していったのだ。

あまりに無茶苦茶なそのやり方に勇次朗さんや他の所属ライダー、チーム関係者達は抵抗し、買収された企業の関係者達も反発した。彼らは団結して奥井に立ち向かったが、莫大な財力の前に反旗を翻した人間達は全員企業や工場から解雇され、バイクチームそのものも経営が続けられなくなり消滅し、勇次朗さんは一時的にレースに参加出来なくなってしまうたのだ。

この絶望的な結末に、チームアドバイザーとして共に戦ってきた勇次朗さんの父親・慎一郎氏は心労が溜まり病に倒れ、今も病院で介護を受けながら寝たきりの生活が続いているという。奥井グループの横暴で被害を受けたのは父さんや母さんだけではなかったのだ。

「……もういい加減忘れて貰えないだろうか？ あの時、我々のグループ内は混乱していて私の許可無しに動いていた強硬派がいてな、私の耳にこの話が入ってきた時には、すでにこのプロジェクトは始まっていてしまっていたのだよ……」

「……つまり、あの勝手極まりないビジネスゲームは部下が許可無く行った事であり、自分には全く関係が無かったとでも？ そもそもグループ内にそんな強硬派が現れてしまったのは、あなたの経営方針から生み出されたものではありませんか？ あなたの思考、言動、圧力がそのプロジェクトを押し進めさせたのではないのですか？」

「……そうではない、よいか、三島？ 経営というものはだな……」

「……お義父さん、三島さん！ もう止めましょう！ これ以上は大会の進行の差し支えになってしまいます！ 今日のところは自分に免じて、どうかお互いに引いて下さい！」

二人の対話を断ち切る様に間に新悟さんが割って入ると、それを合図にボディガード達が幹ノ介氏の周りを守るように取り囲み、カメラの向ける取材陣を遠くに押しつけた。

「……会長、飛行機のお時間に遅れます、ここは御義子息の仰られる通りに……」

「……うむ、そうか、もうそんな時間か」

はつきりとした真相がわからないまま、その場から逃げる様に立ち去ろうとする幹ノ介氏に対して、少し落ち着きだしていた周りの野次馬達の怒りは再び炎上した。周りから汚い野次が飛び交い、押し寄せるマスコミ取材陣に紛れ込んで幹ノ介氏を追いかける人間もいて、周辺は満員電車みたいに人混みでこった返した。

「……ああそうそう、三島、君に会ったら一つ伝えておきたい事があってね」

「……何でしょう？」

「いやあ、君の奥様の話なんだかね、この前我が財閥のパーティーに出席して頂いたんだが、相変わらず綺麗な女性だね、しかし、昔からだが少し経営のやり方が強引で荒っぽいのが気になる、上げ潮に乗って勢いづくのも良いが、世の中そんな甘くは無いものだ、経済界に身を置く先輩として、私から忠告をさせて頂くよ」

「……どうぞご心配なく、彼女は見た目からは想像つかない程のタフで頭の回転が早い人間です、奈落の底に堕ちた自分に再びチャンスを与え、世界の頂点まで駆け上げさせた訳ですからね、渡瀬麗奈並みに恐ろしい女性ですよ」

「……麗奈並みねえ、それは随分と手強そうだな……」

幹ノ介氏は去り際に勇次朗さんと二、三会話を交わすと、近くにいた私と翔太の顔を見た。さっきの興奮が収まってないのか、翔太の息はまだ少し荒かった。

「……那奈、せっかくの再会がこんな揉め事になって済まなかったな、まだ知りたい事があるなら、遠慮なく私の元に訪れるが良い、私にとって君は可愛い姪なのだからな、あと、虎太郎と麗奈に宜しく伝えてくれ」

「……はい……」

「……それと、その少年、風間の息子だったな？」

「……えっ、俺……？」

「皆が言うように、あれは確かに私の失言だった、私としたことがついカッとなってしまうてな、しかし、君もこの年寄りに対して暴力を振るった、だからこれはおあいこという事で流すでしょう」

「……………」

「熱くなるのも良いが、もう少し冷静な判断が出来んと偉大な父親の領域に辿り着くのは困難だぞ？ 君の将来の更なる活躍を期待しておるよ」

「…………ありがとうございます…………」

「…………では、私はこれで失礼させて戴くよ、ごきげんよう」

曲がった猫背をこちらに向けて、多くの黒服に周りを取り囲まれながら幹ノ介氏はサーキット場を後にした。宿敵を捕り逃した橋本さんを始めとするバイク関係者達はブツブツと捨て文句を言いながらも次第に落ち着きを取り戻し、それぞれのピットの持ち場に去っていった。あれだけ人がいたのに私の周りはスッカラカン、嘘みたい、まるで台風一過だ。

「…………翔太？」

「…………は、えっ？ な、何？」

「何？ じゃないわよ！ アンタあんな事して何やってんの！？ 下手すればレースどころの話じゃなくなってたんだよ！？」

「……いや、あの、だつてさ……」

「怒る気持ちもわからなくないけど、相手が誰だかわかってたんでしょ！？ アンタまで橋本さん達みたいになつてどうすんのよ!？」

「……」じ、ごめん……」

穏やかな雰囲気に戻ったピット内で散々翔太を説教していると、それを遠くから見ていた勇次朗さんがこちらに近づいてきた。そういえば、勇次朗さんに会うのも何年振りだろう。確か勇次朗さんとも貴之さんのお葬式以来会つてなかった気がする。

「渡瀬の娘さんと風間の息子が、見ないうちに随分と大きくなったもんだ、千春と娘から良く話を聞かせて貰っているよ」

「お久しぶりです、三島さん」

「あの、三島さん、おはようございます!」

「……フツ、昔良く見た風景だな、聞き分けのない所属ライダーを大声で怒鳴り散らす女性代表、このチームはそれがしつかりと伝統として受け継がれているようだな」

……勇次朗さんにまで母さんと比べられてしまった。やっぱり、蛙の子は蛙なのかなあ？ 私もいつかあの人みたいに裏で『悪魔』とかわれてしまうのだろうか……。



「しかし風間、随分と派手に噛みついたな、若さゆえの過ちとはいえ、一つ間違えれば警察沙汰だぞ？ 騒ぎを聞いて駆けつけてきて正解だったな」

「……はい、すみません、本当にすみませんでした……」

「それとも、その無鉄砲振りはある男から学んだものか？ やめておけ、ヤツを見本にして良いのはライティングの技術とレースの勝負勘だけで十分だ、あんないい加減な人間の生き様なんぞ真似するもんじゃない」

例えば大物ルーキーである翔太でも、勇次朗さんは父さんや新悟さんと同じくらい頭の上がない偉大な大先輩。私に説教されていた時は謝りながらも何か納得いかないみたいなの膨れっ面をしていたのに、相手が勇次朗さんになった途端に深々と頭をペコペコ。その情けない姿を見て、私とまだ近くにいた新悟さんは顔を見合わせて呆れ顔をした。

「三島さん、お久しぶりです、二年前の最終戦以来ですかね……」

「新悟か、久しぶりだな、足の怪我の具合はどうだ？」

「……ええ、まあ、何とか普通に歩けるぐらいには……」

「……そうか、じゃあ、まだ復帰には時間がかかりそうだな……」

三島勇次朗に奥井新悟。世界ロードレース最高クラスを制したたった二人の日本バイクレース界の国宝の貴重なツーショットに、さっきまで幹ノ介氏を追いかけていた取材陣は再び周りを囲んでここぞとばかりにバシバシとカメラのシャッター音を立てた。

他のチームの若いライダーや観客達も集まりだし憧れのスーパースターの姿に見とれ、先程の殺気立ったざわめきとは違う雰囲気の声が上がっていた。中には色紙を取り出しサインを求める人もいた。

「……せっかく久し振りに会えたのにすみません、俺はお義父さんの後を追わなければならないので、これで失礼させて貰います……」

「そうか、婿養子を演じるのも楽ではないようだな、またどこかでゆつくりと話をしよう、いや、出来ればどこかの大会で対戦相手として競い合いたいものだ、最近俺がハマっているラリーやジェットスキーも楽しいぞ?」

「……………」

「……新悟、どうした?」

「……いえ、何でもないです、そうですね、いつかどこかで、また……………」

勇次朗さんの誘いの言葉に、新悟さんが一瞬寂しそうな表情を見せたのが気になった。世界の第一線を離れ、自由にモータースポーツを楽しんでいる勇次朗さんに対して、新悟さんは何やら神妙に深く考え込んでいる様に見えた。

「那奈ちゃん、兄さんに宜しくね、翔太君、君の今日のレースを最後まで見れないのは残念だけど、影ながら応援しているよ」

「あ、ありがとうございます！ 俺、絶対に期待に答える走りをしてみせますから！」

「ちょっと翔太、声デカすぎ！」

新悟さんは一言ずつ私達に挨拶をすると、会場の裏にある関係者通路の中に消えていった。その後ろ姿は以前世界で活躍していた若い頃に比べると一回り小さくなり、少し寂しげな雰囲気だった。こちらに歩いてきた時は気づかなかったが、怪我のせいか歩く足取りは若干ぎこちなく見えた。

「……もう、あの頃には戻れないんだな、時代は常に移り変わっていく……」

そんな新悟さんの姿を見て、勇次朗さんは空を見上げて一つ溜め息をついた。二人が活躍していた時代を共に走っていたライダーは世界でもほとんどの選手が現役を引退してしまい、四十歳を過ぎた今でもプロとして世界を走る勇次朗さんにとって、もしかしたら新悟さんは一緒に時間を共有した最後の戦友なのかもしれない。

「おい那奈聞いたか？ 新悟さん、俺の事を応援してくれてんだってさ！？」 あの元世界チャンピオンがだぜ！？ やっぱり俺って期

待されてるんだなあ、何かすげえ自信がついたぜー!!」

「……空気読め」

「……へッ？ 何で？」

場の雰囲気かわからないお子ちゃまは放っておく事にして、何で勇次朗さんは今日こんな地方のサーキット場まで足を運んだんだろう？ 奥井親子に遭遇したのは偶然だと思うけど、何かしら理由があるってここに来たはずだ。

「三島さん、今日はここに観戦しに来たんですか？」

「ああ、勿論そうだよ」

「ま、ま、まさか、三島さんまで俺の走りに注目してるんスか！？ やつべえ、すげえ緊張してきたー!!」

「……翔太、五分黙れ」

「……ふっ！」

私は翔太が手に握っていたグローブを取り上げると、ベラベラとやかましいその口に押し込みしばらくの間黙られた。全く、一度興奮しだすと行動パターンが小夜と一緒！

「注目はしているよ、何と言っても風間翔太はいずれ最大のライバルになるだろうからね」

「……ライバルって、本気で言ってるんですか？ まさか三島さん、全日本戦に復帰……？」

「ふがつ！ ふごっふごっふがつ！！（ほら！ やっぱり俺の事を注目してるんだよ！！）」

「黙れって言ってるんでしょ翔太！？ 今度騒いだらその口縫いつけるよ！？」

「ふごー（そんなんー）」

私と翔太のやり取りを見て、呆れた様に笑った勇次朗さんは無言で首を振って問い掛けを否定した。

「バカ言わないでくれ、俺じゃない、来年イギリスから日本に帰ってくる息子の為だ」

「ふがつ！ 千秋！ アイツ日本に帰って来るんですか！？」

ふざけていた翔太の表情が一変した。『千秋』と言う名前に私は一瞬女性の姿を想像してしまったが、そういえば二年前くらいに他のみんなも連れて翔太のテスト走行を見に行った時に千夏が弟の話をしていたのを思い出した。

そうそう、そうだ。三島千秋、私達の一つ下で、小学生の頃に翔太とポケバイの全日本戦でチャンピオン争いをしていたあの男の子だ。

いつも翔太に負けて涙を流していたっけ。あの子のお姉さんがあの千夏だなんて、世界は思っている以上に狭いものだ。

「今は向こうの学校に通わせながらユースの大会に参加させて腕を磨かせ、そのまま世界戦でプロデビューさせるつもりだったんだが、日本の文化にも直に触れさせたいという妻の教育方針もあってな、高校進学に合わせて日本に帰国させる事になったんだ」

「……………そうですか……………」

「それに日本を主戦に選んだのは千秋本人の意向でもあるんだ、風間翔太、いずれお前と千秋は世界を舞台に争うライバル関係になるだろうが、どうしてもその前に以前のリベンジを果たしたくて待ちきれないらしくてな、来年からの全日本戦参戦を決めたんだ」

「……………」

「俺は千秋がいずれ自分を超えるライダーになれると確信している、その為の最大の障害が自分と同じ時代を生き、常に雌雄を競ってきた最高の好敵手の息子だとしたらさすがに俺も燃えない訳にはいかない、風間、是非とも素晴らしいデビュー戦を飾ってくれる事を期待しているぞ」

そのライバルの能力と進化を見極める為に、勇次朗さんは翔太の走りと現在の全日本のレベルの下調べをしに来たという事か。これはかなり翔太にとってプレッシャーになりそう……………。

「……望むところです……」

「何？」

「千秋だろうが他の全日本ライダーだろうが、例えば相手が三島さんだろうが、俺は負けるつもりはありません」

さっきまでのヘラヘラした態度と全然違う翔太の佇まい、相手が日本史上最高のライダーでも一步も引かない強い気迫だった。

「……そのビックマウスも師匠譲りか？　あまり大口を叩くと後々自分に返ってくるから真似も程々に……」

「……威勢だけじゃありません！　これは俺と父さんとの約束なんです！　世界チャンピオンになるって、父さんが届かなかった栄光のトロフィーを空高く掲げるって約束したんです！　その約束を果たす為に、俺はどんな相手だろうと絶対に負けませんから……」

幹ノ介氏に掴みかかった時みたいな無謀な感情とは違う、自信に満ち溢れた凛々しい表情。対面する勇次朗さんだけではなく、側で話を立ち聞きしていた人達まで翔太の気迫に圧倒されていた。

「……それだけの見栄が切れるのならば、俺もここまで来た甲斐があったもんだ、その言葉、しっかりと千秋に伝えておくぞ」

そうだよね、何だかんだ言っただって、バイクの大きさは違くとも翔太も全日本のチャンピオンなんだ、あの風間貴之さんの血を継いだサラブレッドなんだ、あの渡瀬虎太郎が育て上げた日本の期待の星なんだ！ 一歩も引く事なんてない！ 翔太、カッコイイよ！！

『……………また、ノロケちゃった……………』

……………話題を変えよう。大切な息子さんの為にわざわざカリスマライダーが視察に来たんだから、きつと家族総出でここに来てるに違いない。と言うことは、千夏もこのサーキット場のどこかにいるのかな？

「ところで三島さん、千春さんと千夏はどこにいるんですか？ もちろん一緒に来てるんですね？」

「そりゃそうだろう？ こんな地方まで三島さん程のカリスマが一人寂しくトコトコくる訳ないじゃん？ きつと二人とも観客席のどこかに……………」

「……………」

「……………あれ？」

家族の話をした途端、勇次朗さんの顔色が曇りだしてうなだれてしまった。『頼むからそこには触れてくれるな』と言いたげな困ったその表情、前に千夏が私達に話していた通り、どうやら勇次朗さん



はこの二人の話をされるのが苦手の様だ。

「……まさか三島さん、ここまで一人で来たんですか……？」

「……千春さんと千夏ちゃん、一緒に来てくれなかったんですか……？」

「……なあ、教えてくれ、お前達は千夏から何か俺の話を聞いているのか？」

「ええ、まあ、ざつとですけど、パパは家で居場所が無いとか、ママがいらないと何にも出来ないとか、休みの日にどこにも遊びに連れて行ってくれないとか、あと……」

「……そんな、あんまりだろお、俺だって、俺だって一生懸命家族サービスしようと頑張ってるのによお……」

あれれ？ さつき幹ノ介氏に立ち向かったあの威勢はどこへやら。よほどこの話がショックだったのか、勇次朗さんはその場にしゃがみ込んでいじけだしてしまった。しかし、勇次朗さんが三島家でこんな情けない立場に追い込まれてしまっているのにはちゃんとした理由がある。

奥井グループとの確執により、所属していたチームが消滅して夢も希望も失い途方に暮れていた勇次朗さんに救いの手を差し伸べてくれたのは、何を隠そう今の奥様であるあの千春さんなのだ。

当時ファッションデザイナーとして頭角を現し、世界でも注目されるようになった千春さんは偶然出会った勇次朗さんの腐れっ振りを

見て母性本能を擲られたらしく、仕事で知り合った有名デザイナーやブランド企業に融資を依頼して新たなワークスチームを作り上げ、再び勇次朗さんに世界の舞台での活躍の機会を与えたのだ。

つまり、その千春さんの内助の功が無ければ勇次朗さんは日本人初のトップクラスでの世界チャンピオンにはなれなかった訳で、カリスマと呼ばれ伝説として語られる現在の勇次朗さんも存在していなかった訳だ。

その為三島家は典型的な力カア天下となり、勇次朗さんは家でも外でも千春さんには頭が上がない。そんな夫婦の間に生まれた娘はカッコいい母親と情けない父親の背中を見てスクスクと態度のデカい小生意気な女に成長し、いつしかパパを見下すようになってしまったのだ。父親の威厳なんてあったもんじゃない、絵に描いた様なマスオさん状態にされてしまっているのだ。

「……今日だって『みんなと一緒に行かないか?』って誘ってみたんだぞ? そしたらアイツら、『今日は友達のブランドが大手百貨店で開店イベントを行うから手伝いで忙しいの』とか、『バイクなんてつまんな〜い、ましてやパパとお出掛けなんて絶対に有り得ない!』なんてほざきやがって……」

「……あ、あの、三島さん?」

「昔は千春もあんなに優しくかったのに、最近は仕事、仕事ってちつとも構ってくれないし、千夏も小さい頃は『パパ、パパ!』って毎日たくさん懐いてくれていたのに! いつからアイツらはこんなに俺に対して冷たくなったんだ!? 唯一の理解者だと思ってた千秋だってそうだ! 親心で遙々こんな田舎まで全日本戦の視察にやってくるって言ったと言うのに、礼の一つも言いやしない! 俺はアイツのマネージャーか!? バシリか!? 一体俺がお前達に何か悪い

事でもしたって言うのかあ!？」

……あーあ、ついには地面の穴から湧き出てくるアリンコを足でグリグリ潰し始めてしまった。大先輩として尊敬している翔太ですら呆れてしまう程の哀れなその姿、私は何か余計な事を言ってしまったみたいだ。悪気は無かったんだけど、どうやら勇次朗さんの一番触れてはいけないところに容赦なく土足で踏み込んでしまったらしい……。

「おいおい那奈、虎太郎や麗奈みたいに勇次朗の事をいじめんなよ？ コイツは貴之以上にメンタルが弱くて、すぐにいじけてヘコンじまうんだからよ」

打ちひしがれる勇次朗さんに更なる追い討ちをかける様に、すっかり機嫌が直った橋本さんがニヤニヤしながら会話に入ってきた。何か勇次朗さんの他の弱みを握っているみたいで、話がしたくてウズウズしてるみたいだ。

「は、橋本!？ 渡瀬の金魚のフンめ、貴様、何の用だ!？ 子供達の前で余計な戯言を喋ったら承知しないぞ!？」

「戯言とは失礼しまうな、俺は真実を知りたがっている若者達に本当の事を話してあげるだけだぜ？ お前はいつも虎太郎に虎太郎に小馬鹿にされては激怒してピットの中まで追いかけてきて、それを麗奈に見つかってスパイ容疑をかけられて、二人揃って正座して麗奈から説教されていたよなあ!？」

「……き、貴様……！」

「しかもよお、今でこそこんなお洒落な格好してるけどよ、昔のコイツのセンスの無さったらまあひどいもんだったぜ？ ヘルメット被ったらグチャグチャになっちまうっつーのに頭にベタベタ整髪料付けまくって、カッコイイと勘違いして首に赤いバンダナとか巻いてたんだぜ？ もうダッセえのなんの、今日のこの服だっとうせカミさんが仕立ててくれたもんだろ？」

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！！ それ以上余計な事をベラベラ喋るなあ……！」

うわあ、これはさすがに私も引いた。世界でもVIP扱いされる程のカリスマの看板がガラガラと崩れ落ちていく音が聞こえてくる。当時を良く知る関係者から語られる衝撃の事実。私や翔太だけではなく、周りにいる他のライダーや取材陣、観客席から覗き込んでいたファン達の視線が一瞬にして冷たくなった。

「……三島さんって、昔はかなりズレてたんですね……」

「違う！ 風間、渡瀬の娘、これは誤解だ！ これはきっと橋本の裏で暗躍している渡瀬の陰謀だ！ 渡瀬那奈よ、お前の父親はな、罪のない人間を陥れては悪魔の様な笑みを浮かべるとんでもない悪党なんだぞ！ いつも俺はあの男の非道に巻き込まれては、迷惑な言われ無きレッテルを貼られて……」

「しかもコイツよ、今のカミさんに出逢うまでバリバリの童貞だっ

たんだぜ？　すでに三十間近だったつてのに、手取り足取りリードされて筆卸しして貰ったんだよなあ？」

「ぐわああああ！！　黙れ黙れ黙れええええ！！！！」

橋本さんの度重なる暴露に、ついに勇次朗さんはキレてしまった。ピット内に転がっていたタイヤやホイールを投げつけ、辺り一面はバイクの部品で散らかりまくってしまった。その見た目からはとても想像の出来ない暴挙っぷりに驚いた取材陣や野次馬はみんな一斉にその場から逃げ出し、取り残されたのは私と翔太の二人だけ。

「女房の尻に敷かれるのがそんな悪い事なのか！？　俺だつてこれでも頑張つて父親やつてんだぞ！？　それなのにお前ら寄つて集つてバカにしゃがつて、チクショウ……」

「……三島さん、ちよつと落ち着きませんか？　千夏だつて本当は三島さんの事を素敵なお父さんだつて思っているはずですから……」

「そうですね、三島さん！　どんな事情があろうとも、三島勇次朗は父さんや親父さんと並ぶ偉大な日本人ライダーですよ！　俺は心から尊敬してますから！」

「……ウツ、ウウツ……」

高校生である私達になだめられるのも何だけど、ようやく勇次朗さんは普段の落ち着きを取り戻して潤んでいた瞳をお洒落なハンカチで拭き取った。

しかし、意外にキレやすい人なんだなあ。一見クールに見えるけど、はつきり言うところとちょっと子供っぽい。こういう危なっかしいところに千春さんも惹かれたのかなあ？

「……醜い姿を晒してしまった様だな、すまなかった……」

「……いえ、大丈夫です、私達こっぴどくの何故か慣れてますから……」

「……あの男が今日ここにいないのがせめての救いか、アイツにこんな姿を見られていたら、一生の恥として語り継がれてしまうところだった……」

さっきまでの話のやり取りやこの言葉からもわかる通り、勇次朗さんと私の父である渡瀬虎太郎は三十年近い歴史を持つ犬猿の仲である。突然この世界に現れ嵐の様に日本国内や世界のロードレース界を席巻した父さんの存在は、子供の頃から真面目に努力を重ねてのし上がってきた勇次朗さんからしたら常に目の上のたんこぶだった。小さい頃から両親に厳しく礼儀作法や人脈の大切さを教え込まれてきた勇次朗さんにとって、礼儀も常識も弁えない暴虐無尽な行動を起こす父さんは全く理解の出来ない正反対の人間だった。

そのいちいち癪に触る男があるう事が自分よりも先にさっさと中排気量クラスの頂点を極め、長年その王座に居座り必死に追いつける自分を最後まで蹴落としては小馬鹿にして大喜びする、正に怨敵。奥井家との因縁の話とはまた一味違う、お互いのファン同士すらも対抗意識を持ってしまうほどの最大のライバル関係なのだ。

「……あの男には何度となく煮え湯を飲まされてきた事が、本気で裁判に訴えてやろうと思った時もあった……」

「……何か、色々とすみませんでした……」

「いや、娘の君が謝る事ではないよ、子は親を選べないし、むしろあんな父親を持つ君の方が不憫でならない……」

とは言いながらも、お互い憎悪の末に殺意が芽生えたりとか、夜中に神社で藁人形に釘を打つとかそんなドロドロした因縁って程ではないんだけどね。わかりやすく簡単に説明すると、父さんがルパ○で勇次朗さんが銭○警部みたいな感じかな？ 何だかんだ言いあってもそんなに仲が悪いって訳じゃないみたい。実際、妻同士は学生時代からの大親友だしね。

「……あつ、そうだ！」

突然、翔太が大声を上げてピットの中に走っていった。何かを思い出したみたいで、自分が背負って持ってきたリュックの中に手を入れて何やらガサゴソと探りだした。

「あのこれ、親父さんがもし三島さんに会おう事があつたら渡せつて……」

翔太の手に握られているのは一枚の安っぽい封筒。どうやら中には

便箋が入っているみたいで、少し形が膨らんでいる。

「……これ、本当に父さんから？」

「……何だと？ 一体何の真似だ？」

父さんからの封書と聞いて、勇次朗さんは疑いの眼差しで恐る恐るその封筒を受け取った。あの人がこんな物を送りつけるなんてかなり珍しい事だ。しかもそれが勇次朗さん宛てなんて、これは絶対に何かある。スゴクイヤな予感がする……。

「……今年に入ってまだちゃんとした挨拶が出来ていなかったから、現地に行けない代わりにこれを渡してくれて言っていましたけど……」

「……あい、さつ？ だと？ あの男がか？ 信じられん……」

何かトラップが入ってないか厳重に確認した勇次朗さんは、封筒の中から数枚の便箋を取り出し目を通した。一体何が書かれているんだろう……？

「『新年の御挨拶』とは……、驚いた、あの男め、この歳になつてやっと人様に対して礼儀を通すようになったんだな、あんな男でもちゃんとやれば出来るんじゃないか、良い心掛けた、正直見直したぞ、うむ、関心関心……」



父さんの意外な行動に嬉しそうに笑っている勇次朗さんだけ……。毎日顔を合わせている娘からしたら、いやいやまさか、それはない。四十過ぎても悪ガキパワー全開のあの人が、この歳になったって礼儀なんて慎む訳がない。きっとその便箋の続きには、絶対に勇次朗さんを激怒させる内容が綴られているに違いない……。

「……………!!」

ほーら、言わんこっちゃない。便箋に目を通してしている勇次朗さんの顔はみるみるうちに変色し、帽子やジャケットの色と同じくらい真っ赤っか。便箋を持つその両手は怒りてブルブルと震え出し、その脳天は活火山の様に噴火寸前……。

『……………噴火寸前?』

そういえば、私はこんな反応を起こす人間を前にも見た記憶がある。確かそれはこの前の高校の入学式で、いや、それより前の県スポーツ大会の体育館でも、いやいや、もっと前のみんなで電車に乗って不良に絡まれたあの時も……。

「……………わあたあせえええええ!!!!!!」

便箋をビリビリに破いた勇次朗さんは再び導火線に火が点き、被っていた帽子を地面に叩きつけて頭からモクモクと火山灰を吹き出しながら周辺を見回していた。どうやら誰かを探している様子……。

「渡瀬！！ 貴様、本当はここにいらっしゃる！？ 俺がここで怒り狂っている姿を見て、どこかで笑い転げているに違いない！！」  
どこだ、姿を見せる渡瀬！！」

「……い、いや、ですから親父さんは今、沖縄に……」

「そんな話、信じられるか！！ 俺には見えるぞ、ヤツが腹を抱えてのた打ち回っている姿が！！ 出てこい渡瀬、今日こそ貴様の息の根止めてやる！！」

勇次朗さんが破り捨てた便箋を一片ずつ拾い集め、何とか文章が読めるように組み立ててみると、やはりその内容は私の予想通りのひどいものだった。

## 新年の御挨拶

Dearフサフサ三島ハゲ次朗ちゃん。

今年の正月は晴天で、チミのでこっパチの様な見事な初日の出を拝む事が出来たんだぜ。

正月早々から爆笑してしまったよ。

さぞかしチミの生え際も森林伐採が進んで温暖化がハゲしくなっている事だろう。

世界は今やエコの時代、チミも抜けた毛髪を寄せ集めて、将来を見

据えてMy地毛100%のスペシャルツラをオーダーメイドするのはいかがかな？

これからも日本のロードレース界の発展の為に、お互いハゲしくハゲましあって心も頭もヘルメットもピカピカに磨いていきましよう。あつ、チミにはもうヘルメットなんて不要だったね、立派な天然カーボンヘッドがおでこにあるんだからね。

チミにはこれからもピカピカに輝くスーパースターで居続けくれる事を願うよ。

眩しすぎて裸眼で見たら目が潰れちゃうぜ、カッコイイぜ、ハゲ次郎！

愛しの虎太郎ちゃんより

「……三島さん、更に生え際がアブナくなって、帽子被ってればいいのに……」

それともう一つ、私が何故激怒しまくっている勇次郎さんに対して冷静な対応が出来ている理由が何となくわかった。この人目もはばからないヒドい醜態、あの女と全く一緒だ。千夏のあの大噴火は、どうやらこの父親から受け継いだものなのだろう。

「出てこい虎太郎！！ 渡瀬虎太郎お！！！！！」

「……あーあ……」

この怒髪衝天に空も共鳴し、晴天だった天気は突然崩れだし大雨が

ザーザー降ってきた。サーキット場のコース一帯はバケツをひっくり返した様に水浸しになって、風も吹き荒れレースの開催は不可能になってしまった。

「……大会中止って、そりゃねーよ！ 待ちに待った俺の全日本デビュー戦だったのに！！」

暴風に撒き散らされる破れた便箋と貴重な髪の毛。幹ノ介氏の登場に勇次郎さんの大噴火、とんでもない嵐に巻き込まれた私の代表代理の仕事は意外な結果で幕を閉じた。もうこんなの懲り懲り！ どんなに頼まれてもこんな役目二度と引き受けないんだから！！

## 第46話 もっと

「わーい！ 瑠璃ちゃん見て見てー！ ベイブリッジだよー、海が見えるよー、お船が見えるよー！！」

「わー！ おふねおふねー！ プカプカういてるー！」

「やっほー！ 今年もゴールデンウィークがやってきたよー！ あたし、真中小夜は今日ねー、瑠璃ちゃんのお母さんのお墓参りに、みんなと千葉のある田舎町へと車に乗ってお出掛けです！ 瑠璃ちゃんも航くんはもちろん、遠藤先生や彰宏お兄さん、そしてあたしのお母さんも一緒なんだよー！」

「……わざわざ車まで出して載いて、お手数おかけして誠に申し訳ありません、日を改めて真中さんには私達から何か御礼を……」

「あーら遠藤先生、これくらいお気になさらないで下さーい？ お墓参りのお話を伺ったうちの小夜が、どうしても瑠璃ちゃんと一緒に行きたいって言い出して利かないものですから、いつもいつも皆様にばかりご迷惑をかける訳にはいきませんもの」

「しかし、私も車を一台所有しているというのに、こんな立派な広々とした外車と運転される方まで用意して下さるとは、流石は世界で大活躍されている音楽プロデューサーの奥様で……」

「……あの、先生？ それに皆さん？ 一つ誤解のないように言わせて戴きますけど、とりあえずこの車は僕の個人の車であつてですね、それに僕は何も自らの好意で今日皆さんに車を提供した訳でもないですし、いつもいつも真中家の運転手をしている訳でもありませんから！ ちゃんと僕には『サンライズ・ファクトリー』の国内の事業運営や経営戦略を海外にいるマスターから任されているエグゼクティブ・ディレクターという仕事上の立場でありましてですね、それから……」

「ごめんなさいね、井上さん？ せっかくのゴールデンウィークのお休みを無理難題言つて同伴させちゃつて、とっても感謝してますわ」

「……いえ、マスターとご夫人から直々のご依頼ですから、僕にはとても断る事など出来ませんし……」

「井上さん、車運転してる姿カッコいいなー！ やっぱ井上さんはおとーさんの一番のお友達だねー！」

「……どうも、ありがとうございます……」

「そういえば井上さん、さっき何か一生懸命お話してたところを私と小夜ちゃんでお邪魔しちゃったみたいだけど、何かしら？ 私達は黙ってますから、どうぞお気になさらずにお話を続けて下さい？」

「……いえ、あの、もう結構です……」

「そうなんだよー！ 今あたし達が乗っている車は、麻美ちゃんの歌

手デビューを手伝ってくれていたあの井上さんの車なんだよー！  
外の色は真っ黒でピカピカで、中はスッゴク広くて座席が三列あつてねー、とてもいい匂いのするカッコいい外車なんだよー！ 何て名前だっけ？ えーと、黒い丸の中に交互に白と水色のマークが付いてたから、確かB W Hだったっけ？

「……………BMWだよ」

あつ、そうだった。間違えちゃった、エヘヘ。やっぱり航クンは物知りだなー！ あたしは外国の車の名前なんて全然わかんない。スゴくおっきなやつとか平べったいやつとか、変な形ばかりなのに何でみんなそんなに外国の車に乗りたがるのかなあ？

そういえばあたし、小さい頃に名前を覚えてばかりのベンツの車を見て『ベンキ、ベンキ！』って指差したらパンチパーマの怖いおじさん達からギロツて睨まれた事があつたなー。一緒にいた那奈に頭をバシバシ叩かれて腕を引っ張られたっけ。何であんなに怒られたんだろっ、たった一文字だけ間違えただけなのにー。

「えーと、神崎さんでしたっけ？ ウフフ、新妻の麻美ちゃんと赤ちゃんの体調はいかがかしら？ 健康に過ごしていらっしゃいますの？ ちゃんと栄養も取れていらっしゃいますの？ もうすっかり、お腹も大きくなったのかしら？」

「……………あつ、はい、お陰様でとても順調で、母子共に健康そのもので……………」

「あら、それはとても良かったわー、私、麻美ちゃんにはあまり力

になつてあげられなかったからスゴく心配してなのよ、私も小夜ちゃんを産む時はとても大変だったわ、麻美ちゃんはとても素直で可愛い女の子なんだから、またヒドい事をして泣かせたりしたらダメよ？ 神崎さんの力で、麻美ちゃんを世界で一番幸せなお嫁さんにしてあげて下さいね？」

「……は、はい、まあ、何とか……」

「そうだよそうだよ！ また麻美ちゃんを泣かせたりしたら、あたしも那奈も優歌お姉ちゃんも許さないんだからね！ みんなでお尻ペンペンの刑だよ！」

「……お尻なら毎日職場であのバケモノ……、いやいやいや、渡瀬優歌『様』に十分叩いて戴いてますから、もうこれ以上俺にプレッシャーをかけてイジメないで下さい……」

一つ残念だったのは、今日麻美ちゃんが私達と一緒に出かけ出来なかった事だな。麻美ちゃんのお腹もお相撲さんみたいにポンポンに大きくなってきたから、転んだり体調が悪くなったりしたらいけないからあまり遠出をするのは控えなさいって産婦人科の先生から注意されたんだって。

それに、麻美ちゃんは元々乗り物酔いが人一倍ヒドいから今日はお家で美代子お母さんとお留守番になっちゃったんだ。麻美ちゃんと一緒にいないのは寂しいけど、その分まであたしがしっかりとお墓参りに行って来なきゃね！ それと、麻美ちゃんや那奈達みんなに何か名物のお土産を買っていつてあげようっと！

「人が目の前で見てるというのに、二人のイチヤイチヤ振りには義



父である私もさすがに嫉妬してしまったよ、全く、新婚さんってもんは困ったもんだな？」

「ワイ、聞いちゃった聞いちゃった！ 麻美ちゃんと彰宏お兄さん、アツアツだねー！ ヒューヒュー！」

「……いや、そんな、それほどでも、エヘヘ……」

「……ウ、ウウン！」

あたし達が後部座席でおノロケ話をしていると、運転席の井上さんがバックミラーを見ながら急に大きな咳払い。その音と鏡越しの目線に彰宏お兄さんがビクツと驚いた。なーんか、スゴくピリピリした怖い雰囲気……。

「……お幸せそうで何よりですね、これならあの子の僕達の苦労も報われますよ」

あー、そうか！ そうだった！ 井上さんと彰宏お兄さんは初対面どころか、麻美ちゃんのプロデビューのお世話してた人とお話全部ダメにしちゃった人同士だったんだっけ。そうだねー、井上さん、まだ怒ってるよねー？ だから、さっきから彰宏お兄さんは申し訳なさそうにこんなに小さく背中丸めていたんだねー。

「……あの、皆様には大変ご迷惑をおかけしまして申し訳ございませんでした、特に、真中啓介様と井上様を始め事務所の方々には本

当に、本当にすみませんでした……」

「井上さん、私からも改めてお詫びをさせて戴きます、麻美子の音楽の才能を見出して戴き、華やかな舞台へのお力添えをして下さったにもかかわらず、その皆様に対して仇を返す様な無責任な無礼の数々、娘に代わり、どうかお許しを……」

運転席の井上さんに対して、遠藤先生と彰宏お兄さんが深々と頭を下げた。あたしもなぜか二人に釣られて一緒にペコツて頭下げちゃった。井上さん、あたしからも謝るからもう許してあげて？

「……フウ、お二人共、どうぞ頭をお上げ下さい、遠藤先生には以前お会いした時にお話を伺っていますからもう結構です、ただ、出来れば神崎さんには今日最初にお会いした時にその言葉を聞きたかったのですが……」

「……あつ、すみません、あの、俺、何て言い出したらいいのかわからなくて、あの……」

……なんか井上さんの態度、しつこくてイライラしててイヤミな感じだなー、お話が長くなりそう。お仕事をダメにされて怒ってる気持ちはわかるけど、ちゃんとしたご挨拶が出来ないのは彰宏お兄さんにとっていつもの事なのにー。（補足：つまりはダメ人間）だから今、彰宏お兄さんはジムで優歌お姉ちゃん達にいじめられながら一生懸命お勉強してるのになー？

「……でも、もう気になさらないで下さい、こうして神崎さんから  
もお話を伺えた訳ですし、すでにもう過去の事ですから、それにこ  
の手の諸事情は僕達が身を置くこの世界では以前にも多々ある話で、  
芸能界というものは世間一般の常識が通用しない難しい部分もある  
んですよ、ですからその……」

「私はね、麻美ちゃんはきっと無事に可愛い赤ちゃんを産んで、  
とても素敵なお母さんになると思うわ？　ね、井上さん？　井  
上さんもそうなってくれると嬉しいわよね？」

「……ハ、ハイ、ソ、ソウデスネ……」

「あらやだ、私ったらまた井上さんがお話してるところをお邪魔し  
ちゃったかしら？　ごめんなさいね、どうぞ私の事なんて気にな  
さらずにお話の続きをどうぞ？」

「……いや、もう結構です、特に話す事でもないですから……」

「あら、そう？　何か悪い事しちゃったみたいね？　ねえねえ、  
小夜ちゃん？　最近の若い子達が言ってる『KY』っていうのはお  
母さんみたいな人の事を言うのかしら？　お母さんって、やっぱり  
周りの空気を読めてないのかしら？」

「えー！　お母さんって『空気』って字が読めないのー！？　大丈  
夫だよー、あたしも小学生五年生になるまで読めなかったもん！  
それにね、あたしも麻美ちゃんはスッゴク優しくとっても可愛い  
お母さんになると思うよー！　きっと生まれてくる赤ちゃんもスッ  
ゴク可愛いんだろー！？　ねーねー瑠璃ちゃん、瑠璃ちゃんも  
そう思うよねー！？」

「うん！ あかちゃんがつまれたら、ルリがおねえちゃんになってあげるのー！」

「やったねー！ 瑠璃ちゃんもお姉さんになるんだねー！ 良かったね井上さん！ 麻美ちゃん、絶対に幸せなお嫁さんになれるよー！」

「……このご夫人にこのお嬢様、一体僕にどうしろと仰れるのですか、マスター……？」

ベイブリッジを過ぎて長いトンネルに入ると、さっきまでいつぱい前を走っていた他の車が急に少なくなっちゃってスイスイ。物知りの航クンに聞いたら、今走っているこの道は『東京アクアライン』って名前の高速道路で、千葉に行くに一番早く到着する道順なんだってー。

でも、何か変なのー？ そんなに早く走れる道なんだったら、何で他の車もここを通らないんだろう？ どうしてみんな、他の道の方に逃げていつちゃったのかなー？ 物知り博士の航クン、あたしにわかりやすく教えてー？

「……………通行料金が高い」

へー、そうなんだー、スッゴくわかりやすーい！ 高速道路によって払わなきゃいけないお金の数が違うんだねー。真中小夜、また一つ賢くなりました！ あたしがおとーさんやお母さんと車で高速道路に乗る時は、いつも真っ黒のカードを料金所のおじさんに手渡すと勝手にゲートが開くから料金とかよくわかんなかったんだよねー。

今さっきもお母さんがそのカードを料金所のおじさんに渡したら、いつもの様にゲートがパァーって開いたもん。あのカードって一体何なんだろう？ ゲートを開ける鍵なのかな？ お金払ってないのに何で通れるのかな？ って言うかあたし、おとーさんとお母さんがお金を払ってるところ一度も見た事ないよー、何でだろう？

「……和夫さん、さっきの見えました？ 真中さんが料金所で手渡したカード、ボックスの中の人も一瞬ビビってましたよ……？」

「……実際に見たのは初めてだ、正に真っ黒だったな？ あれが世に言うブラックカードってヤツか？ 妻と出会う以前、大型病院でバリバリ働いていた私でもゴールドが精一杯だったんだぞ？ やはり世界で活躍する人気音楽家の家庭ともなると、我々一般市民の日常とはまるで別世界のものなんだな……」

遠藤先生と彰宏お兄さんもあのカードを見て何か小声でボソボソ喋ってる。もしかしたら、あたしと同じ事を考えているのかなー？ カードを見せるだけで高速道路を通れちゃうって、やっぱり不思議だよなー？

「あーら、お二人ともそんなにご遠慮なされて小声で喋らなくても結構ですよー？ 私、あのETCって機械が良くわからないものでいつも料金はカードで済ませてますのー、このカードがそんなに珍しいのでしたらどうぞお手に取ってご覧下さーい？ 一枚くらい無くなっても大丈夫ですよ、家に帰ればゴールドでもブラックでもプラチナでも何枚でも選り取り見取り」

「……………」

「……あの、ご夫人、お言葉ですがご夫人のお話にお二人とも若干引いていらっしゃいますから、ここらで控えた方が宜しいかと……」

へー、あのカードってお金の代わりになるんだー！　またまた一つ賢くなっちゃいました！　あたしもいつか大人になったらお母さんみたいにあのカードが持てるようになるのかなー？　でも、見せるだけで何でも出来ちゃうカードなんてあたしが持ったら、いっぱいお菓子やジュースばかり買っちゃいそうだなー？

あつ、そうだ！　そういえばねー、ちよつと前にいづみ叔母さんがあたしに話してくれたんだけど、あたしのお祖父さんはおっきな有名レコード会社の社長さんだったんだつてー。でもねー、今はその会社もおとーさんの会社の中に吸収されて、お祖父さんもあたしが生まれる前に亡くなっちゃったんだー。

それでねー、お母さんは赤ちゃんの頃からそのお家のお嬢様として育てられてきたから、生まれつきお金の感覚が普通の人よりスツゴくズレてるんだつてー。この前まで五円玉に穴が空いてるつて事も知らなかったんだよー！　叔母さんから『小夜もそうならないように気をつけなさい』つて怒られちゃった。

……あれ？　何であたしあの時いづみ叔母さんに怒られたのかなー？　なーんにも悪い事してなかったのに、何か変なのー？

「そろそろお子様達も車内で飽きてきた頃でしょう、皆さん、少し休憩を取っていかれますか？　まだ目的地までは半分近く時間がかりそうですし」

「休憩？　ねーねー井上さん、このトンネルの途中にどこか休める

所があるのー？ この先ずつーとトンネルしか見えないよー？」

「……は、はい、あの、『海ほたる』というパーキングエリアがありまして、途中で外に出るんですが……」

「海ほたる！？ ハーイ！ あたし聞いた事ありまーす！ 瑠璃ちゃん、海ほたるだって海ほたる！ あたし海ほたる行きたーい！」

「ハーイ！ ルリもいきたーい！ うみほたるー、うみほたるー！ たよとおにいちゃんといっしょにいくー！」

三列目の一番後ろの座席にいるあたし達は天井いっぱい手を挙げて休憩さんせーい！ 大声に耳を塞いでいる前の座席にいる遠藤先生と彰宏お兄さんの手も強引に挙げさせちゃおうつと！

「あらあら、後ろのみんなは休憩なんていらなくらい元気一杯ね？ このまま真っ直ぐ目的地まで行っちゃおうかしら？」

「ううん、そんな事ないもん！ もうヘトヘトだもん、ヘットヘット！」

「へつとへとー、へつとへとー！」

「はいはい、わかりました、遠藤先生と神崎さんも一息ついていかれますか？」

「……いやはや、奥様に面と向かってそう聞かれてしまうと、何と答えたら良いのやら……」

あれー？ 遠藤先生ったら、お母さんがこっちを向いて首を傾げたのを見て頭を掻いて恥ずかしがってるよー？ 先生にはちゃんと素敵な奥さんがいるのに、いけないんだー！

でも、さっきのお母さんの仕草、とっても可愛ーい！ 千夏のお母さんに負けないくらい年齢不詳って言われるだけあるよねー！ ホントはもうすぐ四十八歳になるんだけどねー。

「……和夫さん、明らかに反応が変ですよ？ こんな事がもし美代子さんや麻美子にバレたらさぞかし……、ププツ」

「黙れ！ お前は黙ってるバカモン！」

「ウフフ、井上さんも運転お疲れでしょうからゆっくり羽根を伸ばして休んで下さいね？ まだまだ先は長いんですから」

「……そうですね、運転もそうですが、色々とペースを乱されて一番疲れてるのは僕かもしれません……」

トンネルの途中でパーキングエリアの方に進んで、お外に出ると眩しいカンカン照りのお日様と久し振りのご対めーん！ 雲一つない真っ青なお空が見えたと思ったら、同じくらい真っ青な海が360度一望だよー！ スゴーい！ まるで海の上に立っているみたいー！

「瑠璃ちゃーん、ほら見てー！ お船がレインボーブリッジの下を通ってるよー！」



「おふねー、おふねみえたー！ スゴーい！」

「……………瑠璃、少し落ち着け、暴れると落ちるぞ」

航クンに肩車された瑠璃ちゃんは初めて見る大パノラマの風景に大喜び！ やっぱ瑠璃ちゃんにとって航お兄ちゃんの肩の上は専用の展望台特等席だね！

「あら？ 自動販売機ってカード使えないのね？ 売店も混んでいるし、困っちゃう、これじゃあみんなの飲み物が買えないわ」  
「？」

「……………娘さんもそうだが、奥様もかなり天然のご様子だな、だが、それもまた可愛らしく感じるものだ……………」

「……………和夫さんにそう言われ続けると、何か俺もだんだん真中さんが可愛く見えてきたような気が……………」

やっぱりゴールデンウィークだから、あたし達以外にも人がいっぱいいて売店でたこ焼き一つ買うのもたいへん！ でも、瑠璃ちゃんや航クンと一緒に食べたたこ焼き、スゴく美味しかったよー！  
麻美ちゃんへのお土産、これでいいかなー？

「おーい三人とも、そろそろ出発するってさ、早く車に戻ってー」

「えっー、もう出発するのー!? やだやだやだー! まだもつとここで遊びたい! ねー、瑠璃ちゃんと航くんもそう思うでしょ!?!」

「あそぶー、あそぶー! たよといっぱいあそぶー!」

「……………駄目だよ瑠璃、本当の目的はお母さんのお墓参りなんだから、彰宏さんの言う通り車に戻ろう」

あつ、そうだった! 海ほたるがとっても楽しかったからすっかりお墓参りの事を忘れちゃってた。そうだね、今日は瑠璃ちゃんのお母さんのお墓参りに行くんだもんね。ここでずっーと瑠璃ちゃんと遊んでたら、きつと待ってくれている瑠璃ちゃんのお母さん、寂しくなっちゃうよね。

ちよつと残念だけど、あたしもちゃんとしたお姉さんになって瑠璃ちゃんのお手本にならなきゃ! 遊びは遊び、お墓参りはお墓参り! 頭をきつちり切り替えてみんなと一緒に瑠璃ちゃんのお母さんに会いにレッツゴー!

「小夜ちゃーん、ちゃんとおトイレは済ませたの? また車の中でオシッコなんて、もう赤ちゃんじゃないんだからしちゃダメよ?」

「あー、そうだった! トイレ行きたーい! みんなちよつと待っててねー!」

「ルリもオシッコしたーい! たよといっしょにいくー!」

そういえばあたしって、小さい頃車に乗る前はいつもお母さんにオシメされてたな。でも、もうあたしも高校生になったんだから、おもしろいなんかしたら瑠璃ちゃんのお姉さん失格になっちゃう！遠出の時はちゃんと前もってトイレを済ませておかないかね！

「……なあ彰宏、あの奥様は天然の様で然るべきところはしっかりとされている、まるで女性の鏡の様な方だと思わんか……？」

「……そうですね和夫さん、やっぱり女性って育ちが良いと自然にそれが行動や仕草として現れるもんなんでしょうかね？ 何か俺もすっかり奥様の虜に……」

「……あの、お言葉ですがお二人とも、あづみ夫人の事を何もご存知ないからそう言えるんですよ？」

「……は？」

「ご夫人はあの様な可憐な容姿からは全く想像のつかない程の常人の域を超えている『物忘れ』の特技を持っておられまして、直前まで会話を交わっていた人の名前を振り返ったその刹那に忘れてしまふのは当然の事、一家団欒でご静養にお出掛けなされた湖畔の別荘にご自分の命よりも大切なはずのお嬢様を置き忘れていく事もしばしば……」

「……………」

「最近の出来事といえば、何やら急にインターネットの世界に興味を持たれて社内のパソコンでご堪能されている際、危険なURLを

見事躊躇無く踏んでしまい、すっかり満喫されたのかサイトに繋がったままいつもの様にお忘れになって三日間ほど放置、僕達が異常に気付いた頃には社内のパソコンはおるか海外拠点のサーバーも手のつけられない状況になっていて、あわや我が社の極秘情報や所属アーティストとそのファンクラブ会員の個人情報流出しかけて全額一千万円ほどの修復費用が……」

「……彰宏、私もちょっとトイレを済ませてくる、少し頭を冷やす時間が必要の様だ……」

「……和夫さん、俺もお供させて貰います……」

無事にみんなトイレを済ませて一安心。さあ、改めて瑠璃ちゃんのお母さんに挨拶をしにいざ出発だよー！

「あら〜？ お二人とも先程より少し元気がない様に見えますけど、どうなされました〜？ どこか具合でも悪くなされましたの〜？」

「……い、いや、大した事ではありませんのでどうぞお気になさらずに、なあ彰宏？」

「……ええ、ちょっと、急に麻美子の事が恋しくなっちゃいました、アハハ、アハ……」

「あらあらウフフ〜、お熱いんですね、あの〜……、失礼ですがどなた様でしたっけ？」

「……初めまして、遠藤と申します……」

「……神崎でも彰宏でも、どちらでも好きな方で呼んで下さい……」

長いアクアラインのトンネルを抜けてもまだまだ続く長いお墓参りへの道。瑠璃ちゃんと一緒でもさすがに飽きてきちゃったな。周りも山ばかりで何かつまんない。

「もう、ねむいよー」

あらら、どうやら瑠璃ちゃんも同じ景色ばかりに飽きちゃったみたいで、すっかりお眠モードになっちゃった。さっきから車の揺れに合わせて頭が左右上下にコックリコックリしてお人形さんみたい！

「瑠璃ちゃん、あたしのお膝に乗って寝ちゃっていいよー！ あたし、ちゃんと瑠璃ちゃんの事をしっかり抱き締めてあげてるからね！」

「……はい、ムニヤムニヤ……」

あたしに体を預けた瑠璃ちゃんはあつという間にスースー寝息を立てて眠っちゃった。抱き締めた瑠璃ちゃんの体はとってもポカポカして温かくて、お外のポカポカ陽気もあってあたしも何かポカポカいい気持ち……。

「あらあら、小夜ちゃんもすっかり瑠璃ちゃんのお姉さんね、何かお母さん、そんな小夜ちゃんがとっても頼もしく思えるわ」

「お嬢様も素敵な女性に成長されていらっしゃるんですね、この立派な晴れ姿、是非ともマスターにご覧になって戴きたかったものです……」

「……くかー……」

「……小夜ちゃん、完全に寝ちゃってますけど……」

「航、二人が倒れない様にしっかり支えてあげなさい」

「……はい、わかりました」

（一同、数分の沈黙）

「……いやー、しかし子供達の寝顔というのは心が癒やされるものなんですネ、独身の僕からしたら、こんなに可愛らしいお嬢様がいるマスターとご夫人が羨ましい限りで……」

「……すぴー……」

「……ご夫人も一緒に休みですか、そうですね、ハア……」

……サワザワザワ、サワザワ……

「…………ほえ？」

…………あれー？ あたし、いつ寝ちゃったんだろう？ 外から聞こえてきた木が風に揺れる音に目が覚めて車の中から周りを見ると、遠くに山がいつぱい見える狭い砂利道に車が止まっていた。お母さんと井上さんの姿がないよ、どこに行ったの？

「……………起きた？」

声の聞こえた方を見ると、隣りで航クンが眠っていたあたしの事を支えてくれていた。瑠璃ちゃんはまだあたしのお膝の上でスースー眠ってる。どうやらあたしが眠っている間に目的地に到着した、のかな？ まだちょっと寝ぼけててよくわかんない……。

「…………ねーねー航クン、ここってどこー？」

「……………」

「…………航クン？」

…………今、一瞬背筋がゾクツとした。あたしの隣りに座っている航クンは、いつもの様にボソボソッと喋ってホワンと気の抜けた表情をしている航クンじゃない。まるで、初めてあった時の様な瑠璃ちゃん

んを守る事で精一杯だった怖い航クンに戻ってしまったみたいだった。一体どうしたの？ 何があったの？

「お目覚めのご様子ですね、お嬢様」

「あらあら、小夜ちゃんったらまだお目めがシヨボシヨボしてるわよ、ウフフ」

外にいるお母さんと井上さんが車の窓から顔を覗かせてあたしに話し掛けてきた。なーんだ、みんないるんじゃない？ 良かったー！ 何かあたし、怖い夢でも見ているのかなって思っ……、ってあれ？ あたしの前に座ってた遠藤先生と彰宏お兄さんがいないよー？ それに、ここってどこなの？

「ねーねー井上さん、もう瑠璃ちゃんのお母さんのお墓の場所に着いたのー？ それと、遠藤先生と彰宏お兄さんはどこに行ったのー？」

「今、ご挨拶に伺っているところです、ご霊前参りをさせて戴くの、ご遺族の方々に一声もかけないのは失礼ですから……」

「…………ご挨拶？」

「お母さんと井上さんはご遺族の人達と瑠璃ちゃんのお母様とは面識がないから、昔からお知り合いの先生がみんなを代表してご挨拶に行っただのよ」



「……ご遺族……」

「一緒に麻美ちゃんの旦那様、あの……、あらやだ、井上さん？  
あの方何てお名前だったかしら？」

「……神崎さんです……」

「あゝ、そうそう、神崎さんね？ あの方がお近付きのお品を持つて先生と一緒に……、あら？ 先生のお名前は確か、えっと……」

「……ご夫人、無理に思い出されなくても結構かと……」

「……ご遺族つて、確か亡くなった人の家族や親戚の人の事を指す言葉だよな？ じゃあ、今二人が会いに行っている人は瑠璃ちゃんのお母さんの家族の人で、つまり瑠璃ちゃんにとっては本当に血の繋がった親戚の人で、違ってお母さんから産まれた航クンにとっても義理の親戚……」。

でも待つて、確か二人のお父さんが刑務所に入れられて離れ離れになっちゃった時、その親戚の人達は誰一人航クンと瑠璃ちゃんの事を助けてくれなかったんだよな？ みんなして『犯罪者の子供は来るな！』つて追っ払ったんだよな……？

じゃあ今、先生達のご挨拶に行ってる人もそうなんだ。苦しんでいた二人の事を見放した親戚の人達の一人なんだ。だから航クン、さつきからずっとピリピリして黙り込んでいるの？ お父さんと同じ様に、その人達の事を許せなくて怒っているの……？

「……ねーねー航クン、あのね……？」

「……………」

「……いいからもう帰ってくれ!!」

「……!!」

突然、車の外から大きな怒鳴り声が聞こえてきた。あたしもお母さんも、そして井上さんもビックリしてその声が聞こえてきた方に振り返った。

「……ふ、ふえーん……」

「……あつ！ 瑠璃ちゃん、起きちゃったの？」

静かに寝ていた瑠璃ちゃんまで驚いて目を覚ましちゃった。いきなりこんな大声を出されたらビックリするよね、怖いよね？ 誰かケン力でもしてるのかな？ 怖いよ、何か嫌な予感がするよ……。

「…………… 瑠璃、大丈夫、怖くないよ、こっちにおいで……………」

グズってる瑠璃ちゃんをスツとあたしの膝から持ち上げると、航くんは瑠璃ちゃんを何かから守る様にギュって抱き締めた。今の声、誰の声だろう？ あたし、こんな人の声今まで聞いた事ないよー？ 遠藤先生や彰宏お兄さんとは違う、年老いたお爺さんみたいなしやがれ声。窓から身を乗り出して外を良く見ると、車が止まっている

すぐ後ろに麻美ちゃんのお家みたいな昔造りの大きなお家が建っていた。広いお庭の入り口の木戸には『江波戸』って表札が付いていた。何て読むんだろう？ あたしには難しくて良くわかんない……。

「……でしたら、せめてお花の供養だけでもさせて下さい！ せめて瑠璃に、一目だけでも墓前の母親との対面を許してあげて下さい！」

「そんな子供の名前、ワシは知らん！ うちには孫なんてものは一人もおらん！ 花を添えたいなら勝手にしていくがいい！ そして用が済んだらとつとこの町から出て行ってくれ！ 二度とワシの前に、忌まわしき血が流れているあの子供達を連れてくるな！！」

今度は遠藤先生の声も聞こえてきた。何か先生、そのお爺さんの人に怒られてるみたいだった。何であのお爺さん、あんなに怖い顔をして怒ってたんだろう？ それに、『あの子供達』って……？

「……おにいちゃん、こわいよー……」

「……大丈夫、お兄ちゃんが守ってやるから……」

……やっぱり、そうなんだ。あのお爺さん、航クンと瑠璃ちゃんのことを嫌っているんだ。あの子供達って、ここにいて二人の事なんだ。出ていけて、連れてくるなって、そんなの、そんなの……。

「……ヒドい、ヒドいよ……」

玄関の木戸から外に出てきた遠藤先生と彰宏お兄さんは参ったって顔をしていた。二人の服は上着から下のズボンまで水が染みていた。彰宏お兄さんは包装がグチャグチャになったお品を抱えて少し怒っている様に見えた。

「……皆さんすみません、わざわざこんな個人的な事まで付き合わせてしまったというのに、どうやら不快な思いまでさせてしまっ  
たみたいで……」

「……いえ、事情は伺ってますし、遠藤さんのご心労も共感致します、どうか僕の事はお気になさらないで下さい」

「……どうやら、門前払いをされてしまったみたいですね？  
お二人とも水浸して、もし宜しければ私のハンカチをお使い下さい……」

「一体何なんですかあの爺さん！ 差し渡した品はこちらに投げつけ返すわ、ちっとも和夫さんの話を聞かずに怒鳴りまくって水までぶっかけてきて！ あんなのまともな神経してる人間のする事じゃないですよ！」

「おい、彰宏！ 言葉を慎め馬鹿者が！ お前にあの人の何がわかるんだ！？ 少しはお前も人様の立場になって物事を考えろ！！」

「……それでも納得出来ないなあ……」

二人はお母さんから手渡されたハンカチで水を吹くと、疲れた様にあたしの一つ前の座席に座って溜め息をついていた。航クンは瑠璃ちゃんを抱いたまま何にも喋らない。瑠璃ちゃんも顔を埋めたままあたしの方を向いてくれない。車の中はすっかり暗い雰囲気になっちゃった。

「……じゃあ遠藤さん、車を出しますのでお墓の場所まで道案内して戴けますか？」

みんなを乗せた車はそのお家から逃げる様に離れて、いつしか窓の視界の中から消えてしまった。もう二度と近寄る事が出来ないかもしれないあの家とそこに住んでいたお爺さん。もしかしたらあの  
お爺さんは、航クンと瑠璃ちゃんの……。

「井上さ〜ん、ちょっとここで停めて戴けますか〜？ まだお墓にお供えするお花がありませんから、あそこにあるお花屋さんで買ってきたと思いますの〜？」

人通りの少ない道をしばらく走っていくと、小さいお店の並ぶ商店街が見えてきた。ここの商店街、麻美ちゃんのお家に行く時に通る桜の公園の下にある商店街に良く似てる。何か住んでいる人達はみんな笑顔で優しそう。ここにもどこかで桜の花が咲いたりするのかなー？

「いえ奥様、その様な野暮用でしたら私や彰宏が……」

「あら、いいんですのよ？ お二人とも先程の件でお疲れでしょうし、井上さんには運転ばかりさせて私だけ楽をさせて戴く訳にはいきませんもの」

「……ご夫人、このような田舎の商店街では流石にカードは……」

「あらあら、ノープロブレムですわ？ 途中で寄ったあのパーキングエリアで、生まれて初めてＡＴＭで現金を卸してみましたの、もちろん小銭もちゃんと用意してありますわ、一度こんな素敵な商店街のお店で買い物するのが私の夢でしたのよ？」

「……そうですか、それでは宜しくお願い致します、ただご夫人、くれぐれも道に迷われないようお気をつけて下さい、ここに車を停めてお待ちしておりますので……」

「ルンルンルン」

「……余計な物までご購入されないか心配だな……」

お母さんの仕草に大人の三人は少し和んだみただけど、相変わらず航クンは怖い表情のまま。

『あたし、やっぱり気になる！』

瑠璃ちゃんのお母さんのお墓まではもうちょっと先みたいだし、お

母さんがお花を買っている間にあたしは遠藤先生に気になっていた  
さっきのお爺さんの事を聞いてみた。

「ねーねー先生、さっきのお家のお爺さんはどんな人なのー？ 瑠  
璃ちゃんのお母さんとどんな関係なのー？」

「……航、話していいか？」

「……………」

「先生、あたし気になるの！ 瑠璃ちゃんに関係ある事だったらち  
ゃんと聞いておきたいの！ お願ひ、教えて！？」

「……仕方ないな、あの家は真弓さんの実家だよ、瑠璃のお母さん  
が生まれたお家、そしてあの人は真弓さんの実の父親だよ……」

「……そうなんだ。じゃあやつぱり、あのお爺さんは航クンと瑠璃ち  
ゃんのお祖父さんなんだ。航クンとは血が繋がってないけど、瑠璃  
ちゃんには本当のお祖父さん、本当の家族なんだ……」。

「……あのお家の表札の名字は何？ あたしには読めなかったけど  
……………」

「……『エバト』か、江波戸真弓、瑠璃の母親がアイツと、遼司と  
結婚する前の旧姓だよ、遼司がこの町に出張で訪れた時、花屋で働  
いていた真弓さんと偶然……」

「……………止めて貰えませんか？」

「……………航くん？」

やっと、口を開いてくれた航くん。でも、さっきよりも肌をピリピリ刺してくる怖い雰囲気は増していて、その声はとても悲しそうで、苦しそうだった。瑠璃ちゃんを抱き締めている手は、さっきよりも少し力が入っている様に見えた。

「……………その話、瑠璃にこれ以上聞かせたくないんです、お願いですから、もう止めて下さい……………」

「……………わかった、航、余計な事を喋ってすまなかった……………」

きつと、航くんはお父さんの名前が出て来てきたのと、昔のお話になったから止めたんだ。瑠璃ちゃんに聞かせちゃいけないって、この先までお話を続けたら絶対に二人が一番触れて欲しくないところに触れてしまうから……………。

「……………こわいよ、おにいちゃんこわいよ……………」

瑠璃ちゃんが怯えてる。まださっきのお祖父さんの怒鳴り声が怖いのかな？ やっぱり、そんな時に瑠璃ちゃんが覚えていない昔のお話をしたら余計に怖がらせるだけだね？ 何でこんなお話になっちゃったんだろう……………。



「……………！」

……あたしの、せいだ……。

「お待ちどうさまで〜す？　綺麗なお花がいっぱいあったものですから、選ぶのについつい時間が……、あら？　小夜ちゃん、顔色が悪いわよ、どうしたの〜？」

……あたしが、遠藤先生に無理してお話を聞いたからこんな事になっちゃったんだ。あたしが、航クンや瑠璃ちゃんの事を傷つけてしまうところだったんだ。あたしが……。

「……どうした小夜ちゃん？　気分でも悪くなったのかい？　私はこれでも医者だから、何か変なところがあるなら何でも言いなさい？」

「……………ごめん……………」

「……………？」

「……………ごめんなさい……………」

あたし、航クンと瑠璃ちゃんの力になりたかった。瑠璃ちゃんのお

姉さんとして、何とかお祖父さんや他の親戚の人達と二人が仲良く出来る様に何か方法がないか聞こうと思ってただけだった。

でも、それが一番ダメだった。航クンが嫌がっていたのにあたしはそれに気づきもしないで強引にお話を続けちゃった。そして、航クンに嫌な思いをさせちゃった。瑠璃ちゃんにも怖い思いをさせちゃったんだ……。

「小夜？ 一体どうしたの？ 何かお母さんにもお話出来ない事なの？」

「……ううん、大丈夫、大丈夫だから、ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

「……小夜……」

……あたしって、本当に弱くてダメな子。誰より一番守ってあげたい人達を、自分の勝手な行動で苦しめちゃうなんて、これじゃ親戚の人達が二人にしたヒドい事と一緒にだよ。あたし、ヒドいよね……。

「……お嬢様の体調も優れない様子ですので、とりあえず先を急ぎましょう、この町にあまり長居するのも良くなさそうですし、夕方には帰路につかないと道路も渋滞するでしょうから……」

「……すみません井上さん、目的地まではもうすぐですので宜しく願います……」

車はまた、お墓に向かつて走りだした。でも、お墓に着いたらあたしはどんな顔して瑠璃ちゃんのお母さんに会えばいいのかな？ 瑠璃ちゃんの立派なお姉さんになるって報告しようと思っていたのに、こんな事じゃお姉さんと認めてもらえないよね？ あたし、お母さんに怒られちゃうよね……？

「……たよー？ どうしたのー？」

「……………」

さっきより少し落ち着いた瑠璃ちゃんがあたしの事を心配して顔を覗き込んでくるけど、あたしは瑠璃ちゃんのお顔を見る事なんて出来ない。だって、どんなに堪えても涙が出て来るんだもん。こんなヒドい泣き顔、瑠璃ちゃんに見せられないもん……。

「わー！ ねーねー、おにいちゃん！ おそと、おつきくてこわいくもがでてきたー！」

さっきまでお日様がキラキラ輝いていい天気だったのに、外は次第に灰色の雲が覆い被さってきた。雨が降ってくるかもしれない。まるで、あたしの心の中の色みたい……。

あたし、もつと人の痛みがわかる人になりたい。みんなから頼りにされる人になりたい。航クンや瑠璃ちゃん、それに那奈や翼や千夏に麻美ちゃん、あたしの大切な人達みんなを笑顔にしてあげられる強くて優しい女の子になりたいよ。もつと、もつと……。



## 第47話 抱きしめたい

小さな商店街でお供え用のお花を買って、そこからすぐ近くの瑠璃ちゃんのお母さんが眠るお墓までの山の麓の細い道。井上さんが運転する車は、すれ違う対向車もないガラガラの車道をスイスイと順調に走っていきます。

外は風に揺れる木の葉っぱの音が聞こえるくらいとても静かで、さつきまで緑のトンネルの隙間からはキラキラと眩しいお日様の光が差し込んできてスゴくキレイだった。もっと良く耳を澄ますと、山の中から都会ではなかなか耳に出来ない色んな小鳥のさえずりが聴こえてくる。

「…………ハア…………」

でも、そんなキレイな景色とは裏腹に、あたしの心の中はお空と一緒にすっかり曇っちゃった。出発した頃の元気の良さはすっかり無くなってしまい、車の窓から黙って景色を覗いているのが精一杯。

「小夜ちゃん、やっぱりさつきからちよつと元気ないわよ？  
まだ眠たいの？ それともお腹すいたのかしら？」

「…………うつん…………」

「我慢しちゃダメよ？ お母さんがさつき買ったたこ焼き美味し

いわよ？」

「……いない……」

「……あら、そう……」

せつかくお母さんがくれたたい焼きも全然食べる気にならない。あたしは外の景色を見ながら、ガラスに反射して写る隣の航クンと瑠璃ちゃんの姿をジッと見つめてた。

瑠璃ちゃんのお母さんの実家に寄った時から全く話をしてくれなくなっちゃった航クン。それに合わせて、航クンの膝の上に座る瑠璃ちゃんも何か心配そうな顔をしてる。

こういう時はあたしが二人に明るく振る舞って元気づけなきゃいけないのに、何の気遣いも無しに航クンや瑠璃ちゃんの昔のイヤな記憶を思い出させるような事を聞いちゃうなんて……。

航クンや瑠璃ちゃんだけじゃない、何か遠藤先生も彰宏お兄さんも気を使って黙り込んで、車の中がスゴく静かになっちゃった。あたしのせいだね、あたしがもっとみんなの気持ちになって考えていけば、もっと楽しいお出掛けになったのに。こんな事じゃあたし、彰宏お兄さんの事をダメ人間なんて言えないよね……。

「……ハア、ハア、ハアツクション!!」

「……どうした彰宏？ 風邪か？ 花粉症か？」

「……グズツ、いや何か、いきなり背筋がゾクツとして……」

「おいおい、くれぐれも麻美子に風邪を移さないようにしてくれよ

「今体調を崩したら一大事にもなりかねんからな」

「あゝら先生？ 私、以前妹から風邪をひきにくい人間がいるって聞いた事がありますの？ 『〇〇は風邪ひかない』ってことわざがあるらしくて、私はその『〇〇』に当てはまるらしいですわ？ 私、きっと神崎さんも私と同じタイプの人間だと思いますの？」

「……神崎さん、クシヤミをするならせめて手を添えて戴けますか？ 僕の車が汚れます」

「……誰一人、俺の体調を気にかけてくれる人はいないんですね、麻美子だったらずくに体温計持つてきてくれるのに……」

彰宏お兄さんはティッシュを一枚取ると、チーンと大きな音を立てて鼻をかんだ。何かちよっとお目めも涙目になってる。これもあたしのせいなのかな……？

「ところで井上さん？ 『〇〇』って何かしら？ 私、ことわざって良くわからないの、教えて下さる？」

「……いや、その、僕の口からはちよっと……」

「……お話し中すみませんが井上さん、そこを左に入って下さい、坂を登った上に車が一台止められるスペースがあるはずですので」

遠藤先生の言われた通りにちよっと急な上り坂の側道に入ると、砂利道の奥に駐車出来そうな場所とその横に小さなお茶屋さんがあつ

て、そのお茶屋さんの奥にはお墓で良く見る水汲みの手桶と柄杓が並んで置いてあった。入り口には腰の曲がった可愛いお婆さんがいて、笑顔であたしを出迎えてくれた。

「……失礼します、友人の亡くなった奥様の墓参りに来たのですが……」

「あらあら、この時期にお墓参りなんて珍しい、いらっしやいませ  
こんにちは、どちら様のお墓参りになりますか？」

「江波戸です、江波戸真弓さんで」

「トマト？」

「……エ・バ・トです」

「はいはい、江波戸さんでいらっしやいますね、少々お待ちを……」

どうやらこのお婆さん、このお茶屋さんのお店番みたい。ちょっと耳が遠いみたいで、遠藤先生と何度も同じ事をお話しながら、何か帳簿みたいな物を取り出してペラペラめくって何か確認してる。

「……で、お客様の代表のお方のお名前は？」

「遠藤和夫です」

「はいはい、エンドウ豆さんですね」



「エ、ン、ド、ウ、カ、ズ、オ、です！」

「……ブブツ」

「彰宏、何がおかしい!？」

遠藤先生が悪戦苦闘している間、あたしはお茶屋さんの店内の観察をした。ガラスの冷蔵庫の中にはあたしが初めて見る小さな瓶のコーナーや聞いた事の無い名前のオレンジジュースとか珍しい物がいっぱいあった。

「……クンクン、クンクン……」

「………ん? どうした瑠璃?」

航クンと手を繋いでいる瑠璃ちゃんが、お茶屋さんの中を見渡しながら小さいお鼻で辺りの匂いを嗅いでる。それに見てあたしも釣られてクンクン。あれー? 確かどっかで嗅いだ事のある様な匂い……。

「ここ、ルリのおうちとおんなじにおいがするよー!」

「……… 畳の匂いか、良くわかったな瑠璃、エライエライ」

「えへへー」

あつ、そーだ！ 畳の匂いだー！ 瑠璃ちゃんは毎日畳の匂いを嗅いでいるからすぐにわかったんだねー！ あたしは瑠璃ちゃんや麻美ちゃんに会いに遠藤さんのお家に行った時しか畳の匂いを嗅ぐ事が出来ないから、すぐに思い出す事が出来なかった。瑠璃ちゃん、そういう事もわかるようになったんだ、スゴいねー！

『…………瑠璃ちゃん…………』

………つて、ホントなら瑠璃ちゃんを抱き締めて頭ナデナデしてあげたいんだけど、あたしはさっきの自分の失敗が気になっちゃって二人に話しかける事が出来ない。何か、二人とも急に遠くに行っちゃったみたい。このままあたし、仲良くお喋りする事が出来なくなっちゃうのかな…………？

「あとねー、あとねー、なんかどうぶつさんのにおいがするー」

「…………動物？」

そんな辛くて嫌な事を考えていたら、あたしの足元にフサフサして温かい感触が伝わってきた。落ち込んでいるあたしを励ます様に、ゴロゴロと喉を鳴らしながら体を擦り付けてくる小さな可愛いもう一匹のお店番さん。

「ミャー、ゴロゴロゴロ…………」

「あつ、猫さんだー！ 可愛いー！」

「ねこ、ねこねこー！ かわいいー！」

「……………瑠璃、お店の中を走ったらダメだよ」

「ねこ、ねこ、ねこー！ ねこさわりたーい！ ねこねこねこー！」

「瑠璃ちゃん、こっちにおいで！ あたしと一緒に猫さんと遊ぼう？」

「わーい！ ねこねこー！」

ちよっとおデブさんでキレイな茶色の毛をした猫さんが、あたしの足元と瑠璃ちゃんの足元を行き交いしてました。物凄く人懐っこいその姿に、あたしと瑠璃ちゃんはしゃがみ込んでプニプニの触り心地にもう夢中！

「ねこさん、かわいいー！ しっぱふさふさー！」

「フミヤー！」

「ダメだよ瑠璃ちゃん！ 猫さんはしっぱ触られるのは嫌なんだよー？ 瑠璃ちゃんも知らない人にいきなりお尻触られたらイヤですよ？」

「うん、やだー」

「……………瑠璃、猫さんも一緒だよ、頭とか背中を撫でてあげなさい」

「優しく撫でてあげてねー？」

「はい！　ねこさんごめんなさい！　なーでなーで！」

瑠璃ちゃんが頭を撫でてあげると、猫さんは気持ち良さそうに目をつぶって瑠璃ちゃんの膝に顔をスリスリ。ついには床に頭をこすりつけて地面に寝っ転がっちゃった。全然怖がる素振りも見せずに大きなお腹を出して喉をゴロゴロ！

「わー、猫さんお腹タプタプだよ瑠璃ちゃん！　スツゴい柔らかーい！」

「ねこさんのおなか、ぷにぷにー！　かーわいいー！」

プニプニでフサフサの猫さんは、沈み込んでいたあたしの心と瑠璃ちゃんと航クンとのぎこちなかった雰囲気をつかり和ませてくれた。ありがとうね、猫さん！　でも、この猫さんって何てお名前なのかなあ？　ここのお店で飼われている猫さんなのかなあ？　側にいるお母さんも猫さんに興味津々みたい。

「あらー、ずいぶんと人懐っこい猫ちゃんなんですねー？　こちら

で飼われていらっしやるんですか？」

「いえいえ、いつの間にかここに居座ってしまった野良猫なんですよ、いつもは人のお墓の上で昼寝ばかりしていて、あまり知らない人には懐かない子なんですけどね……」

お店のお婆さんが茶碗に入ったお水をあげると、猫さんはぺろぺろと水を飲むと元気良く店の外に出てこちらを向いてミャーミャー泣いている。もしかして、あたし達の事を呼んでいるのかなー？

「……それよりも、あの婆さんちゃんと話ができるんじゃないか、さっきの私の苦勞は何だったんだ……？」

「……真中さんとは波長が合ったからじゃないですか？」

「……いまいち納得出来んが仕方ない、それじゃ皆さん行きましょうか、彰宏、桶と線香を頼む」

「……また、荷物持ち……」

お茶屋さんを出てお墓のある奥の方に向かうと、猫さんがあたし達の前を歩いて道案内してくれました。まるで、旗を持って案内してくれる旅行ツアーのガイドさんみたい。猫さんの後をついていくと、森に囲まれた場所に似たような古いお墓が他にもちよこちよこと建っていた。

「最近の霊園や流行のビル一体集合墓地には無い、本当に昔ながらのお墓の雰囲気ですね、何か故郷を思い出します」

「失礼ですが、井上さんはどちらのご出身ですか？ 私はこう見えても石川の雪国生まれなんですよ」

「それでは、お隣さんになりますね、僕の出身は新潟なんです、子供の頃は良く積もった雪で遊んでいましたね」

「新潟ですか、それでは先頃は大変でしたね、ご実家のご家族の方はご無事でしたか？ 私も以前尼崎の方に医療チームとして行った事がありまして、災害地の悲惨さは身にしてみても……」

出身地が近いせいか、遠藤先生と井上さんはすっかり仲良しになったみたい。雪か、いいな！ そういえば、ちょっと前にあたし達の街にも大雪が降ってみんなで雪合戦やったけど、あれから雪なんて全然積もまないな！。またみんなで雪合戦やりたいな！

『ハックション！』

あれあれー？ 何か今、那奈達のクシャミが聞こえてきた気がしたよー？ あの時はあたしと航クンと、那奈のお父さんお母さん以外みーんな風邪ひいちゃったんだよね。みんな体弱いよねー？

「ねえ、井上さん？ さっきの『〇〇は風邪ひかない』ってことわざ……」

「……ご夫人、もう勘弁して戴けませんでしょうか……？」

なーんて事考えてたら、いつの間にか瑠璃ちゃんのお母さんのお墓の近くまで到着したみたい。

「……確か、江波戸さんのお墓はこの列の一番奥だと記憶しているんだが……」

「……和夫さん、もしかしてあの猫が座ってるお墓、あれそうじゃないですか？」

「あつー！ 瑠璃ちゃん見て見て！」

「わー！ ねこさんだ、ねこさん！」

彰宏お兄さんの指差す方を見ると、道案内してくれていたあの猫さんが先回りしてお墓の上に座って顔を洗っていました。まるで、あたし達が迷わないように手招きしてくれているみたい！ やっぱりこの猫さんはここのお墓のガイドさんなんだねー！

「それじゃあ、早速お墓にお水をかけて綺麗に洗いましょうね？ 江波戸さん、失礼させて戴きますわ？ クリンクリンクリン、お出掛けですか、レレレのし〜？」

「……ご夫人、失礼ですがネタが古過ぎて子供達が首を傾げてます

が……？」

みんながお墓の掃除やお花を供えている間、あたしと瑠璃ちゃんは近くに生えていたネコジャラシで猫さんと一緒に遊んでいました。お腹はブクブクに太っているのに、ネコジャラシを取るうとする動きは結構俊敏！

でも、絶対に爪は立てないで遊んでくれるから、瑠璃ちゃんも怪我しなくて航クンも安心だね！ 動物さんとの交流は癒やしの効果があるみたいだから、まだ心に傷が残ってる瑠璃ちゃんにはピッタリ！ 本当に優しい猫さんなんだなー！

「じゃあ皆さん？ 順番でお線香をお供えしたらちゃんとナムナムしてね？」

どれくらい目をつぶっていたかな？ あたしはお墓の前に立って、瑠璃ちゃんのお母さんにご挨拶をしました。航クンと瑠璃ちゃんのお部屋にもお母さんのお仏壇があるけど、こうやって直接会うのは初めてだからね。

初めましてお母さん。瑠璃ちゃん、こんなに元気になりましたよ。今度、瑠璃ちゃんもやっと他のみんなと同じ様に小学校に行ける事になりました。

あたし、まだまだ那奈や翔ちゃんにいつも怒られちゃう半人前ですけど、瑠璃ちゃんの素敵なお姉さんになれるように一生懸命頑張ります。これからも瑠璃ちゃんや航クン、遠くで頑張ってる二人のお父さんの事を見守ってあげて下さいね、お願いします！



「……ねーねー、おにいちゃん……」

「……どうした、瑠璃？」

目を開けると、あたしの隣で瑠璃ちゃんが航クンの長い足のズボンをクイクイと引っ張ってた。何か不思議そうな顔をして、背の高い航クンの顔を覗き込んでる。

その姿を見て航クンは心配になったみたいで、瑠璃ちゃんと同じ視線の高さにしゃがみ込んでお話を聞いていた。せつかく本当のお母さんのところまでやって来たのに、瑠璃ちゃんどうしたのかな？

「おにいちゃん、ここにはルリのおかあさんがいるって言ってたよね？ ルリのおかあさんがねむってるって言ってたよね？」

「……うん、そうだよ、このお墓には瑠璃のお母さんが眠っているんだよ、ここにくる前に何度も話しただよ？」

「……」

「……瑠璃？」

航クンの顔を見上げていた瑠璃ちゃんは、突然黙り込むと唇を尖らせて下を向いてふてくされちゃった。こんな顔する瑠璃ちゃん、今まで見た事ないよ？ 何か嫌な事でもあったのかな？ スゴく心配……。

「……どこにもいないもん……」

「……………えっ？」

「ルリのおかあさん、どこにもいないよ？ どこにもねむってないよ？ おはかのおいしがおいてあるだけだよ？ ルリのおかあさんはどこにいるの？」

「……………！」

……瑠璃ちゃん言葉に、あたしも、航クンも、みんなも、固まっちゃった。瑠璃ちゃん、もうわかるんだ。お墓にいたとか、眠っているとか、もう瑠璃ちゃんにはそんなお話通用しない。あたし達が一番恐れていた時が、ついに来ちゃったんだ……。

「おにいちゃんは、ここにすればおかあさんとあえるっていったよね？ じゃあ、なんでここにルリのおかあさんはいないの？ おかあさんはルリとあってくれないの？ おかあさんはルリのことキライなの？」

「……………それは……………」

「おかあさん、いないよ！ どこにもいないよ！ おにいちゃん、ルリにウソついたの？」

「……………瑠璃、違うよ、そうじゃない、お母さんは、瑠璃のお母さんは……………」

……航クン、スゴく困ってる。そうだよ、何て答えていいかわからないよね？ 大人の人だって困っちゃう瑠璃ちゃんの質問、高校生の航クンには難しいすぎるよね。遠藤先生と彰宏お兄さんも瑠璃ちゃんの言葉にソワソワしだして、何とか瑠璃ちゃんをここから移動させようと必死になってた。

「……彰宏、瑠璃を小夜ちゃんと一緒にさっきの茶屋まで先に……」

「る、瑠璃ちゃん？ お兄さんと小夜ちゃんと一緒にお茶屋さんに行つてジュース飲もうか、ねっ？」

「やだ！ やだやだやだー！ おかあさんにあえるまでやだー！ ルリうごかない！」

「……瑠璃、わがママを言つたら……」

「ウソつき！ おにいちちゃんのウソつき！」

「……………！！！」

……瑠璃ちゃんが、航クンに対してこんな事言うなんて、ウソつきなんて、そんなヒドい事言うなんて……。違うよ瑠璃ちゃん！ 航クンは、航クンは瑠璃ちゃんの事を思つて……！

「瑠璃ちゃん、違う、違うの！ 航クンは、お兄ちゃんはウソつき

じゃなくて、だから……！」

「やっぱり、ルリにはおかあさんなんていないんだ！ ルリのこと  
がキライでどこかにいっちゃったんだ！」

「……瑠璃ちゃん、違うの、そうじゃないの、瑠璃ちゃん……」

「だって、ルリのこと好きだったら、おかあさんそばにいてくれるもん！ たよのおかあさんやミサキのおかあさんみたいにそばに  
いてくれるもん！ でも、ルリにはおかあさんがそばにいてくれな  
かったもん！ ここにもきてくれなかったもん！」

「……瑠璃ちゃん……」

お喋りも歩く事も出来なかった頃はきつと疑問にも思わなかったみ  
んなと違う家庭環境。確かに、瑠璃ちゃんは色んな事を学んでたく  
さんの治療を我慢してここまで元気になれた。

でも、学んでいくという事は、いつかは瑠璃ちゃんが覚えていない  
悲しい真実を知らなきゃならないって事。お母さんが、もうこの世  
界にはいないって事……。

「おかあさんにあえるってたのしみにしてたのに、おかあさんとい  
っぱいおはなしするってたのしみにしてたのに、おかあさんにだっ  
こされたかったのに！」

「……瑠璃、ちゃん……」

「おにいちゃんのウソつき！ たよのウソつき！ みんなみんな、

ウソつきー！」

「瑠璃ちゃん！！」

「……！」

……もう、我慢出来なかった。これ以上瑠璃ちゃんの姿を見てられなかった。あたしは、ありったけの力で瑠璃ちゃんの体を抱き締めた。そうだよ、あたし達、ウソつきだよ？　いくら瑠璃ちゃんの為だったからって、本当の事をずっと隠して、ずっと瑠璃ちゃんの事を騙していたよね……？

「……ごめんね、瑠璃ちゃん、ホントにごめんね……？」

「……たよ……？」

あたし達、ズルい。ズルすぎる。ううん、あたし達だけじゃない。瑠璃ちゃんと航クンを放つといてどこかに行ったまま帰ってこない二人のお父さんも、二人の事を連れてくるなって冷たく離れたお祖父さんも、助けてくれなかった他の親戚の人達も、みんなズルいよ。瑠璃ちゃん、何も悪い事してないのに、お母さんがいなくてもとても良い子にしてるのに、どうして？　どうしてこんな辛い思いをしなきゃいけないの？　どうしてこんな苦しまなきゃいけないの？　どうして一番寂しい思いをしなきゃいけないの？　こんなのおかしい、おかしいよ……？

「……あたし達、ウソばかりついてごめんね、ホントにごめんね……」

「……たよ、ないてる？ ルリがウソつきっていったから？ ごめんね、ごめんね……？」

悪いのはあたし達の方なのに、逆に瑠璃ちゃんに謝られちゃった。ごめんね瑠璃ちゃん、あたし、お姉さんなのに泣き虫で……。あたしの足元で、猫さんが心配そうにこちらを見て座ってる。お母さんや先生達もみんな静まり返っちゃった。

「……先生、少しの間、瑠璃と二人だけにしてもらえませんか？」

「……航？」

突然、航くんは遠藤先生にそう切り出すと、瑠璃ちゃんを抱きかかえてすくつと立ち上がった。瑠璃ちゃんのお母さんのお墓を見つめるその顔は何かを決意したみたいな真面目な表情で、あたしは航くんが何をしようとしているのかすぐにわかった。

「……航、お前まさか……？」

「……もう、嘘をつき続けてはいけません、瑠璃にも、本当の事を話す時が来たんです」

「……いいのか、航？ 下手な説明をすれば、瑠璃にショックを与えるだけなんだぞ？ せめて日を改めて、病院で私達や心療科ウンセラーが立ち会った時にでも……」

「……… お願いです、二人だけにして下さい……」

みんな、これ以上何も言えなかった。だって、今の瑠璃ちゃんにもう嘘なんてつけないもん。もし、大人達がどんなに誤魔化して説明しても、きっとそれはもう瑠璃ちゃんの為にはならないんだ。そして、それは決してあたし達の口から話しちゃいけない事なんだ。唯一の家族で、お兄ちゃんである航クンから瑠璃ちゃんに教えてあげなきゃいけない事なんだ……。

「……じゃあ、先に行ってるぞ航、くれぐれも言葉を選んで話してやってくれ……」

「……… はい」

「……航クン、瑠璃ちゃん……」

「……… 大丈夫だよ、心配しないで」

気がつくと、さっきまでいたあの猫さんはいつの間にかいなくなっていた。ガイドさんのいないお茶屋さんまでの帰り道、二人の事を思うとあたしは辛くて苦しくてまた泣きそうになった。

本当は瑠璃ちゃんの側にいてあげたい。航クンのお話を聞いている間、少しでも寂しい気持ちにならない様に抱き締めてあげてたい。

きつと今、瑠璃ちゃんはその事を教えられて、小さい体で一生懸命受け止めようと頑張っているはずだから……。

今さっき、瑠璃ちゃんのお母さんのお墓に向かって、瑠璃ちゃんの本当のお姉さんになるって約束したのに、こんな大事な時に瑠璃ちゃんの力になれないなんて、側にいけないなんて……。

『…………瑠璃ちゃん…………！』

あたし、やっぱり弱くてダメな女の子です。航クンや瑠璃ちゃんが背負った傷の痛さも理解出来ないで、逆に傷つけるような事を簡単に口走って、二人を助けてあげられる様な事も出来なくて、こんな事じゃとても素敵なお姉さんなんて出来ないよ……。



## 第48話 名もなき詩

航クンと瑠璃ちゃんを二人きりにして車が停まっているお茶屋さんへ向かう帰り道、あたしはうつむいてずっと下を見て歩いた。階段や砂利道で転ばないように注意してたのもあるんだけど、やっぱり瑠璃の事が心配で心配で、とても元氣良くなんてしていられなかった。

今すぐにでも二人の元に戻って、瑠璃ちゃんを強く抱き締めたい。航クンの話が聞こえないように耳を塞いであげたい。そんな事を思いながら、ぼーっとして歩いてた。

ドンッ！

「ほげっ！」

すると、あたしの前を歩いていた遠藤先生が突然足を止めて、それに気づかなかったあたしは思いつ切り先生の背中にぶつかっちゃった。

「……先生、ごめんなさい！ あたし、ぼーっとしてて……！」

「……………」

でも、先生は謝るあたしの方に見向きもしないで、驚いた顔をしてずっと前を見て立ち尽くしていた。もうすぐそこまで駐車場まで来ていて、お茶屋さんの屋根も見えてきたのにどうしたんだろう？

「……どうしたんですか、和夫さん？」

「……彰宏、あそこにいる老人……」

「げっ！ あの爺さん！」

「……江波戸、さん……？」

二人が見ている先を見ると、お茶屋さん前に腰の曲がった白髪のお爺さんが一人杖を突いて立っていました。『江波戸さん』って事は、お墓に来る前に先に寄った古いお家の人の名前と一緒に。じゃあ、あそこにいるお爺さんは、まさか……？

「……航クンと、瑠璃ちゃんのお祖父さん……？」

遠藤先生が少し急ぎ足で近寄ると、そのお爺さんは申し訳なさそうに小さくペコリとお辞儀をした。見た目だけなら、あんな怒鳴り声を上げた人とは思えないほど優しい顔をしている普通のお爺さんだった。

「……江波戸さん、どうしてここに……？」

「……いやいや遠藤さん、さっきはすまんかったな？ わざわざ遠くから真弓の墓参りの為に足を運んでワシにまで挨拶をしに来てくれたというのに、あんな大人気ない追っ払い方をしてしまったな、一言謝りに来たんじゃない……」

「そんな、お気になさらないで下さい、何の連絡も無く突然押しかけたのは我々なのですから……」

どうやらお祖父さん、あたし達を追ってここのお墓まで歩いて来たみたい。お家からは結構距離があるみたいだから、あたし達がお花を買っていた頃にはすでにこっちに向かったのかな？

さっきの怖い怒鳴り声とは全然違って、お祖父さんの喋り声は耳を良く澄ませないと聞こえないくらいの小さな声。喉もガラガラにしゃがれていて、喋るだけでも何か大変そうだった。もう、結構お年を召してるみたい……。

「あんたの姿を見たら、昔良くワシの元に孫達の世話を頼みに来た時の事を思い出してな、そしたら、元気だった娘の姿やこの前ここにやってきたあの男の顔まで脳裏に浮かんできてな、ついカツとなってしまったんじゃない……」

「……この前？ あの男って、まさか遼司がここに来たんですか！？ それはいつの話ですか！？ 私も遼司とは今、全く連絡が取れなくなっていました、どこへ行くとか、何か仕事に就くとか、何でもいので何かお話は伺っていませんか！？」

航クンと瑠璃ちゃんのお父さん、刑務所を出て二人に会いに来た後ここに来てたんだ！ 遠藤先生と麻美ちゃんのお母さん、あたしと麻美ちゃんが遊んでいる時もお父さんと連絡が取れないってずっと心配してたもんね……。

「……悪いがワシにもその後の行き先はわからん、何も言わずにひたすら涙を流して土下座し続けてな、言ってやりたい事は山ほどあったが、あの男の酷いやつれ様を見たら何も言えなくなつたわい……」

「……そうですか……」

でもお父さん、また行方不明になつちやつたみたい。今頃、どこにいるのかな？ でも良かった、無事だつたんだね。もしかしたら、自殺しちやつたんじゃないかってみんな心配してたもん。航クンは『それならそれでいい』なんて冷たい事言つてたけど……。

「特にその兄さん、あんたには色々物を投げつけたりしてすまんかったな？ 哀れな爺に免じて許してくれ、この通りじゃ……」

「……ま、まあ、謝ってくれるならもういいですよ、かけられた水も乾いた事だし……」

「彰宏、図に乗るな！」

遠藤先生達とお話している感じでは、見た目通りとても優しいそうで良い人に見えるお祖父さん。でも、このお祖父さんも航クンと瑠璃ちゃんの事を助けてくれなかった親戚の一人なんだよね？ さつき『二度と二人を連れてくるな！』って怒鳴った人なんだよね……？

「江波戸さん、今この場所には航と瑠璃も一緒に来ています、もうじき二人もここにやってきました、何度もしつこいとは思いますが、真弓さんが眠るこの地では是非あの子達に会っては戴けませんでしょうか？ 一目だけでも構いませんから、瑠璃に祖父の存在を教えてくださいませんか……！」

「……………」

「お祖父さん、もう一度俺からもお願いします！ このままじゃ航君も瑠璃ちゃんも可哀想です！ 是非会ってあげて下さい、この通りです！」

遠藤先生と彰宏お兄さんが頭を下げるのに合わせて、側にいたあたしもお祖父さんに向かって頭を下げた。でも、上目で見たお祖父さんの顔はさつきまでの優しい顔から一転してとても険しい表情に変わってしまった。

「……………無理じゃ」

「江波戸さん！」

「無理と言ったら無理じゃ！ いい加減わかってくれ！」

「お祖父さん、お願い！ 航クンと瑠璃ちゃんに会ってあげて！  
お願いします！」

どうしても諦められないあたしはお祖父さんに駆け寄ってさっきよりももつと深く頭を下げた。だって、もうお互いがこんな近くにまで近寄っているのに、あと少しすれば瑠璃ちゃんもここに来るのに、お祖父さんに会う事が出来ないなんて可哀想だよ……。

「……遠藤さんや、この子はどこの子じゃ？」

「はい、この子は私の娘の友達で……」

「真中小夜って言います！ あたし、瑠璃ちゃんのお姉さんになりたいんです！ 瑠璃ちゃんが自慢出来るような、強くて立派なお姉さんになりたいんです！」

「……瑠璃の、お姉さん、か……、そうか、そうか……」

お祖父さんは一瞬あたしの顔を見てニコツと笑うと、下げている頭をポンポンと優しく叩いて大きく溜め息を一つついた。

「……ならば、尚更ワシが顔を見せる必要もあるまい……」

「……えっ？ 何ですか！？」

「あの子達は十分、周りに愛してくれる人達がたくさんいる、今更  
ワシが顔を出したところで、あの子達の怒りを買っただけじゃ、ワシ  
ら親族があの子達に嫌われておるのは風の噂で聞いておるし、憎ま  
れて当然の事をしてしまったからのう……」

「……そんな……」

「それになお嬢さん、あんたにはわからんと思うが、あんた達にと  
つたらもうあの事故はとつくの大昔の話かもしれんがな、ワシには  
まだ昨日の事のように脳裏に焼き付いているんじゃよ、冷たく真っ白  
になって変わり果てた真弓の顔がな……」

「でも、でも航クンと瑠璃ちゃんは何にも悪い事してないよ！ な  
のに、どうしてお祖父さんは二人を避けたりするの！？ 会ってあ  
げるくらい別に……！」

「お嬢さん、世の中には世間体と言うものがあってな、例えば事故に  
よるものだったとしても、人を殺した事に変わりはないんじゃよ、  
あの子達が人を殺した男の子供達である事に変わりないんじゃ、そ  
んな子供達をかくまったら、親族一同は世間の笑い者になる、ワシ  
らにはどうする事も出来んのじゃ、わかってくれ……」

あたしがどんなにお願いしても、お祖父さんは首を横に振って聞い  
てくれなかった。さっきまで一緒にお願いしてたはずの遠藤先生と  
彰宏お兄さんもすっかり諦め顔。誰もあたしの応援をしてくれる人  
はいなかった。

「遠藤さんや、出来ればもうこれっきりにして貰えんかね？ あん

たの顔を見るとどうしても昔を思い出して胸が苦しいんじゃないよ、女房にも先立たれ、たった一人ジジイが住むには広すぎる家で自らの死を待つ苦しみ、あんたにわかるか？ 頼むからもう、そっとしておいてくれ……」

「……そうですか、わかりました、残念ですか仕方ないですね……」

「えっ？ 何で先生！？ 先生、あんなに航クンと瑠璃ちゃんが親戚の人達と仲良くなつて欲しいって言つてたでしょ！？ 何で諦めちゃうの！？」

遠藤先生の予想もしなかった言葉に驚いたあたしは、今度は先生に駆け寄つて問い詰めた。先生、あんなに二人の為に頑張つてきたじゃん！ あたしにも二人の力になつてあげてつてお願いしたじゃん！ なのはどうして……？

「……小夜ちゃん、もう仕方ないんだよ、お祖父さんだつて辛い思いをしているんだ、それが世間つてもものなんだよ……」

「……小夜ちゃん、和夫さんをあまり責めないであげてよ、やれる事やつたんだからさ、許してあげてよ」

「……だつて、だつてそんなの……？」

……ヒドいよ、そんなのヒドいよ！ だつて航クンと瑠璃ちゃんのお父さんはお母さんを好きで殺した訳じゃないじゃん！ それに、第一そんな事二人には全然関係ないじゃん！ それなのに、みんな



して人殺しの子供達だなんて言つて二人を避けるなんて……。わかないよ、世間だなんてそんなもの全然わかないよ！ そんなものの、そんなもの……！

「小夜ちゃん？　あまり大人の人を困らせたりしたらダメよ？　いつか小夜ちゃんもお祖父さんが仰られてる事がわかる時が必ず来るわよ？」

「お嬢様、あまり他の人様の問題に深入りするのは僕も宜しくないと思います、ここはどうかお治め下さい」

……ヒドいよ、遠藤先生も彰宏お兄さんも、お母さんも井上さんもお祖父さんもみんなヒドいよ！　みんなちゃんと素直になれば仲良く出来るはずなのに、本当の家族なのに、それを世間とか何とか言つて、全部大人の言い訳じゃん！　みんな嘘じゃん！　そんなの、みんなしてそんなの……！

「それでは、ワシはあの子達がここに来る前に失礼させて……」

「……ズルい……」

「……ん、何じゃと？」

「ズルい！　お祖父さんズルいよ！！」

「小夜ちゃん！」

「小夜！」

もう、我慢なんて出来なかった。二人の事を考えたら悔しくて、悔しくて悔しくて、涙が止まんない。お祖父さんだって辛いのはわかるよ？ でも、でも、二人は一番辛かった時に誰にも助けってもらえなくて、もっと、お祖父さんよりもっと……！

「航クンと瑠璃ちゃんは、お祖父さんよりもっと辛い想いをしてきたんだよ！？」 お祖父さんみたいに大人じゃなくて小さい子供だったのに、誰も助けられなくてずっと苦しかったんだよ！？ 航クンは二回もお母さんを亡くしちゃう辛い想いをして、瑠璃ちゃんはまだ赤ちゃんで今もお母さんの顔を知らないままで、ずっとずっと寂しかったんだよ！？」

「小夜ちゃん、落ち着いて！」

「小夜、もうやめなさい！」

やめないもん、やめないもん！ お母さんに怒られたって絶対やめないもん！！ だって、あたしは一番二人の寂しさを知ってるもん！！ 世界で一番二人の苦しみを知ってるもん！！ みんなが言ってくれないなら、あたしが言わなきゃ誰も二人の事をわかってあげられないもん！！ あたしは航クンと瑠璃ちゃんの、一番の味方だもん！！

「寂しくて、いっぱい傷ついて、誰も信じる事が出来なくなって心

を閉ざしちゃっても、それでも二人は一生懸命頑張ってきたんだよ！？ 航クンは瑠璃ちゃんを傷だらけになって守って、瑠璃ちゃんはその優しいおにちゃんを心から信じて、いつかお祖父さんやみんなと仲良く暮らせる日を夢見て一生懸命生きてきたんだよ！？」

「……………」

「それなのに、自分達が嫌だからって、周りから笑われたくないからって、みんなで二人を遠ざけるなんてヒドいよ！ それを聞いて諦めちゃう先生達もヒドいよ！ そんなのみんな大人の勝手だよ！ 嘘ばっかだよ！ ズルいよ、お祖父さんも他の人達もみんなズルいよー！！！」

「小夜！ もうやめて！！！」

止めに入ったお母さんの胸に飛び込み顔をうずめて、あたしは大声で泣き崩れた。だって、このままじゃあまりに航クンと瑠璃ちゃんが可哀想だったんだもん。血の繋がった人達に嫌われて、家族だと思っていた人達にも見放されそうになって、周りからこんなに愛されないなんて、そんなの寂しすぎるよ……。

「…………江波戸さん、娘が無礼を働き誠に申し訳ございませんでした、娘には良く言って聞かせますので、どうかご勘弁を…………」

「…………ワシだって…………」

「…………江波戸さん？」

「ワシだって、ワシだって辛かったんじゃあ!!」

お祖父さんは突然手に持っていた杖をカランと落とすと、その場に膝を突いて泣き出してしまった。シワシワの顔の両目から、たくさんの大粒の涙を零して……。

「ワシだって、本当はあの子達を助けてやりたかった! 身寄りの無いあの子達を引き取ってやりたかった! 例え世間から批判や冷たい目線を突きつけられても、真弓がこの世に残してくれた可愛い孫達をこの手で抱き締めてやりたかったんじゃ!」

「……お祖父さん……」

「でも、でも、それは叶わなかったんじゃ! 真弓がいなくなつてから婆さんが寝たきりになつて、ワシにはあの子達を養う余裕なんて無かったんじゃ! 他の親族に金の援助を頼んでも、誰一人一文も出してくれなかった! それどころか、あの子達を引き取れば絶縁するとまで言われたんじゃ!」

「……そんな事実があつたんですか……」

無き崩れるお祖父さんの元に寄つた遠藤先生が、励ます様に優しく手を伸ばして背中をさすつてあげていた。でも、お祖父さんの涙はまだ止まらなかった。

「それに、ワシ自身もあの子達を怖がってしまったんじゃ! あの

男の血を受け継ぐ航が次第に父親に似て成長していく姿を見た時、ワシは航に対して憎しみを抱いたりしないだろうか？ 真弓が産んだ瑠璃が次第に母親に似て成長していく姿を見た時、いつまでも真弓を失った時の苦しみを思い出してしまうのではないだろうか？ どうしてもそう思ってしまうワシが嫌だった、そうなるのが怖かったんじゃない！」

あたしがお祖父さんを最初に見て感じた通り、やっぱりこの人は悪い人なんかじゃない。本当はお祖父さんも寂しくて、心細くて、出来れば二人と一緒にいたかったんだ。二人と同じ様に、ずっとずっと苦しんでいたんだ……。

「……遠藤さんや、すまん、すまなかった、一番悪いのはワシなんじゃ、すまない、すまなかった……！」

「……江波戸さん、どうか頭を上げて下さい、この話を聞けば、きっと航と瑠璃もあなたを許して祖父として認めてくれるでしょう、ですから、どうか二人に会って……」

「……か、和夫さん！」

彰宏お兄さんの声に釣られて後ろを振り向くと、そこには瑠璃ちゃんの手を引いた航クンが立っていた。今さっきまでお祖父さんが喋っていた本当のお話、二人はまだ何も知らないはず。航クンの雰囲気、気が車に乗っていた時みたいに少し怖く感じた。

「……航、瑠璃……！」

杖を下に置いたまま、お祖父さんはよろつく足取りで二人の元に行く。とまた地面に膝を下ろして土下座をした。鼻をすすりながらずつと泣きじゃくつて、額が地面に擦りつくぐらい頭を下げていた。

「すまん、すまんかった！　ワシはお前達を助けてやるどころか、地獄の底に落とすような真似をしました！　お前達こんな辛い想いをさせたのはこのワシのせいじゃ！　許してくれ、どうか許してくれ……！」

この時、あたしの頭の中に怖かった思い出が蘇ってきた。二人のお父さんが麻美ちゃんのお家に訪ねてあの日、ひたすら頭を下げた謝るお父さんを見て航クンは我慢出来ずに怒りに任せて暴力を振るってしまった。あの時は悪い予感がしたあたしが麻美ちゃんのお家まで行って、何かわかんない内に二人の間に入って航クンは落ち着ちを取り戻してくれた。

でも、あの時は何て言うかあたしでも良くわからない力が湧いてきて、何とか航クンを止める事が出来た。今のあたしはお祖父さんに二人の気持ちを代弁するのに全部の勇気を使い果たしちゃって、膝が震えてお母さんにしがみつくのが精一杯。

航クンは、お父さんと同じ様に自分達を見放したお祖父さんや親戚の人達を恨んでる。もし、あの時みたいに航クンが怒っちゃったら今のあたしじゃとても止められないよ。遠藤先生も彰宏お兄さんも同じ事を感じたみたいで、急いでお祖父さんを追いかけて航クンの元へ駆け寄っていった。

「航、手を出すなよ！ 私が行くまで江波戸さんに触るな！」

「航君、落ち着いて！ 言いたい事があっても早まっちゃダメだよ！」

……やっぱりあたし、何にも出来ない。航クンと瑠璃ちゃんの為に役に立てる事なんて無理なのかな？ 今のあたしには、みんなが仲良く一緒になれる事を祈る事しか出来ない。航クンと瑠璃ちゃんと、そしてお祖父さんが仲良く笑っていられる事を……。

「瑠璃ちゃんのお母さん、どうかみんなを見守ってあげて下さい……！」

「……ミヤー！」

「あつー！ ねこさんだねこさんだ！ おにいちゃん、ねこさんだよ！？ ねーこさん！」

あたしが瑠璃ちゃんの声に目を開けると、さつき急にいなくなったあのおデブな猫さんが突然現れて頭を下げているお祖父さんの顔に体をこすりつけていた。あたし達にした時みたいにお尻を上げてしっぽを伸ばして、最後はドテーン地面に倒れてお腹を出して甘えた。

「……マユミ？ お前、みんなを墓まで道案内をしてくれていたの

か？　そうかそうか、すまん、お前にまで面倒かけてな……」

お祖父さんがお腹を撫でると、猫さんは気持ち良さそうに体を伸ばしてゴロゴロ。この猫さん、お祖父さんにも凄く懐いていたんだね。でも、あたしが気になったのはこの猫さんの名前。『マユミ』って確か……。

「ねーねー、おにいちゃん！　このねこさんのおなまえ『マユミ』だつて！　いつしょ、いつしょ、ルリのおかあさんといっしょ！」

瑠璃ちゃんに話しかけられたその時、航クンの雰囲気から怖さがスツと消えた。いつもの優しい顔に戻った航クンはその場に跪いてお祖父さんの肩に手をかけると、少し微笑みながらお祖父さんに話しかけた。

「……………もう、これ以上謝らないで下さい」

「……………航……………」

「……………俺は、つい最近まで本当にあなた達を憎んでいました、言いたい事、仕返したい事もたくさんありました、でも、もういいんです、俺も瑠璃も、もう大丈夫ですから」

「……………しかし、しかしワシらはお前達を見殺しに……………」

「……………でも、そのお陰で俺達は心から信じる事が出来る人達と



出会う事が出来ました、一番大切なもの、大切な人を見つける事が出来ました、だから、俺はもう誰も憎んでいません、俺も瑠璃も、今はとても幸せに暮らせていますから、だからもう、謝らないで下さい」

「……そうか、幸せか、幸せなんだな？ 良かった、それは良かった、良かった……」

いつもは無表情の航クンが久し振りに見せてくれた笑顔。とても優しくてみんなが幸せな気持ちになれる笑顔。それを見たお祖父さんは、長年の苦しみから許されたみたいに今度は喜びの大粒の涙をいっぱい流していた。

「ねーねー、おにいちゃん！ このおじいさん、だーれ？」

「………瑠璃の本当のお祖父さんだよ、会いたかったろう？ 初めて会ったから、ちゃんとご挨拶をして」

「はい！ おじいさん、こんにちは、はじめまして！ くりやまルリ、ことしではっさいになります！」

「………そうか、もう八才になったのか、大きくなったな……」

「えーとね、ルリにはわけがあつておとうさんとおかあさんがそばにいません！ でもね、でもねー！」

お母さんがいない、と言う言葉に一瞬不安になったあたし達の前で、

瑠璃ちゃんは上を向いて大きなお空に向かって指差すと、みんなに聴こえるように、まるで天国のお母さんに呼びかける様に元気良く大きな声で言った。

「ルリのおかあさんはねー、おそらのうえのおほしさまになったんだよー！ ルリのこと、ずっとおそらのうえからみていてくれるんだよー！ さっき、おにいちゃんにおしえてもらったんだー！ だからルリ、ひとりじゃないんだよー！ おにいちゃんもたよもみんなそばにいてくれるから、ルリはぜんぜんさみしくなんてないんだよー！」

「……瑠璃、ちゃん……！」

あたしの顔は、涙でもうグシャグシャになっちゃった。瑠璃ちゃん、エライよ。あたしなんかよりも強い、スゴく立派だよ。航くん、ちゃんと瑠璃ちゃんに説明出来たんだ、良かった……。

「瑠璃、すまなかった！ 祖父ちゃんが悪かった！ 許してくれ、瑠璃……！」

「……おじいさん、そんなにギューってされたらくるしいよー？ それに、どうしてないてるのー？」

瑠璃ちゃんを抱き締めたまま、お祖父さんは大声を上げて泣いていた。それを見ていたお母さんもあたしをギューってして泣き出しちゃった。彰宏お兄さんの男のクセに涙をポロポロ。でも、遠藤先生

も井上さんも目が真つ赤だから、今は泣いちゃってもいいのかな？でもやっと、家族が仲良く過ごせる時がやって来たんだね！航クン、やっぱり優しいね、カッコいいよ！瑠璃ちゃん、ちゃんとご挨拶出来たね、エライよ！きつと、あの猫さんとお星様になった瑠璃ちゃんのお母さんがみんなを一つにしてくれたんだね、本当にありがとう！

「……どうやら、あの猫は毎日お墓参りに来ていた江波戸さんに懷いてしまつて、それであのお茶屋の前に居座る様になつてしまったらしい、奥様にも先立たれ寂しかった江波戸さんはその猫に真弓さんの名前を与え、亡くした娘の代わりに可愛がつていたんだろぅな……」

「……だから、あまり人に懐かないはずの猫が孫である瑠璃ちゃんに懐いたんですね、何か切ないなあ、たった一つの過ちだけでここまで血の繋がった家族や親族の絆を切り裂いてしまうなんて……」

「でも、今日こうして途切れた絆が再び結ばれる事が出来たんだ、もうこの絆が綻ぶ事は無いだろう、後は遼司さえ無事に帰ってきてくれれば……」

お墓の駐車場から出発して走り出した車の中。遠藤先生と彰宏お兄さんがお話している後ろの席で、あたしと瑠璃ちゃんは後ろの窓から最後まで見送ってくれているお祖父さん向かつてに手を振っていた。お祖父さんの横にはあの猫の『マユミ』ちゃんも見送りに来てくれた。顔を洗うその仕草は何かあたし達に手を振ってくれている様に見えた。

あたし思つんだ。あの猫さん、名前が一緒だけじゃなくて、もしか

したら本当に瑠璃ちゃんのお母さんの生まれ変わりだったんじゃないかって。だって、優しいところとか、和ましてくるところとか、あたしが聞いた瑠璃ちゃんのお母さんのイメージと一緒にだもん！ 多分、お父さんがお墓参りに来た時も同じ様にお墓まで道案内してくれたはずだよ！ 絶対そうだよ！

「……うわー、スゴい混んでる……」

帰り道の高速道路、井上さんの言う通りやっぱり渋滞しちゃった。お天気もご機嫌斜めで土砂降りになっちゃった。今日、バイクのレスがあった翔ちゃんと一緒にいった那奈、大丈夫かなー？ 川に流されてたりしてないかなー？（補足：川に流された事があるのはお前だろ？）

「井上さーん、今日一日ご苦労様でしたー、せつかくのお休みの日に付き合わせたりしてごめんなさいねー？」

「……いえ、僕も心の洗濯が出来て良い休日になりました、最近ずっと仕事漬けで心が疲れてましたから、なぜマスターが今回の件をわざわざ僕に依頼してきたのかわかった様な気がします……」

「井上さん、私達からお礼を言わせて下さい、本当にありがとうございます」

「いいんですよ遠藤さん、航君と瑠璃ちゃん、またみなでお墓参りに行こうね！ 今度はお父さんも一緒に、親子三人揃ってね！」

「……………はい、そうですね」

車はノロノロ、雨はザーザーと降り続くけど、車の中は井上さんもお母さんも先生も彰宏お兄さんもニコニコ！ あたしと瑠璃ちゃんもニコニコ！ さっきまで悩んで落ち込んでたのがウソみたい、やっぱりみんな笑顔が一番だよ！

「航君、一つ聞きたいんだが、君はさっきから誰にも聞こえない様な小さな声で鼻歌を歌っている時があるね？ 聞いた事が無い曲だがとても良いメロディーだ、僕も職業柄ついつい気になってしまったんだが、それは一体誰の何て曲だい？ 良かったら僕に教えてくれないか？」

「……………赤ん坊の頃、実の母親が歌ってくれた曲です、名前は知りません」

「……………名も無き歌か、このまま埋もれてしまふには惜しいメロディーだな、ご夫人の絶対音感にはどう響きましたか？」

「……………」

「……………あづみ夫人？」

あつ、そーだっだ！ 航クンのお母さんは瑠璃ちゃんのお母さんとは別の人だもんね、あたし、そっちのお母さんにもご挨拶しなきゃね！

「ねーねー、みんな！ 今度は航クンのお母さんのお墓参りに行くよー！ 瑠璃ちゃんのお母さんのお墓参りだけじゃ、きっと航クンのお母さん寂しがるもん、そっちのお墓参りも行こうよ！ ねー、航クン！」

「……………」

「…………航クン、聞いてるー？」

「…………じゃあ、いつか…………」

「うん、いつかね！ 約束だよ！ その時はまたお母さんも一緒に行こうよ、ねー！？」

「……………」

「…………お母さん、聞いてるー？」

「…………そうね、いつか、いつかね…………」

「ほえ？ どうしちゃったんだろう？ 航クンは窓の外を見て黙り込んでしまったし、お母さんもさっきまでニコニコしてたのに急に静かになっちゃった。あたし、また変な事でも言っちゃったのかなー？」

「航クン、さっきの事、まだ怒ってるの？ 変な事ばかり言ってる色々と嫌な思いさせちゃってゴメンね？ あたし、これからもっと頑張って瑠璃ちゃんの立派なお姉さんになるから、許して？」

「…………いや、こちらこそ、ありがとう、本当に……」

あれれー？ あたし、謝ったはずなのに逆に航クンから感謝されちゃったよー？ 何にも褒めて貰えるような事してないのになー、何か変なのー？

「たよ、さっきおおきなこえでなくてたのきいちゃったー！ たよ、なきむしー！」

「あー！ 瑠璃ちゃん、聞いたなー！ 泣き虫って言ったなー！ そんな事言っちゃう瑠璃ちゃんはくすぐりの刑だよ！」

「やだー！ くすぐりたいよー！ たよおねーちゃんごめんなさーい！ キヤハハハハ！」

瑠璃ちゃんをくすぐってじゃれ合っていると、何か急にお尻をモジモジ。瑠璃ちゃん、どうしたのかなー？

「…………おしっこ……」

「えっ？ 瑠璃ちゃん、オシッコ！？」

「…………ちよつと待って下さい？ 休憩所までまだしばらく時間かかりますよ…………？」

瑠璃ちゃんの突然のもよおしに、車の中の大人達はみんな大パニック！ 遠藤先生も彰宏お兄さんも、なぜか紙コップを持ってアタフタし始めちゃった。

「雨降ってますけど、誰かが付き添って外で済ませる以外方法無いんじゃないですか？ 丁度、車もノロノロ運転だし……」

「お前はどこまで馬鹿なんだ彰宏！ 瑠璃はもう八才なんだぞ！ 幼稚園児でもあるまいし、そんな真似させたら付き添ってる人間が女子児童わいせつ罪で……！」

「あら先生？ ちょっと考え過ぎですわ？ じゃあ、もうしょうがないから、小夜が小さかった時みたいに車の中でオシッコ済ましちゃったかどうかしら？」

「それだけのご勘弁下さいご夫人！ これは僕の車なんですよ！ それだけはキッパリ拒否させて戴きます！」

「ハーイ！ 井上さん、あたしもオシッコしたくなっちゃったー！」

「……………すみません、俺も……………」

「は、は、ハア！？」

「うみほたるー！ うみほたるまだー？」

「早くトイレ行きたーい！ 井上さん、海ほたるまだー？」



「うわぁー！　もういい加減にしてくれー！！」

早く、早くトイレに行きたーい！　あたし、瑠璃ちゃんが見てる所  
でおもらしなんて出来ないよー！　もしそんな事になったらあたし、  
お空の上の瑠璃ちゃんのお母さんが認めてくれる様な立派なお姉さ  
んになれなくなっちゃうよー！

## 第49話 虹の彼方へ

一面真っ青に刈り上がった緑のグラウンドのピッチ。その鮮やかな舞台を照らす数多くの眩しいスタンドのライト。そして、観客席は見渡すほどの白、黒、黄色の様々な多国籍の人々でビッシリと埋まり、ゴール裏のエンドラインの後ろには各国の報道記者達がウチに一点集中してカメラを構えとる。

そう、ここはウチとオトンが長年夢見て目指してきた約束の場所、サッカーワールドカップ決勝の舞台や！ 天才サッカー選手の名を惜しいままにしたオトンから鍛えられたウチは日本サッカー界史上最強のプレーヤーになって、男女の壁を突き破り日本代表の背番号10番をつけてついにこの舞台まで登り詰めたんや！

ウチの足元にパスされ転がってきたサッカーボールを華麗にトラップして、襲いかかってくるディフェンダー達を軽く交わして後はキーパーと一対一！ このスタジアムに高々と飾られている金色のワールドカップ、絶対にウチのものにして日本に持って帰るんや！そして、ウチの活躍を病院のベッドで見守ってくれているオトンの元へ持つていって、高々とその頭上に掲げてもらうんや！ さあ、いっちゃ決めたるでウチのスーパーゴール！ 世界最高のフアンタジスタ、松本翼のプレーに世界中酔いしれるやあ！！

「いつけええええええ！！」

ピイイイイイイー！！

「翼！ もうそろそろ起きてよ、翼！？」

「ピッピッピーー！ おねータン朝ですよー！ 早く起きないと置いてっちゃうぞー！？」

「……あれ？ オカン、岬？ ボールは？ ゴールは？ ウチのワールドカップはどこいったんや？」

「おねータン寝ぼけてるー、変な顔ー！」

「今日は午前中から新作君のお見舞いに病院に行くって言ったでしょ？ もう、いつまで寝てんのよ！？」

「……何や、夢かいな。そりやそうやな、そんな夢みたいな大それた話、まだまだ先の事なんやろうなあ。でも、せっかくええ夢見とったんやから、ゴールデンウィークの初日ぐらいゆつくり寝てたかったわ……」。

「ほら翼、早く起きてさっさと顔洗ってパジャマを着替えてよ！ 私、その後演説会の会場に行かなきゃいけないから、もう時間が無いのよ！」

なかなかベッドから起きられへんウチの周りをオカンが忙しそうにバタバタ動き回つとる。ああ、そうやったな、今日は病院に入院しとるオトンのお見舞いに行った後、オカンは何やらどっかの集会で出版したエッセイの演説とかで休み中ずっと帰ってこられへんやつ

たっけ。せやから、このゴールデンウィーク中ずっとウチが岬の面倒を見なきゃあかんねや……。

「……うわあ、面倒くさ、オトンには会いたいけど、何かもう起きる気にならん……」

「翼！ 頼むから起きてよ！？」

「……オカン、あと五分、ムニャムニャ……」

ピイイイイイー！！！！

「うわあ！ うるさっー！」

「おねーたん、シュミレーションファウル！ イエローカード！」

「ゴラア岬！ 朝からピーピーやかましいっちゅうねんオマエは！  
？ 鼓膜破れたらどないしてくれんねん！？」

うつ伏せになって枕に顔を埋めてるウチの耳元で、岬が勝手にウチが誕生日にオトンから貰ったプロの審判員も愛用する高価なホイッスルを大音量で吹きよった。いくら年の離れたまだ小学生のガキとはいえ、お姉様に対して何ちゅう礼儀知らずや、ホンマに頭にくるアホで失礼な妹やわ！

「おねータンはお寝坊さんでダメダメですねー？　みータンはそんな子に育てた覚えはありません！」

「そんな生意気な言葉、一体どこで覚えてきたんやこのクソガキ！　しかもな、『シユミレーシヨン』ちゃうねん、『シミュレーシヨン』や！　第一、オマエに育てられた覚えなんぞ一つもないっちゃうねん！！」

「あー、審判に文句言っただー！　ピッー！　イエローカード二枚目、レッドカード！　おねータン退場！」

「ホンマええ加減シバくぞオマエ！？　ウチのホイッスルとつと返せや！！」

「わーん！　おねータンが怒っただー！　ママー、みータンおねータンの事を起こしてあげたのにいじめるよー！？」

「あなたがいい加減にしないで！　時間が無いんだから、こんな時に姉妹喧嘩とかやめてちょうだい！」

「……いや、だって岬がウチの大事なホイッスルを勝手に……」

「翼、あなたもう高校生でしょ？　もっとお姉さんらしくしつかりしてちゃんと岬の面倒を見てあげてよ！？　これじゃ私、安心して仕事に行けないじゃない！　ホイッスルぐらい貸してあげて、早く出掛ける準備をしないよ！？」

「何でえ！？　何でいつもいつもウチが我慢せなアカンねーん！？」

「いいから早くして！　でないと、本当に置いて行くわよ！？」

「やーい、おねータン怒られたー」

「……チエツ、いつも怒られるのはウチばかり……」

……最悪の目覚めや。せつかくのゴールデンウィーク、ウチかてホ  
ンマは街に繰り出してシヨッピングやオシャレをしたい女の子盛り  
やのに、何で休み中ずっとこんなお子様の面倒見なアカンねん！？  
二、三歳ぐらい年の離れた妹やったらまだ趣味とか学年も近くて親  
近感も湧くかもしれんけど、十も歳が離れとったら話なんて全然合  
わへん！ テレビ見とつたら勝手につまらんアニメ番組に変えよる  
し、かといってバラエティではウチの嫌いな同じ芸しか出来んサム  
いお笑い芸人見てキャツキャツ喜んどる。さっぱりツボがわからへ  
ん！

おまけに人を小馬鹿にする様な神も恐れぬ生意気発言のオンパレー  
ド。もう、何やねん！ これじゃまるでウチが母親みないなもんや  
ないか！？ ウチはオカンに雇われたベビーシッターとちゃうねん  
で！？ こんな事やったら一人っ子で良かったわ。四十近くで第二  
子産むやなんて、オトンとオカンは一体何を考えとんねん！？ ウ  
チには何もかもさっぱり理解出来んわ！！

「……翼？ さっきから何を小声でブツブツ言ってるのよ？」

「……別に、なーんも……」

「ピッピッピー、ピッピッピー」

何やら色々な荷物を後ろのスペースに満載に詰め込んだオカンの車の中、身支度整えて後部座席に座ってふてくされとるウチの前の助手席にはまだ岬がホイッスルをくわえてピーピー鳴らしとる。なんぼ鳴らそうと同じ音しか出えへんのに飽きんのかコイツは？ まあ、お陰で外で荷物運んどったオカンに愚痴が聞こえずに済んだけど……。

「翼、悪いけどこのお見舞いのお花を落とさないように膝の上に置いてくれる？ それと、新作君の着替えが入ってるバックと、お世話になってる病院の人達にお渡しするお土産の品を後部座席に隙間に置かせてちょうだい？」

「えっー！？ 後ろ一人で広いからこっちに座ったのに、そんなデカイバックが来たらもうウチの周り荷物でギュウギュウやがな！ だったらウチ、助手席の方が良かった！ 花なんか岬に持たせたらええやないか！？ 面倒な事ばかりウチに押しつけて、もう嫌や嫌や！」

「ワガママばかり言わないでちょうだい！ 岬にお花を持たせたらイタズラしちゃうかもしれないし、それに危なくて岬一人を後ろに乗らせる訳にはいかないのよ！？ 少しは周りの事情を考えられる様になさい！」

「……チエツ、何やねん？ 花も土産も持っていかなでもええやん、オトンが一番喜ぶ土産は大好きなウチの可愛い笑顔だけやのに……」

「おねータンまた怒られたー！ やっぱりおねータンはダメダメな子ですねー？」

「じゃかあしいわ岬ゴラァ！！ オマエ、後ろから頭蹴りとばすぞ！？」

「はいはい喧嘩はそれまで！ 翼はしばらく黙ってなさい！ かなり飛ばして走るから、二人ともしっかりシートベルトを締めて！」

……またや、またウチだけ怒られた。何でやねん？ 明らかに岬の方から喧嘩売ってきたのに、何でオカンは岬には怒らんのや？  
こんな絶対不公平や、絶対に納得出来ん……。

「……とても渋滞している上を走っていく余裕は無いわね、出来るだけ下を全力で走っていくから、しっかり掴まってなさい！」

「えっー！？ オカン、急いでるからってそんな警察に捕まりかねない運転、そない無茶なー！？」

連休で混雑する昼間の高速道路を避けて、普通の道路を真つ白なワゴンRがターボ全開で交差点を信号ギリギリで駆け抜けていく。まるでジェットコースターの様な乗り心地に岬はキャツキャツと声を上げて喜んだるけど、荷物満載の後部座席に座るウチは荒波に揉まれとる難破船状態や。頭のあっちこっちに荷物が当たって、たまつたもんやないでホンマに……。

「待っててね新作君！ 今すぐ新しい着替えと私達の子供達の笑顔、届けてあげるからね！」



家にはもう一台オトンの大きな1BOXの車があるんやからそっちに乗ればええのに、オカン曰わく『小回りが効かないからイヤ』なんだそうや。病気で仕事が出来なくなつたオトンの代わりに、毎日本の出版の打合せや演説会、はたまたテレビ番組のコメンテーターなどの仕事で忙しいオカンにはこっちの車の方が合つてるとかいなとか。

その慌ただしい生活に付き合わせとるウチはハンパなくしんどい。大体はオカンがいる時に全部済ませてくれるけど、忙しい時はウチが代わりに岬のお守りや家事の面倒しなきゃいけないからメチャクチャ大変なんやで？ まあ、そう言つても最近はず夏を呼び出して手伝つて貰たりしとるけどな。

でも、そんな男勝りにバリバリ働いとるオカンはウチの憧れの女性像やねん！

今でこそ仕事も家事も車の運転も楽勝でこなすキャリアウーマンのオカンも、昔は内気で陰気で奥手なイマイチ眼鏡っ子だったんやて。それが大学生の時にオトンと運命の出会いを果たしてからはメキメキと自信と実力をつけて、一気に学問も仕事も女としての人生も開花してもうたらしいで。

眼鏡の奥に隠れていた天性の美貌と男どもを魅力するナイスバディに一気に磨きがかかつて大学のミスコングランプリに輝くと、今度はずっと勉強して蓄えてきた知識を使って世界史や民族問題を題材にした出版物が次々とベストセラー！。

現在は歴史参考書などの教科書鑑定委員や有名大学の特別講師も依頼される超売れっ子さんや。しかもそのバティストイルはウチと岬を産んで四十越えた今でもくびれの妖しいエロエロなバツ、キyun、ポーン！これぞまさしく才色兼備つてヤツやな。神はオカンに二

物を与えたって訳や。

ウチが世界一の男と惚れ込んだるあのオトンのハートを射止めたこのオカンの魅力はさすがのウチでも齒が立たへん。いつも怒られてばかりで頭にくる時もあるけど、ウチが自分以外でオトンから目一杯愛されても納得して許す事が出来る女性は世界広しと言えどやっぱりこの人だけやで！

「わー！ ママ運転お上手ー！ あつという間に病院に着いたねー！」

「どう、ママスゴいでしょ？ 何とか予定通りの時間に到着したみたいね……、つてあら、翼？ あなた顔が真っ青だけど大丈夫？」

「……大丈夫な訳ないやん？ 荷物があちこち飛び回って、あわや生き埋めになるところやったんやで……？」

……やれやれ、後はこんな無茶な事をせんかったら最高の母親なんやけどなあ？ 車の揺れと飛び交う荷物の衝撃でクラクラになつとるウチとは対照的に、オカンはあんなレースみたいな運転しとったのに荷物を両手に抱えて駐車場から病院一直線にスタコラサッサ。この人、毎日仕事に家事に一体いつ休んでんねやろ？ ホンマにタフ過ぎるわ、ウチには到底真似出来ません……。

「新作君、お待たせー！」

「オトーン！ 可愛い愛しの翼ちゃんの到着やでー！」

「パパー、みータンも来たよー！」

最近、心臓の病状が悪くて検査の数値も良くなり、以前よりも若干やつれてきたオトン。この前、那奈や那奈のオトンが見舞いにきた時は『近い内に死ぬかも』なんてビツクリする弱音も吐いたけど、この松本家三人女神の満面の笑顔を見たらそんなもん軽く吹っ飛ぶで！　ウチらの元気な姿が、病魔と戦うオトンにとって最高の良薬……！

「こらこら、ダメですよ松本さん？　ちゃんと良い子にして点滴の針を刺させてくれないと元気になれませんよぉ？」

「いやいやいやいや、カナミちゃん？　も、もうちょい下かなあ？　もうちょい下に屈んでくれたらええ感じに谷間が拝めて……」

「松本さん、看護婦みんなにそんなエッチなお願いしてるんですかあ？　私だけだと思ってたのに」

「いやいやいやいや、オジサンの一番はミホちゃんだけだつて！　ミホちゃんの朝の採血はオジサン、いつもビビビツって感じちゃうんですよ？」

「んっもっう、私の点滴はビビビツって感じてくれないんですかあ？　そんな事言ったら痛くしちゃうぞ？」

「あつ、あつ、あつ、カナミちゃんの針の刺し方も絶妙や、オジサン幸せいっばいであつちこつち元気になってしまいそうやわあ……」

「……………」

「……あれ？」

……うわあ、最悪や。最悪の場面に出くわしてしもうた。若い看護婦二人挟まれて鼻の下全開で伸ばしまくるスケベオヤジのだらしない醜態。ウチが一番見たくない、甘いマスクに隠されたオトンの闇の裏の顔……。

「……新作君？ 何やってんの？（怒）」

「……い、いやいや美香ちゃん、これはちゃうねんちゃうねん！これはな、あの、い、医学の勉強やで勉強！ 看護婦達に自分の腕の血管の位置を教えて貰えば、いざという時に自分で注射や点滴や採血出来るやろ？ 万事が万事を思つての事であつてやな、その……」

「……自分で注射打つて、一体どんなシチュエーションやねん……」

「せ、せやからな翼？ もしかしたら医者も看護婦もおらん時に心臓に不整脈なんか起こるとも限らんやろ？ そないなつたらオトン一人で何とかせなアカンやん！？ その為に今、看護婦さんの谷間っプリ、いやいや、仕事っ振りを見て勉強に励んで……」

「パパ必死過ぎー、みータンそんな言い訳は見苦しいと思いまーす！」

「何や岬い！ お前までパパをそんな冷たい目で見るんかあ！？  
パパはお前達の為に頑張って病氣と戦ってるんやでえ！？ これく  
らいのサービス、別にええやないかい！？ おっぱい見るだけやつ  
たら浮気にも痴漢にも逮捕にもならんやろお！？」

……うわあ、開き直りや、見苦しつ。とりあえず、点滴の針も無事  
刺さったみたいやし、下手に興奮して心臓に悪い影響出たらアカン  
から看護婦さん達にはお土産持って病室から出てって貰おか。

「いつも夫が『色々』お世話になってるみたいで、つまらない  
物ですが、皆さんで召し上がって下さい（怒）」

「もう二度と来えへんでええで、このオッサンのスケベ根性は底無  
しやからな」

「看護婦さん、バイバーイ！」

「ああつ！ 俺の可愛い白衣の天使が！ カナミちゃん、ミホちゃ  
ん、カンバツーク！！」

もちろん、この後はウチとオカンでたっぷりとオトンに説教がまし  
たった。ちよつと目を離すとすぐに女の胸や尻ばかり追いかけて  
て、今の自分の体の具合をわかつとんのかなこの人は？ 一体オト  
ンのエロパワーの源はどこから来とんねん？ これもウチにはさっ  
ぱり理解出来ん！

「いやゝ、エロスとはすなわち男のロマンですからねえ？　同じ男として生を受けた自分には、新作さんのお気持ちは十分に理解出来ますですよ、ハイ」

…… もう一つ理解出来へんのがコイツや。コイツやコイツ！　ウチが行く所を先回りしてニヤニヤと毎度毎度毎度毎度毎度！！

「何でオマエがここにおんねん、薫！？　何の用でまたオマエがウチらより先に勝手にオトンの病室に居座つとんねん、この変態ストーカーめ……！」

「つばピーったらヒッドーい！　お花はちゃんと花瓶に生けて下さい！　こっちに投げちゃイヤン……！」

ウザいしキモいし、もう何やねん！？　何でオトンのお見舞いに来るといつつもいつつもコイツがおんねん！？　一体何の用やねん！？　オトンやウチらに何か恨みつらみでもあるんかい！？　最近はウチの知らん内に家の中にまで入り込んでるみたいやし、もうウチのストレスは限界や！　迷惑や！　立派な犯罪や！

「それだけとちゃうわ！　綾！　何でオマエまでここにおんねん！？　ウチは今日オマエをここに呼んだ覚えはあらへんで……！」

「……薫君がね、お見舞いに行くから一緒に行こうって誘ってきたの、私も翼のお父さんには何度も車でクラブハウスから家まで送って貰った事があるし……」

「まあ、俺と綾ピーの仲じゃん？　せつかくだから一緒に日頃新作さんにお世話になってるお礼をしに行こうって話になってさ、二人でこうして仲良く病院にお見舞いに来たって訳さ！」

何やねん何やねん何やねんいきなり！？　二人の仲！？　一緒に仲良く！？　何の話や！？　もう全然訳わからへん！？　いくら綾の出番が少ないからって、こんな泥沼三角関係鬼過ぎるやる著作者！？　いつからコイツらはそんな連絡取り合う様な関係なつとんねん！？　学校が一緒になったから言うても、まだ新学期始まって一ヶ月ちよいやないか！？　じゃあ、もしかしてコイツら、もっと前のあのクラブハウスの初対面の時からウチの知らん間にコソコソと……！？

「……なあ、オマエら二人、付き合ってたの……？」

「……ごめん翼、君にはあんな事を言つたくせに、優柔不断な俺は綾ちゃんの事が忘れられなくて……」

……最悪やん。何で？　そんなんヒドい、あんまりやろ？　薫のウチに対する気持ち、ホンマもんなのになって最近信じ始めたのに。ウチの事、ホンマに想ってくれてるんやって気にかけてったのに。ましてや、その相手がウチのサッカーでも私生活でも大切なパートナーの綾だったなんて、そんな酷すぎる……。

「ないないないない、絶対に無い！　薫君の一癖あるノリとしつこ

さは私には生理的に無理！　どんなに私が出番が欲しいと言っても、この役だけは喜んで心から翼に譲ってあげる！」

「えっ！　あんまりだぜ綾ピー！？　こんなナチュラルテイストなスイーツ美男子をそんなゲテモノ料理みたいな言い方して避けるなんて、薫ちゃんショックー！」

「……薫、オマエなあ……」

「おやおや？　つばピーったら焼き餅妬いちゃったのかな？　心配しないでベイビー、俺は未来永劫神に誓って君だけの物さ！　うゝん、怒って真っ赤になった顔もベリベリキュート！！」

「オマエ、一生死んでろやボケツ！　地獄に堕ちて灼熱の溶岩窯に五、六回浸かってこいや！！」

「お花には罪が無いから投げないで！？　花瓶もデンジヤラスだからヘルプミー！？　閻魔様、哀れな俺に天国への蜘蛛の糸を差し伸べてプリーズ！？」

何が天国じゃこのどアホ！　オマエみたいないい加減な嘘つき人間、地獄に行く前にウチがその二枚舌を全部残らずベンチで抜き取ったるわ！　一瞬でも切なくなったらウチが愚かやった。こんな最低スケベストーリーカー犯罪男、絶対に好きになんてなるかいな！

「フバハはほだひがおおふて学校たのひほうやなあ（翼は友達が多くて学校楽しそうやなあ）、ひかもふきやってひひよってくれるだんひまでひて（しかも好きやって言い寄ってくれる男子までいて）



、へいふゆん真つ盛りなんやなあ（青春真つ盛りなんやなあ）？」

「……オトン、何言ってるか全然わからへん……」

「美香ひゃん（美香ちゃん）、ほろほろ頬をふねるほの手をはなひてふれまへんでひょうか（そろそろ頬をつねるその手を離してくれませんか）？　もう看護婦はんたひをへツちな目で見たりひまへんから（もう看護婦さん達をエツちな目で見たりしませんから）……」

オカンに思いつ切りつねられてるオカンの頬は真つ赤になって、相当痛いのか涙目になつとる。まあ、当然の報いやけどな。そんなオトンを見て薫は感心そうに腕を組んでウンウンと頷きいつものニヤニヤ。

「さすがはおっぱい王と崇拝するエロス全能の神であるミスターマツモト、エンジェルナース軍団にモテモテどころじゃなく、しつかりと愛しの奥方のハートも驚掴みで離さないんですね、心より感服致します」

「その通りだ王子、疚しい色事と愛する伴侶と共に暖かい家庭を築いていくのは全くの別物である、男は常に家庭の事を第一に考え、ちよつとしたムフフなお遊びは気晴らし程度に……」

「……気晴らし？」

「ふそでふふそでふ（嘘です嘘です）、美香ひゃん（美香ちゃん）、ひょうだんでももつひいまへんからゆるひてくだはい（冗談でもも

う言いませんから許して下さい)」

しかっしわからんわ。二年前ぐらいにみんなで行ったあのキャンプの後、オトンと薫の突然の急接近はどうもおかしい。おかしいを通り越して何かもう気持ち悪い。二人が言うところのおっぱい同盟はこの騒ぎやない、まるで実の親子かどつかの師匠と弟子みたいや。

そうやな、例えるなら那奈のオトンと翔太の間柄に良く似てる感じや。ああそや、この前は那奈のオトンが病院にやってきて訳のわからん話でキレて怒鳴り散らして、一緒にいた薫は泣き出すしオトンに至っては『もうすぐ死ぬ』なんて言い出しよったし……。

しかもあの話、どうやらオカンは何か事情を知っとるみたいやったけどウチに何にも教えてくれへん。一体、ウチの知らないところで何が起こつとんねん？ オトンと薫、二人の間には一体どんな関係があんねん？

ミステリー好きのウチからするとこの謎はかなり興味深いくて色々妄想してしまうわ。二人が突然真面目な話をし出したり、薫の片方の足が義足だった事がわかってからオトンの態度が変わった事から推測すると、何かシリアスな裏話でも隠されとるんやろか……？

「松本さん、お昼ご飯お持ちしましたよ？」

「うおお！ 神よ、これまたチャーミングなエンジェルナースのご登場でございますよあ！ 少し守りの堅い白衣に写るスマートでシエイプされたエロエロボディはまるで男を吸い付ける魅惑のマグネティック・ガール！」

「おお！ ついにお主も服の上からでもボディラインを想像出来る千里眼を身につけよったか！？ そうとも、我々の千里眼にかかれ

ば世のオナゴ達の姿はすっぽんぽん同然や！ そんな無防備なエンジェルのパユアハートに、新作おじちゃんの不正アクセス炸裂しちゃうぞお！？」

「新作君！ 岬も側で見てるのよ！？ 父親の威厳丸つぶれじゃない、もういい加減にしなさい！！」

「いいなあいいなあ、俺もこの病院に入院したい！ そして、美香さんに一日中説教された〜い！」

……アホや。アホやコイツら。無い。絶対にシリアスな話なんてこの二人にはありえへん。やっぱりオトンと薫を結ぶもんは女のウチからにはわからん壮大なエロエロパワーによるものなんやな。今、改めてそれに気づかせて貰たわ……。

「でも不思議だよね？ そんな薫君が翼の事が好きだなんて、こんなセクシーの欠片も無い小学生みたいな背格好に何の膨らみも無い真っ平な胸……、もしかしてさあ、薫君ってロリコン？」

「じゃあぁしいねん綾！ オマエかてそんな口利けるほどのもんや無いやろが！？ 惨めで貧乏なペチャパイ娘が、オマエにそないな事言われる筋合いなんかあらへんねん！！」

「ヒッドーい！ 翼なんかと一緒にしないでよ！？ 私はちゃんと全国の子女子高生の成長平均値を満たしてますよーだ！」

「平均値以下の何が悪いねん！？ むしろウチは最近需要の高い希少価値のあるロリータバティなんやで！？ ウチかてオマエみたい

などどこにでもいるような量産品と一緒にされてたまるかつちゅうねん!？」

「あー、そうですかそうですね！ 認めるんだね？ 自分がロリ系だつて認めるんだね!？ 何よ、散々メリハリのあるナイスボディになるとか言つといて、結局諦めてその道に逃げちゃうんだね!？ もうガツカリ、ガツカリボディ！ この話、千夏ちゃんにもしっかり報告させて貰うからね!？」

「ガツカリつて言うなガツカリつて！ 勝手にせえや！ ウチかて乳製品採ったりバストアップ運動とか頑張ったけどちつとも成果が出えへんかっただけや！ 千夏がなんぼのもんじゃ!！ オマエになんてウチの傷ついた小さな可愛いハートの気持ちなんかわかってたまるかあ!！」

「わかゝるわかるよ君の気持ちゝ 俺はセクシーでもロリータでも熟女でも何でもペロリしちゃう大食い雑食家なんだせえ!？ さあ、愛しのダーリン？ 迷わず俺の腕の中に真っ直ぐ飛び込んでくるがいいさ!！」

「オマエが一番やつかましいんじゃゴラァ!！」

「あんぎゃあああああ!！」

オトンに着替え一式とウチら未成年者には目の毒なラブラブキッスをプレゼントすると、オカンは急ぎ足で病室から駐車場に戻って来たもやハンパないスピード出して仕事先へと行ってしもた。この後地方でホテルに泊まつての仕事やる？ ホンマに忙しい人やなあ？ オカンの方が体を壊さんか心配になつてくるわ……。

「なあオトン、静岡の『森川の里』って聞き覚えある？」

「……森川の里が、これまたえらい懐かしい名前やなあ、俺が小さい頃に虎太郎や啓介と一緒に世話になった孤児院の名前や、しかし、何で翼がそれを知ってるん？ 俺、お前にそんな話をした事あったっけか？」

「……いや、インターネットで調べとつたら何かそんなんが出てきてな、ちよつと気になってオトンなら知つとるかなって……」

「……そうか、しかしホンマに懐かしいわ、昔良く三人で連んで悪ふざけしては、その院長のスズ婆にいつも怒られとつたなあ、今頃、あそこないなつとんやるか？ スズ婆、元気にしとるんやるか……？」

「……ウチ、オトンに嘘ついてもうた。ホンマはインターネットで調べたんとちゃう、家にオトン宛てでその『森川の里』ってところから手紙が来てたんや。興味をそそられたウチは悪い癖でオトンよりも先にその手紙の内容を読んでしもた……」。

「拝見、松本新作様、風薫る爽やかな季節となりました今日この頃……」

その手紙の主はオトンが『スズ婆』と呼んでいた院長さんの娘さんからやった。そして、その手紙は今のオトンが知ってしもうたらき

つとショックを受けてしまつかもしれへん内容が書かれていたんや……。

「……先日母が、森川鈴子が息を引き取りました、九十五歳の大往生でした、死因は昔からの高血圧が引き起こした心不全でしたが、ほぼ老化現象によるものでしょう、最期はとても安らかな表情でした……」

ウチは最近、何が何でもオトンの周りから『死』という言葉を払い去りたくて必死やった。悪い事を考えない様にしても、どうしてもあの時にオトンが言った『死ぬかもしれない』という言葉を忘れる事が出来なかった。あのオトンが死ぬなんてありえへん！　そう思っても、いつかは来るであろう別れの時が次第にウチらの背後に近づいてきているのを感じて怖くて仕方なかった。

だからウチ、オトンに嘘ついて手紙を渡す事が出来なかった。自分を育ててくれた母親みたいな恩人の訃報を知らせてあげないなんて親不孝もいいとこやけど、それでも今のオトンには人が死ぬって事を考えて欲しくなかった。生きる事だけを考えて欲しかった。これからもずっと、ウチの側に居続けて欲しかったから……。

「……おねータンどうしたのー？　元気ないぞー？　おねータンの取り柄は元気だけでしょー？」

「……うん、そやな、そうなんやけどな……」

「薰タン、薰タン！　おねータンおかしいよ！　みータンが悪口言ってるのにおねータン全然怒んないよー！？　病気になっちゃった

のかなー!？」

「ハツハツハ、いいかいミータン？ おねータンだって女の子、元気な時もあれば落ち込んでシュンとなっちゃう時だってあるのさ！ 翼はいつも強気な様で、本当は弱い小さな自分を守ってくれる白馬の王子様が現れるのを夢見て……」

「……薫君、少しは空気読みなよ？ 翼がこんなに落ち込んでるなんて相当の事よ？ 雪でも降ってこなきゃいいけど……」

「……むう、いい加減おちゃらけモードにも限界があるかな……」

嘘をついて手紙を後ろに隠したまま病院を後にしたウチは、苦悩と後悔で頭の中がパンパンに腫れ上がってしもた。近くの駅まで歩いていく足取りも臆気、これが本当にオトンの為に良かった事やったんやるか？ ウチのした事は正しかったんやるか？ どんなに考えても、ウチには正解を見つucker事が出来へん……。

「……翼？ お父さんの事が心配で落ち込んでいるのはわかるけど、そんな顔してたらお父さんの方が翼の事を心配しちゃうよ？ だからさ、いつもみたいに元気出そっ!？」

「……うん、そやな……」

「おねータン笑って!? ミータンが面白いギャグやってあげるー！ せーの、グーグーグーグーグー！ コォー！」

「……それ、ウチ大嫌いやねん……」

ウチの後ろからついてくる綾と岬が珍しく氣を使つて励ましてくれるけど、やっぱりどうしても頭の中からオトンの言葉が離れへん。昔を思い出して遠い目をして語つとつた、ウチの知らないオトンの大切な思い出……。

「……俺達があゝの孤児院から外の世界に出る時、過去の辛い思い出は全て捨てて新しく生まれ変わろうつてそれまでそれぞれが大切に持っていた宝物を一つずつ近くの大きな木の樹の下に埋めたんだ、いつかこの社会で成功したらまた三人で掘り返しに行こうつてな、でも、俺にはもうそんな機会はあらへんかもしれんけどなあ……」

……宝物つて、何やろう？ 那奈のオトンと小夜のオトンだったら多分知つとるはずやけど、確か那奈のオトンは突然沖縄に行つてしもたらしいし、小夜のオトンは相変わらず海の向こうで仕事が忙しいやろな、この二人に話を聞くのはまず無理や。オカンなら何か知つとる？ いやアカン、オカンにそないな事聞いたらウチが手紙隠しとるのがバレてしまふ。それだけは絶対にアカン。

じゃあ、どないしたらええねん？ この手紙を隠してオトンに嘘ついたせめてもの罪滅ぼし、何でもええからオトンの力になりたい。どんな事でもええ、オトンが喜んでくれる事。あの時の『弱音』がホンマの話なら、せめてオトンが元気な内に何かオトンの夢や希望を叶えてあげたい……！

「ねえ翼？ 今、翼が何を考えているか当ててみせようか？」



「……ハア？」

何や、いきなり？ さっき思いつ切り蹴っ飛ばしてやったウチの靴底の跡がついたままの間抜けな顔で、薫がスケベなニヤニヤとは違う爽やかな優しい笑顔でウチの前を遮ってきた。

「きつと、大好きな新作さんに対して何か嘘をついたか秘密を隠しているんじゃないかな？ そして、それを今とても後悔している、そして、その償いとして新作さんの為に何かしてあげたいと思っている、違うかい？」

「……何で？ 何で何で何で！？ 何でウチの考えている事が薫にまるとお見通しやねん！？ そんなアホな、ウチは何も手紙の話もオトンの孤児院の話も誰にも話してへんねんで！？」

「どうやら図星って顔だね、言っただろう？ 俺は翼の事しか見てないってさ？ これでも、俺は世界中で誰よりも翼の事を理解出来る人間になりたくて頑張ってるんだぜ？ バカな事ばかりしか言っていないから信じては貰えないかもしれないけどね？」

「……何や、嬉しいんやか気持ち悪いんやか訳わからへん感情がウチの胸の奥に渦巻いてキュンとした。サッカーでも相手にフェイントがバレたらマズいから、考えている事はあまり顔に出さない様に普段から気をつけとったのに、薫はいとも簡単にウチの心を読み取ってもうた。何やねんコイツ……。」

「だったらさ、翼の思う通りにすれば良いんだよ！ 翼が今、新作さんにしてあげたい事をしてあげれば良いんだよ！ 小さい頃から新作さんにサッカーで教わった大切な言葉があるんだろう？ それを今、ここで俺達に言ってみてくれよ！？」

サッカーの練習や試合で壁にぶち当たった時、そして、学校や普通の生活でも自分に自信が持てなかった時、オトンは決まって明るく笑顔で、落ち込んでいるウチが一瞬で元気になれる『魔法の言葉』をプレゼントしてくれた。

「……『下を向くな、笑え、自分の直感を信じる』って……」

「そうだよ、それ！ 正にそれ！ 今、自分がしたい事を、自分が感じた事を、自分を信じて動けば良いんだよ！ それが一番の新作さんへの気持ちなんだよ！ 翼が悩んでいる事の本当の答えなんだよ……」

何でウチとオトンしか知らんそんな事まで知つとるん？ ホンマに、薫には人の心を見通す千里眼でもあるんやろか？ 何かウチ、薫に何もかも全てを見られてしもうてるみたいな感じや。うわぁ、何かめっちゃ恥ずかしい。何なんやろ、この変な気分……。

「さあ翼！ 今の翼の気持ちを俺に遠慮無くぶつけてくれ！ 翼が理想に想う頼りになる男じゃないかもしれないけど、俺は翼の為に」

出来るだけの努力は一切惜しまない！ 俺はいつだって、翼の味方なんだぜ！？」

「薫タンカッコいいー！ みータンもおねータンとパパの力になってあげるー！ みータンはみんなに運<sup>ツキ</sup>を呼ぶぜー！？」

「……………どうも断れない空気になっちゃったから、私も何か役に立てるなら……………」

……………そうやな、そうやんな！ ウチに悩み事なんて似合わへん！ 薫、岬、綾、ホンマおおきに！ ウチ、もう迷わへんで！ 思い立ったら即行動、それがウチのポリシーや！ 自分自身をここまで成長させてきたウチの全てなんや！ 絶対に後悔なんてしとくない、世界一大好きなオトンの為に、ウチはこの小さい体で出来る事をするんや！ 今、してあげられる事を全力でしてあげるんや！！

「よしつ、ウチ決めたで！ オトンに代わって、今から静岡まで行って『森川の里』でオトンの宝物掘り出したんねん！！」

「そうだ！ それでこそ俺の愛しのベイビー……………、ってエッー！ さすがにそれは予想GUYデース！？」

「し、静岡！？ ちょっと翼、いきなり何を言い出してんの！？ 今からそんな遠くに行くなんて、とても一日じゃ帰ってこれないじやん！？」

「じゃかあしい！ じゃかあしいじゃかあしいわボケエー！！ もう

決めたんや！ オマエら、ウチに力貸すつて言つたやる！？ 言うたよな！？ 泊まりがけ上等や、学校が始まる前に帰つてこれれば何の問題も無いで！？」

そうや！ 今のウチに出来る事、それは限られた命の十字架を背負わされた運命と立ち向かつているオトンの代わりに、幼き頃の大切な思い出の場所で宝物を掘り出し、それを無事にオトンの元へと届ける事なんや！ それがきつと、今のウチに与えられた神様からの試練なんや！

「……ヤダよ、泊まりがけだなんて、私は何て言つてお母さんを説得すればいいの！？ そんなの絶対に怒られるに決まつてるよ……」

「ウチの家に泊まつとるつて言つときやええねん！？ 静岡に行くくらい別に危険な事でもないやろ、お隣の県やで！？」

「ウヒョヒョヒョヒョ、いいんですか、いいんですかあ！？ 高校生の分際で健康な男子と女子がお出掛けお泊まりなんてしちゃつてもいいんですかあ！？ しかも男一人に女三人つて、何て素敵なハーレムなんでしょう！ まるで男の夢の様な展開……！！」

「岬を『女子一人』に入れるなやロリコン変態！ もう一発顔面に蹴り食らつとけや、このどアホ！！」

「あつぴいあああああ！！」

もちろん、このスケベ犯罪予備軍にはしっかりと悪さをせん様に鎖

を縛りつけて、飼い犬の如く力仕事やら肝心の掘り出し作業やら面倒でかつたるい野暮用を押しつけてこき使ってやんねん！ エロい事を考える余裕も無くなるくらいにビシバシいったるで！！

「おーでかけー、おーでかけー、みんなとお出掛け楽しいなー！  
薫タン、綾ねータン、みータンについてこーい！」

「……いつの間にか岬ちゃんにも懐かれちゃったし、もう私、どうなっても知らないからね？ 翼、私の身に何かあったらちゃんと責任取ってよ……？」

「さあさあさあ、行くで野郎共！ 目指すはあの虹の彼方にある大きな木の樹の下に眠る未知なるお宝、キャプテン翼率いる海賊団の旗揚げやでえ！！」

高校生三人と子供一人の青春旅キップ珍道中。オトンが育った故郷って一体どんな所なんやろ？ 待っててな、オトン！ ウチ、絶対に宝物を見つけてオトンの元に持ち帰ってくるやさかいに、それまでは元気でおってな！？ 絶対やで！！

「んでさ翼、静岡までは何で行くの？ 俺、新幹線乗りたいな？」

「新幹線乗った事無いから何か怖いもん、東海道本線で行きたいんやけどアカン？」

「ワオ、ナーンテコッタイ！ すっかり日が暮れてしまっでんがなまんがな？」

「気持ち悪い関西弁使うなや、このポケッ!!」

## 第50話 光の射す方へ

東海道線に乗って熱海で乗り継ぎ、二時間ちよいかけてやっと着いたで伊豆急下田駅！ やっぱりウチらの街とは雰囲気が違うて、温泉街の並ぶ観光スポットって感じやな！ 天気も良くて風も涼しくて、都会と違って空気が澄んでて美味い美味い！ やっぱり、ゴールデンウィークは家に籠もってるよりお出掛けするに限るって話やなあ！

「いやあゝ、何ちゆうんやるか？ 何かこう、心が真っ白に洗われるってこういう事を言うんやなあ！？ 電車の窓から見た海岸線の大パノラマ、ここでしか戴く事の出来へん最高の駅弁、もう忙しない日常から自分解放って感じやな！」

「みータンも自分かいほーう！ 海とつても綺麗だったー！ おねータン、次はどこに行くのー？ みータン、もっともつと遊びたい！」

「…………あのー…………」

「おう！ その意気やで岬！？ 今宵は無礼講、温泉旅館も貸し切って松本翼大祭りの開催や！」

「よっ！ おねータン日本ー！」

「…………ちよっとお二人さん、ノリノリのところ申し訳ありませんが

……」

ああん！？ 何やねん、さつきから後ろでブツクサブツクサ！ ウチら松本姉妹がええ感じで盛り上がつとるのに、普段ハメ外しっぱなしの薫が何でこんなにテンション低いねん！？ わざわざ連れてきてやったつてのに、一体何が気に食わんのや！？

「……いつからこの小説は『伊豆半島ぶらり途中下車の旅』になつたんですか？ 完全に本来の目的忘れてるし……」

「……目的？ あれ？ 何やったつけ？」

「お宝、お宝！」

「あつ、せや」

そうやったそうやった！ 旅行気分になんて浸ってるヒマなんか無いねん！ ウチは病院に入院して外出出来へんオトンの代わりに、オトンが幼少時代を過ごした孤児院『森川の里』に行つてオトンが昔埋めたお宝を掘り返しに来たんやった！

アカンアカン、快適な列車旅と美味しい弁当、そしてこの街の観光スポット特有のウキウキウォッシングにときめき過ぎてすっかり大事な事を忘れてしまふところやったわ！ やっぱ避暑地の魅力つっ！んはハンパないわなあ！？

「よしっ！ 目的も再確認したつてところで、とりあえず新鮮な伊



豆の海鮮でも食って一息入れよか？」

「さっき駅弁食ったじゃ〜ん！？　つか、交通費だけでもうそんなお金残ってませ〜ん！？　マジで帰りの運賃ピ〜ンチっスよ！？」

「何やねんなオマエ、使えへんな〜！？　オマエから資金スポンサーの役目取ったら一体何が残んねん！？　サラ金にでも手え出してウチらに誠心誠意尽くせやボケツ！」

「学生でサラ金に手を出したら人生終わってしまいますがなでんがな〜？　誰か〜、自己破産手続きの為の良い弁護士さん紹介プリーズ！？」

何や何や！　せつかく下田くんだりまで来たつちゅうのに、途中でどこにも寄れずにそのまま現地に直行しなアカンのかい？　つまらんな〜、修学旅行かて色々な観光スポット回っていくつちゅうのに、これだから学生は貧乏で困るわ！　世の中の保護者はもっと可愛い子には旅をさせんとアカン！　このままじゃ日本ダメになるで！？

「……ねえ翼、そんな気楽な事言ってる場合じゃないでしょ……？」

「……まったく、綾までそんなシケツ面かいな！？　何の縛りも無い自由気ままなぶらり旅、少しは楽しそうな顔しろや！　温泉街から漂う硫黄の匂いとか、他の旅行者で賑わつとる商店街の雰囲気とか……！」

「バカ言わないでよ！？　周り見なよ周り！？　もうすっかり日が暮れちゃってるじゃない！？　これからどうすんの！？　このまま

じゃ本当に泊まりがけになっちゃうじゃない!？」

あらゝ、ホンマやゝ？ 辺り一辺すっかり日が暮れて、キレイな夕焼け空になってしもてるなゝ？ 駅前の街のネオンにも灯りが灯つて、正に夜の街へと表情を変えて怪しい雰囲気やなゝ？ 時計を見たらすでにもう夜七時を回つとるし。

「その目的地までは一体あとどれくらいかかるの!？ 今日中に無事に到着出来るの!？ 第一、翼は目的地がどこなのかちゃんとわかってるの!？」

「……とりあえず、オトン宛ての手紙には差出人の住所は書いてあるけどなあ……?」

「それにさ、その差出人の人にはお伺いしますって連絡してあるの!？ いきなり訪問とかして大丈夫なの!？ それだけじゃないよ、私達は今日どこに泊まればいいのか? もちろん、どこか当てがあるんでしょ!？」

「……いやゝ、現地まで行ったら何とかなるかなって思つて……」

「あー、もう最悪! 翼と絡むといつてもいっつもそう!」

綾のヤツ、途端にふてくされて駄々っ子みたいに地面に座り込んで足をバタバタし始めよつた。もっと年下で生意気な岬かて我慢して大人しくしとるのに、何ちゆうみつももない態度やねん!

「オマエ、高校生にもなつて何やその醜態は！？ さつさと立てや！ 周りの駅員も何事かってこつち見とるやるが！？」

「ヤダ！ 絶対に立たない！ 翼は学校でもサッカーでもいつも勝手過ぎるよ！？ 大したアイデアや見通しも無いのにいつも一人だけで突つ走つてさ、周りで合わせなきゃいけない人間の事を全然考えて無いじゃん！ だからワンマンプレーだっていつもコーチに怒られるんだよ！？ そんな事に毎回付き合わされて、もう私の限界だよ！？」

「何や何や！ 全部ウチのせいかい！？ あのなあ、人に責任擦り付けるヒマがあつたら少しは自分も何か良いアイデア考えんかい！？ オマエかていつも何もかも全部ウチ任せやるが！？ コンビニで地図買つてくるとか、交番で道聞いてくるとか、何かしら気の利いた事出来んのかい！？」

「何で私がそんな事までしなきゃいけないの！？ 私はアンタの召し使いでも奴隷でもないんだから！ 無理矢理こんな遠くまで連れてきて、挙げ句に気が利かないだなんて言われて、もう最悪だよ！」

「……またや、またこれや。サッカーの練習試合で負けた時とか、つまらんプレーして監督やコーチに怒鳴られたりするといつもコイツはウチのせいにする。何でやねん？ ウチについて来れへんオマエが鈍くさいんじゃない！ 走り回るのが仕事のボランチが何ワガママ言つとんねん！」

「もう家に帰りたい！ そんなに宝物を掘り出したいなら、翼と薫君だけで勝手に行ってくればいいじゃん！ 私、何にも関係無いもん！ もう一人で帰る！！」

「あーそうかい！ 何やオマエ、ウチの力になりたい言つたクセにしつぱ巻いて逃げるんやな？ オトンがいつも家まで送つてくれた恩を仇で返すんやな？ せやからオマエはいつまで経つてもサツカ一のレギュラーにも、物語のレギュラーにもなれへん影の薄い中途半端人間なんや！」

「……！ そんな……」

「……ちょ、ちよつとつばピー？ 大切なベストフレンドをそんな言い方したらノンノン！ せつかくの男女四人ラブラブ旅行だぜえ！？ みんな笑顔でピース……！」

「岬を『女子一人』に数えるな言うてるやろがこの変態！ こんな腰抜け女はなあ、一発ガツンと言ってやらなアカンねん！ 小さい岬かて大人しくしとるのに、綾にはホンマにガツカリや！ 帰りたいなら勝手に帰れや、さっさと帰れ帰れ！！」

「……う、う、うわああああん！！」

……泣きよつた。最悪や、こつちが最悪や。ただでさえ岬の面倒も見なアカンのに、何で高校生にもなった泣き虫ダメ女のご機嫌まで面倒見なアカンねん？ こんなやつたら一人でお宝探しに来た方が良かったわ……。

「ヒドいよ、翼ヒドいよ！ 私が一番気にしている事をズバリ言うなんて！ 私だって一生懸命頑張ってるのにー！！」

「大丈夫だよ綾ピー？ 俺は綾ピーの努力を一番近くで見とあげてゐるからね？ 世界中が敵に回っても、俺は君の一番の味方さ！」

「馴れ馴れしく肩を抱き寄せてイチャイチャすなボケツ！ 薫オマエ、さっきウチにも同じ事言つてたやろがこのスケベ男！！」

「あつびやあああああ！！」

………つたく、一日何発このアホの顔面蹴り飛ばさなアカンねん？ コイツ、絶対真正のM男やわ。つて事はやっぱりウチはS女なんかなあ？ 確かに、薫の事を蹴り飛ばす時は結構ウチも楽しんだりする……？ いやいやいや、アカンアカン。考えただけでも気持ち悪いわ……。

「………ここは駅の名前の通り『下田市』やから、もうちょっと先まで行かんとアカンのやなあ、バス停とかあるから、多分ここからはバス移動やと思うんやけど……」

「お前さん達ー、こんな時間に地図なんか広げてー、一体何をしてるんだー？」

「うわっ！ いきなり何やねん爺さん！？」

ウチが手紙に書かれている孤児院の住所を、なけなしのお金で買う

てきた地図と照らし合わせながら調べてると突然帽子を被った小さい爺さんが横から顔を出してきた。どうやら、駅のベンチに座って泣きじゃくってる綾が目線に入って心配して様子を見に来たみたいや。せつかくや、地元の人みたいやからちよつと聞いてみよかな？

「……なあ爺さん、ウチら『南伊豆町』の『石廊崎』って所に行きたいねん、ここからどないしたらええんかなあ？」

「石廊崎ー！？ あんな所に子供だけで今から行くのかー！？ 近くの旅館で先に家族とか誰か待ってたりするんかー？」

「……いや、泊まる所とか全然決まってへんねんけど……」

「なら、やめとけやめとけー！ 石廊崎まではバスが走つとるけど、帰りの時間にはもう無くなっちまうぞー？ 駅まで歩いて帰ってきたら二時間近くはかかっちゃうし、あそこら辺の高級旅館は先に予約しないとなかなか泊めてくれたりせんから、今日はもう出直してまた別の日に来いやー！」

ええ、そない殺生な！？ せつかく二時間近く列車乗り継いでここまで来たのに！ やつぱり綾の言う通り、ちよつとウチの見通しが甘かったかも知れへんなあ？ 最寄り駅まで行けば何とかなるって思ってたんやけどなあ……。

「やつぱり、何の準備も無く遠出をするのはちよつと無理があつたみたいだね？ さあ翼、もう十分気が済んだろう？ 帰りの電車が無くなる前に俺達の街へ帰ろうぜレッツゴー！？」

「……うゝん……」

「……あれゝ？ またまた何やらとんでもない事を企んでいそうなその横顔、さすがの薫ちゃんもつばピーの一挙手一投足にもう心臓がバクバクでヤンス！」

……確かに無謀やったかもしれん。でも、ウチはもう決めたんや！  
ここで考え込んだってしゃあない、目的地はもう目と鼻の先なんや、こんな所で後込みしてたまるかっちゅうねん！

「いいや、ここはあえて強行するで！ 勝ちたかったら前を向け、これがウチとオトンの合い言葉や！ その気持ちに気づかせたんは薫、オマエやからな！？ オマエにはトコトン最後まで付き合って貰うからな！？」

「オーマイガツ！ 行きはバスで良いとして、帰りはデンジャラスな暗闇トワイライトゾーン！ クマとか出たらどうしましょ、オイラはハチミツみたいにスイートでデリシャスだから食べられちゃうぜベイビー！？」

「熊なんて出るかいなアホッ！ こうなったら野宿も上等や、人間の野生の力を大自然に見せつけたんねん！」

「イヤ、野宿だけはイヤー！ 私、まだ高校生になったばかりなのに、こんな所で野垂れ死にたくない！！ 家に帰りたいよ、お母さん助けてー！？」

「何で『死ぬ』前提の話になつとんねん綾！　もし、ウチらがいつか女子サッカー日本代表に選ばれて、どっかの遠い国のアウェー戦に行く事になったらこんな展開あり得るかもしれへんねんで！？」  
オマエもええ加減覚悟決めろや！！」

「みータンはお洒落なバスルームと美味しいブレックファーストが食べられる一流ホテルにしか泊まりませーん！　あと、ステキなプールバーとハンサムなバーテンダーがいないとノーサンキューです！」

「小学生の分際で何がプールバーじゃこのクソガキ！　どこのビッチセレブ気分じゃゴラァ！　岬オマエなあ、最近千夏の影響受け過ぎなんじゃアホッ！　他人のマネするくらいなら少しは偉大な姉を見習わんかいボケカス！！」

「だつておねータンみたいな貧粗で下品なギャルにはなりたくないもーん！　みータンは千夏おねー様みたいな華麗でステキなレディになるのー！」

「誰が貧粗で下品でペチャパイやねん！　オマエなんぞカレーでもハヤシでも天津飯でも冷やし中華でも好きなもんなつとけやこのどアホ！！」

「野宿イヤー！　家に帰りたいよー！　お母さーん！！」

「じゃかあしいんじゃオマエらあ！！　ええ加減にせんとまとめて伊東の海に沈めてマグロの餌にしたるぞゴラァ！！」

もう何やねんコイツら！　連れてきても全然役に立たへんがな！？



それどころかワガママばかり言うてウチの足引つ張りよつて、何でウチの周りにはこんなヤツらばかりしかおらんねんやあ！

「そんなに泣き叫ぶ娘さんがおつたら放っておけんのー、お前さん達、石廊崎の港までで良かったらワシの車に乗ってくかー？ 但し、車内に五人の乗れんから、軽トラックの荷台になつてしまふけどない？」

「……ホンマ？ 爺さん、ホンマに乗せてくれるんか！？ おおきに、ホンマおおきに！」

「ただアレだー、その後はお前さん達でしっかりと安全に眠れる所を見つけるんだぞー？ 小さい子供を二人も連れておるんだからない？」

「……小さい子二人で、ウチ、こう見えても高校生なんやけど……」

どや！ 正に一発逆転、これぞ松本翼様がもたらしたメークミラルルや！ やっぱり港町の人達は心が温かいわあ、爺さんの帽子、何かナンバーみたいのが付いとったから市場の仕事でもやつてる人なんかなあ？ でも、これでバス代が浮いたから、みんなのお金を寄せ集めれば何とか小さな旅館ぐらいなら宿泊する事が出来るようになったで！ 諦めずに前進する事を決めたウチの粘り勝ちやな！

「……お爺さんが声をかけてくれたのは私を心配してなんだからね？ 少しは感謝してよ……？」

さっきまで鼻水まで垂らしてギヤーギヤー泣いotta女が何を言う  
とんねん？ ホンマにコイツは絶対日本国内のアウエー戦の遠征で  
もホームシックになる事間違えないわ。その日の為の鍛錬として、  
あえて綾だけは一人で野宿させたるかなあ？

「おねータン、灯台だよ灯台！ クルクル灯りが回ってるー！」

「ホンマや、灯台や！ あれが『石廊崎灯台』やな！ って事は、  
目指す『森川の里』はもうすぐ近くやで！」

軽トラックの荷台の上は確かに固くて座り心地が悪いけど、暑くも  
寒くもないちょうど良い涼しい風を体を感じるこの感覚は結構ええ  
もんやなあ？

こんな事して警察に見つかったらホンマは注意されるけど、日も落  
ちて暗くなった国道も対向車が少なくなつて通報される心配は無さ  
そうや。

「おねータン、おねータン！ マントヒヒやろーよマントヒヒ！」

「ハア？ そんな面倒臭いわ、オマエ一人で勝手にやれや？」

岬が言うてる『マントヒヒ』っちゅうんは、あの車のCMで安田成  
美が歌つottaヤツや。何でガキはいちいちあんなつまらんものに  
反応するのかなあ？ あんなCMのどこがおもしろいねん？

「ねえねえ、マントヒヒ歌おーよマントヒヒ！ 薫タンも一緒にマントヒヒ歌おー！」

「岬お嬢様のご希望となれば断る訳にはいきませんな！ 是非とも一緒に歌わせて戴きますぞお！」

「……いちいち相手せんでええっちゅうのにオマエは……」

「じゃーね、みータンが最初でおねータン、最後は薫タンだよー！  
せーの、マントーヒーヒ・ヒビヒビヒビヒ」

「……面倒臭っ」

「おねータンー!!」

「……わかつたっちゅうねん！ ヒトコブラクダ・ダダダダダダ  
ダダ！」

「だん吉くーるーま（浅井企画）」

「何でお笑いマンガ道場やねん！ 真面目にやれやゴラァー!!」

「ヒイヒイヒイ!! 真面目にやりますから荷台から落とすのはやめてえー!!」

薫がアホかますからウチが荷台に立って蹴り飛ばすのを見て、運転してた爺さんがビビって急ブレーキかけてもうたやないか！ お陰で思いつ切り運転席の後ろの覗き窓に顔から突っ込んでメチャメチ

ヤ痛いやないかボケツ！！

「じゃあ今度は薫タンが二番目だよー！ マントーヒーヒ・ヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

「人妻淫乱　　ワーオ！　団地妻若奥様シリーズ旦那さんが出張で寂しいエロエロボディが熱く疼いて抑えられないのぉー！！」

「オマエ、ホンマにマクロの餌になれやこのどアホー！！」

「ああ！　落ちる落ちる落ちる！！　お願いですから荷台から逆さ吊りにするのはやめてえー！！」

「薫タン、全然つまんないー！！」

「いやいやいや、薫ちゃんとってもオモローー！！」

「3の倍数やなくともオマエは間違えなくアホやボケツー！！」

しばらく国道を走つとると、散々騒ぎまくった岬や泣きじゃくつとった綾もすっかり疲れ果てて荷台の前のポールに寄りかかって寝だしよった。腕時計を見ると時間はもう夜八時を回つとる。お子ちゃまはお休みの時間って訳やな。

「みータンも綾ピーも寝顔はまるで天使の様だね！　うーん、これぞ正に両手に花ってヤツだね！」

……いまいち気に食わんのは、その二人が安心しきつて薫の両肩にもたれかかつとる事や。さっきまで人妻だの淫乱だの言うつつた変態スケベ男やぞ？ 何でコイツら無防備で体を預けられんねん……？

「……翼、翼？」

「……何やねん？」

「……妬いてる？」

「何でやねん、ボケッ！」

「大丈夫だよ、翼の特等席はちゃんと取つといてあるからね！ ほら、俺の膝の上！」

「絶対断るわ」

「えっ、連れないなあ、シヨボーン」

「……アホ……」

……つーかなあ、何で薫はウチがキュンとなる事をいちいち知つとんねん？ この仕草かて、オトンがオカンと岬に挟まれてウチが恨めしそうに見ていた時に良くてくれた仕草や。その度ウチは喜んでオトンの膝の上に飛び乗って、安心感のある大きな腕の中でウトウト夢心地になつとつたなあ……。

ずっとウチの心の中で否定し続けてきたけど、やっぱり薫は何か才

トンと雰囲気似てる。何でやる？ 偶然？ それとも薫が意識してオトンを真似てんのかなあ？ つーか、オトンと薫の不思議な関係、一体何があるんやろか？ やっぱり、ウチの知らないところで二人は何か特別な繋がりでもあるんやろか……？

「……なあ薫、一個聞いてええか？」

「ん？ 何でございましょう？」

「……あのな、その、薫とオトンは……？」

キキッー！！

「ふげっ！！」

また急ブレーキや！ 爺さん、車に乗せてくれたんはありがたいけどちょっと運転雑やで！ お陰でまた荷台の後ろに座った軽いウチが薫めがけて一直線に吹っ飛んだやないか！！

「な〜んだ、本当は翼も俺の腕の中に飛び込んできたかったんだね？ 素直じゃないな〜？ でも、そんなところがまたベリベリキュート！」

「……ち、違いボケッ！ いきなり急ブレーキがかかったから吹っ飛んだだけや！ 触んな、近寄んな！ スケベ菌に感染するやろ

「がどアホ!!」

「ついには悪玉菌扱いっスか？ 俺は生きたまま腸に届くお腹に優しい善玉菌なのに、シヨボーン」

「おーい、お前さん達、港に着いたぞー？ 後は市場の人間達に道を聞いてみてくれー？」

お、ホンマや。何か磯の香りがすると思たらいつの間にか港に到着しとったわ。市場らしき建物の中は煌々と電気が点いとる。へー、夜でも誰かしら港には人がおるんやなあ？ ウチには朝一番のイメージしかなかったけどなあ。まあええわ、ここで情報収集や。とりあえず、爺さんここまでおおきに！

「おーい、雅やん！ この子ら石廊崎の灯台辺りに用事があるらしいんだとよー、道案内してやってくれー！」

「何だ何だー？ こんな遅い時間に子供なんか連れてきてー？ 森川の里？ さあ、知らねーなー？ ジャングルパークならこの前まであったけどなー？ 吉蔵じいさんよー、森川の里なんてもんこの近くにあつたかなー？」

「森川の里かー、確かこの前亡くなった鈴子婆さんが昔やつとった孤児院の名前だったっけかー？ 今は娘さんと孫が住んどるだけのはずだぞー？」

「そつや！ そこやでそこ！ その森川さんの所にウチらどうしでも行きたいねん！ お願いや、そこまでの詳しい道を教えてーな

！？」

よっしゃ！ やっぱり駅からあのまま帰らんで正解やったな！ さすがは地元の漁師さん達や、下手な携帯電話のナビゲーシヨンステムなんかよりよっぽど頼りになるわ！

「お前らー、もし見つからなかったらまたこの港に戻ってこーい！ もう周りは真っ暗だー、寝る所と毛布と上手い朝飯くらいは用意してやつぞー！」

「みんな、ホンマおおきに！ ウチら、この恩は一生忘れへんでー！！」

「みータンが大人になったら、おじータンにラブラブキスをプレゼントしてあげるねー！」

「オマエは黙っとけ！」

いやー、やっぱり人の優しさってのは心に染みるわー！ オトンはこんな温かいな町で育ったからあんな素敵なナイスガイになれたんやな！ ウチもこんな所で暮らしてみたかったわー！

「……あの子ら家出かのー？ 兄弟かのー、あんな小さい子供を二人連れてお兄さんとお姉さんは大変だわなー……？」

「……もし、またここに帰ってきたら警察に連絡した方がいいかも



なー？ あんな小さい子放つといて、一体親は何をしとるんだかなー……？」

……小さい子小さい子でな、せやからな、ウチはこう見えても立派な高校生やねんで……。

「……なあ翼、もしかしてここじゃね？」

港の爺さん達の教えてくれた道順通りに歩いていくと、灯台の近くに一軒だけポツンと丘の上に建つとる大きな古い家があった。暗くてちよつと見にくいけど、確かに手紙の裏にプリントされとる写真の家と同じ家や。看板や表札も無いけど、間違いないわ！ どうやら、ここがウチのオトンや那奈のオトン、小夜のオトン達が小さい頃を過ごした孤児院、『森川の里』や！

「……でもさ翼、家の電気一つも点いてないよ？ 本当に誰か住んでるのかな……？」

「何や綾、オマエ港の爺さん達の話聞いとらんかったんか？ 院長やった人の娘さんと孫がいるって言ってたやろ？ それに、誰も住んどらんかったら何でこの住所からの手紙がウチの家に届くねん？」

「……だつてさ、見た目が古い家で何かお化け屋敷みたいで怖いよ？ 灯台の灯りも間近で気持ち悪いし、海の波の音も不気味だし……」

「……もうええ、オマエはウチの後をついてくるだけでええわ……」

「……ごめん、でも、やっぱり怖いんだもん……」

まるで金魚のフンや。

吉田綾、コイツはホンマにダメダメの腰抜けやなあ？　こんなに根性無いヤツやったなんて今まで一緒にいて全然知らなかったわ。どんだけビビりやねん？　こういう切羽詰まった時こそホンマの人間性が出るってもんや。中学からずっとコンビ組んどったウチはもうガッカリや。こうなったらコンビ解消も考えなアカンかなあ……？

「みータンはお化けなんて怖くないもーん！　全然平気なんだからー！」

「さすがみータンだね！　俺はそんな逞しいみータンにもうメロメロさ！　今宵、薫ちゃんのみータンの忠実な騎士になりましたようぞー！？」

「じゃあ、薫タンが先頭でお化け屋敷に突入ー！」

「オーマイガッー！」

よっぽど岬の方が頼りになるわな。さすがはウチの妹や！　いざ何かあっても犠牲にして置いていける薫を先頭にして、ウチらは丘に備え付けられた木造の階段を恐る恐る上って行った。そして、家の入り口まで一列になって近づくと、玄関の扉は昔ながらの引き戸で中は真っ暗。綾はウチの後ろに隠れてビクビク、威勢の良かった岬

まですっかりウチを盾にしようてる。ホンマにコイツらは……。

「……インターホンは無さそうだから、扉をノックしてみるけど覚悟はOK……？」

「……こうなったらオマエだけが頼りや、頼むで、薫……」

……トントン……

灯台の灯りが真上をグルグル回る静かな闇夜に、木を叩く乾いた音が響き渡った。中からは何の返事も返ってけえへん。

「……あのー、夜分遅くすいません、こちらは……」

薫が小さな声で呼びかけた、その時やった！

バコオオオオオオオン！！

「ぐっはあああああつ！！」

「うわあああああ！！」

突然、木戸が開いたと思たら暗闇から人影が飛び出して、何か棒の様な物で薫の頭を叩きよった！ 薫はそのまま頭を抱えて転倒、それを目の前で目撃したウチらは恐怖のあまりに大パニック！ 綾と岬は泣き叫び、ウチも腰が抜けてしもて身動き取れへんようになってしまったんや！！

「ぎゃあああああ！ 薫が、薫がやられたあー！！」

「わああああん！ おねータン怖いよー！ みータンは美味しくないよおー！ 食べるならおねータンを先に食べてえー！？」

「いやあああああ！ 私まだこんな所で死にたくない！ 助けてお母さあーん！！」

「……ハア？ こ、子供……？」

抱き合つて怯えるウチらの正面から聞こえてきた声は恐ろしき女の声！ そして、灯台の光に後ろから照らされたその姿はスコップを手に持った殺人鬼のシルエツト！ ウチらか弱き娘達の絶叫が、波が打ち寄せる暗闇の海岸に響きわたったんやー！！

「キヤアアアアアアア！！！！」

「ちょ、ちよつと待ってー！？ アンタ達、一体誰だー！？ ここに一体何の用だー！？」

「……ふえ？」

……あれ？ 確かにスコップは持つとるけど、良く見たら殺人鬼なんかとは程遠いピチピチＴシャツとピッチリジーンズの薫の好きそうなナイスバティの若いお姉さんやないか？ まさか、この人がオトンを育ててくれた院長さんの孫娘さん……？

「……お母さん、ちょっと来てー！ 泥棒なんかじゃねーよー、女の子だよー!?」

港の漁師さん達みたいになんと訛りのあるお姉さんの声に反応する様に、一斉に玄関や家の中に灯りが点いた。すると、家の中からウチのオカンよりちよつと歳を取った感じのおばさんが寝間着姿でサンダルをパタパタ音を立てながらウチらの側に近づいてきた。

「……あらいやだ、すっかり泥棒かと思って……、あなた達、こんな遅くにここに何か用？」

「……あ、あ、あ、あの、こ、こ、ここつて森川さんの家、森川の里で宜しいんですかあ!？」

「……森川の里？ 確かに、二十年ほど前に母がその名前でここで孤児院を経営していたけど、それとあなた達は一体どんな関係？」

「ウ、ウチ、ここで育った松本新作の娘の翼って言いますう！ 病院に入院してここに来れないオトンの代わりに、大切な宝物を取りにきましたあ!!」

「……松本？ まさかあなた、本当にあの新ちゃんの娘さんなの！？」

ビンゴや！ この人、ちゃんとオトンの事を覚えていてくれたみたいや！ おしつこちびりそうなメチャクチャ怖い思いをしたけど、何とかオトンの思い出の場所を探し当てる事が出来たで！

ここまで来たら、後はオトンが埋めた大切な宝物を探してそれを無事に持ち帰るだけや！ オトン、あともう少しやで、あともうちょっとだけ待っててな！ ウチ、絶対にオトンの宝物を持ち帰ったるからな！！

「……ところで薫、無事か？ まだ生きとるか？」

「……お姉さんのグランドスラム、全然シャレになりませうん、その引き締まったくびれから放たれたフルスイングは正に大リーグ級で薫ちゃんたまらず鼻血ブー……」

## 第51話 潜水

「……そう、新ちゃんの病状、かなり悪くなってきたのね、毎年春先には手紙やら電話やら何かしら連絡をくれていたのに、今年は何の音沙汰も無かったから私も亡くなった母もずっと心配してただけど……」

ウチらが色んな人達に何とか助けられながらやっと辿り着いたオトンの故郷『森川の里』。まあ正式には『跡地』みたいなもんやな。田舎の古い幼稚園みたいな造りの広い家には現在、オトン宛てに手紙を出した元院長さんの娘・歩美さんとその孫娘・波子さんが住んどった。

いかにも見た感じから物腰の低そうな歩美さんと女性にしては少し大柄のナイスバティな波子さん。何の事前連絡も無くすっかり夜遅くの訪問になつてしもたウチらやけど、オトンの娘って事とここに来た目的を話すと二人は嫌な顔一つせず喜んでウチらを家の中へ迎え入れてくれた。

この孤児院から巣立っていった子供達はオトン達以外にもたくさんいるはずやけど、それでも歩美さんは名前を聞いただけでオトンの事をすぐに思い出したんやから、よっぽど記憶に残る子供やったんやろな？ 一体どんな男の子やったんやろか？

「……でも、こんな半島の端まで子供達だけで来るのはとても大変だったでしょう？ 道に迷ったりしなくて良かったわ、もし何か事件や事故にでも巻き込まれたりしたら新ちゃんに何て説明したら良

いものか……」

「いや、ウチら見た目は子供でも中身はしっかりしてますから心配せんといて下さい！ おおきにおおきに！」

「あらあら、翼ちゃんは喋り方まで新ちゃんと同じ関西弁になっちゃったのね？ 関東じゃその喋り方はやめなさいってあれほど母に怒られてたのに、娘さんにまで移しちゃうなんて……」

ウチらが案内された広い居間の片隅には、この前亡くなったばかりのオトン達の母親の様な存在である『鈴婆』こと森川鈴子さんの満面の笑顔が写った遺影が飾ってあった。いかにも元気で明るそうなお婆ちゃんや。その周りには他にもたくさんの子供達と一緒に写った色褪せた写真も何枚も飾られた。

「……翼ちゃんと岬ちゃんがもう少し早くここに来てくれたら、母にもこの二人の元気な姿を見せてあげる事が出来ただけだね、きっと母はあなた達の姿を見たら、自分の孫に会った様に大喜びしたでしょうね……」

そう言うとき歩美さんは飾っていた一枚の写真立てを手に取ると、ちやぶ台の対面に座るウチにそれを手渡してくれた。現在の綺麗なカラー写真とは違う、少し年期的入ったセピア色の写真や。

「ほら、この一番前に写ってる男の子が新ちゃんよ、隣にいる真ん中の女の人が母で後ろに立っているセーラー服の女の子が私」



「うわっ、ホンマや！ オトンやオトン！ ちっさい子供やけどどつか面影ある！」

「そういえば、虎ちゃんと啓ちゃんの二人は元気にしているのかしら？ 新ちゃんと違って、あの二人は出たつきりちつともこちらに連絡してくれないから……」

「……トラちゃんにケイちゃん？」

「そう、喧嘩っ早くて問題児の虎太郎ちゃんに無口で物静かな啓介ちゃん、それに新ちゃんを加えた悪ガキ三人組、みんなタイプが違って性格も体格もバラバラなのに、なぜかあの三人はいつも兄弟みたいに仲が良かったわ、遊ぶ時も寝る時も、イタズラをして母に怒られる時もいつも一緒だった……」

やっぱりや。ウチのオトンに那奈のオトン、それと小夜のオトンの三人組はこの孤児院でも歴史に残るほどの悪ガキトリオやったんやな。歩美さんの話によると、いつも三人で孤児院の他の子供達や学校の同級生達にイタズラをしては、毎回院長さんにとっつかまれてお説教を食らってたんやて。

それでも懲りずにみんなの夕飯を隠れて三人だけで先に全部平らげてしまったり、夜中遅くまで外で遊び回って大騒ぎしてきたり、三人のお姉さん役を任せられた歩美さんは相当手がかかったらしいで？ 悪いヤツらやなあ、ホンマに。

「……そうそう、私ね、新ちゃんには子供の頃にお風呂に入っているとところを覗かれちゃった事があるのよ、それ以来新ちゃんったら

急に女の子に興味津々になっちゃって、エッチな事ばかりして学校でもみんなに迷惑かけて、あれには私も母もとても困っちゃったわ……」

「……それがあのオトンのエロエロパワーの誕生秘話やったんか……」

でも、こんなにたくさんオトン達の小さい頃の貴重な話を聞けるなんて、やっぱりここに来て正解やったな！ 諦めずに何とかここまですり着く方法を模索した甲斐があったってもんや！ こりゃ学校で那奈や小夜に会ったら色々自慢話が出来るで、ウツヘッへ……。

「……ちよつと、ちよつと翼！」

「……ん？ 誰やオマエ？」

「誰じゃないでしょ？ 綾だよ綾！ 話に夢中になるのはいいけど、何か大事な事を忘れてない？」

「……大事な事？ 何やったっけ？ えーと……。あつ、せや、お宝や！ ここに来た理由はオトンが昔ここに隠した宝物を見つけない来たんやった！ アカンアカン、すっかり忘れとったわ！」

「せやせやお宝な？ すっかり忘れてたわ、ついでにオマエの事もすっかり忘れてたわ」

「何で私の事まで忘れるの？　って言うか、それもそうだけど！　それよりもっと大事な事！　私達にとって死活問題の事だよ！？」

……何やねん、血相変えて小さい声でコソコソコソコソ？　もう目的地には無事到着したんやから何にも問題無いやろ？　何が死活問題やねん、政治家みないな言葉使いよってからに。高齢者医療費が払えへん年金老人かオマエは？

「……ねえ翼、私達まだ今日泊まる場所決まってるやないんだよ？　もう何時だと思ってるの？」

「……あつ……」

アツカ〜ン！　歩美さんのオトンの昔話に熱中し過ぎて、気がついてたらもう夜の十時回つとるやないカ〜イ、チーン　って髭男爵やつてる場合かいな！？　いやいや、これはホンマにヤバいで？　こんな時間で泊めてくれる旅館なんかあらへんやろ！？

「……どないしよ……」

「どないしよじゃないよ！？　だからあれほど先に宿を見つけないとダメだよって言ったのに……！」

「あら、気づけばもうこんな時間、そういえば、あなた達はもうどこか宿泊先が決まっているんでしょ？　学生さんだけの旅行ですもの、そうでないと保護者の方々が許可しないわよね？」

「……………あぐっ……………！」

ああ、先に歩美さんに釘刺されてもうた！ どないすんねん？  
これでもし、宿泊先も決まっていなくてここにやって来たなんて事を喋ったら、絶対ウチらだけで勝手に来た事を勘ぐられてしまうわ！  
したら、間違いなく歩美さんはオトンに連絡をしてウチは家に連れ戻されてまう！

「……………あの、実は私達、今日泊まる場所が……………」

アカン！ 綾のヤツ、自分の身の心配を最優先して全部真相を話すつもりや！  
そうはさせんで、歩美さんに見えんようにちゃぶ台の下で太ももを指でギョツ！

「……………いったーい！」

「あらやだ、もしかして足にトゲでも刺さったかしら！？ ごめんなさいね、この家、私と娘の二人暮らしなものだからちゃんと綺麗に掃除が出来てなくて……………」

「いやいや、ちゃいますちやいます！ この女、異様に体が硬くて正座してると必要以上に痛がるクセがありますねん！ どうぞ放つと言って下さい！」

「あらそうなの？ だったら、どうぞかしこまらずに悠々と足を伸

ばして貰って構わないからね？」

「……ちよっと、何よそれ！？ 私はそんなに体硬くない……！」

黙つとれボケナス！ さらに爪まで立ててギュギュギュツ！！

「痛い痛い痛い！！！」

「ほら綾！ 足伸ばせ言うてくれてんやから足伸ばせや！？ 泊まる場所ですか？ もうバツチリです！ ちゃんと事前に調べてこちら辺の旅館を全部貸切状態にさせて貰いました！ これから隣に芸者はべらかせて朝まで大宴会ですわ！ アツハツハ！」

「……まあ、翼ちゃんは関西弁だけじゃなくて、こんな面白い冗談まで新ちゃん譲りなのね？ それだけ余裕があるなら私も安心だわ、さすがにこの時間じゃバスもなくなつて家に帰るのは無理でしょうし……」

アツハツハ！ 顔はニコニコ笑顔でも、ホンマは心臓バクバクで余裕なんて全然無いんですけどね？ アツハツハ、ハア……。アカン、アカンなあ。とにかくウチらがオトンに内緒でここに来た事だけはバレたらアカン。歩美さんに事情を説明するなんてそんなの本末転倒や、この作戦はウチらだけの極秘事項にして円滑に実行せなアカンねん！

「でも翼、もう私達を泊めてくれる可能性があるのは多分もうこの

家しかないよ？ ちゃんと事情を話してさ、歩美さんには翼のお父さんに連絡しないで貰うように頼んでみるとか……？」

「……うん……」

でもな、それはウチのプライドが許さんねん。ただでさえ遅い時間に無礼な訪問をして、さらに泊めてくれたなんて無茶な事を言って、拳げ句の果てには作戦に協力してくれやなんて、こんなただの子供のワガママ、オトンの面に泥をかける恥晒し娘や。何とか、何とか別の何か理由でここに泊めて貰える言い訳考えんと……！

「……せや！ 岬がどうしても慣れない旅館やと寝つきが悪くてどうもアカンとか……？」

「……私の膝を枕にして爆睡中……」

「……スースー、ムニヤムニヤ……」

「……コイツ……！」

もう、何やコイツらの役立たずっ振りは！？ 綾は自分の安全の事しか考えへんし、岬は姉がこんなに困つとるのに平然と爆睡しとるし、ウチは一体どないしたらええねん！？

「……何かちょっと、様子がおかしいわね？ 翼ちゃん、念の為ちよっと新ちゃんに連絡させて貰って良いかしら……？」

「ちょ、ちょっと待ってや〜！ それだけは、それだけは勘弁して〜！？」

ああ、もうアカン！ 何も打開策が浮かんでけえへん！ ウチの直感の思いつきはやっぱり単なる浅知恵やったんか？ ウチのオトンへの元気いっぱいサプライズプレゼント作戦はここで潰えるんかいな？ 誰か、何とかして〜、神様〜！？

「ジャ〜ン！ ここで余計な血の気が鼻血で抜けてスツキリフェイスのあなたのみんなの世界の薫ちゃん、ダーリンのピンチと聞きつけて鼻の穴に二本の赤いバラを携えて颯爽と華麗に登場〜！」

「オマエが一番役に立ってへんねんゴラァ〜！」

「ぶうべえらああああ〜！！」

そうや、このアホ！ 薫は今の今まで何をしとったんや！？ いつもウチが真面目に考え事しとると目の前をチラチラ目障りなマネばかりしよって、このアホンダラがあ〜！！

「駄目よ薫ちゃん！ お友達をそんな足蹴にしちゃ可哀想だわ！ 新ちゃんが見たらきつと悲しむわよ！？」

「翼！ こんな所で薫君を踏みつけたってどうにもならないでしょ！？ 薫君はさっきのスコップの一撃で出た鼻血の治療をして貰っ

てたんだからさ、ちょっと落ち着きなつて!？」

「このアホが、このアホが、このアホがあ!! 何が鼻血の治療や! どうせあのボイン姉ちゃん看護受けて鼻の下伸ばしてデレデレしてたんやるが!? オマエがおらん間、ウチがどれだけ頭フル回転して苦労してた思てんねや!? この、この、この……!」

「おい、チビ子ー? そろそろそこで勘弁してやれー?」

「……ブホッ!」

ウチが怒りに任せて薫に馬乗りになつて顔面をシバき倒しているといきなり目の前に弾力のある柔つこい物体が現れてウチの視界と呼吸を塞いだ。もごもごと顔を上に出すと、そこには雑な言葉からは想像つかんほど美人な波子さんの笑顔があつた。つまりウチは今、波子さんの豊満バストの谷間から顔を出しとるちゅう訳や。

「女はそんな簡単に足を広げて男の顔を蹴つたりしたらいかんぞー? 周りの人間にパンツ丸見えになつてしまふからなー?」

「……えつ? もしかして、見えてた……?」

「ちつさい体の割には可愛らしいパンツ履いてんだなー? 今の女の子はこんなところにもお洒落に気を使つてゐるんだなー?」

ウチが焦つて股間を押さえると、波子さんはニヤツと笑つて立ち上がりすれ違い様にウチの頭を良い子良い子して撫でていきよつた。



アカン、そーいや今日ウチ、スカートやった。たまに学校でも制服スカートで薫の顔面蹴ってたりしてたな。その度丸見えやったんや、うわぁ恥ずかしい。これから氣いつけよ……。

「なー、お母さーん、この子ら今日、泊まる所が無くて困ってらしいよー？　せつかくわざわざ遠くからうちに来てくれたんだからさー、みんなまとめて泊めてあげたらどうかなー？」

「うげっ！　何で！？　何で波子さんがウチらの事情を知つとるん！？」

「この茶髪坊主がなー、『予約取ってた旅館がお金無くて泊まれなくなつたから助けて下さい』って鼻血垂れ流しながら土下座して何度も何度も頼み込んでくるもんだからさー、あたしもさっきスコツプでぶん殴っちまった借りもあるし、何か哀れになつて根負けして泊めてやるって約束しちまつたんだー、お母さーん、ダメかなー？」

「駄目だなんてとんでもないわ！　こんな遅くに子供達を家から追い出す様な真似なんてしたら、母さんが枕元に出てきて怒られてしまうわ！　それが母さんの一番可愛がつていた新ちゃんの娘姉妹とそのお友達だったら尚更よ！　翼ちゃん、そんな事情があつたのね？　どうしてもっと早く教えてくれなかったの！？」

「…………いや、あのそのそれはその…………」

「ノオオオオウー！！　波子さん、土下座の件はトップシークレツト！　薫ちゃんのラーメン冷麺僕イケメンの面子丸潰れでございませよおー！！」

「おい茶髪ー、お前また鼻血出てるぞー？ 止まるまでそこではらくそのまま寝てろー？」

「ウイ、ムシユ」

「じゃあ、ええの？ ホンマにウチら、ここに泊まらせて貰うてええのー？」

「ええ、全く構わないわよ？ 古くて何も無い家だけど、元々は孤児院をやっていた所だもの、部屋の数だけなら私と波子だけじゃ使い切れないほどあるんだから、自分達の家だと思って遠慮なくくつろいで頂戴？ もちろん、お金なんて一銭もいらないから心配しないだね？」

「やったー！ 翼やったよ！ スゴい大逆転！！」

ホンマや、やったで！ 綾の言う通り、こんな思い通りの展開そうそう無いで！？ オトンの宝物が眠っている現地で寝床ゲットなんて超ラッキー！ これなら明日の朝からすぐにお宝搜索が開始出来るし、残金がヤバかったウチらの財布も一安心や！ これぞワンダーガール、松本翼様の決して諦めない姿勢が呼び寄せた奇跡の大逆転じゃーい！

「……あゝあ、波子さんにパンツの件喋られちゃったなゝ、半分はそれ目的で今まで喜んで顔面蹴りを受けてきたのに……」

「これからは容赦なく鉄拳制裁にしたるから覚悟せいや？」

「ショボーン」

しっかし薫のヤツ、男のクセに土下座したんかいな！？ 情けないヤツやなあ、コイツには男のプライドってもんが無いんかい！？でも、ウチが困り果てたところを何とか理由を考えて土下座までして頼み込んでくれたんやな？ お陰でホンマに助かったわ、おおきにな薫。さつきは役立たずなんて言ってゴメンな、訂正するわ。文句ばつかりの綾やグース力寝とる岬なんかよりよっぽど頼りになるで！

「……ところで、みんなはもう夕飯は済ませたの？ もしまだだったら、市場で取り寄せた新鮮なお魚があるから焼いてあげましょうか？」

「えっ！ そんな、ウチらそこまでがめつく訳には……、なあ、綾？」

……グー……

「……正直、お腹すいた……」

「オマエ、どこまで情けないねんゴラア！ さっきちゃんと昼飯食わんからそないな事になんねん！ 腹減ったんなら自分でコンビニ行つて弁当買つてこいや！」

「電車賃とかでもうお金無いもん！」

「……しゃーないな、じゃあウチが少し貸したるわ、今残金いくらかないねん？」

「一万五千円！」

「オマエそれフレンチのフルコース食えるやないカーイ！」

……グウググググウー……

「……ちよつと！ 翼のお腹の音の方がヒドいじゃん！ さっきは人の駅弁まで食べておいて、何それ！？ そんな小さい体のクセにどれだけ燃費悪いの！？」

「ち、違うわアホ！ これはあの、アレや！ ウチの腹の音やのうて岬の腹の音や！ コイツはウチより食い意地張つとるから間違いないで！？」

「あーやだやた！ そんな見え見えの嘘ついて小さな妹のせいにするなんて、そんな言い訳がましい空気なんて樋口カッター！ 岬ちゃんだつたらさつきから私の膝の上でグッスリ……」

「ハーイ！ みータンお魚大好きー！ お肉より太りにくいお魚料理はステキなレディーへの近道です！ ルネッサンス！」

「オマエいつ起きたんヤーイ！」

「オウ、イエス！ 薫ちゃんもすっかりお腹と背中がくつついて背

骨を抜いたら立つてられませうん！」

「オマエそれ芸人違うやないカーイ！」

「テテテテ、ててて、手え手え！」

「何でこの流れから強引に原西ネタ押しになんねん!?」

「ねえ、これえ、ム力つく？」

「ム力つくわあ!! ええ加減鼻血止めろやボケツ!!」

「痛ああああい!!」

人の目の前に汚いケツ突き出してきよってこのアホは、何べん蹴られたら気が済むねん!? つーか、さっきからウチらずつと喋ってばつかやないかい! 全員して言葉で比喻表現出来ん様なりアクシヨンばつかり取りよって、もう誰が何を喋ってるかも全然説明出来んわ! こんなもん小説と呼べへんぞ、読者に怒られるわ! 物語進行せなあかんウチの身にもなれや! あまりに自由過ぎんねんオマエら!!

「あらあら、みんな元気なのね? 昔、ここに子供達がいっぱいいてドタバタしてた頃を思い出すわね、きつと母も久し振りの賑やかな雰囲気喜んでると思うわ? じゃあ、今からお魚焼いてくるから、みんなちよつと待っててね?」

「じゃあお母さん、あたしは今からお風呂沸かしてくるよー、あ

たしも何か急に兄弟が出来たみたいで楽しくなってきたわー！」

……何やら、ウチらのせいで急に家の中が騒がしくなってきたてしもたなあ。歩美さんと波子さん親子がメチャクチャええ人やったから良かったけど、こんな失礼な訪問者他におらへんで？ 勝手に部屋で寝るわ飯はねだるわ鼻血は撒き散らすわ、さぞかし迷惑やろうなあ？ まあウチ自身も結構ノリノリやったけど……。

「そんな事ではアカン！ オマエら今から一人ずつ説教や！ 岬はまだガキやからしゃーないとは言ってもな、薫と綾はもう高校生なんやからもつとしっかりと……！」

「じゃあ、ご飯くるまでテレビ見ようぜえ〜！ 土曜の夜はやっぱりブロードキャスターでマツタリするに限るぜ！」

「薫タン、ズルいー！ みータンはエンタ見るのエンター！」

「ちょっと待つてよー、普通土曜の夜は映画に決まってるでしょ！  
？ 二人でチャンネル独占しないでよ！？」

「オマエら人の話を聞けやあゴラア！ 何を勝手に他人の家のテレビのスイッチ入れとんねん！？ つーかなあ、ウチの土曜の夜は二時間サスペンスドラマからマチャアキ経由してスーパーサッカーとCDTVのコラボで決まっとなねん！ わかったらさっさとウチにリモコン渡さんかい！！！」

……あー、しんどい。周りがすっかりしてへんアホばかりやから、

すっかりウチがツツコミ役に徹しなあかん状態に追い込まれとるわ。ウチの本職はボケ役やねんで？　ウチがボケて小夜がさらに天然でボケて、それを那奈がツツコむ、それがウチらのいつもの会話パターンやったんや。

最近はその千夏が煽ってさらに最高のバランスが取れる様になった。ちゅうのに、薫らが現れてからはもうムチャクチャや！　綾も仕切れるほど人間が出来てへんし、岬はガキの分際で口が達者過ぎ！　まとめ役なんて那奈一人で十分やねん、面倒な役回りはもう懲り懲りや！　ウチもいつもみたいに自由に暴れ回りたいわあ……。

「……おねータン、ドップリ疲れてるー、変な顔ー、プププッ」

「ねえ翼、湯船浸かりながら寝たら溺れるよ？　ちゃんと床底に足届いてるよね？」

「……当たり前やろ、余計なお世話やボケッ、あーええお湯、生きてるって感じ……」

「……ヤダー、オッサンみたい……」

今まで来た事の無い場所への遠出、自由気ままな仲間達の面倒で疲れきった体、それに美味しい魚料理で腹いっぱいになった今のウチには、この昔ながらの檜風呂の香りと少し熱めのお湯は眠気に誘われるほど心地がええなあ。何て名前やつけ、五右衛門風呂やったっけか？　外で薪をくべて火を起こしてお湯を沸かすヤツや。

女子三人一緒に入れるほどそないに広い風呂やないし、ちよつと背の低いウチには底が深めやけど、まあ岬が立ってしっかり足が付く位やから大した事やない。ちようど今、綾が湯船から出て体を洗っ

てるから姉妹二人だけで入るにはちょうどええ位やな。

「……おねータン、もしかしたらパパも小さい時にこのお風呂に入ったのかなー？」

「……多分そうやろなあ、オトンが子供の頃に入ってた風呂に、何十年経ってこうしてウチら姉妹もゆっくり浸かっていられるって、何か幸せな気分やなあ……」

……きつと、オトンがアウトドアを好んでみんなをキャンプ場とかに連れて行ってくれたんは、こんな昔のええ思い出があったからかもしれないな。外の空気をを感じる開放的な雰囲気風呂場で、那奈のオトンや小夜のオトンと裸同士で昔話とかしとったんやろなあ。あのキャンプ場、またみんなで行けるようになったらええなあ……。

「……でもさ、こうして翼と一緒に風呂入るなんていつ以来だろ？ ユースクラブの合宿以来かな？」

「……ああ、そやな？ 確か綾がホームシックにかかって大泣きしたあの合宿以来や、あの頃からオマエはヘタレやったなあ、結局、あれから今まで人間として全然成長出来てへんって事やな？」

「ひどいなあ！ そんな事言ったら翼だつて……！」

「……何やねん？」

「……全っ然成長してないよね？ うん、変わってないね、全っ然



成長してない」

「……オマエ、今どこ見て言った？ しかも何で二回言った？」

「……大事な事なので……」

「『二回言いました』ってか？ じゃかあしいねんゴラア！ オマエは何でいちいちウチの体つきにケチをつけんねん！ オマエはウチの旦那か！？ 愛人か！？ オマエの為のバディちゃうねん、放つとけやアホ！！」

「……だつてさ、背格好が岬ちゃんほとんど変わらないじゃん？ さすがに何か成長過程に問題でもあるのかなって心配になっちゃつてさ、翼はちゃんと第二次性徴来た？ 赤ちゃん産めるのかな？ 母乳出るのかな？ ちゃんと女としての価値があるのかなあ？」

「せやからオマエはウチの何やねん！！ 親か！？ 姑か！？ オマエにそないな心配される覚えないんじゃゴラア！！ こう見えてもしっかり大人の女として成長しとるじゃボケッ！！」

「……あ、本当だ、そんなロリータボディのクセして、へえー……」

「ドコ見た今！？ 何や、大切な所が保護の為に繁つとつたらアカンのか！？ オマエかてそうやるが！？ ロリロリうるさいんじゃ！ ええ加減訴えるぞ、たかが標高六百メートル足らずの高尾山程度の分際で！！」

「ちよつと何すんの！？ こっちにバシヤバシヤお湯をかけてこないでよ！？ 翼なんてまるで関東平野じゃない！ いいや、水平線より下の陥没干拓地！！」

干拓地やお！？ 誰が温暖化で南極の氷が溶けたら水没やねん！  
陥没までしてへんわ、ウチはオランダかいな！？ この言葉は立派な名誉毀損や、全世界の貧乳愛好家を敵に回す悪質な差別発言や！！ 綾かて横から見てやつとわかる程度のもんやのに、ちよつと凸がある位で何やこの勝ち組態度は！？ こんなクソ女には神に代わってウチが天罰下したる！！

「今からオマエのブラを切り刻んで石廊崎の灯台の上から相模湾に撒き散らしたるわ！！ あんな可愛い花柄もんつけて見栄張りよつて、サツカー選手に余分な脂肪や色気は排除や排除！！」

「ハア！？ バカ言わないでよ！？ 自分がスポーツブラしかつけられないからつて変な言いがかりつけないで下さーい！？ この梅干し女！ カリカリ梅！！」

「何やお！！ オマエはウチの一番触れてはあかんデリケートゾーンに侵入した！！ よつて今から吉田綾、キサマを排除する！！」

「キャー！ 誰か助けてー！？ 殺される……ブクブクッ……」

こんな失礼で人を見下す事しか出来へんタワケ娘はお湯責めの刑じや！ 頭から湯船に浸かつて、この翼様のキュートでセンチメンタルなピュアハートをメタメタに傷つけた事を悔やむがええわ！ オラオラッ！！

「……ねえねえ、おねータン……」

「何や岬！ ボケツとしてへんでオマエも綾の頭押さえてまえ！  
何やったらその桶で尻を叩いてまえ！」

「……お外の壁から何か竹の棒が突き出してるよー？」

「……竹の棒？」

……あつ、ホンマや！ 湯船の横の壁から小さい穴を通って空洞の  
竹の筒棒がこつちに突き出してるやないか！ これは明らかに風呂  
の中を覗く為に出来た穴以外考えられへん！

「岬！ あの竹の筒の穴の中にアツアツのお湯を注いだれや！」

「ハイ！ ジョロジョロジョロ！」

「……熱ついいいいいい！！」

叫び声が聞こえて風呂場の窓から外を覗くと、目玉を押さえてもん  
どりうつとる変態スケベ男の哀れな姿が確認出来た。やっぱり薫の  
仕業や！ コイツ、薪に空気を送る為に置かれた竹の筒棒を利用し  
てウチらが風呂入ってんのを覗き見しようとしてたんや！

「目ん玉が茹で上がる、目ん玉が茹で上がる！ これがホントの『  
ハードボイルド』、なんちゃって」

「何しとんねん変質者！ 警察呼ぶて！？」

「ヤダー！ もしかして私達、さつきからずっと薫君に覗かれてたの！？」

「イエス！ 愛しのつばピーと綾ピーのもうあんな所やこんな所までじっくり堪能させて……」

「最低！！」

「死にさらせやどアホが！！」

「熱つい熱い熱い熱い熱い！！」

これはもう立派な犯罪や！ 死刑や！ こんな出歯亀変態覗き男にウチらの神聖な一糸纏わぬ姿を見られたからには生かして帰す訳にはいかへん！ 何がハードボイルドじゃ、オマエなんぞ煮えきった熱湯による茹でダコの刑じゃ！！ 窓からジャンジャンお湯をぶっかけたれ！！

「心配すんなー、その穴からは覗き見出来んように昔祖母ちゃんが風呂場を改造してあんだー、安心しろー？」

熱湯に悶え狂う薫の後ろから、新しい薪を持ってきた波子さんがニコニコ笑いながらやってきた。何でも竹の棒を差し込んで湯気で何にも見えないような仕組みになっていて、逆にこちらから反撃出

来るように改造したらしい。ウチが岬に竹の中にお湯を注ぐように指示したのは偶然にも撃退法として大正解やったみたいや。

「つーかなあ薫！ ウソついてまでウチらにお湯かけられて悶えて喜ぶって、オマエ生粋のド変態か！？ 綾なんか本気にして涙目になつとんねんぞ！？」

「……もう、薫君大っ嫌い！ 私本当にもうお嫁に行けなくなつたと思つた……」

「ウッソーン！？ 綾ピー冗談だよ冗談！ 君のステキな眩い裸体は、今度二人きりの世界でゆつくりと……」

「あーもうヤダヤダヤダー！ 最低！ 変態！ お願いだから早く死んで……」

「オマエ、最低過ぎやぞ薫！ 懲りずにピョンピョン飛んでまだ窓から覗き見しようとしよって、さすがのウチも今回はドン引きや！  
！ ホンマに死ねっ……」

「こつなつたら薫ちゃん、みんなと一緒に五右衛門風呂に飛び込んで潜水しちゃうぞ？ ウイー、オール、リブ、イン、ア、イエロ  
ーサブマリン」

もう最悪や！ キモ過ぎる！ 本人にその気が無いとしても、いくら何でもこんな発言ばかり完全にセクハラやないか！？ やつぱり男ってどいつもこいつもスケベな事しか考えてへんのかいな！？  
こんな変態鬼畜野郎には人の裁きなんぞ生温い、コイツにこそホ

ンマの神の天罰を一撃……！

パッカーン！！

「うつぎやあああああ！！」

「おい茶髪ー、そろそろ見苦しいぞー、いい加減にしろー？」

……って、願ったたらホンマに制裁が下ったわ。さっきのスコップでの一撃に続き、またも波子さんの容赦ない竹棒での脳天かち割りグランドスラムが薫の後頭部に炸裂した。完全に手加減無しなや？ これはさすがに痛過ぎる、頭パツカリ割れたんちゃうか……？

「茶髪ー、お前は女の気持ちってもんを全然わかってないなー？ そんなスケベなイタズラしたって女と仲良くなれないどころか、普通に嫌われるだけだぞー？」

「……痛あー、だって、女の子は少しエッチで手に負えないくらいの男が良いっておっぱい神様、いや新作さんを見習って学習を……」

「どこが『少し』だー？ 変態丸出しだろうか？ 一体どの馬鹿の真似をしてるのかはわからんけどなー、本気で好いとる女をものにしたいんだったら、もっと心から誠意ってもんを表さんと駄目だー？」

「『性意』ですとお？ そりゃもちろんですとも！ 波子さんのお

つぱいにも負けないくらい、俺のハートにははちきれんばかりのムラムラした性の意識が……！」

「ふざけてんのかお前はー！？」

「痛ああああいー！」

おお？ 何や何や、何か予想外な展開になってきたで？ いつもは相手の女から呆れられるほどスケベでしつこい薫の戯れ言が、この波子さん相手ではちつとも通用せえへん。さつきからパツカパカ竹筒で頭をシバかれて完全に説教モードに突入。遅しいな波子さん、これはウチらからしたらええ気味やで！

「お前みたいなナヲナヲした女つたらしの腐った男を見てるとなー、立派な男の漁師だった父ちゃん和伊東の厳しい荒海で育てられたあたしははらわた煮えくり返って我慢がならねーんだー！ 茶髪ー、お前は明日からこの子らがここでお宝つてもんを探している間、あたしの船に乗って甲板と船体と自分の心を磨けー！ そのねじ曲がつたスケベ根性、あたしが根っこから叩き直してやるー！」

「えっー！ 船に乗るって何てアンリビーバボーな展開！？ 絶対酔っちゃうし、生魚なんてとても触れませーん！？ つーか、まさか波子さんって漁師やってんスカあー！？」

「男は黙って一つ返事、グダグダ無駄話ばかりするんじゃない！ 漁は休みだから安心しろー、その代わり午前中目一杯まで船の掃除と網の手入れだー！ しつかりやらねーと、お前のキンタマ取って魚の餌にしちまうぞー！？」

「は、はいっ！ この桐原薫、精魂尽きるまで波子姉さんのおっぱいにしがみつかせて戴きますっ！」

「つまらん冗談をいちいち喋るなー！！」

「痛ああああい！！（泣）」

おーおー、やっぱり竹筒で空っぽの頭を叩くとパツカパカええ音が鳴るなあ？ まるで鹿威しや、何か音と雰囲気だけは高級旅館の気分になってきたで！？

「こりやもう一つ楽しみが増えたで、ウヒヒッ、ブクブクッ……」

「……おねータン、何かすっごい嬉しそう……」

「……みんな性格ねじ曲がり過ぎだよ、もう家に帰りたい……」

こりや明日からも色々ワクワクやなあ？ オトンの宝物がどんな物なのかも楽しみやし、それに波子さんの手によって薫がどれだけボロクソ、いやいや、どれだけ立派な男前になれるか見所やで！  
ゴラ薫、ちゃんとウチに相応しいオトンみたいなカッコいいハードボイルドになれるかしっかり見届けさせて貰うから、しっかり覚悟せいや！？

「昔、この風呂場に覗き穴を空けて祖母ちゃんに怒られたスケベな



クソガキも、大人になってから立派な報道記者になったって話だー、茶髪、お前も明日から心を入れ替えて真面目に頑張れー！」

「イエッサー、キャプテン波子お姉様！　ん、あれ？　その人ってまさか……？」

……おや？　何かウチもそのクソガキに心当たりどころが良く知つとるような気がするんやけど……、いやいや、気のせい、気のせいやな。そんな最低なスケベ男、ウチは全然知らん。知らんったら知らんねん！

## 第52話 my sweet heart

暗くて不気味な霧の立ち込めた不思議な色調の深い森の中、ウチは大切な『何か』を探して必死で走り回った。ウチの背後から迫ってくる時計の針の音、その音に追われる様に走り続けるウチの前に、いつもの様に懐中時計を持ったタキシード姿のウサギの顔の案内人が『時』を知らせてくる。

「お嬢さん、お探しの物は見つかりましたかな？」

「待つて！ まだ見つからへんねん！ お願いや、もう少しだけ、もう少しだけウチに時間を……！」

「いえいえ、それはなりません、もう時間は刻々と迫って来ているのです、延長する事も、決して巻き戻す事も出来ないもの、それが『時』というものの定めなのです」

「……だったら、だったらウチは絶対にその時間に間に合わせてみせる！ だから、だから教えてや？ ウチはどないしたらええねん、一体ウチはどこへ向かって進んでいたらええねん！？」

「お嬢さん、探し物というものは遙か遠くの彼方にあると限ったものではないのです、それは普通に、ごく当たり前の様に貴方の側にあったりするものなのです、それをお忘れなく」

「……側に……？」

「さあ、自分の意志を信じて突き進むのです、残された時間はもうあと僅かですよ……?」

ウサギの案内人はゆつくりとその場から消えていくと、霧に包まれていた周りの視界はうつすらと明け始め、眩いくらいの光がウチの両目に差し込んできた。うわっ眩しい、眩し過ぎて目が開けられへん、目が……！

「おねーターン、朝ですよー!? 早く起きないと置いていきますよー!？」

「……ふえ?」

……またや、またこの夢や。最近、なぜかウチはこんな変な夢ばかり見る。いつもウチは何やら時計の秒針みたいな音に追われて不思議な森の中を走り抜けていくと、必ず最後は体が人間で顔だけウサギの案内人がウチに話しかけてくるんや。

サッカー場でプレーしとる夢なら自分の願望が現れたものだって理解出来るけど、この夢の意味だけはサッパリわからへん。でも、何度と同じような夢を見るんや。そしていつも、あのウサギはウチに何か意味ありげな言葉を残して消えていく……。

ピッ、ピッ、ピイイイイー!!

「じゃつかあしいねんこのクソガキがあ！！　ウチが微睡んどる時に耳元でホイッスル吹くなってあれほど言つたやるがあ！！」

「おねータン、遅延行為！　シュミレーションファール！　しかも審判侮辱発言！　一発退場、三試合試合出場停止に五十万円の罰金ー！！」

「せやから『シミュレーション』やって何回言わせんねんこの学習能力ゼロの体細胞があ！！」

「うわーん！　おねータンがみータンの頭をつむじをグリグリ押してイジめるよー！？　痛いよー！　幼児虐待、幼児虐待ー！！」

何が幼児虐待じゃこのクソ生意気なガキンチョが！　人がオトンが暮らした思い出の部屋で寝とるところを乱入してきよってからに！　つむじグリグリの刑だけじゃ済まさんぞ、こめかみも両の拳でグリグリグリの刑もお見舞いしたんねん！！

「ちよつと翼！　いつまでも岬ちゃんと布団の中で戯れてる場合じゃないよ！？　時計見なよ、もうお昼になつちやうよ！？」

うげっ！　もう午前中の十一時をすっかり回つとるやないか！？　アカン、早くオトンが隠したお宝を探し当てなきゃいかんのに、完全に朝寝坊やないか！！？

「結局昨日も探したけど見つからなくて、今日はもう連休の最終日

なんだよ！？ 私達、今日中に帰らなきゃいけないんだよ！？ 遊んでる場合じゃないんだよ！？」

「せやったら綾、少しは氣い利かせてもっと早い時間に起こすなり何なりせいや！ ホンマにオマエはとことん使えへんヤツやなあ！？ 目覚まし時計や二ワトリ以下や！！」

「ずっと起こしてたけど起きない翼が悪いんじゃない？ 第一、私には宝物とか全然関係ないんだから、翼が朝寝坊しようとして私はちっとも困りませんよーだ！！」

「何やとぉ！？ このポケッ！ カスッ！ ヘタレッ！ 役立たず！ 中途半端なキャラと大してある訳でもないシヨボい貧乳！ 他の女の下毛ばかり見てる変態女！ もうコンビ解消や！ オマエみたいな友達甲斐の無いヤツなんかもう絶交や！！」

「ヒッドーい！ ヒド過ぎる！！ じゃあいいよ、もう私達絶交だからね！？ 宝物探しなんてもう手伝ってあげないんだから！ バカッ！ 翼のバーカ！！」

もうこんなヤツ懲り懲りや！ ウチが必死になってお宝探しているのを間近で見ていたクセして、そんな気持ちに全然氣づかへんで自分の事ばかり考えてる女の力なんて借りるかや！ 綾にはもう金輪際一切の事を頼まん、帰りたいかったら勝手に帰ればええねん！！

「岬、今日はちょっと急ぐて！？ オマエはウチと同じオトンの娘なんやから諦めずに一生懸命頑張れるよな！？」

「エイホラサツサー！ みータン、パパの為に一生懸命お宝探しまーす！」

「よしつ、ええ返事や！ ほなら、今からさつさと昨日行つた森の中でオトンが言つてた『大きな木』を探し当てるで！」

歩美さんが用意してくれた寝間着をそのまま布団の上に雑に脱ぎ捨てたウチは、これまた歩美さんが貸してくれた波子さんのおさがりのワンピースに急いで着替えて岬と一緒に二階の階段をドタドタと駆け下りた。縁側の外の広い庭には歩美さんがウチらの服を洗濯して物干し竿に干してくれていた。

「おはよう翼ちゃん、あんなに大きな声で喧嘩なんかして、何かあったの？」

「何でもあらへん！ 気にせんといて下さい！」

「朝ご飯は食べないの？ 岬ちゃんと綾ちゃんはもう食べたわよ？」

「すんまへん、ウチもうそんな時間あらへん！ もう今日しかチャンスないねん、ごめんなさい！」

「……あらそう、私、翼ちゃんの力になれなくてごめんなさいね？ 時間がないのはわかるけど、絶対に無茶をしちゃダメだからね？ ちゃんと無事に戻って来てね？」

「歩美さん、ホンマおおきに！ ほなら、行つてきます！」

歩美さんとの会話も早々に、ウチは急いで靴を履いて玄関から外へ出ると全速力ダッシュで家の裏側の山に繁っている森の中へと向かった。

「おねータン早いよー！？　ついていけないよー、みータンを置いていかないでー！？」

「岬ちゃん、私がおんぶしてあげる！　早く背中に乗って！」

「何や綾！　オマエ絶交したはずやぞ！？　何でついてくんねん！？」

「岬ちゃんが心配だから来ただけ！　こんな自分勝手なお姉さんに振り回されたら可哀想じゃん！？」

「……………んなら勝手にせいや！」

………何でウチがこんなに焦っているかつちゅうとな、全っ然見つからへんねん、オトンが話しとった宝物を埋めたっていう『大きな木』ってヤツがな。ただ一言『木』言うても家の周りには小高い山が広がっていて、そこには名の通り山ほど木が生えていて森になったんたんや。

ここに来た時は周りが真っ暗で良く見えへんかったから気づかなかつたんやけど、一日目の朝を迎えて周囲を見渡した時は、ホンマに気が遠くなつて立ち眩みがしたくらいショックやったわ。こんなにたくさん木が生えとるなんて予想外やったんや。

ウチはてつきり、どっかのCMの広い草原の中に物凄いデッカいこ

の木何の木みたいな巨木が一本立っていて、オトン達はそのわかりやすいシンボルを目当てにして宝物も埋めたって勘違いしてたんや。もちろん、そんなデツカい木なんぞどこにも立ってへん。みんな同じような高さや形の木ばかりや。

それでも昨日は一日中で回れるだけの木々の根元を当たって、何か物を埋めた痕跡でもないかどうか必死になって探し回ったんや。でも、やっぱり外側から地面を見たってそんなもんサッパリわからへん。地中探知機がある訳でもない、ほとんどもう無理に近い状態や。そんで結局、昨日は何の収穫もなく一日が終わってしまったんや。残された時間はあと今日一日だけ、今日中に宝物を掘り出してオトンの元に帰らんと、明日から普通に学校が始まってまう！ それどころか、夕方には家におらんとオカンが仕事から帰ってきてウチらが勝手にここに来てる事がバレてまう！

「……で、結局今日もこうやって森の中をグルグル回って探すだけなの？ これじゃ絶対に見つからないよ、何か別の方法考えないと……？」

「うつさい！ 文句言ってるヒマあったら目を凝らせや！ 嫌やったらさっさと帰れ！ オマエとはもう絶交したんやからな！」

「あつそう！ そうだよな、私達絶交したんだもんね！？ 別にいいよ、私はこのまま見つからなくて全然困らないもん！」

「おう、絶交や絶交や！ オマエとはもうこれでオサラバや、お陰で清々したわ！ フン！」

「……何よ、クスン……」



……何や？ 綾のヤツ、突然歩くのを止めて唇尖らせてふてくされよった。さすがにもう呆れたんかなあ？ 落ち着いて考えてみると、ここ三日間一番自分勝手な事ばかり言つとるのはウチの方かなあ？ 何か急に罪悪感が湧いてきたわ……。

「……何やねん、言いたい事あるなら言えや？」

「……ねえ、やっぱり怒ってる？」

「……ハア？」

「……冗談、だよな？ 絶交って……？」

「……絶交、やろ？ お前言ったやん……？」

「ヤダ！ 冗談でしょ？ 冗談だよな？ 嘘だよな？ 私達、明日からも学校でもユースクラブでも友達だよな？ コンビだよな？」

「……何やねんもう……、だったらもうどっちでもええわ！」

「嘘だよな、嘘だよな？ 嘘だって言つて、お願い！？ 私、もつと頑張つて翼のお父さんの宝物見つけるから！ 絶交なんてやめよう、ねっ、ねっ、ねっ！？」

「もう、しつこいし何やねんオマエは！？ そないベタベタくっ付いてくんないや！？ お宝探しに集中出来へんやろお！？」

「ヤダヤダヤダ、嘘だって言ってくれないと絶対離れない！ ねえ

翼、私達親友だよね？ 千夏ちゃんと出会っ前からの親友だよね？  
千夏ちゃんより最高の大親友だね、ねっ！？」

「オマエはウチの嫁か！？ 愛人か！？ わかったわかった、嘘や  
嘘、絶交取り消し！ わかったからいちいち抱きつくなや、キモイ  
ねん！？ 頼むからもうやめろや！？」

「キモくない、キモくなんてないもん！ ねえ翼、ずっと一緒にい  
ようね？ 私達一心同体だね？ これからも助け合いながら一緒に  
頑張っていこうね！？ 私の事好きって言って！？ 翼だーい好  
き！ー！」

「わかったわかった、好きや好き好き！ わかったからはーなーせ  
ーや、もーう！」

「おねータンと綾タンはやっぱり仲良しなんだねー、プププッ！」

……コイツ、昔から若干百合っ子ちゃん傾向やねんな？ 何かウチ、  
あらぬ道に陥らんかちよつと心配。そんなこんなで綾とじゃれ合っ  
とったら、ちつとも搜索が進まずにあつという間にお昼になっ  
てしまった。朝ご飯を食べてへんウチはさすがに力が出えへん。それで  
も何とか辺りの草を薙って土の捲れていそうな場所を探し回つと  
と、ウチらの後を追って歩美さんがわざわざここまで昼ご飯の時間  
を知らせに来てくれた。

「みんな、お昼ご飯が出来たから少し休憩しましょう？ 翼ちゃん  
は朝ご飯も食べてないんだから、お昼はちゃんと食べないと体が持  
たないわよ？」

「……すんまへん、あと少し、あと少しだけ探させて……」

ウチが時間に追われて力任せに草筆りをしていると、歩美さんはウチの泥だらけの手を掴んでオトンみたいに優しくウチの頭を撫でてくれた。その歩美さんの温かい手に触れた時、ウチの尖りまくった気持ちは少し和らいで焦りがスーと消えていくのを感じた。

「……翼ちゃん？ 気持ちはわかるけど、イライラして探しても大切な物は見つからないものなのよ？ もっと冷静になって、良く周りを見渡してこそ初めて見えるものがこの世にはたくさんあるの、今は焦っちゃ駄目、ゆっくり、落ち着いて、自分のペースで進んでいけば良いのよ、ねっ？」

「……でも、でもウチはオトンに……」

「もし今日見つからなくても、また今度新ちゃんと一緒に探せば良いじゃない？ 新ちゃんはまた必ずここまで外出出来る様になるまで元気に回復するわ？ あの子はそんな柔な子じゃない、お医者さんから病名と命の宣告を告げられてから早やもう二十年以上、私は今までずっとあの子の生きる強さには驚かされ続けてきたんだから……」

「……でも、でもオトンは、次はもうダメやって……」

「そんな事ない、そんな事絶対にならないわ？ それにね、もし無理をして翼ちゃんに何かあったらとしたら、翼ちゃん達がここにいる事を知らないで今も病院で頑張っている新ちゃんはもっと悲しむ事に

なるわよ？ 新ちゃんの命のパワーの源は翼ちゃんや岬ちゃん、奥さんの美香さん家族みんなの笑顔なんだから、ねっ？」

「……えっ？ 何で？ 何で歩美さん、ウチがオトンに内緒でここに来たのを知ってるん……？」

「ごめんね、実は翼ちゃん達が最初にうちに訪ねてきた時から私、気づいていたのよ？ だって、本当に翼ちゃんがちゃんと新ちゃんから許可を得てやって来たのなら、必ず事前にこちらに何かしらの挨拶をするはずですもの？ 虎ちゃんや啓ちゃんと違って、新ちゃんはそういうところはしっかりとした人なのよ」

「……何や、ウチの考えてる事とかオトンの礼儀正しいところとか、歩美さんには最初から全とお見通しやったんか。でも、それでも、歩美さんはウチの努力を踏みにじらんように今までオトンやオカンには連絡しないで黙っていてくれてたんやな。勝手に無謀なウチの行動、影で見守っていてくれてたんやな……」。

「翼ちゃん、私にはわかるわ、あなたは決して意地を張って家族に内緒で行動を起こしたんじゃないやなくて、病気で苦しんでいる新ちゃんにこれ以上余計な心配をかけない様に気を使ってたのよね？」

「……だって、だってウチ……」

「いいのよ、言葉は少し乱暴だけど、あなたは本当はともにお父さん想いの優しい女の子なのね？ 何も心配しなくていいわ、もし、新ちゃんがこの一件を知ってあなたの事を怒ったりしたら、私も一緒に新ちゃんに謝ってあげるわ？ 私だって新ちゃんが元気になっ

てくれる為に翼ちゃんが一生懸命考えた、宝物探し大作戦に参加した人間の一人なんですもの、ねっ？」

「……………」

「……あら？　翼ちゃん、どうしたの……？」

「……う、うう、うわああああん！！」

……この時、何かウチ、歩美さんに励まされて、褒められて、張り詰めていた気持ちが緩んでホッとしてしまった。そしたら、急に涙が溢れ出してきて止まらへんねん。オトンがあの日、自分の死を意識した弱気な言葉を発した時から、ウチの心の中で積もりに積もった不安のカケラが歩美さんの優しさの前で一気に噴き出してしまった……。

「ウ、ウチ、ホンマは怖かったあ、苦しかったあ！　でも、オトンの前でそんな顔、絶対に出来へん！　だって、ウチがオトンに出来る事なんて、いつでも笑って明るく振る舞う事ぐらいしか無いもん！　少しでもオトンの不安を取り除いてあげる事しか出来へんもん！」

「……翼ちゃん……」

「ホンマはもつといっぱいオトンやオカンに甘えたかった！　いつもみんなと一緒にいたいってワガママ言いたかった！　でも、ウチがそないな事言い出したらオトン、ウチの事を気にして自分の体放って無理してしまうかもしれへんもん！　オカンかてウチらやオト

ンの面倒を見ながら仕事頑張つとるのに、ウチがそないな事言い出したらオカンをもっと困らせてしまいかもしれへんもん！」

「……翼、グズッ……」

「……おねーターン、ウツ……」

「でも、やっぱり怖い、怖いねん！ 世界一大好きなオトンがいつかウチの目の前からいなくなってもうたら、もうウチ、どないしたらええかわからへん！ どないしてオトンの代わりオカンを支えてあげたらええか全然わからへん！ 嫌や、オトンが死ぬのは嫌や、嫌やあー！！」

「みータンもやだー！ パパがいなくなるのヤダヤタヤダー！！」

「……あらあら、翼ちゃんも岬ちゃんもこんな小さな体でも一生懸命新ちゃんと一緒に病魔と戦っていたのね？ 偉いわよ二人とも、あなた達はお父さんそつくりの優しくて強くて立派な娘さんよ？ 大丈夫！ 新ちゃんは絶対にあなた達を置いて死んだりなんてしない！ 母さんがたくさんの子供達の中で一番可愛がっていた、優しくて、明るくて、弱い者イジメが大嫌いな強い新ちゃんが、みんなに愛されているあの新ちゃんが、そんな病魔ごときになんて負けるもんですか……！」

ウチを力強く抱き締めてくれている歩美さんの声も鼻声になった。岬もウチの泣いてる姿を見て、不安を感じ取ったみたいで釣られて泣きついてきた。何でか良くわからんけど綾まで立ち尽くして号泣しとった。オマエ、はつきり言っただけ関係ないやん？

でも、こんなに大声出して泣いたのいつ以来やろ？ 歩美さんの胸

の中に抱きかかえられて、ウチは今まで堪えとった涙を目が真っ赤になるまで全部流し切った。歩美さんが付けとるエプロンが涙でびしょびしょになるまで、ずっーと、ずつと……。

「……それじゃ、気を取り直してお家に帰ってみんなでお昼ご飯を食べましょう！ 大丈夫よ、お昼からみんなで力を合わせて探せば、きつと宝物もすぐに見つかるわ！」

温かい歩美さんの手に引かれながら、ウチらはまぶたをパンパンに腫らせたまま孤児院までの帰り道を歩いていった。ウチも綾もちよつと背伸びして薄手に塗った化粧が涙で崩れてヒドい顔や。岬に到つては鼻水垂らしてズーズー言つとる。

でも、何かええなあ、ウチに歩美さんっていうオカンがもう一人出来たみたいでちょっと嬉しい。ホンマのオカンに泣きついたりしたら多分困らせてしまうやろうから、こんな風に母性愛溢れる人が他にいてくれるとスッゴい頼もしいわ。

「ねえねえ翼、もしこんな私にでも出来る事があつたら何でも言つてね？ 私、何だつてするからね？ もう貧乳だとかチビだとか口りだとか絶対に言わないから、ねっ？」

「みータンももうおねータンの事をバカにしたりしないよー？ みータン、もっと良い子になるからね？ おねータン好みの可愛い妹になるからね、ねー？」

……それより何やねん、コイツらの途端の手のひら返しの態度は？

ウチがちよつと泣いたぐらいで急にこの温厚振り、突然すぎて何かちよつと気持ち悪いわ。せやったら最初からいつもこれくらい協力的やったらええのになあ？ メディア報道にお涙頂戴されて思考がコロコロ変わるステレオタイプってのはこういう女達の事を言うんやろうなあ、軽いヤツらや……。

「……あつ、そうだわ！ みんなお腹空いてるところ悪いんだけど、ご飯の前に石廊港に行つて船の掃除をしている波子と薫君を呼んできて貰えるかしら？ もう掃除も二日間かけて全て終わっているはずだし、きつと今頃二人もすっかりお腹ペコペコになっていると思うわ？」

「そうだ！ そうだよ翼、薫君忘れてた！ 今日は薫君にも午後から宝物探索を手伝つて貰おうよ！ 一昨日、私達がお風呂に入つたところを覗かれそうになった分の罰、きつちりと償つて貰わないとね！？」

おお、そうやな！ 薫のヤツ、昨日は生まれて初めての漁船の掃除と漁船網の手入れを波子さんにボロボロになるまでやらされて、ボロ雑巾みたいにヘロヘロになって帰つてきて爆睡こいて、ウチらのお宝探索作業を全部サボったんや！ 綾の言う通り、さすがに今日はそうはいかんで？ 丸二日間みっちり波子さんに鍛えられた真の男の誠意ってヤツを、ダーリンだのベイビーだの言うて迫ってくるウチにきつちりと見せて貰おうやないかい！？

「その前に、翼ちゃんと綾ちゃんはお化粧直さないかね？ そんな顔じゃ薫君ビクリしちゃうわよ？ ウフフ」



「……ホンマやなこれ、これじゃウチらまるでバケモンやで？ 綾、面倒臭いから全部洗い落としてすっぴんで行こうや？」

「えっー、すっぴん？ 学校ではいつもそうだけど、プライベートの時にすっぴんって何か恥ずかしいなあ、ましてや男の子がいる前で……」

「すっぴんに自信が無いなんて、二人ともオバサンになった証拠ですなー？ みータンはぴっぴちだからいつもすっぴん勝負ー！」

「岬はまずその鼻水をかんでこいボケッ！」

ピッカピカのテッカカフェイスになったウチらは残り時間が迫ってきてるのも忘れて、三人で仲良く手を繋ぎながら港までスキップなんてしながら向かった。何か無垢な小学校時代の自分に戻ったみたいや、こんな女の子丸出しなのたまにはええなあ！

しかし、やっぱりあれやな、こう自然に囲まれた環境の空気にはなゝんも小細工しないそのまんまの姿の方が合ってて気持ちのええもんなんやなあ？ こんな清々しい気分、都会生活でコスメまみれの千夏には絶対理解出来ん世界やろうなあ？

まあゝ、今は千夏の事なんかどうでもええわ！ アイツはどうせまた『ママのお仕事のモデルで忙しいのぉー！』とか言うて顔中ベタベタクドい化粧つけまくってねんやろ？ あの面、一度あの柔道ゴリラにでもフンを投げつけられればええねん！

「……クシュン！ グズツ、何よ、このむずがゆい不快感、何か翼の声が聞こえた気がしたけど、気のせいよね……？」

まあ、まさかあの犬猿コンビがこの連休に一緒に行動なんてしてる訳無いわなあ？ まあ、なつてたらなつてたでそれはええネタ話になるけどなあ？ んまあ、そんな事色々考えて歩いとつたら磯の匂いが強くなつて海に浮かぶたくさんさんの船と辺りを右往左往するガタイのええ海の男達の姿が見えてきた。さてさて、お目当ての場違いな茶髪坊主は一体どこや？

「おー、チビ子ー！ それとチビチビ子と泣き虫ー！ ここだこー！」

ウチらが二人を見つける前に、一隻の小さな漁船の前で長靴と勇ましい作業着姿の波子さんがウチらを見つけて地面にあぐらをかいてデッカい声で手招きしていた。ちなみにチビ子はウチ、チビチビ子は岬で泣き虫は綾の事みたいや。港で漁師見つけるより見慣れない娘見つける方が容易いつて事かいな。つーか波子さん、その膝に抱えとんのは真つ昼間から一升瓶！？

「何だー、昼から酒飲んだらいかんのかー？ 今日はもう仕事終わりだー、漁は明日の朝からだから何の問題もねえー！」

……うわっ、波子さん酒臭っ！ もう結構出来上がつとるやん、しかも周りには他にもたくさん酒臭い漁師のオッサンが同じ様に真っ赤になつて、みんなして七輪で魚や貝を焼いて食いまくつとる。漁師っていつもこんなええ加減で構わんのかい？

「バカ言え波子ー、お前ちゃんと天気予報見たのかー？ 今日夕方から天気崩れて嵐だぞー？ 明日の漁は無理だー！」

「何だとー！？ せつかくの漁解禁日に海に出れねーだとー！？ バカ言つてんじゃねー、あたしも船も明日の為にもうピカピカのツルツルになってんだぞー！？ 天気予報なんぞ信じるかー、この腰抜けオヤジどもめー、あたしは出るぞー！ あたしは父ちゃんみたいな立派な漁師になるんだー！」

「お前無茶言うなー？ 忘れ形見の可愛い一人娘がそんな無鉄砲な事したつて、お空の源は何も喜ばんぞー？ そんな事を漁業長に聞かれたら、お前また怒られるぞー！？」

「父ちゃんはお空になんていねー！ あの海の向こうで、あたしが一人前の漁師になるのを待っていてくれてんだー！ 父ちゃん馬鹿にする奴は誰であろうと許さんぞー！？」

……これ、アカンやん。波子さん、完全に目が座つて他のオッサン達の胸ぐら掴みながら頭ペシペシ叩き回つてフラフラの千鳥足や。ウチら、こんなグデングデンの酔っ払い連れて家まで帰らなあかんの？ なあ薫は、肝心の薫はどこやねん？

「……ねえ翼、あれあれ」

「……あつ、おったおった！」

おいおい、何や何や？ 周りの酔っ払いが酒を飲みながら威勢よく大笑いしとる片隅で、船を停泊させる為にロープを繋ぐボラートつて言うへビの頭みたいに出っ張りに腰かけてだらしなくグッタリ死にかけてる男が一人。波子さんに借りたのかダッサイ長靴に汚い作業着、首にタオル巻いてうなだれるその姿は茶髪頭を除けば周りと変わらんタダのオッサンやん。

いつもの頭くるほど軽々しいあの佇まいはどこへやら、まるで生活の露頭に迷って公園のベンチに座り込む日雇い派遣社員みたいやな。同じ作業着でも、きっちり着こなしとる波子さんとはやっぱり格好良さが全然違うわ。これが人間の器の違いってヤツなんやな、納得納得。

「……ハア、しんどい……」

「オイコラ誠意大將軍、少しは楔ぎの修行になつたんかい？」

「……ふえ？ おお、これは愛しのマイダーリン、つばピーのサンシャインスマイルで薰ちゃんも元気ひやくばいいい……」

「……あらゝ？ さすがの薰君もすっかりトーンダウンだね……」

「……しかしなあ、そんだけ追い込まれてもまだそのウツザい口調直らへんのかい？」

ここまできてもキャラを貫き通すってある意味立派やと思うわ。もうコイツのこのノリは生まれつきなんやな、あの波子さんの手にかかってダメなんやからもうダメ、ダメなヤツはダメって事や。そ

れでもまあ、コイツにしたら良うやりきった方なんちゃう？ 近くに自販機もあるし、少しはウチも優しいところ見せたるっかな？

「……ほれ、このジュース、ウチからのおごりや！ ウチが人に物をおごるなんて滅多に無いで、有り難く受け取りや！」

「……えっ、マジ？ 俺に？」

「へえ、珍しい！ 翼がそんな優しい気遣いするなんて、もしかしたら薫君の誠意、翼の心に届いたのかなあ？」

「アホかつ！ そんなんちゃうわ！ 綾が人への労いが足らんとか言うからウチなりに反省した結果や！ 今回はウチが無茶ばかり言うて色々無理強いさせてしもたから、そのあの、あれや……」

「……ありがとう、っーか、あの……」

「……何？」

「……………」

「……な、何やねん？」

薫のヤツ、疲れているせいもあるやろうけど、何かあんまり見た事ないような真面目な顔、いや、真面目言うかニヤニヤふざけてないすつきり美少年の表情でウチの顔をガン見しよる。汗をたくさんかいたからクドさが抜けたんかなあ？ コイツ、黙ってりゃオトンミたいなええ男なんやけど……。

「……翼、すっぴん？」

「……せやけど、何？」

「……だよね、あのさ……」

「な、何やねんや一体？ そない珍しい事とちやうやろ！？ まあ、最近はずっと千夏と連んでからちよっと化粧くらいはするようになったけどな、それが何……？」

「……やっぱり可愛いなあ、いやマジマジ、マジですっげえ可愛い！」

「……ハ、ハア！？」

「……か、か、か、かわ、かわ、可愛い！？ な、な、な、何、何、何をいきなり言い出しとんねんコイツはあ！？ しかも真顔でこっち見つめながらって、オマエ、オマ、オマ、オマ、オマエ……！？」

「いや、本当可愛いなあ！ 俺さ、告っちゃうけど中学の時に初めてあった翼のすっぴんが可愛かったのが一番記憶に残ってたさ、それ以来すっかり翼の虜になっちゃってたんだよ！ 化粧してお洒落な翼も良いけどさ、やっぱりすっぴんでありのままの翼が一番可愛い！ うわあ、マジで本当に可愛い！ 俺マジヤバって……！」

「えっ？ 薫君、それって完全に翼にマジ惚れしてるって事？  
今までの態度は冗談なんかじゃなくて本気だったんだ……？」

「おねータン、ズルーい！ みータンも薫タンから可愛いつて言われたーい！」

「……………私だつてすっぴんなのになあ……………」

……………薫のヤツ、一体何を言い出しとんねん？ これって、何や？  
マジの告白？ 告白……………？

……………こ、告白うー！？ ちょ、ちょっと待つて！？ 困る、困るわ、  
そんなんいきなり困るわあ！？ 男の人からそないな言葉、生まれ  
てきてからオトンにしか言われた事無いねん！ いつもは偉そうに  
見栄切つとるけど、ホンマはウチこつというの全然免疫力無いねん！  
『可愛い』やなんて、そんな事を面と向かつて急に言われたらウチ  
はどないな反応したらええの！？ ウチには千夏みたいなりアクシ  
ョン無理やあ！ いつも薫のノリやつたら下らん冗談で済ませら  
れんのに、何で今回の恋の弓矢はこんな真っ直ぐウチのハートのド  
真ん中にグッサリ突き刺ささつてくんねん！？

「やっぱり自分の異性の顔や体つきの好みなんて、一つの運命的な  
出逢いによって生まれた恋心には関係ないんだって今改めて気づい  
たよ！ ごめん、やっぱり俺、翼の事好きなんだ！」

「…………『好き』とかはつきり言いよつて、このアホアホア……………」

「こんなだらしない俺だけど、もし良かったらマジで考えてくれる

と嬉しいな、俺さ、いつか新作さんみたいなカッコいい大人になれるように頑張ってみるから……」

「アホオーーーーッ!!」

人がこないにたくさんいる場所で何を言い出しとんねんボケー！  
！ みんなにそないな話聞かれたら、ウチは恥ずかしくてもう外歩けへんやないかあ！？ つーか、隣にいる綾や岬にはもう完全に聞かれとるし、酒を飲み交わしとるオッサン連中もウチらの妙な空気に感じてこつち見てニヤニヤしとるやないかあ！？

ホンマやったらいつもみたいに今すぐこのアホの顔面蹴り飛ばして海に落としてやるのに、この前の波子さんの指摘が気になって蹴る事出来へん！ ワンピースやから薫にまた中を見られてまう！ うわあ、アカンアカンアカン！ そんなダメや、恥ずかしい！ もうウチ限界、訳わからん！ オカン、こういう時に女はどないしたらええねん！？ 誰か助けてえ！！？

「おねータン、真っ赤なお顔を手で隠して足をジタバタしてるー！  
何か可愛ーい！」

「……へえ、翼もテンパっちゃうとあんな女の子っぽい可愛い仕事するんだ？ 私、胸がキュンキュン来ちゃったあ、翼可愛い、萌え……」

「おーい、茶髪にチビ子ー！ お前達、何を昼間からイチヤイチヤしてんだー!?」



うわあゝ！　もう頭の中真っ白で何も考えられへんところに、酔っ払いのおっぱい姉ちゃんかウチと薫に抱きついてギュッって密着させて酒臭い息を吐きかけてきよるゝ！　もう今日はウチの生涯の中で一番のドッキドキ日や！　昼ご飯で二人を呼びに來ただけなのに、この後オトンのお宝探しを続けなあかんのに、もうそんな余裕全然無くなつてしもたやないかあ！？　これって、もしかして恋なん…？

「そうだ茶髪ー！　お前はいい加減かと思つてたら意外と掃除と手伝い良く頑張つたなー！？　つまらん戯言や冗談をやめて誠意を貫き通したからこそ、お前もちゃんと一人の男としてチビ子に認めて貰えたんだぞー！　少しはあたしに感謝しろー！？」

「……ちよ、ちよつと波子お姉様そんなに抱きつかれたらおっぱいが、顔中おっぱいがいっぱい……！」

「ちよつと待つてやゝ！　ウチまだ薫を男として認めるとか何も言うてへん……！？」

「祝言だ祝言ー！　お前達への祝い酒だー、飲め飲めー！　そんなもつて元気な赤ん坊を産め産めー！　茶髪ー、お前はこの港に残つて漁師になつてあたしと一緒にこの海で生きていくんだぞー！？　チビ子ー、漁師の嫁つてのは女として最高の人生だぞー！？　アッハッハー！　ハア……」

「……えつ？　波子お姉様？　お姉様ゝ！？」

「……ガー、ガー……」

「寝とるがな！？ マジでえ！？ ホンマかいなあ！？」

ウチと薫の間に抱きついたまんま、とても女のものとは思えへん様なデカいいびきかいて寝てしもうたでこの人！？ 質悪っ！ この酒癖の悪さ、那奈のあのお姉の優歌さん以上や！？ あのお姉はどんだで飲んでも全然変わらんザルの人叩き上戸やけど、この姉さんは寝上戸かい、一番最悪の酔っ払いタイプやないかゝ！？

「……随分と遅いから気になって来てみたけど、こんな事だろうと思っただわ……」

「あつ、オカン！ いやちゃうわ、歩美さん、助けてゝ！？」

助けに来てくれた歩美さんと一緒にみんなでムチムチの酒臭姉さんを何とか港の市場の事務所の中まで引きずるように連れて行って、空いていたソファアの上に寝かせてやっと一息ついた。朝も昼もまだ何も食うてなくてももう腹ペコペコや。

ウチらは歩美さんがわざわざ家から握って持ってきてくれたおむすびを食べながら、その事務所の白髪の漁業長のオッサンと初日にウチらに道案内してくれた港一番の長老さんの昔話を横で聞いている。

「しかし、波子ちゃんはずっかり源さんそっくりになってしまったな？ こりゃ歩美ちゃんの苦労も絶えないってもんだ」

「……父親みたいな立派な海の漁師になりたい、だなんて言い出し

た時は育て方を間違えたって後悔したものだわ？　それがもうすっかり、一人前の漁師の仲間入りだもんね……」

歩美さんには学生時代からの許嫁の様な存在の源さんって言う男性がおって、高校を卒業してからすぐにその人と祝言をあげたんやてその祝言の式はあの孤児院の中で神主さんと呼んで、鈴子婆さんやオトン達の前でしめやかに行われたそうなの。

んで、オトン達が孤児院を出てから年齢的に院長を勤める事が難しくなった鈴子婆さんは『森川の里』を閉院して、新しい家庭を築き始めた娘夫婦を影ながら見守る事になったんや。その当時、日本も経済が大発展して生活が安定したから、里親が必要な子供達がほとんどおらん様になったらしいな。

ホンマは最初、歩美さんは是非この孤児院を継ぎたいって思ってたらしいんやけど、鈴子婆さんは漁師の嫁として夫一人を全力で支えなさいって言うて大反対したんやて。この話を聞いただけでも、鈴子婆さんって人がどんな常識ある立派な人やったか想像つくわな。

「鈴子婆さんの元気の良さは、そりゃあワシら男の漁師も顔負けするほど凄いもんだったからなー？　港にデカイ魚がやって来たって大騒ぎになった時、男どもがビビって逃げ腰になってるところをたった一人で釣り上げてその場で捌いて家で待つてる子供達に食わせたって話だー、何でもその魚、魚じゃなくて鯨だったってワシは聞いたるけどなー？」

「ウフフ、そんな訳ないでしょ吉蔵じいちゃん？　鯨じゃないわ、ホオジロザメよ」

「鯨かー！？　いやー、さすがに鯨は無いと思ってたがよー、それ

ならなるほど納得だー！」

……納得ってオイオイ、ホオジロザメってあのジョーズやん？ ジョーズだけに上手に釣りましたってか？ やかましいわ！ でもあるかも、ありえるわ。何せ世界中で暴れ回ったあのオトン達を女手一つで育てた人や、鯨の一匹二匹ぐらい素手でひよいひよいチヨロいやろ？

「……ねえ翼、何で腕組んでウンウン首傾げて納得してんの？ まさか、この話を本気で信じてるの？」

「綾、オマエはなぐんもわかつとらんなあ？ 甘い甘い」

「うんうん、あるある、ありだねアリアリ」

「……ちよつと、薫君までそんな……」

んでな、その後歩美さんと源さんの間には玉の様な元気で大きな女の子が産まれたんや。おしとやかな子に育てたかった歩美さんの希望とは裏腹に、筋骨隆々の海の男やった父親の後ばかりついて港で魚とばかり接して、いつしか学校の合宿コンクールで『兄弟船』を熱唱するような男気満点の少女に成長していったそうやで。それが今、ここのソファで腹出して寝とる酒臭おっぱい姉ちゃんって事や。

「なあ、歩美さん？ 歩美さんの旦那さんって今どこにおるの？」

波子さんは海の向こうで待ってるとか言うつつたけど……」

「……ううん、あのね翼ちゃん、あの人はもう……」

今から八年前の今頃、この伊豆半島を丸々飲み込むほどの巨大で凶暴な台風が関東圏内を直撃した。都内でもかなりの洪水や暴風による被害が出て、イタリアから日本に来たばかりのウチも経験の無い災害に怖くてオトンにしがみついていたあの台風や。今でも良く覚えとるわ。

その日、他の港に用件があつた源さんは何とか台風が接近する前にこの港に帰つてしようと全速力で船を走らせとつた。車とか使つて陸路でも帰れたはずやつたんやけど、そこは生粋の海の男、自分の船を他の港に置いて行くんが嫌で海に出てしもたらしいわ。

でも、その時の台風の進路速度は気象庁でも予測がつかんほど恐ろしく速くて、荒れ狂う海に飲まれた源さんは漁船もろとも消息不明になつてしもた。台風が去つた後、海上保安庁や漁師仲間で必死で源さんの搜索を続けたそうやけど、結局漁船の一欠片も見つからなかつたんやて……。

「……あの日はね、波子の十二歳の誕生日だったのよ、漁師仲間が波子の為に作ってくれた新しい大漁旗を、早く波子に見せてあげたってなりふり構わずに隣の港まで船を出してしまつたのよ、すぐ帰る、必ず帰るって無線を残して、それがあの人の最後の言葉だった……」

「……でも、波子ちゃんはまだ源がどこかで生きてるって信じてるみたいだな、自分も漁師になつて海に出れば、いつかどこかで出逢えるじゃないかって……」

「……いやー、あの源ならあるかもしれんなー？ あの程度の荒海で死ぬような男じゃねー、ワシが今まで見てきた中で一番の漁師だったからなー？」

事務所の人達の話聞いていて、何かウチは急に波子さんに対して親近感が湧いてきた。同じオトン想いの娘、ううん、それだけやない。オトンに生きていて欲しいって想う気持ち。ずっと一緒にいたいっていう切ない願い。

いつかはウチとオトンも、波子さん親子みたいに会えなくなる時がやって来るんやろや。うん、必ず来る。それが明日か、一ヶ月後か一年後か、はたまた十年後か五十年後かわからんけど、オトンとお別れしなきゃあかん時が絶対にやって来るんや。

そんな悲しい事、今はとても考えたくもないけど、それでもまだウチは波子さんよりも恵まれとる。ウチにはまだオトンと一緒にいれる時間が残されとる。一生忘れる事のない大切な思い出が作れるチャンスが残されとる。

もう二度と会う事が出来なくても、絶対に希望を失わずに自分の父親の事を想い続けて頑張つとる人がいるのに、ウチはさつきから何をヘコんどんねん！ 残された時間が少ないんやないねん、まだ時間が残っている事を有り難く思わなあかんねん！

「……ウチ、負けへん、諦めへん！」

「……ふござつ？ 何よ翼、人がおむすび食べてる最中急に……？」

「綾、岬！ 続きや！ オトンのお宝探しの続き、今から行くで！？」

せや！ ウジウジ考えたってどうしようもないねん！ 考えるな、己の直感を信じる、や！ ウチは今のウチが出来る事を精一杯やる、それがオトンに対してしてあげられる最高の愛情表現やねん！

「翼ちゃん、もう少し休んでからにしたらどう？ そんなに焦らなくても……」

「大丈夫やで歩美さん！ ウチ、もう焦ってへん！ 見つけられるで、ウチとオトンの大切な大切な宝物、絶対に見つける事が出来る！ 絶対に、ウチがオトンにプレゼントするんや！」

「……そう、うん、その笑顔ならもう大丈夫ね？ でも、絶対に無理はしちゃダメよ？ 自分達のお家に帰る時間もちゃんと計算に入れてほどほどにね？」

おおきに、歩美さん！ オトンが隠した宝物が見つからなくたってええねん！ ウチが今オトンの為にどれだけの事をしてあげられるか、それがオトンにとってもウチにとって一生忘れられへん大切な宝物になるんや！

宝は物と限った訳やない、波子さんが父親との大切な宝物を海に見立てる様に、ウチもこの貴重な連休三日間の思い出を宝物にしてオトンにいっぱい話してやんねん！ きつとそれがオトンの宝物にもなってくれるはずや！

「よしっ、ほなら薫！ 今日はおマエも手伝っ……！」

「はいはい、お呼びでございますか？」

「……あの、あのあの、あのな、あのね？ て、て、手伝って、くれ、る……？」

……アッカーン！ 何かやっぱリダメやあ、ウチ明らかに薫に対して反応がおかしい！ ウチったらスッゴい笑顔満面で薫に話しかけてもうて、これじゃウチが薫と話するのがメチャクチャ嬉しいみたいに思われてしまうやん！

しかも目が合った瞬間急に恥ずかしくなってわざとらしく目線そらしてもうたし、絶対ウチの気持ちに薫にグングン惹かれまくつとるのがもうバレバレやん！ こんなんじゃウチ、とてもお宝探しなかに集中出来へん！ また薫に可愛いなんて言われたらウチもうアカン！ どないしょー！？

「イツエース！ もう薫ちゃんたらスイートつばピーの為に疲れきった体に鞭打って、ヒヒヒーンっと馬馬車のごとく全速力でプリーシューティングスターの旅へ一緒にゴートウーヘブウンって感じー！？」

「……………」

「あれー？ ノリが悪いぜプリンセスハニー？ 今宵薫ちゃんはあなたの白馬の王子様、つか白馬でいいや！ さあ、このプリプリの桃尻に武豊並みの追い込み鞭をプリプリプリーズ！？」



……うわあ、冷めた。一瞬で冷めたわ。コイツ完全に図に乗って見事に元に戻つとるやん？ 最悪や、計二日間必死になって頑張った流した汗がちつとも身になってへんやないかい！？ あの時の胸をズキューンって貫かれたときめきは一体何やったんや！？ ウチの純情ラブラブ物語は一体どこへ行つてしもたんやあ！？

もうええ、もうええ！ もうこんなたくさんや！ やっぱりウチにはオトンの愛だけで十分や！ アッホくさ、何がすっぴんに惚れたじゃボケカス！ ウチは何が起こっても世界で二人きりになろうと絶対にコイツにだけは心を許さへんし惚れたりせえへん！！

「お姉さん見て見て〜？ オラの可愛いオ・シ・リ 女王様あ！？ この鬼畜外道変態男の汚い尻の穴にキックミープリーズ！？」

「そない蹴られたかったら脱腸するまで蹴り飛ばしたるわあ！ ウチの気持ちを毎度毎度逆撫でしよってからに、覚悟せいやゴラア！！」

「ワオ！ 稲妻激烈スパークキング！ 痛っああああい！！」

「おー、そうだそうだー！ 稲妻つて言えばよー、確かあの台風の日は近くに雷も落ちて大変だったなー？」

まだ事務所のオッサン達だけで昔話に花が咲いとるけどな、もうそんなもんでもええねん！ まずはこの変態M男ゲス野郎の尻が二つ三つ四つに割れるまでバッシバシ蹴り倒したんねん！！

「ウチのオトン譲り右足から繰り出されるハットトリック食らえや

！ 一発、二発、三発〜！！」

「アウチ、アウチ、アツ〜ウチッ！！ …… ってちょっとストップ  
！ いや翼、マジでマジで！ 雷？ 雷が落ちたって、まさか……  
？」

「この港から少し歩いた神社前の休憩所に立つとった、屋根より高い大きな桧の神木に雷が落ちて、神社までボヤ騒ぎになったの覚えてるかー？ あん時の音は凄かったー、ワシは心臓止まるかと思っ  
たよー？」

「全く吉蔵爺は相変わらず古い事ばかり覚えてるなあ？ 自分が食べた飯の事はすぐに忘れちゃうくせによお？」

「……ん、何やて？ 神社の休憩所にあつた高くて大きな桧の神木？  
ちよつと待てや、もしそんな立派な目立つ木が昔あつたんやったら、何か根元に物を埋めるにはこんなわかりやすい便利な目印は他にないよなあ？ まさか、これってまさか……！？」

「……思い出したわ！ 確かに、あそこには昔大きな神木があつて、その日に雷が落ちて燃え落ちてしまったのよ！ うちの子供達が良くあそこの休憩所で遊んでいたのを見た記憶があるし、翼ちゃん、もしかしたら新ちゃん達は……？」

「……それや！ 多分間違いないわ！ なあ爺さん、その神木つてその後どなかったんや！？」

「上の部分はほとんどが燃えてしまったけどなー、神聖な神木だっ

たから何とか残してあげたくてなー、燃え残った下の幹の部分をワシら町民で綺麗に彫ってお客用の腰掛け椅子に仕上げたんだわー、今もちゃんとその休憩所で人間様の役に立つとるはずだぞー？」

「爺さん頼むわ！　今すぐそこまでウチらを案内してや、お願い！？」

見つからんでもええなんて半分諦めモードやったオトンの宝物探しでも、これはかなり期待出来る展開になってきたで！　あと少しや、ウチらが追い求めてきた宝物の在処はもうすぐ目の前やで！！

## 第53話 Any

「ほれ、ここだー！ どうだ、キレイな腰掛けに仕上がつとるだろー？」

石廊崎の生き字引、吉蔵爺さんに案内されて神社の広い休憩所にやってきたウチら。そこには町内会議とか出来そうな簡易プレハブが数個と木造の倉庫が一つ、その横にはペットボトルのコーラ一本を二百円で売る悪どいボロ儲けな自販機が備え付けてあった。

そして、その広場のド真ん中には中心が出つ張り背もたれに出来る丸い360度の木のベンチ、いや元この神社の神木やった幹がデーソとそこにあつた。座りやすい様に足元の根つこの部分は切り取られている所もあつたけど、パツと見ただけでもすぐにそれが昔からそこに生えていた木だつたって事は一目瞭然やった。

「この高さから上の幹や枝はほとんどが真つ黒く燃え落ちてしまつてなー、ワシらがやむなくノコギリで切り落としたんじゃー、けどな、切り株のまんまじゃ何かみつともないじゃろー？ そこで町内の一番の大工だった靖吉に頼んでオシャレな腰掛けに仕上げて貰ったんじゃー、その靖吉も五年前にぼっくりあの世に逝っちまってなー……」

吉蔵爺さんの話は長くなりそうなのでここで省略させて貰うとして山に生えている木とは明らかに一味違う木の質感と加工されていて

も確認出来る立派な年輪、それに歩美さんが孤児院の子供達が良くここで遊んでたと言う証言からとしてもオトン達がこの木の下に宝物を埋めたのはほぼ間違えないわ！

それでも、やっぱりもつと確実な情報がないと掘り下げても何にもありませんでしたー、なんて骨折り損にもなりかねへん。そないな事になったらただでさえ少ない残り時間を大幅にロスする事になってしまうし、第一、神社の神様の前で決定的な根拠も無くガリガリ敷地を掘ったら神主さんに怒られてしまうがな。

「そ・こ・で・や、ウチは守りに入らずガンガン攻めに入ったんやで！」

「……攻め？　ねえ翼、一体何の事？　さつきから何かどこかに必死になって電話してたみたいけど……？」

「まあ、すぐにわかるで綾？　ここまで来たらオトンやオカンにバシるのを怖がつとる場合やない、もつと確実な情報を手に入れるには当人達から聞き出すのが一番やからな！」

「……おねータン、ケータイ鳴ってるよー？」

「……来た来たキターー！！」

小夜の家に電話したら誰もおらんかったのは予想外で一瞬焦ったけど、那奈の家には翔太のいづみオカンがおってくれたからホンマ助かったわ！　『緊急事態！　オトンが死にそうやねん！』ってちよつと嘯いたらいづみオカン、メチャクチャ慌てて虎太郎オトンと啓介オトンに連絡して折り返し携帯に電話させるって言うてくれたん

や！

オトンと一緒に宝物を埋めたあの二人から話を聞ければ、これ以上  
確実に手っ取り早い方法は他にあらへんからな！　こんな大それた  
嘘ついたら間違えなくいづみオカンからウチのオトンやオカンに連  
絡されてしまうやろうけど、もうそないな事言ってる場合やないね  
ん！

人がウチらが生まれる前の大昔に隠した物を見つけるなんて、よく  
よく考えてみたらエライ無謀な事やったわ。本気で見つけようなん  
て思っんやったら、ウチ自身もオトンに怒られる事を怖がらずに本  
気にならなあかんねん！

どんな事をおつ始める時も、自分自身に降りかかってくるリスクを  
怖がつつたら何も手に入らん！　引いたらアカン、常に前へ前へ  
！　勝ちたかつたら前へ行け、虎穴に入らんば虎子を得ず！　どん  
なに善戦しても、攻めてシユートを打たな得点は入らんのや！　勝  
てんのや！！

「……もしもーし！　どなたさんですかー！？」

「……Hello……？」

「……その耳澄まさんと聞こえへん小さな低い声、啓介オトンかい  
な？」

「……新作が危篤と聞いてニューヨークから事務所のロサンゼルス  
までへりで飛んで来た、容体は……？」

「……あ、あの、実はその話、嘘やねん……」

「……何、だと……？」

……あちゃゝ！ 啓介オトン、声のボリュームからはわかりづらいけど絶対怒つとるわゝ！？ そりゃそうやなあ、わざわざそないな長距離をへり使つて移動して国際電話させてもうてるんやもんなあ、怒るわなあ！？ ここはひたすら謝つてホンマの事情説明するしか手は無いなあ？ 翼、辛抱やで、これくらいのリスクで負けたらアカンで！？

「……宝物が、忙しくてすっかり忘れてしまっていたな、懐かしい……」

ウチのオトンに対する本気の想いや、啓介オトン唯一の弱点である愛娘・小夜のおっちょこちよい話を交えて会話を進めると啓介オトンは何とか怒りを治めてくれた。その隙にウチはやっぱりと宝物を隠した場所を聞き出そうとしたんやけど、何かどうも肝心の啓介オトンの記憶が曖昧やねん……。

「……確かあれば、孤児院の庭の大きな植木……？ 違うな、裏山の森の中……？ 違うな、崖から下に投げた……？ それも違うな……」

「……あのゝ、啓介オトン？」

「……そうだ、海に投げたのはあずみと共に生きていく事を誓ったグランドキャニオンでの結婚式のブーケだったな、うむ、何と懐かしい、またいつか二人であの場所へ行きたいものだな……」

「だ〜から！ 宝物の話やって、た・か・ら・も・の〜！ 結婚式の話なんかどうでもええねん！？ 大きな木の下に埋めたんやろ？ どのどんな木やったかだけでええから教えて〜！？」

「……宝物、確かあれは虎太郎や新作と共に孤児院の近くにある神社の……」

「神社の！？」

「……境内の仏像の下？ いや違うな、あれは確か新作が拾ってきたスケベな成人雑誌だったはず、……賽銭箱の中？ それも違うな、賽銭箱に隠したのは確か虎太郎がくすねた鈴婆のへソクリだったはず、あとは……」

「……もうええです！ 忙しいところお呼びして申し訳ありませんでした！ ほな、サイナラ！！」

もう、いらん情報ばつかやないかい！ エロ雑誌なんか仏像様の下なんか隠すって罰当たりやなあ！？ 銭がジャンジャン入ってくる賽銭箱にくすねたへソクリ隠してどないすんねん、どれがどれやらわからなくなるやろが！？ 第一、それを後でどないして取り出すねん、普通に賽銭泥棒になるやん！？ あの三人、ホンマに生粋のアホか！？

「……翼、これだけ確かな情報が揃っているんだからここで間違えないよ？ 時間が無いんだから、とりあえずここを掘ってみようよ！？」



心配そうにウチと啓介オトンの会話を聞いていた岬や綾とは対照的に、薫は孤児院から自分が殴られたスコップを持ってきてやる気満々やった。さつきまでふざけてた雰囲気もすっかり消えて、波子さんに鍛えられた成果が垣間見える頼もしい男子の佇まい。でも、そのやる気はちよつと勇み足にも感じた。

「待つてや薫！？ ホンマに確実な証言がない限り公共の場所に穴なんか空けたりしたらさすがにアカンて！？」

「そーだぞ、坊主ー？ お前さん達の気持ちもわかるがなー、この腰掛けは靖吉達がこの町に残した大切な忘れ形見なんだぞー？ そんな乱暴な真似、ワシの目の黒い内は許さねーぞー？」

そや、木の麓に穴を掘るなんて事をしたら、もしかするとこの切り株の根を傷つけたりしてダメにしてしまうかもしれない。そないな事になったら神社の神主さんはおるか、吉蔵爺さんを始めとする町の住民さん達に怒られてしまうわ。ましてやそこに宝物が無かったりしたら尚更……。

「……でも俺、何か翼の為に役に立ちたい！ 新作さんの役に立ちたい！ 俺だつて男なんだ、ここまで来てもう引き返す事なんて出来ないよ！？ 翼に、誠意と行動をもって俺の気持ちを伝えたいんだ！」

「……イヤや薫、そない真剣な目で見つめられたら、ウチ困るう……」

……」

「ちょっと二人とも、ラブコメ禁止！ 翼の一番はこの私なの！ 私に翼に宝物を見つけてあげるんだからね！？」

「薫タン、綾タン、二人ともシッ！ おねータン、またケータイ鳴ってるよー！？」

…… おつ、ホンマや！ さっきが啓介オトンからやったから、今度は多分あの人からやな！？」

「はーい、もしもし……」

「いつまで話し中なんじゃゴラァ！！」

「うわっ、うるさっ！！」

鼓膜が破けて脳を通り越して逆側の鼓膜まで破けそうなヒドくうるさい怒鳴り声。こんな口が悪くてドスの効いた大声出せる人なんてあのオッサン一人、虎太郎オトンや！

「新作が死にかけてんのに娘が誰とペチャクチャお喋りかましとんじゃゴラァ！！ お前、夢の島のゴミ置き場に地中深く埋めて化石にしちまうぞガキがあー！！」

アカンアカンアカン！ 啓介オトンと違って虎太郎オトン、最初っからフルテンション全開や！ これでもし、オトンの話が嘘でしたゝ、なんて事言うたら間違えなくウチはホンマに化石にされるわ！？ このオッサン、本気で怒らせるとヤ○ザが組ごと国外逃亡してしまうほどマジであかんねん！ ヤバい、どないしよ、オトンよりも先にウチが天国逝きにされてまうゝ！？

「……翼ちゃん、ちよつと携帯貸しなさい？ 私が虎ちゃんに説明してあげるわ」

ウチがビビりまくつとるのを見て、側にいた歩美さんが半ば強引にウチから携帯を取り上げて喧しく怒鳴り散らすマイクに耳を当てた。

「……虎ちゃん？ 久し振りね、ちよつと落ち着いて聞いてくれる？」

「ハア？ 誰だテメエは！？ 俺は今、新作の娘と話してんだよ！  
！ 外野はでしゃばんじゃねえぞ、さつさと娘に変わって新作の状態を教え……！」

「アンタ、一体誰に口利いてんだい！？ アタシだよ、歩美だよ！  
？ 忘れたとは言わせねえぞ、バイクで世界王者になつたくらいで粹がつてんじゃねえよ！！ ナメた事言わしてんとな、テメエの家に乗り込んで母さんの位牌をケツの穴に押し込んでヒイヒイ言わせんぞゴラァ……！」

……えっ？ 歩美さ〜ん、人格変わりすぎですがな〜？ ウチだけやのうて薫も綾も真っ青になってドン引きして後退りしとるし、岬に至ってはウチにしがみついて震えて泣き出しそうになっとる。これがオトン達を震え上がらせた森川鈴子園長の血の引く娘の成せる業……？

「……そうそう、ごめんなさいね、翼ちゃんも新ちゃんの為に必死だったのよ、宝物の場所？ あっ、そう、やっぱり神社の桧の木の下で合ってるのね？ ありがとう、あなたの話が聞けてとても助かったわ、虎ちゃんと啓ちゃんの分も見つけてあげるから心配しないでね？ あと、一度くらいはこっちに元気な顔を出して私と母さんの墓前に挨拶して頂戴ね？ 約束よ、わかってんだろうなゴラァ！  
？ ……うん、良いお返事ね！ じゃ、またね」

……あの虎太郎オトンが完全に封印されてもうた。あの理不尽暴力男にかなう人間は地球上でも奥さんの麗奈オカンだけやと思ってたのに……。やっぱり、小さい子供の頃に植え付けられた上下意識つてもんは何年経っても消える事がないんやな、あの無敵三人組の成長の礎を築き上げた森川一族、何とも恐るべしや……。

「吉蔵じいちゃん、やっぱりこの木の下にこの子の父親の大切な宝物が埋まっているらしいの、どうかここを掘る許可を神主さんから貰ってこれないかしら？」

「……いやー、歩美ちゃんの頼み事といってもなー、この切り株にはワシらにも大切な昔の思い出がたくさん詰まっているんじゃない、ワシ一人の話じゃ済まんのだよー」

「……本当に、ダメ？」

「……そんな鈴子婆さんみたいな怖い顔してもダメだー」

「……んもう、困ったわ……」

せつかく宝物の埋まつとる場所が確定したにもかかわらず、ウチらは吉蔵爺さんからそれを掘り返す事を許可して貰えへんかった。歩美さんも必死になって説得してくれたけど、吉蔵爺さんは首を横に振るばかり。この町に住んどる住民全員の許可が貰えれば許してくれるかもしれへんけど、さすがにもうそんな時間は残されてへん。時刻はもう正午をとくに回って二時近くになつてしもた……。

「……ここまで来たけど、やっぱり無理なんかなあ……？」

ウチが弱気になつて下を向きかけたその時、手の中でウチの携帯に着信が入った。誰やる？ 虎太郎オトンと啓介オトンとはすでに話が済んどるし、いづみオカンにはこの二人以外の人に連絡してくれなんて頼んでへんし、何か嫌な予感するわ……。

「……も、もしもし？」

「……翼！ お前今、何をしとんねん！？」

「……オトン！？」

ついにバレてもうた。ウチが家におらん事がオトンに知られてもうた。オトンが怒鳴るなんて、ここ最近ではウチの記憶の中にはほとんどあらへん。オトン、相当怒つとるみたいや……。

「今さっき、啓介から美香ちゃんに連絡があつて、美香ちゃん大慌てで病院に電話かけてきたんや！俺が危篤やと！？アホ抜かせ！啓介のヤツ、収益何千万円にもなる仕事の契約打ち切つてわざわざ日本に帰る為に大移動したんやぞ！？お前、自分がした事がどれだけ迷惑かけてるかかわかつとんのか！？」

「……ごめんなさいオトン、ウチ、ウチはオトンの……」

「それだけちゃうわ、まだ小学生の岬や関係ない友達まで連れて行って俺の育った故郷に迷惑かけてるらしいやないか！？翼、お前は満身創痍で病氣と戦つとる実の父親に対して、人の顔に泥を塗るような非道な真似をするんか！？お前はここまで育てた恩を仇で返すつもりなんか！？」

「……違う、オトン、違うねん、ウチは、ウチはオトンに……」

「失望したで翼！俺はそんな娘を持った覚えはない！岬や薫や友達を無事に家まで送つてさっさと帰ってこい！そして、俺の大切な兄弟である虎太郎と啓介にきっちり謝れ！虎太郎かて沖縄から帰る途中で飛行機一本乗り遅れる羽目になつたんやぞ！？お前はホンマに……！」

……もう、泣きそうやった。つーか多分、泣いてたと思う。ウチがどんなに事情を説得しようとしてもオトンはちつとも話を聞いてくれへん。ウチのオトンへの想いは届かへん。喜んでもらうどころか、完全にオトンを怒らせて嫌われてもうた。元気になってもらうどころか、余計な心配かけて苦しめてもうた。やっぱり、ウチってダメな娘なんや、オトンの力になんてなれへんのや……。

「……翼ちゃん、代わって」

丸くなってしゃがみ込む半ベソのウチからまたも強引に携帯を奪い取った歩美さんは、虎太郎オトンと話をしていた時とは違っていつもの優しい雰囲気でおトンと話し始めた。その間、ウチはあまりのショックで立ち上がる事が出来ずに二人の会話を横で聞いているのが精一杯やった。

「……新ちゃん？ 私、歩美よ」

「……歩美姉ちゃん？ ごめんな、何か翼が勝手な事を……」

「いいえ、謝らなきゃいけないのは私の方なのよ、私が翼ちゃんの行動を黙認してしまったの、翼ちゃん、新ちゃんの為にあんまりに必死だったから……」

「……俺の、為？」

「新ちゃん、翼ちゃんはね、あなたが少しでも元気になってくれるようにってこの三日間たくさん頑張ったのよ？ たくさん走って、

汗いっぱいいて、いっぱい泣いて、それでも負けずにまた走って、あなたの残した宝物の為にいっぱい頑張って……」

「……でもな姉ちゃん、宝物って言うてもな、そこに埋まっとるのはただのゴミやねん、俺はそんなものの為に姉ちゃん達に迷惑かけとくないし、翼や岬を危険な目に合わせとくない……」

「違うのよ新ちゃん、大切なのは宝物そのものじゃないの、あなたの笑顔が見たくて翼ちゃんも岬ちゃんも一生懸命小さな体で頑張ってたのよ？　それがあなたにとって何よりの宝物にならないかしら？　だからお願い、どうか翼ちゃんを怒らないであげて？　私からも謝るから……」

「……姉ちゃん、翼に代わって貰えるかな……？」

歩美さんはオトンの話し声を聞いてふうっと一息溜め息をつくとき、その場にしゃがみ込んだるウチの高さに合わせて膝をたたんで切なそうな顔をして携帯を差し出した。ホンマはウチ、携帯を受け取るのが怖い。またオトンに怒られてしまいそうで怖い。でも、ちゃんと話せなあかんねや、ウチが蒔いた種やもん、ちゃんとオトンに謝らなあかんねん……。

「……もしもし？　オトン、ごめんなさい、ウチ、ウチどうしてもオトンが病室で話してくれた宝物の話が気になって、オトンに元気になって貰う為にプレゼントしたくて……」

「……もうええねん、翼、帰ってこい、もう十分や、お前の気持ち、良うわかったから……」



「……でも、でもウチはどうしても……」

「ええか翼？ お前が必死に探しとるもんは俺にとっては手の届かんもんなんや、叶わぬ夢、とつくの昔に諦めて捨ててきた夢なんや、もう今の俺が手に取ったらあかんもんなんや……」

「……叶わぬ、夢……？」

「そうや、俺が制限された人生を生きていく為に封印した夢、辛くて思い出したくもない苦しい記憶なんや、もう二度と、掘り返して欲しくない代物なんや……」

「……オトン……」

「……俺は逃げたんや、どうしようもない出口の無い現実から背を向けて逃げ出したんや、もうそない情けない事思い出したくないねん、念を残して死にたくないねん、だから翼、そのまま放つといってくれ、俺にこれ以上後悔させないでくれ……」

「……ちよつと待って？ オトン、何かおかしいよ？ オトンはいつもウチに『前を向け』って言い続けてきたやないか？ 『下を向くな』って言い続けてきたやないか？ 前を向けて、辛い過去を全部忘れて無視しろって事？ 下を向くなって、すぐ足元にある大切な思い出を見て見ぬ振りせえって事？ ウチはそんな風に受け取ってへん。違う、そんなん違う！」

「……頼む翼、もう諦めて帰ってきてくれ……」

「……嫌や」

「……翼？」

「そんなん嫌や！　ウチは絶対逃げとぅない！　最後まで諦めずに自分を信じて走り続けろってウチに教えてくれたんはオトンやろ！？」

「……！」

「そうや、そんなんダメや！　諦めたらそこで終了や。サッカーも、勉強も、仕事も人生も命もそこで全部終了や！　ウチは諦めとぅない、最後まで、最後の最後まで下を向かず前を向いて精一杯走り抜けるんや！！」

「ウチがこんな負けず嫌いになれたんはオトンが教えてくれたからやで！？　どんな不利な条件でハンデがあっても諦めずに頑張ってこれたんはオトンのお陰なんやで！？　なのに、何でウチより先にオトンが諦めんねん！？　もうええ、なんて情けない弱音を吐くねん！？」

「……翼……」

「オトンはもう思い残す事が無いかもしれへんけどな、ウチにはもつとたくさんオトンと一緒にいきたい場所があんねん！　オトンに見せてあげたい世界があんねん！　オトンに渡したいプレゼントがあんねん！　その為に、ウチは齒を食いしばって今も全力で頑張っ

てるんや!!」

今までウチは、オトンに噛みついた事なんて一度たりとも無かった。だって、オトンはいつも完璧やったから。強くて、優しくて、ちょっとスケベやけど、ウチが心から人に自慢出来る最高のサッカープレイヤーで最高の父親やったから。

でも、今のオトンは違う! 過去の記憶に背を向けて、全然先に進もうとしてへんもん! 迫り来る死への恐怖に怯えて、世界中の騒乱や戦場を駆け抜けていった不死身のジャーナリスト、松本新作の真の姿やないもん!!

「自分のミスや力不足で犯してしまった失点やったら、すぐに立ち上がって取り返せばええやないか!? いつだってええねん、試合終了までに追いついたらそれでええやないか!? 諦めて足止めたら、そこで何もかも終わってしまうやろ!?!」

「……最後まで、諦めない……」

「そうや! 人がいつ死ぬかなんて人が決める事とちゃうねん! 神様だけが知つとるんや! 試合終了の時間が来ても、ロスタイムの最後の笛が鳴るまでは終わりにやないんや! オトンの夢は潰えてなんてへん! 叶わん夢なんて無い! オトンの今の体には無理でも、その代わりにウチがオトンの夢を叶えたんねん! オトンに最高の夢を見せてあげんねん! せやから、ウチより先にオトンが諦めたりしたら許さへんねん! 絶対に、絶対に許さへんねん!!」

「……………」

「……許さへん、絶対許さへん、ウチの前からオトンがいなくなるなんて、絶対許さへん、絶対……」

……もう、ウチは今日何回泣けばええねん？ 嫌や、オトンが諦めたりするの嫌や。一つでも弱々しい言葉聞くとすぐにでも死神がオトンの命をさらっていきそうで怖いねん。そんなん絶対嫌や。ワガママやけど、ウチはずっと死ぬまでオトンと一緒にいたいんやあ……。

「……わかった、良うわかったで翼！ お前の勝ちや！ 翼の言う通り、俺はちよつと最近弱腰になってしもつてみたいやなあ！？」

「……オトン？」

携帯の中から聞こえてくるオトンの声は、さっきまでの小さな声とは比べもんにならないくらいハキハキと齒切れの良い大きな声やった。昔、ウチが小さい体のせいではなかなか上手くりフティングが出来なくて泣きベソかいとつた時にいつも側で笑顔で励ましてくれたあの時の元気の出る明るい声や！

「おーし、ほなら俺も腹くくって過去の忌まわしき記憶と向き合つたろうやないかい！ 翼、お宝はすぐそこや、遠慮無く掘り返せ！ そんでもってそのお宝をこの病院まで持って来いや！！」

「……オトン！」

「それまで俺は何が何でも死なへんで！？ 新ちゃんも死なへんでゝ！？ 死ね言われても死なへんでゝ！？ イキル！ もうしつこいくらいイキル！！」

「それでこそウチのオトンや！ オトン大好きっ！ 世界で一番オトンが好きっ！！ お願い、ウチをお嫁にしてえゝ！？」

アツカ〜ン！ やっぱりオトンが一番最高や！ 薫に感じたドキメキなんかよりも数千倍胸がキュンキュンドキドキしてまう〜！ ウチ、オトンの為やったら何でもいっぱい頑張っちゃうで！？ もう、オトンに求められたら禁断の一線も踏み越える事やって……！！ アカン、それはアカンな。アカンアカン、暴走し過ぎやわ、反省。

「……でもな、条件が一つある」

「条件？」

「せや、時間制限、何としても今日中にこっちに帰ってこい、例えお宝が見つからんでもな、これは絶対や」

オトンの決めたルール、それはお宝搜索大作戦の終了時間が今日の深夜十二時までで、それとみんなが無事に家まで辿り着いて明日からの学校をちゃんと休まずに通学する事。つまりは、試合終了まで退場者一人も出さんで最低勝ち点1を積み上げろって事やな！？ ん、ちよつと例えがちゃうかな？

「ええな翼、ロスタイム無しやぞ！　これが守れんかったらお前は一生出場停止やからな！」

「何が出場停止なるんかは良うわからんけど、ルールはきっちり守るで！？　オトン、待っててや！？　ウチ絶対に最後まで諦めへんからな！？」

「ほなら翼、悪いが最後に薫と代わってくれへんかな？」

……えつ、何で？　何で最後に薫と話なんかする必要あんなん？  
何かいまいち納得出来へんけど、オトンが代われって言うならしゃないなあ？　ほれ薫、携帯舐めたりすんなや？

「……はい、薫です、はい、はいはい、はい……」

一体、何の話をしとんねやろこの二人？　何か口に手まで添えて怪しいやつぢゃなあ？　こりやもう一度オトンと話して聞いてみるしか……。

『ビッ』

あつ、切りよった！　何してんねんコイツ！？　何勝手に電話切つとんねん！？　ウチの携帯でウチにかかってきたオトンからの電話やで！？　オマエに切る権利なんかあらへんのに！？

「オイコラ、コソコソ何をオトンと話しとったんや!? オマエとオトンの関係は一体何……!?!」

「……新作さんがさ、どうか翼を助けてやってくれ、だつて? どうやら俺、新作さんから翼の事を託されちゃったみたいだね、もちろん、新作さんに言われるまでもなく俺は大切な翼をこの身をかけて全力で守るよ!?!」

「……ふーん……」

「……あれ? いまいちときめかない? 今の俺のセリフ、かなりカッコ良くなかった? ダメ?」

「……オトンの後やったら何されても全然ときめかへんわ、役者が違い過ぎるで、一昨日来やがれって感じやなあ?」

「そんな〜! ショボーン……」

まあ、薫の話は後にして、この木の下にオトン達が埋めた宝物がある事はもう明白や! 後はここをひたすら掘って掘って掘りまくるだけ、体が小さくても徹底的に走り込んで鍛え上げたウチのスタミナと脚力でこんなもんあつという間にデカい大穴空けてやんねん!

「だから勝手に掘るなつて言つとるだろがー!? この木はワシら先祖代々の町民の物じゃー、どんな理由があるにせよこれを傷つける事は許さんぞー!?!」

……ああ、そや。この爺さんの存在すっかり忘れてたわ。もどかしいなあ、もう目の前に目的のお宝があるっちゅうのに、それを指くわえて眺めているだけやなんて！ 歩美さんの説得も失敗に終わつたし、こりや町中走り回って町民一人一人に許可貰ってくる以外方法無いんかなあ？ でも、そないな事してたら日が暮れてまう！

「……ここはやむを得ない、お爺さん、すいません！」

「……薫、何するつもりや！？」

「うわあー！ 坊主、何の真似だー！？」

「桐原薫の十八番、土下座戦法ー！！」

「……ハア？」

……何やコイツ？ ズカズカと爺さんの目の前まで歩いていつて一発スコップをお見舞いするのかと思いきや、軽やかにササツと正座して深々と頭下げよつた。この前、波子さんに対してやった戦法と全く同じやないかい！ コイツには土下座以外何かアイデアは無いんかい！？

「何だ坊主ー！？ 男がそんな軽々と頭なんか下げんじゃねー！すぐに頭上げろー、ほら、みっともねーから上げろー！？」



「そうや薫！ オマエ、そんなんいくら何でもみつともなさすぎや！  
！　ウチはそないな事されてもちつとも嬉しくなんてないで！？」

「……お願いします！　どうか、どうか俺達に宝物を掘り出させて下さい！」

爺さんも困って力ずくで頭を上げさせようとしてんのに、薫は地面に額を付けたまま動こうとせん。そんなんしたって逆効果や！　岬も綾も呆れとるし、歩美さんかて困つとるやないか！？

「……薫君、あなたがそんな恥ずかしい事をしなくたっていいのよ？　これは私達町民の問題なんだから……」

「……違います……」

「……薫君、もうやめようよ？　これ以上恥をかいてどうすんの？」

「薫タン、ダッサーい！　みータン、薫タンにはもうガッカリです！」

「……違う……」

「さっきから違う違うって何が違うねん！？　何でもかんでも下手に回ってペコペコ頭下げりや許して貰える思たら大間違いやぞ！？　頭上げろや！　いつまでそんなつまらん醜態……！」

「違う！　これは恥でもなければ醜態でもない！　これは、俺の『

誠意』だ!!」

「……!」

地面から足を通ってお腹に響くぐらい気合いの入った薫の言葉。土下座という情けない格好ながらも、隙間から見えるその瞳は一点の曇りも無く、横顔の表情は今まで見た事が無いくらい凜としていた。本気の薫がそこにいた。

「……確かに俺は、今まで自分が蔑まされる事で物事を許して貰えると思っていた、でも、それは男として一番してはならない最低の行為だったんだ! 誠意は行動で示せるものじゃない、その人間の心意気で示すものなんだ! お爺さん、この土下座は決して媚びている訳ではありません、これが俺の、今の精一杯の誠意です! どうか、俺達にここを掘らせて下さい!!」

「……薫……」

薫が応えてくれてる。ウチの本気に、薫が見栄も恥もかなぐり捨てて全力の努力をしてくれている。さっきの言葉、ウチはいつもみたいに軽く受け流してしまってたけど、薫がウチに言うてきた言葉に一つも嘘なんてなかったんや。ホンマに、ホンマにウチの事を想ってくれてるんや……。

「……坊主の気持ちは良くわかったけどなー、ワシ一人の意見では何とも……」

「何言つてんだ吉蔵爺ー！？ アンタもこの港で八十年漁師やってきた海の男だろー！？ 男が男の誠意に応えられないで何が漁師魂だー！？」

「……波子さん！？」

「……ちよつと、漁業長にみんなまで、港を空にして一体どうしたのよー！？」

まだ少し酔いの覚めてない波子さんの後ろには、港で働いている腕つぶしの強そうな海の男達が指を鳴らして陣取つとつた。手にはスコップを始めつるはしみたいな金具に土嚢袋に、中にはフオークリフトまで乗り付けてくるオッサンまで選り取り見取りやつた。

「吉蔵爺さーん、俺らはこの神木の下を掘る事に一切不満は無いぞー！！？ 先祖様がこの子達の為に大切な宝物を台風や雷から守つてきてくれたと思えばこんなによそに自慢出来る話はねえからなー！？」

「病氣と戦う親父の為に、その子供達がわざわざこんな半島の先つちよまで昔の思い出の品を探しに来るなんて泣ける話じゃねーか！？ 俺なんかさっきから鼻水が出てきて止まんねーよチクショー！」

「さすがの吉蔵爺も最近の事は覚えてないみたいだな？ この娘さんの父親は五年前に武男を助けてくれた恩人の一人だぞ？ 俺達があの時の恩を返すには最高の場面だと思わないかい？」

「おおー、あの武男の時の恩人の娘なのかー！？ 思い出したー、鈴子婆さんの三人兄弟だよなー！？ 何だー、それを先に言ってくればすぐにでも神社の神主に許しを得に行っただぞー！？」

……武男？ 誰それ？ 何かまたウチらの知らん話がムクムク持ち上がってきたで？ オトン達、一体どんな様々な場所で暴れまくったんやろ？

「……昔、ちよつと色々あつてね？ でも、あれはどっちかって言うとお母さんの武勇伝だけどね……」

波子さんや裏の歩美さんの言動で鈴子婆さんの片鱗の一部は垣間見る事が出来たからな、その武勇伝、スッゴい興味あるわ。帰ったらオトンに聞いてみよう。

「茶髪ー！ お前の誠意、あたし達にしっかりと伝わったぞー！ とりあえずさつさとそのスコップ返せー！ あたしがあつという間にその木の真下にイノシシが掛かるほどのドテカい落とし穴掘ってやるー！」

「あ、あの、俺も手伝います！ 女性に力仕事させるなんてやつぱり……」

「馬鹿かお前ー！？ お前みたいな屁っ放り腰なんか役に立つかー！？ 漁師の背筋力ナメんじゃねー、こんな土くらいホオジロザメに比べりゃ屁のツッパリにもならねー！ ほら邪魔だー、そこだけ

「！！！」

「痛ああああい！！ スコップでお尻の穴刺すのはやめてえ！？」

……波子さんも鯨を釣り上げた事があるんかい？ ホンマにメチャクチャな女一族やなあ？ でも何か、ウチらの必死な努力が意外な形で実を結んだで！ こんな頼もしい援軍、ホンマにワンドホーや！！

「そんじゃ歩美ちゃん、鈴子婆さん譲りの啖呵を切って俺らに威勢をかけてくれい！？ 活きの良いのを一発頼むよぉ！？」

「いよゝし、オメエ達！ ガンガン気合い入れてガンガン掘り下げなー！ 漁師が土掘るくらいでへバンじゃないよ、伊東の荒波で生きる男の生き様、神様の目の前でとくに見せつけてやりなー！？」

「うははあー！ やっぱりお母さんはカッコいいなあー！！ あたしも早くこんな粋な女になりてーなー！？」

……もう、ついていけへんわこのテンション。そりゃこんな所でこんな人達に囲まれて育ったら、あんな非常識な人間達に成長する訳やなあ？ まだまだこの地には、ウチが知らないたくさんの秘密が隠されていてそうやわ……。

## 第54話 通り雨

「どうだー、そっち何かあったかー!?」

「駄目だー、こっちは掘っても掘っても何も出てこねー!」

「神社の境内側の方はどうだー!?」

「こっちは太い根っこがあつてなかなか掘っていけねー! 人手が足りねーよ、もっとこっち側に人よこしてくれー!?」

オトン達が若い頃に思い出として埋めた宝物を探すウチらの誠意に応えてくれた波子さんを始めとする逞しい漁師さん達の手伝いのお陰で、昔は神社の神木としてこの港町を見守り続けてきた切り株の丸いベンチの周りはサクサクと順調に穴が掘られていった。

しかし、あちらこちら色々掘ってもなかなかその現物のお宝が見つからへん。オトン達男三人が短時間で埋めた物やから、少し掘り起こせばすぐに見つかるやろうな、というウチらの軽い見通しは見事に外れ、大の男達が十人近く集まって取りかかるとるのにもう作業を開始してから一時間以上が経過しとった。近くにある時計を見るともう時刻は午後三時を回つとる。

そろそろお宝を見つけて帰宅の準備に取りかかると、オトンがいる病院まで到着する頃にはもう日が暮れて真っ暗になってまう。そないな事になったら病院の面会時間が終わってしまうし、下手すりゃ日の変わる時間までに家に帰れへんかもしれない! 一体オトン達はどれだけ深い場所にお宝を埋めたんや!?

「波子さん、ウチらもう一回さっきの穴の方をもうちよい掘ってみる！　もしかしたら、もつと深い所に埋めてあるかもしれへんもん！」

「おう、わかったー！　でもなー、あんま無理して掘って壁が崩れて生き埋めとかになんない？」

「うん、任しとき！　薫、こっち手伝って！？」

「……了解！」

最初は危ないからってみんなに言われてウチらは静かに作業を見ているだけにしようと思ってたんやけど、なかなかお宝が見つからなくてだんだん場の空気が悪うなってきたのを感じて、ウチは居ても立ってもいらなくなつてスコップを持ってみんなと一緒に穴を掘り始めた。もう黙って見ているだけなんは苦痛になってしもうてなあ。

そんなウチの姿を見た薫も穴に入って普段する事も無い慣れない作業と一緒になつて手伝ってくれた。岬の面倒は綾と歩美さんに見て貰うて、ウチと薫は二人で何とか協力しながら顔や服が土で汚れるのも構わずひたすら穴を掘り続けた。さすがに、サッカーするのとは違つてかなりの重労働やなあ、コレ……。

「……ぐっ……！」

「……ん？　薫、どないしたん？」

「……何でもない、何でもないから……」

「……何でもないって……、えっ、薫？　これ、どないしたん！？」

額に脂汗をかきながら顔を歪ませとる薫の足元に目をやると、左の足首の白い靴下の部分がじんわりと赤く染まっとった。……これ、血やないか！　出血してる！　怪我したんか！？　何でや！？　薫のヤツ、どこでこんな怪我を……！？

「……ちよつと待つて、確か薫の左足つて……、せや！　薫の左足は事故で……！」

……そうやった、義足やったんや！　確か、子供の頃に外国で何かの爆発事故に巻き込まれて、左足の足首から下を無くして専用の義足をはめているんやった！　失った部分の障害の程度が軽く、義足の出来具合がええからも普通の人間みたいに動いたり走ったりする事が出来るんですっかりその事を忘れてしまっとった！　前にキャンプ場に行った時に無理して歩けなくなるのを、ウチはそれを目の前で見てたのに！

「……薫、アカン！　もうええ、もうええからこれ以上掘るのやめてや！　もう無理せんでええから！」

「……大丈夫、まだ出来る、まだ出来るから……！」



「ええねん、もうええねん！ ごめんな？ 義足、また壊れたんちやうか？ それとも、左足に負担がかかって金具が食い込んだんとちゃうか？ ウチ、すっかり薫の足の事忘れて手伝わせてもって、ごめん！ ホンマにごめんな！？」

「……ハハハツ、翼が謝る事なんかじゃないよ？ 俺が自分の足の状態もわきまえずに勝手に一人で暴走した報いさ、金具と肉の間が擦り切れて出血しただけだろうから大した怪我じゃないよ、心配して貰うほどの事じゃないからさ……」

「……でもウチ、今までこんな大切な事をすっかり忘れて、薫に対して厳しい事言ったり無茶な事ばかり頼んだり、ウチ最低や、ホンマ最低の人間や！ ごめんな、ホンマにごめんな！？」

「……だから良いんだって、この怪我は翼のせいなんかじゃないよ？ 俺からしたらこの怪我は翼の為に体を張れた名誉の傷さ！ 俺も翔太や航みたいにしは男らしいところ見せようと粹がつてみたんだけど、やっぱり大して翼の役に立てなくて俺こそごめん！ 俺、もっと強い男だったらなあ、翼、ホントにごめん！」

「……何で薫が謝んねん、ごめんな、ホンマにごめんな……！」

「……ホンマ、ウチは最低の女やわ。薫かてオトンと同じ様に大きなハンデを背負わされた人間やったのに、そないな事すっかり忘れてずっと今までヒドい扱いばかりしてしもうた。掘り作業や港での漁船掃除みたいな重労働をやらせるのはもちろん、家からこない遠くまで連れてくる事自体間違っったんや。もしこれで薫の足に何か取り返しのつかない異常が起こったら、ウチでは何も責任取ってあげる事出来へんの……」。

それなのに、薫は痛みを堪えながらやせ我慢をしてウチに笑顔を見せてくれる。そない優しい目でウチを見んといてや、余計自分が嫌になって辛いかな。ウチ、もう自分が情けなくて腹立たしくて、胸がギュッてなつて苦しくて涙が出てくるがな……。

「……あれあれ、どうしたの？ 何で翼が泣き出しちゃうのさ？ 大丈夫だつてば、翼のせいでも何でもないんだからさ、ねっ？」

「……ごめん、ごめん、薫、ごめんなあ？ ホンマにごめん……」

「いいんだつて、大丈夫だから、もう泣くのはやめようよ？ 俺はいつも元気に振る舞ってくれる翼の笑顔が一番好きなんだからさ……」

……

頭までスッポリ隠れてしまうほど深い穴の中で薫の肩にもたれかかつて泣きじゃくるウチの姿を見て、周りの人間達もすっかり作業の手が止まってしもうた。なかなか思う通りに進まない搜索活動に、さすがの海の男達も疲れの色が見え始めとつた。もうここらが潮時なんかなあ……？

「……茶髪、後は任せろー、お前の分まであたしが頑張つて掘り……、つて、んんっ！？ おーい、これは一体何だー！？」

そんな中、顔中泥まみれになりながら一人黙々と穴を掘り下げとつた波子さんの大声が休憩所全体に響き渡つた。他の場所で穴を掘っていた漁師さん達も一斉に集まってきて、波子さんのスコップの先

の根っこの奥に埋まっている何かに視線を集中させた。

「おい、チビ子ー！　ここに何か派手な柄の風呂敷袋みたいのが根っこの間に絡まっとるぞー！　もしかしてお宝ってこれかー！？」

「……ちよつと、あらやだ！　その風呂敷は昔、母さんが大切にしていたお気に入りの柄の風呂敷じゃない！？　なぜか急に家の中から無くなっちゃって母さんが必死になって探していたのを覚えてるわ！　まさか何で、どうしてこんな所に！？」

歩美さんはこの風呂敷に見覚えがあるみたいで、まさかの地中からの発見に目をパチクリさせて首を傾げまくった。この風呂敷を盗み出してここに埋めた人間は森川の里の関係者、鈴子婆さんと親しい人物と見て間違いないやろうな。って事は、その犯人がここに埋めたこの風呂敷の中身は、まさか……！？

「……これが、オトン達の宝物……？」

かなり根っこが嚴重に絡んどってなかなか取り出すのに苦労したんやけど、何とか波子さんの手でこの風呂敷袋は穴の中から外に運び出されて地面の上に顔を出した。思い出の宝物、約三十年近い年月を経てお空の下に御披露目の時。ついに、ついにやっとウチらはオトン達が埋めたお宝を発見する事が出来たんや！

「どうやら絡んだ根っこがそのまま伸びていつて、最初に埋めた場

所よりもさらに深くに持つていかれてしまつてたみたいだなー？

こんなにたくさん根つこが絡まつていたつて事は、よつぱどこのお宝はこの神様に大切に護られていたんだろうなー？ チビ子、茶髪、やつたぞー！ あたしが約束通り宝物を掘り出してやつたからなー！」

「……おおきに、波子さん、ホンマにおおきに！ 歩美さん、おおきに！ 港の漁師さん達、みんなおおきに！ ホンマに、ホンマにおおきにい！！」

もう、ホンマにメチャメチャ嬉しかった！ 今度は嬉し涙がボロボロ出てきて止まらへん！ こんな感動は生まれて初めてや！ 昔に遭遇したどんな感動名場面よか、瑠璃が初めて歩いた時よか、麻美子が再び生きていく事を誓つてくれた時よか嬉しい！ 多分、サッカー日本代表がワールドカップで優勝するのと同じくらいメチャクチャ嬉しい！！

その場で何度もピョンピョン飛び跳ねて薫や綾や岬やみんなといっぱいたくさんハグしたわ、どんな仕草でこの喜びを表現したらええかもう全然わからへん！ ウチはやつとオトンに最高の親孝行をしてあげる事が出来たんや！ やっぱりウチがしようと事は間違つてなかつたんや！！

「……翼ちゃん？ 私達に気持ちを伝える前に、もっと先に感謝をしなくちゃいけない人達が他にいるんじゃないかしら？ あなたを信じてここまでついてきてくれた大切な友達がいるでしょ？」

「……うん、せやな！ 歩美さんの言う通りや！ 岬、綾、ここまですついてきてくれてホンマにおおきに！ オマエらは最高の親友や

でえー!!」

「おねータンはさすがおねータンのおねータンだね！ これでパパも大喜び！ カッコいいぜ、おねータン！ イエーイ!!」

「こんな素敵な感動場面に会えるなんて、私、やっぱり翼を信じてついてきて本当に良かった！ 翼、最高！ 私から褒美にチューしてあげるよ！ チュー!!」

「ごめんなあ綾、それはさすがにキモいんで断らせて貰うわ！ 寄るな、触るな、その汚らしい顔をウチに近づけるな!!」

でも、一番感謝せなあかんのは、痛い足を引きずって土を掘ったり駆け回ったり赤の他人にまで土下座してウチの為に頑張ってくれた薫の存在や。波子さんにスコップで殴られたり、ウチらに熱湯かけられたり散々やったもんなあ。まあ、半分は自業自得やったけど。

「……薫、ホンマにおおきに！ ウチ、さすがに今回は薫を見直したわ、ウチな、あのな、もしかしたら薫の事が……」

「……ンンウ」

「……な、何やねん？ 目えつぶって不細工な顔して唇尖らがして？」

「ええっ？ 決まってるじゃん!? チューだよチュー、ご褒美のチッスさ！ これくらいのご褒美貰っても罰は当たらないはずだぜえ？」

……ハ、ハア？ ご褒美のチッスって、キ、キ、キス！？ しかも唇にしるやとお！？ ここでウチのファーストキスを薫にい！？

「ア、ア、アホかオマエは！？ 人が少し油断したからって調子乗るなや！？ ウチはこう見えてもなあ、あ、あの、オトン以外の男とキ、キスした事なんて無いねん……、せやから、せやからあ、いきなりそないな事言われたら、ホンマに困まってしまうやないかあ……？」

「ウへへへへ、翼がすげえ照れてるうゝ！ ギザカワユスなあゝ！」

「……す、好き勝手に茶化しよってえ、ウチ、ホンマに怒るぞお……？」

「あー足痛い、すっげー足痛い、痛いなあ痛いなあ！ もしこれで二度と歩く事が出来なくなったらどうしましょ！？ せめてほつぺにでもいいから翼にチッスして貰えたらこんな痛みどこかに飛んでいつてしまっただけどなあ？ ほつぺでいいからさ！ お願い、お願い！ 薫ちゃん一生のお願い！！ チッスしてくれたらここから100mを9秒台で走っちゃう！！」

「……ほつぺで、ほつぺでええねんな？ まあ、ほつぺやったらええ、かなあ？ ほなら、ウチ小さいからちよつと屈んでや……？」

うわあ何かイヤやなあ、メツチャクチャ恥ずかしいわ。周りの人達は掘り出した風呂敷袋の中身に気を取られてこっちを見てへんから

ええけど、こんなウチのキャラに無い可愛い子ちゃんみたいな真似すんのはホンマにこそばゆい！

でもなあ、薫はそれだけの事をしてくれたもんなあ、これくらいしてやらんと可哀想やもんなあ？ ほっぺや、所詮はほっぺや。胸がはちきれそうなくらいドキドキ緊張するけど、女は度胸や！ とりあえず目はつぶった方がええのかな？ でもやっぱりドキドキするわあ、見えへんけど、少しずつ顔に近づいてきて薫の匂いがしてきた……。

「……おおっ？ 何だこれー！？ あれだけ必死になって探した宝物が、こんな下らん物なのかー！？ アッハッハッハー、馬鹿らしー！」

「……へっ？」

「……あれ？」

「うわあ！ オマエ、何しとんねん！！」

「痛ああああい！！」

波子さんの突然の爆笑声に驚いて薫のほっぺに唇がつく前に目を開けると、目の前でいつの間にか薫が正面向いて不細工面で唇尖らがせておった！ うわあ気色悪い、あまりのキシヨさに勝手に体が反応して思いつ切り薫の頬を平手打ちしてしもうた。やっぱりコイツ最低や、危うく騙されてウチのファーストキスをこの卑怯者に奪われるところやったわ！

「……いったゝい！ ひでえよお、とろけるスイートチツスじゃなくてスナップの効いた痛恨の一撃をこの薫ちゃんの可愛い天使のほっぺにお見舞いするなんてさあ、あんまりだよ翼〜？」

「約束をキチンと守れへんヤツに誰かご褒美なんてくれてやるかこのアホっ！！ それにそないな事言うてる場合とちゃうねん、何か緊急事態発生や！」

下らん物？ そんなアホな、これはオトンが若かれし頃に泣く泣く諦めた儚い夢が詰まった大切な宝物やろ？ それを事情も何も知らん波子さんが一目した途端に下らん物なんて扱き下ろすってどういう事やねん？ 風呂敷袋の中に入ってたオトンの宝物って一体何だったんや！？

「ほら、チビ子、茶髪、見てみー？ 『昼下がりの淫らな若奥様』、『女子校生の芽生えの春』、『女子社員の秘密の深夜残業』、その他諸々、みーんなアソコ丸見えの素っ裸の女が写つとる茶髪が好きそうなスケベなエロ本ばかりだー！」

「ワオ！ これは昔、昭和の血気盛んな若者達が誰もが一度は手にした伝説の性のバイブル、『ビ二本』ってヤツですねえ！？ さすがは新作さんだ、俺がエロスの象徴の神として崇める男の中の男たる素晴らしきおっぱい王なり！」

「やっぱりお前の父ちゃんはスケベな男だなー？ こんなもんが宝物かー、アッハッハッハー！」



「…………へ、へえっ…………？」

「……んなアホな、んなアホな、んなアホなあゝ！？　ありえへん、ウチらがこんなに苦勞して探し回った宝物がただの工口本の束やつてえ！？　せやったら、ウチが一途にオトンを想って勇氣を振り絞り頑張ってきた今までの努力は一体何やったん？　それでも不安にかられてたくさん流した涙は一体何やったん？　みんなにみつともない姿晒しても、なりふり構わず突き進んできたこの三日間は一体何やったんやあゝ！？」

「あらちよつとやだやだ！　これも昔、私と母さんが虎ちゃんから取り上げて筆笥の奥に隠した物じゃない！？　虎ちゃんたら、こんな教育に悪い本をたくさん持ち帰ってきては他の孤児院の子供達に見せたりしてたのよ？　『女はいいぞ？』なんて悪ふざけしながら！」

「…………へえっ？　虎ちゃんって虎太郎オトン？　ほなら歩美さん、この工口本はオトンの物とちゃうねんな！？」

「確かに、間違いなくこれは私と母さんが虎ちゃんから没収した物よ？　新ちゃんもエツチな子だったけど、こんな下品な物を家に持ち込む事まではしなかったわ！　下品さではあの三人の中で一番虎ちゃんがヒドかったわ！」

「そうかー、これはあの男氣溢れる虎太郎先生の工口本だったのかー？　さすがは先生、丸見え無修正人生だなー！？　あたし、すっかり勘違いしちゃったわー！　すまん、チビ子ー？」

「でも、この風呂敷袋といい、いつの間に箆笥の中からこれを見つけて出してここに埋めやがったんだ？ てっきり泥棒でも入ったのか、って勘違いしちゃねえか、あのクソガキ共め……！」

ちよつと歩美さんが怒り気味で口調が裏モードに変わったのが気になったけど、とりあえずウチはその話を聞いて一安心したわー！  
まあ、啓介オトンの話やと、ウチのオトンはエロ関係の私物はみんなこの神社の仏像の下に隠してたらしいしな。よっぽど鈴婆さんと歩美さんに見つかるのが恐かったのかな？ しかし、虎太郎オトンも結構なスケベ親父やなあ、ヒドいおっさんやわ！

「んー？ 本の下のはこれは何だい？ 薄っぺらいのか数枚、お母さん、もしかしてこれってレコードかい？」

「ヤダ、これも！ これも私と母さんで啓ちゃんから没収したレコード！ 啓ちゃんは夜遅くまで外国のロックのレコードを聞きながらギターを弾いて他の子達の眠りを邪魔するから、全部取り上げて本と一緒に隠したのよ？ 一体いつ盗み出したのかしら？ やっぱ泥棒の仕業じゃなかったのね……？」

こちらのレコード数枚は一目瞭然見ての通り音楽家の啓介オトンの宝物やった。ビートルズ、ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジミー・ヘンドリックス、ローリングストーンズなど……。いかにも啓介オトンらしい品物や。小さい頃からこんなを聞いて音楽の才能を伸ばしていったんやろなあ……。

でも、そんな昔の代物を前に少し昭和のノスタルジックな雰囲気

浸つとつたウチも風呂敷袋を全部広げてみて一気に青ざめた。中身は虎太郎オトンのエロ本が計八冊、その下に啓介オトンのレコードが計十枚、あとはそれらを包んでいた風呂敷が一枚。何と一番肝心のオトンの宝物つてもんがどこにもあらなかったんや……！

「そんなアホな！？ さっきオトンは電話で『諦めた夢を埋めた』って言ってたで！？ 何も無い訳ない、オトンの宝物も必ず一緒にあるはずや！？」

「でもなー、もうこの穴の中には何一つ物らしき物は何にも無いぞー？ なあなあ、お母さん、新ちゃんオヤジからも何か没収した物はないか覚えてないかー？」

「……いいえ、新ちゃんは取り上げなきゃいけないような悪い物を持っていた記憶は無いわ、新ちゃんの宝物、諦めた夢、一体何かしら……？」

ウチらが焦って穴の中や風呂敷の裏表を念入りに確認してオトンの宝物を探している最中、何やらウチの近くで邪悪なスケベ心が立ち込め渦巻いとる嫌悪感を感じた。あの時あの病院でオトンと薫が看護婦相手に鼻の下を伸ばしまくってたあの雰囲気。恐る恐る後ろを振り向き足元を見ると、茶髪のエロ坊主が目をギラギラさせて昭和のエロの落とし物を読み漁ってたんや！

「……薫オマエ、岬も近くににいるのに何を御開帳しとんねんこのどアホっ！？」

「痛ああああい！！ 顔面キックは靴底の土を落としてからにしてえ！？ つーか、翼のスカートも御開帳でビ二本のマル禁部分とオーバーラップして薫ちゃん体の一部がホットホット！！」

「うわあ！ 最低や最低や！！ ウチのトップシークレットな女の子の大切な部分を勝手に妄想しよって！ 変態！ この変態、変態！！ 死ねっ死ねっ死ねえっ！！」

ウチが容赦なく薫の顔面を踏み潰しとると、その弾みで一冊の工口本の隙間から圧縮されてヒラヒラになった一枚の布地の様な物が飛び出してきた。ペタンコに折り畳まれておったけど、どうやら何かYシャツの様な上着の服。何か文字と数字みたいなもんが刺繍されとるそれを見た時、ウチはそれが何なのか、そしてオトンが言うてた『諦めた夢』の言葉の意味が何なのか、頭に稲妻が落ちたみたいに直感が走りそれが全て理解出来た。

「……これ、これってまさか、まさか！？」

その布地を手で拾い上げ一つ一つ折り目を広げて空にかざした時、ウチの直感確信に変わった。そうやったんや、オトンが諦めざる負えなかった大切な記憶、思い出したくない過去の消せない後悔、それはやっぱり、宿命として背負ってしまった病魔によって栄光への道を奪われ、娘であるウチに託してくれたオトンの一番の夢……！

「……南下賀茂高、背番号10……、間違えない、これってサッカーチームのユニフォームや！」

南下賀茂高と言う名前とウチが持っているユニフォームを見て、歩美さんは何か大切な事を思い出したみたいに口を押さえて絶句した。そして、今にも泣き出しそうな感極まった表情で静かに話し始めた。

「……これ、これは、新ちゃんの高校生の時の部活のユニフォームよ！　こんな、こんな所にあつた……！」

「やっぱりそうや、オトンの大切な宝物は高校時代の部活のサッカーユニフォームやったんやな！」

「……あの子は、あの子は本当に、もう……」

「……歩美さん？　一体どないしたん？」

「……馬鹿っ、本当にあの子は馬鹿なんだから……！」

手で口を押さえたまま、歩美さんは膝を突いて座り込みその場で泣き出してしもうた。ウチらはあまりに突然の事で呆気に取られてしばらく話しかける事が出来へんかったけど、波子さんに介抱されて落ち着きを取り戻した歩美さんはこのユニフォームにまつわるオトンの過去の話を教えてくれた。

「……あの子はね、小学生の頃からサッカーの盛んな静岡県内でも有数のサッカー少年だったのよ、中学生の時は何度も県代表チームの一員に選ばれて、全国大会でも大活躍して将来を期待された有望

選手だったわ……」

うん、それはウチもオトンから聞いた事がある。子供の頃から類い希なサッカーセンスを開花させていたオトンは高校進学の際、静岡県内の様々なサッカー強豪校から入学を推薦されていた。でも、その為には我が家同然に暮らしていた森川の里を出て高校の部活寮に引っ越さないかん事になって、みんなと離れて暮らすのが嫌だったオトンはそれらの推薦を全部蹴っ飛ばして孤児院の近くにあった小さい公立高校に入学したんやっけ……。

「本当に馬鹿よね、立派な高校に入学してそこで全国大会に出て活躍すれば、当時はプロのサッカーリーグは無くとも実業団のチームに入ってお仕事にも困らなかったのにね、『兄弟と離れて暮らすなんて考えられへん、母ちゃんと姉ちゃん置いて自分だけ一人安定した暮らしするなんて絶対に嫌や』なんて言い出しちゃってね、あの子が外の世界に出て成功してくれる事が母さんの一番の喜びだったのにねえ……」

それでも、オトンはその公立高校のサッカー部に入部して三年間の高校生活で小さい港町の弱小サッカー部を全国大会の県代表戦決勝の舞台にまで導いていったんや。有り余る才能と経験豊富なキャプテンシーを武器にして……。

「その高校の名前が、そのユニフォームに刻まれている南下賀茂高等学校よ？　今はもう、少子化と県の学校再編法案によって廃校になってしまったけど、新ちゃんやチームのみんなを率いて県内の

強豪校を破って決勝の舞台でもこのユニフォームを着てグラウンドに立つはずだった、はずだったのよ……」

その決勝戦の前日、夜遅くまで学校のグラウンドで練習に励んどったオトンに対して死神が非情な首刈り鎌を振りかざしてきよったんや。突然、胸の強い痛みを感じたオトンはその場に倒れて意識を失い、救急車に運ばれて心臓内科の救急病院で緊急手術を受ける事になった。手術の為にその時着ていたサッカーユニフォームはハサミで切られてもうたらしい。

何とか一命と取り留めて意識が戻ったオトンに医者から突きつけられたあまりに辛く悲しい二つの現実。一つは自分が倒れている内に『敗退』と言う形で終わってしまった高校最後の大会の終焉。そしてもう一つは、日本から世界の華々しいサッカーリーグへの移籍と日本代表の一員として最高峰の舞台であるワールドカップへの出場を夢見ていたオトンのサッカー人生の終焉命令と、近い内に人生そのものも終焉を迎える可能性があるかと告げられた死の宣告。

「……辛かったわ、私も母さんも涙が枯れるほど泣いた、何で、どうして？ どうしてこんなに家族や兄弟想いの優しくて頑張り屋さんの新ちゃんに対してこんな惨い運命を与えるの？ って、あの時私は心から神様を憎んだのを覚えてるわ……」

病院に入院したオトンはしばらく、絶望に打ちひしがれて誰ともまともに会話しなくなってしまうたらしい。それがたとえ見舞いに来た虎太郎オトンや啓介オトンやろうと、歩美さんでも母親同然の鈴婆さんでも病室の窓の外を眺めたまま返事すらしなかったそうや。

「……ウチがオトンから聞いた話はそこまでや、そういえば、オトンはこんな状況からどないして再び立ち上がる事が出来たんやるか？ 報道ジャーナリストを目指す事になったのは大学で出逢ったオカンの影響やって聞いてはいるけど、そないな状態でどうやって大学に……？」

「……そこで、このユニフォームが話に関わってくるのよ？ 病院でただ流れていく一日一日を抜け殻みたいになって過ごしていた新ちゃんの元に、三年間一緒に汗を流してきた高校のサッカー部の仲間達がお見舞いに来てくれたのよ……」

サッカー部の仲間達は、病に倒れ試合に出場出来なかったキャプテンを一言も責めたりなんてしなかったそうや。それどころか、『俺達のチームのキャプテンの代わりなんて誰もいない』ってオトンの代名詞の背番号10が入ったユニフォームを再び新しく作り直してプレゼントしてくれたそうなんや。

「……それでもしばらくはね、退院して家に帰ってきてても新ちゃん は元の明るい男の子には戻らなかったのよ、その姿を見た母さんは少しでも早く新ちゃんの心が晴れますように、って毎日毎日そのユニフォームを丁寧に洗い続けたのよ、晴れの日も、雨の日も、嵐の日でも毎日毎日……、一度も服に袖を通してないんだからちっとも汚れてなんていないのよ？ それでも母さんは、高校の部活動の練習で毎日汗まみれで帰ってきたあの時のユニフォームと同じ様に、毎日毎日洗濯し続けたの……」



そして、その鈴子婆さんの暖かい愛情はいつしかオトンの曇っていた心の中も真っ白に洗い流していった。汚れてもいないユニフォームを洗濯させるのは忍びない、ってオトンは再びユニフォームに袖を通してリハビリ程度の運動を始めるようになった。

孤児院の周りの道をフラフラと気軽に散歩したり、心臓に負担がからん程度にサッカーボールをリフティングをしたりと、一人の社会人としての復帰を目指して人生を再出発する事を決意したんやて。自分を一生懸命支えてくれる、鈴子婆さんや歩美さん、サッカー部の仲間達などみんなの誠意に目一杯応える為に……。

「……でもね、新ちゃんが都内の大学に合格して虎ちゃんや啓ちゃんと一緒に孤児院を出る事になった時、母さんはいつもの様にユニフォームを綺麗に洗濯して、巣立ちの記念に新ちゃんへ手渡してあげようとしたらしいんだけど……」

「……何か、あつたん？」

「庭に干していたユニフォームがいつの間にか無くなってしまったいたのよ、母さんは風に飛ばされてしまったと思って泣いて新ちゃんに謝っていたわ、人前であまり涙を見せる人じゃなかったのにね、でも、そんな母さんを新ちゃんは笑って許してあげていたわ、『気にする事なんてない、もう俺はあれが無くても大丈夫や、生まれ変わったんや』って……」

……それは多分やけど、オトンが鈴子婆さんに隠れてユニフォームを回収して、虎太郎オトン達と一緒にこの木の下に埋めたんやと思う。だって、オトン言うてたもん。ここに埋めたのは親に捨てられた孤児として育った悲しい過去の記憶やって。新たな自分に生まれ

変わる為の儀式やったって。そしていつか、社会に出て成功した時にみんなで掘り返して昔の事を語り合いたいってな。

きつとオトンにとつて、このユニフォームは自分の夢を絶たれた悲しき記憶の残骸で、それによって生きる希望を失い殻に閉じこもってしまった弱い自分の姿の象徴やったんやろな。それを見る度にオトンはその時の自分の事を思い出して、それが嫌でここに忌まわしき過去と共にこのユニフォームを埋めていったんやと思うねん……。

「……でもな、こんなに暖かい人達の想いがこもっている物、絶対に捨てたらあかん大切な思い出の宝物やで！ 今、病院で弱音吐いとるオトンは生きる希望を無くしたその時と同じ弱いオトンや！ せやからこそ、今のオトンにはこのユニフォームが必要やねん！ 生きていく勇気を奮い立たせてくれた、みんなの誠意がたくさん詰まったこのユニフォームで、再びあの時の様に生きる希望を取り戻して貰うんや！」

「……これでやっと、あの時の母さんの想いも一緒に今の新ちゃんの元へ届けてあげる事が出来るわね、翼ちゃん、私達の新ちゃんへの愛情の届け役、宜しく頼んだわよ！？」

「任せときや！ 今度はウチが鈴子婆さんの代わりにこのユニフォームとオトンの心をガシガシ洗い上げてやんねん！ そんなで、このウチの太陽の様な眩しい笑顔で天日干しにしてパリッパリの真っ白に仕上げてあげんねん！」

よっしゃあ！ これで肝心のお宝も見事にゲットやで！ 何かとんでもないデカイ代物やったら持ち帰るのどないしょ？ なんて不安やったけど、これなら折り畳んでバックに入れば楽勝や！ 残り

の二人のお宝は……、レコードはまだええけど、エロ本はさすがに勘弁して貰いたいなあ……？

「心配しないでいいわよ、二人の私物は私が責任を持って配達便で送ってあげるわ、もちろん、没収した物を勝手に盗み出したお叱りの文と盗難賠償も一緒に添えてね？」

「えっ？ 昭和のレジェンドエロス『ビ二本』とはここでオサラバですか？ 薫ちゃん、もともっと女体の神秘の部分に触れたかったのに、シヨボーン……」

「ええ加減にせえやオマエはホンマにこのエロ坊主が！ エロ本ばかり読んどったら彼女なんか出来へん、ってこの前オトンが言うったで！？」

「オウ、イエス！ 俺にはつばピーっていう魅力的で希少価値満点のロリロリマイハニーがいたんだよね！ エへへ、こっちの方が興味津々だぜ？ じゃあ、女体の神秘のお勉強は是非とも翼から手取り足取り直接指導を……」

「歩美さん、ホンマ助かります、おおきに！ ほなら、さっさと空けた穴埋めてとっとと帰る準備しよっつと！」

「あれえ？ もしかして俺って今、見事なくらいに無視されてるう？ 俺って今、極めて無色透明で無味無臭？ 空気って感じい？ あんまりだぜ、シヨボーン……」

何やかんやとまあ色々あったけど、全てが上手く事が進んで今回も

これにて一件落着！ カツカツカツ！ な～んて思つて余裕ぶつこ  
いとつたら突然、休憩所内を吹き荒れ暴れまくる突風が襲いかかっ  
てきた。空を見るといつの間にもやら気持ちの悪い真つ黒な雲が辺り  
一面を包み込む。都会ではあまり見た事のない異様な雲の形、何や  
ろう、何か物凄い嫌な予感がしてきたわ……。

「おーい、お前さん達、こんな所にこんなデカイ穴ほじくり空け  
て何やってんだあ！？」

「おー、神主さんかー？ ちょっと野暮用があつてなー、神木様の  
周りをちよいと掘らせて貰つたんだー！ もう用は済んだから、す  
ぐにみんなで埋め戻すから心配すんなー！？」

「馬鹿っ！ 吉蔵爺、そんな事言つてる場合じゃねーぞお！？ 天  
気予報を聞いてないのか？ もうすぐ大雨が降つて来るぞお！？」

……何やて？ 大雨？ そういやさつき、港で波子さん達が嵐が来  
るから漁に出るとか出ないとかケンカしながら話しとつたなあ……？

「伊豆半島全域に大雨洪水雷波浪警報出てんだぞお！？ 今最近流  
行りのゲリラ豪雨だ、静岡県内あちこちで大洪水だあ！ 台風並み  
の嵐がここにももうすぐ来ちゃうぞお！？」

「えっ、そない殺生なあ！？ 波子さん、どないしよ！？」

「やべー！ おーいみんなー、早いとこ穴埋めねーと池が出来ちま  
うぞー！ 早くしろー、早くしねーと、雨が……！」

ドッバアバアバアアア！！！！！！

「降ってきたー！！」

もういきなりや。まるでバケツをひっくり返した、と言うよりまるでナイアガラの滝の様なとんでもない大雨がウチらの頭上を容赦なく襲いかかってきよったでー！　とてもやないけどこんな傘無しで立つとったらあつという間にパンツまですぶ濡れや、早よどこか屋根のある安全な場所に逃げんとアカンで！？

「……チビ子！　茶髪！　お前達はお母さん連れて家に帰っとけー！　穴はあたし達で埋めるから心配すんなー！？」

波子さんの言葉に甘えて、ウチらはオトンのユニフォームを握り締めながら孤児院まで全速力で大雨の中を走り抜けた。薫も足が痛かったやろうけど何とかビッコ引きながらウチらの後をついてきた。

「……あゝあ、すっかり頭から足の先まですぶ濡れや……」

「雨に濡れて髪から雫が滴る翼もセクスイー！　今宵僕は君と愛という名の海に溺れたいぜベイビー？」

「……勝手に溺死してろ、アホッ！」

とりあえずびしょ濡れの服を着替えて家の中から外の様子を見てみると、雨は弱くなるどころかますますその雨足を強め始めた。その激しい豪雨に後から帰ってきた波子さん達と呆氣に取られていると、港からきた若い兄ちゃんがウチらに絶望的な情報を仕入れてこちらにやってきた。

「おい、歩美さん大変だぞー！ この大雨で伊豆急行は全線運転見合わせだとよー！」

「……えっ！ それはマズいわ！ 翼ちゃん達は電車でここまで来たんでしょ！？ これじゃみんな帰れなくなっちゃうじゃないの！？」

「だから代わりに俺がどこか電車が走ってる所まで車を出そうと思っただけだよー、そしたら今度は国道が雨で陥没して通行止めになっちまったんだよー！ もうどうにもなんねーよー！？」

「……えっ、ちょっと待ってや！？ って事は、ウチら今日中に家に帰る事が出来なくなっただんか！？」

「ええっ！？ 翼、それはマズいよ！ 私達、明日から学校なんだよ！？ 私はお母さんにどんな言い訳すればいいの！？ もし、男女で泊まりがけの旅行をしてたなんて学校の生徒達にバレたら、私は不良娘ってみんなからレッテル張られちゃう！」

「そつだよそつだよ！ もし、男女で泊まりがけの旅行をしてたなんて学校の生徒達にバレたら、薫ちゃん不良息子ってみんなにレッ

テル貼られちゃう!」

「オマエは黙つとけやアホッ! いちいち話をややこしくするなや!?!」

「……もう、これではどうにもならないわね、翼ちゃん、残念だけと今日は諦めましょう、新ちゃんには私から連絡をしてあげるから……」

「……そんな……」

あんまりや、そんなあんまりや! せっかく目的の宝物も見つけてあとはオトンとの時間の約束を守るだけやってのに、何でここで雨なんか立ち往生されなきゃアカンねや!? もう何やねん!? 何で神様はこないに次から次へとウチらに厳しい試練を与えてくんねん!? ここまで来て諦めるのなんて嫌や、絶対に嫌や!

「ウチ、絶対に今日中にオトンの元まで帰る! 電車や車がダメなら自分の足で走ってでも帰る! 絶対に帰るんや!」

「それも無理だつてば翼! 私も岬ちゃんもそんな真似出来ないし、第一、薫君は足に怪我をしているんだよ!? こんな嵐の中を走ったりしたら翼だってタダじゃ済まないよ!」

「綾達はここに残って晴れてから帰ればええ! こんな無茶な事にまでオマエらを巻き込みたくないもん、ウチ一人だけでオトンの元へ帰るんや!」

「翼、落ち着けつて！ そんな事したって新作さんは絶対に喜ばないぞ！？ これはさすがに俺も反対する！」

「そうよ翼ちゃん？ 薫君の言う通り、今日はもう諦めなさい！ 新ちゃんにはまた明日会ってユニフォームを渡してあげればいいのよ、だから……！」

「嫌や！ 絶対に嫌や！ ウチとオトンに残された時間はもうそんなに残ってへんねん！ ウチとオトンにとっての一分一秒は他の誰よりも大切な時間なんや！ 薫なんかにはウチとオトンの何がわかんねん、ウチは絶対にオトンとの約束を守るんやー！！」

「……翼……」

「翼ちゃん、いい加減に……！」

「お母さーん！ ちょっと待ってー！」

綾と薫に取り押さえられて暴れるウチを歩美さんが平手打ちしようとした時、さっきの大雨で濡れた髪を拭いとった波子さんがタオルを床に叩きつけてこちらに歩み寄ってきた。その顔はニコニコしていたいつもの笑顔やのうて、歩美さんと同じくらい怖い顔をしていた。

「何や！ 歩美さんの代わりに波子さんがウチの事をひっぱたくつもりなんか！？ ひっぱたくならひっぱたけや！ それでもウチは行く、オトンの元へ帰るんや！」



「……そんなに、父ちゃんとの約束を守りたいのか……？」

「当たり前や！ オトンはウチにとって掛け替えの無い大切な世界でたった一人のオトンや！ ここで諦めてもしオトンが明日この世からいなくなつとてたら、ウチは後悔しても後悔しきれへん！ そんなんは絶対に嫌や、ウチは必ずにオトンとの約束を守る、守りたいんやあ……！」

「……よしっ！ その決意、しかと聞き入れたぞー！ 任せとけー、それならあたしが責任持つてお前らを電車が走ってる街の港まで連れて行つてやるー！！ 武雄、電車が走ってるここから一番近い街はどこだー！？」

「……熱海からは東海道線がノロノロ運転で走ってるらしいけど……、波子、お前まさか！？」

「熱海だなー！？ よーし、わかったー！ おいチビ子、茶髪、泣き虫、チビチビ子、急いで帰りの身支度して港まで行くぞー、さつさと準備しろー！？」

「……ええっ、港つてまさか！？ 波子さん、こんな嵐の中で船を出すつもりかいな！？ だつて波子さんのオトンは同じ様な荒れた海の中で船もろとも行方不明になつてしもたんやろ！？ そないな事言い出したら、歩美さんはきつと……！」

「波子！ アンタ一体、何馬鹿な事言い出してるんだい！ アンタまであの人みたいに私を置いてどこかに行つてしまうつもりなのかい！？ そんな事になつたら、私は母さんとあの人に何て報告した

ら……」

「……大丈夫だ、お母さん！ あたしは負けねー、あたしは伊東の海の魔物なんか絶対に負けねー！ あたしよりも小さい娘っ子がこれだけ腹括つてんのに、あたしが屁っ放り腰なんてかましてられるかってんだー！ あたしは最強の海の男の娘、伊東一番の女の娘、波子だー！ この世界中の海の最高の漁師になる、森川波子だー！  
！」

波子さんの気合いに満ちた啖呵の前に歩美さんは泣きながら波子さんを抱き締めてその決意を見送ってくれた。港からも見える荒れ狂う見通しの悪い海の中、ウチのオトンとの約束とウチらの命は波子さんの腕一本に託される事になった。

綾あたりは船に乗るのを嫌がって駄々でもこねるかと思いきや、みんな覚悟を決めたみたいに凜々しい顔して合羽を着て船に乗り込んだ。岬のヤツも小さい割には度胸の座った女やなあ？

「いいかチビ子ー！ あたしはこの命をかけても絶対にお前達を無事に熱海まで連れて行くー！ だから、お前は絶対に約束を守ってあたしの祖母ちゃんやお母さんの願いをお前の父ちゃんの元に届けるよー！ これはあたしとチビ子の約束だー！！」

「うん！ ウチは絶対にみんなの気持ちをオトンの元へ届けるで！ 絶対や、約束するでー！！」

「よし！ それじゃあ、行くぞー！！ 振り落とされない様にしつかり掴まれー！？ 武雄、サポート頼むぞー！？」

「おうよー！ 波子、お前の後ろには俺がいるから心配すんなー！  
？ 二人で一緒に源さんの伝説を塗り変えるんだー！！」

「船を、出すぞー！！」

ついには命懸けの大冒険にまで発展してしもうたウチのお宝探索の  
連休三日間。でも、ここまで来たらもう引き下がる事なんか出来る  
かいな！？ オトン、ウチはどんな障害が待っていようと絶対  
諦めへんで！ 必ず、必ずこのみんなの想いが詰まっとなるこの思い  
出のユニフォームをオトンの元へ届けるからな、待っててや！！

## 第55話 HANABI

空一面を黒く澱んだ雲が真つ暗な荒れた海の中へ、ウチらを乗せた波子さんの漁船は熱海に向かって石廊崎の港を出発した。傘をさしても意味の無いぐらい強い豪雨の中、ウチらを心配してくれとる歩美さんや港の漁師さん達は停泊場から船の姿が見えなくなるまで大声を出して見送ってくれた。

「絶対に無事に熱海に行くんだぞー！ 着いたら無線で連絡しろよー！！」

「翼ちゃん！ 岬ちゃん！ みんなー！ 今度は新ちゃんと一緒にここに遊びに来てねー！？ 約束よー！？ 波子ー！ 絶対に無事に翼ちゃん達を送り届けて帰ってくるのよー！？ 絶対よ、約束だからねー！！」

港の人達、みんなええ人ばかりやったなあ。あの人達の助けがなかったらウチが今大事に抱えてるオトンの宝物のユニフォームを見つける事は出来なかったもんな。ホンマに、みんなおおきに！

そして歩美さん、ホンマに優しくて、暖かくて、強い女の人やったなあ。オトンがホンマのお姉さんみたいに慕ってる理由が良くわかったわ。ウチにとっても歩美さんはもう一人のオカンの様な存在、ホンマにおおきに！

今度ここに来る時は元気になったオトンを連れて来るさかいに。絶対、絶対にまた来るからな！ その時は、今度はウチがみんなの手

助けをして恩返しするんや！ ホンマにみんな、ええ思い出をいっぱいいっぱいありがとな〜！

「……つても、全部無事に家まで帰れたらの話やけどなあ〜！？」

オカンの事故スレスレの危険なドライビングテクニックに耐えてきたんやから荒海ぐらい楽勝やろ？ なんて軽い気持ちに船に乗り込んだらこれがもうメチャクチャや！ 船ごと波に揺すられて立っている事はおろか、まともに前を向いている事すら全然出来へん！ 運転室の端っこにみんなで丸まって手すりにしがみついても、横の出入り口からジャンジャン海の水が入り込んでくる！ 遊園地の絶叫マシンの百倍以上怖いわー！！

「アカ〜ン！ もう船酔いとか言ってるレベルとちゃうで！？ 油断したらあっちゅう間に海に投げ出されてまうがな！？ さすがのウチでもこれは無理や〜！！」

「アツハハハ、もう笑うしかないや！ これは死ぬる、確実に死ぬる！ 神様、今までの自分のしたエッチな悪戯を全て懺悔します！ だからどうかこの桐原薫をお助け下さいませ〜！？」

「いやあ〜！ イヤだよイヤだよ、私、こんな所でこの若さで死にたくないないよあ〜！！ やっぱ船なんて乗らずにおとなしく向こうで待ってれば良かった〜！！ お父さ〜ん、お母さ〜ん！！」

「お前ら、ギヤーギヤー騒いでないでしっかり壁にしがみついてろー！ 絶対に立ち上がったたりするなよー、さもないと海へ降り落と

されちまうからなー!?」

ウチらが恐怖のあまり床にしゃがみ込んで震え上がってんのに、波子さんはこのヒドい揺れを膝の動きで上手く吸収しながら寄れる事無く立って舵を握っていた。ハンパないバランス感覚と強い足腰や。この人がもしサッカーとか他のスポーツ選手になったらさぞかし名選手になれるやろうな、メンタル面もメチャクチャ強いし。ウチ、波子さんの運動神経がスゴく羨ましいわ〜!

「うわーい! おねータン、この船ママが運転する車よりもっと面白いよー!? グーラグラ、グーラグラ、ジェットコースターみたいーい! キヤハハハハー!」

……メンタル面だけ言ったら岬の根性も大したもんや。まだ小さいガキやからあまり恐怖を知らないからかもしれないけど、ウチらが真っ青な顔してんのにコイツ一人だけキャツキャツと喜んどる。もしかしたらコイツ、将来ウチよりもスゴいとしてもない大物になるかもしれないなあ? こんな切羽詰まった状況を楽しめるなんて、ポジティブ思考もええとこやでホンマに……。

「武雄ー! レーダーの方はどうだー!?」

「ああ、大丈夫だー! ちゃんと目的地に向かって進んでるぞー! 波子、その調子だー!」

波子さんと武雄って言う兄ちゃんとのコンビネーションは息ぴったりで、こんなに大波に揺さぶられとる中でも冷静に舵取りをこなしていた。ウチより少し年上の若い二人なのに、その作業の確かさと早さはまるでベテランの漁師さんみたいや。やっぱり海で育った人間ってスゴいわ、カツコええな〜！

「……うわっ！！」

……な〜んてウチが二人の姿に見とれていた次の瞬間、今までのものとは遥かに違う強い波が船の側面から思いつ切り襲いかかってきた。その勢いで船は一瞬真横に近いぐらゐまで傾きあわや転覆寸前になった。

「ぎゃああ〜！ 船が沈む〜！！」

「……翼！ 俺に掴まれ！」

「……薫！ 離さんとして、ウチを離さんとしてえ！！」

「……転覆なんかしてたまるかあー！ あたしはみんなと約束したんだー！ チビ子達を無事に届ける、絶対にお母さんの元に帰る、って約束したんだー！！」

波子さんが傾く方向とは逆に体重を載せて舵を思いつ切り体の方に引つ張ると、奇跡的に船は再び真っ直ぐ立ち上がり転覆を免れる事が出来た。しかし元に戻った時の揺れの衝撃は物凄く、ウチらは運

転室の逆の壁までまとめて吹っ飛ばされてしもった！

「…………ぐへっ！！」

「…………がつ！！」

その時、何かが金属の様な物に激突する鈍い音が室内に響き渡った。何や、誰かがぶつかつたんか！？ みんな無事かいな！？

「…………か、薫、綾、岬、みんな大丈夫か…………？」

「…………薫ちゃん、翼の下敷きになっても何とか生きてまゝす…………」

「…………うえゝん、怖かったよ、本当に死ぬかと思った…………」

「お船面白ーい！ みータン、大きくなったら漁師さんになってみたーい！！」

…………どうやらウチらはみんな無事みたいやな。せやったら、さっきの鈍い金属音は一体何や？ 何か機材でも宙に飛んだんかなあ…………？

「…………波子！ 大丈夫か、しっかりせい！！」

武雄さんの絶叫に振り向いてみると、運転室の端で波子さんが頭を



押さえてうずくまっていた。良く見ると、手で押さえとる箇所からは血が出て指の間を伝い床に落ちていた。さっきの音は波子さんが室内の機材に頭をぶつけた音やったんや！

「……波子さん、頭から血が、血が出とる！」

「……大丈夫、大丈夫だー、これくらい、あたしからしたら大した事じゃない……」

「駄目だ波子ー！ 俺に舵を任せてお前は少し休めー！ まずは何か布でも頭に巻いてその出血を止めるんだー！！」

「……大丈夫だつて言ったら大丈夫だー！ 武雄は早く船に何か損傷がないか見に行ってくれー、舵はあたしが責任持つて最後まで取るー！！」

「……わ、わかった！ でも、無理は絶対にするなよー！？ この船に乗っているのは俺と波子だけじゃないんだからなー！？」

波子さんに促され、武雄さんは命綱をつけて運転室から外に出て先程の衝撃による船の損傷具合を確認しに行った。波子さんは出血がひどくならない様に頭に手拭いを頭に巻いて再び立ち上がったが、その足元はフラフラとぐらつき、意識も朦朧としているみたいやった。

「……あたしは、あたしは父ちゃんみたいな強くて立派な漁師になるんだ、そしていつか、父ちゃんのいる遙かかなたの世界の海に行

くんだ……！」

その時、凄まじい怒号と共に真っ黒な空に一筋の雷光が走った。雷に照らされて周りが見えた瞬間、ウチはこの船の進路が狂って陸の岩壁に向かって真っ直ぐ突き進んでいるのがハッキリと確認出来た。

「……波子さん、アカン！ このまま行ったら壁に激突してしまうで！？ 早よ、早よ舵を切ってや！！」

「……あたしは、あたしは負けねー、こんな荒海に、海の魔物なんかに負けてたまるかぁ……！」

「……波子さん？ まさか、前が見えてへんのか！？ 波子さん！ しっかりしてや、波子さん！！」

……ヤバい！ これはマジでアカン！ 波子さん、すっかり方向感覚を失って船が岩壁向かって突き進んでる事に全然気づいてへん！ もう意識もほとんど無いかもしれへん！ このままやとウチら、船ごと岩壁に激突して海に沈没してしまうがな！？

「お願いや波子さん、しっかりしてや！ 壁が目の前まで迫ってんねん、目を覚ましてや波子さん！！」

「……父ちゃん、今行くぞ、あたし、今から父ちゃんの海へ……！」

「波子さん！！！」

「いやあー!!」

……ダメや、もうぶつかる。オトンごめんな。どうやらウチ、オトンの約束守れそうにないわ。父親より早く死ぬなんて、ひどい親不孝もんやなあ。ホンマにごめん……。生まれて初めて死を覚悟したその時、雨でびしょ濡れになった武雄さんが慌てて運転室に駆け込んできた。

「……何しとんじゃ波子ー!!」

ふらつく波子さんを強引に舵から引き離して片手で抱きかかえると、武雄さんは船のエンジンを切って舵を思いっ切り端まで目一杯切った。それによって船の前進は止まり、何とか方向転換して激突を免れた。窓から外を見ると岩壁との距離は一メートルも無いギリギリやった。あわやあの世行きスレスレの体験に、ウチもあわやこの歳で失禁してしまう寸前やった。

「……ホンマに死ぬかと思っただわ、ふう……」

「……どうしよう、私、ちょっとお漏らししちゃったかも……」

「ワオ、綾ピーったらご失禁ですかあ？　いけないんだ、イケメンだ、フウー！」

「……薫、顔に全然余裕が無いで……？」

何度か手こずりながらも再びエンジンをかけた武雄さんは、グッタリとうなだれる波子さんを太い腕で支えながら代わりに舵を握り鋭い目つきで前方の荒波を睨みつけた。波子さん、完全に意識が無いみたいや、大丈夫やるか！？

「……あ、あの、波子さんは……？」

「大丈夫だ、気を失ってるだけでちゃんと呼吸はしてる！ 海の魔物が源さんの時みたいに波子を死の海の中に引きずり込もうとしたんだろうが、そんな事はこの俺が絶対にさせねー！ 波子を源さんの二の舞にはしねーぞ、波子は俺が守るんだー！ かかってこい魔物！ 今度はこの俺が相手だー！！」

波子さんを守る武雄さんの後ろ姿はメチャクチャカッコよくて、正に屈強な海の男の姿やった。きつと、波子さんのオトンもこんな強くて立派な漁師さんだったんやろな。この波子さんが心から尊敬する人で、あの歩美さんが愛した人やもん、間違いないわ！

「……翼、見てみ！ 外、少し波が穏やかになってきたぜ！」

「……ホンマや！ あの嵐、もうここを通り過ぎてくれたみたいやな！？ 勝ったんや、波子さんと武雄さんの気迫が海の魔物に勝ったんやー！！」

それから後はもう船が転覆するような大きな波が襲ってくる事はなかった。船は順調に進路を進んで行き、次第に前方に熱海の町並みのネオンが見えてきた。気絶していた波子さんもうつつすしながらも意識を取り戻し、何とか船は熱海の港に到着した。ウチら、何とか命拾いする事が出来たんや！ ホンマに死ぬかと思っただけ……！

「……武雄！ 良く無事に港まで来れたなあ！ 石廊崎から連絡は受けてるぞ、今すぐ急いで船を桟橋にくくりつけてやるからな！」

「……おっちゃん、それより波子が！ 早く応急手当をしてくれ！ ……あ、この子達を体を休ませる事が出来る暖かい場所に案内してやつてくれ！」

「よし来た！ お嬢ちゃん達、おっちゃんの後についてこい！ 今すぐ暖かい飲み物を用意してやるぞ……！」

さつきよりだいぶ雨風は弱まってきたけど、まだ空には真つ黒な雲が漂い遠くでは雷がピカピカ光つとった。ウチらは駆け足でおっちゃんの後を追って港の待合室の様な暖かい部屋に駆け込み、合羽を脱いでフカフカのソファ―に体を投げ出して一息ついた。こんな命懸けの大冒険、滅多に経験出来るもんやないでマジで……。

「……あー、ホンマにエライ目にあつたわ、このフカフカソファ―の座り心地、何か生きてるって実感するわぁ……」

「……俺は改めて生きてるって事の尊さを痛感させて貰ったよ、あんなに余裕の無い状況まで追い詰められると、冗談なんか言ってる

場合じゃなくなるもんなんだなあ……」

「ほお、さすがのアホの薫もこれには懲りたみたいやなあ？」

「でも、船が転覆しかかった時の翼の『離さんといて』は薫ちゃんマジで萌え萌えしちまったぜ！ 翼、俺はいつでも君を絶対に離さないぜダーリン！？」

「……ア、アホッ！ あれはついとつさに言っけしもうただけなあ！？ って、今ここで近づいてくるなやこのスケベ！ ウチから離れろ、抱きついてくるなや変態！！」

「……もうやだ、もう絶対にやだ、こんな思いは二度としたくない！ そもそもは翼が無理矢理私達をここまで連れてきたからこんな目にあつたんだよ！？ 何かあつたらどう責任取るつもりだったのよ！？ バカッ！」

「何やとお！？ 綾までオマエ、ここまで来てまだそんな減らず口を叩くんか！？ オマエが溺れ死んだ頃にはウチもとづくに海の藻屑や、どないして責任取れっちゅうねんどアホ！！」

「……そ、それは、天国でも私達いつも一緒に仲良く手を繋いで、それでこうしてイチヤイチヤしてえ……」

「うわあ！ キモいキモいキモいキモい！ オマエも抱きつくくな！ その乙女チックなキラキラ目線でウチを見るな！ オマエ、ホンマおかしいぞ！？ 明らかにウチに対して変な感情が芽生えるやないかボケッ！！」

「みータン、度重なるたくさんのピンチにハリウッド映画のヒロイ

ンになったみたいーい！ キヤメロン・ディアスもナタリー・ポートマンもみータンの前では三流女優だもんねー！」

「岬も少しは懲りんかい、オマエらまとめてアホばかりじゃ、ボケボケボケッ！！」

揺れたりしない安定した地面の上に戻って、やっとウチにもツツコミを入れる余裕が出てきたわ。やっぱり人間は地面の上にいるのが一番やなあ？ そんなウチらを見て、ウチらの側で頭を包帯で巻かれてソファーに横になつとる波子さんがクスクスと笑つとった。

「……しかしすまんなー、あたしのせいでみんなには怖い思いをさせてしまったなー、あれだけ啖呵切つてこの有り様、あたしは情けない限りだー……」

「そないな事ないで？ 波子さんがおらんかったら、ウチらは無事にここまで来れんかったんやから、ホンマに波子さんには感謝しても感謝しきれへんぐらい感謝しとるで！？」

「……そっかー、ありがとうな、チビ子……」

見た感じ大丈夫そうやけど、頭を打ったんで念の為波子さんは病院で診察を受ける事になった。今、武雄さんが波子さんの搬送とウチらを熱海駅まで送り届ける為に港に停まつとる車の準備をしてくれているところや。しかし、あの武雄さんの波子さんを守ろうとする態度、何か普通とちやうな？ 何かさつきからウチは二人の関係が気になって気になってしゃあないねん。

「……なあ、波子さん？ 失礼な事聞くようやけど、波子さんと武雄さんてもしかして……？」

「……エへ、エへ……」

「うわっ、メチャメチャ笑顔やん！ やっぱり二人は恋人同士なん？」

「そうだー、あたしの男だあ、格好良いだろあ？ 海の男って感じだろあ？ あたしはあの遅いところが堪らなく大好きなんだあー」

「ウへへ、もう完全にベタ惚れやん！？ なあなあ、どこまで行っ  
てん？ もちろん、もうキスなんて済ませたんやろ？ エッチな事  
はしたん！？ 結婚はいつ！？ 子供は何人欲しいねん！？」

「やめろー、やめてくれー！？ そんな恥ずかしい事聞かれたら、  
あたし答えに詰まって照れてしまうだろー！？ 子供が大人をから  
かう様な真似するなー！？」

ウハハッ、波子さんたら両手で真っ赤になった顔を隠してデレデレ  
やん！ こんな強気な女性でも、やっぱり恋の話では完全に女の子  
になってしまっやなあ？ 波子さん、メッチャ可愛いやん！

「……ねえ翼、私達が盛り上がってる中、一人だけテンションどん  
底の人がいるんだけど……？」



「……うへえ、やっぱり男が惚れ惚れする素敵なナイスボディのおっぱいちゃんには、すでにそれを我が物にして自由に満喫している男が先にいるもんなんだなあ……？」

「……あのな薫、波子さんは大人の女性やで？ そんなに当たり前やろが……？」

「そうさ、いつもそうさ！ 尻の青い未成年の俺達はその魅惑のお宝にはいつも手が届かずにお預けで、見てるだけで指をくわえてなければいけない運命なんだよなあ……！？ ああ、早く俺も一人前の男になって女体の神秘の秘密を心ゆくまで堪能したいよ……！」

「……薫君のお相手するのって大変そうだね、翼が可哀想、ご愁傷様です……」

「そない恐ろしい事を言うなや綾！？ イヤや、ウチあんな男にこの体を好き勝手されんの絶対イヤや！！ 誰か、この変態からウチの操を守って……！」

そうこうしてる内に車の手配も済んで、ウチらは波子さんと一緒に武雄さんが運転する軽のワゴン車に乗り込み雨の中を駅に向かって走り出した。後部座席でキツキツの中を我慢して乗っているウチらとは対照的に、前に座つとる波子さんと武雄さんはすっかり仲良くラブラブモードや。薫やないけど、早くウチも大人になって広い席でラブラブしたいわ……！

「……ついにチビ子達ともお別れだなー、何か寂しくなるな……」

駅に到着したウチらを、波子さんは怪我をしとるのにわざわざ雨の中を車から降りてウチを抱き締めてくれた。ウチも寂しいよお。この三日間、ウチに新しい家族が出来たみたいでホンマに楽しかったからなあ。出来る事なら、もっと波子さんや歩美さん達と一緒にいたかったなあ……。

「……チビ子、この先何があっても負けたら駄目だぞー？ いっぱいいっぱい、お前の父ちゃんとの楽しい時間を過ごしていくんだぞー？」

「……うん、波子さん、ホンマにおおきにな？ 波子さんはウチにとつてホンマのお姉さんみたいやったわ……」

「あたしも妹達が出来たみたいで楽しかったぞー？ またいつか、みんなで石廊崎に来いよー？ その時は……」

「……ふっ！？」

次の瞬間、波子さんは側にいた薫を捕まえてウチと引っ付けてまとめて抱き締めてくれた。ウチも薫も波子さんの豊満な胸に顔がうずくまって窒息寸前。でも、港で抱き締められた時の酒臭さはもう無くなっていた。

「その時は、チビ子と茶髪の可愛い赤ん坊も一緒にあたしの前に連れてこいよー！？ このあたしが責任持つてその子を立派な漁師に育ててやるからなー！？」

「……な、波子さん、そない赤ん坊やなんて、気が早過ぎ……！」

「ウヘヘエ、やっぱり波子さんのおっぱいは柔らかくて最高だなあ？ 女性のおっぱいは男の憧れ、男の夢とロマンが詰まった最高の宝物、俺はやっぱりデッカいおっぱいの女性の方がいいなあ！？」

「……何やと薰っ、ゴラァ！！」

「うわーん！ まな板ペツタンコの貧乳怪人が襲いかかってキター！ 綾ピー、みータン、このイケメン薰ちゃんに救いの手をどうかヘルプミー！？」

ウチらが列車に乗り込んでからも、波子さんと武雄さんは駅の外からこちらに向かって手を振り続けてくれていた。あの二人もどうか幸せになれます様に、ウチは空に願いを込めて二人に目一杯手を振ってお別れを告げた。

「波子姉ちゃん、武雄さん、ホンマにおおきにー！ 歩美さんにも宜しく伝えてやー！ 必ず、必ずまたここに来るからなあー！！」

武雄さんが調べてくれた情報通り、東海道線は列車ダイヤが乱れてノロノロ運転ながらも何とか運行してくれていた。船の進行に手間取った事もあって、時刻はもう午後の十時を回つとる。石廊崎の港を出た時は七時やったから、ウチら三時間も船に乗っていた訳や。色々あったから何かあつたという間だったけどなあ。

「……でもさ、十時って事は約束の時間まであと二時間でしょ？  
このノロノロ運転でちゃんと間に合うかなあ……？」

向かい合う四人掛けの座席に座ったウチの対面で、綾が疲れ切った表情をして話しかけてきた。いかにも眠たそうな顔しとる。岬に至ってはさっきまでのしゅぎっ振りが嘘みたい。にウチの隣でもたれかかって爆睡しとる。

「大丈夫やろ？ 遅くても間違いなく先には進んどるし、最寄り駅に着いたらみんなの有り金集めてタクシー拾えば十二時までには病院に到着出来るで！」

「……そうかなあ……？」

「とつくに面会時間は過ぎてしもうたけど、病院の守衛さんに事情を説明すれば多分中に入らせてくれるやろ？ ウチと岬を病院で下ろしたら綾達はそのままタクシー乗って家に帰ってもええからな？ さすがにそこまで付き合わせる訳にはいかんし……」

「……すぴー……」

「……最後まで話聞けや！ 人が思いやりをかけてやってんのに、話の途中で寝るとは失礼過ぎるやろオマエ！？」

ダメや、綾も完全に爆睡モード突入や。でも、それもしゃーないか。

あんな荒海の中を命懸けの航海して、その前は一生懸命ウチのお宝探しを手伝ってくれたんやもんな。お疲れさん綾、ゆっくり休めや。

「……痛っ、イタタタ……」

声のした隣の席に目をやると、やっと落ち着ける場所に来れたからか薫が左足の靴と靴下を脱いで義足の付け根の怪我の様子を確認していた。靴下は血と雨の水で全体が赤く滲み、その下から現れたアルミ製の義足にも血のシミの跡が広がっていた。

「……薫、足大丈夫か？」

「……ん？ うん、ちょっと関節の金具の部分が磨耗で削れてバランスが狂って、飛び出た金具で付け根の部分をひっかいちゃったみたいだ、最近メンテナンスを怠っていたせいかな？ でも、大した傷じゃないし、義足本体もこれくらいの故障ならすぐに修理出来るよ、明日はもう一つの予備の義足をつければ問題ないしね？」

「……薫、あのな、ウチ……」

「おおっと、もう謝るのは無しだぜ？ これは俺が自分で望んで負った名誉の傷、ちっとも翼のせいなんかじゃないんだからね？」

「……薫……」

「でも、これで少しは俺の翼に対する気持ちが本物だって信じて貰えると嬉しいな、この程度の怪我じゃまだまだ新作さんの足元にも

及ばないけど……」

「……でも、薫はあの、どっちかって言ったら波子さんみたいな豊満な女性の方が好きなんやろ？　だったら、ウチなんてこんなやから全然ダメやもん……」

「うつん、そんな事ない、そんな事ないよ！　俺はその、どっちかって言ったらさ、その……」

「……その……？」

「……エヘヘ、やっぱりナイスボディの方が良いかなあ？　男として生まれてきたなら一度はやっぱり、ゆっさゆっさのおっぱいをこの両手でギュッと、その……」

「……もう、寝る！」

「ウソぴょん、ウソぴょん！　つばピーの小振りでペツタンコなおっぱいもとってもセクスイー！　やっぱりご飯もおっぱいも腹八分目が一番だよ、欲張ったりしたらノンノン！　翼のそのお子様ランチみたいなボディラインは薫ちゃんのラブリーな大好物だせい！？」

「フォローにも何にもなっへんがな！　もう知らん！　勝手にどこぞの女の牛みたいな巨乳の谷間に顔うずめてニヤニヤしながら窒息死でもしてろやどアホ！！」

「ぎゃあ〜！　愛しのつばピーに嫌われてしまった〜！　嫌われ〜、カイワレ〜、大根二重婚、セイツ！　ねえ、これダメ？　つまんない？　誠にすいま〜ン、セイツ！　ねえ翼、こっち見てっば、

ねえ？ ララララ、ララララ、オバマ氏割り箸、セイッ！」

もう知らん、今回はもう絶対に許さへんもん！ いつつもそうや、薫のヤツ、ウチがちよっとときめいてええ顔したら最後はふざけてガツカリさせよるし！ もうコイツなんかは一切期待なんてせえへん！ 多分隣で変なステップ踏んで踊りながらウチが振り向くのを待つとるんやろうけど、絶対に振り向いてなんてやらへんもん！ 絶対に振り向いてなんて……！

「ルッキング、ドッキング、エドはるみ上ハラミ、セイッ！」

「……ブツ、ブブブツ！」

「アハハ、翼が笑った！ 今の良いでしょ？ ララララ、ララララ、ヒラリーハラヒレホロ、セイッ！」

「やめろやオマエ！ 全然意味がわからんがな！？ だからそのキモいステップやめろや、そのマヌケ面でこっち見んな！？ いちいち顔を近づけてこんでもええねん！？ キモい、キモいわ！」

「サルコジ、ガス工事、胡錦濤かりんとう、セイッ！」

「ブツハハハッ！ もうやめろや！ 腹筋が破壊される！ アッハッハッハッハッハッ！！」

薫とアホな会話を重ねていたら、あっという間に電車は平塚の駅ま

で到着していた。時刻はもう少しで十一時、あと一時間もあれば十分間に合うわな。やったでウチ、オトンとの約束を守る事が出来そうや！　ウチの完全勝利や！！

「……ご乗車のお客様に申し上げます、只今平塚駅より先の信号が大雨によるトラブルで故障し、通行が出来ない状況になっております、その為、この列車は折り返し下り方面の熱海行きに変更致しますので、上り方面に行かれるお客様はこの平塚駅で下車して戴き信号の復旧と後続列車の到着をお待ち下さい……」

「……えっ？」

「なお、信号の復旧までの時間は現在未定となっております、お急ぎのお客様には大変ご迷惑をおかけ致しまして申し訳ございません、繰り返してお客様に申し上げます……」

「ええっ！！！」

……そんな、ここまで来てそれは無いわー！　もう目的地まで目と鼻の先、あと三つ駅を通過すれば到着やないかー！　何でこんな時に信号なんか故障すんねん、仮に信号が故障しとったって線路が無事なら電車は普通に通れるやろお！？　何で通行止めなんかにすんねん、せやからウチは○R線はいまいち好きになれへんねん！！

「オイ、綾、岬、起きろや！」

「……うーん、何、どうしたの？　もう駅に到着した？」



「さつさと目を覚ませや綾！ オマエと薫に最後に頼みたい事があるねん！！」

もうこうなったら、最後の手段に出るしかないわ！ この雨で運行機関なんかどこも信用出来ん、こんな非常事態に信じられるのは自分、己の力だけや！

「薫、綾！ 何とか岬を家まで送って届けてやってや！？ ウチの最後のワガママや、お願い！！」

「……ちょっと待つてよ？ 翼、アンタは一体どうするつもりなの！？」

「……ウチはここから自分の足で走って病院まで行く！」

そうや、もうそれしか方法は残されてないんや！ ウチのこの九十分フルでサッカーピッチを走り回る事が出来る短くも鍛え上げたこの両足、これしかウチが信頼出来る物はもう他に無いんや！！

「馬鹿言つなよ翼！ 外はまだ激しい雨が降り続いているんだぞ！ しかもこんな夜遅くに一人でなんて、絶対にダメだよ、危なすぎる！！」

「だって、今の薫の足じゃウチと同じくらいの速さで走る事が出来ないやろ！？ 絶対無理やろ！？」

「……そ、それは……」

「ええねん、ウチ一人で大丈夫や！　これはウチとオトンとの約束なんや！　これ以上薫や綾を巻き込むのはイヤや！　ごめんな、ウチ勝手な事ばかり言うてごめんな！？　岬の事だけ頼むわ、ホンマにごめん！！」

「翼！　ちよつと待ってよ翼！！」

「薫、綾！　また明日学校で会おうな！　お詫びにジュースが何か奢ってやるやさかいに、ほなら頼んだで〜！！？」

ウチはそれだけ言うて列車の中の二人に手を振ると、階段を駆け上って改札口を抜けて雨の街の中を全速力で走り出した。ちよつと走っただけであつという間にずぶ濡れになってしもうたけど、弱音なんて言つてられへん！　必ず、必ず今日中にこのユニフォームをオトンの元に届けるんや！！

「……翼ったら傘もレインコートも持っていないで、相変わらず無鉄砲過ぎだよ……」

「……クソッ！」

「……薫君……？」

「……俺の足が、俺の足が普通の人みたいにまともに走れる事が出来たら、……チクシヨウ！！」

……それから何十分間走り続けたやるか？ 大きな川を超えて、荒れている海を横目で見ながら海岸線を通って、やっといつも見慣れた街並みに着いた頃にはウチの両足はもう痺れて限界寸前やった。でも、止まったらアカン。諦めたらアカン。諦めたらそこで終わりや、最後の最後まで可能性がある限り走り続けるんや！ それがオトンがウチに教えてくれた大切な事、オトンとウチが交わした一番の約束なんや！ 最後のホイッスルが鳴るまで、絶対にウチは諦めへん……！！

「……痛っ！！」

病院まであと五百メートルぐらいまで来たこんな所で、ウチの右足が悲鳴を上げてふくらはぎがつってしもうた。長時間の全力疾走と冷たい雨にされされていた事による痙攣。何でや、何でこんな大詰めまで来てウチは……！

「……オトン……！」

さっきまで降り続けていた雨はすっかり上がって、空を覆っていた黒い雲にも所々隙間が出来て星空が見え始めた。でも、ウチの瞳から降る雨は止まらん。悔しいわ。ここまで来て、オトンとの約束を守れへんなんて、ウチ情けなさ過ぎるわ……。

走りたくても、足が言う事聞いてくれへん。歩く事も、立ち上がる事すらも出来へん。もう、残されてる時間も無いやろうな。ここま

で来た事をオトンは誉めてくれるかもしれへんけど、ウチが約束を守れへんかったのは事実や。やっぱり無謀やったんかなあ。一人で勝手にその気になってみんなを巻き込んで、やっぱりウチ一人の力なんて、この程度のもんやったんやなあ……。

「……オトン、ごめんな、ごめんなさい、オトン……！」

「……翼ー！！」

その時、雨上がりの夜空にウチの聞き覚えのある叫び声が後ろから聞こえてきた。ウチがうずくまったままその声のした方向を見ると、遠くから木の枝の様な物を突きながらビッコを引いた人影がこちらに走ってくるのが見えた。

「……薫？ 薫なんか！？ どうして、どうしてここに！？」

息を切らせてここまで走ってきた薫は力尽きたみたいになにウチの隣に並ぶ様に倒れ込んだ。せつかく止まっていた左足の怪我の出血は再びヒドくなっていて、かなり無理をして走ってきた事が容易に想像出来た。

「……何で？ 何で薫がここにおんねん！？ 電車は……？」

「バカッ！ あの後、三十分もしないで信号は復旧して後続の電車が到着したんだよ！ おとなしく待っていれば一番近くの駅まで来

る事が出来たのに、見切り発車なんかして飛び出して行ったりするから!!」

「……えっ、ホンマに……?」

「いくら何でも今回の翼の行動はあまりに無茶が過ぎるよ! 俺達がああ後、どれだけ翼の事を心配したと思ってんだ! このバカッ!!」

「……ごめん、ごめんなさい……」

……初めて薫に怒られてしもつた。こんな怖い薫を見るの初めてやったから、ついついウチも素直に『ごめんなさい』なんて謝ってしもつて何か変な感じや。でも、確かにウチが悪いよなあ、ホンマにごめん……。

「……そうや薫、岬は? 綾は一緒と違うんか?」

「綾ちゃんには俺の有り金を全部渡して岬ちゃんと一緒にタクシーで帰らせたよ、岬ちゃんを一人にする訳にはいかなからね、後の事は綾ちゃんが責任持つてやってくれるはずだよ!」

「……そっか、おおきにな、薫一人でウチの後を追ってきてくれたんか? 何か色々手間取らせてごめんな、しかもまた足を痛めさせる様な事までさせて……」

「だから謝んたって!! 翼も足が限界でここにうずくまっていたんだろっ! 人の事なんか心配してないで早く病院に着く事を考

えろよ、新作さんとの約束を何が何でも守るんだろう!？」

「……う、うん、そうやけど、でも、でも……」

……ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

「……!」

その時、ウチがつけてる腕時計から突然アラーム音が鳴り出した。ウチが駅から出発する時に十二時五分前に鳴るようにセットしたアラームや! もう時間が無い、間に合わへん!

「……薫、もうウチ、ダメや、時間が無い、間に合わへん……」

「……何言つてんだよ!? 翼がここで諦めちゃったら俺達の努力や、歩美さんや波子さん達の優しさもみんな水の泡になっちまうんだぞ!? 立てって、立ち上がれよ翼! まだ試合終了じゃないぞ、走れ翼!」

「……だって、もう無理やもん、もう……」

バリバリバリバリッ!!

「うわっ!？」

すっかり雨も止んで改善に向かっていたと思つとつた空から、最後の断末魔みたいに大きな音を立てて一筋の雷がウチらの近くに落ちたのを感じた。その瞬間、周りのマンションやビルの照明は一斉に消えて、辺りは暗闇に包まれてしまった。

「……て、停電!？」

「……ここでこれかよ!？ ふざけんな！ 神様はどこまで俺達にこんな仕打ちを……!」

……もうええ、もう無理や。ウチのしようとしてる事はお空の神様までもが良くは思ってくれへんのや。これが結果なんや、ウチの負け、どんなに頑張っても負ける時は負けるんや。どんなに頑張っても……。

「……あつ！ そうだ!!」

「……今度は何？ もうええねん薰、ウチはもう……」

「……翼、諦めるのはまだ早いよ！ 今日中に新作さんにこのユニフォームを見せるだけならまだ出来る可能性がある!!」

「……えっ!？」

薫が見上げる先を見ると、周りの停電した建物とは対照的に夜空の花火の様に煌々とライトに照らされている大きな看板がビルの上にあった。何でやろ、電気は一面ストップしてんのに、何であの看板だけ……？

「翼、あと一踏ん張りだ！ 急いであのビルの屋上まで登るぞ！」

その頃、病院の病室にはウチの安否を心配して寝ずに起きていたオトンと、仕事で地方から帰ってきたばかりのオカンが窓から外を眺めていた。雷で病院内も一瞬停電したみたいやけど、すぐに緊急電力に切り替わって事なきを得たみたいや。

「……本当に、翼はここに向かって来ているのかしら？ 岬も一緒なのかしら？ 私、心配でじつとしてられない……」

「……歩美姉ちゃんの話やと、無事に熱海に着いてみんなで電車に乗り込んだらしいで？ 翼かてもう子供やないんや、いくら約束でも出来ん事出来ない事の区別くらいはちゃんと出来るはずや……」

「……でも、あの子はいつも新作クンとの約束は全部守ろうとして頑張っちゃうじゃない？ 今回もまた無茶な事をしないで真っ直ぐ家に帰ってくれているといいけど……」

「……せやな、俺も簡単に翼とあんな約束を交わしてしまったのは軽率やったって反省してるわ、アイツの性格を一番わかつとるのはこの俺なのにな……」



「……新作くん……」

「……ホンマに今回は自分の不甲斐なさを痛感したわ、翼が俺に心配かけまいと無理して空元気装ってくれてんのに、俺はそないな事ちつとも考えずに弱音ばかり吐いて、ただでさえ小さい体で辛いのを耐えてるアイツをさらに苦しめてしまった……」

「……翼がこんなに頑張っているんだもの、新作くんも頑張って前向きに生きていかなきゃね……？」

「……ホンマや、翼のお陰で、俺はまた生きる希望を見つける事が出来たんや、翼には、ホンマに感謝しても感謝しきれへんなあ……」

「……新作くん、もう十二時よ、日が変わるわ……」

「……そうか、残念やけど、しゃあないな……」

「……神様、約束は守れなかったけど、一生懸命頑張った翼をどうか無事に私達の元へ……」

「……翼、ようやった、上出来や、帰ってこい、無事に俺達の元に帰ってこい……！」

……ピッ……

「……あれ？ 新作くん、何か聞こえてこない？」

……ピッ、ピッ、ピッー……

「……外からやないか？」

「今、窓開けるね!？」

……ピイイイッー……!

「……この音……!？」

ピッ、ピッ、ピイイイッー!

「……ホイッスル、ホイッスルの音や! どこや、どこから聞こえてくるんや!？」

「……新作クン、あそこ! あの看板の下、誰がいる!」

「……翼や、翼や! 俺があげた翼のホイッスルや! 翼が帰ってきたんや!」

「新作クン、翼に返事をしてあげて!？ 何か、何かあそこまで聞こえる物が見える物を……!」

「俺もアイツとお揃いのホイッスルを持ってるで! 待ってるや翼、今、俺もホイッスルを……!」

ピィィィッーーーー！！

「翼、絶対に諦めるなよ！ そのままホイッスルを吹き続けるんだ  
！！」

ビルの屋上に登ったウチは薫に肩車して貰いながら岬から取り上げたホイッスルを力強く吹いて、薫が持っていた木の枝にユニフォームをくくりつけて目一杯病院に向かってそれを振り回した。周りは停電で電気が点いている場所はここだけ、遠目からでも絶対に目立つはずや！ お願い、気づいて！ ウチはここにおるで、オトーン！！

「翼、もう一回だ！ もう一回ホイッスルを……！」

……ピッ、ピッ、ピィィィッー！！

「……！」

「……今のは、まさか……！？」

「……ウチのホイッスルやない、オトンや、オトンのホイッスルや  
！！」

良く目を凝らすと、病院の一室の窓からこちらに大きく手を振る人影を見る事が出来た！ オトンや、オトンがウチらの姿に気づいてくれたんや！！ やった、やったあ！ オトンがウチらの姿に応えてくれたあ！！

「薫、今何時や！？」

「……今、ちょうど十二時ジャスト！ やったよ翼！ ちゃんと時間通り新作さんとの約束を守る事が出来たよ！！」

「……ホンマに？ ホンマにか！？ やった、やったで薫！ やったやったあゝ！！」

「痛っ！ おい翼！ 俺、足痛いんだから無茶な事すんなよ！？ 聞いてんのか翼、って、うわあゝ！！」

嬉しさのあまり薫の肩から飛び降りたウチはその勢いのまま薫に抱きついて押し倒してもうた！ だってホンマに嬉しかったんやもん、これもみんな薫のお陰や！ ご褒美にいっぱいほっぺにキスして顔をスリスリしてあげるで！？ 薫、ホンマにおおきにやでえ！！

「……あらあら、あの二人ったらあんな所でイチャイチャしちゃって、仲がいいのねえ？ 新作くんもうかうかしてると翼を薫クンに取られちゃう日が来ちゃうかもね……？」

「……………」

「……新作クン、泣いてるの……？」

「……ホンマに、生きてきてホンマに良かった、鈴子母ちゃん、俺は世界一の幸せ者や、俺の娘、翼はいつも俺を驚かせてくれる最高のファンタジスタやで……！」

でも、一つだけ腑に落ちへん事があるんや。周りの建物は全部停電で真っ暗になつとるのに、何でこの看板の照明だけはこないピカピカと光つとんねんやろ？

「……この手の照明看板のタイプは風力や太陽光の発電機があらかじめ備え付けられていて、昼間蓄えた電力で停電に関係なく夜中もずっと灯りが点くようになってるんだよ？ 空気も汚さないし、電気代もかからない省エネエコロジーな仕組みになっているのさ！」

「へえ、知らんかったわ、薫は見かけに寄らず意外と博学なんやなあ？」

「そりゃあもちろん！ 今、世界は温暖化とエコロジーの時代だからね？ いずれ近い将来、俺も人々の代表として時代を牽引していくのにこれくらいの常識くらいは……」

「……人々の代表……？」

「……い、いやいや！ 何でもない何でもない、独り言だよ！ それよりさ、俺って今回すっげえ活躍したじゃん？ どうかな翼？ そろそろ本気で俺の事を彼氏として認めてくれないかなあ？」

「……えっ、そんな、どないしょ……?」

「俺、表向きの言葉や態度はふざけていても、心の奥底ではちゃんと翼の事を想ってる、大切にするよ、世界中で一番幸せにするから！ マジでお願い！ この通り！」

「……そのセリフで土下座はやめてえなあ、困るわぁ……」

「いやいや、これが俺の本気の誠意！ 『本気』と書いて『マジ』！ マジで俺は本当に翼の事が好きなんだよ！ お願いだよ、付き合ってくれ〜!?!」

……もう、さすがにウチもはつきりせんとかアカンかなあ？ こないにウチの事を想ってくれる人、もしかしたらもう二度と現れんかもしれんもんなあ？ ちよつとスケベで変態っぽくて困るけど、ホンマは優しくて勇気があるし、それに、やっぱり見た目だけやったら外人の血が混ざっとるせいか他の女達も焼き餅妬きそうなグッドルツキングボーイやしなあ!?!

「……ええよっ！ ウチも女や、責任持って薫の事を、ウチの彼氏として認定のお墨付きのハンコを押してやるでっ！」

「……マジ？ マジで!?! やった、やったー！ ついにこの桐原薫の元にも人生の春の芽生えがキター!! 薫ちゃんの土筆の子も恥ずかしげに顔を出しますう〜」

「……でも、これからウチの彼氏といられるには条件が一つだけ

あるで！」

「……へっ？ 条件？」

「……薫の頭の中に澱みまくつとるキスやおっぱいなどスケベな行為は、薫が立派な一人前に成長してオトンよりもカツコええ男になれるまではお預けや！ ウチにとって薫はまだまだ二番手、一番はやっぱりオトンやからな！？ それまではこれまで同様、スケベな真似したら容赦なく顔面蹴り飛ばすから覚悟せえや！？」

「……ふええ、目指す頂点は遙かなたの険しい頂かあ、翼の胸の標高は低いのに……、俺が新作さん越えを果たせる時は、一体いつの事になるのやら……？」

「そないガツカリするなや！ 諦めたらそこで終わりや、せいぜい頑張ってウチの為にええ男になってや？」

「……早く一人前になりた……（泣）」

「大好きやで、薫！ オトンの次に、なっ！？」

「……嬉しくねえ、嬉しいんだけど何か嬉しくねえ！ 最後の一言すつげえいらねえ……！ 見てるお、俺も早く立派な男になって、翼と一緒に合体ラブラブ昇天飛行してこの夜空にデッカい花火を打ち上げたるでえ……！」

「いちいち言葉にエロい表現を挟むな！ しかもオマエの関西弁はキモいんじゃ、このボケッ……！」

「痛ああああい……！ 顔面キックはノーサンキューでアテンシヨ

ンプリーズ!？」

夜が開けて、雨のせいで風邪気味でフラフラになったウチと薫は学校の授業中でも机に突っ伏して完全に爆睡モードに陥ってしもうた。『いつも風邪気味でいてくれれば静かでもいいのにね』なんてイヤミをチクリと刺してきた那奈のしたり顔がホンマにカチンと来たわ。後で覚えとけや那奈、近い内にオマエの家宛てに身に覚えの無い大量の無修正エロ本が伊豆から届くでえ？ 覚悟しいや、ウツヒツヒッ……。

しかし、今日はとてもええ天気なあ。病院のオトンも、家で執筆活動中のオカンも、小学校で同級生の男子達をくだに巻いてる岬も元気いっぱいや。それもそうやな、なんてったってオトンの病室のベッドの上には、みんなの想いがたくさん詰まった真っ白なあのユニフォームがウチらを見守ってくれているんやからなっ！



## 第55話 HANABI（後書き）

この回より、『Be ambitious!』の連載は少しのお休みを戴かせて貰います。

毎回読んで戴いている読者様には申し訳ありませんが、作品の質を下げたくないのですばらくの間お時間を下さいませ。

宜しくお願い致します。

ミラージュ

## 第56話 デルモ

「おつそお~~~~いつ!!」

もうう! ママったらこんなPretttyでSexyでExcellentなLovely girlを放つたらかして、一体今どこで何をしているのよお!!? 今日は待ちに待ったゴールデンウィークの最終日、世界中のTeen'sみんなの憧れのスーパーモデル、このMiss Chinatsu Mishimaの初のソロでのショーステージAnniversaryだっというのに! 現地で時間決めて集合しよつ、って言い出したのはママの方でしょ!!? アタシはちゃんとママとの約束通りに寝坊も寄り道もしないで、大好きなママとHagしたくて急いで時間ピッタリJust timeでやってきたんだからあ!

そんな聞き分けの良い利口で可愛い自慢の娘を、新興都市だか何だか知らないけどこんな片田舎の周りに田んぼしかない広いだけのシヨッピングモールの入り口で一人寂しく三十分も待たせるだなんてもう信じられない! Unbelievableよ!!

それに、今回のお話はやつとついにこのアタシが主役としてスポーツトライトを浴びる大切なSpecial episode timeなのよあ!? この小説のメインキャラクターの中で一番可愛くて美しくて大人気キャラである、このアタシの回が今まで無かった事自体がおかしかったのよ! 第56話まで進行してきて今更遅いくらいだわ! 作者は悔やみなさい、那奈や小夜や翼ごときに話をダラダラと長引かせるから、いつまで経っても読者に評価や感想すらも書いて貰えないのよつ!

……ふう。まあそれはこのアタシの優しいSweet heart  
で特別に許してあげるとして、そんな事もあつて今日のアタシはと  
つてもご機嫌で超ハイテンションなのっ！　なのに……、なのに、  
ママったらたくさんの人ごみの中でアタシを一人だけにして人目に  
晒すだなんて、もし悪い人達に目をつけられて誘拐なんてされたり  
したらどうするのよっ！？

いやぁ、とっても危険な予感！　アタシの身代金なんてとても十億  
円どころじゃ全然足りないわ！　もうアタシ困っちゃっう、あまり  
にDangerousな展開で胸がドキドキワクワクしちゃっう！  
まるでハリウッドの一流女優が、パパラッチの取材カメラの目を  
盗んでお忍びプライベートをEnjoyしてる気分にも似てるわぁ  
っ！

「いやぁっん！　すれ違う人みんながアタシの姿を見てるわっ！？  
みんなしてこのアタシのPerfect bodyとSexy  
fashionに釘付けじゃない！　アタシったらスゴく可愛く  
て美しすぎるから、すぐに悪い狼さんに狙われちゃっう！　怖い、  
怖いわ！　人にそんな悪意を抱かせちゃっうアタシの魅力が自分でも  
怖っい！！」

……ザワザワ、ザワザワ……

「……おい、何だあの子……？」

「……何か一人で喋って、何か一人でモジモジしてるぞ……？」

「ママー！　あのお姉ちゃん、なーにー？」

「……シッ、見ちゃいけません……」

いやん、いやんいやんいやぁ～ん！ 左右上下360度からギャラリーの熱い視線を体全体にピンピン感じるわぁ～！ やっぱ、ちよっと都会から離れた片田舎のダッサい一般People達にはこのファッションは少し刺激が強すぎたかしら？

だって、日頃陸上で鍛え上げたこの自慢のピチピチ美脚を真つ赤な超ミニワンピースとロングストレッチブーツでアクセントをつけて惜しげもなく見せてあげてるんだもの、どんなに抵抗したって視線を奪われちゃうのは当然よねえ？

でもね、アタシがもっとみんなに注目して貰いたいのは、ワンピースの上に羽織っているこのフリルがアクセントの真つ白なショート丈の新作カーディガン！ 生地にとってもこだわってるこのカーディガンは通気性と保温性に優れているからAll season重宝するわよお？ 着こなしを変えれば、お姉系から姫系まであつという間に変身出来ちゃう！

もちろん、これもそれもあれもみ～んなママのオリジナル、世界の『ミシマ』ブランドでフルコンプしてるんだから！ アタシだから超着こなしてるってのもあるけど、基本ママは日本人の女の子に似合うスタイルをデザインしてるから今この小説を読んでいる貴女にもピッタリお似合いだわ！

どう、もう欲しくてたまらないでしょ？ 今すぐ急いでGetしとかなないと出遅れちゃうわよ？ 今なら公式通販サイトで会員登録して購入すればポイント20%UPのプレゼントもつけちゃうわ！

みんな、ジャンジャンいっぱいAccess pleaseしてねっ！！

（注・もちろんそんなサイトは存在していませんので御了承下さい）

……ザワザワ、ザワザワ……

「……今度は一人でクルクル回り始めたぞ……？」

「……念の為、警察呼ぶか？ それとも救急車か……？」

「ママー、あのお姉ちゃん何か楽しそうだよー？」

「コラッ！ 指なんて差しちゃいけません！」

……Oops！ やだあ、アタシったらまだショーが始まる前だつていうのに、一足早く周りたくさんのギャラリをすっかり魅了しちゃったみたいだわ。そうよね、本番はまだこれからだもの。慌てちゃダメよ、千夏？

それに、何てったって今日は今までのようなママの力で他のプロのモデルさん達と一緒に出させて貰っていたショーとは違って、このアタシが一人前のモデルとして世間に認められてソロのステージのオフアーを受けた大切なお仕事なんだもの、こんな所で安売りは厳禁だわ。今からきっちり気を引き締めていかないかね！

「……でも、いくらなんでもママ遅すぎよぉー！？ これじゃママよりソフィーの方が早くここに到着しちゃうわよぉ？ アタシ達が先に準備して案内をしてあげなきゃいけない立場なの……？」

「……Chinatsu？ Are you Chinatsu Mishima？」

「……えっ？ まさか、その声は……！？」

聞き覚えのある懐かしくて優しい声に後ろを振り向くと、あの時と何も変わらない背が高く足の長い抜群のスタイルに綺麗な金髪のロングヘアーを束ねた青い目の超美人白人女性の姿がそこにあったわ。彼女はアタシがイギリスに住んでいた時のもう一人のママのような存在。そして、アタシが世界で二番目に心からリスペクトする憧れのスーパースターなの！

「ワオ、ソフィー！ I wanted to meet  
you much!!」

「Oh, really!? I wanted to meet  
you! Chinatsu, I love you!!」

彼女の名前はソフィー・影山・ヨハンソン。元スウェーデン代表の一流陸上選手で、世界陸上の走り高跳び競技で銀メダルを取った事もあるスーパースリートだったの！ 現役を引退した後はパパのバイクの仕事仲間である影山 晶さんと国際結婚をして、それ以来アタシ達三島ファミリーともFriendshipなお付き合いなのよ！

現役時代の度重なるハードワークが悪影響となつてなかなか影山さんとの間にBabyが恵まれないソフィーにとって、アタシと弟の千秋は本当の子供みたいに可愛がってくれて、仕事で忙しいママの代わりに小さい頃は色々と面倒を見て貰ってたの。

アタシとママが日本に移ってきた三年前の時には、パパと影山さん

のお仕事の都合がつかなくてソフィーはまだこっちに来れなかったんだけど、今回その目処も立ってパパと一緒に日本にやってきたのよ！ アタシにとってソフィーはママと同じくらい大切な人。アタシが陸上で走り高跳びを始めたのは、ソフィーみたいなカッコいいスポーツアスリートになりたかったからなのよ！

「ずっと会いたかったわソフィー！ Welcome to Japan！！ さあ、アタシを思いっ切りギュってHagしてえん？」

「Chinatsu, You became beautiful！ You may be more beautiful than Chiharu！」

約三年振りくらいのキス&ハグを済ませたアタシ達は久々の再開にテンションボルテージがアップアップ！ イギリスから発つ前にハグした時はアタシの頭がソフィーの腰のちよつと上くらいしか届かなかったけど、今回はついに胸の辺りに頭が届くようになったわ！ アタシも日々着々と成長してるって証拠ね！

「やだあ、ママよりキレイだなんてちよつと言い過ぎよ、ソフィー？ ママが聞いたら嫉妬しちゃうわ？」

「Oh, It's truth. You're very beautiful！ It is not a compliment.」

「お世辞かどうかは別としてえ、チツチツチツ、ソフィー、ここは日本よ？ ソフィーはこれから日本人のお嫁さんとして身も心も Japanese にならなきゃダメなんだから、言葉には気をつけないとねっ！？」

「ワオ、ソウデシタネー！ コレカラハ ニホンゴデ ハナシマー ス！」

「スゴい！ ソフィーもずいぶん日本語が上手くなったのねえ！ ソフィーもちゃんと成長してるんだあ？」

「チナツモ セイチョウシテ オモクナツタネー？ モウ、Hag シテモ モチアゲルコト デキマセーン！」

「ちよつとお！？ 日本の Lady に『重くなった』はタブーよお！？ Quit it！」

「Oh, Sorry！ ニホンゴ、ヤツパリ ムズカシイデスネー！」

でも、ソフィーの頬にキスするには子供の頃みたいに持ち上げて貰わないと無理だったのよね。だってソフィーの身長は軽く185センチオーバー、あの航ちゃんと良い勝負が出来るくらい背が高いんだもん。アタシはこの前やっと167センチになったばかり、手が届くのがやっとね。まだまだカルシウム摂取量が足りないのかなあ？ もつとミルクとお魚採らなきゃダメねえ？ あっそうそう、ちなみにソフィーはアタシのもう一人のCookingのコーチでもあるのよ！ 料理のバリエーションや味付けとかはママから全部教えて貰ったものだけど、栄養学やサプリメントなどに関してはソフ



イーから学んだもののな！ 練習や試合で消耗した体力を回復するには、やっぱり栄養補給が一番重要なもの。もちろん、アタシとママはこの知識をしっかり美容にも生かしてるけどねっ！

「チナツ、チハルハ ドコニ イル？ マダ コナイ？」

「あっ、そうだわ！ あまりに遅過ぎて、すっかりママの事忘れちゃってた！」

そうよそうよそうよお、ママはアタシとソフィーをこんなに待たせて、一体どこで何をしてるのよぉー！？ もう約束の時間から一時間も経ってるじゃない！ まさか、どこかで交通事故にでも巻き込まれたのかしら！？

そういえば、昨日は昔からの親友である那奈のママの麗奈さんと、久し振りに一緒に夜遊びに行ったらしいから心配になってきたわ。二日酔いで飲酒運転なんかで捕まっていたりしないかしら？ もし、ママが逮捕されちゃったりしたらアタシ、今日この後どうすればいいのよぉー！？

……ピロロロ、ピロロロ……

「……あっ、携帯！ ママからだわ！」

んもぉーっ！ あまりにIt's too lateよママ！ アタシはおるか、ソフィーまでこんなに待たせて心配ばかりかけて、

相変わらず時間にはルーズなんだから！ 今日という今日は、たとえ相手がママでもアタシがガツンと言ってお説教しちゃうんだから！

「もしもし、ママ！？ 今どこにいるのよお！？ アタシをこんな所に一人にして、ママはアタシの事が心配じゃないのぉ！？」

「Hello！？ 千夏？ もうショッピングモールには着いてるわよね？ ソフィーはもう到着してるかしら？ 合流出来た？ お疲れちゃ～ん！ 今やつと駐車場の中に入れたわ、もうスツゴい渋滞してるのぉ！ 日本ってやっぱり車社会なのねえ～、こんな狭い国に何でこんなに車がいっぱいあるのかしらねえ～？」

「もう、とつくに到着してるしとつくにソフィーとも合流してるわ！ 遅れるなら遅れるで何で電話一本くらい連絡をしてくれないのよぉ！？ 最近のママは少し自分勝手に何か冷たいわよ、ママはこんなに可愛いアタシの事を放っておいて心配じゃないのぉ！？」

「昨日ねえ、麗奈と朝まで飲んじゃって、お酒がなかなか抜けなくて出発が遅れちゃったのよ、ゴメンねっ？ それより千夏、麗奈ったら相変わらずムチャクチャでスツゴいのよ？ お店のボトルを全部空にしちゃったかと思ったら、ホストの男の子達全員を床に正座させて三時間もお説教しちゃったの！ 『サービスが悪い』とか『長髪は切れ』とか『茶髪はウザい』とか『チャラチャラするな』とか『丸坊主になって俺に打たれる』とか『マグロ漁船に乗って精神鍛え直せ』とか、言いたい事言いまくってももうやりたい放題！ そんな事を言われたって彼らはそれが仕事なんだし、それを否定されたらホストの面目なんて完全に丸つぶれて感じよねえ？ 男の子達、困り果てちゃってみ～んな揃いも揃って涙目になって、中には土下座して『帰らせて下さい！』とか『助けて、お母さ～ん！』と

か言い出す子もいて、ママはそれを横で見えて腹筋が抜れるくらい大爆笑しちゃった！ もうここ数年でも最っ高の楽しい一夜だったわ〜！」

「……ねえ、ママ？ アタシの話を良く聞いて？ あのね、そんな話はどうでもいいのっ！ アタシはママとの約束を守る為に、もう一時間もここでずっとママの事を待っているのよお！？ ママは那奈のママと楽しくお酒が飲む事が出来れば、その後の自分の娘との約束はどうでもいいとでも言いたいのお！？ もうママは、こんなに良い子で可愛いアタシの事を愛してくれてはいないのね！？ ママはアタシの事が心配じゃ……！？？」

「あつ！ あつたあつた！ 駐車場の空きスペースが見つかったわ！ ねえねえ千夏、ママはこの後色々忙しいからあ、そこからこっちにソフィーを連れて迎えに来てくれるかしらあ？ えっ〜とねっ、ここは三階のBエリアの82番のパーキングエリアよ、わかるかしら？ 持っていて貰いたい荷物もそこそこあるから急いで来てねえ〜？ じゃあ、また後でねっ！」

「ちょ、ちよつとママ？ ママー！？？」

……ッー、ッー、ッー……

……何よ、この完全に一方通行な怒涛の通信状態は。これって携帯電話よねえ？ トランシーバーじゃないわよねえ？ アタシの声はちゃんとママの元に届いているはずよねえ？ ……なのに、なにに……！！

「Oh, shit! Oh, my god!! どうしてママはいつもいつも人の話をちっとも聞こうとしないのよお!? もう訳わかんない! Unbelievable!!」

「……チハルハ、イマモ カワラズ Going my way ナンデスネー……」

んもあーう、ママと電話でお喋りするといつもこんなだから！  
自分の喋りたい事だけ全部喋って勝手に電話を切るんだもん、これじゃまるで留守番電話と喋ってるみたいじゃない！ あるいは時報やガイダンスの音声案内とお喋りしてるようなものだわ、アタシ一人バツカみたい！

しかも、シヨ―モデルとして招待されたこのアタシに荷物持ちをさせようとするだなんて、アタシはママのお店の従業員なんかじゃないのよ!? 全然、母としての愛情が感じられないもの。虚しい、悲しい、寂しいわ！ 最近の子供達が非行に走る原因の一つは、親の愛情不足からくるものだっていうのに！ 仕事で忙しくなる前のママはこんな冷たくなかったわ。アタシはもう、ママにとっていない子になってしまったの……? 」

「……チナツ、ゲンキダシテ クダサイ? ワタシ、チナツノミカタネ! Smile デス、Smile!!」

「……Thanks... ソフィーは優しいのね、アタシ、涙が出ちゃいそう……」

優しく、H a gしてくれるととっても温かいソフィーは落ち込むアタシを気遣いながらママがいる駐車場の場所まで一緒についてきてくれたわ。んもう、ソフィーにまで迎えに来させるなんてママったら……。これ以上冷たくしたらアタシ、ママの事キライになっちゃうんだからねっ！ ソフィーの家の子供になっちゃうんだからねっ！ ママが泣いて謝っても帰ってなんてあげないんだからねっ！ アタシ本気よ、ママなんてもう知らないっ！！

……ううん、でもきつと、今頃ママもアタシに冷たくした事を反省して落ち込んでいるはずだわ。だってアタシはママの一番の宝物、愛しい愛しい世界でたった一人の自慢の娘だもの！ 悲しむアタシの姿を見たら、急いで駆け寄ってギュッってH a gしてくれるに決まってる！ ママ、待っててね！ アタシはもうすぐそこまで来てるわ！

「……あの駐車場のナンバー、あの見慣れたオフロード4WDの真っ赤な車、あの美しい髪をしたステキな女性の後ろ姿、見つけた、見つけたわママ！ アタシはここよ！ 寂しかった、ママに会いたかった、ママ！ ママ……！！」

「んもおーう！ おっそ……い！！ こんな車の排気ガスまみれの場所に五分も待たせるだなんて、千夏はもうママの事を愛してくれてないのぉ？ ママ、スッゴク虚しい、悲しい、寂しい！ 昔はそんな聞き分けの悪い子じゃなかったのに！ あんまりよ、あんまりだわ、千夏！？」

「……F u c k i n g m o m . . . ! !」

「……あら？ 何か今、小さい声で物凄い汚らしい言葉が聞こえて

きたような気がするんだけどぉ？ 千夏、何か言った？」

「うっん、なぐんにも！ 今日も大好きなママに会えて、アタシ超 Happyだわぁー！」

「そうよねえ、千夏がママにそんなヒドい事を言う訳がないわよねえ？ だって、千夏は可愛い可愛いママの大切な宝物だもの、愛してるわ、My baby！」

「……そうよ、ママ！ その言葉、アタシはその言葉がずっと聞きたかったの！ アタシもママの事を世界中の誰よりも一番愛してるわ！ ねえママ？ ママの愛しい愛しい世界でたった一人の愛娘を、息が苦しくなるまで思いつ切りHagしてたくさんの愛情をアタシに注いで頂戴！？ 愛してる、大好きよ、ママー！！」

「でねえ、今この車の後部座席に積んでいるのがその荷物なんだけどぉ？」

「……ギャフン！ 痛ったぁーい！！」

母子の熱い絆を再確認しようと、アタシは両手を広げてママの胸に向かつて一直線にダイビング！ ……のはずが、ママはそんなアタシに目もくれずに車の後部に回ってドアを開け、中に積んである荷物をガサゴソと外へと取り出し始めた。おかげでアタシは勢い余って車のガラス部分に思いつ切り頭をぶつけちゃったじゃない！？ 痛い、身も心もスゴく痛い！ おでこにたんこぶまで出来ちゃったじゃない、こんなのあんまりよ、ママ！？

「じゃあ千夏、早速だけど車に積んである荷物を全部会場まで運んでくれるかしらあ？ 今回のステージを提供して下さったショッピングモールの関係者様達へのお礼の品とかたくさんあって、ママ一人だけじゃとても持つていけないのよぉー！ もうショーの開演まで時間があまり無いから、急いでお願いねえー！」

「……いったい、おでこ赤くなってるー！ つーか、時間が無いのはママが遅れたせいじゃない……！」

「あら、隣にいるのもしかしてソフィー？ ソフィーよねえ！？ ウッソ、全然変わってなあって！ What's up！？ おげんこ？ お疲れちゃん！」

「Wow！ Hey, chiharu！ オゲンコー！？ オヒサシブリネー、オツカレチャーン！ Everytime, You are very very beautiful デスネー！」

「……んもおう！ ママったらやっぱり、全然人の話を聞いてくれないんだから！」

……ソフィーとは熱いHagをして久し振りの再会を喜んでいるのに、ママったらアタシだけ放ったらかしで完全に無視されてるみたい……。しかも、今日はこのアタシが主役のはずなのに、こんな虚しい粗末な扱いをされるだなんて……。もう嫌、アタシってママにとって一体何なのかしら？ もう、アタシにはママの事がわからなくなってしまうたわ。

今日のショーはママがソフィーの協力を得て、新しい『ミシマ』スポーツファッションブランドを日本で初御披露目する大切なイベントで、ソフィーにとっても引退後初の本格的な第二の人生の出発の

日。アタシにとってもこのショーは、世界のスーパーモデルへの飛躍の第一歩となる待ちに待ったソロのステージなのよ？ 今日のアタシ達三人にとって、最高の一日になると思って楽しみにしてたのに……。

なのに、予想外のママの態度に、アタシのテンションはすっかり下がってしまった。何か今、この中で一人ぼっちになってしまったみたいでとても寂しい。ママの瞳に、もうアタシの姿は写ってないのね？ アタシ、そんなに悪い子だった？ ママにはもうアタシは必要無いのね？ だったらアタシ、ホントに家出しちゃおうかなあ？ もうアタシなんて、アタシなんて……。

「……あら？ ちょっと千夏、ずいぶんと元気が無いじゃない、どうしたのお？ そんな湿気った顔をしてたら、とてもギャラリィの前でモデルなんか務まらないわよお？ スマイル、スマイル！」

「……別に、何でもないわ……」

「……うん？ それとも、どこか具合でも悪いのかしら？ 風邪でもひいた？ お腹痛いの？ ダメよお、あれほど健康管理には注意しなさい、ってママ言っただじゃない！ 冷たい物ばかり食べ過ぎたんでしょ？ これだから千夏はまだまだ子供……」

「……何でもないったら、何でもないってば！！ もう、構わないでよっ……」

「いやあ～ん！ 千夏ったら怖い！ どうしてそんなに怒ってるのお？ 最近千夏、勇ちゃんに似てきて怒りのスイッチの場所がママには良くわからなくなってきたわ？ もしかして、これって年頃の女の子特有の反抗期ってヤツなのかしら？ んもう、忙しいのに



そんなワガママまで言われたら、ママはどうして良いのかスゴく困っちゃうー!」

……もうヤダ、涙が出てきちゃった……。

一人前のモデルとしてソロのステージに立つアタシの晴れ姿を、ママはもっともつと喜んでくれるかと思ってたのに。結局、このショ―もママにとってはタダのお仕事の一つ、アタシはその駒の一つに過ぎないのね? そうよね、だっていくらアタシのソロのステージだって言ったら、実際にショーのプロデュースをしてるのはママなんだもん。何が一人前よね、自分で笑っちゃうわ。

どうせアタシはママがいないと何もできないダメな女の子、そんなお荷物な娘の事なんて、ママにとったらどうでもいい、邪魔な存在なのね? 今のママにとってはお仕事が一番で、アタシやパパや弟の千秋の事なんて忙しくて構ってなんていられないのよね? ファミリーがみんなバラバラになっちゃったって、ママは寂しくないのね!? だったらもういい! アタシだって、ママなんてもういない! ママなんて大嫌い! ママなんて、もうママなんて……!

「……グスッ、ウウッ、グスッグスッ……」

「……千夏? 泣いてるの……?」

「チハル、ワルイデース! チナツ、トテモ カワイソウデース!」

「えっ? ソフィーまで、どうしてえ?」

「チナツハ ヒトリデ チハルヲ マツテテ トテモ サミシカッ

タデース、チハルニ Hagシテホシクテ チナツハ ズット ガ  
ンバツテタヨー？」

「……千夏が、寂しがつてる……？」

「Businessハトテモ ダイジネ、But、Famill  
yハモットモット Very very ダイジョー！ ワタシハ  
Baby、Nothingダカラ スゴク ワカルネ！ チナ  
ツハ Mamaガ ダイスキ デス！ ダカラ、チハルモ モット  
ダイスキ シナイト チナツ サミシイヨー！」

「……ソフィー……」

「チナツハ Very good girlデース！ ワタシ、チ  
ハルニ Jealousyシマース、チナツヲ ナカス、ワタシ  
ユルサナイデース！」

張り裂けそうなアタシの心の叫びを、ソフィーが片言の日本語で必  
死にママに向かって代弁してくれた。ソフィーはやっぱアタシの  
もう一人のママだわ、アタシが思っていた事を簡単に見抜いちゃっ  
た。三年振りの再会でも、ソフィーの愛は今でも変わらずとても温  
かかった……。

「……そうね、確かに、ソフィーの言う通りかもしれないわ？ 日  
本に帰ってきてから仕事が忙しくなって、ちよつと家族の事を蔑ろ  
にしていたかもしれない、千夏の事も、勇ちゃんの事も……」

「コノマエ、アキラガ オシエテクレタ ニホンゴデース！ 『フ

ウフエンマン』、『カナイアンゼン』、Very very wonderful wordネー！　チハルはステキナ Wife and mamaヨー！　コレカラモ、Tendernessナ Super ladyデ イテネー！」

「……そうね、そうよねっ！　せっかく昨日、麗奈に『最高の女性の一人』だって褒めて貰ったのに、こんな事じゃまた怒られてお尻を叩かれちゃうわ！　仕事も家事も全部こなしてこそその主婦の力リスマ・三島千春だっていうのに、こんな事じゃ主婦どころか母として、女として失格だわ！　ありがとうソフィー、おかげ様ですっかり目も酔いも完璧に覚めたわ！」

「Yeah, all right!　Don't worry, Baby!!」

「千夏、ごめんなさい！　ママが間違っていた、ママが悪かったわ！　寂しかったでしょ？　ホントはママも寂しかったの！　アナタはママにとって、仕事より大切な世界でたった一つの宝物、アタシの自慢の最高傑作よ！　さあ、早くママの腕の中に飛び込んできて頂戴！」

ママはソフィーのほっぺにお礼のキスをすると、優しい笑顔でこっちに振り向いて両手を広げてアタシを呼び寄せてくれたの！　アタシ、スゴく嬉しくって涙がこらえきれなかった！　もちろん、アタシは急いでママの胸に向かって一直線に飛び込んで行ったわ！

「……ママ、ママ！　大好きよママー!!」

涙でグシャグシャになったアタシを、ママは優しく抱き締めて頭をナデナデしてくれた。ママの胸はいつもみたいにスゴく温かくて、とても優しくかった。やっぱり、アタシのママは世界一のママだわ！仕事でも家事でも何でも出来ちゃう、アタシの自慢の最高のママなんだから！

「……グスツ、ママの腕の中、スゴく暖かいわ……」

「何よお、たかだかこれくらいでそんなに泣く事ないじゃない？千夏はまだまだ泣き虫のお子ちゃまさんなのねえ？」

「……グスツ、エヘヘッ、ゴメンね、ママ！」

「……じゃあね、そんなママの大好きな自慢の娘だからこそ、特別にお願いしたい事があるんだけど、いいかしら？」

「えっ、なにになに？ アタシ、ママが喜んでくれるなら何だって頑張っちゃう！だってアタシはママの最高傑作だもの！ いっそもう、ショーの段取りを全部任せてもらったって全然 No problem なんだから！ さあママ、お願いを言って！？ どんな願い事でもアタシが全部叶えてあげるわ！」

「それじゃあねえ、さっき言った通りアレとコレとソレとコレとアレらの荷物を全部ショー会場まで運んでくれるかしら？ ママはこれからソフィーと一緒にショッピングモールのステージ担当者と打ち合わせしなきゃいけないのよぉ〜？」

「……あっ、そう？ 結局、これ全部アタシが運べっ事なのね？」

あつ、そう？ そうなんだ？ ふ〜ん、結局、アタシってママの可愛い可愛いお使いペットって事だったのね……」

「だって今、千夏『No problem』って言ったわよね？ この仕事は今ね、千夏じゃないと出来ない、任せる事が出来ない大切なものなのよ？ このショーの成功は全てあなたの力にかかっているわ、期待してるわよ、千夏！」

「……騙されない、もう騙されない、アタシ、もうママの言葉に泣いたりなんてしないわ、また一つ、アタシは女の醜い部分を垣間見て、大人の女性への階段を上っていくのね……」

「……何よ、何よ何よ何よ！ 結局アタシの役目ってママの荷物持ちだけじゃない！ このショーのアタシの役割ってタダの雑用係！？ 何でステージの華やかな主役であるショーモデルがこんな雑用まですなきゃいけないのよ！？ 荷物持ちくらい別でアルバイトを雇えばいいのに、バツカみたい！」

しかも、何なのよこの荷物の量、どこがちよつとなの！？ アタシ、ここと現地を何往復すれば全部運び終わるのよお！？ やっぱリママはアタシの事なんか愛してなんてくれないんだわ！ あんまりよ、これじゃアタシちつとも報われない！ まるで意地悪な召使いに虐められる、惨めな悲劇のヒロインじゃない！

「……荷物って、組み立てデスクとかディレクターズチェアとか、全然ショーに関係ないママの私物ばかりじゃない！ しかも助手席には悪趣味な大きなクマかゴリラみたいな気持ちの悪いぬいぐるみまで乗せてきて、こんなにたくさん一人で持っていける訳ないでしょ〜！！！」

……あつ、そうだね。そうよそうよ！ ゴリラよゴリラ！  
アタシとママのラブラブな関係が少しずつおかしくなってきたのは、  
忘れもしないあの悪夢のあの日のあの時！ あの不細工ゴリラこと  
柔道バカ澤村一茶が、アタシの目の前にヒョコヒョコと現れたあの  
高校の入学式の日からだったわ！

可憐で美的で才色兼備な学園のスーパーアイドルであるこのアタシ  
を、見た目だけでメチャクチャにけなして踏み潰してくれたあの F  
uck in' beast！ ううん、入学式どころじゃないわ。  
あの電車で初めて会ったあの時から、あのゴリラのせいでアタシの  
華やかなセレブライフの歯車がギリギリと狂い始めたのよ！  
しかも、よりによってまさかママがアイツのスポンサーになるだ  
なんて！ いくらお仕事の上でやむを得なかった契約だったとい  
つても、アタシの大切なママがあんなクソゴリラの為に色々とサ  
ポート役に回らなきゃいけないだなんて、アタシにとってこんな  
侮辱は他に無いわ！ 絶対に許せない話よ！！

間違いなく、あの日はアタシの人生において一番最悪の一日だ  
ったわ。あの男さえいなければ、今頃アタシとママは仲良く幸  
せなセレブライフを堪能していたはずなのに！！ アタシがこんな  
辛い思いしてるのは全部アイツのせいだわ！！ アイツのせい、  
アイツの、アイツの……！

「……マ、ママ……？」

「ん？ 千夏、どうかした？」

「……これ、ぬいぐるみじゃないよね？ 何、コレ……？」

見た感じゴリラのぬいぐるみかと思っていたバカデカイ助手席の物体は、良く見るとダッシュボードに頭をつけてうずくまってウーウー唸ってる。嫌あ！これって生き物じゃない！何よコレ！？エイリアン！？キングコング！？ジエイソン！？それともターミネーター！？こんな危なそうな未確認生物まで連れてくるだなんて、ママったら一体何を考えてるのよぉ！？

「ああ、そうそう！ごめんね、すっかり忘れちゃってたわ！ソフィー、ご希望の日本男子を用意したわ！満足してくれるかしら！？」

「Wow！It's a SAMURAI BOY！Amazing！Excellent！Very very fantastic，Yeah！！」

「……『サムライ・ボーイ』……？」

助手席のドアのガラス越しにその生物の姿を見たソフィーは飛び上がって大喜びしてる。恐る恐るアタシも窓を除くと……。

「……Oh，no．．．Oh，my god．．．Oh，my god！Oh，my god！Oh，my god！！Nooooooooooooo！！！！」

……嘘よ。嘘よね？悪いジョークよね？夢だわ。これは夢だわ

！　ママが、アタシの大好きなママがこんな事をする訳ない。アタシが世界で一番大切だつて言つてくれたママが、アタシが宇宙で一番嫌がる事をする訳がないわ！

信じない、アタシは信じない！　これは悪夢よ、アタシは悪夢を見ているんだわ！　早く目を覚まして、起きるのよ、千夏！！

「……ママ、やめて、お願い、アタシをこれ以上イジめるのはやめて、お願いママ、ママ……!？」

「長時間のドライブご苦労様！ 無事に現地に着いたわよ！ 調子はどうかしら、澤村君？」

[N O O O O O O O O O ! ! ! !]

Why, why, why! ? 何で! ? どうして! ? どうしてよお! ? どうしてここにこの不細工ゴリラがママと一緒にやって来ているのよお! ? 何でうちの車の助手席にコイツがちゃっかり乗ってたりするのよお! ? もう訳わかんない、頭壊れそう!

I Don't know! I Don't know! んもおう全然アйдノオウ!!

「……ママ、ママ、ママ？ なぜ？ どうして、どうしてママはこんな残酷な事をアタシにするの……？」

「あら？　千夏にもちゃんと話したはずよ？　今日のショーは、以前陸上選手だったソフィーや他の契約スポーツ選手達に色々素材や運動機能などを監修してもらって、以前の『ミシマ』ブランドで



培われた最新のデザインや装飾を施して作り上げたママの自信作、プロのアスリート選手から一般のスポーツユーザーまで幅広くカバーする新ブランド『HMスポルティーボ』の御披露目ステージだつて！」

「それは聞いてる、聞いてるわ！ でも、それとこのゴリラが何でここにいるのかは全然説明になってないし、アタシは何も聞いてないわ！」

「どうしてえ？ だって澤村君はこのブランドとスポンサー契約をした現役の柔道選手なのよお？ それにね、今日はいつものファッションショースタイルとは違って、クローステージのブース内の中だけで全国の教育関係者を招待して、私立や公立の学校用の公認スポーツウェアの契約マネージメントと販売用のカタログ作りをする予定でいるのよ？ だから、スーパ―高校生柔道家として全国的な知名度がある澤村君には、是非とも特別ゲストとしてイベントに参加して欲しいって関係者やソフィーからもリクエストがあったのよ！」

「……カタログ、作り？ 教育関係者だけの御披露目？ ちよつと待って、じゃあアタシのソロステージの話は何！？ あの話は一体どこにいつちゃったのよお！？」

「だからあ、千夏には女性用スポーツウェアのモデルとして、教育関係者の前で小さなステージに立ってその着こなし姿を御披露して貰うのよ！ その時、舞台の上には千夏、アナタだけだわ！ アナタ一人だけが役所のお偉いさん達の視線を一点に受けるのよ！ どう？ 今からワクワクしない？ ねっ、ちゃんとママの言った通りのモデルのお仕事になっているでしょ？」

「チナツナラ キット High school student  
sノ ミンナノモデルニ ナレルネー！ ミンナ、チナツニ クビ  
ツタケヨー！？」

……騙された。騙されたわアタシ。騙された騙されたあ！  
！ アタシ、完全にママに騙されたあー！！ 何よ、何がソロのス  
テージよ！ こんなファッションショーって言うより、ホントに  
マネキン一体あれば済んじゃうタダの体操着のカタログ作りじゃな  
い！

ステージだのショーだのモデルだの色々言われるから、すっかりい  
つもあの賑やかなファッションショーだって勘違いしちゃったじ  
やないのよお！！ 何が一人前のモデルとしての晴れ舞台よ、これ  
じゃエキストラのモデル募集を応募してきた一般の女子高生と同じ  
扱い、アタシ自身がアルバイトみたいなもんじゃないのよおー！？

「ヒドい、ヒドいわママ！ アタシ、本気でこのステージを踏み台  
にして、遂に華やかなトップモデルの世界へと飛び立てるって夢見  
てたのにい！ まるでビックないイベントのショーの主演に抜擢した  
みたいに振る舞って、喜んで有頂天になるアタシをまんまと騙して  
いたのねえ！？ 何で、どうしてえ！？ どうしてママはけんなに  
可愛くて素直なこのアタシにそんなヒドい嘘を真顔でついたりする  
のよおー！？」

「だってえー、それくらい言っただけでこないと千夏、学校用のジ  
ヤージとか体操着とか人前で着たりしてくれないでしょ？ あと  
お、部活動用のテニスウェアとか弓道着とか競技用水着とかあー」

「……嫌、嫌、嫌あー！！ ジャージはともかく、テニスウェアや

水着だなんて、そんなのまるで秋葉原のコスプレ写真会じゃない！  
ママは十代の汚れの無い無垢な自分の娘のあられも無い姿を、  
たくさんの教育関係者のおっさん達の目前に一人で晒すだなんて、  
そんな卑劣で卑猥な真似をして何とも思わないのお！？」

「でねえ、女性モデルは千夏でOKとして、問題は男性モデルを誰  
にしようかスッゴい迷っちゃったのよぉ？ 千秋はまだイギリス  
から帰ってこないしい、いくら何でも勇ちゃんにやらせるには学生  
として歳取り過ぎちゃってるしいゝ？」

「お願いママ、アタシの話を聞いて！ アタシにとってはこれから  
の人生にかかわる大事な話なの！ ママはアタシが恥ずかしい思い  
をしても平気なの！？ ホントにママは、もうアタシの事を愛して  
くれて……！」

「そこでね、ソフィーからはやっぱり勇ましい『日本男児』っぽい  
男の子がモデルとして適任じゃないかってアドバイスをされてね、じ  
ゃあって事で澤村君をモデルとして抜擢したのよ！ 背が高くてガ  
ツチリしてるし、なんてったって現役柔道選手だもん！ ジャージ  
や体操着が似合わない訳がないわ、きっとコマースヤル効果も絶大  
よ！ 千夏と澤村君がモデルだったら、きっと相性バツグンでステ  
キな学校用カタログが完全すると思うわ！」

「ニホンノ サムライ、ワタシ ダイスキネー！ JUDO、サイ  
コウネー！ クロオビ、ワザアリ、イッポーン！」

「嫌あゝ！！ いやイヤ嫌あああ！！！！」

……もうダメ。アタシ、終わったわ。もう終了。死んだも同然よ。

タダでさえ公務員連中の前で恥ずかしい姿を晒さなければなら  
ないっていうのに、それを世界中で一番大嫌いなこのバカゴリラと一緒  
にしなければいけないだなんて。しかもこの姿がカタログになって  
全国の学校に配れちゃうんだわ。どうしよう、こんな事がもし翼達  
に知れたら、アタシこの先、生きてなんていけない……。

Oh, Jesus! アタシはそんなに親不孝で悪い娘でしたか？  
なぜ、こんなひどい仕打ちをアタシに与えるのですか？ 美人薄  
命ってホントの話だったのね。絶世の美少女として生まれ、美しい  
女性へと成長したアタシの姿そのものが、神の怒りを買ってしまう  
重罪だったんだわ……。

ああ、アタシの愛しき王子様、あなたが世界中を探し求めている姫  
はここにいます。意地悪な母親とまま母と凶悪な野獣に暗闇の檻へ  
と閉じ込められて、その愛の命の炎は風前の灯火。どうかこの地獄  
の様な現状から、アタシを救い出してステキなお城へと連れ去って  
下さいませえ……！？

「うー、うー」

……んもーうー！ さっきから車内に響くこの家畜みたいな唸り声  
が耳障りでメチャクチャウザい！ 現実逃避すらまともに出来ない  
じゃない！ 元はと言えば全ての悲劇の始まりはこのFuck野郎  
のせいよ！ このFuckin' jap monkeyさえアタシ  
の前に現れなければ、今頃アタシの青春時代はロマンス映画顔負け  
のドラマティック・ストーリーになっていたのにい……！！

「ちょっとアンタ！ 何を馴れ馴れしくママの車なんかに乗ってんのよお！！ この車の助手席はアタシだけのスペシャルシートなの！！ アンタみたいな巨体が座ったらシートが痛むでしょ！？ さっさと降りなさいよ、Fuck off！！ Get out way！！」

「臭い」

「……What！？ 何ですって！？」

「酒臭い」

……あつ、そういえば何か車の中、スツゴい不快な臭い！ 何よこのアルコールと汗臭さと酸っぱいのが混ざってゴチャゴチャになった頭の痛くなるこの臭い、こんなのファブリーズでも絶対消えないわよ！？ 一体何を積んだらこんな臭いが車内に残るのよお！？ もう、訳わかんない臭い！！

「あつ、ごめんなさいね澤村君？ それはきつとね、アタシが澤村君を迎えに行く前に車に乗せてた麗奈のお土産の残り香だと思うわ？ 麗奈ったらスゴいハイペースでガンガンチャンポンしてお酒空けちゃったから最後悪酔いしちゃってね、送ってる最中に何回か後部座席でゲロゲロゲロってリバースしちゃったのよお！！」

「……Oh, my god... No! Oh, Mom. No! No, no, no, no, no...!!」

「時間が無くてとても洗車してる余裕が無かったのよ、ごめんなさ

いね？　もしかして澤村君、酔っちゃったかしら？　千夏も帰りはちよつと車の中が臭いかもしれないけど勘弁してね、お願い！？」

「Zoooooooooooo!!!」

……壊れていく、壊れていく。アタシの居場所が、アタシの世界が、アタシそのものがママとの思い出と一緒に壊れていくう!! アタシの大切な家族が、華麗なる一族である世界の三島ファミリーが、野蛮な人間達に腐食されていくううう!!

「バカバカバカ！ ママのバカ！ ママなんて大っ嫌い！！ みんな大っ嫌い！！ バカアーーーー！！」

「いやんいやんいやあゝん、そんなに大声出したら怖あゝい！ 千夏ったら、いつからママに向かってそんなヒドい言葉をぶつける様になつたのよあゝ！？」　ママはそんな悪い子に育てた覚えなんてないのにいゝ！？　きつとカルシウムが不足してるのね？　ママ今度ね、美容サプリメント商品のプロデュースもやってみようと思つてるのゝ！　その時はまた、千夏にモニター参加者としてサポートお願いするからどうかよろぴくねえゝ！？」

G、Wの昼間の立体駐車場に断末魔の様な叫び声が響き渡り、辺りは真つ白く火山灰で埋め尽くされた。アタシが正気を取り戻した頃には、方向性を失ったドライバー達が上下階あちこちで追突事故を起こして車が一本の組みたいに一列に連なっていた。ママもソフィ

「もアタシの火山灰ですっかり真っ白になっていたわ。みんな、アタシの迸る熱いジェラシーの炎に燃え尽くされてしまったのね……」

「……またやっちゃった、アタシったら、やっぱり罪作りなイケない娘……」

「チナツ コワイネー、オコルト パパ ソックリネー」

「とにかく酒臭い」

もう、こうなったらテニスウェアだろうがスクール水着だろうが何だって着てやろうじゃない！ アタシがどんなファッションでもイケちゃうスーパーモデルって事を、ママとソフィーの目の前で証明してみせるわよ！ そして、この車酔いしてる家畜ゴリラとは役者が違っって事を全員に思い知らせてやるわ！ 覚悟なさい、澤村――茶！！

## 第57話 フェイク

「きゃ〜！ 千春ちゃ〜ん、チナッティ〜、お久しブリブリ〜！」

「社長さーん、千夏ちゃーん、お久し振りですうー！」

「エッ〜！ ウツソ〜！？ リョウちゃんにランちゃん、それにモさんまで！ みんなどうしてここにいるのお！？ 元気だった〜！？」

聞き慣れたドス低いオカマ口調の声と耳が切り裂けそうな甲高いアニメ声に後ろを振り向くと、これでもかっ！ ってくらい胸元を強調したど派手なドレスに身を包んだ大柄の女性とアキバ系猫耳コスプレをした小柄な女の子、そしてその後ろから静かに歩いてくるOLスーツ姿の社長秘書風な美女がこちらに近づいてくるのが見えたわ。

彼女達は知る人ぞ知る、世界の『チハル・ミシマ』ブランドを影から支えるママご自慢の『百花繚乱』カルテットのメンバー達なのよ！ それぞれがママから直接アーティストとしての技量や心構えを叩き込まれた世界でたった一つのスペシャルチーム、ママが本気になる時にしか滅多に召集しない最強の四人衆なの！

「しゃ、社長！？ そんなに全身真っ白になられて、一体どうなされたんですか！？ 消火器か何かでも暴発したんですか！？」



アタシの火山灰で真っ白になったママの体を慌ててはたいて気遣うこの女性はメンバーのリーダー的存在の通称『モモさん』、名前が百香だからモモさんって呼ばれてるの。彼女の主な役割はママの代理人として広報や交渉契約、イベントの総合演出などを任されていてチーフディレクターみたいな存在なの。

天真爛漫で少しおっちょこちょいなママとは違ってスゴく冷静沈着な人で、それぞれ個性が強すぎる各メンバーをまとめるのに必要不可欠な人材。それ故、ママが一番信頼を寄せる実質上ママに次ぐナンバーツーの実力者なの！　なのにモモさんはまだ二十代後半でまだまだピチピチの女盛り、このアタシですらも憧れちゃうスーパーキャリアウーマンなんだから！

「……ふう、ちょっとした爆発事故みたいな事が起こっちゃってね、でも、もう収まったみたいだから大丈夫よっ！」

「……爆発、事故？　みたいなの？　うーん、何が起きたのかはよくわかりませんが、くれぐれもご自身のお身体には十分にご注意ください、下さい、社長の代役を務まる人間は他にいないのですから……」

「わかってるわ、安心して！　それより、みんな総出でお出迎えありがと〜！　ちょっと到着が遅れちゃってゴメンねえ〜！」

ヤダ、スゴ〜い！　ママったら、あれだけアタシの怒りの火山灰を浴びても灰がスツと下に落ちて全然ヘツチャラ、お肌もツヤツヤのまままでヘアスタイルも全くも乱れていないわ！

さすがはママね、この前アタシが学校の入学式で大噴火した時は、那奈も小夜も翼もみんなお笑いコントの爆発の後みたいになグシャグ

シャヘアになつてボロボロになつたのに！

もう四十代に突入したつていうのに、ママのこのピチピチのお肌ツヤツヤとSexyなPerfect bodyはやっぱ超ハンパないわ。きつとママの体は最先端のステンレス加工かチタンコーティングみたいなものが施されて錆びない様に出来ているに違いないわね！ いいなあ、アタシもいつかはママみたいなIron womanになりたくい！

「あゝもういやいや、相変わらずモモは肩凝っちゃいそうなお仕事口調で堅っ苦しいのよね〜！ 千春ちゃんはそのいうおべんちゃらは苦手なんだから、もうちょつと肩の力抜いたらどう？ そうやって全然遊び心がないもんだから、いつも合コンでも男に相手にされずに一人だけ売れ残っちゃうのよ？ でしょでしょ、ランラン？」

「そうですー、リョウさんの言う通りですー！ モモさんはツンツンで腹黒くて話がつまんないから、女の悪いところばかりが目立って全然魅力が感じられないですー！ モモさん、笑顔ですー！ ニヤンニヤン！」

「……余計なお世話ですね、人工物と腐敗物にいちいち指摘される筋合いありませんから」

「ヤツダゝ、人工物ですつて、言うよね〜！ ちよつと聞いた、ランラン？」

「腐つてゐるだなんて失礼ですー！ もう『くたばっちまえ、このアマ！』って感じですよー！」

そうそう、モモさんはママの前だととても素直で有能な部下なんだけど、いざママがいなくなるとちよつと性格の悪い腹黒さが出てくるのよね。口の悪さも相当よ、ママのお店に入ってきたアルバートの女の子達は全員一度はモモさんに痛烈なイジメを受けた事があるらしいわ。怖い！

んでえ、そんなモモさんに強烈なツッコミを入れてるのがメイクアップ担当の『リヨウちゃん』とネイリストの『ランちゃん』の二人リヨウちゃんはママの昔からの知り合いで共に世界でたくさんの舞台を経験してきた凄腕メイクアップアーティストなの。これまでも様々な女優やアイドルの専属メイクを担当してきた超売れっ子さんなのよ！

そして、ランちゃんは何とまだ現役美大生の学生さん！ 類い希な芸術センスを買われてママが直接チームにスカウトした逸材なのよ！ ママがわざわざ自分から出向いてお願いしにいくなんて滅多に無い話なんだから。ネイリストとしての才能はもちろん、美大生だけあって絵もとっても上手いの！ 趣味で漫画やイラストなんかも書いてたりするの、スゴいでしょ！？

「じゃあ早速で申し訳ないんだけどお、アタシとソフィーは今から最後の打合せに行くから後を頼むわね、よろしくうー！」

「かしこまりました社長、後はお任せ下さい」

「チナツ、ガンバッテネー！ See ya!!」

「うん！ ママ、ソフィー、Good luck!」

な〜んだ、ママったらアタシ一人に荷物を運ばせようとしてたのか  
と思つたら、先にみんなに連絡して援軍を頼んでくれていたんだ。  
やっぱりママはちゃんとアタシの事を愛してくれていたのね。そんな  
事も知らないでバカだなんて言つて、ごめんなさい、ママ！  
アタシ、頑張つてモデルのお手伝い全うして挽回するから安心して  
見ててね！ ママの新ブランドの御披露目に相応しい最高のイベント  
トにしてみせるから、期待してもらつて構わないわ！ アタシに任  
せて！

「じゃあ、皆さんで分担して会場まで荷物を運ぶとしましょうか、  
リヨウさん、ランさん、後は宜しくお願いしますね」

「ちよつとちよつとちよつと〜！ 何よ、モモも何か手伝いなさい  
よ〜！？」

「ランラン達は引越屋さんじゃないですうー！ モモさんも社長さ  
んのチエアぐらい持つていきやがれですうー！」

「私はこれからハナがセッティングした会場ブースの最終確認をし  
なければならぬんです、そんなガラクタなんて運んでる暇なんて  
ありませんから」

「ヤツダ〜、ガラクタですって！ これ全部千春ちゃんの私物なの  
よ？ 本人がいなくなつたからつて言うよね〜！」

「最っ低のクソ女ですうー！ もう『いっぺん死にやがれ』つて感  
じですうー！」

んもおゝう、ママがいなくなった途端に、急にみんな本性剥き出しにしてギスギスし出すんだからあゝ！ 女同士の争いって華やかなようでとても醜く冷徹なものよね。顔は笑顔で仲良く喋っているように見えて、下ではお互いの足をガシガシ蹴りあっている感じ。この業界ではうちのチーム以外でも良くある日常茶飯事的な光景なのよ。

しょうがないわね、ここはアタシがリーダーになってみんなをまとめるしかないわね。何てったってアタシはママの最高傑作、世界のミシマの名を背負う後継者の定め星の元に生まれてきたんだもの。いつか来るであろう将来のアタシの時代の為にも、今からでも頑張らなきゃ！

「いいわ、コレとコレはアタシが持つていく！ 残りはリョウちゃん」とランちゃんをお願い！

「……い、いや、あの、千夏ちゃん？ あなたにはこの後、イベントのモデルとしての重大な役割があるのだから無理しなくていいのですよ？ もし、あなたに何か怪我とかあったら私は社長に合わせ顔が……」

「ヨイシヨット！ ううんモモさん、いいのいいの！ アタシ、さつきママにヒドい事言っちゃったからこれはせめてもの償いなの！ いつも部活で鍛えてるもの、これくらい何ともないわ！ Don't worry!」

「……い、いや、でもかし……」

「ねえねえ、どうすんのよモモ？ 社長令嬢が自らが荷物持ちを買って出てるのよ？ なのに、アンタ一人だけ手ぶらで楽するってち

よつとヤバくな〜い？」

「……わ、わかりました！ わかりましたよ！ 持てば良いんですよね持てば！ 千夏ちゃん、私にもお手伝いさせて下さい！」

「やつぱりモモさんとはんでもない腹黒女ですうー！ 同じ女として非常に醜くて恥ずかしいですうー！」

車の中にあるほとんどの荷物は女性でも持てる軽い物ばかりなんだけど、なぜが一つキャンプ用みたいな超重たそうな折り畳み式テーブルが一台ドスンと積んであるのよね。何なのよコレ？ どうやって車に積んだの？

ママったら、会場でバーベキューでもするつもりなのかしら？ こんな大きなテーブル、ホントに必要なの？ も〜う、面倒だわ！ 荷下ろししているアタシ達を見て、他のお客さん達には『何事か？』みたいな目で見られて目立っちゃってるし……。

「……重、たい、ですうー！」

「やだやだ〜、ランラン一人でそんな大きなテーブル持てる訳無いでしょ？ ここはお姉さんに、マ・カ・セ・テ！」

「……ふうー！ リヨウお姉様、お願いしますですうー！」

「うおりゃああああー！」

「ちよつとちよつとお、リヨウちゃん！？ 声が完全に男に戻ってるわよおー！」

「しかも、あんなガ二股になって……、みつともない、何て見苦しい姿なんでしょうか……」

あつ、そううつ。言い忘れていたんだけどお、リヨウちゃんの本名は『繚一郎』っていうの。えっ？ 女性なのに名前が繚一郎ってどいういう事なのかって？ えっくとねえ、スゴく説明しにくいんだけどお、コレ言っちゃって良いのかなあ？

つまりいゝ、リヨウちゃんは昔、『男の子』だったって事なの。今はすっかり全身のカスタマイズが完了して正真正銘女の子の体になっているんだけど、たまゝに油断すると言動が三十五歳のオッサンに戻っちゃったりするのよねえ。

「……お、重お……」

「一人じゃ無理よ、リヨウちゃん！ 絶対持つていけないってばあゝ！ アタシ達も手伝うから、無茶しないで！」

「リヨウさん、もうみつともないから止めて下さい！ そばにいる私達まで恥ずかしいです！」

「このままじゃリヨウさんのカスタマイズボディが崩れて、胸のシリコンが有り得ない場所に移動しちゃいますですうー！ ただでさえバケモノなのに更に妖怪化しちゃいますですうー！」

ヤダ、困ったわ！ こんな重たいのみんなと一緒に持たないと、とても会場まで運んでなんていけないわ！ ホンット、ママはどうや

つてこのテーブルを車に積む事が出来たのよお！？　アタシとあとの二人は他の荷物で両手がふさがっちゃってるし、一度この荷物を会場に置いてきてからもう一回ここにみんなで取りに来ないとダメかしら……？

「なら、俺が持っていきましょう」

「……あらっ？」

テーブルを頭の上に担いでプルプルしているリョウちゃんの背後から大きな人影が近づいてきたと思いきや、その重たい荷物をスツと片手で掴み上げて軽々と肩に担いでみせた。その怪力を目の前で見せつけられたリョウちゃんを始めモモさんやランちゃんもポカーンと口を開けて啞然顔。もちろん、その人影の正体はアタシが世界中で一番大嫌いなあの不細工ゴリラ、澤村一茶！

「何よアンタ！　車酔いしてウーウー唸って苦しんでたんじゃなかったのぉ！？」

「外の空気を吸ってすっかり治った、もう問題ない」

「だったら女ばかりに力仕事させてないで、最初からサツサと手伝いなさいよ！　ママに頼まれてこのテーブルを車に積んだのもアタの仕業なんじゃないの！？　人の家の車に乗ってくるだけでも十分ウザいのに、余計な仕事ばかり増やさないでよ！」

「やれやれ、普段は男女平等だの女の権利だのギャーギャーとやか



ましくせに、いざ困った時だけは都合良く甘えて男の手に頼る、女とは本当に自分勝手に面倒な生き物だな、特にお前のような口うるさい女は」

「Shit! あゝんもおゝう、いちいち気に障るわコイツゝ!!  
アンタごときに『お前』なんて呼ばれたくないのよ、この下品不細工ブタゴリラ!」

「俺もお前ごときに『アンタ』呼ばわりなどされたくもない、一体何様のつもりだ、お前は」

「キィゝ! 腹立つゝ!!!」

『アンタ』こそ何様のつもりなのよ、このCock suckerは!  
あのまま黙って車の中でずっとうづくまっていれば良かったのに、いざ口を開けばネチネチネチ嫌みったらしい事ばかり喋ってアタシの言う事全てに反抗して!

冗談じゃないわ、何でこんなFuckin' beastとHigg school以外のPrivate timeまで一緒に過ごさなきゃいけないのお!? こんなダサくて不細工な男をモデルに使おうだなんて、ママとソフィーは一体何を考えてるのよお!?

「……あらやだゝ、スッゴい男前、遅しいわぁ……」

「……えっ? ちょっとリョウちゃん? どうしたの?」

「……なるほど、彼が社長とソフィーさんが惚れ込んだ澤村一茶君ですね、高校生ながらこの体格と大人びた風格、私も凄いピンピン

来ちゃいます……」

「……嘘お、モモさんまでそんな事言い出して……」

「ウホッ、キタキタキター！ これぞ今や絶滅したと言われていた伝説の『昭和七十年代汗臭さバンカラ男』キャラですうー！ ランラン、伝説の男に出会えてマジ感激ですうー！ アニキー、今からアニキの事を『番長』って呼んでイイツスカ？ オッース！」

「……あゝあ、ランちゃんまで、どおしてえゝ！？」

「……何よ、何よ何よ何よ！？ Why？ 何で？ どうして？ 三人とも、こんな無愛想で減らず口で敵つくて醜くて頭の悪そうな男の一体どこがそんなに良いのお！？ バツカみたい、みんなもつとカッコいい芸能人とかジャニーズ系アイドルとかリッチなお金持ちの人とかと一緒にビジネスしてるっていうのに、この男のどこにそれ以上の魅力があるっていうのよお！？ みんなしてちよつとおかしいわ、もうUnbelievableよ！！」

「……私、ある程度年収のある二十代後半のフリーなんですけど、澤村君は年上の女性とかがって興味あつたりします？ 実は私、こう見えても以外に家庭的だったりして、料理とか家事も結構得意だったりして……」

「いやいやいやゝ、無理無理無理ゝ！ モモ、あんたには無理よゝ？ 一茶ちゃん、やめといた方が良くわよこの女はゝ！ 性格は無茶苦茶悪いし物凄い腹黒いし、第一、初対面でいきなり自分の年収

をアピールするなんて、もうセンスゼロでしょ？ やっぱり女っていうのは一緒にいて息苦しくないのが一番よね？ お姉さん、一茶ちゃんの事すんごい楽しませちゃうわよ、どうかしら？」

「汚らしいオカマのオッサンが清純な青少年相手に出しゃばらないで貰えますか！？ 私にとって澤村君とのお付き合いは、今後の女としての人生の運命を左右しかねない大切なものになるかもしれないんですから、外野は余計な口挟まずに黙って引ッ込んで下さい！少しは身の程を弁えたらどうですか！？ あなたに女を語る資格なんて一つもありませんから！！」

「言うよね、言うよね！ 自分こそ高校生相手に結婚話をチラチラちらつかせて、本当にあんたって『重たい女』よね？ これだからいつも男に嫌がられて捨てられるのよ？ ああ、何て可哀想な女なのかしら！？ こんな女じゃ、相手になる男の人はとても幸せになんてなれないわよね！？」

会場に向かう合間でも、無愛想なゴリラを挟んでモモさんとリョウちゃんが牽制し合って火花バッチバチ。後からついていくアタシはすっかり呆れ顔よ。ホント、訳わかんない。端から見てもスゴく虚しくて醜い争いよね、お互い必死過ぎなんだもん。

かたや仕事三昧で婚期逃がしまくっている男運の無い寂しい女性、かたやまともな男性とは交際出来ないであろうと思われる元オッサンの惨めな女性、こうなっちゃうともう男だったら何でもいいのかしら？ アタシ、歳を取っても絶対あんな風にはなりたくない。絶対に嫌だわ……。

「否、否あー！ 番長には売れ残りのひもじい独身女の体も、改造

妖怪の醜い偽物の体もゴミ同然ですうー！ 番長にはババアどものつまらん恋愛妄想の世界より、もっと相応しい世界がちゃんとありますですうー！」

「……う、売れ残りですって！？ ランさん！？ その発言、どういう事なのかしっかりと説明して貰おうじゃありませんか！」

「言うよねー！ ランラン、話によっては後でモモと一緒に女子トイレに連れ込んで泣くまでイジメちゃうわよ？ 一茶ちゃんに相応しい世界ってどこなのかしら？」

「ズバリ、番長には濃厚なボーイズラブの世界で腑抜けなヘタレ男の○ツの穴にぶつとい気合注入棒をオッスオッスオラオラしてアッー！ ってなってる男の極小チ○ポを更に力ずくでしごきまくって最後は迸る白い血潮をンギモヂイ！ って相手の顔面や全身にぶっかけまくる鬼畜調教するのが一番似合ってると思うですうー！ ランラン、今度のコミケは是非とも番長をモデルにした同人誌を描いて腐りきった同族種の女どもをハアハア言わせまくりたいですうー！」

「……………」

「……もう一つ、言い忘れていた事があるわ。あのぉ、ランちゃんはね、スタッフの中でもアタシと一番歳も近くてちよつと幼い部分もあって、お姉さんっていうよりも妹みたいな存在んだけど、見た目の奇抜なコスプレファッション通り強烈な腐女子キャラの女の子なの。」

最近日本のYoung generationsで急激に増えてきた完全なアキバ系のオタクさんで、さつき趣味で描いているって話

した漫画やイラストのほとんどは、有名なアニメや漫画の男性キャラクター同士がスゴい事になっちゃってる十八歳未満お断りの内容ばかりなのよ。

実はアタシね、一度ランちゃんの漫画を偶然読んじゃった事があるんだけど、とりあえず絵は物凄く上手くて綺麗ではあるの。でもね、その分色々と描写がリアル過ぎて強烈なのよ。何がどうリアルなのかはみんなのイメージに任せるわ。アタシの口からはとても言えない……。

いつもアタシにしてくれるネイルアートがみんなとても素敵でデザインばかりだっただけに、その裏の顔を知ってしまった時のショックは計り知れなかったわ。いつか、あんなのやこんなのをネイルに描かれちゃったりしないかってちょっと心配なのよ……。

「ほぐらランラン、見てご覧なさい？ あなたの空気読めないぶっちゃけ腐女子トークでチナッティもモモも一茶ちゃんもみくんなどン引き、真っ青な顔して凍りついちゃったわよ？ もう最悪、どうしてくれるのこの場の空気？ とてもじゃないけど、お姉さん一人じゃ修復出来ないわ〜！」

「うっー！ みんなして軽蔑の眼差しで見るなですうー！ 現在の日本で一番アツいのは腐女子文化ですうー！ バカにする輩は『臍腑プチまけてくたばりやがれ』ですうー！」

「言うよね〜！」

この最強メンバーを前にしてママは『例え水商売の世界でも頂点に立てる自信がある』ってアタシに言ってた事があるわ。何かわかる気がする。それくらい、このチームには個性豊かで様々な才能が溢

れた人材がたくさん揃っているのよ。

でも、その頂点に立ってみんなを率いているのはもちろんママよ。ママだからこそ、これだけの人材を一つに集めて一致団結する出来るの。スゴいリーダーシップよね、やっぱりママは偉大な人物だわ！

「……………」

アタシがそんな事を考えていると、何か不快な気配と視線を真横からピリピリ感じとったの。その正体は何なのかと横に振り向くと、あの柔道バカゴリラが隣からアタシの姿をジッと見下ろしていたの！ うわぁ、ヤダ、気持ち悪い！

何か言いたげそうな表現をしてこつちをずっと見つめていて、もうホントに嫌、寒気がするわ！ タダでさえ吐き気がするくらい不細工な顔のクセして、さらにあの開いてるのかどうかわからない細い目で見下ろされてるって超不愉快。ホントにもう、スッゴいストレス！

「……………何？ 何か用！？ 言いたい事があるならはつきり言いなさいよ！」

「ならば、遠慮なく言わせて貰おう、お前の周辺にはこんな奇妙な人間しか他にいないのか？」

「悪い！？ 何か問題でもお！？」

「いや別に、類は友を呼ぶと言うしな、おまえ自身も奇妙で不可解な人間だから妙に納得しただけだ」

「ハア！？ 何よ、ケンカ売ってんのお！？ アンタはいちいちアタシに嫌味を言わなきゃ生きていけない訳！？ ウザい、ウザいのよアンタは！ 話がしたいなら他でしなさいよ、アタシはアンタと口すらも利きたくないの！！」

「それは同感だな、俺もお前みたいな女とは口も利きたくもない、お前の声を聞くとこちらの耳が腐りそうだ」

「……！！」

んもおうイライラしていい加減ストレスも限界寸前、ここでもう一度怒りの大噴火でもしてやろうかって思った時、周りを見るといつの間にかアタシ達は今回のイベントが行われるショッピングモールの中央広場に到着してた。

この広場は様々なイベントが開催可能らしくて、買い物帰りに立ち寄ったギャラリーも無料で見物出来る多目的ホールみたいな感じの作りになってるみたい。

会場にはすでにアタシがスポットライトを浴びるアタシの為だけの最高のステージ、って言っても大して大きくない屋根付きのブースなんだけどね。それでも今日の主役であるアタシの到着を今か今かと待ちわびている様にそこに組み立てられていたわ。

教育関係者相手のお堅い殺風景なイメージの作りかと思ったら、何かBlackをモチーフにしたデザインでとてもCoolな感じに仕上がっていてGood feeling！ さすがはどんな場面でもお洒落心を失わないママのデザインらしいわ。こんなのもたまにはアリかしら？

「今日のイベントはいつものコレクションスタイルとは違って、教育関係者に向けての新たな『ミシマ』の挑戦であるスポーツウェアブランドの発表会ですからね、公務を担当されている招待客相手という事で少し落ち着いた地味目のデザインを施してありますが、やはりそこは我らが世界の『ミシマ』、他のブランドとは一味違うフアッショナブルな一面もアピールしてみました」

「なるほどねえ！ 学校用のスポーツウェアといっても、やっぱりカッコ良くてCoolじゃないと先生や生徒達のHeartはGet出来ないもんねえ、超納得！」

「世界の舞台で闘う一流スポーツ選手に合わせたハイグレードタイプも用意してありますが、あくまでもこのブランドのメインマーケットは一般庶民層をターゲットにしています、その為にはまず、国家機関である教育委員会から正式な公認ブランドのお墨付きを受けて信頼を得て、実際に着用する生徒やその保護者達からの製品への意見の声を集め改良を重ね、徐々に一般のシェアへとセールスを拡大していく、その様な戦略スタイルが効果的だろうという社長のアイデアで今回のこのイベントを開催する事になった訳です」

へえ、なるほどねえ！ ママったら、何てCleverなのかしら！ 何でもかんでもショーやマスコミを利用して賑やかにコマিশタルをするだけじゃなくて、こうやって意外な所からマネージメントをかけてブランドネームを広げていくやり方もアリなのね！ これならたくさんのユーザーの声を即座に応える事が出来るもの。ママ、スゴいわ！

そうそう、この去年の『2008東京ミシマコレクション』はコンサート会場にも使われる大きな球場を貸し切って壮大に行われたけど、全国の女の子達が会場に入れるプレミアチケットを手に入れる



為に色々苦労したって話を聞いた事があるわ。ネットオークションで騙された子もいたらしいし、アタシもママもそれを聞いた時は胸を痛めたもん。大きなイベントになりすぎると、参加者全員の意見までカバーしてあげられなかったが悩みどころだったのよね。

でも、今回の方法ならなかなか届きづらい購入者の生の声を聞く事が出来るし、仮に商品にクレームがあつたとしてもスピーディーに対応する事が可能よ！そして、教育の場という厳しい審査の目が光る世界で絶対的な信頼を得れば、こんなにコマーシャル効果が高い方法は他に無いわ！ヤダ、アタシスゴい感動しちゃった。ママはアイデアも超一流なのね！

「そんなママのイメージをこうして実現しちゃえるモモさんも超Excellent！さすがはママが一番信頼する最高の『右腕』よね！」

「……いえ、私は三島社長のご意志に全力でお答えしているだけです。それで、それに、この様なビジネススタイルは社長が『全ての人々にファッションを楽しめる自由と喜び』を追求した我々『ミシマ』の本来の姿、私にとってはこれくらい出来て当たり前の仕事なのですから……」

「んもおう、モモさんたら謙遜しちゃってえ〜！じゃあ、このイベントはタダのカatalog作りなんかの小さなものなんかじゃなくて、大規模なビジネス戦略を繰り広げる為の大切なファーストステージなのね！？だから、ママの最高のスタッフチームであるみんながここに揃った訳なんだ！？うわあ、そのモデルをやるアタシの役目って意外と重要！？何か、んもおうワクワクしてきちゃった〜！！」

「……でも、普段とは少し勝手が違う困難なステージ作成に、ハナさんはかなり試行錯誤を重ねられたみたいですね……」

あつ、そうだわ！ ママの最強チームである『百花繚乱』カルテツトはモモさんにリョウちゃんにランチちゃん、そしてもう一人、ステージの組立や装飾デザイン作成を担当している『ハナさん』がいるの！ 何のイベントか気になった覗き見るギャラリーが集まり出している会場の真ん中で、腕組みしながら首を捻っているカッコいいジーンズ姿のあの女性、それがハナさんよ！

「ハナさあ〜ん！ 久し振りい〜、What's up!？」

「ん？ おお、オッース千夏！ やつと来たのかよー！？ 相変わらずお前ら親子は時間にルーズだなー？ 責任者っていう肝心な立場にいる人間なんだからさ、もうちょっと早く現場に来れないのかよー!？」

「ヒッド〜イ！ アタシはちゃんと予定通りの時間にここへ来てたわよお!？ 遅くなったのはママ！ 約束の時間より一時間も遅刻してきたのよお〜!？」

「またあの人か？ 千春の姉御は本当にいい加減なんだな〜？ アタシなんか今日、現地に朝六時入りして飯も食わずに働きっぱなしだぜ？ もう眠たくってたまんね〜よ!」

ハナさんは言葉口調こそ男っぽい感じだけど、リョウちゃんと違って正真正銘生まれつきの女の子よ。名前も『花子』だしね。東京の

下町育ちの江戸っ子で、お祖父さんの影響でこんな喋り方になったんだって。

ハナさんはその行動力も男の子顔負けで、普段は毎朝早い時間に海でサーフィンをエンジョイした後に、自転車に乗ってオフィス街を駆け回るメッセンジャーの仕事をしてるの！

だから、こっちの仕事は副業って感じなんだけど、これくらいのステージならたった一人でママの希望通りに作り上げちゃうその腕前はプロも真っ青の超スーパージョー級。

この前の球場でのコレクションイベントでも、並み居る本業の装飾業者のオジサン達を取り仕切ってスゴいキラキラの煌びやかなビジュアルグステージを作り上げちゃったんだから！ ゲストとして招待されたプロのファッション誌モデルのみんなからも大絶賛だったのよ、スゴいでしょ！？

「ところでよモモ、その肝心の姉御はどこに行っちゃったんだー？ 姉御の最終チェック受けてOK貰わねーといまいち自信が無くてさ、こんな出来映えで納得して貰えるか不安だよ……」

「社長は現在、ソファーさんと一緒にイベント担当者と最後の打合せを行っています、ここに来るのは多分、いつもの様にイベント開始三十分前位かと……」

「マジかよー！？ 三十分前じゃ何か気に入らない部分があったとしても、時間が無くてとても変更なんか利かねーぜ？ だから、いつももっと早く会場に到着してチェックしてくれて頼んでるのにな……」

「でも、社長はあなたの仕事に絶対の信頼を寄せていますし、私の目からしても今回の完成度は十分に納得出来る物です、きつと問題

は無いでしょう」

「……なら良いけどなー、いつもと違って今回はお客がお客だろ？  
公務員のお偉いさんに気に入って貰えるかどうかどうも不安でよー、こ  
んなんで良かったのかな……」

「そろそろご自分の仕事にしっかりと自信を持たれたらいかがです  
か？ 凜となされたお姿の割にはハナさんが意外と小心者なのはす  
でに存じ上げておりますが、あまりいつまでも臆病風に吹かれてビ  
クビクされているとこちらの仕事にまで差し支えが出るかもしれ  
ませんので」

「……チツ、チクチクと一言多いヤツ、本当に嫌な女だよな、コイ  
ツって……」

「言うよね言うよねー！ ねえねえハナちゃん、いつそ思いっ切り  
この女の鼻の両穴に釘打ちつけてやったらどう？ きつとスツキ  
リするわよー？」

「そうですそうですうー！ 思い切ってこの憎たらしい顔面をサー  
フボードでぶっ叩いてやればいいですうー！ 否、その程度ではこ  
の外道女には生温い！ 太平洋の黒潮に揉まれた粹の良いピチピチ  
の本マグロでぶっ叩いてインド洋まで場外ホームランにしてやれば  
いいですうー！」

「そりゃいいなー！ インドまでぶっ飛ばされれば、もしかしたら  
物好きな蛇使いか何かがこんなクソ女でも嫁に貰ってくれるかもし  
れねーしな！？ ヨガでもやってその体に染み付いた汚い毒を吐き  
出してこいってんだ！ ハハハッ！」

「あー、もう！ あれこれつべこべ無駄話をしてないで、各自サッサと自分の持ち場に散りなさい！ ハナさんはステージ強度の最終チェックと照明の電源配線チェック、リヨウさんとランさんは千夏ちゃんと澤村君を連れてバックルूमでメイクアップの準備！ 喋ってる暇があるなら仕事しなさい！ はい、駆け足駆け足！！」

んもおう、この四人は顔を合わせるといつつもこう！ 一人ずつだけでも鬱陶しいくらいDeepでDopeでDangerousなキアラばかりなのに、みんなが揃うとその破壊力は四倍どころか四十倍の四百倍のさらに四乗まで跳ね上がって暴走し放題好き放題なんだからあ！

でもね、これは彼女達に特有の最高のコミュニケーション方法だよ。お互いメチャクチャ悪口を言い合っている様に見えるけど、逆を言えばそれは四人が何でも言い合えるとてもFriendlyな関係だつて証拠でもあるの。

職場は常に明るく楽しく、そして元気良く。彼女達はママの理想を見事に表現してみせた最高のパーティー、お店の店員達が見本として憧れる最強チーム！ もちろん、アタシも心からみんなをRespectしてるわ！ だつて、この四人と一緒にいると楽しくって超Happyなんだもの！

「さーで、ヒステリック女もいなくなつた事だし、あたしも自信持つて舞台の仕上げ作業にかかるかなー？」

「ハナさあーん！ アタシもこのステージはCoolで超イケてるって感じいー！ アタシが言うんだからきつとママも満足するわ、It's all right!!」

「おう、千夏のお墨付きなら完璧だなー！ 任せとけー、お堅い連中達相手でもちゃんと千夏が光り輝けるような最高の舞台に仕上げてやるからなー！」

「じゃあー、舞台の準備はモモちゃんとハナちゃんに任せて、私達はメイクルームで千夏姫とダンディーなワイルド一茶ちゃんに最先端の胸キュンなメイクアップを施して差し上げますわー！」

「例えステージがサハラ砂漠のド真ん中でも、吹雪舞う南極大陸のド真ん中でも、このランランとリョウお姉様の魔術に不可能の文字はありませんですうー！ もう台風でも大寒波でも地球温暖化でもおととい来やがれて感じてですうー！」

「さあ姫様、今日は姫様にどんな素敵な魔法をかけてあげましょうかしら？」

「Wow！ Very exciting！ んもおう、今からドキドキしちゃう！ ねえねえ、期待しちゃっていいのお？ アタシ、これ以上キレイになっちゃってもいいのお？ いやーん、超楽しみ！ どうしよう、スッゴいワクワクしちゃうー！」

前回のコレクションでもこの二人にステキなメイクアップして貰って、日本の名だたるトップモデルの人達と一緒に特別にステージに立たせて貰えた、あの時のあの興奮が再びアタシの脳裏に蘇ってきたわ！

実はその時、アタシも会場に詰めかけていたファッション業界の関係者達から、『あの可愛い子は一体誰？』、『どこの所属の新人モデル？』『三島千春の実の娘だって！？ 何て美しい娘さんなんだ！』って色々注目されていたんだから！

その成果が実ってつきり今回、プロのモデルとしてソロステージのオフアーを受けたと勘違いしてすっかりママに騙されちゃったけど、ちよつと落ち込んでいたテンションも超アゲアゲでスゴいい感じだわ！

この調子ならアタシ、今日はママの期待通りの最高のステージを教育現場のお偉いさん達に見せてあげる事が出来ると思うわ！ もうバイタリティFull充電よ！ こうなったらもう、誰もアタシを止める事なんて出来ない……！

「ちよつと待ってくれ」

……つて、言ってるそばからこの男……。不快だわ、ホント不愉快……！

「……何よお？ トイレにでも行きたいの？ そんなの後、後！ 早くメイクルームに行かないと時間に間に合わなくなるじゃない！ ほら、さっさと行くわよ、ポケツと突っ立ってないで、ほらあ！」

「ちよつと待て！ 事情が全く呑み込めない事ばかりで不満だらけだ、一つ確認させてくれ」

んもおーう！ 一体全体何だっていうのよこのグズグズののろまなゴリラは！ アタシがすっかりやる気満々のハイテンションになっているっていうのに、何でこうもいちいちアタシの足を引っ張る様な真似をしてくれる訳！？

アタシとリヨウちゃんとランちゃんで一生懸命手を掴んでメイクル

ームまでエスコートしてあげようとしているのに、ちつともその場から動こうとしないんだもん！ ホントイライラするわ、何が不満だって言うのよぉ！！

「Oh, shit! Damn it!! 不満があるのはアンタよりもアタシの方なのよ!? アンタなんかと同じイベントに出て、しかも同じカタログにモデルとして写真が載るなんて、アタシからしたら最悪の屈辱以外の何物でもないの! そんな不細工な面の分際で、ママのプロデュースした最新スポーツウェアを着て、このアタシと一緒に『ミシマ』の一大ビジネスの役に立てるだけでも有り難いと思いなさい! ほらぁ、さっさについて来なさいよ!? Come on!!」

「だから、そのイベントやらビジネスならと言った話がさっぱり俺にはわからない」

「Shut up! 今更何言ってるのよ!? 自分でモデルやるってママに志願したんでしょ!? だったらつべこべ言っていないでさっさと……!」

「モデル? 何の話だ?」

「……ハア?」

「俺は三島さんから『服の寸法を計らせて欲しい』としか話を聞いていないぞ? なのに、なぜお前達と一緒に化粧室なんかに行かなければならないんだ? 第一、化粧室とはその名の通り女が化粧をする場所であって、男が立ち入る場所などではない」



「……えっ？　ちよつとWait？　アタシまで何か良く事情がわからなくなってきたわ……」

「それに、さつきからお前達がベラベラと飽きずに喋り続けている『ショー』だの『カタログ』だの『メイク』だのといった会話の内容の主旨もさっぱり理解出来ない、一体何の話なんだ？　これから俺は一体何をやらされるんだ？　俺は何も聞いていないぞ、説明してくれ、これは一体どういう事なんだ？」

「……アハン？　What？　何言ってるのコイツ？　つまり、自分が何でここに来たのか全然わかってないって事？　じゃあ、自分がモデルとしてイベントに参加するとか、その姿を写真に撮られてカタログに載るとか、何一つわかっていないって事なのぉ！？」

「……アンタさあ、ママをお願いされて、それをOKしてここへ一緒に来たのよね？」

「そうだ、怪我の治療費やリハビリ費用までも支援してくれている三島さんの願いを断る訳にはいかない、俺は『人の恩を仇で返すな』と子供の頃から厳しく両親にしつけられてきたからな」

「……ママからは服のサイズを調べさせて欲しいとしか言われてないの？」

「そうだ、今年の秋に日本で行われる、国際学生柔道大会の開会式の衣装を作るので寸法合わせをしたいと聞いている、この大会での優勝が今年の俺の目指すべき目標だからな」

「……それだけ？ ホントにそれだけしか聞いてないの？」

「そつだ、それだけならお安い御用、むしろ感謝しなければならな  
いと二つ返事で同伴を了承させて貰った、その様な細かい部分の世  
話まで見てくれて誠に有り難い話、心より感謝仕る、とあの岩窟な  
親父も頭を下げて俺達を見送ってくれたもんだ」

「……Wow... Oh, my god, It's unbe  
lievable...」

「何だ、その手は？ その外人が呆れた時にする、手のひらの上に  
向けて肩をすくめるその仕草は何だ？ オイ、なぜ首を横に振る？  
なぜ含み笑いをする？ 何なんだ、俺の言っている事の何がおか  
しい？」

「……哀れねえ、何て哀れなおサルさんなんでしょう……」

「オイ、まさか、違う、のか？ この話はまさか、全部嘘だったの  
か？」

「……あーあ、これだから男ってバカなのよねえ。今頃気づくだなん  
てIt's too lateもいいところ。頭が悪くてクソ真面目  
な男ほど、言葉一つで簡単に釣れちゃうもんなのね。ママったら、  
ホントに隅に置けない悪い女だわ、怖あゝい！」

「……なるほどねえ、アンタもすっかりママの言葉に騙されてたっ  
て事なのねえ、ふゝん……」

「ならば、なぜ俺はここに連れてこられたんだ？ 一体、お前達は何を企んでいるんだ？」

「……ホント、バツカ！ アンタってマジで頭の中まで筋肉なのね、ああ、ホントに哀れな男だわ、可哀想！」

「オイ、真面目に答えろ！ 俺をここに連れてきた本当の理由とは何だ？ お前達の目的は何なんだ？ お前達は一体、俺をどうするつもりなんだ！？」

「そんなに知りたい？ しょうがないわねえ、じゃあアタシが丁寧に優しく説明してあげるから心から感謝しなさいよあ？ あのねえ、アンタはこれから、ここで行われるママの新ブランドのデビューイベントで、アタシ達オフィシャルスタッフと一緒にファッションモデルとして参加するのよ」

「何？ 何だと？ しんぶらんど？ おふいしやる？ ふあっしょんもでる？ 俺が？ 俺がか？」

「そつ、今からその不細工面にモデル用のキメツキメキラッキラのメイクをしてえ、そのボツサボサで鳥の巣みたいなダッサいヘアスタイルもバリバリバツチりにキメちゃってえ、そのJapanese makeupみたいなセンスゼロのダボダボジャージからママがプロデュースしたFreshでHigh performanceな超CoolスポーツウェアにChangeしてえ、たくさんのギヤラリーとカメラがひしめくSpecial floorでその姿をShow upするのよ！ いくらアンタでもテレビとかでも見た事あるでしょ？ コレクション、ファッションショー、ファッションモデル、モデルよモデル、モ・デ・ル！ アンタはこれからモデルのお仕事をするのよ！ このアタシの説明なら、いくらアンタ

が人間よりIDの低いゴリラだとしても十分理解出来るわよね？

All right? Did you understand?

OK? アハン？」

「……………」

「……何よお？ タダでさえバカみたいな顔が更に間抜けな顔してボケッとしちゃって、何なのよアンタ？ ちゃんとアタシの話聞いているの？」

「聞いてない」

「ハア！？ 何よ、ここに来てまだこのアタシにケンカ売ってる訳！？ Shit! バカにするのもいい加減に……！」

「何も聞いてない」

「……あゝん、もぉう！ イライラするぅー！！ だゝかゝらあゝ、ちゃんと説明してあげてんだから真面目に聞きなさいよお！ アンタはこれから、ここのイベントで、ファクションモデルを……………」

「有り得ない、そんな事は絶対に有り得ない、極めて非常に遺憾だ」

「キィー！ Shut up!! 人が何度も親切に説明してやってんだから、途中でグダグダネチネチ言葉を挟むなっつーの……！」

「帰る」

「……ハア？ Pardon!? ちょ、ちょっと、ちょっとちょ

「とちよつとお!? いきなり何言い出してんのお!? ねえ、ちよつと、急に来た道戻ってどこ行くつもりなのよお!? ちよつと待ちなさいってば、ちよつとお!?」

んもおう、何なのよ!? 全然訳わかんない、Unbelievable! ホントにマジでバツカじゃないの、コイツ!! さつきまでム力つくぐらい堂々と偉そうに嫌味ばかり言っていたくせして、いざ自分が連れてこられたホントの理由を知った途端いきなり真っ青な顔になって『帰る』ってどういう事なのよお!?

引き止めようとするアタシとリョウちゃんランちゃん三人を力ずくで引きずって無理矢理帰ろうとしてるし、これじゃまるで歯医者嫌がつて駄々をこねてる子供じゃない! アタシ達はデカイクソガキのBaby sitterをやってる訳じゃないのよ! いいい、加減にい、しなさいよお、このお、クソオ、ゴリラア!!

「……何よお、このバカ力は!? 三人がかりでも全然止められない……!」

Fuck!! 「冗談じゃないわよお!! もうじきママとソフィーも打合せを終えてこっちに戻ってきて、そろそろイベントステージもスタートする時間だっていうのに、こんなところで勝手に帰せらせてたまるかつつーの! アタシだってスポーツアスリートなのよ、相手が男だろうが力比べで負けてたまるもんですか……!」

「うわー! スゴいパワーですうー! 三人がかりでも簡単にズル引きずられるですうー!! まるでビグザムかサイコガンダム

クラスの圧倒的パワーですうー!!」

「ダメよ一茶ちゃん! 帰っちゃダメ! てめえ、帰るなって言っただろうがこの野郎!! …… って、男に戻っても全然かなわなくい! 何てエネルギーシユな殿方なのかしら、その逞しい腕に抱かれて女に生まれてきた喜びを体いっぱいビンビン感じたいわく!」

「バカな事言っていないで真面目に引張ってよ、リョウちゃん! ちよつとお、バカゴリラ! ふざけんのもいい加減にしないよお!! もうスタッフもギャラリーも全員会場に揃ってステージの準備も出来てるんだからあ!! 駄々こねてないでさっさと来なさいよ!! この期に及んで逃げるっていうの!? このchick en boy!! 弱虫!! 根性無し!! デカいだけのバカゴリラ腰抜け男!!」

「腰抜け、だと?」

「……キャー!!」

……ドタドタドタツ!!

……いったあゝい!! んもおう、最低! さっきまで力任せで強引にアタシ達三人を引きずり回していたクセに、急に立ち止まって手を離すもんだから勢い余ってみんなして思いつ切り床に尻餅ついちゃったじゃないのよお!!

どこまで人に迷惑かけたら気が済むのよ、この男は!? 許せない、んもおう頭にきたわ、我慢の限界!! こうなったらもう一回、こ

こで大噴火して辺りを怒りの業火で焼き尽くしてやる！！ 周りにはたくさんの罪の無い人間がいてこっちを見てるけど、そんなの今のアタシには見えない、関係無いわ！ こうなったらみくんなみんなまとめて巻き込んでやるうゝ！！

「Oh, shit!! Fuck, fuck, fuck!! You're fuckin' chicken boy!! 何でアタゴときの為にアタシ達がこんな目にあわなきゃいけないのよお！？ 何を今更ビビってんのよ、この腰抜け！ 負け犬！ 臆病者！！ タマ無し！ フニャオン！ イ○ポ野郎！！」

「いい加減にするのはお前の方だ、俺は決して腰抜けなどではない、今すぐその発言を撤回しろ」

「ハア！？ 撤回！？ お断りしますう！！ だって事実じゃない！？ モデルをやるって聞いた途端にビビりまくってここからコソコソ逃げ出そうとしてるのは誰！？ 背中晒して尻尾丸めて敵前逃亡しようとしてるのはどこのだゝれ！？ 何よ、将来のオリンピックク金メダル候補だとか何だとか周りにチャホヤされていい気になって、いつも自信満々にふんぞり返って大層なBig mouth吐いて偉そうにしてるクセに、この程度の小さなイベントステージぐらいでブルブル震えて恐れをなしてお家に帰ろうとしてるのはどのどなた様かしらあゝ！？」

「違う、断じて違う、俺はビビってなどいない」

「バカ言わないでよ！？ 顔どころか唇まで真っ青になって、完全にビビりまくってるじゃない！？ しかも、額には変な汗までダラダラかいてるし、良く見たら手も足もちよっと震えてない！？ う

わあゝ、情けなゝい！ アンタってホント、気持ち悪い男！！」

「震えてなどいない！ 違う！ 違うと言ったら断じて違う！！」

「何をムキになつてんのよお！？ 大人気ないわねえ、アンタがたかだかモデルをするぐらいでそんなに嫌がつたりするから、アタシはビビってるって言って……！」

……あれえ？ あれあれあれえ？ これってもしかして、もしかしてもしかする？ まさかこのコイツって、真正正銘の腰抜けChickenのビビりちゃんなのかしら？ 柔道の試合で見せてるあの威勢は、Heartが弱くてピヨピヨヒヨコちゃんのを必死に隠す為の精一杯のフェイク？ うん、あるある。スポーツアスリートに良くいるもん、ユニフォーム脱いだらタダの人ってパターン。この男、正にそうなんじゃないの？

ううん、タダの人なんてどころの話じゃ無さそうね。もしかしたらホントはかなりHeavyのあがり症なんじゃないかしら？ だって、額の脂汗の量がハンパじゃないし、視点はキョロキョロして定まらないし、動作は手や足をモジモジして落ち着きが無いし、明らかに挙動不審だわ！ これだけの物的証拠が揃ってるんだもん、No doubt！ 間違いないわ！

「……ねえねえ、アンタってさあ、普段は見栄張って偉そうな事言ってるけど、ホントは口も図体もデカいだけで中身はビビりの腰抜けヒヨコちゃんじゃないの？ ホントは今、大勢の人の前でモデルをやらなきゃいけないのが怖くて怖くて、超ミニミニなCutie heartがバクバクしちゃって破裂寸前になっちゃってるんじゃないの？ ホントはまあ、全身がブルブ



ル震え出しちゃって、今すぐにも自分のパパやママに助けて貰いたいたくて我慢出来ないんじゃないのぉ！？」

「……………」

「ヤツダァー！ チェックメイト！？ もしかして凶星！？ アタシったら、誰にも知られなくなかったアンタの Real face をズバリお見通しちゃったかしらあ？ 一番触れられたら困っちゃう Naive な一面をズキュンって撃ち抜かれちゃって、ちよつとヘコンじやつたりしてるう？ いやん、ごめんなさぁーい！ 許してえ、Sorry！」

「ば、馬鹿馬鹿しい、ず、ずず、凶星だなど、そんな訳が無い」

「えっ、ホントにいっ？ その割には、今の言葉からはげんぜん自信が感じられなぁーい！ そんなんじゃアタシ、否定されてもげんぜん納得なんて出来なぁーい！ ねえねえ、さっきまでの男らしくてカッコ良かったあのオーラはどこに行っちゃったのぉ？ 日本期待の天才柔道家、全国の柔道少女少女の憧れのスーパースター、泣く子も黙る無敵の全日本学生柔道王者のあの面影は一体どこに行っちゃったのぉ？」

「……………」

「……ウフフ、ウフフフ、ウフフフフ！ 来たわ、遂に来たわぁー！ 今までズウーつとこのゴリラにメチャクチャに貶されて、いつも悔しい思いをさせられてきたアタシにとって、待ちに待った反撃の狼煙を上げる千載一遇の大チャンスがやって来たのよぉー！ 絶対に逃がさない、これまで溜まりに溜まったこの積年の恨み、今日

この場で全て三倍増しで返してやるわ！！　アハハハハ！！

「皆さあゝん、聞いて下さあゝい！　この人つてえ、こんな大きな体してるクセにい、メンタルは超腰抜けの c h i c k e n   h e a r t ……！」

「違う！　違う違う違う！　勝手な言いがかりをつけて、それをいちいち周囲に言い触らすな！　断じて違う！　俺は決して腰抜け男などではない！！」

「キャハハハ！！　またムキになってる、超カツコ悪い！　アハハハハ、ダツサゝい！！」

「とにかく、俺は少しもビビってなどいない！　男たるもの、常に平常心で山の如くその場に腰を据え万事何事にも動じず」

「じゃあ、ちゃんと最後までやり通せるわよねえ？　モ・デ・ルの・お・し・こ・と」

「……………」

「皆さあゝん！　この人つて超ビビり……！」

「わかったわかった、確と承諾した！　ここまで言われてすごすごと撤退など男として一生の恥、取り返しのつかない後悔を残す事になる！　こうして一度乗りかかった船だ、最後までその航海を見守る事としようではないか」

「何それえ？　もしかして『航海』と『後悔』をかけたつもり？

ダジャレ？ まさか、韻を踏んでH i p h o p？ アンタってB -  
b o y？ ヤダア、気持ち悪い！ 超つまないし、超ダツサ  
い！ 絶対に有り得ないわ、N o w a y！！」

「……………」

……勝った。アタシ、勝ったわ！ んもおう、最っ高！！ こんに清々しい気分はホント久しぶりだわ！ ちよっと人より柔道が強いくらいで生意気にもこのアタシに立ち向かってくるからこんな羽目になったのよ！ んもおう、ザマーみろって感じだわ！  
でもお、良く考えてみたらこれは当たり前前の事なのよね。こんなレベルの下衆男相手にこのアタシが負ける訳が無いもの！ こんな男、顔じゃないわ！ 結局、どんなにおバカなゴリラがジタバタ足掻いたとしてもこの勝敗は最初から決まっていたも当然だったのよ！  
さあ、おバカで不細工で腰抜けC h i c k e n のB e a s t ちゃん？ 己が犯してしまった愚かな過ちの数々を悔やみなさい？ 己の哀れな無知と無力さを呪いなさい？ その見るも耐え難い汚らしい顔を床に擦りつけて平伏し許しを請いなさい？ そして、己とはとても比べ物にならない、高貴で優雅で賢名で世界一美しいこのアタシに跪いて永遠に崇め続けなさい！！

「ねえねえ、ホントはここだけの話、今すぐにも逃げ出したいんじゃないのお？ ホントはモデルをやるなんて、とっても怖くて恥ずかしくってゴミ虫みたいに凍えて死んじやいそうなんでしょ？  
ねえねえねえ！？」

「男に二言など無い、この使命、必ずや最後まで全うしてみせる」

「んもおゝう、意地張っちゃって？ 前言撤回するなら今がチャンスよ？ 今なら誰も見ていないし聞いてもないわ、慈愛満ち溢れる女神の様なこの千夏様が、か弱き子羊である貴方に温情を施して見逃してあげてもいいのよお？ アタシは決して鬼でも悪魔でもないもの！ 仏の顔も三度まで、なんでしょ？」

「……………」

「それとも、臆病で弱虫なMっ子ヒヨコちゃんは、いつそ思いつ切り罵倒してあげた方が嬉しいかしら？ Hey, baby？ お子ちゃまはさつさとG o h o m eしてママのおっぱいでも吸ってなさい！ F u c k o f f！！」

「それではお言葉に甘えて帰ります」

「みゝなゝさあゝん！？ この人ってやつぱりとんでもない腰抜けビビり男なんですうゝ！！！」

「悪魔め」

ウフフ、ウフフフ、ウッフッフッフゝ！ まだよ、まだまだトドメなんて刺してあげない。こんなんじやぜゝんぜん物足りないもん、アタシがこれまで傷つけられてきた痛みはこんなものじゃないわ。この程度で終わらせてやる訳がないじゃない！ これからよ、本当の地獄はこゝれゝかゝら！ ウッフ

じっくりタツプリ時間をかけて、この惨めな世間知らずのダメ男にアタシ達女の怖さつてものを嫌ってほど思い知らせてやるわ！ もう二度と、人前に立てなくなるくらいありったけの屈辱をフルコースでご堪能さし上げるわよゝ！ ウッフッフフ、アハハハハ、アッ

八  
八  
八  
八  
八  
八  
！  
！

## 第58話 アンダーシャツ

「キャハハ！ ヤッダァ、超ブサイク〜！ こういうオカマ、イギリスのバーとかにもいたいた〜！」

「ねえねえ千夏ちゃん、あるいは全然長髪が似合っていない勘違いしたロックバンドのメンバーって感じもしませんか？ 私も実際に良くこんな人を合コンとかで見た事ありますよ！」

「って言うかさ、悪役の外人プロレスラーって感じもしないかー？ 何か首に鎖とかかけて観客席とかで場外乱闘とかしてそうな」

「んも〜う、モモもハナもみんなして言うよね〜！ 一茶ちゃん、気にしなくて良いわよ、あなたとってもキレイ！ この輝くブロンズの髪にゴツく割れたその顎がズッゴイセクシーよ！」

「うわー、キモいですうー！ アキバで女装してるキモオタどもより何千倍もキモいですうー！ もし、ここがアメリカだったら間違いない不審者として即効銃殺される危なさですうー！」

アハハ、アハハハハ〜！ もおう、最っ高！ ショッピングモール内のバックヤードに仮設されたメイクルーム兼衣装室の中で、アタシと周りの女性スタッフ達はお腹を抱えて大爆笑！

腰抜けゴリラを捕獲したアタシ達は容赦なくそのデカい図体を紐でメイクチェアに縛り付けられて、男の風上にも置けないダメダメでフニャフニャな一茶ちゃんを思い切って可愛い女の子に大変身させ

てみたの！

リヨウちゃんに無抵抗でメイクアップされていくその不細工の醜い顔はキモいったらありやしない！　さらには十七世紀の貴婦人みたいな金髪クルクルカールのかつらまで被せられて、その姿はもうこの世のものじゃない、正にMonsterだわ！　あの三輪〇宏でさえもビクビクして逃げ出しちゃうって感じ！

あゝあ、バカバカしい。ホント、この男にはガツカリよね。普段はあんな大口叩いておいて、いざ化けの皮が剥がれるとブルブルと震えてるチワワ同然なんだもん。日本柔道界期待の新星も、ここじゃすっかりアタシ達女の可愛いおもちゃ。まるで着せ替え人形、あるいはぬいぐるみってところかしら？

哀れよね、自分の身の程を知らずに傲慢になって、アタシに還付無きまでに叩きのめされた挙げ句にこの醜態。嗚呼、醜い。何て醜いその姿！　その醜い姿を写す目の前の鏡も、あまりの醜さに耐えられず砕け散ってしまいそう！　正に敗者に相応しい結末だわ。勝利とは正義、正義はいつの世も常に勝者の元に舞い降りるものでなくてはならない！

そう、アタシは勝った、勝ったのよ！　凶悪な野獣に自由を奪われ、煮え湯を飲まされ、地に這いつくばって砂を噛み、夜な夜な枕に涙を濡らし屈辱にまみれた不遇の時代はもう終わり！　アタシは遂にこの鬼畜極まりない野獣の心臓を正義の剣で貫き通し、その息の根を止めてやったのよ！

ああ、この至福の時を、この魂の解放の時を、どれほど世界中の女性達が心より渴望してきた事だろう。この勝利はアタシだけのものではないわ、女の素晴らしさをちっとも理解出来ない愚かな男どもに虐げられてきたアタシ達女性全員の勝利よ！

きつと、今日のこの日は忌まわしき男尊女卑の時代と完全に決別を告げる、『女性の独立記念日』として未来永劫まで世界中で祝い、讃えられるわ！　何て素晴らしい日なの、こんなHappyな気分は生まれて初めてだわ！

「……ウフフフ、アハハハハ、アツハハハハ！ あらまあ皆さん、ちよつとWait？ お気持ちはわかりますが、皆さんでちよつとオイタが過ぎるんじゃないやございません？ いくら何でも遊び過ぎかと思えますわあ？ こちらにいらつしやるお方は未来の日本柔道界を背負つて立つ有望な人材、将来のオリンピック金メダリスト候補と噂される、あの澤村一茶様という超VIPなスペシャルゲストなんですのよお？ もつと熱く情熱的にギュッてハートを込めて、清楚に優雅に丁寧にエスコートして差し上げて頂戴ませませ？ モモさん、ハナさん、リョウさん、ランランちゃん、よろしいかしらあ？」

「またまた、悪い冗談ですよ、千夏ちゃん？」

「そんなこれっぽっちも心に無い事を言つてさー？」

「結局、一番この状況をお楽しみなのは？」

「間違いなく千夏ちゃんですうー！」

「いつやあーん！ バレたあー？ バレちゃったあー？ んもおーう、そんなイジワルな事言つて、ホントはみんなだつてとつても、お楽しみ、ク・セ・にいー？ ママの大切なゲストをこんなに辱めちゃつて、アタシ達つて何て悪い小悪魔なのかしら？ これじゃ悪戯好きで美しいアタシ達に嫉妬した神様が、怖い怖い天罰を下しちゃうかも？」

「いやーん、怖いー！」



さすがはママのご自慢の四人組、こういう時だけはイタズラ心満載でキヤツキヤツとはしゃいで息ピッタリ！ ホント、このスタッフはみんな楽しくって最高！ アタシもいつか、ママやみんなと一緒に世界中を渡り歩いてビッグビジネスを成功させてみせるわ！  
それがアタシの一つ目の将来の夢なの！

「ウフフ、What'up? Mr.lady, Issa Sawamura? 絶世の美女に大変身したご気分はいかがかしら？ その泥臭い田舎のイモ娘みたいに赤くチークされた頬に、アイラインとマスカラが施された細くて凶悪犯罪者みたいなシヨボシヨボお目め、ワインレッドの鮮やかなルージュが映える辛子明太子みたいなグロくて分厚い唇がとつてもCuteで超Prettyよ！  
んもおう、見るだけで吐き気をもよおしそうなくらい、不細工で醜くてキモくてBitchでFuckでとつてもお似合いだわあ  
」！

「……………」

「あらやだあ、もう言葉すら出てこないくらい自分の美しいお姿に感激されていらっしやるのかしらあ？ ほおら、目に穴が空くまで良くご覧なさい？ 鏡に写るもう一人の自分の姿、とつてもキレイでしょ？ オランウータンの体毛みたいに臭そうなこのブロンドの髪も超ステキ！ ねえねえ、今の気分、どんな感じ？ 新たな自分の可能性に気づいちゃったって感じ？ それとも、鏡の中の可愛い自分にFall in loveって感じかしらあ？」

「屈辱だ」

「えっ、なぐにいい？ 声が小さくて良く聞こえない！」

「屈辱の何物でもない」

「キャハハハ！ そうよね、そうよねえ！？ でもね、今更後悔したってもう遅いわよ、クソ生意気にもこのアタシに何度も何度も事ある毎にいちいち楯突いたりするからこんな仕打ちにあうのよ！ これまでずっとアタシ達女性をナメてかかって疎かに扱っていたんだもん、当然の報いよ！ まだまだこれからよ、この地獄以上の苦しみと耐え難い屈辱のフルコース、とくと存分に心ゆくまで味わいなさい！！」

男って、ホント愚かで哀れな生き物ね。アタシのこれまでの人生経験から思うに、所詮男の人って外見や肩書きばかり気にしちゃって、自身のスキルを磨こうとするSpiritが全然無いのよね。特に、最近の日本の男はみんなそう！ 口だけではカッコいい事言っておいて、実際は小骨をママに取って貰わないと魚も食べられないBabyばかり！

ああんもおう、アタシ最近の日本男子にはつくづくガッカリ！ 何が『サムライ』よ、何が『ヤマトダマシイ』よ！ もうこの国に『ブシドウ』なんて残ってないわ！ やっぱ、アタシのdairlinになる男性はガニ股ちゃんまげ頭の日本人じゃなくて、サラサラのブラウンヘアに青い瞳の足の長い白馬の王子様しか考えられないわよねえ！！？

「お前、さつきから一人でクルクル回ってて気持ちが悪いぞ、何かおかしい物でも食べたのか？」

「……ハッ！ ん、んうん！ Shut·up！ このStupid monster！ 今のアンタに発言権なんか無いのよ！ いちいち口を開かないで、口臭が辺りに充満するじゃない！」

ふん、何よ。この男だつて同様じゃない。結局、この偉そうにふんぞり返っていた柔道王者さんも中身が空っぽのお坊ちゃまだつたつて訳よね。畳の上、そして柔道着を着てないと自分をアピール出来ない臆病者のChick·en·boyじゃ、とても全世界六十六億の人類が一点に注目するあの平和のスポーツの祭典のステージで活躍するなんて到底無理な話よ！ 偽りのプライドなんて付け焼き刃、とても通用する世界なんかじゃないわ！

やっぱり、スーパースターになる人間っていうのは、アタシみたいに生まれながらのその美しさで人々の視線を独り占めして、拍手喝采を浴びる魅力と才能を兼ね備えているものなのね。アタシはこの通りルックスもスタイルもアスリートとしての才能もAll·perfect！ 人々の憧れの対象になる為に神に選ばれこの世に生を受けた天才ですもの！

アスリートと呼ばれる者は日々の鍛錬と努力で鍛え上げたフィジカルだけじゃなく、どんな場面に出会しても決して折れないSoulfulなメンタルと、誰にも負けたくないっていうPowerfulなFighting·spiritが必要なのよ！ それが伴っていない負け犬どもにそのステージに立つ資格など有りはしない！

いいえ、そのステージを夢見る資格すら無いのよ！

アタシは選ばれたのよ。人々に夢を与えるスポーツアスリートとして、世界中に愛を振り撒くセレブリティモデルとして、全人類をHappyにしてあげられるスーパースターとして！ きつとママは、この世にアタシを産み落とした『定め之母』としてその使命を全うする為に、これまで様々な経験を通じてアタシに学習させてきたに違いないわ！

ありがとう、ママ。

アタシ頑張る！ いつかきっと、ママの期待に答えられる世界中の女性達の未来の担い手、世紀のSuper womanになってみせるわ！ まずその見せしめとして、この身の程知らずなFuck in' beastを二度と日の光りの見えない奈落の底へ叩き落としてやる！ さあ、世界中の女性達、アタシについてきて！ Follow me!!

「それじゃ、メイクもバツチり決まった事だし、次は可愛いステージ衣装をセッティングしてあげて下さあーい！ んもおう、会場の教育関係者さん達がお目めがハートマークで胸がキュンキュンしちゃう様なステキな衣装をプリプリPlease!」

「……あれえ？ 気がつくときまでノリノリだったモモさん達四人全員とも、なぜがメイクルームの隅に寄り添ってプルプル震えだしてるわ？ どうしたのかしら、寒い？ ううん、そんな訳無いわよね？ だって今日は五月上旬の楽しいG、Wだもの。じゃあ、なぜ？ Why？ みんな、何かアタシの真後ろを見て怯えているみたいんだけど……？」

「ねえみんな、どうしたの？ カーニバルはこれからよ？ これからこの不細工Babyちゃんに可愛い衣装を着させてあげて、ショッピングモールの中を大パレード行進……」

「……ああ、あわわわわ、千夏ちゃん、千夏ちゃん！ 後ろ、後ろ……!」

「……やっべー、まともに現場見られちゃった、何も言い訳出来ねー……！」

「……いや〜ん、ねえみんな、アレ怒ってるわよね？ 絶対怒ってるわよね〜？」

「……ヤバいですうー、100%カミナリどーん！ の予感がビリビリしますうー！」

……何、この背筋を伝ってくる強烈なプレッシャーは？ 幽霊？ 怪物？ それとも殺人鬼？ あるいはエイリアン？ プレデター？ まさか貞〇！？ ううん、わかってる、わかってるよお！ アタシの後ろに誰がいるか、今名前あげたものより遥かに怖い事ぐらいもうわかってるよお！！ 怖いよお、後ろを振り向くのが怖い……！！！！！！

「……アナタ達、一体ここで何をやってるの……？」

「……ま、ま、マママママママ、ママア〜！！！！？」

「……四人とも、今すぐ横一列に並んでこちらにお尻向けなさい、もちろん千夏、アナタもよ」

「……ハア〜イ……」

嫌あ〜〜〜！ 怖あ〜〜〜い！！ 今のママ、完全にお仕事モードの中でも最強の状態、怒髪衝天プンプンお怒りモードだわあ〜！

この時のママは一切おフザけ無しの超Coolなスーパーキャリアウーマンの顔になるの！ アタシはそんなカッコいいママの一面も大好きなんだけど、一度怒り出すとアタシなんかより何百倍も怖いのおゝ！！

「アナタ達は」

「痛っ！ いえ、痛いですっ！」

「アタシが連れてきた」

「痛ってえ！」

「大切なゲストに対して」

「ああん！ 痛ったゝい！」

「こんな酷い悪戯をして」

「痛てえーですうー！」

「真面目に仕事をする気があるの！？」

「Ouch！ んもおう、ママ！ 痛ったあゝい！！！」

ママだったらいつも怒るとヘマをしたスタッフ達を一行に並ばせて、手に持った長いコームをビュンビュンしならせて順番にお尻をペシペシ叩くのよお！ アタシも前にステージ上でヘマしちゃった時、

ママのお怒りに触れて何回かお尻をペシペシされたわ！　これ、ホントに涙が出るほど痛いのお！　この前なんてお尻に真っ赤な印かれ跡が残っちゃってたんだから！

「モモ、アナタがここにいて、どうしてスタッフ全員がこんなに緊張感ゼロの状態になっているの！？　アタシが不在の時、現場をきっちりと仕切るのはアナタの役目でしょ？　アタシはアナタの持ち前のリーダーシップを評価してスタッフチーフに抜擢したのよ、まさかそれを忘れてる訳じゃ無いわよね！？」

「も、申し訳ありませんでした、社長！　私がついていながらこの失態、反省致します！」

「ハナ、アナタは自分の仕事が終わるとその後いつも気を抜き過ぎ！　暇を持て余すのは結構だけど、他のスタッフの足を引っ張るような真似はしないでよ！」

「……いやー、すまねえ姉御、姉御が帰ってくる前に元に戻せばいいかなー、なんてちーと調子に乗っちゃってたわー……」

「リヨウ、何よこのふざけたメイクは！？　アナタはゲストの澤村君に対して何て事をしてくれるの！？　もうイベント開始まで十分も残ってないのよ！？　いい歳して悪ふざけも程々にしなさい！」

「……千春ちゃん、ごめんなさい、私ついつい千夏ちゃんのノリに少年、いやいや、少女の頃に戻ったみたいになっちゃって、グスッ……」

「ラン、今日は教育関係者相手のイベントで出演モデルのメイクは

全体的に抑え目、本当はネイリストであるアナタを呼ぶ予定は無かったの、それでもあえてアナタをここに呼んだのは、他のスタッフと比べてキャリアが浅いアナタにこの業界のいろはを学習して貰う為だったからなのよ！？ 決して遊びで呼んでる訳じゃないの！  
いい加減、社会人らしい年相応な行動をとりなさい！」

「……うえーん、誠に申し訳ありませんでしたですうー……」

さすがの四人も、頭に鬼の角をツンツン出して説教するママの前では借りてきた猫みたいに小さくなって静かになっちゃう。だって四人にとってママは先生、師匠みたいな存在だもの、絶対に逆らえないのよね……。

「そして、千夏！ アナタがこのメンバーの中で一番の問題児よ！  
外の廊下にまで聞こえてくるほど大きな声で騒いで、アナタは一体何の為に今日のこのイベントに呼ばれたと思っているの！？ アナタもここに遊びで来てる訳じゃないのよ！？ しかも何よこれ、ママの大切なゲストに何て事をするの！？ さっきから黙って聞いていれば澤村君に対してヒドい事ばかり言っつて、澤村君はアナタと同じ学校のお友達でしょ！？ 何でもつと普通に仲良く出来ないの！？ ママはお友達を大事にしない悪い子は許さないからね！？」

「……だって、だってえ、このゴリラ、いつもアタシの事を……」

「また言った！ 『ゴリラ』だなんて、例えそれがアナタ達の間柄のあだ名であってもあまりに失礼よ！ 澤村君はママのお仕事の大切なパートナーでもあるのよ、二度とママの前でそんな呼び名を使わないで頂戴！ それに、アナタのその格好は何！？ あと三十分



弱でイベントが始まるっていうのに、まだ何の準備も出来ていないじゃない！ アナタも澤村君と一緒にそのメイクとヘアスタイル、今すぐ全部リセットしなさい！」

「えっ！ Why!？ 何で、どうしてえ!？ せっかく自分で可愛くセット出来たのに！ 今日のメイクはアタシの人生最高傑作なのに、リセットするなんてイヤイヤヤ！！」

「バカッ！ あのね、何度も言うけど今日は県教育委員会や各世代公立私立校の関係者のの方々をご招待した、教育法人向けに企画した新スポーツブランドの御披露目発表会なのよ!？ 教育の場で公認許可を貰うのに製品として一番大切なのは、確かな安全性と徹底した清潔感、そして何より明るく健康的なイメージだって事はいくら何でもアナタにだってわかるでしょ!？ それなのにそんな場違いなメイクにヘアスタイルにネイルアート、アナタはママやソフィーの顔に泥を塗るつもりなの!？ いい、全部よ、全部リセットしなさい！ そしていつも学校に登校する時みたいな薄いメイクとヘアスタイルに戻しなさい！」

「……そんなあ、ママア……」

「甘えた声出してもダメなものはダメ！ モモ、大至急全スタッフと最終チェックをして手違いや連絡漏れがないか確認しなさい！ ハナはイベントブースでモニターVTRの用意！ リョウとランは今すぐ千夏のリセット&セットアップ！ 澤村君はアタシがやるわ！ いいわね、二十分以内で全て終わらせなさい！ はい、各自行動開始!!」

「了解です!!」

「

「……ふーんだ！ 何よママったら、超つまんなあーい！」

……あゝあ、せっかく昨日の夜遅くまで一生懸命塗ったジェルネイルも、バツチリ決まったへアカールも激力ワメイクも、みんなぜんぶ無駄になっちゃった。鏡に写るメイクチエアに座ったPrettyでCuteなスーパーモデルのアタシの姿は、リョウちゃんとランちゃんの手によってあつという間にいつもの女子高生に元通りまるで魔法が解けてしまったシンデレラみたいだわ。何かもうガツカリ。久し振りに自分でも納得の出来映えで超ノリノリだったのになあ。さっきのママのお説教もボディブローで完全にダブルパンチ状態。あゝあ、これからがアタシの本領発揮のシーンだっていうのに、すっかりテンション下がっちゃったわ……。

「……ママだって何もあんなに怒らなくてもいいのに、もうアタシ、もうイジケちゃいそう……」

「千夏ちゃん、社長さんが怒ったのはランラン達が遊び過ぎてたからであって、千夏ちゃんのせいじゃないですー！ イベントが終わった後、さっきよりもっと可愛いネイルに戻してあげるから元氣出すですー！」

「そうよ、チナッティ？ 千春ちゃんも忙しくてちよつと虫の居所が悪かっただけよ？ 私も後で特別に、今ハリウッドセレブの間で大人気の最先端メイクとお姫様系巻き巻きふんわりカールをセットしてあげるわ！ だ・か・ら、元氣出して！ 笑顔よ笑顔、スマイル、スマイル！」

ママに怒られて傷ついちゃったアタシの Break heart に、リョウちゃんとランちゃんの温かい言葉がジンジン染み渡っていくわ。元はと言えばアタシが悪ノリしてみんなを巻き込んだのに、二人とも優しいのね。ありがとう、大好きよ。

何か、泣きそうになってきちゃった。鏡に写ってるメイクチェアに座ったアタシの目、ウサギみたいに真っ赤になってる。アタシ、何も悪くない、間違ってる！ 悪いのは全部この男なのに！ どうしてアタシだけがママに怒られなきゃいけないの？

ママは全然わかってない。隣に座ってママにメイクを落として貰ってるこのクソゴリラに、ママの知らないところでアタシがいつもどれだけ悔しい思いをさせられているか。コイツ、ママが最高傑作だって自慢してくれるこのアタシを、見た目だけで人格を判断して鼻で笑い飛ばしたのよ？ アタシが毎日陸上の練習で汗を流して頑張っている努力を、子供のお遊びだってバカにしたのよ？

確かに、ママからすればこの柔道バカは、将来の活躍を期待してスポンサー契約をした大切なお客様かもしれないわ。でもこのゴリラの正体は、ママにとって世界で一番大切な自分の娘の憎むべき宿敵なのよ？ 絶対に許せない礼儀知らずの最低男なのよ？ アタシにとって世界でたった一人、世界一大好きで大切なママが、よりによってこの男の味方になるなんて……。

そんなアタシの苦しい胸の内を知らないで、ママは隣でさっきの怖い顔からは想像出来ないほどニコニコ笑ってゴリラ相手にお喋りしてる。どうしてこんな人間以下の下等生物ごときに惜しげもなくそんなステキな笑顔を振りまいたりするの？ アタシ悔しい。悔しいわ、ママ！ ママは間違ってる、騙されてる！ 早く目を覚まして！ そして愛する娘の元へと戻ってきて！ お願ひよ、ママ！

「澤村君、ごめんなさいね？ せっかくモデルの依頼を引き受けてくれたっていうのに、こんなヒドい目に合わせちゃって……、アタ

シのスタッフへの監督不届きが原因ね、反省してるわ、みんなには後でまたちゃんとキツくお説教しておくから、どうか許してあげて頂戴？ ホントにごめんなさい」

「……………」

「……やっぱりまだ怒ってる？ そうよね、当たり前よね？ 同行を御了承して下さったお父様やお母様にも謝らなければならないわね、後日、お家にお伺いして改めて謝罪をさせて戴くわ、ホントに、本当にごめんなさい」

「いや、あの、それはもう済んでしまった事なので気になさらないで下さい、はい」

「ホントに！？ ありがとう澤村君！ アナタはその大きな体と同じように心も大きくて広いのね？ 気は優しくて力持ち、全国の子供達の見本となるスポーツ選手として正に理想のタイプだわ！」

「いや、あの、お言葉ですが、自分はこの一件よりも、先程から三島さんの話に出てくる『自分がモデルの依頼を引き受けた』という一文の方がどうも腑に落ちないのですが？ 事前にお伺いしたお話では寸法を図って試着をすると聞いていただけで、モデルをすることは一言も」

「そうよねえ？ 澤村君も怪我のリハビリや学校の勉強とかで色々毎日忙しいはずなのに、こんな急な依頼を快く二つ返事で引き受けてくれるなんて、アタシ超感激しちゃった！ 澤村君の協力にはホント感謝してるわ！ ありがとう！」

「ん？ はあ？ んっ？ 喜んで戴けたのは光栄なのですが、自分

は秋の柔道大会の開会式用の衣装を作ると聞いていた訳で、だからその」

「澤村君が今日のイベントをとて楽しみにしてたつてお母様から聞いているわ、やっぱり分野が違うと言えども澤村君だつてスポーツ選手だもの、新しいトレーニングウェアに興味津津なのは当然よねえ？」

「うむう、自分の問いかけ方が間違えていたでしょうか？ それは別にイベントが楽しみだという訳ではなくて、だからそのあの」

「こんなヒドい目にあわせてしまった事だし、澤村君、もう一度アタシに名誉挽回のチャンスをくれるかしら？ 今日絶対、澤村君が期待してた通りのステキなイベントにしてみせる事を約束するわ！ きつと今日のこの日はアナタの青春の思い出の１ページに残る、最高の一日になるわよ！？」

「これは参った、会話がちつとも成り立たない、馬耳東風とは正にこの事、果たしてどうしたら良いものやら」

…… あゝもおう、ウザったいわねえ！ ママの話に対して不満そうにいちいちデツカい顔をあつちこつちカクカク傾けて、もう隣にいて目障りったらありやしないわ！ この汚いボサボサ頭を振られる度に、中のフケやノミやダニの死骸がこつちにまで飛んできそう！ このスゴく不潔そうなルックスとイメージ、少しは改善しようって気は無いのかしらコイツ？それにね、アンタのその智能じゃママの言動パターンを理解するなんて無理無理！ 脳みそまでガチガチ筋肉のオツムで考えたつて理解不能よ！

ママはね、他人の都合なんてちつとも考えない、ひたすら我が道を

突っ走って行く人なの。敵を騙すにはまず味方からって言うでしょ？ 実の娘でさえも上手く丸め込んで容赦なく騙すんだもん、アンタの話なんか全然ママの耳に入ってないわよ！

……何よ、読者みんなしてそんな白い目でアタシをジロジロ見て……？

What!？ お前も騙されたんだから、ママからしたらどっちも目糞鼻糞ですって!？ Shut up!! うるさいわねえ！  
外野がいちいち余計な茶々なんて入れなくてNo thank youなのよ!!

「……でも、ちょっとアレねえ？ もしかしたら澤村君には余計な話で失礼かもしれないけどお、澤村君はもうちょっとヘアスタイルやファッションとかに気を使った方が良いかもしれないわねえ？  
そろそろ女の子に恋心も芽生えたりする微妙なお年頃なんだしい、せつかくご両親譲りの整ったルックスで体格にも恵まれた色男なんだからあゝ、もっと自分をセルフプロデュースしてどんどんアピールしても良いと思うんだけどおゝ、澤村君的にはこんな感じになりたい！ みたいな理想とかつてあるのお？ もし良かったら、いっそアタシが澤村君をカッコ良くプロデュースしてあげてもOKよっ！」

「……ウゲェ……」

「……何よ千夏、ママ、何か言ってる事おかしい？」

うん、ママおかしい。絶対おかしい。この顔が色男……？ どこか

らどう見ても北京原人にしか見えないんだけど？ ママの目にこのゴリラの姿はどう映っているのかしら？ ママのビジョンはかなり鮮明な解析度になっているか、もしくは人の顔も分別出来ないほどモザイクがかかっているかのどっちかに違いないわ。

「あつ、そうだわ！ ねえねえ澤村君？ もし良かったら今日を機に、足の怪我が治って練習が再開出来るようになるまでの間だけ、暇な時はアタシに同行してこの業界の職場を色々と見学してみるってのはどう？ この業界は日本や世界でも有名なモデルさん達と出会える事が出来るから、彼らからアドバイスを受けたら真似をするだけでもファッションセンスはぐんぐんアップしていくと思うわ！それに、うちのチームは女性スタッフしかいないから、澤村君みたいな若い男の子が現場にいてくれたらとても良い活性剤になる事間違いなしよ！ 澤村君にとってもメリットのあるアイデアだと思うんだけど、どうう？ 興味津々って感じいい？」

「No！ No！ Noooooooooo！！ ダメダメダメ！ 絶対にダメ！！ そんな夢みたいなさステキなお話、この男よりもアタシの方が誘われないくらいなのにい！！ そんなの却下よ却下！！ そんなのアタシが絶対に認めない！ 大反対！！ Objection！！ 何もおう絶対に超Objection！！」

「ちよつとお、千夏には何も聞いてないわよお！！？ ママは澤村君とお話をしてるんだから、横からちょこちょこ口を挟まないでよ！！」

「ダメ！！ ママが何と言おうと絶対にダメ！！ アタシ、パパと千秋を連合組んでこの案は多数決で否決しまあす！ 三島ファミリーは全員はんだ！！」

「じゃあ、ママはここにいるスタッフ全員と一緒に多数決しまあす！ 澤村君に来て欲しい人、挙手してえ〜！？」

「ハ―イ！」

「Oh , S h i t ! ! 何でみんなしてママの味方なのよあ〜！？」

ヒドいわ！ 数に物言わせてこんな強行採決、有り得ない！ 日本はイギリスやアメリカと同じ民主主義国で個人の自由と尊重は法律によって保護されているのに！ 独裁よ、ママは独裁者だわ！ 人々を甘い言葉で誘惑して虜にしちゃうイケない女独裁者よっ！！

「とか何とか言っちゃって、本当は千春ちゃん、若くてピチピチした活きの良い男の子と一緒にデートがしたいだけなんじゃないの？ も〜う、言葉の節々から女の卑猥な下心がチラチラ見え隠れしててスッゴイイヤらしいわ〜！」

「あ〜らやだ、さすがねリョウ、こういう話だけはホントに勘が良く利くんだからあ〜？ アタシだってまだまだ女よ？ 毎日仕事の繰り返しばかりじゃ心も体も廃れちゃうもの、たまには若い子と一緒に遊んでリフレッシュしたって罰は当たらないでしょ〜？」

「ハンパねえ大人の本音トークですうー！ 社長さーん、何だかんだ言ってやっぱりおいしいところを全部一人で総取りしようとしてるですうー！ 卑怯ですうー、社長さんにはちゃんとカッコいい旦那さんがいるのに、悪い女ですうー！ 稀代の悪女ですうー！！！」



……Unbelievableよ。わかんない、もう全っ然I don't knowだわ。まだあの四人組ならともかく、あのママまでもがこんな不細工なScrub相手にPush仕掛けるだなんて、みんなそんなに男に飢えてたりしちやてるのお？

ママにはちゃんと、何でも言う通りにしてくれるパパっていうペット、うーん、ペットはちよつと可哀想かしら？ ステキなdarling、がいるっていうのにい！？ ママったら贅沢ね、セレブリティライフをEnjoyし過ぎだわ！

でもまあ、確かにパパもはつきり言えばかなりの頑固者で見栄っ張りのクセしてダサくてKYでヘタレで屁っ放り腰のどうしようもない駄Men sだけど、アタシはこのゴリラに比べたら何百倍もマシだと思うんだけどなあ？ だって、ちよつと甘えてあげたらすぐお小遣いくれるしい。

「……まあ、今のはちよつとしたジョークとして、澤村君もアタシと行動を共にする事によつて、色々和社会勉強にもなるし貴重な経験も積めて、これからの人生に何かとプラス要素がたくさんあると思うわよ？ 今回の新ブランド発表によつて、これからは国内のみならず世界クラスのスポーツ関係者との交流の場も増えてくるだろうし、そうなれば世界の舞台を目指している澤村君の競技生活にも良い事尽くめでしょ？ ねっ、かなりおいしい話だと思わない？ 今すぐ返事をしなくても良いから、ちよつとだけ考えてみてくれるかしら？」

「せっかくのお話で残念ですが、自分は全く興味がありません、失礼ながらお断りさせて戴きます」

「……ハア!?」

「あらそう、それは残念ね」

「……ちよつと待つて、ちよつと待つて、待つて待つて待つて、wait!? 興味が無い!? お断りですつて!? You suck! Fuck you!! いい加減にしなさいよ、このバカブタゴリラ野郎があ!!!!!!」

んもおう限界だわ! 絶対に許せない! アツタマきた!! この男、アタシに楯突くだけではもの足りず、せつかくのこママのお誘いまであつさり断るだなんて、一体全体何様のつもりなのよゴラァ!!

いい根性してんじゃない、こうなったらここで一発最大級の大噴火を起こして、この失礼極まりない恩知らずの腐れ外道をアタシの怒りの紅蓮の炎で骨まで残さずキレイさっぱり焼き尽くしてやるわこの野郎!!!!!!

「Hey, you!! Fuck!! fuckin' jap monkey!! You're fuckin' mother fucker!! and...!!」

「Chinatsu, shut up!!」

「Ouch!! 痛っ!? 痛ったあゝい!!」

「さっきから卑劣な言葉ばかり並べて、とても女の子がする事だとは思えないわ! 聞ってるママの方が恥ずかしくなってくる! も

う、いい加減にしないで！」

……グスン、痛いよぉー！？ またアタシだけママに叩かれたぁー！ さっきお尻を叩かれたあのコームで、今度はそれを縦にして頭のとつぺんのつむじの辺りにガツーン！ って、頭蓋骨の中にまで音が響いたよぉー！！

んもぉーう！ 何でえー！？ 何でよぉー！？ 何でママは実の娘のアタシよりこのパープリン野生ザルの味方をするのぉー！？ ホントにもう、ママはアタシの事が嫌いになったのぉー！？ そんなの嘘よ、嫌っ！ イヤイヤイヤー！！

「嫌よママ！ アタシを見捨てないで！？ アタシ、ママの理想通りの良い子になるから嫌いにならないで！？ お願い、お願いよ！？ お願いだから、ママー！？」

「……ねえ千夏、アナタ最近ちょっと変よ？ 学校で何かあったの？ どこか調子が悪いの？ ねえ澤村君、今日の千夏ってちょっとおかしいわよねえ？」

「いえ別に、極めて普段通りだと思います」

「あら、そお？ じゃあ、あまり千夏の事は気にしないで聞いて頂戴？ もしかして、澤村君がアタシの誘いを断ったのは今回のこの一件があったからかしら？ だったら、もうそれは心配しなくていいわ、モデルのお仕事は今日だけ、もう無理は言わないわ、これっきりよ？ アタシはただ、澤村君にはもっとたくさん経験を積んで貰って、もっともっと大きな人間に成長して欲しいのよ、これからの競技人生の飛躍の為に、ねっ？」

「ならば、尚更自分には必要の無い話です」

「あら、それはどうしてなの？」

「自分は、澤村家の長男としてこの世に生を受けた時から畳の上で結果を求められる事を宿命づけられた人間です、結果とは勝利、勝利とは一本、柔道の世界で求められるものはそれだけ、柔の道を歩む者にそれ以外はありません、自分が日々精進し達成しなければならぬ使命はただ一つ、勝利のみ、その為にすべき事は如何なる時も常に鍛錬に鍛錬を重ね、ただひたすら生涯をかけて己の完成型を極めるだけです、その他の知識や経験などは心に隙を生み出しかねない不要な存在、今の自分にとって無駄な雑念以外の何物でもありません」

「……うゝん、なるほど、そういう訳ねえ」

……うわあ、最悪。超つまんない。ものスゴい堅苦しくて退屈しそうな生き方だわ。もう、聞いててこっちが息苦しくなってきたやう。何よ、『使命』とか『宿命』とかって、バカじゃないの？ アントは生まれてきた時に神様から『お主は柔の道を極めなさい』とかお告げでもされたって言いたいのか？

ホントに見た目通りこれっぽっちも面白味の無い男なのねえ、最っ低。翔太君はよくこんなヤツとFriendlyになれるわよね、ある意味リスペクトしちゃうわ。那奈や小夜や翼もこの話を聞いたら絶対呆れてこの男と距離を置くに違いないわ。

「なるほどねえ、そう来ちゃった？ あっそ、やっぱりそうよね

？ うんうん、そうね、そうよねえ？」

……それにしても、スゴいのはママの仕事っぷりよ。ゴリラの戯言を一言漏らさず聞いて相槌打ちながらも、メイク落としの手の動きはちつとも止まる事無く、次々と汚れたコットンがゴミ箱の中に消えていくの。

リョウちゃんのメイクはかなり濃く塗られていたはずなのに、まるで消しゴムで消してるみたいにスイスイとメイクが落ちていく。動きに一つもムダが無いわ、やっぱりママってスゴい！ 間違いなく人類最強で最高の Super woman だわ！

でもね、ママのスゴいところはこれだけじゃないのよ？ あのお、何て言うのかなあ？ 一言で言えば Insight , 洞察力がスゴいのよね。ちょっと会話を交わただけで相手の人格や性格、これまでの生き様とかを簡単に見抜いちやうスペシャルスキルを持つてるの。その的中率やプロの占い師もビックリしちゃうくらい。このチームの四人組や他のスタッフ達はみんなママがそれぞれ持っていた可能性を見い出して育成した人ばかりだし、何てったってアタシのパパ、あの三島勇次朗の埋もれていたライダーとしての才能を見事に開花させて世界チャンピオンの座に導いちゃったぐらいだもん。つまりママにはどんな隠し事も丸見え、何だって全部お見通しなのよっ！

「やっぱり、ね、今回もズバリ見抜いちやったわ、やっぱりアタシの思ってた通りの男の子なのね、澤村君って」

「は？」

「自分の欲や甘えに屈せず、周りの声や空気に流されず、己の信念

をしつかり持つて何事にもブレない太い芯が座っていて、道徳的に人として間違っている言動が大嫌いで、弱い人が困っているのを見るとジツとしていられない、正に古き良き時代の逞しい日本男児の象徴みたいな男の子なのね」

「光栄です、その様な有り難きお言葉、自分には勿体無いほどです」

「さぞかしご両親から厳しいしつけの元で育てられて、毎日の稽古で自らの『心・技・体』を鍛え抜いてたんでしょね、その磨きかった内面の輝きは礼儀作法や言葉の節々からも十分に感じ取る事が出来るわ」

「確かに、これまで両親からは厳しくしつけられて参りました、それが柔道家としての嗜み、それこそが澤村家の家訓と教えられてきました」

「でもね、その反面、あまりに頑固一徹過ぎて柔軟な対応に欠けて、自分の不得意な分野の話になると反応がとても鈍くて、どうしていいかわかんなくなっちゃって結局最後はいつも『自分には関係ない』って殻に閉じこもっちゃう傾向があるんじゃないかしら？」

「うっ、いや、あの、それは」

「そして、自分には関係ないと判断したものに對しては必要以上に過敏に嫌悪感を表して、ついつい誤解されがちな連れない態度を取っちゃう可愛げの無い天の邪鬼さんタイプ」

「うぐっ」

「心中は周りの同世代の男の子達みたいな生活にちょっと憧れてい

ながらも、『それは自分の意志とは違う』とやせ我慢をしてせつかくのチャンスを見て見ぬ振りしてやり過ぎちゃう、でもホントは意志や信念なんて言葉は全部弱い自分に対しての言い訳で、得意分野以外の未経験の世界に足を踏み入れるのが怖くて背中を見せて逃げ出しちゃう臆病者さんでもある」

「い、いや、そんな事はありません、自分は様々な世界から良いものだけを学習し吸収しようと冷静に吟味をしているだけで」

「なのに負けん気だけはスゴく強くてプライドが高いもんだから、そんな自分の弱さを人から指摘されても絶対に認めない、それどころか指摘してきた相手にはすぐムキになって真正面から敵対しちゃう、見てるこっちがああん、もおう！　ってなっちゃうほど世渡り下手でとつても不器用な困ったちゃん、それが澤村一茶君、アナタの真の姿」

「んがっ、がっ」

「まあ、ザッとこんなもんかしらあ？　どお、大体図星でしょ？　でしょ？　でしょ？　それとも、まだ何かアタシに反論でもある？」

「ま、参りました、さすがは世界を相手に大活躍されている有名実業家、感服致しました」

「ウフフツ、どうやら今回ばかりはさすがのSamurai boyも一本負けって感じかしらあ？　でも、さすがは勝負師、勝ち目が無いと察すればちゃんと素直に敗北を認めるのね？　そういう男らしい潔さ、アタシは好きよ！」

どうやら、それはこの堅物ゴリラ相手でも例外ではなかったみたいだわ。さすがはママ、んもおう最っ高！ アタシがどんなに責め立てても一切負けを認めなかったこの男を、反撃の隙すら与えない一方的なOneside gameでコテンパンにやつつけちゃった！ ママ、ステキ！ アタシ、横で聞いてて胸がスカツとしちゃった！

「ほおら、見てご覧なさい！ やっぱりアンタはアタシの言う通り、見栄ばかり張って偉そうにしていた腰抜けChickenじゃない！ ママから見ればアンタなんてまだまだお子ちゃま、何がSamurai boyよ、アンタごときMonkey babyで十分！ さつさとGo homeしてMonkey mamaの膝の上でおねんねしてればいいのよ、このバーカ！！」

「まあ、確かにアタシから見ればもちろん澤村君は子供だけと、アナタはさらに困ったお子ちゃまよねえ、千夏？ 最近仕草や気配が大人びてすっかりアダルトな感じになってきたのに、喋る言葉や頭の中は至って幼いチャイルドのまんま！ 今日の千夏にはママガツカリ！ この様子だと一人前のLadyになるにはしばらく時間がかかりそうねえ？」

「えっ！？ そんな、ヒドおい、ヒドいわママ！ こんな見栄っ張りで頑固で聞き分けのないダメダメ男に比べたら、アタシはもうすっかり一人前のLadyじゃない！ 一体、アタシのどこがChildだつて言うのよお！？」

「千夏、アナタはまだまだ勉強不足よ、特に男の人に関してはね」



「……勉強不足？」

何よ、勉強不足って？ 男の人？ ふん、バカにしないでよママ？ 男のポテンシャルなんてものはルックスと財産と包容力がものを言うのよ。そしてアタシは、それら全てがHigh performanceでバランス良く整ったステキな男性をChoiceしてお相手はリッチでカッコいい白馬の王子様以外考えられないわ！これがアタシの男性論。どう、ママ？ 完璧でしょ？

「ブツッ！ はい、ダメッ！ 全然ダメッ！！」

「何でよぉー！？ 女の子だったら誰でも夢見る最高の理想じゃない！？ 何がいけないのよぉー！？」

「あのね千夏、男の人って言うのはね、常に夢と希望と高い信念を持って生きている生き物なのよ？ それは男同士の格付けを決める大切なステータスであって、女性が子孫を残す相手として選ぶ目安に絶対必要不可欠なものなのよ？ だから、男の人はみんな他の男性に負けない強い理想と力を求めて、多少虚勢にも近い見栄を張ってしまったりするものの、頑固で意地っ張りなのは何も澤村君だけに限った事じゃない、世界中の男性みんなが必ずそういう一面を持っている、当たり前前の事なのよ？ 威勢を張るのは決して悪い事じゃないわ、見栄やプライドというものは男の人が男として生きていく為になければならないものなのよ」

「でもお、全然中身が伴っていない人間が見栄ばかり張ったって、結局はいざとなった時にヘマをしてみつともない姿を晒して恥をか

くだけじゃない？ そんなダサイ男なんて全然話にならないわ！  
どんなに柔道が強かったって、ルックスはダメ、性格もダメ、得意分野以外の事は何にも出来ない、挙げ句にはBig mouth叩くだけ叩いて最後は見事に腰引けちゃってグダグダで、やつぱりこのゴリラ男はダメダメの腰抜け男よ！ 男なんてみんなそんなのばかり！ 口ばかりで実行出来ない人間なんて最低よ、論外だわ、論外！」

「そんな事無い、澤村君は決して腰抜けなんかじゃないわ」

「どうしてえ！？ 何でそこまでしてママはコイツの味方をするのよあ！？ アタシ、今のママが理解出来ない！ もう全っ然わかんない！！！」

「じゃあ千夏、アナタは澤村君と同じように柔道着を着て畳の上に立って、体重が100kg近くもある大男と試合をする事が出来る？ その場から逃げずに最後まで戦い抜く事が出来る？」

「……なっ！？ そんなの全然今してる話と関係ないわ！ アタシは柔道選手なんかじゃないもの、そんな事を突然言われたって、戦う訳ないし戦える訳がないでしょ！？ 逃げるわよ、逃げるに決まってるじゃない！？」

「よねえ？ 普通逃げるわよねえ？ 自分の得意分野じゃないんですもの、当たり前よねえ？」

「当たり前よ！ って言うか、その話とさっきの話とどういう関係があるって……！！？」

「じゃあ、澤村君からすると今回のイベントモデルのお仕事はそれ

と同じ事なんじゃないかしら？ 澤村君には自分より大きい相手と戦うより、全く経験の無いこっちのステージの方がよっぽど怖いって感じるのは当然、そう思わない？」

「……あつ……」

「それでも、彼はちゃんと覚悟を決めてこの未知の世界に足を踏み入れてきたわ、虚勢を張って一度言い出した事に引込みがつかなくてやむを得ずだったからかもしれないけど、その覚悟つてのは並みの勇気だけではそうそう出来ないものよ、果たしてそんな人間がホントにチキンかしら？ ママにはとてもそうは思えないんだけどねえ？」

「……そ、それは、その……」

「誰だって最初に経験する場面に恐怖心を抱くのは当たり前のことよ？ 千夏もそんなに大人の女性を気取りたいのならば、悪口なんて言っていないでアナタから澤村君を優しくリードしてあげるぐらいの余裕があってもいいんじゃない？ この業界に関してはアナタの方が遙かに先輩なんだから、もうちょっとママが見てて頼もしくなるような振る舞いをして欲しかったなあ？」

「……うう、うぐう……」

全く隙の無い Perfect 過ぎるママの言葉の前に、少しは大人の Lady に成長したと思ひ込んでいたアタシも完全にノックアウトされてしまったわ。やっぱり、ママはあまりにも偉大過ぎる。全然歯が立たないわ。

ああ言えばこう言う減らず口のお喋りゴリラを黙られたと思いきや、

そのまま返す刀でこのアタシまでも軽くシャットアウトしちゃうんだもの。アタシもTalk battleなら那奈や翼にも負けないくらい自信あるんだけどなあ、やっぱりレベルが違い過ぎるわ…。

「澤村君にはやっぱり余計なお話だったかしら？ 今回のこの話は無かった事にして貰って結構よ、ってあら？ もしかしてちよっと落ち込んだりしてたりしてる？ 気にしないでいいのよ、そんな顔しないで？ スマイル、スマイル！」

「はあ」

「もーっ、相変わらず千春ちゃんは言葉を選ばないわよね？ きつともっ、すでに一茶ちゃんの心はズツタスタに切り裂かれまくってるわよね？」

「社長さんはたまに褒めてんだか貶してんだかいまいち良くわからない時があるですー！ 社長さんはこの前ランランのコスプレを見た時、『うわあ、キツモーい！ でも、可愛い！ キモくて可愛い、ランちゃんってズバリ臭くて美味しいくさやみたいな感じよねえ〜？』って言われて、ランランは喜んでいいのか悲しんでいいのか良くわからなくなってるその日一日中ずっーと『モルボルの臭い息』状態になったですー！」

ママとお話をしている間にアタシのメイクはすっかり完成して、すっかり余裕で手の空いたリョウちゃんとランちゃんも会話に参加するようになったわ。でも、肝心の隣のゴリ顔はメイク落としはキレイに完了してるけど、まだモデル用の下地メイクや毛穴隠しも施さ

れてなくて汚い肌のまま！

いくら男性でも今やイベントステージやカメラのある場所ではメイクをするのは当たり前前の時代、さすがにこの顔でギャラリーの前に立たせるだなんてさすがに失礼な話。もうイベント開演まで時間が無いわ！ 一体どうするのつもりなの、ママ！？

「……実はね、アタシがあえて澤村君にこんな話をしたのは、アタシが深い交流がある一人の男性と澤村君がとても良く似たタイプの人間だったからなの」

「同じタイプ？」

「そつ、彼も澤村君と一緒に小さい頃から厳しいお父様の元で礼儀作法や一般道徳を叩き込まれて、たった一つの夢を実現する為に周りの娯楽には目もくれずにがむしゃらに青春時代を駆け抜けていった人でね、で、その夢っていうのは彼のお父様の夢でもあって、若くして亡くなられたお兄様の跡を引き継いだ夢でもあったのよ、幼い頃から周りのたくさんの人達の想いや願いをいつぺんにその背中に背負って生きていかなければならなかった人、それがアタシが初めて彼と巡り会った時の第一印象だったわ」

「何か、他人とは思えないほど自分と立場が良く似てますね、確かにその人と自分は共通点が多いと思います」

「ううん、似てるのは立場だけじゃないわ、性格までそっくりなのよ？ 彼も澤村君みたいに自分の信念に頑固なくらい固執しちゃう、物凄い石頭で柔軟性に欠けた不器用な人でね、ちよつとでも自分と違う思念や常識を持つ人間と対立すると、ムキになって敵意を剥き出しでその相手を言葉を全否定するの、でもね、自分の得意分野以

外のキャパシティが全く無いもんだから、そこから攻め込まれるとまるで子供のケンカみたいな幼い言い返ししか出来なくて、いつつも簡単に返り討ちにされちゃうのよ、ルックスは真面目そうでも背も高くてカッコ良かったのに、いざ喋らせると全然ダメで何にも出来ない人で、何かアタシもその時はガツカリしちゃったのを覚えてるわ、ねっ、澤村君とホント良く似てるでしょ？」

「似て、ますか？　そうですか、非常に心中複雑な気分です、はあ」

「しかもね、さらに彼には自分と全てが真逆の人に対してちっとも礼儀も敬意も払わない、いい加減な性格の仲の悪いライバルの人がいてね、顔を合わせる度にいつも口ケンカになつては散々茶化されてもて遊ばれてこねくり回された挙げ句、馬鹿にされてコテンパンに叩きのめされて半ベソかきながらスゴスゴと背中丸めて逃げ帰っていくのよ？　あの哀愁漂う可哀想な後ろ姿、アタシ今思い出してもついつい吹き出しちゃうわー！」

「……あれ？　ママのこのお話、アタシどこかで聞いた覚えがあるわ。不器用で子供っぽくてダメダメで、スゴく仲が悪いライバルの人がいて、しかも死んだお兄さんの跡を継いで夢を追いかけていた男の人……。もしかして、これってアタシも良く知っている男性の話じゃないかしら……？」

「でね、その普段のケンカでついちゃった彼の負け犬根性は本番の戦いの場でも足を引っ張る形になっちゃって、そのライバルの人が先に現役を引退するまでの十年間延々と負け続けて、彼は自分の夢を叶えられずにつつと屈辱の日々を過ごしてきたのよ」

「……ママ、その『彼』って、もしかして……？」

「でもね、彼は決してそのライバルの人より弱いつて訳じゃなかったのよ？　むしろ誰にも負けたくないっていう闘志は日本人の三人の中でも一番だった、って周りの関係者達はみんな口を揃えて言っていたわ」

「……ママ……」

「二対一っていう厳しい不利な条件の立場でも、何度も負けて叩きのめされても、心無いファンからブーイングを浴びせられても、彼は決して諦めずに何度も何度も奮い立って、人一倍の練習を重ねて戦いに挑んだのよ、呆れるくらいの負けず嫌いと、家族みんなの夢である世界チャンピオンへの闘志は、あの二人とは比べものにならないくらい熱くて魂のこもったものだったわ？　ライダーとして恵まれた環境に育ち、お父様から直々に英才教育を受けて、デビュー前から『神童』と呼ばれ周囲から期待されながらも、突然現れた強力なライバル達の前に苦杯を舐め続けて思ったような結果を残す事が出来ない、それでも腐ったりせず一步一步にコツコツと努力を重ねるその姿は、見ているこっちまでもが切なくなって胸を熱くさせられたわ……」

「……間違いないわ。その『彼』とはママが世界で一番愛しているあの、三島勇次郎。アタシのパパよ！　パパが昔、世界の頂点のバイクレースのステージで、那奈のパパの虎太郎さんや翔太君のパパの貴之さんと熱いバトルを繰り広げていたのはアタシも良く知ってるわ。でも、そんな苦労をしてレースを走っていたなんて全然知らなかった……」

「でも、それが彼の一番の長所であり最大の弱点、皮肉にも一途で真面目過ぎるその信念こそが自らの可能性を狭めてしまっていたのよ、亡くなった憧れのお兄様の遺志を継ぐ事ばかりに気を取られてチームの監督をしていたお父様の言う事も聞かずにずっとそのお兄様の形見の旧式のマシンに乗ってレースに出場してたのよ？ それじゃいくら何でもとても勝てる訳が無いわ、相手は世界最高の技術を持つ女性クリエーターの手によって開発された当時最新のモンスターマシンだもの、誰が乗ったって走る前からすでに勝負が決まっていたようなものだったわ……」

「……何よそれ！？ そんなのあまりに無謀過ぎるわ！ そのモンスターマシンってのを作ったのは、ママも Respect しちゃってるあの麗奈さんでしょ！？ 無理よ、絶対無理！ いくら何でもそんな戦力でパパに勝ち目なんてある訳が無い……！」

「そこにね、さらに追い討ちをかけるように世界でも五本の指に入る日本の大財閥グループが、モータースポーツの舞台に参入していた鉄鋼生産企業や二輪車生産工場を次々と取引法違反ギリギリのやり方で買収する金融混乱が発生して、彼が所属していたチームも巻きぞいにあって経営破綻に追い込まれて消滅してしまったのよ、彼は唯一の生きる道であったライダーとしての活躍の場を奪われて、唯一の頼みの綱だったお父様はそのショックが原因で脳梗塞を起こして倒れてしまい、何とか一命は取り留めたものの重い障害が残って半身不随になってしまったの、全てを失ってしまった彼はすっかり闘志も熱意もプライドも無くなって、まるで抜け殻みたいに茫然と途方に暮れていたわ……」

うつん、違っわ。アタシがパパの事を詳しく知ろうとしなかっただ



けだった。パパのバイクの話なんて、所詮は趣味が延長したただのお遊びだってバカにしてた。それどころか、パパは弱かったからずっと勝てなかったんだって、ダメなライダーだったから長い間ずっとチャンピオンになれなかったんだって勝手に思い込んでた。

慎一郎グランパの事や、プライベート中の交通事故で亡くなったって聞いている龍太朗アंकルの事とか、パパがそんなにたくさんの方の夢や希望を一人で抱えて頑張っていたなんて知ろうともしなかったわ。パパからお話を聞けるチャンスはたくさんあったのに、連れない態度ばかり取って知らん顔してた。

まさかこんな所でママの口からこのお話を聞けるだなんて予想もしてなかったわ。ママにこうして教えて貰わなければ、アタシはずっと誤解したままパパの事を見下し続けていたかもしれない。アタシって最低。これじゃこのゴリラがアタシに対してする扱いとほとんど変わらないじゃない……？

「澤村君、もしアナタが彼みたいに、生涯を賭けて全霊を尽くして目指している夢を奪い取られた時、例えば大怪我によって柔道家としての可能性を閉ざされてしまったとしたら、今のアナタに別の新たな人生を見つけ出す事が出来るかしら？ 柔道家ではないもう一人の自分の姿を想像する事が出来るかしら？」

「いえ、無理です、自分には柔道以外に何もありませんから」

「じゃあもし、ホントにそうなっちゃったりしたらどうする？ どこかの大学の指導者にでもなる？ それとも、お父様の跡を継いで道場の師範代にでもなる？ どちらにせよ自分より若い世代の選手を導く立場になる訳だけど、その為にはもっと様々な世界の人達とコミュニケーションを取って、もっともっと広く人間関係を深めていく必要があるんじゃないかしら？ だってコーチは現役選手と違

つて、各選手達の競技生活を金銭面でも契約面でもしつかり支援してあげなければならないし、医学面や栄養面でも詳しいアドバイスをしてくれるトレーナーや医師を探さなければならぬしね、色々とする事いっぱいあってスッゴい大変よぉ？」

「うむう」

「それとも、いつその事死んじゃう？　もう僕には生きる夢も希望もありませ〜ん、って？」

「ママ！　それはいくら何でも言い過ぎよ！　このご時世にその手の話題はタブーだわ！」

「ごめん、ごめ〜ん！　ジョークよジョーク、例えばの話！　そんなに怒らないでよ千夏、ママ怖〜い！」

「んもおう、最近のTeenagerはとてDeli cateでFrag ileなのよ！？　どこで誰がこのお話を読んでいるかわからないんだから、Easyにそんな事言わないで！」

「いやあ〜ん、ごめんなさあ〜い！　ママったらイケない子だわ、猛烈に反省中でえ〜すっ！」

「あ〜あ、せっかくSeriousな空気だったのに、すっかりおフザケモードになっちゃったわ……」

「でもね、決して悪ふざけでこんな話をした訳じゃないわ？　中にはそれくらい悩んで苦しんでる選手の人達もいたりするから、ちょっと心配でついつい口が滑っちゃったのよ、千夏も澤村君もそれだけはわかって欲しいの、どうか許してえ〜？」

でも、ママが一体何を言いたいのか少しわかる気がするわ。夢に向かつて一生懸命になるのは良い事だけど、あまりそれに気を取られて周りが見えなくなると、それが叶わないと知った時に絶望のあまり自分自身を見失ってしまうかもしれないって事よね。道は一つとは限らない、人生にはたくさんの道がある。だからママはアタシに色々な経験の場の与えてくれていたのね……。

「アタシ達は澤村君の柔道家としての可能性だけに期待してる訳じゃないの、これからの未来を担う一人の若者としてアナタが持つ無限の可能性に期待してるのよ？ だから、柔道の世界だけに拘らず、もつと別の様々な世界にたくさん触れて欲しいのよ、全国民のみんなが憧れる本当のスーパーヒーローになって貰う為になっ！」

「しかし、自分にそんな事が果たして可能でしょうか？ 恥を忍んで本心を語らせて戴きますと、自分は先程三島さんが言われた通り酷く不器用で融通の利かない人間です、本当は柔道以外の世界で上手く生きていける自信が全く無いのです、こんな自分が博学と武芸を兼ね備え、人々の模範となる人間になれるとは、とても……」

「しんぱーいないさあー！ なんてねっ？ ウフフ、だって澤村君が極めようとしてるのは『柔』の道でしょ？ どんな出来事に対しても柔軟な心構えで受け止めるのが真の柔道家のあるべき姿、アタシはそう思うんだけどなあー？」

「ハッ！ 言われてみれば、確かに！」

「自分には無理、自分には関係ない、そういうネガティブな思い込

みこそが自分の可能性を狭めてしまふのよ？ さつきも言った通り、未知の世界へ足を踏み入れるのは誰だって怖いのも、それは決して恥ずかしい事なんかじゃないわ、失敗したっていいじゃない？ 人間は一人なんかじゃ生きられない、困った時は意地を張らずに助けを呼べばいいの！ だからこそ、アナタが道に迷わないようにアタシ達サポート役が側にいるんだから！」

そういえば、ママはこれまでもたくさんアーティストやアスリートのサポート役に回っては、それらの人達のサクセスストーリーを演出してきたわ。時には自分のチームのスタッフだけじゃなく、他のデザイナーやよそのスタッフにまでアドバイスをしてあげて、事業やイベントのお手伝いをしてあげた事もあったわ。

だから、この業界でママが嫌いだって言う人はほとんどいないわ。中には嫉妬してイヤミを言ったりするひねくれた大御所さんとかもいるけど、一度助けて貰った人達はみんなその恩を忘れずに、今度はママの頼み事を聞きつけて喜んで協力してくれる。見返りや分け前を求めず他人に尽くすからこそ、ママはみんなから絶対的な信頼を得る事が出来たのね！

「澤村君、アナタが難しい事を考える必要は一切無いわ、男は夢と野望を持って真っ直ぐ前を向いて堂々と生きていけばそれで良し！それが男の役目であって、それを裏で支えるのがアタシ達女の役目！ 澤村君が気を使わなくても、こっちがちゃんと後ろから全力でサポートしてあげるから一つも心配しないでいいわよ！ このアタシを信頼して何だってせーんぶ任せなさい！！」

「おお、これは何と頼もしい存在だろうか、これほど安心して身を任せられる人間には今まで出逢った事が無い、もしやするとこの人

はお袋よりも凛々しく逞しい女性かもしれん、これこそ正に海千山千、世界を見極め悟りを開いた偉人の気迫というもののなのか」

「あれこれダメダメだったアタシのダーリン、勇ちゃんもね、ちゃんと有能なスタッフとマシンクリエーターを揃えたスペシャルチームを用意して最新鋭の技術が詰まったニューマシンに乗せてあげたら、たった二年で日本人初の最高排気量クラスのシーズンチャンピオンになっちゃったんだもん、澤村君だったらもつと早く世界王者になれちゃうわよお!？」

「ハイ! ソノ Super Machine ヲ ツクツタ  
ノハ、My sweet darling ノ アキラ・カゲヤマ  
デース! アキラ ノ Machine ハ、Very ver  
y fast デシタネー! レナ・ワタセ ガ ツクツタ Ma  
chine ヨリ、ゼンゼン Stronger! イチバン F  
astest デシタヨー!」

「あゝらまあ? ソフィー、そんな事を麗奈の前で言ったら、んもおうカンカンに怒っちゃって大変な事になるわよお? ホント、晶ちゃんの話をするとうすぐに喜んですっ飛んでくるんだからあゝ!」

「Oh, yes! He is my favorite tr  
easure! I love you, baby! I wan  
t to hug your right now!!」

「あゝあ、呆れちゃって聞いてられないわ、相変わらずお二人はラブラブでお熱いのねえ? どうもご馳走様でしたあゝ!」

ママのお仕事モードの気迫にちよつと控え目で後ろに隠れていたソフィーも会話に絡んできて、ピリピリしていた場の空気も和んでスタッフからも笑い声があがって、何かスッゴいGood feeling! アタシも急にテンション上がってきちゃって俄然やる気満々になつてきちゃった!

「……でも、ちよつとWait? ママ、コイツの、この男のメイクはどうするの?」

「はい! 時間でーす! スタッフ各自、持ち場についてスタンバイして下さい!」

「姉御! 準備OKかい!? もう開演時間だぜー!」

「ヤツダ〜!? モモとハナが迎えに来ちゃったわよ〜!? 千春ちゃん、急がないと一茶ちゃんの準備間に合わないわよ〜!」

「衣装の着替えはすぐ出来るとしても、まだメイク下地も塗つてないしヘアスタイルもボサボサですうー! さすがの社長さんもこれは大ピンチですうー!」

ヤダヤダヤダ、どうしよう? 普段こんなにギリギリになる事なんて無い前代未聞のママのお仕事具合にアタシ達スタッフ全員はドツタバタの大慌て! 時間を知らせに来たモモさんハナさんもルーム内を走り回つて大パニック! アタシ達がイタズラして塗つたメイクは完全に落ちてるけど、コイツの顔、無作為で面白みの無い不細工ゴリラのままよお!? ママ、どうするのよお〜!?

「ねえ、ママ!? まさかママともあろう人が、お喋りに夢中になつてお仕事を忘れちゃった訳じゃないわよね!? 何か秘策があるのよね!? Hey, Mom! hurry up! Time is coming!」

ところが、ママはそんなアタシ達を気にもしないで鼻歌を歌いながら余裕しゃくしゃく。笑顔でゴリラの不細工顔の両頬をムニツと掴むと、手のひらで軽くポンポンと叩いて緊張を解す様に両肩を揉んであげてこう言ってみせたのよ。

「さつ、これで準備は完璧よ! 澤村君、頑張つてね!」

「えっ!? ちょっと待ってよママ!? これで完璧だなんて、まだメイクも何もしてないじゃない!? いくら男だっていつてもすっぴんのままイベントに出させるだなんてUnbelievable過ぎるわ! 一体どういう事なのか説明してえ!」

「あら、メイクならとくに完了してるわよお? 見てわからない? わからない様じゃ、千夏もまだまだ勉強が足りないわね〜?」

「……What? どういう事?」

ママはニコニコしながらアタシのおでこを指でツンとつつくと、両手を腰に置いて自信たっぷりに説明してくれた。その姿は、世界のファッション業界のNew generationと呼ばれ、ワールドクラスで大活躍するカッコいい女性十傑としてTIME誌にも

紹介された『チハル・ミシマ』そのものだっただわ！

「メイクって言うのはね、何も外見だけを整えるだけのものだけじゃないのよ？ 内面のケアもきつちりとしてあげて、本来持っている自信と輝きを取り戻させてあげる事もメイクアップの一つなの！ 澤村君には元々、大勢のギャラリィを魅了するオーラが全身から溢れ出しているもの！ アタシがこれ以上手を加えなきゃいけない部分はもう一つも無いわ、大丈夫よね、澤村君？」

「はい、お任せ下さい、三島さんのご期待に全力でお応えしてみせます」

「うん、よろしい！ 良い返事ね、今のアナタに余計な飾りなんて必要無いわ、正々堂々と胸を張って自分の勇姿をみんなに見せつけてやりなさい！ アナタにはアタシがプロデュースした高機能なスポーツウェアと、澄んだ心の様な真っ白なアンダーシャツ一枚あれば最高のスーパースターになれるわよ！ アタシが保証するわ、自信を持って行つてらっしゃい！！」

「押忍！ 澤村一茶、行つて参ります！！」

「社長〜！ お見事です！ お見事過ぎます〜！ もう私、感動して体中がビリビリ痺れちゃってます〜！」

「うひゃー！ 姉御、カッコ良いよ姉御っ！ アンタ、カッコ良すぎだぜっ！！」

「う〜ん、悔しいわ〜！ また千春ちゃんに一本取られちゃった〜！メイクとは内面をも輝かせる言葉の魔法、何てステキな名言な



のかしら〜！ 私はまだまだヒヨツ子ちゃん、メイクの心得って私が思っている以上に奥深いものなのね〜！？」

「やっぱり社長さんは別格中の別格、この世の唯一神ですうー！ランラン、死ぬまで社長さんのお側から離れずに御奉仕する事に決めたですうー！ ご主人様ー！！」

……さすがだわ、ママ。アタシもすっかりシビれちゃった。『メイクは外見だけじゃない』だなんて、リヨウちゃんじゃないけどこれって二十一世紀に残る大名言だってみんなも思わない？

こんなセリフ、そんじょそこらの名も無きファッションデザイナーがカツコつけて言ったってダッサいわよお？ 絶対にシユプレヒコールの嵐に飲み込まれるに違いないわ。

どんな場面でも自分の力と愛する人達の秘めた可能性を信じて、様々な困難を乗り越えてきたママだからこそ言えた名言だとアタシは思うの！ これはママしか使っちゃいけない魔法の言葉、ううん、ママだからこそ人々に愛と勇気をあたえる魔法の言葉になるのよっ！ その証拠に、見て！？ さっきまであんなにヘタレ全開で情けなかったあの腰抜けゴリラがすっかり立ち直って、あのいつものふてぶてしい偉そうな姿に戻ったわ！ これでもう怖いものなんて無いわ、このイベントだって成功したも当然よ！

これならきつとアタシ、最高のステージをママとソフィーにプレゼントをしてあげられるわ！ 受け取って！？ これがこれまで愛をもつてアタシを育ててくれた二人に対しての精一杯の感謝の気持ち！ アタシはこんなにキレイで美しいLadyに成長したわ！ それもこれもみ〜んな二人のお陰よ、愛してるわ、Mom & Sophie！！

「……つてあれ？ Happy endも良いけれど、何かちょっとおかしくない？ アタシ、どうしても納得出来ない事があるはずなんだけとお、何だっ たっけ……？」

「何をポケットとしているんだ？ 急がないと開演までに間に合わないぞ、早くしろ」

「……ああん、もおう！ ちょっと待つてよぉー！？ ……つて、ちよつと待てえー！」

「何だ？」

Wait！ Wait， wait， wait！！ 何で？ どうして！？ 何がどうしてこんな事になっちゃってるのぉ！？ 元々はアタシ、やっとこの男の弱点を驚掴みにしてあと一步のところまで追い詰めたっていうのに、何よこれ！？ ママの励ましのせいでコイツ、また自信を取り戻して元通りになっちゃったじゃないのよぉ！？

ううん、元通りどころか最初の時よりさらに態度がデカくなって偉そうになってない！？ 嘘でしょ！？ 超最悪なんだけど！？ こんなシナリオ、アタシはちつとも望んでない！ こんなオチ、アタシ全っ然笑えない！ 冗談じゃないわよ、作家のバーカ！！

「アンタねえ、ちよつとママに褒めて貰ったくらいで Wannabe ってんじゃないわぉ！？ モデルのキャリアはアタシの方が断然上である事には変わらないの！ せいぜいアタシの足を引っ張らない様に細心の注意を払いなさいよ！ わかった！？」

「足を引つ張りかねないのはお前の方だ、健康的な印象が第一のス  
ポーツウェアのモデルを、そんなチャラチャラしただらしのない女が  
果たして務まるのか俺は今から心配でならない」

「……なっ！ Shut that fuck up!! アンタ  
ごときに心配される必要なんか無いのよ！ そんな暇があるなら自  
分の心配しなさいよ、このBig baby!! Kick yo  
ur ass!!」

「本当に下品な女だな、恥を知れ、ファッキンビッチ」

「Noooooooooooo!! Oh, my god!!  
Shit!! Fuck, fucker, fucking!! ど  
こでそんな言葉覚えてきやがったこのクソゴリラ!! マジいい加  
減ぶっ殺すわよゴラァ!!」

「ハイハイハイ！ 二人ともケンカも良いけど、イベントではち  
やんと仲良くニコニコ振る舞って頂戴ねえ!!? ほら、もう始ま  
るわよ！ Everybody, Let's go!!」

「ママ一人だけEnjoyし過ぎよ！ 少しは自分の娘にも優しい  
言葉をかけてくれたって良いじゃない!?!」

「ママ、千夏のジャージ姿とテニスウェア、楽しみにしてるわよ  
！ あと、スクール水着もよろしくねっ？ ウフフッ!」

「……あ、ああ、ああああああ!!!!」

……忘れてた。せっかく忘れてたのに、思い出しちゃった。ママの

せいで思い出しちゃったあゝ！！ 嫌あ、スクール水着は嫌あゝ！  
それだけは嫌よ、絶対嫌あゝ！！

「はい、ステージ開演しまーす！」

……まあ、アタシだってこれでもプロのモデルな訳だから、もちろんこの後のステージでは機嫌悪いながらもしっかり仕事はこなしたわよ。だってしょうがないじゃない、お仕事なんだもん。どんなに嫌な事でも最後までやり切るのか社会人の常識、クレイ事ばかりじゃ生きていけないのよっ！ もうこの話はノーコメント！ 何も言う事ないし何も答えないわ！ はい、もうここまで！

えっ？ あのゴリラのモデルデビューの件はどうなったのかった？ そりゃもう最悪よ、アタシからすればね。すっかり気合い入って問題ないかと思ってたら、出番目前になった途端に真っ青な顔になって脂汗ダラダラ、緊張で足の先までカチンコチンになってたわ。それでもいざステージに立ったら覚悟が決まったのか、まあまあそれなりにこなせてた感じだったかしらね。アタシとしては正直、何かとんでもないヘマでもしないか期待してたんだけど、何事も無く無事に終わっちゃってもうガツカリだわ。

しかもギャラリィの中にはコイツを知ってる人達もいて、女性陣からは黄色い歓声が上がったりしてたのよ？ 生意気よねえ、アタシなんか脂ギツシュなハゲのオッサンにジロジロ見られて超キモかったのに、どっちが今回の主役だと思ってんのよ！？ あゝん、もう超不愉快！ アタシ全然納得出来なあゝい！！

「OK〜！ 千夏、澤村君、最高のショーだったわよ！ アナタ達

二人をモデルに起用して大正解ね！ やっぱりアタシの目に狂いは無かったわあゝ！ ねえソフィー！？」

「Wow！ It's excellent！ Very very amazing！ And exciting！ Yeah！」

……どおゝもいまいちスツキリしないわねえ。何かスツゴイイライラするわ。勝負に負けたような気がするのはアタシの錯覚なのかしら？ でもまあ、イベントは何事も無く大成功したし、ママもソフィーもみんなとっても喜んでくれてるから、とりあえずGoodってところかしら？ それに、今日アタシがここに来た目的は別にある訳だしねっ！

そうよ、アタシのもう一つの目的はソフィー、貴女と交わしたあの日の約束を果たす為なのよ。アタシは日本にきてからこの三年間、この約束を一日たりとも忘れた事は無いわ。さあソフィー、アタシの気持ちを受け止めて。そして、貴女が体験したSky highの世界へとアタシを導いて！ 世界中のアスリート誰もが夢見る、あの地球最大の平和とスポーツの祭典の最高のステージへと！

## 第59話 跳べ

「社長、長時間の激務お疲れ様でした、明日のスケジュールも多忙になりますが、この後はどうぞ羽根を伸ばしてごゆっくり休暇をご堪能下さい」

「姉御、またいつかどこかでドカーンとデカい事やろうなー！ お疲れー！！」

「チナッティもソフィーさんもお疲れちゃん！ 一茶ちゃん、もし今回の件で女の世界に目覚めちゃったら、ぜひリョウお姉さんに相談してね？ 力になるわよー！」

「穴空けドリルで改造された男女の化け物になって、誰も好きでなりたいくなんてないですー！ アニキにはやっぱりボーイズラブの世界で濃厚ウホウホが一番、ランランは今度のコミケでアニキをモデルとした同人描くから楽しみにしやがれですー！」

「言うよねー！」

「ハイハイ、みんなお疲れちゃん！ アナタ達もちゃんとゆっくり休むのよお？ じゃあ、またねえー！」

ママの小悪魔的イタズラ心にすっかり騙され、最後まで振り回されてドタバタのまんまFinishした今回の新ブランドのデビューイベント。ギャラリーがみくんなシリアスでセンスゼロのお堅いメ

ガネ公務員さんばかりで、何かお互いの間の温度差が違って終始会場の空気がぎこちなかったわ。モデルとしてステージに立っていたこのアタシですら、上手くイベントが進行するかどうかちょっと心配になってきちゃったくらいだもん。

ブランド新製品の解説約として司会進行していたモモさんもセリフ噛みまくって珍しく慌てふためいていたし、残りの三人もバックヤードからヒョコつと不安そうな顔を覗かしていたのがステージから見えたわ。ビジネスの相手が変わると、ずいぶんこちらの勝手も変わってくるものなのね。

やっぱり、ビジネス世界って口で言うより遥かにVery Difficultだわ。そんなに重労働って訳じゃなかったけど、何か普段では有り得ないピリピリした雰囲気にはさすがのアタシも気疲れしたわ。何か、スッゴい肩が凝っちゃった。こんな筋肉痛、部活の練習とかじゃ経験した事なんて無いもん。変なところに無駄な力が入っていたみたいね。

「あらやだあゝ、千夏ったらちよつとお疲れモード入ってるゝ？  
まあ、それもしようがないわねえ、千夏はまだ子供だもの、あんな堅苦しくてつまらないイベントじゃ飽きちゃうわよねゝ？」

「ママ、ヒッドゝい！ アタシが子供だからじゃないわ、スタッフみんな今回のイベントにはヘトヘトになってたのよ？ Coolな顔してピンピンしてるのはママ一人だけよお？」

「ウフフ、そおゝう？ だつてママ、今回のこのイベントでたくさんのお教育関係者の方々とコミュニケーションを取る事が出来たんだもゝん！ 中には文部科学省の役員までいたのよ！ また新たなビジネスルートの可能性を発掘出来て、ママは今、とってもアゲアゲのハイテンションなおゝ！」

ママ曰わく、新ブランドを武器に『ミシマ』の社運をかけた今回のこのイベントはかなりしつかりとした手応えを得る事が出来たらしいわ。前からアタシ達を通うあの学校の設立と経営に資金提供していた事もあって、ママの名前は教育関係者の人達にも多く知れ渡っていたんですって。だから、それほど苦労せずに新製品契約の話に持ち込めたそうよ。

「もし、今回の縁でママが中央教育審議委員会に推薦されてえ、審議委員に任命されたりしちゃったらどうしょおう？ 昨日の地方の学校での保護者会にアドバイザーとして招待されてた美香、スーツがスゴくフィットしてて超カツコ良かったわ〜！」

「……………ねえ、ママ……………」

「やっぱり、仕事が出る女ってスーツが良く映えるのよね、ママの仕事ってまずスーツなんて着る事無いじゃない？ だから、ああいうキヤリアウーマンスタイルって実はママ、スゴく憧れてたりするのよねえ〜！」

「ねえ、ママってば！？」

「あつ、そうそう、良く考えたらうちのモモもいつもスーツ姿よねえ？ なのに、美香の方が数段カツコ良く見たのはボディスタイルの差なのかしらねえ？ 美香スツゴいもん、ママよりグッドスタイルよ！ やっぱり新作ちゃんのおかげなのかしらあ？ ダーリンにあれだけ愛されてると、女って簡単には錆びないように出来るのねえ？ じゃあ、麗奈が最近すっかり廃れてきちゃったのは、や



っぱり虎太郎兄い兄いのせい……」

「ママ、Stop! Stop now!!」

「いやん、んもあうう！ そんな大声出して怒ったら怖い！ わかってる、大丈夫よ千夏？ ママは例え教育委員会の推薦があつてもこのお仕事は絶対に辞めないわ！ ちゃんと千夏に跡を継いで貰えるように頑張つて……」

「ちうがう！ そんな事じゃないわよお！ このままママがずっと喋り続けていたら、また今回のお話が軽く二万文字オーバーして次の回まで続けなきゃいけなくなっちゃうじゃない！ 全然話が進行していかないわ、ママは少しの間だけBe silent!!」

「んうゝん、イジワルウゝ」

「今回のお話はアタシとソフィーのお話なの！ ママはお口チャツク！」

そうなのよ、そうなのよお！ やつと先のお話に進行出来るわ。イベントが終了して解散したアタシ達は、ソフィーとの再会を改めてお祝いしようとショッピングモール内のフードフロアにある絶品ステーキハウスでディナータイムを取りに移動中なのよ！

ディナーと言っても時間はまだ夕方の五時だからちよつと早いんだけど、イベントがあまりに忙しくてランチをちゃんと取れなかったから、アタシのお腹はすっかりペコペコ！ 今日はアタシもモデルの役目をきつちりやり遂げてママとソフィーの為に貢献したもん。ご褒美よ、ご褒美！

「チナツ、Todayハヨクガンバッタネー！ トツテモ Excellent ダッダヨー！」

「エヘツ、Thank you, ソフィー！」

「チナツノ Swimmer style, Very cute  
ダッダヨー！ チナツ、Nice body ダッダネー！」

「……お願いソフィー、その話はもうやめて……」

……何よ？ みんなしてまたアタシの事をジロジロ見て……。えっ、まさかホントにあの場所で水着姿になったのかって？ Shut up！ 放つといて頂戴！ 別にここでわざわざComing outする必要無いでしょ！？ 今日のアタシにその話はタブー！ 明日も、明後日も来月も来年も何年後でもずっと永遠にタブー！！ 一言でも話したら大噴火するから覚悟しなさい！！ 良いわね！ 絶対よ！！

『……あゝあ、アタシ何であんな事やっちゃったんだろう？ 人生最大の汚点にならなきゃ良いけど……』

「チナツ、ゲンキ ダシテクダサイ、『ワカゲノイタリ』、  
ダレデモ アルコトネー？ ワルイ コト ワスレテ、イッパイ  
ゴハン タベマシヨー！」

「……そうね、そうよねっ！ もう、済んじやった事だもん！ 済

んじやった事、済んじやった事、済んじやった……、ハア、……もう、取り返しつかないわよねえ……」

「……チナツ！？ Smile、Smile！」

「……うん！ 食べよ、食べよ！ んもおう、アタシお腹ペコペコで超Hungry！ いっぱい食べるわよぉ、こうなったら半分やけ食いで食べ尽くしてやるう！」

「Wow！ チナツ、スゴイナー！ ココハ Me ト チハルノオゴリネー！ 『Samurai boy』、イツサモ イツパイタベルネー！」

「はい、それではお言葉に甘えて」

「……何でアンタまでここにいるのよぉ？ さっさと消えてくれない？ んもおう……」

そうなのよね、ママが車に乗せてこのゴリラをここまで連れてきちゃったから、帰りも車で家まで送ってあげないといけなくなってるのよね。あぁ、もうヤダ！ 丸一日中この男と一緒にいなきゃいけないだなんて、何てBad dayなの！ まさかこんな日が来るだなんて、予想すらしてなかったし予想したくもなかったわ……。

「……ねえ、千夏？ そろそろママ、喋って良いかしらぁ？」

「えっ？ まさかママ、今までアタシの言う通りずっとお口チャックしてたのぉ？」

「だってえ、今日の千夏、何かスッゴいピリピリしてて怖いんだも〜ん！ 言う事利かないとイジメられちゃいそうで、ママビクビクなのよお？ いやあ〜ん！」

……お仕事から解放された途端、ママったらすっかりいつものお気楽モードに戻っちゃってる。さっきまでのCoolでFantasticなお仕事モードのママはどこ行っちゃったのかしら？ ホント、ONとOFFのギャップが激しい人なのよね、アタシのママって。

「ねえねえ、千夏う〜？ そろそろママの事をリリースして頂戴？ ママだってお仕事で疲れて、デイナータイムくらいはパア〜っとハジケたいのよ〜！ お願いプリプリプリ〜ズ！？」

「……う〜ん、まあ良いけどお、さっきみたいなNon stop talkingはNo goodよ？ それだけ約束してね？」

「OK〜！ さあ、みんな！ お目当てのステーキハウスが見えてきたわよ〜！ 今日はジャンジャン食べてジャンジャン飲むわよお、Are you ready？ Let's go！！」

「Oh, yes！ Let's go go go！！ Yeah  
！！」

「ちよつとママア！？ 許してあげた途端にすぐこれなんだからあ！ ソフィーもはしゃぎ過ぎ！ 勝手に二人だけで走って行かないでよお！ ねえ、ちよつとお〜！？」

まだ本格的なディナータイムじゃない事もあって、人気のお店とはいえ他のお客さんの姿はまばらで店内は意外とスッキリしてたわ。まあ、例え混んでいたとしてもいつもの様にママが事前にVIP席を予約してあるからNo problemなんだけどねっ！

「……あのー、もしかして、三島千春さんですか？」

「……あらあ、そうですけどお、アタシに何かご用かしらあ？」

「……うわあー、本物だー！ 私、三島さんの大ファンなんです！ 毎週いつも欠かさず女性誌を見て、三島さんの新作ファッションをチェックしてるんです！ あっ、あの、もし良かったら握手して貰えますか！？」

「全っ然OKよ！ そんなに夢中になってくれているだなんて、アタシ超感激しちゃうわー！ 今日のファッションスタイルも『ミシマ』ブランドで統一してくれているのね、Thank you！」

「うわ、うわ、うわあー！ 握手して貰っちゃった！ それにこのファッションにも気づいて戴けるだなんて、もう涙出そう！ ありがとうございます！」

……あるある。ママと一緒にいると毎度良く見るシーンなのよね、コレって。日本のアラフォー女性世代にとってママは憧れ以上の神様みたいな存在だから、プライベートでお出掛けしているとみんなに見つかってあっという間に人混みが出来ちゃうのよねえ。

ママだったら、こんなに人気者なのに全然変装とかしないで堂々と人前に出ちゃうのよ。しかもボディガード無しで。だから、いつも今みたいにファンの人達から握手やサインを求められたりして色々大変なの！

中には図々しく勝手にケータイで写メを撮ったりする人もいたりするんだけど、ママは決して嫌な顔一つせずには笑顔でみんなとコミュニケーションを取るの！ これこそスーパースtareのあるべき姿よね、いつかアタシもママみたいな人気者になりたい！

「……ん？ あれ？ どうしたの？」

アタシがママのカッコいい姿に見とれていると、下からミニのスカートをツンツン引つ張る小さなお手てそこがあったわ。肩まで伸びた髪を左右に結わいたPrettyなおさげの女の子。うーん、パッと見About幼稚園児くらいかしら？ 翼のところのみータンよりもUnderageだと思うわ。

「や、やだ！ ちょっとあなた、何て事してるの！？ こっち来なさい、早くお母さんのところに、早く！」

ママと会話していた女性が慌てて声をかけて呼び寄せると、その女の子は駆け足でその女性の後ろに隠れちゃった。親子なのかしら？ でも良く見たら、この子の着てる服もママのブランドのキッズモデルだわ。ホントにママの大ファンなのね、このお母さんって。

「ごめんなさい、この子ったら、去年のミシマコレクションに行つてからすっかりモデル系のお姉さんに憧れるようになってしまつて、悪気は無かつたんです、どうか許して下さい」

「ぜんぜん！ お氣になさらないで下さ〜い！ ってゆ〜かあ、あのステージ見てくれてたんですかあ？ いやあ〜ん、アタシ、スツゴい嬉し〜い！ ねえママ、聞いた聞いた？」

「おかあさん、あたし、このおねえちゃんしつてるよー！ キレイなモデルさんといっしょにファッションショーにでたのみたよー！」

「ウツソ〜！ マジで〜！ アタシがああのステージに立っていたのを覚えててくれたのぉ〜！？ アタシ、超感激〜！」

「おねえちゃん、あのなかでいちばんかわいかったよー！ あたしもいつか、おねえちゃんみたいなキレイなモデルさんになりたいー！！」

「……Wow, very very wonderful！ まるで夢みたいだわ……！！」

去年の国内のファッション業界のNo.1ビッグイベント、あのミシマコレクションで名だたるスーパーモデル達が埋め尽くしていたステージの中、ダイヤの原石の様に光り輝いていたこのアタシの姿を、この子はある大勢の観客の中から一点憧れの眼差しで見つめてくれていたなんて……！

素晴らしいわ！ 何て良い子なんでしょう！ しかも、アタシみたいなキレイなモデルになりたいって、何て素直で正直で賢いのかし

ら！ やつぱり、見る人が見ればアタシの魅力はちゃんとわかるのね！？ この子は絶対ビッグになるわ、アタシが言うんだもん、間違いないわ！！

「All right！ 大丈夫、きっとアナタもアタシみたいなステキでキレイで可愛いスーパーモデルになれるわよっ！ このアタシが保証してあげるわ、大きくなったらいつか同じステージで共演しようねっ！？」

「ワイイ！ あたしぜったいにモデルさんになるー！ ワーイワイー！」

やつぱり、無邪気で夢見る女の子って可愛いわー！ アタシもそうだったもん。この子はこれから、このアタシを目指して一步步perfect ladyへの階段を登っていくのね？ アタシもついに子供達から目標にされるスーパースターになったんだわ。これからはもつと自分の美しさを自覚して、もつともつとキレイにならなくっちゃ！

「……あの、失礼だとは承知の上なんです、もし良かったらサインも……？」

「ハーイ！ 喜んでサインさせて貰うわー！ この雑誌の裏側なんかで良いのかしら？ はい、チハル・ミシマ、つと……、あつ、そうそう、千夏？ アナタもこの子にサインしてあげたら？」

「えっ？ アタシも！？」



「だって、この女の子はアナタのファン第一号なのよ？　せつかなんだから、サインくらいしてあげなさいよ？」

「あたし、サインほしーい！　おねえちゃん、サインちょーだい！」

「…………どうしよう、サインなんて一度もした事無いのにいー？　色紙やノートがある訳でも無いし…………」

困ったアタシが女の子の手を見ると、そこには小さな黄色の傘が握られていた。そういえば、今日は夕方から天気が悪くなるってニュースで言ってたっけ。

「じゃあ、この傘にサインしていい？　表に書きちゃうと雨で流れちゃうから、裏側に書いてあげる！　えっと、チナツ・ミシマ…………、っと！　ほら、これなら傘を開いて見上げればいつでもアタシと会えるわよ！」

「ワイー！　やったやったー！　おかあさん、みてー！？　サインもらっちゃったー！」

「…………娘にまでこんなにサービスして戴いて、もう何て感謝して良いのやら…………、今日でますます三島さんのファンになりました、本当にありがとうございます！」

「Don't worry！　それくらいお安いご用だわ！　いつもアタシのブランドを愛用してくれているんだから、当然のサービスよっ！」

「おねえちゃん、ありがとー！ あたし、このかさ、たからものにするねー！」

「アタシもDon't worryよ！ 大事に使ってね、約束よっ！」

ウキウキですっかりご機嫌の女の子は、右手にアタシのサイン入りの傘、左手に夢見心地のお母さんの手を握ってお店の外へと歩いていったわ。何か、アタシも釣られて上機嫌！

やっぱり、ファンが一人でもいてくれるってとてもHappyな事なのね。これからももっと頑張って、もっともつとアタシのファンを増やしていくわよぉー！

「……千夏、見事に一本取られたわねえ」

「……えっ？」

「アナタがあんなに嬉しそうな顔するもんだから、ママもお母さんのお願いを断るに断れなくなっちゃったわ」

「……何の話？」

「あのお母さん、上手い事娘さんの事を仕込んでいるのねえ？ ちゃんと千夏がアタシの娘だって知っていて、あの子にアナタの事を覚えさせたのねえ」

「……What？」

「さあゝてみんな、お待たせちゃゝん！今日はパーティーなんだから、ドンドン好きな物を好きなだけオーダーしちゃって良いわよおゝ！千夏はソフィーはもちろん、澤村君も遠慮しないでガンガンイツちゃって頂戴！？今日のイベントの成功はアナタの功績でもあつたんだから、これはアタシからのせめてものお礼よっ！」

「功績だなんて、自分にはおこがましい限りです、こちらこそ貴重な経験をさせて戴き、心より感謝致します」

「ヤッパリ、二ホンノ『Samurai』ハ Gentleman デスネー！『レイニハジマリレイニオウル』、Very beautiful ナ Life style デース  
！」

「ねえ、ちよつとママゝ！今の話はどういう意味なのよゝゝ？それにアタシは！？アタシの功績は褒めてくれないのぉ！？アタシだつて頑張つたでしょ！？ねえママ、ソフィー！ちゃんとアタシの話も聞いてよゝゝ！？」

……んもおう、何よ二人して。いくら今回のイベントのスペシャルゲストだからつてこの不細工ゴリラばかりチャホヤして可愛がつて！アタシ、スッゴいつまんない、メチャクチャ不愉快だわ！こうなつたら今日はこのお店で一番高いメニューをオーダーしちゃうんだからね、アタシの功績はアタシ自身でご褒美してあげるんだもん！

「お待たせ致しました、それではご注文をお受け致します」

「じゃあねえ、アタシはこの高級黒毛和牛A5クラスのシャトーブリアン100g、活鮑と活車海老のセットで良いわ!」

「あらまあ、千夏ったら、随分と思いつ切り行ったわねえ?」

「Wow! コレダケデ モウ 20000Yen over デース!」

「だってえ、アタシだって頑張ったもん! これくらいのがママ、別に良いでしょ? 何か問題アリ?」

「うーんうん、全然問題無いわよ! じゃあ、ママもこれに決めた!」

「チハル、アイカワラス Rich life デスネー! Me  
ハ Sirloin, 200g ノ Salad set ニ  
スルネー!」

「えっ! ソフィーったら、いくら背が高いつていてもLadysなのに、お肉200gも食べちゃうのぉ!? 有り得ない、Unbelievableだわ!」

「So? Me ハ Athlete デシタカラ、コレクライ  
ハゼンゼン No problem デース! ホンキ ダシタ  
ラ 300g デモ Eating up デスヨー!」

……300gって。無理無理、ハンパないわ、超有り得ない。もしアタシがそんなに食べたなら、間違い無く胃袋がパンクして病院送り

になっちゃう。横で話を聞いていたウェイトレスさんもビックリした顔してるわ。やっぱり食べる量の多さって体の大きさと比例するものなのね。アタシは200gで絶対に限界だわ……。

「あの、店員さん」

「はい？」

「この店で一番大きい肉はどれくらいですか？」

「はい、スペシャルジャンボサイズのサーロインで450gのメニューがございますが……」

ソフィーの話に呆気に取られていると、アタシの正面の席に座ってジッくとメニューを眺めていたBeast monsterが小柄で可愛いウェイトレスさんに何やら小声でボソボソ。この男、ちゃんと料理が来るのを待ってられるのかしら？ 何か今にも彼女を捕まえて食べちゃいそう……。

「じゃあ、その450gを」

「はい、かしこまりました、ご注文繰り返します、シャトーブリアンのセットが二つとサーロインのセットが一つ、それとジャンボサイズの450gが一つ……」

「三つで」

「失礼致しました、ジャンボサイズの450gが三つ、……エエッ  
!!!」

「ハア!？」

三つ!？ 450gのステーキを一人で三枚!？ 嘘、ウソウソ！  
有り得ない、こんなおかしい、Unbelievable過ぎ  
るわ!! 何なのコイツ、自分で何を言ってるのかわかってんの！  
？ 450g×3つて1350g、軽く1キロOverなのよ!？  
ちゃんと計算出来てるのお!？

「あと、ご飯大盛で」

「……ライスでしたら、スープも付いてくるお得なセットもござい  
ますが……?」

「じゃあ、三つともセット付きで、三つ分一つの皿に盛って下さい」

「……は、はい、かしこまりました……」

……ライスとスープまで三人分!？ 一体全体、この男は何者なの  
よ!？ ギャル曾根じゃあるまいし、ここで大食い番組のロケでも  
始めるつもり!？ 無理無理、絶対無理! 完食出来るはずが無い  
わ! いくら何でもやりすぎよ、いくらママのおごりだっていつて  
も、こんなヒドい悪乗りをアタシは絶対に許さない!

「いい加減にしないよ、このバカゴリラ！ アンタがどれだけ体が大きいからっていったって、そんな非常識な量を食べられる訳が無いじゃない！ 今すぐさっきのウェイトレスさん呼び止めて、メニューを変更しない……！」

「サスガ ハ Heavy weight class ノ JU  
DO athlete デスネー！ Very very won  
derful デース！」

「……ハア？ ソ、ソフィー？」

「Me ノ friend ニモ JUDO athlete イ  
マス！ He is gluttonous , too！ ヤッ  
パリ、Physical making ニハ Eat a lo  
t ガ Very key point デスカラネー！」

「そうねえ、やっぱり柔道選手の男の子はそれくらいガッツリ食  
べて貰わないと駄目よねえ？ 今が一番大切な育ち盛りなんだも  
の、もしそれで足りなかったらドンドン追加しちゃっていいからね、  
澤村君！」

「……ママまで……」

……おかしい、そんなの間違ってる。確かにスポーツアスリートの  
フィジカル強化には日々の練習と同じくらい食事生活が重要なのは  
アタシも知ってるけど、そんな無茶な暴飲暴食をしたら逆に身体を  
痛めつける事になりかねないわ。アタシは違う。アタシは適度で必  
要な量だけを、栄養学にバランス良く摂取するのが一番のフィジカ  
ル強化への近道だと考えているの。

だって、それって当たり前でしょ？　だって食べた分が全部筋肉になるって訳じゃないんだもん！　それはすでに世界中の栄養学においても確証されている事だわ。いくら格闘競技の重量級選手だからっていつても、この食事生活は間違ってるわ！　完全にDoubtよ、絶対に体を壊すに決まってるわ！

「お待たせしました、こちらがシャトーブリアンのセット二つと、サーロイン200gのセット、それと……、ジャンボサイズ450g三人分になります……」

「……うわぁ、んもおう、見てるだけで気持ち悪い……」

さっきのウェイトレスさん一人じゃ持ちきれぬ訳の無い、大量の肉とライスとスープが乗ったプレートが男の人の手でアタシ達のテーブルまで運び込まれてきたわ。そのボリュームたるや、正に肉のピラミッド。あるいはオーストラリアのエアーズロックだわ。

ソフィーのステーキだってかなりの量なのに、例の450g×3に比べたらたった一切れの肉みたいに見えるちゃう。アタシとママのシャトーブリアンなんて豆粒だわ。現物を見て今一度確信したわ、とても人間が平らげられる量じゃない！　もし、これを食べきったらコイツはマジでゴリラ決定！

「……あらぁ？　どうしたの千夏？　何かあんまりナイフとフォークの進み具合が良くないみたいだけどぉ？」

「……うん、何か急に食欲無くなっちゃったみたい……」



「お腹の調子でも悪いのお？ このステーキ、超Deliciousよお？ もうママ、ほっぺ落ちそう〜！」

……だつて、ママ？ 今、アタシの目の前で見るに耐えない背筋も凍る様な恐ろしい惨劇ショーが繰り広げられてるのよ？ 一頭の野蛮な肉食獣が、スゴい勢いで肉の山を貪り尽くしているの。赤身だろうと関係無しよ、口からは肉汁と脂がポタポタ滴って……。嫌あゝ！ キモいゝ！！

何なのよコレ？ ここはサバンナ？ それともどこかのトラベルツアーのジャングルクルーズ？ 誰もディナー中に大自然の弱肉強食の世界なんて見学したくなんてないわよ！ ママはどうしてコレを目の前にして普通に食事が出来るのかしら？ アタシは何か急にお腹が痛くなつてきて、吐き気までもよおしてきちゃった……。

「チナツ、What's happen? ゼンゼン タベテナイナー、Meat キライ？」

「……ううん、そんな事ないんだけどね……」

心配してくれるソフィーの方を苦笑いして振り向くと、アタシは呆れて絶句しちゃった。だつて、ソフィーったらあの200gのサーロインステーキをペロリと全部食べ終わっちゃってるんだもん！ 何よこの食欲、ホントに女性？ イギリスにいた三年前より明らかに食べる量もスピードもアップしてる！

「……ソフィー、そんなに食べたらいつか絶対Weight over

erするわよお？ アスリートは引退した後が一番食生活が危ない  
んだから、少しはCautiousしないとダメよお？」

「It's all right！ ニホンノ ゴハン、トテモ  
Delicious ネー！ Like it！ モット タベタ  
イ デース！ チナツ、コレ イラナイ？ ダツタラ、コレ Me  
ガ タベルネー！」

「……I don't know, unbelievable.  
みんな、おかしいわよ……」

完全に食欲が無くなっちゃったアタシを囲んで、血に飢えた野獣ど  
もが肉に食らいついてムシヤムシヤムシヤ。その光景はまるで  
動物園そのもの。アタシは決して間違っていない、いたって正常よ  
おかしいのは明らかにこの三人の食欲！

ママはゆっくり味わって食べてるから別としても、この目の前の肉  
食ゴリラとアタシの残りのステーキをパクパク食ってるソフィーは  
一体何類何科のアニマルなのよ？ さっきの肉の三段重はいつの間  
にか半分以上無くなってるし、ソフィーだってこんなに食べたなら陸  
上コーチも出来なくなるくらい太っちゃう……！

「……Oops！ そうだわ、すっかり忘れてた！」

そうよ！ アタシには今日、ステージのモデルを務めるだけじゃ  
なくてももう一つ大切なイベントが残されていたんだわ！ ううん、  
アタシのホントの目的はモデルなんかよりむしろこっち！ これを  
忘れたら、今日アタシがここに来た意味は何にも無くなっちゃう！

「ソフィー、アタシの話を聞いて！ ソフィーにどうしても報告したい事があるの！」

「……What? チナツ、ドウシマシター？」

そうよ、そうなの。アタシはイギリスから日本に渡ってから三年間、ずっとこの時を待っていたの。ずっとソフィーとの約束を守る為に頑張ってきたの。ずっとずっとこの報告がしたくて、ソフィーが来日してくるこの日を待ち望んでいたのよ！

「ソフィー、聞いて！ アタシ、やったわ！ 約束を守ったの！ アタシね、ついに、ついに、この前のジュニアインターハイの公式記録で1m72を跳んだのよ！ 自分の身長以上の高さのバーを跳ぶ事が出来たのよ！！」

「……Promise？」

「ソフィー！？ とぼけないでよ、わかるでしょ！？ 1m72よ、この数字だけでピンとくるでしょ！？ 走り高跳びよ、アタシの走り高跳びのPersonal bestよ！ アタシついに、1m67、自分の身長より5cmも高く跳ぶ事に成功したのよ！」

「……Really？」

「アタシ、ちゃんとソフィーとの約束を守ったのよ！ 日本に旅立つ前にソフィーがアタシにしてくれた約束！ 高校生までに自分の

身長より高い記録を残すって約束！ そしたら、いつか日本に来日した時にはアタシの専属コーチになってくれるって約束！ アタシ、あの日から今まで一度たりとも忘れた事は無いわ！ ソフィーにコーチして貰いたくて、憧れのスーパースターに直接指導して貰いたくて、アタシはこれまでどんなに辛い練習にもずっと耐えて頑張ってきたの！」

「…… a a n . . . O h , n o . . . O h , m y g o d . . .  
」

「そのジュニアインターハイではあと少しで優勝を取り逃がしちゃったけど、ちゃんと銅メダルを G e t して表彰台に立ったんだから！ ねっ、アタシってかなり将来有望なアスリートって感じてしょ？ 高校一年生でこの成績だもん、あと三年もあればインカレで大活躍してオリンピック代表も夢じゃないわ！」

「…… u m m . . . O h , m y . . . O h . . .  
」

「うっん、そこにオリンピック銀メダリスト、『雪の妖精』と呼ばれたソフィーのコーチングが加わるんだもん、アタシ絶対、全日本やアジアどころか間違いない世界の頂点に立って、表彰台の真ん中でこの首にオリンピックの金メダルを掲げる事が出来ると思うの！ 日本人初の陸上競技の金メダリスト、それはアタシの為にあるアタシだけの名誉！ アタシしか手に出来ないアタシだけの勲章！ アタシのもう一つの夢、もう一つの目標！ いいえ、夢物語なんかじゃないわ、これは R e a l よ！ 実現する、実現させるのよ！」

「…… C h i m a t s u , s o r r y . . .  
」

「出来るわ、アタシとソフィー、二人がコンビになれば絶対にこの

夢は叶うわ！ Yes , we canよ！ アタシにソフィーの技術が備われれば、どんな世界のトップジャンパーが相手でも負ける訳がないもの！ そして、アタシは世界のスーパースターになって、ママと一緒に『ミシマ』を世界No.1のトップブランドにしてみせるの！ ソフィーはスーパースター三島千夏を育て上げた世界No.1のコーチングスタッフとして大絶賛されるわ！ ねえ、ソフィー？ アタシと一緒に金メダルを目指そう！ アタシならきつと出来るわ！ そして、ソフィーならアタシを必ず世界の頂点に……！

「Sorry . . . Chimatsumatsu , sorry . . .」

「……？ ソフィー？」

……何で？ 何で謝ってるの？ アタシ、つつい熱くなっちゃってずっと胸の内にしまっていたPassionを解き放って一気に色々と喋っちゃったけど、ソフィーが謝らなければいけない事なんて一つも言っただけは無いわ！ なのに、なのにどうしてソフィーは、落ち込んだ表情をしてアタシに謝ったりするの？ ソフィー、どうして……？

「……Chinatsumatsu , I certainly promised you , but I cannot coach you . . .」

「……えっ……？」

「I regret , but this is my answer」

e r t o y o u . . . S o r r y , s o r r y , C h i  
n a t s u . . .」

「..... W h y ? S o p h i e , W h y n o t ! ?」

..... どうして？ どうしてなの、ソフィー！？ あの時、アタシと  
交わした約束を覚えてくれているのに、どうして『コーチをしてあ  
げる事が出来ない』だなんて言い出したりするの！？ 『これが答  
え』だなんて.....。ソフィーはアタシとの約束を破るつもりなの！？

「S o p h i e , Y o u ' r e a l i a r ! アタシは、ア  
タシは中学の三年間、ずっとソフィーとの約束を守る為に一生懸命  
走り高跳びの練習をしてきたのよ！？ ソフィーみたいな強くて力  
ッコ良くて美しいアスリートになりたくて、アタシはどんな辛い練  
習にも耐えて頑張ってきたのよ！？ 食事や睡眠時間、生活習慣に  
も徹底的に気を配って、例えば1 c m でも、1 m m でも高く跳べるよ  
うに努力し続けてきたのよ！？ なのに、なのに何で、どうして！  
？」

「..... チナツ、ゴメンナサイ、ユルシテ.....」

「..... 許さない、許せないわよ！ アタシ、生まれて初めて本気で  
自分の夢を最後まで諦めずにやり遂げようって気になれたのに、誰  
にも負けない世界一のジャンパーになるって決心したのに、そのア  
タシの姿を見て、ソフィーは喜んでくれるって信じてたのに.....」

「チナツ、キイテ クダサイ！ R e a s o n , リユウ アリマ  
ス！ アナタ ニハ、アナタ ニハ.....」

「No! 言い訳なんか聞きたくない! 嘘つき、ソフィーは嘘つきよ! 大嫌い、ソフィーなんて、ソフィーなんて……!」

「千夏、アナタの声に他のお客様が驚いているわ、座りなさい」

「ママは黙ってて! これはアタシのソフィーの……!」

「いいから座りなさい!」

「……!」

椅子から立ち上がってソフィーに詰め寄るアタシを、ママは滅多に見せない怖い顔をしてキツく叱り飛ばしたわ。そのプレッシャーはさっきのお仕事モードのママより凄まじいもので、アタシはすっかり怖じ気づいてこれ以上何も言えなくなって、静かにスッと椅子に座り直したの。ホント、凄く恐かったわ……。

「チナツ、Me ハ、Me ハ……!」

「ソフィー、もういいわ、ここからはアタシが千夏に説明するから」

アタシの言葉が余程ショックだったのか、ソフィーは涙ぐんで下をうつむき口を押さえて黙り込んだ。そんなソフィーの肩を優しくさすってあげたママは紙ナフキンで口を拭き、興奮するアタシを諭すようにゆっくりと話しかけてきた。

「千夏、ソフィーは何もアナタに意地悪がしたくて『約束は守れない』なんて言い出したんじゃないわ、ましてや嘘をついた訳でもない、ソフィーは本心からアナタと約束を交わした、ソフィーもアナタとの約束をちゃんと守ろうとしてたの、それだけはわかってあげて頂戴？」

「……だったら、だったらどうして？ どうしてソフィーはアタシのコーチになってくれないの……？」

「それはね、千夏？ ソフィーはアナタの事を傷つけたりしたくないから、アナタの事を失望させたくないからなのよ」

「……失、望？」

ママはアタシが知らない来日前のソフィーと交わした会話の内容を丁寧に教えてくれた。その内容とはアタシにとってあまりにショッキングで、まるで『夢』を描いたステンドグラスを粉々に打ち砕く、凍りつくほど冷たい『現実の鉄槌』みたいなものだった。

「……ソフィーはね、まさかアナタがまだ走り高跳びを続けているとは思ってなかったのよ、とつくの昔にやめてしまつて、本気で陸上選手を目指しているとは想像もしてなかったの」

「……えっ、どうして……？」

「ソフィーの来日が決まった頃だったから、今から三ヶ月くらい前だったかしら？ ソフィーにアナタの中学生の時の写真を見せたあ



げた事があるの、その時ソフィーはね、アナタが美しい女性に成長した事を自分の子供のようにとても喜んでいたわ、でもね、その半面『走り高跳びの選手として大成するにはあまりにも背が低すぎる、だからもう千夏は陸上を諦めているに違いない』って思ったそうよ」

「……背が、低い……？」

「千夏、アナタは日本に帰ってくる三年前の頃は、イギリスの同じスクールの同世代の女の子達と比べても成長が早目で身長も高い方だったわね？ 日本の学校に転校してからも、しばらくはクラスの身長順の並び方でも一番後ろだった、そう『だった』わよね？」

「……うん、そうだった……」

「でも、今は違う、今の高校にはアナタよりも背の高い女子がたくさんいるわ、それはなぜかしら？ それはね千夏、アナタの身体の成長がすでにピークを迎えてしまったからじゃないかしら？ ママはそう思っただけど」

「……成長が、止まった……？」

「だって、ママはこの三年間千夏と一緒に遊びに行ったりショッピングに行ったりしてるけど、並んでお喋りしながら歩いている時の目線の高さがずっと変わっていないでしょ？ そう思わない？」

「……確かにそうだわ。この日本に来てから、アタシとママの目線の高さは全然変わっていない。ううん、それだけじゃないわ。良く思い出してみたらアタシが今の学校に転校してきて体育の授業で校庭で並んだ時、隣のクラスで一番後ろの女子生徒だった那奈とはほ

とんど背の高さに差は無かった。

でも、今は那奈とお喋りする時、アタシは少し上を見上げて目線を合わせている。那奈だけじゃない、翔太君に対してもそうだわ。二人ともいつの間にか背が伸びてる。いつも小さい翼と遊んでいた、近くに大きな航ちゃんがいったりしたからあまり気づけなかったけど、アタシは中学から全然身長が伸びていない……！

「多分ソフィーはね、小さい頃の千夏の成長を見て、これからもドンドン大きくなって背が高くなるって期待していたんだと思うわ？だから、あの時アナタに『自分の身長より高く跳べたらコーチになつてあげる』って約束したのよ、実を言つとママも千夏はもうちよつと大きくなるんじゃないかって思っていたんだけどね」

「……じゃあ、ソフィーはもつと高いレベルの成績をアタシに期待していたって事？ たかだか170cm程度の記録ぐらいじゃ全然足りない、力不足だつて事？ アタシには、走り高跳びの世界の頂点に立てないはおるか、競技を続ける資格すら無いって事なの……？」

「……そんな、そんな事無いわ！ どんなに背が低くたって、それをカバーする跳躍力を鍛えれば絶対にアタシは世界のトラックで活躍出来るアスリートになれる！ ソフィーの、ソフィーのコーチさえあれば、アタシは絶対に……！」

「……チナツ、モウ ヤメマシヨウ、M e モ カナシイ デス……」

「……ソフィー……」

ソフィーは涙ながら、アタシにトラック競技選手への道のりの厳しさを、世界の名だたるアスリート達がどれだけの努力と苦労を重ねて生活をしているのかを詳しく教えてくれた。それは、アタシが夢見ていた華やかで優雅な世界とはまるで違う、あまりに受け入れがたい『現実』だった。

スポーツ競技、特にオリンピックや国際大会の舞台などというものは参加国にとって国家力をアピールする絶好の機会。それ故に国の代表選手や育成枠選手に選ばれるには、他と比べて際立った才能と可能性を持っていなければならない。

現在の世界の女子走り高跳びの選手のレベルだと、オリンピックの舞台で190cm以上、少なくとも180cm以上はなければ勝負にならないどころか参加基準記録を超える事すら困難。仮にどんなに素晴らしい跳躍力があつたとしても、自分の身長より約30cmも高く跳ぶ事など人体科学的に考慮してもまず不可能な事。

アタシの現在の身長は167cm。これではとても世界を狙うどころか、アジアのトップ、いや日本国内の大会で目覚ましい記録を残す事も出来ないだろう。将来性の薄い選手に過度な期待をして、あるいはさせて、苦しい無理な練習を続けさせたくない。

だから、わかって欲しい。このまま競技を続けていても、先に待っているのはあまりに辛い現実だけ。こうする事が貴女の為。これが貴女の将来を見込んでの一番のアドバイス、精一杯のコーチ。ソフィーは、声を絞り出すようにそうアタシに説明した。

「……チナツ、ゴメンナサイ、ホント ニ ゴメンナサイ……」

「……………」

涙も出ない。悔しいはずなのに、怒りの感情すら出てこない。何か、体から全てのエネルギーを吸い取られてしまったみたいに力が抜けていく。何も考えられない。目の前が見えない。全部真っ白。

「…………アタシは、アスリートとして該当外…………？」

…………どうして？ どうしてこんな事になっちゃったの？ アタシ、真面目に一生懸命練習に励んできたのに。食生活にも気をつかつてバランス良く栄養摂取してきたのに。どうしてアタシの成長は止まってしまったの？ どうして…………？

「ご馳走様でした」

「あらヤダ、澤村君ったら見事にあれだけの量のお肉平らげちゃったわよぉー！ スゴいわねえ、普段もこれくらいペロリと食べちゃうの？」

「はい、小さい時から父には厳しくしつけられてきましたので」

「しつけ？ 食べる事が？」

「自分は子供の頃、食が細く小さな体でした、しかし、父はそれではとても立派な柔道家にはなれないと、毎日食事量を定めて全てを食べ終わらないと食卓から立つ事を許してくれませんでした」

「エッ！？ 毎日そんな食卓じゃ全然楽しくなかったでしょ？  
むしろ、食べる事がキライになっちゃいそう、食事とは人間にとつて娯楽の一つでもあるのにねえ？」

「確かに楽しくはありませんでした、しかし、毎日三回の食事も自分にとっては稽古の一つです、体を大きくする、日々の鍛錬で消費した体力を回復する、それには例え苦しくとも必要な分の栄養を採る以外に方法はありません、選手と食事は切っても切れない関係にあるもの、ましてや成長期にある人間なら当然の事、適度で楽しい食事生活など自分からすれば勘違いも程々しいお笑い草ですね」

そんなアタシにトドメを刺すように雄弁に語る不細工ゴリラの痛烈な一言。タダの暴飲暴食ではない、全ては計算尽くされたアスリートとしての栄養摂取方法だ、とでも言いたいのか？ アタシの成長が止まったのは栄養バランスなんか考えて適度な食事量に抑えたからだ、とでも？

…… もういい、もういいわ。アタシの負けよ。アタシはもう、自分の事をアスリートだなんて呼べない。だって、ソフィー直々に失格の烙印を押されちゃったんだもん。やっぱり無茶だったのよ、日本人初のコメダルジャンパーになるなんて。そもそも日本人が活躍出来る競技でもなかったんだわ。なのに、大きな口叩いて大それた夢見て……。

『……アタシ、バカみたい……』

こんな事じゃ多分、スーパーモデルになりたい、なんて夢も儚く消

えてしまいそうね。モデルの世界だつて今は身長180cm以上が当たり前なもの、アタシなんかじゃなれっこないわ。結局アタシつて、ママが用意してくれたレールの上しか走れないダメな娘、一つも才能なんて無い落ちこぼれだったのね……。

「うわーん！　ない！　ないよー！」

「無い、無いってうるさいわね！？　もう放つといてよ！　……つて、アレ？」

小さな子供の泣き声がした方に目を移すと、そこにはお店のレジの前で足をジタバタして駄々をこねている女の子の姿があつた。しかも、良く見るとその女の子はアタシがさっき傘にサインをしてあげたあの女の子！

「仕方無いでしょ、盗まれてしまったものは諦めるしかないのよ？　新しい傘ならお母さんが買ってあげるから、ねっ？」

「ヤダヤダヤダ、あのかさじゃなきゃヤダー！　ヤダヤダヤダー！　」

「……盗まれた？　ねえママ、アタシ心配だからちよつと行ってくる！」

「ちよつと千夏！　まだみんな食事中よ！？　待ちなさい千夏！」

ダメよ、放つとおいてなんていられないわ！　だって、あの子はアタシの一番最初のフアンの子だもん！　こんなアタシでも『いつかお姉ちゃんみたいになりたい』って言うてくれた大切なフアンなんだもん！　黙ってなんていられない！

「どうしたの！？　何があつたの！？」

「あつ、おねえちゃん！　かさが、あたしのかさが、わーん！！」

「ごめんなさい、先程せっかくサインして貰ったこの子の傘、外が雨降り出してきたせいか誰かに持つていかれてしまったみたいなんです、傘立てじゃなくて手元に置いておけば良かったんですが、本当にごめんなさい」

アタシに頭を下げるお母さんの言葉にお店のガラス越しに外を眺めると、空はすっかり暗くなって雲が覆って大粒の雨が降り出していた。お昼は晴れていたから傘を持たずに出掛けた人もたくさんいただろうけど、だからと言って他人の傘を勝手に盗むだなんて、しかもアタシの大切なフアンの子の傘を！

「……許さない、アタシ絶対に許さない！　その傘泥棒、アタシがこの手で捕まえてやる！」

「チナツ、Where do you go!？」

「待ちなさいってば、千夏！？」

宛もなくお店を飛び出したアタシは、とにかくがむしゃらになって広いショッピングモール全体を隅々まで駆けずり回り、あの黄色い傘を持っている人を探した。

「…………どこ？ どこに行ったの？」

似たような傘を持つ親子連れを呼び止めては人間違えと謝って、人混みをかき分けながら汗まみれになるもの構わずに全力で探し回った。もうすでにこの場所に犯人はいないかもしれない。でも、アタシは諦めきれなかった。

意地だった。こうもしないとやりきれなかった。自分の気持ちを治められなかった。断たれてしまった自分の夢を追い求めるように、アタシは今まで出し切てなかった努力の全てをこの傘泥棒探しに尽くし通した。そして……。

「…………あつ！」

ショッピングモールの出口の前、ついに背丈とは割の合わない小さな黄色い傘をグルグルと振り回しているモジャモジャ頭の若い男性の姿を見つけた！ アイツが傘泥棒の犯人に違いないわ！

「コラア〜！ 傘泥棒〜！！」

「…………！」



アタシの声にビクツと反応したその男は、こちらの姿を確認するや背中を向けて建物の外へと逃げ出そうと走り出した。これでF i n a l a n s w e r よ、あの傘はあの子の傘ね！

「……待ちなさい！」

出入り口付近で混雑する人の障害を上手く避けながら、アタシは男の後を追った。アスリート失格って言われたって、アタシがこれまで積み重ねてきた練習の成果は伊達じゃないのよ！ 素人相手に負けるもんですか！

「どけ！ どけどけ！ 邪魔だ！ 道を開ける！」

「キャツ！ 危ない！」

「うわっ！ 何するんだ！」

追い詰められた男は他の通行人達を押し倒しながら強引に出口へと進んでいった。アタシの目の前には倒れた人達が五人横一列に並んでその長さの距離は約5 m前後！

「千夏！ このままじゃ人を踏んづけちゃうわ！ 止まりなさい！」

「……ママ、大丈夫！ えっいつ！！」

床に右足を踏み込んだアタシは、思いつ切り勢い良くジャンプして倒れている人達全員の上を跳び越えてみせたわ！ これくらいの幅、アタシからしたらなんて事無いわよ！

「あらまあ、千夏ったら思ってた以上に運動神経バツグンなのねえっ？」

「……Wow、It's fantastic...」

「……ソフィー？」

今度は約5mおきに四つん這いに倒れている通行人の列！ これだつてNo problemよ、歩数を合わせてスピードを落とさずにタイミング良くピョン、ピョン、ピョーンだ！

「Oh、yeah！ Very exciting!!」

いける！ あともう少しで捕まえられる……！ そう思った時、アタシの目の前には男に押し倒された若いお母さんとベビーカーに乗ったBabyの姿が飛び込んできたの！ もう、とても止まれるスピードなんかじゃないわ！

「千夏！ 危なあって！！」

「……！」

とつさの判断、と言うより体が勝手に反応して、アタシはその親子の寸前で踏み切り走り高跳びの要領で背面跳びをしていた。何とか二人を跳び超える事は出来たけど、アタシはまともに床の上にドッスン！

「いったあゝい！ 受け身取ったけど痛いものは痛いゝっ！」

「Wow！ It's Amazing！！ Very very cool！！」

しまったわ！ 倒れていた隙に傘泥棒が出口から外に逃げ出しちゃう！ とても今から走り出して追いつける距離じゃない！ こうなったら最後の手段、一か八かやってみるしかないわ！

「そこのおじさん！ その手に持つてる傘をアタシに貸して！？」

「別に構わんが、一体何をする気だ？」

「いつけえゝっ！……！！」

「……痛えっ！！」

アタシが十分に助走をつけて投げたおじさんの黒い長めの傘は、あと一歩で外に出ようとしていた傘泥棒の足元に命中して、相手は躓いてもつれるようにその場に倒れたわ！ やったわ、見事に成功よっ！

「Excellent!! Chinatsu, you're wonderful!!」

「……よしっ、捕まえた！ この傘泥棒！ ……って、アレ？」

アタシが男を捕まえてその顔を見ると、前にもいつか見た記憶のあるダサい髭面の汚らしい格好のアフロ頭。コイツって、確か……。

「あつゝ！ あの時の電車のバカ男！」

「あつ！ てめえ、あの時のクソ女！」

そうよ、そうだわ！ 中学の時、下校中の電車の中で悪態ついてアタシにケンカ売ってきたB・Boy気取りのダサダサ男！ あれからもう二年近く経ってるのに、懲りもしないでダサい格好してこんな場所にまで出沒してるたなんて、何てとことん迷惑な人間なのかしら！ Unbelievableよ！

「このダツサイ不細工なダメダメ男！ 小さい子供の傘まで盗むなんてどこまで根性が腐ってんのよ！ 返しなさい、その傘を今すぐ返しなさい！」

「うるせえ！ うぜえんだよコラア！！」

「……キャツ！」

男はアタシを力ずくで押し倒すと、持っている傘を振りかざしてバシバシとアタシを叩き出した。アタシがうずくまって頭を押さえても容赦無し。とても大の男が女の子に対してする行為じゃないわ！  
あまりにヒドすぎる！

「てめえのせいであ、俺はあれから学校に呼び出し食らって停学になって、一年余計に留年する羽目になっちまったんだぞ！ てめえがあの時あんな所にいなけりや、今頃俺はお気楽な大学生活を満喫してたっていうのによお！！」

「痛い！ 痛い痛い痛い！」

「千夏！ 逃げて！ すぐにそこから逃げなさい！」

「Hey, you! Stop right now!!」

男の罵声の遠くから、止めに入ろうとしているママとソフィーの叫び声が聞こえてくる。でも、もうダメ。頭まで加減無く叩かれてい

るせい、何か意識がボクッとしてきちゃった。やつぱり美人って薄命だわ、アタシの人生はここで終わりを迎えるシナリオなのね。ママ、こんな親不孝な娘でごめんなさい。パパ、いつもキツくあたってゴメンね。アタシは二人の娘として生まれてきて幸せでした。千秋、お姉ちゃんの分までパパとママをよろしくね。那奈、小夜、翼、アタシ達はずっと友達だよ。みんな、バイバイ……。

「全部てめえのせいだ！ てめえの、てめえの、てめ、て、てえ、痛てええええ！！！！」

「えっ？」

男の断末魔の様な叫び声と共に、アタシを叩く傘の攻撃がピタリと止んだ。恐る恐る目を開けて男の方を見ると、んもおうビックリ！  
だって、男の両足が完全に床から空中に浮いているんだもん！

「つ、つ、つ、つう、掴むなあ！俺の髪を掴み上げるなああああ！」

……髪を掴んで持ち上げられている？ あれ？ 確かこれ、前にも見た事ある風景……？ 更に視線を上げて上を見ると、そこにはあの時と同じように熊がゴリラみたいなバカデカイ図体の人影が……。

「またおまえか」

「何でえ！？ 何でもまたお前までここにいるんだよおおお！？」

「……澤村、一茶……？」

……あの男が、あの不細工ゴリラ男が、アタシを助けてくれた……  
？　　って言うかコイツ、いつここにやってきたの？　　つか、いた  
の？　　さっきから声も気配もしないから全然気づかなかったわ……。

「人の私物を無許可で勝手に持ち出し、我が物顔で利用しようなど  
悪逆無道も甚だしい、貴様はあれから何一つとも学習出来ていない  
様だな、俺はすっかり失望したぞ」

「ま、待ってくれ！　急に雨が降り出してきたから、ちょっとの間  
だけ借りるつもりでいたんだよ！　決して盗むつもりじゃなかった  
んだ！」

「言い残す事は、それだけか？」

「頼むよ！　許してくれ！　俺だって色々あってムシヤクシヤして  
たんだ！　魔が差したんだよ！　悪気は無かったんだ！　頼むよ、  
許してくれえ！」

「仏の顔も三度まで、だが以前、俺は仏ではない、次は無いぞと忠  
告したはずだ、覚悟は出来ているな？」

「いやいやいや！　あんたは俺にとって仏さ、神様さ！　あんたな  
ら俺を笑って許してくれる、あんたはそれが出来る心の広い男だよ  
！」

「ふむ、そこまで言われては俺も悪い気はしない、ならば三度目の正直として見逃してやるのも常識ある賢者としての心得」

「へ、へへっ、そりゃどーも、じゃあ、この髪を掴んでいる手をさっさと離して……」

「しかし、貴様は同時に四度目の重大な過ちを犯した」

「……へっ?」

「それは、男という逞しく誠実でならなければならない身分でありながら、本来守るべき相手であるか弱き女に対し非道な暴力を振るった許し難い愚かな過ちだ」

「えーっ!? そんなー!!」

「男、いや人間の風上にも置けない外道者め、恥を知れ」

「うぎゃああああ!!!!」

次の瞬間、アフロ頭の体は空中でクルリと一回転し、ブチブチブチツと鈍い音を立てながら背中から床に投げ落とされた。一本背負いならぬアフロ背負い。モジャモジャのあの髪は容赦無く引きちぎられ、大の字で倒れる男の頭は見るも無残な逆モヒカン状態になってしまっていたわ。

「千夏! 大丈夫? 怪我は無い? どこか痛いところは無い?」



「……ママ？ うん、大丈夫よ、All right！ これくらい、なんて事無いわ！」

「バカッ！ また無茶な事して！ 千夏に何かあったらママ、ママは……！」

「……ゴメンね、ママ？ お願い、もう泣かないで、ねっ？」

この時、ママがアタシの事を本当に心から愛してくれているんだって確信出来た。この涙は嘘なんかじゃない、こんなキレイな涙は演技なんかじゃ出せないもの。スゴく温かくて、優しい涙。やっぱり、アタシのママは最高のママ。世界一カッコ良くて優しいママよ！

「警官さん、この男です、是非とも厳しい指導を施してやって下さい」

「はっ！ 柔道有段者と思しき見事な背負い投げ、本官非常に感服致しました！ 不審者逮捕のご協力、有難うございます！」

例のアフロ……、いや逆モヒカン男は、騒ぎを聞いて駆けつけてきたお巡りさん達に脇を抱えられて交番に連れて行かれたわ。もう刑務所にぶち込んで二度と出てこなけりゃいいのに。傘で叩かれた場所、ホントはまだ結構痛いんだからね、んもおう！

「おい」

「……何よ？」

「怪我は無いか？」

「ふん、ぜんぜん？」

「そうか、ならいい」

「何よ、それだけ？ 心配するならもうちょっと優しい言葉ぐらい  
言えないのお？」

「言って欲しいのか？」

「ハア？ バカじゃないの？」

「ところで、助けてやったのはこれでもう二回目になるが、  
またもお前は礼の一つすら無いのか？」

「言って欲しいのお？」

「まさか、馬鹿馬鹿しい」

「じゃあ、言わなあい！」

「恩知らずめ、恥を知れ」

「アンタなんか言われたくないわよ、このバカゴリラ！ アンタ  
こそひねくれ者の礼儀知らず……」

不細工ゴリラの売り言葉に仕方なくいちいち相手にしてやっていると、いつの間にか横にこの黄色い傘の持ち主であるあの女の子がニコニコしながらアタシ達の言い争いを聞いていた。アタシの後を追いかけてきたのかしら？

「おねえちゃん、このおとこのひと、かれしー？」

「What! ? No! No, no, no! ! そんなの有り得ない! No wayだわ! 誰がこんなゴリラみたいな不細工男……! !」

「全くだ、こんな下劣で卑猥なチャラチャラ女、こっちからお払い箱だ」

「……チャラチャラって言ったわね? 今、チャラチャラって言ったわねえ!? Oh, shit! Fuck! Fuckin' jap monkey! ! Fuck off! !」

「ここは日本だ、日本語で喋れ、ファッキンビッチ」

「Fuuuuuuuuuck! ! ! !」

でも、傘は無事に女の子の元に返った訳だし、とりあえずはHappy endってところかしらね? 嬉しそうに傘を持ってお母さんと一緒に歩いていくあの子、とってもPretty girlで愛らしかったわ。

「良かったわね、ちゃんと傘が戻ってきて」

「うん！　ねーねーおかあさん、あたしね、おおきくなったらあのおねえちゃんみたいなキレイなモデルさんになって、あのゴリラのつよいおにいちちゃんみたいなおとこのことけっこんするんだー！」

「……でもね、今日のこのお話はこのままHappy endじゃ終わってくれなかったのよ。何がどうしてこうなっちゃったのか良くわかんないんだけど、なぜかソフィーのスイッチがONになったまま元に戻らないのー！」

「Chinatsumi, you're fantastic! exciting! and amazing! You're great! excellent! and perfect!」

「……どうしたの、ソフィー？　そんな力んでアタシの肩を掴んで、さっきはアタシには走り高跳びは無理だって言ったじゃない？」

「Nonnonnonnonnon、チッチッチッチ、タシカニ、チナツハHigh jumpダメムリ、But、チナツニハモットピッタリナGood sportsガアルネー！」

「……アタシに、ぴつたり？」

「チナツ、Meitai Shiyoニ『Heptathlon』ノChampionメザシマショーー！」

「……へ、へ、『Heptathlon』!? No! あんなの嫌! 冗談じゃないわ、絶対にNoよ!」

バカ言わないでよ、あんなメチャクチャな競技やる訳ないじゃない! つーか出来る訳ないじゃない! あんな競技本気でマスターしようとしたら、このアタシの自慢のNice bodyや保険金一億円とも言われたこの脚線美はあつという間に筋肉ムチムチのキモいマツチヨになっちゃうじゃない!?

「へぶたするん、とは?」

「澤村君はホントに横文字弱いのねえ? これって立派なオリンピック競技よ? 『デカスロン』って知ってるでしょ? 『King of athlete』って呼ばれているあの競技」

「男子十種競技の事ですか?」

「正解! ヘプタスロンって言うのはその混合競技の女性版なのよ! 日本語で言うとお、え〜とお……」

「女子七種競技ですね? なるほど、さすがは三島さん、英単語の説明も完璧ですね、全てが中途半端、いやいや平均的な彼女には正に納得の適応競技だと自分も思います」

「全っ然適応じゃないから! アンタはあの競技がどれだけしんどいか知らないからそんな戯言叩けんのよお!!」

だって、二日の間に七つ、その名の通り七種も競技をしなきゃいけないのよお！？　ただでさえ一種でも練習だけでヘトヘトになるっていうのにそれを×7って、アタシ軽く死ねるわよ！？

それに第一、走り高跳びはもちろん、幅飛びやハードル、徒競走や持久走は少しは自信があるけど、砲丸投げとかやり投げなんて絶対無理！　アタシが砲丸投げてる姿、想像出来る！？　出来ないですよ！？　無い無い、絶対有り得ない！！

「Don't worry!　チナツ、Javelin technique　アルネー！　サツキ　ノ　Umbrella throw　ハ　perfectダツタヨー！　Long jump　モ　Hurdle jump　モ　No problem　デース！　Push up　ガ　Weak point　デモ　ゼンゼン　OK　ヨ、Heptathlon　ハ　Point style　ダカラ　Cover　スルコト　デキマース！」

「おかしい、絶対におかしい！　こんな展開有り得ないわ！　しかも何でソフィーがそんなに七種競技に対して熱くなってるのよお！？　ソフィーは走り高跳び専門の選手だったはずでしょ！？」

「No!　Me　ホント　ハ　Heptathlon　athlete　ヲ　メザシテ　タノヨ！　But,　Height　ノビタ　ラ　Running　ゼンゼン　ダメ　ニ　ナツタ、Very　ク　ヤシイワ！　Heptathlon　コソ　Ladies　No.　1　ノ　Sports　ヨ、ゼツタイ　Revenge　シタイネ　！　ダカラ、Me　ハ　Every time　チナツ　ミタイナ　Good　ナ　Generalist　ヲ　サガシテマシター！」

「……嘘、嘘よソフィー！？　ジョークよね？　悪い冗談よね？」



## 第60話 ニシエヒガシエ

日付や時間の単位以上にとても長く感じたゴールデンウィーク三日間が終わり、再び私達はいつも見慣れた学校の風景で顔を合わせた。他の生徒の中には家族と一緒に旅行に行った人間もいれば、休み中ずっと部屋に籠もりきりでテレビゲームをしていた者、もしくは塾に通い勉学に励んでいた者もいたとかいないとか。

そんな連休の過ごし方を自慢、あるいは嘆きに近い口調で友人同士が会話を交わす教室内の空気は非常に活気に満ちていて、何だかんだ言いつつも各自それぞれそれなりに連休を満喫した様子が手に取るようにわかった。学生だって同じ日々の繰り返しは疲れる、たまには気分転換の一つぐらいしないとやってられないのだ。

「でねー、航クンのお祖父さんが泣いて謝ってる時に猫さんがニャーって来てねー、瑠璃ちゃんが『お母さんは近くで見てくれてるから寂しくないよー』って言うてねー」

「……………」

「でねー、航クンもお祖父さんの事を許してあげてあたしもお母さんも遠藤先生も彰宏お兄さんもいっぱい泣いちゃったんだー！その間も猫さんは喉をゴロゴロ鳴らしながらお祖父さんにベタベタ寄り添っていたんだよー！」

「……………あの、あのね小夜？ 連休中に色々あったみたいけど、アンタのその話からじゃ何があったのか全っ然わかんない……………」



「えー、何でー！？ あたしこんなにいっぱい一生懸命説明してるのにー！ ちゃんと聞いてよ、那奈ー！」

連休ですっかり緩んでしまった明け一日目の午前中の気だるい思考回路に、小夜の不可解な暗号じみた『ゴールデンウィークのお墓参り日記』報告は正直ツラすぎる。お祖父さんが出てきて猫がニヤーとか言われても何の事やら全然さっぱり。

小夜の記憶の風景を私の頭の中にダウンロードするには相変わらずデータが解読不能でネットワークエラーが出まくり状態である。そして、小夜の一方的なウイルス込み大容量データ通信は他のサーバーも巻き込み放課後の下校時間でも容赦なく送信されてくる。

「……一生懸命かどうかは知らんがな、相も変わらずオマエの話は支離滅裂で事の順番がメチャクチャ過ぎんねん！ どこから瑠璃の祖父さんが出てきたんかの話も無いし、第一にその猫さんっちゅうんは一体全体何者やねん！？ 墓場に猫ひろしでもおったんかいな！？」

「だーかーらー！ その猫さんは瑠璃ちゃんのお母さんでー、瑠璃ちゃんのお母さんのお墓の前まで案内してくれたのー！ でねー、名前は瑠璃ちゃんと同じ『ルリ』って名前でー」

「待て待て待て待てい！ せやから何でやちゅうねん、何でその猫が瑠璃のオカンになっとんねん！？ オマエはどこまでアホやねんな！？ 猫から人間が産まれてくる訳ないやろがボケエ！ それとも何か、瑠璃は猫から産まれた猫娘でしたー、とでも言いたいんかオマエは！？」

「ちーがーうー！ 全然違うー！ 瑠璃ちゃんのお母さんはお墓の中だけどー、ずっと近くで瑠璃ちゃんと航クンの事を見守ってくれてるのー！ もーう、那奈も翼も人の話を聞かな過ぎー！ だからあたしの話がちゃんと整理出来ないんだよー！？」

「オマエに言われた無いわ、このどアホー！ オマエ自身がオマエの話をちつとも整理出来てへんからこないメチャクチャのグチャグチャで訳わからん話になつとんねや！ オマエだけ自由過ぎんねん、オマエの頭の中はお花畑パツパパーで一年中五月病かいな！？ オイ航！ オマエも一緒にいたんやろ！？ コイツの話をウチらがわかるように翻訳せえや！」

「……………猫さんがフカフカで、とても可愛かったです」

「オマエもパツパパーかいな！？ 辺り一面アホ花咲き乱れてキレイやな、ってアホか！？ オマエらただけでたいねん、ウチらまとめてナメとんのかゴラァー！」

「あーもう、アンタ達がまとめて全員うるさい！ 本当に目障り耳障り、休み明け一発目の登校日ぐらい少しは静かに出来ないの！？」

そこへもってこの小さい米粒みたいなちびっ子の不快な関西弁と甲高い怒鳴り声。珍しく朝はぐったりと居眠りしてて静かだったのに、いざ目が覚めて口を開けば毎度毎度のこの調子。側で聞いているこっちの方が頭痛い。体格が幼稚園児と知能が幼稚園児同士でレベルの低いケンカすんなっつーの！

「……あーあ、せっかく連休で少しはリフレッシュ出来たと思ったのに、初日からいきなりアンタ達子供のお守りでストレス満タン、もう本当に勘弁してよ……」

「ヘッ、何様のつもりやねん？ 偉そうに良う言うで、ええか那奈？ 人間ちゆうんはな、多少ストレスを感じてへんと頭も体もしつかり働かへんように出来とんのやで？ 休みでたるんだ体調を日常通りに戻してあげたんやで、もっとウチらに感謝して貰わんとなあ？」

「あつ、そーだ！ ねーねー、那奈はお休み中に翔ちゃんと一緒に遠くのサーキット場までお出かけしたんだよねー？ どうだったー？ 楽しかったー？ リフレッシュ出来たー？ バイク凄かったー？ 何か美味しいもの食べたー？ それからえーと」

「……あのさ小夜、ちゃんと順番ずつ何があつたか話すから、矢継ぎ早にガンガン質問するのやめてくれない？」

「……確かに、都会から離れて自然の空気を吸えてリフレッシュ出来た事は出来た。ただね、そんな気分を綺麗さっぱり吹き飛ばしてくれるほど現場は嵐が吹き荒れて生きた心地がしなかったってのが本音。奥井親子の登場に会場の人間巻き込んだの大ゲンカに三島勇次朗さんの大噴火に……、今思い出すだけでも胃が痛くなってくる。」

「嘘お、Really!？ 向こうでパパと会ったのおー!? ねえねえ、二人とどんな話したのお？ 那奈は興味無くても、翔太君はパパの話に興味津々でしょ？ ねえねえ、アタシにも教えてPlease?」

「……いや、話すほどの事でも、ねえ翔太？」

「……う、うん、まあ色々、色々ね……」

「何よお？ 何で二人揃ってそんなに歯切りの悪い感じな訳え？  
何か怪しい、い、アタシに何か隠してるでしょ？」

……そりゃね、さすがにこれは千夏には言えないって。アンタのパパがうちのチームの橋本さん達から散々からかわれてプライドをズタズタにされて、トドメは父さんからのあの幼稚で中学生の悪口みたいな手紙によって大激怒して少ない頭髪を暴風雨に晒してただなんて……。

こんな事を実の娘である千夏に喋ったら、ただでさえ三島毛、いやいや三島家で髪が薄い、いやいやいや影が薄い勇次朗さんの人権侵害にもなりかねない。下手したら鬱になって自殺してしまう可能性も拭えない。言えない言えない、無理無理、絶対無理。

「千夏、アレちゃうか？ コイツら、オマエのオトンとか関係無しに、何かウチらに話せへんようなやましい事をしてたんとちゃうか？ 若い二人が都会から離れてお出かけやもん、これはあんな事やこんな事があってもおかしくないでえ？」

「ヤッダァー！ もしかして、開放的な空気と景色についつい心も体も All open しちゃったって事？ イケないわ、まだ高校生なのにそんな事しちゃって、何てイケない悪い Steady 達なのかしら？」

……オイコラ千夏、この恩知らずめ。アンタの父親の名誉を守ってあげたつてのに、何でそっちの話になっちゃう訳！？　また始まった、このご近所奥様レベルのゴシップ妄想バカ話。ちよつとでも私と翔太が一緒に行動したらすぐこれだ。他に話す事はないのかなこの二人は！？

「……またそっち系の話？　全くもう……、あのね、あの日翔太は全日本戦に出場、私は現地に行けない父さんの代理、そんなバカな事してる暇なんか無かったわよ！　何かにつけて変な言いがかりばかりつけるのいい加減にやめてくれない！？」

「そうだぞ！　俺達は何も遊びに行つた訳じゃないんだぞ！？　それに、周りには橋本さんや竹田さんとかチームのみんながいたんだから、変な事なんか出来る訳が無いだろ！？」

「またそっち系？　遊びじゃないんだぞ？　ウヒヒ、良う言つわ、とか何とか言つてやでオマエら、ホンマはこうやってウチらにからかわれたりやきもち妬かれんのが嬉しくてたまらんのやる？　ええなあ、遊びでなくとも一緒におるだけで毎日ラブラブで楽しいんやろうなあ？　ウヘヘ、羨ましいなあご兩人！　なあ、千夏？」

「いやん、もおう！　とっても羨ましくつてアタシったらジェラシービンビンで腰クネクネしちゃうー！　超スゴくない超スゴくない？　超ヤバいって感じー！」

「何よ薰ちゃん！　それアタシの真似のつもりなの！？　全っ然似てない！　最っ低！　ム力つくう、超キモいんですけどぉー！？」

「恋する二人はとっても楽しそうで羨ましいでんがなまんがな〜？  
よし、こうなったら俺達も二人に負けなくらいみんながやきもち妬きまくリングな熱く濃厚なラブラブチュッチュツを見せつけてやろうぜダーリン！？」

「何でやねん！？ キモいインチキ関西弁喋りよつて、オマエは呼んでもへんのにしゃしゃり出でくんや茶髪豚野郎が！ そないな話即行お断りや、頭空っぽのエロエロ変質者め、ウチの半径五メートル以内に近づくなやこのどアホ！」

「う〜ん、エロエロ変質者って言われたってこの薫ちゃんは全然へっちゃらだぜ！ C H A - L A ! H E A D - C H A - L A ! 頭空っぽの方が〜エロ詰め込め〜るう〜」

「近づくな言うてるやろがこのスーパースケベ人！ 変な歌を歌いながらどさくさ紛れてウチに抱きつこうとするなや、いい加減警察に被害届け突き出すぞボケエー！！」

しかし、この連休中の出来事で私達が一番驚いたのは、このクドい夫婦漫才コンビがマジで交際を始めたという話。このまま永遠に一方的な薫のストーカー行為で終わると思っていた関係が、まさか本当に恋人同士になってしまふとは。翼、御乱心？

「翼も隅に置けないわよねえ〜、アタシの知らない内に薫ちゃんとそんなラブラブ関係になっちゃうだなんて、何だかんだ言って所詮翼も恋に夢見るウブな女の子だったって訳なのねえ〜？」

「アホか千夏、ウチを見損なってもらたら困るわ！ こんなラブ

ラブでも何でも無い、タダの無料サンプルお試し期間やで！　こんなどスケベ男を世に放し飼いにしとったら危なくってしゃあないやろ？　せやからウチが責任持ってコイツの身元請負人になってやつただけや！　オマエらを犯罪の魔の手から守ってやつたんやで、少しはこのウチに感謝して貰わんとなあ！？」

「でもさ、俺とつばピーはすでに二泊三日の婚前旅行に行っちゃってたりしてるデイーブな仲だったりするんだぜえ！？　しかも、この薫ちゃんとエロエロ男爵新作お父様とのおっぱい同盟の結束力は世界一、美香ミカお母様やみータンお嬢様からの信頼度も完璧だぜ！　お嬢と旦那コンビなんて目じゃないね、俺達はすでに松本家一家公認の最強ラブラブカップルなのさ！」

「いやあゝん！　まだ二人とも高校生なのにお泊まり旅行だなんてスツゴいスキヤンダル！　イケない、イケないわ！　何てイケない二人なのかしらあゝん！」

「アホかボケエ！！　コラ薫、オマエ適当な事ばかり言うなや！　あん時はウチら以外にも綾や岬も一緒におったやないか！　しかもあれは旅行とちゃう、オトンが隠した宝物を探しに行っただけやろが！　勝手にオトンやオカンの名前まで出しよって、何がお父様お母様やねん！　キシヨい言い方すんなやボケエ！」

「……でもまあ、これでめでたく翼は私と翔太の事をいちいち茶化したり出来なくなった訳だ。コイツには今まで散々からかわれてきたからね、後々その分はきつちりと仕返しさせて貰う事にしますか。女同士の恨みは怖いよ、ムフフ……。」

「まあ、な、アレや、そないな事よりウチはこの前凄いスクープを手に入れる事に成功したんやで！ オマエら気になる？ 聞きたい？ 聞きたいやろ？ そこまで言われたらしゃあないなあ、そない聞きたいならそっちの話しようか、なあ？」

「……別に？ 何だったらこのまま、おのろけ話を続けて貰っても私は構わないけどね、ププツ……」

「グダグダニヤニヤうつさいねん那奈！ オマエは四半世紀、いやいや丸々一世紀黙つとけや！！」

あらまあ、随分と必死ですねえ翼ちゃん？ あー、いい気味だわ。これこそ正に因果応報つてヤツよ。人様の恋バナは蜜の味、しばらくはこの話だけでご飯三杯いけそうな気がする。スッゴくメシウマです、ププツ……。

「……ううんっ！ まっ、気を取り直して改めてやけど、そのスクープリッチゅんは、この学校の体操着が次の学期から全面リニューアルされるって話なんや！ 何か全国の小中高で公認される前の試験的採用だとかで、その機能は一流のスポーツ選手も納得の出来映えになってるらしいで！？ 職員室で先生達が立ち話してたのを聞いた話やから、間違いのない確実な情報や！」

体操着が全面モデルチェンジ？ へえー、年度中に変更するだなんてあまり聞いた事の無い珍しい話。余程その体操着には教育関係機関まで参加した一大プロジェクトでもあるのだろうか。どこのスポーツメーカーだろう？ ミ○ノ？ アシッ○ス？ それでも外資系



のナ○キやアディ○スかな？

「なあ千夏、オマエやったらあのオカンを通じて色々と情報が入ってくるんとちゃうか？ 何か知ってる事があつたらウチに教えてゝな？」

「……知らない」

「……ハア？ 何で急に不機嫌になつとんねん？ なあなあ、せやったらオマエの裏ルート通じて、何とかその体操着のカタログとか上手い事手に入らへんかな？ ウチかて立派なスポーツ選手や、こういう話は気になってしゃあないしゃあない……」

「I don't know!! 知らないつたら知らないわよ！ カタログなんかある訳無いでしょ！？ あつたつて絶対に見せない！ んもおうこの話題はノーコメントよ、Shut up!!」

「せやから何でキレてんねん！？ さっきまで『いやあゝん！』とか言つてニヤニヤしとつたクセに、アイドンノウなのはこつちの方やで？ オマエ何か変な動物の肉でも食つたんとちゃうか？」

「Noooo!! Don't touch me!! Shut the fuck up!! Fuuuuck!!!」

「アカン、コイツもパッパカパーや、もう訳がわからへんがな」

そういえば、この連休中に千夏は一体何をしてたんだろう？ いつもはしつこいくらい自分の話をしたがるこの女が、まるで腫れ物に

触られるのを嫌がるように一切深い追求をシャットアウト。一週間前は『アタシの時代が来たわ!』とか『これで世界のトップモデルの仲間入りよ!』なんてはしゃいでいたはずなんだけどなあ……?

「新しい体操着か、なあ一茶、同じくスポーツ選手であるお前もさすがにこれは結構気になるんじゃないか? 授業や部活で毎日着るものだしさ、一言運動着と言っても機能だけじゃなくてデザインとかも色々……」

「全然」

「……あつそう、相変わらず無頓着だな……、あつ、そっぴや確か一茶は連休中に大会用の衣装を作りに行くって言ってたよな? どうよ、どんな感じ?」

「翔太、お前投げ飛ばされたいのか?」

「……何でそうなるの? 俺、何か悪い事言ったか?」

深く追求されたくないのはどうやらもう一人いるようだ。何か朝からこの犬猿の仲コンビは他を寄せ付けないくらいピリピリとした空気を周囲に振りまいている。どうやら各自それぞれがそれぞれ、訳あり気な連休を過ごしていたようだ。

『……まあ、みんなもう高校生だもん、それぞれ色々難しい問題を抱えてるって事かな……』

「……ねーねー、那奈……」

「……ん？」

私がそんな事を考えていると、いつの間にか小夜の小さい手が上着の裾を掴んでクイクイ引っ張っていた。何やら酷く怯えて心配そうな表情をしている。

「……さっきからね、木の後ろに隠れてこっちをジッと見てる人がいるよー？ 何か怖い、怖いよー！」

「……えっ、どこ？ どこから？」

小夜に言われて私達全員が後ろを振り向くと、こことは反対側の校門に通じる下校路の路樹の影に隠れてこちらを恨めしそうに見つめる女子生徒が一人いた。その視線は非常に殺気立っていて、小夜どころか私すら恐怖を感じる身の毛のよだつものだった。

「……あれって、綾だよね……？」

「こっちをスゴい見てるでしょー？ どうしてあんなに睨んでるのかなー？」

「ヤダア、怖あーい！ 何か翼と薫ちゃんの事を睨んでる気がしない？ まるで心霊写真よ、アレ？」

「……あのアホ女、何しとんねん……？」

何やらそのまま木に藁人形でもくくりつけて釘を打ち出しかねない異様な雰囲気だ。しかも良く見ると、小さな声で何かブツブツと呟いているのか口元が小刻みに動いていた。口の動きを読み取って言葉にしてみると……。

『翼は私のもの、翼は私のもの、翼は私のもの……』

……何なの、アイツ……？

「……あのオーラは正しく嫉妬の怨念、人を呪い殺す悪魔の呪文……」

「……なあ薫、お前まさか綾ちゃんにまで何か変な事したんじゃないだろうな？」

「ノンノンノンノン！　してね〜ツスよしてね〜ツスよ！　ちよつと風呂入つてるところを覗いただけでな〜んにもしてね〜ツスよ！　翔太の旦那も航先生も人聞きが悪いツスよ……！」

「それって十分してるだろ……！」

「ねえ翼、綾と連休中に何かあったのぉ？　あの子、絶対変よぉ？」

「……気をつけときや千夏、オマエもアイツの怨念の対象になつて  
るみたいやからな……」

「Why? どおしてえ?」

……怖い。怖いよ、吉田綾。一体何がどうしたのか? 影が薄かつた人物像だったとはいえ、この先コイツは一体何キャラに変貌するつもりなんだろうか? ちょっと不安……。

「那奈、那奈! 今度は逆から変な人が走ってきたよー!?!」

「もう何なのよ!? お次は何!?」

「チナツ、I found you! マタ アエマシタネー、Me Ha Chou Happy デース!!」

「嘘っ! 何でソフィーがここにいるのよお!?!」

今度は片言のオモシロ日本語が聞こえてきた方向に目をやると、やたらと背の高い女金髪外国人が全力でこちらに向かって猛ダッシュしてきた。その姿を見た千夏は怯えながらその外国人さんとの間に私達を挟んで盾にしながら周りをグルグル。何ナニなんなの何事なのこれは!?

「Me Ha チハル ニ オネガイ シテ、コノ School  
ノ Special coach ニ ナルコト デキマシター!

コレデ Every day チナツ ト Olympic メザ  
セルネー！」

「Oh, my god! 冗談じゃないわ! ママったら、何て余  
計な事をしてくれるのよお!？」

「チナツ、イマカラ Me ト Together デ、Hept  
athlon ノ レンシュウ シマショー! コレカラ ハ チ  
ナツ ト Man-to-man デ ビッビシ Coach  
シテ アゲルヨー！」

「Noooooooooo!! 嫌あ、嫌いやイヤア、絶対に嫌あゝ  
!! 女子七種なんてアタシ、絶対に嫌あゝ!!」

「チナツ、Wait! ゼツタイ ニガサナイ デスヨー!!」

ソフィーとか言うデツカい外国人さんに追われながら、千夏は全力  
疾走で校舎の中へと戻りそのまま姿を消した。残された私達はただ  
その場に茫然。何これ? どういう展開なの? 全然状況が把握出  
来ないんですけど……?」

「……誰なの、あの面白外国人は……?」

「千夏大丈夫かなー? あの人に食べられちゃったりしないかなー  
?」

「……多分大丈夫とちゃうか? もうしんどいわ、千夏は放つとい  
て早よ帰ろつや? さっきからもう背後からの綾の視線がメチャク

「チャ寒いねん……」

ここは翼の言う通りだ。他人の話までいちいち付き合ってられない。私は私でこの後家に帰ってからしななければならない事がある訳だし、後は各自でどうぞご勝手に。もうさっさと帰ろう、私も本当に疲れちゃったよ……。

「おっと、悪いが俺は今日から柔道部の活動に参加するのでもう一緒に帰れない、まだ本格的な稽古こそ出来ないが、色々と迷惑かけた分用意や片付けの手伝いくらいはしなければならぬからな」

「日本柔道界希望の星も一年生新部員恒例の雑用係は避けられないって訳か、一茶も色々大変だな、また怪我しない程度に頑張れよ」

「お前もな、翔太」

「部活で青春一本道も良いけど、一茶親分もたまには息抜きしないとこの薫ちゃんみたいにラブラブでウキウキなハイスクールライフを満喫出来ませんでせえ？ やっぱ青春に恋愛はつきもの、野郎同士で寝技ばかりしてたらヤバイ世界に目覚めちまいますぜ？」

「余計なお世話だエロ河童、サノバビッチ」

「オーマイガー」

色々ありながらもやっとこさ学校から外に出ていつもの下校路へ。しかし、その間も相変わらず小夜からは解読不能な暗号じみた謎の

お墓参り報告が次々と送信されてくるわ、その後ろではちびつ子と変態ストーカーがどうたらこうたらやり合っているわで、千夏と一茶がいなくて少しは静かになるかと思っただ私の見通しは見事に粉碎されてしまった。この時私は将来、絶対に保育士にはなりたくない」と心に誓った。

このベビーシッター地獄から私がやっと解放されたのは見慣れたいつものあの駅に到着した頃。ここで毎日小夜と翔太以外のメンバーとはバイバイになるのだが、今日は小夜も電車に乗って航と一緒に遠藤医院に行きたいと言い出した。その目的はもちろん瑠璃と遊ぶ為と、そろそろ出産予定日を控え産婦人科への入院が近くなってきた麻美子に会う為だろう。

「麻美ちゃんにはいっぱいお話してあげたい事がたくさんあるんだよー！ 瑠璃ちゃんのお祖父さんの事とか、彰宏お兄さんのズッコケ話とか、色々教えてあげるんだよー！」

「……まあ、別に良いけどさ、あまり麻美子の体に負担かけない程度で帰ってきなさいよ？ もう随分お腹も大きくなってきた事だし、無理矢理外に連れ出して引きずり回したりしたら絶対駄目だからね！？」

「ハーイ！ ダイジョブダイジョブー、ダイジョブダイジョブー！  
じゃあ、行つてきまーす！」

「……アンタの『大丈夫』が一番大丈夫じゃないんだよね……」

まるで台風一過のように静かになった下校路、気がつけば私の横には翔太が一人だけ。お陰で随分と雰囲気は落ち着いたけど、私は別



の意味でいまいち気分が落ち着かない。特に二人揃って無言になったりすると妙に焦ってしまう。何かしら話題を見つけないと息苦しくなってしまう自分がいる。

「……親父さん、沖縄から帰ってこないな、連休明けには戻ってくるって言ってたのに……」

「……うん、そうだね……」

「……向こうで何かあったのかな？ 電話の一本すらかかって来ないし、さすがにちよっと心配になってきちゃったなあ……」

「……父さんの事だから、どうせどこかで寄り道とかして遊んでるんじゃない？ わざわざ心配しなくてどこかで野垂れ死ぬような人間じゃないよ……」

「……まあ、そりゃそうだけどもさあ、逆に人を殺したりして向こうの警察の厄介になってなきやいいんだけど……」

「……翔太、それマジでありそうで全然笑えない……」

どうしてもまだきこちなくて、上手く関係が保てないでいる私達をさらに追い立てるように、この連休中ずっと父さんが不在の状態。そして、お姉も大体この時間は滅多に家にはいない。つまり今、家に帰れば私と翔太の二人きりになってしまうのだ。

正直今、私は迷っている。このまま帰っちゃっていいのだろうか。いくら今までずっと一緒に同じ家で暮らしてきたとはいえ、もう私達はお互いの気持ちを伝えあってそれを認め合った恋人同士の仲。

そんな二人が他に誰もいない空間に閉じ込められてしまったら女子として困ってしまう事がたくさんある。

つまり私が言いたいのかと言えば、まだ何事にも経験の浅い若い男女が恋人同士であるという事は、そこには色々と言えないうる役目の大人がいけないという事は、二人は若気の至りの余りにイケない過ちを犯しかねない訳であって、だからつまり、その……。

「……あれ？　おい那奈、親父さん帰ってきてるみたいだぜ？」

「……へえっ？」

……そんな私のバカな妄想を粉々に粉碎するように、大通りの曲がり角から見える自宅の玄関の前には父さんがいつも使っているカブのバイクが停まっていた。帰ってきちゃったのか、うーん、何かホツとしたような残念なような複雑な心境……。

「……おっ、お二人さん、揃ってお帰りかい？　相変わらず仲のよろしい事で」

「あれ？　優歌さん？」

「へえー、こんな時間帯に珍しい、お姉もいたの？　何か事件でもあったの？」

「あたしが家にいるだけで一大事かよ、ひでえ扱いだな、オイ」

私達が玄関前まで辿り着く寸前に、家の中から外に出てきたお姉とバツタリ巡り合わせになった。まさかお姉までここにいるとは予想外、今日はジムの練習は休みなのだろうか？

「優歌さん、今からどこか行くんスか？」

「おう、酒のつまみが無くなっちゃってな、虎太郎ちゃんから直々にパシリ使命だよ、さすがのあたしも虎太郎ちゃんの命令には逆らえねえからなあ」

「こんな真つ昼間からお酒？ 父さんが飲みたいって言い出したんでしょ？ あーもうだらしないなあ、家族の一員としてみつともないったらありやしない！ お姉も一緒になって飲んでないでちゃんと父さんを止めてよ！？ こんな事ご近所に知られたら私達まで笑いの扱いされちゃうじゃない！」

「まあまあ、堅い事言っなって、何もリクエストしたのは虎太郎ちゃんだけじゃないんだぜ？ 何せ今日の渡瀬家はカーニバルアーンドフェスティバルだからなあ？」

「……ハア？ カーニバル、アーンドフェスティバル？ 何それ？」

「まあまあまあ、おめーらも家の中に入って祭りに参加すりや嫌でもわかるさ！ すっげー事になってるぜ、おめーらビビって腰抜かすぜ！？ ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ！」

何やら意味ありげな捨てゼリフを残すと、お姉はニヤニヤしながら

ジーンズのポケットに両手を突っ込んで駆け足で近くのコンビニに向かっていった。リクエストは父さんだけじゃない？　どういう事？　誰か他にいるの？　お客さん？　父さんの知り合い？　啓介さん新作さんの二人は有り得ないし、じゃあバイク仲間の橋本さんあたりかな……？

「……あるいは、もしかしていづみさんかな？　小夜の帰りが遅くなるのがわかって、真中家からあづみさんも遊びに来てるとか……？」

「まさか！　母さんが帰ってくるにはまだ時間が早過ぎるだろう？　それに、母さんがいれば真っ昼間からお酒なんて絶対に許さないだろうし……」

確かに、いづみさんが仕事から帰ってくるにはあと一時間くらい後の話になるだろうし、それに第一、いづみさんはまだ精神安定剤の薬を処方されていて医者からお酒を止められているはず。翔太の言う通り、父さんがお酒飲みたいだなんて言い出したら間違はなく大反対するだろう。じゃあ、今この家の中で父さんと一緒にいるのは一体誰なの！？

「……翔太、そーとね、そーと……」

私達は中の人間に気づかれないようゆっくり音を立てず玄関のドアを開けてみた。耳を澄ませて聞こえてくるのはどうやらテレビの音、人同士の会話の声は何も聞こえてこない。しかし、室内から異様な

ほど凍えそうな冷たい空気がこちらにまで漂ってくる感覚を覚えた。

「……何、この空気……？」

恐る恐る隙間から家の中を覗くと、そこには一人がスッポリ入ってしまいそうな大きなアタッシューケースが二つ。いつかどこかで見た事のあるそのケース、私達がそれを思い出すのに時間はほとんど必要なかった。

「……おい、那奈、これって、まさか……！？」

「……あの人が、あの人が今ここに……！」

想像すらもしていなかった予想外の仰天事实に、私と翔太は慌てふためきそのまま玄関前に尻餅をついて顔を見合わせた。確かにビビって腰が抜けそうになった。お姉の言ったカーニバルアードフェスティバル、まさかこんな事だったなんて。これはお祭りどころか私達が血祭りになっちゃうってば！

「……俺、母さんから何にも聞いてないぞ！」

「……私だって、父さんやお姉から何にも聞いてない！」

「……またアポ無しで抜き打ち帰国かよ！？」

「……もう本当、いい加減にして！」

「……何で!？」

「……何で母さんがここにいるの!？」

一難去ってまた一難、先程の騒ぎはこの天変地異の大嵐の前触れに過ぎなかったのだろうか？ 黒船襲来。この家の中に、間違いなくあの氷の女王、私の母・渡瀬麗奈がいる。あの冬の雪合戦の日以来の凱旋帰国。西の猛虎、東の麗龍、今ここに揃い踏み！ 風雲蠱く怒涛の急展開、私達の緊張は一瞬にしてピークを迎えた!!

## 第61話 Monster

「……ねえ、どうするの?」

「……どうするって、何で俺に聞くんだよ?」

「……女にこんな事決めさせないでよ、男でしょ?」

「……そんな事、いきなり言われてもさ……」

「……ねえ、翔太が決めてよ?」

「……俺が、決めちゃっていいの?」

「……うん、いいよ……」

「……那奈は、後悔しない?」

「……うん……」

「……じゃあ……」

「……じゃあ?」

「……このまま待機!」

「もう! 埒が明かなーい!」

学校から家に帰宅してから早や十分、私と翔太は未だに『恐怖のホラーハウス』に入る覚悟が出来ないまま、玄関の扉に背中をつけて体育座りをして青空を見上げて途方に暮れていた。

家の中にはほぼ確率的に血に飢えた悪魔が二匹、私達の帰りを今か今かと待ちわびている。しかも、お姉の話ではすでにかなりの量のアルコールを摂取している模様。非常に危険、危険過ぎる状態にある。

今の私達の心境を他で例えるならば、古代ローマのコロッセオで野獣の檻に押し込められた奴隷の様だ。この先に待つのは自由か地獄か、生か死か、行くべきか行かざるべきか、正に瀬戸際。今、私達は究極の選択を突きつけられているのだ。

「そろそろいい加減、翔太も覚悟を決めたらどうなの！？ 私達、このままずっとここにいてる訳にもいかないんだよ！？ アンタがヘタレなのは百も承知だけど、ここは男らしく私を庇って先陣切つてよ！」

「おいおい、勘弁してくれよ！ そう言う那奈は親父さんと麗奈さんの実の娘だろ！？ だったら二人の事を何もそんなに怖がったりする必要無いじゃないか！？ ここは那奈が仕切って先に家の中へ入ってくれよ！」

「バカッ！ あのね、言わせて貰うけど私は別に父さんと母さんが怖い訳じゃ無いの！ 酔っ払ってベロベロになってる父さんならいつも介抱して慣れてる事だし、母さんだって本来は話をすればちゃんと通じる真人間だから、お互いへの個人個人の対応なら何の問題は無いの！ ただ、ただね……」



……私が足先の指まで震え上がるほど恐ろしいのは、この家という限られた狭い空間の中に、顔を合わせたらこの地球上で天変地異が起こり世界が滅亡するとまで言われている渡瀬夫婦が共存しているって事！

すでに激突が起こり内部では次元の法則が乱れ空間の崩壊が始まっているならいざしらず、ゴキブリ一匹でさえも生存出来ないほど冷たく凍りつき、無の静寂が広がるこの室内の状況はとても尋常じゃない！

触らぬ神に祟り無しじゃないけど、とてもこの空間に普通の人間は入り込めない！　どんなに気密性抜群の宇宙服でさえも、あつという間に押し潰されてグシャグシャになるに違いないってば！　いくら何でも私、そんな命知らずな勇者には絶対になれないから！

「じゃあ、俺はこの圧力の前に犠牲になってグシャグシャに潰れちまえて言うのかよ！？　あんまりだぜ那奈！　お前は自分が助ければ俺はどうなってもいいって事かよ！？」

「命懸けで女を守るのが男の役目でしょ！？　情けないよ翔太、そんな事じゃ私、この先とても翔太にはこの身を預けられない！　翔太の事を心底から信用出来ないよ！」

「いやいやいや、男女の問題の前に那奈の方が間違はなく俺より全然強いじゃん！？　むしろ助けて貰いたいのは俺の方だって！　さすがにあの二人も血の繋がった実の娘相手なら多少加減をしてくれるだろうけど、居候の俺は百パーセント血祭りにされるのが目に見えてるって！」

「あーもう、本当に埒が明かなーい！ 早く自分の部屋に戻ってー休みしたーい！」

……それからさらに五分経過。状況は何一つ改善せず、ただ空には白い雲がこちらの苦悩など知らず存ぜぬの顔をしてのどかにプカプカと漂っていた。日差しは時より雲に覆われたりするものの、至って日当たり良好である。

肝心の家の中からは未だに物音一つせず、この扉の向こう側はブラツクホールか、あるいは何か未知の空間に通じているのかと錯覚してしまうほど静かで気味が悪かった。

「もう限界！ 失望した！ どこまでヘタレ男なのアンタは！ 今更実の娘も居候も関係ないでしょ！？ 翔太だつて一体何年この家に住んでるのよ！？ もうほとんどみんな家族同然みたいなもんなんだし、それにいつかは私と翔太も本当の家族に……」

「……えっ？」

「……あつ、いや、あの……」

「……本当の、何？」

「……だ、だから、翔太だつて、私と本当の家族になるかもしれない訳だし……」

「……そりゃ卑怯だよ那奈、参ったなあ……」

……カッとなりすぎて、またつい本音が出てしまった。さっきまでの口論も忘れ、私も翔太もすっかり真つ赤になって俯きモード突入。私のバカ。一日一回はおろのけないと気が済まないのかなあ？

……はい、そうです。みつともないけど認めちゃいます。翔太と一緒にモジモジしてる時間が、実は最近とっても好きだったりします。チラリと横目で翔太を見ると、頭を掻いたりして必死に照れ隠ししてる姿がちょっと嬉しくて……。

「……いつか、いつかの話だよ？ 私と翔太が、その、家族になるって時は、翔太には勇気出して貰って父さんと母さんにちゃんと挨拶してくれないといけない訳だし……」

「……う、うん、まあ、そうだけどさ……」

「……私がどんなに強いって言っても、やっぱり私は女だし、男の人には守って貰いたいって思ってるし……」

「……うん、わかってる、俺もそうであるべきだって思ってる……」

「……本当に？ 私、本当に翔太の事、信じていいの……？」

「……うん、そうだ、そうだよな？ 俺だって男だ、よしつ、決めたよ！ 俺が先に中に入る！ 那奈は後をついてきてよ、俺を信じてくれ！」

「……翔太……！」

「……でも何か、何だかなあ？ 何か最近それを餌に上手い事言い

くるめられてような気が……、もしかして、尻に轢かれてるってこういう事を言うのかな？」

「何が？ 何か不満？」

「……いや、何でもないです、タダの独り言です、はい……」

……何か、ちょっといい感じ。嬉しくて切なくて、ドキドキする幸せの一時。でも、ちょっと怖くもある。少しずつ翔太の体がこちらに座ったまま擦り寄ってくるのがわかる。手が触れて、肩が触れて、気づけば真横からは翔太の息遣いが聞こえた。

「……じゃあさ那奈、俺、頑張るから、その前に俺に少し勇気をくれよ……」

「……えっ、何よ急に？ どうしたの、翔太……？」

「……いいから那奈、こっち向いて、俺を信じて……」

……うわっ、嘘うそウソ！ 嘘でしょ！？ 翔太は絶対に今、私にキスしようと考えてる！ どうしよう、いきなりそんなの困るよ！ 突然の事で体が動かない。手と膝で顔を隠して首を横に振る事しか出来ない。きっと今、顔を上げて横を向いたら、私はもう自分の気持ちを制御出来なくなっちゃう……！

「……俺、絶対に那奈の事を守るから、だから……」

「……ダメだよ翔太、父さんと母さん、家にいるんだし……」

「……お願いだよ那奈、顔を見せてよ……」

「……じゃあ、ちょっとだけ、ちょっとだけ、だよ……?」

押し潰されそうな感情を堪えて顔を上げて横を向くと、もう目と鼻の先に翔太の顔があった。顔がどんどん近づいてくる。あと五センチ、四センチ、三センチ……。ああ、もう近づき過ぎて何も見えない。自然に瞼が閉じていく。私と翔太の距離、あと一センチ……。

「なあーにおめーら昼間っからシッポリしてんだよ? いやらしいなあ?」

「……う、うわあああああああ!?!?!」

「ウツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤー!!! おめーら愛しの優歌お姉様のお帰りさ! お楽しみのところをお邪魔して悪いね悪いね、ウツヒヤッヒヤー!!!」

しまった、油断した! 止めどなく甘く淡い時間を粉々に打ち碎くように、恐るべき三匹目の悪魔が憎たらしいほどのしたり顔で私と翔太の目前に顔を肉迫させていた。すっかり忘れてた、家の中で待つ鬼はおるか、まさか反対側から追いつてくる蛇がいた事を!

「オイおめーら、今、自分達の家の玄関の真ん前で何をやらかそうとしてたんだ？ トローンとウツトリ目ん玉瞑っちまってよ？ オイ那奈、おめー今、翔太と何しようとしてたかあたしに言ってみよ？」

「……あ、あの、お姉、これは、その……」

「グヒヒッ、おめー顔真っ赤だぞー？ なぁ翔太、おめーは男だから女を守ってやるって言ってたよな？ 那奈がモジモジして困っちまってるぜ、おめーが代わりに答えてやれよ、今、何しようとしてたんだ？」

「……いや、優歌さん、それだけは勘弁して下さい……」

「ハア？ 何だとコラ？ この優歌様がそう易々と勘弁してやるのも思ってたのか？ おめーだってちゃんとチ○コついてんだろ？ だったら気合い入れて正々堂々言ってみろってんだよ、何しようとしてたんだ、あぁん!？」

「……、しようと……」

「あん？ 聞こえねーな!？ チビチビ言ってるでしっかりデカい声で言えやゴラァ！」

「……キス、しようと思いました……」

「……バカッ！ 翔太のバカー!!」

「ウツヒヤッヒヤッヒヤッヒャー！ キスカ!？ おめーらここでキスしようとしてたのか!？ 誰がどこで見てるかわからねー野

外で口吸い行為かよ！？　とんでもねえスケベだなおめーらは！？  
お姉様はビックリ仰天で腹が擦れちまうぜ、ヒャッヒャッヒャッ  
ヒャッヒャー！！」

「……お姉！　近所の人にまで聞こえるでしょ！？　恥ずかしいからもうやめてよ！！」

「いやいや、お邪魔仕って申し訳なく候、ささつご兩人、拙者にはお氣遣いなくどうぞ思存分お好きにだけブチュブチュして戴きたく候、ついでに翔太はアッチも早漏？　なんちゃって、ウツヒャッヒャー！！」

「お姉！！」

私の懇願など聞く耳持たず。半径三十メートルまで響き渡るほどの大音量で爆笑するお姉の暴挙は止まる事を知らない。散々笑い飛ばして一息つくと、今度は馴れ馴れしく私達の首に両手を回して強引にヘッドロックをかけてくる。

「……ところでよ、何でおめーらは家に入らないでこんな所にいるんだよ？　ちゃんと虎太郎ちゃんと麗奈ママには帰ってきた事を報告しているんだろうな？」

「……いや、まだだけど……」

「……親父さんと麗奈さん揃い踏みって、ちょっとあまりに怖すぎて……」

「ああん！？ 怖えだと！？ おめーらナメた事ぬかしてんじやねーぞゴラァ！！ 何事も無く無事に学校から帰宅した事をイの一番に親に報告すんのが子の勤めだろうが！？ この親不孝者どもめ、ちよつと来い！！」

あれほど二人で開けるのを拒んでいた異世界への扉を、お姉は何の躊躇も無く全開にして力づくで私達をその中に連れ込もうとし始めた。こうなってしまうてはもはやどんな抵抗も無駄というもの。私と翔太の命運、ここに潰える。

「どうせブチュブチュすんならよ、是非とも愛する両親の目の前で舌も絡めた濃厚なフレンチキスでもかましてやれよ！？ 虎太郎ちゃんと麗奈ママはきつと、おめーらの立派に成長した姿に涙流して喜ぶぜー！？」

「その涙はきつと喜びの涙じゃないって！ 第一、そんな事したら絶対に私達二人ともまとめて殺されるってば！！」

「旦那様ー！ 奥様ー！ 可愛い可愛いお嬢様と婿殿のお帰りどすえー！ どうか目一杯の愛情でお出迎えなさって下さいましー！？」

「さっきから何なのその喋り方は？ 一体何時代の人間？」

「うつせーな、グズグズ言ってねーでさつさと家の中に入りやがれこのクソバカ腰抜け野郎どもオラオラ」

玄関から廊下、そしてリビングへ。お姉に首根っこを掴まれたまま



抵抗虚しく私達二人はまるでボロ布同然に引きずられて床の上に投げ飛ばされた。顔を上げて周りを見渡すと、そこにはテーブルに向かい合って椅子に座りテレビを眺めるあの二人の姿が。

「……あわわわ、やべーよ那奈、マジで親父さん麗奈さん揃い踏みじゃん……！」

「……や、やだ、ちよつと翔太、しがみついてこないでよ！ 何で私の後ろに隠れてんの、ちよつと！」

このツーショットは私がこの世に生まれた時にその手に抱かれこの目で初めて見た懐かしく微笑ましい光景のはず。しかし、今の私にはその二人の姿は寺院の門に左右対で並ぶ仁王像の様にしか見えない。実の両親だというのに、いつから私の脳裏にはそんなイメージがついてしまったのだろうか。

「じゃあ、あたしはこれで部屋に戻るから、後はよろしくなご兩人！ 久し振りに親子水入らずで有意義な時間を過ごしてくれよな！」

「ちよ、ちよつとお姉！？ 私達だけここに置いて行かないでよ！ 待つてよお姉！？」

「おっーと、そうだそうだ忘れるところだったわ、これこれ、御注文の品だ、二人に渡してやってくれ」

「……何これ、あたりめにビーフジャーキー……？」

「んじゃ、そこんとこよろしく！」

「お姉ー！？」

お姉は言う事だけ言い済ますと乾き物二袋を私達に投げ渡し、リビングの扉をボタンと閉めてさっさと一人だけ二階の自分の部屋へと避難してしまった。何て薄情な人間だろうか。私達はまんまとここにいる地球上最凶の野獣二匹の生贄にされてしまった訳だ。

正に絶体絶命。これだけ周りで大騒ぎしているというのに、当の二人は背を向けテレビの画面を見たままちつともこちらに振り向いてはくれない。しかし、こちらに気づいていない訳が無い。その意味あり気な謎の沈黙が更に私達の恐怖心を引き立てる。

「……あ、あの、父さん、母さん、ただいま……」

「おう、お帰り」

「お帰りなさい」

「……親父さんも麗奈さんも、お帰りなさい……」

「おう、ただいま」

「ただいま」

二人、未だこちらに振り向かず完全に背を向けたままで言葉少ない最低限の返事のみ。怖い、怖すぎる。十五年間生きてきた私にとっ

ても全くの未知の領域。いつもの父さんなら私に対してセクハラ並みのしつこい粘着絡みをしたり、翔太に対して言われ無き因縁をつけてからかったりするはず。

そして、いつもの母さんなら私の姿を見ればこちらの近況を知るする為に即座に話しかけてきてくれていたはず。なのにこの静寂。おかしい、これは何かある。怒っているのだろうか、それとも何か企んでいるのだろうか、それ以上にこの二人がこんなに近距離にいてケンカもせずになぜ黙っているのか、私には全然予測が出来ない！

「……お、親父さん、沖縄どうでした……？」

「おう、とりあえず当初の目的は達成出来たな、遥々日本の最南端まで飛んでいった価値はあったぜ、帰りしにちいとばかり面倒臭え事に巻き込まれちまったがな、もうヤンバルクイナには懲り懲りだぜ」

「……ヤンバルクイナ？」

「何でもねえ、こっちのこった」

（注・詳しくは別編小説、『晴天を誉めるなら夕暮れを待て』より）

「……母さんは、いつ日本に帰ってきてたの……？」

「二日前よ、昨日は私の開発チームの出資者のお食事会にお呼ばれ、一昨日は美香と百人近くの馬鹿相手に軽く説教してやった後、千春と一緒に朝まで騒いでストレス発散させて貰ったわ、たまには羽目を外すのも良いものね、二人にはちよつと迷惑かけちゃったけど」

「……千春と美香って、千夏と翼のお母さんの事？　つか、百人

相手に説教って何？ 一体何をしてたの……？」

「何でもないわ、こつちの話よ」

（注・詳しくは別編『ツアラトウストラはかく語りき』より）

こちらの問いには普段通りに答えて下さっているように見える尊敬なるお父様お母様ご夫妻。しかし、その視線はまだ下らないゴシップ記事を取り上げるワイドショーが流れるテレビに向いたまま。私達の探りの質問にも全く動じる気配無し。

「……あの、父さんこれ、お姉から……」

「おう、サンキュウベリマッチ、んっ？ イカにジャッキー？ くだらねえ、猫の餌かよ？ こんなもんしかなかったのか？ シケたつまみだなあクソツたれ」

「安っぽい乾き物ばかりね、最近のコンビニはカマンベールチーズや鶏の唐揚げぐらい普通に売ってるんじゃないの？ 優歌に任せたのが間違いいね、あの子も随分とセンスの無い事、まるでオッサンのチヨイスだわ」

「……じゃあ母さん、乾き物だけじゃなんだから、私と翔太で冷蔵庫の残り物で何か一品ぐらい作ろうか……？」

「いや、いいわ、お気遣いなく」

「……じゃあ父さん、何か欲しい物があつたら今から私達で買い物に行くけど……？」

「いや、それを待つのも面倒臭え、これで十分だ」

「……ああ、そう、そうですか……」

「何だ？ 料理だの買い物だの色々難癖つけて、何やら二人ともここから逃げ出したいみてえだな？ 違うか？」

「……い、いやいや、そんな事無いそんな事無い！ 久々に家族みんな揃って私、スゴく嬉しいよ！ 翔太もそう思うよね、ねっ！？」

「……も、ももも、もちろんッス！ 後は母さんも帰ってくれば勢揃いッスね！ 今日は楽しい夕飯になりそうだなー！？」

「そうね、いづみとともに色々と話がしたいわ、確かに楽しみね」

「……ハア、しんどい……」

「……母さん、早く帰ってきてくれないかなあ……」

「……あーもう嫌だ、耐えられない！ 私が何を言ってもこの状況と無言のプレッシャーは何一つ変化の兆しが無い。もう限界、頭がおかしくなりそう！ このプレッシャーは私達二人に対してのもの？ それとも、父さんと母さんがお互いを警戒して発しているもの？ どっちなの！？」

「……那奈、死ぬ時は一緒だよな……？」

「冗談でもやめてよそんな事！ 何でもうすでに半ベソ状態になってんのよ、このバカ翔太……！」

でも、どちらにしろそれが恐ろしい事には変わらない。もしこの二人にまとめて集中攻撃されてしまったら、その相手は跡形の無く心身を粉碎されて植物状態になる事間違いなし。つまり、その攻撃対象になっていると思しき私達にはきつと明日と言つ未来は訪れないだろう。

しかし、これがもし父さんと母さんがお互いを牽制し合つて発生している緊張感なのであれば、これは以前世界を震撼させたあの米ソ冷戦を上回る大戦危機、もしくは原子力融合における臨界点ギリギリの緊迫状態。つまり、大爆発すれば至近距離にいる私達にきつと明日と言つ未来は訪れないだろう。どちらにせよ、私達が助かる可能性は限りなくゼロに近い！

「……チツ、しつかしとことんつまんねえワイドショーだな、さすがに飽きてきたぜ、ふう……」

この張り詰めた空気の中で先に動いたのは父さんだった。テレビ番組の内容に一言ケチをつけると、手に持っていた缶ビールを一気に飲み干してゴミ箱に投げ捨て、椅子の背もたれに寄りかかつて大きく背伸びをすると首を左右にグルグルと回した。準備運動完了のサイン、ついに来る！！ 餌食は誰！？ 私！？ 翔太！？ それともまさか、悪夢の渡瀬家夫婦大戦勃発！？ 神様、どうか私だけでも助けて下さい……！

「……翔太、話がある、ちょっと面貸せ」

「……うへえ！？ お、おおお、俺っスかぁ！？」

「こっちに来い、俺の正面に立てよ」

「……う、うう、はい、今行きますう……」

……祈りが通じた。神様、どうもありがとう。どうやら私は救われたみたい。それもそうだ、私はこの二人に叱られるような覚えは何一つ無いのだから。今思えば何を怯えていたのだろうか。生贄に選ばれた翔太には悪いけど、私はこの時改めて自分の命の有り難みを心から実感した。

「……あ、のお、お話しとは何でしょうがぁ？」

あちゃー、何と哀れな光景だろう。まだ何も会話が始まっていないというのに、父さんの目の前に直立する翔太の鼻からは恐怖のあまり鼻水が垂れていた。笑っちゃいけないんだけど、私はその姿がまともにツボに入ってしまった。人は極度の緊張感に晒され続けると感情がおかしくなると言うのは本当の話みたいだ。

「……で、どうだった？」

「……へえっ？ どうだったって、あの、何がっスか？」

「何が？ じゃねえよ、どうだったんだって聞いてんだよ」

「……？ あ、あのー、いまいち言ってる意味が良くわからないんですけど……？」

「……おめえ、俺をおちよくってんのか？」

「……へえっ？ 何でえ！？」

「俺とおめえの間でどうだったって聞かれたら何の話かすぐにわかんだろぅがあ！？ 俺とおめえを繋いでるもんは何だ！？ 俺とおめえの共通点は何だ！？ ほら、答えてみるやゴラァー！！」

「ヒ、ヒイイイ！！ いきなり全開で怒らないで下さーい！ 怖いよおー！！」

「オイ！ ビビってねえで答えろって言うてんだよ！！ 殴られてえのかこのクズ野郎！！」

「バ、バ、バ、バイクですう！ ロードレースですう！ 昨日の全日本戦ですうー！！」

「チツ、ちゃんとわかってんじゃねえかよ、だったらスツとぼけてねえでさっさとどうだったのかこの俺様に報告しやがれ！！ ピョッてんじゃねえぞゴラァー！！」

……翔太、号泣。 やっぱり、お父様のこの長き沈黙に隠されていたのはお怒りの感情だったのですね。 いやはや、怖いです、恐ろしいです。 テーブルの脚をガンガンと蹴り飛ばすそのお姿、まるでヤ○



ザです。こんなお方がお父様だなんて私、一生の恥でございます。  
あーあ、何かもうこっちまで涙が出てきそう……。

「改めて聞くぞ、どうだった？」

「……予選は晴れてたんですけど、本戦開始前に豪雨になって来週へ延期に……」

「んな事あとくに知ってただよバカ野郎！！ そんなもん昨日の内に橋本ちゃんから電話で連絡来てんだよ！！ 俺が聞いてんのは選手権の予定じゃなくて、雨が降る前に行われた予選の結果だ！！ おめえ自身の初の全日本クラス公式戦の手応えはどうだったんだって聞いてんだよ！！」

「……だったら、最初からそう聞いてくれれば……」

「ああん！？ 翔太の分際で生意気にもこの俺様に対して何か文句でもあんのかゴラァ！！」

「ありませんありませんからそんなに怒らないで下さい蹴らないで下さいガンつけないで下さい酒臭い息吹きかけないで下さいごめんなさい本当にごめんなさい」

柄の悪い男に絡まれる気弱な男子学生の図。この光景がもし外の市街地で繰り広げられていたら、間違いなく近隣住民から警察に通報されてしまうだろう。いや、まかり間違うとこの室内でのやり取りの声がもし外部に漏れていたりしたら、それでも十分に通報対象になりかねないかもしれない。

「ご近所の皆さん、これは決して恐喝事件などではありません。渡瀬家恒例の家族内コミュニケーションの一つです。怒鳴っている当人に悪気や殺意はありません。だからお願い、どうか警察や機動隊は呼ばないで下さい！」

「……これよ、何だかわかるか？ 正式記録とは別に俺が竹田に頼んで計測して貰っておいたおめえの予選前に行われたテスト走行のラップタイムだ、ひでえ出来だな、爆笑もんだぜ、笑いすぎて屁も出ねえや」

「えっ！ そんなのいつ計測してたんですかー！？ 嘘だあ、えっ！？」

父さんがズボンのポケットから取り出した一枚の用紙を手渡された翔太は、焦りに近い驚きの表情でそれに目を落としていた。私もあのサーキット場に同行していたはずなのに、とても橋本さんや竹田さんがそんな作業までしている感じには見えなかった。いつもふざけている様に見えて、やはりあの二人もこの業界のプロだったという事か。

「一体何なんだこのハチャメチャなタイムは？ 一周目のシケインで凡ミスかまして2分5秒台なんてヘボやらかしたと思いきや、二周目は立て直してくるところか前周のミスにビビって全コーナーでブレーキングミスって2分9秒台、三週目でやっと2分ギリギリ切ってきたかと思いきや四周目でまた同じシケインでしくじって2分3秒、さすがにマズいと焦ったかテスト最終周で1分55秒でファーストレスト出したは良いが、予選本番の一発勝負で今度はヘアピン

であわや転倒寸前になって結局記録タイムが1分58秒54、参加全台数二十四台中で第八位、こんな走りで入賞圏内に入れた事自体が奇跡に近いぜ」

「……はい、マシンはすこぶる調子が良かったので、何とかストリートではタイムを稼ぐ事が出来て……」

「マシンが調子良いだあ！？ 生意氣ぶっこいてんじゃねえよ、そんなもん当たり前だバカ野郎！！ 調子の悪い時なんかあるか！！ あのなあ、言わせて貰うが俺達は何も遊びでバイクやってんじやねえんだ、手抜きなんか一切しねえ、うちのチームクルー達の仕事はいつだって完璧なんだよ！！ 橋本ちゃんだって毎度休日返上して一人走り回って大会エントリーの手続きや機材搬入用の車両の準備をして、竹田だって最後まで壊れずに回り続けてくれますようにって天に祈りながら夜遅くまでエンジン組み立て直してみんな必死で頑張ってたんだよ！！ 他の連中だって必死だ、俺だって必死だよ！！ みんなおめえが少しでもリラックスして本来の力を発揮出来るように、おめえが本戦で一つでも上のリザルトが残せるように、みんな汗まみれオイルまみれになって命懸けてんだよ！！ おめえ如きにマシンがうんたらかんたらなんぞ言われる筋合いなんかこれっぽっちも無えんだよこのクソつたれがあ！！！」

「……ひいつ！ す、すいませんでした！」

「それにな、このテスト走行のラップタイムに目を通すだけで十分今回のこのだらしねえ予選タイムの原因はマシンじゃなくて乗り手のおめえ自身の気の緩みだって事は解りきってたんだよ！！ 初コースで本番一発勝負ならともかく、おめえはこれまでの合宿練習や模擬レースで何回このコースを走ってきてんだこのボケェ！！ しかも同じシケインで二回も同じブレーキミス、ヘアピンでアクセルワ

「クミスって転倒寸前だと!? それでもおめえは全日本のポケバイとミニバイクを通算五連覇した無敵のチャンピオンか!? こんな出来でこれまでおめえに敗れてきた他の選手達に顔向け出来ると思ってるのか、このタコ野郎が!!」

「……でも、これまで乗ってたミニバイクに比べたら、やつぱり250ccのスピードだとブレーキポイントがいまいち掴めないし、それにエンジンレスポンスも強烈で上手くアクセルワークもコントロール出来なくて……」

「ネチネチグダグダと言いつつがましいんじゃないじゃゴラァ!! そんな事にならねえように俺はずっと前からおめえに250ccを経験させてやってただろうが!? これじゃ何の意味も無え、これまでの練習は一体何だったんだ、ああん!」

「……すいません……」

「……おめえの実力、こんなもんじゃねえハズだぞ、俺にはわかる、どうせ腑抜けでスケベなおめえの事だ、ピットにいる那奈や観客の女どもに少しでもカッコ良いところを見せようとして、軽い気持ちでナメて挑んだんだろ!」

「……うつ、いや、あの……」

「図星だな、このキ○タマ野郎!! でなきやあんなショボいコーナーでブレーキミスなんかするか!! こんな事だろうと試しに俺の代理で那奈を行かせてみりゃ早速ボロ出しやがって、まともに走りゃちゃんと初戦から優勝争い出来るだけのマシンを用意してやって、これまで六年もの間この俺様が専属で徹底的に鍛え抜いてきてやったつてのによ、おめえの本番の弱さとヘタレっ振りは本当に親

父そのまんまだな！？　こんなバカみてえな話じゃあまりにみつともなくて、貴之のヤツが成仏出来ねえで化けて出てきちまうぞ！？」

「……すいません、本当、すいませんでした……」

「謝んなら俺だけじゃなくてクルー全員に謝れ！！　いいか、こんな不甲斐ねえ結果でも橋本ちゃん達はな、『デビュー戦だから仕方ねえよ、色々あったから俺達も悪いんだ』って笑って済ませてくれたんだぞ！？　優しい連中じゃねえか、おめえは随分と救われてるんだぜ？」

「……有り難い限りッス、本当、皆さんには感謝します……」

「しかーし！　俺様は違うぞ、甘くねえ！！　もしあの時、俺が現地にいたらおめえをコテンパンに叩き潰してやってたところだ！！」

「親父さん、お願いですからもう許して下さいーい！！」

「許してたまるかこのクソツたれがぁ！！　よくもまあ三島勇次朗や他の関係者が見てる前でこの世界最強天下無敵唯我独尊の渡瀬虎太郎様の顔に泥を塗りたくってくれたなぁ！？　これだからおめえはうんたらかんたら……！！」

以下、長文の為割愛にて候。ついでに翔太はアツチ……、いや、何でもないです。父さんの説教はこの後一時間ほど途切れる事無く延々と続いた。その間に父さんは冷蔵庫にあった缶ビール五百ミリリットルを三本、灰皿山盛りタバコ一箱を軽々と空け、お姉が買ってきたあたりめとビーフジャーキーを一本残らず全て胃袋に収納した。説教の最中、翔太は何度となく横目でチラチラと私にアイコンタク

トで助けを求めてきていたが、とてもじゃないが間に入ってあげられるような状態ではなかった。翔太の顔は涙やら鼻水やらでもうグシャグシャ。仲間を見殺しにするのはこうも愉快、いやいや、心苦しい事なのか。どうやら私はかなりSっ気の強い人間なのかもしれない。親の遺伝だろうか。

「……ふーん、最速タイムと最低タイムに14秒ものラグ、一位のトップタイムとは6秒差の八位ね……」

父さんが怒り狂っている間、母さんは黙ったまま表情一つ変えずに例のラップタイムとやらが載っている用紙に目を通して何やら考え事をしていた。口調こそ父さんとはかなり温度差はあるものの、この結果に不満そうなのはその雰囲気からして明らかだった。

「……ねえ、現地はいつから雨が降り出したの？ 詳しいコースコンディションはわかる？」

「……橋本ちゃんの話だと、予選時は雲の切れ間からお天道さんが顔を出すくらい良い天気だったらしいぜ、もちろん、コンディションは頭にクソが付くぐらいのカラツカラのドライだ」

おっと、父さんと母さん、ここでやっと初めてのコミュニケーション。テーブルを挟んで二人揃ってラップタイム用紙を覗き込む姿はかなり貴重な光景。やっぱり、二人の共通点であるバイクの話だと普通に会話出来るんだね、ちょっとホッしました。

……なーんて言ってるのも束の間、父さんの噴き上げるマグマの様

な大激怒で変な汗が出てくるほど体感気温が高くなっていた部屋の空気は途端に一変し、今度は吐いた息が白くなるぐらいに冷たく凍りつくような寒気が辺りを覆い尽くし始めた。

「……ハア、これじゃちつとも話にならないわね、翔太」

「……うえっ、今度は麗奈さんから説教ツスカ……」

「あなた、私と交わしたあの契約、まだ覚えてるわよね？」

「……け、けいやく？」

「速くて強いライダーになりたい、父さんがなれなかった世界チャンピオンになりたい、って私達に指導志願したのはあなたよ？ いくら小学生の頃の話だったとはいえ、まさか忘れたとは言わせないわよ？」

「……あ、ああ、高校卒業後のプロ転向、ワークスチーム移籍の話ですか、契約って言うから何かと思った……」

幼き頃の翔太が父さん母さんに告げた将来の夢、それは二輪車モータースポーツの頂点であるロードレース世界選手権こと『Moto GP』で、今から十年前の日本国内で行われたシーズン開幕戦のレース中で事故により命を落とした翔太の父親、風間貴之さんが叶えられなかった夢でもあったエンジン排気量別の最高クラスでの世界チャンピオンに輝く事。

当時、自らが設計したマシンのエンジントラブルにより事故を引き起こしてしまったと罪の意識に苛まれ一度は開発者の道を絶とう

とした母さんは、その翔太の決意の言葉を聞き再び新たなレース用のマシン制作に取り組む事となった。

全ては翔太の夢を叶える為に、夢半ばで散った貴之さんの無念を晴らす為に、愛する人を突然奪われ失意の底に堕ちた大切な友人であるいづみさんの為に、そして、過失を犯してしまった過去の自分と決着をつける為に、母さんは再び立ち上がったのだ。

だがしかし、レースの舞台とは様々な人の思惑や企業の大金が動く特別な世界。その華やかな舞台に立つにはいくら関係者とはいえど簡単にはいかない。有名ライダーの息子だからというコネが通用する訳でもない。だから母さんは翔太にある条件、世界の頂点を目指すプロライダーになる為の厳しいノルマを与えつけた。

「全日本ロードレース選手権に三年間参戦して、一年目は様子見でシリーズ上位三位以内、そして、二年目三年目は無条件でシリーズ完全連覇、それが私とあなたとの間で交わされたうちのワークスチームへの移籍の条件、忘れる訳がないと思うけど改めて確認よ、ちゃんと覚えてるわよね？」

「……はい、しっかりと心に刻んであります……」

「うん、ならいいわ、今回の予選結果を聞いてたら、もうそんな事すっかり忘れて諦めちゃったのかって少し心配になってね」

「……いや、そんな、そんな事無いです、これからきっちり挽回してみせます、はい……」

「本当に？ 頼むわよ、覚悟なさい、あなたも私ももう後戻りは出来ないわ、やっと私の新ワークスチーム構造計画が親会社の経営陣に認めて貰えてね、三年間の準備期間、あなたとの二年のプロ契約



で総額六億円の予算をこちらに回してくれるそうよ」

「……ろお、ろろろ、六億う！？」

「六億円って……、母さんそれって、翔太一人の為だけに！？」

「しかも二年間連続で好成績なら契約更新はもちろん、年俸も格段にアップしてくれるらしいわよ？ 渡瀬虎太郎、風間貴之、三島勇次朗の三強、そして奥井新悟の四人が活躍したあの日本ロードレース界黄金期以来、マシン製造の技術は最高レベルながらなかなかそれを乗りこなし世界で活躍する国産ライダーが現れなかった二輪車製造メーカーにとって風間翔太は業界待望の超新星、他のチームなんかには横取りされる訳にはいかないって事よ」

「……嘘でしょ？ 本当に！？ ねえ翔太、これスゴいよ！ これってスゴい事だよ、ねえ！？」

「……ろ、六、六億、待望の、超新星……」

「この大不況の御時世で六億円だなんて大金、そうそう出てくる話なんかじゃないわ、でも、あなたにはそれだけの莫大な投資利益と経済効果が見込める可能性があるって高評価して貰えたのよ、さすがは無敵の高校生ライダー、随分と注目されてるのね？ もちろん、これは私の懸命な交渉もあってのものだけど、どう翔太、吉報ですよ？ 少しは良い活性剤になったかしら？」

「……は、はひゃひゃひゃひゃ、ろ、六億、六億、無敵の超新星……」

……これにはさすがに私も驚いた。六億円の価値？　これが？　根性無しでスケベでヘタレ全開のこの男が？　信じられない大金と仰天の高評価に舞い上がって呆然としているこのおバカさんが？　へえー、やっぱりバイクとか自動車のレースの世界は動く金額が一般の常識とは桁違い。こりゃ舞い上がっちゃうのも仕方のない話か。

そういえば、テレビで良く見るあのF1のマシンも一台作るのに開発費と生産費だけで軽く一億円超えるとか言う話を、私も新聞か二ユースか何かでうつすら聞いた覚えがある。じゃあ、レース仕様のバイクだと一台いくらなんだろう？　F1マシンの半分くらい？　いや、部品の数や大きさから言って三分の一かな？　例えそれでも凄い金額には間違いない。

だとしたら、母さんが普段仕事で扱ってるバイク部品とか、エンジン一台は一体おいくら？　父さんが現役時代に壊しまくったマシンの合計損害額は？　何かもう気が遠くなる金額になりそうな予感がある。つーかそれより、もし翔太がプロになったら契約金や年俸はどれくらい貰えるのかな？　プロ野球選手と同じくらい？　もしかして私、玉の輿に乗れちゃう……？

「た、だ、し」

しかし、そんな甘い夢すら見せてくれないのが『氷の女王』の別名を持つ我が母・渡瀬麗奈。将来有望な見通し明るい話にフワフワと浮き足立つ私達を、巨大な氷柱を針代わりに突き刺し凍てつく大地に貼り付けるような冷徹で非情な痛烈の一撃を振りかざしてきた。

「あくまでこの計画は翔太、あなたが私との契約条件を満たしてこそその話よ？　つまり、あなたがこのまま不甲斐ない成績でこの全日

本戦一年目のシーズンを終わらせる事になれば、この夢のような御伽噺話は全て泡と消える事になるのよ」

「げえっ！ まっ、マジっスか！？」

「えっー！？ 母さん、そんなのあんまりだよー！？」

別にちよつとぐらい条件に満たなくたって、そこまで話がまとまってるならサクツと契約しちゃえばいいのに！ 相変わらず母さんは自分で定めた規律に厳しすぎだよ！ そんな結果じゃメーカー会社側が許してくれないのかな？ やっぱりダメ？ ああ、六億円が飛んでゆく。玉の輿への道のりはまだまだ遠いなあ……。

「もしそんな事になったら、これほどの高額な予算を無駄にして会社到大損害を与えた私達チームスタッフは確実にその責任を追求されて、間違いなく全員が職を失い人生の路頭に迷う事になるわね？ それどころかこれがきっかけでワークスチームはもちろん親会社のメーカー企業そのものが経営破綻して倒産に追い込まれるかもしれないし、そうなれば昨今の世界経済の金融不安にもさらに拍車がかかる事にもなりかねないわよ？ 西暦1929年以来八十年振りの世界大恐慌の再来ね、食糧難問題もある事だし、下手したら第三次世界大戦が起こっちゃうかもしれないわよ？」

「……………」

「人類の未来と私達の運命はあなたの志一つにかかっているわよ翔太、次からは是非とも良い結果が聞ける事を期待しているわ」

「……エへ、エへ、エへへへ……」

「母さん、翔太が完全に壊れちゃったよー？」

……正にこれこそが渡瀬夫妻驚愕の破壊力、双璧並び立つこの光景こそが世界の要人すらも恐れおののく地獄の黙示録。この地に降り立ち二つの存在はこの世の全てを黒く焼き尽くす恐怖の大王と、あらゆる存在全てを否定しこの世を浄化する裁きの鬼神。私達無力な人間はその絶大な力の前に塵と消えゆく運命なのでしょうか……。

……って、何この大袈裟な解説のくだりは？　おいコラ筆者、アンタは一体私に何を言わせようとしてんの？

「……でも、良く考えてみると滑稽な話よね、まさかこの目の前にいる暴虐無尽の権化みたいな最低男から、よく『チームクルー』の必死の努力』なんて言葉が出てきたもんだわ、せめて現役時代に少しでもそんな他人を敬う気遣いをしてくれれば、私も苦労せずに済んだはずだったんだけどね」

「……チッ……」

……ああ、なるほど、そういう事か。父さんがなぜあれほど翔太のレース結果に激怒していたのか理由がわかった。父さんにとって翔太はいわば直弟子、先生と生徒の関係。その翔太がレースで不甲斐ない結果を残すという事は、それは師匠である父さんの指導力に原因があると言われても仕方がない。

つまり、もし翔太が母さんとの契約条件をクリア出来なかったとし

たら、これは父さんが母さんに対して敗北を期す事と同じ。常にお互いを意識して小さな事柄でも争い合う二人の関係からすれば、これは父さんにとって最大の屈辱。この現状が面白く無いのは当然の事だろう。

「やっぱり翔太には今の内からこちらに呼び寄せて、有能なコーチスタッフの元で海外の舞台を経験させた方がライダーとして大成するんじゃないかしら？ 下手クソでいい加減な指導でせっかくの才能を潰されて、こちらの仕事にまで悪影響を齎されたらたまったもんじゃないわ、こんな外道と地獄に道連れにされるなんてまっぴら御免なものね」

「……黙っておけばベラベラベラ好き勝手言いやがって、下手クソだあ？ いい加減だあ？ 挙げ句には外道だあ？ 偉そうにしやがって、めえは何様のつもりだゴラア！？」

「この計画の一番偉い最高責任者様ですが何か？ この現状を打開する最良の方法を述べたまでだけど、何か問題でも？」

あー、マズい。絶対的有利なこの状況に気を良くしたのか、母さんの鋭い氷の矛先はついに接触してはならない最大の宿敵へと向けられてしまった。核ミサイルの目標到達点をセットし、後は赤いボタンを押すだけの二大国家。恐怖の臨界点突破、世界壊滅までのカウントダウンが開始された。

人類は歴史に残る重大な決断を迫られる時、その答えはいつも二つに絞られる。イエスかノーか。白か黒か。全てを自分の思い通りに塗り潰さないと気が済まない父さんが黒ならば、人の都合や理念や人格すらも容赦なく無視して消し去ってしまう母さんは白。

白と黒、光と影、右と左、北と南、そして生と死。決して交わる事の無い対立する二つの対局がぶつかり合う時、時空の法則は乱れこの世は終末を迎える事だろう。神よ、我々人類は滅びるしかないのでしょうか。この世界は終わりを迎えるしか道は残されていないのでしょうか……。

……って、だから何なのよこの訳わかんないぶつ飛びトンデモ解説は！？　こんなしょうもない事を言わせる暇あったら、私達を早く避難させてよバカ筆者！　もう無理、ここにいたら絶対巻き沿いになる！　こうなっちゃったら逃げるが勝ち！！

「……父さん、母さん、もういいかな？　翔太も十二分にどっぷり反省してるし、来週の本戦で巻き返せばいい訳だし、ねっ？」

「俺からはもう特に言う事は何も無え、しかし翔太！　次からは俺が現場に復帰するからな、またナメた走りしたらタダじゃ済まさねえぞ！！」

「ちなみに、来週は私も現地へ視察に行かせて貰う予定よ、よろしくね」

「……チツ、視察視察視察っていちいちうつぜえな、橋本ちゃんも竹田も誰も歓迎してねえから来んなっつうんだよ、空気読みやがれこの陰険ニガ虫女が……」

「……何ですって？　今、何か言った？」

……はいはいはいはい、もう後はお二人で仲良く夫婦水入らずの時

間をお過ごし下さいませ！ あーあ、翔太ったら二人に精神を粉々に破壊されて鼻水もよだれも全開で完全に白目剥いちやってる。ちゃんと元に戻るかなあ、どうしよう？

「あつ、そうだわ那奈、ちょっと待ちなさい」

「…………えつ、私？」

茫然自失の翔太の手を引いて地獄のリビングから脱出しようと扉のノブに手をかけた瞬間、またも女王様からのお呼びの声。今後の餌食は私！？ もうやめて！ 私達のヒットポイントはとくにゼロよ！？ 渡瀬家の悪夢の宴はまだまだ続く！ いや、出来る事なら続かないで欲しい、次回が怖いよー！！

## 第62話 終末のコンフィデンスソング

「あなた、私に何か報告しなきゃいけない事があるんじゃない？」

「……ほ、報告？」

前触れも無く突如この地に現れた恐怖の渡瀬家二大霸王、我が父・渡瀬虎太郎と我が母・渡瀬麗奈。その脅威なる圧倒的な力によりまずは翔太を軽く血祭りにすると、ついに実の娘である私にまで鋭い毒牙を剥き出しにして襲いかかってくる。まだ生贄の血が足りないと言うのか、どこまで冷酷、残忍な悪魔達だろうか！

「……報告って言われても、いまいちピンとこないんですけど、何の話……？」

「あら、すました顔して堂々としらばっくれちゃって、そんな顔したって私には一切通用しないわよ」

「……ハア？」

……すました顔して？ しらばっくれてる？ 何の事やらさっぱりわからない。一体、母さんは私から何を聞き出そうとしているのだろうか？ この前母さんと話した時から、私の身に何か報告しなければならぬような出来事が果たしてあっただろうか？ 私は脳内



の記憶回路をフル回転してこれまでの出来事を色々と検索してみた。

「……あの大雪の日からの出来事と言えば……、えーと、あの後すぐに中学三年生に進級して……、あつ、そうだ！ 空手の関東大会！ 私が優勝して新聞に載ったってヤツかな？ そう言えばまだ母さんには報告してなかったっけ……」

「それはさつき優歌から聞いたわ、痛みに耐えて良く頑張ったらしいわね、おめでとう！ でも、私が聞きたいのはそんな事じゃないわ、それよりもつと後の話」

「……もつと後？ じゃあ、えーと……、クリスマスの麻美子のあの出来事かな？ あの一件は麻美子と神崎さんの為にもあまり他人に話すべきじゃないと思ってて……」

「それも優歌から聞いたわ、とても緊迫した不慣れな場面でも、大事な友達を想って一生懸命体を張って頑張ったそうね、さすがは私の娘、これもとても立派な事よ」

「……ううん、私は何にも……、あの時は完全にお姉におんぶに抱っこで……」

「でもね、私が聞きたいのはそれでもないの、もつともつと後の話」

「えっ？ 違うの！？ もつと後の話！？」

「……何？ 何なの！？ 母さんは何が知りたいの！？ 母さんは一体私に何を求めているの！？ 全然わかんない、あまりに難解で不」

可解な質問に、私の脳内の記憶を司る部分である海馬はもうオーバーヒート寸前。意識は朦朧、何か急に頭がクラクラしてきた。

「……もしかして、中学卒業式の話？」

「それもすでに同席してた千春から一昨日聞いたわ」

「じゃあ、高校入学式？」

「それも千春から」

「じゃあ、一体何なの！？」

あー、もう訳がわかんない。母さんの強烈なプレッシャーによる精神壊滅心理攻撃は次々と、そして着実に私の脳細胞シナプスを破壊していく。私がまだ母さんに報告していない事、報告していない事、いない事……？ うわあ、もうおかしくなりそう！ もっと先の話って、もうここまで遡ったらほとんど一ヶ月前とか一週間、あるいは昨日今日の話とか……？

「……昨日……？」

大混乱する私の脳裏にふと浮かんだとても最近の鮮明な記憶。それは、昨日のゴールデンウィーク最終日に父さんの代わりにチーム代理代表として、翔太や橋本さん竹田さん達と一緒に向かった全日本ロードレース選手権。

大会が行われたあのサーキット場には、叔父の奥井新悟さんと共にレース関係者にとつては全くもって招かざる客人であるあの奥井幹ノ介氏までも姿を現した。それを見た幹ノ介氏に恨みを持つ橋本さん達関係者は激昂して一斉に周りを取り囲み、あわや奥井側のボディーガードとの間で大乱闘になりかけた事があつた。

父さん母さんと幹ノ介氏は私が生まれる以前、世界中を巻き込む大騒動を起こして対立した当事者同士であり、今現在でも深い蹄が残っているとは各地で噂されている因縁の関係。きっと母さんが聞きたがっている事は、あの時の幹ノ介氏の言動や詳しい詳細に違いない。私はそう確信した。

「……その顔、どうやら私の質問の意味がやっと理解出来たみたいね、そうでしょ？」

「……うん、多分この事だと思う……」

「実はね、私はこの話もすでに優歌や千春の話で耳にしてるのよ、でも那奈、私は是非ともあなたの口から聞きたいの、あなたがどう思つて今回の決意に至つたのか、どれだけの覚悟を決めてこの件に挑んだのか、あなたの本当の気持ちを私に教えてくれないかしら？」

「……け、決意？ 覚悟？」

何やら重苦しい空気と緊迫感が辺りを包み出した。私だつてもう高校生、一人の人間として確かな思想と責任を持ち、世間の出来事に対してどの様に接するべきか判断しなければならぬ年齢に達している。母さんはそれを見越して、私が過去のあの奥井家との確執をどう感じ取っているか知りたがっているのだろうか？

しかし、母さんが今言った決意とは？ 覚悟とは？ まるで私があの時、幹ノ介氏に対して何か大それた行動を起こしたと言いたげに聞こえる内容。確かに、私の周りにいた人達は幹ノ介氏に横暴な態度と行動を取っていたが、私はその騒動の中でもみくちやにされて何もしてなかったのが実際のところ。そんな事をした覚えは何も……。

「……まあだ部屋に戻っぢや駄目ですがあ？ 用があるのは那奈だげですよええ、俺はもう、解放じで貰えだんですよええ？」

「……あつ！」

顔中のあらゆる穴から涙やら鼻水やらが吹き出してテツカテカになっている翔太を見て私の記憶回路はピーンと電流が走った。そうだ、このバカ！ コイツ、幹ノ介氏に父親の貴之さんの事を侮辱されて押し倒した拳げ句、馬乗りになって胸ぐら掴んで怒鳴りつけたんだっけ！

「まだよ翔太、この話はあなたも十分過ぎるほど関与している大切な話なの、那奈と一緒にそこにいなさい」

「……まだ、何か俺に苦言があるんですけどあ！？」

やっぱりそうだ、あの一件だ！ 再び因縁の火種を燻りかねないあの暴挙。仮にも昨日の私はチーム代理代表という責任ある立場、なのになぜ側にいてそれを止められなかったのか、母さんこの責任

を私に問い質しているいるんだ！ 涼しい顔をしてるけど、きっとその心中は怒り浸透で煮えくり返っているに違いない！ ああ、どうしよう、どうしよう！？」

「……自分の口からは言いづらい？ まあ、その気持ちは母としてわからなくはないわ、だったら私から言ってあげても良いわ、あなたがまだ私に話していない、親子の大切なけじめの報告……」

「……か、母さん、ごめんなさいっ！！」

「……？」

もうあれこれ言い訳したって、それが一切通用しない相手だって事は重々わかってる。悪あがきも無駄、命乞いも無駄！ どうせ私はこの後、この冷酷な氷の女王の手によって見せしめの公開処刑をされる運命なんだ、助からない運命なんだー！！ ならば、あの時の真実を洗いざらい偽り無く全て報告して、せめて汚れの無い清らかな心で天国へと旅立ちますうー！！

「私は止めたの！ 自由を奪われ身動き取れない状態でも、精一杯声を振り絞って『ダメッ！』って言ったの！ こんな事しちや駄目だって、こんな乱暴な真似をしたら怒られるって、私は一生懸命翔太を止めたんだよ！！」

「……えっ、俺？ 何の事だよ？」

「……那奈？ あなたそれ、一体何の話……？」

「……でも、でも翔太は私の制止を振り切って、突然押し倒して馬乗りになったの！ 強引に間を割って、無理矢理突っ込んで……！」

「……ちよつと待ちなさい那奈、あなたまさか……？」

「……何だとお？ 何やら随分と聞き捨てならねえ話になってきたなあ……？」

「……ちよ、ちよつとオイ那奈、何か話が変わだぞ？ 俺を見る麗奈さんと親父さんの目つきがすっぱー怖いんだけど！」

「その後、私はもみくちやになってグチャグチャにされて、何の抵抗も出来なかった……、そのまま、なすがままで……、母さん、ごめんなさい！ 無力な私を許して！ そして父さん、最低限の責任を果たせなくてごめんなさい！ 私は、私は二人の娘として失格です……」

「……これだけ猛反省の態度を取れば、私への二人の説教は翔太の分に比べれば多少軽減してくれるはず。だって私、本当に悪くないもん。全部翔太が勝手にやった事だもん。むしろ私は幹ノ介叔父さんに対してかなり丁寧な応対が出来ていたはずだもん。私は悪くない、悪いのは全部このバカ男だもん！」

「……那奈、あなたが謝る事じゃないわ、可哀想に、怖かったでしょう？ 私こそごめんなさい、大切な娘であるあなたの事を守ってあげられなくて……」

……あれ？ 軽減するどころか、なぜか母さんは悲しげな表彰で立ち上がるとこちらに歩み寄って私を優しく抱き寄せてくれた。私があの一件で傷心したとでも思っただろうか。もしくは自分達の争いに関係の無い我が子を巻き込んでしまっただけで悔やんでいるのだろうか。私、いくら何でもちよつとやりすぎかな？

「……あの、母さん、私……」

「いいのよ、あなたがこれ以上話す必要は無いわ、辛いだろうけどもう忘れなさい、このカタはきつちり落とし前つけてあげるからね」

「……お、落とし前って、何の話？」

「翔太、ちよつと面貸せ」

「えっ？ あの、親父さん？」

「同じ男として同情しねえ訳じゃねえ、だがな、俺はこういう汚えやり方は絶対に認めねえ主義でなあ、おめえのその腐ったイカレチ○ポ、この俺様が跡形も無くギツタギタに握り潰してやんよ」

今度は父さんまでが椅子から立ち上がって、翔太の肩に手を回して強引に家の外へと連れ出そうとし始めた。せの雰囲気は明らかに冷たく殺気立っている。ヤバイ、これは何か様子がおかしい！

「ねえ虎太郎、大切な娘を無残にも傷物にされたのよ？ 例えビジ

ネスの契約商品だろうと親友が残した一人息子だろうと、一切の情けは無用よ、わかってるわよね？」

「当たり前えだろ、こんな事じゃ貴之の念も報われねえ、直接あの世で土下座して詫びさせてやるさ」

「ちょ、ちょちょちょちょ、ちょっとちょつとちょつとちょつとちょつとお！！ 違う違う、違います！ 誤解です誤解！！ オイ那奈！ お前完全に二人を何かと誤解させてるぞ！？ 俺、このままじゃマジで殺されるって！ ちゃんと訂正して正確な真実を伝えてくれよ！ 頼むよ、オーイ！！ 親父さんも麗奈さんも俺の話聞いて下さーい！！」

「欲情にまみれた鬼畜の言い分など聞く耳持たぬ！ この不屈き者め、よくもこれまでの私達の恩をこの様な仇で返してくれたな！ 貴様のような下劣な男は地獄の業火に焼かれ野垂れ死ぬがいい！ 恥を知れ、俗物！！」

「観念しろや翔太、俺とおめえの縁もどうやらここで潮時だ、これが男の楔ぎってヤツさ、苦しまずにポーンと逝かせてやるから心配しねえで楽しみにしな？」

「ちょっと待って父さん！ 母さんも話を聞いて！ 間違ってる、二人とも何か間違ってるってば！ 何だか良くわかんないけど誤解だって！ お願いだから早まらないで、翔太を殺さないで、お願い！！」

……なかなか話を聞き入れてくれなかった父さん母さんも、私の必死の説得と弁解で何とか冷静を取り戻し再び椅子に座って一息つい



た。正に間一髪、首の皮一枚で命を繋ぎ止めた翔太の顔は更に真っ青になって痩せこけ、ありとあらゆる毛穴から変な脂汗が滲み出ている。あわや私はこの年齢で恋人と永久の別れをしなければならなところだった。

「……なんでえ、何かと思えば奥井の話かよ？　くっだらねえ、回りくどい変なやらしい言い方すんじゃないよ、バカ野郎が！」

「……目の前が真っ暗になったわよ、まさか那奈が翔太に暴行されたんじゃないかってね、この先、いづみとどう接したらいいのか露頭に迷うところだったわ……」

「……ごめんなさい、あまりはつきり名前を出して言っちゃうと、父さんや母さんの気に障るんじゃないかって怖くなっちゃって……」

「……どうやら私は二人にとんでもない誤解をさせてしまっていたみたいだ。いくらテンパっていたとはいえ、私は何て卑猥な事を口にしていたんだろうか。押し倒して馬乗りとか、無理矢理突っ込んできたとか、今思うと疚しい事を連想させる恥ずかしい言葉ばかり。お姉が聞いたらさぞかし泣いて喜ぶだろうなあ。何考えてんだろ、私……」

「あのね那奈、奥井との件ならもうあなた達が余計な心配をする必要は一切無いわ、あれはすでに過去の出来事、和解も完全に済んで私達の間ではすでに終わった話なのよ、今や奥井グループは私の大切な研究資金の一番のスポンサーだし、大騒ぎしているのは未だにこの結末に納得しきれていない一部の馬鹿と暇なマスコミだけよ」

「おう、そうだぜ！ 俺にとっても今や幹ノ介の爺さんはギャンブルの軍資金を調達してくれる心優しきお兄様なんだぜ？ あの奥井の豪邸には玄関とか部屋にたくさん高価な外賓の記念品とか飾ってあるからよ、階段の上から『ここから全部ブン投げてぶっ壊すぞー！』って言うときよ、あの爺さんメチャクチャ焦って黙って俺に小遣いくれるのさ、なっ、俺達すっかり仲良し兄弟だろ？」

「それ、立派な恐喝罪ね、奥井の財産には若干まだ私の所有権が残っている物もあるのよ、今の内に裁判に向けて良い弁護士を探しときなさい」

「しかしよお、今更あんなコレコレの幹ノ介爺さんイジメたって面白くも何ともねえだろ？ むしろ哀れみさえ感じるぜ、下手に振り回したら血管ブチ切れて脳みそバーンってなって死んじまうぞ？ ただでさえあの爺さん、高血圧と抗鬱剤と心臓と肝臓と腎臓と糖尿と抗ガン剤とコ○インとヘ○インと便秘とイボ痔の投薬治療で薬漬けになって半分死人みてえなもんなんだからよ」

「高血圧と抗鬱剤だけよ、その発言も立派な名誉毀損罪ね、執行猶予無しの実刑判決が下るものと覚悟しなさい」

「あれえ？ そうだっけか？ つーか、そもそも幹ノ介の爺さんは何で鬱病になんてなっちまったんだっけかなあ？」

「間違いなくあなたのせいよ、恐喝に名誉毀損に精神的侵害に迷惑防止令状違反、数え役満で死刑確定ね、いつそ弁護士よりお経読んでくれるお坊さんでも探しときなさい」

「てめえも十分幹ノ介を死の底まで追い詰めただろうが、この奥井

の怨霊め、塩撒き散らすぞゴラア」

……うーん、この雰囲気だとうやら二人の言っている事は本当です。すでに当事者同士の怨恨はすっかり解消して、今では普通の血の繋がった親族としての交際を続けているみたいだ。敏感になつてやら無闇に大騒ぎしていたのは私達外野だけだったようだ。

何も知らずに余計な心配をして浮き足立つとは、娘として何とも情けない限り。深く反省。これからは私も幹ノ介氏とは妙な嫌悪感を持たずに普通の親戚の叔父さんとして接しないといけないなあ。昨日の連れない冷たい態度も今度どこかで会えた時にちゃんと謝らな

「昨日、私が泊めさせて貰った大富豪の豪邸って言うのは実は奥井邸の事だったのよ、その時、今回の騒動は幹ノ介さん当人と新悟君から聞いてるわ、翔太の件に関してはあちらも言葉が不足だったと反省してたわ、翔太、どうか許してあげてね」

「……いや、そんな、あれはカツとなつた俺が全部悪いんであつて……」

「その旨、次回どこかで奥井義親子に会ったら伝えてあげなさい、きっと喜ぶと思うわ？　那奈も時間があつたら遠慮しないで奥井邸を訪ねてみたかどうか？　裕美も歓迎すると言っていたし、何より一番あなたに会いたがっている人間がウズウズして手ぐすね引いて待っているわよ」

……手ぐすね引いてる人間、ハア、あの子ねえ……。私と一つ違い

の下だから、もう彼女も中学三年生になったのかな。そういえば新悟さんがそんな事言ってたっけ。あーやだやだ、向こうがどんなに会いたがっていても私は絶対お断り。あんなワガママなへそ曲がり、いちいち付き合ってたらかっちの身が保たないって。冗談じゃない、行く訳無いでしょ？ 絶対にお断りです。

えっ、そのへそ曲がりとは一体誰なのかって？ うーん、正直言うと紹介も解説すらもしたくない。簡単に言うなら、世界一面倒で対処に困る可愛げの無い傲慢ちきな私の従姉妹。名前？ 言わない。言ったら近々この小説内にも登場してきそうだもん。絶対に言わない。嫌だ、言ってあげない。絶対イヤ！

「そっぴゃ、里美ちゃん元気かな？ 小学生の時に会って以来だもんな、多分那奈も里美ちゃんとはかなりご無沙汰なんじゃないか？」

「……………！」

「痛ってえ！！ 何でえ！？ 何でいきなり下段蹴り食らわなきゃいけないの！？ 俺、何か那奈の気に障るような事でも言った！？ 絶対今日厄日だよ、もうマジ死にてえ……………」

「二人とも本当に仲が良いのね、私が那奈の口から聞きたかったのはその件、奥井でも学校の事でも何でもない、あなた達二人の話よ」

一時期はかなりゆったりとした団欒モードに入りつつあった部屋の空気も、母さんのこの言葉で再び緊張感漂っぴりぴりモードに突入した。私達二人、私と翔太の話、私と翔太の間にあった出来事と言えば……………。

「……………あつ……………」

……そうだった。いつかちゃんと報告しなきゃ報告しなきゃと思っていたながら、結構今の今まで母さんにはまだ何も報告していなかった。暗黙の了解みたいな感じになってはいるが、父さんにも正式に話をした訳ではない。だから母さんは私の口からこの報告をするのを待っていたんだ。

「……………翔太、翔太からちゃんと行ってよ、男でしょ？」

「……………えつ、俺から？ いや、これは実の親子である那奈から話した方が円滑に物事が進んでいくと思わねえ？ 俺からだとも分びびつちゃってだらしないって怒られちゃうよ……………」

「……………なつ、ふざけないでよ！ じゃあ、アンタはいつか結婚の報告をする時も私に言わせるつもりなの？ どこまでヘタレ男なのよ、しっかりしてよ、もう！」

「……………結婚ってお前、いくら何でもお前、気が早いってお前、マジやべえよお前、参ったなオイ……………」

「……………バツ、バカッ！ 例えば！ 例えばの話！ こういう時は男が責任持って相手の親に挨拶するのが当たり前でしょ！？ 男だつたらちゃんと誠意見せてよ、じゃないと私、翔太に愛想尽かしちゃうよ！？」

「ちよ、ちよ、ちよっと待てよ！ 俺だつてやる時はやるさ！ だ

からこうやってここに残って親父さんと麗奈さんの前に……！」

「甘　　い！！！！！」

「……ひえっ！」

私と翔太のおのろけ水掛け論のアツアツ熱を一瞬にして凍結するように、母さんの瞬間冷却送風機の如く強烈な一喝がテーブルを叩く打撃音と共にこちらに襲いかかってきた。その体感温度は正に絶対零度、辺りはまるで液体窒素を撒き散らしたみたいな銀盤の世界と化し、私と翔太は雪だるまにされてしまった。

「いいこと、良く聞きなさい？　あなた達二人がいずれはそういう仲になるんじゃないかって事は、私も那奈を産んで風間家と行動を共にしてきた頃から薄々ながら感じ取っていたわ、だから私はあなた達が一緒になる事に反対なんてしない、むしろこれはとても喜ばしい事だと思うわ、でも、でもね、あなた達はあまりにも……」

「甘え　　！！　　おめえらはイチゴパフェに生チョコレー  
トと生キャラメルと生クリームとカスタードクリームに練乳とあん  
こと塩スウィーツとマスカルポーネチーズと抹茶白玉アイスとラムレ  
ーズンにガムシロップたっぷりかけて角砂糖二十個ぶちまけて綿飴  
二本差したぐらい甘え甘え」

「そうよ、そうなのよ！　甘いのが、あなた達はあまりに甘過ぎる！」

「……何だかんだ言って、実は父さんと母さんって息があつて……  
……？」

「そんな事はどうでもいいの！ お互い初めての恋愛に浮かれる気持ちはわかるけど、恋愛とは常に麻薬の様な魅力の背後に、その身を滅ぼしかねない危険な部分も隠し持っているのよ！ 私はそれが今この時からすでに心配で心配でならないの！ あなた達は普通の高校生と置かれる状況が違う部分がたくさんあるわ、それをしっかりと自覚しなさい！」

……普通の高校生とは違う状況、例えば何だろう？ お互いの両親が親友同士とか、あるいは生まれた時から幼なじみとか。うーん、でもこんなシチュエーションはドラマとか漫画とか他でも良く聞く話じゃないかと……。

「……わかってないわね、私の不安は的中したわ、良く考えなさい？ あなた達が学校から帰ってきて、食事を取ってお風呂で暖を取って、疲れた体を休める為に睡眠を取る我が家はこの地球上にいくつあるの？」

「……ここ、でしょ？ ねえ翔太？」

「……だよな？ はい、ここ一つだけです」

「そうよね、一つでしょ？ 那奈も翔太も帰る家はたった一軒、この家だけよね？ そこで良く考えてみなさい、恋愛交際をしている高校生の男女が、隣近所ならともかく一つの家で一緒に寝泊まりしているなんて状況、一般常識的に見てごく当たり前の事だと思う？」

「……あつ……」

「違うわよね、私達渡瀬家と風間家のこの家族形態は世間でもそうそう無い極めて稀なケースなのよ？ 本来なら別々に住所を持ち別々に生活しているはずの二つの家族が、一身上の都合によりやむなく一つの家に一緒に住む事になったとはいえ、兄弟でも親戚でも無い血の繋がらない未成年の男女が保護者同伴とはいえ一つ屋根の下で同棲しているなんて、普通に考えたらあまりに非常識で教育上よろしくない環境よ、あなた達はちゃんとそれを自覚しているの？」

「……それは、あの、うん、それなりには……、ねえ、翔太？」

「……うん、まあ、それなりに……」

「それなりに、程度じゃ困るのよ？ あなた達二人がすでに成人して社会的にも熟成した一人の人間として認められ、自分の行動にきっちり責任が持てる知識と経験が備わっているのなら、私はあなた達二人に苦言を論う事は何も無いわ、でも、あなた達はまだ高校生になったばかり、しかも第二次性徴を迎えて異性に対して様々な興味が湧いてくる年齢、私は留守中の目の配れないところで、あなた達を取り返しのつかない失敗を仕出かさないか不安で不安で仕方ないのよ」

そういえば、母さんのこの忠告は私がちよつときまで心の底で不安に思っていた事と全く一緒だ。普段は夕方になれば誰かしら人がいるけど、今回みたいに父さんが長く不在になったり、学校が早く終わってまだお姉やいづみさんが帰ってこないと、しばらくの間私と翔太はこの家に二人きりになってしまう。

以前までは二人だけになって気まずい時には私が逃げるように小夜



の家に遊びに行ったり、翔太が夕飯の買い物に行ったりと何とかドキドキ状況を回避してきたけど、もうこうして恋人同士になっちゃったらお互いを避けるのも何かおかしいし、恥ずかしいけとずっと一緒にいたいのが本音。

自分達の部屋に籠もるにも、私と翔太の部屋は壁を一枚挟んだだけの隣り同士。向こうが見てるテレビの音も聞こえてくる事があるし、夜眠る時に耳を澄ませば寝返りする音や寝息まで聞こえてきて馬鹿みたいに妙にドキドキしちゃう時もある。翔太も隣りで同じような事考えたりしてるのかなあ？　そう思うと恥ずかしくっておかしくなりそう。

小学生の頃は何度も一緒にベッドで寝てたりした事もあるのに、今の私達がそんな事にしたら絶対ヤバい事になっちゃうのは確実。私達だってもう高校生、それくらいはわかってる。そして、それが蜜みたいに甘く魅力的で、かつ危うくお互いが責任を問われる行動であるか……。母さんが不安に思うのも当然の事、私達の環境は恵まれているようで非常に危険な環境なんだ。

「改めて言うけど、私は別にあなた達の交際を反対している訳じゃないわ、将来、あなた達が結婚して新たな命を宿して一つの家庭を築いてくれたら、それは私にとっても凄く幸せな事よ、あなた達二人から孫の顔を見せて貰えるだなんてまるで夢のようだわ」

「……やだ母さん、孫だなんて、話早すぎだよ……」

「……そうツスよ麗奈さん、マジ勘弁して下さい……」

「真面目に話してるのよ、デレデレしないでちゃんとシャキツとして聞きなさい！」

「……は、はい！」

「だからいいこと？ 絶対に順番だけは守って、しっかりと物事の筋だけは通しなさい！ 進学するかしないかは別として、お互い何事も無く高校を卒業して、成人を迎えて一社会人として立派に一人立ち出来るまではちゃんと最低限のルールを守りなさい！ 二人とも、もう子供じゃないんだから私の言っている意味がわかるわよね？ これはあなた達の為なのよ、絶対に私達を悲しませたりする事だけはしないって約束して！」

「……はい母さん、約束します」

「うん、よろしい、翔太は？ この手の話は男の方が責任重大なのよ、返事は？」

「……さっきあれだけビビらされたら、そんな真似絶対出来ないッスよ、もちろん約束します……」

「うん、これでやっとホッとしたわ、いづみの為にもよろしくね、あと、出来れば別れるのもやめてね？ そんな事になったらここにみんな一緒に住めなくなるし、私もいづみとの関係が気まづくなっちゃうから」

「……この前交際し始めたばかりなのに、早速別れ話とかそんなのやめてよ……」

……まあ、これで私も少し目が覚めた。いつまでもおのろけてばかりじゃダメだね。せつかく恋人同士になれたんだから色々デートしたりイチャイチャしたりしたいけど、これからも翔太とは近くで

ずっと一緒にいれるんだもん、焦る事もないよね。多分、翔太もこれに懲りてさつきみたいな無茶はしないはず。やっぱり高校生は高校生らしい健全なお付き合いを……。

「……………クツクツクツクツ……………」

……………あららら？ 母さんの話も終わってこれで無事家族会議も終了かと思つたのに、何やら今度はダークサイドの『恐怖の大王』から悪魔の嘲笑い声が聞こえてきた。何か嫌な予感がする、一度緩んだこの場の緊張の糸は再び千切れる寸前まで張り詰め出した。

「……………バカくせえ、どっちが滑稽な話だよ？ 順番守れだあ？ 筋通せだあ？ どの口だあ、どの口が偉そうにそんな綺麗事抜かしてやがんだあ？」

「……………何ですって？」

「ギャーハッハッハッハッー！！ 高校生がセツ〇スする時は真面目にちゃんとコンドーム付けろってか？ 避妊はきっちり確実に致しましょうってか？ 籍入れる前に腹がポンポンに膨れ上がっちゃった阿婆擦れ女が一人前に言えた義理じゃねえだろ！？ 笑わせんじゃねえよ、ギャーハッハッハッハッハッー！！」

「……………貴様……………！！！」

……………あーあーあーあ、これはもうすでに関係修復不可能の完全なる

宣戦布告。いやもとい、巨大無差別テロ後の犯行宣告と言っても良  
いぐらいの歴史的な大暴挙。それまで平常を保っていた『氷の女王』  
の表情が一気に般若の面の様な鬼神の顔へと変貌していく。ついに  
私達が恐れていた渡瀬家夫妻大戦の口火が落とされてしまった。

「あのなあ、最近のアダルトDVDの流行はなあ、（ピー）の3P  
連続ありつてのが決まっただよ！今の高校生ナメんなよ、放課  
後はおるか学校の中でも平気で（ピー）して（ピー）もやって（ピ  
ー）とか（ピー）や（ピー）でも何でもアリだぜ！？初孫は早い  
に越した事ねえさ、出来ちゃった結婚で十代の母、大いに結構じゃ  
ねえか！ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤー！！」

「父さん、もういい加減に自主規制されるような発言は控えてよ！  
本当にこの作品、R18指定にされちゃうってば！」

「特に男はこの時期、何発カイトもカイトも足りねえくらいうじゃ  
うじゃキ○タマからオタマジャクシが湧いてきてキリがねえんだ、  
ニヤンニヤン出来る女がすぐ隣りにいてエロ本相手にシコシコして  
られるかってんだよ！なあ翔太？」

「……親父さん、お願いですからこっちに話振らないで下さい……」

「オイ那奈、やる事は早い内に済ましとかねえと女は随分と初めて  
は痛いらいぜえ？今の内に乳なり尻なりアソコなりあちこち触  
って貰って体慣れさせてよ、お股広げでズッポリ迎え入れてこの腑  
抜け野郎を立派な男にしてやってくれよ！？女に乗るのが上達す  
りやあ、自然にバイクに乗んのも上手くなるかもしれねえしなあ？  
ブッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤー！！」

「……もうヤダ、この人最低……」

無礼極まりない鬼畜オヤジの無修正お下劣卑猥話は、回り始めたアルコールが潤滑油となつて軽く一秒間二万回転オーバーのフルスロットルで大爆進。モクモクと有害排気ガスを撒き散らして、一人環境破壊男の大打進は止まる事を知らず。もうどうにでもなれ！？

「俺なんか中公の時にすでにヤル事済ましちまつてるからな、高校卒業した頃にはもうすでにプロ級の腰使いだったんだぜ？ この甲斐あつて俺様は今やこんな立派な世界最強の男になれたのさ、どうだ、俺様つて最高だろ？ ビンビンだろ？ イカしてるだろ？ だからよ、そんな堅つ苦しい話は気にしねえで若いうちは本能のままバンバンやりてえだけやりやいいのさ！ この渡瀬虎太郎様が言うんだ、間違えねえぜ！！」

「……貴様、ちょっと待て……」

「かく言うこの女だつてウダウダとあれこれ抜かしまくってるクセによ、本性はかなりのスケベ女だったりするんだぜ？ この俺様の手にかかりゃあ『ゴムつけて？』なんて言わせる暇も無くギシキシアンアンドッピュツビューで」

「それ以上、その汚らわしい肥溜以下の愚口を開くな！！ 言わせおけば、阿婆擦れだど？ スケベ女だど？ 何を言うか！？ 礼儀も道德心も無く人の心に土足で侵入して、嫁入り前の純情可憐なこの私を無責任に妊娠させたのは一体どこの外道だ！？」

「何い！？ 嫁入り前の純情可憐な女にそんな非道な真似を仕出か

した男がいるのか！？ とんでもない野郎だな、一体どのどいつだ！？ 出てこい！！」

「貴様だ！！ 極悪無道のクソ虫男が！！」

「何い！？ 俺かあ！ つーかおめえ、良く自分で純情可憐だなんて言えたもんだよな、恐れ入るぜ全く、ブブブツ！」

「黙れ黙れ黙れー！！ 今から魑魅魍魎のような醜い戯言が湧き出すその地獄の通り口、二度と開く事が無いように隙間一ミリ無く板金溶接して完全に封印してやるから覚悟しろ！！」

激昂した母さんはいちなり足元にある紙袋から溶接用の電極小手と防護用の鉄製マスクを取り出し火花をバチバチ！ 何でそんな物が紙袋の中に入ってるの！？ つーかどこから電源引いてる訳！？ もう訳わかんない！ この二人あまりに自由過ぎ、何でもアリ過ぎだよ！！

「……ちよつと翔太、帰ってきてるの！？ 何なのこれは、外にまで大声が聞こえてきてるよ！？ 近所の人達みんな集まってきたやつてるし、犯人は誰よ！？ 優歌の仕業！？ 一体誰が家の中で子供みたいな大騒ぎを……！？」

「……あつ、いづみさん……」

いづみさん、最悪のタイミングでご帰宅。思いつ切りリビングの扉を開けてご立腹の表情で怒鳴り込んでくるや、室内の戦場の状況を

見て一瞬にして真顔に元通り。体は硬直したまま動かず、眼球だけが左右に移動して例の二人の姿を確認した模様。飛んで火に入る夏の虫とは正にこれの事を言うのだろうか。

「……………」

「……いづみさん、お帰りさない」

「……母さん、お帰り」

「……あつ、そうだった！　そういえば私、あづみ姉さんに頼まれてた買い物の品を届けに行かなきゃいけなかったんだっけ？　そうだったそうだった、忘れてた忘れてた……」

「ちよちよちよ、ちよつといづみさん!？」

「母さん、どこ行くんだよ!?　買い物の品なんかどこにも無いじゃないか!?　待ってよ母さん!！」

ダメダメダメダメ！　せつかくこの地球上で唯一二人を止められる存在であるいづみさんがここからいなくなったら、本当に世界は終末を迎えちゃう！　ここは絶対に死守、何が何でも外には行かせない！

「そんな事言って、母さんあづみ叔母さんの家に逃げるつもりだろ!?　ダメだって！　もう母さんしか頼れる人間いないんだよ!!」

「お願いしますいづみさん！ この恐竜大戦争を止められる救世主はもういづみさんだけなんです！ 私達を助けて下さい、お願い！！！」

「私はゴジラでもウルトラマンでもないから！？ 冗談じゃないよ、虎太郎はともかく何でもまた連絡無しで麗奈まで帰ってきてんの！？ もうヤダ、これまであの二人にはどれだけ苦労させられてきたか知ってる！？ アンタ達が生まれてくる前から、二十年以上もあの脅威に晒され続けてんのよ！？ 事ある事にいちいちあの二人に介入してたらこっちの身が保たない！ 卑怯者だと言われようと絶対にお断りだからね！！！」

「そんなあ、母さん！？」

「翔太も那奈ももう子供じゃないんだから、自分の身ぐらい自分で守りなさい！ じゃあね、バイバーイ！！！」

「いづみさん、カムバツーク！！！」

……ボタンと言う扉の非情な音が玄関から廊下に、そしてリビングへと響き渡った。私と翔太の制止の手を振り切ったいづみさんはそのまま一目散に近所の真中家へと避難。これでもう、人類滅亡を防ぐ最後の望みも潰えてしまった。

「……俺さ、最期の時くらいはゆっくり迎えたいなあ……」

「……うん、部屋に戻ろうよ？ もう私達には用は無いみたいだし……」



……兵どもが夢の跡、後は野となれ山となれ。どうせ私は予定外、出来ちゃった結婚の副産物ですよーだ。私もお姉みたいに非行に走るのかなあ？ もうやってらんねーッスよ、バカみたい。

「実際におめえもあの時は結構ノリノリでガンガン乱れまくってたじゃねえか？ 良い思いしたんだからお互い様つてもんだ、何だったら今晚また味わってみるかあ？ 俺様の高速高圧可変式4ストロークV12気筒エンジンは今でもバリバリ健在だぜ！？」

「2気筒2ストロークのへなちよこ原動機が何を言う！！ そもそももは貴様が口ほど無く早々にエンジンバーストしてくれたから避妊する余裕すら無かった事を忘れるな！！ ハヤいのはバイクに乗った時だけにしろ、この早漏男！！」

「……ここだけの話、すげえエロかったぜえ？ あの時のおめえ」

「恥を知れ、この俗物が！！」

「可愛いねえ、子猫ちゃん」

「地獄に堕ちろー！！！！」

……以上、あまりに醜い言い争いの為、割愛にて候。ついでに父さ……、って、もういいやどうでも。あー疲れた。少し休みたい。頭の中に蓄積した下品な言葉の数々を水洗いしたい気分。時計はもうとつくに夕方五時を過ぎていた。そうだ、今日は一人分多く夕飯用

意しなきやいけないんだ。しんどいなあ……。

### 第63話 幸せのカテゴリ

「……で、すごすごと一目散にこっちに逃げ帰ってきたって訳か、そりやまたどうもご苦労さーん！」

無関係な一般人などお構い無しに戦場の業火に巻き込みまくる恐怖の独裁者同士の争いから追いやられた難民の様に自宅の二階の部屋に戻った私と翔太。そこにはすでにとっと避難を済ませて対岸の火事見物をしていたお姉が満身創痍の私達の姿を眺めてニヤニヤしていた。この薄情者、元はと言えば全部あなたのせいなんですよ、お姉様！

「何だよ何だよ、二人揃ってそんなに渋い顔すんなって？ 久し振りに二人の元気な姿を間近で見れて良かっただろ？ 何だかんだ言ってもやっぱり両親が健在で仲良くしてる家庭が一番幸せだよなあ！？」

「いくら何でもアレは健在過ぎ！ まだ二十代三十代の若い夫婦ならともかく、お互いとくに四十路過ぎてあのテンションでケンカされたら周りにいる人間はたまったもんじゃないってば！ いづみさんが嫌がって逃げちゃったのもわかるよ、さすがに今回ばかりは私も二人には愛想尽きちゃったよ！？」

「ギャハハハ、やっぱりさっきの玄関の扉の音はいづみちゃんだったか！？」 確かに良く考えてみるといづみちゃんも災難だよなー、

あたしの年齢よりも長くずっとあの二人の面倒を見てるんだもんよ、さすがはこの優歌様が世界で唯一本物と認める、警視庁のブラックリストに燦然とその名を残す元関東一の伝説のスケ番、タフだよな――？」

「……………そう言うお姉だってそのブラックリストに堂々殿堂入りしてるよね……………」

……………その新旧スケ番までもが尻尾巻いて逃げ出す化け物二人の一点集中放火を約二時間耐え抜いて命辛々掻い潜ってきた私達の感動ストーリーは、YouTubeに投稿すれば山火事から逃げてきたオーストラリアのコアラみたいに全世界の視聴者から食料の支援でもして貰えるでしょうか？ 本当、ペットボトルの水を三本ほど一気飲みたい心境でございますよ、ハア……………。

「……………あのー、それより何で二人とも俺の部屋にいるの？ 那奈はともかく、何で優歌さんまでいつの間に関自分の部屋から勝手にこっちに入り込んでるんすか……………」

「ああん？ 何だ翔太、あたしがここにるのがそんなに不満かよ！？ あたしの部屋はちょうど虎太郎ちゃんと麗奈ママがやり合ってるリビングの真上で、怒鳴り声がうるさくておちおち寝てもいられねーんだよ！ ほとぼり冷めるまでの間くらいケチな言ってるんじゃないぞゴラァ！」

二階に上がりそれぞれ自分達の部屋に戻ろうとするや、扉を開けた翔太が突然大声を上げて驚き尻餅。何事かと部屋の中を覗いてみれ

ば、そこには下着一丁の姿で無断で他人のベッドに両足をおつ広げて昼寝していたらしい女が一人。そして、現在に至る訳で……。

「……お姉、せめてジャージぐらい着なよ？　それほど際どくないスポーツ系のラフなアンダーとはいえ、とても男子の部屋でする姿なんかじゃないよソレ……」

「んなもん気にすんな気にすんな！　ここはおめーらの家であると同時にあたしの家でもあるんだぜ、家の中で寛ぐのにいちいち格好なんて気にしてられっかつつーんだよ、面倒臭え」

翔太のベッドに横たわったまま、肘をついて空いた片手でお尻をボリボリ搔くその姿はほとんどオッサン。発言、仕草、思考、行動全てが女じゃないですこの人、一体誰に触発されてこんな女性になってしまったのやら……。やはりお姉が理想の男性像と崇拝している父さんの影響なのだろうか？

「つーかよ翔太、おめー自分の部屋に若い女が二人もいてよ、一方は自分の彼女、もう一方は下着姿のお姉様だなんて、男にとってこんな夢みてーなチャンス満載の最高のシチュエーション、他の同年代の男子高校生が聞いたら悔しがってじたんだ踏んじまうぜ？　純情な妹に経験豊富な姉とのこんな超展開、おめーも一度は想像して悶々した事あんだろ？　正直にいつてみな、ああん？」

「……いや、まあ、その……」

「何だ何だ、いまいち連れねー中途半端な反応しやがって、本当は

今頃下の方はビンビンになっちまって我慢利かねー状態になっ  
てん  
じゃねーのか？ どうだ、初めてからいきなり思い切って姉妹井と  
かイツちゃってみるか？ クイーンオブセッ○スの称号を持つこの  
優歌様がウブなおめーらに手取り足取りレッスンしてやってもいい  
んだぜー？」

「……いや、本当に、もう今日はあまりそんな気には……」

いつもならお姉の挑発に顔を真っ赤にして必要以上の反応をする翔  
太も、まるで魂を抜かれた植物人間の様に部屋の隅でこちらに背を  
向け体育座りをしたまま完全に鬱状態。さすがのエロ女王もこの翔  
太の変わり果てた姿に驚きを隠せなかった。

「……オイ那奈、翔太のヤツ一体どうしたんだ？ いつもなら『や  
めて下さいよおー！』とか言っただけ嬉しそうにスケベな顔すんのによ」

「……お姉、多分今日の翔太には何言っても反応しないと思うよ？  
さっき散々嫌ってほど母さんにガスガス釘刺されてたから……」

「……あちゃー、麗奈ママも相変わらずコツチ系の話には厳しいな  
ー、だから横で聞いているおめーの反応もいまいちなのか？ チツ、  
つまんねーの」

母さんからは凍り付く様な冷徹な常識人の規律を、父さんからは燃  
えたぎる様な熱い男の情熱を同時に勧められた翔太の心境は、わか  
りやすく言えば真夏の灼熱日に室内の強烈な冷房でクーラー病にな  
り自律神経に異常を来したOLの様なものか。

欲感情はすでに麻痺してるに同然、体調は思わしくなく神経は衰弱状態、視点は一点に定まらず、ただ茫然自失と頭を垂れてどっぴりとうなだれるだけ。やはりこうなってしまったか。五体満足で健康そのもの、成長著しい十代男子の迸る精力すらも奪い取ってしまう渡瀬家恐怖の二枚看板やはり恐るべし。

「しかしアレだぜ、虎太郎ちゃんも麗奈ママもあんまり追い詰め過ぎるとアイツ、将来マジで不能になっちまうかもしれないぞ？あの若さで無使用のままでも能とか、男として生まれてきた意味が何にも無くなっちまうぜ、可哀想になあ……」

「……それだけじゃなくて、そろそろいい加減翔太もお姉のそういう姿や挑発には慣れてきちゃったっていうのもあるかもね？何て言うかな、お姉にはもう飽きちゃったって言うか……」

「おうおうおう！言ってくれんじゃねーか那奈ちゃんよお！？そこまで言うなら是非とも今からここであたしとおめーで素っ裸になつて、どっちが翔太のキ〇タマ疼かせるか勝負しようじゃねーか！？もちろん、立ち技寝技有りの総合ルールだぜ、一切手加減しねーから覚悟しやがれゴラァ!？」

「人にはメチャクチャ言うクセして、ちよつとでも攻撃されたら下ネタ込みで三倍返しするのズルいよ!？本当に負けず嫌いなんだから、お姉は……」

「何だ何だ何だよ、今日は那奈まで不機嫌っつーか連れねーな？冗談だよ冗談！いつもみてーに真っ赤に照れた可愛い顔をこのお姉様に見せてくれよ、寂しいじゃねーか？おめーまで何へこんでんだよ、オイ？」

へこんでいるのは翔太だけではない、もちろん、私も今回の父さんと母さんのやり取りにはかなりのダメージを受けている。

「アレか？ おめーも翔太とのイチャイチャ禁止令が出てブルーな気分つてところか？ 隙あらば周りの小夜や翼達を出し抜いて一足早く『大人の女』になれるチャンスだったのにー！ ってか？ ああん？」

「違うよ、そんな訳ないじゃん！ 母さんの言っている事はごもつともだもん、文句や不満なんて何も無いよ！」

私がいまいち気分が晴れない理由、それは翔太との交際についてお灸を据えられた事もあるが、それ以上に二人の实の娘である立場としてあまり聞きたくなかった話もチラホラあったので……。

「じゃあアレか、以前の奥井グループとの確執の話か？ 残念だったな、あれはもうとつくの昔に上映終了したお蔵入りのドキュメンタリー映画さ、当時まだ幼稚園児だったあたしも少しだけ関係者として出演してリアルタイムで観させて貰ったけど、あれは近代日本史に残る最高のヒューマンドラマだったぜー？ まだ麗奈ママやいづみちゃんの腹の中に居て自分のその目で観る事が出来なかったおめーらはさぞかし不備だよなー？ まあ気持ちはわかるぜ、せつかく自分達もその当時の雰囲気をお祭りにもならなくてすっかり興奮醒めしてガツカリー、って感じなんだろ？ 違うか？」



「違いますー！ 人の昔のいざこざをほじくり返してそれ見て楽しむうだなんてこれっぽっちも思っちゃいません！ むしろ本人達からすでに済んだ話だって聞けてホッとしたぐらいだもん、私だって小さい頃からこの話題はかなり気にしてたんだから！」

「じゃあ何なんだよ？ おめーは虎太郎ちゃんと麗奈ママの一体何が気に食わねーんだ？ あんなに愉快で見てて飽きねー最高の夫婦世界中どこ探しても一組もいねーぞ？ そんな二人の間に生まれたおめーは世界一恵まれてた娘だっていうのに、これ以上何の文句があるってんだよ！？ ウジウジと黙ってねーではつきり言ってみるよ、ああんゴラア！？」

生活費にも困らず、何不自由無い学生生活も、風間家との共同生活も、仕事の都合によつてほとんど家にいない母さんの存在も、身勝手でもいい加減な父さんの性格も、私は何一つ不満なんて無い。もちろん、実の姉妹ではないのにそれ以上の繋がりを感じさせてくれるお姉がいてくれる事に対しても文句なんてある訳が無い。

むしろ、お姉が言う通り私はとても環境に恵まれていると思う。幼い頃から一番大切な存在である異性と共に生活をする事が出来て、親同士から続く交流によつて複数の仲の良い同性同世代の幼なじみが側にいて、これほど充実した環境で生きてこれた事はどんなに感謝をしてもしつくせないぐらいだ。

だから、私のこの感情は不満でも無ければ嘆きでも無い。私は心から父さんと母さんの娘として生まれてきた事を誇りに思っている。出来れば二人にはもう少し年相応な言動を弁えて貰いたいというのが本音だが、二人のあの性格からいってそれはまず不可能なので諦める事にする。

ただ、ただ、私自身はそれで良しとしても、果たして周りは私の存

在をどう思っているのか？ 特に、数多くの仕事を抱えていながら私を身ごもってしまった母さんと、一家の主として家庭を守り一つの場所に根を張る事が不得意と思える父さんからしたら……。

「……っつー事は那奈、おめーは自分の存在があのに二人にとって『想定外』の存在だったって言ってるのか？」

「……………」

「つまり、虎太郎ちゃんは所帯なんて持つつもりなんて無かったのに、麗奈ママは仕事の妨げになる出産や育児なんてするつもりなんて無かったのに、って思ってるのか？」

「……………」

「ついつい成り行き任せの大人の事情によって宿っちまったおめーの命の為に、やむなく二人は責任取って夫婦になったんじゃないか、って思ってるのか？」

すでにお姉は起き上がり真顔で胡座をかいて私の顔を覗き込んでいます。その表情は険しい。私は決意してお姉に思いのたけを打ち明けてみた。こんな話、とても父さん母さんに直接言う事なんて出来ないから……。

さっきの父さんと母さんの会話からだと、私の存在は二人にとって考えもしなかった想定外の存在だったとは思えない。運命的な出逢いを果たし、大恋愛の末に結ばれた夫婦の間で待望された命だったのであれば何も心配も不安もありはしない。

でも、きつとあの二人は違う。私の存在は二人にとってあまりに唐突過ぎたものだったはず。だから妊娠発覚よりも入籍が遅れた訳であり、あんなに性格が正反对でケンカばかりしてる男女同士が一つの夫婦になつた訳で……。

「ふざけんじゃねーよ!? ナメた事抜かすのもいい加減にしやがれバカ野郎!!」

「……!?!」

言葉に出来ない複雑な心境に黙り込んでうつむく私を、お姉は座っているベッドの敷きクッションを拳で殴りつけて怒鳴り飛ばした。でも、その怒りの表情は弱気になる私を一喝する時のいつものものとは違い、少し悲しげな雰囲気漂っていた。

「……おめーが……、おめーがそんな目で二人の事を見てどうすんだよ!? 何で二人の事を信じてやれねーんだよ!? あの二人はなあ、虎太郎ちゃんと麗奈ママはなあ、そんじょそらの連中なんかよりも人一倍全力で生きてもがき苦しんで、お互い報いなんて一つも求めずに一途に世界で一番大切な人を想って……!」

「……お、お姉……?」

私に必死に語りかけるお姉の瞳は若干潤み、悔しそうにシーツを掴んでその両手は少し震えているように見えた。私は初めて見るお姉の姿に言葉を失い、悲しみに似た感情が胸を締め付けて息が苦しく

なった。

「……何も知らねーガキのクセに一丁前な口利きやがって、つまんねー余計な心配しやがって、おめーは、おめーってヤツはよ……！」

「……お姉……」

「……優歌さん、どうしたんスか……？」

その異様な空気に蚊帳の外になっていた翔太も心配になったようでそこから言葉に詰まり下唇を噛んだまま黙り込むお姉に声をかけていた。でも、私は何も言えなかった。お姉の瞳に浮かんでいたのは間違いなく涙、私の前で涙ぐむお姉なんて、私は今まで生まれてきて一度たりとも見た事なんて無かったから……。

「……ふう……」

「……お姉、あの、私……」

「……悪い、何でもねーよ、気にすんな……」

「……でも、何か優歌さん、いつもと様子おかしいッスよ？ 本当  
に大丈夫ッスか？」

「大丈夫だ、大丈夫だって！ おめーら、そんな間抜けな面してこ  
っち見んじゃねーよ！？ 気持ち悪いな、ウツヒヤッヒヤッヒヤッ  
！」

「……なら、まあいいツスけど……」

「つーか、翔太でめー、今どさくさ紛れてあたしの胸の谷間チラチラ覗いてたろ？ このヘタレ男が、そんなに見たけりゃコソコソしねーで堂々と顔突っ込んで好きなだけ観察しやがれスケベ野郎！」

「うわっ！ ちょ、ちょっと優歌さん！？ これはさすがにヤバイですって！ 那奈も見てるしスツゲー良い匂いするしスベスベして柔らけえし、もうギブアップっスよー！！」

まるで今にも喉から飛び出しそうな言葉を無理矢理飲み込むように口を抑えたお姉は、次の瞬間にはいつもの明るい笑顔に戻って心配する私達を軽く笑い飛ばし、何事も無かったやうに近くにいた翔太をベッドの上に引き込みギュッと抱き締め胸の谷間に顔を押し付けはしゃいでみせた。

それで少しは室内の緊張の糸もほぐれたのだが、私の胸の中では後悔と反省の念がグルグルと渦巻いていた。私はまた、何か余計な話をして他人の古傷に触れてしまったのだろうか？ お姉の満面の笑みが私の心にとても痛く突き刺さった。

しかし、お姉はそんな私の心境もお見通しだった。ジタバタと暴れる翔太を押さえ込んだままこちらにニコツと笑いかけると、小さい頃に私と一緒に寝ていてる父さんに悪さをする時に見せたイタズラっ子の顔で私の不安を一掃してくれた。

「那奈、よく聞け！ 心配しなくても虎太郎ちゃんと麗奈ママはなあ、おめーが言ったようなすっぱー運命的な出逢いをして、誰も

真似出来ねーような大恋愛の末におめーを天から授かって、ちよつと順番は狂っちまったけどお互い合意の上で結婚したんだぜ！」

「……ほ、本当に？」

「ああ、本当さ！　これはあたしも生まれる前の事で後々いづみちやんから聞いた話だけだな、二人の馴れ初めはそりやまあすげーもんなんだぜ？　虎太郎ちゃんが日本縦断の旅をしてる最中に出逢った麗奈ママの親父さんから『うちのチームの所属レーサーにならなica』って誘われて、その後にその親父さんが経営してるバイク修理店を訪ねて行ったらよ、そんな話何にも聞いてなかった店番の麗奈ママは虎太郎ちゃんの事を泥棒目的の不審者だと勘違いして、店内にあつた鉄パイプで思いつ切り後ろから頭をブン殴ったんだつてよ！？　それで虎太郎ちゃん頭パツクリ割れてよ、後日病院で十針ぐらい縫う大怪我負う羽目になつたらしいぜ！？」

「……ハ、ハア？」

「それでも当時から関東じゃ名の知れた札付きのワル、警察機動隊百人相手に一人で立ち回つてみせた虎太郎ちゃんの事さ、頭から血がピューピュー噴き出してんのにそんなのお構い無く麗奈ママを蹴り飛ばして反撃したはいいけどよ、それでもヘコたれない麗奈ママは次に鉄パイプでキン○マブツ叩いて虎太郎ちゃん悶絶、それで完全にキレた虎太郎ちゃんがマジ平手打ちすると今度は麗奈ママが鼻血ブーで大流血、虎太郎ちゃんより一足早くその店で住み込みで働いていたいづみちちゃんと貴之ちゃんの二人が買い物から帰つてきて止めに入るまで、延々と二人でバシバシ殴り合つてたらしいぜ！？」

「……あのー、お姉？」

「いづみちゃん曰わく、どんな屈強な大男とタイマン張っても連勝無敵の虎太郎ちゃんと、あれほど凄まじい大ゲンカをやらかした女は後にも先にも麗奈ママ一人だけなんだってよ！？　どうよ、すごいだろ！？　これこそ正にあの二人に相応しい運命的な出逢いだと思わねーか？」

「お言葉ですが、全っ然そうは思えません」

「そっか？　そりやそうだな、じゃあなー、えーと、あとどんなエピソードがあったっけ？　あたしが知ってる話だと、朝寝ぼけてた麗奈ママが間違えて虎太郎ちゃんのトランクス履いて仕事に行っちゃって、残された虎太郎ちゃんは仕方なく置いてあった麗奈ママのパンティを履いて貴之ちゃんとツーリングに行行って帰ってきてズボン脱いだらパンティのゴムがビロンビロンに伸びちまっててよ、それを見た麗奈ママはお気に入りのパンティを駄目にされた事にマジ切れして皿やコップやフライパンが飛び交う大ゲンカになっちゃってよ！　その時、あたしは生まれたばかりのおめーを抱いて家中あつちこつち逃げ回ってそりやもう大変だったんだぜ！？　どうよ、お互いの下着間違って履いちゃうだなんてこんな泣ける大恋愛話はとても余所では聞けねーぜ！？」

「……もう結構です、聞いてて何かもうバカらしくてすっかり脱力してきちゃったよ……」

呆れ返るほどふざけていて馬鹿馬鹿しい話ばかりだけど、なぜか私はそのお姉の話の聞いて心がすこし温かくなった感じがした。そんな下らない話の数々も、あの二人だから今では笑って済ませられる話になるんだろう。あの二人だからこそ、こんなムチャクチャな恋

愛関係もアリなんだろうと思えた。

小夜や翼、千夏のところのご両親は今でも見てるこつちが恥ずかしくなるほどアツアツのカップルもいるけど、何もイチャイチャしている事が良い夫婦の愛情バロメーターって訳じゃないのかもしれない。多分、愛情表現の方法は愛し合っている夫婦と比例する数がこの世には存在しているんだ。

だから、父さんと母さんはアレで良いんだ。外目からだと極めて危険なデコボコ夫婦に見えるけど、アレはあの二人独特の一つの愛の形なんだ。ずっと二人見て来たお姉そう言っただから、私も思う事しよう。仮に当時の計画とは想定外だったとしても、実際に私はこれまでちゃんと二人に大切にして貰えているのだから。

「おめーを授かる云々関係無しに、虎太郎ちゃんと麗奈ママが大恋愛の末に夫婦として一緒に生きていく事をお互いが望んだのは間違いないねーんだ、だからあたしも何ら不安も心配もしねーで喜んで二人の養女になった、おめーのお姉になったんだ！二人の愛情を疑うなら、あたしがこの身を持って証明してやるぜ！」

「……お姉……！」

「おめーが家族愛を見失って不安になった時は、この優歌様が何度でもおめーに熱つい愛を語ってやるから心配すんな！この家には確かな愛がある、どこにも負けねーでっけー愛があるんだぜ！」

「……ありがとう、お姉、本当にありがとう……」

そうだね、私が余計な心配する必要なんて無いよね。お姉が一番良く知ってるんだもん、二人の事を。そのお姉が言っただから間違い



ないよね、うん、そうだ。もうバカな事考えるのはよそう。私はみんなに待望されて生まれてきた渡瀬家の次女だ、胸を張って生きていかなきゃね！

「……じゃあ、優歌さんは俺の父さんと母さんが結婚した時の話も知ってたりするんスカ？」

「おう、もちろんだぜ！ あっちはアツチでまた何かとイライラさせてくれる世話のかかるカップルでよ、貴之ちゃんは初めて出逢った時からいづみちゃんに一目惚れちまったクセに、女に疎くてひでえチキン野郎だったから自分の気持ち告るのに十年近くかかったんだよ？ でな……」

「……ねえ、翔太……？」

「ゆ、優歌さん、ちょっと話ストップ！ えっ？ 那奈、何？」

「……アンタさ、いつまでその格好のままお姉の谷間を拝見し続けてるつもり？」

「おー、そーいやそうだ！ 翔太てめー、あたしに抱きつかれて何ウツトリしてんだよ！？ 那奈ともあろう将来の嫁が見てる目前で、ちやっかり男の幸せ感じてんじゃねーぞゴラァー！！」

「ええっ！？ だってこれは優歌さんが無理矢理俺に抱きついてきて」

「うるせーな、翔太の分際でよ！ てめーマジでこのままパンツ脱がせてチ○コしごくぞゴラァー！！」

「やめてー！ マジマジでやめて下さいマジで大きくなっちゃう大きくなっちゃう本当にやめて下さいー！！」

「おうおうおう、これならどうやら不能になるなんて事はまず無さそうだな？ 良かったじゃねーか那奈、翔太のヤツ、至って健康そのものでビンビンの上玉だぜ？ この優歌様直々のお墨付きだ、あと半世紀は安心して楽しめるぜ？ ウツヒヤツヒヤツヒヤーー！！」

お姉からやつと解放された翔太の顔は真っ赤になって湯気が立っていた。随分無理して『苦しかった』みたいな表情をしてこちらに必死で不可抗力だった事をアピールしているみたいだけど、どうやらいやらしい口元の緩みだけは隠しきれない様子で。ええ、もちろん私は怒ってますよ。

「……参ったよ、今回ばかりはマジで優歌さんにヤラれちゃうって思った……」

「……参った、ですか？ その割にはまんざらでもないって感じに見えましたけどね、さっきまであんだけへこんでだクセして、本当に変わり身の早い事でいらっしますね？」

「……那奈さん、敬語怖いッス……」

「オイオイオイ、今度はこっちで夫婦喧嘩勃発かよ？ 勘弁してくれよ、せつかくやつと下からの痴話喧嘩の声も聞こえなくなってきたっていうのによ」

……あつ、本当だ！ お姉に言われて耳を澄ませてみると、さつきまで近所の飼い犬が釣られて鳴き出すほどの父さんの人をからかうようなあのバカ笑い声と母さんの周囲をフリーズされるあの冷徹な一撃の言葉の数々は全然聞こえなくなつた。

停戦か、それとも終戦か。あるいは激戦の末に戦場は全てがその姿を消し去られ、何一つ音すら残らない無の境地へと変貌してしまつたのだろうか？ 私達がこの翔太の部屋と言う核シェルターから一歩外に出ると、もうそこは死の灰が降り積もる世紀末の世界と化しているのか……？

「……実は今頃、邪魔なお子ちゃまをみんな二階に追いやつて、二人だけの世界でラブラブチュッチュツしてたりしてな？」

「……えっー、まさか？ お姉、それはいくら何でも無い無い……」

「いやいや、十分に有り得るぜ那奈？ 何せしばらくご無沙汰振りの夫婦再会、しかもお互い四十を超えてあのバイタリティだぜ？ あの二人はそういう夫婦なのさ、もしかしたらあたし達、この歳でもう一人弟か妹が出来ちまつたりしてな？」

「お姉、考え過ぎだよ！ そんなのいくら何でもまさか、有り得ないって、絶対に無い！」

「じゃあよ、今から下に行つて確認しに行こうぜ？」

「えっ！？ ちょっとお姉、それはマズいよ！ 覗きになつちゃうよソレ、いくら家族でもそれはダメだって！ 親のそんな姿、恥ずかしくって見れないってば！ もし本当にそんな場面に出会しちゃ

「つたら、私達どう対応すればいいの？」

「見届けてやりゃーいいのさ！ おめーも本心は気になって気になつてしょうがねーんだろ？ 何か妙にドキドキしねーか？ 素晴らしい命の誕生の瞬間をこの目で拝めるかもしれねーんだぜ？ もし、あたし達の下が産まれた時にはよ、おめーはこうやってみんなの温かい目に見守られて家族に迎え入れられたんだって話してやる事が出来るじゃねーか、なっ？」

「……まさかお姉、私の時、見届けてたの？」

「オイ翔太、あたしについて来な！ エロ本なんかよりハンパねえもんが見れるかもしれねーぞ？」

「……イケない事とはわかってるんすけど、何なんだろう、この妙にときめくイケない胸騒ぎは……？」

「好きだねー、おめーも？ よーし、じゃあ決まりだな！」

「……ねえ、お姉、私の時は……？」

「よしっ、行くぜ野郎ども！ 危険が危ないデンジャラスな大人の故郷原点回帰冒険の出発だぜ！」

……お姉の十八番のアダルトトークにすっかり触発されてイケない気分になってしまった私と翔太は、ジャージ姿に着替えたお姉を先頭に音を立てずにコッソリと階段を下りて一階に着くと、ジリジリと廊下を擦り足前進してリビングの扉に耳を当てて中の様子を確認した。

This is the 若気の至り。若者の好奇心とは何て愚かなものなのでしょうか。後々落ち着いて良く考えてみると本当馬鹿者揃いです。何やってんだろっ、私達……？

「……あれ？ ダメみたい……、どうして？ ちゃんと押してるのに……？」

「……おめえ、本当に下手だなあ？ そうじゃねえって、ちよっと貸してみ？ 押すだけじゃなくて上げんだよ、んで、すぐに回してホラ、こうやってな」

「あっ、スゴい！ ちゃんと回ってる！ ちよっともう一回私にやらせて？」

中からは父さんと母さんの珍しい優しいトーンでの会話のやり取りが聞こえてきた。押す？ 回す？ 回ってる？ 私には何の事やらサッパリ。意味不明の言葉に私と翔太はキョトンとして顔を見合わせている間、お姉だけは必死に笑いを堪えて嬉しそうにニヤニヤしていた。

「……コイツはやべーな、多分おめーらにはちよっと刺激が強過ぎるかもしれないぞ？」

「……刺激が強い？ お姉、何の話？」

「これアレだぜ、オモチャだ『オモチャ』、夫婦のマンネリ化を改

善させるにはもってこいの秘密兵器さ、そんなもんまでこっそり持ってたのかよ、あの夫婦も隅に置けねーな」

「……何スカ『オモチャ』って？ 優歌さん、もっと詳しく教えて下さいよ？」

「まあまあまあ、そう焦んなって？ 百聞は一見に如かず、見りや何なのか嫌でもわかるさ、いいからおめーら、大人の扉開けちゃうぜ？ この世の全ての男女のカラクリと、末永い夫婦円満の秘訣をよーくその目にしかと焼き付けな！」

お姉の号令で私達とリビングを隔てる扉がゆっくりと開き出す。その隙間からは部屋の灯りが差し込み、私と翔太の心臓の鼓動は最高潮に達した。ここに一つの夫婦の愛のカタチがある……！

「……うわっ、嘘！？ 私、こんなの初めて見た……！」

「……す、すげえ！ なるほど、そうか、そういう事だったのか……！」

「……あれー？」

私と翔太がその光景に驚く最中、お姉一人だけが首を傾げて何やら落胆の表情。そこにはテレビに映るマリオとピーチ姫がバイクとカーに乗ってアクロバティックなコースを走っているゲーム画面を見ながら、ハンドル付きの白いコントローラーを揃ってクルクル回している父さんと母さんの姿があった。

「……うわあ、あれ、いづみさんが欲しい欲しいって言ってた噂のWiiだ！ うちにはゲーム機なんて一体も無かったよね？ じゃあ、母さんが買ってきたのかな？ さっきの紙袋の中にはこんな物まで入ってたんだ！」

「マナー化を改善して夫婦円満を保つ『オモチャ』ってのはコレの事ッスね優歌さん！ そうそう、俺もそろそろゲーム欲しかったんだよなあ、何かすっげえ面白そう！」

「……うーん、チツ、いまいちあたし的には納得出来ねーんだけど、でもまあ良いっか」

お姉が一体何を納得出来ないのかは良くわからないし、わからない方が良さそうなので深い追及はしないが、それ以上に私はこの光景を見て嬉しくなって少し涙が出そうになった。もちろん、それは我が家にWiiが来たからではない。

ちよつとゲーム操作を苦手にして困っている母さんに、優しく手本を見せて手ほどきしてあげる父さん。その表情は面倒臭そうで、でも何か嬉しそうに見えた。母さんも素直にその説明を聞いて、四苦八苦しながらも楽しそうに父さんの真似をしていた。

それは物覚えつく前に私がいつか見た懐かしく微笑ましい二人の姿。私が初めて瞼を開けた時に目にした世界にたった一組の両親の姿。やっぱりこの二人はちゃんと愛し合っている夫婦であり、私はちゃんと歓迎されてこの世に生まれてきたんだとこの時確信した。そして、私の心を覆っていた不安のくすみは全て綺麗に消えていった。

「あーもう！ やっぱり上手くジャンプ出来ないし曲がらない！  
きつとこのコントローラーに原因があるのよ、ちよつとそつちと交  
換して！？」

「一緒だつつの！ おめえの操作がおかしいんだよ、おめえは本  
当に物作り一辺倒でそれを扱ったり遊んだりすんのは下っ手クソだ  
よなあ？ 全くもってセンスゼロだぜ、ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒ  
ヤー！！」

「いいや、私が下手クソだなんてそんなはずは無いわ！ さつきか  
らちゃんと操作してるもの！ まさか虎太郎、アンタ、私が上手く  
走れないように裏で隠れて何か細工してるでしょ！？ 卑怯者！  
ズルしないで正々堂々と私と勝負しろ！」

「する訳ねえだろこのバカたれが！ おめえがあまりに下手クソ過  
ぎてそんな細工する必要すらねえよ、ちつとも勝負にならねえな、  
頼むから少しはこの俺様を楽しませてくれよ、麗奈さんよお！？」

つい先程まで汚い言葉で罵りあっていた男女とはとても思えないほ  
ど、二人は仲良く並んでこちらに気づかないくらいゲームに夢中にな  
っていた。父さんとはかく、母さんがこれほど楽しそうにして  
いる姿を私は見た事が無くてとても新鮮に感じた。

その表情はあの『氷の女王』と呼ばれる何事にも動じない冷徹のポ  
ーカ―フェイスからはとても想像もつかない、無垢で純粋な十代の  
少女の様な眩しい笑顔だった。これが本来の母さんの笑顔であり、  
きつとこれは父さん相手にしか見せない表情だと思う。そして、父  
さんはちゃんと母さんの本当の姿をわかってる。



「ああんもう！ 何でさつきから曲がりきれずにすぐコースアウトしちゃうのよお！？ この前やった時は上手く出来てたのにい！」

「嘘くせえ、あんまり言い訳がましいと見苦しいぜ？ おめえ、本当は一度も上手くコーナー曲がれた事なんて無えんじゃねえのかあ？」

「失礼ね、これでもずっと向こうで一生懸命練習してたのよ！ いつもゲームではアンタに負けっぱなしで嫌だもん、このゲームなら絶対リベンジ出来るって気合い入れて持ってきたのに、もう悔しい……！」

「じゃあ、今回もその努力は水の泡と消える訳だなあ？ 残念だねえ、可哀想な麗奈ちゃん？」

「うるさーい！ 黙れ黙れ黙ーれ！！ 絶対に負けないんだから、こんなのこうしてやるっ！！」

「痛つてえなあ、バシバシ叩くなよ！ 人のコントローラーに手え出して操作の邪魔すんなっつーの！ おめえ卑怯だぞ！？」

母さんがわざわざ家にゲーム機を持ってきた理由は父さんと一緒に遊びたかったらなのかな？ もしかして、お姉が買い物に行つて私達と一緒に家に入るまでの間、あの静寂の中でも二人で一緒に遊んでいたのかな？ だとしたら、実際母さんにこんな事言ったら絶対怒られちゃうと思うけど……。

「……母さん、何か可愛い、スッゴい可愛い……！」

どうやら、今日をもって私の母さんへのイメージが完全に180度変わってしまった感じがする。やっぱり母さんだって女性、恋に生きた純粹可憐な女の子なんだ。

そして、連れない態度を取りながらもそれにちゃんと応える父さんも男。何でこんないい加減な人が多いのかに愛されているのか、女である私でも少し理解出来たような気がした。

「オイコラ、那奈、翔太！ おめーらが邪魔でゲーム画面が良く見えねーよ、もつと前に行きやがれ！」

「やめてよ、お姉！ そんな無理矢理したら扉が完全に開いちゃうって、ほら、危ない！」

「痛っ！！ 痛い痛い痛い！ 俺、一番下敷き、痛ーい！！！」

「……ん？ オイ、おめえら何やってんだ？ 昔良くやってた懐かしいプロレスごっこか？」

「……何よ、三人揃いも揃って？ 本当に仲が良いわね、あなた達」

「……アハ、アハハ、お邪魔しまーす……」

……覗き見犯、漫画やドラマで良くありがちなお約束的自爆将棋倒しで発見されるの図。上からお姉、私、翔太の出歯亀三匹重ねを見る父さんの母さんの視線は若干しらけてはいたが、とても温かく優しくかった。

「よっしゃ翔太、この世の中は男の手によって動いている事をコイツら世間知らずの女どもに教えてやろうぜ！　今ここに渡瀬・風間の最強コンビの復活だ！　亀を入手したら即刻で容赦なく投げつけてやれ！　ただし、俺様に当てたりしたら半殺しにしてやるから覚悟しろ！！」

「えっー、そんなー！？」

「優歌と那奈はこういうゲーム慣れてるわよね？　いいこと、何が何でもあの赤帽ヒゲオヤジキャラのバイクを阻止して私を一位に導きなさい！　どんな手を使っても構わないわ、これは世界中の女性全ての威厳がかかった天下分け目の大勝負よ！！」

「那奈、これは責任重大だぜ？　負けたら麗奈ママの面子は丸つぶれ、あたしの面子も丸つぶれだ、負けは許されねーぜ！　わかってんだろうな、ああん！？」

「自分の番じゃないからって無責任過ぎだよお姉！　どうしよう、私も小夜の家でやった時ぐらいでこのゲームの操作方法良くわかんないよー！？」

二人に確保された私達は男女別に振り分けられて二対二の四人プレイに参加する羽目に。無茶な事ばかり要求するお互いのチームリーダーにてんてこまいになりながらも、久し振りの一家揃つての家族団欒の時間に嬉しくなつてはしゃいでいる私がそこにいた。

やっぱり家族が一番、今更だけどそれを痛感した一時だった。いづ

みさんも逃げずにここに残れば良かったのになあ。あんなにW i i  
やりたがってたのにもつたいない。逃がした魚、とっても大きくて  
楽しいですよー、いづみさん？

第64話 Dance Dance Dance

いづみさん、生意気な事言つてすみませんでした。やっぱり正しいのはあなたの方でした。いづみさんの危険予知感覚、スゴすぎます。緊急地震速報なんて目じやないです。ネズミは船が沈む事を察して逃げ出すとは良く聞く話ですが、正にそれと同じくらいの野性的察知力です。

もしかして、いづみさんはエスパーですか？ どうやって先程までの楽しい家族団欒の幸せな一時から、一転して地獄絵巻の様な惨劇へと変貌する事を察したのですか？ これまでの人生で培われた経験の成せる業なのでしょうか。その能力、是非とも私も欲しいです……。

「納得出来ねえええええええええ！！！」

家中に響き渡る御歳四十五歳の困ったワガママ悪ガキジイの怒鳴り声。何が納得出来ないと言えばそれはズバリ、みんなでプレイしていたマリオカートのレース結果。この悪夢のすべての根源は今さつきまで行われていたレインボーステージのファイナルラップに潜んでいた。

「さっさと亀投げる翔太！ 前にいる優歌にぶつけりや俺達のワンツーフィニッシュだ！」

「……いや、あの、そう言われても、その……」

二対二の男女対抗戦を始めた序盤は、私が母さんとペアになり父さん・翔太組とレースをしたのだが、私の力不足と父さんの卑怯極まりない問答無用の命令で動く翔太の妨害行為で次々と連戦連敗続き。頭にきた私は何発か翔太に蹴りを見舞ってやったが、如何せん上から指示を出しているのは父さん。それに対して翔太が刃向かえる訳も無く、最後の辺りは半ベソかきながら私の車に体当たりする有り様。

なかなか勝てない現状に母さんのストレスは溜まる一方。最初は姑息な戦法を取る父さんに文句を言っていたが、次第に怒りの矛先は不甲斐ない私の方に向き出し始めた。それを見て痺れを切らせたお姉が私と選手交代。しかし、これがマズかった。

ゲーム慣れしているお姉はレース開始から父さんと抜きつ抜かれつのデッドヒート、その膠着状態は最終週まで続き、勝敗の行方は三番手につける翔太の甲羅投げの結果に委ねられた。ちなみに母さんは最後まで操作に手こずり相変わらずの最下位走行。

今までの相手は私だった為、翔太も多少は気軽に妨害行為が出来ていたが、何せ今度の相手は泣く子も黙る渡瀬家ナンバー3の現役女子格闘家。父さんの威喝とお姉の無言の圧力に挟まれた翔太は混乱寸前。そこに、誘い水のようにお姉がわざと翔太の正面に車を移動させる。

そして、やってしまった大暴挙。慌てた翔太は即座に甲羅を投げたのだが、すでに行動を察していたお姉は余裕でスツとそれを避けて目標を失った甲羅はそのまま更に前方にいる父さん目掛けて一直線。この時、レースを観戦していた私は頭を抱えて天を仰いでしまった。甲羅、見事に命中。父さん大スピン。あわやコースアウト寸前のところを何とか立て直したまでは良かったが、トドメの一撃とばかりに最後尾の母さんがオーバースピードでスリップしながらそのまま

父さんに激突。その衝撃でかろうじて母さんはコーナーを曲がれたが、哀れ父さんは虹色のコースから奈落の底へ……。

「翔太めええええええええええ！！！」

「ひいひいひいひいひいひい！！！！」

男性軍敗退。しかも自分は屈辱の最下位。さらに初心者の母さんにまで負ける。母さんとお姉の勝ち誇った表情と見下ろし加減の目線が突き刺さる。悔しいやら情けないならでこの場に居づらい。気分を紛らわせようにも冷蔵庫にはもうお酒が一本も残っていない。

どうにもこうにもなくなってしまうた父さんは戦犯である翔太を半ば拉致同然で外に連れ出し、そのまま近所の行きつけの居酒屋に繰り出して行ってしまったのだ。渡瀬家の一家団欒の一時、わずかに三十分足らず。やはりこの家庭に『安息』という言葉は存在しないみたいだ。

「……いづみさんはこの展開までを予想出来ていたのかな、何かもうスゴすぎ……」

「でも、たかがゲームごときであんなにムキになるだなんて、あの男も随分と幼稚な子供よね、呆れたわ」

「いやー、麗奈ママも負けず劣らず随分とオテンバちゃんだと思っ  
ぜー？ 負けてる時の貧乏揺すりが地震と勘違いするぐらいスゲー  
の何の」

「あら優歌、『お転婆』ってババアがコロぶって書くのを知ってる？　あなた、それを承知の上での狼藉？」

「うおっほっほ、くわばらくわばら」

一人減り、二人減り、いつしかこの家に残ったのは私と母さんとお姉の渡瀬家母子三人だけになった。以前私が小さかった頃はごく毎日ありきたりの光景だったが、最近ではあまり遭遇しない珍しいスリーショットだ。

「それより那奈、メシまだー？　もう夜七時だぜー？」

「あつ、ゲームに熱中してまだ何も夕飯の用意してない……」

「マージーかーよー！？」

……しまったなあ、料理の準備や買い物どころか、炊くお米すらも研いでない。ゲームもそうだけど、その前の父さんと母さんの説教にも時間を取られてそれどころじゃなかったなあ。どうしよう、せっかく母さんが帰ってきたのに何のお持て成しも出来そうにないよ……。

「気を使う必要なんて無いわ、この時間から用意するんじゃ大変でしょ？　今日ぐらい那奈もゆっくりしなさいよ」

「本当？　うわあ、スゴい助かるよ母さん！　ゴメンね、次の時は



ちゃんとした物を作るから！　じゃあ、今から近所の中華料理屋に出前を……」

「最近は高級ホテルもダイナーのデリバリーサービスをやってるのよね？　この時間でもまだ受け付けてるのかしら？」

「……えー、マジですかー？」

やはりと言つか、さすがは発動機生産業界のワールドクラスのVIP要人、そう簡単に一筋縄ではいかない。そうですよね、ラーメンや餃子や天津井なんて眼中に無いですよね？　どうも失礼致しました、ハア……。

「……どうよ那奈、どれくらいで来るって？」

「……少なくとも一時間以上はかかるって……」

「マジで！？　勘弁してくれよ、あたし餓死しちゃうよー！」

電話帳やインターネットで調べに調べて、無理を承知でほとんどゴリ押しで何とか取ったデリバリーのオフォー。意外に私、交渉上手？　つか、こんな時間に配達しなければならぬ担当の人、母が無茶言ってすみません。娘が代わって謝罪させて戴きます……。

「ところで優歌、あなたはちゃんと家事をしてるの？　まさか料理洗濯掃除ゴミ出し全般、那奈と翔太に押しつけてなんていないでし

ようね？」

「いや、大体はいつみちゃんがやってくれてるし」

「あなた、そんな事でどうするの？ もう二十歳も過ぎて子供じゃないのよ、そろそろ自分の事ぐらいは自分で出来ないところの先困るわよ？」

「……麗奈ママだって、あまり人の事言えねーじゃんかよ……」

「私の話はいいの！ こうして那奈も立派に育って、後はあなたの将来が私の一番の心配事なの！ あなたはいつも昔からうんたらかんなら……」

デリバリーサービスの到着を待つ間も先程の私への説教だけじゃ物足りないのか、母さん今度はお姉に対しても苦言をポロポロ。まあ、確かに言われても仕方がないほどお姉は全然家事なんて一切しない人なので、お灸を据えるにはちょうど良い機会か。

「なあ那奈、あたし麗奈ママに文句言われる必要無いくらい、ちゃんと家事手伝ってるだろ？ なあ？」

「いつ？ 誰が？ どこで？ 何時何分何十秒？」

「てめー、こういう時は場の空気読んでハイハイって言つときゃ良いんだよコラ、おめーの寝小便したパンツ洗ってやったのどこの誰様だと思ってやがんだこの野郎グリグリ」

「イタイイタイイタイ、そんな大昔の話を今更持ち出されても困ります、っーか、人のこめかみをそうやってグリグリしたらダメだって昔から怒られてるでしょグリグリ」

「イテテテ、てめーコラ、妹の分際で何を一丁前にお姉様に対して生意気にも反撃してんだよこの野郎グリグリ」

「ハイハイハイ、姉妹喧嘩はそこでおしまい！ 優歌、お姉ちゃんが先にそんな事するから下の子が真似するのよ？ 那奈、妹が目上のお姉ちゃんに対してそんな事しちゃダメよ？ どうせ後々お互い泣く事になるんだから、二人とも喧嘩しないで仲良くしなさい！」

「はーい」

……と、言われても他にやる事が無いんです。こういう時に限ってテレビ番組は親に反抗する家出少女のドキュメンタリー特集とかやってムチャクチャ気まずいし、ゲームの続きをするにも結局一番下手な母さんをイライラさせるだけだし、さて、どうしますかねえ？

「……今の内に、お風呂でも洗って沸かしとこうかなあ？ 母さん、シャワーだけじゃ疲れ取れないでしょ？」

「風呂の話題キター！ 聞いて驚け、実はこの優歌様、麗奈ママのお帰りと聞きつけ昼間の内に風呂場を隅から隅まで綺麗サッパリ掃除し尽くしてやったのさ！」

「えっー！ お姉が掃除を！？ 信じられない、ちょっと怖いな、電でも降ってきそつな予感……」

「しかも湯張りから沸かしまで全て完璧だぜ！　どうよ、少しはあたしの事を見直したろ？」

「いやいや、お湯張りとは沸かしなんてボタン一つ押せば後は勝手に自動で」

「可愛くねーなおめーはよ、あたしの言う事にいちいちいち反論しやがって、またこめかみグリグリして泣かすぞコラ」

「じゃあさ、せっかくだから母さん先に入ってよ？　やっぱり一番風呂が一番目上の人に譲るのが世間の常識だしね」

「何よ那奈、私に毒味ならぬお湯味をさせるつもり？　これでもし優歌が浴槽に『まぜるな危険』の洗剤同士の撒き散らしてたら私、極楽浄土じゃ済まないわよ？」

「オイコラその二人、少しはあたしの仕事を信じるよ！？　マジで親子揃って性格わりーな、養女虐待はんだーい！」

とは言われても、このお姉が滅多にしない不慣れな作業を進んで行くなんて、何かしら裏工作があると思えないのがぶっちゃけ正直なところ。私と母さんの疑念は深まるばかり。

すると、お姉はこの言われなき濡れ衣を完全に晴らす為か、私達にとんでもない仰天プランを提案してきたのだ。

「じゃあよ、いっその事みんなで一緒に風呂入ろうぜ？　こうして

親子三人揃うのも久し振りの事だし、たまにはこんなのもあっても良くな？ そんなに浴槽が心配ならあたしが自ら先陣切って一番に入るからよ、なっ？」

もちろん、私はお姉のこの提案に大反対。三人で一緒にお風呂に入るなんて私が小学三年生だった十年近く前の話以来だし、この歳になって家族で裸の付き合いだなんていくら何でもちよつと無理。

第一、当時は私もお姉も子供で小さかったから大丈夫だったが、すっかり体が成長した今では三人で浴槽に入りお湯に浸かるなんてまず不可能、全員がお風呂場に入りきれるかどうかも疑問なところ。やっぱ無理ですよ無理無理無理……。

「そうね、久し振りに親子三人で一緒にお風呂に入るのも悪くないわね、良いんじゃない、私は賛成よ」

反対一票、賛成二票、多数決により『渡瀬家女同士のスキンシップ』案は可決されました……。つーか、母さんとお姉の二大国強制決定権を使用されたら、私には拒否権なんて与えられていないようなもんだってば！ 嫌だよお、絶対に嫌だあー！

「ホレホレ決まった事には文句言わねーでさっさと風呂場行って身ぐるみ置いていきやがれホラホラ」

……いやね、私だって別にお風呂が嫌いな訳でもないし、久し振りに母さんと一緒に入るのも決して悪い気はしないし、こんなしょー

もない小説をわざわざ読んで下さる読者様に向けたサービスシーンがちょっぴりあっても良いと思うよ？ ただね、この家には見た目こそ女性なのに思考や言動が完全にオッサンの人が一名いてね…。

「うおっほっほーい！！ 何じゃこりゃー！？ オイオイ那奈、おめーいつの間にこんなスケベな体に成長してんだよこのヤロー！ 何食ったらこんなに立派なヒマラヤ山脈が出来るんだよ？ おめーコレ、高校生のレベルなんてもんじゃねーぞオイ！？」

「ちよっとお姉！ いい加減にベタベタといやらしく触ってくるのはやめてよ！？ そんなに触りたければ自分の触ってれば良いでしょ！？」

「おめーは背が高けーから服着てるとわかりづらいけどよ、これは間違いなくあたしよりデケエよな？ 実際デケエもんな？ 同じ空手やってて一体何なんだおめーは！？ 最近の若いヤツは本当にすげーぜ、見事なぐらいたわわに実ったもんだなー、オイ！？」

「もうその不快な発言とか触ってくる手つきとか完全にオッサン！ これ絶対にセクハラだよ、本当にもう嫌だつてば！！」

「これだけの上玉、あんなヘタレの翔太ごときにくれてやるのはあまりにも勿体ねーな、オイ那奈、ちよつとばかし揉ませるよ？ 記念すべき山脈頂上到達第一号にはこのあたしの名を刻んでやるぜ！」

「本当バツカじゃないの！？ 山脈とか記念とか、本当にバカ過ぎるよ、お姉！ 別に私はお姉の為でも翔太の為でも、ましてや好きでこんなになつた訳じゃないよ！ これだから嫌だったの、お姉と

一緒に風呂に入るの!!」

もう本当にスケベエロバカハレンチ変態! 二人入るだけですのに狭い湯船なのをいい事に、上から下から次々と隙間をはいくぐつてはお姉の手が私の胸に向かってクネクネ伸びてくる! これはもうセクハラどころか立派な性犯罪だよ、未成年者猥褻行為で通報するよ本当に!?

「なあなあ麗奈ママ、弱冠十五歳の小娘が生意気にもこの有り様だぜ、あたし達のこれまでの美容やらシェイプアップやらの努力って一体何だったんだろうな? バカバカしいよなー、マジでシラけちまうぜ」

「あらそう? 私が那奈と同じぐらいの歳の頃には大体それくらいはすでにあつたもんよ? 最近の日本人女子の平均成長率は諸外国と大差無いほど進歩してるもの、そんなに大騒ぎする事の話でも無いわよ」

「随分と無茶して見栄張るねー? じゃあ何かい、今の麗奈ママは那奈を産んだ時に空気漏れでも起こしてすっかり萎んじまったのかい? いや、あたしが初めて麗奈ママと会った時にはすでに萎んでたからもつと前からか?」

「いちいち茶化す暇があるなら背中の一つでも流してくれたらどうなの? 気が利かない娘ばかりね、こんな事じゃ将来の老後の介護の手が心配だわ」

「へいへい、この渡瀬優歌、喜んでお背中流させて戴きますよ、お

義母様？」

湯船から出たお姉はボディソープのプッシュノズルを乱雑に二、三回ギョツギョツと押してこれまた乱雑にスポンジをグシユグシユすると、あちこちに泡を飛ばしながら母さんの背中を洗い始めた。

エッチな魔の手から逃れられてホッとしたのも束の間、今度は容赦なく私の顔めがけて白い泡が次々飛んでくる。この人の辞書には『丁寧』って言葉が無いのかなあ？

「麗奈ママ、何か以前より背中が小さくなってねーか？ あたし達を育てる為に苦労してこんなになっちまったんだな、涙で目が滲んで前が見えやしねーぜ、チクシヨウめ」

「私が小さくなったんじゃないの、アンタ達がデカデカと大きく育ち過ぎたのよ」

「そっか、そりゃそうだよな、仕事で苦労してる分オフではきつちり遊びまくってんだもんな？ 小さくなるどころか目障りなくらい風貌も態度もデケエデケエ」

「お風呂でも部屋でも、少しは黙ってられないのアンタは？」

「へいへい」

「返事は一回」

「へーい」



母さんの言う通り、最後にみんなでお風呂に入った時と比べると私とお姉は当時の何倍も体が大きくなって、いつの間にか二人とも母さんの身長を追い越していた。私に至ってはお姉はおるかついに父さんよりも背が高くなり、渡瀬家一番の高身長となってしまうた。正直、父親より背の高い娘って世間的にどうなのよ？ ってちよつとコンプレックスに思っていた時期もあつたけど、翔太も順調に背が伸びてるので最近はまだあまり気にならなくなった。ちなみに、いづみさんはおおよそお姉と同じくらいの背格好。

背の順をつければ私と翔太が並んで一番高く、次に父さん、そしてお姉といづみさんで一番小さいのが母さん。大体小夜と一緒にいるかな。意外に渡瀬夫妻、お互いとも態度に似合わず身長だけは周囲より若干低目なんです。

だからちよつと不思議に思う。私は父さんと母さんの実の子なのに、こんなに背が高くなったのは一体なぜなんだろう？ これじゃまるで私の方が血の繋がっていない養女みたいだ。本当は私とお姉、逆だったりして？

「母さん、今回は何日ぐらいこっちに居るの？」

「そんなに長居はしてられないわ、たった二ヶ月程度よ」

「に、二ヶ月？ そんなに居るの？」

「そんなに、ってどういう意味かしら？」

「……いや、あの、いつもは一週間くらいですぐにまた海外に行っちゃってて寂しかったから、今回はたくさん一緒にいられるなー、って思ってた……」

ええ、もちろん本音半分嘘半分です。母さんと色々と話が出来るのはとても嬉しい事である反面、先程みたいな父さんとの激突が二ヶ月間毎日続くのかと思うと軽く鬱状態になりそう。アレを約二十年間耐え続けてきたいづみさんはやっぱりすごい人だなあ……。

「私のワークスチームの研究開発機関が入っていたオーストラリアの工場が一時的に閉鎖状態になってね、施設機材を全てドイツの本部に移転する間の仮休暇みたいなものよ、本当は休んでる暇なんてこれっぽっちも無いんだけどね」

「えっ？ オーストラリアの工場って私達も小さい頃に行った事のあるあの工場？ どうして？ あんなに大きなテストコースまである工場が閉鎖しちゃうだなんて……」

「ニュースも新聞も見ねーお子ちゃまはこれだから参っちゃうよなー？ しょーもねーバラエティ番組や漫画ばっか見てたらオツムの弱いアホの子になっちゃうぜ、那奈？」

私の素朴な疑問を軽く茶化したお姉は、自信満々の表情で手振りをつけながらウンチクを並べ立て始めた。その解説はとも高校三年間連続で保健体育以外の教科の通信簿オール1を取った人とは思えない饒舌振り。

「現在この地球上の世界各国は百年に一度の未曾有の大不況に陥っているんだぜ？ 日本やアメリカ、ヨーロッパみてーな経済発展大

国だけの話じゃねえ、オーストラリアだって十分やべーんだよ、ましてやその工場の生産メーカーはおめーも知ってる通り日本の企業なんだから一緒の事さ、世界全体で需要が減ってたから販売数減少による生産ラインの停止はもちろん、現地では労働者が一千人単位の量でリストラされてんだ、この最悪の景気じゃ工場閉鎖なんて話、あちこちでザラだぜ？ 当該国のアメリカなんてもつとひでー事になってんだ、今の世の中はそんなしんどい暗黒の時代に突入しちゃったのさ」

「……ふーん、テレビとかで薄々は聞いてたけど、そんなにヒドい状況になっているんだ……」

「どうよ麗奈ママ、あたしの解説、完璧だろ？」

「アンタの口から良く未曾有なんて言葉が出てきたもんよね、でもまあ間違っではないし立派な解説よ、ちょっと見直したわ、そんな知識一体どこで身につけたの？ まさか日経紙でも購読し始めたのかしら？」

「いや、ソースは2ちゃんねる」

「あらそう、それはガツカリだわ」

「でも、オーストラリア羨ましいよなー、あたし達が冬の寒さに凍えてる頃、麗奈ママは南半球の常夏でリゾート気分だったんだろ？ 良いなー、あたしもカンガルと一緒にボクシングしてーなー！」

「毎日気温40度越えの灼熱地獄よ？ 外に三十分いるだけで肌は真っ黒け、アンタ間違いないく死ねるわよ？」

「うへへえー！ 怖え怖え、殺人バイオレット光線怖えッス、くわばらくわばら……」

お姉によつて母さんの背中も綺麗に洗い流されて、今度は私が母さんと湯船交代してお姉の背中流し開始。渡瀬家は基本的に年功序列ですから、下っ端がお上のお世話するのは当然の事っスよ。

「ねえお姉、背中向けてるけど明らかに鏡越しで私の姿を見てるよね？ 物凄く不快な視線感じるもん、そんなに妹の体が気になる？」

「いやー、湯から上がった姿を見ても、おめーやつぱりすげーな？ 肌を流れる水の粒がピチピチ弾けてるぜ、女のあたしでもすっかり見とれちまうなあ、ウヒヒヒヒ……」

「……もう、本当にヤダ……」

とはいえ、かく言うお姉だって毎日トレーニングしてる格闘家にしては女性らしいスタイルをキープ出来ていたりする。普通ハードな筋トレとかすると例え女性でもムキムキマツチヨになってしまつて、男性から見ると『ちよつと……』って感じになつちやうものなのだが、不思議とお姉にはそんな感じはほとんど無い。

骨格の作りは格闘家のそれっぽく女性にしては遅しくて、試合に合わせて体重を絞っている為に全体的に筋肉質な方ではあるが、女性として出るところはちゃんと出てるし、肌艶などはきめ細かくとても綺麗。特に肌の白さは抜群で美白美人という言葉が良く似合う。

思考や言動は確かにオッサンそのものだが、その美貌は学生時代に数々の男性を手玉に取ってきただけあるかなりのもので、言葉では

説明しにくい人を惹きつける不思議な魅力と同じ女性の私でも感じ取る事が出来る。魅惑的と言うか、妖艶と言うか……。

底抜けに性格が明るくて楽観的で大雑把、生粋の姉御肌で齒に物着せない発言連発の空気読まない自分優先主義、しかもエッチ下ネタ好きの困ったエロエロ女王様。だから周りの人達は、まさかお姉が生まれつき難病に侵されている人間だとは誰も夢にも思わない。

「……あれ？ お姉、髪の毛伸びた？ 根元の辺りに地毛の灰色が出てきちゃってるよ？」

「うげっ！ マジかよ！？ この前美容室で染めたばかりだぜ！？ 面倒くせーな、ブロンズならしばらくの間は目立たないで済むかと思ってたのによー！」

「うん、外がブロンズで中が白っぽくて、何か柴犬の体毛みたいになってる」

「あたしはハチ公かつーの！？ おめーよ、もつとまともな例えは他にねーのかよ！？」

病名、先天的白皮症。あるいは色素欠乏症。と言われてもピンとくる人は少ないかもしれない。通称は『アルビノ』と呼ばれる、人間が太陽光線に含まれる有害な紫外線から身を守る為のメラニンの合成に支障をきたす遺伝子疾患。本来保護色がつくはずの体の部分の色素を、体内で作る事が出来ない病気なのだ。

「かったりいなー、毎度毎度髪染めんのも時間もかかるし金もかかるし、最近何か勿体ねーような気がしてきてんだよなー、あれこれ色変えるのもそろそろ飽きてきたつてのもあるしよ、もういつそ全部丸刈りして虎太郎ちゃんみたいな坊主になっちまおっかなー？」

「…………お姉、さすがにそれは怖いからやめて…………」

お姉はその日その時の気分によつて髪の毛の色を茶髪や金髪や赤青緑と言葉通り色々変えているのだが、何もこれは趣味や遊び心だけでしている訳では無く、カモフラージュの為でもある。お姉の本来の髪の色は少し濃いめのグレー、初老の人の白髪頭の様な感じの色になっている。これは先程説明した病状の色素不足によるものだ。髪の毛の色だけではない、人間の体は眼球の網膜にも紫外線保護用の色素が使われていて、私達日本人の瞳の色が黒いのもそのせい。しかし、お姉にはその色素を体内で作る事が出来ないのです、その瞳は眼球内の血管の色がうつすらと浮き出て赤茶色に近い色になっている。

同時にこの症状は視力にも大きく影響を与える例が多く、お姉も例外では無く生まれつき人より視力が弱い。その為、普段は視力矯正と本来の眼球の色を隠す目的でカラーコンタクトを着用している。たまにイタズラで真っ青な目にして私達を脅かしたりするからちよつと困る。

冗談はさておき、先程ちよつと触れたお姉の絶品の美白の肌も元々はこれが原因。メラニン色素がほとんど無い訳だから、日光浴をしても肌を小麦色に焼く事は出来ない。それどころか、そんな事をしたら肌は真っ赤に火傷してしまい、最悪の場合は皮膚ガンを発病してしまう可能性もあるのだ。

この病状が重度の患者さんの場合だと、髪の色は真っ白に近いシルバーやブロンズ一色になり同時に視力はかなり弱化し、紫外線防止

の為に防護性の高めな日焼け止めクリームやサングラス、日光を遮断する環境などが必要不可欠となり生活の範囲はかなり制限されてしまう。

また、通常とは違う外見や生活習慣により他の一般健全者から誤解や差別をされる事も多々あり、世間から非情な冷遇を受ける例も後を絶たないらしい。実の話、お姉も幼少時に学校等で同世代の子供達や理解力乏しい一部の大人からイジメられた経験があるそうだ。ただ、ここで更なる誤解を生まない為に私から弁明させて戴きたい。この病気の患者の人達は然るべき環境と手厚い人手の助けさえあれば、十分普通のひとと少しも変わらない生活を送る事が出来る。日のでない夜間なら普通に外出可能だし、軽度の障害なら外目ぐらいでは見分けがつかない人だっている。

実際、お姉も軽度の病状の患者の一人で、ハンデを背負いながらも数年間ずっと世界空手女子王者に君臨し続け今現在もリングの上で健全者相手にバリバリ殴る蹴るやりまくっている。だから、お姉が障害者だと人に話しても誰も信じないし、特別扱いもしない。お姉もそれに満足しているみたいだ。

かく言う私も中学に上がる前にお姉から直接この話を聞いて最初こそ少し驚いたが、そんな事を微塵も感じさせない持ち前の性格の明るさである意味余計過ぎるほどの脅威の行動力を見て自然と理解を深めその事実をすんなり受け入れる事が出来た。

今では普通にお姉とこの病気の話をして、今さっきみたいに髪の毛の染め具合を確認してちよつとふざけながら教えてあげたり、お店で良い日焼け止めクリームを見つけたりするとプレゼントしたりしている。この事は父さんと母さんはもちろん、翔太といづみさんもすでに理解済みだ。

うちの家族は基本みんな何事に対してもオープン主義。それはそれぞれがそれぞれを信頼し合っているから出来る事。だから、何か特別な事があれば必ず報告し合っし、それ以上の不必要な勘ぐりもし

ない。ただし、下手に疚しい隠し事してたら徹底的に追及されるけどね。

ただ、私はお姉に対して最近少し気がかりになっている事が一つある。それはお姉本人に確認するか、一番詳細を知っているはずの父さん母さんの二人に聞けばわかる事。でも、それは出来ない。さつき部屋で私の話を聞いたお姉のあの滲んだ瞳を思い出すと尚更……。

「……オイ那奈、おめー何ボツーとしてんだよ？ 背中洗う手が止まってるぞ？」

「……えっ？ あっ、ごめん」

「つーかおめー今、鏡越しに何見てた？ その視線の先、あたしはしっかりと感じ取ってたぜ？」

「……視線？ 何が？」

「おめーよ、あたしの大事な大事なデリケートな部分を一点ガン見してただろー！？」

「……ちょ、ち、違う……！」

「おめーも翔太に負けず劣らずスケベだなー？ そんなにお姉ちゃんの体が気になるか？ そんなにあたしのがどんなになってんのか知りたいのか？ よーし、じゃあ今振り返ってやるから直で見ろよ、おめーが満足するまで好きなだけ御開帳してやるぜ」

「ちーがーう！ 誤解だから！ そんなところ見てないって！ 見たくもないし見せなくていいから！ こっち振り返らないでよ、気



持ち悪い！」

「うつへっへー、何かこっ恥ずかしいなー？ これでもちゃんと手入れはしてるからキレイな方だと思っぜ？ どうぞこの優歌ちゃんのありのままを見てやっておくんまशीー？」

「だからこっち向くなっつーの！ 背中流せないでしょ！？ お願だからそこから一步も動かないで、この露出狂！」

「……何してんのよアンタ達？ 仲が良いのは結構だけど、まかり間違つて有りもしない道に目覚めちゃったりしないでね？ そんな事になったら、さすがに私泣くわよ？」

「母さんまで……、違うから！ 全部誤解！ 絶対そんな事無いから、有り得ないから！」

「……見てないよ、見る訳ないじゃん？ 見てどうすんのよ？ 違います、私が見てたのはソコじゃなくて、それよりちょっと上の辺り、お姉の下腹部にある手術の傷の跡を見てたの！」

「……興味無いよ、男の人は比べたりするらしいけど、何で姉妹でそんな……。もう、くだらない！ 違うから、絶対誤解です！」

『……あたしはもう、子供を産む事が出来ねーからな……』

お姉はいつも、どんな事でも嘘をついたり誤魔化したりしないで私の問いかけに答えてくれた。私が学習する重ねていく事に比例して

湧き上がる様々な疑問。中には聞くに聞けない踏み込んだ個人的な諸事情や世界に蔓延る納得の出来ない真実、あるいはごく日常的な小さな葛藤や切なく苦しい恋愛の苦悩。

それらの疑問にお姉は全力で、本心で、時には日々ありがちな疑問をわかりやすい説明で、ある時はタブーに近い質問を躊躇せずに赤裸々な言葉で、更にはこちらが聞いてもないのに危険極まりない余計な情報まで、お姉は何一つ包み隠さず私に全てを話してくれた。だから、いつしか私はどうしても自分だけでは調べようが無い事以外は、必要以上にお姉に尋ねる事はしないようにした。私が困った顔をすれば、自然とお姉は私に声をかけてくれる。私が悩んだ顔をすれば、自然とお姉は私を答えに導いてくれる。お姉に隠し事なんて無い。私は本気でそう信じていた。

でも、それは違った。

お姉は私に、重大な秘密を一つ隠していた。

麻美子を取り乱して飛び降り自殺を図ろうとしたあの日、お姉は私の目の前で私より先に他の人間にこの秘密を話した。私が盲腸の手術の跡だと嘘を教え込まれていたこの傷は、お姉の心に深く刻まれている完治出来ない一生物の傷。そんな大事な話を、お姉はその時まで私に教えてはくれなかった。

私を下手に動揺させない為に、確かにそれもあるかもしれない。あるいは父さんや母さんに口止めされていたから、それもあるかもしれない。でも、生まれつき普通の人とは違う難しい持病を持ち、そして実の姉妹では無い事までを自ら話してくれたお姉が、私に隠し事をしてたのは凄くショックだった。

隠し事の内容にショックを受けたのも確かにある。子供が産めないという女性にとって致命的な事実は当時の私には衝撃過ぎて受け止め切れず、そこに麻美子の件や自分の中に湧き上がってきた翔太への想いとかで色々と混乱して頭の中を整理するのに時間がかかって

しまった。

今、それらの問題がほぼ解決されて落ち着いてあの日の事を思い返すと、なぜかとても複雑な心境になる。お姉が私に打ち明けてくれなかった残念な気持ちと、打ち明けてくれるだけの器量が私に無かったのかという空虚感。

そして、お姉に絶対的な信頼を置く事によつて、それまで決して口にせずずっと心の片隅にしまい込んできたある一つの疑問が制御を失い、私の脳裏の中で日を重ねる事に徐々に膨れ上がり、いつしか破裂する寸前まで思考の全てを支配し始めた。それは、普通なら誰もが最初に思う当然の疑問。

『……お姉の本当の両親って、どんな人なの……？』

私は詳しく知らない。

だって、とても深く追及する事なんて出来なかったから。

私が初めてお姉と実の姉妹でない事を告げられた時、当然の質問として私は父さんと母さんにそう尋ねた。すると二人は、少し物悲しげな顔をして返答に困っていた。それでも幼い好奇心からしつこく食い下がった私に、二人が渋々教えてくれた答えは……。

『父さんと母さんの大好きなお友達で、親戚だった人だよ』

あとの詳しい話は二人に上手くはぐらかさせて何も答えてはくれなかった。決して全く血が繋がっていない訳ではない、でも、私とお姉は実の姉妹ではない、それが答え。これ以上は二人を悲しませた

り怒らせるのが怖くて、私は子供ながら雰囲気を考慮して自粛してしまっただ。

『あたしの両親は世界で二人だけ、虎太郎ちゃんと麗奈ママだけだ！ 血が繋がってようとなくなろうとそんな関係ない！ だから、那奈は世界で一番大切なあたしの可愛い妹で、あたしは那奈の世界でたった一人のお姉ちゃんだ！ それで良いんだ、あたしはお姉ちゃんだから全力で那奈の事を守ってやるからな！』

納得出来なかった私が同じ質問をお姉にぶつけると、お姉はいつものあの自信満々の眩しい笑顔で私の頭を撫でてこう言ってみせてくれた。この言葉で私のこの疑問は心の中から姿を消し、あのクリスマス雑居ビルの屋上の時まで長い眠りにについていた。しかし、ついにそれは冬眠から目を覚ましてしまった。鎌首を上げた疑問はさらに別の疑問を次々と巻き込みもつれ合い絡み合って、自分ではもうコントロール出来ないほど巨大化して私を押し潰す。そして、年齢と教養を重ね自らの調査により次第に明らかになってきた真実が、私の心の滑走をさらに加速させていく。

『アルビノ』は先天的の遺伝子疾患。つまり、日々の生活の中で患う病気ではなくその前、産まれる前の母体内で細胞分裂を繰り返して身体を構築している胎児の時点で判明する病気。その発病の原因は大まかに分けて二つ。

細胞分裂中の遺伝子の突然変異か、もしくは遺伝子提供者こと両親のどちらか、あるいは双方が同じアルビノの劣化遺伝子を持っているかどうか。私は少し前にお姉のお供で一緒にかかりつけの病院へ行った時、偶然お姉と担当医の話を立ち聞きしてしまった。

お姉は、親からの遺伝。

父親か、母親か、どちらがアルビノなのかはその話だけでは確認出来なかったが、少なくともその一人はお姉と同じ障害に苦勞しながら生きていたという事になる。そして、その事実は間違いなく、父さんと母さんも知っているはずだ。知っている人はずだ。

その人達の名譽か何か大切なものを守る為に、父さんと母さんはお姉の両親の話を避けているのだろうか？ 私が生まれるずっと前に父さん母さんとお姉の両親との間に何かの出来事があって、それが今でも二人とお姉の心に深い傷跡を残しているのだろうか……？

人には各自それぞれ触れられない過去や記憶がある。それは私もわかる。でも今、私は凄く知りたい。お姉の生い立ちを。お姉の両親の詳細を。父さん母さんとの関係を。どうしてお姉は渡瀬家の養女になり、私のお姉になったのか。そして第一に、その両親は今も健在なのか、それとも……。

知りたい。もつとお姉の事を知りたい。だって、私はお姉を本当の姉と思うくらい心から信賴してるから。心の底から人生の先輩として尊敬してるから。父さん母さんと同じくらい私もお姉に信賴されて、真実を全て打ち明けて欲しい。私は、本当にお姉の事が大好きだから……。

「……おめー今、また見てただろ？」

「……へっ？」

「さっきから間抜けな面してポツーとしやがって、そんなに見てー

なら遠慮すんなって？ 何だったら触ったりナメでもいいぜ？ た  
だし、指は突っ込んだじゃダメよ〜ん？」

「バカッ！ 違うつつの！！」

……まあ、今はあれこれ考えてもどうにもならない。第一、すぐ側  
には母さんもいるし、下手に動いて事を荒らげては身も蓋も無い。  
ここは何とか自分の知りたい欲望を抑え込んで、いつか来るであろ  
う機会に期待するしかないか……。

「那奈、あなた今度の日曜日はどうするの？」

「えっ、日曜日？」

「先週はあの男の代わりにみんなと一緒にサーキット場まで行っ  
たでしょ？ 今回はどうするの？ 私も視察で現地に行くけど、も  
し良かったら同伴する？」

「……うーん、確かにあの様子だとちょっと翔太が心配ではあるけ  
ど、基本的に私はサーキット場やバイクが苦手だし、父さん母さん  
だけじゃなく橋本さんや竹田さんとかもみんな勢揃いで、これでま  
た幹ノ介叔父さんや三島さんまで来たらもうエライ事に……、うー  
ん……」

「おっーと待ってくれよ麗奈ママ！ 悪いけど今週だけはあたしに  
那奈を貸してくんねーかな？ ちよつとコイツに見せてやりてー最  
高のイベントが同じ日曜に控えてるもんでな？」

……おやおや？　これはいきなり願ったり叶ったりのチャンス到来？　お姉から私を誘い出すなんて珍しい。見せてやりたいものってまさか、お姉の両親や出生に関するものだったりして？　これはもしかしたらもしかする？　期待度激アツ！？

「お、お姉！　イベントってなにになに？」

「おつ、珍しく食いつきが良いなー？　まあ落ち着けよ、いいか？　聞いて驚け、来週日曜日はこの渡瀬優歌様の記念すべきプロ総合格闘家通算五戦目の、十分間3ラウンド一本勝負のアニバーサリーマッチデーなんだぜ！？」

「何だ格闘技か」

「何だとは何だてめー！？　あたしはこれでおマンマ食ってんだよ！　立派なビジネスを侮辱すんじゃないやねーよ、ナメた事抜かしてるとジムに拉致して会長達と一緒にてめーをボコボコにリンチすんぞゴラァー！！」

「……ハイハイ、すいませんでした、すいませんでした！　つまり自分の試合を観戦しろって言いたいのね？　総合かあ、テレビでは良く見るけど生で見た事はさすがにまだ一度も無いなあ……」

「おめーには会長に頼んで一日限定ジムトレーナーとして、特別にセコンドサイドの特等席で試合観戦させてやるよ！　おめーが今やつてる顔面突き禁止や立ち技オンリーの空手の世界がいかに甘ったるいお遊びなのか存分に思い知らしてやるぜ！？」

「なら決まりね？ 私は全然構わないわ、たまには優歌に那奈をくれてやるのも悪くはないわね、その方が翔太もデレデレしないで真面目に走るかもしれないし」

「いや、あの、母さん？ 私まだ何も返事してないんですけどー？ つーか、私の所有権って母さん持ちなの？」

「期待しとけ那奈？ タイマン上等、瞬殺KOが持ち前のこの優歌様の驚愕の世界の虜にしてやるぜ！！ 最高で本物のDEAD OR ALIVEってヤツをためーに体験させてやるから覚悟しな！？」

「……私個人の決定権は無視ですか、そうですか、ハア……」

サーキット場が嫌だと言えばお姉に連れ去られ、格闘技観戦が嫌だと言えば母さんに連れ去られるあまりに悲運な私の運命。来週日曜日どうしようかなあー？ 小夜や翼、千夏と一緒に遊びに行こうかなあー？ とか、色々予定考えてワクワクしてたんだけど……。まさか月曜日の時点で全ての企みが潰れてしまうとは。もう立派な誘拐ですよコレ、あーあ……。

「よしっ！ 背中も綺麗サッパリ流して貰えたし、もう一度湯船に浸かって温まっていくかなー？ 麗奈ママ、お邪魔しまっせー！？」

「ちょっとヤダ、狭い狭い！ 本物に狭い浴槽ね、この家はそろそろリフォームする予定とか無いの？ こんな手狭な家にずっと住んでたら私、ストレス溜まって発狂しちゃうわ」



「んな金ある訳ねーじゃーん！ あたしのファイトマネーなんて一般の派遣社員の月給より少ねーし、この家の生活費もいづみちゃんの給料で何とかやりくりしてるようなもんなんだぜ？」

「……あのー……？」

「その家の大黒柱である家主の稼ぎは？ あの男は一体何やってんのよ？」

「虎太郎ちゃんはスーパーサイヤ人みたいな戦闘民族で仕事が大の苦手だからな、職場のバイクで配達出たまま勝手にツーリングに行っちゃったり、会社の金持って夜の繁華街で姉ちゃん達はべらかせて酒飲んで毎日修行に勤しんでるぜ」

「……あのー？」

「何なのよあの男は！？ あの男もとりあえずはバイク便配送会社の代表取締役って肩書きなんですよ？ そんな事じゃあまりに部下が不備だわ、良く倒産したり社員クーデターが起こらずに済んでるもんよね」

「社員の連中曰わく、虎太郎社長様は『御輿』なんだってよ、みんなに担がれてギラギラ光ってりやお役目御免らしいぜ？ 実際、経営管理してんの専務の橋本ちゃんと経理の竹田ちゃんだし」

「……責任者の風上にも置けないわね、正に生産性ゼロのダメ人間、橋本や竹田も良くあんな疫病神御輿を担ぐもんよね」

「じゃあ、そんな疫病神と結婚しちゃった麗奈ママは弥勒様か何かかい？ 軽く後光が射してるぜ」

「天上天下唯我独尊」

「うおっ、まぶしっ！」

「あのー！？」

「さっきからあのーあのーうつせーな、おめーはマラソン解説中の高橋尚子かよ？ 何だよ那奈？」

「……私の背中を流してくれる人は誰もいないの？」

「……アンだつて？」

「……あなた、誰様にもの言つてんの？」

「……自分で洗います、失礼致しました……」

……今の私、軽くシンデレラ状態入ってます。高圧的な母親に意地悪な義姉、寂しいなあ、愛が欲しいなあ。何か背中が寒いよ、湯冷めしちやいそう。一番下っ端って嫌だなあ、小夜じゃないけど私も妹が欲しいなあ……。

……いやいやいや、何もイジめる為じゃないよ？ 私は違うから、二人とは違ってちゃんと優しく接するよ？ 私の小夜への対応とか見ればわかるでしょ？ ほら、小夜は私の妹みたいな……。あー、ちよっと待った。アレが本物の妹だったら辛いなあ……。やっぱり結構です、はい。

「おーい、おめえら！」

「……えっ？ キャアアアアアア！！！！！」

何の前触れも無く、突然開いた風呂場の扉！ 室内に響き渡る、図太い男の声と湯気に写る謎の人影！ 何！？ 誰！？ まさか侵入者！？ 変質者！？ 私は怯え、母さんとお姉がいる湯船に飛び込んだ！ 渡瀬三母子に緊張走る！！

「何ビビってんだよ、俺だよ俺、オレオレ」

「……と、父さん！？」

このご時世にオレオレ言われると余計に怪しいって！ いつの間に帰ってきてたのか？ つーか女性がお風呂に入っているのにいきなり扉を開けるだなんて、どんだけデリカシーが無いのこの人は！？

「扉開ける前にノックぐらいしてよ！？ いくら家族同士とはいえ、ちよつとぐらいは常識弁えてよ！？ 信じられない！」

「虎太郎ちゃん、そりゃねーよ！？ さすがのあたしもビビっちゃまったぜ！」

「……本当、この男はとことんダメ人間ね……」

「ギャーギャーギャーうつせえな、おめえら三人の素っ裸な  
んかとかの昔から見飽きてんだよバカ野郎！ 何が常識だ、この  
家では家主であるこの俺様がルールだ！ つべこべ文句があるなら  
まとめてかかって来いやゴラァ！！」

「……もうヤダこんな父親、反省するどころかファイティングポーズとってこつちを挑発してるし……」

最近の女子高生の父親は家の中で威厳が無くて娘にバカにされてる人が多いらしいけど、だからといってこんな父親も絶対に嫌だ！  
威厳とか言うレベルじゃないよ、好き勝手し放題の暴君だよこの人は！

「で、何の用よ、そのエロバカスケベの疫病神さん？」

「おう、その一人四十路のペチャパイ女のおめえ、さっきのWi  
iどこやった、Wi i？」

「何だよ虎太郎ちゃん、またマリオカートかよ、良く飽きねーな？」

「えっへへー、帰りにゲームショップ寄ってガンダム無双買ったやつたー！ もちろん、領収書は会社の名前でな」

「……父さん、ただだけダメ人間なのあなたは……？」

「よし、お父さん今からザクモグフもドムもビッグザムもサイコガンダムもみんなギッタギタに斬り刻んじゃうぞお！？ オイコラそこの年増女、Wi iどこやったんだよ！？」

「……もうアタツシケースの中にしまったわよ」

「何勝手にしまつてんだよこの野郎、おめえのWiiじゃねえだろ、みんなのWiiだろうが！」

「私を買ってきたんだから私のWiiよ！ 寝ぼけた事言わないで、ドイツに出発する時には一緒に持つて行く予定だからそのつもりで！」

「オイオイ、待てやゴラア！ じゃあ俺のガンダム無双はどうなるんだ、勝手にそんな真似したらおめえ、ゲルググのビームナギナタでギッタギタのメツチャメチャにしてやつからな！？」

「だって自分で会社の金でも横領して本体買いなさい！ 何でアソタの暇潰しの為に私が玩具買い与えなきゃいけないのよ、冗談じゃないわ！」

「女房のおめえが買ったもんは俺にも所有権があるんだよ！ いいか、おめえの物は俺の物、俺の物も俺の物、会社の金も居酒屋の酒もお店のママもミキちゃんもモエちゃんもミーコちゃんもみんな俺の物だ！ 良く覚えとけつつうんだこのクソ野郎が」

「貴様、いい加減に……！」

「危ないからお風呂場で夫婦喧嘩はやめてー！ 母さんも裸のままで言い争つてたら風邪ひくよ！？ 頼むからここは抑えて、ねっ？」

母さんが父さんを貴様呼ばわりする、それは完全戦闘モードに突入

した合図。いまいち呂律が上手く回っていない状況を見ると、どうやら父さんもかなりアルコールが入っている様子。この状態で激突はマズい。湯船のお湯が血の池地獄になっちゃうよ！

「しょうがねえな、Wiiの場所もわかった事だし、今日はこれくらいで済ませてやるぜ！ さって、ガンダム、ガンダム、ガンダム無双！ アムロ、行っきまーす！！」

「扉閉めてけ、このバカ親父！！」

もう本当最低！！ わざとだ、絶対そうだ！！ この人はたまに人がトイレ待ってる時も、用足した後に水流さないで出てきたりくる凶悪確信犯！！ 寒いよもう！ 湯冷めしないように早く扉閉めないと……！！

「親父さーん、何か親父さん宛てに森川歩美さんって人から宅配便来てますけどー……？」

「……えっ？」

「……！？」

「キヤアアアアアア！！！！！」

「ぎよわあああああ……ぐぶっ……！！」

……嘘、嘘お、嘘だあ！？ 何で、何で翔太までここにいるのお！？ 見られた、念の為タオルで隠してたとはいえ、翔太に私の裸姿を見られたあー！！！！！！

「ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤー！！ やつちまつたな那奈！？ まるで王道エロ漫画の展開そのものだな、鼻血噴き出して気絶する翔太のリアクションもベタで最高だぜ！！」

「笑い事じゃないよ、お姉！？ こんなひどいよ、よりによって翔太にこんな姿を……、あーもうヤダヤダヤダ！ 恥ずかし過ぎる！ これじゃ私、お嫁に行けなーい！！」

「どーせおめー、コイツの嫁になるんだろ？ だったら良いじゃないか、いずれは全部おっぴろげる事になるんだからよ、気にすんなって、ドンマイドンマイ！」

「……っーかお姉、タオルぐらい巻きなよ……」

シヨックのあまりにその場で座り込んでヘタっている私の横で、無敵のエロ女王様は一糸纏わぬモロ全開の姿で腰に手を当て高笑い。この人に羞恥心ってものは無いの？ 気を失っているとはいえ、翔太が側にいるつてのに……。

「あららら何よ、翔太のヤツ、何でこんな血ダルマになってんの？ 那奈がブツ叩いたの？ やめてよねー、こんなバカでも私がお腹痛めて産んだ息子なんだからさ……」

「……いづみさんも帰ってたんだ、だったら翔太を止めてくれれば良かったのに、もうヒドいよ……」

「それより虎太郎、何なのコレ？ この荷物の中身は！？」

「あ？ 中身だあ？」

翔太が荷物を持ったまま倒れた事によって、ガムテープで包装されていた段ボールの箱は口が開いて中から何か本のようなものが数冊外に飛び出し廊下に散らばった。その本の表紙に写るのは……、女性の裸！？

「何コレ！？ エロ本ばつかじゃん！？」

「いづみちゃん、コレってアレじゃね、昔懐かしいビニ本ってヤツじゃね？ なあ虎太郎ちゃん、そうだろ？」

「おうおうおう、思い出したぜ！ アレだ、俺が伊豆の孤児院にいた時に新作と一緒に集めてた無修正のヤツだ！ 随分と懐かしいもんが届いたなあ、新作の娘から電話があったのはコイツの件か？ またどうでもいいもんほじくり返しやがって、歩美姉もいちいちこっちに送ってくんなっつーの」

……学校からの帰り際に翼が見せたあの企み顔はこの事だったのか！ お陰で私はこんな恥ずかしい思いを……。余計な事しやがって、あの悪戯チビ子めー！！



「そっぴやアソタ達、高校の時も公園のゴミ箱とか公衆便所からこんなもんばっか拾ってきたたよねー？ 懐かしいなー、私も当時の事思い出しちゃったよ」

「でもよいづみ、コレ半分以上は新作が集めたもんなんだぜ？ アイツのスケベは底無しだからな、この本なんてわざわざ小遣い貯めて古本屋で買ってきて、部屋に隠してたら掃除してた鈴婆に見つかってよ……」

「……オイ、貴様……」

「あ？」

「……れ、麗奈！？」

「……か、母さん……！！」

私達が声がした方を振り向くと、そこにはバスタオルを巻いて恐ろしい怒りのオーラを漂わせて仁王立ちする弥勒様、もとい完全戦闘モードに突入し氷の女王を化した母さんの姿が！

ダメなんですこの人、卑猥、猥褻、野蛮、破廉恥行為は一切NGの完全潔癖人間！ こういうエッチな本とかビデオとかの存在やそれを持つている男の人を、絶対に許す事が出来ない人なんですー！！

「……この段ボールの中から溢れ出るおぞましい下劣な愚物の数々……、何て汚らしい！ こんなもの、こんなもの……！！」

「何だおめえ、おめえも興味津々なのか？ ホレ見てみ、結構保管状態良いだろ？ 二十年三十年経ってもエロ文化は錆びねえもんだよなあ、いやいやエロとは偉大なり」

「……貴様、今日という今日ばかりは……！」

「しっかしアレだなあ、そんな昔の女でもこんなにヤらしい裸してんによ、おめえのその見窄らしい体つきったら情けねえもんだなあ？ せめてこのくらいのボリウムがありやあ俺も每晚満足出来んだけどよお、いやあ、残念だねえ？」

「貴様とこの愚物の存在、跡形も無く完全にこの地球上から消し去ってやるから覚悟しろ、渡瀬虎太郎！！！！」

「やつべ」

もう制御不能。氷の女王から第二形態の『冥界の死神』へと変貌した母さんは自分の脱衣籠からおもむろに拳銃を二丁取り出すと……、つて、拳銃う！！！！？

「母さんソレ、本物じゃないよね！？ エアガンか何かだよね！？」

「地獄に堕ちろ、俗物！！」

「本物やないかい！！！」

耳をつんざく凄まじい火薬の爆発音と共に発射された二つの銃弾は、

信じられない事にマジ冗談抜きで父さんに向かって一直線！　しかし、これまた信じられない事に父さんはそれを後ろに倒れ込みながら寸前で回避！　何コレ？　マトリックスそのまんまやないかい！！

「ハッハッハ！　私には当たらんよアンダーソン君！」

「黙れ鬼畜野郎！　減らず口を叩いていられるのもこれまでだ！！」

次々と母さんの二丁拳銃から飛び交う銃弾がリビングの壁やガラス戸を突き破って破片が飛び散る中を、父さんはまるでダンスをしているように高速で避けまくって廊下に逃げていく！

埒が明かないとばかりに弾切れした拳銃を投げ捨て、次に母さんがリビングに置いてあったアタッシュケースから取り出したのはWi……、じゃなくてマシンガン！？　まさか、これも本物ですか！！！！？

「私に楯突く愚か者め、地上の塵と埃に消えるがいい！！」

「ハッハッハ！　無駄だ、無駄だよアンダーソン君！！」

「本物じゃーん！！　機関銃だけに言う事利かんじゅーう！！　なんちゃって？　何てダジャレ言ってる場合じゃ無ーい！！　母さん、もうやめてー！？」

さっきよりも凄まじい爆音と金属音を上げながら打ち出される銃弾

の嵐は、家の廊下の壁、床、天井をボロボロに破壊してあつという間に蜂の巣に！ その中をあの化け物親父は壁を駆け上がりバク宙しながら玄関へ疾走！ 人間じゃないよ、一体何者なのこの二人は！？

「渡瀬さん！ 遅くなりました、デリバリーサービスのお届け……、って、うわあああああ……！！！」

……あつ、そうだった。私と母さんとお姉の三人分の夕飯、デリバリーサービス頼んでたんだっけ。って、そんな事は今更もうどうでもいいって！ 配達の人、早く逃げてー！！

「楽しかったよ、さらばだアンダーソン君……！」

「逃がすかあー！！！」

銃弾で破壊された玄関から外へ逃亡した父さんを追う母さんは、今度は玄関にあるもう一つのアタッシューケースに手をやり取っ手のボタンを押すと中から……、って言うか、ケースが勝手にガチャガチャ変形し出してアレアレアレー！？

「吹き飛びやがれええええ……！！！」

「それ何てミサイルランチャー……！！！」

母さんから発射されたミサイル二基は一目散に逃げるデリバリーサイビスの車の屋根に乗っている父さんに標準ロクオン！しかし、  
またも父さんはまるで野良猫か忍者のように近くの民家の屋根から  
屋根へと飛び移りそれを回避！代わりに車と民家が大爆発……、  
つて、有り得ない！！ お願いですから無関係な人まで巻き込んで犠牲にしないで下さい！！！！

「残念だったなアンダーソン君！ どうやら私の勝ちのようだ、これは偶然では無い、必然なのだよ！！」

「まだだ！ 貴様を野放しなどにするものか！ 今夜で最後だ、必ずこの手で貴様の息の根止めてやる！！」

「この世界は私のものだー！！！！」

「逃がすか、渡瀬虎太郎うー！！！！」

……母さん、あなたはスタローンかシュワちゃん、あるいはセガルですが？ ここはベトナム？ 沈黙の要塞？ もしくは幻像のマトリックス世界？ つーか、どうやってこんな戦闘兵器を国内に持ち込んだの？ あまりにもキャラ設定が自由過ぎです、ついていません。この夫婦、やっぱり普通じゃないよ……。

「……何？ この一般常識や小説設定を完全無視したやりたい放題のナンセンスコメディ展開……？」

「ウツヒヤツヒヤツヒヤツ！ 麗奈ママのヤツ、バスタオル一枚で虎太郎ちゃん追っかけて行っちゃったよ？　ありや絶対二人とも警察に不審者扱いされて職務質問されるぜ？　やっぱりあの夫婦はいつ見ても飽きねーな、あたしはあんな二人が好きで好きで大好きでたまんねーよ！」

「麗奈が海外でストレス発散の為に射撃場で実弾打ちまくってるって話は本当だったんだ……、ってか、どうすんのこのボロボロに破壊された部屋と玄関……？」

……私が目の前の惨状に啞然としているっていうのに、何でお姉といづみさんはこんな普通に冷静でいられるの？　やっぱり慣れですか？　昔から見慣れた風景ですか？　あーそうですか。今に始まった事じゃない日常茶飯事なんだね、あの二人の大戦争は……。

「……う、ううつ、あれ？　何でいつの間に家の中がこんなメチャクチャに？　つーか、何で俺、ここに倒れてるんだろ？　何だこの血は！？　確か荷物を持っていったらいきなり目の前におっぱいがドーンって……？」

「オッス翔太、目え覚めたか！？　ホレ見ろよコレ、虎太郎ちゃん厳選の無修正もんだぜ！？　ホラホラホラ、すっげーだろ！？」

「ぐはああああああ！！！！　お、おっぱ、グフツ……！！」

「ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒャー！！　翔太のヤツ、また鼻血出して気絶しちゃったぜー！？　やっぱり未成年にコレは刺激が強すぎたか！？　ヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒャー！！」

「……いやいやお姉、刺激が強すぎたのは本の内容じゃなくて多分あのその、頼むからとりあえず女性として隠さなきゃいけない部分はちゃんと隠そうよ……？」

悪夢のような大嵐は全てを呑み込み粉々に破壊して、残されたのは半壊状態の我が家と床に転がる無数の薬莢。そこに倒れる多量出血死寸前のスケベ男とそれを哀れむ男の母親、そして高笑いする全裸の露出狂女とバスタオル姿で完全に湯冷めした可哀想な私。

私の人生最大の失態、それはあの父親と母親の元に娘として生まれてきてしまった事だ。あーあ、もうヤダよこんな家族！ しかも寒いー！ とりあえず風邪ひく前にもうひとつ風呂浴びてこよっかなあ……？

## 第65話 【e s】

「でねー、ドバババー！ ってスゴい音がしたら今度はドカーン！  
って地面が揺れるくらい大きな音がしてねー、驚いてお母さんと  
一緒に外を見たら車とお家が燃えててモクモク黒い煙がたくさん出  
てたんだよー！ その後いっぱい消防車や救急車やパトカーが来て  
夜遅くまで大騒ぎだったんだよー！」

「そんだけのエラい大事故やったつてのに、一人も死人が出えへん  
かったのは不幸中の幸いやったなあ？ 警察の発表会見やとガス爆  
発が何かやったつて話やけど、もしかすると犯罪やテロの可能性も  
拭えないってマスコミの見解もあるらしいで！？」

「いやあーん！ 超Dangerousだわ、何て物騒な話なのか  
しら！？ 地球上でもNo.1と言われてるこの国の治安も、すで  
にその神話は崩壊しつつあるつて事なお！？ 日本が唯一世界に  
誇れる確かな安全性を信じてイギリスからこっちに移り住んできた  
つていうのに、こんな事じゃアタシ、怖くてもう一人じゃ外を歩け  
なあーい！！」

「……………何が起きてても変じゃない、そんな時代さ、覚悟は出来て  
る……………」

「どつかで聞いた覚えのあるフレーズですな、航先生？ それよ  
り何より、その爆発は那奈お嬢と翔太の旦那のスイートホームの目  
の前で起こったそうじゃん、二人とも怪我は無かったのかい？」



「……………」

…… 昨晚、渡瀬家において勃発してしまった凶悪猛獣二匹による空前絶後の大戦争は、近隣住民やありとあらゆる人々の心に大きな爪痕を残し、今日の朝刊各紙の第一面や各テレビ局の朝のニュース番組のオープニングを堂々と飾っていた。

母さんの無差別爆撃により犠牲になったデリバリーサービスの配達員は即座に燃えたぎる車の中から自力で逃げ出せたので奇跡的に軽傷で済み、同時に爆破され火事になった民家二軒も偶然留守中で犠牲者がいなかったのは翼の言う通り不幸中の幸이었다。

しかし、その火事の為に何十台という数の消防車が現地に駆けつけ朝方まで消火活動は続き、県内の警察関係者が全員集まったのではないかと思えるほどの捜査官が目撃者やら調査を行っていた。野次馬も数多く現場に群がり、家の周りは軽くパニック状態になった。もちろん、警察から真っ先に疑われたのは我々渡瀬家の住民。玄関の扉は蜂の巣になってるわ、家の中から大笑いして逃げる坊主の男とそれを追うバスタオル一枚の女の姿を見たという目撃証言はあるわ、室内で鼻から大出血して倒れている少年はいるわでいかにも怪しい雰囲気がプンプン漂っていたのだから仕方のない話。

しかし、そこはこんな大騒ぎにも手慣れているお姉といづみさん、あれだけ家の中に巻き散らかされた銃弾の薬莢を一つ残らず即行で片付けると、自分達も爆発の被害者であると平然な顔をして警察に説明。呆れかえるほどヌケヌケと嘘をつく二人に捜査官達もまんまと騙され、この爆発は周辺のガス漏れによるものだという結論に達したらしい。

とりあえず、出血量がヒドかった翔太は念の為救急車に運ばれ一日ほど様子見で入院する事になり、壊れた家も今日のうちにいづみさんの立ち会いでリフォーム業者の手により修理される予定。結局、あの当事者二人は朝になっても帰っては来ず、この騒動の真相は都

合良く闇に葬られる事になった。

破壊された車や民家も保険が適用される事になり、配達員の怪我も一週間ほどで完治出来るとの事。大惨事にならないだけでも良かった。これにて一件落着、めでたしめでたし……。

つて、んな訳ねーだろおー！！

「翔ちゃん大丈夫かなー？　ねーねー那奈、あの時一体何があったのー？　あたしに教えてー？　ねーねー、ねーってばー、さっきからずっと黙ってないで教えてよー？」

「……！」

「イタイイタイイタイー！　何でー！？　何でそうやってあたしのこめかみグリグリするのー！？　あたし、何も悪い事してないのにー！　イタイよ那奈ー！？」

余計な追及は無用、これが渡瀬家の家訓。例え部外者でも容赦はしない。悪、即、滅。これが私のスタイル。ならば、この騒動が起きる原因を生み出した諸悪の根源も完全に撲滅する必要があるだろう。

「イタタタタ、何でウチまで頭をつむじグリグリされなアカンねん！？　ウチがオマエに何をした！？　そないグリグリ押したら背が縮むやるが、イタイっちゅうねん！　おいオマエら、誰かコイツを止めてやー！？」

「いやあーん、アタシ無理無理、今日的那奈怖あーい！」

「……………触らぬ神に祟り無し」

「つむじをグリグリされると将来ハゲるって都市伝説があるらしいから俺も勘弁だせ！　ゴメンよ愛しのマイハニー、薫ちゃんはいつまでもフツサフサでいたいのだ！」

……………ふう、いちいち癢に障る幼なじみがいると本当苦労する。憎むなら自分達の父親を憎みなさい。あの二人も父さんと一緒にあんな卑猥な本の数々を集めていたのだから同罪です。母さんもいつその事、真中家と松本家もまとめて爆撃してやれば良かったのに。お陰で翔太にあんな恥ずかしい姿を……。少しは私の苦痛を思い知れ！

「うー、まだ頭がギンギンするよー、何で怒られたのか良くわからないよー？」

「そりゃこっちのセリフじゃボケエ！　こんなオマエが何かしらやらかしたからに決まってるやん！　ウチまでとばっちり受けたわ、いつもそうやもん、昔からオマエら二人と一緒にいるとロクな事無いわホンマに……………」

……………これ以上、昨晚の件を振り返るのは不快なだけなので話題を変える事にしよう。実はもうすでに今日の学校の授業は全て終了して今現在は放課後、いつもなら即座に下校する私達がなぜまだ学校内に残っている理由は、爆発事故やテロよりも恐ろしい大惨事を起こす例のトラブルメーカー娘が突然言い出したある一つの決意にある。

『せつかく高校生になったんだから、あたしも何か部活動やってみ  
たいー！』

正直、朝一に小夜からこの発言が出てきた時は何か悪夢でも見てい  
るのかととっさに自分の頬をつねってしまった。この子が部活動？  
授業とは違い、本人のやる気と自制心による言動が問われるコミ  
ュニティー活動をこの子が？ 無理無理無理、絶対無理。出来る訳  
が無い。話を聞いた私は一秒も間を置かずそう即答した。

ただでさえ何事も無い平穏な環境からまるで錬金術のように危険極  
まりない話題や状況を造り上げてしまうこの娘がこれ以上行動範囲  
を広げてまったら、学校内全域が騒動の地雷に埋め尽くされてしま  
う。第一、それを面倒見なきゃいけない他の部員が哀れ過ぎるし、  
下手すれば私までその活動に付き合わされる可能性もある。

だから、私は休み時間や教科別の教室への移動中など丸一日かけて  
小夜を説得した。しかし、反論する私を余所に小夜の目はキラキラ  
と輝きを増す一方で、全く私の話に聞く耳を持たない。そこにこの  
話を面白がった翼や千夏がやんやと煽り、こうして放課後にみんな  
で小夜に相応しい部活動を探す羽目に……。

「……でもさ、小夜ちゃんに相応しい部活動って一体何さ？ この  
薫ちゃんのスーパードンキーコング並みの頭脳をもってしても、そ  
の答えは全然アイドンノウなんスけど？」

「小夜が少しでも運動神経が良かったら、何の迷いもなく陸上部に  
スカウトしちゃうんだけどなあ？ 足は遅いし、スタミナも無い  
し、それに跳び箱も跳べなければ逆上がりも出来ないんでしょ？  
いくら何でもそれじゃみんなと同じ練習にはついていけないわよね

え〜？」

「確かにそうやるなあ、コイツ相手じゃ千夏大好きのあのヘンテコ外国人コーチもさすがにお手上げやる？」

「お黙りShut up！！ そんな話してたらまたどこからソフィーがアタシを追って飛んでくるかもしれないじゃない！？ 昨日のあの後、アタシは三時間もみっちりトレーニングされたのよお！？ んもおうこんなの懲り懲りだわ、今日だって最後のホームルームが終わってFast restでみんなの所まで逃げてきたんだから！」

「ソフィーは〜ん、お探しの三島千夏はここに居まつせ〜！？」

「Fuuuuuck！！ You suck！！ I'm buckin' at you！！」

「うわっ、めっちゃキレとる！ 怖いっのう、怖いっの〜う！ ソフィーは〜ん、この練習嫌いのなんちゃってアスリートからウチの事を助けてや〜！？」

後ろでドタバタ追いかけてっこしてるチビ子とビッチ女は放っておくとして、確かに小夜に体育系部活動はまず無理な話。陸上はおるか、バレーやバスケットなどの球技なんてやらせたらボールがどこ飛んでいくかわかんないし、それが関係ない人間に当たって怪我させる恐れも十分に考えられる。

剣道や柔道なども持ち前のミラクルパワーで有り得ない防具の壊し方をしたり、相手に致命的な大怪我を負わせてしまう可能性もある。空手だって同様、私だって小夜と闘うのは何してくるか想像つかない

いので怖いくらいだ。

卓球もダメ、野球もダメ、新体操もレスリングもセパタクローも力バディもダメ。とにかく対戦相手がいるスポーツはその相手が危険な目に遭うから全部ダメ！昔公園でやってた鉄棒の逆上がりの練習でさえも上げた足が幼児に当たって大怪我させたくらいだもん、体を動かす部活動は絶対に禁止しないとダメッ！

「……っ！か第一、小夜は一体どんな部活動がしたいのよ？それがわからないと私達もどんな部を捜せばいいのか全然わからないし……」

「うーんとね、面白くって楽しくって、それとみんなでワイワイ出来て楽しくって、それで三年間ズーと続けられるくらい楽しくって、それからうーんと……」

「……もういい、もうわかったから、楽しきや何でも良い訳ね……」

……とりあえず、各教室でやってる文化系の部活動をそこらかしこ当たって色々体験入部させてみて、後は本人に気に入ったヤツを選んで貰うしか方法は無さそうだ。でも、例え文化系と言えどもともてもこの娘に相応しい部活なんてあるとは正直思えないのだが……。

「じゃあ、先ずは茶道部！小夜、ちゃんと正座して静かにするんだよ！」

「足痺れたー！それに宇治金時みたいに甘いのかと思ったらお茶が苦すぎるよー！」

「……やっぱりそうなるよね……」

この娘に平常心や作法なんてものを求めた私が間違っていた。気持ちを切り替えて先に進もう。次は小夜も最近結構趣味でハマってる家庭科調理部！

「きゃあー！　コンロから凄い火柱が立ってるー！　火事よ火事！  
！」

「何でホットケーキを作るだけでこんな真っ黒な煙が上がるの！？  
すぐに消さなきゃ、消火器はどこー！？」

……他の部員の皆様、大変失礼致しました。この子には自宅以外で料理しないようキツく言い聞かせときますので……。気を取り直して次、放送部なんかどうかな！？

『あーあー、ただいまマイクのテスト中……、ってあれ？　このボ  
タンって何だろう？』

ジリリリリリン！！　ウーウー！！　ピーポーピーポー！！　フ  
アンファンファンファン！！

「きゃあー！　学校内で火事が起こってるー！」

「みんな逃げろー！ 火事だぞ火事ー！！」

『……あれ？』

『何で緊急避難用サイレンのボタンなんか押してんのよ、このバカッ！ー！』

『痛いよ那奈ー！ 何で頭叩くのー！？』

……校内の全生徒の皆様、大変失礼致しました。今のは誤報です。調理室の小火騒ぎはすでに完全鎮火してますのでご安心下さい。放送部の皆様、大変ご迷惑おかけしました。もう二度とここにこの子を連れてきたりしませんから……。

「……じゃあ、次は美術部」

「あたし、絵を描くのだーい好き！ 今から那奈達みんなを似顔絵描いてあげるね！ ほら、上手でしょー？ 見て見てー！」

「……何やねん、このピカソの『ゲルニカ』みたいな気色悪い絵は？ ウチの顔なんて最悪やで、コレ絶対『ムンクの叫び』やん？ どないしたらこないな訳わからん呪いの絵が描けんねん？」

「……っ！ か、あの二人は一体何やってんの……？」

「Hey, everybody? 全国のTeenのスーパーアイドル、泣く子も見とれるこの世界のChinatsu Mishii



maが喜んであなた達のデッサンモデルを引き受けてあげるわ！  
どう、キレイでしょ？ 美しいでしょ？ セクシーでしょ？ も  
っと熱い眼差しを投げかけてくれてもOKよ、みんなもっと見て見  
て見て！？ Look me！！」

「ワアオ！ 千夏ちゃんたらそのミニミニなスカートから飛び出る  
二本のおみ脚がベリーベリービューティフルでとってもセクスイー  
！ もう我慢出来ない、薰ちゃん今すぐその太ももに頬ずりチュッ  
チュッしたいでヤンスよ女王様！！」

「……………他の部員から大ヒンシュクを買わない内に、さっさとこ  
こから立ち去った方が無難かと……………」

「……………航、悪いけどあのバカ変態二人を大至急回収してきてくれる  
？」

もしかしたら、小夜にはもっと地味で活動範囲の狭い陰気な部活の  
方が合っているのかもしれない。出来るだけ動きが少なくて済む部  
活、もっと日の目の当たらない校舎の下階へ……………。

「……………囲碁将棋部か、ここなら地味だしそんな大騒ぎにはならない  
かな……………」

「よし、これで……………、何だっけ？ 上がり？ ゴール？ リーチ  
？ チェックメイト？ ポンジャン？ ヘキサゴン？ 何て言うん  
だっけ？」

「何でチェックメイトが出てきて王手の言葉が出てけへんねんコイ

ツの頭は？」

「それより今、飛車が相手側の歩と自分側の歩の駒二つ押しのけて真っ直ぐ進んで行ったの見ちゃったんですけど？　しかも小夜ちゃん今、先に相手から王手かけられてるんだよね？　こんなスーパ―ミラクル戦術、薰ちゃん見た事ありません！」

「……もう出てけ！　って空気が部室全体に漂いまくってるね、お邪魔しました、失礼します……」

……次は、漫画部？　何ソレ、何の部活動やってんのここ？　読むの？　描くの？　何か怪しいけど、まあいいや。とりあえず体験入部だけ……。

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴオー！！　スタープラチナ・ザ・ワールドオー！！　オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアー！！！！！」

「いちいち声出して読むなっつーの、このバカ小夜っー！！！」

……即行で追い出されてしまいました。やっぱり小夜に地味で静かな部活なんて場違いだったみたい。そりゃそうだよな、さっき図書部員もやらせてみたら棚にあった本を全部床に落として周りからスツゴい殺意の目で睨まれたし……。あと校内で行ってない場所は体育館ぐらいかな？　体育館でやってる文化系部活動と言えば……？

「……よりによって演劇部とはねえ……」

「おうおうおうー！ この右肩に刻まれた桜の紋所、まさか見忘れたとは目に入らぬかー！ こちらにおられる方は暴れん坊將軍なるぞー！ 頭が高い、控えおろー！ 成敗！ カツカツカー！！」

「……あのー、今僕達部員が練習してるの、シェイクスピアなんですけど……？」

「……あちゃー……」

……もうダメだこりゃ。万策尽きました。結論、真中小夜に相応しい部活動はこの世に一つも存在しません！ 相応しい相応しくない以前に他の部員の大迷惑になっちゃうからダメだって、絶対ダメ！！

「小夜、もう帰ろう？ アンタに部活動なんてやつぱり無理だよ、そんな事させたら私達までこの学校の全生徒から大批判されちゃうってば」

「えー！ そんなのヤダヤダヤダー！ あたしも部活やりたいよー！ せっかく高等部に進学したんだもん、夏休み中のオープンキャンパスや文化祭で色々イベントやりたいもん！ 絶対ヤダ、部活決まるまであたし帰らないー！！」

「そんな駄々こねないでさ、今まで通り俺達と一緒に下校すりゃそれで良いじゃん？ これからも薫ちゃんはお夜ちゃんに楽しい放課後タイムをバンバン提供しちゃうぜ？」

「そうよお小夜、部活動って何も楽しい事ばかりって訳じゃないのよお？ 色々苦勞しなきゃいけない事もいっぱいあるしい、遅くまで学校に残って準備しなきゃいけない事だってあるんだから！ 小夜には学校終わった後に遊んでくれる麻美子と瑠璃ちゃんって言うBest friendがいるんだから、それでVery goodでしょ？」

「ヤダヤダヤダー！！ 麻実ちゃんや瑠璃ちゃんとも遊びたいけど、一緒に部活動もやりたいのー！！ ヤダヤダ、ヤダったらヤダー！！」

…… あーあ、ついには体育館の床に座り込んで足をジタバタと猛抗議、完全にグズリモードに入っちゃった。小学生の頃はこんな事を毎日やらかしては私と翼で苦勞しながら家まで送ってたっけなあ。最近は瑠璃の存在もあってこんな醜態見せなくなってきてたのに、久々に子供帰りしちゃったか……。

「もうええ！ ホンマ、オマエのワガママにはほんとウンザリやわ！！ 那奈、これ以上構ってやる必要無いで？ こんなクソガキ、昔みたいに無理矢理引きずり立たせて家に強制送還させればええねん！！」

「…… うん、もうしょうがないね、校舎内全部の教室回って全ての部活動をお試し体験させた訳だしね？ やるだけの事はやったもん、もう帰ろう！」

「ヤダ！ ヤダヤダヤダヤダヤダ、ヤダったらヤダー！！」

「泣いたってダメなものはダメッ！ 小夜、潔く諦めなさい！ もうこれ以上、他に行く場所は一つも残って無い……！」

「……………ある」

「……………えっ、航？」

「……………別館の一階」

私と翼でジタバタ暴れる小夜の両手を引いて強引に立たせようとしていると、さつきまでほとんど喋っていなかった航が突然ポツリと私達まだ立ち寄っていない場所を教えてください。でも、別館の一階って何かあったわけ……？

「あのなあ航、あそこの一階やなんて清掃員の事務室と倉庫室と、あとはゴミ収集車や弁当屋の車の搬出入口ぐらいしかあらへんやないかい！？ せっかく満場一致で帰るって決まったんやで、余計な事言つてこれ以上小夜に過度な期待させるなや！？」

「……………事務室の奥に第二音楽室がある、そこにはまだ行ってない」

「……………第二音楽室？ 何それ？ そんな教室の存在なんて私、今初めて聞いたよ？ ねえ千夏、アンタはママの千春さんから色々この校舎の事を聞いているはずだから詳しいよね、そんなのあったわけ？」

「うっん、アタシも全然知らな……い！ 確かにママからこの校舎の詳しい話は色々聞いているけど、第二音楽室なんて今初めて聞いた

……」

私達がその教室の存在に頭を傾げていると、スケベて変態な茶髪男が何かを思い出したように手を叩きベラベラと喋り始めた。それは第二音楽室の存在が明らかになると同時に、私と翼にはとても聞き捨てならない余計な情報まで織り交ぜられた話だった。

「……あつ！ あるある、あつたあつた！ 俺さ、入学式の日に翔太の旦那と一緒に校舎内を探検しててさ、廊下で可愛い先輩の女の子見つけて階段下りてる時にスカートからパンツ見えないかな？ って後を追ったんだよ、そしたらその別館の一階の奥の教室から楽譜置くヤツ、あの黒くて三脚みたいなヤツを持って行くの見たぜ！ アレ音楽室だったんだな、どうりであんなもんが中から出てきた訳か、なるほどね！」

「……おいコラ薫、可愛い女の子とかパンツ見えへんかとか、一体全体何の話やねん？」

「……翔太も一緒だったって言ったよね？ どういう事なのか詳しく説明して貰える？」

「……いや、それはあの、そうですね？」

「まあ焦る事無いがな、体育館から別館の一階までは結構距離あるしな、そこまで行く最中に全部洗いざらい吐かせてやるやさかいに覚悟しいや？」

「ちなみに私達の取り調べ方法は、アンタも良く知ってる通り体罰

拷問スタイルだからそのつもりで、指の骨の一、二本ぐらいで済めば良い方だと思いなよ？」

「オーウ、ノオーウ！！ 捕虜虐待は世界各国共通でジュネーブ条約により全面禁止されてマゝスよゝゝ！？ 人権侵害ハンタゝイ！ 道徳無視ハンタゝイ！ ちなみに薫ちゃんはハンタゝイ！ なんかって？ ああ、痛いですう！ お願いだからすね毛をプチプチ抜くだけはヤメてえゝゝ！！」

……とりあえず、翔太の刑罰執行は病院から帰ってきてからにするとして、一応その第二音楽室つて所にも行ってみるとしよう。ただ、音楽室の部活動と言えればお決まりのブラスバンド部は全くその音楽室は使用していないんじゃないかと私は思う。

なぜなら、私達は先程ブラスバンド部がもう一つの音楽室で練習していたのを目撃しているからだ。私達も普段授業で使用していて、中学の頃のオープンキャンパスの時に麻美子がピアノを弾いて啓介さんと井上さんが突然現れたあの音楽室だ。

多分、授業でも第二音楽室の方はほとんど使われていないかもしれない。女子生徒が音楽機材を持ち出したと言う薫の証言から推測するに、最早そこはタダの倉庫と化している可能性が高いかも？

誰も人なんていないと思うけどなあ。でも、小夜を完全に諦めさせるにはやっぱり行くしかないかなあ？ このまま駄々こねられるよりマシか。やむを得ないね、かつたるいけど行きますか……。

「あー！ あった、あったよ那奈！ 航クンの言う通り、事務室の奥に音楽室があるよー！！」

「うわっ、ホンマや！ こんな所に音楽室なんてあったんかい！？

航、オマエ良うこんな場所知つとつたなあ!？」

「……………入学式の日、交付された書類に載つてた校舎の見取り図を見て覚えた」

「……………それだけで覚えてたの？　へえー、航つて意外と記憶力あるんだ？」

「それよりも那奈あ、ここつて入り口の鍵つて開いてるのかしらあ？　扉の窓が小さいからはつきり見えないけど、部屋の中の電気は点いてないみたいよあ？」

音楽室と言うだけあつてその外見は他の通常教室とは異なり、廊下側には窓が一つも無く壁は小さい穴の開いた板の中に消音材のようなものが入っていて、扉も壁と同じ構造になつていて非常に分厚そうに見える。もちろん、室内からは物音一つ聞こえてこない。やっぱり誰もいないのかな…………？

「……………あれ？　鍵、開いてるよ？」

「ホンマかいな那奈？　つて事は、誰か中におるうちゅう事かいな？」

「ヤダア、何かアタシ、怖くなつてきちゃった……………」

「音楽室には様々な霊現象や都市伝説が報告されているからねえ？　薫ちゃんの都市伝説、信じるか信じないかはあなた次第！　誰もいない音楽室に響く謎のピアノの音、恐る恐る扉を開け中を覗くと、



そこには！」

「……………野良猫が入り込んで、足で『ネコふんじやった』を演奏中……………」

「アハハー！ 航クン、それ全然怖くないよー？ ネコさんかわいーい、あたしそれ見てみたーい！」

「…………オチがしょーもない！ それより小夜、これで最後だよ？ これで誰もいなかったらワガママ言わないでちゃんと諦めなさいよ？」

「うん、約束する！ これでダメだったらちゃんと諦めて、麻美ちゃんや瑠璃ちゃんと遊ぶー！」

「……………本当かなあ、どうかねえ……………」

……………ひとつ通りオチがついて場がシラケたところで、面倒だけこの音楽室で部活動をやってるのかどうか確認しますかね。どうせ中はガラクタが散らばっていて人っ子一人いないもぬけの空なんだろうけどね……………。

「……………失礼しまーす……………」

カラオケボックスみたいに分厚くてちよつと重たい扉を開けると、千夏の言う通り室内は照明が消されていて、真っ赤に夕暮れた空の明かりが校舎外側の広い窓から床に向かって差し込んでいた。中は

私が想像してたほど散らかってではなく意外と綺麗で清掃されている様に見えた。

しかし、やはり教室の奥には穴が空いて使い物にならなくなった大太鼓やフォークギターが無造作に置かれていて、机の向きや並び方も四方八方バラバラになっていた。とてもここで部活動をやっている雰囲気は微塵も感じられない。

「……やっぱり、ここには誰もいないみたいだね……」

「ほなら、もうこれでおしまいかな？ 帰るで帰るでさっさと帰るで！」

「……うー……」

「あのー、また小夜ちゃんが泣き出しそうになってるんですけどー？ どうしましょったらどうしましょー？」

「ダメよお、薰ちゃん！ そういう事を言うから余計に小夜が泣き出しそうになっちゃうのよお！？ ほら、見てご覧なさい！ 今にも大きな瞳から大粒の涙が零れ落ちそうで……、ああんもおう！ 小夜が可哀想ー！！！」

「オマエが一番小夜を煽ってんねん、千夏！ せつかくカタが着いたんやからもうこれ以上事を荒らすなや、オマエらはホンマにいい！！」

「小夜、約束したよね？ ここでダメなら諦めるって約束したよね！？ 部活動なんてやらなくても楽しい事は他にたくさんあるんだから、今日はもう我慢しなさい！」

「……うう、うーう……」

「小夜！ 返事は！？」

まるで子供みたいに、つーか本当に子供なんだけど、小夜は口をへ  
の字にして唇を尖らせ、またもグズリモードに突入してしまった。  
あと一言、私が怒鳴りつけたら間違いなく小夜は泣き出すだろう。  
長年の勘、顔見りやわかるもん。

そうならない内にさっさと撤収しますかね、一度泣き出すとあやす  
のに大変なんだもんこの娘は。こりゃ家に帰った後、母親のあづみ  
さんは小夜の機嫌直すのに苦労するだろうなあきつと？ もしかす  
ると、私も小夜が泣き止むまで付き合わされそうな予感が……。

「……ヒツ！ えっ！？ 嘘っ！？ イヤアアアアアア！！！！  
」

「えっ！？ ちょっとちょっと何なにナニ！？ 何があっ  
たの！？ ちょっとやめてよ！ 今、叫び声上げたの誰！？ 千夏  
！？」

「……Oh, my god! Oh, my god! Oh, my  
god! Oh, Jesus! Help, help me, p  
lease……!!」

「一体何やねん千夏！？ いきなりそない大声出したらこっちまで  
ビビるやろお！？ 何があつたんやこのボケエ！？」

「……航ちゃんがぁ、航ちゃんが指差してる方向、誰がいる、何かがいるのおー!!」

「……航が、指差す方向……?」

……確かに、航は黙って前方を見据えて静かに一点を指差していた。その姿だけでも十分くらい怖いっていうのに、その方向はちょうど今、私が立っている場所の真後ろ。正面の五線譜が書かれた黒板の下辺り。ゆっくり振り向いてみるとそこには……、黒いソファーに座っている前髪の長い少年の姿がぁー!!

「きゃああああああ!!!!」

「うわーん!! 那奈、怖いよー!!!!」

「出たぁー!! ホンマに出たぁー!!!!」

「Mooooom!! Help meeee!!!!」

「何で何で何でみんなして俺を盾にして前に押し出すんだよお  
よおよおー!? マジでえー! ガチでえー! 超怖ウィツシュ!  
!!--」

「………人、ちゃんというじゃん」

……へっ? ひ、人? 幽霊じゃなくて? 本当に人? だって、さっきから全然気配無かったし何も喋らないし、前髪が垂れていて

顔がわからないし、本当に生きてる人なの？

「……まさか、これがこの学校に言い伝えてられている第二音楽室の都市伝説か！？そこには将来に絶望して自ら命を絶った男子生徒の死体が今も置かれたままだと言う！！信じるか信じないかはあなた次第！！」

「ぎゃああああああ！！！！」

「なぐんちゃって、ウツソぴょん！」

「……ゴラア薰！！オマエ、ボッコボコにしばらくぞボケエ！！！！」

「……No！No，no，no，no，no！アタシもう限界、早くママの所に帰りたい……！！」

「那奈、怖いよー！あたし、もうワガママ言わないから早く帰ろうよー！びえーん！！」

「……幽霊、じゃないよね？死体でも、ないよね？生きてる人だよ、この人？あのー、生きてますよねー？」

「……………」

「……何にも喋ってくれないんですけどぉー！やっぱり幽霊なんですかぁー！？」

「……………よく見てみなよ那奈、足があるし呼吸してるよ？息で

前髪が揺れてるし」

「……あつ、本当だ、生きてる……」

小夜の部活動探しから始まった校舎探索。私達にとって未知の領域であつた第二音楽室で出くわした、なぜか何も言わずに黙つたままソファ―に胡座をかいて座っている謎の男子。この学校の生徒の様だが、その正体は全くの謎だらけ！

この人物、一体何者なのか！？ 何でこんな場所に一人でいるのか！？ その謎の真相は次回明らかにされる！！ 信じるか信じないかはあなた次第！！ って、もういいからこの手のオチは！ あーあ、最近展開早くて何かスゴい疲れるなあ……。

## 第66話 ロックンロール

「…………あのー、すみません？」

「……………」

「…………参ったなコレ、どうしよう…………？」

…………何も語らず、何も動かず。まるで世間や日常から完全に隔離された存在と化していた『第二音楽室』と言う名の忘却の狭間で、私達が遭遇した前髪の長い謎の少年はこちらの問いかけに一切答える事無くただ黙って座ったままでそこにいた。

彼が腰掛けている黒いソファ―は肘掛けこそついているもののかなり安物っぽく見える粗末品で、背もたれや腰掛けの部分は表面の皮が破れ中からスポンジが飛び出していた。これはもしかすると校長室などで不要になりここに放置してたのを再利用したものなのかもしれない。

しかし、それ以上にインパクトがあり目を引くのはそれに座っている例の少年。せっかくのソファ―なんだから足を伸ばして背もたれに寄りかかれれば良いものを、彼はなぜか足を組んであぐらをかき、背中を丸めて頭を垂れて、まるで座禅をしているみたいに静かに佇んでいる。

あまり綺麗とは言えない首周りがヨレヨレした白の長袖のＴシャツを着ていて、髪型は目元がほとんど見えないほど長い前髪とパーマを失敗したような縮れたボサボサ頭。ズボンだけはこの学校の制服のものなのでどうやらここの生徒である事には間違いなさそうだ。

しかし、その雰囲気は誰が見ても実に怪しい。生きているのかどうかすらわからないくらい身動き一つしないし、寝てるにしてはあまりに体がシャンとし過ぎてる。第一、私達がズカズカと室内に入ってきて、目の前で大声を出しているにもかかわらず何の反応もしないだなんて……。彼は一体、何者？

「……Why!? なぜ、なぜなのお!? 今、アタシ達が目の前でこんなに大声上げて大騒ぎしているっていうのに、どうしてこのBoyは身動き一つしないのよお!? んもおう、怖いしキモいしアタシ嫌あゝ!!」

「那奈、このオバケじゃないよね? あたしがワガママ言ったから怒りに来たオバケじゃないよね? 本当はオバケなんていないんだよね? ねっ、ねっ?」

「……返事が無い、タダの屍の様な、これはやはり、この学校に古くから言い伝えられている校舎内をさまよう自殺した生徒の怨霊だ! もしかしたら俺達は、決して生きた人間が踏み入ってはならない死後の世界へと迷い込んでしまったんだ! ここは呪われた漂流教室、不可思議ホラーの第一人者『楳図〇ずお』の世界へようこそ! グワシッ!!」

「誰がま〇とちゃんやねん、オマエは薫ちゃんやろが? 都市伝説やらホラー漫画やら、薰って意外にオカルトマニアだったんやな、スケベで陰気って、最悪やん? キモッ! やっぱりウチ、つき合っのやめよっかなあゝ?」

「ほーら小夜ちゃん千夏ちゃん、ヘビ少女だよ!! オイラの左手は神の左手、右手は神の右手だぜ! ニョロニョロニョロ!!」



「きゃあー！ 薫ちゃん気持ち悪いー！！」

「何すんのよ、このScrubb!! どさくさ紛れてベタベタ体を触つてこないでよ！ You suck!! Fuck off!!」

「イタイイタイイタイです、すいませんごめんなさい謝りますこの通りですから顔引っ掻いたりみぞおちパンチしたりすね蹴っ飛ばしたりつむじグリグリするの止めて下さいお願いします」

エロ変態かつオカルト好きの最低男に脅かされ逆ギレしている小夜と千夏の怖がりコンビはさておき、先程から私は例の男子生徒に何度か呼びかけ続けてみるのだが、やはり返事は一つも返ってこない。近づいて顔を覗き込んでみても前髪が邪魔して目が開いているのかもわからない。寝てるのか、それとも気分が悪いのか？ あまりの無反応に少し心配になってきた。

「……先生か誰か、大人の人を呼んできた方が良くかな？ もし、具合悪くて俯いているんだったら放っておくのもマズいし……」

「……………保健室、連れて行く？」

「えっ！？ そんな面倒やがな！？ どうせコイツ、昼寝しとるだけやろ？ ウチらが余計な事する必要無いがな、放つときやええねん、こんなキモいやツ！」

「そうもいかないでしょ？ これで何か一大事があつたらもつと面

倒な事になるかもしれないだよ、翼？」

「……何やねん、しんどいわぁー！ 何で小夜のアホのお遊び探しに付き合わされた挙げ句にこんな人命救助までせなアカンねん……」

「じゃあ航、片方の脇から彼の体を支えてあげて！ もう片方は私が持つから！」

もし、風邪や熱で体調を崩しているのならば見て見ぬ振りをする訳にもいくまい。とりあえずその場から立たせる為、私と航でうなだれている彼を持ち上げようと両脇に手を通してみた。手がすり抜ける事もなければ死後硬直もしてない。やはり幽霊や死体なんかではない様だ。散々煽りやがって、薫のバカが。

「……ほら、小夜と千夏もいつまでも怖がってないでちょっとは手伝ってよ！ この人、全然自分の力で立とうとしてくれない……！」

「きゃあー！ 那奈、那奈、那奈！ 怖い、怖いよー……！」

「小夜！ アンタ、いい加減に……！」

「Oh, my goooood!! 嫌ぁー!! 目が、目が、目が開いてる……!!」

「……目？」

この世のものでは無い得体の知れないものを見る様に抱き合いなが

ら怯える二人に釣られて、私も恐る恐る抱えている彼の顔に目線をやると、先程まで開いているのか瞑っているのか良くわからなかった彼の両目ははつきりと見開いていて、その目はゆっくりと私の顔を見つめてきた。その動き、まるで映画に出てくるゾンビそのもの！

「きゃあああああああ！！！！！」

突然の事で驚いた私はその場で尻餅をつき、支えていた彼の腕を放して翼と一緒に小夜と千夏がいる場所まで逃げて四人で団子状態になって震え上がった。さっきまで座りっぱなしの彼はしつかりと二本の足で立ち上がったものの、相変わらず何も言葉を発さずそこから身動き一つ起こさない。

謎だらけの男子生徒の理解し難い反応にもう何が何だかわからなくなつて混乱しまくっている私達。しかし、次に彼が起こした行動は更に私達を大混乱させる衝撃のパフォーマンスだった。

「……………君、大丈夫？」

「……………」

航の心配の声が聞こえて無いのか、彼は一言も返事無しで猫背のまま両手をズボンのポケットに突っ込んでかつたるそうに教室の黒板の前に移動すると、右手でチョークを持ち準備運動とばかり軽く背筋を伸ばした。そして急に、黒板に何かを書き始めたのだ。

「……何、コレ……!？」

ガリガリとチヨークが削れる音と共に書き写される様々な記号。音楽室の黒板は最初から楽譜用の五線が引かれており、彼はその中に音符らしきものを次々と記入していく。教科書の楽譜を写しているのではなく、何も見ないで書いているのだ。

驚くべきはその書くスピード。あっという間に一列の五線を音符で埋め尽くしたかと思えば、二段式の上下に動く黒板をスライドさせて次の五線にスラスラと続きを書いていく。その姿、正に無心の極地。音楽担当の教師でもこうも素早くは出来ないかもしれない。

私には音楽の才能が無いので一切楽譜を読む事が出来ない。だから、彼が一体何の曲を書き写しているのかサッパリわからない。しかし、それでも今、目の前で繰り広げられている光景が尋常ではない事くらいは理解出来た。そう感じたのは私だけでないようで、周りのみんなも口を半開きにして呆氣に取られていた。

その時だった。突然音楽室の扉が開いたかと思うと、外からギターのような何かの弦楽器とノートパソコンを持った眼鏡の男子と背の高い肌黒のアフロ頭の男子が室内に入ってきた。眼鏡の方は真面目そうな普通の日本人だが、アフロ頭の方は……、日本人じゃない!？もしかして黒人!？ 南米人!？

「Oi! Como vai!？ Um amigo!」

「口、口ギ、お待たせ……、って、うわっ! 何だよ、もう始まっちゃってるのかい!？」

「caramba! viva Rogi!! bravo!!」

「ブラボー! だなんて言ってる場合じゃないよザビ! 早くパソコン立ち上げてこれ全部入力しないと! ログ、ちよつと待って! まだ消さないでくれ!」

カラフルな黄色と緑にカラーリングされた二本のスティックで机をバチバチ叩きながら、リズムカルにステップを踏んで陽気に踊りまくるアフロ頭を後目に、大慌てでパソコンを開き黒板の楽譜を入力し始める眼鏡男子。彼らはまさか、この不思議な無口男子の知り合いなのか? 何か今、彼の事を『ログ』とか何とか呼んでいたような……?

で、その肝心の彼はそんな二人の姿に見向きもせず、黒板全ての五線譜に音階を書き埋め尽くすと最初に書いた列の音符を消して別のメロディーをガンガン猛スピードで書きまくっていく。どうやら、彼が書いているのは何かの曲の一小節の様だ。一体、誰の何の曲なのだろうか? 音楽の才能の無い私達には全っ然わかりませーん……。

「Katsu, O senhora a tempo?」

「……な、何とかね、ハア、疲れた……」

何の前触れも無く私達の目の前でいきなり始まった難解不明な音階速記大会はそれから約二分ほどであつという間に幕を閉じた。高速タイプ打ちでパソコンに書き写していた眼鏡男子は燃え尽きたように机に突っ伏し、アフロ頭は未だに踊り続けている。

そして、例の彼は用事が終わるとソファーに飛び乗りあぐらをかいて再び無言。何コレ？ この人達、一体誰？ 何者？こんな生徒達、この学校にいたっけ？ つーか、ここって何の部活動やってんの？ その前に、これって部活動なの？

「……あのー、すみませんけど、あなた達は一体……？」

「……え、えっ？ う、うわあああああああ！！！」

「きゃあああああああ！！！」

私が後ろからスツと眼鏡男子の肩に手をかけ声をかけてみると、予想外の驚きの反応した彼は大声を上げて椅子から転げ落ち、それを見た小夜と千夏は怖がってさらに大絶叫。もううるさいよ、アンタ達！ こっちまでビビっちゃうでしょ！！？

「Eh pa! Eu estava surpreso!」

「い、いつの間に！？ 誰だ君は！？ ここに何の用だ！？ 君達是一体、何者なんだ！？」

「うわーん！ 那奈、怖いよー！ 何か頭がモジャモジャのお化けが出てきたよー！」

「Noooooooooo!! キモいキモいキモいキモいキモオーい！  
！ 何なのよ、あのブロッコリーのMonsterは！？」

「きっと、アレは西洋妖怪の首領、バグベアード様に違いない！  
目を見たら催眠術にかかってしまうぞ！ 気をつけるお、鬼太郎  
！」

「猫娘ならともかく、何でウチが鬼太郎やねん！？ つか、何でオ  
マエが目玉のオヤジになっとんねん！？ 裏声キモいわアホッ！」

「……………ぬりかべー」

「あーもう！ アンタ達みんな全員まとめてうるさい！！ 何か  
もう色々ありすぎて何が何だかさっぱりわかんない！ 今からこれ  
までの出来事を整理するから、アンタ達全員五分黙りなさい！ い  
いね！？」

「……………」

「……………って、わざわざ言わなくてもさっきからずっと黙りっぱなし  
の人間も若干一名いるけどね……………」

とりあえず、人の問いかけに全く反応しない無口クンと何語喋って  
んのかさっぱりわからないアフロ頭外人はパスするとして、見た感  
じではまともな会話が出来そうな眼鏡クンから接触を図った方が良  
さそう。一体、彼らはこんな人気の無い場所で何をしているのだろ  
うか？

「……………勝手に教室に入ってきてごめんなさい、実は私達、この子に相  
応しい部活動がないか校舎中を散策してたところで……………」

「……ぶ、部活動？ 何だ、入部志望の人達だったのか、まさか他に人がいると思ってなかったから正直驚いたよ……」

「初めましてー！ 真中小夜っていいまーす！ クラスは一年のBです！ よろしくお願いしまーす！」

「……ず、随分と元気な人だね、何かテンション高すぎてついていけない……」

どうやら、この教室でも何かしらの部活動をやっているのは確かの様だ。普段使われていないとはいえ音楽室での部活、そして先程の無口クンが黒板に書きまくっていた大量の音符の数々から推測すると、やはりここで行われているのは楽器系の部活かな。念の為聞いてみよう。

「……で、ちなみにここでやってる部活って、一体何ですか？」

「……え、えっ？ ここは軽音楽部、つまりはロックバンド部なんだけど……、何も知らないでここに来たの？ 入部志望の人なんだよね？ 違うの？」

「……ごめんなさい、本当はこんな場所で部活動なんてやってる訳が無いって勝手に思ってたから……」

「な、なるほどね、確かにこんな端っこの教室、普段は誰も来ないからね、この教室の存在すらも知らない生徒もここにはたくさんいるんじゃないかな」



……軽音楽部、よりによってロックバンドっすか。あーあ、最悪。こりゃダメだ。自宅にあるレコーディングスタジオにすら父親の啓介さんから出入り禁止されてる小夜には絶対無理な話だ。両親が共に才能に溢れた音楽家だっていうのに、この子にはそれがちつとも遺伝されてない事だしねえ……。しょうがない、部員の人達とは適当に断りの話を合わせてさっさと退散しますかね。

「……あつ、そうだ！ 名も名乗らないでごめんなさい、私は渡瀬那奈、この子と同じ一年のBクラスです」

「こ、これはご丁寧にどうも、僕は『中島』って言います、学年は同じ一年、クラスはEです、どうぞよろしく」

眼鏡クンの名前は中島か。この音楽室に入ってくるのにかなり慣れた感じだったから、まさか同じ一年生だとは思わなかった。中学の時には会った事無い顔だから、もしかしたら高校からの入学組かな？

「……で、早速で申し訳ないんだけど、この子にバンドとか楽器とかってまず無理なんで、今回は入部は見送らせて貰おうかな、って……」

「……あつ！ せやせやせや！ どっかで見た事あるって思ったらオマエ、ウチと同じクラスの男子やないかい！」

「……ちよつと翼！ 今、私が喋ってんのに……！」

小夜の入部断念の旨を伝えようとした私の横斜め下からでしゃばる様に、迷惑雑音スピーカー人間のちっちゃい小娘が眼鏡クンの前に出て馴れ馴れしく会話を横取りしてきた。せつかく場の空気を讀んで丁重にお断りしようとしたのに、余計な真似すんなっつーの！

「ホレホレ千夏、アイツやアイツ！ オマエが入学初日に『あの眼鏡クン、アキバ系オタクみたいで超キモぉーい！』って言っとったあの男や！」

「……キ、キモい……？」

「やあーだ、ホントだー！ 良く見たらホントに同じクラスのあのキモオタ眼鏡クンじゃない！ こんな外見のクセしてバンドとかやっちゃってるの？ ウッソ、信じられない！ 超 unbelievable!!」

「……キ、キモオタとか、こんな外見とか、ヒドいよ、ヒド過ぎる……」

「……あーあ、本当にコイツら、それほど親しく面識も無い人間に対して礼儀も容赦も優しいさの欠片も無いなあ。確かに私も、最初にこの眼鏡クンを見た時にはちょっとオタク臭さを感じ取ってはいいたけど、それは本人を前にして口に出しちゃ普通ダメでしょ？ ほら、眼鏡クンすっかりヘコンじゃったじゃない……」。

「そっか、オマエ中島って言うんやな？ その面から察するにオマ

「エ、ろくにクラス内に友達おらんやろ？ よしつ、せやつたらウチらが友達第一号になつたるさかい、そのキモい黒縁眼鏡に免じてウチの脳内メモリーにオマエの顔と名前をしっかりと刻み込んでおいてやるから感謝せいや、ナカジマ？」

「……ち、違います、ナカジマです……」

「ハア？ 何やて？」

「ナ、ナカジマです」

「……せやから、ナカジマやろ？」

「ナナナ、ナカジマです！」

「何で軽くキレてんねん！？ せやからナカジマやろ！？ 何が違うねんな！？」

「で、でで、ですからナカジマです！！」

「しかも何で喋り出し一発目がそないドモンねん！？ 少し落ち着いて喋れや！ なあ薫、『ナカジマ』と『ナカジマ』、何が違うんや？」

「ん、どうでしょう、これはいわゆるひとつのメークレジェンド、巨人軍は永久に不滅で一茂はセコムしてますかあ？」

「そりゃ『ナカジマ』やろがボケッ！」

「う、ん、やはりバッティングは構えから脇をキュツと締めて、バ

ツと腰を回してビシッとミートするのが大事です、英語で言つと、バットスイング、スピードアップ、ベリーファストOK?」

「全つ然意味わからへん」

ダメだこりや。唯一ちゃんと話が出来そうなナカジマ、じゃなくてナカシマ眼鏡クンも完全に翼と薫のオモチャとして横取りされてしまった。相変わらず無口クンはソファアに座ったまま上の空だし、残りはさつきから踊りまくっている南米系アフロ頭……。

「……あ、あのー……?」

「Ya! B o a t a r d e !」

「……何語喋ってんだか全然わかんないや、どうしたらいいんだろ  
う、うーん……、マイネームイズ、ワタセナナ、んでー、ユアネー  
ム……、じゃなかった、えーと……」

「N a n a ! 『矢沢あい』のN a n a ! 『木の実ナナ』ノN a  
n a ! 『夏目ナナ』のN a n a ネ !」

「……ハア?」

「ナナ、トツテモ良イ名前ネ! O r e ハ『ザビエル』って名前デ  
ヤンスー!」

「……日本語ペラペラじゃん、つーか、矢沢あいや木の実ナナは良  
いとして、夏目ナナって誰……?」

……何なの、このアフロ頭。さつきから聞いた事の無い言葉を話したり、見た目明らか日本人じゃないから絶対会話が通じないと思つてスゴい緊張してたのに、どうやら私の取り越し苦労だったみたい。しかし、なぜ語尾が『ヤンス』なの？

まあ、そんなのどうでもいいか。言葉が通じるなら話は早い。さつさと入部辞退の旨を伝えて、バンド練習の邪魔にならないようにさつさとここから楽器よりもやかましいこのお喋り連中を退散させないと……。

「……で、部活入部の話なんだけど……」

「オイオイ、聞いたか薰！？ コイツ、ザビエルやて！ こんな面にこんなモジャモジャ頭してザビエルやてよ！ フランシスコ・ザビエルかいな？ 有り得へんがな、メチャメチャおもしろすぎるでコイツ！」

「まさかこんなところで歴史的偉人にお目にかかれるとは！ 日本にキリスト教と鉄砲を伝来したのはアナタですね！？ アナタハ、カミヲ、シンジマスカ？ アタマノ、テッペン、ツルツルデスカ？」

「……だーからー！ 人が喋つてるところを横から割り込んでくるなっつーの！」

また横取りされた！ 眼鏡クンを好き勝手にいじるだけいじって、飽きたら今度は次の獲物にシフトチェンジ。このちょこまかとうざ

つたいチビ女と変態茶髪男、誰か余所で面倒見て貰えないかなあ？  
もう本当に迷惑！

「Sim！『タネガシマ』ニ『キリスト教』ト『火縄銃』を伝来  
シタノハ、Oreノ祖父チャンデヤンス〜！」

「見え見えの嘘つくなやアホツ！ 何やねんコイツ、頭モジャモジ  
ヤでロナウジーニヨみたいな顔してるクセに、日本語ペラペラでア  
ホなくらいノリが軽いウザ系インチキ外国人、ほとんど薫とキヤラ  
被つとるやん！」

「Ronaldinho！！ 我ラノ黄色イ『カナリア軍団』ノサ  
ツカーハ世界最強デヤンスヨー！ KakaモRobinhoモ最  
高ノ『セレソン』デヤンス〜！」

「な、何やと〜！ オマエ、ブラジル人かいな！？ ウチら日本の  
サムライブルーを差し置いて何が世界最強や！ セやったら今から  
ウチと勝負せい、日本のサッカーレベルの進歩、国内最強のフアン  
タジスタのテクニクをウチがオマエに存分思い知らせたるでえ！」

あらま、本当に南米人だったんだこのアフロ頭。ブラジル人ねえ、  
そうと聞いたらサッカー一途の翼は黙っちゃいられないか。しかし、  
ブラジルの人は本当にみんなサッカーが上手なのだろうか？ ちょ  
っと疑問。サッカー大国の血を引く人間を前に興奮するチビ子とは  
別に、金髪変態男はもう一つの華やかなブラジル文化の方に興味津  
々。

「サッカーも良いけどカーニバルもねっ！ やっぱりブラジルと言えぱリオのカーニバルっスよカーニバル！ 小麦色の南米美女がキワどい衣装でおっぱいプルプル腰クネクネのセクスイーダンスはエロさ満点で、もう薫ちゃんはノックアウトっスよ！」

「Let's samba！！ リオノカーニバルも最高二陽気デ過激デ世界最強ノオ祭りデヤンス！ デモ、ブラジルノリゾートハモット過激デヤンスヨ！ ビーチデハ美女ガトップレス姿デ日光浴トカ当たり前ノ光景デヤンス！」

「そうそう、アタシも以前、ママと一緒にブラジルの西海岸のリゾートに遊びに行った時、たくさんの女性がありのままの姿で休暇を満喫していたわ！ アタシもママもついついその気になって真似しちゃったもん、あの解放感はたまらないの！」

「うおおおお！！ 薫ちゃんもヌーディストビーチ行きてえええええ！！！！！」

「いやあゝん！ 薫ちゃんったら、そんなにアタシのトップレス姿が見たいのお？」

「いや、千夏ちゃんはあるまり、うん、何となく想像つくからどうでもいいや」

「何よソレ！ どうでもいいとか想像つくってどういう意味なのよお！？」

「薫はオマエなんかに興味ないって事やボケエ！ わかつとるで薫、やっぱり薫はウチの天真爛漫なありのままの姿を見たいって事やねんなっ！」

「翼つて、わざわざトップレスになって見せるだけのものがあるの  
おゝ？ 絶対現地で迷子扱いされると思っただけどおゝ？」

「じゃあかあしいわボケカスどアホ！ 放つとけやこのクソビッチ  
女が――！」

……以上、アフロブラジル人を取り囲むチビ女と変態茶髪とセレブ  
ビッチのたわいもない雑談をお届け致しました。一体誰かどのセリ  
フを喋っているのか全部わかる貴方はもう『Be Ambitio  
us――！』一級です。かなりのマニアです。重病です。インターネ  
ットも程々にして、たまには外の空気でも吸ってリラックスしまし  
ようね。お薬出しときます、お大事に。

「ねーねーナカシマ君、このロックバンド部は、ナカシマ君とザビ  
エル君とあのモップみたいな髪の毛したあの男の子の三人でやって  
るのー？」

小さい頃から慣れ親しみ、自宅のスタジオでも毎日の様に見慣れて  
いる演奏楽器に囲まれているせいか、さっきまでの部活見学とはま  
るで違うキラキラした目をして小夜の受信アンテナが精度を増して  
いる。さっさと入部を断ってここから離れたいのに、何か余計な事  
したり話したりしないかかなり心配……。

「え、えっ？ あっ、うん、そうだよ、僕とザヒと、あとそこにい  
るロギの三人でスリーピースバンドをやっているんだ」



「ロギ？」

「あ、あそのソファ―に座ってるアイツのあだ名だよ、本名は興  
梶一寿、僕達は『ロギ』って呼んでるんだ」

「コオロギさん？ はい、あたし知ってるー！ コオロギさんつ  
てキレイな音で鳴くんだよー！ リーン、リーンって！」

「そりゃ蟋蟀やろがどアホッ！」

「アタシ、蟋蟀って未だに見た事無いのよねえ、どんな虫なのお？」

「アレだよ千夏ちゃん、夏の田舎のトイレなんかでピョンピョン飛  
び跳ねてるヤツさ！」

「……………それは便所蟋蟀、似てるけど蟋蟀じゃない」

「……………つかアンタ達さ、最初の小夜の大間違いにちゃんと的確な  
ツッコミ入れなさいよ、リーン、リーンって鳴くのは蟋蟀じゃなく  
て鈴虫だって！」

……………最近の若えもんは鈴虫と蟋蟀の違いもわかんなくなっちゃった  
のかい、古き良き日本の時代はどこへやら、おいちゃんは情けなく  
て悲しくて涙が出てくるぜチクショウめ。

……………アレ、何言ってるんだろ私？ 何かお姉みたいな言い回しになっ  
ちゃった。確かに最近、都会じゃ蟋蟀なんて見なくなったなあ。ま  
あ、そんな事今はどうでもいいか。今は蟋蟀じゃなくてこっちの興  
梶さんの話。

「ぼ、僕はベースとパソコンを使ったシンセの打ち込みを担当しているんだ、で、ザヒはドラム担当」

「SIM！ 音楽ノ原点トハ心を跳躍サセル野生ノ『Rhythm』ト魂ヲ奮イ立タセル熱イ『Beat』デヤンスー！ 考エチャダメ、体デ感ジルデヤンスヨー！ Don't think, feel！！」

「オマエはブルース・リーかいな！？ しっかしアレやな、ベースとかドラムは知っとるけど、シンセや何やらなんて物まで使ってやつとるって事は、かなり本腰入れたバンド活動やってんねんなあ？」

「ねえねえ、三人はもうライブとかやった事あるのお？ 将来プロとか目指しちゃってる訳え？ あなた達の音楽センス次第では、アタシ達がこのバンドのファン第一号になってあげても良いわよお？ こんなカワイイ女の子がファンだなんて、凄く光栄な事だと思わない？ ねえねえ、どうかしらあ？」

「……初対面相手にこの馴れ馴れしい失礼な上から目線、このチビ子と腐れビッチの礼儀知らずコンビはどうにかならないのかねえ？ ナカシマ君、完全にドン引きモードになっちゃったじゃない……。」

「……し、将来プロを目指すかどうかは僕らが決める事じゃないので……」

「ゼンブ、Rogeiノ気分次第デヤンスヨー」

「えっ、じゃあ彼がこのバンドのリーダーなの？」

「う、うん、そうだよ、ロギはボーカルとギター担当で、僕らにベイスやドラムの演奏を教えてくれたのもロギなんだ」

「Rogei八音楽ノ天才デヤンス！ 全テノ楽器ノ演奏ヲ小学生ノ時ニマスターシテ、中学生ノ頃ニハオリジナルソングヲ三十曲近クモ作ツタデヤンスヨ！」

「……さ、三十曲！？ じゃあまさか、さっき彼が黒板に書いていたヤツって……？」

「ロ、ロギの新曲だよ、ロギはいつもこの音楽室に一人籠もって、楽曲の創作活動をしているんだ」

「ソノ楽曲ヲパソコンニ写スノガ、KatsutoReノ役目デヤンス！ ソシテ、ソレニ更ニ色々ナ伴奏ヲ加エテ編曲スルノモOre達ノ役目デヤンスヨ！」

「ロ、ロギの楽曲創作はいつも突然なんだ、僕らには良くわからないけど、何か上から、天から降ってくる様にメロディーが思い浮かぶらしくて、それを凄いスピードで黒板や五線紙に書き写していくから、パソコンに転送する僕の作業はいつも大変で……」

ここにきて、まだ一言も喋らずにソファーにあぐらをかいている『ロギ』こと興梠一寿と言う少年。まさかそんな超人的な能力を持った人間だとは思ひもなかった。外見だけだと奇妙な感じだが、もしかするとこれが天才肌ってヤツなのだろうか？ 天才か、私に

はどうもにわかに信じがたい話だ。

人によって何かしらの特別な才能を持ち合わせているのは、私達も以前に目の前で見た事があるから理解出来る。それが音楽の才能なら尚更。私達が見て聴いて感じた才能、それはあの遠藤麻美子の絶対音感の才能。

小夜の父親、世界中で大活躍している偉大なミュージシャンでもある真中啓介ですらも認めた麻美子の音楽センスは私達の想像の域を軽く凌駕するものだった。ほとんど楽譜を見なくても、超難解な曲をスラスラとピアノで弾いてしまう彼女は正に天才と言うべき存在だった。

そんな彼女を知っているからこそ、正直この『ロギ』の実力がどれほどのものなのかどうもピンとこない。突然楽譜を書き始めたあの行動には驚いたが、実際に書いたその曲のメロディーってどんなものなのか？ 果たして実力のほどは……？

「……ねえ、さっき彼が書いた曲のメロディー、今からナカシマとザビで簡単な演奏とかけられる？」

「え、えっ？ 即興かい？ うーん、出来なくはないけど、ザビ、どうする？」

「K a t s u、ヤツテヤリマシヨ～デヤンス～！ ヤット来テクレタ待望ノ新入部員、歓迎ノ気持チヲ込メテ、O r e達ノ実力ヲ見セテヤルデヤンスヨ～！」

二人はそう言うと、椅子から立ち上がって演奏の準備をし始めた。ナカシマは肩に背負っていた皮のカバーから黒一色のベースギターを取り出しスピーカーに音源を繋げてチューニングを開始、ザビは

音楽室の倉庫から様々な大きさの太鼓を引きずり出しドラムセットを組み立て始めた。その姿は一端のミュージシャンって感じた。

「……なあ那奈、オマエ一体どないしたん？ さっきまで早よ入部断ってさっさと帰ろうとしてたやんか？」

「……うん、何か急にこのバンドが気になっちゃってね、何か、麻美子の時と同じ様な、予感って言うか、期待って言うか……」

「わかったわ！ 那奈ったら、アタシを出し置いてこのバンドのファン第一号になろうって企んでいるのねえ！？ そうはいかないわよお、これはアタシが一番最初に見つけた My favoriteなのよっ！！」

「無い無い無い、それは無いから、安心して第一号名乗ってるこのミーハー女」

そして、私達を観客に二人の演奏が始まった。

曲調はかなりハードロックな早いメロディー、それに合わせて二人の演奏も力強いものだった。ドラムにベースだけという編成の為に地味ではあったが、ナカシマのベースの演奏は高校生のお遊びとは比べ物にならないくらい繊細で、ザヒのドラムはブラジル人という国民性からか、とてもリズムミカルで強烈だった。

『……うわっ！ この人達、本物だ……！』

それは麻美子のピアノの時とは少し違う、しかし衝撃的な演奏だった。私自身、さほどプロミュージシャンやバンドのライブ会場に行った経験は無いのだが、小夜と共に人生を歩んできた関係上啓介さんの演奏などを聴いた経験もあり、彼らがプロと比べても遜色ない実力の持ち主である事は直感で理解出来た。

そして、肝心のログオリジナルのメロディーもハンパないもので、とても高校生が作曲したものとは思えない完成度を誇っていた。ハードロックながら、すんなりと耳に馴染んでくる美しい音符の旋律。確かにザヒが言う通り、彼は麻美子とはまた違う音楽センスを持った天才なのかもしれない。

しかし、ベースとドラムだけの即興演奏でこれだけの音楽を奏でる事が出来るなんて、これに本格的にギターやシンセや詩やボーカルが加わったら一体どんな歌が出来上がるんだろう？　うちの学校にこんな凄いバンドがいたなんて、今日の今まで全然知らなかった……。

「……こ、こんな感じにしてみたけど、どうだったかな？」

「……コレ、かなり凄くね？　薫ちゃん、ちょっと感激しちゃったんすけど」

「オイオイ、ナカジマ！　オマエ見た目に似合わず結構やるやないかい！　タダのパソコンオタクやなかったんやな、ウチは見直したで！」

「決めたわ！　アタシ、喜んであなた達のバンドのファンになってあげる！　アタシがファンになるってスゴい名誉な事よ、あなた達のサクセスはもう決まった様なものだわ！」

どうやら、一欠片の音楽の才能も持ち合わせていないおバカ連中も、この演奏に心惹かれたみたいだ。麻美子がプロデビュを諦め主婦業に専念する事になった今、知り合いがプロミュージシャンになる可能性があるのはこの三人？ 今の内に仲良くしとけばライブとかにタダで招待して貰えたりして……？

「ま、まだ仮の演奏だから聴きづらいところがあつたかもしれないけど、これからギターやシンセのサウンドを合わせていけば、これもきつと良い曲に仕上がると思うよ」

「はい、あたしシンセサイザー知ってるー！ 良く井上さんが曲を作る時に使ってるんだよー！ おとーさんは『機械に頼らずもつと生の音源を大切にしろ』って怒ってたりする……！」

「バカッ！ 余計な事を喋るんじゃないよ小夜！」

「い、井上さん？ おとーさん？ 真中小夜さんって言ったよね、君の家族ってまさか、何かの音楽業界関係者……？」

「いやいやいや、ちょっとした趣味が講じて音楽やつてるだけで、そんな関係者とかレーベルとかプロデュース活動みたいな凄い事やつてる訳じゃないんで、あまりこの子が言ってる事を気にしないで下さい！ 本当に何でもないので、アハ、アハハ……」

……まずい。もしかして将来プロを目指すかもしれないバンドメンバー達に、小夜の父親が泣く子も黙る邦楽音楽界の重鎮である事を

喋ったりしたら、変な影響や誤解を与えるどころかプロデビューの為に小夜自身が彼らに悪用されたりする事も十分に考えられる。

「小夜、彼らには絶対に啓介さんやサンライズ・ファクトリーの話をしちゃダメだよ」

「えー、何でー？」

「何でも何もないの！ 絶対に話しちゃダメ！ いい、これは私と小夜の約束！ 破ったら針千本飲ますよ！？」

「針千本やダヨー！ うん、わかった！ 絶対に話したりしない！ 約束！」

幾ら将来有望なバンドとはいえ、私達と彼らは今日が初対面。まだどんな人間が良くわからないのに、こちらの細かい詳細や身分を証したりするのはちょっと危険だ。小夜をこの部活に入れるのはマズいね、やっぱりさっさと退散しますか……。

「……カツ、コード進行が単調過ぎ、曲が生きてない……」

「……え、えっ？ あっ、うつ、そうかな？ ご、ごめん……」

「……ザヒ、もっとリズムミカルに激しくアグレッシヴに、あまり形に拘らないで……」

「アチャッ、手ヲ抜イテタノバレバレデヤンスッ、流石ハR o g e e、



ゴマカシ効カナイデヤンスネ」

突然、教室の端から聞こえてきたボソボソ声。耳を澄まさないと聞き漏らしてしまいそうなその声の主は……、まさか！

「……やっと、喋った」

「……いやあ〜ん！ 薫ちゃん、今聞いた？ 初めて喋ったわよお！」

「ワ〜イ、喋った〜！ クララが喋った〜！」

「何でクララやねん！ クララちゃうわ、ロギやロギ！ 何やコイツ、ちゃんと喋れるんやないかい！」

さっきの二人の演奏にも参加せず、ソファーに座ったまま眠っているのかと思っていたバンドリーダー、遂に開口。つか、ボーカル担当の割には随分と弱々しくて今にもかき消されそうな小さい声。この人、これで本当にボーカルなの？

「……ところで君達は、誰……？」

「……渡瀬那奈です、つか、さっきからずっと名乗ってるんだけど、話全然聞いてないの？」

「……初めまして興梠一寿、です……」

「……やっぱり、何か変だなあ、この人……」

いざ喋ったら喋ったで普通の人とは若干違う言葉のトーンと不思議な口調。いまいち会話が噛み合っていない様な妙な不快感はこれま  
で出逢ってきた人達には無かった感覚だ。また変なキャラが登場し  
てきちゃったなあ。航と初めて会った時とちよつと似ている感じ、  
アッチもボソボソ喋りだし……。

「……あれ？ そういえば航はドコ……？」

「……渡瀬那奈さん貴方に、一つ質問があります……」

「……えっ？ な、何でしょうか？」

「……さっきから後ろでボクの、ギターを勝手に弄っている背の高  
い彼は、誰ですか……？」

「……ハア？」

ロギの言葉に私達が一斉に教室の後ろを振り向くと、確かに背の高  
い坊主頭が壁に立てかけてかる数本の高価そうなギターを持って勝  
手にイジイジ。姿が見えないと思ったら、何やってんのよコイツは！

「ロ、ロギのギターに勝手に触るだなんて！ 彼は何て事をしてる  
んだ！」

「O r a b o l a s ! R o g i が怒ルデヤンスヨ〜!」

「ヤバくねヤバくね? 航先生、それはいくら何でもちよっとヤバくね〜!?」

「ゴラア! オマエ何しとんねん、航!」

「いやあ〜ん、ギターって高いヤツだと十万百万一千万したりするものもあるのよお〜! 壊しちゃったらどうしましょ〜?」

「航! アンタ何する気なのよ!? 今すぐそのギターを戻しなさいってば! 聞いているの、航……!?」

……あれ? ちょっと待った。そういえば航って、ギター弾けるよね? 亡くなったお母さんの形見のフォークギターを持ってたよね? 麻美子が私達にデビュー曲を披露しよう和小夜の家に集合した時、確かちよこつとギターを演奏していた記憶が……。

「あつ、そーだ! ねーねー、ロギ君にナカシマ君にザヒ君、航クンもギターを弾く事が出来るんだよー! いつも妹の瑠璃ちゃんに聴かせてあげてるんだー! 航クン、みんなにも聴かせてあげなよー!?」

「……………了解」

ロギの天才的音楽センスと不思議キャラ、そしてナカシマとザビエ

ルのいまいち絡みづらい人間性と凄まじい実力を備えたスリーピー  
スバンドとの出逢い。これだけでも相当な出来事なのに、それを遥  
かに超えた本当のサプライズはこの後に待っていた。

それは後に、航や彼ら三人だけでなく、小夜の将来までも左右する  
事になる人生のクロスポイント。航とロギの運命の出逢い。まさか  
その瞬間を見届ける歴史の証言者になろうとは、この時まで私達は  
想像すらしていなかった。

## 第67話 Mirror

「……航が、バンド？」

あの第二音楽室でのロギ、ナカシマ、ザビエル三人組トリオとの衝撃の出会いから一日、無事病院から退院して登校してきた翔太は、キツネが豆鉄砲食らった様な丸い目をして私達の話聞いていた。やはりと言つか、予想通りにわか信じがたい様子。

「……まあ、そんな反応になるのも当然よね、実際にその場にいた私達だってまだ頭の中が整理出来てないんだから」

「しかもな、聞いて驚けや翔太？ アイツ、航のヤツ、ウチらに内緒でとんでもない意外な才能隠し持つとんたんやで！ これには流石のウチもビックリ仰天パッパカパーや！」

「普段はあゝんなボツ！とした顔してるクセに、いざとなったら結構ヤルのよね航ちゃんって！ アタシ、先物買いであのバンドのファン第一号になったの、翔太君もアタシと一緒にこれからファンクラブ作らなあゝい？」

「男は多くを語らず黙って事を成す、正に航先生にピッタリの言葉だね！ これこそが脳有る鷹は爪を隠す、加藤鷹は爪を切る、深爪は武器です！ って事なんだぜ翔太の旦那！ 薫ちゃんもそんな違いのわかる大人の男になりたいぜベイビー！」

「加藤鷹全然関係ないやろが！ オマエはもう少し黙っとけやこのどアホ！」

ただでさえ見当もつかない突然の急展開に、更に追い討ちをかける様にチビ子とビッチとエロ変態が矢継ぎ早に好き勝手喋ってくれるお陰で、翔太は脳内の整理がなくなっただのか軽くめまいを起こしてフラフラと立ち眩んでいた。あるいはまだ体内の血液が不足していて貧血でも起こしたのだろうか。

「……那奈、今日って四月一日だっけ？ 俺、もしかして一年近く寝てた？」

「……エイプリルフルどころか、ゴールデンウィークも先週終わりましたが、何か？」

「……だよなあ……、ハッ！ まさか俺はまだ昏睡状態のままで、今見ているこの光景はもしかして夢なのか！？」

「……気絶する前の疚しい記憶を完全に消去してやろうと、帰宅後にあんだだけ何発もひっぱたいてやったのに、まだ夢の中にいるとか抜かす訳、アンタは？」

「……あれ？ そういやそうだ、俺は何で病院に入院する羽目になったんだ？ 確か親父さんに居酒屋に連れていかれて、家に帰ってきたら宅配便の荷物が届いてて、風呂場の親父さんに持っていたらしいきなり目の前に何かスゴいおっきな白い柔らかそうな……」

「……まだ完全にフォーマット出来てないみたいだね、いつその事、思い切って脳内HDDごとバラバラに破壊しちゃった方が良かったかな？」

「……あれー？ もう何が何だか全然何も覚えてないやー？ ここは誰？ 私はどこ？ 見ざる言わざる聞かざる、俺はあの時なーんにも見てませーん！」

うん、それで良し。アレは父さん以外に誰もいないと思い込んでいた私自身の不覚でもあったけど、あんな恥ずかしい記憶は翔太の脳内どころか私の脳内からも消し去りたいくらいだ。もう本当に忘れない。今思い出しても顔が赤くなりそうだ。

あー、何か気まずいなあ。まだタオルで隠していたから最悪の事態は免れたから良いものの、これは女の子としてはかなりのシヨック。普通はそうだよな？ 丸見え全開だったクセにちっとも気にしてないお姉が異常なんだよね？ やっぱりあの人、露出狂なのかなあ？

「……しかしさあ、航がフォークギターを弾いているのは俺も知ってるけど、基本フォークとバンドで弾くエレキとは演奏の仕方が全く別物な訳じゃん？ それに、航自身があんなにおっとりでスローペースな性格だったのに、ロックバンドとか全然まるつきり想像出来ないんすけど……」

「でしょ？ だから私達もひっくり返っちゃうほど驚いた訳よ」

「まさか、あの航がギター弾きながら頭をガンガンシェイクさせてノリノリに飛び跳ねたりするのか？ ソロの見せ場でギターを背中に回して弾いたりとか、仰向けに寝ころんだままギター弾いたりと

か、あるいは興奮が頂点に達してギター振り回して床に叩きつけて壊したりとかしちゃうの？　もしそうだったら俺、多分怖くて泣いちゃうかしんねーぞ？」

「……ロックバンドのギタリストって大体そんなイメージだよ、だから、航の演奏はちよつと意外、いや、かなり意外、つーか奇妙な姿かもしれない……」

「……奇妙？　何か更に訳わかんなくなってきたな、こりゃ本人にちゃんと確認するか実際に見てみないとさっぱり理解出来ないや……」

ところが、その当人である航は、いつもなら休み時間でも教室の席に座ってジツとしているというのに、今日は授業が終わるとそくさどこかに姿を消してしまってるらしい。翔太が授業中に先生の目を盗んで話しかけても無反応。今こうして昼休みの昼食の間でも、あの馬鹿みたいに背の高い航の姿はここにはいない。

「まあ、理解出来へんのもわからなくはないわ、とりあえず今日も連中共は放課後に音楽室に集まって練習するみたいやから、そこで実際に見てみれば一目瞭然やで」

「今日もまた彼らの演奏を聴く事が出来るのね！　んもおうアタシ、今から超ワクワクしちゃう！　ねえ翼、授業が終わったらソッコーでナカシマ君を捕獲しやおうよお！？」

「百聞は一見に如かず、って事だね！　百回のエロ本やエッチなDVDを見るより、一回現物で生のおっぱいを見たり揉んだり顔埋め



たりした方がもう完璧」

「オマエはエロやおっぱいの話以外、例え話が出来んのかこの変態金髪豚野郎！」

はい以上、トリオ・ザ・バカの雑談漫才、どうもありがとうございましたー。さっさと退散して下さい。ほら、その幼稚園児みたいな小さいお嬢ちゃん、カメラ被ってるからさっさと舞台裏に消えて下さーい？ クソビッチとおっぱい星人も邪魔ですよー？ とつとと楽屋に消え失せて下さいー！ 二度と出てこないで下さいねー、この疫病神共めー！

「じゃあよ那奈、小夜がここにいないのももしかして……？」

「航と同伴」

「……こんな訳のわからん話に更に小夜まで絡むのかよ、頭おかしくなりそうだ……」

それじゃあ、ここからは昨日の音楽室であの後何が起こったのかを翔太と読者の皆様に説明を加えながら話を進行していきますかね。突然、ロギのギターを手にした航が、一体私達の目の前で何を仕出かしたのか。もちろん、そのギターで演奏をした事に変わりはないんだけど、問題はその演奏の内容が信じられないほどぶっ飛んでいて……。

「……………了解」

昨日のあの時、小夜のリクエストに応えて航は音楽室の後ろに置かれたバレーボール入れの様な鉄柵の籠から持ち主であるロギの許可無く一本のエレキギターを取り出し、その肩にベルトを通した。そのギターはデザインこそ木目調の地味な物だが、色々と音調を設定出来るポリウームの摘みが何個かついていて、いかにも値段が高そうな代物だった。

持ち合わせている音楽のセンスや才能からしてバンド内の絶対的権力を握っているだろっロギの目の前での行為に、横にいるナカシマとザビは真っ青な顔して航の無礼な行動に啞然とした表情。当の本人であるロギも笑いも怒りもしない人形のような無表情人間なんだそうだが、この時ばかりは少し嫌悪感が雰囲気から滲み出ていた感じだった。

「オイコラ航、オマエなあ、許可も無く勝手に人様の物を手にしたらアカンで！ 兄貴がそないな事してたら小さい妹が真似するで！？」

「そもそも航先生はコード押さえてジャカジャカのおっさんフォーク専門なんだから、いきなりナウでヤングなエレキなんて無茶もいいところですね？ ここはこの薫ちゃん言う事大人しく聞いて、さっさとギターを元にしましょっぜ？」

私達と三人の間に張り詰めた空気を緩和させようと翼と薫が航に歩み寄ろうとしたその時、みんなの心配をよそに航は真っ直ぐ直立の状態で何の前触れも言葉も無くいきなりその指でギターを弾き始めてしまったのだ。何て余計な事してくれるんだコイツは！？　　っと私達は一瞬大慌てになったが、すぐに航の奇妙な演奏方法を見て動きが止まってしまった。

「……………何、あの指……………」

普通ギターをコードで弾く場合は、片方の手の指で弦を押さえ、もう片方の手の指の爪で上から下に弦を弾き音を鳴らす。実際に航も小夜の家で麻美子とのセッションでギターを演奏した時はそう弾いていた。

ところが、今の航は弦を押さえる左手の指四本を六本の弦の上で素早くスムーズに動かし、エレキギターっぽいカッコいいビートサウンドと指先の繊細なテクニクを私達の目の前で披露してみせたのだ。

しかし、それ以上に異様で目を奪われたのは弦を弾く右手の形。本来エレキギターの弦を一本一本弾く為には指の爪より『ピック』と言うプラスチック製の小さい道具を使うが、もちろんこの時航はそれを持ちあわせてはいなかった。だからなのだろうか、航は右手の指を下に向けてギターに添え、人差し指と中指で弦の弾き音を鳴らしていた。

しかも、その演奏するメロディーは先程のナカシマとザビの即興の様な早いビートのロック調な曲ではあったが、エレキギターにしては随分と地味なパート進行。つか、一体何の誰の曲を弾いてるのかも全然わからない。

果たしてこれは凄い事なのか、それとも大した事でもないのか、い

まいち状況が把握出来ない私達は頭に『？』マークを浮かべてその場に立ち尽くしてしまったのだが……。

「……う、うわああああ！！」

その時だった。茫然とする私達の後ろから断末魔の様な大きい叫び声が上がった。私達が驚き後ろを振り返ると、そこには先程演奏したベースギターを肩に下げたまま驚愕の形相で尻餅をつきブルブルと怯えるナカシマの姿があった。一体、何が？

「……ど、どどど、どうして君は、今のこのメロディーを弾く事が出来るんだあああ！！？」

何やら未知の生物でも発見した様に真っ青な顔をして腰を抜かすナカシマ。さっきまで明るく陽気にふざけていたブラジル人ザビエルも目を丸くしてポカン顔。唯一微動だにしないのはロギー一人だけ。一体、航はこの演奏で何をやらかしたのか？ 何かとんでもない事でもやらかしたのか？ 色々な心配事が私の心の中を駆け巡った。

「……ね、ねえ、一体どうしたの？ もしかして航のヤツ、何か悪い事でもした？ だったらごめんなさい！ もう私、これ以上練習の邪悪にならないようにここから出て行くから……」

「……な、何者なんだ彼は？ どうして、どうしてこの演奏を……？」

「何やねんナカジマ！？ 何をそない怯えとんねん！？ 航が一体何をしたっちゅうねんな！？」

「……ひ、一つの間違いも無い、完璧に、全部完璧に弾いてみせた……」

「……えっ？ 何が？ 誰が？」

「……あ、あの人だよ！ 彼、彼は、さっき僕がやったベースの演奏を、一音も狂いなくそのまんま再現してみせたんだよおおお！！」

「……ハア？」

「いまいち事の重大さが理解出来ずに私達が後ろを振り向くと、そこには無表情のままボケツと直立しているいつもの航の姿があった。演奏をそのまんま再現？ どういう事？ さっきナカジマが弾いた演奏を航が真似してみせたって事なの？ 嘘だあ、そんなまさか……」。

「……それは多分偶然たまたま、航もさっきアンタが演奏した曲を知ってたっただけだと思うよ？ そうそう、実はコイツね、こんなとぼけた顔してるクセに何気にフォークギターとか普通に弾けちゃう人間だったりするのよ、だからそんなに驚くほどのものでも……」

「ち、違う、違う違う違う！ さっきの僕の演奏は他の人の曲でもすでに既存している曲でもなく、ロギの新譜から即興でイメージし

たメロデーだよ！　つまり、まだここにいる僕らと君達しか知り得ない、まだ僕しか弾けないはずのオリジナル演奏なんだよ！」

「……えっ？　ちょっと待って、つまりそれって、航はナカシマの演奏を一回聴いただけで……、えっー？」

「こ、こんな事とても信じられないよ！　ロギならまだしも、こんな音楽と無縁そうな同い年の高校生男子が……」

音楽なんて高度な文化に全く知識も才能もない私も、次第に今ここで航がやってのけた奇妙な行動におのき唾をゴクリと呑み込んでしまった。これはただの偶然なのか、あるいは本当に航は真似をしてみせたのか……？

「そ、その君、もう一度だ！　もう一度、僕がこのベースで他の曲を演奏してみせるから、もし全く同じに弾けるのなら弾いてみせてくれ！」

「……………了解」

ナカシマは何やら航に対して挑戦状を叩きつけるようにムキになって、先程のものとは比べ物にならないくらいアップビートなテンポの早い演奏を私達の目の前で披露し始めた。弦と弦を行き交う流れるような指さばきに、アンプから響いてくる重低音はほとんどプロ級の腕前。どうやら航に触発されて本気モードに突入してしまったようだ。

やっぱり、この三人の音楽センスは高校生レベルのものじゃない。

彼らは将来、プロのミュージシャンになっても成功するかも。これはいくらなんでも無理、フォークギターしか弾けない航がこれを真似出来る訳がない。私達が対等に敵う相手じゃないよこれは。絶対無理無理無理……。

「……………覚えた」

「……………へっ？」

ナカシマの全開本気モードの演奏をジッと見ていた航は、一言ポツリそう言うつと視線をギターに落とし両手の指を軽く弦の上に置き、『ワンツー』とか『1、2』などの掛け声も何も無しにいきなりさつきと同じ弾き方で演奏をし始めた。そのギターから聴こえてきたメロディーは……。

「……………う、嘘だあ！ そんな、まさかあ！？」

「今さつき、ナカシマが弾いた曲調にそっくり……、つーか、まるつきり同じ！？」

とても素人では出来る訳のない、目で追いつかない程素早い指さばきだったナカシマの演奏を、航は体の大きさ同様の長い指でまたしてもいとも簡単に真似をしてみせる。しかも指以外は直立したまま身動き一つせずに。

さつきも言ったが、ベースギターとエレキギターでは音の高さが全然違うので音程そのものには差があるのだが、奏でるリズム、弦の

押さえる場所、演奏方法は二人とも全て同じ。一つの狂いもない。まるで、鏡に写しているのかと錯覚してしまうほど……。

「こ、こうなったら僕も一切加減しないぞ！ 最上級レベルの演奏を見せてやる、コレまで真似出来るものならやってみる！」

完全に闘志に火がついたナカシマは己の音楽センスと演奏テクニックを航に見せつけるように、前回二つまでの人差し指と中指で弦を弾く弾き方とは違い、親指を叩きつけるような変わった弾き方で激しく力強い演奏を披露してみせた。

後々本人から聞いた話によると、この弾き方は専門用語で『チョツパー』と呼ばれる最高難度のベーステクニクらしく、プロのベースリストが曲の間奏の部分でソロプレイをする時に良く使う技なんだとか。会得するにはかなりコツを掴む為の練習が必須で、もちろん素人がいきなり演奏出来るレベルじゃない、との事。

実際、そのテクニクの高度さは素人である私達も聴いていて度肝を抜かれるほどの凄まじいもので、私達はロボットの様に早く正確に動くナカシマの両手の指に視覚を奪われ、足の裏からお腹の底まで揺さぶられるようなサウンドに聴覚を占領されて啞然としつしまった。

「Wao！ 超Cool！ Excellent！！ 何よあ、ナカシマ君ったらオタク顔して結構やるじゃない！ やっぱりMusicianってカッコイイわよね、アタシ、ナカシマ君となら付き合ってあげても良いかもぉ〜！？」

「オイ千夏、これマジでメツチャハンパないで！ まるでライブハ



ウスや、やっぱり生演奏は腹に響くなあ？ 何かこう、魂が揺さ……、アカン、何かウチ、急にトイレ行きたなっただわ、ちよつと失礼……」

「おやおや翼ちゃんったら、重低音にお腹刺激されてしい～しい～でちゅか？ それじゃあ薫パパと一緒にトイレまで行つて両足持つてあげまちょうね～、いっぱい出すんだよ？ ほら、しい～しい～」

「ついてくんなやこの変態鬼畜ロリコン茶髪野郎！！」

「ぶへええええっ！！ 嗚呼、今日も今日とてつばピーの顔面蹴りはパンティ全開でとってもセクスイ、薫ちゃん、痛気持ち良くてスツゴい幸せ……」

音楽室の床に鼻血垂れ流して倒れているド変態男を余所に、ナカシマは全ての力を出し尽くしたように額から汗を流して息を切らし航の姿を睨みつけていた。『どうだ！』と言わんばかりの険しい表現。確かに、プロのミュージシャンのライブ会場とか行つた事のない人間が聴いたらビビってしまうほどの迫力ある演奏だった。

「……こ、これはさすがに真似出来ないだろう、いくら君が普段からギターに慣れ親しんでいるとしても、こんな演奏まで出来っこない、出来る訳がない……！」

男・ナカシマ、完全燃焼。航を睨みつけていた鬼の様な形相は、呼吸が整ってくるにつれ勝ち誇った自信の表現へと変わっていく。こ

こまでやられたらもうしょうがない、ナカシマの勝ちだろう。コード演奏しか出来ないはずの航がこんな超絶テクニクまで真似出来る訳がない。その場にいた私達全員がそう思った。

……が、しかし、次の航の起こした行動に、私達もナカシマも、側にいたザビエルも驚愕のあまり声を失い、遂にはこれまで何も行動を起こさなかったロギでさえも触発される事を余儀なくされてしまったのだ。

「……………全部、覚えた」

「…………えっー、嘘だあー!？」

私が驚きの声を上げたのと同時に、航は親指を使った演奏方法、難易度トップクラスであるはずの『チョッパ』を難なく弾き始めてみせたのだ。しかもそれは先程と同様、ナカシマが奏でたメロディーとリズムと全く寸分の狂いの無いもの。

ギターの弦とベースの弦では見た目からして全然違う。ベースの方が低音を出す仕組みになっている為、ギターの弦より若干太めに出てくる。つまり、親指で弦を弾くにもかなり力加減が違って同じ演奏をするには相当繊細な技術が必要と思われるはずのこの技を、またも航は見よう見真似だけでやってのけてしまったのだ。

「……………そ、そんな……………、僕だって三年間毎日練習してやっとマスタ―したテクニクなのに……………」

「Eh pa! コノノッポノオ兄サン、トンデモナイ人デヤンス

ネ〜！ コンナ凄イ人、R o g i以外デ始メテ見タデヤンス〜！」

「そ、そんな悠長な事言ってる場合じゃないんだぞ、ザビ！ 演奏テクニクだけの話じゃない、僕が今弾いた三曲は全部僕らの曲、ロギが作曲、編曲した完全オリジナル曲なんだぞ！？ 僕とロギ以外が弾ける訳が無いのに、どうして……？」

この衝撃の一部始終を目の前にナカシマは遂に力尽き、その場にしやがみ込んで両手を床に着き頭を垂れ、側で楽観的態度で様子を眺めていたザビエルも大きな目をさらに見開いて感慨の表現を浮かべていた。かく言う私達もこの展開には冗談一つすら言う余裕も無く……。

「……オイ那奈、これ、エラいこつちやぞ……？」

「……Oh, my god! Unbelievable!!  
一体何なのよお、何者なのよお、航ちゃんって！？ アタシ、何か怖あ〜い！」

「……あ〜、え〜、あ？ はい？ ああいやいや、今の俺にコメント期待しないで下さい、さすがの薫ちゃんもこれにはたまらずアイドンノ〜ウ！」

この三バカお喋りトリオが水を打った様に静まり返るなんて、そうそう滅多にある事ではない。それくらいこの時、航がしてみせた『神技』は想像を絶するものだったのだ。私もしばらくの間は声を発する事が出来なかった。唯一、事の重大さがちつとも理解出来てい

ない天然娘が一名、キャツキャツと声を上げて喜び跳ねてはいたが……。

「ワイワイ！ 航クンスッゴい！ いつもお家で瑠璃ちゃんに聴かせてあげているギターの腕がこんな所でも役に立っただね！ スゴいよスゴいよー！！」

……正式に言えば航がやったのはギターじゃなくてベースの演奏方法なんだけどね。まあ、ギターとベースとバイオリンと三味線の違いが良くわかっていない小夜に説明したところで馬の耳に念仏か。しかし、この航の常識外れの謎の特技は一体何なのか？ 人が演奏したメロディーをそのまま完全に真似してみせるだなんて、これは何か特別な音楽の才能？ 航には音を聴いただけでそれが何の音階がわかるのか？ って事は、これってまさか……？

「航クンはきつと、麻美ちゃんと一緒に全ての音がドレミファソラシドで聴こえてくるんだよー！ これって何て言っただけ？ えーと、『絶体絶命』？」

「バカッ！ 違うわよ、『絶対音感』でしょ！？」

「……ぜ、ぜぜぜ、絶対音感！？」

漢字にして四文字のその言葉を聞いた途端、敗北に打ち拉がれてどんよりと落ち込んでいた眼鏡のベシストとアフロ頭のドラマーが真っ青な顔をして飛び上がり驚きの声を上げた。二人の視線は航と

ソファ―に座り未だ反応を見せないロギの間を忙しく行ったり来たりし、その拳動はソワソワと落ち着きがない。

「……い、一緒だ、ロギと一緒に……」

「……信ジランネーデヤンスヨ、他二モ『ゼツタイオンカン』持ッテル人、初メテ会ッタデヤンス……」

「……えっ？ ちょっと待って、じゃあそこにいる興相、彼も絶対音感の持ち主なの！？」

そうなのだ。このバンドのリーダーであり核と言える人物、興相一寿もあの遠藤麻美子と同じ絶対音感の才能を持った人間だったのだ。突然黒板に楽曲を書き出したあの異端とも言える行動も、ナカシマとザビエルが即興で披露した演奏に聴いただけで改良点を指摘出来たのも、彼が一般人とは違う特殊な才能を備え持っていたからなのである。

「……こんな間近に、麻美子と同じ特別な力を持った人がいたなんて……」

しかも、才能の使い道がわからず宝の持ち腐れ状態だった麻美子とは違い、ロギはナカシマやザビエルの話からして小さい頃から音楽の道一本でやってきた事を考えると、その音楽センスは麻美子以上あるいは比べ物にならないかもしれない。もし啓介さんが彼の存在を知ったら驚くだろうなあ……。

「ねーねー、航くんはこんなに凄いギターの演奏出来るのに、どうして今まであたしや瑠璃ちゃんやみんなに内緒にしてたのー？ 隠し事はダメだよー、瑠璃ちゃんが怒っちゃうよー！」

「……………披露する機会が無かっただけで」

「でも、航くんカッコ良かったよー！ あっ、そうだ！ ねーねー、麻美ちゃんが赤ちゃん産んで元気になったら、また今度みんなで音楽パーティーやろうよー！ 航くんのホントのギター演奏、麻美ちゃんやお母さんに聴かせてあげようよー！」

「……………この程度のもので良ければ」

「うん！ じゃあ約束！」

ちよい待った、ロギどころじゃないよ。もしこの航の才能を啓介さんが知ったら、果たしてどんな反応をするんだろうか？ 絶対音感と言う特別能力ならあずみさんも持っているし、何だろう、小夜の周りにはなぜか音楽に関する人間が集まりやすいのだろうか？ 本人には全くと言っていいほど音楽センスが一欠片も無いのに、本当に不思議な話だなあ…………。

「…………マジかよ、航にも絶対音感があったなんて、三年以上一緒

にいて全然気づかなかったなあ……」

……んで、ここから私の昨日の回想から現在の放課後時間に一度戻る。私の話を横で聞いていた翔太はいまいち信じられないのか非常に複雑な表情をして『うーん』と唸っている。まあ、話を聞くだけじゃ想像がつかないもの当然だろう。私だって昨日の出来事は夢でも見てたのではないかと錯覚してしまうくらいなのだから。

「でもね翔太、それは違うの、航のそれは絶対音感じゃなかったの」

「……ハア？　だって那奈、今さっき……？」

「航のその特技は絶対音感によるものではなくて、別の特殊な才能によるものだったって事」

「……オイ、オイオイオイ、じゃあ何なんだよ一体、また話の真相が全然見えてこなくなってきたじゃねーかよ！？」

「それだけとちゃうで翔太、航のヤツな、こんだけとんでもない事やらかしたクセに、例の三人からのバンドへのスカウト、最初は断ったんねんで？」

「……ハア！？　何でえ！？」

「『興味がない』んですって！　アタシ、それ聞いた時ひっくり返りそうになっちゃったわ！　航ちゃんってやつぱりちよつとCrazyよね？」

「航先生の無気力っ振りは我々一般ピーポーにはもう全然アイドンノ〜ウでございま〜す！ 俺なんてついついその時、無意識に天を仰いで十字切っちゃったくらいだからね！」

次々と周りからもたらされる情報に、翔太の目はクルクルと回りだしもう失神寸前。気持ちはわかる。私達だって昨日、そんな状態になるまで振り回されまくったからねえ……。

「ちよつと待てよ、俺はさっき航がバンドに入ってたって聞いてたのに、それが参加を断ったってのはどういう事なんだよ！？ それに、人の演奏を聴いただけでそれを真似出来たのは、一体航に絶対音感以外の何の才能があるって言うんだよ！？ もう訳わかんねえよ、ちゃんとわかるように何があつたのか最後まで丁寧に説明してくれー！ー！」

「もちろん、最後までちゃんと説明するって、それに、実際に音楽室に行つて見て聴いてみれば全部わかる事だしね」

「……じゃあ那奈、早くその第二音楽室に行つて、昨日の話の続きを俺に教えてくれよ！」

「……うん、でもね……」

「……でも？」

「全部説明すると総数二万文字オーバーしかねないので、とりあえず今回はここまで！」





## 第68話 エソラ

普段は無口で無表情、大きな体の割には存在感が薄く喜怒哀楽の感情すら滅多に表に出さない、まるでアフリカの大地にいる巨大な草食動物の様な物静かな一人の高校生男子が、初めて人前で披露してみせたあまりに意外過ぎる超絶パフォーマンス。  
それまでその存在すらほとんどの生徒に知られていなかった埃臭く冷たい空気が漂っていた第二音楽室は妙な熱気を帯び、室内の雰囲気はあまり感じた事のない不思議な緊張感に包まれていた。

『…………あの航が、絶対音感の持ち主…………？』

航の演奏を目の前で目撃したナカシマとザビエルに音楽室に入ってきた最初の頃の余裕っ振りは影を潜め、ただ呆然と小夜と喋っている航の姿を見つめるだけ。それまでキヤーキヤー騒いでいた千夏と薫も完全に無言になってしまった。翼も緊張の余りかトイレに行ったりきりまだ帰ってこない。

さっきまで楽器の音がけたたましく鳴り響いていた室内は嘘みたくに静まり返っていた。元々は小夜のワガママによる部活動探しのだけの校舎内探索だったのに、こんなとんでもない展開が繰り広げられる事になるとは、一体ここにいて誰が予測出来たであろうか……。

『…………でも、今のこの現状って、ちょっとマズいよね…………？』

航とナカシマの凄まじい演奏対決に私もすっかり頭の中がトリップしてしまっていたが、ここに来た本来の目的を思い出して我に帰り、一気に焦りの感情が脳内を駆けずり回った。そうだった、航の事なんてどうでもいい、小夜でも出来そうな部活動を探さなきゃいけなかったんだ！

「……あのー、ナカシマ君とザビエル君、それに興梠君だったよね？ 何か、友達が勝手な事をしてごめんなさい、みんなの練習の邪魔しちやったみたいで……」

航の件はさておき、先程のナカシマとザビエルの演奏は高校生のお遊びを遥かに凌駕した本格派で、バンドリーダーであるロギに至っては麻美子以上かもしれない絶対音感の持ち主と思われる天才。この軽音楽部、レベル高すぎ。とても小夜が入部出来るような場所じゃない。やっぱりここは早いところ退散しよう！

「……演奏聴かせて貰って痛感しました、やっぱりこの子にはとても無理です、この子や私達みたいな音楽センスゼロの素人が入部なんかしたら、多分みんなの足を引っ張っちゃうと思うんで、今回の入部の件は無かった事に……」

「……え、えっ？ あっ、そうなんだ……、せっかく久し振りに新入部員が来たと思ったんだけど、ちよっと張り切り過ぎちゃったかな……」

「非常二残念デヤンスヨ、女ノ子ノ部員サン来テ、O r e トツテ

モウキウキシテタダンスノニ」

ただでさえ勝手に部室に入り込み、勝手に人様のギターを弾いて、更に下手をすれば彼らのプライドや自信に傷をつけてしまいかねない大暴挙までやらかしてしまう始末。私は彼らに深々と頭を下げてこれらの無礼を謝り、何とか事の収集をつけバ力迷惑なお友達連中をこの場から撤収させようとした……。

その時だった。

「……じゃあ彼は入部、するの……？」

「えっ？」

頑なに沈黙を守り一部始終を見物していた静かなる音楽の申し子、興相一寿ことロギ、遂に動く。明らかに私に対して質問を投げかけているにもかかわらず、その目線の先は真っ直ぐ航に一点集中。私達の姿は眼中に入っていない様子。

突然の質問に意表をつかれた私が返事に焦り何か言葉を発しようとするか否かのその瞬間、ロギはソファアールから飛び上がる様に立ち上がり、姿勢の悪い猫背に両手をズボンのポケットに入れた状態でゆっくりと航の元へと歩み寄っていた。

「……お、おいロギ、一体何を……？」

「……………」

ナカシマの問いかけにも全く返事をせず、ロギは航と小夜の横を無言で通り過ぎると籠の中にある別のエレキギターを一片手でスツと取り出し、再び航と小夜の横を通り過ぎてこちらに戻ってくると先程同様ソファーに飛び乗りあぐらをかいて座り込んだ。

そして、不思議そうにその姿を見つめる私達を気にする素振りも無くギターと側にあるアンプスピーカーに音源コードを繋ぐと、ギターの弦六本をポケットから取り出したピックで鳴らしチューニング作業をし始めた。

「……な、なあザビ、ロギの奴、何を始めるつもりなんだろう……？」

「ソリヤ、ギター弾クニ決マツテルデヤンスヨ」

「そ、そんな事は僕だつて見ればわかるよ！ 何なんだよ、このバンドを設立してから前代未聞の一大事だつていうのに、何でザビはそんなにお気楽でいられるんだよ！？ 僕なんてもう緊張で足が震えてんの……」

「馬鹿馬鹿シイト思ウナヨ、ヤツテル本人大真面目！ Oreノ体ヲ流レル、オジイチャンカラ受ケ継イダ『ラテン』ノ血ガソウサセルデヤンス！ ソンナ事ジャk a t s u、初ライブノ時ニオ漏ラシシチャウデヤンスヨ？ ソンナ事ヨリ、ナナ、Oreの話ヲ聞イテ聞イテ！」

「……バ、バンドの一大事より女子とのお喋りが優先かよ、もうヤダよこのメンバー、お腹痛い……」

リーダーは音楽以外の事柄に無反応、ドラムはアフロの中の脳みそが女っ気一色のお祭り男、どうやら実質このバンドの全てを取り仕切っているのは頭にドがつくほど真面目人間のナカシマのようだ。仕切らなきやいけない立場にあるのってしんどいよねえ。何か凄く苦勞がわかる気がする。

私も毎日、ド天然娘にミニチュア人間雑音機にイングリッシュビッチに電柱男に変態インチキ外国人にもう大変だもん。最近は柔道ゴリラも仲間に参加するようになったし、家に帰れば血に飢えた野獣共が獲物を求めて爪を研ぐ……。あー、何かこっちまで胃が痛くなってきた。

「那奈、Rogiiニハ『チューナー』ナント小道具ハ不要デヤンス、自分ノ耳ダケデ全部ノ楽器ノチューニングガ出来ルデヤンスヨ〜！」

「……耳だけ、聴いただけで音程にズレがあるかどうかわかるの！？ ああ、そうか、絶対音感の持ち主だもんね、それくらい出来て当然なのかな……」

「チナミニ、Oreハ女ノ子ノ尖ッタハートヲチューニングスルノガ得意デヤンスヨ〜！ 那奈ノチョット怖ソウナツンツンシタハートビート、是非チューニングシタイデヤンスヨ〜！」

「……このアフロ馬鹿、薰と同じ対応しちゃっていいのかな？」

「同じ対応？ 地デジ対応？ アンテナ良シ、Oreツヨシ！ 2011年、地デジノ準備才願イシマスでヤンスヨ〜！ デモ、才酒飲ミ過ギテ裸ニナツチャ駄目デヤンスヨ〜、Hohohoh〜!!！」

「問題無さそうね、はい有罪確定、中段廻し蹴りの刑」

「Ai! Wanderlei Silvaモビックリノミドルキ  
ック、OreノHip-CuteニHit! 痛イデヤンス! V  
al ha - me Deus!」

どうしてこうもまあ、外国の血が流れている人間ってというのはこうも腹立たしいほどノリが軽過ぎるのかね。初対面とはいえ、薰同様ここはガツンと思い知らせてやった方が良さそう。もう数発蹴っ飛ばしてやるのかな……? 私がそんな事を考えていた、その時だった。

「……うわっ……!」

何の前触れも無く、いきなりアンプスピーカーから風圧と共にけたたましく流れてきた独特の金属製の機械音。時には鼓膜を突き破るぐらいに甲高く、時には地震のように足元の床から揺さぶられる重低音が音楽室全体に響き渡る。その音源の正体は、ロギが弾くギターの演奏音だった。

「……うわっ、何コレ、スゴい音……!」

スピーカーを最大音量まで全開にしたのだろうか、耳を塞いでいないとしても我慢出来ないほどの爆音は私達の喋り声や周りの物音全

てをかき消してしまった。正直言つて素人には雑音としか聞こえないやかましいギターサウンド、嘘でしょ？　こんなのが天才と呼ばれるミュージシャンの卵がする演奏だつていうの！？

「……や、何……、起こつ、……やつ！？」

突然の騒音に驚いたのか、トイレから音楽室に戻ってきた翼が両耳を押さえながら私に向かって大声で何か話しかけてきた。しかし、何を言っているのかさっぱり聞き取れない。小夜や千夏や薫はもちろん、楽器の音には慣れているはずのナカシマとザビエルまでもが指で耳栓をするほどの大音量。唯一、無表情で涼しい顔をしているのは航一人だけだった。

「……何なのいきなり、何考えてんのよ、あの男……？」

「おおおいいいい那奈あああ！！　ウチがおらん間に一体何があつたんやあああ！！！？？」

「うわっ、うるさい！！　もう演奏終わったんだから耳元で大声出さずに普通に喋れえー！！」

「あっ、ホンマや！　何や急にメツチャ静かになつてたなあ？」

「……絶対わざとだろ、この人間騒音スピーカー女め……」

……あー、耳が痛い。まだ頭がキンキンする。まるでライブ会場の



最前列にいたみたいだ。私も千夏に誘われて小夜や翼と一緒に真夏のライブイベントに行つてあの会場独特の大音量を体験した事があるが、今回のこれはあまりにヒドすぎる。洒落にならない。ほとんど雑音にしか聴こえてこなかった。このロギと言う人物、やっぱり何を考へてるのか全然わかんない。冗談キツいつてアンタは！

「……これ、出来る……？」

「……………」

「……そう、君だよ、君……」

消音加工がされてなかったら間違いなく近所騒動になっていたであろう無茶苦茶な演奏を一つ通りを弾き終えたロギは、さっきの爆音と比べると超音波並みの全然聞き取れない小さいボソボソ声で航に話しかけた。どうやら先程ナカシマにやってみせたあの神業を、今度は自分相手にもう一度やってみろ、という事らしい。

音を聴き取る楽器の種類がベースから航と同じギターに変わり、演奏を真似て披露するには少し条件が良くなったようにも思える。しかし、相手はナカシマとザビエルが『天才』と呼ぶ類い希な音楽の才能の持ち主。耳を塞ぐ事に集中してしまった為、すっかりその演奏テクニクを見逃してしまつたが、やはりかなりのものと予想して良いだろう。

しかも、私には肝心の演奏の音量が大きすぎてロギが弾いたメロディーがどんなものだったのかちつともわからない。それは多分、一緒にここにいる音楽センスゼロのおバカさん軍団も同じだろう。ナカシマとザビエルは聴き取る事が出来たのかな？そして、当の航は果たして……？

「……………凄く難しい」

「……………やっぱり、無理……………」

「……………でも、やってみる」

楽器無しの会話だけだと、遠くの港に停泊する船の汽笛すら聞こえてきそうなくらい静かな二人のコミュニケーション。何か急激に緊張感が緩む。無口な人間ほど別の方法でのパフォーマンスが派手だとは良く聞くが、正にこの二人は典型的な例かもしれない。つーか、そんな事より航、まさかこの演奏までさっきみたいに真似出来るって言うの！？

「……………えーと」

「ちょ、ちよつと航！ 頼むから何の前触れも無くいきなり演奏始めるのやめてよ！ せめて『ワンツー』とか『せーの』とか言えつーの！」

またも全くリズム感の感じられない直立不動状態で、何の掛け声も無く突然始まる航の身勝手演奏。聴いているこっちは毎度毎度タイミングが狂ってかなり不愉快でストレスが溜まる。例えるなら出発動作の振動がヒドすぎる下手な運転手のバスに乗らさている感じだ。しかし、いざ始まってみれば航の弦を行き交うその高速な指さばきに私達は啞然茫然、その光景が映る自分の目を疑ってしまった。ナ

カシマの時より遙かに難しくなっているはずのギターテクニクを、航はものの見事に全員の前で難なく実演してみせたのだ。

「Yes！ いやあ〜ん、このメロディースッゴいCoolじゃない？ アタシが育ったロンドンの本場UKロックを彷彿させるHardなBeat sound！ アタシ、超気に入っちゃった！！」

「そんじょそこらの最近のヘタレバンドが奏でる音楽とは一線違うでこれは！？ 航、やるやないか！ めっちゃめっちゃカッコイイでえ！！」

その演奏メロディーには芸能音楽の話題に一言うるさい翼と千夏も大絶賛。良く見ると、航の右手にはいつの間にかピックが握られていた。どうやらさつき、ギターを取りにいった際にロギがいつの間にか航に自分の物を一つ手渡していた模様。どこぞの違法売人みたい。

それはともかく、まるで流れるような指使いでギターを奏でる航のその姿は、演歌歌手みたいな直立不動状態を除けば一端のギタリストそのもの。あの不器用そう航がねえ、人は見た目だけでは判断出来ないものなんだなあ。私は改めて驚かされてしまった。

「……あの〜、ところでこれって物凄く大事な事なんだけどさ、今航先生が弾いているメロディーと、さつきロギ氏が弾いたメロディーが全く同じものなのかどうか、聞き分けられる人って誰かいるんスか？ 薫ちゃんにはその肝心なところがぜ〜んぜんアイドンノウなんスけど〜……」

そうなんです、そこが一番の大問題。航の演奏が上手いか下手かは別として、今、私達やロギ達が知りたいのは、本当に航には絶対音感の持つ麻美子やロギと同様、聴こえてくる音がちゃんと頭の中で音階として整理されているのかどうか、あのロギの演奏を覚えそのまま再現する事が出来たのかどうかだ。

その前のナカシマの演奏はベースとアンプスピーカーが繋がっていなかったで、生の楽器の音で私達も互いの演奏を自分達の耳でも聴き比べる事が出来た。しかし、今回のロギのはスピーカーからの大音量で聴き取るどころか鼓膜が破れないようにするのが精一杯、どんなメロディーだったかすらも私達には全然わからずじまい。

そこへもって、航が弾いているのはロギと同じエレキギターとはいえずスピーカーを通していないので、聴こえてくるのは弦を弾いた時に鳴る張り詰めた生の金属音のみ。この条件でこの二つの演奏を聴き比べるには私達素人の聴覚ではほぼ不可能。二つのスイカを叩いてどっちが甘いかを聴き分けるくらい無理な話だ。

……と、いう事で、この判定は普段から弦楽器に親しんでいて、物をちゃんと正しい思考で受け止める事が出来る真人間、ナカシマ審査委員長にして貰う事にしよう。

「……う、嘘だろ、ロギのあの高速ギターテクニックまでそのままカバー出来るだなんて、そんなバカな……」

判定、『同じもの』、らしい。私達にはただの雑音にしか聴こえなかったロギの演奏も、普通に弾けばこんなにカッコ良くてシビれる曲だったのか。まさか、これも彼のオリジナルなのかな？ それに

しても、ナカシマの反応は非常にオーバーで一目瞭然なので、音楽の知識の無い私達にはわかりやすくてとても助かる。

「…………じゃあ、次はこれ…………」

そんなナカシマとは対照的で顔色一つ変えずに淡々と演奏を続けるロギ。相変わらず半分寝てるようなボツーとした表情をしながらもギターを弾くその両手の動きは、ちよつと例えが悪いがまるで這いずり回っている昆虫の脚の様に素早く私は何とか目で追っていくのがやっとだった。

そして、また今回も頭の中をグチャグチャに破壊されそうな強烈な大音量。しかも今回は何やらギターのエフェクトを変えたのだろうか、普段良く聴くエレキサウンドとは違い、何かの吹奏楽器みたいな奇妙でちよつとふざけた感じのサウンド。これまた私達にはいまいちメロディーを聴き取りにくい加工がされていた。

「……………やってみる」

ロギの演奏が終ると、二人は無言でアイコンタクトを交わし、ポツリとそう呟くと今度は航が相変わらず何のタイミングも取らずいきなり演奏を開始する。聴いているこちらは何も心の準備が出来ないのでかなり心臓に悪い。さっきのハードロック調とは違いこの曲もファンキーな感じでかなり好印象。でも、やっぱり私達の耳では同じ曲なのかどうか区別がつかない。ナカシマ、出番ですよー。

「……こ、これはもう完全にアマチュアの領域を超えているよ、とても僕がこの二人の間に入り込める余地なんて無い……」

……だ、そうです。じゃあつまりこれも同じ曲なんだね。しかしナカシマも良く聞き分けられるもんだねえ。やっぱり普段から音楽に携わっている人間は、聴覚やそれを情報処理する脳の構造が普通の人と違いがあるのかな。私も少し楽器とかに親しんでいれば良かったかも。

「うわー、航クンもコオロギさんも二人とも良くわかんないけど何かスゴーい！　まるでおとーさんがピロピロピロピロって弾いてるギターみたいだよ、ねー、那奈！」

「……とは言え、小さい頃からずっと間近で音楽聴いてても、誰もがそういう聴覚を持てる訳じゃないみたいね、小夜を見る限り……」

……で、この表情からでは一体何を考えているのか全然読み取れない奇天烈人間の二人のギターセッション、実は何とこの後、約一時間近くぶつ通しで続いたのだ。まずロギが適当にワンフレーズを弾いて、後から航が同じフレーズを弾く。中には私達も耳にした事のある既存の曲もあつたりしたが、ナカシマ曰くほとんどの曲がロギの即興だったらしい。

つまり、航は私達の予測通り自分が既に知っている曲を弾いているのではなく、直前に聴いたばかりの知らない曲を即座に脳内で整理し丸々コピーして弾いているのだ。これはもはや偶然の出来事でも無ければ人業でもない。こんな芸当が出来るのは、やはり航には絶対音感の才能があるからなのか……？

「……い、今日の今まで、少しでもロギに追いつきたいと思って必死に練習してきた僕の努力は一体何だったんだ？ たった一つの才能があるだけで、バンド経験も無い同い年の制度にいと簡単に追い抜かれるなんて……、ヒドいよ、世の中不公平過ぎるよ、あんまりだ……」

「ヘイKatsu、Forca！ ドウセOre達コンナモン、何モ人生悪い事ばかりじゃナイデヤンスヨ、明日ガアルサ、明日ガアル、上手クナクテモバンドヤツテリア、ソレダケデ女ノ子達二ハモテマクリデヤンスヨ！」

「オイコラそのアフロブラジル人、オマエの励ましは気軽に不純で何のフォローにもなってへんぞ？ それよりあの二人、一体いつまでギターやんねん？ いい加減ウチも聴いててしんどくなってきたわ」

「アタシももう疲れちゃったあゝ！ 早くMy homeに帰りたいあゝい！ あんまり帰りが遅いと悪い男に捕まったんじゃないかってママが心配しちゃうゝ！」

「そろそろ夕日も沈んで空は一段と暗くなり、夜行性の動物達が活発化して大量発生しまゝす、そんな薫ちゃんも実は夜行性動物、月夜の晩にはイケない狼さんに変身して美味しそうな女の子達に噛みついちゃうのさ！ ワオーン！」

「いやあゝ！ 何よこの薄汚い野良犬男ゝ！ Don't approach！ Don't touch！ Fuck off！！」

「ベタベタとウチらに抱きついてくんなや、この変態鬼畜犬が！」

「キャーン！」

……いや、本当にマジでもう私も帰りたい。窓から見える空は夕暮れを過ぎて星がチラホラと見え始めているし、ふと教室の時計を見てみれば時間はもう夕方六時を回っている。お腹も空いてきた。もうフルラウンドドロって事にしませんか、両選手？

「……君って、面白いね……」

「………どうも」

何度となく難易度の高いギタープレイを題にあげながらも難なくついてくる航が余程気に入ったのか、無機質一辺倒だったロギの表情は少し緩み、軽く口元には笑みが浮かんでいた。それに対する航もどうやら悪い気ではなさそう。お互い、まだまだやる気満々の様子。困ったね、こりゃ。

「……じゃあ次は逆で、やってみよう……」

「………逆？」

「……そう今度は、君から何か曲を弾いてよ、それをボクが真似てみせるから……」



この会話のやり取りこそが、航の常識を軽く凌駕した謎の行動の数々が一体何の才能によるものなのかが判明する重要なターニングポイントになった。突然のロギからの提案に、今まで表情一つ変えなかった航の言動に微妙な変化が現れ始めたのだ。

「……………」

「……………どうしたの？ さあ、どんな曲でも良いから弾いてみてよ……」

「……せ、戦略を変えてきたか！ さすがはロギだ、そうだよ、ただかだか数年フオークギターを弾いてきたくらいの人間に、僕達のロギが負ける訳がない！ 栗山君とやらも確かに凄かったけど、どうやらここまでのようだね！」

「何やとコラ、ナカジマア！ オイ航、オマエこのボサボサ頭から生意気にも挑戦状叩きつけらとるんやで！ ここで引いたら男や無いで、何が天才や、何が軽音楽部や！ 遠慮したらアカンで、このままオマエのその訳わからん神業で軽く捻り潰したれや！ んでもって、オマエがこの部を乗っ取ってやりやええねん！」

何かの道場破りの様な雰囲気になってきた軽音楽部を代表するロギと、私達へなちょこ素人軍団を代表する航の、長時間に及んだギタープレイ対決。しかし、ここにきて航の指が、手が、体が全く動かなくなってしまった。疲れている訳ではなく、何やら悩み込んで動けなくなっている様子だった。

「……さあ早く、君の音をボクに聴かせて……」

「……………」

「……弾けないの、かい……？」

「……………わからない」

しばらくの沈黙の後、やっと口から出てきた航の言葉は、聞いているこちらにも『わからない』不可解なものだった。これまでの展開の流れからは想像も出来ない航の言動に、私達はおるかナカシマやザビエルも拍子抜けしたようにポカンと絶句してしまった。

「……って言うかぁ、航ちゃんよりアタシ達の方が超 I don't understand って感じなんだけどぉ？ 航ちゃん、さつきまでスッゴい難しそうな演奏を超 Easy にやってたじゃない、なのに急にどおしてえ？ Why？」

「ゴラア航！ オマエいきなり何をアホな事抜かしてんねん！ 何がわからないやねん、簡単な事やる！？ 何でもええからさつきみたいなメチャメチャ難しい曲をこのボサボサ頭に一発かましてやればええだけやるが！ 何やオマエ、ここまできて急にビビったんか！？ こんだけ喧嘩売られて怖じ気づぐやなんて、オマエどんだけ腰抜け……………」

「ちよつと、翼も千夏もちよつと静かにしなつて！ 何かおかしいよ、明らかに航の様子がおかしい！」

私が大騒ぎする翼と千夏を制している間も、航の表情は明らかに動揺していてその目線にも落ち着きが無かった。ビビって敗走？ それは無いだろう。だって、中学生の時は小夜と瑠璃を守る為に車を暴走させていた質の悪そうな大人相手に全く怯む事無く立ち向かい、過去に様々な辛い経験に遭いながらもずっと頑なに耐えてきたあの航が、この程度の場面で怖じ気づくようなタマだとは私には到底思えなかった。

これは何か別に理由がある、航が突然ギターを弾けなくなった理由が。何があったのか、私は恐る恐る本人にその理由を問い質してみた。

「……航、どうしたの？ わからないって、一体何が？」

「……………」

「……航？」

「……………何を弾いて良いのか、わからない」

後々になって考えてみると、この時の航の言葉こそが、皮肉にも航には絶対音感の才能と音楽の創造性が備わっていない事を自ら証言する答えそのものだった。当時まだ私達にはその言葉の真の意味を理解する事は出来ていなかったが、ロギだけは航の本当の姿を見抜く事が出来ていたようだ。

「……君にはまだ、君の音が見つかっていないんだね……」

「……………」

「……やっぱりそうか、君とボクは、違う存在……」

時間にして約二時間半ほど延々と続いた航とロギの別世界の様な驚愕のギターセッションは、航の続行不可能という意外な形で幕を閉じた。一体、何曲のメロディーが二人の間を行き来しただろうか。私達は麻美子の件以来、改めて音楽の凄さをひしひしと痛感させられた、そんな一日だった……。

「……ってな感じだったのよ、昨日は」

「待てーい！ ちょっと待て待て待てえーい！！」

昨日の回想の続きから再び現在に戻る。教室のある校舎本館から結構距離のある別館一階の第二音楽室に到着するまでの間、前回分で話しきれなかったここまでのあらずじを全て教えてあげたというのに、未だに翔太は頭の中が混乱している様子。相変わらず鈍感で物分かりが悪いなあ、この男は。

「何よ翔太、まだ何かわからない事でもあるの？」

「あるアル有る在るっつーかわかんねえ事だらけだよ！ 何が『そ

んな一日だった』だよ！ 全然話が最後までまとまってねえし、何で航が急に演奏が出来なくなったのかの説明が一つもねえし、第一、それだけで何でお前らは航に絶対音感の才能が無いってわかったんだよ！？ 航が人の演奏を聴いて、それを完全に真似てみせたのは事実なんだろう？ なら、どうやって航はそんな人並み外れたスゴ技を成し遂げる事が出来たんだ！？ もう全然訳わかんねえ！ もつとちゃんと丁寧にわかりやすく一つ一つの詳細まで省略せずに説明してくれなきゃ理解出来ねえっつの！」

「本当、アンタって呆れるくらい面倒で手がかかるわよね、赤ん坊みたい」

「……おまつ、那奈、その言い分はねえだろ！？」

「翔太君ってえ、何をするにしてもこっちが助けてあげないと何にも出来ないダメダメ亭主になりそうなタイプよねえ？ 洗濯物はキレイにたたんで置いてあげないとダメとか、魚食べるにも全部骨を取ってあげないとダメとか、もしかしたら、その制服のネクタイもママに結んで貰ってたりしてえ〜？」

「何だよ、千夏ちゃんまでヒデえよ！？ ネクタイくらい毎日自分で結んでるよ！ つーか、この一件と俺の魚の食べ方どう関係があるって言うんだよ！」

「うるさいなあ、ちょっと落ち着きなよ？ あのね、私達が言いたいののは、事の全ての詳細を人に『教えて、教えて？』って強請るんじゃないくて、少しは自分の頭の中で話をそれなりに整理して、それで自分なりの予測を立てて考えてみるって事なの！ 昔っからアンタと小夜は何においても『何で何で何で？』って答え急ぎすぎ！」

「いや、だってよ、今回のこの話はいくら何でも俺以外の人間だつて訳わからなくなるって！　じゃあよ、実際に那奈や千夏ちゃんはその航の例の摩訶不思議な才能の正体が、その場で見て聴いただけで何なのかすぐに理解出来たって言うのかよ！？　自分の頭の中で予測立ててピーンときたって言うのかよお！？」

「……うわぁ、何コイツ、本当にガキだなぁ……」

「……那奈、絶対に苦勞するわよ？　翔太君との結婚生活……」

そうだねえ、苦勞するだろうなぁ……。って、ちよつと待て！　千夏、気が早過ぎだから！　第一、アンタにいちいち心配される筋合いありませんから！　何よいきなり、結婚生活だなんて、全然まだまだ先の話じゃない、そんな大きな声で言わないでよ、恥ずかしいよ、やめてよ、全く、もう……。

……？　う、ううん！　さて、気を取り直して話を進行しますかねえっ、何？　今、デレただろうって？　いいえ、デレてない、デレてないッスよ。まさか？　デレてないって、デレてないったらデレてない！　はい、もうおしまい、話を進行します！　強引でも進行しまーす！！

……ふう。まあ、実のところ正直言つと、私達もその時すぐに事の全てを理解出来たと言う訳では無い。ロギの『ボクとは違う』の言葉から、航には絶対音感が無いという事ぐらいは臆気ながらも予測が出来たが、じゃあなぜ航が人の演奏をコピー出来たのかまでは全く検討すらつかなかった。昨日の夜、突然携帯に翼からの電話がかかってくるまでは。

「何かね、航には絶対音感とは違う、他の飛び抜けた才能があるみたいで……」

「おっーとお嬢！ ここからはそのほぼ決定的な仮説を唱えた本人である、この桐原薫人類スケベ学名誉教授が直々にお答え致しましたようぞ！ この桐原薫の手にかければ、頭の中が女の子のおっぱいやおパンツやあゝんな事やこゝんな事でギユウギユウ大渋滞のむつつりどスケベ星人の翔太の旦那相手でも、スツキリ明解で目の覚めるような説明を論じて差し上げましょうぞ！」

「……あのなあ、やっと喋れる順番が来たからってベラベラと長い台詞を並べやがって、お前なんかにとスケベなんて言われたくねえよ、この変態教授が！」

「まあまあまあ、わかるわかる、わかるわかるよ、翔太の旦那が言いたい事はよくわかる！ しかしまあ不毛な積もる話もなんですから、ここは黙ってこの薫ちゃんの有り難い講談を聞きんしやい？ じゃあ愛しのマイダーリン、サポートよろぴくう！」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！ コラ翔太、この松本翼様が血と汗をもって世界中からかき集めた仰天スクープを耳かっぱじって良く聞きや？ 昨日あの後ウチな、どうしてもあの航のスペシャルなギター演奏の真実が気になって気になってしゃあなくなつてしもてな、そしたら薫が急に『似たような話を以前に聞いた事がある』って言い出してな、帰りしに二人でインターネットカフェに寄って少し調べてみたんよ」

一度気になりだすといってもたつてもいられなくなり、詳細の隅々ま

で徹底的に追求しなきゃ気が済まないのが翼の性格。そこに薫のゴミ屋敷みたいに無駄に大量の雑学知識が加わり、あ後は二人だけで色々と情報収集に励んでいたそう。研究熱心なのは結構だけど、見た目完全に小学生と変態不審者が夜遅くまで彷徨いてたらお巡りさんに補導されちゃいますよ、ご両人。

「なあ翔太、『絶対音感』を持つ人間の特徴ってのは、以前の麻美子の話で良く知ってるやろ？」

「……まあ、何となく、演奏や人の喋り声とかの全ての音がドレミファソラシドの音階で聴こえてきて、それを即座に楽器で表現したり線符に書き写す事が出来るんだっけか、確か？」

「せや、メロディーの音階が全部聴くだけでわかるんやから、人が演奏したもんをまるつきり真似してみせるっちゅう事はその能力を持つとる人間やったらそれほど難しい事やない、ウチら普通の人間が他人の喋った言葉をそのまま復唱する事と大差の無い事やからなせやからあの時、ウチらはそれをやつてのけた航には絶対音感がある、って思った訳や」

「えゝ、しかしながら、残念な事に航先生にはその才能が備わっていなかったんですゝ、これは実際に絶対音感の持ち主であるロギ氏と、その当人である航先生から確かな証言を戴いておりますゝ、ムフフウゝ」

「……オイ薫、それ一体誰の物真似だよ？」

「桐原任三郎ですゝ、ムフフウゝ」



「……似てねえ……、それより何だよ、航は自分が絶対音感を持つてない事をあつさり白状しちゃったのかよ？　じゃあ、航の耳は俺達と同じで、全ての音が音階で聴こえてきたり、メロディーの音階を聴き分けるたりする事は出来ないって訳なのか？」

「ん〜、そうなんです〜、それについてはかなり早い段階でロギ氏もこの真実を見抜いていたみたいです〜、航先生には楽器の音や人の喋り声などを音階で聞き分けるなんて事は出来ません〜、つまり〜、航先生は楽器の音を聴いて演奏の仕方を覚えたんじゃないかもしれません〜、他の方法、他の能力でメロディーを覚えたんです〜、ムフフウ〜」

「……他の方法、能力？　何だよそれ？　音楽のメロディーや音階を聴く以外に完璧に覚えられる方法って、何か他にあるのかよ！？　そりゃ一体何なんだよ！？　オイ薫、勿体ぶらないでちゃんと教えてくれよ、オイ！」

「え〜、この詳しい説明は〜、ワタシの助手の今泉クンにお願いしましょう〜、お〜い今泉ク〜ン、例の話、翔太の旦那にしてあげて〜？」

「誰がガスター10やねん、このどアホが！　……まあ、どうでもええわ、それより翔太、これはな、あくまでウチらの調査資料による憶測にしか過ぎない話なんやけど、多分、多分やで？　アイツ、栗山航はな……」

「……航は？」

無表情、無反応、無口で無趣味で呆れるほど無気力。190センチ

という軽く高校生離れした大きな体を持ちながら、まるで剥製か仏像みたいな置物程度の存在感が無い、一人の男子が隠し持っていたものとは、常識ではとても考えられない奇想天外な才能だった。

「航は、耳で楽器の音を聴いてメロディーを記憶したんじゃない、人が演奏しとるその方法、体、腕、指の動きを『目で見て』、それを完璧に脳に記憶してそのまま再現してみせたんや」

「……オイ、それってお前らお得意のいつもの冗談だよな？」

「……あのなあ翔太、いくらウチらかてたまには真面目な話くらいちゃんと……」

「嘘だつー！ お前ら、また俺を変な罠にかけて誘導尋問してからかおうって魂胆だな！？ そう何度も同じ手に引っかけたまるか！ たった一度、人がやった動作を見ただけでそれを全部記憶出来るだなんて、動画ビデオカメラじゃあるまいし……！」

私も翔太と同様、電話で翼からこの話を聞いた時、正直なところあまりに現実離れし過ぎた憶測話で素直に受け止める事が出来なかった。私だって現地でロギとナカシマの演奏を見ただけ、指の動き一つにおいても常識外れなくらい複雑に素早くて、あれを一度見るだけ記憶するなんてまず無理、有り得ない、出来る訳が無い、と。しかし、その後が続いた翼と薫による詳細な裏付けの調査結果により、私も『そうなのかもしれない』と感じられるようになった。そもそも絶対音感と言う特別な能力ですら信じがたい存在なのに、すでに私達はその能力を持つ人間に二人も出会っているのだから、人並み外れた何かしらの別の能力を持つ人間がすぐ近くにいたとして

も何ら不思議な事ではないのだ。

「はいはいはい、ここからはこの桐原任三郎がおバカな翔太の旦那でもわかるように丁寧にご説明しよう、え、風間翔太さん、あなた、『キム・ピーク』という人物をご存知ですか？」

「……キム・ピーク？ 誰それ？ 全然知らねえ……」

「ん、やはり新聞も本も読まない頭の中がエンジンのモーターで出来てる翔太さんにはわかるはずがありませんでしたね、いやいや、これは大変失礼致しました」

「てめえ、このヤロ……！」

「質問の内容を変えましょう、風間翔太さん、あなた、『レインマン』という映画はご覧になった事はございますか？」

「……レインマン？ うーん、タイトルだけなら聞いた覚えがあるけど……」

映画『レインマン』とは、今から約二十年前に全世界で上映されアカデミー賞にも選出されたハリウッドムービーの名作である。主演にダスティン・ホフマンとトム・クルーズを迎え、日本でも大ヒットして舞台化もされている。

ストーリーはある一人の青年の父親が亡くなり、その遺産のすべてが別々に暮らしている自閉症の兄に承継される事になった。青年扮するトム・クルーズは遺産を手に入れる為に兄扮するダスティン・ホフマンを施設から強引に連れ出すのだが、自閉症による不可解な

言動に振り回されて苦悩の日々を過ごす事になる。

しかし、ある時青年は兄に常人では有り得ない突起した才能がある事に気づく。それは記憶力。毎日の図書館通いが日課になっていた兄は、図書館に置かれていた様々な本の一字一句を全て脳で暗記し、電話帳に載っていた個人の番号や住所までもその人間の名前を聞いただけで即座に答えてみせたのだ。

この兄である役名『レイモンド』のモデルは実際に現在もアメリカ合衆国で生活をしている『キム・ピーク』と言う人物で、彼は先天性による脳の損傷を持ち毎日の生活には介護が必要となる障害者ではあるが、映画の物語同様常識では計り知れないほどの膨大な記憶力を持ち、日本のテレビ番組でも何度か取材されている。

「そのキム・ピーク氏以外にも、様々な障害や幼少時の記憶や体験などで人並み外れた才能を持った人間が世界には数人確認されています、それらの例は医学的名称で『サヴァン症候群』と呼ばれているんですよ、ムフフフ」

「……サヴァン症候群、ねえ……、ん？　ちよつと待ってくれ、つかよ薫、世界ビックリ超人みたいなその話と今回の航の話と、一体どんな関係があるって言うんだよ？」

「……翔太才マエ、ホンマ正真正銘のアホか？」

「……えっ、何で？」

ここまで丁寧に説明してやってんのに話を察する事が出来ないチンパンカンパンなバカ男。何でわからないかなあ？　つまり薫と翼が言いたいのは、航の驚異的な記憶能力はもしかしたらそのサヴァン

症候群に近い非常に稀な特殊能力なのかもしれないって事なの！  
わかった！？

「……つてもよ、航は別に脳に障害がある訳じゃねえし、第一、これまでの俺達と一緒にの学校生活でだってそんな特殊な才能を発揮した場面もほとんど無いし……」

「ムフフウ、サヴァン症候群の該当者達は何も障害者だけに限った事ではありません、例えば、物心つかない幼少時に何らかのシヨッキングな出来事に遭遇して精神的にダメージを追った者や、心を病んでしまった人間なども存在します、つまり、幼少時に悲運なアクシデントにより一家が崩壊し一部の心無い大人達に虐げられてきた過去を持つ航先生には、十分サヴァン症候群と思われる特殊な能力を身に付ける事が出来る環境が揃っていたんです！ え、風間翔太さん、それはあなたも良くご存知の筈です」

「……あつ、そうか……」

随分前の話でも語られた通り、航は生まれて間もなく記憶も無い内に実の母親と死別し、その後父親と再婚した義理の母親は不慮の事故により目の前で命を落とすという壮絶な過去を経験している。父親の逮捕後はまだ言葉も喋れない赤ん坊同然の妹・瑠璃と共に各地の孤児施設を転々とし、場所によってはイジメや嫌がらせを受けてきたそうだ。

今でこそひょこつと会話に参加してきたり拳動もすっかり安定してきたが、私達が初めて航に会った当時は会話もほとんど交わせる状態では無く、瑠璃に近寄る者や自分の父親の話になると敵意をむき出しにして大激怒する事がしばしば見られた。確かに、薫の言う通

り航にはそのサヴァン症候群と呼ばれる人達が育った環境とかなり類似点がある。

「それにな、あんまり目立たへんけど航はこれまでのウチらとの関係の中でもちよくちよくその記憶力を発揮しとる時があんねん、ウチらが普通に受け流して忘れとるあんな事やこんな事、ちよつと思いい出してみ」

私も翼との電話での会話中、これまでの航が私達の前で起こした行動を色々と回想してみたが、そもそも活発に行動するタイプの人間ではないので数も少なく、それに該当する良く考えるとかなり奇妙な場面を即座に思い出す事が出来た。

まずは出会って間もない頃に遠藤病院にお邪魔して麻美子や瑠璃と一緒に駅まで歩いた冬の帰り道。小夜が無茶して瑠璃をおんぶして車道の真ん中で転び、そこに猛スピードの車が突っ込んできたあの時、私達より遙か後方にいたはずの航は間一髪車より先に二人を担ぎ上げ助けてみせたあの場面。

後から聞いた話によると、その後あの場所では同じくスピードを出した車が歩行者を跳ねるといふ痛ましい交通事故があったそうで、あそこは登り坂の為アクセルを強めに踏み見通しの悪い交差点に突入するドライバーがかなり多く、有名な事故の多発場だとか。

特に小夜と瑠璃が轢かれかけたあの車のドライバーは道路交通法違反の常習犯で、度々計算に検挙されていて回覧板にも掲載されるほど近所でも悪名高い迷惑者だったそうだ。もしかすると航はその情報をすでに記憶していて、例のその車が接近している事に気づき、車より先に二人の元に駆け寄ったのかもしれない。

そして、もう一つは翼の父親の新作さんに誘われてみんなで行った初夏のキャンプ場。先に進む吊り橋が先日の豪雨によって川に流され、私達は案内人に教えられた上流の浅い岩場を渡って川の向こう岸を目指す事になった。それでも小夜が水を怖がり立ち往生、それを航は何の躊躇も無く川の流れに足をつ込み小夜を抱えて助けてみせた。

いくら膝ぐらいまでの浅瀬だったとはいえ、上流だけに水の流れはかなり速く足を滑らせたら大事故にもなりかねなかったあの大胆な行動にも実は裏事情があった。案内人に道を尋ねている時に、その岩場で安全に渡れるルートを自らの足で下調べをしているキャンプ場のスタッフの姿があったのを遠くからうつすら見えたと後に新作さんが証言しているのだ。

私達が現地に到着する三十分前くらいの話らしい。最悪川に落ちても大丈夫かどうか水の深さまで丁寧に調査している感じだったらしく、新作さんもその時それを見て子供達を連れていても問題なく渡りきれんだろうと判断したそうだ。

吊り橋から岩場までの距離は約二百メートルはあっただろうか。もちろん、新作さん以外の私達はそんな事には気づきもしなかった。もしかすると、一番背の高い航もそれを見ていて、川のどこを歩けば安全なのかをすでに知っていたのかもしれない。

私達が突然の出来事で慌てふためいていたそれらの場面でも、航は常に冷静な対応と素早い行動で最悪の状況を未然に防いできた。しかし、普段のボツーとした雰囲気から察するに、それは何も反射神経が良いという訳でも危険予知能力が高いという訳でもなく、脳内に一瞬で蓄積できる膨大な記憶量が航を事前に先回りさせているのではないだろうか。

で、ないとこれらの航の迅速な行動の数々の理由を上手く説明する事が出来ない。あのデカい図体に寝てるんだか起きてるんだか良くわからないナマケモノみたいな人間がとっさの判断で素早く動ける

とはとても思えないし、実際私には急に思いついて行動している感じには見えないのだ。

「しかもアイツ、人がとくに忘れてしもてるようなしょーもない事まで覚えてたりする事あるやろ？　ウチらが以前遠藤家に遊び行つて麻美子のオカンからおやつのチョコアソート一袋貰った時も、ストロベリーチョコ十個あった内の七個をウチが食べた事をアイツ一人だけきっちり覚えとんねんもん、バレんようにチョコの袋を全部ゴミ箱に捨てて誰が何個食べたかなんてみんな忘れてたのにやで？　お陰で一個もストロベリー食べてない小夜にそれがバレてその後ギヤーギヤーと大ゲンカになってしもたもんなあ」

「そおそお、そういえば帰り道でみんなと一緒にコンビニ寄つた時もお、店員さんがお客さんにポン酢がどこにあるのか訪ねられて見つけるのに困っている、なぜか航ちゃんか二人に場所を教えてあげてた事があつたわね、ポン酢の在処に詳しい高校生なんて普通、そんなにいるもんじゃないわよねえ？」

「そ〜し〜て〜、極めつけはここにいる誰もが忘れていたあの第二音楽室の存在を入学式に配布された校舎見取り図を一見ただけで記憶していたという事です〜、ムフフウ〜」

それだけではない、それ以外にも航の記憶力にはハツと驚かされる事が多々ある。そのほとんどは大して役にも立たない下らないものばかりだが、私達が一つの事柄をなかなか思い出せなくてウーンと悩んでいる時、必ずと言っていいほど最後は航がポツリとその答えを口にする。やはり航には記憶に関する何かしらの特別な能力があると思えないのだ。



「普通なら簡単に見落とし忘れてしまいそうな事柄、風景、他人の言動一字一句一挙手一投足を、航先生はまるでビデオテープに録画したように鮮やかに記憶する事が出来る、実際に航先生はそれをギタープレイという方法で我々の目の前で実演してみせました、私はサヴァン症候群の人に直接会った訳ではありませんが、航先生がやってのけたあの超常現象の仕組みを説明出来る言葉はこれ以外に存在しません！ 航先生は演奏を聴いて覚えたものではありません、驚異の記憶力により演奏を見て覚えたのです！」

「……マジかよ……」

「……え、私の推理は以上です、風間翔太さん、何か反論があるならどうぞ？」

「……薫、お前は一体どこで航には絶対音感とは違う特別な才能があるって気づいたんだ？」

「ムフフウ、私は航先生とロギ氏がギターセッションを始めた時からすでに怪しいと感じていました」

「……まさか？」

「え、あの時ロギ氏はスピーカーアンプを利用して敢えてメロディーが聴き取りにくいほどの爆音でギターを弾いていました、あれだけの音量で音階を判断するのは例え絶対音感を持つ人間でもかなり困難かと思えます、そこ・で、私はそのロギ氏の行動の理由には『何かある』と察して調査を開始した訳です」

「……参りました、降参です……」

「以上、桐原任三郎でした」

「……最後まで似てねえ……」

脳細胞の成長が最も著しい幼少時に母親の無残な姿をその目にし、誰一人救いの手を差し伸べてくれない孤独な生活を余儀なくされ、幼く無力な妹を守る為にいつしか誰も信用しなくなり心を閉ざしてしまった不遇の日々。そんな辛い現実の数々が、いつの間にか航に人並み外れた記憶能力を備わせたのかもしれない。自分とたった一人の家族である瑠璃を守る為に……。

しかし、それにしてもここまでの薫の推理力と翼の情報収集力は素晴らしいの一言だった。下手なマスコミなんかよりも勘が良く迅速かつ正確な仕事、さすがは変態雑学王子に世界的ジャーナリストの娘といったところか。だが、それでも航のこの能力に対して完全に説明しきれない部分が二つほどある。

「……でもよ、仮に航がそのすげえ記憶の才能の持ち主だとするなら、その気になったらアイツ、国語も数学も社会も理科も学校で習う事全部丸暗記するのも不可能じゃないって事だよな？ 見様見真似で人がやった行動をそのまま表現出来るなら、体育の授業も楽勝じゃね？ なのにアイツ、学問も運動もそんなに成績良い方じゃないよな？ 何で？」

その一つは翔太が今疑問に挙げたその話。中学からの過去三年間三

学期、私達は航の成績表を見てきたがそれはあまり他人に話せるようなものではなかった。一言で言えば実に平均的、悪く言えば中の下といった感じ。特にズバ抜けて良い教科も無ければ極端に不得意な教科も無し。感想としては『もうちょつと頑張りましょう』あたりか。

もし、航が薫の言う通り世界各地で研究が進められている『サヴァン症候群』と言う特別な才能の持ち主ならば、その能力をいかになく発揮して高成績をあげる事は実に容易いはずだ。しかし、その才能は今のところ全然発揮されていない様子。これは一体、なぜ？

「あのな、サヴァン症候群ってのは何もその人間達が一つの弱点も無い万能の大天才って訳や無いんやで？ 先に言つたやろ、それらの人々には脳や精神に何かしらの障害があるってな」

「んゝ、サヴァン症候群に見られるその特殊な才能とは他人にとつてあまり役に立たない、簡単に言えば無駄な知識である事が多いんですねゝ、なぜなら、その能力が発揮されるのは彼らそれぞれが興味深意を喚ばれたものに限られてしまふ例が多いからなんですゝ」

「せやから、その人達のほとんどはそんな素晴らしい才能を持ちながらも、それを十分に社会の中で発揮するだけの基本的な人間心理が構築されていない人が多いんや」

「なので、自分の関心事以外の情報に対しては彼らもいわゆる一つの普通の人間と同様か、あるいはそれ以下の脳内処理能力しか備わっていないんですねゝ、ハイゝ」

「……オイ薫、オマエ明らかに途中からナガシマに変わつとるやないかい？」

「ん、どうでしょう、ストレート狙いと見せかけて、直球一本狙いでフルスイングOK?」

「それ一緒やないかい!」

つまりそういう事。栗山航と言えば常識では考えられないほどの超無欲無気力無関心人間。向上心ゼロ、集中力ゼロ、夢も無い、趣味も無い、努力したり熱中しているところなんて一度たりとも見た事無い。勉強も運動もこれっぽっちも興味が無いからちっとも覚えようとしない。これこそ正に宝の持ち腐れってヤツです。その才能、少しでいいから私に分けてくれ!

「……って事はさ、そんな無趣味な航でも音楽や楽器には多少なりとも興味があつたって訳だよな、ギターの演奏に対してそれだけの記憶力を発揮したんだからなあ……」

「うっん、そうでもないみたい」

「えっ、何で? 何で何で何で?」

そりゃこっちが聞きたいよ。翔太は昨日現地にいなかったからわからないだろうけど、散々続いたギターセッションを最後まで付き合わされて、いよいよロギ達からバンド参加の話が出てきたつてのに、私達はその後の航の言葉に頭に金タライが落ちてきたような衝撃を受けて一同ズッコケたんだから……。

「せやから最初に言つたやろ？ アイツな、こんだけエライ事やらかしといてバンドの誘いに一秒も迷う事なくバツサリ断つてみせたんやで」

「ロギ君がバンドメンバーをスカウトするなんて初めての事だったらしいわよあ？　なのに航ちゃんつたらいとも簡単に『興味無い』の一言、アタシ、あんなに残念な気持ちになったの生まれて初めてかもしれないあゝい」

「そういえば一茶の親分も何度か航先生を柔道部に誘つていただけ、その度ごとくお断りされてましたなあ？　航先生の琴線に触れる事が出来るものとは一体何じやるなあ？　学問？　運動？　娯楽？　やっぱり男の子なんだから女子やエロ系とかかなあ？」

「もし薫にそんな能力が備わつたらって考えるとホンマにゾツとするわ、なあ千夏？」

「即座に通報して無期懲役でプリズン送りよね、ホント、航ちゃんであつたわ」

「ショボーン」

そうこうしてる内にやっとこさ別館一階の第二音楽室の目の前まで到着した。すでに一足早く教室の前にはベースギターをカバーに入れ肩に背負っているナカシマと相変わらず一人でヘンテコダンスを刻んでいるザビエルの姿があつた。この二人、遠目から見るとやっぱりかなり怪しい。

「二人とも、早いね」

「Boa tarde! ナナ、今日モトツテモ綺麗デヤンスネ!  
! アナタノ笑顔で今日モ一日トツテモ幸セナ氣持ちニナレルデヤ  
ンスヨ〜!」

「ちよつとちよつとちよつとお〜!?!? ねえザビ、アタシは? ア  
タシだつて綺麗でしょ〜!?!」

「モチロンデヤンス、チナツモ綺麗デヤンスヨ〜! ソレナリニ」

「何よそれ! 超ム力つく、Fuck!」

どうやらブラジル人には千夏タイプのキラキラワイイ系よりも私  
のような着飾らないタイプの方がモテるのだろうか? 嬉しいよう  
な、そうでもないような、ちよつと微妙な気分だ。

「オイコラナカジマ、オマエウチと千夏を置いてホームルーム終わ  
ったらさつさと一人で教室から出て行つたやる!? 友達甲斐の無  
いやツやな、女を無視していくなんて男として最低の行為やぞゴラ  
ア!」

「で、ででで、ですから僕はナガシマじゃなくてナカシマ……!」

「Katsu八女ノ子ト一緒ニイルノガ苦手デヤンス〜、恥ズカシ  
クテ顔ガ真ツ赤ニナツテシマウデヤンスヨ〜!」



「まあ、その内慣れてくるんじゃない？ この二人で戸惑っているようじゃ、とてもあのバンドリーダーさんとは会話すら成り立たないよ？」

二人と合流したところで、いざ音楽室の中に入ろうとナカシマが職員室から借りてきた鍵を入り口のドアの鍵穴に差し込もうとすると、どうやらちよつと様子がおかしい。鍵が間違ってたのかな？

「……あ、あれ？」

「何よナカシマ、どうしたの？」

「……か、鍵、開いてる……」

どうやらすでに私達より先に侵入者がいる模様。耳を済ますと中からは複数のギターをかき鳴らす音とキャツキャツとハシヤぐ女子の黄色い声。誰と誰と誰がいるのかぐらいいとも簡単に予想は出来たが、一体コイツらは鍵も無しどうやって中に入ったのだろうか？

「あつ、みんないらっしやーい！ コオロギくん部長さん率いる軽音楽部へようこそー！」

授業が終わった途端にさつさと教室から姿を消したと思いきや、気分はもうすっかりここの部活の窓口嬢兼案内役気取り。昨日までのあのグズリベソ泣きワガママ言いたい放題の駄々っ子お嬢様はどこ



へやら。何が『ようこそー!』よ、全くもつ……。

「……カツ、ザビ、遅い……」

「な、なあロギ、鍵も無しに一体どうやって教室に入れたんだよ？」

「……合い鍵、作った……」

「E n a p a ! 学校ノ備品ヲ勝手ニ複製シタラ、先生ニ怒ラレ  
チャウデヤンスヨ〜! 相変ワラズR o g i ハヤル事が大胆デヤン  
ス〜!」

「ロ、ロギ、それはマズいよ! そんな事したらロギだけじゃなくて、  
一緒にいる栗山君だって同罪に……!」

「……ナカシマさん、こんにちは」

「……え、えっ? あ、はい、こんにちは……」

「……ワタル、彼の呼び名はカツで良いよ、カツもこれからは、ワ  
タルと呼んであげて……」

「……了解、カツ、こんにちは、ワタルです」

「……カ、カツです、どうも……」

「何カ、彼モR o g i ミタイナ謎ダラケデ調子狂ウデヤンスネ〜」

あらま、いつの間にやら互いを名前で呼び合う仲になっちゃったよこの二人。まあ、お互い無口で無表情で考えている事が良くわかんない不思議ちゃん同士、類は友を呼ぶって言うもんね、気が合うのかな？

「おいおいちょっと待てよ、何でここに小夜と一緒にいるんだよ？まさか、お前までバンドに入ったのか！？」

「あー、翔ちゃんだー！ もう元気になったんだねー！ 翔ちゃんあたしね、昨日からこの軽音楽部のマネージャーさんになったんだー！」

「……マ、マネージャー？ お前が？」

そうなんだって。あれだけみんなで小夜にも出来そうな部活部を校内全域隅から隅まで散策してあげたのに、結局は赤ん坊の頃からずっと慣れ親しんでいる音楽系の部活に落ち着く事になったんだって。楽器なんて家に帰ればお店を開けるほどたくさんあるっていうのに、やっぱり良くわかんないや、この子は……。

「……おい那奈、小夜のヤツ、このまま放つといっちゃっていいのか？」

「もう、別にいいんじゃない？ 小夜がマネージャーとして入部したお陰で、航が前言撤回をしてバンド参加を決意してくれた訳だし」

「……小夜のお陰？」

何時間も続いたギターセッションのその後、音楽の才能こそ備わってはいなかったが、今まで出会った事の無い特殊な能力を持つ栗山航と言う人間にバンドリーダーであるロギはすっかり興味津々。ナカシマやザビエルに相談もせずに航をバンド内の空白の一席だったギタリストとして勧誘してみたのだが、航はこれを軽く一蹴してしまふ。

航の連れない答えに少し興奮気味な表情を見せていたロギもすっかり意気消沈して妄想モードに突入。ザビエルも気球みたいにパンパンに膨れ上がっていたアフロ頭が一気に萎んでマツチ棒みたいになり、ナカシマに至っては残念なのと同時に自分の現在の立場を航に奪われなくて済み、気持ちの悪い引きつった笑みを浮かべていた。もちろん、側にいた私達もガツクリと肩の力が抜け脱臼したみたい。両腕がブラインとなって『やってらんねえ』とばかりにさっさと帰り支度。天から授かった貴重な才能が呆気なくドブ川へ。その虚しさに私達が哀れんでいると、まるでそれをすくい上げて再び選択の機会を与えるが如く音楽室内に響き渡った音楽の女神、ミューズの箴言。

『えー！ そんなの勿体無いよ航くん！ せっかくこんなに上手くギターを弾く事が出来るのにー！ もし、お兄ちゃんがカッコーいギタリストだって知ったら、絶対に瑠璃ちゃんは大喜びするのになー！？』

この時、私はなぜ無関心の代名詞みたいな航がギターに対して興味を持ち、あの様な驚愕の才能を披露してみせたのか、何となく理解する事が出来た。実際は家に帰ってからよくよく思い出してみても

づいた話だが、航が周りを驚かせるような行動を起こす状況には、必ずと言って良いほど同じ共通点、同じキーワードがあった。

『小夜』と『瑠璃』。

やはり今現在、航自身には何か将来夢見ている事や、没頭出来る趣味や嗜好といったものは存在していないみたい。そんな無気力人間を奮い立たせ超人的な能力を発揮させる原動力、それは多分、自分の命より大切な存在である妹の瑠璃の笑顔と、その瑠璃が心から敬愛してやまない唯一の存在であり恩人である小夜の笑顔なのではないかと。

自分自身は興味や理由が無くとも、それが小夜と瑠璃の為に役に立てるのであれば全力で立ち向かう。その思いこそが航に備わった瞬間的に物事を記憶する特殊な能力を発揮させて、これまでの不可解な行動の数々を起こさせたのではないだろうか。

そもそも昨日、ここで航がギターを弾き始めたのも自主的な行動ではなさそう。確かに航は自らロギのギターを勝手に手に取り眺めていたが、いつもの航なら私達が注意をすれば静かにギターを元に戻していたはず。なのに、それを無視して演奏を始めたのはアレのせい、小夜の『弾いてみてー！』のあの一言。

実際、一度はバンド参加を断った航が一転その答えを考え直したのも、小夜の口から『瑠璃』の名前が出てきた次の瞬間だった。それまで何事においても興味無い、興味無い、興味無いと呪文のように言い続けていた男が、途端に『……………やってみる』と言い出すくらいなのだから。本当、極端。実にわかりやすい簡素な思考。航が天才人間に変身するスイッチは、どうやら小夜と瑠璃が握っているようなのだ。

「…………でももしよ、那奈のその予想が当たっているとしたら、そん



「……ア、アハ、アハ、アハ、僕だって全レパートリー曲をマスターするのに三年近くかかったのに、たった十分間だけで、アハハハ……」

「……カツ、ザビ、チューニングの準備、早速練習を始めよう……」

「ワイワイ！ 今からあたし達だけのシークレットライブが始まるよー！ 何かこういうの久し振りー、今度は麻美ちゃんも連れてきてあげようかなー？」

新たに結成された若い才能による将来有望なフォーピースロックバンド、色々と一番苦労するのはやっぱりナカシマなんだろうなあ。さっきも言ったけどまとめ役って絶対損な役割だね、しかも肝心のマネージャーがアレでしょ？ 大変だよー？ まあ、せいぜい頑張ってちょーだい。

「オイ千夏！ やっぱコイツらホンマもんやで！ このバンド、絶対プロデビューしたら成功するで！」

「いやあーん、四人でも超Cool！ メチャメチャカッコいいわあー！ アタシ、これから学校中にこのバンドを大々的にアピールして、もっともっとファンを増やしちゃうんだからあー！」

「んー、これはいわゆる一つのロックンロールがポップしてビートしてソウルフルなシェケナベイビー！ 音楽は大海を渡り人々を熱狂させるパワートゥーザミュージックでセコムしてますかあー？」

それぞれの自己紹介と挨拶の代わりとばかりに、ロギ達は練習がてらに数曲ほど私達の目の前で自分達のオリジナル曲を披露してくれた。この前の即興演奏とはとても比べ物にならない激しく痛快な口ツクサウンドに音楽室は一瞬にしてライブハウスに早変わり。

先程までの情けない姿が嘘のようなナカシマの重厚でカッコいいベースにザビエルのブラジルの情熱の血を彷彿させる魂のドラム、そして何より私達が呆気にとられたのは物静かなその風貌からは予想もしなかったロギの跳躍的なギタープレイと惚れ惚れするような力強く胸に響く圧倒的ボーカル。

起きているのかどうかもわからないくらい細く臍気だった瞳はカツと見開きギラギラと光輝き、その表情と神か何かが乗り移ったかのように全身を使ってリズムを刻む姿はまるで別人。そして、その歌声はカラオケレベルどこの騒ぎじゃない。一度聴いたら延々と耳に残る、ワイルドながらもとても美しい歌声だった。

これが絶対音感を持つ音楽の天才の本来の姿なのか。なるほど、メンバーであるナカシマとザビエルが心底から尊敬し崇拝する訳だ。翼や千夏みたいにキャーキャーとミーハーみたいな真似はしたくないけど、このバンドは本当に成功すると私も心から実感させられた。

「……………なあ、那奈……………」

「……………えっ、何？ 何よ翔太？ 今スッゴいノリノリで最高の気分なのにー！」

「……………アレ、アレさ、やっぱりちょっとおかしくね？」

翔太が指差す方を見ると、そこには長い指を器用に使ってギターを

弾いている航の姿が。うん、ちゃんと演奏出来てるじゃん。たった十分間の練習時間ながらも、どうやらロギが教えてくれたギターテクニクを完全に会得してみせたようだ。

さすがは驚異の記憶力、こりゃ私も少し航に対しての見方を変えなきゃいけないかもね。小夜じゃないけどあの高い身長と線の細さに手足の長さ、これで黒ずくめの衣装に長いコートとサングラスをかけたら、パツと見だけでも啓介さんみたいだね。航、マジで凄いよ！

「いやいやいや、俺が言いたいののはギタープレイとかテクニクじゃないで、航の演奏しているあの格好……」

「……格好？」

沸騰気味になってる心拍数を一息吐いて冷静を保ち、少し引き気味の視界でバンドメンバーの四人を見た時、私は翔太が言っている事の意味がやっと理解出来た。曲を聴いている小夜達同様、演奏しているロギ、ナカシマ、ザビエルも汗まみれになるくらい飛ぶわ跳ねるわの完全トランス状態。しかし、ギターを弾く指と手以外ピクリとも微動だにしない人間が若干一名……。

「……みんな揃ってすっげえノリノリ状態なのにさ、何でアイツ一人だけ演歌歌手みたいに直立不動なの？」

「……もしかして、航にはリズム感ってもんが全く存在して無いのかなあ？」



……だとしたら、ギタリストどころかミュージシャンしてかなり致命的な話ですよコレ。そういえば、昨日のギターセッションも何の前触れもなくいきなり演奏を始めたし、あの時も真っ直ぐピーンと立ったまま全然動かなかったっけ。

『……君はまだ、君の音が見つかってないんだね……』

あの時のロギの言葉はそういう意味だったのか。どうやら、今の航には人がやってる演奏を見て記憶して、それを丸々真似する事だけに出来ないみたい……。

「イエーイ！　ねーねー航クーン、ノッてるかい！？」

「……………イエーイ……………」

あちゃー、こりゃ音楽のイロハってヤツを一から教わっていかないでダメかもね。それまではロギのコピーロボット状態になるのかなあ？　前代未聞の音楽知識リズム感ゼロの高校生バンドマン、栗山航が妹・瑠璃の自慢のスーパーギタリストになれる日はいつの事になるのやら……。

## 第69話 ひびき

「オイコラ、ナカジマ!」

「……で、ですから僕はナカジマじゃなくて……」

「オマエ、ナカジマの分際で何でメンバーから『カツ』って呼ばれとんねん?」

「……い、いや、あの、それは……」

今週も早いもんでもう週末や。大してオモンない人間ばかりで飽きしとったこのクラス、やっとウチと千夏にも暇つぶしにもってこいの楽しいオモチャが手に入ったで。その名もナカシマ。おっと、もといナカジマ。しょくもない事にいちいち反応しよるオモロいやツヤ。

音楽室での初対面の日からこの三日間は休み時間中ずっとコイツを千夏と一緒にいじくり倒しまくつとるで。ウチが茶化すと真っ赤な顔してドモリよるし、千夏が色仕掛けするとやつぱり真っ赤な顔してドモリよる。ベース弾かせりや立派なもんやけどな、丸腰になったらタダのメガネのヘタレ男やからなあ、コイツは。

「もしかしてえ、カツってナカシマ君のFirst nameなのかしらあ? ねえ、そうなのお? アタシに教えてえく?」

「……あ、あ、いや、あの、はい、そ、そうです……」

「やっぱそうなんか、でも、『ナカジマカツ』だけやと何か中途半端な名前やな、カツの後に何か付くんか？ 例えばカツヒロとか、カツヒロとか、カツミつてのも結構カツコええ名前かもなあ？」

「ねえ翼、確か日本の歴史上の人物に『勝家』っておサムライさんいたわよねえ？ もし勝家だったりしたら超カツコ良くない？ ナカジマ君は一体カツ『何』なのかしら？ アタシ、超期待しちゃう〜！」

「素直に白状せいやナカジマ、オマエの下の名前、何て言うねん？」

「……、オ……」

「何？ 何やて？」

「……カ、カツオ……」

「……ギャハハハハハハ！！ オイ、聞いたか千夏？ カツオて、よりによってカツオて、オマエ、それは無いわ！ カツオて、カツオて、ギャハハハハハハハ！！」

「アハハ、ヤダちょっと翼、笑い過ぎだつてば、ナカジマ君イジけちゃうわよお、アハハハハ！」

「アカン、アカンアカン、ウチ完全にツボつてもうた！ カツオて、しかも名字がナカジマて、オマエの両親はどれだけ長谷川町子マニアやねん！ ギャハハハハハハハハ！！」

「……あ、悪魔だ、松本さんも三島さんも、女の皮を被った悪魔だ……」

あゝアカンアカン、久々に腹筋が痛くなるほど大爆笑してもうた。さすがにちよつと笑い過ぎたかもしれんなあ？ 他のクラスメイトからは変な目でジロジロ見られてしもたし、あれからナカジマのヤツも一言も口利いてくれなくなってしもたしなあ。

こりゃ今日一日はしばらく思い出し笑いが止まらんかもしれへんなあ。それどころか数日の間はナカジマ、いやカツオの顔見たら吹き出してしまうかもしれへん。今日も放課後、音楽室に行つてロギに一曲聴かせて貰て気分転換しようかな。多分、薫や那奈達も来よるやろうし。

「カツオ」

「やめろや、笑いがブリ返してくるやるが」

「ヒドいや姉さ〜ん」

「ブブツ！ やめろつたらやめろや！ もう腹筋限界やねん、筋肉痛になつてまうやる！」

「お〜いイソノ〜、野球しようぜ〜」

「ギャハハハ！ やめろつちゆうねん薫！ ホンマに笑い死ぬわ、ホンマ、ホンマに堪忍してえ！」

「フゲタく〜ん、どうだい今日も一杯ぶるうううあああああ」

「何でここでアナゴさんやねん！ ホンマにもうアカン、ダメエ、許してえ！ ギャハハハハハハハ！！」

痛痛痛痛痛、何か横隔膜の下の部分がメツチャ引きつりそうで呼吸もまともに出来へん。こんなキツイ筋肉痛はサッカークラブに入っ  
て初めての夏合宿でコテンパンにしごかれた時以来やわ。椅子から立ち上がんのもままならへんようになってしもたわ。

こりやもう日曜夜六時半のあのアニメ番組はしばらく見る事出来へんなあ。その度に腹筋崩壊してまう。ここに来たんは失敗やったな、さらに深くツボってしもて気分転換どこの話とちゃうわ。ニヤニヤとめちやくちゃ嬉しそうな顔しよってからに、薫のアホンダラめ。

「……も、もういい加減、僕の名前で遊ぶのはやめて下さい……」

「ほら見てみい薫！ ナカジマのヤツ、ベソかいて半泣き状態になつてしもたやないか！ 陰険なイジメ行為は中央教育審議会委員、松本美香の娘として見逃す訳にはいかへんでえ！ 謝れ、今すぐ誠意を込めてきつちりと謝らんかい！」

「ごめんなさいデス、カツオ兄ちゃん」

「タラヲやめい！ せやからちゃんと真面目に」

「バ、ブウ、ハ、イ！」

「ギャハハハ、頼むからもうやめれ、ギャハハハハハハ！」

「……き、桐原君も優しそうな顔してヒドい悪魔だ……」

アカン、イソノ一家の話はホンマにもう忘れよう。このままやと胃痙攣起こして病院送りにされてしまうで。さてと、とりあえずこの話は余所に置いて、昨日のロギ達のライブの余韻がまだ抜けてへんのかな、みんな何の約束もしてへんのに自然とここに勢揃いしとったわ。ウチの予想通りの展開やな。

「……いやさ、本当に昨日はマジで興奮したよ！ まさか航がバンドのギタリストになるなんて夢にも思ってたし、しかもそのバンドの演奏レベルがハンパねえだもん、絶対一茶も聴いたらビビるぜ、マジでハンパねえから！」

「ふむ、ハンパねえ、か、非常に軟派で耳障りで腹立たしい言葉だな、相手が翔太でなければ一発床に叩きつけていたところだ」

「……あれ？ 怒ってる？ もしかして一茶、いまいちノリ気じゃない？」

「当然だ、『面白いものを見せてやる』と聞いてわざわざお前についてきたというのに、こんな喧しいだけの部活に連れてこられて機嫌が良い訳が無いだろう？」

「……喧しいだけ、ツスカ……」

「機嫌が悪いのはそれだけではない、何せ栗山航は我々柔道部も入部を願っていた有望な逸材だったからな、あれだけ恵まれた体格を持ちながら、それをこんな子供じみた楽器のお遊びの為に費やして

しまつとは、宝の持ち腐れとは正にこの事だ」

「……楽器のお遊びッスか、どうやら一茶にとってロックンロールなんてもんは無縁の存在だったみたいだな……」

「俺は長渕剛と宇崎竜童しか聴かん」

「……あつ、左様でございますか、そりやどうも失礼致しました……」

あの時ここにいたメンバー全員はもちろん、今日は珍しくゴリー一茶まで姿見せとるわ。しっかしこれほど音楽室が似合わん男も珍しいなあ。今日はゴリ、部活休みなんかな？

「ねえ、何でわざわざこんなダツサイ演歌とか軍歌ぐらいしかしないOld typeなWankstaなんか連れてきたのよお？  
アタシ、超気分悪いんですけどぉ〜！」

「ロックとは本来硬派と言う意味だ、軟派極まりない軽率な女などが聴く音楽ではない」

「アハン？ 何よこのFuckin' Beast、またこのアタシにケンカ売ってんのぉ!?」

「……あーあ、ほら言わんこつちやない、この二人を引き合わせたら絶対こうなっちゃうのわかってるクセに、何でわざわざ強引に連れてきたりするのよ、翔太!? もし、これで最悪の状況になったりしたらちゃんと自分で責任取りなよね、私は一切面倒見ないから」

「！」

「えっー！ 何だよ！？ 俺のした事ってそんなに悪い事か！？ このバンドのファンを増やしたいって言うから一茶を連れてきたのに、そりゃねえよ、那奈！？」

「知らない、私は何にも関与してませーん」

おゝお、やつとるやつとる。あの二組は毎度の事、夫婦喧嘩が絶えまへんなあ。まあ多分、あの様子やとアホ翔太が空気読まずにゴリ一茶を連れてきたんやと思うけど、こりゃ確かにあまりにも愚かな行為やったなあ。那奈も完全にサジ投げでもた事やし、この後の千夏との激突はまず避けられへんやろなあ？ ウチも知らんでえ、障らぬ神に祟り無しや。

「いくら千夏がもつと人を集めてバンドのファンクラブを設立したって言うてもやで、よりにもよって一番仲悪いゴリを連れてきたら普通アカンと思うやろ、翔太も？ ホンマにアイツは生粋のアホやな、しかも相手が嫌がってんのに強引に連れてくるってのもよろし無いわ、やつぱりファンクラブっちゅうもんは、自然と人が寄せ集まって結成されんのが本物のファンクラブやとウチは思うねんな」

「……おい、人が帰ろうとしてるところを力ずくで拉致ってきた誘拐犯が何言ってんだー？」

「ん？ どこからか人の声が聞こえてくるで？ 何やコレ、幻聴か？ それとも幽霊の仕業かいな？」



「コラー！ 目の前目の前！ ちゃんと目を見開いて前を見るー！ 私はこちらにいるぞー！」

「あれ？ オマエ誰や？ また新しい登場キャラか？」

「誰や？ じゃないでしょ！ 私よ私！ あなたのかけがえのない最高のパートナー、吉田綾ですー！」

「何や綾か、影が薄うて向こうが透けて見えたから、てっきり幽霊かと思たわ」

「失礼過ぎ！ 親しき仲にも礼儀有りつてことわざもあるでしょう！？ さっきからずっとみんなと一緒にここにいるんだからさ、ちゃんと読者の皆さんに紹介ぐらいしてよね！ でないと本当に空気キャラになっちゃうじゃない！」

そう言うウチも帰路に着こうとしてた綾を無理矢理後ろから口を塞いで強引に拉致ったんやっけか。まあ、汗臭そうな柔道ゴリラなんかより、とりあえず女である綾がファンクラブに入った方が、航とロギは反応無いかもしれんけど少なからずナカジマとザビは喜ぶやろうと思てな。

「いちいち紹介なんかいらんやろが、別にオマエに紹介するほどのプロフィールなんてありやせんし、ただでさえおるんかおらんのかわからんくらいキャラ薄いんやから、こうして出番が増えたただけも少しは有り難い思えや！」

「ひつどーい！ この前わざわざ伊豆まで行ってお父さんの宝物探

しを手伝ってあげたっていうのにさ、そんな言い種ってあんまりだよ！ 本当、翼って友達甲斐のない薄情な人間だね、最低だよ！」

「何やとゴラア！ ウチかてオマエみたいな街中どこにでもおる量産型女なんか友達と思うてへんわ！ 嫌ならウチと絶交したらええがな、ああゝ、絶交や絶交！」

「何よ、いきなり絶交って！ そうだったんだ、そうだったんだね！？ 翼は前々から私の事が嫌いだったんだね！？」

「何を言ってるねや！ 前々から嫌いやってたら長々と五年間も一緒にコンビ組んでる訳ないやろ！？」

……………。

「エへへへへへへへ」

「やっぱり私と翼は最高のコンビだよなっ！」

「いちいちオードリーネタを振ってくんなっちゅうねん！ それにな、ウチからしたらそない最高とまでは思てへんし」

「……………えっ……………」

「…………オマエな、頼むからそれくらいの事で本気でへこむのやめてくれへん？ へこんでる時のオマエの顔、何か呪われそうでメチャメチャ怖いねん！ そない虚ろな目でウチを見るな！ ホンマに怖い！」

まあ、確かにウチと綾はええコンビと言ええコンビやな。綾にしても千夏にしても、ウチはこっちから話を仕掛けてキチンとオモロい返しがくる相手やないと仲良くなりたくないねん。だつてつまらんやん、ええ反応が無いと。人間同士やもん、マネキンと喋つるとの訳ちゃうで。

何て言うかなあ、打てば響く、つてヤツかいな？ 会話つちゅうんはお互いの魂の共鳴やからな。せやから響くどころか聞く耳持たずと話を相殺する那奈や、どこ跳ね返るかちつとも予測出来ん小夜なんかはつきり言つてウチからすると苦手なタイプやねん。

まあ、そう言うても二人とはかれこれ小学校からの長い付き合いやし、オトン同士が実の兄弟みたいな間柄つてのもあるから今も一緒にあったりするんやけどな。俗に言う腐れ縁つてヤツやな。それに、コイツらはウチがおつてやらんと何にも出来へんアホコンビやからなあ。ホンマ手が焼けんねん、この子らは。

「ところでや、ナカジマのフルネームは判明したとして、ザビの本名は何て言うねん？ ブラジル人ってハンパなく名前が長いやろ？ あのロナウジーニョかて『ロナウド・デ・アシス・モレイラ』言うんやもんな、やつぱりザビもミドルネームとか入ってメチャクチャ名前長いんか？」

「Oreノフルネーム？ 『山田ザビエル』デヤンスヨ？」

「短っ！ しかも普通っ！ それより何や、『山田』ちゅう事はザビは日本国籍を持つ日系ブラジル人なんか？」

「Sim！ Ore八日系二世同士ノ間ニ生マレタ三世デヤンス」

！ ルパン・ザ・サード」

「でもアレやろ、普通日系人は日本人用の名前と一緒に、ブラジル人用の名前も名付けられるんとちゃうか？ そっちの名前は何て言うねん？」

「ザビエル・モラレス・デ……、長過キテ忘レタデヤンス」

「何で忘れんねん！ オマエそれ、自分の名前やろがボケエ！」

ホンマいい加減なんやな、お祭りラテン系の血が入った人間っちゅうんわ。多分、悩み事なんか何にも無いんやろな。ええなあ、ウチもブラジル人の血が入ってたらもつと陽気に生きてサツカーも上手くなれたんやろなあ。アイツらブラジル人の足首と膝の曲がり方、普通の人間のものとちゃうもんな。ホンマ化けモンやで、アレ。

「あゝ、せや！　せやせやせや！　名前や名前！　名前で思い出したわ！　オマエら個人の名前なんかどうでもええねや、それよりオマエらのバンドの名前や！　いつまで名無しのまんまでおるつもりやねん！？　いい加減ちゃんと決めんとアカンやろ？　どないすねん、オマエら？」

そつやねん！　昨日ちよこつと話聞いてブツたまげたんやけど、コイツらのバンド、まだ正式な名前がちゃんと決まっていらないんやて。アホな話やでホンマに、そんなバンド組んだ時に一番最初にメンバーで決めておく事なんとちゃうの？　よう今まで名前無くて困らんかったと思うわ、どっかの会場でライブやる時とかどない

するつもりやったんやろか？

「……い、いや、会場とか借りていざ人前でライブやる時になったら、ロギが仕切ってそれなりなバンド名を付けてくれるのかな、って思ってたもんで……」

「別ニ今マデ名前無クテモ、大シテ困ラナカタデヤンスヨ〜？  
路上や公園デゲリライブヤッタサツサト退散スルノガOre達のスタイル、ギャラリーカラ名前ナンテ聞カレタ事無イデヤンス〜、ソレニOre達、コウイウ大事ナ話ハ全部Rogiニ任せテイルデヤンスカラ〜」

「あのなあオマエら、さつきから揃いも揃って二言目にはロギロギ言うとするけどな、その肝心のバンドリーダーはん、さつきからずつと航とギターの練習に没頭してて、そんな話どこ吹く風って感じやで？」

今日もあの二人、ウチらが来る前から一足早くここに来てわざわざ湿気臭そうな教室の隅に陣取ってジャカジャカジャカジャカとギター三昧や。二日間あんだけ散々ギター弾きまくっつといて今日もギターで、ホンマ飽きへんもんやなあアイツらも。他にやる事何も無いんかい？

「……そう、これが基本の四分の四拍子に四分音符で4ビート、これが八分音符だと8ビート……」

「……………4ビート、8ビート……」

「ねーねーねー、コオロギ君の好きな食べ物ってなにー？ あたしねー、お母さんが作ってくれるバケツプリンがだーい好きなんだー！」

「……ボクもプリン、好きです……、で、これをさらに速くすると16ビート……」

「えっー、コオロギ君もプリン大好きなんだー！ プリン美味しいよねー、あのプルプルしてるのが面白いよねー、ねーねー、航クンもプリン好きー？」

「………プリンさんが好きです、でもヨーグルトさんはもっと好きです……、えーと、これが16ビート……」

しかも、ずっとひっきりなしに小夜が周りでチヨロチヨロして馴れ馴れしく話しかけたりしとるのに、よう二人ともイライラせんと集中出来るもんやな。あんな無口な人間同士で一体どんな会話交わしとるんやろか？ 変に仲良くて何か気持ち悪いわホンマ、あの二人……。

「………も、もしかしてロギはもう僕達に愛想を尽かしてしまったのかな？ そんなにワタルと一緒にギターの練習をしている方が楽しいのかな……？」

「ダトスルト、モウK a t s uハ才役目御用デヤンスネー？」

「そ、そりゃないよザビまで！ 僕だってこのバンドにたくさん貢

献してきたのに、そんなのあんまりだ、あんまりだよ……」

「お役目御用になりたないんやったらな、ここらで一発奮起してこのバンドの名付け親になってや、きっちり自分の存在をロギにアピールせなアカンでオマエら！ もう今日の内にさっさと名前決めてまおうやないかい！ こういうもんは早いもん勝ちやで、善は急げや！」

……って、何でウチがコイツらのバンドの面倒見てやらなアカンねん？ これってマネージャーになった小夜の仕事とちゃうの？ まあええわ、アイツに任せるとろくな事にならんやろうしなあ。かといって、作詞作曲バンド活動方針を全部ロギ任せにしとる無責任なコイツらだけやとそれも不安やなあ。ファンクラブ初代会長の千夏はぐん、ちよいと手伝ってやぐ！？

「うぐん、とりあえずはみんなからアイデアを出して貰ってえ、そこからグッドセンスなバンドネームをチョイスするってのはどうかしらあ？ それならみんな文句無いでしょ？」

「ほな、早速千夏から何かアイデア出せや、言い出しっぺはオマエなんやからな」

「Non , non , non , non ! アタシは最後！ もし、みんなの出したアイデアが全部バッドセンスなダッサイネーミングだったりしたら、その中からチョイスするどころか完全にお手上げ状態になっちゃうじゃなあぐい？ 一番のお楽しみ、メインイベントってのは最後の最後までとっておくものなのよ、当然でしょ？」

「何がメインイベントや、言うわけアホ！　これでしょうもない名前出したら一生からかってやるやさかいに、覚悟しいや？」

ほなら、ウチの独断と偏見で勝手に順番決めて何かええバンド名挙げていつて貰おか。せやな、まずはいつも偉そうに場を仕切つとる那奈、オマエからや！

「えっ、バンド名？　ちょっと待ってよ、いきなりそんな事言われてもなあ……」

「何でもええねん、何かパツと思いついた名前、言うてみいや？」

「……って言われても何にも思いつかないなあ、うーん、えーと……」

「はい時間切れ、オマエはセンス無しのアホの子決定！」

「ちょっと、何よアホの子って！？　アンタ、ブン殴りたいの！？」

「ほなら、次は翔太！　何でも良いから言うてみい！」

「えっ、俺？　そうだな、やっぱりロックバンドなんだから、何かしらカッコいい名前が……」

「はい遅い！　オマエもアホの子決定！」

「いや早えよ！　早過ぎだろ！？　ちょっとは考えさせろっつーの」



！　いくら何でも進行スピードが無茶苦茶過ぎるぞ、翼！」

アホか、こんなもんはじっくり考えたところで良い名前が出てくる  
もんとちゃうねん！　萩本欽一も言うところやる、『考えたらオシマ  
イ！』ってな！　こういうもんは思いつきやねん、インスピレーシ  
ョンやねん！

バンド名つてのはパツと聞いたただですぐ人に覚えて貰わなアカン  
もんなんやから、意味とか理由とかなんて後付けすればそれでええ  
ねん！　大事なんは語呂と響きや、グダグダと考えとつたらアカン  
のや！

「あつ！　ねえねえ翼、私、今ピーンときた良い名前があるんだけ  
ど、聞いてくれる？」

「また幻聴か幽霊の声が聞こえるけど、まあええか！　はい次！  
次はえ」と、誰にしよう？」

「ちよつと何でよ！？　何で私を無視すんの！？　ねえ、翼つてば  
ー！」

あゝあゝ聞こえへん聞こえへん！　まかり間違つて綾が名付け親な  
んかになってしまたら、このバンドの登場の回に毎度毎度コイツま  
で一緒に登場させなアカンくなるやろが？

無理無理無理、もう登場キャラ多すぎてオマエの席なんか残つてへ  
んねん！　少しは筆者の都合つてもんも考えろや！　はいはい次々、  
ほなら次は小夜、オマエとりあえず責任者なんやから何か言えや！

「ハイ！ えーとね、コオロギ君がリーダーだから、『コオロギ君と愉快的音楽隊』ってどうかなー？」

「チツ……、はいはいご苦労さん、却下や却下」

どこの出版社の童話絵本やねんや、その子供騙しな長ったるいアホな名前は？ しかも偶然か音楽隊と虫の鳴き声をかけて意外にええセンスしてたりするから余計ウザいわ。悔しい、ウチちよつと悔しい！ 小夜の分際で出来過ぎやねん、このどアホが！

「ほならそのゴリー茶、あまりこの話に興味ないやろうとは思っけど、何か一つ言うてみい！」

「男四人熱血筋肉音楽隊」

「オマエもどこのホモ漫画のタイトルやねん、それ？」

「翼も翼よお、何でこんなパープリン相手にアイデアなんか聞いたりするのよお！？ これで本当に名付け親になっちゃったらコイツまで毎回登場扱いになっちゃうでしょ！？ そんなの嫌よ、アタシ絶対お断りだからねっ！」

「あのなあ、千夏も初代ファンクラブ会長名乗るんやったら来るもん拒むなや？ オマエの好き嫌いでファン会員選んでどないすんねん？」

「ねーねーねー、じゃあ『コオロギ君と愉快的三匹の音楽隊』だっ

たらどうかなー？ 『愉快な』 だけだと何人組かわからないと思うしー」

「じゃかあしいねんアホンダラ！ もう小夜には話聞いてへんがな！ 大して名前も変わってへんし、ええ加減『音楽隊』からイメージ離れるや！ ロックバンドで音楽隊ってどう考えてもイメージおかしいやろがボケエー！！」

全くどいつもこいつも揃いも揃ってアホばかりやないかい！ もつとまともなアイデア出せる人間は他におらんのかい？ こんなところで早々に座礁乗り上げてどないすねん、何か先行き不安やなあ、このバンド……。

「はああああああああ！！！！！」

「何や何や何や！？ 何やねん大声出していきなり！？」

「降りてきたあ！ 我に神が降りてきたああああああ！！！」

「あゝもう！ いちいちうつさいねんオマエは！ 何や薰、何かええアイデアでも浮かんだんか！？」

「える しってるか こおろぎは ぷりんしか たべない」

「せやから何やねん！？ 全然意味わからんがな、真面目にやれやこのどアホ！」

「いやこれ事実、本当にロギ氏は昼食にプリンしか食べないんだっ



「真ん中伸ばしただけやないか、このボケエ!!」

「……って言うかあ、二人ともプリンのスペル間違ってるわよお？  
『プリン』じゃなくて『Pudding』が正解、テストに出るかもしれないから読者のみんなは間違えないようにね、千夏ちゃんとの約束よっ!」

……アカン、もうダメダメや、キリがないわ。こんなアホどもにバンド名を募集したウチが間違っつつたわ。ホンマどうしょもないでコイツら。失望したわ。ウチはもうすっかりガツカリモード突入やで。

「だからさ、とりあえず私の意見も聞きなつてば! 少なくとも『音楽隊』や『Puree e N』や『男四人ホモなんたら』よりかはまともな名前が浮かんだんだからさ! ねえ翼、気になるでしょ? 気になるよね? ねえねえねえ?」

「ところでえ、もちろん翼の頭の中にはすでに何かハイセンスなバンド名が用意されているのよねえ? どんな名前なのお? 発表してみてよ、ねえ?」

「うえっ! ウチかいな? ウチの考えた名前はなあ、えゝとなあ、アレやアレ、えゝと……」

「だから無視すんなって言ってんだろぅがよー! 何よこれ、イジメ? イジメよね? 明らかイジメ行為よね? この小説はイジメを幫助するって言う訳? ありえない、このご時世にそんな不見識な話、絶対ありえない! 訴えてやる、中央教育審議委員会に松本

美香さん宛てに匿名で手紙書いて、翼と千夏ちゃんを名指しで訴えてやるー！」

「やつかましいなあ綾！ わざわざウチのオカンの名前まで引つ張り出すなや！ イジメやか訴えるやかギャーギャーと騒ぎよつてからに、今回こんだけ出番があつて一体何が不満やねん！？ 言うとかけどな、今回のオマエのこの立場、キャラ的には結構オイシい立場なんやで？」

「えっ、そうなの？ 今回の私、オイシいの？」

「おう、オイシいオイシい！ お陰で透明キャラからシースルーキアラに進化しとるで」

「ワイイ、やったー！ って、それって大して変わってないじゃない！ やっぱりこれはイジメだよ、翼は私の事が嫌いになったんだー！」

「アホか！ オマエが嫌いやったらこんな長々と尺使つて愛着持つてイジくり倒すかつちゅうねん！」

.....。

「エへへへへへへへ」

「私と翼のコンビネーションは人っこ一人も入り込めないほど緻密で完璧よね！」

「いや、もうええ加減飽きてきたわ、そろそろコンビ解散してピ  
ン一本でやっていこうかなあ？」

「……えっ……」

「せやからその貞子顔やめろや、怖いっちゅうねん！」

あ、もうしんどい。ホンマにコイツ、嫉妬深いっつかかまって  
ちゃんっつか、これいつかホンマにコンビ解散って話になったら  
夜道で後ろから刺されそうで怖いわ。何で女が女の嫉妬心の恐ろし  
さを身を持って体感せなアカンねん？ もうコレ腐れ縁どころとち  
やうわ。因縁やで、因縁。

「……って言うかあ、もうB級漫才はお開きって事で良いかしらあ  
？ ねえ、どうなのよ翼、翼のネーミングセンスは果たしてアタシ  
の足元に及ぶだけの實力があるのかしらあ？」

「アホか！ 見くびるなや千夏、ウチの手にかかればロックバンド  
の命名の一つや二つ、赤子の手を捻るくらい楽勝もんなやでえ！  
？」

「じゃあ、早速その自信満々のアイデアをお聞かせ願おうかしら、  
大ブレイク間違いなしのSuper rookie rock b  
andの行く末を占う大切なバンドネーム、責任重大よあ！？」

「あのな、アレやアレ、あの、『イソノ一家』って、どや？」

.....。

「.....うわぁ、マジで？ 翼、それReally？」

.....いや、あのな、その、スマン。ホンマにスンマヘン。ウチも自分で言うてみてコレはアカンとひしひし痛感したわ。不肖です。こんな自分をホンマに残念やと思います。自分を棚に上げて糞味噌言いまくってホンマ申し訳ありまへんでした。

物に名前付けるって結構難しいんやなあ、ウチにはちと無理なお仕事みたいやわ。ああ、穴があつたら入りたい。オトンに合わせる顔が無い。ウチのこないみつともない姿、そないみんなで見んといてや、嫌やぁ、恥ずかしい.....。

「.....ほら見ろお！ オマエらバンドメンバーが前々からしつかりと名前決めとかんからウチがこない恥ずかしい目にあつたやないかあゝ！ カツオ！ 山田！ オマエら二人揃つてウチに謝れえ！ 深々と土下座して額を床に擦りつけて謝らんかい！！」

「Eh pa！ ソリヤアンマリニ無茶苦茶ナ言イ分デヤンスゝ！ マルデミサイル撃ツテオイテ国連ニ謝レッテ言ッテル、ドコカノ国ト一緒デヤンスヨ、將軍様ゝ！？」

「し、しかも人の名前ネタを勝手に使つてスベつておいて八つ当たりするだなんて、何て身勝手な人なんだ、松本さんって.....」

「ええい、黙らっしゃゝい！ ウチがスベつたんは全部オマエらのせいや！ 責任取れい！ 誠意を見せい！ ウチの小さな弱いエ



ンジェルハートをギツタギタに傷つけた賠償を現金で札束の耳揃えて今すぐ払わんかゝい！！」

「いつから翼は『ミナミの帝王』になったのお？　ねえねえ、そんな事よりナカシマ君もザビちゃんも自分達のバンドの話なのにい、全部アタシ達に任せつきりってちよつと無責任過ぎるんじゃないかい？　二人もちゃんと名前考えなさいよぉー！　って言うか本当に前々から何も考えてなかったのお？　自分達の大切なバンド名でしょ、少しぐらいは何かアイデアがあってもいいんじゃないのお？」

おう、そやそやそや、千夏の言う通りや！　自分達の名前くらい他人に名付けて貰うより自分で決められるならそれにこした事ないわ第一、コイツらが一体どんなバンド名が一番しっくりくるんか教えて貰わんとウチらも考え様が無いしなあ？　コラアカツオ！　山田！　何か言ってみいや！？

「Me　confie！　実八昔カラズツト考エテイタ名前ガアルデヤンス！」

「よしっ！　ほなら山田、一発かましたれや！」

「Oreノ案ハ、バンドメンバー全員ノ頭文字ヲ取ツテ、ソレヲカツコ良ク並べ替エルデヤンスヨ！　マズ、Rogioノ『R』！　Katsuノ『K』！　Xavierノ『X』！　サラニ新加入メンバー、Wataruノ『W』！！」

「ほお、何かええ感じやないかい！　四人の頭文字を取って、その名前は！？」

「『RKXW』！ 特二深い意味八無いデヤンス〜！」

「並べ替えてもへんやないかい、このアフロボケエ！ 何やねんそのヘンテコアクロバティック自転車みたいな訳わからへん名前は！？ んなもん審議する必要も無く却下や却下！ 意味は無いわ大して面白くも無いわであまりにしようもなさすぎるわ、この頭まりもっさり星人が！」

「じ、実は僕、このバンドが結成されてから、ずっと胸の内に秘めていた自信作があるんだ！ なかなかバンド名を決めようっていう機会が無くて、これまで発表出来ずじまいだったんだけど……」

「ほお、なら正に今日はその自信作を発表するに良い機会やで、思い立ったが吉日や！ ナカジマ、オマエがホンマもんの男になれる絶好のチャンスやぞ、遠慮無く思い切って言うてみい！」

「う、うん！ す、『Stars』ってのはどうかな！？ 『スペシャル・スリー・アーティストック・リアル・サウンド』の略なんだけど、これ思いついた時、自分でも『うわー、すげーカッコいい！』って感激しちゃって……！」

「……正気ですか？」

「……え、えっ？ どとど、どうして？」

「……『スリー』でオマエ、航が加入したんやからもう三人やのうて四人やん？」

「あっ……、じゃ、じゃあ、スリーのところをフォーに変えて……、

ん？ あれ、待てよ？ これだと『Stars』じゃなくて『Sfars』になっちゃうな、あれ、どどど、どうしよう？ えっ、えっと……」

……アホや。揃いも揃ってアホのオンパレードや。カーニバルや、だんじり祭りや、闘牛のアホ追い祭りや。これはまるで、アホの宝石箱や〜ん！ なんて言うてる場合か、このどアホツ！

何が『Stars』やねん、めっちゃめっちゃダサイ名前やないかい！ オマエらは星の王子様かそれともにしきのあきらか？ いっそ星屑になつて大気圏で焼け墜ちるかブラックホールに飲み込まれてしまえや、この生粋のどアホどもが！

「ホントみんな、ネーミングセンスの欠片も無いダサダサのダメダメなおバカさんばかりね〜？ もうガツカリって感じい〜！」

「おうおうおう〜！ さつきから黙って聞いてりやあ〜だのこ〜だの好き勝手言ってくれるやないかい千夏！ もうここにおける全員の意見は出揃ったで、後はオマエ一人や！ 凄腕デザイナーのママから受け継いだその類い希なインターナショナル的感觉つてもんを、是非とも平凡なウチらに教え被りたもうやないかい！ これだけ大風呂敷広げてズッコケてみい？ オマエに平和と言う明日は訪れへんで！？」

「Take it easy！ もうすでに最高にCoolなバンドネームを用意してあるわ、ちよつとナカシマ君の考えたネーミングと近いところがあるけど、アタシのはそんなのよりずっとずっと意味も響きもカッコいいんだから！」

「御託はもうええねん！ 千夏、勿体ぶらずにさつさと言ってみ  
やー！」

「発表しまあゝす！ ズバリ、『Super Nova』ってのは  
どうかしらあゝ！？」

「……スーパー、ノヴァ？」

……何やそれ？ スーパーはわかるけどノヴァって日本語でどうい  
う意味や？ ノヴァ、ノバ、NOVA……。アカン、あの駅前留学  
のヘンテコうさぎしか頭に思い浮かべへん。いっぱい聴けて、いつ  
ぱい喋れる ……アカンアカンアカン、考えれば考えるほどあの  
歌が頭の中でエンドレスリピートになってまうわ。

「ねーねーねー、そういえば最近、NOVAうさぎのCM見ないよ  
ねー、どうしちゃったのかなー？」

「……まさかコイツと頭の中が一緒になるやなんてなあ……、あの  
なあ小夜、その話題にはあまり深く触れん方がええと思うで？」

「えっー、何でー？」

「何でも無しも色々と世の中には大人の事情つてもんがあんねん、  
下手に煽らんとそつとしくのが自分の身の為やで？ ほなら英会  
話教師の千夏はん、話を本線に戻してさっきの詳しい解説頼むわ」

「Hey! Every body, Enjoy speaki  
ng! Listen to me! Superは特出している

とか絶大なもの、Novaは生まれたばかりの星や惑星って意味よ、つまり、日本語に直訳すると『超新星』ってところかしらね？」

「『超新星』ときたかいな、そついや良う将来有望そうな新人が台頭してきたりする事を『新星現る』とか言ったりするなあ？」

「そうそう、『流れ星のように突然現れた』とも言われたりするでしょ？ でもね、このバンドにはこのアタシが初代ファンクラブ会長務めるからには『新星』とか『流れ星』程度のレベルで世間から評価されるくらいじゃ満足出来ないわ、彼らにはいつか日本、いいえアジア、世界を代表するHyper mega hit super bandになつて貰わないとねっ！ 音楽界という太陽系の形態図を一変させるBig Bangを起こして貰いたいつて願いも込めて『Super Nova』！ ねっ、超Coolって感じでしょ？ みんなどうかしらあ？」

銀河の仕組みまでも変えてしまうほどの巨大新惑星かい、これまた随分とブツ飛んだ大規模な話やなあ。でも、何か『Super Nova』って名前の響きもカッコええし、何といつてもパツと聞いただけで簡単に覚えやすいところも非常に好印象やな。この名前、ウチは好きかも。後は当のメンバーどもの反応次第や、何か異論があるヤツおるなら名乗り出るやあ！

「Bravo！『Super Nova』、トツテモイカシタ名前デヤンスネ！ Oreハスツカリ気二入ッチャツタデヤンスヨ！ Katsushadudeヤンスカ？」

「……う、うーん、いまいち、こつ、な、何だかなあ？ 星とか惑

星を連想させるのであれば、やっぱり僕が長年構想に構想を重ねてきた『Stars』の方がわかりやすく、ウ、ウケると思うんだけどなあ？ 『Super Nova』って言っても多くの日本人にはすぐに意味が伝わらないと思うし、そ、それに僕が考えるこのバンドを影で支えている存在っていうのは僕とロギであって、面倒な事が嫌いなロギや同じタイプみたいなワタルも絶対、僕が考えた『Stars』の方が絶対気に入ると思うし……」

「おい航！ ロギ！ 二人、ちゃんと話聞いたったやろ！？ オマエらの正式バンド名、『Super Nova』でどや！？」

「……………異議無し」

「……………う、うぐう……………！ ち、ちちち、違う、違うよ！ ワ、ワタルは昨日入ったばかりだから、まだバンド名の重要さを良くわかっていないと思うよ？ ほ、ほら、何だかんだ言ったってまだ素人みたいなものだからさ、ワタルの場合は、うん……………」

おうおう何や何や、真っ赤な顔して額に脂汗かいて眼鏡まで曇らせよって、随分と必死やなナカジマ。余程自分で考えたバンド名が不採用にされんのが嫌みたいやな。ヘタレで気弱のクセに自己顕示欲だけは一人前に強い陰気男、正にウチが一番嫌いなタイプの間人やで。気持ち悪っ！

「で、でも、あの、ロギは違うよ、ロギは！ 音楽やバンドには何が大切かという事を完全に熟知していて、今までずっと僕と一緒に二人三脚で歩んできたロギなら、きき、きつと僕の考えた『Stars』の方を……………」

「おいロギ！ 後はオマエの鶴の一声だけで、どないすんねん！？」

「……ワタルが良いならボクも、それで良いと……」

「……ふ、ふえええええ、ロ、ロギまでそんな、あああ、あうあうあうあう……」

「ほなら、賛成三名に反対一名、多数決により採用って事で決まりやな、文句無いな、ナカジマ！？」

どうもいまいちまだ納得しきれてへん顔してふてくされとるナカジマはさておき、このバンドの正式名称も無事に決まったようやな。これでやっとプロデビューへの道のりの第一歩を踏み出せた感じやで。

「んもおう！ アタシ絶対このバンドネームはみんなUnanimityで大賛成してくれるってスッゴい自信あったのにい！ナカジマ君ってKYでウジウジしててへそ曲がりでひねくれ者でレディに優しく出来ない超Scrubなダメ男だったのね、最っ低！何かもうアタシ、メチャクチャ気分悪いんですけどおう！？」

「……え、ええっ？ そ、そんなあ……、い、いや、あのその、い、言い訳じゃないけど、あの、ほ、本当は僕も『Super Nova』の方がカッコ良いなって思ってたんだよね！ や、やつぱりこんな素敵なバンド名考える三島さんって凄いなー！ なんて感心しちゃってさ！ で、でも、あの、何て言うか、その、だから、つま

り、こ、こういう多数決の場って対抗馬がいないと盛り上がらない  
と思つてさ、僕のある事で三島さんの案がさらに際立てば良い  
なー？　なんて思つて、で、ですから、あの、その……」

「……オイ、ナカジマ！　今のオマエのその姿、千夏の言う通りホ  
ンマに最低のクソ人間やぞ……？」

コイツ、ホンマに性根から性格腐りきつとるわ。ウダウダと女々し  
く言い訳がましいし、白旗挙げた途端に今度は嘘丸出しの媚び売つ  
てゴマをスリスリ。今日のこの一件でナカジマの男気指数は一気に  
株安ストップ高まで急降下、男の風上にも置けんヤツつてのは正に  
コイツの事やな。いっそゴリー茶に五、六発太平洋沖合まで投げら  
れたらええんとちゃうか？

しかし、それに対して千夏は今回また株を上げたなあ。あれだけ大  
見得切つて偉そうな口を叩いてただけあるわ。『Super Nova』か、語呂も響きもええ感じや。いやあ、ウチもすっかり見直  
したで千夏！　タダのオシャクソ野郎かと思てたらちゃんとやる時  
はやるやないかい！　さすがはウチの一番手の子分やでえ！

「でもアレよ、先に言つとくけどお、あくまでも『Super Nova』の著作権や使用权諸々は全てアタシにあるつて事だけは忘  
れないでよね？　アナタ達がメジャーデビューしてスーパースター  
になった暁には、うちの『ミシマ』ブランドとのコラボレーション  
を果たして貰うつもりだから覚悟しときなさあーい！？」

「……きつちりママへのお土産も忘れずゲットかい、阿漕な商売し  
よるなあ、この腹黒女は……」



「ん？ 何だお前、さっきから俺の顔を見て何をニヤニヤしている？ 相変わらず気持ち悪いヤツだな、何か変な薬でもやっているんじゃないな？」

「……せいぜい吠えるだけ吠えてればいいわ、今に見てなさい、このシナリオでアタシの P e r f e c t   w i n は N o   d o u b t よ！ これでアタシも T h e   e n d ね、ウフフ、グウフウフウフウフウフウ……！」

……女つて怖い生き物やなあ、一つでも恨み辛み買うとどんな手を使つても相手を地獄に叩き落とそうとするからなあ。何やねん千夏のあのニヤけ顔？ 小悪魔どころとちゃうで、アレもう妖怪や、妖怪。妖怪『因縁怨恨ビツチ』や。おつそろしいのおゝ！ おゝい誰か、この教室全体に清めの塩撒いとけ、塩ゝ！

「……私の考えたバンド名、結局聞いてもくれなかったのね、恨めしい、恨めしいいいいいいい！！」

「うわああああああ！！　ここにももう一体、気色の悪い怨念の塊みたいな女がおんね〜ん！　なんちゃって、って言うてる場合か、どアホ！　悪霊は退散や、これでも食らえ！　十両力士・北桜関がいつも土俵に撒くぐらいの大量の塩化ナトリウムを食らえ食らえ食らえ〜！！」

「私はナメクジかってーの！ それより翼！ 無事にバンド名が決まったのは良いけどさ、そんな事よりも私と翼にとってもっと大切なビッグニュースが一つある事を忘れちゃいませんか？」

「……ウチと綾の大切なニュース？ なんやったつけ？ M-1出場決定？ 上方万歳大賞受賞？ それともなきや時期大阪府知事選出かいな？」

「お笑いと大阪から離れろっつーの、この関東生まれのインチキ関西人！ 違うでしょ？ 選出は選出でも知事選じゃなくて、もっと世界規模の大きいものよ！ 帰ろうとした私を強引にここに連れてくる時、何て言って説得したか覚えてないの！？」

「……手相見せて下さい、やったつけ？」

「それ、どこの怪しい宗教団体の勧誘？ 違う、違います！ 『ウチらの長年の成果がこうして実った事を、大々的に発表してみんなに自慢してやるんやあ！』 って言ってたのはどこの誰！？ 昔からの念願が叶って嬉しかったのは私よりも翼の方だったんじゃないの！？」

「……あつ、ああああああ！！！！ 思い出した、思い出したああああああ！！」

「思い出すの遅っ！！ ヤダ翼、若年認知症の疑いアリ！？」

「オマエそない大事な事、何でもっと早くに言わんかったんや！？ 危つく完全にスルーするどころやったやないかい！ ホンマにオマエは何の役にも立てへんダメな子やな、母ちゃんはそんな子に育

てた覚えあらへんでえ！！」

「翼が私の話をちつとも聞かないで、千夏ちゃんとの会話に夢中になつてたのかいけないんでしょ！？ 何よ、勝手に連れてきたクセに放つたらかしにして挙げ句はダメな子呼ばわりだなんて、やつぱり翼の言葉や態度から全然私への愛情が伝わって来ないよ！ えーえー、どうせ私はダメな子で嫌われ者ですよ、この地球上で私を大切に想ってくれる人なんて一人もいないんだー！！」

「アホかあ！！ ホンマに嫌いやつたら、ウチがオマエの事をこない実の子みたいに可愛がる訳がないやろ！ 手のかかるダメな子やから、お母ちゃんは心からオマエが愛おしいんやでえー！！」

……………。

「イエス、フォーリング・ラブ」

「やっぱり私と翼は最高のパー……」

「もうええっちゅうねん、このどアホツ！！」

そーや、そやそやそやそーや！！ ウチとした事がこない人生の中で十本の指に入るようなドデカいニュースを忘れてしまつやなんて、こりやウチにとって一生モンの汚点になつてしまつで、コリヤコリヤ！ とてもお天道様に顔向けなんか出来まへんがな、アカンアカン、今日からもつとええ子になつて好き嫌いせず残さず何でも食べますさかいに、どうか神様、堪忍してやー！？

……ん、何やねん？ 何やて、そのウチと綾に関するドデカいニュースってのは一体何なんやってか？ 気になる？ 知りたい？ 知りたいか！？ そゝかそゝか、知りたいかゝ！？ そりやもう大騒ぎやで、『Super Nova』なんて話も霞んでしまうほどハシパないビッグニュースやで！？ 知りたい？ どうしても知りたいかオマエら！？ ほならここにおる読者だけにこつそり教えたるわ。実はな、このビッグニュースってのは……！

…… 次回のお楽しみやねん……！

オイオイオイ、そないムキになつて青筋立てて怒るなつちゅうねん！ 『騙した』とか『嘘つき』とか言うなや！ そりやしやゝないやろ、ここまでの話で一体どんだけ文字数使った思てんねん！？ また性懲りもなく一話二万、三万文字オーバーになつてもうたら、しんどいのはそれを全部読まなアカン事になるオマエら読者の方なんやで？ まあ、最近は筆者の方も編集に苦労して音をあげとるらしいけどなあ？

悪い事は言わへん。こういう話はな、適度にインターバル空けて読んだ方が疲れずに思いつ切り楽しめてええ事尽くしやねん。楽しみは後にとつておく、さつき千夏もそう言つとつたやろ？ せやから、この話はまた次回。サヨナラするのは辛いけど、時間だよ、仕方がない。 って事で、今回はここでお別れや。またなっ！

…… って言つてもなあ、このまましばらくの間、せつかくこんなアホな作品をわざわざ読んでくれてはる読者はん達を悪戯に待ち続けさせんのも、心優しいウチとしてもちよつと心残りやったりするん

やなあ……。

そ・こ・で・や！　ウチな、今までにない斬新なアイデアがピーンと浮かんたんや！　多分な、これまでの作品にはまず無かったであろう画期的な試みやぞ？　そのアイデアってのはなあ、知りたいかあ？　ウズウズするかあ？　周りには内緒やでえ？　ウヒヒツ……！

聞いて驚け、このままこの文章をズツと下までスクロールさせるとわかると思うけどな、実は今回の話にはこの作品にしては珍しく、筆者の『後書き』があんねん。何とその中でな、次回で語られるビッグニュースの内容と、同時に明かされるウチの秘密の話が予告編として公開されていたりすんねん！

オイオイ筆者、こない過剰サービスな無茶な事してホンマに大丈夫なんかあ！？　でもこれはアレなんよ、途中で読書に飽きて端末のブラウザ閉じたり飛ばし読みせんで最後の一行まで読んでくれたみんなへのウチからのせめてものお礼みたいなもんなんや。

せやから、何も遠慮せずに堂々と見たってや？　ここにいるみんなだけへの特別待遇、この松本翼ちゃんからの目一杯の愛情を込めた最高のプレゼントなんやでえ！！

ウチ渾身の新企画である『オマケ後書き』、そこには次回の最大の見せ場のダイジェストと、ウチの幼少期時代に秘められた『Be Ambitious!!』作品内、最大最高の秘密の謎が……！

## 第69話 ひびき（後書き）

書かれとる訳無いやろがボケエエエエエエ〜〜〜〜〜〜！！！！！！

ウツソつやつね〜ん！！ アッホツかあ！ そないネタバレみたいな事を書いたらそれで満足されてもって次回更新したって誰も読んでもくれなくなるやないかい！ タダでさえ最近、隔週更新にしたらアクセス数全然伸びへんねん！

評価や感想も今年入ってから一通たりとも届いてへんわ！ 閑古鳥が鳴いとるで、ポストに蜘蛛の巣が張ってまうつちゆうねん！ 無人島漂流状態や、太平洋独りぼっち状態や！ お〜い誰か〜！ おるんやったらウチに返事してや〜！！？

でも、たまにはこんなアホな後書きがあってもオモロかったりするやろ？ えっ、オモンない？ オモンないどころかイラッときた？ 小説ナメンなつてか？ こんなふざけた事する作家は今すぐ辞めてまえつてか？

やめへんで〜、翼ちゃんはやめへんで〜！ だつて楽しんでやもん！ 人生は楽しんだもん勝ちやで？ この程度の悪ふざけで激怒してまう頭のカタイ人間はウチ苦手どす〜！ 許してチョンマゲ、ゴメンねゴメンね〜！！？

さてと、ここらで冗談もさておき、次回も色々とおモロい話満載でやっていくつもりやさかいに、何せ司会進行役は今回に引き続きウチが担当やからな、何でもアリアリでガンガン突っ走っていくで！

もちろん、例のビッグニュースの真相とウチの幼少期からの秘密の話も踏まえてなっ！

それまでの間、みんなこれに懲りずに首を長くして待っていてくれたりするとウチは嬉しいわぁ！ 季節の変わり目、風邪とかならんように手洗いうがい忘れずになっ！？ 最後まで付き合ってくれてホンマにアリガトっ！ ほなら、また次回、ここで会おうなっ！ 約束やで！？ バッハハハハ！

「……ところで、綾があんだけ発表したがつてたバンド名って、一体どんなやねん？」

「うーんとね、リーダーがロギ君だから、『ロギザエル』ってどうかなあ？」

「オマエが一番最悪やボケエー！！」

お後が宜しいようでっ！ ほな、さいならっ！

## 第70話 口がすべって

「ねえねえ四人ともお、せつかくこうして正式にバンドネームも決まった事なんだからさあ、そろそろ昨日みたく超CoolなSuper liveをアタシ達に聴かせてPlease!？」

「ハイ！ あたしもあたしもー！ あたしもまた航クンとコオロギ君のスゴいギター演奏が聴きたいなー！ ねーねー、那奈も聴きたいよねー、ねー？」

「うん、そりやもちろん！ その為に放課後ここに来たんだもん、せめて一曲ぐらいは聴いていかないと真っ直ぐ家に帰れないって！」

「一茶も興味無いとは思うけどさ、今日はこの後特に予定は無いんだろ？ だったら、騙されたと思ってちよつとだけ付き合っていけて！ マジでこのバンドすげえから！ 絶対に聴いて損はないよ、約束する！」

「ふむ、翔太がそこまで言うのなら是非とも一目伺ってみようではないか、時には世間の風情とやらを直に感じてみるのも一興かもしれないぬ」

「おつ、ついに一茶親分もその気になってノリノリモードですか？ 航、コオロギ氏、カツオちゃんにザビ夫ちゃん？ こっちは全員準備万端だぜえ！ そっちはどうだい！？」

「……リクエストに応えられない奴など真の音楽人、とは言えない



……、ワタル、カツ、ザビ、この前の新曲のデモ、イけるよな……  
」？

「……………こちら、問題無し」

「……ワ、ワタルが大丈夫なら僕だつて！ さっきまで散々バカにされたんだ、こ、ここ、ここらで一発、きっちり汚名挽回してやるう！」

「汚名ヲ挽回シテドウスルンデヤンスカ？ ソレヲ言ウナラ『名誉挽回』デヤンス！ Ore達ハOKデヤンスヨ！ 光リ輝ク超新星『Super Nova』、今ココニ誕生デヤンス〜！ Hey, Rogi! Let's count down!〜」

「……イクぜお前ら、魂を奮わせろ！ ワン、ツー、ワンツースリー！」

「ちょっと待てやゴラア！！！！」

「ズコー！！」

ドンガラガッシャーン！！  
ギューギューギューン！！  
ビロビロビロビローン！！  
ブッパブッパブッパパー！！

「何やねんやこの集団ズッコケ大才チは？ オマエらはどこの吉本新喜劇やっちゅんねん！」

まあ、見事なぐらい全員息ピッタリ合わせてコケてくれたもんなやあ？　那奈や薫達はともかく、まさか堅物と思っとなった航やゴリ一茶、まだウチらのノリに慣れてへんはずのロギやナカジマまで楽器放っぱらかして真横に転倒しよるし、ザビに至ってはドラムセツトから身を乗り出して前に一回転しよったわ。コイツらホンマは音楽よりもお笑いに向いとるんとちゃうか？　なかなか筋がええぞオマエら！

「……ちよつと、急に何なのよ翼！　アンタのお陰でみんなキレイにズッコケちゃったじゃん！」

「痛いよー、転んだ弾みで肘擦りむいちゃったよー！」

「ああ、んもおう！　せつかくステージのテンションもいい感じで盛り上がってきたところなのにい！　翼のせいで全て台無しだわ！　何て事すんのよお、この Mood crusher！」

「えーい！　黙れ黙れ黙らっしやーい！！　ええかオマエら、この教室はたつた今、ウチらが問答無用でスクールジャックさせて貰たでえ！　ここはこれから行われるウチと綾の緊急特別重大発表記者会見場になるやさかいに、せやから今日の Super Nova の公開練習はこれにてお開き、中止や中止！」

「ハア？　ちよつと待ちなよ翼、アンタ突然何勝手な事を言い出してんの！？　あのね、私達はアンタのバカなお遊びに付き合っられるほど暇でもないの！　悪ふざけも程々にしないとアンタ、タダじゃ済まないよー！？」

「那奈の言う通りだよー！　だってこの教室はあたし達軽音楽部の部室なんだよー？　なのに、勝手に占拠して練習を中止させるなんて、翼ズルいよー！」

「Holy shit！　Fuck you！！　一体どういうつもりなのよ翼！　どうしてファンクラブ副会長でアタシのBest friendであるアンタがアタシの未来のビジネスパートナーであるSuper Novaの邪魔をするのよお！？　……ハッ、わかったわ！　まさか翼、アンタこのSuper Novaの全権限を握るこの初代ファンクラブ会長のアタシにJealousyして、その腹いせに練習を邪魔して困らせてやろうって魂胆なのね！？　ヒドいわ、これは裏切りよ！　絶対有り得ないわ！　Now ay！！」

「ええい、ゴチャゴチャと喧しいんじゃないこのボケどもがぁ！！　部活動もSuper Novaの練習時間も千夏のビジネスうんたらも、ましてや嫉妬だ何だのありもしない話など、今回のウチらの緊急重大発表に比べたらどうでもええ事なんじゃない！　オマエら平民ごときがなぁ、この松本翼様相手につべこべ文句を言える権利なんぞ一つもあらへんのや！　文句言う暇あったらな、さっさとそこにおる全員で散らばつとる楽器や椅子を適当に片付けて、さっさと机を動かしてウチらの為の緊急会場の組立準備をせんかい！　それが終わったらな、えゝと、せや、那奈、小夜、千夏！　オマエら三人がみんなを先導して横一列に並ばせて体育座りで大人しく待たせとけや！　ほらぁ、理解出来たなら急いでテキパキ動けや！　ええか、五分以内に全部支度するんやぞ！　わかったかゴラァ！！」

「……何コイツ、何様のつもりなの？」

「……またいつもの翼の偉そうな命令が始まったよー」

「Oh, my god... 翼ってこんなにSelf-satisfactionな一面があったのね、Unbelievableよ、何かアタシ、超ムカつくんですけどぉー!？」

ウヒヒ、よっぽどウチの迫力の啖呵切りが効果覲面だったみたいやな、最初から借りてきた猫みたいに大人しい腰抜け男子どもはもちろんの事、あんだけブーブーと文句たれてた那奈や千夏もせつせと働いて会見舞台の準備をしようてる。何やオマエら、素直になればちゃんと出来るやないかい？ ええ子やええ子や！ いやぁ、人を顎で使うっつゝのはホンマ気分のええもんやなぁ!？ 余は満足じゃ、カッカッカッ！

「……ねえ、ちょっといい翼？ あのさ、いくら何でもこれはちょっとやり過ぎなんじゃない？ こんな上から目線な失礼な態度での重大発表をするだなんて、ヘタしたら私達、みんなに祝って貰えるどころか逆に大ヒンシュク買っちゃったりしないかな？」

「アホか綾！ 何をそないビクビクしてんねやオマエは？ ええか、ウチらはな、この狭い火山列島にギュウギュウに詰め込まれる黄色人種の日本人の中から、ハンパなく厳しい条件を満たし徹底的に振るいにかけれ選り抜かれた特別な存在なんぞぞ？」

「……とは言つてもさ、それはちよつとあまりにも大袈裟過ぎんじゃないかなあ？ いくら私達は選出された人間達だとはいえ、何もここまでする必要は……」

「ええねんええねん、これくらい大した事あらへんがな！ 何せウチらは今ここでバタバタと机を並べるしか能の無いアホどものちっさいちっさいミジンコみたいなプライドと、吹けば飛んでいく程度のゴミ屑みたいな愛国心と明日への希望を守ってやる為に、これから果てしなく続く険しい戦いの日々に身を投じて命懸けんとアカンねんで？ ウチらに對するこれくらいの奉仕は、コイツら平民どもの当然の義務みたいなもんや！」

「平民つて……、まあ確かに、私達は国民の期待と希望を一身に受ける立場に立たされる訳だけどさ……」

「そうやで、目に見えんそのプレッシャーたるは普段ボケーンとして何も考えてへんアツパラパーな並の生活をしとる平民ごときが予想すらつく訳も無い、とてつもなくデカく重く絶大でかつ責任重大なもんなんや！ しかし、そんな重大なお役目をウチらはお上直々から選出され全てを任させる事になった、それはなぜやと思う？

それはな、ウチらはその絶大なプレッシャーにも耐えうるだけの強さと才能を持つ特別な存在やって事を、世間から認められたからに他あらへんのや！ 国民の願い、祈り、怒り、喜び！ それら重圧とはこの身を苦しめる重き背の十字架であると同時に、選ばれた者しか手にできん究極の名誉と誇りでもあるんやでえ〜！」

「そうや、ウチらはついにこの約束の地まで登り詰めてきたんや！

ウチがこの世に生まれたその理由、それはあの緑一面の美しい約束の地で、あの選ばれし者しか袖を通す事を許されない偉大なる群青を身に纏い、この二本の両脚で輝かしき草原の大地を駆け回り、白地に赤一点の我が国家の旗を一番高き場所へと導く為や！ ついに、ついにこの松本翼の前に全世界が平伏す時がやってきたんやでえ〜！！

「……で、重大発表って何よ？ さっきも言った通りこつちも暇じゃないんだから、無駄話も適当にさっさと終わらせてくれない！？」

「体育座りツライよー、お尻冷たいよー、椅子ぐらい座らせてよー？」

「Oh, shit! Why? 何でアタシまでこんなヒドい目に合わなきゃいけないのよお！？ 翼、覚えてなさいよお？ これで変な話だったりしたら絶対に承知してあげないんだからあー！」

「……つーかさ、何で俺達男子グループまでここに座らされてんの？ これって女子グループだけの話じゃねえの？ つーか翼の重大発表って何なんだよ？ 一体ここで何を始める気なんだよアイツは？」

「……………詳細不明」

「アレアレアレ？ これってもしかしてもしかすると、翼の重大発表って実は近い将来の薫ちゃんとの婚約報告だったりなんてしちゃったりなんかして！？ コラコラコラ、薫ちゃんったら一体何を言っちゃってんだか！？ そんな事がある訳アルマジロ、な〜んちゃって〜！ あららそこの一茶親分ちゃん、今のミーのイケてるダジヤレつまんない？ やーだそんな事言われちゃったら薫ちゃんまいてまいてまいてちんぐ、こんな無愛想なゴリラーマンみたいな顔して少しは笑って頂戴よこのヤロこのヤロ、ツンツ〜ン！」

「ならばこの屈辱の下座の扱い、貴様にも一因がありそうだな、その罪の報いとして即座にこの場で締め落としてくれる」

「えっ！？ いやちよつと親分マジで顔が怖いし怒ってますよね明らかに怒ってますよねマジで素人相手になにそれこわい襟首そんなに締めたら気管が詰まぐぐうううくつぶつぶうくばあかつかつかぶつ……、ぴっ」

「……な、何か今、送襟締めをかけられてる桐原君の頭のとっぺん辺りから、何か空気が漏れたような変な音が聞こえてきたんだけど……、な、なあロギ、僕達あまり松本さん達と深い関係じゃない訳だし、何か怖い思いさせられる前に今すぐここから逃げた方が良くんじゃないかなあ？ 結局桐原君、あのまま白目剥いて失神しちゃったみたいだし……」

「……動ぜず我慢、たまには観客側の立場になってみるのも、とても良い機会……」

「ッテ言ウカ、Rogeiノ体育座リッテ初メテ見タデヤンスヨ！ Ore、スツカリアグラデシカ座レナイノカト思ッテタデヤンスヨ、コレ、結構レアナ光景ネ！ アツ、シマツタ！ セツカクノシャッターチャンス、デジカメ持ッテクレバ良カッタデヤンス！」

よっしゃ、とりあえず即席ながら舞台も準備が出来て平民連中も整列し終わったみたいやし、そろそろお待ちかねであるウチらの重大発表の全貌を大公開してやつてもええかなあ？ オマエら、ホンマびっくり仰天するで？ 口から心臓飛び出さへんようにしっかり手で押さえておくんやで、ええなっ！？

「……さてと、まずは今日、ウチらの為にわざわざこうしてここに

集まってくれたオマエらに対して、ウチからせめてもの礼を言わせて貰うわ、どうもおおきに「苦労さ〜ん！」

「別にアンタの為なんかに集まってる訳じゃないんですけど？ いちいち癪に障るんです、つまらない冗談言つのも休み休みにして戴けませんかね、その背格好も精神年齢も小学生レベルの可哀想なおチビさん？」

「そーだよー！ あたし達は航クンやコオロギ君達のバンドの演奏が聴きたくて集まっただけなのにー！ 翼の話はその後だって別に良いじゃーん！」

「ああ〜んもおう！ ホントいちいちイライラするわ！ そんな下手な挨拶なんてする暇あるんだったら、さっさと言いたい事言つてとつとこんな発表会なんか終わらせなさいよお！ どうせ翼の事なんだから大した話でもないんでしょ！？ んもおう、スツゴい不愉快！ 信じらんない！ 超Unbelievable!!」

「ああ〜！ ホンマに頭クルわオマエらは！！ さっきから聞いてりゃギヤーギヤーギヤーじゃつかあしいねん、このボケナスのどアホどもがっ！！ 何や何や何や、オマエらまとめてウチとやんのかゴラァ！？ 人がこうして畏まって誠心誠意込めて礼を述べるとる最中やっちゅうのに、まだグダグダと文句タレてブウたれとるアホはこのどいつやねん！？ もうええわ、そのデカ女とガキ女とクソビッチ！ オマエらには一切ウチの重大発表を聞く権利なんど無いわ！ 三人揃って外の廊下立つとけや、この見ざる言わざる聞かざるの三連どアホエテモンキーどもめがあ！！」

「ちょ、ちよつと翼！ 私達の晴れの舞台なのにみんなと喧嘩なんかしてどーすんのよ！？ とりあえず少し頭冷やして落ち着きなっ



て、ねっ？」

「そないな事言つたつてや綾、だってコイツらが全然ウチの話をまともに聞こうとせんねんもおゝん……」

「そうやってふてくされないの！ 大丈夫、ここは私に任せて！ 私が進行役になってこの発表会見を進めていくから、翼は私の説明だけじゃ不十分な所をサポートしてくれるような形でいこうよ！ ねっ、それなら良いでしょ？」

「……ふう、ほならまあええわ、ここはオマエに任せるで、ホンマ嫌やわコイツら、完全にウチの事を目の敵にしとるんやもん……」

……もう何やねんな！？ コイツらどアホトリオは揃っていちいちウチに反抗的で牙剥き出しで食いかかってきてホンマ可愛くないわあゝ！ 那奈はええ子振ってカツコつけたがるわ小夜はガキみたい にワガママ言いまくるわで、ウチは昔からコイツらのそういうところにほとほと嫌気が差しとんねん！

そんでもって、そこへさらに千夏のクソセレブ系パッパパーヒステリックが絡んできたりすると、その毒性たるやもう環境公害も んやでコレ？ 人間光化学スモッグや、こっちは頭クラクラして体 調不良起こしてまうつちゅうねん！ いつか民事裁判でオマエらま とめて損害賠償金請求したるからな、覚悟しとけやホンマにコラッ！

「……コホン、それではお待たせ致しました、ここからは私、吉田 綾が進行役として今回の重大発表会見を進めて参ります、改めてど うぞ宜しくお願い致します」

「あれれ、随分と流暢な司会進行、ちよつと意外で不意突かれちゃった、綾って結構こういうの向いてるタイプ？」

「何か落ち着いて聞いていられるよねー、翼とは違って怒鳴ったりしないのが良いなー！ 綾ちゃん、スゴくカッコ良いよー！」

「Short temperでChildishなどつかの誰かさんと違って、Lady likeでCleverな雰囲気がつてもGood feelingよね！ やるじゃない、綾！ これからは翼の代わりに綾がメインのメンバーになった方が良いんじゃないのぉ？」

「……あれ、あれれ？ 何か今までに経験の無い予想外の高評価、本当に今日の私の立場、かなりオイシイのかな……？」

……オイオイオイ、何や何や何やコイツらのこの気持ち悪いぐらいの態度の変化は？ 進行役がウチから綾に代わったとたん手のひら返すように賞賛の嵐かい。やっぱり女の間に真の友情なんてもんは存在せえへんのやな。今回という今回はほんとコイツらどアホトリオには失望してもうたわ。

まあ、どうとでも言ううとけばええわ。オマエらがこの先どう騒ぐとウチらとオマエら平民との体勢に変化はあらへん。今日のこの舞台の主役はこのウチ、松本翼様の独壇場なんやからなあ！ さてさて、この重大発表を聞いた後、オマエらのウチを見る目がどれだけ変わるもんかこりや見ものやで？ 那奈、小夜、そして千夏！ 覚悟しとけや、ウツヒツヒツ！

「さて、もう時間やぞ！ つまらんおべんちゃらもここまでや！

オイ綾、ここらでそろそろウチらとコイツらの決定的な才能の差をガツンと一発知らしめてやれや！ 昨日の夜、ウチらに届いた選ばれし者しか足を踏み入れる事が出来へん世界の大舞台への招待状！果たしてその内容とは、何やあゝ！？」

「……の前にー、私達が挑むその大舞台の知識が皆さんにどれだけあるのか、二、三ほど質問させて戴きまーす！」

「いやゝん、重大発表はCMの後ゝ？ スゴく気になってテレビの前から離れられなゝい！ 勿体ぶらないで翼ちゃんだけにおせゝておせゝて！？ って何でやねゝん！！ オマエはどこぞの二時間枠バラエティ番組やねん！？ いちいちそんなワンクッション挟む必要あるかい！ 下手な小細工入れんとそのまま一発ストレートにガツーンと発表してやつたらそれで済む事やるがぁ！」

「えっー！ だってさ、私だってもうちょっとこのスポットライトの中心で注目を浴びて高揚感に浸っていたいしー、こんなオイシイ出番がこの先また巡ってくるかどうかもわからないしー」

「カツゝ、ちよつとええポジション立ったら味占めてつけあがりよつてからに、欲深い女やなあ、オマエも……」

「……」つたく、これやから登場機会に飢えとるサブキャラってのは面倒やねんなあ。こんな不毛なやり取りしとるからまた一話の総文字数が二万文字オーバーしたりしよんねん。この後の後半部分にも結構大事な話が予定されてんねんぞ？ オイ綾、オマエの気持ちは良うわかったから読者様に飽きられへん程度に手短にやれや、ええな？

「それでは質問させて戴きます、今から約一ヶ月後の来たる六月十六日に、九州の大分県スポーツ公園総合競技場で開催される一大スポーツイベントとは何か、皆さんはもちろんもうご存知ですよね？」

「……大分県で一大スポーツイベント？ 今年、そんな話題のものってあったっけ？ ねえ翔太、モータースポーツ関係で何か予定あった？」

「……競技場の中でレースなんて出来ると思うか？ それより、那奈の得意分野の空手とかの格闘技関係はどうなの？」

「……競技場の空の下で蹴る殴るなんて出来ると思う？ どうやら私達には全然関係無さそうだね、競技場っていうくらいだから、ねえ千夏、陸上大会関係で何か思い当たる節ない？」

「ぜんぜん！ 県別で小さな記録会くらいはあるかもしれないけど、社会人や学生、ましてや国際大会で大きなイベントとかがって話は一度も聞いた事が無いわ」

「もしくは競技場内の体育館とか？ なあ一茶、柔道とかで何か大会あるか？」

「無い、あったとしても県内や九州地区選出の個人別か学校別団体競技ぐらいなものだ」

「……じゃあ、一大イベントって一体何よ？」

「……何だろな？」

……チツ、このメンバーの中でスポーツ関係に詳しそうやと期待し  
とった体育会系の四人が、ことごとくこの一大イベントの存在を知  
らんとはなあ、コイツらただ情報弱者やねんな？ 新聞やニユ  
ー見んと漫画やしょうもないお笑い番組ばかり見とるからこんな  
オツパツピーで残念な子になんねん。

これからの新時代を生き抜くには、常に世界中のネットワークにア  
ンテナ向けて毎日新しい情報を取り入れていかんと、あつという間  
に時代の狭間に置いてかれてまうで？ スポーツの世界かてそうや、  
コイツら口では世界チャンピオンや金メダルや言ってる割には随分  
とお気楽モードなんやなあ？ 何かお先真っ暗って感じやな、ホン  
マコイツら大丈夫なんかいな？

「……何か、みんなの反応が思ってたよりもいまいちでちよつと心  
配になってちきやつた……、もしかして、私の質問の仕方がマズか  
ったのかなあ？ それとも、まだ先の話過ぎて世間一般の人達には  
あまり良く知られていないのかなあ？」

「……うゝん、いやあゝ、そんな事ないはずなんやけどなあ？ 確  
かに他の世代と比べるとウチらはまだまだマスコミの扱いも小さい  
つてのはあるかもしれんがな、それを加味してもコイツらのこの反  
応の鈍さはウチも意外、ってかガツカリやつたなあ……」

「……ねえ翼、もしかしてこれから私達が挑むこの絶対に負けられ  
ない戦い、本当は日本中の誰からも全然注目されていない、なんて  
事は無いよね……？」

「ア、アホか綾！ オマエ、何を突然血迷った事を言い出しとんね  
ん！？ そないな事ある訳無いやろが！？ ええか綾、ウチらはこ  
の日本にいる国民全員の代表の一員として、世界の強豪達と命を懸

けて雌雄を競う重大任務を与えられた選ばれし戦士達なんやぞ！  
そんな厳しい戦場の舞台に赴く、逞しく誇らしい戦士達の姿を、この国の民達が注目してない訳があるかいな！　いいや、あつてたまるかいな！！」

「……そ、そうだよ、私達、絶対みんなから熱い激励をして貰えるはずだよ、ごめんね翼、私、何か急に不安になってきちゃって……」

「しっかりせいや綾！　ホンマの戦いはこれからなんやで！　こんなところで弱気になってどないすねん！　自信持てや！　自覚持てや！　オマエもウチと同じ選ばれし戦士達の一員なんや！　偉そうに堂々と胸張っていかんかい！！」

「うん、そうだよ、ありがとう！　やっぱり翼はいざという時頼りなるなあ、堂々と張れるだけの胸がちつとも無いクセに」

「そのお陰でどんなロングパスでもボールを胸トラップすんのがラックラクやで〜！　って、放つとけやボケエ！！　ウチの胸は低反発衝撃吸収材かつちゅうねん！　吸収材どころか何のクッションも入ってへんわ！　触ってみい、アバラと筋肉でカッチカチやぞカッチカチ！　お母ちゃ〜ん、ウチの乳腺どこいった〜ん！？　って、何を言わせよんねんな、オマエはゴラァ！！」

「……うわあ、何もそこまで自虐ネタに走らなくてもいいのに……、何か私、切なさや罪悪感で本当に涙が出てきちゃた……」

「コラッ、同情すなっ！　ネタに同情すなっ！！　そういう反応されんのが一番ボケてる本人に精神的ダメージがキツイねん！　笑えや、ここは笑ってオチつけろや、コラッ！」

「哀れだよー、惨め過ぎるよー、ごめんね翼、本当にごめんねえー  
!？」

「オイコラア！ マジで謝んなつちゅうねん！ そないな事されたらウチの方が物凄いい切なくなつて泣けてくるやないか！？ つかオマエ、明らかにわざとやつとるやろ？ オイ笑えや、笑えつちゅうねん！ でないとホンマにウチ、救われようが無いやないかい！  
！ お願い、お願いやから笑つてや！？」

オイ綾オマエそれはいくらなんでもあんまりな仕打ちやぞウチからしたら殺されたに等しい暴挙やぞ何やかんや言つてもウチからしたらこの貧乳ネタは未だコンプレックスなんやぞそれをオマエは容赦無く笑いにしよつてからにウチは今ベッコベコにヘコンであと一言何か悪口言われたらここで大人気なく号泣すんぞこのヤロうわぁ  
くん！！

「……ねえ二人とも、ちよつといい？ わざわざ私達をここに集めたのは何の為？ 新ネタの漫才を公開する為？ ねえ、アンタ達はいつまでそんな無駄話で本題を後々にズルズル引きずつて私達をずつとここに座らせておく気なの？ 私さ、いい加減本当に怒りのバロメーターが限界点なんですけど」

……うわぁ、またや。

またウチらで盛り上がつてるところにわざわざ冷徹な横槍差し込んできて場の空気の温度下げよる那奈の突っ込み。ウチ、ホンマに大っ嫌いやねん。コイツのこの生き物が死滅しそうな絶対零度の冷た

く冷え切った空気と、相手を思いやる優しさや慈愛の欠片すらも感じ取れない棘まみれのええ子気取り文句。

ホンマ、コイツには何のユーモアのセンスもありゃあせんのやな。ちよつとぐらい羽目外したって別にええやかい？ 何やねん、何でもかんでも仕切りたがりよってからに、何様のつもりやオマエは？ ホンマに嫌な女、つまらん女や。ああ、腹立つ！ 何か急に気分悪なつたわ！

「どこぞの誰かさんが偉そうにギヤーギヤーと喧しいんでな、しゃあないからさつさと話を先に進めたるうかなあ？ やっぱり綾なんか司会任せとったら日が暮れてまうわ、オマエは試合中でもプライベートでもウチより前に出てきたらアカンねん！ ええから黙って後ろに控えとけや、ここは一発、ウチが事の本題をズバリ簡潔にまとめて発表したろやないかい！」

「だったら最初からそうしろっつーの、それを悪戯にこんな長々と話を引き延ばして、一体何が楽しいのよ？ 翼のバーカ」

「那奈オマエ、ええ加減にうつさいねん！ 少し黙って聞いとけや、このどアホが！ ええかオマエら、ズバリ教えたるから耳かっぼじって良う聞きや！ 六月十六日から大分で開催される一大スポーツイベントってのはなあ、今から数年後に控えた『サッカー女子U-20フランスワールドカップ』と『女子ドイツワールドカップ』の結果を占うに最も重要な一戦、『U-16女子アジアカップ』のグループ別予選試合が行われるんじゃない！！」

「……サッカー、U-16女子アジアカップ……！？」

「おう、そうや！ 七日間の開催期間中に出場国全十六カ国がそれ



それ四力国ずつ4グループにわかれて計三試合の総当たり戦を行い、各グループ成績上位2チームが晴れて本戦出場権獲得になんねん！」

「……一週間の、総当たり戦……！？」

「おう、そやそやそやでえ！　そして厳しい戦いを勝ち残ったアジアベスト8がグループ通過順位によってトーナメント表に振り分けられて、二ヶ月後の八月に中国主催で行われる大会本戦にてアジアナンバーワンのチームを決定させんねやあ……！」

どや！　どやどやどやオマエら！　アジアカップっちゅうたら日本A代表でも毎度毎度テレビ中継でも高視聴率を叩き出す、日本のスポーツ界においても一、二を争う大注目のサッカーイベントや！　オマエらかて一度は見た事あるやろ？　トルシエ監督時代の『ゴールデン・エイジ』のアジア制覇、ジーコ監督時代の度重なる大逆転の奇跡の二連覇！　そう、アレや！　あのアジアカップやぞお！　そのアジアカップが最近男子だけでなく女子のカテゴリーにまで拡大する事になって、何と前年度からは男子と同じU-16の若い世代による大会も新しく設立されたんやで！　今やアジア地区でのサッカーの発展力はヨーロッパや南米も無視出来へんほど凄まじいもんで。時代はついにアジアから世界の頂点を狙えるところまでやってきてるんや！　何かもうウズウズするやないかい、ワクワクするやないかい、たまらんやないかい！！

「……この大会に代表として招集された選手達はいずれ、この先に待つU-20女子ユースワールドカップや、最高峰である女子ワールドカップやロンドンオリンピックの主軸となる事間違いないやで！」

「……ねえ、翼……」

「まだ未発掘の将来有望なダイヤの原石達が広大なアジア大陸の各地域から、この日本に向けて一直線、仰山詰めかけてくるねんぞ！？これを一大スポーツイベントと言わんで何と言う！？どや、今から待ち遠しいやろお？手に汗握るやろお？ドキドキして夜も寝れへんやろお！？どうや、驚いたやろがオマエらあ！？」

「ねえ、翼つてば！」

「何やねんな綾！？さつきから隣りでウチのブラウスの裾グイグイ引っ張りよつて、まさかウチの言葉を聞いてオマエが一番興奮してもうたんとちゃうやろなあ？」

「……見て？周り、誰も聞いてない……」

「……へっ？」

「……オイオイオイ、ちょっと待て待て待て！何やねんなこの会場のシラッとした虚しい雰囲気は！？教壇に並べられた机に仁王立ちして熱弁奮つとるウチを後目に、さつきまでキレイに列になって座つとつた平民達が誰一人いなくなつて勝手に持ち場に帰つて楽しく笑談したり楽器の練習しとるやないかい！どういふこつちややねん、一体何が起こつたんやコレは！？」

「オイコラ、オマエら！ウチの許可無しに何を勝手に傍聴拒否してさっさと自分達のやりたい事やりだしてんねん！？まだ何の話

も終わってへんねんど、オイ千夏、オマエ何してんねんな!？」

「What? Why? まだ何か用? 翼達の重大発表ってそのアジアカップとか言うサッカーの大会が開催されるって話でしょ? じゃあ、もう要件済んだわよね、わざわざ教えてくれてどうもThank you、とりあえずそんなイベントがあるって事だけ記憶の片隅に留めておいてあげるわね」

「違うわアホッ!! 誰が日本サッカー協会の広告マスコットガールなんかやるかつちゅうねん! ウチと綾がサッカー関係で重大発表っちゅうたら大体わかるやる!? ウチらはなあ、その現地に行ってみんなと共にこの日本の為に戦ってくるんやあ!!」

「あつ、な〜んだ、観戦しに行くのお? はるばる大分まで大変ねえ〜? サポーターってのも楽じゃないのね、お疲れちゃ〜ん!」

「それも違うがなあ!! ウチらはサポーターやのうてそのサポーター達が観戦しとる中でつまりその……、っちゅうか、ちよつと待てえ! それより何で那奈と小夜の姿がどこにも見当たらんのか!? アイツら、ウチの話の途中で何を抜け出しとんねん!? オイ翔太、あのアホ二人は一体どこに行きよったんや!？」

「何か、小腹空いたし暇だから二人で売店行って飲み物とデザート買い出ししてくるって言ってたぞ?」

「……ナメんなやあのヤロウども、ウチがこれだけ熱うなつてこの大会の素晴らしさを説明してやつとるっちゅうんに……、もうええ、もうこれまでや! もうウチも限界やで、アイツら二人とは今日をもつて金輪際絶交や! もうアイツらにウチのこの重大発表を聞く資格はあらへん、あの二人の帰りなんぞ待つ必要ないわ、オマエら

だけで結構や！」

「えっ、まだやんのかよ翼？ 俺達もいい加減そろそろかつたるいっつーか、しんどいっつーか、もうウンザリ？ 薫も一茶に締め落とされたまま全然起きねえし、お前コレどうやってオチ付けて事の收拾つけるつもりなんだよ？」

「ゴチャゴチャと御託並べとる暇があんならな翔太、オマエが中心になってもう一度ここにおける人間全員並べ直して黙って座つとかんかい！ いちいち心配されんでもおつりが返ってくるぐらいの強烈なオチを用意しとるから覚悟しとけ、驚くのはこれからやぞ！」

アカン、アカンアカン！ 最近の若いもんは人の話を最後まで良く聞かんとは言われとるけど、コイツらはその若いもんの中でも私語を慎まんわ途中退席するわと一番だらしないアカン連中や。こんなヤツらと同じ世代として一緒にされるウチはホンマにみつともなくて恥ずかしいわ。ここは一発ガツンと説教代わりにウチとコイツらの決定的違いを思い知らしめなアカンな、この世界仰天の重大発表と共になっ！」

「ええかオマエら、良く聞け、ほんでもって聞いて驚け！ ウチらはなあ、ここにおけるこの松本翼と吉田綾はなあ、何も現地に観戦しに行く訳とちゃうねん！ ならば、なぜウチらが遠路はるばる大分まで出向く事になったんか、その理由はなあ……、綾、時間やで、遠慮なく思い切り公表したれやあ！」

「発表します！ 私、吉田綾と松本翼は、U-16女子アジアカップのメンバー二十三人の一員として代表招集される事が決定いたし

ましたー！！」

「えっー!？」

そういうこつちや、こんにいヤロー！！ 昨日の夜にな、ウチらが所属しとるサッカークラブ事務局宛てに日本サッカー協会から直々に、今回の大会の招集連絡とそれに向けた練習合宿への参加依頼が伝達されてきたんや！ ウチらがユースチームで残してきた数々の実績が、遂に日本代表招集という形で花開いたんや！ どやオマエら、凄いやろ、驚いたやろ、ぶったまげたやろおゝ！！

「聞いたかオマエら、代表やぞ？　日本代表やぞ？　この日いずる国、日本の代表選手やねんぞ！？」　ウチらはあの名誉ある青いユニフォームに袖を通し、背中に日の丸と国民の夢と希望を背負つて世界と戦う重大任務を託された特別な人間なんやで！？　オマエらみたいなマヌケな面してタラタラ学生生活過ごしてる一般平民とは訳が違うねん！　どや、ウチらとオマエらとの決定的違い、思い知ったかボケナス共が！　ええい、オマエら生意気にも頭が高い、全員まとめてウチら二人の足元に跪くがいい、控えおろさう！　ギャツハツハツハツハツハツハツハッ！！」

「……ねえ、ねえねえ、翼……」

「いや、しかしアレやな、よくよく思い返してみるとここまでの道のりはそりや険しいもんやったなあ？　ウチは運動神経やテクニクは同じクラブユースの同年の男子とも引けをとらんほど優秀やったのに、体の小ささがネックになつてなかなかレギュラーに選ばれなかった苦難の時期があつたし、綾もクラブに入った当時はリ

フティングを十回続けるのも困難で、小学生の頃まではずっと二軍チームで居残り練習させられてたもんやったしなあ……」

「翼！　ねえ、翼つてば！？」

「でもやで、そんな苦難の日々を耐え抜き血と汗の滲む苦しい鍛錬と経験を積んできたからこそ、今回の代表招集という大きな花を咲かせる事が出来たんやな、やっぱり神様はちゃんと空の上からウチらの努力する姿を見てくれてたんやなあ！　やったで綾、ウチら、ウチら念願の日本代表に選ばれたんや！　遂にウチとオマエの小さい頃からの夢がこうして現実になつたんやあー！！」

「翼！　話を聞けつてーの！！」

「何やねん？　何をそないに目ん玉クリクリさせて怒鳴つとんねん？　ウチがこないハシャいでるんやから、オマエも少しは嬉しそうな顔しろや！　相方やろが？」

「そんな事より周りみてごらんよ、周り！」

「周り？　んなもんいちいち言われんでもどうなつとるかぐらい簡単に想像つくわいな、今頃ヤツら平民連中はウチらの功績に恐れおのいて、頭を垂れて深々と平伏し憧れの眼差しでウチら二人を見上げているに違いない……、つて、アレ？」

「……また、みーんないなくなっちゃってるんですけどー！？」

「ハ、ハア？　何でやあー！？」

……またや、またやまたやまたコイツらはホンマにもう！ またしてもさっきまで目の前で横一列並んで座つとったはずのアホもが、ウチが物思いにふけてるのをよそ目に何の許しも得ず勝手に各自バラバラに散らばつとるやないかい！！ コイツらには事の重大さが理解出来へんのかいな？ オマエらの目の前におけるウチらはあの日本代表やぞ、U - 16 なでしこ J a p a n なんやぞぉ！！？

「ちよつと待てやオマエら！ ウチらはオマエらの代表として国の名誉を懸けて緑一面の戦場へと赴く選ばれし戦士なんやぞ！？ オマエらみたいな何の才能も無いカス同然の輪の中から唯一誕生した自慢の出世頭なんやぞ！？ オマエらがどう頑張つても辿り着けない世界の舞台へと登り詰めた偉大なるニューヒロインなんやぞ！？ それが何やこの『そんな事別にどうでもいい』みたいな扱いは、オマエらあんまりにも失礼過ぎるぞゴラァ！！」

「みんなー、お待たせー！ 売店でデザートとジュースいっぱい買ってきたよー！ 多分、全員分あるはずだから、みんな仲良く食べねー？」

「これ全部、小夜にお小遣い渡してくれたあづみさんの奢りだから、ロギ達は面識無いからしょうがないとして、翔太や千夏は今度あづみさんに会ったらちゃんとお礼言つてね？」

「おう、わざわざ買い出し悪いな那奈、小夜もご苦労さん！ 俺、喉渴いたからコーラ貰うぜ、一茶は何がいい？」

「お茶」

「じゃあ、はい、伊右衛門」

「綾鷹は無いのか、うむ、仕方ない」

「ゴラア！ ヘタレ翔太にゴリー茶！ オマエら綾鷹やの伊右衛門やの好き嫌い言うてる場合か！ お茶なんぞどれ飲んでも一緒や！ 生茶もおゝいお茶も爽健美茶もみんな全部飲んだら一緒じゃボケエ！！」

「いや、綾鷹には濁りと茶の風味がある、本来の煎茶というものは濁りと渋みがあり、それがあつてこそその日本茶なのだ、ジャパニースティーなどとても飲めたものではない」

「何や、一茶つて名前だけにやたらお茶には一味うるさいやないかい？ せなやあ、ウチもどちらか言つたらお茶はやっぱり急須で煎れたのが一番美味いかなあ……？ って、そないな事はどうでもええねん！ 何が綾鷹や、オマエはどこぞのコカコーラ・ボトラーズの回し者やねんな！？ それとも何か、まさかオマエのスポンサーとちゃうやろな！？ まあ、それはさておいてえゝ、オマエら何を勝手におやつタイムなんぞ楽しそうに始めとんねんやゴラア！！ ええか、何度もしつこく言うがな、ウチらはあの日本代表なんやぞ？ この日本列島に住む約一億人の中から吟味に吟味を重ねて協会から選出された特別な選手なんやぞ！？ 頭下げるとはちと言い過ぎたかもしれないがな、せめて賞賛と激励の言葉一つぐらいあつても罰が当たらんのとちゃうんかい、違うか！？」

「じゃあ、アタシはPudding戴くわゝゝ、ロギ君もPuddingでいい？ んでえ、航ちゃんはヨーグルトよね？」

「……糖分、補給……」



「……………カルシウム、補給……………」

「オイ、聞いたんのかオマエら！ コラ千夏、オマエもええ加減にせえよ？　いくらウチとオマエが遠慮無しで水入らずの関係やっていてもな、この態度はいくら何でもあんまりやと思わへんか！？　オマエが陸上やモデルの仕事で頑張った時、ウチがどれだけ一緒に喜んで褒めてやったかオマエは……………」

「……………じゃ、じゃあ僕もプリンで……………」

「えっ、ナカシマ君も食べるのぉ？」

「……………え、ええっ？　あ、あの、だ、駄目ですか……………」

「嘘よお、JokeよJoke！　もし良かったらアタシが食べさせてあげようか？　はい、アーン！」

「う、うえええうえっ！　い、いいいい、良いんですかぁ！？　ほほほ、本当に良いんですかぁ！？　あわ、あわわわわ、僕、どどど、どうしたらいいんだろう、うわ、照れるよ、恥ずかしいよ、じゃ、じゃああの、うん、はい、ア、アーン……………」

「バツカねえ、それこそ冗談よ、アタシに食べさせて貰おうだなんて百年早いわよ、気持ち悪い」

「……………う、うえ、うえうえ、うえーん、ヒドい、ヒドいよ……………」

「Katsuハマダマダレディーニ対シテ甘チャンデヤンスネー！　女ハプリンミタイニ甘イダケジャナクテ、カラメルソースノ様ナホ口苦イ一面モ持ッテイルデヤンスヨー！　Hahahaha

「!!」

「……頭キタ、完全に頭キタわ、千夏はおるかカツオやザビまでウチらの事を無視しよってからに……、オマエら、こうなったらもうウチも我慢の限界やぞ!!」

何がおやつタイムや、何がSuper Novaや、何が生ライブ演奏や! そないなもんどうでもええねん! ウチにとつてサツカ!とは、日本代表に選ばれる事とは、今までの人生の中で涙が出てくるほど一番嬉しかった出来事やったのに、ウチ一人だけやない、家族みんなの、世界で一番大切な人の為の大切な夢やったのに、それをこんな蔑ろな扱いしよってからに……、コイツら、コイツらホンマに許せへん!!

「こんな余計な飲み物や食べ物なんか買ってくるのがいけないんや! こないなもん、全部こうしたるわ! こないなもん、こないなもん!!」

「キャツ! Oh, shit! いきなり何するのよ翼! せっかく買ってきたスイーツやドリンク、みんなひっくり返っちゃったじゃない!!」

「うわーん! あたしと那奈で買ってきたプリンさんやヨーグルトさんがみんな下に落ちてグチャグチャになっちゃったよー! 翔ちゃんや航くん達の為に買ってきたのにー、翼ヒドいよー! うわーん!!」

ウチは怒りの感情に身を任せたまま、みんなが囲っている机の上に置いてあったジュースやプリンなどの品を全部力づくで下の床へと払い落とした。ウチが悪いんとちゃう、そもそも悪いんはこんなもん買ってきた那奈と小夜がアカンねん！

「オイ翼！ お前ちょっと落ち着けて！ みつともねえぞ、何もこんな真似までする事ねえだろうがよ！？ いくら何でもこれはやりすぎだぞ！ どうすんだよ、小夜泣いちゃったじゃねえか！ 謝れよ、今すぐ小夜に、あとここにいる全員にもちゃんと頭下げて謝れよ！！」

「謝るかボケエ！！ 翔太ごときに命令される筋合いなんぞ一つも無いわ！ ウチは何も悪くない、オマエらが全員グルになってウチを無視したのが悪いんじゃ！ 謝るのはオマエらの方や、今すぐウチと綾に対して深々頭下げてきっちり謝罪しろや、このボケナスどもがあ！！」

「ふざけんなよ、お前！ いくら俺でもやる時はやるぞ、今まで女だからって遠慮して下手に回ってたけどな、さすがに今回ばかりは俺だって我慢しないぞ！？」

「おゝおゝ、何や何や、殴るんか？ ウチの事殴るんかい？ ほなら殴ってみいや、オマエごときの一撃なんぞウチからすれば蚊に刺された程度のもんや、ほら、遠慮なく殴ってみい！ オマエのぬるま湯みたいな男気ってヤツをウチに見せてみるやゴラァ！！」

「……この野郎、言わせておけば……！」

ヘンツ！ 何を粹がつて真面目に正論並べつくしとんねん、このヘ  
タレ翔太が！ オマエなんぞタダの那奈のオトンの腰巾着、虎太郎  
オトンや他のバイクの大人連中がおらんと何も出来へん腰抜け男や  
ないか！ コイツに殴れる訳が無いわ、第一、ウチは殴られるよう  
な悪い事なんて何もしてへんのやからな！ 悪いんはここでギヤー  
ギヤー泣いとるアホ小夜と、いつつもウチを粗末に扱いよる那奈が  
悪い……！

バシッ  
！

「……痛っ！ えっ、何で……？」

「……オ、オイ那奈、お前……！」

「……翼、アンタ本当に見苦しい、最低だよ、マジでいい加減にし  
な」

叩かれるはずが無いと思つとつたウチの頬に、乾いた音と同時に響  
いてきた鈍い衝撃と、燃えたぎる様に熱く痺れる鋭い痛みが走つた。  
頬に手を当て啞然となつたウチが正面を振り向くと、そこには翔太  
の前に割り込み鬼の様な形相をした那奈が立つとつた。

「……なあ那奈、今のはあくまで俺と翼の間での言い争いであつて、  
何も那奈が翼をひっぱたく事も……」

「いいの、男が女に手を上げるなんて非道な真似、アンタにさせる

訳にはいかないからね、ここは女同士できっちりカタをつけるから引っ込んでよ」

「……いや、でもよ……」

「それに私も今回でさすがに完全に堪忍袋の緒が切れちゃったんだからさ、もう引っ込みがつかないんだよね、これまでもずっと溜まりに溜まった鬱憤もたくさんあるもんだから、もう今日で全部きっちり白黒つけてやろうかと思ってね」

那奈は横における翔太に一瞬だけ笑みを見せてこちらに振り向くと、途端に表情を硬く強張らせて冷たい目線でウチを睨みつけてきた。殴られた、何でや？ 何でウチがコイツに殴られんとあかんねんな？ オトンはもちろん、オカンにかてそないに殴られた記憶無いのに、この女容赦なくウチの事殴りよった！ 冗談やないで、コイツ、ホンマどんだけウチの事をホンマに……！

「バカにすんなやオマエ、コラア！！ そもそも全てはウチの話を無視して勝手に買い出しなんか行つたオマエが一番悪いんじゃないかあ！！ それなのに、何でウチがオマエに頼ひっぱたかれなアカンねや！？ ウチがオマエに何をした！？ 一体オマエらに何をした！？ 日本代表に選ばれてそれを報告する事の、そのどこが悪い事なんや！？ 答えろや、答えろや那奈！！」

「いつまで駄々こねた子供みたいな事言ってるんだよ、アンタは！ 悪いも何も無いよ、代表に選ばれて名高い大会に出れる事になつて、それはとても凄い事だよ？ 素晴らしい事だよ？ それが私達の友達だとしたら、こんなに嬉しい話は無いよ！？」

「嘘つけや！　せやったら、何でオマエらは嫉妬しとるみたいにつまらん意地悪して素直にウチらを褒めへん……！」

「嫉妬？　バカ言わないでよ！　アンタがこれまで頑張ってきた努力がこうして実を結んだ事に対して嫉妬なんてする訳ないでしょ！　？　私達だって素直に気持ち良くアンタ達を褒めてあげたいよ、良く頑張ったね、おめでとうって言ってあげたいよ！　？　なのに、なのにさ……」

那奈は少し言葉に詰まると俯いて一つ深く呼吸をしてその後、まだ心中に溜まりきつとる怒りをぶつける様に飲み物食べ物が散らばった机に思い切りガツンと拳を振り下ろしよった。その姿に周りの女子連中はもちろん男子も全員怖じ気づいてしもって、誰もが口を閉ざして教室内は一瞬にして沈黙に包まれた。

前髪の間隙から見えるその目は怒りと同時に何か残念そうな雰囲気漂わせておった。それを見た時、何かウチの胸に言葉に上手く表現出来へん鋭い痛みがグサリと突き刺さってきたんや。言葉以上に重く冷たい、尖った槍みたいなきつい痛みが……。

「……アンタのさっきまでの私達に対するあの態度は一体何なの！？　平民だの才能が無いだのさんざん偉そうに小馬鹿にしてさ、挙げ句には人を顎で使って発表舞台の準備までさせて、それでもこっちが我慢して話を聞いてあげようとわざわざ冷たい床に座って待っていてあげれば、発表もそっちのけで綾と二人で内輪ネタで無駄話始めて私達そっちのけ、こんなヒドい扱いをされて私達が素直にアンタの事を祝ってあげる事が出来るとでも思ってたの！？　冗談じゃないよ、バカにするなって言いたいのは私達の方だよ……！」

「……いや、あんな、平民やか才能無いとかつちゅうんは軽い冗談やし、なかなか本題の話をせんかった事にはウチも綾もちよつと調子に乗りすぎて悪かったかなって思てるし……」

「翼、アンタさ、親しき仲にも礼儀有りって言葉知ってる？　いくら私達とアンタが小さい頃からの付き合いだとしてもさ、アンタの冗談は冗談を通り越してるレベルなんだよ！？　笑えないの、失礼過ぎるの、そこまでやったら人を怒らせるだけなんだよ！？　いい加減アンタもガキじゃないんだから、少しは私達の反応見て自覚したらどうなの！？　独りよがりでウケてると思ってたら大間違いなんだよ、このバカッ！！」

「……那奈オマエ、そないそこまで糞味噌に言わんでもええやないか……」

言い返すどころか予想以上の強烈な批判攻撃の雨霰に、ウチはすっかり意気消沈して完全に防戦一方になってしもた。口だけの攻防やつたらウチかで得意分野でかなり自信のあるもんやったけど、こん時の那奈の威勢の強さにはとても齒が立たんかった。次第に小さくなるウチとは対照的に、那奈の凍てつく言葉の槍は止む事なく次々こちらに襲いかかってくる。

「これでもね、私はかなり抑えて話してる方なんだよ？　それだけアンタのこれまでの身勝手な行動には我慢の限界だったの！　アンタは小学校の頃からいつもそう！　自分が上手く出来る事、特にサッカーに関してはまるで自分が神様にでもなったみたいに自意識過剰になって偉そうに振る舞って、上手く出来ない相手に対してニヤ

ニヤ笑いながら上から目線で蔑んでバカにする、それがどれだけ人間として最低な行為か、アンタは一度でもそれを考えた事があるの！？ バカにされた人がどれだけ悔しいか、相手の立場になって考えた事があるの！？」

「……せやつて、ウチにとってはサッカーは自分の命と同じくらい大切なもんやから、それが上手く出来るって事はウチからすれば自慢のステータスの一つやし、今回かてホンマに嬉しゅうて嬉しゅうて溜まらんくてハシャぎ過ぎたのもサッカーが大好きやからって理由な訳やし……」

「アンタのサッカー好きは私だつてずっと昔からアンタと付き合っているから良く知ってるよ、アンタがサッカーに命懸けてるのも、何でそんなにサッカーに執着しているのかも良く知ってるよ、でもね、だからってサッカーに興味ない無関係な人達まで巻き込んで大騒ぎするなんて勘違いもいいところだよ！ 私達はともかくさ、この前知り合ったばかりのロギ達はアンタのサッカー話とは全然関係ないじゃん！ それなのに、勝手に音楽室占領して彼らのバンド練習の時間まで潰してさ、私が本当は一番頭にキてるのはそこだよ！ いちいち記者会見みたいなバカな真似なんかしないでさ、みんなで演奏聴いて楽しんだ後に普通に報告してくれれば私達だって良い気分です直にアンタ達を激励してあげたのに、それを全部ブチ壊しにしたのは翼、アンタ自身だよ！ 一番素直じゃなくて可愛くないのは翼、アンタなんだからね！」

「……………」

「……ウチが、悪いんか？ 全部、ウチのせいなんか？ 場の空気がこないギスギスしてもうたのも、みんなが不快な気持ちになってし



もたのも、全部ウチが余計な真似して重大発表やなんて言い出したのが悪いんか？ だって、だってや？ ウチにとってサッカーは、ウチがサッカーで活躍する事は一番の特効薬……。

「……あ、あの、ば、僕らそんなに気にしてませんから、な、なあ、ロギ……？」

「……プリンもう一つ、ある……？」

「……Nana、怖いデヤンス、大和撫子トハトモ遅シクテ強イオナゴナンデヤンスネ……」

「……オイ那奈、そこらへんでもう止めようぜ？ ナカシマもザビもみんなビビっちまってるし、翼も今回ばかりはかなり反省してるみたいだしさ……」

「うっん、いいの翔太、今回という今回は最後まできっちり言わせてもらっよ、これはみんなの気持ちの代弁でもあるし、これ以上翼が変な勘違いしないように理解して貰わないといけない事だから、翼の為でもあるんだから」

この時点ですでにウチはもう身も心もボロボロになって何の言葉も喋れんようになってしもてた。さっきひっぱたかれた頬の痛みなんて何も感じへん。なのに、那奈は手加減一つせずウチが一番触れられたらアカン弱点の場所ヘトドメとばかりに残酷な一撃を突き刺し、ウチの体を貫き通した。

「悪いとは思うけどはつきり言わせて貰うね、アンタが私達が得意としてる事に興味が無い、くだらないって言うのと一緒に、私達も別にサッカーにそれほど興味がある訳でもないから、アンタがどんなに大活躍されて大活躍したとしても、正直私からすればそんな事どうでもいいの、知った事じゃないの、アンタ以外の人間からしたらそんなもんは所詮その程度のものなのよ」

「……その程度って、あんまりやぞ那奈、だってウチにとってサッカーは……」

「オイ那奈！ もう止めろって！」

「それにね、何も頑張ってるのは翼だけじゃないんだよ？ 私だって地区大会とはいえ空手で優勝した事があるし、千夏だって陸上大会で優勝してメダルを貰った事がある、翔太や一茶に至っては世界の舞台で成功する事が約束されているようなものだし、航やロギ達だってこの先大ヒットロックバンドになれるかもしれない、アンタがいつもバカにしている小夜だって、将来どんな可能性を秘めてるかまだわからないんだよ？ アンタ一人だけ才能があるって訳じゃないの、みんなそれぞれ違う才能があるんだよ、だからアンタに偉そうに振る舞う権利なんて無いし、他人を蔑む権利も一切無いの！」

「……そんなつもりなんかやない、ウチは自慢したくてサッカーやってるんと違う、ウチのサッカーへの情熱はウチ一人のもんやない、ウチ一人の夢やない、サッカーはウチと、ウチとオトンを強く結んでくれている一番の……！」

「それだって私も良く知ってるよ！ アンタがサッカーやってんのはお父さんが果たせなかった夢を代わりに果たす為でしょ？ だったらさ、わざわざ私達に報告してる暇があるんなら、その言葉をず

つと待っていて新作さんの元へさつさ一番に行けば良いじゃない！ アンタと新作さんとの間の約束なんですよ？ 私達は何も関係ないんだからさ、家族内の話で毎度毎度こっちまで巻き込むのはいい加減やめてくれない！？」

「……那奈、オマエそれ、ホンマに言うてんのか……？」

「っーかね、いい加減アンタのオトン話にはいちいち付き合ってられないの！ もううんざり！ 正直迷惑！ 愚痴や弱音や夢物語なら余所でやってよ！ 翼のバカッ！！」

「……………」

……バカ。バカって言われた。大好きなオトンの為に、オトンの病気が少しでも良くなって貰いとうてやってきた事を、バカって言われた。余所でやって、うんざりやって、迷惑やって言われた……。迷惑か、ウチはみんなにとって迷惑な存在なんか……。

「……綾、ごめん、ウチ、帰るわ……」

「えっ？ ちょ、ちよつと翼、何よ帰るって！？ 発表会見の続きは！？ 現地弾丸団体応援ツアーの宣伝は！？ ねえ翼、私と翼は最高のパートナーだよな！？ なのに、翼は私を一人ここに置いて帰っちゃうの！？ 嘘でしょ！？ やだよ、置いてかないですよ！？ ねえ翼、翼ってばー！！」

耐えられへんかった。ウチを見るみんなの目が物凄く冷たく感じた。千夏や小夜が談笑しとる時の笑顔がウチを笑い飛ばしとるように見えてしゃあなかった。辛くて、惨めで、とてもこの場に居座る事なんて出来んかった。タダでさえ分厚く開けるのしんどい音楽室の扉、出て行く時にさらにハンパなく重たく感じたわ……。

「うわあゝ、今日的那奈、超キレまくりで怖あゝい！ でもお、そろそろ翼にはお灸を据えなきゃいけないかなあゝ？ って、アタシも思っていたところだからちようどTimeleyだったわね！ 全部代弁してくれちゃったから何かスツキリしちゃった！」

「あーあ、あんなにたくさん買ってきたプリンさんやジュースさんがみんなグチャグチャになっちゃったよー、無事なのはちよつとしが残ってなーい！ 今日の翼は悪い子だよ、あたしだって今日は許してあげないんだからねー、プンプン！」

……もうこれで、小学校からずっと続いてきた那奈と小夜との付き合いも終わりになるのかなあ？ それだけとちゃうわ、もしかすると千夏との友情もこれまでもしれへん。ウチはこれから一人になつてまうのかな、誰も後を追ってきてくれへんのかな、何かメチャクチャ寂しいわ。綾、信頼出来んのはもうオマエだけや。オマエだけはウチの気持ち、わかっていてくれとるよなあ……？

「……ヒドいよ、那奈ちゃんも、小夜ちゃんも、千夏ちゃんもみんなしてヒドいよ！ 翼はみんなの知らないところで一生懸命頑張ってきたんだよ！ 少し自慢するぐらい別に良いじゃん！？ 私は翼の味方だからね、翼は私の大切なパートナーだもん！ みんながど

んなに翼を責めたって、私は絶対に翼を守ってみせる……！」

「綾ちゃん、綾ちゃんも一緒にプリン食べるー？」

「えっ？ ええっ！？ 私の分、あるの！？ ちゃんと私の分まで数に入れて買ってきてくれたの！？」

「もちろんだよー！ ちゃんと綾ちゃんのは別に置いてあったからひっくり返らずに無事だよー！ はい、これ綾ちゃんの分ねー！」

「……嘘、私、凄く嬉しい……、今までずっと空気キャラで存在すら気づいて貰えなかったのに、こうしてプリンまで用意してくれるなんて……」

「アハハ、綾ちゃんったら何も泣かなくてもいいのに、大袈裟だよー？ もし、まだ食べたいんだったらまた売店まで買い物行ってあげるから心配しないでねー？」

「……ううう、涙が出るほど暖かい御自愛、小夜ちゃんは優しいね！ 翼なんかより何百倍も優しいんだね！ まるで天使か女神様みたい！ 私、これからはずっと小夜ちゃんについていくよー！」

……校門まで来たけど誰も追ってきてくれへん。何度後ろを振り向いても人っ子一人おらへん。聞こえてくるんは校庭で部活動しとる他の生徒の楽しそうな笑い声だけ。どうやらウチはついに綾にも見捨てられたみたいやわ。惨めなもんやな、ああそうや、どうせ全部ウチが悪いんや。ぜんぶ全部、ウチが全部悪いんや……。

「……………那奈……………」

「……………何よ、その何か言いたげな意味深な表情は？ 翔太だって正直頭にキテたんでしょう？ 私はみんなの気持ちを代弁しただけだよ、嫌な役回りを買って出てあげたんだから少しは感謝してよ」

「それは俺も申し訳ないと思ってる、でもさ、あれはさすがに言っちゃダメだよ、今の不安定な体調のこの時期に、翼に新作さんの話をするのはさ……………」

「……………」

「……………なあ、那奈……………？」

「……………言っちゃったんだもん、今更もうどうしようもないじゃん……………」

……………もうええわ。例えみんなに嫌われて仲間外れにされても、ウチは一人ぼっちにはならへんもん。ウチの今回の代表招集のニュースを一番喜んでくれる人が他におるんやから、アイツらなんかよりも一番最初に報告したい大切な人がウチにはおるんやからな。何もわざと後回しにしてたんとちゃうで。今日の午前中は色々検査で忙しいって聞いたとつたし、ウチも学校があつたからちよつと順番が狂っただけやで。

いちいち那奈なんか指摘されんでもわかつとるわ！ ウチがサッカーに、日本代表に必死になるんは全部オトンの為や！ ウチの一番の理解者で、一番の味方であるオトンの為や！ ウチにサッカーの楽しみを教えてくれた大好きなオトンの為だけや！ もう他の事なんかどうでもええ、ウチはオトンが喜んでくれて元気になってく

れたらそれでええねん！ 他に何もいらんねん！ それだけでええねんや！！

よしっ！ そうと決めたらグジグジ落ち込んだり余所で油なんが売ってる場合とちゃうで！ さっさと寄り道せず一直線、オトンのいる病院へ向かう事としかっ！ 仕事で忙しいオカンが連絡してへんようなら、まだオトンはこのビッグニュースを知らへんやろうからなあ？

話聞いたらどんな顔するやるか？ 何せ代表やもん、いきなり憧れのサムライブルーやもん、そりやさすがのオトンも驚いてブツたまげるやろなあ？ ビックリし過ぎてオトンの心臓止まってしもたらどないしよ？ そんな時はウチの熱い熱い人工呼吸と心臓マッサージで介抱してあげよっかなあ？ エへ、エへへへエへ！

オトン、あとちょっと待っててや？ アナタの愛しの親孝行娘、今すぐその胸一直線に飛び込んでいきますさいにいっ！！

## 第71話 羊、吠える

「じいさああああああんんんん！！！！」

「いやっ！ 何よ薫、いきなり大声出して急に！？」

「ハッ、ここは誰？ 私はどこ？ 何時何分何十秒？ 地球が何回グルグル回った時？」

「……何だよ薫、目覚めた途端いきなりコレかよ、さっきまで白目剥いて失神していたクセに」

「……っーか何なのよ、今の『じいちゃーん！』ってのは？」

「おおそうだ、翔太の旦那に那奈お嬢、俺の聞いてくれ！ 俺さっきまで綺麗なお花畑の中にいて周りを見渡してたら、川が流れている向こう岸で俺の祖父さんが笑いながらこっちに手招きしてたんだよ！ アレが噂に名高い三途の川ってヤツなのかな？ やべえ、薫ちゃんもしかして臨死体験しちゃった？ もし、向こう岸に渡ってたら俺今頃どうなってたのかな？ 今考えると怖え、マジ怖えー！ また自分の体に戻ってこれて良かったー！ 生きてるって素晴らしいー！！」

「……あつ、そう……、私的にはそのまま向こう岸に渡ってくれちゃった方が一番良かったけどね……」

「何かと思えば寝言にしちゃ声がデカすぎるんだよお前は、本当い



ちいち迷惑なヤツだなあ」

「アレ？ でも俺の祖父さんって確か海外でまだ健在のはずだったよな？ んじやもしかして俺が立っていた方が死後の世界！？ ワオ、薫ちゃんついにご臨終！？ ここは天国！？ それとも地獄！？ 俺ってばこれまで数多のレディーに優しい嘘ばかりついてたから閻魔様が嫉妬して舌抜かれちゃうぜベイビー！ 痛いのはイヤでも気持ち良いのは大好き！ 嗚呼神様、これまで犯した全ての過ちを心より悔い改めますから、どうか可愛くてエッチでおっぱいボインボインな女神様がたくさんいらっしゃる天国の桃源郷へと、この薫ちゃんに情けをかけて導いておくんなまし！？」

「……いざ喋り出したらこの戯言の数々、本当マジでウザいけどこの男、いつそ完全に息の根止まるまで締め落とされちゃえば良いのに……」

「……前回、早々に失神させられて全然出番無かったからなあ、コイツ……、でもよ薫、もうそんだけ喋れば十分気が済んだだろ？」

「まあねー！ と、いう事でボクチンにもプリンちょーだい！」

「……ウゼえ、確かに那奈の言う通り寝起きでこれはマジでウゼえわ、何か俺にも珍しく力づくで実力行使に走った一茶の気持ちあげえわかるような気がするよ……」

「……プリンならどうせ一個余った事だし、私達もお腹いっぱいだからもう勝手に食べれば？」

「それじゃお言葉に甘えて、戴きマンモスー！ パパパオーン！」

「……もう私ヤダ、限界、あとは翔太が相手してあげて……」

「……ハア、しょうがねえなあ……、はいはいどうぞ、勝手に食えよ！ どうせソレ、俺の分のプリンじゃねえしな」

「……ん？ だとすると、本来このプリンを食べる予定だったメンバーは一体誰だったのかな？ それに何かさつきよりメンバーが若干一名ほど人が少なくなったように感じるのは薫ちゃんの気のせい？ それと何か教室内の空気がちよつとピリピリしてて特に那奈お嬢がちよつと元気無いように見えるのも、やっぱり薫ちゃんの気のせいなのかな？」

「……えつ？ いや、まあ、それは、ちよつとな、ちよつと……、なあ、那奈？」

「……………」

「うゝん、あやすい、何かあやすいなあゝ、ご兩人？」

「……えつ、面会謝絶？ 何で？」

いつもの帰り道とは反対方向の電車に乗って入院中のオトンに会いに病院まで来たウチは、ナースステーションの面会用帳簿に名前を書き込み終わらん内に予想外の言葉を看護婦さんからかけられた。

面会謝絶でどういう事？　ウチ、家族やで？　娘やで？　それなのに、何でウチがここで門前払いされなアカンねん？　何でや、何でやねんな？

「ごめんなさいね、謝絶つてほどもないんだけど、松本さん、昨日の夜中にちよつと危険な心拍数に陥って朝方までずっと集中治療室に入っていたの」

「えっ！　そないな話、ウチ何も知らん！　朝、登校する時かてオカン何も話してくれへんかったで？　その話、ホンマにホンマなんか？」

「うん、奥様には松本さんの様態が変化した時にすぐにご連絡させて戴いたわ、病院の方にも午前四時頃に一度お見えになられたし、この後夕方お仕事が終わられたら急いでまたこちらに寄るってお話を伺っているわ」

……そんな夜中にオカン、病院まで一人で出かけてたんや。その時ウチは完全に爆睡しとつからなあ、そんなん全然気づかなかったわでも、そない大変な事があつたんなら何でオカンは朝、ウチが起きた時にこの事を教えてくれんかったんや？　ウチかて学校なんか休んでオカンと一緒にオトンの看病したかったのに……。

「多分、お母さんはあなたや妹さんが余計な心配をしないように気をつかって内緒にしていたんじゃないかしら？　あなた達が驚いてパニックにならないように、最善を尽くした結果そいう事にしたんだと思うわ？　それに、二人には学校を休んでほしくないって気持ち

ちもあつたと思うし、こんな事を言ったら失礼かもしれないけど、お母さんはお父さんの看病をするのに出来るだけ手を空けたくてあなた達を学校に登校させようと思ったのかもしれないしね」

まあ確かに看護婦さんの言う通り、ウチと岬が病室内でウロチヨロしてもオカンや病院の先生達の邪魔になるだけやろうけどな。でも、もしこれでオトンにまさかの事があつたとしたら、ウチと岬はその瞬間に立ち会えなくなるところやったんやで？

そんなん嫌や、何も知らんで学校行つとる間にオトンとサヨナラになるなんて絶対嫌や！　せめてこんな一大事ぐらいはちゃんとウチにも教えてほしい。でないとホンマにそうなった時、ウチは内緒にしてたオカンや病院の人達を恨んでしまう事になつてまうがな……。

「でもね、今回はもう大丈夫よ、集中治療室で治療を始めてから容体はすぐに安定したし、午前中にはいつもの病室に戻って今はもうグッスリ眠っているわ、でも、夜中の間ずっと息苦しいのに耐えていたのもあつて、お父さん少し疲れていると思うの、だから、今はちよつとの間だけ家族の方にも面会を控えてもらつて安静にして貰いたいのが病院側からのお願いなの、ごめんなさいね」

「……そういう事なら、はい、わかりました……」

「夕方頃にはお父さんも目を覚ますと思うから、もし良かったらその時また面会に来てあげて下さいね、あつそうそう、せっかくお母さんもその頃こちらにいらっしゃる予定だから、連絡を取って家族みんなで来るのも良いんじゃないかしら？　お父さんきつと喜ぶと思うわ、もしかしたら、お母さんもお仕事が落ち着いたらあなた達に連絡してくるかもしれないしね」

「……………」

ここ最近、オトンの体調があまり良くない。前にも何度か心臓の状態が良うなくて入院治療を受ける事があったけど、その度担当の医者が驚くほどの生命力で回復し、入院一週間後には病室で看護婦にセクハラ行為、一ヶ月後には何も無かったみたいにピンピンになって退院してた。

でも、今回はこれまでのもんとはちよつと雰囲気が違う。前回までの入院と比べると圧倒的に容体悪化の回数が多いんや。その要因のほとんどが不整脈による心臓発作。心肺停止まではいかんくても、血液を全身に送るポンプ動作の不良で体内の血中酸素度数が減少して突然倒れたりする事がたまにある。

今のところその度治療を受ければちゃんと回復するみたいやけど、正直その話を聞く度ウチの方の心臓が止まりそうになって息苦しくなつてまう。今回の件かてそうや、ナースステーションで看護婦さんから話を聞いた時、何も知らなかったウチはその場で一瞬立ち眩み起こしそうになつたんやからな。

「…………俺は、もうじき死ぬ…………」

前回、病室に面会に来た薫と那奈んとこの虎太郎オトンの前で言つたオトンらしくない弱気な発言。あれはホンマにオトンの本音やつたんやるか、オトンは自分の命がもう短いと悟つてしまつとるんやるか？ ウチのこの説明し難い胸騒ぎは何や？ もしかして、今回の入院を最後にウチはオトンと一緒に外を歩く事が出来なくなるんやるか？

それに、苦しくてそんな弱音吐きたいんやったら何でウチやオカン家族に対してやなくて、いくら兄弟同然とはいえ何の血の繋がりもない虎太郎オトンや僅かの期間の面識しかない薫にだけ他に知られたくないようにボソツと言ったんや？ まさか、ウチら家族に余計な心配かけんよう、最後の最後まで黙って静かに一人で旅立とうとしてるんちゃうやろな？

そんなん嫌や、許さへん、絶対嫌や！ オトンが死ぬなんてそんな事無い、そんな事あつてたまるかいな！ オトンにはもつともつと長生きして貰うてウチの花嫁姿、いいや岬の花嫁姿まで見て貰わんと困んねん！ ウチと岬がどんだけオトンよりカツコええ男捕まえたか判定して貰わんと、ウチ安心して結婚なんか出来へん！ 他の男のものになるなんて出来へんもん！

花嫁姿だけとちゃう、オトンに見せたいもんはもう一つ、類い希な才能に恵まれながらも心臓の病気で夢を諦めざるを得なかったオトンの代わりに、ウチがサッカー日本代表に選ばれサムライブルーのユニフォームを身に纏い、チームをワールドカップの決勝の舞台で活躍するウチの姿をオトンに見てもらう事や！ これは花嫁云々よりも前に果たさなアカン、オトンの一番の約束なんや！

その時までオトンにはまだまだ生きて貰わんと困るんや！ ウチは必死で頑張つとるやもん、そんな途方も無い夢物語も、現実を感じるほど近いところまでやってきたんやもん！ なでしこJapanでしかも年齢制限があるとはいえ、ついにウチはあの日本代表のメンバーに選出されたんやから、ついにオトンにその晴れ姿を見せる事が出来るんやから！

ワールドカップで優勝する事がウチの約束なら、それを見届けるまでどんなにボロボロになつても生き続ける事がオトンの約束や！ だから、死んで貰たらアカンねん！ ウチが頑張れる力の源として、目標として、オトンにはウチの側にいてくれないと困んねん！ オトンはウチの全てやもん、生きる希望なんやもん！

オトンさえいてくれれば、ウチはどんな逆境にかて立ち向かってい

けるで！　そして必ず、良い結果をオトンに報告する事が出来んはずや！　今までずっとそれだけで頑張つてこれたんや、今回の代表招集かて、オトンがウチに託してくれた情熱とウチのオトンに対する熱い想いで勝ち取った宝物の一つなんやでえ！！

「……………それをアイツら、あんな連れん態度で適当に受け流しよつてからに……………」

病院で門前払いされたウチは、最寄り駅の入り口付近の柱に寄りかかってしゃがみ込み、途切れる事なく行き来する人の流れをボーっとしながら眺めてた。他に行く場所が無くなつてもうたんや。家に帰るのは学校でみんなとたくさんサッカーの話して日が暮れた後つて予定しとつたから、今帰るのは何かもつたいのうてどうも気が進まなくてなあ……………」

オカン、まだ仕事忙しいんかな？　それもしゃーないわな、何たつて教育審査会のお偉いさんやもんな。でも、そういえばオカン、今日は病院からの連絡で夜中に起こされて、その後すぐにオトンの元へと駆けつけて看病して、今度は返す刀で家に戻つてウチと岬の朝の支度をして、それから自分の仕事場へと出勤……………、全然寝てへんやん！　ホンマにタフな人やなあ。でもさすがに心配やわ、今日はゆっくり休んでな、オカン。

岬は今頃何しとるやるか？　もう小学校の授業は終わつとるはずやから、家にランドセル置いて遊びに行つとるところかな。アイツもここ最近ほとんど家におらんくなつたからなあ。近所の友達と一緒にに遊んだり、ちょっと遠出して瑠璃の家まで行つたりと大忙しや。本人の話やと数人の男子連れてデートまがいな事までしとるんやと。ガキの分際で生意気な話やで、将来どんな女になるんか今から正直恐ろしいわ、ホンマに。

つまり、今ウチがこのまま真っ直ぐ家に帰ったとしても、多分そこは空っぽ、誰一人もおらん。少し前までは岬がおる関係でオカンも昼頃にはずっと家におって、ウチとしてはそれがウザくていつも二人とはケンカしとったのに、いざ誰もいなくなつてまうとこれが意外と寂しかったりするもんなんや。せやから帰りたくないねん、ウチがここに一人たむろつてるのはそういう理由があるからやねん。ウチの携帯にユースクラブから代表招集の連絡が来たんは昨日の夜十時頃。岬はもう寝とったしオカンはウチも寝てしもうた後に帰ってきたから、まだウチ以外の家族はウチが日本代表に選ばれた事をまだ知らへん可能性が高いねん。せやから、ホンマやつたら今すぐにもオカンや岬にこの件を報告して、家族みんなで喜びを分かち合いたいんやけど、それも今はまだ無理や。だからせめてオトンにだけでもこのビッグニュースを伝えたかつたんやけどなあ……。

「……………ウチ、何か一人ぼっちや……………」

……………何でウチ、あんなヒドい事してしもうたんやろか。ちよつと自分の話を聞いてくれんかつたぐらいで、自分の思い通りにならんかつたぐらいで、自分に注目してくれんかつたぐらいで、何もあんなにカツとなつて机にあるジュースやデザート全部ぶちまけなくつても他に方法あつたはずやろ？ もう高校生なんやから、もつと大人なスマートな対応出来たはずやろ？

あんなにマジでキレた那奈の顔、何か久し振りに見たわ。まさかひっぱたかれるとまでは予想しとらんかつた。頭を小突くくらいならいつもの事やけど、あんなに思い切り平手打ちされるなんてなあ。あまりに予想外でさすがのウチもビビつて何も仕返しできんかつたわ。

今考えてみると、やっぱりウチちよつと失礼やったかもしれへん。



那奈達への態度はいつもの事……、うーん、多少やりすぎた感もあるけどな、ロギ達バンドのメンバーはまだ出会って間もないのにあるんな形で練習の邪魔をしてしもうて、正直無関係やもんなあの人、とんでもない迷惑かけてしもたかもしれへん。ロギ、ナカジマ、ザビ、ごめんな。ウチが悪かったわ、ホンマにごめんな。

あと、綾にも随分迷惑かけてしもたかもしれへん。アイツかて代表に選ばれてウチと同様天にも登るほど嬉しかったはずなのに、その晴れの発表の場をウチの身勝手な行動で全部ダメにしてもうたんやからな。せつかく裏に回ってサポート役に徹してくれていたのに、ウチはそんな事お構いなしで一人芝居ばかりやってしもた。これじゃウチの方がパートナー失格や。綾、ごめんな。

こうやって少し落ち着いて素直になってみると、やっぱり千夏や小夜に対してもちよつと失礼過ぎたわな。もし、あの場面でウチと千夏が逆の立場になってあんな失礼な態度取られたら、間違いなくウチは千夏がしたようにキツく突っぱねていたと思うし、親から貰ったお金で買ってきた物で何かトラブルが起こったとしたら、その全責任として自分のオカンに怒られてまうのは小夜やもんな。そう考えてみるとやっぱりウチのした事は悪いな、最低やわ。ごめんな、二人とも……。

「……頬、まだヒリヒリするわ、痛っ……」

……しかし、しかしやで、あの時の那奈の言葉の数々、あれは無いわ。バカだのアホだの言われるくらいやったらウチも良う那奈に対して言つとるからおあいこ様や。でもな、自分に興味が無いからって日本代表やサッカーそのものを軽蔑するような言い方して、最後にはウチとオトンの命懸けの約束の事にまでしゃしゃり出てくるってのはちよつとやりすぎやろが？

あの時、ウチは苦しくて悲しくてホンマに泣きそうになったんやぞ？ あれはいくら何でも鬼やぞ、ヒドすぎる！ 確かにウチはうるさくてウザかったかもしれへん、失礼な態度取ってカチンときたかもしれへん、だからって普通あそこまで言うか！？ 親しき中にも礼儀ありって、オマエにも当てはまる話やないかい！

いつか、アイツとはこうなると思ってた。いつか絶対絶交する事になるって。だって合わへんもん、ウチと那奈の性格。全然正反対なんやもん。ウチは真面目くさってええ子演じるのが苦手やし、逆にアイツは羽目外してふざけたり大騒ぎすんのが苦手。合う訳あらへんねん。最初から無理やったんや。ただ、オトン達の繋がりがあったから一緒におっただけや。ウチと那奈の間には、昔も今も友情なんてもんは存在しなかったんや。

「……ええねん、これでええねん、これでお互い清々したやないか……」

……でも何やろ、このどてっ腹にデッカい穴が空いたようなスツカスカの空虚感。そういやウチと那奈、小夜の付き合いもかれこれもう十年近くになるんやなあ。長いなあ、何か毎日のようにアホな言い争いしとったのが思い浮かぶわ。那奈が仕切って、小夜が大ボカままして、それをウチがゲラゲラ笑とる……。何やかんや言うてもええトリオやったなあ。千夏はウチと那奈のどっちにつくんやろ？ 下手すんとウチ、ホンマに一人ぼっちになってまうのかなあ……。

「ねえねえ、この後どこ行く？」

「私この前、スッゴく可愛いお店見つけたんだ！ そこ行かない？」

「じゃあその後さ、みんなでマック寄ろうよ！」

「それいい感じー！　それで決定、だったら早く行こ行こー！」

一人ポツツーンとしやがみ込んだるウチの目の前を、同級生ぐらいの他校の女子の四人組が黄色い声でキャツキャツ言いながらこっちに見向きをせんで通り過ぎつつた。ヘッ、何がマックやねん。普通『マック』やのうて『マクド』やろ？　人をよそ目にヘラヘラヘラヘラ楽しそうにしようてからに、何やねんアイツら、ホンママ力つくわ……。

「……マクドか、何かウチも小腹空いたなあ……」

せやけどなあ、さすがのウチにも一人マクドが出来るほど悟り開いた仙人みたいな強い精神力は無いわ。他の連中の視線が恥ずかしいやら虚しいやらで多分店内にいるのに一分すら保たへんで。こないな事やったら教室飛び出す前にプリンの一つでもパクってくれば良かったなあ。あーあ、やつぱりウチに一人ぼっちは絶対無理や。誰でもええ、誰か側におってや。寂しいよお、オトン……。

「さよーならー　叱られる事も　すくーなくー　なっていくけれどー」

「……人がぎょうさん行き交いしおる駅のド真ん中で……」



「メガネやつたらお約束でアタマにあるやろが、アタマアタマ」

「おおそうかいそうかい、ならアタマはどこかねアタマアタマ」

「自分のアタマ探してどないすんねん！　ってか、何でオマエとこんな場所で即席メガネ漫才やらなアカンねや！？　ここはなんば花月かそれともルミネtheよしもとかいな！？　もうええっちゅうねん、このどアホ！！」

「お後がよろしいようで、どうもありがとうございました〜！」

「よろし無いわボケエー！！」

ちよつと待ってや運命の神様！　いや、笑いの神様？　確かにウチは一人になって寂しい、誰か側にいて欲しいと言ったがな、何でよりによってこないクドくてウザくて喧しい男をここによこせて頼んだんや！？　一番最悪の人選やでコレ、何か早速ウチの顔見て気味悪くニヤニヤしとるし、相変わらず周りの人達からは変な目で見られとるし、まだ一人でおった方が幾分マシやったわ、アホンダラ〜！

「オイコラ薰！　オマエさっきまで学校の音楽室でノビとったクセして、何でいつの間ここにぉんねん！？　ってか、オマエどうやってウチがここにおるってわかつたんや！？」

「そりゃあ愛しのマイダーリンつばピーがみんなにイジメられて寂しく一人で小さく震えていると聞いたら薰ちゃんいてもたってもいられなくなっただけにでも一緒にいてあげたく側にいてあげたくて

抱き締めてあげたくて泣き顔にチツスしてあげたくて学校出てからずっと良からぬ妄想を脳内でムクムク膨らましてハアハアしながら後からひっそりとバレないようにぴったりストーカーしてきちゃいました」

「うわあゝ、何かもう全身にじんましんが出て痒くなるくらいキモいっゝ！！ 息継ぎ無しでそない無駄に長くてさぶイボ立ちそうな話せんでもな、『心配やから後を追ってきた』の一文だけで全部説明つくやろが！？ 何でオマエはそない毎度毎度ウチが嫌がるようなアホな事言うて場をシラけさせよんねんな！？ ホンマにウチはオマエのそういうところだけがどうしてもいちいち腹立たしい……！！」

「じゃあそういう事で、翼は今から俺にギュッて抱き締めらせて愛のチツスを顔中いっぱいにチューチューされるのと、俺と一緒にマツクに行つてシェイクをチューチューするのとどっちが良〜い？」

「何がじゃあそういう事やか何やか全然わからんけど100%マツクに決まつとるやろが、このボケエ！ それに何度も言っけどマツクやのうてマクドや『マクド』！ 『マクドナルド』の略なんに『マツク』ってパソコンでもありやせんのにどう考えてもおかしいやろ？ おかしい言つたらオマエがさつきから言うてる事も十分おかしい事だらけでだからあのそのな……」

「それじゃあ、今から大至急マツクに向かってカモンレッツラゴー！  
ただ泣いてわらゝって 過ごす日々に 隣にたゝって  
いれる事でええええええゝ」

「せやから民衆のド真ん中でデカい声出して歌うなっちゅうねん！  
しかもウチはまだどっちがええか答えたただけでな、何もオマエと

一緒にマクドに行きたいだなんて一言も言うてへんぞコラッ！ オイ薫、手え離せ！ 誰が手え握ってええなんて許可したんや！ 話聞いとんのかオイ！ 離せっちゆうねん、コラアゝ！！」

何やねんなこのスーパーハイテンションで訳わからんちんグダグダ展開は？ ウチがせつかく普段人様には見せへんおセンチモードになっとったのに、そんな雰囲気見事に木っ端微塵やないかい！ うわあ、道ですれ違う人達の視線がめっちゃイタイ！ 絶対ウチと薫、親の目盗んで外出しとるオマセなお子様カップルやと思われとる。ちやいますねんちやいますねん、ウチらそんな幼稚園児とちやいますねん！ そない保護者の目で見んというてや、お願いゝい！？

「……で、これで少しは御満足して戴きましたでございましょうか、お姫様？」

「……ん、まあ、シエイク一本飲んだからそれなりに小腹は満たされたわ、とりあえず余は満足じゃ」

「それはそれは、その御言葉、私にとっては非常に有り難き光栄にございます」

「ただな、一つだけどうしても納得出来へん事があんねん」

「と、言われますと？」

「オマエ何で四人掛けのテーブル席なのにわざわざウチの真隣の席にぴったり座つとんねん？ 向こう側の席空いとんやらそっち座つて対面になればええやろ？ 話す時にいちいち横振り向くのしんどいし何かこの暑苦しい密着感も気持ち悪いし、一体何考えてんねんな？」

「いいじゃんいいじゃん！ 向かい合つて話すよりこうして仲良くぴったり並んでイチャイチャすんのもいいじゃん？ 何せ俺とつばピーは世間が羨む超アツアツハッピーなラブラブステディなんだからハニー？」

「……ハア、失敗やわ、ホンマ大失敗やったわ、ウチのあの時の選択……」

そうやねんな、昨日の放課後に航の不思議な記憶能力の真相を調べに二人でインターネットカフェに行った時にも思たけど、ウチと薫、この前の伊豆探索の帰りから形だけは正式に恋人同士になつてしまたんやなあ。

ホンマ今になつて良く考えると不思議でしゃあないわ、何でウチはコイツの気味の悪い求愛行為なんかに反応してしもたんやろか？ 完全に魔が差したと思えへん。コレは何かの罠か隠蔽や、ハメラれたわ、ウチ。

「……あゝもうホンマに、今日のウチはとことん踏んだり蹴つたりやわ！ 昨日までは夢にまで見た代表招集の話が来て身も心も完全に有頂天になつて最高の気分やったのに、一転して那奈にはひっぱたかれるわ小夜と千夏には相手にされんわ、挙げ句には綾にまで裏切られてオトンにも会えんで、最後には心配して来てくれた人間が



よりによつてオマエやる？ 最悪通り過ぎでもうすっかり生き地獄やで！ 生きてる心地がちつともせえへんわ、不愉快極まりないつちゅうねん、ホンマにもう！」

「まあまあまあ、人生とは常にギブアンドテイクでございますよお姫様？ 昨日それだけのグッドラックがあつたから、その分先々にバッドラックが待ち受けてるのは仕方の無い事、自然の摂理でございますよ」

「ウチが代表に選ばれたんは運だけとちゃうもん、実力で勝ち取つたもんなんやで！ それが何でここまでヒドい仕打ち受けなアカンねんな？ ホンマ世の中不公平やわ！ しっかしおかしいなあ、朝家出る前に見たテレビの星占いやと、ウチの運勢は全体でもランキング上位でそない悪くないはずやつたんやけどなあ？」

「へえ、ちなみに翼は何座だつたっけ？」

「水瓶座や、一月二十五日の大雪の日に産まれたんやで」

「ほお、早生まれっスか、だから人より体の成長が遅いつて訳ですな」

「うつさい放つとけ！ 三月下旬ギリギリ生まれの頭の成長が遅れとる小夜に比べりゃ幾分もウチの方がマシや！」

薫が側に来てくれて一人ぼっちの寂しさから解放されたんはええんやけど、この変なテーブルの座り方もあって何かしっくりせんと言つかこそばゆいと言つか妙な空気でも落ち着かなあ。ウチが店内の他の客の視線を気にしてキョロキョロしとると、薫はそんな

事も気にせんとカバンから携帯取り出して何やらボタンをポチポチ。何や、もし他の女にメールなんぞ打ってたりしたら承知せんぞコラッ！

「あれ〜？ いやいやいや、薫ちゃんがいつも利用してる星占いサイトだと、残念ながら水瓶座は週末の運勢が一番最低ですがなまながな〜？」

「えっ、ホンマに？ まあ、占い師によってそれぞれ結果が違うんはわかるけど、それにしても十二星座中ドベの最下位かいな？ 極端な話やなあ、そない水瓶運氣悪いんか？」

「うわあ〜、もう最悪ですよコレ？ 可哀想、見てられない、鬼です、悪魔です、地獄絵巻です、ヒドい、あんまりだ、夢も希望もありやしない、死んだ方がマシだ」

「……オマエあなの、本人前にしてその言い種は無いやろ……、まあええわ、その占い何て書いてあんねん、教えてや？」

「七日間でビックリ！ わずか三錠飲むだけで体重が二十キロも減少」

「誰がサイト上に掲載されとるいかにも怪しい広告読めって言うたんや！ 違うやろ、占いの内容や内容！ メインの文章読まんでどないすんねん、このどアホっ！」

「おお、そうでしたそうでした、翼が二十キロも痩せたら皮と骨だけになっちゃうところでしたなあ？ え〜とね、今週末の水瓶座の全体的運勢は、『今まで努力してきた事が実を結び、一番欲しかっ

たものを手にする事が出来るでしょう』、だって」

「何や、悪いと思ってたら逆にスゴくええ感じやないかい？　しかも偶然にもウチの現在の状況とピタリ当たつとるわ、それで何で最下位やねん？　全然理解出来へんで」

「え〜と続きね、『しかし、その喜びにより舞い上がって調子にノリ過ぎると、その代償としてとても大切なものを失ってしまうかも可能性があるかもしれない』、だって」

「……………うぐっ……………！」

「え〜とそれとね、『それは粗末な扱いをすると後々取り返しのつかないほどの痛手となってあなたを苦しめるでしょう、手に入れたものと失ってしまうもの、どちらがあなたにとって本当に大切なもののなか良く考えて落ち着いて行動しましょう』、だって」

「……………が、がはっ……………、当たつとる、恐ろしいほど当たつとる、一体何やねんなその占い、何でそこまでウチの事をお見通しなんや……………？」

「こりやかなり深刻な状態ですなあ、コレちよつと笑えないっスよ？　さて、どうすんのさ、翼？」

……………ウチにとって大切なもの、そりや確かにオトンとの約束であるサッカーや日本代表の話はスゴく大切な事や。でも、ウチがここまですで頑張つてこれたんは自分の力やオトンの励まし、一緒に苦しい練習を耐えてきた綾の存在だけやったやるか？

違うよな、舞台こそ別やけど目に見えないライバルとして、仲間と

して、励まし合う友達として存在してくれてたみんなのお陰でもあるもんな。こんなウチに当たり前のように側にいてくれたかけがない親友、これはどんな事があっても失ったりしたらアカンのやな……。

「……でも、今更謝ってアイツら、ホンマに許してくれたりするのかなあ……？」

「そんな水瓶座のあなたに運氣回復のラッキーパーソン！」

「えっ！ 何や何や？ 何したら運氣アップすんねん？ なあ、もったいぶらんと教えてや、ウチ何でもするで、教えてや〜！？」

「ズバリ、あなたの運氣回復アイテムは『彼氏』！ あなたの素敵で優しくてカッコいい彼氏にはいっぱいベタベタ甘えて可愛くやらしくサービスしちゃいましょう〜！」

「……ハア？」

「もうベタベタイチャイチャスリスリするどころか、見てる周りの人達が逆に恥ずかしくなるほどラブラブハグハグチュッチュッモゾモゾして、そのまま二人で一氣に大人の階段ワンツースリー！ って駆け上がって、何度も何度も快樂と言う名の樂園へとフライハイ！ ってそれからムフフ」

「オイ薫、その携帯ちよつとウチによこせ」

「いやいやいやマズいですこの携帯はちと他人に見られるとかなりヤバイものが結構保存されておりまして下手すると通報されてタイ

ホされちゃう恐れもありましてつまりはそのあのこれは非常に危険がデンジャラス」

「ギャーギャー言わんとよこせつ言うトンねん！ 問答無用、不審物回収強制実行や！」

「ああっ、お代官様お戯れ〜！ フツガツグツグッ！」

薫の口にウチの小さい手で掴めるだけのポテトをギュウギュウに詰め込んで強引に携帯取り上げて画面見ると、思った通りや、そないアホなラッキーパーソンどころかさっきまでの大切なもの云々の話も全部コイツのデタラメやん！

何やコレ、ホンマの水瓶座の運勢欄は『嘘や詐欺紛いな話に注意』で、これウチが朝テレビで見た占いが言ってた事と全く一緒やないかい！ まんまと騙されたわ、薫！ よくもやりよってくれたなゴラァ！！

「オマエ、ウチに対してこれだけの大暴挙しよるとはなかなかええ根性しとるやないかオイ、今からオマエの胃袋にポテトどころかビツグマツクにフィレオフィッシュにクォーターパウンダーをマツクフルーリーでごちゃ混ぜにしたもんをたらふく詰め込んで『I'm lovin' it』にしたるから覚悟しとけやアホボケタコナスおんどりやてめえゴラァあぁん！？」

「でもさホレホレ、この占いも運氣アップのところは翼にもちゃんと当てはまってると思うぜ？ ホレホレ見てみそ見てみそ？」

「そないな事言うて氣い紛らわせてウチのパラッパッパッパー！」

から逃れられると思たら大間違いやぞコラ、今日という今日はもう容赦せえへん、オマエなんかハンバーガーとポテトとドリンクSにプリキュアのおもちやつけてハッピーセットでらんらんるーにしてやるやさかいに……、って、んっ？」

薫はウチが投げつけた携帯を再び手に取り液晶をこちらに向けると、怒髪衝天中のウチを宥めるように占い画面に書かれてあるある一文に指を差してニヤリとほくそ笑みよった。そこに書かれておったんはホンマの水瓶座の運勢アップのラッキーパーソン、そして、その内容とは……。

『水瓶座のラッキーパーソン・昔からの幼なじみ』

「……………」

「あつ、そうそう忘れてた、え〜と……、あつたあつた、はいコレ、翼の分ね」

痛いところを徹底的に突つかれまくってグウの字も出えへんようになってしもたウチに対して、薫は最後のトドメとばかりに自分の力バンの中から一つ、中に黄色いゼラチン状の物体が入ったプラスチックの容器を取り出しテーブルの上にちょこんと置いた。それは本来ウチが食べる予定だった分の、那奈と小夜が買ってきてくれた百円のプリンやった。

「……あの後さ、那奈お嬢も少し言葉を選ぶのを間違えたって気づいたらしくてさ、彼女にしては珍しくすげー落ち込んで後悔してたみたいだよ、自分の分の飲み物とかに全く手もつけないでさ、ずっと下向いて考え込んでね……」

「……………」

「そんなお嬢の姿が伝わったのかな、側にいた翔太の旦那も黙り込んでるじゃん、小夜ちゃんや千夏ちゃんも何か申し訳なさそうな表情してたよ、みんな、いくら何でもちよつとやりすぎたかもしれない、って心の中で反省してたんじゃないのかな」

「……別に、悪いんはアイツらとちゃう、やりすぎたんはウチの方やから……」

「うん、俺もそう思う、さすがに普段冗談ばかり言ってる俺も『平民』扱いには正直言ってるドン引きしたよ、こりゃちよつとばかし暴走モード過ぎやしませんか？　ってね」

「……薫にまでドン引きされてまうとは、相当ヒドかったんやな、ウチ……」

「だからさ、薫ちゃんも負けじと暴走モードになってギスギスした雰囲気中和させようとフル充電100%で大放出版状態になったのは良いんだけど、まあ見事に大放出版する相手を間違えた間違えた、何の抵抗も出来ないままあつという間に一茶親分に秒殺されてしまいました、トホホ」

「当たり前や、あんな類人猿相手にユーモアのコミュニケーションなんぞ取れる訳無いやろ？」

「だね、自分では良かれと思って場を盛り上げようと大騒ぎしてるつもりでも、他人からすると癪に触ったりヒンシュク買っちゃったりする事が多々あるんですよね、いや、だから笑いって難しい」

「……せやな、ウチかて別にみんなを怒らせようと思ってあんな態度取った訳や無かったんやけど……、今回はアカンかったなあ……」

「でもまあ、そんなユーモアに対して目くじら立ててマジ切れしちやうのもあまりに大人気なくてナンセンス、だからこの薫ちゃん、つばピーの代わりに那奈お嬢にガツンと言かましてやりましたぜ！？ 『おめー、つまんねー堅物女っ！ お尻ペンペンっ！』 ってね！」

「おおっ！ 薫才マエ、勇氣あるなあー！？ で、どないやったん？ あの偏屈の塊みたいなの那奈のヤツ、それ聞いてどないな反応しよったんや？」

「即座にガツンとお尻を廻し蹴りされました」

「……せやろな、無茶しやがって、身の程知らずもええとこ過ぎるわこのアホ」

「あの人絶対おかしいですよ、仮にも空手道という一般ピープルとは違う別世界に身を置いておきながら、どうしてズブの素人相手に本気の廻し蹴りを普通にお見舞いしてくれたりしますか？ これでマジ薫ちゃんの尾てい骨折れたりしたらどう責任取って戴けるんでございますか？ 誠に遺憾です、これはもう明らかに日本国憲法第十一条を無視した人権侵害と無差別的虐待とあります、こちらと致



しましては早急に『渡瀬那奈による被害賠償請求団体』を設立して徹底抗戦したいと思っっている次第でございます」

「オイオイちよつと待て待て、オマエあのな、そうやって個人的な恨み辛みを裁判紛いな言葉並べてウチに向かつて陰口叩いてもしやあないやろが、ウチは弁護士でもなきや検察でも裁判官でもあらへんのやぞ？」

「是非とも我々被害者の心境を一番ご理解して下さい下さつてらっしゃると思われる松本翼様にはこの団体の代表になって戴き、平等なる法の場によりこの世に蔓延る諸悪の根源に対し正義の鉄槌を振りかざして戴きたいと思う次第にございます、まずは同じく渡瀬那奈により被害を被った者達から署名を集め民事裁判に」

「コラコラコラッ！ オマエはウチと那奈の友情を仲裁して取り持ちたいんか、それとも完全に修復不可能にしたいんかどっちゃねん！？ 何かウチより薫の方がアイツに対して色々と怨念抱えてんっちゃうか？ すました顔して考えとる事おっそろしいなあ、どんな性格腹黒いねんなオマエは？」

「だって本当に痛いって文句言っただって全然手加減してくれないし、飯にやり返したとしても絶対その何百倍返してボコボコにされるのが目に見えてるし、ならば獰猛で凶暴な肉食獣に対し為す術が無い我々が弱き羊達は一体全体どうやって身を守れば良いって言っんですかあ！？ このまま黙って毎日お尻蹴られまくって打ち身青あざ切れ痔脱腸起こして病院送りにされて泣き寝入りしろって言っんですかあああああああ！？」

「人がチヨコシェイク飲んだる時に切れ痔とか脱腸言っなあ！！ オマエが那奈に蹴らるんはほとんどがオマエの自業自得やろが、こ

のボケエ!!」

「ならばチョコシェイクのついでにこちらのプリンもどうぞ平らげて下さいませませ?　ここに来るまでの間ずっと薫ちゃんのカバンの中でぬくぬく発酵してちょうど良い感じに醸し出されております  
く!」

「何やコレ!?　良う見たらこのプリン、白い部分とカラメルソースがグチャグチャに混ざり合ってマーブル状になつとるやないかい!　　そういう薫オマエ、さっき歩いている時思いつ切りカバン振りまくつとったやろ!?　何してくれんねんオマエは!?　誰かプリンまでシェイクしろつて言うたんや、このボケエ!!」

「あつ、そうだ!　あのさ、もしかしてプリンシェイクつてこれから巷で流行しそうな新スイーツになりそうな気がしねえ?　　いつそ缶に入れて飲む前に十回くらい振ってね!　　って感じで売るのはどうかなあ?　炭酸ゼリーつてもアリだよね、振って振って飲んでシュワワワって絶対ブームになるぜコレ!」

「はいはいせやな、そんなもってCMに朝青龍でも起用してファン太郎とでも命名しよか」

「ワオ、ナイスアイデア!　　つばピー冴えてるね、電通社員のビツクリ仰天の顔が目には浮かぶぜコンチクショウめっ!」

「まずはオマエの虫湧いた脳みそを百回くらいシェイクしてこいや、このボケナスがあ!!」

……でもアレやな、何かこう、ふと思い返してみると、もしかした

ら薫は気づかん内に色々とうちらの間での争い事を未然に防いでいてくれてた気がすんねん。

いつものメンバー、特にウチと那奈が小さな小競り合いからホンマの大ゲンカになりそうになると、そこには必ず薫が間に入って怒ってるのがアホらしくなるほどしようもない冗談抜かして代わりに殴られたり蹴られたりしてくれてたような、そんな記憶があるんよ。今回のウチと那奈のケンカも、薫が気を失っていなければいつもみたいに間にしゃしゃり出てきてくだらん事言うて、ウチらと場の空気を宥めてくれてたんとちゃうかな。何だかんだ言うてウチらは薫のお陰でいつも楽しく学校生活が送れてるのかもしれへん。

そう考えると、何か薫には頭が上がりへんな。コイツ、いつもはしようなないアホ演じとるけど、ホンマは一番周りに気い使うて荒波立たぬよう冷静にウチらの舵をコントロールしてくれてんのかも。もしかしたら、ウチが薫に惹かれたのもそういう一面に薄々気づいていたからなんかなあ……？

「ってかオマエはいつまでウチの真隣にべったり居座つとんねん！  
？ ウザいねん、暑いねん、やかましいねん！！ 寄るな、触るな、顔近づけるな！！ さっさと向かい側の席移れや、このどアホっ！  
！」

「やゝだやだやだ、薫ちゃん常につばピーのうなじの匂いクンカクンカしてないと呼吸困難起こして窒息しちゃう、例え密封された室内に一酸化炭素が蔓延してもつばピーの匂いがあれば薫ちゃん四百メートル全力で駆け抜ける事が出来るもん！」

「オマエはどこまで果てしなくアホやねん！？ 自分で自分の言うてる事聞いてて良う平常心でいられるなあ、並みの人間やったら今

頃絶望して首吊つとるぞ普通!？」

でも、それとこれとは話が別や! さっきまでは普通にカバン一つぐらい隙間空けて隣に座つとったのに、知らん間にジリジリ間詰めて気づけばピツタリ真横に体寄せてきよつとるやないか! いくら何でも馴れ馴れし過ぎんねん、これはもうセクハラやぞ!? 勘違いもええとこやでコイツは!

ウチもウチやで、よりによつて店の端にあつた四人掛けの一番奥の席に座つてもて、そこに問答無用で薫が隣にグイグイ詰め寄つて陣取りよつたから、さっきからウチは壁と薫に挟まれて逃げ場無く身動き取れへん状況やねん! デカい声出してギャーギャー騒ぎよるから他の客からも変な目で見られとるし、もう恥ずかしくてしゃあないわ、も〜う!

「ホンマもうマジでキツイから席移つてや、ホンマにホンマ、もう堪忍して」

「う〜ん、翼は相変わらず素直じゃないなあ、さっきまで一人ぼっちであんなに寂しそうにしてたクセに、こゝのツンデレさん、ツンツン!」

「ちょ……! ゴラア薫! 何いきなり人のほつぺた指でツンツンしとんねん!? 誰が触つてええなんて許可出したんや、オマエ最近明らかに調子乗つとるやろ!? ええか、確かにウチはこの前オマエと交際するのを認めただけだな、こういう彼氏紛いな事をするにはまずオトンよりもカツコええ男になつてから……!」

「あれ? おやおやおや? やつぱりそうか、これはもしかしたら

もしかする？」

「何や何や、今度は何やねん！？ 鼻息かかるくらいめっちゃ顔近づけて人の顔ジロジロ見よってからに、意味わからんわ、何がやっぱりやねんなコラ！？」

「……翼、今日すっぴんだよね？ 今日っていうか、昨日も一昨日も今週入ってからずっと」

「……えっ？ は、はいっ？」

「やっぱりそうだね？ 先週末までは千夏ちゃんに負けないくらいメイクに力入れてたと記憶してるんだけど、いきなり急にどうしちやったのかな？」

「……いや、あの子、それはアレや、そのな……」

「もしかして、俺がこの前『すっぴんが可愛い』って言ったから？」

「……がっ！ ち、ち、違っ、違うわ！ アホかボケェ！！ これはちやうねん、これはそのあの、ア、アレやアレ、気分転換や気分転換！ 夏も近づいてそろそろ暑くなってきた事やし、ちよいとばかりメイクも気分も軽めにして解放感を出してやな……！」

「……うわあ、必死になって言い訳する姿もまた良い！ 翼、すごい可愛いよ、何か俺ドキドキしてきちゃったぜ……」

「……やめろや、オマエ目がマジ過ぎる、ホンマ殴るぞ？」

「いいよ殴っても？ 那奈お嬢ならともかく、翼に殴られるなら本

望す」

「……あのなオマエ、ええ加減に……」

「……翼、マジで可愛い……」

「……あわわわわ、ホンマにやめて、ホンマ堪忍してや薰!？」

何何何何何、何やねんないきなり急に!? 何なんやコイツ、さっきまでの人権やら朝青龍やらの話から何で急にこない展開に早変わりしよんねん!? 何するつもりや、一体ウチに何するつもりなんやコイツは!? ……まさか、こないな所で、こないたくさん人がおるところで、まさか、……キス? 嘘やろ? そんな、嘘やろおゝ!?

アカンねん、ウチアカンねん! 心の準備なんぞ何も出来てへんし、第一、実のところこないな真似オトンにすらされた経験ウチには無いんやぞ!? もう訳わからん! 自分で何考えてるか何言ってるのかも全然わからへんがな! こっち見んな! 顔近づけんな! キヤラに無い真面目な表情で似合わんセリフ囁くな! アカンアカンアカン、ホンマに堪忍してやゝ!!

「……薰、人見とるから、ホンマアカン……」

「……ん? あらら本当だ、何かみんなしてこつち見てる、いやゝんエツチゝ! ちよつとだけよ? アンタも好きね? カトちゃんペツ! なんちゃって」

そりやさつきからあんだけデカい声出して喋ってりや、いくら店の隅にいたって嫌でも周囲から大注目されるに決まってるやろが、この鈍感スケベ男が！！ もう嫌やコイツ、どこまで冗談か本気かさっぱりわからへんし、それより何よりこの男には羞恥心つてもんは存在せえへんのかい！？ やっぱコイツ変態や、生まれながらの筋金入りの大変態や！！

「じゃあ、ここじゃ何ですから今から移動して二人だけのラブラブデートの続きをしますかね？ 誰にも邪魔されない場所でゆつくりと、ね」

「……な、何やねんソレ？ 邪魔されへん場所って、どこやねん？」

「……決まつとるやないか、『ええとこ』や、え・え・と・こ」

「……ちょ！ ちょちょちょちょ、ちょっと待てえ！！ 何や『ええとこ』て！？」

「『ええとこ』言ったら一つしかあらへんがな、ホンマは良う知つとんねんやろ、お嬢ちゃんも？」

「オマエおまおまオマエホンマにアカンぞオマエ、ってか何でオマエ急に怪しいオッサンみたいな関西弁になつとんねん！？ 何考えてんねや薰、ウチらまだ高校生やぞ！？ 高校生の分際で『ええとこ』で、それはいくら何でもアカン、あきまへん、あきまへんがなあゝ！！」

「さあさあ話が決まればいざ鎌倉、ならぬいざ『ええとこ』！ 翼にはもつともつと俺のあゝんなところやこゝんなところをいっぱい

いっぱい知って貰いたいのさ！」

「アカンアカンアカン待て待て、そない強引に腕引つ張ってウチを拉致すなっ！　ウチはまだ『ええところ』行きたいだなんて言うてへんぞ！？　それに、オマエのウチに知って欲しいもんで何やねん！？」

「すんごいの俺の秘密、んもおうすんごいだから、薫ちゃんすんごいの、もう我慢の限界です、翼にスゴいスゴいつて言わせたくて薫ちゃんドントストップミ―状態に突入しまゝす！！」

「ダメダメダメアカンアカンアカン、嫌や嫌や嫌やゝ！　オトンに言いつけんぞオマエ、愛娘に乱暴したつて言いつけたるぞコラゝ！！」

「……そんなに、嫌？　恥ずかしい？」

「……ん、あの、まあ嫌つて言うかその、いきなりこんなんはちょっと……、だつてウチ、そんなん困つてまう、恥ずかしい……」

「そんな困つちやつて恥ずかしがつてる翼がまたすつげゝ可愛いからたまんねゝぜ！　今日という今日は薫ちゃん、問答無用で男の勝手貫き通しまゝす！」

「そない殺生なあゝ！！　助けてえゝ！　この人誘拐犯ですうゝ！　警察に通報してゝ！　誰か男の人ヘルプミゝ！？」

嫌やあ、こない強引なやり方でそんなん嫌やあゝ！　こついうんはもつとムードとか順番とか色々段階踏んでから経験するもんやろお



く！？ まさか薫がここまでスケベで無茶な男やなんて全然予想し  
とらんかったし、ウチらまだ付き合って一週間も経ってへんし、や  
っぱりこんな健康な高校生男女がする事ちゃう！ アカンったら  
アカンねん！

これじゃウチ、オトンとオカンに顔向け出来なくなってまうし、そ  
れに学校で那奈達と明日どんな面して会ったらええのや！？ ホン  
マに洒落ならん、ウチの貞操大ピ〜ンチ！ これ次回どないなんね  
ん、内容過激過ぎて観覧禁止になったらどうんねんな作者！？ ヨ  
ゴレキャラになりとうない、卒業まではキレイな体でいたい！ 誰  
かウチを助けてや、お願い〜！！

## 第72話 Drawing

そういえば、そんな兆候は昨日の放課後のインターネットカフェの時からあったと言えばあったんや。航のあの訳わからん滅茶苦茶ギターの謎が気になってウチがウーンと頭悩ましてるところに、タイミング良く薫がサヴァン症候群が何やらと耳打ちしてきたのが全ての始まりやった。

聞き慣れへんヘンテコな用語に興味を持ったウチは、いてもたってもいられなくなつて半ば強引に薫を連れ出して駅前にあったカフェに突入、そのまま二時間ほどパソコンの画面にかじりついてこれまでのサヴァン症候群の実例を調べて航との接点を探しまくったんや。その間、薫は途中で飽きもせずウチと一緒にずっと個室に閉じこもつて検索用のキーワードやその症例に関する人物名などをアドバイスしてくれていた。ウチも完全に夢中になつとったからな、ただただウンウンと頷いてマウスを右往左往動かしてクリックしまくる事しか頭に無かつたんや。

一つ通り調べるだけ調べてフウと一息つき背伸びをした後、ウチは今更自分が置かれている状況がハンパなくヤバく危険である事に気づいたんや。そりやそうやで、いくら協力して調べもんしてた言うたつて、もう夜も十時近くになつとる一つの狭い個室の中に若いカップルが二人きりで一緒におんねんぞ？ ヤバすぎるやるコレは？ もしこの時、今日みたいに薫のスイッチが入って興奮して襲いかかつてこられたら、ウチは逃げ場も無ければ抵抗する術すら無かつたんやで。それに気づいてからはホンマビクビクやったわ。最後の一回調べに薫がパソコンいじくつとる間もウチは物音立たんよう小さい体をさらに小さくして時間が過ぎんのを黙って待ってったんや。

『……じゃあ、そろそろ帰ろうか？』

この時は薫がウチの心境に気づかんかったのかどうかは良く知らないけど、何事も無く普通に店から外に出て駅まで歩いて向かう事になった。でもそつからがまた一大事！ 外はもう真っ暗になっとるし、何せ店から駅までの間にどうしても目の前を通らなアカン関所が一軒存在してたんや！

何やて、関所って一体何やって？ そんなん言わんでもわかるやろ！？ 十八歳未満の男女お断りのあのキンキンピカピカのあの場所や！ 一泊九千八百円で巨人軍から札幌飛ばされたあの野球選手でお馴染みのあのやらしい愛の巣窟のあの場所や！

もうアカンかったわあの時ウチは、何か良うわからんけど足はガタガタ震えるし、建物見んようしてもウザったいくらいネオンが目線に入りよるし、いっそ顔背けようと反対側向けばそこには薫の顔が目の前にあるんやもん！ 完全に絶対絶命や、ウチ今日は家に帰れへんのとちゃうか、そんな事まで考えてある程度覚悟も決めてたんやけど……。

『こんばんは、こんな遅くまで娘さん連れ回してどうもすいませうん！ どうかこの薫ちゃんのおバカの顔に免じて許してチョンマゲー！？』

『あら、何よ翼、薫君と一緒にだったの？ 随分と帰りが遅いから心配して私、千夏ちゃんの家電話しちゃったわよ』

『薫ターン、今度はみータンとも一緒にデートしよーねー、バイバイー！』

……コイツ、顔色一つ変えずに普通に家までウチを送り届けやがった……。正直ホツとしたっちゅうかガツカリしたっちゅうか、それより何より桐原薫という男が一体全体何を考えて行動しとるのかウチにはさっぱり理解出来なくなってもうたわ！ 普段あんだけエロい事ばかり言うとする狼男がこない草食系動物な訳が無い、コイツ絶対猫被つとる、怪しすぎ！

ホンマは薫もビビってウチと同様足ブルブルさせてラブホ通り過ぎてた？ いいや違う、コイツはそんな翔太みたいなヘタレやのうて意外と芯が通つてるとウチは思うねん。この前の伊豆の時もそうや、あんだけ嫌がってた漁船の掃除も結局やり通したし、荒波の中の船も乗ったし、それにウチが大雨の中で大ピンチの時に駆けつけてくれたんは薫だけやったもん！

そない根性入った男が女をホテル連れ込むなんぞ、痛む義足引きずってビルの屋上登ってウチを肩車するよりよっぽど楽勝やろ？ だとしたら、やっぱりコイツ何か他の事企んどる。これは近い内に何かしらのアクションを起こしてくるに違いないわ。昨日よりももっと絶好のチャンスと見極めたその日に、ウチの隙を見て必ず何かエロい事を……！

「……って、それが昨日の今日かい！！」

やっぱりコイツ何考えてんのかウチにはさっぱりわからへん！ 何でえ！？ 明らかに昨日の方がチャンス満載やったやないか！？ 今日こんだけ強引な行動出来るなら何で昨日しなかったんや！？ もう訳わからん！ なあ薫、ウチをどないするつもりや？ ウチをどこに連れて行くつもりや？ 乱暴なんは嫌や、お願いやからもっ

と優しくして……！

「……って待てやオイコラ、どういつつもりや、どこやねんなここは？」

「えっ、決まってるじゃーん！　ここが『ええとこ』なんだぜ！？」

「ハア！？　どう見てもこんな『ええとこ』とちやうやる！？　一体何のつもりや、オマエは一体何を考えとんねんなコラボケエ！」

……って、怖さ半期待半分でなすがまま連れてこられたここはどこじゃボケエ！　何やこの人通り無い裏路地にポツンと建つとるボロい雑居ビルは？　その一階にある外見では何売ってんのか全然わからんメチャクチャ怪しい変な店舗、これが『ええとこ』かいな！？　オイコラ薫、説明せい！　ここは一体全体何屋やねん！？

「そんなの入り口の扉に書いてあるじゃーん？　ほらここ見て見て、『貴方の欲しい物が必ず見つかる夢のお店、なんでも屋』ってね」

「……あのなあ、なんでも屋ってそない曖昧な怪しい名前の店……、そんでもってオマエはウチをここに連れて来て何をさせるつもりやねん！？」

「ズバリ、ショッピングの付き添いでーす！　薫ちゃん、どうしてもこの店で購入しなきゃいけない大事な物があるんだよね、買う物は決まってるから別に自分一人で買い物に来て良かったんだけど、

せつかくだから翼と一緒にアドバイス貰いながら色々との品定めするもアリかな？ って思ってたね、いつかは翼にも関わりのある事になる可能性大だし」

「……ちよつと待て、聞き捨てならんぞ今の話、何やいつかはウチにも関わりのある事って？ 質問はそれだけとちゃうわ、こんな入り口の自動ドアのガラスがマジックミラーになつとる如何にも怪しげなこの店が扱つとる商品って一体何系のもんやねんな！？ しかもそついやオマエさつき、もっと自分の趣味とかをウチに知って貰いたいとか何とか言うとな？ 怪しい、考えれば考えるほど怪し過ぎるわこの展開！ まさかこの店、何か変なヤバくていかがわしいグッズとか売つとる十八歳未満立入禁止のエロエロショップとちゃうやろな！？ そうなんか、そうなんやろ！？ アカンアカンアカン、そんなんアカン！ ウチはオマエと違つてそない疚しいもんに全然興味無い……！」

「まあまあまあ、そない疚しいエロエロショップかどうかは入つてみればわかるがなあ？ いやいよ年貢の納め時でっせお嬢ちゃん、覚悟はええかあ？ 怖ない怖ない、おっちゃんに全部任せときや、ウツヒツヒツ……」

「せやからその笑福亭鶴光みたいなヤラしいおっさんの関西弁やめんか、どアホっ！ ホンマにさぶいば立つくらい気持ち悪いねんその喋り方！ つかオマエまたそうやって強引に腕引つ張るなや肩抜けるやろが！ 触るな近づくな大声出すぞ通報すんぞ男の人呼ぶぞコイツ変態や誰か助けてやあゝ……！」

「……ああ、なんてこつたいな、最悪や。まだ普通のカップルとして『ええとこ』連れて行かれるだけなら思春期特有の若気の至りとし

てちょっとマセた青春の一ページになるやろうけど、まさかこないイケないお店にまで足を踏み入れる事にまでなるなんてさすがにウチも予想すらしとらんかったわ。

それともアレかな、この変態工口工口男と付き合うだなんて決意をした時から、ウチは清純な幼げ美少女から破廉恥でいやらしい口リ口リ変態娘に成り下がる事を覚悟しとかんといかんかったのかなあ？ オトン、オカン、ごめんなさい。ヨゴレていくウチを許して下さい。もう後戻り出来へんや、ウチはもう薫の世界に色染められて身も心も悪い女に変わっていくんやあ……。

「……って、何じゃこりゃこりゃ何じゃこりゃ〜！？ 何やこの店、さらに訳わからん、こりゃ一体どういう事なんや！？」

薫に無理矢理引きずり込まれて外界と隔離された魅惑の世界に足を踏み入れると、そこには淫靡かつ卑猥なグッズが店中所狭しと……、無い！ そんなもん一つも無い！ 何やこれ？ 店内は普通に明るくてウチらの他にも客があるし、筆とか絵の具とか色鉛筆やらスケッチブックやら、見た感じたただの文房具屋？

に、しては絵描き用のツールの品揃えがエラく充実しとるような気がする。何なんコレ、一体ここは何屋やねん！？ そんでもって、この店で薫がウチにも品定めして欲しいらしい購入したいもんって一体何やねん！？ ウチ、ついに思考回路がショートして脳みそが沸騰してしまいそうやわ！

「うーん、まあ文房具屋つても正しい名称だと思うけど、もっと適切な言い方をするなら画材屋つてとこかな？ 翼の言う通り、ここは主に絵を描いている人達が様々なツールを求めて訪れてくるお

店で、プロの画家が御用達の専門的な画材や、なかなか国内では出回らないレアな商品もあったりと品揃えの豊富さは折り紙付きでね、知ってる人は知っている隠れた名店なんだよ」

……「画材屋、ねえ。『なんでも屋』の名前の由来は欲しい画材がなんでも揃うって事かいな？ 何や紛らわしいのぉ、そういう健全なお店なんやったらもつと何扱ってる店かわかるようなまともな店名つけんかい！ 外からは中が見えないようにマジックミラー加工されとるし、ウチはてつきりやらしいもんでも売ってる店かと思てドキドキヒヤヒヤしてもうたやないか！ 心配して損したわ、ホンマにボケがあー！！」

「店内のガラスを全部マジックミラーにしてるのは、さつきも言った通り結構有名なプロの画家も画材購入の為に店にお忍びで訪れたりするから、下手な騒ぎにならないようゆっくりと買い物をして貰いたい、っていう店主の気心によるものなんだよ、この店にプロの画家達が良く来る事はあちらこちらで周知されてるからね、良く店の外とかで待ち伏せをしてサインやアドバイスを無理に強請る芸術家のタマゴや学生なんかが多くて、昔は結構その手のトラブルが絶えなかったらしいんだ」

「はあ、なるほどなあー！ 随分と粹な計らいする店主さんなんやなあ、これぞホンマもののプロの商売人って感じやで！」

「さてさて、これで今回この薫ちゃんの行動に関する怪しい疑問心は解消して戴けましたかな、お姫様？」

「せやな、これでウチもその説明でこのお店がどんなもんなんかは



良う理解出来たわ、ただな、ウチにはまださっぱり理解出来へん事が一つあんな、そんなプロも訪れる画材屋なんかにおマエが何を求めて買い物なんぞしに来たんか、って事や」

「鉛筆ですよ鉛筆、いつも愛用してる絵筆の新しい物を買いに来たんでございますよ」

「鉛筆？ 鉛筆やと！？ その新しい鉛筆をウチに品定めさせるやとお！？ オマエやっぱり変なやらしい事考えてウチをここに連れてきたんやなあ！？ 何やおマエ、その鉛筆使ってウチの体に何するつもりや！？ 鉛筆なんぞオマエアカンぞ、そんなでチクチクされたら想像するだけで体中がむずがゆくて気持ち悪うてホンマにもう……、変態！ どスケベ！ 悪趣味！ キモい！ 半径5メートル以内に近づくな！ オマエ絶対オトンに言いつけたるからな、覚悟しとけやこのエロ男爵めがあ！！」

「ワオ！ 何てヒドい誤解と偏見なんでしょう、不実ですう  
微笑んだ私にいゝ 不思議顔おゝ (By工藤静香) この  
理性と道德心の塊とも言える桐原薫ちゃんが、そんな不健全でいか  
がわしい妄想なんてする訳がありませんことよ？ 失礼しちゃうわ  
ね、これだから最近の若い子は礼儀知らずで汚れてるのよ、あぁも  
うはしたない、いけませんわ、いけませんですわこんな乱れた世の  
中の性社会なんて！」

「普段から女の胸と尻しか目に入らんで、しかも頭の中がオールス  
ケベの変態男に誤解も偏見もあるかつちゅうねん！ しかも何やそ  
のオネエ言葉？ ただでさえこの地球上で呼吸して生きてるだけで  
も全国指名手配級のセクハラ対象やってのに、そない虫酸が走るよ  
うな喋り方されたらさらにキモさ倍増やがな！ 頼むからおマエ死  
んでくれ、特大元氣玉食らって細胞一つ残らず蒸発して消え去って

しまえや、このドスケベ変態発情魔人がっ！！」

「とか何とか言っちゃって、本当は翼もすっかりこんな変態チックな薫ちゃんワールドの虜になっちゃったんじゃないやございせんか？　もう薫のアレやソレやコレが無いと生きていけない、み・た・い・なっ？　ほらほら、この鉛筆なんてどうかな、コレで翼のまだ未発達なあゝんなとこやこゝんなとこをツンツン！」

「うゝあゝ、キモいゝ！！　オマエこれ完全にセクハラやぞ、その言葉も動作も目つきも思考もニヤニヤしとるキモい面も全てが全てセクハラや！　ホンマにオマエの頭の中はそんなアホな事しか考えてへんのかい！？　もう最悪や、ウチはやっぱりオマエなんかと付き合えへん！　交際破棄や、却下や！　今日でもう一生のお別れや！　二度と顔見せるな、ほなサイナラ！！」

「えっゝ！？　オーマイガー、そんなあ貫一さん、お願いよ、アキチを、アキチをどうか捨てないで！　アキチを一人にしないでおくんなましゝ！　後生じゃ、このワシの後生の頼みじゃゝ！！」

「誰が貫一やねん、このブサイクお宮！　ってかさつきからオマエ一体全体何キャラやねんな！？　触るなや、腕掴むなや、足にしがみつくなや！　見苦しいわこのどアホ！！　他の客が何事かと見とるやろ、恥ずかしいからさっさと離せやゴラア！！」

もう嫌や、もう限界や！　案の定やったわ、やっぱりコイツがウチと恋愛交際したいなんて言い出した理由はそんなエロい事をしたい相手が欲しかっただけやったんやな！？　何やアホくさ、薫にとつてウチはその程度の存在やったんか！？　頼めば何でも簡単にやらせてくれる、都合の良い軽々しい女やって思われてたんか！？　お

ちよくるのもええ加減にせいや、ウチの事何やと思てんねん、このバカ野郎っ！！

結局コイツ、ウチやのうて干夏でも小夜でも綾でも女やったら誰でも良かったんや。ただ偶然ウチが一番近くにいただけ、一番話がしやすくてひっかけやすいと思たからあんな事言い出しただけなんや！　ウチがオトンの事で不安いっぱい心細くなつとるところを狙うて、偽りの優しさと真心を見せてつけ込んでただけやったんや！あんまりや、ヒドすぎるわこんなん！　初めて出逢った時からコイツがどうしよもないアホでスケベで中身空っぽのダメ人間って事は重々承知しとったけど、それでもあの時、土砂降りの中を痛む義足引きずってウチの元まで駆けつけてきてくれた勇敢な姿を見て、その想いがホンマもんだと感じ取ったウチも少しずつ薫に惹かれてきとったのに、もう最悪やつ！！

「薫なんか大嫌いや！　もうウチ帰るっ！！」

「ヘイ、ガール！　ジャストモーメントプリーズ！？」

「……うわっ！」

頭にきたウチは店の扉の取っ手に手をかけ外へ出ようとした。せやけど、意外と扉が重くてウチの力と体重じゃなかなか開かんくてちよっとモタモタ。そないな事してる間に後ろから追いかけてきた薫に簡単に腕を掴まれると、さっきまでのふざけた様子とはまるで違う強い力でウチは無理矢理強引に後ろへと引っ張られてもうた。

とっさの事で反応出来ずあわや後頭部から落ちそうになったウチの体はどっち側にクルッと一回転したんか良くわからんまま斜めになつて、薫の腕に受け止められてタンゴの決めポーズみたいな形にな

ってもうた。倒れそうな女性を男性が腰に手を回して支えるあのポーズな。しかも空いた片手でウチの手を握り締めるオマケつきや。

「……本当、翼は素直じゃないなあ？ 今、家に帰っても誰もいないからあんな場所で一人ポツンと丸くなってたクセに、この後一体どこに行くつもりなんだい？ 普段は勝ち気で意地っ張りだけど、その本性は人一倍寂しがり屋で甘えん坊さん、そんな翼の居場所はここだけ、俺の腕の中しか無いっていうのにさ」

「……なっ、何のつもりやねんなこの真似は！？ オマエこれセクハラどころか完全に婦女暴行やぞ、犯罪やぞ！ 今すぐ離せや、でないと大声出すぞ、警察呼ぶぞコラッ！？」

「ええ、構いませんよ、全然構いません、それで少しでも翼の気が晴れるなら、俺は変態呼ばわりされようと逮捕されようと全然構わないね」

「……オマエッ……！ 離せやコラッ！ ホンマにええ加減にせえよ、ウチの事何やと思とんねん……！？」

ウチが必死になって要求を訴えようと再び上を見上げた時、オトンのような優しく済んだ眼差しと目があった。ウチがオトン以外の男性に心惹かれてしまった、あの伊豆の最終日に見せた薫の姿がそこにおった。学校でも、放課後でも、普段は誰にも見せない、ウチしか知らん薫の本気の表情。本気の眼差し。

「……あっ、アカン……！」

「可愛らしいなあ翼は、自分を柵に上げといて必死になって俺にばかりスケベだの不健全だの文句言っちゃってさ、本当は翼だって昨日から変に俺を意識して過剰な反応してるクセに、俺がそれに全然気づいていないとも思ってたかい？ 今日だってそうさ、ここに来るまでの間、妙にガチガチに身構えて落ち着きなくソワソワしちやってさ、今までの翼だったら逆に俺を振り回すくらい元気いっぱいのはずなのに、何かいたいけな弱い乙女ちゃんみたいになっちゃってるぜ？ そんなに意識しちゃってくれてるんだ、俺の事？」

「……見るな、その目でウチを見るな！ そのクソ真面目な表情やめろや、似合わへんねん！ ホンマにやめろや！」

「嫌だ嫌だと言っておきながら、本当はこのまま俺と深い関係になっちゃう事にドキドキしながら期待してたんじゃないのかい？ 今だって翼、足も体もブルブル震えて顔はおるか耳まで真っ赤じゃないか？ 俺だってバカな役回りばかりやってる訳じゃないよ、やる時はやるさ！ だって本気だもん、俺の翼に対する熱いこの想いはね」

「……オマエ、卑怯やぞそんなん、そない切羽詰まった時だけ全開マジモードになりよってからに……」

読者の皆様に申し上げます。実はウチ、アカンのです。この薫のマジモード、コレされるとウチ借りてきた猫みたいになってしまっんでありんす。それまで積もり積もった文句も何一つ言えんくなってしまうんでありんす。何か良くわからんけど、体からスッポリ力が抜けてしまっんですわ……。

いやだってな、いつもの薫の口元ヘラヘラのアホな表情やったら何

が無性に腹立たしくなるだけで済むんやけど、いざこうしてマジ顔されると元々白人系ハーフ特有の整った顔立ちがさらに引き立ってもうてな、悔しいんどメチャメチャ男前やねんコイツ！

ウチの好みの男性像ってのはご存知の通りオトンみたいな超美形なイケメン男やから、実のところ薫は肌が白く髪サラサラの美男子系で笑ってまうほどウチのどストライクなタイプやったんよ！結構長く一緒におったのに何でつい最近まで意識せえへんかったんやるか？これが灯台下暗しって言うんかなあ？　ってかホンマにウチ、今の状況ホンマにアカンねん！

「……翼、マジで可愛いよ……」

「……オ、オイ、ちょっと待てやオマエ、アカンぞ、こんなアカンぞ！　真顔で可愛いとか言うな！　いつまでウチの体をこない不自由な状態にさせとくつもりやねん！？　手え離せ！　起き上がらせろや！　普通に立たせろや！　コラッ、人の話聞いとんのかオマエは！？」

「……ねえ、このままキスしていい？」

「……ア、アホアホ、アホかアホアホアホかオマエは！？　いきなり何言い出しとんねんどアホっ！　してええ訳あるかいな、ウチらまだ付き合いだして一週間も経つとらんし、第一店内には他に客がおってみんなしてこっち見とるし、こないなところでキスなんぞされたらウチ、恥ずかしくて頭の血沸騰して気絶してまうやないかあ！　アカンアカンアカン、そんなん絶対アカン！！」

「……大丈夫だよ、恥ずかしくなんてないさ、みんなしてるんだから、これくらい……」

「うぐああゝ！ 顔が、顔が近いゝ！！ ホンマ堪忍や薰！！ ホンマ、ホンマにウチ力が抜けるうゝ！！」

ウチもうダメや、こうなってしまうと主導権は完全に薰の一方的展開やもん！ しかもコイツの目な、エロとスケベしか存在せん汚い心とは対照的に、少しブラウンがかった透き通った目えしててメツチャ綺麗やねん！ 反抗しようにも魔法かけられたみたいに意識吸い込まれてもうて力が全然入らへんのや！

どないしよどないしよゝ！ ウチこんなところで人が見てんのにキスなんぞされたら、気絶どころか汚い話やけどオシッコ漏らしてまうがなあ！ ってアレ？ ウチいきなり何アホな事言い出しとるんやろ？ 何や何や何や、もう訳わからん！ だってオトンとする家族の間のキスとちゃうもん、ホンマの恋愛上のファーストキスやもん！ ホンマにアカン、アカンってばゝ！！

「……翼、目を瞑って……」

「……嫌あ、嫌やあ薰、優しく、優しくして……」

「……プッ」

「……？」

「プハハハハッ！ ほらやっぱり！ 翼だってこういう事すつげえ期待してるんじゃない！ そんなウツトリ目を瞑っちゃったりしてさ、それなのに本当ヒドいよなあ、俺ばっか変態扱いしてさゝ！」

……えっ、ええっ？ 何コレ、どういう事や？ 薫のヤツ、急にニヤヤしてウチの体を起こして元に戻して……、あ、あれ？ あの、キ、キスは？ せえへんの？ 何で？ どうして？ あれ、何コレ？ 何やねん、どういう事？

「だって、こういったおマセな事は俺が新作さんよりカッコいい男に成長するまでお預け、って言いだしたのは翼だろ？ 俺も調子こいて変な事して新作さんや美香さんにバレたらお説教どころじゃ済まねえもん、こう見えてもこの薫ちゃん、約束はちゃんと最後まできっちり守る律儀な人間なんですぜ？ だから、こんなに人がいるお店の中でチュ〜しちゃうだなんて大暴挙、する訳ないじゃ〜ん！？」

「……オマ、オマオマ、オマエよくも……！！ 試したなあ、下手な芝居打って嘯いてウチがどんな反応するか試したなあ！？ 卑怯やぞ薫！ ウチの弱みを握ってこんな恥ずかしい真似までさせよってからに、やっぱりオマエとはもう絶交や！！ 女の気持ちを試す男なんぞ外道極まりないわ、死ねっ！ オマエなんぞ死んでしまえっ！ このバカツ〜！！！」

「いやいや、これで薫ちゃん確信しちゃったもんね、やっぱり俺と翼は絶交じゃなくて『絶好』さ！ ちゃんと翼も俺の事を正式な彼氏として認めてくれているんだね、俺の事を好きでいてくれるんだね！ その愛情、しっかりとこの胸に伝わってきたぜダーリン！ 意地っ張りないつもの翼も好きだけど、そうやって素になって照れまくっちゃう翼も好きだぜ！ 翼可愛いよ翼、超愛してるせベイベー……！！」



「やめてやめてやめて、頼むからホンマにもうやめてえ〜！　こんなところで可愛いとか大好きとか連呼するなや〜！　恥ずかしいやろ、照れるやろ、体中が熱く火照って溶けてしまっやろ〜！！　もうやめて、ホンマにもう許してや〜！？」

……間違いなくウチら、店内の他の客からアホなガキ同士のバカツプルって思われとるやろな。はいそうです、ウチら真正正銘バカツプルです。もう那奈や翔太の事をからかったり出来る権利なんぞこれっぽちもございません。メチャメチャ困つとるクセしてウチ、メチャメチャ喜んでたりしてはります。

だって楽しいんやもん。オトンと遊んだりしてドキドキすんのは一味違うて、何かメツチャ青春真っ只中って感じがたまらんく嬉しいんやもん！　ウチどうやら完全に薫に惚れてもってるみたいやわ。やっぱり恋愛ってサイコーやん！　ウチ、地球に生まれて良かった〜！！

多分アレやで、小夜はお子ちゃま過ぎてこんな感情はまだ芽生えてへんやろうし、千夏に至ってはまともな相手すらもおらんてもう半分恋愛思考腐つとるんとちゃうか？　可哀想になあ、ホンマご愁傷様でございますって感じや。オマエら恋せよ乙女や、命短しやでえ？　ウヒヤヒヤヒヤ！

「このお〜、可愛いぞお〜、翼！」

「も〜う、やめてや薫〜、そない可愛い可愛い言われたら、ウチ羽根生えてどっか飛んでってまうぞ〜？」

「そうだったんだね、やっぱり翼は俺のエンジェルだったんだね？　大丈夫さ、君がどこに飛んでいっても必ず俺が捕まえてやるぜハ

「――！」

「いや〜ん、そんな言われたらウチ困る〜！ 早よ捕まえてや薫、どこでもフワフワ行つてまう悪い子なウチを離さんといてや〜！？」

……いやいや、非常にお見苦しい場面を長々と大変失礼致しました。この自分らの醜い有り様を利用してウチが何を言いたいかっていうとな、恋愛って言う神様がウチら人類に与えてくれた最高の『脳内麻薬』ってのは、嬉しくて楽しくて有頂天でスーパーハイテンションになつてしまう向上効果がある反面、羽目を外し過ぎて暴走しまくり余計な事まで口走つてしまう悪い部分も併せ持つてたりするねんな。

しかもな、その暴走した恋愛対象の相手が調子乗りすぎて自分に対して一番癪に障る事をされたりすると、今までその効果で過剰熱くなつていた感情は途端に急速冷却されて強烈なストレスを感じ、同じ事を赤の他人にされるより何十倍も何百倍も頭にくるようになるみたいやねん。胸上げされて下に叩きつけられるイメージ、せやからダメージも倍増やで。つまり恋愛感情とは両刃の剣、これから皆様にお見せする場面はそんな一例です。

「俺、やつぱり翼を選んで大正解だったよ！ 千夏ちゃんや小夜ちゃんも目じゃねえぜ！ 今日この滅茶苦茶可愛い翼の姿、もつともつとたくさんの人に知って貰つて自慢したいぜえ！」

「アカンアカン！ そないみんなに知られたらこれまで積み重ねてきたウチの面子が丸つぶれになつてまう〜！ さつきからウチ、薫の言われるがままで何も抵抗出来へん〜、こうなったら今日からもうデレデレタイプの甘えん坊さんにキャラ変更して薫の事を骨抜

きにしたらうないなあ〜？」

「ワオ！ それイイネイネ、イ〜ネッ！ デレデレタイプ最高っスよ！ ツンツンしない翼、超カワユス！ ギガントカワユスッ！」

「……………何やと？」

「カワユスなあ、そんなデレデレ翼をギュッとして一日中プニプニしたいっスなあ、マジでそんな事になったらもう薫ちゃんリミッタ崩壊で気分はすっかりトウルツトウ〜！」

「……………」

「……………ってアレ？ 何その急に苦虫噛み潰したような嫌悪感タップリの興醒め顔？ どうしたのさ翼、もっと薫ちゃんにそのカワユスな激萌えスマイル見せてプリーズ！ トウルツトウ〜！」

「……………オマエ今、何つつた？」

「……………えっ？ いやあの、カワユスって、ギガントカワユスって言いましたけど、ほら、ねっ、あのほら、知ってるでしょこの言葉？ それが何か？」

「……………何が『カワユス』やねんなコラ」

「痛っ！？ ちょ、ちょっと痛いってば、何でいきなり足のスネ蹴っ飛ばしてくるの！？ 何なの何なの、何がどうして薫ちゃん全然理解が出来っ、痛っ！〜！」

「何やねんカワユスやらギガントやら、全然理解出来へんのはこっちの方や、ナメとんのかオマエはゴラア！」

「痛い痛い痛い！ 痛いって痛いってば！ 何で！？ 翼怖えよ！？ そんな思い切り蹴っ飛ばさなくてもいいじゃん！？ 俺、何かした！？ 何か悪い事言った！？ さっきまで翼だって超ノリノリでデレデレ、って痛っ！！！」

「さっきまでみたいに普通に可愛いだの好きだの言うてりやええものを、何やねんいきなりトウルツトウ〜！ ってオイコラ！ そんなウちにシバかれないんかオマエは？ その義足二度と修理出来へんようになるまでボコボコに蹴り飛ばしたるかコラボケカスクズタコこのどアホ」

「痛い痛い痛い痛いマジヤバいつてその蹴り方は非常に危険がデンジャラスで義足どころか薰ちゃん両足複雑骨折しちゃうから本当マジで勘弁して下さいシバかれないです許して下さい何が悪かったのか良くわかんないけどこの通りですお願いします」

「何が悪かったのか自分の心に聞いてみるや、このキモオタ豚野郎があー！！！」

「いったああああああいー！！！」

……遺憾や、非常に遺憾やわ。嫌いやねんウチ、アイツ嫌いやねん！ ムチャクチャ気分悪っ！ 何がギガントカワユスやねん、しょうもないヘンチクリンな言葉真似して使いよってからに、ちっとも嬉しくもないしオモロくもないわ！

何やるな、『百年の恋も冷める』っちゅうんはこんな感じかいな？

さっきまであんだけ火照ってたからその分反動がハンパないわ。裏切られたって感じ、軽く殺意すら覚えたでホンマに。何考えてねん薫も、あんなオタク系アイドルの一体どこがええねん！？」

今回の薫の行動、こういうのな、『墓穴を掘る』って言うねん。読者の皆さんも氣いつけた方がええで、特に男子。何かオモロい事言うて女子の氣を惹こうとするんはええけどな、必死過ぎて空回りの拳げ句に選択肢間違うて逆に相手の怒り買うなんて事、男と女の会話のやり取りの中ではようある話やで。みんな、薫みたいなアホな男になったらアカンぞ？ 恋は焦らず急がずや、ウチもこれ教訓にして十分氣いつけんとアカンな。

「そついや薫、確かオマエこの店で買い物せんとアカンもんがあるんやったよな？ ほならいつまでもモタモタしてへんで買うもん早よ買ってこいや！ もうお遊びは終わりやぞ、ええか、五分以内で全部済ませてこい！ でないとホンマにオマエの両足、低空ドロップキック食らわせた後ドラゴンスクリーにかけてメに足四の字固めで粉々に粉碎したるから覚悟せえや、おんどりやあワレエ！！」

「あなた一体全体どこのグレート・ムタですか？ わかりました即行で買ってきますから毒霧吐かないで下さいフラッシュクエルボー落とさないで下さいシャイニングウイザード顔面に叩き込まないで下さい頼みますからお願いしますトホホ……」

「つたく、ホンマ腹立つわ、何が『ギガントカワユス』やねん、アホちゃうかホンマに」

「……失敗したあ、調子乗りすぎたあ、せつかく超良いムードだったのにまさか『アレ』が翼爆弾の起爆装置になるなんて、薫ちゃん

はい、いつもと元通り。会話の主導権奪回。やっぱりウチが運転席でハンドル握った方がウチらが乗るこのラブラブトレインの運行は上手くいくみたいやな。薫なんかは何もかも任せっきりにしといたら暴走してどこで脱線するかわかったもんやないでホンマに誰かデレデレキャラなんぞになるかいな、ウチはこれからもツンツン毒々コテコテキャラを貫き通すで！ ほれ、どんくさい変態車掌、さっさと買い物済ませろや！ 何やったっけ欲しいもん、鉛筆やっただけか？ ケツ、何が鉛筆やねん、そんなもん別にどこで買ったって一緒……。

「……ちよつと待てやオイ、つて事は何かい薰オマエ、まさか隠れて趣味で絵とか描いてたりするんかいな!？」

「そりやウチが言うネタやボケカスコラタコツ！！ オマエが先にそれ言うたらウチがこの後言うセリフが何も無くなつてまうやろが、この欲張り坊主があ！！！」

2029

湧き出てきましてなあ、人間とはいつまで経つてもなかなか無欲の境地には辿り着けないもんですわ、はい」

「そりゃオマエの日々の精進が足らんからじゃ未熟者が！　ところでちゃんと質問に答えんかい、オマエホンマに絵とか描いてるん？」

「絵え、まあ」

「誰がいちいちドンブリネタ重ねてこい言つたんや、このどアホ！　ええ加減にせんかい、もう絵えちゅうねん！　なんちゃって」

「なにそれこわい」

「えっ」

「絵っ」

「ホンマ埒が明かんがな！　もう絵えわもっ！」

「絵っ、なにそれこわい」

「えっ」

「絵っ」

「もうしつこいんじゃ、このボケエ！！」

あゝもう、いちいち疲れるわホンマに。よくよく思い返してみたらウチら、この店来てからあまりに無駄な会話ばかりで肝心の話が全

然進んどらんのとちやうか？ この調子やとまた本編後回しで次回に続くって事になってまうがな。作者の悪い癖や、文章力乏しいなあホンマに。

アカンでアカンで、このお話は今回でちゃんと終わらせなアカンのやで？ しかも話の肝はこれからなんやからな。せやから、ここからは余計な話抜きでどんどん進行していくやさかいに、第二部スタートや！ 読者の皆さんもここから頭切り替えて読んでや、よろしゅう！

「に、してもやで？ 薫と絵画って何か全然両極端な世界に住むもの同士って気がしてな、ウチにはにわかオマエの話が信じられへんねん、第一いつから絵なんか描いとんねん？ 何がきっかけやったんや？ それに絵と言っても色々な様々な分野があるやろ、一体オマエはいつもどんな絵を描いとんねんな？」

「質問順にお答え致します、俺が絵を描き始めたのは物心ついた五歳くらいの頃だったかな？ んで、きっかけは祖父ちゃんに勧められたからってのと、他にやる事が無かったからってとかな？ 当時はまだ義足に慣れてなくてあまり外で遊べなかつたしね、分野は主にスケッチ画を描いてまっせ、鉛筆と紙さえあればすぐに描ける手軽さが好きで、暇さえあれば描きたいものをいつも自由に描いてるよ、人物画とか、風景画とか、興味そそられたものをノートとかにチャッチャッチャッとね」

「うーん、五歳くらいの頃というと、ウチはまだ日本やのうてオトンやオカンと一緒にイタリアに住んどった時やなあ、薫も小さい頃は海外育ちやろ、その頃にはもう日本にいたんかいな？」

「いや、俺が日本に来たのは大体翼と同じ時期だから、まだ祖父ち



やんと一緒に海外にいたよ、幼い頃から感受性のある人間に育って貰いたいっていう祖父ちゃんのお教育方針でね、自分の目で見て感動を覚えたものはしっかり心に刻みなさい、って誕生日に鉛筆一式とスケッチブックをプレゼントしてくれたんだ、景色の良い場所に住んでたからね、あつという間にスケッチブックの中が絵でいっぱいになったよ」

「何や、頭も中身も軽々しい残念な孫に比べてエラくしつかりとした人物って感じなんやな、薫のお祖父さんって？ 感受性が、そんな孫想いの温かい愛情とは裏腹に、実際は余計な部分ばかりの感受性だけアホみたいに成長してもたんやなあ、お祖父さん報われへんわ、可哀想に」

「そうそうそう、感受性高める為にアッチコッチにアンテナ立てて電波受信したら、入ってくる情報がパツキンチャネーのナイスボディやエツちな姿ばかりでやたら性的情報だけ感受性ビンビンになっちゃったのです、本日もスケベアンテナ感度良好、薫ちゃんったら本当にイケない子」

「描写体探しとる目線がそのまま姉ちゃんチェックするスケベ目線になってしもたんかい、嫌やなあスケベアンテナって、一体何が受信されんねんな？ 正に人間ペイチャネルってところやな、エロと芸術は紙一重とは良う言ったもんやでホンマに」

「まあ、エツチスケッチワンタッチって言うくらいですから」

「やかましいわポケツ！ ネタが古い！ オッサンか！？」

「いやいやまあまあそんなこんなありまして今や薫ちゃんも健康な一男子として成長し、人物画は人物画でも裸婦画に非常に興味があ

りまくっております、現在常時専属モデルさん募集中です、そのボディスタイルに何の凹凸も無い貧相なお嬢さん、是非ともこの私の手で若き日の美しい裸体を永遠にキャンパスに残してみませんか？ 翼の身体はビックリするほど平面だから描写するのが物凄く簡単そうだしね」

「鉛筆の品定めにウチに関係あるっちゅうんはそういう意味やったんか、ってかペラペラのベニヤ板で悪かったなゴラァ！ そんなもん即座にお断りや！ そないまで裸婦画描きたいんやったらオマエん家の喫茶店でマスターやっとなるユリアに頼めや！ あんだけスタイルボツキコンボンやったらウチなんかより相当描き甲斐あるやろが！？」

「実際に以前頼んでみたら胸ぐら掴まれて鼻血出るまで数発往復ビシタされました、あの人怒らせるとマジで怖えのよ、怒ってるはずなのに全然感情外に出さねえの、無表情で沈黙したまま冷酷なマシンみたいになしなし、たまに口元薄ら笑い浮かべながら血祭り上げですよ、旧共産圏出身の女性は心身逞し過ぎてマジでパねえっス」

「当然の報いやアホ、確かユリアはポーランド出身やったよな？ ただでさえ今現在女として一番花盛りの年頃やってのに、それを犠牲にして祖国からわざわざ地球の反対側の遠い島国移り住んで頭の中お花畑のアホの子の後見人やられてやで、拳げ句そのクソガキから裸婦画描きたいんでおっぱい見せて下さい、なんぞ言われたらそりゃ軽く虐待行為もしたくなるやろ？ ぶつ切りにされてシチューにならんかっただけでも良かったと思えや、第一オマエのシチューなんぞ汚れた心から滲み出た灰汁がキツすぎて食えたもんやないやろっけどな」

「ポーランド料理のグヤーシユ美味しいよね、ユリアもたまにだけど作ってくれたりするよ、料理は絶品、家事も完璧、美しい容姿、スタイル抜群、あとは男なら誰彼食っちゃう魅惑のド淫乱痴女だったら何の文句も無い最高のメイドさんなんだけどね？」

「いつからユリアはオマエの性欲後見人メイドになったんやコラボケツ！ 色々と身の回りの面倒見てくれてる事に普段からもっと感謝せえよ、でないといつかホンマにユリアに殺されるか空から天罰が下るでオマエ？」

「いやでも、もし俺がユリアの裸婦画描いたらそれはもうハンパなくエロい作品になるだろうなあ、薫ちゃんのスケッチは基本完全無修正ですから美術の教科書に掲載したら間違いなく全国PTAからお怒りの言葉の雨霰っスよ、下手すりゃテニスボール並みの雹まで降ってくるかも、ウヒョー！」

「それより前にな、オマエには全国の健全男子学生を悶々させられるほどの描写力があるんか？ ちゅう話やけどな、三歳児が描くヌード画見て悶々出来る強者は重度の二次元オタクぐらいなもんやで？ なあ薫、ぶっちゃけオマエの絵心の実力ってのはどんなもんやねん？ 学校の美術の授業でもオマエの絵は一度も見た事ないし、とりあえず人前に出せるだけの才能ぐらいはあるんやろうな、天才画伯さん？」

「ええ、もちろん、何てったって薫ちゃん、ピカソ級ですから！ もう人の顔があんな事になって鼻がこんな方向いて目の位置がドツチラケになってまるで目隠しした福笑い状態」

「謝れ、オマエ今すぐピカソに謝れ！ あの左右非対称はピカソが描いたから芸術なんであって、オマエみたいな素人が描いたらただ

の落書きじゃボケエ！」

「何かもうね、俺が幼い頃に無意識で描いた街並みのスケッチなんてステッキ持った紳士の首が90度曲がってたり喫茶店でお茶を飲む貴婦人の顔が半分無かったりと、ちよつと観覧するには精神崩壊注意的なスーパージェルニカ状態になってたりしますからね、薫ちゃんったら一体どんな幼少期を過ごしてきたんでしょう？ 確かまだあのスケッチブック家に残ってたっけかな、良かったら薫も今度、奇妙奇天烈天外異次元薫ちゃんワールド体験してみる？」

「オマエは今すぐ絵描きなんぞ止めて病院に行って脳を移植してこいよ！」

あれだけウチに品定め手伝ってとか散々言うときながら、結局薫が選んだ鉛筆は前に使っていた物と同じ品だった。何やアホくさ、『翼には俺の秘密を知って欲しいんだ』なんて言い出しよるから一体何事かと思えばそないしようもない一般的な個人趣味かいな。軽いなあ、軽すぎるわ。何の緊迫感もあらへんがな。

薫が誰にも話してへん秘密っていうからや、ウチはてつきりオトンと薫の謎の親密な関係の真相とか、この前病室で遭遇した那奈ん家の虎太郎オトンとの意味不明な会話のやり取りの内容とかが解明出来るんとちゃうかな、ってそっち側の期待もしとったんやけどなあ。何やかなあ、完全に肩透かしやったわ。この話の真相、いつかは薫やオトンの口からウチに話してくれる時は果たして来るんやろかなあ？ ウチからしつこく問い質すのも何か気が引けるし、オカンからもあまり首突っ込むなと釘打たれとるしなあ。意外と男の方が女より秘密にしたりする事が多かったりするんねんな。ホンマやらしい生き物やで、男って。

「おやおや、これはこれは若き天才学生画伯の桐原薫様、いらつしやいませお待ちしておりました、本日も当店を冷やかし半分で御来店して戴き誠にありがとうございますじゃ」

「イヤだなあおジジ、相変わらず憎まれ口がチクチクとキツいつスよ」

「カッカッカツ、わざわざ余計な憎まれ口を言うのがこのおジジの生き甲斐なもんでな、これも懲りずにここで買い物をしてくださるお客様を想うがあまりの愛情表現なんじゃよ」

「つまりそれは、客はつべこべ言つてねえでさっさと金置いてさっさと好きなもん持つてさっさと消え失せろ、っていう根っからの商売人魂の表れなんですな、わかります」

「うむ、そういう事じゃ、わかつたらさっさと金置いてさっさと好きなもん持つてさっさと消え失せろ、お客様」

「本当に失礼な店ですねこは、お客さんのリピーター数が多い理由が何となくわかる気がします、多分いつか口減らずなおジジに一発何かやり返してやるうっていう飽くなき復讐心によるものなんでしょうね」

「最高級の褒め言葉どうもありがとうございます、当店は皆々様のたゆまぬ愛情により細々とコツソリ経営させて戴いておりますじゃ、それがわかつたらさっさと品代払つてさっさと帰れ」

「……本当、イラッとするほど口が達者だよなあ、御歳八十歳とはとても思えない頭と舌の回転率だね、おジジは」

いちいち一言多いお喋りクソ野郎な薫と対等に渡りあつとる、会計カウンター越しの椅子にどっしり構える白髪小太りの穏和な顔した眼鏡の爺さん。どうやらこの人がこの『なんでも屋』の店主さんなんかな。

へえ八十歳かい、そりやたまげた。確かに見た目は足腰弱つてそう  
で年相応やけど、出てくる言葉はかなり生き生きとした小気味のえ  
えもんやな。何か痴呆症知らずのパワフル爺さんって感じで、ウチ  
も結構興味そそられるオモロそうなタイプやな。

「おやおや？ そちらの付き添いのお嬢さんが前々から話してたモ  
デル候補さんかい？ こりやまた小柄でまるでお人形さんみたいな  
可愛らしいお嬢さんじゃな、上手い事釣り上げよつたな、この色男  
め」

「オ、オイ薫！ オマエ他の人にまでウチのやらしい絵を描きたい  
だなんてアチコチ言いふらしてたんか！？ 恥ずかしいなあ、ええ  
加減せえよオマエ！ ウチの知らんところで勝手な事ばかり言いよ  
つてからにホンマ……！」

「違う！ 違う違うつて！ さっきの裸婦画つてのは冗談でさ、い  
つかちゃんと翼にモデルになって貰つて一枚絵を描きたいな、つて  
前から本気で思ってたんだよ！ 世界で一番美しくて大好きなもの  
を描いてみたい、つて欲求は絵画に関わる者誰もが一度は思う事じ  
ゃん？ 変な疚しい気持ち無しで本気でそう思ってるんだよ、マジ  
でマジで」

「そない調子のええ事言うてな、ホンマは他の女にも同じようなセ

リフ言つてあっちこっちで声かけまくつとるんやろオマエ？ 怪しいなあ、オマエのデッサンのモデル務めた女、ウチで何人目や？ 正直言つてみるやコラッ！」

「そうそう、言われてみりやあ色男、このお嬢さんの前にこの店に連れてきた女の子は一体どうしたんじゃ？ もう早くもポイ捨てしちゃったんか？ それとも最初からこっちが本命であつちはお遊びじゃったんかいな？」

「オイコラ薫！ 今のおジジの話聞き捨てならんぞ、どういう事や説明せい！」

「いきなり何とんでもない大嘘ついてんスカこのおジジは！？ 俺、一度もここに翼以外の女の子なんか連れてきた事無いじゃん！？ 勘弁して下さいよマジで、これでもし薫ちゃん、つばピーにフラれちゃったりしたらどうしてくれんのぉ！？ ほら見てコレ、額や手のひらに変な汗かいてきちゃったじゃん！ せっかくラブラブアツアツ地球温暖化の仲になれたのに余計な事して一気にツンドラ氷河期状態にするのやめてえゝ！？」

「カッカッカツ、いやいやスマンの、歳を取るところ、若くて仲の良い二人組を見るとついつい嫉妬して悪さをしたくなってしまうもんでな、安心なさいお嬢さん、今のはただのジジイの戯言じゃ、どうか聞き流してやっておくれよ」

「……うゝん、今のおジジの話は嘘としてもやで、コイツの性格からしてホンマにそないな話ありそうやから正直心底安心出来んわ、こりゃたまにウチも一人でここに来ておジジに浮気調査して貰った方がええかもしれへんかもなあ？」

「ほらあ！　ただでさえ普段から変態扱いされてるつてのに今回でついに俺、次は完全に犯罪予備軍扱いに格上げだよ！　ヒドいよあんまりだよこれ絶対にハメられてるよ、国策捜査だよ！　やってない、それでもボクはやってない！　謝罪！　ちゃんと前に来て謝罪！　でないと私は絶対に許さない！！」

「オマエはどこぞの大物政治家秘書かあるいは誤審冤罪元囚人やねんな！？　オマエなんぞ満員電車乗るつちゅう行為だけで十分痴漢確定や、何もせんでもすでにその存在そのものが公然わいせつ罪現行犯やつちゅうねん！　全裸にならんでも夜中の公園とかで大声出しとつたら即座に逮捕されるで、永遠に自宅謹慎して二度とシャバの空気に触れるなボケェ！」

「シンゴー、シンゴー！　地デジの準備、お早めに」

「もうええっちゅうねん！　もうそんなんでもええからさっさと買い物済ませろや！　またウチらの雑談だけで話の進行が停滞してしまうやろが、この無駄文字使わせストーリーリーストッパー！！」

「ですよね？　やっぱりそうですよ？　じゃあすいませんおジジ、今日は一箱二千円の鉛筆セットを二箱下さいませませ」

「いやいや、これだけ良いものを目の前で見せて貰って普通に金を戴くなどこのおジジの面目が立たん、今のお前さん達の小気味良い粋な夫婦漫才に免じてな、今日はこの鉛筆一箱普段は二千万円のところを半額の一千万円に値引きしてやろっぞ？」

「恩に着まゝす、じゃあ五千万円札でお釣り下さいな？」

「ほれ、イチ、ニ、サン、これで三千万円のお返しじゃ、毎度あり」



「何が三千万円やねんな、普通に野口英世三枚やないかい、しょくもなっ！ こりやまた負けじとコテコテなキャラ全開やなあ、このおジジも」

あゝあ、やっと買い物終了したわ。何かこの店に来てから本来の目的を果たすまでエラく時間がかかったような気がするわ。やっぱりアレやな、ウチと薫の二人だけで話進行していくと、必ずどこかで会話が脱線してさっきみたいなしょうもないやり取り漫才になってしまっうねんなあ……。

「……おかしいなあ、薫ちゃんつてば鉛筆買いに來ただけなのに、何でこんなに疲れてんだろう？ 何かもう喉がカラカラで頭もカラカラ財布もカラカラ、カラカラカラッ！ ト！」

「あんだだけ休みなく延々喋ったたら嫌でもしんどくて喉も渴くわボケッ！ ウチなんかツツコミ過ぎで声枯れたわ、ホンマ薫の相方務めるんは前後半90分フルタイムに延長戦込みでピッチを全力疾走したみたいに疲れるわ……」

薫のボケに対してウチがいちいちツツコミなんぞ入れたりするのが一番アカンのは自分でも良うわかってんねんけどな、綾との時と同様、ええ反応が返ってくるとウチも嬉しくなっつてついその気になっつてまっうんよ。ウチが薫に惹かれたもう一つの理由はそこにあるのかもしれないな。

この前ちょこつと話した通り、やっぱりウチの理想の会話うちゅうんは魂同士の共鳴なもんでな、相手からええ音鳴ってきたりすると

ウチも自然にええ音返しなくなってしまうねん。しゃあないねん、これ仕様やねん、そういう構造になっとんねん、ウチの体って。

「そもそも薫がいちいち会話の節々にいらん小ネタを挟んでくるのがアカンねん、それしよっぴくだけでウチらの一会話の言葉数はかなり削減出来るはずやで？ どうせいつも二言目には下ネタぐらいしか出てけへんやさかいにオマエは」

「あらやだ失礼しちゃう、わたくしそんなに下ネタ連発した記憶なんてありませんことよ？ 薫ちゃんいつかは翼をモデルに絵を描きたいと言ったけど、毎晩夜な夜な翼で『カイてる』なんて言った覚えは一言も」

「オマエホンマぶつ殺すぞゴラア！！」

「いやあゝん、つばピーったら超怖あゝい！ 何か超アンビリーバボーなんですけどおゝ？」

「オマエは千夏かつ！？」

……って、考えてみるとアレやな、もしかしてウチらって那奈みたいな冷静な暴走ストッパーがいてくれたりするから何とか収拾ついてたりするんかなあ？ 確かにアイツおらんとウチらどころか小夜に千夏に暴走しまくるいつものメンバーをまとめんのって絶対無理やもんなあ。

アイツはアイツで毎日苦労ねや、大変な役割務めてんねや、側にいて貰わな困る存在やったんやな。それなのに悪い事したわウチ、ホンマ明日ちゃんと謝ろつ。ウチらが毎日安心して羽目外せんのはオ

マエのお陰やで。これからよろしゅう、おおきになあ。」

「……ハクシユン！ あれやダ、もしかして風邪ひいたかな……？」

「あれー？ 那奈どうしたのー？ 風邪ひいちゃったのー？」

「……うーん、重責疲れかなあ？ でも、どっちかって言うと風邪より胃がちよっとキリキリして調子悪くてそっちの方がしんどいかなあ……」

「ねーねー翔ちゃーん、あたしさっぱりわかんないけど那奈が『風切り伊賀忍法きりきり舞い』が調子悪くてしんどいって言うてるよー？ いつから那奈は忍者になったのー？」

「さっぱりわかんねえのはこっちの方だよ！ 一体どこをどう聞いてたらそんな訳わかんねえ解釈になるんだよ、お前は？」

「えー？ あたし今、何かおかしな事言っただかなー？」

「……あーもう本当にヤダ、本当に胃が痛くなる……」

さてさて、もう買い物は済んだけどまだまだオカンの仕事が終わる頃には時間があるし、今から家帰ってもどうせ岬と一緒にしようもない夕方のアニメ番組見せられるだけやろうしな、せっかくやから暇潰しに店内にある珍しい品々を薫に説明して貰いながら色々と手に取って見てみようかなあ？

絵心ゼロのウチが画材屋なんぞマイナーな場所に来る機会はそうそう滅多にあらへんやろうし、別に絵を始めてみたい訳でもないけどな、ちょっとした興味本位での探索みたいなもんや。デート代わりに、自分の得意分野の場所でデートするなんて男からしたら最高に嬉しいやろうしな。どや、ウチって結構気が利く可愛い女やろ？

「しかしアレやな、こういう店の客はベレー帽被ったいかにも画家みたいなオッサンばかりがたくさんおると思ってたら、以外にウチらと同じ年くらいの若い女の子なんかもおんねんな、何でえ？」

「アレですよアレ、あの子達って大体マンガ家の卵とか同人誌描いてる子達なんだよね、この店はスクリーントーンとかも扱ってたりするからさ」

「ああなるほどな、確かに何となく見た感じ、あの子から『腐』の匂いが漂ってくる気がしなくもないわ、あんなすました顔してスツゴいボーイズラブとか描いちゃうかな、最近の日本のオタク文化は常軌奇してるでホンマに」

「……実はさあ、随分前にこの店で知り合った真性腐女子の現役美大生の『ランさん』って人に、俺のこの変態ヘタレキャラがエラく気に入られちゃったみたいでさ、彼女が描いてるシリーズものの同人誌でいつもオジサマ方にイタズラされる主人公のモデルにされちゃってるみたいなんだよね、マジで……」

「……うわあ、言われてみりや確かにオマエ、アツチ側の人間のイメージも無きにしも非ずやな……」

「しかもさ、この前会った時に至っては『今度はバンカラ番長ゴリラ柔道部長と直腸破裂するまでオッスオッスオラオラする回描いてやるから、奥歯ガタガタ震わせながら四つん這いになって楽しみに待っていやがれですー！』って言われて、薫ちゃんかなり精神的ダメージ受けてたりするんですけどお……」

「……柔道ゴリラってオイオイ、とても他人事には思えへん話やなコレ？ 氣いつけるやオマエ、これで将来婚約目前に『I was gay』なんてカミングアウトされたらウチ、その場でクビ吊つて道連れに呪い殺したるぞホンマに？」

何やかなあ、世の中にはまだまだその素性が解明されてへん未確認生物が仰山おったりすんねんな、怖いわあ。そない恐ろしい腐女子と仲良くしとる連中って一体どんな人間なんやろか？ いっぺん面拜んでみたいもんやで、怖いもん見たさでな。

「……クシユン！ Oh, shit！ ヤダア、アタシまで風邪？ これって翼の呪いなのかしらあ？ いやあゝん、怖あゝい！」

「あれー？ 今度は千夏が忍法きりきり舞いの番なのー？ いいないいなー、みんなして忍者になれていいいなー！ あたしも那奈や千

夏と一緒に風邪ひいてくしゃみして忍法使いたいよー！」

「アンタとナントカは絶対風邪ひかないから大丈夫、私は本当に羨ましいよ、アンタのそのストレス知らずの頭の中が」

「ワイワイ！ あたし那奈に褒められちゃったー！ イエーイ やったねピースピース！ 航クンもピースピース！ イエーイ！」

「……………イエーイ」

「…………ハア、もう胃潰瘍になりそう…………」

うーん、油断出来ん。何気に薫、様々な分野で結構人気あるみたいやな。ルックスだけやったらええ男やもんな、それも当然か。オツスオツスなアツチの世界は無いとしてもやで、ただでさえ本人、女やったら来るもの拒まずの何でも雑食家っぽいからウチちよつと心配やわあ。

こりゃホンマにこの店でのコイツの行動をおジジにチェックして貰う必要性アリやな。それともなきや薫がここに足運ぶ際に後を尾行したるか。いや待てや、ウチ彼女なんやから毎回一緒に来たらええだけか？ いやいやわからんぞ、ウチに内緒で一人でコッソリ来たりする可能性もあるで？ 何や彼氏が出来るってメチャクチャ忙しいもんなんやなあ、あゝ忙しい忙しい、怪しい怪しい……。

「…………ん？」

その時や、探偵みたいに顎に手を当てあれこれ薫の浮気防止方法を考慮しとるウチの目線に突然しゃしゃり込んできた、立派な額に入られ店内の壁に飾られた大きな一枚の美しい風景水彩画。その絵の上手さに目を奪われたつてもあるんやけど、ウチは完全にその水彩画の前で体が固まって一步も動けなくなってしまうた。

「……………あつ……………！」

「へっ？ 何さ急に、どうしたの翼？」

「……………この絵、この絵、ウチ、この絵……………！」

「この絵？ ああ、この絵ね、実は俺の昔からの知り合いでこの店に良く来るプロの画家さんがこの店に譲渡した水彩画作品でね、残念ながらコレは売り物じゃないんだよね、お店のインテリアとしておジジが飾ってるもんなんだよ、売ってくれって言い出してくるお客さんも結構良くいるらしいけどさ」

「……………この絵、そうや、間違いない、この絵……………！」

「すげえ上手いだろ？ だってこの画家さんマジで海外でも個展とか開いてる一流プロだもん、『高木耕秋』って画家さんなんだけど、俺にも良くデッサンのレッスンつけたりしてくれた事もあるんだぜ！ どうよダーリン、こう見えても薫ちゃんだって一流プロから一目置かれるくらいの才能ぐらい持ってたたりするんだぜえ！」

「……………これや、やっと思い出した、そうやこれ、絶対そうや！」

「でも、この絵がそんなに気になっちゃうだなんて翼も随分とお目が高いねえ？ いやぁ良い仕事してますねえ、かなりの美術センスですよお客様、もしお買い上げと申されるのでしたらざっとゼロの数が五桁六桁……、っていうか、さっきから全然俺の話耳に入っていないっすよね？ 何よ何なの何なのよ、マジで一体どうしたんだよ、翼？」

「……見た事ある、ウチこの絵、見た事ある！ いいや正式には絵とちゃう、この絵に描かれとるこの景色！ ウチこの景色、小さい頃にオトンと一緒に見た事ある！！」

「……えっ？」

「そうや、そうやそうやそうや！ この景色、この風景、この角度この目線この色彩！ 綺麗で真っ白な建物がたくさん建ち並ぶ緩やかな丘の上のレンガ道から覗く、底まで真っ青に透き通ってそんなメチャクチャ綺麗な海一面！ これウチが日本に来る前に見た数少ない海外での記憶、ウチとオトンが共通して持つとる思い出の景色や！」

「……地中海や……」

「……地中、海？」

「せや！ 絶対間違いない、この絵に描かれとる景色は間違いない地中海や！ ウチがイタリアいた時にオトンと手を繋いで一緒に見た青と白の記憶、思い出したわ、これ絶対に地中海やわ！！」



「……イタリア？ えっ……？ ねえ翼、これって本当にイタリアで見た景色？ 本当に？」

「えっ、何で？ 何で薫がそない疑問に思うねん？」

「……いや、ちょっと、何となく、ね……」

「絶対間違いないわ、これは絶対イタリアの地中海や！ ウチがオトンと一緒に見た、あの景色と同じもんや！！」

「……ほお、お嬢さん御名答じゃな、確かにこの風景画で描かれている海は地中海じゃよ」

「あつ、おジジ！ せやろ、これ地中海やろ！？ やっぱりそうやったんや、小さい頃の記憶が曖昧で今までいまいちはずきり思い出せんかったんやけど、やっぱりあの景色は地中海やったんや！ そうやこれや、ウチやつと思ひ出す事が出来たでえ！！」

ウチには夢があんねん。それは前からずっと言うてるサッカー日本代表で大活躍するってのは別に、いつかもう一度、もう一度あの思い出の場所でオトンと一緒に手を繋いであの景色が見たいねん！ オトンが元気なうちに、生きていてくれるうちに、もう一度イタリアに行ってあの地中海の景色が見たいねん！！

「……ウチかてな、いつかは大好きなオトンとお別れせなアカン時が来る事ぐらいはもう覚悟出来てんねん、しゃあないもん、人は誰でもいつかは必ずお別れの時が来るもん、どんなに足掻いても、嫌がっても、絶対に誰もが避けて通る事出来へん当然の運命やから……」

……」

「……翼……」

「でもな、ウチはどうしてもオトンとの最後の思い出として、最初の思い出でもあるこの地中海の景色と一緒に見たいんや！　せやからウチは、どうしてもヨーロッパで開催される国際大会のサッカー日本代表になりたかった、なでしこでもユースでも何でもええから出来るだけ早く代表招集されるレベルの選手になりとうて今の今まで必死になつて練習してきたんよ……」

そして代表に選出された暁には、オトンを大会の現地まで招待してあげんねん！　そしたら、ウチはオトンに自分の晴れ姿を見せてあげられると同時に、あの地中海の景色と一緒に見る機会も作れるやんか？　行きでも帰りでもええ、現地まで行ければそない時間いつだって作れるはずや！

奇しくもウチが今回代表招集された大会の目指す先には、女子フラインスU - 20ワールドカップと女子ドイツワールドカップがある！　さすがに男子A代表のワールドカップは無謀な夢かもしれんけど、女子やったらウチはどんなゴツくてデカイ外国の選手と当たったって全然負ける気せえへん！　だってウチは翼やもん、天才の名を惜しいままにした日本最高のファンタジスタ・松本新作の娘、松本翼なんやもん！！

「……それにな、覚悟決めたと言つときながらホンマ見苦しいかもしれんけどな、ウチの活躍する姿を見てくれたら、あの美しい地中海の景色を見てくれたら、オトンももう少しだけ頑張ってくれて、もう少しだけ一緒におれる時間が長引いてくれるんとちゃうかな、

って子供みたいな事を夢見とったりしてな……」

「……………」

「アホやるウチ？ 何の医学的根拠も無い奇跡みたいな夢物語に必死になつてな、ここまでするとウチのファザコン加減もホンマ病気やな、ホンマこないな事じゃアカンと自分でもわかってんねんけどなあ……………」

「…………そんな事はないよ、新作さんだつてそれだけ翼に想つて貰えたら、きつとこれまでみたいにまた元気になつて退院出来るよ、そして、翼がワールドカップの舞台で大活躍する姿を楽しみにして待つてくれるはずだよ？ うん、そうだよ、絶対にそうだ」

「お嬢ちゃんや、その純粋な願いはお父さんだけではなく、必ず天の神様にまで届いておるよ、地中海、また一緒に行けると良いな、頑張れよ」

「…………薰、おジジ、ホンマありがとう、ホンマおおきにな……………」

忘れかかつとつた大切な記憶、失いかけてた希望と自信、ウチこの店に来たお陰で何か全部取り戻せた気がするわ。一時的は何されるかわからんてメチャクチャ不安やったけど、一緒についてきてホンマに良かったわ。薰、おおきにな。またちよつとだけ好きになつたで、薰の事！

「しかしアレやで薰、もしまだ自分の目であの地中海の美しさを見た事が無いんやったらな、死ぬ前に一度は絶対見た方がええで？」

人生観変わるでホンマに、これ絶対ウチのオススメやで！」

.....

「薰？」

「……地中海、か……」

「…… doesn't it? 何かさっきから様子おかしいで? まあオマエの拳動がおかしいんは今に始まった事とちゃうけどな?」

「……うん、まあ、何でもないよ、いつもの拳動不審っスよ、うん……」

「……ん？ ケータイ鳴つとる、おっ、オカンからや！」

「どうやらオカン、一仕事終えて一度家帰った後、岬連れてこっこの病院の方に向かってきとるみたいやねん。オトンも目を覚まして体調安定しとるって病院からの連絡もあつたそうやわ。良かった、とりあえず一安心や。ほならウチも合流してみんなと一緒にオトンに会いに行くで！」

何てつたつて今日はオトンが一番欲しがつた最高のプレゼントを用意する事が出来たもんな！　ウチが代表招集されたつて知ったらオトン、一体どんな顔して驚くやろか？　あんまり心臓にシヨツク与えん方がええのかな？　でも言いたい、絶対言いたい！　そんでオトンにいつぱい頭なでなでされて褒めて貰うんや！　エへ、エへへ、エへへへへへへへ！

「もしもし美香さ〜ん？ 薫ちゃんです〜！ ええ、是非とも一緒に面会行かさせて戴きます〜！ 翼の事はこの薫ちゃんが責任持ってお連れ致しますのでご心配無く〜！」

「ってオイコラ待てやオマエ何勝手にウチがデレデレしとる間にケ―タイ取り上げてオカンと訳わからん約束結んどんねんなゴラァ！ 誰がオマエまで一緒に来て良いなんて許可出したんや、買い物済んだんやからさっさと家帰って部屋に籠もってお絵描き力キカキしてろやボケエ！」

「みータン元氣〜？ 薫お義兄さんだよ〜！ えっ、お義兄さんはヤダ？ 薫ちゃんはみータンのオモチャなの？ いやはやこれまた困っちゃったな薫ちゃん、すっかりみータンまで俺の虜になっちゃったみたいでどうしようコレ？」

「オマエ岬にまで手え出したらホンマにタダじゃ済まさんぞゴラァ！ そない一緒にいてきたいんやったらな、ウチの大好きな地中海の特産品何か一つ答えてみいや、正解したら考えてやってもええぞ？」

「ズバリ、鰹！」

「……ブハッ！ オマエやめろや！ せっかくカツオ忘れとったのに思い出させるなやあ〜！ また変な笑いぶり返してくるやろ、まだ腹筋痛いねん！ 頼むからもうこれ以上ウチを笑わせるなや、このどアホッ！」

「カツオ！ ご期待下さい！ いやつぶありいフグタくん、カツオのすべらない話ご期待下さいなんだぬああ〜！」

「ギヤハハハッ！ それカツオちゃう、マグロやるがボケエ！  
そんでもって何でそこで毎度毎度アナゴさんが出てくんねん！？  
ってかもうそれアナゴさん全然関係ない、普通に中の人の物真似し  
とるだけやないか、どアホッ！ ホンマ堪忍やで薰、腹痛い、腹痛  
い、腹筋吊ってまうがなギヤハハハッ！！」

あゝあ、何か今日は笑たり怒ったりへコんだりドキドキしたりとハ  
ンパなく忙しい日やわなあ？ ホンマ退屈せんわ。こんな楽しいア  
ホなオモチャ、いや彼氏、岬や他の女に取られてたまるかつちゅう  
ねん！

先にウチに惚れたんはオマエやからな、ウチやのうてオマエがアカ  
ンのやで？ 覚悟せえよ、これからもガッツリ首輪かけてギューギ  
ューに束縛したるやさかいにな、ええな、ウチの可愛いペットの薰  
ちゃん？

### 第73話　くるみ

「うううううう、痛たたたた」

頭の上で両手を組み、思いつ切り背伸びをすると肩や背中 of 辺りで骨がパキパキと音を立てる。ついでに首を回すとこっちでもパキパキ。湯船に浸かったくらいじゃ全然取れないこの疲労。この前高校生になったと思いきや、気分はすっかり日々の仕事に追われ体をすり減らすサラリーマンの気分だ。

正直疲れた。今週の忙しさは異常過ぎる。父さんの代理として翔太の全日本戦に連れ出され奥井家と一悶着したと思えば、次の日には母さんの緊急帰国で家は滅茶苦茶、学校では小夜と航の軽音楽入部の急展開に久々の翼との大喧嘩。

これこそ正に盆と正月が一緒に来たってヤツかな。ゴールデンウィークからまるで半年ぐらい経ったみたいな感じだ。学校に行けばお子ちゃまなおバカさん達の子守に追われ、家に帰ればお子ちゃまな御両親様の痴話喧嘩のなだめ役。休んでいる暇なんかどこにもありやしない。

「……………ここに来ると、やっと落ち着いた気分になれるなあ……………」

夕飯とお風呂を済ませ、パジャマに着替えて自分の部屋のベッドに転がった土曜日の夜十時。相変わらず父さんは週末になるとお酒を

浴びに繁華街へと繰り出し、母さんもどうやら千春さんと夜遊びに行ったご様子。

お姉に至っては昨日から家に帰ってこないし、一階にいるのはいづみさんだけ。信じられないほどとても静かな夜。ああ、何かホッとするなあ。本当久し振りの安泰の時だ。

……コンコン……

「……ん？」

ベッドに横になりながら、上げた片足で真横の壁を軽く叩いてみた。隣から聞こえてくる意表を突かれたようなマヌケな返事。翔太だ。

「……もう、起きてる？」

「……うん、ついあまり寝れてない……」

「明日のプレッシャーで？」

「……うん、まあ、そんなところかな……」

翔太は先週の全日本開幕戦が突然のゲリラ豪雨で延期となった為、事実上明日が公式デビュー戦となる。しかも今回は父さんが現場復帰するどころか、母さんまでもが現地視察で二大巨頭揃い踏み。そのプレッシャーたるや相当のものだろう。下手すりゃレース開始前



に頭がクラッシュしてしまいかねないかもしれない。

「……とりあえずさ、事故らないで無事に完走する事だけ考えて走ったらどう？ 色々考え込んだってさ、どうせアンタの頭じゃどうにかなる訳じゃないんだし」

「……それは励ましなのか？ 気楽に言ってくれるなよ、明日の結果次第じゃ俺、無事に家に帰ってこれるかどうかわからねえのによ……」

家が静かだから、壁越しでも翔太の声が良く聞こえる。開催するサーキット場が地方なので、翔太はこの後橋本さん達チームクルーと合流して深夜に現地移動する予定。だから今日は昼からずっと睡眠を取っていたはずなのだが、どうやらこの様子だとまともに寝てないみたい。

「……ところで、父さんはどうすんの？ 一緒に連れて行かなくて大丈夫なの？」

「……あの人、いつも現地集合、レース直前になって目え真っ赤にしてノコノコやってくるから心配ないよ……」

「……あの人、何様？」

「ああ、また酒臭いんだろうなあ、嫌だなあ、俺絶対レース前に色々絡まれるよ、トホホ……」

これから出発する翔太には悪いけど、横になりながら話してるから何か眠くなってきたやつだなあ。でも、せめて見送ってあげないとあんまりだよな。命懸けの戦いに出向くんだもの、それくらいしいと彼女失格だよな。ああ、でも眠いなあ。体がどんどんベッドに沈んでいった良い気持ち……。

「……でもさ、親父さんと麗奈さんが二人揃って観戦してくれる機会ってそうそう無いし、これは俺の成長した姿をアピール出来る最高のチャンスだとも思ってるんだ、麗奈さんからあんなにハッパかけられてビビってばかりじゃ、俺の男が廃るしさ」

「……うん……」

「……明日は必ず良い結果を出して、三年後には絶対に世界の舞台に立つ、そして、父さんと俺の夢を叶えるんだ！ その為にはいきなり開幕戦でだらしない結果を残す訳にはいかない！ 見てろよ那奈、明日は最高の報告を持って帰ってくるから！」

「……ん……」

「……で、でさ、もし晴れてプロ契約を結ぶ事が出来たらさ、その時は那奈、その、俺と、俺と……！」

「……ぐー……」

「……お前、絶対寝てんだろ！？」

……どうやら完全にオチてしまったようです。いづみさん曰わく、翔太の出発の時間になっても私は爆睡中だったそうで、何度体を揺さぶられようと蹴りを食らおうとちっとも起きる気配が無かったとか。

その時の翔太の様子と言えば、脱臼したみたいにガックシと肩を落とし涙目になって玄關を出て行ったらしく、『アンタは嫁失格!』とこっぴどく怒られてしまいました。いづみさん怖いよー、この人絶対将来鬼姑になるんだろうなあ。ああ、嫌だ嫌だ……。

……とはいえ、かく言う私も休日だからといって昼頃までぐっすりと寝れてた訳ではない。最近の多忙ですっかり忘れてしまっていたのだ、あの約束を。半ば強引に結ばされる羽目になった、あの悪魔の女とのバスルームでの地獄の契約を……。

「起きろおおおおおおお!!!」

「ひえっ!!」

突然ベッドが一回転したと思うと、何の受け身も取れない状態で部屋の床に真っ逆さま。思いつ切り頭を強打し何が何だかわからないまま寝ぼけた頭で辺りを見渡すと、部屋の中にはベッドをひっくり返した張本人が私の目の前で腕を組んで仁王立ち。

「……えっ? 何今の? 地震!？」

「地震!? じゃねーよ、寝ぼけてんじゃねーぞてめーはよ!?!? いつまで寝てんだ、さっさと起きて出発の準備をしやがれバカ野郎

が！！」

「…………お、お姉！？」

強くて優しい愛しのお姉様、二日振りのご帰宅。つーか何なのよいきなり！？ 人が疲れて寝てたのにこの大暴挙はどういう事！？ 第一、今何時よ！？ 朝七時！？ 勘弁してよ、一体全体何なのよこの騒ぎは！？

「おめー、今日はあたしの試合を観戦しに会場に向かうってこの前言っただろうが！？ まさかてめー、忘れてた訳じゃねーだろうなあ！？」

「…………ああ、そうだった、小夜とか翼とかSuper Novaとか色々あつて、すっかり忘れてた…………」

「てめーはこの優歌様との約束を破るつもりなのかゴラァ！！ いつからおめーはそんな冷てー妹になっちまったんだよオイ、お姉ちゃんには悲しくて涙がちょちょ切れちまうぜコンチクショーウ！！」

何この早朝からのスーパーハイテンション。服装もタンクトップにスパッツですでに完全戦闘モードだし、まさかお姉様、変なクスリとかまで手を出したりしてないでしょうね？ 嫌ですよ私、学校で『那奈ピー』とか言われて馬鹿にされるの？

「心配すんな、あたしからすりゃノ○ピーもオシ○も可愛いもんだ

ぜ、やっぱりクスリは吸う飲むより直接血管に針でぶち込むのが一番ラリラリ」

「コラーー!!」

「冗談だよ冗談、それよりさっさと身支度しな、今日はわざわざ會長が車出して迎えにきてくれてるんだ、あまり迷惑かけんじゃねーよ」

お姉の言葉に驚き、眠い目をこすりながら窓の外を見ると、家の前にはボディのあちこちが錆びた汚い白い1BOX車が一台、エンジンをかけたまま停車していた。いかにも怪しいその佇まい、これ何て言う殺人現場で目的されがちな不審な車両？

「……お姉やジムの人は色々準備しなきゃいけないからわかるけど、何でこんな早い時間に私まで？ 試合開始何時よ？ 夕方でしょ？ それまでに会場に行けば良いんじゃないの？」

「ナメた事言ってんじゃねーぞ、このウストラトンカチ野郎!! 言っただろうが？ おめーは今日、あたしの臨時セコンドスタッフとして一番の特等席で試合を見せてやるってな！」

「……だ、だから、試合の時間になったらスタッフルームに顔を出せばそれで……」

「そんな事だからてめーはいつまで経っても翔太一人も誘惑出来ねえ小便臭えお子ちゃま処女なんだよ、クソ野郎!!」

「それって高一の女子で悪い事ですか！？ 中学生の分際で悪い交際でスケベなオジサン達から金巻き上げてたお姉と一緒にしないでよ！ 第一、ソレとコレと一体何の関係があんのよ！？」

刃向かう私を諭すように、お姉は私のおでこに加減無く痛烈なデコピンを一発見舞うと、自分の滅茶苦茶な社会理論を堂々と語り始めた。

「いいか、人間が社会で生きていく上で労働つてのは決して避けて通れない国民最大の義務なんだよ、恩恵を得たいのなら労働しろ、ギブアンドテイク、働かざる者食うべからず、あたしも何もオッサン達から貢いで貰ってた訳じゃねえ、それなりに一生懸命上になつてエッチラオツチラ腰動かして得た金なんだぜ、これだつて立派な労働さ」

「犯罪ですから！ 偉そうに言ってもそれ立派な犯罪ですから！  
っ！か、だからソレとコレと何の関係があんだっつの！？」

「つまり、てめーもこの優歌様の最高の蹴り合い殴り合いを見てー  
んだったら、それなりの労働をして観戦料払えつて事だ！ 今日はおめーもうちのスタッフの一人として荷物運搬スケジュール管理、  
そしてあたしのパシリとして目一杯働いて貰うからな！」

「えっー！？ そんなー！？」

「試合直前にノコノコ来るだなんてVIP扱いして貰えると思うなよ！？ 今日はおめーにみっちり社会人のいろはを叩き込んでやるから覚悟しやがれ！ 偉大なる優歌様の勇姿を見れて、その上貴重

な社会勉強まで出来るだなんて、おめーは本当に幸せもんだなあ？  
あたしが姉で嬉しいだろ？ 最高だろ？ 心から神に感謝するんだな、ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤッ！」

「……天はいつも我らに平等で無し……」

……と、いう訳で、私はほとんど拉致される形でお姉に連れられ家の前で待っていた車の中に押し込まれる羽目に。外で手を振りながら見送るいづみさんの笑顔が恨めしい。あの人絶対この後あづみさんと一緒にランチとか食べに行つて悠々自適な休日を送るつもりだ。大人つてズルいよ。父さんにしても母さんにしてもいづみさんにしても……。

「……そんなシケた顔しちやダメよ、大人には大人の事情があるんだから、休日ぐらいは思いつ切り楽しまないとね」

運転席から酷く酒焼けしたガラガラのオネエ言葉が聞こえてきた。ビククリしてルームミラー越しにその声の持ち主の顔をのぞき込むと、そこには綺麗に化粧を施したやたらガタイの良い髪の長い一人の女性……、女性？

「初めまして妹ちゃん、私があなたのお姉さんが所属する格闘技団体の会長をしてる、橋口ミミよ」

「……えっ、会長さん？ 女性？ つーか喋り声が明らかに……」

「本名『橋口新之助』っつーんだけどな、こつ見えて会長は夜は二丁目のお店のママもやってんだぜ、どうだ那奈、働き者だろ？」

「あらやだ優歌ちゃん、余計なお喋りは御法度よ？　まだ妹ちゃんにはこの世界のお話は早いもの、清楚な乙女を悪い道に引きずり込んだりするの、あまりお姉さんとしてはいただけない行為ね？」

「……ゲエツ、本物のオネエ様なんですか、会長さんって……」

パツと見、顔の部分だけだと艶々した長い髪にかなり美しい感じの会長さんだけど、腕とか肩幅に目を落とすと確かにそれは女性のものとは思えないほどムツキムキ。なのに胸は豊満でキャミとか着てるから違和感ありすぎて頭おかしくなりそうだ。本場のニューハーフを見るのが初めてだった私にとって、かなりの衝撃映像である。

「しかもな、会長は以前『男』だった時代、プロレスから派生した総合格闘技団体でライト級の世界王者にもなった超一流ファイターだったんだぜ、このあたしですら入団当時は随分とシメられたもんさ」

「過去の賜物よ、今となつてはもう優歌ちゃんに敵う相手はうちのジムには誰もいないわ、それに、私も随分前に『タマモノ』は切つて捨ててしまったからね」

「オイコラ那奈、今の笑いどころだぞ、笑つとけ笑つとけ、ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツー！！」

「……全然笑えません……」



参ったなあ、こりゃ。これ会場に着くまでずっとこの二人の下ネタ全開トークを聞いていかなきゃいけないんだろうか？　つーか、他のスタッフは？　この団体にはお姉と会長さんだけしかないのかな？

「スタッフは全員、先に会場に向かってスタンバってるわ、私は途中で妹ちゃんを拾っていかなきゃならなかったら別行動になっただけ」

「そうだったんですか、何かすいません、忙しいのにわざわざ……」

「ウフフ、お姉ちゃんと違って妹ちゃんは謙虚なのね？　良いのよ、どうせこの車はお荷物を積む為の家畜運搬車みたいなもんだから」

「オイオイ会長、そのお荷物やら家畜やらつてのはこの優歌様の事かよ？」

「さて、どうかしら？　実際後部座席は荷物で一杯だし、妹ちゃん以外についでの家畜も一匹積んでる事だしね」

「……ついでの家畜？　それって何……、うわっ！」

私が会長さんの言葉に首を捻っていると、ギョウギョウに荷物が積みまれた後部座席の方から何やら物音がガサゴソガサゴソ。何なの、何を積んでんのこの車！？　牛！？　豚！？　それともニワトリ！？

「……家畜呼ばわりだなんて、あんまりですよ会長……」

「……あ、彰宏さん！？」

随分と懐かしい人が荷物の間から顔を出してきた。神崎彰宏さん、当時中学生だった麻美子を妊娠させてヘタレの境地を切り開いたあのダメダメ男の若医者。

結婚を決意して一からやり直す為にお姉の団体の専属ドクターになったとは聞いていたが、まさかこの車に一緒に乗っていたとは全然気づかなかった。

「てめーなんぞ家畜どころかゴミ同然だろうが、このクソ野郎！いちいち反応して汚らしい顔出してくんじゃねーよ、あたしのやる気が削がれるだろうがゴラァー！！」

「痛い！ 痛い痛い痛い！ ちょっと優歌さん、こっちは荷物に挟まれて手が出せないんだから、そんなに人の顔にグリグリ蹴り入れるのやめて下さい！ 眼鏡割れちゃう！ 失明しちゃう！ 助けて、誰か助けてー！？」

助手席から伸びてくるお姉の足の裏が容赦なく彰宏さんの顔を踏みつける。まるでモグラ叩き。麻美子言っただなあ、仕事場でみんなにイジメられてないか心配だって。不安の中、そりゃ毎日生傷が絶えないはずだわ。可哀想に……。

「優歌ちゃん、いくら神崎ちゃんがどうしようもないヘタレだからってそんなにイジメちゃダメよ、これでもうちの大事なリングドクターなんだし、あと数ヶ月でパパになる人なんだから、もっと丁寧に愛情をもって扱って頂戴？」

「チツ、つまんねーの、ついでに試合前のアイドリングでコイツをサンドバックにフルボッコしてやろうと思ってたのによ」

「……彰宏さん、こんな形でなんですけど、お久しぶりです……」

「……あ、ああ、那奈ちゃん久しぶり、くれぐれもこの事は麻美子には内緒にしておいてくれ、下手に心配させて子供と母体に悪影響与えるとマズいから……」

「……立派な男になりましたね、何か涙が出てきそうです……」

「……コレがコレなもんで、へへッ……」

小指を立ててお腹が膨らむジェスチャーをする彰宏さんは足跡のついた顔で満面の笑み。切ないです。正に蒲田行進曲の世界。つかこうへいも感涙です。あとは十メートル階段落ちだけです。頑張れ、ヤス！ 銀ちゃんカツコイイー！

「さあ、着いたわ、話は聞いているだろうけど妹ちゃん、今日はうちの臨時スタッフとして色々と働いて貰うわよ、その分、あなたには普段経験出来ない女のアブノーマルな世界をご堪能差し上げあげるわよ」

日曜の早朝の首都高を車に乗り揺られること一時間ちよい、到着した先は国内初のドーム式室内野球場で有名なあの巨大なタマゴ建築物。おお、こんな所貸し切って試合なんてやるんだ。思ってたより人気あるんだなあ、女子格闘技界。

「おめーはアホか？ どこぞのプロレス団体の正月興行や人気ミュージシャンのライブやる訳じゃあるめーし、あたしらの会場はこっちだよ、こっち」

……ですよねー、いくらなんでもまさか一万人以上の観客動員数を見込める訳ないですよねー。やっぱりまだまだ極めてレアな世界なんです。ね女子格闘技界ってヤツは。それでもこちらの会場となるホールもボクシング界では『聖地』と呼ばれている有名所、かなり気合い入ってるんじゃないかな？

「今日は国内から様々な団体が参加して共同開催している、女子格闘技界のちよつとしたお祭りの様な興行なのよ、単一での興行とは違って各団体のエース級の選手が一同に集まって試合をするから、結構前評判も高い一大イベントだったりする訳よ」

「そんなデケエ大会でメインイベントを任されたのがこの渡瀬優歌様なんだぜ！ どうだ那奈、これだけであたしの注目度が痛感出来ただろ？ おめーにはそのあたしの晴れ姿をセコンドという特等席で見せてやるうってんだから、この優しい妹想いな偉大なるお姉様に感謝感激するんだな！」

……この先の女子格闘技界の命運がかかってそうな一大イベントで  
×がお姉って……。随分と無謀な賭けに出たもんだな、興行関係者  
の人達は。観客にまで負傷者が出ないか今から心配だ。

「よしつ、じゃあ無駄なお喋りもここまでよ、早速だけと妹ちゃん、  
さつき乗ってた車に積んでた荷物を神崎ちゃんと一緒に会場内の控  
え室まで運んでくれるかしら？ 控え室の場所は神崎ちゃんが知っ  
てるから案内して貰ってね、そこまで行けば、先に会場に到着して  
いるうちのスタッフがいるはずだから」

「……あのー、会長？ とりあえず俺もリングドクターとして選手  
のメディカルチェックの準備とか色々やらなきゃいけない事がたく  
さんありましてですね、ですからそのー……」

「てめーみてえなヒヨツ子ドクターが一人いねーくれえで医師陣は  
ちつとも困りやしねーよクソ野郎！ おめー以外にもちゃんと別の  
ドクターが余所から来て待機してんだ、つべこ言ってねーでてめ  
ーは会長の言う通り試合始まるまで荷物持ちやってりゃいいんだよ、  
生意気抜かしてんじゃねーぞ、この腑抜け男が！」

「……はあーい優歌先生、生意気言ってすいませんでしたあー……」

「……彰宏さん、哀れだ、哀れ過ぎるよ……」

彰宏さんと一緒に荷物を抱えて関係者出入り口から会場に入ると、  
控え通路には他の団体のスタッフと思しき人達が忙しそうにあら

こちら右往左往していた。団体の名が入ったＴシャツを着ている者や、大会のオフィシャルらしき無線機を持った者など様々。やっぱり女性スタッフが多いなあ。ある意味男子禁制の秘密の花園って感じだ。

それぞれの控え室を覗いてみると、そこには参加選手らしき非常に体の引き締まった女性の姿もちらほら。さすがは国内のＥーＳ級と呼ばれる格闘アスリート、見た感じだけでもかなり強そうだ。私も空手の大会でこの様な光景は見慣れている方だが、それとはちよつと違う殺気じみた空気がピリピリと伝わってくる。

「……怖いなあ、女性でも鍛えたらあんな体になるものなんだねえ、俺が本気になって喧嘩してもあつという間に叩きのめされそうだよ……」

「彰宏さんは殴り合いの喧嘩とかに無縁そうですもんね、女は怖い生き物なんですよ、本気にさせたら」

「……さすが、那奈ちゃんは普段空手やってるだけこういう環境も慣れてるんだね、俺なんて初めて会場に足を踏み入れた時はビビってちよつと小便チビっちゃったのに……」

「……だらしなさ過ぎる、今度麻美子にも簡単な護身術教えて家でも根性鍛え直させないとダメかも、この人……」

そうこうしてるうち、目的地であるお姉達の控え室の前へと到着した。扉には貼り紙が貼られ、そこには『橋口レインボージム』と書かれてある。ここで間違いない……、つーか、『レインボー』って確か隠語で同性愛を意味するんじゃないかなかったっけ？ 会長さん、露

骨過ぎます。嫌だなあこんな名前、絶対勘違いした人がジムに入会してきそう……。

「おう、お疲れひゃん、わざわざ重たいもん持たせて悪かったのう」

控え室に入ると、そこにはパイプ椅子に腰を下ろし両手で杖を突くかなり年配のお爺さんが私達を出迎えてくれた。つーかこのお爺さん、何もしてなくても常に体中がプルプル震えていて、入れ歯でもしているのか喋ると発音が怪しく何かフガフガ。この人がジムのスタッフの一員？

「この人は橋口大吾郎さん、会長のお父上だよ、ここのジムの初代会長さんだった人なんだ、みんなからは『長老』って呼ばれているんだよ」

「お嬢ひゃん、初めましてじゃ、息子、いや娘がいつも世話になるとるのう」

「……は、初めまして、こちらこそ、姉がいつもお世話になってます……」

へえー、あの会長さんのお父さんなのか、このお爺さん。顔はシワでクシャクシャ、体は痩せ細ってヒョロヒョロ、何か日曜日夕方の長寿番組の司会をやってる落語家さんみたい。こんな格闘技の世界とは似つかわしくない優しいそうなお老人って感じた。

「おい神崎や、この子がお前達がいつも話しとる渡瀬優歌とか言う娘かな？ 確かに良い図体をしておる、これは強い選手になるぞお、ワシが保証する」

「いや長老、彼女はその渡瀬優歌の妹さんで那奈ちゃんです、今日は観戦で訪れただけで……、てか長老、優歌とは朝会って話したばかりじゃないですか」

「ほお、しょうだったかのう、歳を取ると色々物忘れが激しくなつてのう、しょうかしょうか、ところでお前は誰じゃ？」

「神崎です！ 神崎彰宏です！ 今年からジムに入った専属ドクタ―ですよ！ 今さっき名前呼んだじゃないですか、忘れないで下さいよ！」

「おお、しょうかしょうか、いやいや、ワシにも一人息子がおるからのう、てつきり我が子と間違えてしまったんじゃよ、すまんのうすまんのう、ところでこの娘はどここの娘じゃ？」

「ですから渡瀬優歌の妹さんの那奈ちゃんです！」

「何だ、ワシの孫ではないのか、てつきりワシの娘とお前の子供かと思つたわい」

「いつから俺は長老の娘婿になったんですか？ てか会長は元男なんですから子供産めませんし、さつき自分で『息子』って言ったじゃ……」

「腹が減つたのう、おいカズコ、飯はまだか？ フガフガ」



「奥様はもう十年前に亡くなられてますから！」

……ダメだこりや。この調子じゃこのお爺さんにスタッフの一員としての労働力を期待するのはまず無理だ。なるほど、彰宏さんがドクター兼荷物持ちまでやらされる理由が良くわかった。男手がいなのね、こりや彰宏さん、多忙だわ。過労死しないかちょっと心配。

「……っかこのジムのスタッフ、男手どころか……」

それほど広くない控え室の中をパツと見渡すと、私と彰宏さんと長老さん以外の人間が誰もいない。他の団体の控え室にはたくさんスタッフが詰めかけていたというのに、ここのジムにはお姉以外の所属選手すら他にいないのかな？　っかスタッフって、私と彰宏さんだけ？

「……おや、すんぶはえーな、神崎センサー！」

私がそんな不安にかられて途方に暮れていると、背後の控え室入り口の方から見事なまでに東北系訛りの元気な挨拶の声が聞こえてきた。後ろを振り返るとそこには、無造作なおかつぱ頭に最近学校でも見かけないような洒落つ気のない緑ジャージ、ギャル系ファツシヨンとは全く無縁そうな、正に『田舎のイモっ子』と言っべき一人の少女が顔が隠れるほどの大きな荷物を抱えてそこに立っていた。

「センサー、これ、会長さんに言われて持ってきたんだって、どさに置いておけばええかなあ？」

「……えっ？ いや、俺に聞かれてもなあ……、中身は多分グローブとかミットやタオルだろうから、適当に空いてる場所に置いとけば……」

「またー、てぎとうな事ばいってらと渡瀬先輩におこられんずやよ？ あだしイヤだ、また先生と一緒に先輩のサンドバッグになんの一！」

彰宏さんの頼りないアドバイスにイモっ子ちゃんは荷物を抱えたまま室内をオタオタウロウロ。お姉ったら、こんな良い子そうな娘さんにまで理不尽な暴力を振るっているのか。こりゃ加害者の家族として放っておく訳にはいかないな、何とかしてあげないと。

「……今の彰宏さんの話だと、多分中身はあの人の道具とか私物だと思うからそこら辺に放つぽっちゃって良いんじゃないかなあ？ それであれこれ難癖つけて脅してきたら、私が間に入って説教しとくから」

「うえっ！？ 渡瀬先輩に説教するって、アンタ死ぬ気か！？ つか、アンタ誰だ？ 新人さんか？ あだしの後輩さんか？ あだしよか身長デケーし何か見てからに強そうだ、でも渡瀬先輩は怖えーぞ！？ ナメてかかったらベコさ一頭軽く素手でバラしちまう……」

「……いや、別にジム入会員って訳じゃないし、それより仮に後輩だとしても『さん』付けって……、それだけあの人に恐れおのっているんじゃない、自己紹介するのにちよつと気が引けるなあ……」

私のこれまでの経験からすると、これは学校の入学式やクラス替えで毎度出会った場面に良く似ている。『へえ、あんたもナナって言うんだ』みたいな感じで馴れ馴れしく近寄ってきた初対面の生徒がいざ私の真の正体と家族構成を知るや途端に顔を真っ青して次からはなぜか敬語扱い……。

「胡桃ちゃん、彼女は渡瀬那奈ちゃん、優歌さん……、いや、優歌様の妹君だよ」

「……うえっ？ うへえー！？ わ、渡瀬先輩の妹さんだばてー！？ あ、あ、あー、あわわわわ、うだでだうだでだ、あ、あの、あの、あだ、あだ、あだし、失礼な事ほざいてすねだったー！！ あだしみたいなクソガキがナメた口ば利いてほんまに申し訳ねじやだんずやー！！」

……あーあ、やっぱりこうなっちゃったか。本当、『渡瀬優歌の妹』っていう肩書きだけで扱われ方が180度変わっちゃうからなあ。それが実際お姉からの被害を常に受けている人間ならば尚更。水戸黄門の印籠どころの効き目じゃないよコレ、悪者どころか明らかに善人と思しき人まで土下座させちゃうし……。

「あ、あ、あだし、小っこい頃からバカで頭悪くて、むったどトツ

チャヤカツチャから叱られてばかりで、『おめえが向こうで人様に迷惑かけてねか心配だ』ってむったど電話で叱られて、こつたらバカな娘だばってら初めての挨拶でも渡瀬先輩に笑われて、今度はその妹さんにまで失礼な挨拶になっちまって、ほんまに、ほんまに、申し訳ねじゃだんずや！ この通りだ、許してしてけるじゃー！！」

「……あのー、言葉の半分以上訛り過ぎてて何を言ってるのか全然わかんないし、別に私は失礼だなんて全然思ってたければお姉と違って常識ある真人間だと自負してる訳で、ですからそのー……、とりあえず、頭上げて下さい、お願いしますから……」

こんな誤解を受けそうな場面を常々野次馬にも目撃されてしまうもんだから、いつしか私は学校内でも近所でも『あの姉有りてこの妹有り』と勝手に悪いイメージが先行して周囲からビビられてしまう。私はエリートヤンキー三郎かつーの。まあ、もう慣れてますけどね。今や魔除けとして重宝させて戴いてますよ、お陰様で。

「ういーっす、長老……、ってオイ、何だ何だどうした胡桃！？ おめー、朝一から何でそんな深々と土下座なんかしてんだ！？ オイコラ那奈、てめーまさか初対面でいきなりあたしの可愛いペットをシメてくれたのかこの野郎！？ でかしたぞ、それでこそこの優歌様の妹、泣く子も黙る渡瀬虎太郎の娘だな！ おめーも随分とワルになったもんだなー、この立派な晴れ姿、虎太郎ちゃんにも見せてやりてーぜ、ウツヒヤツヒヤツヒヤツー！！」

「……この体に流れる渡瀬の血が憎い、自立してやる、絶対二十歳になったら自立してこの悪魔どもの手の届かない場所に逃げてやるんだ……」

本日の舞台の主役の千両役者、まるでハリウッドのレッドカーペツトを練り歩く一流スターの様に控え室到着。つーか腕通さず肩でジヤージ羽織って室内でサングラススタイルってどこの亀田ですか？ どう見ても極道です。任侠ファイターです。本当にありがとうございました。

「ホレ胡桃、いつまで地面とチュツチュツしてんだ、みつともねえからさっさと顔上げろ」

「ハ、ハイッ！ 渡瀬先輩、あざーッス！」

さっきの彰宏さんに対してとはまるで違うイモっ子ちゃんの挨拶。汚れを知らなそうなウブな少女に変な標準語教えないで下さい。つか、イモっ子ちゃんのお辞儀の仕方がまたスゴい。『く』の字のお辞儀は初めて見た。頭下げ過ぎ。そんなご丁寧なお辞儀は神前くらいにしなさいって、あなたの前にいるのか間違はなく神ではなく鬼ですよ。

「パパ、控え室の留守番ご苦労様、後は私達で準備をするから、パパはゆっくり休んでいてね」

「おーおー、いつもすまんのうマサエや、全く、ワシは本当にええ嫁に恵まれたもんじゃ」

「あらやだ、ママももうすでに十年前に天国へ旅立ったでしょう？

それとも、私がだんだんママに似てきたのかしら？」

「そうだったかのう、遠い昔の事ですっかり忘れてしもうたわい、フガフガ」

「ちなみにパパ、ママの名前は松子よ？ さつきからカズコやらマサエやら一体どの女の事なのかしらね、ウフフ」

……実際にツーショットで見るとかなりのインパクトだなあ、橋口会長長老親子。くれぐれも念を押しますが、この二人は父親と息子です。父親と息子です。大切な事なので二回言いましたよ。この世界にはまだまだ私達の知らない様々な家族の形がたくさんあります。

「……それじゃ、休む暇もなく申し訳ないんだけど妹ちゃん、すでに挨拶を済ませたと思うけどその胡桃ちゃんと一緒に大会管理室に行つて、優歌ちゃんの参戦エントリー確認とプログラム表を貰ってきてくれるかしら？ 胡桃ちゃん、ちゃんと妹ちゃんを案内してあげてね」

「ハ、ハイッ！ 木島胡桃、無器量ながらも妹君様ば大会管理室まで無事に案内してんずや！」

「……あのー、ちょっと待って下さい会長さん、まさかとは思いますが、ここのジムのスタッフって……」

嫌な予感が次第に現実と化してきた。他の参戦ジムの控え室には少

なからず五、六人ほどの雑用スタッフの姿がちらほらと見えていたものだが、ここの控え室にいるのは私とお姉と、会長さん長老さんに彰宏さんとこのイモっ子ちゃんだけ……。うちのスタッフって、まさかこれだけ！？

「オイコラ那奈！ 会長がさっさと行つてこいって言つてんだ！グダグダ文句抜かしてる暇があるなら今すぐダッシュで五分以内に用件済ませてきやがれてんだ、このスットコドッコイが！」

「何がスットコドッコイよ、お姉！ もうっ、すっかり騙された！ 本当はジムの人手が猫の手も借りたいほど不足してるのを内緒にして、よくもタダで観戦させてやるだなんて優しい事言つて誘い出してくれたもんよねっ！？」 『未知の衝撃を体験させてやる』とか『あたしの晴れ姿を見てくれ』なんてそんなもん本当は別にどうでもよくて、最初から私を足りない人手を埋める一員としてタダ働きさせる為の口述だったんだ！ 冗談じゃないよ、誰がお姉のパシリなんてやってやるもんか！ 自分のエントリーぐらい自分って済ませてこいっつーの、この嘘つき！ 詐欺師！ 二枚舌！ 前科二桁以上の極悪犯罪者！！」

「おーおー、言わせておけば散々言ってくれるじゃねーか、この寝小便処女のクリ〇〇スオ〇ニーオンリー小娘がよ！ まんまと騙されたてめーが悪いんだ、悔しかったらYouTubeに一発デカ〇ラバ〇プをおま〇こに突っ込んだ状態で『どうぞあたしのあられない姿を見ていっぱい出してね！』ってセリフ入れた動画投稿してみろってんだ、この隠れ変態ムツツリスケベ野郎が！！」

「このバカー！！ バカ、バカ、バカッ！！ 一体どれだけ伏せ

字かければ気が済むのよ、このお下劣外道大魔神は！ 第一何よ、うんたらかたらオンリーって？ これじゃまるで私が夜な夜なそんな事してるみたいな言い方じゃない！ してません！ 天に誓ってしてません！ 名誉毀損！ 言葉の暴力！ 今すぐ訂正、謝罪要求！ 妹のイメージを地に墮として何が楽しいのよ、アンタは！？」

「あー言えばこー言ういちいちうるせーな、どこの倉木麻衣だてめーはよ？ 生意気抜かしてると口塞いで目覚めさせて、わたしの、知らない、わ・た・し、で、ひーひーひーひー言わずゴラァ！？ 嫌なら今すぐ観戦料払えよ、特等席だからキャッシュで福沢諭吉五人分だ、札耳揃えて今すぐ払え！ でねーと料金未納による不法侵入罪でマッポ呼んで、てめーにも輝かしい前科のエンブレム付けてやんぞ、このチツキチキー！！」

「あつたまキタ！！ 今日という今日はさすがにあつたまキタ！！ あーそうですか、なら結構ですよ、その喧嘩買った！ 私だってこれでも悪名轟く渡瀬虎太郎、麗奈夫妻の実の娘ですよ、だったらお姉のお望み通りパシリでもマッサージでもスパーリング相手でも何でもやってやろうじゃないの！ 今に見てるよ愚かな独裁者、いつかその台座から引きずり墮として地獄の底に埋めてやるからねっ！！」

「おーおー、そうかいそうかい、まっ、せいぜい小さな革命活動頑張れよ、愚かな小市民様」

「バーカ！！」

……最悪だ。ここの一週間、何か一年分の不運が一斉に押し寄せてきているような感じがする。先週の幹ノ介氏……、いや、



もう幹ノ介叔父さんと言うべきか、叔父さんからはまだ生まれてもない時代の父さん母さんとのいざこざをグダグダ愚痴られるし、母さんが帰ってきたと思えばいきなり初日から父さんと家をボロボロに破壊するほど大暴れするし、小夜の部活動探しに付き合わせたとさえ翼と口喧嘩するし……。

あーもうやだ、本当腹立たしい。もっと静かに生活を送らせてくれないもんなのか私の周囲の人間達は。一体私が何をした？ 私が悪いの？ 否、違う。それもこれもきっかけは多分あの日のバスルーム、あのバカお姉の悪夢のお誘いが悪運を呼び寄せてしまったに違いない。うん、きつとそうだ。根拠は無いけどそう思う事にしよう。あの人が全部悪い。私と翔太の関係がファーストキス以来いまいち停滞気味なのも絶対お姉のせいなのだ。

「……それは、あまり関係ないか……」

そんな事まで言い出したら、ここ最近の世界同時不況や各地内戦や地球温暖化や地震やら台風やら政権交代まで全部お姉のせいになつてしまいかねない。まさか、さすがにそこまでは……、いや待てよ、あの人なら十分にあり得る話かもしれない。

この前の大洪水を引き起こした大型台風の目の中には、もしかしたらお姉が両手広げてグルグル回ってたんじゃないかな？ じゃああの震度6弱の地震はお姉が地面を拳で殴ったから？ まさか新政权の影の將軍って、あの大物政治家じゃなくて実はお姉だったりして？

「……何考えてんだろ、私は？」

いやね、こんな馬鹿げた事でも考えてないとこの腹に溜まりに溜まった様々な怒りや憤りのやり場がどこにも無いんですよ。いつもみたいに隣に翔太がいればお尻に一撃蹴りでも見舞ってストレス発散出来るけど、さすがに昨日今日会ったばかりのマスコットみたいに可愛らしいイモっ子ちゃんを蹴れるほど、私は暗黒に染まりきれない訳で……。

「……………」

「……私の顔、そんなに変？ 何かついてる？」

「いや、そつたらつもりじゃないんだけど……」

二人でその大会管理室って所に向かっている間も、イモっ子ちゃん は先導して案内をするというよりも私よりちよつと斜め後ろをついてくるような形で、すれ違う人とぶつかりそうになりながらもこちらの顔をマジマジと見つめていた。ヘッ、あんまり見つめるなよ、照れるじゃねーか。とか言ってる場合じゃない。ちゃんと案内してよ、私達迷子になっちゃうよ？

「……アンタ、スゲーな……」

「……ハア？」

「いやー、スゲーよ、あの渡瀬先輩に怖がらんと堂々啖呵切るって、アンタタダ者でねーよ、あだしは真似できねー、尊敬しますー」

「……いや、そりゃあ、ねえ？　だって、私とお姉は姉妹な訳だし、物心ついた頃からこんな口喧嘩は日常茶飯事だったし、そんな尊敬されるほどの事でもないよ、姉妹喧嘩なんてどこの家庭でも普通でしょ？」

「いやー、それでもスゲーよ、口喧嘩どさろか、いつ渡瀬先輩の拳が飛んでくらかわがね恐怖に負けて自分の意見ば貫き通すって、こっちは向かってブツ飛んで来るベコば素手で受け止めちまうくらいスゲーだよ、人間業でねーよ、アンタは天狗か河童だんずな？」

「……私達姉妹は妖怪ですか？」

まあ、端から見れば確かに妖怪じみてるかもしれないかね、この姉妹は。姉は言動の八割以上が十八歳未満お断りのお下劣淫乱エロ河童、片や妹は高一ですでに身長170センチオーバーの人間灯台鞍馬天狗。こんな姉妹に誰がした。ええ、そりゃもちろん、私達の愛しいご両親であるあの理不尽大王バツグベアード様と冷酷無情な雪女様でございますよ。

「あ、そだ、改めましてどもども、あだし、木島胡桃って言っただよー、見ての通りバカな娘だばって、どうぞご指導せんばお願いしますますー」

「何か色々順序が狂っちゃったね、改めまして初めまして、渡瀬那奈です、いつもお姉が迷惑かけてるみたいで、本当ごめんなさい」

「とんでもねえだ、迷惑だなんて……、渡瀬先輩には助けて貰って

ばかりで頭が上がらねえもん、まだこっちの言葉や生活に慣れてねえもんで、那奈さんにも色々ご迷惑かけっかもしれんけども、一生懸命勉強して気張っていきるんだばってら、どうか見捨てねでしてけるじゃ」

詳しい話を聞いてビックリ。何とこのイモっ子ちゃん……、もとい、クルミちゃん、私と同じ年だったのだ。でも、学校には通っていないそうでジムに住み込み毎日雑用勤務をこなしながらプロデビューを夢見て日々鍛錬を重ねているとか。つまり、彼女はジムの練習生。これでも将来の女子格闘家の卵なのだ。

「あだし、頭悪くて体もズブいもんだばってら、田舎の秋田じゃむったど学校でみんなにからかわれて、こったらんじゃあかん、もつと強いおなごになりてえ、って決心して中学出てすぐに一人で上京してきたはええんだばっても、一体何ばしたらええのかよくわかんねくて……」

「……気が弱いつて……、この歳でたった一人で上京してくるだけでもかなり勇気があると言うか、無鉄砲と言うか……」

「そつたらことでオロオロしてたら、街で怖い男の人達に周りば囲まれて訳わがねこと言われて、どつか変な場所に連れて行かれそうになったんだべ、そこば偶然、酒飲んでベロベロだんずや渡瀬先輩がお仲間様方と一緒に通りかかって……」

その怖い男の人達がその後どうなったのかは、あえて話す必要は無いだろう。とりあえず念の為、死人が出なかった事だけは報告して

おく。そして、詳しい事情を聞いたお姉は酔っ払った勢いのままジムに向かい、夜中の三時に会長を叩き起こして無理矢理話をこじつけ彼女を入会させたとか。

実にお人好しなんだか有り難迷惑なんだか良くわからない話だ。話だけ聞いてると絡まれた上京娘をお姉が助けたみたいにな形になっているが、その後のお姉の行動も男連中がしようとした事と何ら変わらない拉致同然の身勝手な大暴挙。杏ちゃんはお姉の取り巻きの人達をお仲間さんだと思ったのか。実はあれらもあなたと同じ強引に拉致られた奴隷とも言うべきお姉の後輩の方々なんですよ。

「……で、助けてくれたお姉に憧れて、自分も女子格闘家を目指そうと思っちゃった訳だ？」

「他人様ば殴ったり殴られたりだなんて、あだしには怖くてでぎねーよ、って思ってたんだばっても、もしいつかあだしがあん時のあだみたいない弱い女の子が悪い男にからまれてら場面にバッタリ逢ったら、やっぱりその子のことは助けてあげてえって思うもん、だばってら、あだしもここでいっぱい練習して弱い心も体も鍛え上げて、優歌先輩みたいな強い女になってやるんだ、って決心したんだべ」

困った人を助けてあげたい、そういう強い人になりたい、って志はとても素敵だと思う。実際、私やお姉が空手を始めた動機はそれだったしね。ただねクルミちゃん、勘違いの無いように説明させて戴くと、どんな状況であつても格闘技に属する人間がズブの素人相手に実力公使したらダメだからね？ あの人とは別格、本当にやったら破門どころか捕まるよ、気をつけてよね。

「……しかし、こんな華奢な子が総合格闘技とはねえ……」

ジムに入会してそれなりには練習を積んでいるのだろうけど、彼女の外見や骨格はまだまだ至って普通の女の子。

背格好も私より遥かに背が低く、ちょうど小夜と同じ位の150センチ後半といったところか。本当にこんな子が痛い、辛い、厳しいの格闘技の世界でやっていけるのかなあ？ ましてやお姉の下で……、無限の可能性を秘めた成長著しい若者の芽が心無いハゲタカどもに啄まれやしないか、ちょっと心配だ。

「したつてば、那奈さんはあだしと違って体もデカくて背筋もシヤキツとして、渡瀬先輩相手でも一步も引かななんぼい威勢もあつてもものすげえ強そうだ、やっぱり姉妹なんだべな、話は聞くと、優歌先輩と那奈さんのご両親さんも無茶苦茶喧嘩が強いお人だとか」

「……あの人は余計な事までベラベラと……、いや、あの両親二人は普通の人じゃないんで、っーか人間じゃないから、それに、こう見えても私もとりあえず空手習つてたりするんでね」

「うえっー！ 那奈さん、空手やってんだんずなあ！？ そりゃあ遅しいはずだべ、きつと那奈さんも無茶苦茶強いんだべなあ、あだしなんかが立ち向かったら指先一人でダウンさせられちまいそうだし……！」

どこの世紀末覇者ですか、私は？ 胸に北斗七星の傷でもあるってかい？ じゃあ、さしずめお姉はラオウってところかな。っーか明

らかにジャキでしょあの人？ ラオウはどつちかといえば父さんか。本当にあの人、世界核戦争後でも存命して世界の王になりそうで怖い。じゃあ母さんは南斗最後の将？ 何この一家？ つーか、さつきから何言ってんだ私は？

「……暇だったからってゴールデンウィーク中に小夜の家で全巻読破なんてしちゃったからかなあ……」

実際は小夜が買ったものじゃなくて父親の啓介さんが昔買い揃えた物らしいけど。あそこの家の書籍スゴいんです。ゴルゴ13も全巻揃ってるし本宮ひろ志作品などハードボイルド漫画目白押し。とても一日じゃ全部読み切れません。意外と私、チャラチャラした少女漫画なんかよりこつち系好きだったりするんで、飽きずについつい泊まりがけで読みあさっちゃったりしちゃうんですよ、エヘヘ。

……まあ、そんな事どうでもいいんですけどね。ちよつと話が脱線したようなので、そろそろ軌道修正をば……。

「……あれ？ つーかこれって……？」

胡桃ちゃんとの会話に没頭していて、ついつい今まで気づかなかったのだが……、確か私達が今、向かっているのはこの会場のどこかにある大会管理室のはず。そして、その場所に私を案内してくれているのは彼女のはず。

しかし、すでに控え室を出発してかれこれ十五分ほどウロウロ歩いているが、全く管理室に辿り着けそうな気配がしない！ つーか、

ここどこ？ 何かボイラー室とか清掃員控え室とか扉に書いてあるんだけど？ これってもしかして、私達迷子になってない！？

「……ねえ胡桃ちゃん、大会管理室って、本当にこつちであつてるの……？」

「えっ？ 那奈さん、場所知ってるんじゃないんだんずな？ 先頭立ってズンズンと先進んで行くからあだし、何か凄い頼もしいなあ、って関心しながら後ついてきたんだばってども……」

「……会長さんから案内してあげて、って言われてたじゃん……」

「いやー、あだし人の前に立てるような人間じゃねえし、そつたら自信もこれっぽっちも無いもんでなー、もし道順間違つてたりしたら迷惑かけちまうしー」

「……YouはShock!」

何その涙が出るほどいたいけなな謙虚さは？ 変な気を使われた方が迷惑だっつーの！ 会話の軌道修正どころか進行方向まで修正しなきゃならない羽目になるとは……。

「あとなー、あだし外に出で百歩以上歩くと帰り道わがなくなるほどひでえ方向音痴なもんでな、行きは良い良い帰りは怖い、控え室に戻る時は那奈さん、どうか案内お願いしますー」

「……私はもう、死んでいる……」



木島胡桃、こりゃ小夜達とはまた一味違う世話のかかる困ったちゃんみたいだなあ。今日も色々と重労働になりそうだ。あー、胃が痛い。胃腸に良く効く秘孔、トキに突いて貰いたい気分だ……。

## 第74話 いつの日にか二人で

「……………只今戻りましたー……………」

巨大アウトレットモールの面積と比べればその半分以下しかない、決して広くはないはずの会場ホール内を胡桃ちゃんと二人で迷い流れて漂ってやっとこさお目当てのスケジュール表を大会本部でゲットした私。

それまでにかかった所要時間は約三十分。本部でホール内の見取りマップを貰って控え室へ戻るのに最短ルートを通ってみれば何て事はない、わずか五分足らずで帰って来れてしまった。

本部、メチャクチャ目と鼻の先だったんですけどー、胡桃先生？何をどうやってどこを通ったら三十分も時間がかかる訳？ 方向音痴にも程がある、まるで狐に摘まれたか神隠しにでもあったような気分だ。

「あら、お帰りなさい二人とも、随分と時間がかかったからてつきり中央線に乗って高尾山まで行っちゃったのかと思っただわ」

「……………すいません橋口会長、実はちよつと道に迷っちゃいました……………」

「あらやだ、そうだったの？ ちよつと胡桃ちゃん、初めてこの会場に来た妹ちゃんか道に迷わないように、ってあなたを案内役で一緒に行かせたのに、これはあまりにもお粗末な話ね、只でさえ人手

が足りなくて参ってるのに、こんな事じゃ私、まいっちんぐマチコ先生よ？ まいっちんぐ」

言葉使いやその仕草は間違いなく女性のそれそのものだが、やはり喋り声だけは明らかに酒焼けしたオッサンのガラガラ声である橋口ミミ会長。本名何だったっけ、しんのすけだっけ？ 忘れちゃったよ、もう。つーか何で私、まだ十六歳なのに『まいっちんぐマチコ先生』知ってるんだろう……？

「ほ、ほんまにすみねだった会長さん！ いや、あだしもこの控え室は出るまではちゃんと本部の場所ば覚えてたはずだんずやんだけどー、いざ出発して人ごみの中ば入ったらすっかりテンパっちゃまって頭ん中真っ白になってー……」

「もう、相変わらず人がたくさんいたりすると慌てふためいちゃうのね、胡桃ちゃんは？ それでも、もうこのホールに来るのはもう五回目なんだから、いい加減に大会本部室の場所くらい覚えないとダメねえ、本部室、過去五回とも同じ場所にあるんだから」

「で、でも、あだし達の控え室の場所は毎回違うだよ！ あだし、目的地が同じでも出発地点が違つとどさばどう通ればいいかわかんなくなつちまうから……」

……この子の空間認識能力や帰家能力、犬以下ですか？ 五回も同じ場所に来てその度道に迷うつて、あの小夜でさえ通学三日目には私が手を引かなくてもちゃんと真っ直ぐ学校から家に帰る事が出来たのになあ。あの子よりヒドい方向音痴を見るのは初めてかもしれない

ない。こりや迂闊に首輪つけずに放し飼い出来ないねえ、胡桃ちゃん。持ち物全部に名前と住所書いた名札つけないとね。

「そ、それでもあたし、何とか思い出そうと一生懸命足りない頭で記憶巡らせて頑張ったんだべ！ そしたら、あたしより先に那奈さんがズンズン一人で前に進んで行っちゃまって、あたしは道順ば思いつく余裕も無くなって後ばついていくのに精一杯で……」

「……えっ？ ちょっと待って胡桃ちゃん、その言い方だと道に迷ったのってまさか私のせいになってない？」

「那奈さんだったらあだしなんかよりすげーしつかりしとるし、何てったってあの優歌先輩の妹さんだばってら、初めて来た場所でも全然迷ったりしねんだ、やっぱすげーなー、なんて思って感心してたんだばって、そしたら氣いつくとかいつの間にかボイラー室とか倉庫とかある変なところ入っちゃまって、したらあだし余計テンパって自分が一体どこさいるのかすらも訳わかんなくなっちゃまって、元の道に戻るだけでもすげー無駄に時間いっぱい使っちゃまって……」

「……オイコラ、ちょっと待てっつーの」

「あだしが悪いんだ！ あだしがしつかりしてねーから、何にも知らねー那奈さんに頼ってヘコヘコ後はついて行っちゃったからいけねーんだ！ 会長さん、那奈さん、この通りだ、どうか許してしてくるじゃー！」

「とか言って胡桃ちゃん、本当は絶対自分が悪いって思っていないでしょ！？ 思っていないよね、全然納得していないよね絶対!？」

……ハイハイ、そうですか、左様でございますか。ええ、そうですよ、全部私のせい私のせい。でしゃばって余計な真似した私が悪いんだよね。そりやどうも失礼致しました。事情説明に必死になっていて決して悪気があつて言つた訳じゃないんだろうけど、シラツと人に全責任押し付けしやがつてこのヤロー。お姉みたいにイジメちゃうぞ、ド田舎娘め。

「でもまあ、私は無事に二人が帰つてきてくれただけで十分よ、それに、ちゃんと目的のエントリー確認とスケジュール表を持つてきてくれたんだからね」

「でも、本当はもつと早くこつちに帰つてきて私達が手伝わなきゃいけない用事とかあつたんじゃないんですか、会長さん？ 何かいつの間にか、控え室の中に無造作に置いた荷物も全部片付いているし……」

「ああ、あれなら全部私と優歌ちゃんできちんとまとめてやつけたわ、やつけたつて言つても、必要な物だけ中から取り出して後は隅に寄せただけだね」

「……へっ？」

……お姉が、片付け！？ あのお姉が！？ 子供の頃からオモチャ出したら散らかしっぱなし、服脱いだら脱ぎっぱなし、食べても一切食器洗わない、下手すりや父さんみたいにトイレの水すら流し忘れるあのお姉が！？ なにそれ怖い、天変地異の前触れか、もしくは世界の終わりの始まりか、大雨と霰と雹と吹雪が訪れて日本列島

が丸々沈没してしまいそんな予感がする。洗濯物しまっておいたっけかなあ？

「言う事があんまりねえ妹ちゃんは、優歌ちゃんね、あれでもジムではちゃんと自分の物以外もしっかり片付けを手伝ってくれたりするのよ？　胡桃ちゃん一人じゃまだ重くて持てないウェイトや練習用のマットとか、ねえ胡桃ちゃん？」

「優歌先輩はすげーよ、あだしが両手で精一杯のダンベル、片手で軽々持ち上げちゃうもん、体細えのに、どこさそげなば力あるんだかなー？」

何その外面美人。家では『あたしは茶碗より重てーもん持った事ねーしー』とか言って洗い物するどころか台所まで自分の食器すら持つてこないほどグータラのクセして、何よその人の変わり様は？　他人にそれだけ優しく接する事が出来るんなら少しは家族にも気を配れっつーの。

久々の母さん帰宅つてのもあつたからかもしれないが、この前の自主的浴槽清掃でもかなりの奇跡に近い行動だった。それがまさかジムではそんな善人っぽい真似をしてるだなんて、とてもじゃないが生まれてからずっとあの人の一挙手一投足を見てきた私にはにわか信じがたい。つーか気持ち悪い。そんなお姉の姿、ちっとも想像がつかない。

「でも、もちろん片付け中はいつも通り愚痴に文句言いつぱなしだったわね、『アイツらどこで油売ってんだ、仕事サボってどこで一服してやがんだ、帰ってきたらまとめてシバき倒してやる』ってね」

「あー、やっぱりそうですよねー、あの人が本心から片付けや手伝いなんてする訳ないですよー、嫌々に決まっていますよねー、なるほど、その話を聞いて何か少しだけ私も納得が出来ました」

「うふふ、妹ちゃんはお姉ちゃんの事、何でもお見通しなのね、いい姉妹だわ、あなた達」

誰もやってくれる人、やれる人がいないからしょうがなく自分がやらざる負えないって事なのね。それでも、あの人の性格からすればかなり立派な事。何だ、お姉もちゃんと一社会人として成長できてるんじゃない。少なくとも父さんよりかは遥かにマシだ。お姉、偉いぞ。いい子いい子。

「……なんて事、本人の目の前で言ったらいくら妹の私でもボロボロにシバかれるだろうな、さすがに……」

それはともかく、ところでそのお手伝いがちゃんと出来る、頭を撫でて誉めてあげたい優歌ちゃんの姿が見当たらないのはなぜ？ 私達が帰ってきたら即行シバき倒すんじゃないのかな？ 待ちきれなくて私達を捜しに行ってしまったのか、あるいはトイレか、それとも試合前だったのに一服しに行っちゃったのか？

「あそこよ、カーテンの中」

会長さんが指差す先には、着替えやマツサージ、怪我の治療等で使われる寝台が置かれているカーテンで仕切られた空間が控え室の奥に備えられていた。さっきこの部屋に初めて来た時はカーテンは開いていたのだが、今はきつちりと隙間無く360度密閉されている。中で何してんのあの人？ もう試合用の衣装に着替えてんのかな、まだ試合までかなり時間あるよ？

「仮眠よ、優歌ちゃんはね、試合前は必ず数時間仮眠を取るのよ、入場の時間ギリギリまでね」

「……ギリギリまで？ そんな事したら普通、逆に体がなまって動きづらくなったりしないんですか？ 私もとりあえず格闘技やつてるけど、試合前に寝るなんて絶対に有り得ないし寝たくても寝れない、ストレッチとかして常に体動かしてないととても気持ちが落ち着かないなあ……」

「優歌ちゃん曰わく、『それらの無駄な動きは悪戯に体力を消耗するだけだ』ですって、寝つけないほど緊張するのは己の気持ちの弱さ、自信の無い証拠だってね」

「……何か、どこかで聞き覚えのある言葉……」

「耳が痛いかしら？ ちょっと前に妹ちゃんが空手の大会に出た時、前日に全然睡眠が取れなかったって話、私も以前優歌ちゃんから聞いたわ、大変だったわね、でもそれが普通よ？ 恥ずかしい事じゃないわ」

「……ですよねー、これから殴る蹴る締める極めるやらかして、自分



が怪我したり相手に怪我させたりする可能性があるのに、緊張感ゼロで容赦なく爆睡出来るあの人がおかしいんですねー？ まあ、試合でもノールールの一般実戦でも経験豊富で、空手界で世界女王の座まで登りつめたお姉にすりゃ今更緊張なんてしないのかもしれないけど……。

「この私だって、現役時代は試合当日の朝方からかなりナーバスになって、とても十分な睡眠時間を取れたなんて記憶は無いわ、もちろん、同じ団体の選手でもそんな心臓に毛の生えた猛者はいなかった、こんなタイプの選手に会ったのは、優歌ちゃんが初めてよ」

「やっぱり、階級王者になった事がある会長さんでも緊張するもんなんですね、格闘技の舞台は……」

「そりゃそうよ、負けたくないもの、戦術やら試合ペースやら色々考えて頭も体もカッチカチよ」

「……普通そうですよー、この前の私もそうでした……」

「ついでに、相手がイケメンだったりすると筋肉以上に体のある一部もカッチカチになっちゃって困っちゃったりしたわ、別の意味で素敵な寝技かけちゃおうかしら、なんて」

「……女子高生相手にまた下ネタ、これ立派なセクハラだよ、もう……」

「あだし、ジムに住み込むようになって毎日会長さんと優歌先輩のお下劣話は聞いとるから、もうすっかり慣れっこだー、那奈さんは体は強えけど、まだまだウブっ子さんなんだなー？ あだし何か、

自信出てきたぞー！」

「……いや胡桃ちゃんそれ、自慢にならないから……」

……青少年教育上、環境悪過ぎるよなあ、このジム。この子が住み込みで練習生をしている事はやっぱり何か間違っているような気がしてならない。学校以外の場所での道德教育つても結構大事な事だと思えますよ、文部科学省各関係者方々様。翼のお母さん、美香さん、何とかして下さい。

「それとね、優歌ちゃんからすると、仮眠を取ると起きた後に頭がスッキリしてベストコンディションになるんですって、それはあくまでも、自分で自然に目が覚めて十分に睡眠が取れた場合だけだね」

「……それが、下手に人が叩き起こしたりした日にゃあ……」

「そんな事したらその後優歌ちゃんがどうなるかは、多分私達より妹ちゃんの方が良く知っていると思うわ、起こしに行った神崎ちゃんが帰ってこないから心配で控え室に行ったら顔中血だるまになって倒れてるし、そのままの不機嫌状態で対戦したこの前の相手選手に至っては本当に可哀想だったわ、敵ながら同情しちゃったもの、どんな惨事になったか詳しく知りたい？」

「……いや、いいです、皆まで聞かなくても大体予想つきますから……」

目覚めスッキリなら頭も体もピンピン絶好調で楽しく相手をボッコボコ、目覚め最悪なら完全不機嫌で近づく者みんな容赦なくボッコボコ。どちらにしろ格闘家として常にベストコンディションなんじゃないあの人。そりゃ自分で『天職だ』って言う訳だわ。

やだなー、絶対にこんな人間とは闘いたくないなー、命がいくつあっても足りない、っーか質悪すぎる。なぜ神様はこの様な危険な人物に格闘の才能を与えてしまったのだろうか。鬼に金棒どころかステルス爆撃機に核兵器だ。お姉、B-2ですかあなたは？

「……もうカーテンの中に入ってしまったら経つんですか？」

「そうねえ、五分前くらいだったかしら？」

「……じゃあ、もう寝てますね、近寄らない方が良いと思います」

「さすがね妹ちゃん、それだけでわかちゃうのね、じゃあ胡桃ちゃん、いつも通り試合前まで外に退避するわよ、準備して」

やっぱりこの人達もいつも退避してるんだ。そりゃそうだよなー、家でもお姉が部屋で昼間してるって聞いたら、私も翔太もまるで戦時中みたいにあのドアの開け閉めも慎重に、箸の転がる音すら立てないよう必死だもん。山中で冬眠している腹ペコ熊に出会しちゃった様な心境ですよ、本当に。

「でもあたし、未だ優歌先輩がそつたら凶暴な獣みたいな人だななんて気がしねーだよ、あたしは悪い人達から助けてくれた先輩のまなごはすげー優しくかったしー、むったど口が悪くて『シバくぞ』って

脅されても、実際に暴力振るわれた事なんて一度たりもないだしな  
ー……」

「……ですって妹ちゃん、空気も心も済みわたった平和な田舎で育ち、人を疑う事を知らずに育ったこんな純粹無垢な胡桃ちゃんに何か言ってあげる事、ある？」

「都会は雪山で遭難するより遥かに怖いよ、野生の熊より恐ろしい人間がたくさんいるよ、ここにいたら胡桃ちゃん、食べられちゃうよ？」

「……あわわわ、食われんのは御免だ、那奈さん、置いてかねーでけるじゃー！」

と、いう事で私達はメインイベントの試合が始まるまでのしばらくの間、ホール内をうろつき他の控え室で待機する別の団体の選手達の様子を見に行く事にした。ついでに試合会場の袖からそろそろ始まる第一試合の様子も見させて貰えるらしいから、格闘技好きの私にはかなり嬉しいサービスだ。

少し気がかりなのは控え室に椅子に座ったままうたた寝してた長老さんを一人にして置いてきちゃった事だけど、実の息子、ならぬ娘である会長もちつとも心配してない様子だったし、まあまさか流石のお姉熊もあんなご老体にまで補食の牙を剥く事は無いだろうと思う。

「うちのパパはああ見えて熊退治は大の得意なのよ、若い頃は素手で何頭もの熊と殴り合いの大喧嘩をしたそうだから」

「……長老さん、どこの大山倍達ですか？」

「ちなみに、あのムツゴロウさんも若い頃に熊と殴り合った事があるそうよ、その道を極めた人達って、やっぱり強いよね」

「……ムツゴロウさん、スゴいなあ、ライオンにふざけて噛まれた時も拳で顔面殴ってる姿を小さい頃テレビで見た事あるし……」

まあ、ムツゴロウさんはさておき、ホール裏の通路を歩いているだけでも、試合前の練習がこちらこちらの控え室からパンチやキックのミット打ちの音がバンバンドスドス聴こえてくる。チラリと中を覗くとやはり女性らしく小柄ながらも鋭いキックを放つ選手らしき人、別の控え室では念入りに寝技のチェックに励む人の姿が。うーん、流石は格闘技大会会場、このピリピリした空気、他ではなかなか味わえない。

何だかんだ言って私もこういった『やるかやられるか』みたいな勝負の世界は大好きなクチで、人が闘っているのを見ると自然と勝手にこちらの体も疼いてしまう結構バトル好きなタイプなのだ。この前テレビでK-1を見ていてつついっ気分が盛り上がってしまった時は、つついっ側で座っていた翔太の背中に思いつ切り回し蹴りを入れてしまった過去がある。

翔太、その場で悶絶して三日間ぐらい背筋伸ばせなくなったっけ。ごめんね翔太、悪気は無かったんだよ。この私の好戦的な性格、やつぱりあの両親からの遺伝なのかな？ 私が学校で他の生徒から怖がられているのは、お姉の妹っただけじゃなくこんな性格が外面にも若干滲み出てしまっているせいもあるかもしれない。ただでさえ中一の時に小夜を虐めてた先輩達を懲らしめちゃった事もあるしなあ、私もあまりお姉の事は言えないな、こりゃ……。

「那奈さんはなんつーか、小綺麗なのにトゲがあるっつーか、まるで薔薇の花みたいな人だなー、んだ、薔薇の花っつーかトゲの鞭か？ 下手に触れたら皮も肉もまとめてズタズタにされちまいそうだなわ」

「胡桃ちゃんって気弱な振りして意外にシラツと暴言吐いてくれるよね、だったらお望み通りズタズタに引き裂いて挽き肉にしてやるうか？」

「そっつーか、こんな小柄でイモっ子な胡桃ちゃんも普段はジムに住み込みで格闘技の練習やってるんだよね？ って事は、それなりに打撃や寝技なんかも素人に比べれば強くなってないとおかしいよね。私とどっちが強いんだろう？」

「いやいやいや……、あだし、まだミットに蹴るだけでもすねが痛くてまともに蹴れねーし、寝技なんてむったど会長さん相手に折り紙みたいに手足パタパタ折り畳まれちゃうし、何ら素人レベルと変わりねーだよ」

「胡桃ちゃんってスゴい可愛いのは、少し頸動脈締めただけで顔真っ赤にして手足バタバタ暴れさせて、あつという間にイツちゃって失神しちゃうの、もう可愛すぎてついついあんなイケない寝技やこんな過激な寝技、揉んだり舐めたり縛ったり色々試してみたくなくなっちゃうのよね、ウフフ」

「……一体何を教えてるんですか、会長さん？」

でも、寝技が出来るっていうのは立ち技オンリーの私からするとかなりスゴい事。サブミッション系は視聴者として見てる分でも複雑過ぎてよくわからないし、見た目も非常に地味なので私はどうも興味が湧かないのだ。だから、身に着けたいとも思わないし、そんなルールがある試合もしたいとは思わない。総合ルールだったら私、もしかすると胡桃ちゃんに負けるかも？

「んなこたあねー、あだしなんかタツクルで突っ込んだ瞬間、那奈さんの蹴りが顔面入って一撃KOだよー、那奈さん、空手強えーんだべ？ どっだけ蹴りの威力あるんだべ？」

「うーん、とりあえずバット一本はへし折るくらいかな」

「……あんたの彼氏さん、よく生きてたなー……」

「ちなみにお姉は金属バットへし折った事がある」

「……あんた達姉妹は、どっかの国の大量殺戮兵器かターミネーターか！？」

「……だって父親が拳銃の弾をヒョイヒョイ避ける人だし……」

……あのー、くれぐれも読者の皆さん、どうかドン引きしないで下さい。確かに私、バットへし折りますけど至って普通の十六歳現役女子高生です。自分で言っちゃいますけど可憐です。清楚です。ツンデレキャラです。萌え要素たっぷりです。だからお願いします、そんな怯えた目で見ないで下さい。何か最近、私だけ小夜や翼や千

夏とは一線されて『怖キャラ』として扱われている様な気がしてちよつと不安……。

……ちよつと脱線したので話を戻しますかね……

打撃には自信があつても、それは空手の試合、空手の形での事。だから、お姉が総合格闘技の世界に足を踏み入れたと聞いた時には正直驚いた。お姉だつて出身は空手、その世界で若くして頂点を極めて別の格闘技の世界へと挑戦しようという気持ちはわかるが、やるなら同じ立ち技のキックボクシングが何かになるだろうと私は思っていた。

『何でもアリ、つてところに惹かれたのさ、馬乗りになつて殴る、倒れている相手を踏みつける、ほぼ素手に近い状態で顔面を殴れる、これが合法として認められ、しかも金が貰えるんだぜ、最高じゃねーか？』

確かに、お姉の場合は空手以上にプライベートでのストリートファイトの方が経験豊富つてのもあるが、それでも全くの未経験の舞台へ何の躊躇も無く挑戦しようとするその勇氣は感服するとうかかなり呆れたのを覚えている。その挑戦意欲、もつと他の場所で生かせないもんですかね？

『相手の寝技なんかにはいちいち付き合うつもりなんかねーよ、その前に倒しちゃえば何の問題もねーしな、ちよつと前にミルコ・クロコップつていただろ？ あたしが目指すのはあんな感じのファイターだからな』



実際、お姉は総合デビューしてこれまでの五試合全てを1ラウンドで対戦相手をKOしてきたらしい。初戦は同じくデビュー戦だった、か弱き十代の女の子を弄ぶ様に馬乗りになって両手ビンタ連発でリオンチKO。二戦目はその選手が所属している団体の中堅選手が仇討ちに來たが、ゴング直後にダッシュしてコーナーに追い詰め獣拳ラッシュ、ともにパンチが相手の顎に入り僅か十秒で失神KOした。三戦目は相手がタックルに來たところを押し潰して顔面に非情のサッカーボールキックを一発、ぐったりとした相手の顔面をさらに踏み潰しレフリーストップ。そして四戦目に至っては、オープニングアタックの右下段回し蹴り一撃で相手のすねの骨を闘争心ごとへし折ってみせた。試合時間五戦合計一分五十一秒。内一戦はデビュー戦の一分間リンチだから、ほとんど汗もかかずに勝利を手に行っている。

「優歌ちゃんの対応力ってホントにスゴいわよね、いくら相手がまだ全日本ランククラスではないとはいえ、あれじゃ相手はどうする事も出来ないわよ、正にうちのエースね、まさかうちのジムからこんな選手が出るだなんて夢にも思っていなかったわ、あの子、まだまだ強くなるわよ」

それ以上強くなってどーする！？　って感じなんですけどね、私はちなみに、対戦した相手は全て骨折やら大流血やらで病院送り。デビュー戦の女の子に至ってはショックでPTSDになり未だに通院治療中とか。空手時代でも一回り大きな外人相手に正拳で肋骨破壊とか下段蹴りでふくらはぎ裂傷とか平気でザラだった。悪魔ですよ、本当に。その柔軟な対応力、是非とも他の場所や場面でも生かせな

いもんですかねえ？

そんな残酷惨たらしいお姉の試合を見てきたからなのか、すでにリング上で始まっている前座同然の第一試合の内容なんてもんはタダのキャットファイトにしか見えなかった。女同士が容赦なく顔面を殴り合い、鼻から出血し、腕を有り得ない方向に曲げ極める姿は一般人にはかなり衝撃的かもしれないが、私からすると何か物足りなくちよつと残念な感じだった。やっぱり私もお姉同様、結構悪魔？

「流石に目が肥えているわね妹ちゃん、特にスタンドでの攻防中にやれガードが甘いだと間合いが悪いだとのブツクサ文句言いながら観戦してるところは、かなりの格闘技マニアと見たわ」

「……聞こえてましたか、すみません……、いや、ついつい、ああいった場面見ると熱くなっちゃう質なもんですから……」

「どう、妹ちゃん？ ならばいつそ、妹ちゃんも私のジムに入ってお姉さんと一緒に汗を流してみない？」

「……いやー、それは流石にちよつと……、プロの格闘家になりたくて空手始めた訳じゃないし、それにまだお姉みたいに空手の道極めた訳でもないし……」

「あらそう、でも気が向いたらいつでもトレーニングだけ来て貰ってもウエルカムよ、胡桃ちゃんも練習相手が多い方が上達も早くなるかもしれないし」

「……うえっ、那奈さんまで来たらあだし、どこにも居場所ば無くなるだよー……」

……格闘家、か……。

そっぴゃ私、将来一体何になりたいんだろっ？

同じくスポーツで青春時代を謳歌する仲間達は皆、それを職業にするかどうかは別として、ある程度の高い目標を持って日々の練習に勤しんでいる。

翔太は亡くなった父親の貴之さんの跡を継ぎロードレースのチャンピオンになる為、翼は新作さんとの約束でサッカー日本代表選手になって活躍する為、一茶は名門柔道一家の面子にかけてオリンピックで金メダルを取る為。

千夏は私と同様最終目標がいまいち曖昧だけど、根っからの負けず嫌いで最近はいギリス時代の知り合いである元陸上メダリストのソフィーさんの指導を受けて七種競技の練習を始めている。でも本人かなり嫌々みたいだけど。

始めた動機も曖昧、最終目標も曖昧、そしていつまで続けるのか、この経験を人生にどう生かすのか一番曖昧なのはこの私。まだ高ーだから将来何なりしたいのなんて決めるには早過ぎるのかもしれないけど、何かそういったビジョンが極めて不透明なのはもしかしたら女子四人の中で私だけなのかも。あの小夜だって、技量はどれくらい瑠璃のお姉さんになる、と頑張っているのだから。

『……何で私、空手始めたんだっけなあ……？』

その理由は思い出すまでも無くただ一つ。まだ小学校に上がる前の

幼き頃、公園で意地悪な小学生男子達に私と小夜が虐められていた時、どこからともなく颯爽とお姉が現れみんなまとめてやつつけてくれた姿を見て、『私もお姉みたいに強くなりたい!』と思ったのが始まりだった。

同時、お姉もアルビノの疾患を馬鹿にするいじめっ子に負けないように空手を習い始めたばかりで、よく私も父さんに連れられお姉が通う空手道場に行ったものだ。辛い練習にも根をあげず涙も見せないお姉のその姿を目にして、幼心ながらも強い憧れを抱いたのをよく覚えている。

『私も、空手やりたい!』

月の習い事代増加で自分の遊び賃が減る事を子供みたいに渋る父さんを何とか説得して、私はお姉と同じ道場に入会して空手の道を歩み始めた。最初は怖くて痛くてすぐにでも逃げ出したくなかったが、ただたどしくも正拳突きをの形を取る私の姿を見てニコニコと微笑んでいるお姉を顔を見たら、それも我慢して続けていく事が出来た。

全てはお姉みたいな男の子にも負けない強い女の子になりたくて、お姉みたいに弱い者を助けてあげられる優しい人間になりたくて……。

でも、その願いは次第に私の心の中で小さいものになっていった。お姉が優しい人間じゃなくなった、それもある。お姉が強きを挫き弱きも挫く大暴君になってしまった、それも……、ある。うん、あるある。お姉が私の理想的な立派な人間じゃなくなってしまったつても確かにあるが、それ以上に、お姉が私から遥か遠く存在になっってしまった感じが一番大きい。

中学生になってから全国大会でもメキメキと頭角を現し、二年生で全日本制覇、その勢いで初めて出場したジュニアの世界大会も制してしまい、高校一年生では並み居る世界中の成人女性選手達を圧倒的強さで次々と倒し無敵の空手女王をなったお姉。

もちろん、こんな大偉業を成し遂げた日本人選手は他にいない。私の前回の大会での中学生での関東大会制覇も相当凄い記録らしいが、お姉の残してきた記録に比べれば微々たるもの。全く敵わない。追い越すどころか、追いつける気配すら感じない。

正に雲の上の人。体力が、精神力が、何もかもレベルが違いすぎる。だから私は、『いつしかお姉みたいになりたい』から、『少しでも近づければ』程度にしか思わなくなってしまったのだ。つまり、挫折したのだ。

『おめーはあたしより遥かにデカイ体になってフィジカルに恵まれたっつーのによ、どーも何かこう、メンタルが弱えっつーか、気合いがねーっつーか、覚悟がいまいち足りねーんだよねー』

ジムが休みの日、たまにお姉は空手道場に足を運んで私の練習する姿を見に来て、かつての師匠である道場の師範と談笑したりしてる。もし今も、お姉と一緒に同じ道場で汗を流す事が出来ていたら、私のモチベーションもこれほど下がらずに済んだかもしれない。今も尚、お姉に追いつく事を目標として心から鍛錬に励めてたかもしれない。

でも、もう道場の練習生の名札にお姉の名前は無い。世界女王になったお姉は程なく空手の道を絶ち、非行に走りその闘争心を日々の喧嘩や騒動に使うようになった。渡瀬家崩壊寸前の暗黒時代、私が小学校高学年だった頃の話だ。その話の詳細はまた、別の機会にで

も説明させて貰うでしょう。

今現在、お姉がいた頃に練習生として道場に在籍しているのは私一人だ。もうかれこれ十年近くなるのかな。最近是不況からかあまり空手を習い事として子供にやらせる家庭も減ってきたし、大人の男性も当時に比べて三分の一くらいになってしまった。師範もすっかり、白髪が増えてお爺さんっぽくなった。

ほとんど惰性、他にやる事が無いから続けていると言っても過言ではない私の空手道。正直、もう続けているのが辛いと思う時もある。他に目指したい夢が何かあれば、多分すんなり辞められるんだろうけど、それでもダラダラと続けているのは、同じ屋根の下で暮らしながらも、何か最近さらに距離感を感じ始めたお姉との繋がりを保ちたいからなのかな……？

「だったら尚更、うちのジムに入って初心を取り戻すべきじゃないかしら？」

大会の試合はすでに第五試合まで終了していた。女子格闘技界きつての一大イベントだからか、会場には熱心な観客が時間を追う毎に連れ増えていき、中には男子の試合内容を凌駕するほどの熱戦が繰り広げられたバトルもあり、かなりの盛況振りを見せていた。

「……また、その話ですか、会長さん……」

しかし、かく言う私は先程からの自分のこれまでの人生の歩みやら将来への不安やらで完全にテンションは下降、自販機のある休憩所

で一人、ジュースを飲みながら物思いに耽っていた。そこに、一息入れに來た橋口会長が現れた訳で。

「あれ、胡桃ちゃん、一緒じゃないんですか？」

「そろそろ優歌ちゃんの試合の時間が迫っているからね、色々と準備をさせているのよ、今のあの子には、重たい荷物を運ぶのもトレーニングの一環よ」

「……頑張ってるなあ、あんなに体小さいのに、元気だなあ……」

身体能力や格闘の強さは私の上なのかもしれないけど、夢に対する熱い気持ちや、もっと強くなりたい、もっと上手くなりたい、っていう向上心は彼女の方が数段上かも。私、どこで失ってしまったんだろう熱い魂。他人の事ばかりに必死になって走り回って、何か自分の事をずっと蔑ろにしてきてしまった気がする……。

「んっもう、優歌ちゃんから話を聞いて、妹ちゃんにはもっとこの大会を楽しんで貰えると思ってたのにね、何かあんまり、お気に召していない様子ね」

「……そんな、気に召さないだなんてそんなつもりじゃなくて、楽しい事は楽しいんですけど、何かちょっと、同じ女性でこんなに頑張ってる人達がたくさんいるのに、自分は何やってんのかな、って……」

「それは多分きつと、妹ちゃんは観戦側より実戦側のタイプだから

じゃないかしら？ ウズウズしてストレスを感じているのよ体も心も、『こんな場所にいないで私もリングに上がって大暴れしたい！』みたいな？」

「……そういう訳でもないんですけど……」

「じゃあアレね、別の形で欲求不満が溜まって女性ホルモンの分泌が悪くなっているんじゃないかしら？ ダメよ我慢は、彼氏いるんでしょ？ 怖がる事無いわ、ガンガンやりまくっちゃえばいいのよ！ こういうのは若い内が華よ、歳取ったら私みたいに手も握ってくれなくなっちゃうんだから」

「……いや、それかなり違いますし、相当話がズレてきてる気がしてならないんですけど……」

……しかし、何で私の周りってこんな性に対してオープンな人ばかりなんだろう？ 男性経験海千山千の姉に四十超えて未だビンビンの父にエロ話好きのチビ子とビッチに変態丸出しの茶髪野郎……。しかも彼氏がムツツリスケベとくりやもう百点満点ですよ、全く。

「でもね、それが青春ってもんだと、私は思うわ」

うなだれている私の肩をポンポンと叩いてウインクをした会長さんは、自販機で買った炭酸栄養ドリンクを腰に手を当てて一気飲みした。前者は極めて女性らしい仕草だが、後者ははっきり言ってこの風呂上がりのオッサンですか？



「妹ちゃんの年齢で人生のベクトルを定めた人なんて、そうそういたりするもんじゃないわ、妹ちゃんのお友達だって、やれプロライダーだのサッカー選手だの金メダリストだの言っても、それは親御さんの影響があって決めた事なんですよ？　なら焦る事なんてどこにも無いわ、むしろ、妹ちゃんには様々な選択肢があって様々な可能性が秘めているって事を有り難いと思わなくちゃ」

「……そう、なんですかね……」

「そうよ、私なんかパパの影響でどうしても格闘技の世界に進む事しか許されなくて、本当は普通の女の子みたいに可愛い服を着たりお化粧したりしてもっとお洒落したかったけど、男がそれじゃ対戦相手が気持ち悪がるからって格闘技選手らしく丸刈りにせざるを得なかったのよね」

「……それは、幾分仕方ないかと思うんですが……」

「それに、夢や希望は若い時に見ついたり叶えられなくても何も問題は無いわ、青春時代は生きている限り青春時代よ、私も嫌々、男としてやってた格闘家を引退してから、こうして希望通りの姿になれたんだから」

「……例えば話が難解過ぎて、いまいちよく納得出来ないんですけど……」

「もうかれこれ私も四十になるけど、まだまだ私だって路頭に迷う時があるわ、煮え切らないな、中途半端だなんて、今の妹ちゃんみたいに、ね」

「えっ、そうなんですか？ 会長さん、思いつ切り人生謳歌してる様にしか見えないんですけど……、例えばどんな？」

「私って、女なのか男なのかって」

「……………」

激しく後悔。聞くんじゃなかった。

「つゝまゝりゝ、迷いや悩みもみんな楽しんじゃえばいいのよ！

アハハって笑い飛ばせばいいの！ 妹ちゃんはどうも笑顔が足りないわね、今のネタ、優歌ちゃんなら床にのた打ち回って大爆笑よ？」

「……笑いどころってヤツですか、ごめんなさい、私にはやっぱりソレ系のネタ、難しすぎます……」

何か、肩の荷が軽くなったんだか重くなったんだかはつきりしない人生相談だった。でも少しは、モヤモヤした気分が晴れた気がする。そうだね、私は空手を始めた理由がお姉の影響で自分の意志じゃない事を少しネツクに思ってたけど、よくよく考えてみたら翔太達も一緒なんだ。

つーか、何事もきつかけなんてそんなもんなのかもしれない。誰かに憧れて、そんな風になりたい、それに近づきたい。これだって立派な自分の意志なんだ。最初から自分の生まれた意味、成すべき事がわかってる人間なんて誰一人いる訳が無い。迷って、悩んで、苦しんで当たり前なんだ。

『あたしはさ、虎太郎ちゃんや麗奈ママみてーな強くてカッコいい大人になりてーんだ、ちよつと怖くて、ちよつと悪くて、ちよつとガキっぽくて、でもすげー優しくていい人、どうよ、最高じゃね？』

そういえば、お姉も昔こんな事言ってたっけ。そうなんだ、お姉だつてそうなんだ。私がお姉に憧れた様に、お姉も父さんと母さんに憧れて、強くなりたくて空手を始めたんだ。私もお姉も、一緒なんだ！

「少し気が晴れたような表情になったわね、じゃあ最後に、妹ちゃんがこれから頑張つて空手を続けていけそうな気分になれるいい話を教えてあげるわ」

そう言つと、会長さんは休憩所の椅子に座っている私の前にしゃがみ込み、膝を抱えて笑顔で驚くべき事実を話してくれた。それは、今まで一度たりとも、私に明かさなかつたお姉が抱いている夢。

「妹ちゃん、あの子はね、あなたの為に総合格闘技を始めたのよ」

「……えっ、私の為？」

「そう、あの子は、このまま女性が空手を続けていつても、それが食い扶持にならない事を悟つてたの、女性で師範代になって道場を経営するのはかなり困難な事だからね、でも、女子の総合格闘技界

はまだこれからの展開によっては伸びしろが見込めるイベントだし、観客数が増えてギョランティが増えれば、ちゃんとプロとして食べていけるって思ったみたいよ」

「……あのお姉が？ 明らかに貯蓄とかする堅実なアリタイプではなく、その日暮らしで後先考えないギリギリスタイルのあのお姉がそんな事を？」

「でも、現状のイベントの規模や観客動員数では各選手に満足はいくギアラが払えている訳では無いわ、どうしたって男子の大会とは華やかさもレベルも全然敵わないもの、実際、ほとんどの選手が他に副業を抱えて何とか日々の生活をしているのよ、仕事を終えて、クタクタの体で毎日練習を重ねているの」

「……大変そうですね、でも、それとお姉が私の為に総合を始めた事とどういう関係が？」

「あの子はね妹ちゃん、あなたが今までずっと空手で頑張ってきた努力を、タダの青春の1ページの思い出だけにしたいくないのよ、確かな人生の糧になるような、そういう存在にしてあげたいって思っているの」

「……つまり、それって、私もお姉と同じ様に格闘技を職業に……？」

「そう、そこまではつきりとは口には出さなかったけど、あの子はあなたが自分と同じ、プロの道に進んでくれる事を望んでいるわ」

正直、ぶったまげた。まさかお姉が、将来とか生活とか老後の不安

とか全くの無縁だと思っていたお姉がそんな事を考えていたなんて、夢にも思わなかった。ましてや、私にもプロの格闘技になって欲しいなんて……。

「……でも、安定した生活をしていくには厳しいんですね、女子プロの世界って……」

「今のままではね、だからあの子は、一度は道を断った格闘の世界に戻って、再び闘い始めたのよ、自分が派手な試合をして勝ち続けて、もっと観客を呼んで女子格闘技界を盛り上げて、もっと選手達の金銭的や生活面もケア出来る環境を作って、いつかあなたに将来の目指す職業として自分と同じプロ格闘家を選択して貰えるように、ってね」

「……そこまで決意して……、私、お姉がまた格闘技を始めた理由は、趣味が気紛れか何かだと思い込んでた……」

「あの子本気よ、その証拠に、只でさえ少ない自分の稼いだファイTMマネーを、いずれイベント経営の基礎基盤となる団体株式会社の設立の費用にほとんど注ぎ込んでるんだから」

「……！」

……そんな凄い責任感、いつものお姉の口振りから一度も感じた事なかった。いつもお姉は自分の懐にファイTMマネーが入ってくる事ばかりを喜んで、自慢して、そのくせそのお金は家に入れる事もなく、全部遊びで使ったとか、飲み代に消えたとかヘラヘラ笑って……。

「もうすでに、この優歌ちゃんのお思想に便乗した関係者達が何人かいるわ、あの子一人じゃ金勘定すら危ういからね、かく言う私もその一員なんだけど」

「…………お姉が、そんな事まで考えて闘っていたなんて…………」

「実はこの大会だってその一環なのよ？ 今日はいまあまあの成果を上げた方ね、成功と言っていていいわ、でも、その夢への実現にはまだまだたゆまぬ努力が必要よ」

でも、もしお姉のその理想が実現すれば、今現在も仕事をしながら試合に臨む他の選手達も生活に困窮する事なく練習に集中してコンディションを保てるようになる。そうならばもっといい試合が出来て見に来るお客さんも増えるかもしれない。あくまでそれは、理想の範疇にしか過ぎないけど…………。

「でもね、言い出しつぺは大変よ、周りの環境が整っていない今、あの子はどんなにキツイ状況下でもリング上で最高のパフォーマンスを見せないといけないんだから、そうでないとお客さんは呼べない、言い訳なんて出来ない、あの子は自ら、自分がスーパースターにならなきゃいけない道を選んだんだから」

「……………」

「しかしまあ、私達格闘技界に属する関係者からしても、こんな野心溢れた人間が現れてくれた事は非常にウェルカムだわ、正に待ち

望んでいたニューヒロインね、でも、本当のところは女子格闘技界の繁栄云々なんてどうでもよくて、ただ単に、あの子はあなたの事だけを考えて始めた事なのかもしれないわね、妹ちゃんがこれから、挫けずに一つの道に精進してくれる事を願って」

「いや、そんな、いくら何でも、そこまでは……」

「だって、言っただわよあの子、『もしあたしを倒す事が出来る人間がいるならば、世界広しとは言えただ一人、アイツだけだ』って」

「……えっ!？」

「これってつまり、自分が無敵のスーパーヒロインになった後、その称号をあなたに継いで貰いたいって意味なんじゃないかしら？それまでは誰にも負ける気なんてこれっぽっちも無いみたいね、どうやらあの子の本来の目的は渡瀬姉妹による女子格闘技界独占よ？まあ怖い、私達の事情なんてとても眼中にないわ、でもまあ、私は楽しませて貰えればそれで良いんだけどね」

「……お姉……」

「頭の痛い問題児だった困ったお姉さん、少しは妹ちゃんの見る目も変わったかしら？心から愛されてるのね、本当に良い姉妹だわ、あなた達」

「……どうしてくれるのよ。いい加減この御時世、空手少女なんてどこかの香港映画じゃあるまいし流行らないからそろそろ潮時かな、なんて思ってたのに、足やら腕やらいつも生傷や青あざが出来まくって学校の制服着るのに恥ずかしいから、ここらが引き時かな、な」

んて思ってたのに……。

絶対に辞められなくなっちゃったじゃないか、お姉のバカあー！！  
もう本当に余計な事ばかりして、人に何の相談も無しで勝手にズケズケと押し進めて、弱音も吐かずに、辛い顔一つも見せずに、全部一人で背負いこんで、そのクセ普段は馬鹿装って悪ぶって……。

「ちなみに妹ちゃん、私があなたにこの話をしたって事は優歌ちゃんには内緒よ、本当は口止めされてるの、『こんな性に合わない話、アイツの前じゃ絶対口が避けても話せねー』ってね、でないと私が『お喋りババア』って怒られちゃうもの、いいわね、女同士の約束よ？」

「……はい、話してくれてありがとうございます、会長さん……」

……もう本当、バカだよお姉。本当に素直じゃないよ。過去の悪事をふてぶてしく自慢するくらいなら、今やろつとしてゐる善意の事を胸張って自慢しろっつーの！ この話、父さんや母さんが聞いたらきつと喜んで褒めてくれるはずだよ。お姉も立派な大人になったんだ、って。いづみさんだったら泣いちゃうかも。でもあの人達もお姉以上に素直じゃないからなあ……。

「会長さん、ここにおつたのですか」

「あらやだ胡桃ちゃん、もうそんな時間？」



外と休憩所を仕切っているガラス戸から、ひよっこりと顔を出してきた田舎っ子顔。何とも間の抜けた東北弁が、ちよっとヒートアップして目頭が熱くなつてた私の心をクールダウンさせてくれた。そうだ、もうメインイベントの時刻まであと三十分ほどになったんだ。

「ありやりや、那奈さん、目え真っ赤だで、花粉症か？」

「……いや、ちよっと、ね、まあ気にしないで」

「都会っ子はこれだから駄目だんずなー、花粉症とかアレルギーとかインフルエンザに簡単にかかつちまうしょー、免疫足りねーっペよ、毎朝起きた後、寒風摩擦とかしねーからそったら鰯っ子なんだべ」

「本当に一言一言余計だよねアンタ、すっかりムードぶち壊したよ、お礼に金属ヤスリで磨り減って無くなるまで擦り続けてあげようか？」

さて、それはともかく試合時間が近づいているという事は、その愛しのお姉様を深い夢の中から現へと連れ戻さなければいけない訳でもそれは屋根が燃え落ちそうな火災現場から中に取り残された人を救助しなければならぬくらい、非常に困難で危険なミッションな訳で。

「犠牲となる獲物が必要ね、胡桃ちゃん、神ちゃんは今何してるの？」

「何か神崎センサー、今日はがっぱど試合で怪我した選手がおつて、全然手が離せねーみてーなんだべ、さっきた医務室行ったらすげー慣れた手つきで瞼の傷口縫合しとったんずや、やっぱりお医者さんだんずやんだなー、あの人」

……いや、そりゃあ彰宏さんだつて大手大学病院に勤めてた時は評価の高い若手の外科医だったらしいからねえ、基本縫合ぐらい出来ないとマズいでしょ。例え今は作品内随一のヘタレキャラだとしても。

「じゃあ、どうやら適任者は一人しかいないみたいね、妹ちゃん、後はよろしく」

「……ですよねー、そうなりますよねー、やっぱり……」

「あなたの大好きな眠れる森の美女のお姉様、その優しいキスでその目を開けてあげて頂戴な？ そのまま頭から食べられないように十分気をつけてね」

「那奈さーん、どうかご武運をー」

眠れる森の美女？ 眠れる獅子か森のクマさんの間違いじゃないですか、この場合？ 嫌だなあ、この役目。私、ムツゴロウさんじゃないから猛獣の扱い慣れていないんですけどー！？ ましてや大山先生ほど空手道極めてる訳じゃないしー！

どんなにお姉が私の事を想っていてくれたとしても、こればかりは話が別！ 誰か麻酔銃用意してー！ もしくはいつそ猟銃会

の人呼んでー！ 熊出没注意、嗚呼、多分数分後の私は川を登る秋  
鮭の様に、鋭い爪撃で空高く狩り飛ばされてるんだろっなあ……。

## 第75話 君がいた夏

「…………ぐがー、ぐがー…………」

「…………さて、と、どうしますかねえ…………」

こちらスネーク、たった今、世界中の全人類の脅威である無差別大量殺戮生物が眠る会場ホール内の控え室に潜入に成功した。ターゲットは未だ大イビキをかいて爆睡中の模様。私に課せられたミッションは、この凶暴な生物に不快な刺激を与える事なく気分爽快な目覚め方をさせる事、である。

無論、失敗は許されない。失敗、それは即座に私の死を意味する。下手な起こし方をすれば例え姉妹とはいえ容赦なく、その殺人兵器とも言えるコンクリートよりも硬い鉄の拳と、金属バットすらもへし折る金棒のような回し蹴りが襲いかかってくるのは過去の経験で嫌というほど学習済みだ。

かといってこのミッションを放棄する訳にはいかない。この控え室の外では、すでに支度を済ませあとはリング入場の時を待つのみ。会長さん達と、今宵のメインイベントを飾る主役の登場を楽しみにしている、会場に詰め掛けたほぼ満員に近いたくさんの観客が控えているのだ。

これは私にしか出来ない、達成出来ない重要なミッション。この大会が成功するか否かは全て、私のこの腕にかかっているのだ……。

…………なんちゃって。まあ実際はそれ程重要なミッションでも何でも無いんだけどね。簡単に言えば、会長さん達にうまい事危険かつ面

倒臭い役目を無理矢理押しつけられてしまったって訳。

ヒドい扱いです、私が部屋に入った途端、会長さんか胡桃ちゃんか知らないけど誰かが外から扉の鍵閉めやがった。室内の安全が完全に確保出来るまで外に出てくるな、って事？

私は生贄かつつの！ 最低だあの人達、その正体は絶対人の面を被った鬼か悪魔だ。一般兵一人ぐらいがどうなっても当局は一切関知しないと、そう存じ上げますか？ これだから上層部の人間ってヤツは……。

「……お姉？」

「……ぐっがつがつ、すぴー、ぐがー……」

お姉に心地良い目覚めを体感してもらう為の方法として、横になっているソファーを蹴り飛ばして床にダルマ落とし状態にするか、顔に塗れタオルをかけて窒息させるか、それともお姉が持っているタバコに火を点けてそれを火災報知器に近づけスプリンクラーを発動させてずぶ濡れにするか、あるいは昔のバラエティー番組よろしく早朝バズーカでもかましてやろうか、などなど色々と考慮をしてはみたものの、どれもネタとしては最高かもしれないが、それらは間違いなく私の命と引き換えのコメディーになると思われたので自粛した。

私だってまだ早死にしたいわけではない。いくら空手やってるからってそりゃ殴られたら私だって痛いもんは痛い。正式な組手でも勝てる気がしないのに、マジ喧嘩したら間違いない一方的にボッコボコにされるのは目に見えている。これじゃコメディーどころかR15指定の血みどろの大惨劇になってしまう。

やはり最善かつ最も安全な方法はいつも通り、引火性爆発物を取り扱うように細心の注意を払って、丁寧に優しくそしてたっぷりの愛情を持って起こすのが一番だろう。とはいえこの方法で私の身の安全が100%保証出来る訳では無いが、少しでもゲームオーバーになる確率を減らしておく事に越した事はない。

第一、この身を犠牲にしてまで笑いに走る勇気とキャラ設定は私には無い。そんなヨゴレ役は翼と薫のお笑いコンビがやればいいのだから。あの二人なら笑いさえ取れば命を落としかねない強烈な殺人ツッコミでも喜んで受け入れるだろうし。

「……ねえ、お姉、もう時間だよ？　そろそろ起きようよ、ねっ？」

「……むうーん、にやむにやむ、もうこれ以上殴れないよー、にやむにやむ……」

「……ハア？」

……何の夢見てんの、この人？　『もう食べれない』とかなら良く聞く寝言だけど、『殴れない』ってただけ物騒な悪夢ですか？　いや、本人からしたら悪夢じゃなくて最高のシチュエーションか。夢に出てる人達が可哀想です。『二時間殴り放題バイキング』なんてタイムサービスあったら喜んで行っちゃいそうだなあ、この人。従業員死んじやうよ、みんな。

「……ほらお姉、会長さんも胡桃ちゃんもみんな待ってるよ、いい加減そろそろ起きないと試合開始に間に合わない……」

「……うるせーなあー、あとムエタイとコマンドサンボとブラジリアン柔術を三皿くらい……」

「殴れないとか言つといて全然殴り足りてないじゃん!? つーかもうタイムサービス終了ですよ、お客様! 当店は持ち帰り厳禁ですから残した商品をパウチとかに詰め込まれたら困ります!」

「あああああああ!!! 人が気持ち良く寝てんのにギヤーギヤーうるせーな、てめーはよ!」

「ちょ、ちよつと待った! お姉、まだ寝ばけてるでしょ!? 私だよ私、肉親殺害は重罪だよ! 暴力はんたーい!!!」

しまった。不覚。あまりに下らない夢の中の話についていついッコミがキツくなって、制御に失敗してお姉原子炉の臨界点突破を許してしまった。扉に鍵を閉められ密室状態の控え室に閉じ込められた私と寝起き最悪の人間核爆弾。もう大変です。エクスプロージョンです。逃げる間も無く次の瞬間には、私の身にチェルノブイリの五倍ほどの衝撃波が襲いかかってきた。

さっきまで横になってたソファァーをこっちに向かってブン投げてくれるわ、壁に立てかけてあったパイプ椅子を持ち出して脳天に振りかざしてくれるわ、もんどりうつて倒れた私の両足を掴みグルグルとジャイアントスイングして放り投げてくれるわ……。これらのお姉の暴走で私がどんな惨たらしい姿になったかは皆様の御想像にお任せします。これって軽い死刑執行だよな? 私、そんな残酷な刑を受けるような大罪、いつ犯したっけ?

「……ん、あれ? 何だ、良く見たらおめー、那奈じゃねーか?

何だよ、てつきり翔太か神崎のアホがあたしの安眠を邪魔しに来たのかと思って勘違いしちゃってたぜ」

「……良く見なくても声聞きゃわかんذار、気づけっつーの……」

「オイオイ那奈、おめーは何で髪も服もグシャグシャになつて、しかも頭から血い流してんだ？ 襲われたのか！？ 誰にやられた！？ あたしの可愛い妹をこんなに痛めつけるだなんて、どこのどいつだ、許せねー話だなー！！」

「アンタの仕業アンタの仕業これ全部アンタの仕業！ 控え室の中がメチャクチャなもの、ソファーが壁に突き刺さってるのも、私の頭がパツクリ割れてんのも、みんな全部全部アンタの仕業！！」

「しかも結構深い傷みてーだな、あまりカリカリしてつと噴水みてーに血がドバドバ噴き出しちまうぞ？」

「……そりゃあ、パイプ椅子で殴られた後、ジャイアントスイングで頭から壁に向かって投げられりゃあ誰だつて出血ぐらい……」

「急いで止血しねーとな、とりあえず紐か何かで頸動脈締めときゃ止まるか？」

「まだ痛めつけ足りないと仰られますか！？」

……まあ、出血したつて言ってもそんな大した程でもないんだけどね。傷口にちよつと指を触れたら血が付く程度で済んだよ。私だつて伊達に普段から体鍛えている訳じゃないし、こんな理不尽な暴力行為はいつも家でも日常茶飯事ですから、もう慣れっこです。



お陰様でマンションの二階のベランダから植木鉢が落ちてきても怪我一つしない頑丈な石頭を持つ少女に成長する事が出来ました。幼稚園時代に私をバイクの後ろに乗せて路面に振り落としてくれた父と、生後八ヶ月の時に『高い高い』をして頭から真つ逆さまに地面に落としてくれた母と、私を毎日サントバツクのように殴る蹴るして遊んでくれた姉の温かい愛情にはとても感謝しています。本当にどうもありがとうございます！……バカヤロー……。

「……で、もう気が済んだ？ 済んでない訳無いよね、こんだけ好き勝手自由に暴れまくったんだから」

「おう、スッキリだぜ！ いやー、しかし良く寝たわー、やつぱり寝起き後の運動は気持ちが良いもんだな！ これで頭も体も完全にリフレッシュ出来たぜ」

「……あー、そうですか、そりゃ良かったですね、こっちはたまったもんじゃないけど……」

「んで、朝飯はマダー？」

「……ここ、家じゃないし、しかも朝じゃないし……、つーかお姉、自分が今どこにいるかちゃんとわかってる？」

「あー、そうか、そういやここはホールの控え室だったっけか？ おめーがいるから家にいるんだとすっかり勘違いしちまってたぜ」

「……ちゃんと起きてる？ まだ寝ばけるんじゃないの、お姉？」

「あれ、つーか何であたし、ここにいるんだっけ？ ここに何しに

来たんだっけ？ 最近物忘れがひどくてなー、歳は取りたかねーな  
ー、全く」

「……頭出しな、仕返しも兼ねて思いっ切りパイプ椅子で頭ブツ叩  
いて記憶回路治してやるから」

「……冗談だよ、そんな怖えー顔すんなって、気弱で繊細でいたい  
けなお姉さんにもっと優しくしてーん？」

何がいたいけど、その前にアンタがもっと可愛い妹に対して優しく  
しろっつーの！ 相手がまだ私だったからこの程度の被害で済んだ  
けど、並みの人間だったら今頃病院か火葬場送りだよ、この暴拳は  
？ 前にお姉を起こしに来た彰宏さんが生死をさ迷う羽目になった  
理由が良くわかった。下手すりや警察沙汰の立派な暴行事件になっ  
ちゃうよ、これは！

「……確かに、歳を取ると物忘れが多くなって困るのう、ワシもい  
つ飯を食ったのかすっかり忘れて、いつも嫁に怒られてばかりじゃ」

「うわっ！ いたんですか長老さん！？」

「おうジジイ、おはよう」

私のお姉の間に、いつの間にか入り込んで椅子に腰を掛けてるヨボ  
ヨボフガフガのお爺さんが一人。橋口会長の実のお父さん、通称長  
老さん。そういえば私が胡桃ちゃんと大会本部室に向かった時から  
ずっとここでうたた寝してたっけ。

……ん？ ちよつと待つて、つーかこの人、お姉が暴れて部屋を破壊しまくつてた時、どこにいたの！？ あんなにソファーや椅子やらが控え室の中を飛び回っていたのに、何で傷一つ負わずに平然とここに座っているの！？

「お嬢ちゃん、ワシはここから一步も動いてはおらんぞ、お前さんがワシの気配に気づいてなかっただけじゃ」

「那奈、このジジイをタダのボケ老人だと思ってナメてかからない方がいいぜ、リアル亀仙人って言うのはこのジジイの事を言うのさ」

「……リアル亀仙人？ 何それ、スケベって事？ あるいは普段サングラスにアロハシャツ着てるとか？」

「わかってねーな、こう見えて実はとんでもねー武道の達人だって事だよ、まあ、おめーもこれから何度かジムに通う事になりや嫌でもわかるさ、マジでハンパねえぞ、このジジイ」

「……そういえば、さつき会長さんも熊がどうのこうのとか言ってたっけ……」

何がどうハンパねえのかはよくわからないけれど、武道や喧嘩の強さでこれほどお姉が他人を称えるだなんて珍しい話だ。父さんぐらいじゃないかな、こんな特別扱いするのは。って事はこの長老さんも機動隊百人を全滅させたり拳銃の弾避けたりするレベルなの？ 何か最近の私の身の回りの人達、超人じみてる人多すぎだよ。いずれは本当にかめはめ波まで放つ人物が現れそうな予感……。

「あら、もうすっかりお目覚めのご様子ね、優歌ちゃん？　もう試合前の準備運動やストレッチすらも必要ないくらいハッスルしたみたいね」

「おう会長、まだまだ暴れ足らねーな、残りはリングの上で晴らすぜ、今日はこの優歌様のキャリア最高の試合を見せてやるよ」

「あらあら、相変わらずお転婆さんな事、楽しみね、ウフフ」

内から物音が聴こえなくなってもう安全だと判断したのか、嚴重に閉じられていた控え室の扉の鍵を開けて、会長さんが悲惨な室内の状態に気にする素振りもせず普通に中に入ってきた。目の前の惨状に気づいてない？　目線に入っていない？　それとも、敢えて見て見ぬ振りしてる？　あのー、ソファーとか机とか室内に置いてあったテレビとかみんなボコボコになってるんですけどー、これって会場関係者宛てに弁償とかになったりしないでしょうか、会長さん？

「妹ちゃん、お役目ご苦労様、外からでも物凄い怒号と爆弾テロみたいな騒音が聴こえてきたから、さすがの妹ちゃんでも命が危ないかしら？　と思つて危うく横田基地にSWATチームの出勤を依頼しちゃうところだったわ、でも、やっぱり妹ちゃんはお姉さんの扱い慣れているのね、あなたにこの役目を頼んで正解だったわ」

「……ハア……」

「あらやだ妹ちゃん、頭からつつすら血が滲んでるわよ？　これは大変だわ、今すぐ医療室に行つて首を縛つて止血しないと」

「……アンタ達、マジで覚えとけよ……」

……SWAT呼んでる暇があるなら、アンタが助けてよ！ とりあえずはお姉の師匠なんだから強いんでしょ！？ って話だよ、全く。それより何より気軽に電話一本で米軍SWATチームが出動出来るかつつの、蕎麦屋の出前じゃないんだから！ もうどこまでが冗談でどこからが本音なんだか全然わかんない。会長さん、あなた一体どこの米国防長官なんですか？

「……なんまいだぶつ、なんまいだぶつ、なんみよーほーれんげーきよー、はんにゃーはらみた、ぎゃーていぎゃーてい、はらぎゃーてい……」

「……胡桃ちゃん、私、まだ死んでないから……」

「うわあああああ出たあああああ……！……！ 崇りじゃー、山神様の崇りじゃー！！ 那奈さん、あだしは悪くねーよ、どうか恨まんでけろじゃー！！ 悪霊退散、悪霊退散！！」

「だからまだ死んでねーつつの……！！」

……胡桃ちゃんに至ってはこの有り様。会長さん曰わく、室内からの物騒な物音を聞いて、てっきり私がお姉に虐殺されたと思ったらしく、ずっと扉の前に正座をして私が成仏出来る様に延々とお経を読み続けていたらしい。いざ私の姿を見るや塩まで投げてきやがった。筋違いな余計な優しさどうもありがとう。もし、本当に私が死

んだ時は絶対アンタも地獄に道連れにしてやるからな、覚えとけよ。

「……じゃあ優歌ちゃん、あと五分よ、急いで準備してね、胡桃ちゃん、パパを先にセコンド席まで連れて行ってあげて頂戴」

「はい、長老さーん、あだしと一緒に先に会場に行きんずやよー」

「おお、もうお迎えが来たのか、すまんのう香織、わざわざ三途の川を渡ってワシを待っていてくれたのか、フガフガ」

「あらやだパパったら、悪いブラックジョークね、『香織』って一体何号目の女なのかしら、モテモテなのね、ウフフ」

室内でちよつとした雑談を数分交わすと、会長さん達は一足早く入場口へと向かっていった。控え室に残ったのは私とお姉の二人だけ。

「何だ那奈、おめーも一緒に行かぬーのか？」

「私は見張り役だつてさ、お姉が二度寝しないように、あと試合用のパンツの中とかに催涙スプレーやメリケンサックとか凶器を仕込まないように、って会長さんが」

「するかアホ、集団で大乱闘するならともかく、タイマン勝負でいちいちそんなもん使うかよ」

「……じゃあ、乱闘では使ってた？」

実のところ見張り役っていうのは半分嘘で、今回のこのイベントで今までよりも少しお姉との会話の距離を詰めたかったのに、なかなかその機会に恵まれなかった私に対して会長さんが気を使ってここに残してくれたのだ。ついでお姉の緊張も解してあげて、この事。とても緊張してるようには見えませんけどねー。

「……………」

「……何だよ、何を黙ってこっちをジッと見てんだよ？」

「……いや、別に……」

「あたしが試合用の服に着替えるのがそんなに気になるのか？ この前風呂であれだけあたしの素っ裸のあんなとこやこんなとこ見てもまだ見足りねーってか、オイ？」

「バカ！ 違うつつの！ そんなんじゃないよ！」

「そうかそうか、じゃあしょうがねーな、ならばおめーの為にストリップダンサーみたいにエロやらしく一枚一枚脱いでいってやるよ、ちよつとだけよーん、アンタも好きねえ」

「気持ち悪い！ いちいち体をクネクネさせて脱がなくてもいいから！ つーかカーテンあるんだからそこで着替えなよ！ いくら私しかないからってここは家じゃないんだから、公共の建物の中で全裸になってはしゃぐなつつの！ 誰かが部屋に入ってきたらどうすんのよ！？」

「上等だぜ！　あたしは男がいようと女がいようと常にウェルカム  
戦闘状態、全裸が正装だからな！」

「胸張るな！　自慢にならん！　バカ言っでないでさっさと服を着  
なさい！」

……どうやら緊張してるのは私の方か。お姉からこのイベントに誘  
われた時、普段の生活の中ではなかなか切り出せない事も、こんな  
特別な場面なら言い出せるんじゃないかと思ってたのになあ。二人  
きりになれたせつかくのチャンス、聞きたい事がたくさんあるのに、  
何も言葉が出ない。何を聞いたらいいのか、ううん、何て聞き出し  
たらいいのかわからない。

「……あのさ、お姉、あの……」

「ん？　何だ？」

「……あの、お姉の、お姉のさ……」

「あたしの、何だ？」

「……お、お姉の試合の相手ってどんな選手なのかな！？　そうい  
えば私、相手の選手の事何にも知らないんだよね、どんな選手なの  
？　強い？」

……違う、そんな事じゃない。私が聞きたいのは、ずっと、ずっと  
お姉に聞きたかった事はそんな……。



「……うーん、『並』の選手が相手になったら強えーんだろーうな、何せ全米女子の階級別アマレスチャンピオンらしいし、黒人だし、女とは思えねーすげーガタイしてるしな」

「えっ、相手外人！？ しかもチャンピオンって、嘘でしょ？ 何でそんな輝かしい経歴を持つ選手がわざわざ日本で総合格闘技なんか出るの？」

「コーチが総合格闘技経験者らしくてな、レスリングじゃもう相手がいないーから、新たな戦場探してたところをこの大会のゼネラルマネージャーが結構な契約金積んでマッチアップしたんだとよ、要は半分売名、半分金稼ぎってところか」

「……ふーん、でもいくらレスリングチャンピオンとはいっても、総合に対して適応出来るテクニックとかあるのかな？ よく男子の試合でも、元金メダリストとか鳴り物入りでデビューしたのにいざ試合やったらボコボコにされちゃった選手とかいるし」

「実際、現地でも何試合かやって未だ負け知らずらしい、つつても向こうの女子格闘界がどれくらいのレベルなのかはよく知らねーけどな、今回の対戦、やつこさん達はあたしをタダの噛ませ犬だと思ってるナメてかかってるらしいぜ」

「……うわぁ、その選手マジで鳴り物入りでボコボコパターンまっしぐらになりそう……、でも伊達にアマレスチャンピオンじゃないだろうから、お姉でもいざ掴まれたりしたらヤバいんじゃない？」

「掴まれると思うか？ この渡瀬優歌様が？」

「……不用意な失言、失礼致しました」

「逆に掴みに来てくれりゃこちらから間合い詰める手間も省けるって話だ、黒い肉ダルマはさぞかし叩き甲斐蹴り甲斐があるだろうなー、飛んで火にいる夏の虫ってか、売名に使わせてもらうのはこっちの方だぜ！ 見てろ那奈、今日はド派手に決めるぜ、全米大号泣させてやるよ」

「……やっぱり、聞けない。お姉が試合前でこんなにモチベーションが上がっているのに、わざわざそれを下げさせるような真似なんて出来ない。私がお姉から聞き出そうとしている話は、全てお姉からすれば他人に触れて欲しくない事ばかりだ。そんな事で試合に影響が出たら間違いなく私は後悔するだろう。今のお姉には、女子格闘技界を盛り上げていかなきゃいけない使命があるのだから。」

『やっぱり、今まで通りの生活を過ごしていく事が、私達姉妹にとって一番良い事なのかな……』

「……………」

「……だから、何だよ？ 湿気た顔してだんまり決めやがって、何かあたしに不満でもあんのか、アン？ あんなら言えよ、お互い腹割って拳で語り合おうぜ、シュツシュツ！」

「いや、言葉で語り合うだけで結構です、つーか何でもないよ、個人的な悩みだから気にしないで……」

「個人的な悩み？ 生理が来ねーとか？」

「何でそうなるの？」

「いや、それは悩みじゃなくてめでたい事だな、おめでとさん、元気な赤ん坊産めよ」

「だから何で？」

「よし、御祝儀だ、お姉さんがなけなしのポケットマネーからお小遣いをあげよう、好きなもん買ってこい、あたしはいつものボスレインボーな」

「もう試合まで三分もないのに自販機まで走れって？ 何が御祝儀よ、タダのパシリじゃん、まあ良いけど……」

「つか、試合前に缶コーヒー飲む格闘技選手ってどうなの？ お姉はいつも試合前こんな感じなのかなあ？ 信じられない、私なんか試合中に吐きそうで絶対飲み物すらも口に出来ないのに。いくら義理の間柄だとは言え、ここまで性格や行動が違う姉妹も珍しいんじゃないだろうか……」。

「……ん？」

お姉が自分のバックから財布を取り出し小銭を出そうとした時、その小銭入れの裏の隙間から一枚の白い紙のようなものがヒラリと床

に落ちた。落としたお姉本人は気づいていないみたい。レシートなんて集めるような人じゃないし、落ちる時一瞬だけ裏面が見えたけど何か人影のようなものが描いてある、あるいは写ってるように見えた。何だろう、これ？

「…………お姉、何か落ちたよ、何これ？」

「ん？　おう悪い、札か？　　たたく、諭吉ちゃんはそんなにあたしの財布じゃ居心地悪いって言うのかよ」

「…………うん違う、これ、…………写真？」

「…………！」

「ちょ、ちよつとお姉!？」

私が拾ったその写真らしきものを見せると、お姉はこれまで見せた事もない様な驚いた表情をして、焦った様子で私の手からそれを奪い取った。そしてそれを再び財布の小銭入れの裏にしまい込み椅子に座ると、さっきまでの饒舌が嘘のように下唇を噛んで黙り込んでしまった。

「…………お姉…………？」

「……………」

「…………写真、だよね？　ハサミか何かで小さく切り取ったような、

あれって……？」

「……何でもねー、何でもねーよ」

見られたら困る物だったのだろうか。でも、私は見てしまった、その写真を。その写真に写る、一人の女の子の姿を。中学生くらいの小さい体に、まるで人形の様な白い、いや銀に近い軽くウェーブの掛かった綺麗な長い髪、そして絵に描いたような美しく可愛らしいその表情……。誰？ 少なからず私にとっては、一度も見た事の無い女の子……。

「……………」

「……お姉、あの……」

「……何でもねー……、訳ねーよな、そんないい加減な言葉で済まされねーよな……」

お姉はフウと一つ溜め息をつく、目を瞑ったまま一瞬笑みを浮かべて何かを決意したように両股を叩き私の顔を見た。その表情は昔、幼い私を公園のイジメっ子達から守ってくれた優しい笑顔。先程の写真の女の子の笑顔にも似た、温かみに溢れるものだった。

「こうなっちまったらもう、無理に隠し通したり話をはぐらかし続けたりのも限界だな、ほらよ、よく見ろ、多分これが、おめーが昔からずっとあたしに抱いてた疑問の答えだ」

さつきしまった財布を取り出し例の写真を取り出すと、お姉は躊躇無く私にそれを手渡してくれた。床に落ちた時に白い紙に見えたのは表が下を向いていたからかな。やはり写真だった。しかも、かなり年季が入っていて若干セピア色になっている。それでも、写真に写るその女の子の髪や素肌や着ている服の色はちゃんと確認出来た。

「……凄く綺麗で、可愛らしい子……、本当、お人形さんみたい」

「……人形、ね、しかも『子』ときたか、ひでえ言われ様だな、ハッ」

「……えっ、失礼だった？ まさかこれ、お姉じゃないよね？」

「んな訳ねーだろ、何十年前の写真だと思ってんだ？ 第一、あたしがこんなに髪伸ばしてた記憶がおめーにあるか？」

「……じゃあ、この人は、まさか……」

「……ああ、あたしの、本当のお母さんだ」

「……この人が、お姉を産んだ本当のお母さん……！ 私がずっと知りたくて、それでも聞けなかったお姉の出生の話。こんな綺麗な人がお姉のお母さんだったんだ。意外と言ったら失礼だとは思っけど、正直驚いた。年齢は中学生ぐらい、私達と同じくらいの頃の写真だろうか。正に美少女と言える、女の私でも見とれてしまう美しい容貌だ。」

「あたしの本当の名字はな、『蓑田』って言うんだ、んで、そこに写ってるお母さんの名前が『カヅキ』、『歌』に『月』って書いて歌月な、カゲツじゃねーぞ、それじゃ吉本の漫才ホールになっちゃうからな」

「……歌月さん、か、月に歌う、名前も素敵だなあ……」

『歌』と聞いて思い出したが、そういえばお姉も『ユウカ』の『カ』の部分が、良くある『香』とか『花』ではなく『歌』だ。お互いに小さい頃、お姉の名前を聞いた大人の人達が『この当て字はかなり珍しいね』と毎度毎度言っていたのを隣にいて聞いていたのでよく覚えている。

そうか、お姉の『歌』はお母さんの名前から一文字譲り受けたものだったんだ。じゃあ、『優歌』と言う名前は私の父さん母さん夫婦が名付けたものではなく、本当のご両親が名付けてくれた名前だったんだね。謎一つ、解明。

しかし、それによりまた一つの疑問が私の頭の中に渦巻いた。歌月さん、『蓑田歌月』さん、だよな？ えっ？ いや待ってよ、日本人なの？ だってこの人、髪の色は銀色っぽくて、肌は透き通って血管が浮き出て見えそうなくらい真っ白で、私にはどこをどう見ても白人に見えない。さらに、瞳の色が黒じゃなくて、何か茶色っぽいと言うか、赤に近いと言うか……。

「おめー、バカか？」

「えっ、何でバカ？」

「あたしと何年一緒にいるんだよ、あたしの本当の目と髪の色、何色だ？」

「……あっ！」

……そうだった。お姉は先天性の色素欠乏症、『アルビノ』の疾患者だった。普段はコンタクトレンズやヘアカラーで髪や目の色をカモフラージュしてるから見た目だけじゃわからないけれど、実際は髪は少し灰色がかっていて目の色も少し茶色い。お姉の場合は遺伝による疾患だと担当医が言ってたっけ。って事は、つまり……。

「……お姉のお母さん、歌月さんも、アルビノ……？」

「……ああ、あたしとはとても比較にならねー程の重度疾患者だったんだ、昼間じゃまともにも出れねーぐらいさ、普通の人にとつては有り難いポツカポカのお天道様の光が、一転殺人ビームになっちゃうんだからな」

二つの謎、解明。と、いうか今回は私が少し鈍かった。お姉に対しても歌月さんに対してもちよつと失礼だったなあ。一番の理解者だなんて言つといて、これじゃ無知な一般人と言つてゐる事が一緒じゃん……。

「おめーはたまに頭の回転が良いんだか悪いんだかよくわからねー



時があるよな、その辺はホント虎太郎ちゃんと麗奈ママにそっくりだわ、おめーの記憶回路の方がよっぽど心配だぜ、もう数発頭叩いて治療してやるうか？」

「……失礼致しました、もうパイプ椅子だけは勘弁して下さい……」

「……ふう、まあいいや、詳しく教えてやりてーところだが、時間がねーから適当に話すぞ」

お姉は試合前で時間が無い事もあって、ちょっと早口で簡潔に歌月さんの生い立ちと、お姉が生まれてから一緒に過ごした数年間の思い出を私に話してくれた。

「まあ、あたしも人伝で聞いた話だから、あたしが生まれる前の時代の事は詳しく知らねーんだけどな……」

歌月さんも生まれた時から先天性のアルビノを患っていた。まだ当時の日本にはこの疾患に対する知識が不十分で、そのせいか歌月さんはまだ乳飲み子同然の頃に気味悪がれた両親に捨てられてしまったのだそうだ。その後、裕福な家庭に拾われ養女となったそうだが、実際は娘というよりもその珍しい容姿と生まれ持った美しい顔立ちから外国の人形のような扱い方をされ、養父には玩具みたいに友人の家族に貸し借りされるなど、『一人の人間』として見てもらえない不遇の幼少期を送っていた。

その後、その心無い養父母から『飽きた』とばかりに捨てられた歌月さんは再び孤児となり、小学生から中学生までの間を孤児院で暮らす事になった。しかし、中学を卒業した頃、『彼女を貰い受けた

い』と訪ねてきた一人の男性に迎えられ、彼女は再び一族の養女となった。その男性は配偶者との間に実の子供は無くすでに死別していて、唯一の家族であるもう一人の男子の養子と一緒に暮らす大企業の重役だった。

そこでは以前の様な酷い扱いをされる事はなく、養父となったその男性からは本当の娘のように可愛がられたらしい。そしてしばらく時が経ち、いつしか一緒に暮らしていたもう一人の養子である男子と恋愛関係になり、普通の女性と同じように結婚をした。そして、その二人の間に生を授かったのが、何を隠そう渡瀬優歌、お姉だ。

「……まあ、幸せって言えば幸せな家庭だったのかな、生活には困らねーし、いつもあたしの側にはお母さんがいてくれたしな」

しかし、現実残酷だった。その後の歌月さんはただでさえアルビノの影響により幼い頃から病弱な上に、子供を出産するという大変な大仕事で体に負担をかけた事により、体内の免疫力が極端に低下し紫外線によって出来た小さな皮膚ガンが様々な内臓機関に移り、毎年のようにガン摘出の手術を受けていたそうだ。

「……無理してあたしを産んだ事が原因の一つだっけ知ったのは随分と先の話だったな、言わねーんだよあの人、そんな事一言も漏らさなかった、病室でしんどいはずなのにいつもあたしに笑顔をくれて、誕生日にはケーキを買って看護婦さんと一緒に祝ってくれてよ、『生まれてきてくれてありがとう』だなんて……」

例年に比べ非常に気温の高い、お姉が四歳の時の夏の暑い日、歌月

さんは眠るようにこの世を去った。亡くなる前日まで一人の女性として、母親としてこの世に残す事になる愛する娘を慈しみ、目一杯の愛情を注ぎ、そして、その未来を心配していたという……。

「……最期の頃はずっと謝ってばかりだったな、『お母さんの病気、移してごめんね』ってよ、謝る事なんかじゃねーのによ、あたしからすりゃこのアルビノは、逆に自分が『蓑田歌月の娘なんだ』って証明してくれる誇り高い勲章みたいなもんだからな……」

歌月さんが亡くなったその後は私が知っている通り、お姉は渡瀬虎太郎と麗奈の夫婦に養女として迎えられ、後に二人の間に生まれてくる私の義理の姉となった。お姉は養女だろうと何だろうとと大人気ないくらい容赦なく本気で向かい合ってくれる二人に対して『本当のご両親以上』の愛情を感じているらしい。

それでも時には、夜空に浮かぶ月を見てお母さんの事を思い出してしまうそう。父さんを『虎太郎ちゃん』と呼ぶのは出逢った頃からの呼び名らしいが、母さんを『お母さん』ではなく『麗奈ママ』と呼んでしまうのはどうしても歌月さんの事が忘れられないからだとか……。

「……あの二人と違ってよ、優しすぎなんだよな、あの人は、厳しく叱ってくれりゃ少しは嫌いになれたのによ、一度も怒られた記憶ねーんだよ、あたし」

「……自分が辛い思いをしてきたからこそ、それだけ人に優しく出来たのかもね、お姉のお母さんは……」

「かもな、昔からすげー辛い思いしてきたんだから性根腐ったっておかしくねーのによ、透き通るほど真っ白で、呆れちまうほどピュアで、決して他人を蔑んだり、攻撃したりする事のない、仏様みたいな人だったな……」

「……………」

「……真逆だな、あたしとは、あたし何やってんだか、な」

お姉は一瞬肩を竦めて首を捻ると、珍しく自分のこれまでの人生を悔いるような弱音を吐いて苦笑いした。大丈夫だよお姉、確かにお姉は言葉も行動も乱暴で人に迷惑かける事がたくさんあるけど、あなたがお母さんに負けないくらい辛い思いをして人に優しく出来る事を私は良く知っている。

だって自分の身を犠牲にしても自殺しようとしてた麻美子を手助けしてくれたり、格闘技関係者の人達の将来を案じて人気を盛り上げようとリングに立って闘っているんだから。方法が違っただけで、お姉は十分、歌月さんの娘として誇れる人生を送っていると思うよ。まあこんな事、実際に口にしたら生意気だって殴られるから言えないけどね。

「…………で、どうだ？ 長年の疑問が解けてもうスッキリしたか、妹ちゃんよ？」

「……うん、知れば知るほど胸が痛む話ばかりだったけど、聞いておいて本当に良かったと思う、胸が痛いのは私よりお姉の方だよ、辛い事思い出させてごめんね、教えてくれて本当にありがとう……」

「お安い御用さ、気にすんな、ちゃんと話さなかったあたしも悪いんだからな」

私に笑いかけるお姉の雰囲気、いつもの明るなお姉で正直ホツとした。もし、変な気遣いをさせてこの後の試合にズルズルと引きずらせたなら元子もない。このお姉のノリなら、きっと素晴らしいフアイトをリング上で見せてくれるだろう。

お姉の言葉じゃないけど、やっぱり腹割って殴り合う、もとい話し合うって大切な事なんだな。以心伝心も良いけど、どんなに親しい仲でも言葉にして話さないと伝わらない真実や想いつてのは必ずある。これからは翔太や小夜達に対しても腹に溜めずにちゃんと言葉に出そう。出すって大切、お陰で私も胸の支えが取れてもうスツキリ……。

「……してない」

まだある。お姉の知られざる秘密の数々。本当のお母さんの事はわかったけど、そもそもどういいうきさつでお姉は父さん母さんの養女になったの？ つーか本当のお父さんの方の話は？ 歌月さんと同じ養子だったって事は聞いたけど、一体どんな人だったの？ それに父さんは昔、私とお姉は全く血の繋がりが無い訳じゃないって言ってたけど、これじゃ全然話が食い違っちゃうよ、どうなってんの？ そこら辺の事、さっきの話のくだりの中に何一つ語られてないんですけど……？

「……ねえお姉、せっかくだからもう少し教えて欲しいんだけど……」

…」

「あ？ まだ何かあんのかよ、何だよ？」

「ちょっと優歌ちゃん、妹ちゃん！？ もう何分経ったと思ってるの！？」

「あつ、やべー！」

私の質問を遮る様に、先程までの色っぱいオネエ系から完全にオッサンの血相に変貌した会長さんが控え室の扉を蹴り破って中に入ってきた。時計を見るとすっかり予定の五分どころか十分近く時間が経過していた。ヤバーい、大遅刻だー！！

「ちょっと妹ちゃん！？ いくら色々と事情があるといってもこれはあんまりよ！？ お姉さんを失格にさせるつもり！？ 建て前は見張り役としてここに残したんだから、本来の役目はきっちり果たして頂戴！！」

「てめー那奈コノヤロー、おめーの話がグダグダと長くてすっかり缶コーヒー飲みそびれちゃったじゃねーか！ これはあたしの勝利の方程式、試合前のお決まりのルーティーンだったんだぞ！ それをおめー、どうしてくれんだバカ野郎！！」

「もう、妹ちゃんのお陰で今日は最初から最後までドタバタだわ、お肌が荒れちゃいそう、胡桃ちゃんの世話だけで精一杯だっていうのに」

「全くだぜ、出来の悪い妹、いやセコンドを持つと試合前から疲れちまうぜ、これであたしが負けたら戦犯はおめーだからな、覚悟しろよ」

何その理不尽発言の数々？ しかも何よルーティーンって、お姉あなたそんなゲン担ぎするようなイチローみたいな細かい性格でもないでしょ？ 会長さんも会長さんだよ、時間が押し迫っているならもっと早く呼びにきてくれれば良かったのに……。

私、本当はゲストだよな？ 招待客だよな？ 人手が足りないって言うから色々と準備手伝ったのに、それがこの言われ様ってあんまりだよ。胡桃ちゃんが道に迷ったのを私のせいにしたのは、きつとこの意地の悪い大人達の影響を受けてるからに違いない。歌月さん、コイツらまとめて天国から叱り飛ばして下さーい！

「オイ那奈、あとの詳しい話はおめーがよく知ってる人物から聞くんだな、あまり余計な事を喋るとあたしが怒られるんだ、あたしにお母さんの子供の頃の話を教えてくれたのも、さっきの財布の中の写真を譲ってくれたのもその人だしな」

「私のよく知ってる人間？ 誰よ、それ？」

「やつぱりおめーはちょっと勘が鈍いなー、わかんねーかなー？ じゃあヒントやるよヒント、多分これでわかるだろ」

「ヒント？」

「あたしのお母さんが最初のクソ里親に捨てられて、その後次の里親に貰われるまでの間、身を置いていた場所はどこだ？」

「……孤児院、だっけ？」

「そういう事だ、じゃあ、しっかりセコンド頼むぜ」

「ちょっと待つてよ、意味わかんない！ お姉、お姉つてばー！」

大会のメインイベントであるお姉の試合は、何とか無事十五分遅れで開始する事が出来た。私は空手の大会ではとても考えられないド派手な入場演出に付き合わされ、押し掛けてくる会場の観客の手からお姉を守る為に代わりにもみくちやにされる羽目に。

どさくさに紛れて体を触ってくる輩がいたので会長さんの許可を貰ってこちらもどさくさで何人が殴つてやったけど、胡桃ちゃんも蟻地獄にハマった蟻の様に人混みに飲まれ、断末魔の叫びを残し途中でどこかに消えてしまっていた。ハア、セコンドって仕事は色々大変な仕事なんだなあ。しんどいなあ。

……んでですね、肝心の試合内容なんですけど……。

結果だけ報告します。１ラウンド八秒、右上段回し蹴り一撃ＫＯ。もちろん勝者はお姉。キャリア最短試合更新。ゴングが鳴って自信満々で迂闊に自軍コーナーから飛び出してした全米アマレス王者をナタの様な左下段回し蹴り一発でぐらつかせると、返す刀で次の瞬間にはガードの下がった相手の左の首筋から延髄にかけてお姉の右足の甲がグツサリとめり込んでいた。

実況する暇すら無い。もう少しリアルタイムな状況説明をしたかったところだったが、何せ試合時間が短すぎる。正に一瞬、刹那。ほとんど一発目の下段蹴りで決まったようなものだった。私が『危ない！』と思った瞬間には、相手のガチムチ王者さんは膝から崩れる



ようにグニヤリと倒れ失神してしまっていたのだ。

「どうだ、見たかクソヤローども！！　これがリアルストロングだ、これがこの渡瀬優歌様の生き様だ！！　勇気があるヤツはついて来い、もっとすげーもん、もっとたくさん見せてやるぜゴラァ！！」

会場の空気は衝撃のＫＯシーンに一瞬凍りついた様に静まり返ったが、コーナーポストに登り威勢良く啖呵を切るお姉の姿を見るや地面が揺り動くほどの大歓声上がり、全会場中の観客がスタンディング・オベーションとなった。それはまるで、この先の日本女子格闘技界の繁栄を予感させるものだった。

「……………やっぱり強い、この人、強過ぎる……………」

私がリングの下から見上げる先には、不敵な笑みを浮かべてこちらを指差す、汗一つすらかいていないお姉の姿があった。私がどんなに近づこうと必死に追いかけても、お姉は常に遙か先を突っ走り、私を簡単に置き去りにしていく。

『あたしを倒せるのは、アイツだけだ』

お姉が会長さんに漏らした言葉。それは本音なの？　本当にそう思ってる？　私はそうは思えない。私にはやっぱり、お姉は永遠の憧れ、そして、決して越える事の出来ない巨大な壁、そんな気がして

ならないよ……。

「……し、死ぬかと思っただ、なんとか人混みの中から抜け出す事が出来だよ、なあ那奈さん、優歌先輩は勝ちたんずやか？ あだし、全然試合見れる余裕無くて……」

「あれ、胡桃ちゃん、生きてたんだ？」

「ひでーだよ、何かよくわがねーうちに観客さん達に袋叩きにされて、拳げ句には試合が良く見えねーからってみんなに椅子代わりの踏み台にされて、ちっとも生きた心地がしなかっただ、都会人は怖いよ、あだしもう故郷さ歸りてーよ……」

「……それはご愁傷様、なんまいだぶつ、なんまいだぶつ……」

歌月さんと父さん母さんの関係、お姉のお父さんの事、それと、なぜ私に子供が産めない体になってしまった事を隠していたのか、まだまだお姉には聞きたい事がたくさんある。謎だらけだ。でもそれは、知れば知るほどそれに見合った『痛み』を代償にしなければならぬのかもしれない。今の私に、それに耐える勇気と強さは備わっているのだろうか……？

手を伸ばせば簡単に触れられる、でもその奥底までは全然届かない。近くて遠い、隣にいるのに雲の上の存在の様な人。少しだけ隠し事が減って心の距離は近づいたかもしれないけど、何か今まで以上にお姉との距離が長く感じてしまった、そんな一日だった。

## 第76話 彩り

「いやー、ごめんね那奈、学校帰りで疲れてるところを無理にお願いしちゃってね」

お姉の試合を観戦した翌日の月曜日、休む間もなく今日の私は学校の放課後に駅でいづみさんと待ち合わせ、翼の父親の新作さんのお見舞いに付き合わせさせる羽目になった。お見舞い品やら何やら荷物を持っていくのに一人じゃしんどいから手伝ってくれとの事。

一体何なのここのヶ月ぐらいの私の多忙さは？ 父さんに母さんにお姉、そして挙げ句にはいづみさんにまで、最近どうも家族にいいようにこき使われてるような気がする。私は渡瀬家のメイドか執事かそれとも使用人か？ 少しは本職である学業に専念させて下さいよ。つーか、本音は部屋に籠もってダラダラしてたいだけなんだけどね。

「本当はさ、普段から何もしないで暇してる優歌でも捕まえて、いつも家事をサボってる代償として手伝わせてやろうかなー？ なんて思ってたんだけど、いくら無傷の圧勝だったとはいえ昨日今日殴る蹴るやってきたばかりじゃん？ 実際、当の本人も昨夜の祝勝会でベロベロに酔い潰れて未だに爆睡してるみたいだしさ、他を当たらうにも虎太郎も麗奈も相変わらず全然連絡がつかないし、唯一頼りになりそうな翔太もダメ、あと頼めそうな人間は那奈ぐらいしかいなかったのよ、勉強で忙しいのに無理言ってに頼んじゃって、いやいや悪いねホントにごめんねえ？」

「……いや、先週から色んな人に散々振り回されまくってこんな  
の慣れっこですから、別に今更いづみさんのお願いくらい何とも…  
…」

「そう言って貰えるとスゴい助かるなー、でもさ、そんな聞き分け  
の良い事言ってる割には物凄く不快そうな表情に見えるんだけど、  
それは私の気のせいかな？ それとも、血の繋がった実の家族のお  
願いは聞けても、小言ばかりの鬱陶しい居候のお願いを聞くのはや  
っぱりご不満？」

「またまたー、そんなひねくれたご冗談を、そう言いつみさんだ  
って『ごめんねえ』なんて謝っている割には、その意地悪そうな満  
面の笑顔から全然悪気が感じられないですけどね」

「あ、バレた？ うん、ごめんね、本当はぜんぜん悪いだなんて  
微塵も思っていないだよ、実際は『どうせろくに勉強もしないで  
部屋でゴロゴロしてるだけなんだから少しは手伝え』ってところが  
本音かな？ 那奈も随分本音と建前を見抜けるようになったみたい  
だね、ちよつと関心したわ」

「ええ、これも日々の将来の姑を名乗るひねくれオバサンからの『  
花嫁修行』と言う名の陰険なイジメの数々に耐えてきた賜物です、  
この前学校から帰ってきていきなり洗濯物10キロの山を押しつけ  
られた時は、『マジでこのババア思いつ切り蹴っ飛ばしてやろうか』  
って本気で思っちゃいました」

「あつそお、そうなんだ、いつそ蹴っ飛ばしにきてくれたら三倍に  
してぶっ飛ばし返してあげたのにー？ もうかれこれ長い付き合い  
なんだからさ、私達の間に変な遠慮なんて無用だよ？ 次からは容

赦なく蹴っ飛ばしてきなさいよ、こつちも容赦なく叩き潰してどちらか上か嫌って程思い知らせてやるから」

「それは楽しみですね、じゃあ次からはこれまでの積年の恨みも兼ねて思いっ切り蹴り飛ばさせて戴きます」

「はいはい、前からでも後ろからでも闇討ちでもいつでもいいしやい、現役の手少少女の蹴りがどれほどのものなのか見極めてやるわよ、どうやらこれからも那奈とは仲良くやっていけそうね」

「そうですね、これからも末永く宜しくお願いします」

「アハハハハ」

「アハハハハ」

……マジでやってやるから覚えとけよ、このヤロー。学生だって毎日学校通って疲れてヘトヘトなんだぞ。そこへもって家に帰りやあ怪獣みたいな家族に囲まれて無茶苦茶な事言われて右往左往させられて……。昔はそんな私に同情して色々と助けてくれたのに、最近は助けの手を差し伸べてくれるどころか崖の縁から奈落の底へ蹴り落とそうと虎視眈々と狙ってる優しい『第二のお母様』。家庭内唯一の常識人で、話がわかる唯一の味方だと思ってたけど、どうも勘違いしてたみたいだ。

私が翔太と本格的に交際を始めたと思った途端、急に監視の目が厳しくなった。ちよつとでも部屋で寛いでいると家事を押し付けてくるわ、言われた通りに仕事をこなせばその出来にいちいちケチをつけてくるわ……。そして私は理解した。この人、私の生涯一番の敵になる人だ！ しかも根は常識人だから父さん母さんなんかより尚

更質が悪い！ 陰険過ぎる、明らかに悪意を持ってやってる、明らかに私を陥れようと企んでいる！

そんなに自分の息子に寄りついてくる女が憎たらしいか！？ どの骨かわからない見ず知らずの女ならともかく、赤ん坊の頃から良く知っている自分の娘みたいな女にまでそこまでするか普通！？

これはきつと、これまで私の両親がいつみさんに対して与えてきたストレスが溜まりに溜まって蓄積したものが今、その娘である私に向かつて発散されているに違いない。因果応報ってヤツなのか。つくづく自分が生まれ持ってしまった宿命を憎む。子供は親を選べないからねえ。

つか、もしかしたらいつみさんはこの瞬間をずっと待ち望んでいたんじゃないだろうか。いつか私と翔太がそういう仲になったら徹底的にイジメぬいてやろう……、とか。あー嫌だ嫌だ、女って歳を取ると誰もがこんな腹黒い意地悪な性格になるのかな？ 私はならないよ、将来は優しいお婆ちゃんになるんだ、絶対にいつみさんや母さんみたいな人間にはならない！ そして、どんなイジメに対しても絶対に負けない！

「ねーねー翼、何か那奈といづみ叔母さんがスゴく怖いよー？ 二人とも顔はニコニコしてるのに目が全然笑ってないよー？」

「あのなあお二人さん、嫁姑争いするんはどうせウチからすりや人ん家の話やから別に勝手やけどな、電車の座席の間に無関係の人間挟んで火花バチバチさせんのは勘弁して貰えんやるか？ こつちまで感電して丸焦げになりそうやわ、やるんやったら隣同士に座って気が済むまで永遠にやつとれっちゅうねん」

あつ、そうそう。お見舞いに向かっているのは私といづみさんだけ

ではなくて、見舞われる家族側代表として翼と、なぜか小夜まで一緒にいつてきた。翼がついてくるのは新作さん絡みなら当然、と言うかこのおチビちゃんの許可を取らないと後から『不法侵入』だの『アポ無し取材禁止』だのギャーギャーうるさいので仕方がないのだが、小夜は『真っ直ぐ家に帰れ』って言うてんのにしつこくしがみつかれて半ば強制的に連れて行く事となった。どこかに遊びに行くとても勘違いしてるのかね？ この子を病院に連れて行くのは不安なんだよなー、どこの病院でも毎度毎度迷惑かけて出入り禁止になっちゃってるし。

「でもー、どうしていづみ叔母さんが翼のお父さんのお見舞いに行くのー？ 叔母さんと翼のお父さんって昔からの友達なのー？」

「あれ、小夜は知らなかったっけ？ 私と新作、それと虎太郎とアンタのお父さんの啓介とは高校が一緒だったんだよ、私が虎太郎と連んで色々悪さしてた時からいつもアイツの側には啓介と新作がいたからね、嫌でも毎日顔合わせてたのよ、だから友達って言つか、何だろな、腐れ縁ってところなのかな？」

「悪さ？ えー！ じゃあおとーさんも若い頃は、バリバリのツツパリハイスクールで朝も早よからポマードべったりの無敵のロツケンローラーだったのー！？」

「……何で小夜がアラジン知ってんの？ アンタ、まだ生まれてないよね？ まあいいわ、確かにロツケンロールは合ってるけど啓介はツツパリじゃないわよ、不良じみた事やらかして警察の世話になつていたのは私と虎太郎だけで、あの二人はどんな悪い誘いにも一切乗らなかつたっけ、そんな馬鹿な遊びよりも夢中になつてた事があつたからじゃないかな？ 啓介はその頃からギターとロツクー筋

だったし、新作はいつもサッカーボールと女の子の尻ばかり追いかけてたっけね」

「……うへえ、その頃のオトンの姿、あんま想像したないわあ……、男子も高校生の時期いうたら頭ん中スケベな事ばかりやろうしなあ、今以上に鼻の下伸ばしてあちこちの女に手え出してたんやろなあ……？」

「心配しなくていいわよ翼、アイツ、四十越えた今も大して変わってないし、昔からあんな感じで頭の中十割スケベのおっぱい星人だったから」

「うわああああああ！！！！ オトンのカッコええイメージがガラガラと音を立てて壊れていくううう！！ ウチの脳裏の爽やかスポーツマンのオトンの記憶が全て、エロ変態おっぱい教祖のスケベ親父のニヤケ顔に変わっていくううう！！」

「他の乗客がいるのに車内でエロとか変態とかデッカイ声で叫ぶな！ 周りから変な目で見られるでしょ、いい加減にしてよ本当に！！」

「何を偉そうに、今、那奈もデカい声でエロとか変態とか色々言うたやないか」

「あー言っちゃったねそういえば、今、エロって言っちゃったね、ってやかましいわコラ！

「ななは のりつつこみを おぼえた！ しかしエラくシヨボくてつまらんノリ突っ込みやな、せやからオマエは終始イジられるしか笑いが取れへんダメダメキャラやねん」



「うるさいうるさい！　翼、今から五分黙ってる！」

「コメディー作品で笑いが取れないって致命的だよねー、那奈も真面目キャラやめて『シエー』とか『クエツ』とか『死刑！』とか一発ギャグやる面白キャラになれば良いのにー？」

「だから何でアンタはそんな古いギャグまで知ってるの？　私までアンタ達みたいなボケキャラになったらアッチもコッチもボケばかりで場の収拾がつかなくなるでしょ！？　第一、小夜にまでいちいちキャラにダメ出しされたくないよ、アンタも五分黙ってる！！」

……失敗、やるんじゃないかった。翼の言う通りやつぱり私にはこういうキャラ属性は備わってないらしい。この場に千夏がいなくて良かった。アイツがいたらきつと翌日には学校全体にこの話が広まって全校生徒から白い目で見られていただろうなあ。後で翼にしつかり口止めしないと、お姉直伝のパイプ椅子ショックで記憶回路をちょこつといじくつとけば大丈夫かな？

「……ところで、翼は千夏と一緒にじゃなかったの？　私、放課後からアイツの姿見てないんだけど……？」

「異人さんに連れられて行っちゃった」

「……またあの青い目の陸上部顧問さんか、災難だね、アイツも……」

「最近は砲丸投げの砲丸が囚人が付けてる逃亡防止の足かせに見える

てきたらしいで、アイツ、いつか陸上ノイローゼで発狂して人様向かって槍投げてしまうんとちゃうかな」

「槍投げだけに人生も投げやりー！　みたいなー！」

「笑いのセンスは那奈より小夜の方が幾分上みたいやな、こんなアホの子にまで負けとるなんてどんだけ頭の固い女やねん、空手やり過ぎて脳味噌までカチカチの筋肉になってもたんとちゃうかオマエは？」

「余計なお世話だっつーの！　五分黙ってろって言ったでしょ、いい加減にしないと次は脳天に踵落とし食らわせて更に身長縮めちゃうぞ！？」

「黙れ言うつといて即座に話しかけてきたんはオマエの方やろがボケエー！」

……んで、話は変わりますが、いづみさんの過去と父さん啓介さん新作さんのズッコケ三人衆との馴れ初めをしばし説明させて戴きます。

いづみさんは高校時代、早くして病気で亡くなった母親の一件で当時大手レコード会社の社長さんだった父親との確執があり、実家を飛び出して伊豆地方に住んでいた親戚の叔母の元へと身を寄せていたそう。実の父親との間に確執が生まれてしまった原因、それは病床に伏せる母親の看病や見舞いはおろか、最期の瞬間ですらその父親が病室に姿を見せなかった事が許せなかったから。建前上の理由としては仕事で多忙だったとの事だが、どうもその裏には別の女性の存在がチラチラと見え隠れしていたとか……。

当時まだ中学三年生、純粹無垢で汚れを知らない正義感の強い少女

だったいづみさんは、その事実を知ると猛烈に父親を批判し軽蔑して、姉のあづみさんを残してほぼ絶縁に近い状態で家出をした。そして、高校に入るや真面目で人一倍元気と世間で評判の良かった中学時代が嘘の様に非行に走りグレてしまった。相手が男だろうと女だろうと関係なく毎日喧嘩に明け暮れ、一年足らずであのお姉さんえも一目置く程の関東随一の女番長に成り上がっていったそうだ。そんな折り、ほとんど必然とばかりに同じ高校に属する真の男喧嘩番長だった私の父・虎太郎と出会った。

最初の頃こそ目が合っただけで一触即発的な対立関係だったそうだが、互いに良く似た大雑把な性格だった事からいつしか意気投合し、一緒に連んでは乱闘騒ぎを起こして警察沙汰になったり、人様のバイクを盗んでは無免許で夜な夜な暴走行為を繰り返していたらしい。しかしこの時期に色々とバイクに携わっていた経験や知識が、その後父さんと共に母さんの父親であり私の祖父・滝沢一義に見出され、祖父の跡を継いだ母さん率いるワークスチームのピットクルーの一員となり、父さんを世界王者に押し上げる原動力になり、後に結婚する貴之さんと出逢うきっかけになるんだから人生わかったもんじやない。

自暴自棄になり他人に迷惑をかけ続けた学生時代、しかし、そんないづみさんもいつしか心配する叔母からの説得や自分より辛い幼少期を送ってきたはずなのに健気に生きる父さんや啓介さん、新作さん達の姿を見続けていく内に次第と自分の立場の有り難みとこれまでの己の行為の過ちに気づき、高校生最後の頃はすっかり改心し、父さんも一緒に更正させようと陰ながら努力をしたり、啓介さんの音楽界へのプロデビューの手伝いで会いたくもなかった父親にわざわざ頭を下げて契約を懇願したり、病気になって夢半ばでサッカーの道を絶ち絶望する新作さんを一生懸命励ましてあげてたりしていたという。

腐れ縁なんて言ってるけど、そんな事はない。本当はみんなと強い友情で結ばれていて、そういった巡り合わせをとても大切にする人

それが『風間いづみ』と言う女性なのだ。と、生前貴之さんはまだ小さい私に熱く語っていたのを良く覚えている。そこに惚れたのだと、こんな逞しく心が澄み渡っている女性は、世界広しと言えども彼女一人しかいなかった、とまで。

「あ、そういえばさっきお米研いだのに電気釜のスイッチ入れるの忘れちゃった」

「えっー、本当に？ それマズいよいづみさん、お姉が目を覚ましてたら『飯マダー？ チンチン』って箸鳴らしてまたうるさいよ？」

「参ったなあ、しょうがないから那奈、今から反対側の電車に飛び乗って家に帰ってスイッチ入れてきてくれる？」

「…………窓開けて飛び移れと仰られますか？」

「ほらほら、今丁度電車すれ違うからさ、一気にポーンって飛び移って運転席の窓にしがみつけば全然大丈夫」

「死んじゃうから！ それ絶対死んじゃうから！ ったく、貴之さんは一体この人のどこに優しさを感じたんだろうか…………？」

…………『慈愛の女神』とまで言ってたっけ、貴之さん。どんだけベタ惚れですか？ あの人やけに他人を過大評価する人だったからどこまで本音が良くわからないんだよなあ、父さんに対しては『俺の憧れのスーパーヒーローだ』なんて言ってたし。慈愛の女神様、ねえ…………。だったら私にももっと優しくしてよ、常に慈悲の御心ってヤツを与えて下さいよ、って話だよ、本当に。

いやね、誤解の無いように言っておくけどさ、いづみさん、普段はとても優しい人なんだよ？ あの慈愛や慈悲の御心の欠片すら無い悪魔の様なお父様お母様お姉様三鬼神に比べたらそりゃー神様みたいな人でございますよ。ただね、同じ血を分けた姉であるはずの小夜の母親のあづみさんの御釈迦様みたいな穏やかな性格を見るとさ、『本当にこの二人は実の姉妹なの？』ってマジで思ってしまう。私とお姉が似てないのは実の姉妹ではないからわかるけど、何で遺伝子一緒にこうも性格違うかなあ？

あづみさん優しいもんなあ、いつも小夜の事を可愛がって怒ってる姿なんて見た事ないもんなあ。あの人こそ女神様だよ。あーあ、一度で良いから私も思いつ切り家族に甘えてみたい。ギュッて抱き締められたい。目に見える、肌で感じる温かい愛情表現が欲しいなあ。いいなあ小夜、ああいう母親懂れるな、羨ましい。ちよつと話を合わせるのはしんどそうだけど……。

「それより小夜、アンタ勝手についてくるのは良いけどちゃんと病院にお見舞いに行くって姉さんに連絡した？ その辺しつかり伝えとかないとあの人、本気で小夜が誘拐されたって勘違いして警察に通報しちゃうかもしれないからさ」

「はい、さつき電話して伝えておいたよー！ えつとね、『叔母さんと一緒だよー！』って言ったから大丈夫ー！」

「……『オバサン』、だけ？ 頭に『いづみ』ってつけた？」

「うっん、何でー？ 叔母さんは叔母さんでしょー？」

「……そうじゃないのよあの人には、マズいなあ、もしかしたら私、

今頃警察から全国指名手配されてるかも、『オバサン』だけで誰の事言ってるのかわかる訳ないじゃんあの人が、絶対あの人の頭の中では『どこかの知らないオバサン』に変換されてるわよ……」

「……まさか、いくら何でもいづみさん、それは言い過ぎ……」

「アンタは何も知らないからそう言えんのよ那奈、あの人の思考回路は宇宙より謎だらけで神秘的でね、私が電話で『私、私、いづみだよ』って名乗ったって『どちらのいづみさんかしら？』って返事が返ってくるくらいなんだから……」

「……うわぁ……」

「オカンがそんなんやったらそりやこないアツパラパーな娘が生まれてくんのも当然の話やな、血は争えんっちゆうんは正にこの事やで」

……前言撤回。神様つてのは我々人類の常識を遥かに凌駕する思考回路を備えているみたいだ。やっぱりあの人の娘は小夜じゃないと務まらないね。それに異常なほど過保護だもんなあ真中家は。ちょっと姿が見えない、連絡がつかない、っただけでいちいち搜索願い出されたらこっちの身が保ちませんっ。そっういやあの一家、父親も娘を溺愛するあまりに軍隊の様な謎の自衛団を作っちゃったって父さんが言ってたっけ。愛情も度が過ぎると怖いよ。迂闊に外出すら出来ないじゃん。子育て方針が両極端過ぎだよ、渡瀬家と真中家は。同世代の女の子達にアンケート取ったら絶対『娘になりたくない一家』のワンツーフィニッシュ飾ると思う……。

「ホンマ、オマエらの家は昔からやる事なす事非常識で滅茶苦茶やなあ？ その点どうや、松本家は誰もが羨む幸せタツプリの最高の家族環境やで？ オトンはウチを心から愛してくれとるし、それでいて余計な束縛は一切せんし、でも遠くで陰ながら見守ってくれとる、オマエらのアホなオトンどもと違うて正に父親の鏡の様な世界一のオトンや！」

「でも、どスケベだけどね」

「じゃあかあしいねん那奈！ いちいち頭に『ど』つけんなや！ それにな、スケベやったらウチのオトンよりオマエのオトンの方が質悪いぞ！ エロい発言とエロい目線だけでセクハラする人間と、実際にお触りしてセクハラする人間を一緒にするなや！」

「大差ないだろ！ どっちも立派なセクハラだ、バカモン！」

「でもー、翼の家族ってホント良いよねー！ お父さんは色々遊びに連れて行ってくれてカッコいいしー、お母さんも頭良くて仕事出来てカッコいいしー、みータンも可愛くてカッコいいしー」

「……ウチには岬の何がカッコええのかようわからんけどな、まあ、別にあんなクソ生意気なガキやオカンの事はどうでもええねん、ウチにはオトンさえおれば幸せいっぱい花満開やし」

相変わらずのファザコン振り、どうもありがとうございます。ここまでくるともう最早重病だね、翼のオトン好き好き病は。コイツ本当に将来、『父親と結婚したい』って本気で言い出しそう。つーか、普段から言ってたつけ。新作さんが入院する前は家で一緒にお風呂とか入ってたりのかな？ うわー、想像するだけで気持ち悪い。

うちの家族じゃ絶対に考えられない。私なんて同じ女でも頭の中が並みの男性より遥かにエロいお姉はもちろん、母さんとすら一緒に風呂に入るの嫌だったのに……。

「……どうでも、いい？」

「……へっ？」

「母親なんてどうでもいい、とは聞き捨てならないねえ翼、アンタさ、新作が病気で働けなくなった今、一体誰のお陰で毎日食にも困らず学校に行けると思ってる訳？」

「……はへっ？ いや、ちょっと、何やねんな翔太のオカン、そない急に？」

「アンタさあ、いつも口開けば『オトン、オトン』って新作の話ばかりしかしないけどさ、その新作の看病からアンタ達の育児や世話に孤軍奮闘して、それどころか他人の子供の教育の場までより良いものにしようと職場でも汗水垂らして頑張っている自分の母親の事も、もうちょっと自慢気に話したらどうなの？」

「……いや、オカンは、オカンは、なあ……」

「って言うかさ、アンタは自分の母親が普段どんな仕事してるか知ってるの？ 国家教育委員会の役員どころじゃないよ、あの子ユニセフの難民支援大使も兼任してんだよ？ この国の子供達だけでな地球の裏側のく恵まれない貧困の国の子供達の事まで考えて、毎日国内のみならず世界各国津々浦々まで一生懸命走り回ってんだよ？」



「……ま、まあ、それはウチも知つとるけどお……」

「それをね、『どうでもいい』なんていい加減な言われ方されたらさ、それじゃあの子のどんな努力も報われないよねー、その努力を一番わかつて貰いたい存在のはずである実の娘がこんな思いやりの無い親不幸娘じゃさ」

「小夜、何かいづみさん、翼に話があるみたいだから席代わってあげな」

「はい！　じゃああたし、那奈の隣座るー！」

「オ、オイ待てやオマエら！　ウチと翔太のオカンを隣同士にすな！　小夜、戻れやオマエ！　戻ってウチの盾になってくれや、ホンマ洒落ならんて！」

「那奈、小夜、気遣いサンキューね、昔から翼には言ってやりたい事が沢山あつてさ、せつかくの良い機会だから今日は美香の代弁としてみっちり説教漬けにしてやるわよ」

いづみさんの容赦なき逞しい正義感、ついにチビッコ相手にも牙を剥く。ラッシュアワー前で若干空き気味の電車の車内、縦向きの長椅子に並んで腰掛ける私達の並び順は右から私・翼・小夜・いづみさんから、私の開けたスペースに小夜が移ってきた事から私・小夜・翼・いづみさんになった。間に挟まれて飛んでくる火の粉で丸焦げになるのは御免ですよ、後はお二人でごゆっくりどうぞ。

「いいかい翼？　アンタが大好きな新作と一緒に居られるのも、ア

ンタが毎日サッカーに夢中になっていられるのも、衣食住に困らず人並みな生活を過ごしているのも、全部アンタの母親、美香のお陰なんだよ！　いくら以前新作が取材の仕事で得た知識や情報で書いた記事や著書で適度に収入があるとはいえ、普段の生活費やら医療費やら学費やらアンタのサッカークラブの月費まで全部面倒見てるのは美香なの！　もしあの子がいなかったら新作だって今頃あれほど大きな病院で手厚い治療を受ける事が出来なかっただろうし、アンタだって家の家事やら岬の世話でとてもサッカーなんてやってられなかったんだよ！？　美香はアンタ達の為にまともな休みも取れずに寝る時間も惜しんで働き続けているのに、それをアンタ、『どうでもいい』って一体全体どの口が抜かしてんの！？」

「……いや、だってオカン、オトンに比べると滅茶苦茶しつけ厳しいしい……、アレやったらアカン、コレやったらアカン、お姉ちゃんらしくしつかりしなさいだの、サッカーだけやのうて勉強も頑張りなさいだの、口開きや小言ばかり並べていちいち嫌みったらしいわうつさいわしつこいわ……」

「それは全部、アンタの事を想って言ってるんでしょ！？　アンタが間違った道を歩まないように、後々後悔して苦労しないように、全部アンタの将来を心配してわざわざ忠告してくれてるんじゃないの！？　それを小言！？　うるさい！？　しつこい！？　馬鹿言ってるんじゃないよ、娘に嫌がらせ目的で小言並べる母親がどこにいると思ってるの！？　何度も同じ事言われ続けるのは、アンタがそれらの忠告に対して努力を怠っているからなんじゃないの！？　無視して聞く耳持たないからなんじゃないの！？」

「……うえっ……、でも、ウチかて勉強もちゃんとせなアカンな、  
と思て少しは頑張ってるつもりなんやけど……」

「『つもり』だから駄目なんだよ！ アンタさ、今回は運良くサッカーのなんとか代表になれたかもしれないけどさ、これから将来死ぬまでサッカーだけで食っていきけるって本気で思ってたの？ そんなに日本の女子サッカー界って身振りが良い訳？ 少なからず私はそんな話一度聞いた事無いよ、代表クラスの選手ですらみんな他に仕事やアルバイトやりながら何とか食い繋いでるって聞いてるけどね？ 父親との約束なんだが良く知らないけど、アンタは何？ サッカーばかりで勉強もろくにしないで、高校卒業したら大学にも行かないで現役引退した後は一生アルバイトでも続けていくつもり！？」

「……そない夢の無い話せんでもええやん、そない言われ方したら、ウチの人生お先真っ暗やないか……」

「それともさつさと結婚して専業主婦にでもなる？ 養ってくれる相手、今から当てあるの？ って言うかアンタが専業主婦になれるとはとてもじゃないけど私は思えないねえ、一切家事の出来ない嫁を貰う羽目になる将来の旦那が今から不憫で仕方ないよ」

「……ううっ、そないオカンと同じ事言わんでもええやないかい、第一、松本家の教育方針と翔太のオカン、全然関係あらへんやないか……」

「関係なくない！！ 私はね、美香の一番の味方で一番の理解者なんだよ！ 目に入れても痛くない可愛い妹みたいな存在なの！ アンタがああスケベ男を大切に想っているくらい、私にとって美香は小さい頃からの大切な親友なんだよ！ その親友の娘が戯言抜かして母親をナメてかかっているだなんて、これは私に対する侮辱と同等だよ！ いいかい翼、これからは美香を馬鹿にする事は、私に喧嘩売ってるのと同じ事だと思っただね！！」

「えっ！？ そない殺生な！？」

いづみさんがこれほど翼を怒るのには訳がある。今さっき本人も言っていたが、実はいづみさんと翼の母親の美香さんは物心ついた頃からの幼馴染で、保育園から中学の間までずっと一緒に過ごしてきた唯一無二の大親友なのだ。生まれ持った気丈な性格のいづみさんに人見知りでビクビクして内気だった美香さん。両極端な性格ながらなぜかとても仲が良かったそうだ。

美香さんがクラスの男子にイジメられるとその男子全員を素っ裸にして校庭に立たせ代わりに仕返ししてあげたり、うっかり尻尾を踏んで野良犬に追いかけられる美香さんを助ける為に組んず解れつ噛む噛まれるの大喧嘩をしたりと、今で言う私と小夜の様な関係だったそうだ。

少し違うのは、美香さんは昔から学問はとても優秀で、勉強が苦手だったいづみさんはいつも美香さんに色々教わって助けて貰っていたとか。つまり持ちつ持たれつの関係。どんな困難も二人の得意分野を駆使して協力しながら乗り越えてきたそうだ。実に羨ましい話だ。私におんぶにだっこの小夜とは少しどころか大分と違うかな。第一、私は男子を素っ裸にしたり犬に噛みついたりした事ないし。

で、そんな二人だからもちろん高校も一緒の学校に進学しようと約束をしていたそうなのだが、先程のいづみさんの過去の概略で話した通り、いづみさんは父親とのいざこざで実家を飛び出し伊豆の叔母の家へと引っ越してしまった為、結局二人は別々の高校へ進学する事になってしまった。

いづみさんは実家に残した姉のあづみさんに対してはそれ程心配はしてなかったそうだが、美香さんの事は非行に走っていた不良時代でも一時も忘れずに身を案じていたという。しかし、すっかり変わ

ってしまった自分の姿を見られるのが怖くて、会いに行ったり連絡を取るのを躊躇してしまっていたそうだ。

二人が再会を果たしたのは高校を卒業した二年後の事、当時母さんの生家である祖父が経営していたバイクショップ兼修理場で父さん、貴之さんと共に店員として住み込みで働いていたいづみさん達の前に、高校時代の悪友の一人である眼鏡工口おっぱい男爵さんがひよっこり来店してきた。その目的は兄弟同然の関係である父さんに久しぶりに会いにきたのと、サッカーを諦めて報道記者を目指す事にしたので大学入ったから一度キャンパス見学来えへんか、とお誘いの言葉を伝える為だった。

でも、真の目的はどうやら自分に滅茶苦茶可愛い彼女が出来た事を父さんに自慢したかったただけだったらしく、一生涯縁が無いと思っていた学問の園に足を踏み込み目を白黒させる父さん貴之さんいづみさんの三人の前に、その工口男爵さんは満面の笑みで一人のパツと見ガリ勉風で地味目な髪の長い綺麗な女性を連れてきた。その女性、必要以上に人前に出る事を恥ずかしがり、最初はずっと彼の背中に隠れてビクビクと怯えていたそうだ。

そして、いづみさんは落胆した。あまりのショックに腰が抜けてしまったらしい。いづみさんは心の中で絶叫した。世界で一番大切に目に入れても痛くない可愛い自分の親友の彼氏が、もしかしたらあまりに人見知りで奥手で結婚すら出来ないかもしれないと心配していた彼女の初めて出来た恋人が、『よりによって、コイツ!? 悪い夢なら覚めてくれー!!』と……。

……そして、現在に至る。いづみさんの願いも虚しく、美香さんはその後紆余曲折の末にその工口男爵さんと結婚し、二人の間にはヘンテコ関西弁を話すおチビでペタンコな親不孝長女と小学生の分際で異様に口が達者な悪ガキ次女の二人の子供に恵まれた。

いづみさんは語る。もしあの時、自分が実家に残り同じ高校に進学していれば、もしくは勇気を出して連絡を取って会いに行っていたら、美香さんに悪い虫が付かないように気遣ってあげていれば、こんな事にはならなかった筈だと、悔やんでも悔やみきれない、一生の不覚だと……。

「美香はね、元々はそんなにタフで強い人間じゃなかったんだよ！ちよつとした事でもすぐに風邪ひいて寝込んでいたり、ちよつと精神的ショックを受けたりするとすぐヘコンじやったりする弱い子だったんだ！それがさ、旦那が馬鹿でアホでスケベでエロ男爵だから、その間に生まれたアンタ達娘がそんなアツパラパーだから、あの子はどうしても強くならざるを得なくなっちゃったんだよ！アツパラパーなのは小夜じゃなくてお前の方だよ翼！昔は虫一匹すら可哀想で殺せない心の優しい女の子だったのに、そんな美香がガミガミと叱る厳しい母親になったのは間違いなく翼、お前がしつかりしてねえからに決まってるだろうが！？お前が美香の力になってやらねえから、文句ばかり言って足引つ張りやがるから、そりや美香だってストレス溜まってイライラするぐらい当然だろうが！？違うのかゴラァ！！」

「……うつつ、すんまへんでした、仰る通りです、アツパラパーなウチが全部悪うございました、だからお願いや、そない眉間に青筋立ててガン飛ばさんといてえなあ……」

「ねーねー那奈、何かいづみ叔母さん変だよー？段々言葉使いが優歌お姉ちゃんみたいになってきたよー？翼泣きそうだよー、可哀想だよー！」

「……ヤバいなあ、次第に若かれし女番長時代の『裏いづみさん』」

の顔が出始めてきちゃったみたいだね、これは何とかしないと翼の精神が崩壊しちゃうかもね、小夜、携帯持ってきてる？」

「うん、持ってるよー！ でも、どうすんのー？」

「今すぐ家に電話かけて！」

もうこうなってしまったたら私達の様な小娘があれこれしたって焼け石に水だ。煮えたぎる熱湯を冷ますには冷水を、鉄をも溶かす強烈な酸にはアルカリ性水溶液で中和するのが一番。プラスにはマイナスを、黒には白を、S極にはN極だ。今のいづみさんを止められるのはもう、あの人しかない。

「大体なあ、私はお前が新作の真似して変な関西弁喋ってんのも気に食わないんだよ！ お前は新作の娘の前に美香の娘なんだから、もうちよつと可愛らしくおしとやかな喋り方を……！ って、誰だこんな時に私の携帯に電話かけてくんのは！？ チツ、めんどくせえなあ、あーもしもし、アンタ誰！？」

『もしもし？ いづみちゃん？ あなたのあづみお姉さんです！』

「……ハア！？ 姉さん！？ な、何よ、どうしたの急に！？」

『いやーん！ いづみちゃんがそんな怖い声で誰だ！ なんて言うなんて、お姉さんビックリしてもう泣いちゃいそう、悲しい、悲しいわ、うえーん』

「……あ、いやあの、ご、ごめんなさい、ちょっとイライラしてたからつい大声になっちゃって……」

『ダメよ、そんなイライラして乱暴な言葉を使ったら、みんな怖がって逃げちゃうわよ、ってお姉さんいつも言ってるでしょ？  
いづみちゃんもホントはとっても優しい子なんだから、いつも笑顔で明るく元気良く、私の大好きないづみちゃんできて頂戴？ でないとお姉さん、イジけちゃうんだから！ もーう、そんないづみちゃんもイヤイヤイヤイヤン！』

「……ハア、あの……、ごめんなさい……」

『すぐにイライラしてイッー！ ってなっちゃうところはいづみちゃんの悪いところよ？ また昔みたいにオイタしたら、お姉さん今度こそカンカンに怒っちゃうんだから！ メッ！ プンポン！』

「……はい、すいませんでした、以後注意します……」

『わかれば宜しいっ！ やっぱいづみちゃんはとっても聞き分けの良い優しい子ね、お姉さんの誇りだわ！ じゃあね、また電話するからね、バイバイキーン！』

「……バイバイキーン……」

会話を終えピツと携帯を切ったいづみさんは両肩が脱臼したみたいにガックリとうなだれていた。姿を現し始めていた『裏いづみさん』のオーラは、すっかり電話越しのあづみさんによってエナジードレインされたみたいだ。脱力作戦成功。これでしばらくはいづみさんの怒りが沸点に達する事はないだろう。



「……あの人が相手じゃ怒ってられないって、まるで衝撃吸収体みたいにくっこの感情を丸呑みしてお花畑に変えちゃうんだもん、本当に昔から苦手だよ、姉さんだけは……」

それに、いづみさんをあまり興奮状態にしない訳が他にもある。今から数年前、いづみさんは夫の貴之さんがレース中の事故で命を落とすのを目の当たりにして、そのショックで重度の鬱状態になつてしばらくの間精神科病棟に入院していた経歴があるのだ。現在こそ社会復帰出来る程状態も回復したが、未だに月一回の検診と毎晩寝る前の服薬は欠かす事が出来ないのだ。

「……那奈、小夜、アンタ達、仕込んだね……？」

「だって翼が可哀想だったんだもん！　ねー、那奈？」

「……うつつ、オマエらあんがとなあ、ウチ、ホンマにここで全裸になつて土下座するか舌嚙みきるしか許して貰えへんかと思つてメツチャ怖かつたわ、やつぱり持つべきもんは友達やなあ、ホンマにあんがとおー！」

「それにこれは、いづみさんの為を思つての事ですから、一時的の状態からはかなり病状も改善したとはいえ、まだいづみさんは投薬治療中の身なんですからね」

「……それもそうだね、まさか那奈にまで説教されちゃうとは、今回は完全に一本取られたかな？　これだけしっかりしてれば今から

でも、どこに嫁いでも良い嫁になれると思うよ、アンタは」

「最高の褒め言葉、ありがとうございます、今までの厳しい苦言の数々が嘘みたい、何か気持ち悪くて背中がむず痒いなあ」

「チツ、可愛くないねえ、そういうところはホント麗奈にそっくりだよ那奈は、こりゃあこの子も将来母親に劣らないヒドい鬼嫁になりそうだね」

確かにいづみさんはお姑さんみたいにいちいち小うるさい。でも、私は最近こうも思い始めている。いづみさんが私に対し家事や女性の礼儀に関して厳しく接するのは、もしかしたら父さんと母さんへの復讐なんかではなく、逆に恩返しをしようとしているからなのではないか、と。

貴之さんが突然の事故で亡くなり、いづみさんが心労で倒れた時、他に身寄りの無かった翔太を引き取ってあげたのは他でもない、二人の掛け替えの無い友人である父さんと母さんだ。そして二人は貴之さんの意志を継ぎプロのライダーを目指す翔太の為に、自らの家庭の事情をかなぐり捨ててまでもその夢の後押し役を買って出た。二人揃ってあの事故の現場に居ながらも、貴之さんを助けてあげられなかった罪滅ぼしも兼ねて。

でも、それによって渡瀬家は大きな代償を払う事になった。それによつて私とお姉はほとんど両親が家にいない生活を余儀無くされ、ある時にはそれが原因でお姉がグレて非行に走ってしまった事もあった。私もあまり親の愛情を実感出来ない幼少期を過ごす事となり、他とは違う複雑な家庭環境に戸惑った時期もあった。

だからいづみさんは退院した後、翔太を連れて別の場所で暮らす選

沢枝を捨てて、私達渡瀬家と共に暮らしていく事を選んでくれたんじゃないんだろうか。自分の息子の面倒を見てくれる留守がちな友人夫婦の代わりに、私達の代理母として実の娘のように接し、私達の為に毎日家事に世話に仕事に勤しんでくれているんじゃないだろうか。

お姉に過去の自分の姿を重ねる事により、その痛みと苦しみを分かち合い、一番の理解者になろうと必死に努力していた姿を私は知っている。お姉もいづみさんの存在には随分助けられたと言っていた。そして私には、自分達の様な難しい環境に置かれる妻や母親になっても困らないように、厳しくちよつと意地悪に、でも誠意を持って真っ直ぐ向き合って指導をしてくれてるんじゃないだろうか……。

薄々は感じていた。でも、やっぱりあれこれ小言を言われるのはどうしてもうるさくて、実の母親でもない人にまでいちいち世話を焼かれるのがうざったくて、最近どうもいづみさんを毛嫌いしてしまっていた感がある。間違ってた。今日確信した。さっきの翼に対するいづみさんの言葉。いづみさんは決して嫌がらせやストレス発散で苦言を零している訳じゃない。本当に心から、私達を心配して言うてくれているんだ、と。

『本当に優しい人でなければ、他人を叱る事は出来ない、なぜなら人を叱るのはその相手の事を想ってなければ出来ない行為なのですから』

学校の朝礼で校長先生がそんな様な事を喋ってた記憶がある。確かにそうかもしれない。もし相手が情をかけてやる価値の無いどうでもいい存在なのならば、いちいち指導して道を正したりせず無視し

て勝手に落ちぶれていく様を傍観してれば良いだけなのだから。大切な存在だからこそ手を差し伸べたい。見て見ぬ振りをして他人が墮落していく様を見逃す訳にはいかない。だから人は人に叱る。気づいていない間違いを正す為に、自分と同じ過ちを繰り返させない為に。憎しみや嫌みではなく、その言葉からでは読み取り難い、溢れ出る程の愛情を持って。

『……もしかしたら、私も翼と大差無かったのかもしれない……』

感謝しなければいけなかったんだ。呆れられる事無く何度も何度も叱ってくれる事を有り難い事だと思わなきゃいけなかったんだ。うるさいとか、しつこいとか、意地悪だなんて非難するのは筋違いだった。いづみさんはいつも、私にありったけの優しさを与えてくれていたんだ。実の娘でもない、他人である私に対しても、実の親子の様に接してくれていたんだ。愛する人を失って、一番辛くて不安なのは自分のはずなのに……。

「でもね、もし風間家に嫁ぐつもりだったらそんなんじゃないまだ修行が足りないよ、あんなヘタレ息子でも翔太は貴之が残してくれた掛け替えの無い忘れ形見、私にとって自分の命なんかより大切な宝物だからね、将来麗奈みたいな鬼嫁になってアイツを蔑ろにしてみな、その時は私は麗奈以上の鬼姑になってアンタを徹底的にイジメ抜いてやるからね」

「望むところです、これからご指導宜しくお願いします、お母さん」

「……あら、何なの急に目キラキラさせちゃって、随分と素直じゃ

ん？ さつきまでの反抗的な態度はどこへやら、しかも何よ『お母さん』って、翔太ならともかく那奈に言われると何か気持ち悪っ、うわっ、背中痒っ！」

「……ちよつと言ってみたただけですよ、つたく、いづみさんも可愛くないなあ、やっぱり言うんじゃない……」

やれやれ、嫁姑問題はどこの家庭でも面倒な話だなあ。これからもずっと続いていくんだろうなあ、私といづみさんの本音と建前のやり取りは。そんな私達のやり取りを横目に、そんな気苦労などちつとも理解出来ないであろう頭の中と体の大きさがお子ちゃま二人が何やら余計な事を小声でヒソヒソ。

「……なあ小夜、ウチ思うんやけど、この二人が頑張れば頑張る程、間に挟まれて一番迷惑被る人間ってやつぱり……」

「翔ちゃんだよねー、いつも那奈のお父さんとお母さんにイジメられて、いつもいつも優歌お姉ちゃんにもイジメられてるのに、これでいつもいつもいつも那奈と叔母さんにまでイジメられるようになったら翔ちゃん可哀想だなー、可哀想だなー、可哀想だなー！」

「あんまり何度も可哀想可哀想強調してやるなや、ホンマにアイツが哀れに思えてきたやないかい！　しっかし完全に四面楚歌やな、まだどつかの家の飼い犬の方がもうちょいええ立場に立って生活してるんとちゃうか？　お犬様言うくらいやし、『土農工商』で言うたら間違いないアイツ、穢多・非人の扱いやで」

「『齒槽膿漏』？　何それー、痛いのー？」

「一番勉強せなアカンのはウチよりオマエやアッパラパー！ イタ  
いのはオマエの頭の中や、血い出るまで歯でも磨いとけ、このどア  
ホが！」

うるさいよご兩人。いずれはアンタ達も将来結婚したら出会す問題  
なんだから、しょうもない漫才やってないでちゃんと見て聞いて覚  
えてしっかり勉強しときなさい。赤線引きなさい、テスト出ますよ、  
ここ。

「あつ、そうそう！ ねえ那奈、翔太って言えばさ、昨日から全日  
本戦に行ったきりずっと何の連絡も無いんだけど……、生きてるよ  
ね？ 那奈の携帯には何か連絡あった？」

「……いえ、何も……、生きてると思いますよ、多分……」

そうなんです。実は現在翔太、生存すら確認出来ない音信不通状態  
なんです。昨日の全日本戦で雨天順延となった先週の予選とは見違  
えるような走りを見せて、デビュー戦としてはかなり上出来の本戦  
五位入賞という結果を残したは良いんだけど、百戦中百勝しないと  
気が済まない鬼師匠と鬼監督はどうも納得出来なかったみたいで、  
今も現地で居残り特訓させられているとかいないとか……。

「……ハ、ハ、ハ、ハックシュツ！」

「何だ翔太、風邪か？」

「……いえ親父さん、別にそんな事はないと思うんですけど……、あのー、それよりそろそろ帰らなくて大丈夫なんスか？ 俺、明日だって学校あるし……」

「今日は丸一日サーキット場を貸し切ったからまだまだ好きだけ走れるわよ、学校？ 無駄ね、馬鹿はどんなに勉強したって馬鹿よ、意味の無いものに労力を使う事ほど馬鹿な話はないわ」

「……他人の子供捕まえて馬鹿、馬鹿って……、麗奈さん、いくら何でもあんまりっスよ……」

「あなたを実の子と思つての苦言よ、それにね、馬鹿は風邪ひかないつて迷信が正しいならあなたが風邪をひく事は一生涯無いから安心しなさい、良いわねえ、不必要な医療費もかからない、レース前の体調不良とも無縁、馬鹿だから悩み事も無いんでしょうね、常に健康そのものなあなたの体と頭が羨ましいわ、私もそんな空っぽ頭なら疲れなんて感じず毎日バリバリ仕事に集中出来るのにな」

「何が学校だクソつたれ、学問なんぞ無くたって俺様みてえに立派な偉人になれるんだ、何だったらもういつそ退学しちまえ、こつちからすりゃ学費も浮いて感謝感激万々歳だ」

「……ひでえ、鬼過ぎるよこの二人、どうして親友が残した一人息子に対してここまで悪魔みたいな仕打ちが出来るんだ……？」

「グズグズダラダラ独り言抜かしてんじゃねえ！！ 言いてえ事あ

んなら正面切って言いやがれ、ぶん殴ってやるからよ！！　いいか、てめえには文句言ってる暇も風邪ひいてる暇もねえんだぞ、文句言ってもぶん殴る、風邪ひいてもぶん殴る！！　次こそはこの俺様のメンツにかけても優勝しねえと風邪どころか氷水に沈めて凍死させてやつからな、死にたくなかったら死ぬ気で練習しろ！！」

「次戦は来月だったわね、もう入賞とかそんなの要らないから、そろそろあなたが秘めている才能をいつまでも秘めてないで拝見させて頂戴？　私にはまだまだ遙か遠く及ばないとはいえ竹田もそこそこ良いエンジンを組むようになってマシンの調子も悪くなさそうだから、もしそれで不甲斐ない結果になったらそれは間違いなく乗り手の責任ね、そんな事になったら翔太あなた、表彰台の代わりに絞首台に上る事になるわよ」

「げえっ、優勝以外イコール『死』ですか！？　あんまりだ、二人とも一年目は多少大目に見るって言うてくれてたじゃないですかあ！　全然話が違い過ぎる……」

「一年目だからダメでも良い、なんて生っちょろい事考えてんから勝てねえんだよボケナスがあー！！　残り全戦どんな手を使っても勝つ気で挑め、少しでもピヨった走りしたら凍死させるどころか氷漬けにしてかき氷器でシャリシャリにすりおろしてやつから覚悟しやがれクソ野郎！！」

「一戦一戦切腹するくらいの気合いで立ち向かいなさい、さもないとこちらから先に容赦なくスッパリ介錯仕るわよ」

「……もう嫌だあ、この親父さんと麗奈さんの生き地獄特訓、いつそ本当に殺された方がマシかもしれない……」



「だからブツブツ独り言抜かしてねえでさっさともう一本走ってこい！！ 今大会のベストラップを更新するまで帰らせねえぞ、次からは俺も一緒に走って後ろからまくし立てるからな、ちんたら走ってたら蹴っぱくってケツ二つにかち割るぞゴラァ！！」

「は、ははは、はい！ 喜んで練習させて戴きまーす！！」

「次戦が今から楽しみだわ、父親同様、翔太もなかなか鍛え甲斐がありそうね、そろそろ練習メニューに昔、貴之にやらせた一人四十八時間耐久タイムアタックでも追加してみようかしらね？」

「……うう、うええっ、帰りたい、帰りたいよあー、父さあーん、母さあーん、那奈……」

……学校休ませてまで現地居残りって、そんな事させて本当に大丈夫なんですか、お父様お母様？ ライダーに学力は不要だと、そう仰られますか？ 最低でも高校は卒業しとかないと絶対将来色々困ると思うんだけど……？

もし翔太がプロのバイクレーサーになれなかったら、なれたとしてもチャンピオンになれるどころか大した活躍が出来ずに廃業しちゃうたりしたら、あの人達どうやってその責任取るつもりなんだろう？ 他の職業に就職させられる当てでもあるんだろうか……？

「……あると思う？ 人生計画ノープランでこれまで勢いとノリだけで生きてきたあの理不尽屁理屈迷惑夫婦に？」

「……無いと思う……」

「正解！ と、いう事で、もしあの子が将来人生露頭に迷ったら那奈、その時は娘であるアンタが責任取って面倒見てあげてね」

「えっー！ 滅茶苦茶だよそんなの、自分の息子でしょ！？ 無責任だ、育児放棄だ、母親失格だ！ いづみさんだって十分に理不尽屁理屈迷惑人間じゃーん！」

「知らない、私は翔太がライダーになるのを最初大反対したのに勝手にズケズケ物事進めたあの二人が全部悪いんだもーんだ、憎むなら私じゃなくて、こんな現状を生み出した自分の両親を憎みなさい」

「そんなあー！」

……プロ契約金とその後の年俸収入とかでウハウハ玉の輿生活どころの騒ぎじゃ無いよ、これ。下手すりゃ翔太のヤツ、このいい加減な母親と私の戸籍に一生つきまとう非常識両親のせいで、バイク以外学歴も能力も何にも無いタダのプータローにされちゃう可能性もあるんだ……。うわぁ、そんなの嫌だ！ 将来絶対苦労するのが目に見えてる！ 今からでも遅くないかな、考え直そうかなあ、翔太と付き合っていくの……。

「……さてと、病院の最寄り駅は次だったっけ、三人とも、忘れ物しないようにね、特に小夜、カバンちゃんと持った？」

「はい叔母さん、ちゃんと持ってまーす！　那奈ー、次で降りるよー！」

「……………」

「あれー？　何か那奈が『考える人』の銅像みたいに固まっちゃって動かないよー？　元氣無いなー、お腹でも痛いよー？」

「放つといたれや小夜、人生つてもんは苦悩の連続や、愛だの恋だの甘っちょろい話だけでは生きていけん、那奈は今その奥深さを思いつ切り噛み締めとんねん」

「翼は随分わかったような事を言うもんだね、アンタだつて昔の自分の母親みたいに愛だの恋だの甘っちょろい話に人生振り回されるかもしれないのにさ」

「心配あらへんで翔太のオカン、ウチはオトンの愛情と現金しか信じへん女や」

「……あつそお……、ハア、やっぱり美香報われないなあ、何をどうしたらあんな真面目な子からこんな適当娘が産まれてくるんだか…………？」

「……氣を取り直そう。今悩んでも仕方ない、まだ翔太がブータローになると決まった訳じゃないし。そんな事より今は新作さんのお見舞いに集中しよう。実は今回、私がいづみさんに付き合って一緒に病院に行く事にしたのにはちょっとした目的がある。」

昨日のお姉の最後の言葉、それが何を意味しているのか、一体誰の事を言っていたのかは何となくわかった。でも、さすがにそれを本人直々に聞くのは躊躇してしまう。触れてはいけない過去の部分に触れてしまいそうで、少し怖い。お姉だって『怒られる』って言うて怖がつてるくらいなんだから。

だから、新作さんならもしかしたら知っているんじゃないかと思った。その人と同じ時間を共にし、同じ時代を生き、お互いに隠し事など一つも無いであろう兄弟同然の様に過ごしてきた新作さんなら、きっと私の知らない過去の出来事を知ってじゃないかと、こっそりと教えてくれるんじゃないかと……。

「はい、みんな降りるよー、何度も言うけど忘れ物ないようにねー」

「……ちよつと失礼しますご婦人、警察の者ですけど」

「ハア？ 警察？」

突然の急展開。駅に着いて電車から降りるや否やなぜかホーム上には警官が多数待ち伏せ状態。そしてなぜか紺色の制服に周りを囲まれ職務質問されるいづみさん。ナニコレ？ ドウイウコト？

「ワイー！ ねーねー那奈、おまわりさんがいっぱいいるよー！」

「……警部補、提供された写真との照合の結果間違いありません、この娘さんのようです」

「そうか、お急ぎのところ申し訳ないけどねご婦人、ちよつとお話

を伺いたいので駅構内の交番までご足労願いますかね」

「ちょ、ちょっと待つてよ何突然！？ いきなり周り取り囲まれて何の説明も無く交番に来て、どこかの逃走中の指名手配犯じゃあるまいし、私が一体何したって言うの！？」

「あちらの娘さんのお母様から警察の方に通報がありましたね、何やら大切な娘さんが学校からの帰宅中に、知らない『オバサン』に連れて行かれてしまつて帰つてこないのどうしましょぅ？ とかどうとか」

「……勘弁してよ、姉さん……」

「……マジで通報されてるし……。またも脱臼したようにガックリ肩を落とし、両端を警官に付き添われて交番に向かういづみさんの後ろ姿は、言葉では表せないような哀愁の空気が漂っていた。何か映画のラストシーンみたい。あづみさんハンパねえ、容赦ねえ、いつか私も小夜と一緒にいたら通報されて逮捕されるかも。うわあ、マジでありそうで怖いよマジで。」

さっきの電話で小夜の無事を伝えておけば良かったのかなあ？ 私、気が利かない？ 嫁失格？ まあいいか、私に意地悪してきた報いだね。ついでに身代金要求しときや良かった。そうすりやもつと大騒ぎになったのに。可哀想ないづみさん、ああ可哀想、可哀想だなー、いづみさんすんごい可哀想だなー！

「腹ん中ウハウハなクセしてオマエまで何度も可哀想可哀想強調してやんなや可哀想に、嫁姑の本音建前の愛憎劇はおつかないのお、昼ドラ顔負けや、こりゃハリウッドで映画化決定やな、全米震え上

がるでこれホンマに」

「ねーねー、何であたし達交番に行かなきゃいけないのー？ 病院にお見舞いに行くんじゃないのー？ おサイフ拾った訳でも痴漢にあった訳でもないのに何でー？」

「オマエらアツパパー親子のせいやろが、このボケエー!!」

……やっぱりこのトラブルメーカーは連れてくるべきじゃなかったよ。こりゃ帰りが何時になるかわかったもんじゃないね。やっべ、お米どうしよう。お姉が気付いてスイツチ入れておいてくれている訳……、無いよね？

帰ったら飯飯ギヤーギヤーうるさいんだろうなあ、あの食うだけ大怪獣。私にもとんでもない非常識なお姉様が一人いたんだっけ。もしかしたら私といづみさん、似た者同士なのかも。あーあ、これだからこの家庭でも姉ってヤツは。泣くのはいつも、健気に働く妹ばかりだよ、全くもう……。

## 第77話 I'm sorry

「今日も今日とてエミちゃんのお尻はええ形しとるわな、男を惑わす魅惑の曲線美やな、こりや彼氏は余所の男に横取りされんか心配で心配でおちおち夜もまともに寝てられへんやろなあ？」

「イヤだあもう松本さん、またセクハラ発言ですかあ？ 彼氏なんていませんよ、毎日仕事が忙しくてそんなの作ってる暇なんかありません！」

「うつそお、そりやもつたないわ！ 何ちゅう宝の持ち腐れや、いやこれはエミちゃんをフリーにしとる最近の若い男どもに問題があるで！ 世間ではやれ草食男子やら女性恐怖症やら二次元依存症やら訳わからん輩がワラワラ湧き出しとるらしいが、ホンマどうもこいつもアホばかりやなあ！ こない可愛い子を一人で放ったらかしにしてホンマけしからんしもつたない、よし、ほなら俺が喜んでエミちゃんの彼氏になったるでえ！ おっちゃんは一時も寂しい思いさせへんぞお、毎日エミちゃんの唇からうなじに胸にお尻にあんなとこやこんなとこまで目一杯愛したるやさかいに」

「もう、エッチな事ばかり言っていないで真面目にちゃんと採血させて下さい！ この前新人のナースにまでそんなセクハラ発言するから、その子松本さんの事が怖くなって別の病棟に移転したいって言い出しちゃったんですからね！」

「ええやんええやんこれくらい、毎日こない狭苦しい病室閉じ込められてその上こないカッチカチの寝心地悪いベッドの上でダラダラ

退屈な時間過ごしてんねんもん、ちよつとぐらいのエッチな意地悪可愛えもんやん？ 小学生男子が保健室の先生のスカートめくんのと同じやで、今の俺にとって最高の娯楽はエミちゃん達可愛い白衣の天使さんと楽しく愉快に戯れる事なんやから」

「そんな変な事ばかり言つてると、また奥さんや娘さん達から叱られますよ？ みんな心配してるんですから真面目に治療に専念して早く退院して安心させてあげないと駄目ですよ！」

「えっ！ いややいやや、俺ここ退院してエミちゃん達と会えなくなるやなんて絶対イヤや！ ずっとここに居らせてえなあ、ここに居つてお仕事気張つとるマミちゃんやカナミちゃんやマイちゃん達の姿を見守つてあげたいねん、遠くからみんなのお尻やおっぱいをいやらしい目で凝視してたいねん！ お触りしたりスカートめくつたり無論押し倒したりなんてせえへんから、ホンマに見てるだけやから、エッチな妄想するだけで十分やから、お願いやここに居らせてえなあ！」

「……狭苦しくて退屈だったんじゃないんですか、ここ？」

「ホンマ頼むわお願いや、俺今日からええ子になるから！ 採血で注射針刺される時も『初めてなの痛くしないで』とか言わへんし、血圧計で圧迫される時も『あつダメそこイッ』とかやらしい声上げへんし、体温計する時もズボン脱いで『お尻の穴で計つて』なんてアホな事言わへんから、この天国みたいな酒池肉林の魅惑の花園に永久在籍させてえなあ、禁断の果实をかじらせ続けさせてなあ！ お願いお願いおねがぁい、でないとおっちゃんまたお尻プリンプリンしてまうぞぉ……、って、ありや？」

「……新作さん……」



「ねーねー那奈、何で翼のお父さんベッドの上で四つん這いになつてお尻プリプリさせてるのー？ 何か尻尾振ってるワンちゃんみたい、気持ち悪いー」

「……最悪やオトン、ウチ泣きたい……」

「……オイ新作、お前何やってんの？ もう中年期に差し掛かった大の男が、しかも自分の娘の見てる目の前で」

「いやああ、また見られたああああああ！！ 一時間ぐらい到着遅れるって言うてたやあん！？ この嘘つきiiiiiiiiiiii！！」

……これは酷い、酷過ぎる。以前にも同じ様な場面を目撃してシヨックだったと翼から聞いてはいたが、四十も過ぎたオッサンが醜態晒して若い娘に媚びを売っている姿は実の娘でなくとも誰が見たってショッキングな映像だ。しかもそれが難病に侵され周囲からその身を心配されている立場の人間がやかしているというならば尚更身の程知らず、恩知らず。お見舞いに来た人達の親切心を無駄にする裏切り行為とは正にこの事だ。

「……と、とりあえず松本さん、採血だけさせて貰いますねー」

「エミちゃんだっけ？ 仕事とはいえ毎日こんなバカの看病大変だねアンタも、もうさ、腕からなんて生つちよろいからいつそ頭から脳みそごと採血しちやいなよ、日頃のストレスや恨みを込めて針を根元までグッサリとさ、大丈夫大丈夫、私が許すから」

「イヤあ、いづみちゃんおつかないがなあ、そないな事されたら俺の頭シワシワに萎んで、いづみちゃんのおっぱいみたいになつてまうがなあゝ!?」

「うるせえ黙れ変態ヤロー！ てめえに『ちゃん』付けされる覚えなんかこれっぽっちもねーんだよ、このスケベエロ河童！！ なんならいつそその鼻に鉄拳かませて壊れた蛇口みたいに大出血させて、注射針無しでも採血可能にしてやろうか!?」

「ヒイゝゝ！ それつてまるで銭湯とかで口からお湯が出るライオンの飾り物みたいやないかゝゝい!? せやったらどうせ出すなら他の場所からチヨロチヨロ出す小便小僧になりたいなあ、と俺はつくづく思つたりしたりなんかしちやつたりして」

「そつちを蹴り潰して欲しいのかこのヤロー!!」

「ここはアカアゝン！ ここはドントタッチでアンタッチャブルで絶対聖域な俺の夢と希望と愛と情熱が詰まったスーパースペシャルなデリケートゾーンやねゝん！」

「ホラさつさとパンツ脱げこのセクハラ男！ お望み通りその汚えブツを木っ端微塵に蹴り潰してやった後、後ろの穴に好きなだけ体温計やカルーテルや腸内カメラぶち込んでやるからよ!!」

「イヤあゝん、お代官様お戯れゝん！」

…… あゝ、バカバカしい。この二人は昔からこんなくだらないやり取りをし続けてきたのかね？ 何かすでに疲れきってしまった。嫌

になっちゃった。もう今回これで話終わりで良いかなあ……？　そうもいかないか。正直かつたるいけど話を進行させて戴きます。

と、いう訳で……、何が『と、いう訳で』か自分で言つといて良くわかんないけど、私達はなんとか無事に病院に到着する事が出来た。途中いづみさんが警察に連行されるというちよつとしたハプニングがあつたが、その後の確認でそれがあづみさんのとんでもない勘違いである事が判明し、ものの四、五分くらいで私達は釈放して貰えた。

しかし、自分の姉の慣れ親しんだいつものド天然行為だったとはいえ、そんなゴタゴタに巻き込まれてしまつたいづみさん本人はもちろん機嫌が良い訳がない。更にそこに竹馬の友、一心同体の存在だと豪語する大親友の旦那様がその奥様のいない隙に自分の年齢の半分程度でしかない若い娘相手にこんな醜態晒していれば、そのストレスは二倍三倍どころか十倍百倍一千倍とパンパンに膨れ上がってしまう訳で……。

「……新作お前、本当にいい加減にしなよ？　もう酸いも甘いも加味分けてないといけない年齢になつたんだからさ、少しはそのアホとか言つてた最近のダメ男達の見本になる様な紳士らしい立ち振る舞いをしたらどうなの？　お前は何の為に入院してんの、病気の治療する為？　ナースにセクハラする為？　どっちなの？」

「うーん、せやな、どっちかって言つたら、どっちもやな」

「治療に専念しろ！　ここは風俗店じゃないんだよ、このバカ！

……全く、私は未だに理解出来ないよ、何で美香はこんなどうしようもない男選んじやつたんだろうなあ？　こんな父親じゃ娘も可哀想だよ、ほら見てみ翼のヤツ、虚ろに窓の外眺めたまま物思いに耽

「つちやっただじゃんかよ」

「……ええ天気やなあ、この窓開けて一步踏み出したらウチ、空も飛べそうな気がするわ……」

「アカンアカンそれはアカン！ すまんかった！ 翼、オトンが悪かった！ 冗談やねん冗談やねん、ちよつと魔が差したただけなんや！ もうこんなアホな事せえへんから、約束するから、せやから親より先にお空に還るんだけはやめてくれ〜！」

前回話した通り、新作さんといづみさんは私の父さんや小夜の父親の啓介さんと一緒の高校に通っていた同級生である。三年生の時はクラスも一緒だったらしい。良く一緒に連んで行動を共にしてたそうだがその頃の名残だろうか、不良上がりとはいえないづみさんは普段あまり男性に対し『お前』なんて乱暴な言葉使いはしないのだが、多分もう新作さんに対してはその呼び方が癖になってしまっているのだろう。

それとも『お前』の方がツツコミやすいのかな、さっきの二人のしようにもない漫才見てると。父さんに対しては『アンタ』だったかな、いづみさん。怒ってる時は『おめー』って呼んでるけどね。啓介さんの事は何て呼ぶんだろう、とりあえずいづみさんにとって啓介さんは義理の兄になる訳だし。今度注意深く二人の会話を聞いてみるかな。でも同級生が義理の兄って何か心境複雑になりそう……。

「ところで新作、美香はまだ？ そろそろ仕事終わっててもいい時間じゃない、残業でもあるの？ 何か連絡あった？」

「いやアレや、今日美香ちゃんにはちよいとばかり俺から野暮用を

一つ頼んどんねん、そんでもって途中家にも寄って一人留守番してる岬を連れて来えへんといかんから、ここに着くんはまだあともうちよい時間かかると思っわ」

「……ただでさえ仕事で疲れてるだろうにあれやらこれやら色々尽くさせて、本当にお前はつくづく女の敵だね、その野暮用つてのがまさかエロ本購入とかだったらマジでその鼻を眼鏡ごとへし折つてやるから覚悟しなよ？」

「んな訳あるかい、美香ちゃんがおつたらそないエロ本なんぞ無用やわ、余所の女の裸なんて屁のカス、この世で美香ちゃんほどエロいナイスボディは他におらへんもんなあ、ウヘヘ」

「『エロ』で嫁を称えるな！『綺麗』とか『美しい』とか『愛してる』とかいう言葉を使ってやれつての！子供が側にいるんだぞ、発言に気をつけるこの歩く有害サイトが！」

「いや、あれはもう芸術品の域やで、奇跡の四十代や、三島んとこの嫁はんも凄いがあや色々加工して仕上げた養殖モンやからな、美香ちゃんはちゃうで、天然モンや！ピッチピチしとるがな、俺気張ってもう一人作ってまおっかな、ウヘヘヘ」

「……ダメだこりや、もうここまできると生きてるだけで公然わいせつ罪だね、歩く有害サイトどころの騒ぎじゃないよ、全く……」

……つーか、歩く有害サイトばかりなんですけどね、この小説の登場人物って。新作さんを始め青少年教育上宜しくない発言や行動ばかりしてる人間が多過ぎ。例えば父さんとか母さんとかお姉とかお姉とかお姉とか……。渡瀬家そのものが有害ですか、そうですか。

多分著者そのものが有害人物なんだろうな。読者の皆様、この小説の半分は有害で出来ています。お読みの際は分量と用法を守って正しくご使用下さいませませ。

「……………」

「……小夜？」

そんな事より、さつきからちよつと気になる点が一つある。私がここに向かっている最中どうやって制御しようかと頭を悩ませていたトラブルメーカーが、あちこち駆けずり回るところか病室の椅子に座ったままじつとして一言も喋らない。これは一体全体どうした事か。前代未聞、空前絶後、最早これは超常現象だ。何が起ころのやら、大地震の兆候か？ それとも隕石衝突？ 大戦争勃発？ あるいはこの世の終わりの始まりか？

「……どうしたの小夜？ 何か今日は随分と静かじゃん、いつもだったら病室を走り回ったりナースコールボタンを押したりして迷惑かけまくるのに、一体何があったの？ 眠いの？ 辛いの？ それとも病気？」

「えー？ だってそんな事したら那奈怒るじゃん！ それに麻美ちゃんのお見舞い行った時に騒いだりしたら麻美ちゃん迷惑でしょー？ あたしがちゃんとしないと瑠璃ちゃんが真似しちゃうし、だから病院では絶対バタバタしないで静かにしてるってあたし決めたんだよー！」

「なるほど、麻美子のお陰なのか……、これは良い体験学習だわ、アンタもちゃんと成長してんだね、ちよつと見直した」

「ねーねー、今度那奈も一緒に麻美ちゃんのお見舞い行こうよー、麻美ちゃんきつと喜ぶよー！　ねーねー、行こうよ行こうよー！」

「言つたそばからピョンピョン跳ねない！　わかった、わかったから大人しくじつと座ってなさい！」

「ハイー！　やったー！　麻美ちゃん、みんなに会えなくて寂しいつて言つてたからスゴく喜ぶだろうなー！　ワイ、楽しみー！」

……ごめん麻美子、最近アンタの事すっかり忘れてた。今、大変なんだよね麻美子。担当の産科医から『ただでさえ母体そのものが虚弱で出産に耐えられるかどうかわからない上に、それが原因でお腹の中の子供にも栄養が行き渡らず未熟児での出産になるかもしれない』という定期診断を受けたらしくて、『ならば常に有事に備えておく必要がある』と父親の遠藤先生から進言されて二ヶ月ぐらい前からずっと産婦人科病棟に入院してるんだよね。

そんな大変な事になってるのに私ときたら、そういえば一度もお見舞いに行つてないじゃん。うわぁ最低、我ながらヒドい話だ。友達甲斐の無い人間だなあ私は。反省します。父さん母さんお姉にいつみさんの手伝いばかりしてる場合じゃないよ、やらなきゃいけない事いっぱいあるじゃん。麻美子のお見舞いは行くとしてもそこに更に学校に空手の稽古に家では掃除洗濯料理にその後宿題……。あー忙しい。何で私ばかりこんなに忙しいんだ？　一日が三十六時間にならないかなあ、そうなれば自分の用事も色々片付くのに……。

……愚痴つても仕方ないか。ならば、今この時間にも早速そのやら

なきゃいけない事の一つに取りかかるとしますかね。私がお見舞い以外にここに来たもう一つの理由、それは新作さんに二、三尋ねたい話があったからだ。長々話すと新作さんもしんどいだろーうし遠回しな聞き方は抜きだ、単刀直入に行こう。

「……蓑田、歌月……？」

「……ええ、知ってますか？」

「……知ってるも何も……、いやあ、エラい久し振りに聞いたわ、その名前……」

「……ちよつと待ちなよ那奈、何でアンタがその名前知ってるの？  
一体誰から聞いたのよ、優歌？ 虎太郎？ それとも麗奈？」

「えっ！ いづみさんも知ってるんですか、歌月さんの事！？」

やはり、新作さんは知っていた。私が生まれる前の話、お姉の本当のお母さんの事を。それどころか、いづみさんまで歌月さんを知っているとは予想外だった。って事は、いづみさんもお姉が渡瀬家の養女になった経緯を知っている……？

「……優歌が話したのね、あの子がねえ、ふーん……」

「えっ？ ちよつと待てや、何でいづみがカツちゃんの事知ってるん？ オマエ確か彼女に一度も会った事無いやろ？」



「知ってるよ、って言うか会ってるよ！ 新作も一緒だったじゃん、啓介の計らいでやったあの日比谷公園での路上ゲリラライブ、あの時外出禁止だった彼女を病院から抜け出させてあげたのは誰でもないこのわ・た・し！ 虎太郎に頼まれたとはいえ看守に見つからないように連れてくるのスッゴい大変だったんだから、あの時！」

「せやったつけ？ ああ、おったな、そーいやおったわ、せやせや、しかも確かあん時オマエ、啓介が用意したバンドメンバーが足りなくて急遽ドラム叩いとったつけな」

「何で忘れてるかなあ？ しっかりしなよ、お前まさか若年性アルツハイマーまで発症したんじゃないだろうね？ 私なんて今もくつきりあの日の記憶が脳裏に焼き付いてるってのにさ」

「もう何十年前の話や思とんねん、俺にもあの日からこれまでの間にあんな事こんな事色々様々紆余曲折あったんや、ちょっとぐらい記憶が曖昧になっとったってそりゃしゃあないやろが」

「女性から聞いた電話番号やスリーサイズだけは戦場取材中の爆風に巻き込まれて頭強打しても忘れないのにねえ？」

「放つとけや！ それだけは脳みその記憶回路が別になつとんねん、一万ギガバイトセキユリテイ万全の大容量データメモリ内臓や、民間航空機のブラックボックスより丈夫で記録鮮明やで、どうやスゴいやろあ？」

「そんなもん自慢になるか、このバカ！ でもまああれからもう……、十八年？ 優歌がまだ小学生だったからそれくらい前になるんだね、私達もまだ三十路前だったしなあ……」

「あの頃はお化粧のノリもとっても滑らかやったのに、今は鏡を見る度目尻の小じわが気になあて気になあて」

「うるさい黙れ余計なお世話だ！」

「そんなあなたにドモホルンリンクル」

「お前はどこの再春館製薬の回し者だ!？」

「膝の関節の痛みには豊潤、軽い尿漏れにはハルンケアとレディガードコーワをどうぞ、良く効きまっせ」

「それともインチキ薬剤師か!？ まだそんなもん必要なほど歳取ってねーよ！」

「まあ、ヤクザ医師やなんて何それ怖い、おつかないわあゝ！ それはともかくしかしアレやで、『さっき行ったのにまた行きたくなる』ってCM、何かちよつとエロくないか？ 『イキなくなる』ってそれはアカンやろお、『何やハニー、あんだだけ乱れといてまだ物足りないのかあい?』ってなエッチで淫らなイケない気分になってしまうがなガナ」

「お前の思考レベルは中学生男子と同等か!？ いい加減マジで黙れしつこいクドいクドすぎる！ お陰でちつとも話が進まないじゃないかよ、バカヤロー！」

「奥さん、ここは病院でっせ、どうかお静かにお願いしますわ、迷惑や」

「……てめえこのヤロー……、ハア、しかしまさか優歌がねえ、あ

の子の口からその名前が出るだなんてちょっと意外だったなあ、もう吹っ切れたのかな」

「そりやもう人が一人生まれてから社会人になるまでぎょうさん時間が経ったんやで、優歌かてもうとつくに成人迎えてんねんやからええ加減に心境整理ついてへんとアカン時期やし、那奈ももう高校生になったんやから少しぐらい話してもアタマ混乱せずちゃんと理解して貰えるって思ったんとちゃうか？」

「……あのー、私も会話に参加して宜しいでしょうか？」

「あつ、ごめんね那奈、コイツのバカさ加減にムキになっちゃって、すっかりアンタ達の事無視しちゃってたわ」

「参加したい？ そりやもちろんOK牧場やで、俺は二人漫才も多人数コントも大歓迎や！ よっしゃ、ほなら今から公開質疑コントを始めるでえー！ ハイ内閣総理大臣、渡瀬那奈くーん」

「……あの、吹っ切れたとか、理解して貰えるとか、一体どういう事ですか？ お姉が渡瀬家の養女になった理由は、何か複雑な事情があったんですか？」

「……………」

怒涛のポケッツコミ漫才を繰り広げる二人に私が割り込んで質問を投げかけると、先程までの饒舌な会話が嘘みたいに新作さんみづみさんも口を閉ざして黙り込んでしまった。まるで、事情を知っているのにそれを誰かに口止めされているかの様に。

「……いやなあ、悪いが那奈、その質問に関しては俺の口からは何も言えへん、何せ人んちの事情やからな、さっきのノリで下手なボケかまして変な誤解与えてもアカンしな、もしそないな事になつたら俺ら迷惑どころの騒ぎとちゃうでコレ」

「……優歌はアンタにそれ以上の話はしなかったんでしょ？　なら私達からは何も話せないよ、いくら一緒に暮らしているとはいえ私は渡瀬家の人間じゃないし、新作じゃないけど余計な事言つて誤解なんかさせたら本当に迷惑に……」

「……迷惑つて、誰にですか？　私ですか？　お姉にですか？　それとも……」

「……………」

「……それとも、渡瀬虎太郎と、麗奈にですか？」

私の両親、虎太郎と麗奈の名前を口に出すと、新作さんといづみさんは一瞬顔を見合わせ互いに困惑した表情をした。そして直後に視線を下に向け揃つて俯き、ぐつと真一文字に結んでいた口を更に硬く閉ざしてしまった。頼むからもうこれ以上は聞かないでくれ、触れないでくれ、そんな言葉が聞こえてきそうな静かな威圧感が二人の雰囲気から感じ取る事が出来た。

やっぱりそうだ。お姉が昨日最後にポツリと私に言い残していった全てを知る人物、歌月さんを良く知っていて、お姉が養女になった経緯も目の辺りにして、それを私に知られぬよう他人に口止めしてまで必死にひた隠している人物。それは既にわかりきっていた事だ

が、私の両親、虎太郎と麗奈だ。

何かあったのかもしれない。私が生まれる前、その二人が夫婦になる前に、父さんと、母さんと、そして歌月さんとの三人の間に。いや、絶対に何かあったに違いない。ただ単に若くして亡くなった歌月さんからお姉を譲り受けたと言う容易な話だけではなく、私が高校生になるまで話せない、いや高校生になっても未だに詳しくまでは話せない、聞いたら何かしらのショックを受けてしまいかねない難しい事情が、過去の出来事が。昨日のお姉と今日の新作さんといづみさんの反応……。もう、そうとしか思えない。

いや待って、もしかしたら私の両親との間に事情があったのは歌月さんではなく、お姉が最後まで話してくれなかった父親の方なのかもしれない。ある大財閥の幹部だった男性の養子で、その後同じ男性に養女として迎えられた歌月さんと結婚したお姉の本当の父親。現時点でその人について私が知っている情報はそれしかない。名前すらわからない。一体どんな人だったのだろうか、私の両親とはどんな関係だったのだろうか？ 友人？ 敵対関係？ それとも……？

『……遠い親戚だった人だよ……』

……血縁なの？ 遠い親戚、あまりに曖昧な言葉過ぎてどこまでの関係だったのか全然把握出来ない。でも、父さんのあの時の声、あの時の目、とても記憶に残っている。何かとても寂しそうだ。声はかすれ、どこか遠くを眺める様に、凄く悲しげな目をしていた……。

……ダメだ、キリがない。余計な事まで考えてしまう。胸が苦しい、辛い。知りたいよ、父さんと、母さんと、歌月さん。私が知らないその昔に一体何があったのか。私とお姉の間に一体どんな複雑な事

情が存在しているのか。傷ついてもいい。後悔したっていい。知りたい、知りたい知りたい知りたい！ このままじゃ嫌だ、自分だけ何も知らないのは嫌だ！　お願い、もっと私に詳しい情報を下さい！

「新作さん、いづみさん、お願いです、教えて下さい！　自分でもなぜかわからないけど、最近ずっとこの話が気になって仕方ないんです！　お姉はどうして渡瀬家の養女になったんですか！？　私の両親と歌月さんはどんな関係だったんですか！？　それと、お姉のお父さんはどんな……！」

「……もう、やめとけや」

すっかり我を忘れ、立ち上がった勢いで倒れる椅子も気にならないほど急ぎ立つ私を制したのは、真横から聞こえてきた少し呆れ気味の冷めた声。熱を帯びた室内の空気が一瞬にしてクールダウンする。声の主、それは先程まで父親のスケベな醜態を目の辺りにし窓の外を眺め落ち込んでいたその娘、翼だった。

「……那奈オマエな、さつき小夜に病院では騒ぐな暴れるな一丁前なセリフ抜かしといてな、実際今の自分のその姿はどないやねん？　そない必死こいて血眼剥いて大声出して、ちっとも人の事言えへんやんか、みっともない、自分でそう思わへんのかいな？」

「……あつ……」

「しかもオマエな、五体満足健康そのものでピンピンしとる翔太のオカんに食ってかかるんやったらまだええとしてもや、ウチのオト

ンはこれでも今現在担当医から絶対安静外出禁止言われとる重病患者やねんぞ？ 下手に心臓にショック与えるような事したらアカン、ホンマやったら家族の人間以外は面会控えて欲しい、とまで言われてんねんぞ？」

窓の敷居部分に突き肘をして外を眺めたまま、感情を押し殺し淡々と喋る翼のその雰囲気はいつものふざけた軽々しいものとは違い、母さんやお姉でプレッシャー慣れしている私ですらも言葉に詰まるほど鋭く尖ったものだつた。こちらに向けている小さい背中がなぜか今はとても大きく見える。

「それやのにオマエはそない尻に火い点いたロケットみたいにドカドカ突っ込んでギヤーギヤー食ってかかりよってからに、これでもしホンマにオトンの心臓止まってもうたらどないして責任取ってくれんねん？ 医者が飛んで来る間に緊急蘇生術でも出来るんかいなオマエは？」

「…………いや、あの…………」

「オマエここに何しに来たんや？ 見舞いに来たんとかやうんかい？ それともホンマの目的は事情聴取かいな？ せやったらさつさと帰れや、ここは警察署ちゃう、病院や」

「……………」

「姉貴の云々聞きたいんやったらな、その姉貴貰い受けた本人達に聞くのが一番話早いんと違うんかい？ それを何やら面倒がつてウチのオトンから又聞きしようやなんて考えとる事自体とんでもない

オカト違いやねん、そない話は家帰ってからやれや、ウチら何も関係あらへんがな、せやる？」

確かにそうだ。お姉や父さん母さんからこれ以上の事の詳細を聞くのが怖いからといって、他に事情を知っている人物を探し話を聞き出す事だけに夢中になって何か大切な事を忘れてしまっていた。新作さんは病人なんだ。しかも常にいつ病状が悪化するかわからない危険な状況にある重度の心臓病患者だ。

そんな人に無理を言っただけで喋りたくない事まで強引に喋らそうだなんで、ちよつと私どうかしてたかもしれない。お見舞いのついでに聞く事が出来れば良いな、程度でしか考えていなかったはずだったのに、感情が先走っていつの間にか本来の目的を見失ってしまったいたみたいだ……。

「この後まだオトンに負担かけて病状悪化させるような事しよつたらな、ウチがオマエをこの病室から永久に出入禁止にしたるさかいに、絶交どころとちゃうぞ、一生恨み通したるから覚悟せいよ」

「……ごめん翼、私、つい……、ごめんなさい、新作さん……」

「いやいやええねええねん、そないガツクリ落ち込むなや那奈、大袈裟過ぎや、この程度何て事ないから気にすんなって、なっ？」

隣でキョトンとしている小夜の顔をまともに見れない。本当に人の事言えないな、今の私。さっきの大声が別の病室まで響いて他の入院患者さんの迷惑になってないだろうか、少し心配になってきた。



「翼もそないピリピリして怖い事言わんでもええやないかい、オマエのオトンは女子高生一人に言い寄られたくらいで死んだりせえへんで、むしろ那奈相手ならもつと近くまで言い寄って貰て添い寝までされたら逆にオトンのハートはドキドキキュンキュンしてMAXケージまで心拍数増大してまうわウヒヒ」

「何がMAXケージやねん、自分の病状省みず人の気心も知らんと……、娘の友人にまでセクハラしてる場合とちゃうねんで？ 少しは心配してる家族の気持ちも考えてくれんとホンマ困るわ！」

「わかつとるわかつとる、わかつとるがな、俺は幸せもんやなあ、こない自分の家族から心底愛されてホンマ幸せもんや、ついでにここにあるナースちゃん全員にも目一杯愛して貰たらもつと幸せ満開花満開なんやけどなウヒヒヒ」

「あゝもうしょうもなつ！ こないアホでスケベなオトンなんか嫌や！ いっそいっぺん死んでまえ、このどアホっ！」

「アホとスケベは死んでも治りまへゝん、先生がアホにつける薬無い言っねゝん」

「アホの坂田ゝ って、やかましいわホンマに！ 蚊取り線香粉にして蕎麦にぶっかけ食っとけや！」

死ね、なんて乱暴な事を言いながら翼の表情は半分呆れつつも相変わらずファザコン全開の満面の笑顔。本当に大好きなんだねえ、新作さんの事が。すっかりいつもの調子良い生意気娘と戻ったチビっ子は窓際からこちらに歩み寄ってくると憎たらしいしたり顔で椅子

に座る私の頭を馴れ馴れしく手のひらで撫で回してくる。さっきまでのピリピリした雰囲気は一体どこへやら。

「まあわかればええねんわかれば、ちゃんと聞き分け良くええ子にすればいちいち怒られんでも済むねんで、また一つ賢くなれたやないか那奈ちゃん？」

「……触んじゃねーよ、調子乗んな」

「アラマア怖アーイ、何テ汚イ言葉ナンデショウ、ヤッパリ那奈ちゃんハ悪イ子デスネー」

「ただでさえ普段の関西弁でもウザいのに、慣れもしない標準語を変なイントネーションで喋るな！ 本当気持ち悪い！ 鳥肌が立つ！」

「ウヒヤヒヤ、岬の真似やで！ どうや腹立つやろ？」

「自分が普段やられて腹立つ事を人にするなっつーの！」

「まあまあそないカツカするなや、しかしなアレやで那奈、さっきから忠告がましいかもしれないけどあまり他人様が隠しとる事柄にズカズカ首突っ込むのは極力控えた方がええと思うで？ 人間生きてりや余所には絶対知られとうない話がたくさんあって当たり前、例えばそれが家族の人間、姉妹同士、実の娘相手でもや、オマエかて家族にも知られたくない秘密あるやろ？ せやったら余計な勘ぐりはしたらアカンがな」

「でも、うちの家族は一切秘密事はしない、包み隠さず何でも話す

って主義だったから……」

「せやからそれでも話せへん事ってやつぱりあんねんって、あくまでこれはウチの予想やけどな、多分オマエの家庭にはそう簡単に一筋縄ではいかん難しい事情があつて、多分それを知って一番傷つくんはオマエなんとちゃうかな？　せやから多分姉貴もオトンもオカンも今までずっと何も語らず黙っとんたんやろ、オマエの為に、オマエの事を思つてな」

「……それは多分そうなんだろうけど、でも……」

「しかしやで、姉貴は今回やっと自分の母親の名前をオマエに明かしてくれたんやろ？　せやったらいずれ向こうから全てを話してくれる時が必ず来るがな、こつちから下手にドタバタついたりせんでもな」

「……そうかな……」

「そうやで！　時期尚早やねん、今は！　今はまだ話せへんかもしれんけど、いずれ時が満ちれば全ては明らかになんねん！　真実つてもんはいつもそういうもんやねん！　焦ったってしゃあない、どうせいつかは嫌でも知ることになる時が来んねん、せやからそないビクビクして心配せんとドンと構えて何でも受け止めたるぞって威勢見せたれや！　そしたらオマエのオトンもオカンも安心して全てを語ってくれるはずやで！」

「……うん、そうだね、焦らずにちよつと待つてみるかな……」

「うん、それでええねん！　何や珍しい、今日は随分ええ子やないかい那奈ちゃん？　翼お姉ちゃんは上機嫌やで、オマケにもう一

回頭ナデナデしたるわ」

「だから触んなっつーの！」

とても翼の口から出るとは思えない大人びた発言。でも、異論は無い。いつもは諭す立場の私が逆に諭されて何か悔しい気もするが、今日は仕方ない。これにはさすがに納得せざるを得ない。

「……そういう事、そういう事やろ、なっ、オトン？」

「……………」

「……オトン？」

「……『真実』か、せやな、時が満ちれば……、上出来や翼、全くもってその通りやで……」

翼の呼びかけに一瞬深刻な表情を見せた新作さんは、二度目の呼びかけにはニコリと笑顔に戻り感慨深く何度も頷く素振りをした。どうも意味あり気な今の二人のやり取り、この親子の間にも私の家族と同様、何か他人には明かせない、今は話せない難しい事情があるのかな？ 何となく気になる、ちょっと微妙な空気間だった。

「……うーん、しかしせなや、どないしようかな、もうええ加減ずっと黙り込んだるのも宜しくない気もしてきたわ、アイツにとってもなあ……………」

何やら考え込みながらベッドに胡座をかき膝をポンポンと叩いた新作さんは、意を決した様にベッド横の机の引き出しから小さいバツグを取り出すと、中をガサゴソと探り始めた。

「何やオトン、ウチらに小遣いでもくれるんかいな？」

「アホ、そない端金ある訳無いやろ、さすがの俺も女子高生に小遣い与えてイタズラしようなんて悪趣味はあらへんで」

「ちよつと待ちなよ新作、お前まさか……？ やめときなつて、私達から余計な世話する必要無いつて、これは那奈と虎太郎達の問題なんだからさ」

「せやからつてこのまま子供相手に知らぬ存ぜぬ見て見ぬ振りすんのも年輪重ねたええ大人がする事とちゃうやろ、優歌が吹っ切れたんや、もうアイツかてええ加減吹っ切らんとあかん時期が来とんねん、それにこのまま内密にして那奈が気にして不眠症にでもなったりしたらそれこそ迷惑な話やからな、ちよつとぐらい喋ったって別に罰当たらんやろ」

……アイツ？ 一体誰の事だろうか？ そして今、いづみさんの制止を振り切り新作さんが取り出そうとしてる物は一体何なんだろう？ 期待と不安に自分の鼓動が早くなってるのがわかった。緊張が一気にピークに達する。

「……えっ！と、これはこの前六本木のお店で聞いたエミリちゃんの電話番号のメモやろ……、これは随分前に虎太郎や啓介と行った銀座のお店のママも名刺や、あちゃー水割りサービス券期限切れとる、もったいない事したわ……、あれ、おっかしいなあ見つからへん、どこしまったっけなあ……？」

「お前のバッグは水商売関係の四次元ポケットか！？ よくもまあそれだけ無駄なもんばかり集めたもんだね、掃除しなよ……」

「まあな、開店祝い水割りサービス券からお店在籍女の子リストまで選り取り見取りや、年期入つとるでえ、ほれコレなんて生前の貴之と一緒に行ったノーパンしゃぶしゃぶ店のアルコール品引換券やで、かれこれもう熟成二十年モンの限定ヴィンテージ品や」

「……ちよつと待て、聞き捨てならないぞ今のは、ノーパンしゃぶしゃぶ！？ あの貴之が！？ 嘘をつくな嘘を！ お前と違ってあんな真面目な男がそんな卑猥な店に行くだなんてそんなまさか……！」

「いやー、飛び跳ねて御満悦でしたでお宅の旦那さん？ ああいうお店初めてやったらしくてなあ、最初は目のやり場に困つとったみたいやけど、日頃のレースのストレス溜まってたんやるか、アルコール回り始めた途端あんな過激な行動してまうとはあの時俺はとてもとても予想出来ん……、おっ、これやあつたあつたやつと見つけたわ例の物」

「話をはぐらかすな！ いつの事！？ 私と結婚した後！？ まさか翔太が生まれた後じゃないでしょうね！？ それより過激な行動って何よ！？ アイツ、父親にもなって私に隠れて何やってんの！？ って言うかお前、何勝手に人の旦那をそんな場所へ案内してん

だよ！？　おいコラ新作、ちゃんと最後まで詳しく話さない……  
！」

「絶対に知られたくない戦いが、そこにはある！　嫁の見てない所でそないハッスルしてもいいんですかあ？　いい〜んですっ  
！」

「川平慈英かよ！？　うるせえそんなのどうでもいいから話せよゴ  
ラア、過激な行動って一体何なんだよ！？　てめえ吐かねえとその  
首根っこ締め潰すぞコノヤロ」

「そない突っ込んで食ってかかれたら心臓止まってまうがな、い  
づみも人の事言えへんなあ、もし俺の体に何かあったら責任取って  
緊急蘇生術でもしてくれるんかいなオマエは？」

「肋骨が粉々になるまで心臓マッサージしてやるよ、その話を全て  
聞き出すまでは死んでも死なせるか！」

……緊張の糸、プツツリ切れました……。どれだけネタあんのよこ  
の二人？　もうお腹いっぱいです、勘弁して下さい。とりあえず貴  
之さんのハッスル話は別として、新作さんが探していた物、それは  
風俗嬢の名刺でもなく水割りサービス券でもない、一枚の手のひら  
サイズの白い紙。紙と言うよりフィルムみたいな物だった。まさか  
コレ、お姉の時と一緒？　また写真？

「うわあ、久し振りに見たけど俺若いなあ〜！　絶世の美少年やな、  
こりゃ当時のクラスの女の子達がぎょうさん寄りついてくる訳やわ」

「ヤダ何これ、三人とも田舎のクソガキって感じ丸出しじゃん！？  
麦藁帽子にランニングシャツに半ズボンって、今の子供達はこんな格好恥ずかしがって絶対にしないよね、これって中学生の時？」

「せやなあ、確か二年の時の臨海学校で撮ったもんやと思うわ、俺らがいつみと知り合う前の話やな、エライ懐かしいわ、もう四半世紀以上も前の事なんやなあ……」

「あー、二人だけで盛り上がってないで私に見せて下さいよ、それ、一体何が写っているんですか？」

新作さんは一瞬ニヤリと笑みを浮かべると、手を伸ばしてその写真を私に渡してくれた。大昔の写真の様だが、ノーパンしゃぶしゃぶ店のお姉ちゃんが写った写真ではない事は確かだろう。詳細が気になったのか小夜と翼も私の肩越しからその写真に目を通す。

「うえっ！ これ写ってんの誰やねん！？ このメガネ少年、まさかオトンかいな！？」

「スゴい古い写真だー！ 眼鏡の男の子が翼のお父さんなら、この一番端の背の高い男の子って、もしかしてー！？」

私は驚きのあまり息が詰まってしまった。なぜなら、この写真の中で三人の少年の間にいる一人の銀髪の少女、昨日お姉が私に見せてくれたものと一緒の姿をした歌月さんがそこに写っていたからだ。あの時お姉が持っていた写真は歌月さんが写っている部分だけ小さく切り取られ全体の風景までは確認出来なかったが、着ている服、



少し恥ずかしそうしている仕草、引き込まれてしまいそうな可愛い笑顔……。間違いない、あの写真とこの写真は全く一緒のもの、同じ場所同じ時間に撮られたものだ。

「……新作さん、これは……？」

「……カッちゃん、いやもとい、蓑田歌月はな、俺らと同じ『森川の里』の出身なんや」

ちよつとどここの騒ぎじゃない、とんでもない新事実が湧き出してきた。『森川の里』と言えば父さん啓介さん新作さんの兄弟同然の三人衆が幼少期を過ごした伊豆の孤児院の名前。と、いう事はこの写真に写る左端の眼鏡少年はやはり若かれし頃の新作さんで、右端の背の高い中学生離れた大人っぽい少年が小夜の予想通り啓介さんだろう。ならば、その中央に偉そうに腕を組んで陣取り、馴れ馴れしくピツタリと歌月さんの右隣に寄り添ういかにも悪ガキそうな坊主頭の少年はまさか……？

「……父さんと歌月さんは、小さい頃一緒に暮らしていたんですか……？」

「中学までやけどな、俺らが高校に上がる前、カッちゃんはどこかのお偉いさんに連れられていなくなってもうたんや」

「富豪の養女に……、お姉の話と合ってる、この写真は新作さん以外にも父さんや啓介さんも……？」

「捨ててなけりや持つてるはずやで、俺らの大切な青春の思い出やからな、さっきの俺みたいにどこしまったか忘れた、っちゅう話ならあるかもしれんがな、特に日頃忙しい啓介辺りは」

「……じゃあ、この写真から歌月さんの姿だけ切り取って、それをお姉に譲ってあげた人物っていうのは……」

「いや、あの頃はホンマ楽しかったわ、よう四人で一緒に色んな所遊びに行ったもんやで、今見てもホンマ可愛えな、どうや、メチヤクチャ美人やろカツちゃん？ 里の男子はみんなカツちゃんに夢中やったわ、俺はもちろん、あの啓介までギターそちのけでムンムン色気づいとなぐらいやからな、毎日何とか気い惹こうとみんなして必死になつてな、誰が彼女を落とすか競い合ってたもんやで」

へえ、三人は小さい頃一人の女の子を巡って争っていた時代があったんだ。あまり恋愛に興味が無さそうな啓介さんまで必死になつていたなんて意外。つーか一番意外なのは父さんだ。気を惹くなんてめんどくせえーとか言つて強引に相手を拉致しかねないあの理不尽人間がねえ。でもあの人つて女性が百人いたら百人全員モノにしないと気が済まない性格だから、多分ピュアな恋心で歌月さんに迫った訳じゃないとは思うけどねえ……。

「男三人で女一人を奪い合いね、何かドラマみたいな話だね、悪ガキにギターバカにエロ河童、か弱き彼女はこんな野獣みたいな三匹に追い回されてさぞや毎日気苦労が絶えなかっただろうね、何か可哀想、同情しちゃうわ」

「んでや、カツちゃんおらんって寂しいなあ、同じ高校行きたか

「ったなあ、と思つとつた俺らの前に現れたんがこの不良女や、さすがの俺らもコイツに対してはそんな気にはならへんかったな、だつて可憐で清楚で学業優秀なカツちゃんに比べたらこの女の可愛げ無い事、外見性格学力素行全て悪い事悪い事」

「可愛げ無くて悪かつたな！ お前ら三人にチヤホヤされるだなんてこつちからお払い下げだよバカヤロー！」

そうだったのか。父さんと歌月さんはそんな昔から顔見知りの間柄だったんだ。なら歌月さんが亡くなった後、古くからの知り合いだった父さんが頼まれてお姉を貰い受けたのも理解出来る。意外と単純な理由だったのかな、お姉が渡瀬家の養女になったのは。私ちょっと、難しく考え過ぎてたのかな……。

「ところでオトン、オトンら三人の中でこのアイドルちゃんを落とす事が出来たんは一体誰やねん？」

「あー、それあたしも知りたーい！ おとーさんって昔モテモテだったのかなー？ お母さんに出逢う前はいっぱい女の人とお付き合っていたのかなー？」

「バンドマンはモテるやろっからな、多分一番優位に立つとつたのは小夜のオトンな気がするわ、オトンは多分エロ過ぎて嫌われとつたんとちゃうか？」

「ねーねー、この歌月さんって人と一番仲良くなれたのって一体誰だったのー？」

「もしかしたら三人とも見事にフラれてたりしてな、ウヒヒ」

色恋沙汰話になると途端に色めき立つ年頃女子高生どもめ。自分達の父親がどれだけ女性にモテてたかそんなに気になりますか？ まあそうだなあ、私も翼の予想通り三人まとめて良い友達止まりで撃沈ってところだと思っけどなあ？ 釣り合わないもんね、控えめな歌月さんとのキャラの濃すぎる三人じゃ。特に父さんなんて絶対歌月さんから怖がられて敬遠されていたに違いない……。

「そんなんその写真見りやわかるやろ、真ん中で仲良う二人並んでな、俺と啓介なんて端に追いやられて外野扱いや、弾みでもカツちゃんの手なぞ握ったらその場で袋叩き、手どころか指一本すら触らせて貰えんかったもんやで」

「……えっ……？」

「リーダーの特権乱用しまくりやったわあの男は、神が齎した運命の出逢いだーだの俺は彼女を守る為に生まれてきたんだーだのアレコレほざいて俺らの恋心なんてハナから度外視お構い無し、それどころかカツちゃん人見知りで怖がりやのにそないな事にせず感情の赴くまんま直球体当たりやっつたしな、カツちゃんが里に来た初日からいきなり結婚してくれ言い出して鈴子母ちゃんに叱られとるわ、学校でカツちゃんをイジめる生徒達はもちろん偏見の目で見る教師達大人まで全員叩きのめして大問題になるわ、あまりの暴走っ振りに俺も啓介も途中で怖なっつてほとんど諦めとつたもんな、下手したら何されるかわかったもんやないしな」

「……あの、さっきから新作さんが言ってるアイツとかあの男って、

やっぱり……？」

「遂にはカツちゃんもその熱意の前に観念してもうてな、ほとんど脅して無理矢理交際取り付けたみたいなもんやでアレは？ それでも、アイツはカツちゃんには見てて気持ち悪いぐらい優しくて心底尽くしまくったな、カツちゃんも最後はホンマにアイツの事が好きになってしもたみたいやし……、いやまあしかしや、アイツが一人の女にあそこまで夢中になつとる姿、俺は今にも過去にも他に一度も見えた記憶無いわ」

「……ちよつと、ちよつと待って下さい！ 新作さん喋りだしたら止まらなすぎです！ えーと、話を整理するとそれを聞く限り当時歌月さんと恋愛関係になった人っていうのは、まさか……？」

「……ああ、そのまさかやで、何せアイツにとってカツちゃんは生涯唯一無二の……」

予想だにしてなかったまさかの新事実。新作さんは昔の淡い思い出話に熱中し完全に口が緩んでいる。これはチャンス、今なら全てを聞き出せるかもしれない。私は核心に迫ろうと一気に攻勢をかけたきつとこの話の裏側に私が知りたい全ての原点が隠されているに違いない。真実はすぐそこにある、あと少しだ、あともう少し……！

……が、次の瞬間、そんな私の切なる願いを打ち砕く小さな邪魔者の声が病室内に響き渡った。

「イエーイ、今日の主役登場だぜいー！ お待ちかねのみんなのアイドル、みータン今到着ー！」

「あつ、みータンだ！ みータン、久し振りー！」

「あつ、小夜タンだ、さーよターン！ って久し振りじゃないよこの前会ったばっかじゃん」

「あれ、そうだったっけー？ そうかー、そういえばそうだねー、この前あたしと瑠璃ちゃんと三人で麻美ちゃんのお見舞い行ったんだっけー、忘れちゃってたよエヘヘ」

「相変わらず小夜タンはいつまで経っても頭の中がボケボケですねー、小夜タンに瑠璃にみータンは手のかかる子供の面倒ですっかり肩が凝っちゃいましたよ、あーあ」

……誰も待ってねーよ、あともう一押しで全部聞き出せそうだったのに……。見た目は可愛らしい、しかし並みの大人より遥かに腹黒い小悪魔登場。姉より更に生意気娘の松本家次女・岬が勢い良く病室内に駆け込んで来た。相変わらずなのはこの子も同様、いざ口を開けば小学生とは思えないマセた言葉を並べ立てまくる。どこで覚えてくるんだかこんなセリフ、最近の小学生ってヤツはみんなこんなのはっかりなのかなあ？

「と、いう事でお姉タン、早速だけどみータンの肩揉んでちょーだい」

「何でウチがオマエの肩なんか揉まなアカンねや！ 姉様ナメとんのかこのクソガキが！」

「ダメですねー、お姉タンも相変わらずサービス精神ゼロで思いやりの欠片すらないダメダメ人間ですねー、こんな不甲斐ない姉を持つてみータン、肩どころか目も腰も辛くなってまるで更年期障害にでもなった気分です」

「アリナミンVでも飲んで、このどアホ！ 全く、到着早々ドタバタ走ってギヤーギヤー騒ぎまくりよってからに、今さっき病室では静かにせえって話したばかりやがな！ それをオマエは……」

「ねえねえパパー、みータンね、昨日の学校のテストで100点取ったんだよー！ ホラホラ見て見て超スゴくない？ お姉タンと違ってみータン超イケてるって感じてしょー？」

「最後まで人の話をちゃんと聞かんかいゴラア！ ってかオトンしんどのいにベッド飛び乗ってピョンピョン飛び跳ねんなや、オトンの病状悪くなったらオマエどないしてくれんねん！ 何かあったらオマエは責任取って緊急蘇生術でも……！」

「ねえねえお姉タン、顔に何かついてるよー！」

「……えっ？ 何や何や、何がついてんねん？」

「鼻でした、プププ」

「……オマエ、シバくぞゴラア……！」

「アハハ、お姉タンが怒った怒ったー！」

……ダメだ、岬に新作さんの所有権を奪われこれではとてもさつき

の話の続きが出来る状態じゃない。あーウザい。周りの空気をちつとも読まずに自由奔放に愛嬌を振りまく幼い妹と、それをデカい怒鳴り声で追いかけて回す更に精神年齢が幼い姉。どっちもうるさい、迷惑です。ここは病院ですよ、他の患者さんに迷惑かけないようにもつと良い子な対応をして下さい。特にお姉さん、あなたさっきまでの面子が完全に丸潰れになってますよ。あの一丁前な説法は一体何だったんでしょうか、もうガツカリです。

「コラッ！ 翼、岬！ いつも顔合わせれば姉妹ゲンカばかりして、病院内ぐらい仲良く出来ないの！？ 二人ともいい加減にしなさい！」

「いやだつてやオカン、またコイツがウチの言う事利かんとギャーギャー騒いでオトンに負担かけよるから……」

「お姉ちゃんがそんなに大声出したら妹が真似するのも当然でしょ！？ ここは家じゃないのよ、高校生にもなつてこんなくだらしない事で怒られていてどうするの、もつとしっかりしなさい！」

「……またや、またウチが怒られた……」

「しつかりしなさい！ プププ、やーい怒られた怒られたー、やつぱりお姉タンは怒られてばっかりのダメダメ人間ですねー」

「オマエも同罪のダメダメ人間やこのボケっ！！ こんな事になつたんはそもそもオマエが……！」

「ねえねえお姉タン！」



「何や今度は、何がついてんねん!? 目か、耳か、それとも口か!?」

「ただ呼んだだけ」

「……オマエ、マジでぶつ殺したる!!」

「怖い、殺人予告犯発見! お巡りさん、ここに犯罪者がいます!」

「オマエ一匹殺したところで罪に問われるかい、むしろ感謝状貰うて表彰もんや! 逃げんなやコラこのクソガキ、今日こそ姉の偉大さつてもんをその身にたっぷり叩き込んだる……!」

「もういい加減にして! 殺すとか殺さないとかそんな不吉な言葉並べて、ここをどこだと思ってるの!? そんなにケンカしたいなら二人とも家に帰りなさい! もう二度とお見舞いに来なくて結構です!」

「もう、何でいつもこないオチになんねやあ!?!」

岬から遅れて美香さんが病室に到着。清涼感溢れるビジネススーツを着こなしたトレードマークの綺麗なストリートヘアと縁無し眼鏡がとても良く似合っている。うーん、相変わらず美人だ。こんな時間まで仕事に勤しんでいたとは思えないほどの佇まいからは疲労の影が見えず、身なりがキツチリ引き締まっている。先程のお言葉、ごもつともです。私が言いたい事を全て代弁してくれた。親を困らせる不届き娘どもめ、少しは見習え。

「皆さん遅くなりました、……いづみ、こんな遅い時間まで残らせちゃってごめんね、無理なお願い聞いて貰っちゃって本当にごめんなさい」

「なあゝにを今更そんな余所余所しい事言ってんのよ、私とアンタの間柄でさ？ 美香こそこんな遅くまでお仕事お疲れっ！ とりあえず洗濯物の収納とか花瓶の水やりとか出来る事は大体やっというたからさ、朝からずっと働きっぱなしでしょ？ 少しは落ち着いてゆつくりしなよ」

「うん、ありがとう、凄く助かる……、いづみ、いつも側にいてくれて本当にありがとう」

「だからやめてよそんな改まってさ、何か照れるじゃんかよ、エヘへ」

美香さんからお礼の言葉をかけられると、いづみさんは嬉しそうに頭を掻いて少し恥ずかしがった。やっぱり仲良いんだなこの二人。さすがは幼馴染からの親友同士だけある。持つべきものは友か、果たしてここにいる私の友人達は二十年三十年経っても困った時に手を差し伸べてくれたりするだろうか？ 今現在においても私が助けてあげるばかりでこの二人にこちらが助けて貰った記憶がほとんどと言っていいほど無いような気がするのだが。

「新作クン、遅くなってごめんね、もっと早く来れるように急いだけだ……」

「……何でもかんでも先に謝ってまうのは美香ちゃんの悪い癖やな、とんでもない、むしろ謝らななんのはこっちの方や、いつも遅くまでホンマお疲れ様、ホンマおおきにやで」

「ホレ岬、オマエのオトン独占タイムはここまでや、さつさとベツドから降りてその場所オカンに譲ったれ」

「えっ、今さっきここに来たばかりなのに！　もっとたくさんパパとお話したい事がいっぱいあるのに！」

「ええからさつさと降りんかい！　こっち来て大人しくしてろや、空気読め！」

「チエツ、つまんないの」

ありやま、何と聞き分けの良い空気の読める姉妹だ事。やれば出来るじゃん、世界屈指のファザコンである翼もちやんと母親に譲るべき時は譲るんだね。これが松本家円満の秘訣なのかな。まあそれも両親夫婦同士が何年経ってもラブラブだからそうなれる訳で、渡瀬家夫婦みたいに巡り会ったが百年目今日こそ積年の決着つけてやる、みたいな因縁関係だと逆に二人きりにしたらとっても危険なんですけどね。また大喧嘩して家壊されちゃうよ。

「あつコレ、新作クンから頼まれてた例の物、まだ仮出版の状態だけど無事刷り上がったから」

「おつ、ホンマかいな？　いやあ、待ったわ、ようあんな酷い保存状態からここまで立派に仕上げてくれたもんやなあ！　これは

グッジョブやで、ホンマおおきに！」

「それが新作が美香に頼んでいたっていう野暮用？ 何それ、写真集？」

「うん、これは新作クンが以前……」

「嗚呼、やっぱりか、美香アンタついにこのエロバカの為にヘアヌード写真集まで買い与えるようになったんだね、何てこったい、あたしや虚しくて悲しくて涙が出てくるよ……」

「何でやねん！ せやから違う言うとるやろ！ いくら俺でも嫁にそないなもん買わせるほど落ちぶれてへんわ！」

「違う、違うよいづみ！ これは以前新作クン達が海外で取材をした時に撮った写真をまとめたものの！ 当時一緒にコンビを組んでたカメラマンさんが亡くなって今年でちょうど十年忌でね、それを偲んで彼が残っていた記録を一つの写真集として出版出来なかって新作クンから頼まれてたの」

「これらの写真のほとんどは一度爆発に巻き込まれて燃えてしまつてな、何とか全焼せずに済んだフィルムも状態が悪うてとても現像化するんは不可能やと思つとつたんやけど……、最近の復元補修技術は凄いわなあ、これは十分に納得出来る出来映えやで、ホンマありがとな美香ちゃん、さすがは俺の最高の嫁はんや」

「そんなおべんちゃら使つて……、お礼なら出版社の関係者の人達に言つてあげて、私は何もしてないもん……」

「いやいや、これは美香ちゃんやないと出来んかった仕事やで、ホ

ンマおおきに、心から愛しとるでホンマに」

「……もおう、子供達が見てる前でバカなんだからあ……」

真っ赤になつて照れる美香さんの姿はまるで十代の少女の様。もしもーし、何度も言うようですがここはデートスポットじゃなくて病院ですよ、お二人さーん。自分達の子供どころか余所の子も見てるんだから少しは弁えて下さいよ。見てるこっちが恥ずかしくなっちゃうよ、全く。

「ホンマええ出来や、完璧やで、これでやっと俺もアイツに報いてやれた氣いするわ、これでまた一つ、思い残す事が無くなつたわ……」

「……新作クン……」

「あーあ、いつまで経つてもお熱いお二人だ事、嫁の前ではこんな齒の浮く様なセリフ宣つて裏ではナースの尻追い回してる懲りないスケベ野郎の事だからさ、私はてつきり女の裸でも載りたいやらしい写真集か何かだと思っっちゃったけどね」

「……懲りない、スケベ？ ナースの、お尻？ どういう事かしら？ いづみ、ちょっとその話詳しく教えて」

「オイいづみ、オマエええ雰囲気やのに余計な事言うなや！」

ヤバイ。余計ないづみさんの一言にそれまでウツトリと優しい目を

していた美香さんの眼鏡のガラスが一瞬にして曇る。と、同時にそれまで岬の話し相手をしていた旦那様の眼鏡のガラスも冷や汗の湿気で一瞬にして曇る。病室内に漂っていた暖かい春麗らの様な一家団欒の空気が一転、身の毛のよだつ様な冷たい殺気地味たツンドラ気候へと変わっていく。うわあ、何か急に吐く息が白くなってきた！。

「ななな何を急に訳わからん事言い出しとんねやこの風間家のお母ちゃんは？ スケベとか尻とかさっぱりわからん、俺ずっとええ子にして愛しの美香ちゃん待ったやないかい？ なあ、せやったよな那奈？」

「……………」

「いやいやいやいやその意味ありげな無言はおかしいやろ？ 何を急に黙秘権なんか行使しとんねんオマエは？ 証人の義務全うせえよ、黙っとつたらわからんがな、そないな事じゃ将来世渡り上手になれへんぞ？ ホンマやで俺嘘なんかついてへんもん、美香ちゃんまだかな、早よ会いたいな、って、もう寂しゅうて寂しゅうて涙ポロポロ溢れて大変だったんや、なあ、せやったよな翼？」

「……オトン、見苦しいわ、そんなオトン、ウチ嫌いや……」

「ブルータス、オマエもか！？ 嫌いとは何やねん、オマエまでオトンを見殺しにしようとするんかいな！？ アカンがなアカンがなアカンがな、最近の若い子はみんな嘘つきで素直やないなあ？ 俺は命尽きるまで一人の女性にこの身を捧げるロマンチストやで、そないまだまだ青臭い小娘どもの尻ごときに夢中になる訳が無いやん、俺には美香ちゃんしか眼中あらへんがな、当たり前やないか何を今

更」

「オイ新作、今のお前すげーみっともないぞ、男だろ、潔く腹切れよ」

「四十路過ぎの欲求不満なオバハンは黙ってといて貰えまへんか！  
？ あゝもう翼も那奈もいづみもアカンアカンアカン、こんな切羽詰まった場面に笑いもボケもいらんのや、そないあくどい嘘までついて俺を陥れて一体何が楽しいっちゅうねん？ 小夜は違うわな、オマエは素直でええ子やもんな？ 言っただれや、俺がどんなに美香ちゃんを想つとるかをなっ！」

「うん！ さつき翼のお父さん、翼のお母さんが世界で一番だつて言つてたよー！」

「おう、せやっ！ どうやこれが真実や、真実はいつも一つやでえ！ でかしたで小夜、良うわかつとるやないかオマエは！ さすがは啓介の娘やな、羨ましいがな、アイツも素直でええ子に恵まれたもんや……」

「翼のお母さんが世界で一番エロくてナイスボディな女の人なんだつてー！」

「どアホっ！！ そいつは余計な話やっ！！」

「あとねー、バッグの中にいっーぱい女の人の名前が書いてあるメモがたくさんあったよー！ 翼のお父さんってモテモテなんだねー、そんなモテモテな人と結婚出来た翼のお母さんってやっぱスゴいなー！！」

「褒めてへん褒めてへんそれ絶対褒めてへんしフオーにもなつてへんがな、オマエ一体俺に何の恨みがあんな途方もない大告発かましといて何ニコニコしとんねん人様の家庭メチャクチャにして何がそない楽しいねん今日一番心臓に負担かつたわオマエは俺を殺す気かあああああ！！」

決定的。致命傷。見事なトドメの一撃だ。『溺れる者は藁をも掴む』とは正にこの事。小夜に助言を求める事自体とんでもないミスティク。小夜がニコニコしてるのは通常仕様です。本人悪気なんてこれっぽっちもありません。自業自得、全てはあなた自身が蒔いた種です。策士・松本新作、策に溺れるでござるの巻。

「……へえ、そうなんだ、ふーん……、新作くん、話があるからちよつとついて来て」

「いやいやちよつと待つてえな美香ちゃん違うねん違うねん誤解やねんそない怖い顔せんでいつもの可愛い笑顔で笑って許してえな頼むわつてか俺絶対安静の身やからベッドから降りたら死んでまうがな死んじゃう死んじゃうホンマに死んでまうし」

「いいから来なさい」

「はい」

両腕を組んだまま無言で病室の外へと先導する美香さんの後を追う新作さんの姿は、医者から余命申告を受けた直後の様な何とも言えない絶望的な雰囲気漂っていた。カラカラと引きずる点滴用の三



脚のタイヤの音が物凄く虚しく聞こえてくる。死相が出てたね。さすがにこの後新作さんからさっきの話の続きを聞くのは鬼だよね、本当に死んじやうかも。今日はもう自粛しよう。とりあえずは合掌、哀れなスケベに神のお導きがありますように、チーン。

「……何で男っていくつになってもああなんだろうねえ、多分アイツは死ぬまで女の尻追い回すんだろうなあ、やっぱり美香は結婚相手間違えたよ……」

「……夫婦で生きていくって大変なんだなあ、何か、結婚って本当は凄く怖いイベントなんだな、ってつくづく思い知らされた気がする……」

「那奈も気をつけなよ、ダメな男捕まえるところな事無いからね、それでも、結婚するって悪い事ばかりじゃないとは思っけどさ」

「じゃあダメな男にならないように十分厳しくしつけて下さいよ、自分の息子さんを……、ところでいづみさんは貴之さんと結婚して正解だったと思いますか？」

「うん、私は正解だったと思ってるよ、貴之はちゃんと私を妻として愛してくれたし、息子にとっても優しい父親だったし、百点満点中九十九点の結婚相手だったね」

「減点一点は？」

「私と翔太を置いて、さっさと先立たれちゃった事かな……」

「……いづみさん……」

「あつ、思い出したー！ 貴之叔父さんねー、昔あたしにいづみ叔母さんの料理が美味しいって自慢してたよー！ カボチャの煮つけが美味しいって、最高の奥さんだって言ってたー！」

「……まだ赤ん坊同然の頃の小夜にまで嫁の自慢話するとか、本当バカだねえアイツはもう……、そういえば貴之、カボチャの煮つけ大好物だったっけなあ……」

「あとねー、カボチャを素手で真つ二つに叩き割る女性なんて初めて見た、ゴリラみたいですげー感動した、だってー！ 包丁いらなくてとても便利だ、ってスゴいニコニコしながら嬉しそうだったよー！」

「……余計な事べらべら喋りやがってあのヤロー、今度位牌ごとカボチャと一緒に圧力鍋でグツグツ煮込んでやるのか……？」

……ブルルルル……、ブルルルル……。

「ハイもしもし、那奈？ ああ、やっと連絡取れた、いやさあ大変なんだよ今、親父さんと麗奈さんに捕まって昨日からずっと練習されられまくっててさ、丁度今休憩貰えたところなんだけどまだまだ帰らせてくれそうにないんだよ、俺このままじゃ二人に殺されちゃう……」

『ねえ翔太、私の良いところを一つ褒めるとしたら、どこ褒める？』

「な、何だよ急に？ それよりさ、近くに母さんか誰か大人の人もいる？ 頼むから親父さんと麗奈さんを説得してよ、本当にこのままじゃ帰れそうにないんだよ、学校にも行けやしない、誰か何とかして……」

『ねえ、どこ褒める？ 速やかに答えて』

「……答えたら説得してくれる？」

『その答え次第』

「……喧嘩に強くて不良に絡まれる心配が無い事、かな？」

……ブツツ、ツー、ツー、ツー……。

「えっー！ 何でー！？ 空手やってる人間にとって『強い』って最高の褒め言葉じゃないのかよー！？ 何も電話切らなくなっちゃっていいじゃん、しかも着信拒否にされてるし！ ちよっと待ってよマジでヤバいんだって、俺このままじゃ本当にここで野垂れ死ぬ……！」

「ゴラア翔太！ もう休憩は終わりだ、あと三百周くらいざっと回ってこい、そしたら帰してやる」

「まあ、あと三百周も走れるだなんて有り難い話じゃない、あなたは世界一幸せなライダーね、翔太」

「もう土下座でも何でもしますから許して下さいー!!」

……やっぱり蛙の子は蛙だったか。男性の皆様、是非とも女性を誉める際にはその部分に十分ご注意下さい。余計な発言は控え目に、壁に耳有り障子に目有り、どこで話を聞かれてるかわかったもんじやありませんよ。愛情表現は計画的に。

「……………」

「ねえねえお姉タン、それなーに？」

「……子供の見るもんとちゃう、ってか見ん方がええ……」

それよりさっきまで騒ぎまくってた翼が急に黙り込んでしんみりしてしまったのが気になる。美香さんが持ってきたあの写真集が原因の様だが、一体何が写っているのだろうか？ 見ない方が良いもの、亡くなったカメラマンさんが残した取材の写真、それだけで何か嫌な予感がするのだが……。

ここまで終始穏やかで楽しい会話で進んできたこの一時。しかしこの数分後、この写真集によってこの世界中で最も悲惨で、最も困難な問題と向き合う事になるとはこの時私は思いもしていなかった。それどころか近い将来、それが私達の人生に深く関わり、遠い地球の裏側の他人事では済まなくなるとは、とても想像出来てなかった

訳で……。

その話は、また次回。

「ってか病院では携帯の電源切れや、どんだけマナー違反やねんなオマエは？　今日は小夜の方がよっぽど大人やぞ」

「ホント今日的那奈は怒られてばかりだねー、ダメダメだねー、そんなんじゃないの事何にも言えないよー！」

……仰る通りです、失礼致しました、アイムソーリー……。

## 第78話 いつでも微笑みを

「ねえねえパパー、みータンね、体育の授業でも男の子達よりたくさん上手くサッカーのリフティング出来たんだよー！」

「……………」

「もしかしたらお姉タンよりサッカー上手くなっちゃうかもー！  
やっぱりみータン、超イケてな〜い？」

「……………」

「……………パパー？」

あれから大体十分ぐらい経っただろうか、世界一エッチでナイスボ  
ディな四十代女性だという愛する奥様にこっぴどく説教されたと思  
われる懲りないドスケベ重病患者さんは、グツタリとした様子で病  
室に帰ってくるや一言も発せずベッドに横になると、胎児の様に膝  
を抱えて丸くなったままピクリとも動かない。楽しそうに話す娘の  
言葉にも無反応。先程よりも頬が痩けてげっそり痩せ細ってしまっ  
たような印象を受ける。

「……………何コレ、さっきまでの人間騒音機が嘘みたいに静かになっ  
ちやっただじゃない、ねえ美香アンタ、どうやってこのお喋り男爵を退  
治したのよ？」

「次やったら離婚届に判子押して戴きます、って言っただけ」

「なるほどねー、やっとアンタの口から『離婚』っていう最終通達が出てきた訳か、今更遅いくらいだよ、いつそ今すぐ書類揃えちゃいな、私が速達で役所に届けてやるからさ、アハハハハ」

横たわる旦那様を見下ろす美香さんの雰囲気は未だピリピリ尖ったまま。眼鏡の奥からキラリと写る鋭い眼光がとつても怖いです。さすがは私の母・麗奈の一番の理解者だと自負するだけある。『麗奈教』スゴいな、着実に世界中に氷の女王、増加中。それ以上にいづみさんも喜び過ぎでしょ。この状況、スッゴい楽しくて仕方ないんだろうなあ……。

「……鬼や、美香ちゃんもいづみもみんな鬼や、俺一人にされたら寂しくて死んでまうがな、もう女怖い、女怖い……」

「寂しいと死んじゃうって、お前はどこのうさぎだよ？」

「碧いうさぎ、ずっと待ってる、独りきりで震えながら」

「その歌はやめろ！ 余計な問題に足突っ込むな、炙るぞお前？」

「俺は寂しいうさぎちゃん、半ベソかいて目も真っ赤、女という凶暴な肉食獣に食われてまう悲しい運命なんや、辛いなあ、こんな時は可愛え可愛えバニーちゃんにでも膝枕して貰いながら頭ナデナデして慰めて貰いたいわ……」

「岬、ママのバックから朱肉取り出してくれるかしら？ 書類用に  
パパの拇印採取しなきゃいけないから」

「嗚呼もう、女怖い、女怖い……」

……あまり懲りてない様にも見えるけど、これではらくはこの病棟のナースさん達も仕事に専念出来るようになるかな。もしかしたら他の病棟に移転したい、って言ってた新人ナースさんも帰ってくるかもね。うん、良かった良かった、これにて一件落着。しかし新作さんが黙っちゃうだけでこんなに病室内が静かになるんだなあ。パパに相手にして貰えない岬も黙って、普段ちよこまかつるさい小夜が静かなだけに尚更……。

「……………」

……もう一人いた。さつきから気味が悪いぐらい静かな女が。喋る事で活動エネルギーを自己発電してるんじゃないかと思われる父親譲りの原子力騒音機娘が、美香さんが持ってきた写真集とやりに熱中したままずっと無言状態。このままじゃ電池切れしちゃうんじゃないだろうかコイツ？ 大丈夫かな？

「……ねえ翼、さつきからずっと黙り込んでやっって一体どうしたの？ アンタが静かにしてるだなんて小夜が静かなのよりも気持ち悪いんだけど」

「……えっ？ いや別に、別に何でもないで……」



「あれー？　ここにもいないなー？　どこにいるんだろー？」

「その本、何なの？　何が写ってんの？」

「……いや、まあ、その、アレやわ、うん……」

「ここかなー！？　あれー？　ここにもいない、じゃあこっちかなー！？　あれー？　おかしいなー、どこに隠れてるのかなー？」

「何か、表紙とかパツと見た感じ、どこかの国の光景や現状が収めである写真集みたいだけど……」

「……まあ、まあな、うん、そういうこっちゃ……」

「わかった！　ここだー！」

「……えっ？　うわっ！！　コラ岬！　オマエ何をいきなり人様のスカート捲って中身覗いとんねん！」

何という大暴挙。会話を交わす私と翼の間にそそくさと入り込んだ小さい小悪魔は、椅子に座る姉のスカートの裾を掴むや何の躊躇も無くバサツと捲り返して御開帳。すぐに反応し急いで手で押さえたとはいえ、約一秒ぐらいの間翼はパンツ丸見えのあられもない姿になっていた。こんな大胆不敵なスカート捲りは私の人生で一度も見ただ事がない。パンチラどころじゃない、サービスカットもいいとこだ。あー、びつくりした！

「お姉タンの中じゃないんだったら、小夜タンのスカートの中かなー？」

「えー！？ ヤダヤダヤダ、あたしスカートの中に何も隠してないよー！ 那奈助けてー！」

「じゃあ那奈タンの中にいるのかなー？」

「てめーやってみろ、蹴っ飛ばすぞ！」

「ってかオマエ、さっきから戸棚開けたりベッドの下覗き込んだり何してんねや！？ 一体何を探しとんねや、それは人様のスカートの中に入っとなるような代物なんかいな！？」

「うん、多分」

「何や！？」

「薰タン」

「何でやねん！ そないなもん入っとなる訳無いやろが、このポケッ！！」

……いや、入ってもおかしくないかもしれない。新作さんよりもスケベで変態で神出鬼没なあの男なら十分にあり得る話だ。岬の予想、決して間違っていないような気がする。むしろ良い線いってる？

「ってか何でこの場面で薰の名前が出てくんねん！？ 今、アイツ

の事なんか全然関係ないやろが、どないな経緯になつたらそない訳わからん話になるんや!？」

「だってー、みータンがここに来るといつつも薫タン居るしー、今日も薫タン居るかなー、また一緒にいっぱい遊ぼうかなーと思つたら居ないしー、だからおかしいなー、お姉タンがみータンに意地悪しようとして薫タン隠してるのかなー、って」

「せやからってスカートの中に隠すかどアホが! 居らんなおかしいなって、アイツがいつもここに居る事自体がおかしいねん! 居らんのが当たり前なんや、毎度毎度アイツが居つたらこつちが頭おかしくなるわホンマに!」

「なーんだ、つまんないのー」

ああそうか、この前ここにお見舞いに来たの時と比べてかなり病室が静かだなと感じるのは、小夜が大人しかつたり翼があまり喋らないだけじゃなくて、ここに何しに来てるんだがよくわからないあのバカ男が居ないってのもあるんだ。確かに前回も私達が来る前になぜかちゃっかり病室に居たつけアイツ。あの時は途中で父さんまでやって来て随分と騒がしかったもんなあ……。

「そつといえはそうね、今日は薫君は来てないみたいね、ねえ翼、あなた学校で一緒じゃなかったの?」

「知らんがな、授業終わった途端早速教室に顔出してきてウザッと思つたら、『ハニー、残念だけど今日は一緒に居られないんだ、寂しくなつたらこれを俺だと思つてきつく抱き締めてくれ』とかほざい

てクツサイ体操着渡してきよったからソッコーごみ箱捨ててやったわ」

「ああそうだったわね、月曜日はいつも地区センターのケアプラザで介護のボランティアしてるって言ってたっけ薫君、居ないなら居ないで何かちよっと寂しい気もするわ、いつも岬の面倒を良く見てくれて私も助かってるし」

「勘弁してえな、岬はともかくオカンまで薫居らんで寂しいとか言わんといてえな、どんだけウチの家族は薫依存症やねん？」

今日の薫に始まった事ではなく、中学の頃は毎日当たり前の様にみんな集まって一緒に帰っていたのが最近は一人二人とメンバーが欠けている場合が多くなってきた気がする。特に男子。今日の下校時には誰一人いなかった。航はバンドの部活動、一茶も相変わらず柔道部の稽古、翔太に至っては御存知の通り昨日から家に帰ってこなくて登校すらしていない。

高校生にもなるとそれぞれ忙しい事情があるのも当然といえば当然か。つまり今、ここに居るのは他にやる事が無い暇人って訳で……。あれ？ 前回の話と矛盾する。私って忙しいの、それとも暇なの、どっち？

「航くんもバンドの練習忙しそうであまり一緒に帰れなくなっちゃったなー、瑠璃ちゃんもお兄ちゃんが居ない時が多くて寂しいっていつも言ってるよー」

「……っーか小夜、部活は？ アンタそのバンド部のマネージャーになっただんじやないの？」

「あつー！ 部活忘れてたー！」

「……あーあ……」

練習をすっぱかすバンドメンバーならともかく、それらを取り仕切らなければならないマネージャーが部活すっぱかすだなんて話聞いた事ないよ。完全にマネージャーという名のお荷物かマスコット、予想はしていたがやっぱりこうなったか。ロギ、ナカシマ、ザビ、本当にごめんね、私からも謝るよ。これからも色々苦労かけるかもしれないけど、どうかこの子の事長い目で見てやって下さい。

「……あつ、せや！ 美香ちゃん、この……」

「うん大丈夫よ、ちゃんともう一冊貰ってきてるから」

「ああ、ならええわ、ほなら今度会ったら渡してやってえな」

ふと思い出した様にベッドから起き上がった新作さんは美香さんに何かを確認すると、ホツとした様子で一息吐くとテーブルに置いてあったコップのお茶を一口含み、また一つ溜め息を吐いた。そして再び写真集に目を落とす翼の方をしばらく複雑な表情で見つめっていると、徐にその写真集を翼の手から取り、ページを開いた。

「……翼、見てみてどうやった？」

「……………」

「これが、今まで俺が見てきた世界の真実や、ホンモンの姿や」

「……………」

「言葉にならんか、当然や、しゃあない」

新作さんはそう言つと、瞑想する様に目を閉じて三度溜め息を吐いた。先程の二回よりも深く重い溜め息。その表情は私達がここに来た時のお喋りで陽気なスケベ男爵とは違い、常に命の危険に晒される、世界中の紛争地域や不安定な国内情勢の最前線で取材を続けてきた国際ジャーナリストの顔に変わっていた。

「何や那奈、オマエもコレが気になってしゃあない、って顔しとるな」

「…………えっ？ いや、その…………」

「……………見てみるか？」

「えっ、良いんですか？」

「もちろんやで、ただし自己責任や、後で後悔したただの見なきや良かつただの文句は抜きやで」

新作さんはそう言つと、ベッドから手を伸ばして私にそれを手渡し

てくれた。A4サイズの少し大きめな写真集、それほど厚くはない。そして、その表紙には無残にも粉々に崩壊した家の様な建物の残骸が散らばっている背景に、肌が褐色のアラブ系と思しき涙を流す一人の幼い男の子が立ち尽くしている姿が写っていた。

『It's not one.』

タイトルにはそう書かれている。一つじゃない、かな？ 私はどちらかと言うと英語の成績はそれほど良い方ではないが、日本語に直訳するとそういう意味だろう、多分。何かどこかの偉人が言い残した文章の一節の様な言葉っぽいタイトルだ。

「ねーねー、それあたしも見たーい！ 那奈、一緒に見せてー！」

「みータンも見たーい！」

「アカン、オマエらは見たらアカン、特に岬は絶対に見たらアカン」

「どうしてー！？ お姉タンは見てたのに、パパのケチー！」

「えー！ あたしもダメなのー？ 何でー！？」

「ケチやろうが何やろうがアカンもんはアカン、小夜もこんなもん見て何かあったら俺が啓介やあづみの姉ちゃんに怒られてまう、絶対にアカン」

「ズルいよー！ 那奈と翼はいいのに、何であたしだけー！？」

「そうだそうだー！ パパはいつもお姉タンばかり鼻屑して、姉妹差別だー！ 人権侵害だー！ 日本国憲法第十二条を無視した許すまじ言動だー！」

「うるせえよ側で聞いてりやガキの分際で人権とか憲法とか生意気垂れやがってよ！ はいはいガチンチョどもはグダグダ言っでないで私と一緒に売店に何か飲み物でも買いに行こう！ ついでにお菓子も買ってあげるからさ、ねっ！」

「ホントにー？ やったー！ ねーねーみータン、いづみ叔母さんがお菓子買ってくれるってー！」

「わーい！ お菓子お菓子ー！」

何というナイスタイミングでナイスアシスト。絶妙の機転により喧しいガチンチョどもはすっかりお菓子に気を取られてさっさと病室を出て売店へと一直線。生意気言っても所詮はお子ちゃまか、さすがですいづみさん。しかし岬のヤツ、本当にいちいちうるさいね。何か少しでも翼の気苦労がわかったような気がする……。

「ごめんねいづみ、新作クンどころか岬の面倒まで見て貰っちゃって……」

「良いつて事よ、それより美香、あの口達者なクソガキ、本当にアンタのお腹から出てきた子？」



……さて、邪魔者も居なくなつてこれなら新作さんも一安心、私も落ち着いてこの写真集のページを開く事が出来る……。が、実のところそれを少し迷っている私がいる。

後悔、自己責任、さっきの新作さんの言葉が重く私にのしかかる。多分この本にはあの翼でさえ黙り込んでしまうほどかなりシヨッキングな内容が含まれていて、多分掲載されている写真のほとんどがそういうものばかり。それはこのインパクトのある表紙を見ただけでも容易に予測がつく。

表紙に写るこの男の子がいる風景、これはおそらくどこかの国の戦場となつた街の風景だろう。これからしてページを捲つた途端に觀光名所の絶景や名物料理の案内といった華やかなレポートが収められているとは到底思えない。世界の真実、本当の姿か。知りたい好奇心もあるが、やっぱりどうしても気が引けてしまう。

「那奈」

「……えっ、えっ？ 何よ翼？」

「覚悟しとき、それ、今オマエが想像しとるもんを遥かに超えとるぞ、教科書レベル程度やと思つとつたらエライ目見るで」

……余計な事言つなつつの、尚更ページ開け辛くなつちやつたじゃない！ うわぁどうしよう、やっぱりやめておこうかな。知らぬが仏、って言葉もあるくらいだもんなあ。私がこの真実を知つたところで私自身の人生に何か変化が起きるとはちよつと想像つかないし、第一、私があか世界に貢献出来る訳でもないし、何も無理して冒険するほどの話でも無いんじゃないかな……？

……でも、『やっぱりやめます』ってそのまま返すのもせつかくの新作さんの好意を無駄にってしまう事になるし、何より嫌なのは私が怖じ気づいたのを翼に後で『アイツ、偉そうにしとるけどホンマはビビりやで〜』ってあちこち言い触らされそうな事だ。今の忠告ももしかしたら私に対する軽い挑発だったりするかも。

それに、『日本人は平和ボケだね〜、これだから最近の若者達は』なんて海外や年配者の方々から呆れられたりするのも正直癪に障る。それは翼に馬鹿にされるより許せないし情けない事だ。やっぱり逃げるのは卑怯、こんな事でビビっていたら私はいつまで経ってもお姉に追いつけないし、私が今知リたがっている両親や歌月さん達に隠された過去の真実にも辿り着けない！

よし、決めた！ 見る！ 例えどんなに衝撃的な内容だとしても、今、私の手元にあるこの写真集は美香さんの話によるとまだ仮出版の物らしいが、これは後々に正式に出版されて全国の書店に並ぶ代物なんだから、見る者全てがドン引きしてしまうほどそこまで酷い内容のものではないはず。そんなだったら普通は売り物にならないだろうし。

多分テレビのニュースやドキュメンタリーとかで流れる映像程度のものだろう。それならば、私だって何度か目にした覚えがあって衝撃に耐えうる免疫力がある。大丈夫、私ももう高校生になったんだ、いい加減少しは今現在世界中でどんな出来事が起こっているのか知っておかないといけない時期だ。これは社会勉強なんだ、知識を身につけるチャンスなんだ、怖じ気づいてたまるか、これまでの渡瀬家の人間達の暴挙の数々に比べたら何て事は無い！ 新作さん、喜んで学習させて戴きます！

「……………うわあ……………」

……後悔。やっぱり見るんじゃないかった。確かにこれは小夜や岬には見せられないよ、ヤバすぎるって……。

「……なっ、せやからエライ目見るで、って言うたやろ？」

「まだ仮出版のもんやからな、これから使えそうな写真を厳選して最終的な編集かける前やし、写真自体に何の修正も加えられてへんから、かなりの免疫が無いと相当キツイと思うわ、那奈、オマエ勇氣あるなあ？ さすがは虎太郎の娘やな」

「……先に言えよ、このバカ親子……」

ちよつとコメディーっぽく冗談めかした展開にはなっているが、私が見てしまったそれらの写真に写っている光景の数々は、とても笑えるものではなかった。

（注・この先、コメディーらしからぬ若干残虐でシリアスな表現があります。ご注意下さい）

翼の言う通りそれは私の想像を遥かに超えるほどあまりに衝撃的で、強烈で、悲惨で、絶望的……。怒りや悲しみを通り過ぎ、嘔吐した時の様な不快感が体の底から込み上げてくるのを感じた。もちろん、グロテスクな写真に対して吐き気をもよおしたというのもあるが、それだけではない、何か言葉に表せないやりきれない感情が……。

銃弾によって頭を吹き飛ばれた兵士。

爆発によって胴体以外が吹き飛んでしまった男性の死体。

戦車に轢かれ真っ赤な肉片と化した人間らしきもの。

血まみれになり倒れる母親の元で泣き叫ぶ幼児。

原型を留めないほど黒く焼け焦げ灰になった人間の姿。

まるでゴミの様に折り重なり積み上げられている戦死者の山。

……これ以上は言えない。言っても、言う方も聞く方も不快になるだけだと思う。もっと酷い光景、もっと酷い状況がたくさんあった。血、涙、叫び、苦しみ、怒り、嘆き……。それらがこの本のほとんどのページを埋め尽くしていた。

「……これが、新作さんが見てきた世界の真実……？」

「……そうや那奈、そしてこの真実は今でもなおこの世界中のあちこちで繰り返されとる、ほぼ毎日、出口の見えない迷宮みたいにな」

「……今も……？」

……こんな事が、こんないたたまれない現実が本当にこの地球上で起こっているの？ 過去でもなく、ましてや空想の世界でもなく、

今現在もこの世界のどこかで？　だって戦争は私達が生まれるもつと昔に終わったんじゃないの？　同じ過ちは繰り返さない、二度と争いはしないって、今、世界各国は手を結んで平和の時代へと歩み出しているんじゃないの？　嘘だよ、信じられない……。

「嘘みたいやけど、それが事実や、真実なんや、表向きの話や報道はそうでも、裏では未だこないアホな事が続けられてんねん、ホンマ、聞くに耐えへんやりきれん話かもしれんがな……」

「……………」

「……オイオイオイ何や何や何や！　那奈も翼も濡れ煎餅みたいな湿気た面しよってからに、そりゃこんなエライもんを見せてしもた事は謝るがな、何もオマエらがそないべっこりへコむ事無いやろ？　猫背になつとるぞ、シャキツとせいシャキツと！」

「……………でも……………」

「……あんなん見たら何かウチら、こないお気楽に生きとるのが申し訳なくて……………」

「確かに他国の各地には今もぎょうさん悲しみと苦しみが渦巻いてる場所が存在しとる、ところがしかしやで、この世界は何も絶望ばかりって訳でもないんや、その悲しみの連鎖もいずれは終焉を迎える時が来る、春になれば雪は溶ける、明けない夜は無い、って言うてな、いずれは暗闇にも光が差す時が来るんや、それは過去の歴史が証明しとる、人類の歴史つてもんはそういうもんやねん」

「……………」

「……フォローにならんか、うーん、しゃあないなあ……」

新作さんは再びお茶を口に含むと、パンツと両膝を叩いてうなだれる私達の顔を覗き込み話を続けた。今度は先程の真実を語る深刻な表情とは打って変わり、子供達に勉強の楽しさを教えている、教師の様な優しい笑顔で。

「なあ翼、那奈、オマエら日本人に生まれてきて良かったなあ、って思った事あるか？」

「……いえ、あまり……、嫌だと思った事もあまり無いですけど……」

「……ウチも、あんまり思った事無いわ……」

「俺はつくづく日本人に生まれてきて良かったと思うわ、もしそうやなかったら今頃とづくに病氣以外で死んどったかもしれんし、美香ちゃんとも巡り逢えんかった、そして俺らの間に生まれたオマエや岬にも、豊かで安定した生活をさせてやる事が出来なかったかもしれない」

……何か、以前にも見た光景だ。これまでも、新作さんは様々な状況で私達に『大切な何か』を伝えてきてくれた。ある時は義足のコンプレックスを持っていた薫に、同じく体に障害を持つ者として卑屈に思う事など一つも無いと説き、ある時はサッカーを通じて夢をもつ事、夢を追い続ける事の大切さを説き、ある時は自分の死期が

近づいているのを察しながらも、それでもこの世に生まれ生きて  
いる事の素晴らしさを説いた。そして今また、私達に対して『大切な  
何か』を残そうとしている。

「ええかよく聞け、オマエらは恵まれとる、食いもんにも困らず、  
寝る場所にも困らず、アホな事せん限り命を落とす心配も少ない、  
好きなだけ勉強して、好きなだけ遊んで、スポーツに打ち込めて、  
自由に恋愛を楽しめる、それが出来るのも全て、今オマエらが生ま  
れてきたこの時代と環境が平和そのものだからや」

「……オトン……」

「……新作さん……」

「せやから、それを感謝せなアカン、無駄にしたらアカン、恵まれ  
とる事を当たり前やと思つたらアカンねん！　もしこの真実を知つ  
て胸が痛むんやつたら、自分達にも何か出来る事がないかと思うん  
やつたら、今、オマエらが出来る事は常に毎日生きていられる事を  
感謝して、一切手加減せず全力で人生を謳歌する事や！　ホンマに  
心から愛せる男見つけて、ぎょうさん悩んで、怒って、泣いて、笑  
って、与えて貰ったその命を一杯満喫して完全燃焼する事や！  
一生懸命生きよう思えば人様に迷惑かけるようなアホな事もせえへ  
んし、同じく一生懸命生きとる人間を傷つけたりなんてせえへん！  
自分の命を大切にする、人生を手加減無く全力で生きる、それが  
この世の中の為にもなんねん！」

「……………」

「ええな、全力やで、手加減無しやで！　もう食べへん、もう腹一

杯やゝ！ ってなるくらい人生を楽しまんとアカンのやぞ！ ……  
それをしたくても、出来んかった人達の分までもな」

「それが、今の私達でも出来る事……？」

「……その程度か、自分らって非力やな、って思うかもしれんが、それはオマエらだけやない、俺らからそうなんや、何かデカイ事しよう、この世界変えたらう思ても、人一人の力なんて微々たるもんや、どんなに大声で真実を伝えても、それが届かない時もあんねん、彼らにかて、どうしても避けられん理由があって争つとる訳やしな……」

「……………」

「でもアカン、どない理由があっても人殺したらアカン！ せやから、この世界の人間全員が、自らに与えられた命を大切に、一生懸命人生を生きてくれば、人殺す、自爆するなんてそないアホな事せんでも問題は必ず解決するはずや、一人や二人じゃ無理でもこの世の中に生きる人間全員がそう思ってくれたら絶対に世界は変わる！ 俺はそう、そう思えて仕方がないねん……」

「……命を燃やし、命を懸けて波乱の人生を駆け抜けてきた人の言葉は、どんなことわざや格言よりも遥かに重い。そして、納得出来る、重いのに、まるで何度も丁寧に濾過され澄み切った湧き水の様に、スウーッと心の奥底にまで染み渡っていく。この人こそ正に生き字引、あの人生常に全勝無敗、怖いもの知らずの父さんでさえ、『アイツの真似は出来ねえ』と一目置く人だけある。人生のバイブルの様な人だ……」



「しつこいようやけど、ええか、手加減無しやぞ、全力やぞ！ 若い時代はあつという間や、油断してたらアカン、絶対に悔い残したらアカン！ 一時も粗末にせず一日一日常に完全燃焼するんやで、ええな！」

「……はい、しっかりと胸に留めておきます……」

「特に翼！ オマエは早ええ男見つけてとっと結婚せい！ 俺の目の黒い内に花嫁姿見せてくれえや、んで、この手に孫抱かせてくれえや、岬にはまだまだ先の話やからな、オマエが頼りや、宜しく頼むで！」

「……うゝん、せなや、まあ、ウチなりに頑張ってみるわ……」

「何や齒切れ悪いなあ、オマエは俺と美香ちゃんの娘やぞ、俺ほどやないにせよジャーニーズ系の美少年ぐらい捕まえんのチョロいもんやろ、オマエは絶世の美少女やで、自信持つて無い胸張れい！」

「わかつたつちゆうねん！ オトンよりええ男捕まえてきてヤキモチ妬かしたるから心配すんなや！ ってか無い胸は余計や、シバくぞホンマに！」

……この人は何でこんなにポジティブでいられるんだろう。誰もが目を伏せたくなる様な世界中の悲痛な真実の数々、自らも病気ににより常に死の恐怖と戦いながら、それらを間近で目にし肌で感じてきた新作さんの言葉は、何度も言うが、重い。ずっしりと重く、乱反射する様に私の心の中に響き渡った。それは多分、翼の無い胸にもこれが世界中を渡り歩き真実を伝え続けてきた『不死身のジャーナ

リスト』と呼ばれた人間の強さなのか。父さんじゃないがとても真似出来ない、とてつもない強靱な心の持ち主だ。

「はい松本さんこんばんはー、夕食の時間だよー」

「おっ、もうそない時間かいな、配膳係のおばちゃんいつもサンキユーな」

「さすがの新作クンも配膳係のおばちゃんにはセクハラしないみたいね」

「……もう許してえな、美香ちゃん……」

病室の時計を見ると短針はすでに午後の六時を回っていた。どうりで私も小腹が空いてくる訳だ。ある意味ナイスボディな恰幅の良い白衣姿のおばちゃんが食膳をテーブルに置き病室を去ると、新作さんは少し嬉しそうに早速お椀を取り味噌汁を一口すすった。献立は他に白いご飯と焼き魚と納豆とほうれん草らしきおひたし、美味しそうだ。

「いやあ、しっかし今思うとホンマに日本帰ってきて大正解やったなあ、イタリアも悪うなかったけど毎日トマトとチーズとパスタばかりじゃ口の中塩っ辛くてじゃないわ、やっぱり日本人には白米と味噌汁が一番やで、なあ美香ちゃん？」

「ウフフ、そうね、でも新作クン、日本人を名乗るならまずそろそろ納豆の食わず嫌いも克服しないとね」

「コレはアカン、人間の食うもんやない、こないネバネバ口の中入れたら心肺停止して死んでまうわ、俺」

「コレはウチもアカン、こないクツサイもん口の中入れたら一生臭い取れへんくなりそうでウチも死んでまうわ」

「せやる翼？ さすがは俺の娘やな、ホレホレ、コレ臭い嗅いでみい、この世のもんとは思えへん魑魅魍魎の臭いや」

「うわっ、クツサッ！ これ絶対鹿のフンや、食いもんとちゃう！」

「また親子揃ってそんな事言って……、納豆は健康な体を作る貴重なタンパク質の塊なのよ、岬は納豆大好きなのに、同じ親子で本当に不思議ね？」

「俺が納豆嫌いなんは最近良くある食物アレルギーってヤツやで多分、食ったらシヨックで死んでまうってヤツ、何やったっけ、アラキーシヨック？」

「アナフィラキシーシヨックでしょ！ ヌード写真集見過ぎ！ 新作クンの場合は明らかに食わず嫌いです！」

「……もう、さっきのシリアスなジャーナリストの顔からただのお喋り男爵に様変わりしてるよこの人、本当の新作さんって、一体どっち……？」

今まで考えもしなかった世界中の様々な悲劇や現実を目の辺りに少し意気消沈気味だった私と翼も、新作さんの温かい言葉に励まさ

れすっかり気を取り直し、病室の中は再び冗談まじりの雑談が飛び交う穏やかなムードになった。美味しそうだなご飯、何か一気にお腹空いてきた。さつきまであんな衝撃的な写真を見てどっぴり落ち込んでたクセに、私も随分と現金な人間のようなようだ。

「ワイー！ 見て見て那奈ー！ いづみ叔母さんにお菓子いっぱい買って貰っちゃったー！」

「ポテチにお煎にチョコにポッキーにいっぱいいっぱい！ さすが日本一のレコード会社社長の親戚さんは景気が良いですねー、太っ腹ですー！」

事も終息し、ちょうどいいタイミングで小夜と岬が売店から帰ってきた。二人の両手には大量のお菓子が詰め込まれたビニールの手さげ袋が。遅れて病室に入ってきたいづみさんは財布の中身を見ながらガツクリと肩を落としている。こりやかなりの損害額を被った様子。

「……ねえ美香、何度も言うけどアレ本当にアンタの娘？ どういう教育してんの？ この子、遠慮してもんが無いの？ このまま店ごと商品買い占めるつもりなのか？ って見てて正直ヒヤヒヤしたよ、私、破産しちゃうって……」

「……本当にもう、色々ごめんなさいねいづみ、後で領収書渡してくれたらきっちり全額払うから……」

そんな大人達の嘆きなど露知らず、餌を目の前にしたお子ちゃま達は病室だろうとお構いなしにお菓子パーティー開催。食事制限されてる患者さんもいるんだぞー、自制しろバカもーん。

「よーし、じゃあ早速お菓子食べようかみータン！　あたしはポツキー食べようつとバリバリ」

「みータンはポテチ食べるーバリバリ」

「コラッ岬！　お菓子買って貰って、ちゃんといづみにお礼言ったの！？」

「いづみタンありがとー！　バリバリ」

「あたしもいづみ叔母さんありがとー！　バリバリ」

「……もういい、こんな展開、小夜を連れて行った時点で大体予想出来てたし……」

そういえば動物園でも餌貰って礼を言う猿は一匹も見つた事がないなあ。それと同じなのかな、この二人の場合は。いづみ飼育員さんお仕事ご苦労様です。さて、夕飯にありつけるまではまだもう少し時間がかかりそうだし、私も猿になって少しばかり餌に群がるとしますかね……。

「でも、せつかくだけどこのお菓子はまだしばらくおあずけです」

「えっー！ どうしてママー！？」

「えー！ あたしもおあずけなのー！？ 何でー！？」

「何でって、二人とももうこんな時間なのよ？ 今この時に栄養の偏ったお菓子なんか食べたらお腹いっぱいになって、身体の成長の過程において大事な役割になる肝心の夕飯を食べれなくなっちゃうでしょ？ だからダメ、母親としても、一教育者の立場としてもこの時間の間食は認める事は出来ません、没収します」

「えー！ あたしもうお腹空いたよー！ お腹空き過ぎてお腹と背中がくっついちゃうよー！」

「みータンもお腹空いたー！ 栄養失調で低血糖症になっちゃうよー！ 育ち盛りの子供から食べ物取り上げるなんて、ママの育児放棄、幼児虐待ー！」

「はいはい、もう少し我慢してね二人とも、今日はいづみにたくさん迷惑かけちゃったから今度は私がみんなに夕飯をご馳走するわ、帰りにどこかで外食していきましょう、何でも好きな物食べさせてあげるから、ねっ？」

「ホントに？ わーい！ みータンはハンバーグ食べたーい！」

「ワイワイ！ あたしは釜飯食べたーい！」

……仰られる通りです、美香さん。私も間食自粛します……。しかしさあ小夜、アンタさっき少しは成長したって褒めてあげたばかりなのに、これじゃ全く小学生と同じレベルじゃん……。いとも簡単

に食べ物に釣られるガチンチョどもめ、つーかハンバーグと釜飯を一緒に食べられる外食店って一体どこよ？ ミシユランガイドに載ってるかなあ？

「せや、時に翼、オマエそろそろ代表の合宿始まるんとちゃうか？」

「うん、せやな、ちょうど来月の頭から召集やったかな？」

「ついにオマエがあ代表のユニフォームを着てピッチに立つ時が来たんやなあ、何や感慨深いやないか、ようここまで辿り着いたもんや、オマエはオトンの誇りやで」

ご馳走に飛び跳ねる猿達を横目に見ながら、自分の果たせなかった夢を叶えてくれた娘の偉業に新作さんはとても嬉しそうで食事のペースも軽やかに箸が進む。年代別とはいえ翼が日本代表ねえ、このサッカーには圧倒的不利と思われる短足のチビツ子がねえ？ 未だにいまいち信じられない話だが、きっと新作さんにとっては首が長くなるほど待ちに待った吉報だったんだろうなあ……。

「こういう大会に参加出来る事は何も試合の勝ち負けや技術のレベルアップに繋がるだけやない、今回はアジア地区の国だけかもしれないがな、それでもぎょうさん異文化の人々とコミュニケーションが取れる貴重な経験も出来んねん、それが国際大会の醍醐味や」

「そう言ってもオトン、ウチ日本語以外何も喋れへんがな、どないしてコミュニケーション取んねん？ しかも韓国人とか中国人とかウチら日本人の事嫌ってそうで何か今から怖いわ、特に北朝鮮なん

か……」

「それは偏見やな、それが人々が憎しみ合う争いの火種になんねん、アカンな」

「……って言うても、言語の違いは何ともならんがな……」

「そないな事ないで、言葉なんか通じんでもコミュニケーションなんぞ身振り素振りですらにでもなんねん！ それにな、嫌つとる憎んだるなんて話はあくまで国家レベルのお偉いさん同士の話でな、実際に選手達に会ってみれば『何や、韓国も中国も北朝鮮もみんなええ人ばかりやん！』ってなるで！ 向こうかてオマエに会うたら『日本にはこないオモロイヤツが居るんかいな！？』ってめつちやフレンドリーになれる事受け合いやで！ せやから何も心配する事なんかあらへん、言葉や文化や住む環境が違ってたって俺らはみんな同じ人間なんや、仲良う出来ん訳がない、それは今までの俺の経験からも保証したるわ」

「同じ人間かあ、せやな、何かそう言われるとウチと同年ぐらいの他の国の女の子達がいつもどないな事して遊んどるのかちよつと興味出てきたわ」

「その意気や！ ええか翼、試合に勝つ事だけとちやうぞ、ぎょうさん色んな国の人と出会って、ぎょうさん色んな話聞いてこい！そして、これからもぎょうさん色んな大会に出場してぎょうさん色んな国に行ってこい！ そこで得た経験と知識は必ず、全部オマエの力になるはずやでえ！」

「その為にはまず、毎回代表に召集されるようにならんとアカンなあ」



「オマエなら出来る！ この調子でいつかは俺をワールドカップの観客席に連れて行ってくれえや、国際サッカーの舞台は国々が交流を深める恰好の機会、ワールドカップは世界平和、国際友好の象徴なんやでえ！」

「でも、そのサッカーの試合の結果で戦争になった国もあつたってウチは聞いとるけどなあ？」

「アーアー聴こえへん聴こえへん、鼓膜破れたんかな、なーんも聴こえへん」

「……何ちゅう都合のええ耳や」

「それまでは俺も病魔に負けんよう気張るさかいに、まずは代表デビューと記念すべき一勝や、来月末の大会、楽しみにしとるでえ！」

「おう！ お釣りが来るほどのスーパープレー見せたるさかいに、オトンもワールドカップだけやのうて頑張つて体調整えて、今度の試合も九州まで足運んで観に来てや！」

「……九州遠いなあ……、長居やさいたまはもちろん、国立でも遠いわあ、せめて三ツ沢辺りでやつてくれへん？」

「交通手段しんどいわ！ 日産スタジアムじゃアカンのかいな！」

あつ、そうそう。この物語の舞台って実は神奈川県なんです。知らなかった？ そりゃ一度も話してないもんね、当たり前か。理由は単純、作家自らが神奈川在住だから。ええ、どうせバカながわ県民

ですよ私達。蛇口捻るとシュウマイが出てきますよ（嘘です）。一家に一台自転車代わりに江ノ電が置いてありますよ（もちろん嘘です）。じゃんじゃんそーじゃん三浦のマグロうめーじゃんじゃん（これは事実）。

「……でもやつぱりアレやな、代表ユニフォームもええが、さっきも言ったが俺は早ようオマエの綺麗な花嫁姿が見たいわな、父親としての当然の願いや、果たしてそれまで生きてられるやるか俺？」

「当たり前や、生きて貰わな困るで！　ってかオトン、ウチの結婚式、絶対に泣くやろ？」

「泣くな、絶対に泣くわ、今から保証したる、もう涙も鼻水も大洪水になって式場水没してまうかも、せやからやつぱりお嫁に行かんとずっとオトンの側に居てえな、どこぞの馬の骨かわからん男のものにならんといてえなあ」

「ウチに嫁に行つて欲しいんかそれとも嫌なんか、どっちやねん！」

「翼にも那奈みたいに小さい頃から気心知れた許嫁を準備出来とつたら俺も安心してられるんやけどなあ、そう考えると虎太郎のヤツは上手い事やりよつたでアイツは」

「えっ、翔太って最初からそのつもりで父さんが準備したものなの？」

「……そんな訳ねーだろ、何で私がアイツの策略で腹痛めて息子産まなきゃいけないんだよ……」

「……ですよねー、いづみさん……」

焼き魚も綺麗に食べ終わり、茶碗についた最後の米粒を一つ箸で摘み取り口に運んだ新作さんは、それを流し込む様にお椀に口をつけ味噌汁を飲み始めた。あーお腹空いた。私は焼き魚御膳にしようかな。ハンバーグに釜飯に焼き魚、本当にどこの店に行けば全部メニューにあるんだか。

「えー？ でも那奈だけじゃなくて翼にだって将来結婚してくれそうな人、いるじゃーん？」

「お、オイオイちよつと待てや小夜、オマエまた余計な事喋るんとかやうやるな？ ええから黙っとけ、オマエが喋ると誤解が誤解生んでろくな事にならへん……！」

「だって翼って今、薫ちゃんと付き合ってるって」

「せやから黙れっちゅうねん……！」

「……ブハッ！」

トラブルメーカーの面目躍如。小夜からの余計な情報に反応した新作さんは飲んでいた味噌汁をブツと吹き出し病室中に香ばしい味噌と海藻の匂いが。そしてどうやら味噌汁の具が気管に入ってしまったのか、そのままベッドに倒れ込み咳き込み出してしまった。

「……ゲホッ、ゲホゲホッ……！」

「やだ、新作クン大丈夫！？」

「ちょっとちょっと何よ急に新作のヤツ苦しそうにうずくまっちゃつてさ、さっきまであんなにピンピンしてたクセに突然病人っぽい白々しい演技すんなっての」

「違う、違うの！ 本当に苦しいの！ 痰が絡んだり食べ物が支えたりして咳き込んだら急激に心拍数が上がるからダメだって担当医から言われてるの、お願いいづみ、今すぐナースコール押して！」

「えっ、マジで？ これヤバいの？ マジで！？ 嘘おーん！？」

その後の病室内のてんやわんやつ振りはそりやもう大変だった。看護婦数人に続き担当医も走ってこちらに駆けつけてきて、すぐさま心電図に酸素吸入器にあれやらこれやら様々な医療機材が新作さんにフル装備され、私達子供は全員病室から追いやられる様に病室の外に出されてしまった。穏やかな夕食時の団欒ムードが一転、いきなり予断を許さない危篤状態へ。小夜と味噌汁に殺されかける新作さん、本当にご迷惑ばかりかけてすみません……。

「何か大変な事になっちゃったねー、翼のお父さんって味噌汁飲んだら気持ち悪くなっちゃう体なのかなー？」

「そないな訳あるかい！ 明らかにオマエのせいやろが！」

「お腹空いたなー、もう七時だよー、ねーねーまだ帰れないのー？」

「こない時間になったんも、オトンが死にかけとんのも、みんなみんなオマエのせいや、このポケット！」

……結局、新作さんの容態が安定するまで私達も病院内の待合室で待機する羽目になった。いづみさんも美香さんに付き添ったまま帰ってこないし、先に帰っていいと言われたとはいえやっぱり心配だし。もしかして『先に帰れ』とは『邪魔だからさっさと消えろ』って意味だったのかな。でもそう思われても仕方ないよね、今回私達、迷惑かけまくり……。

「『私達』言うな！ 迷惑かけとんのは那奈と小夜、オマエとオマエや！ もう二度と見舞いに来るなや、オマエ来るとホンマろくな事があらへん！」

「ごめん翼、そんなつもりじゃなかったんだってば……」

「一体全体何やねんオマエらは、見舞いに来た言うといて突然訳わからん昔の話でオトンを質問責めにするわ、食事の最中にいきなり余計な事言うてオトンを驚かせるわ、オマエらはどぞの新手の暗殺部隊やねん！？ 何か松本家に恨み辛みでもあるんかいな！？」

「でもー、翼のお父さんが咳き込んだんじやったのはあたしだけのせいじゃないよー？」

「言われてみればそうだよ、さっきから余計な事余計な事って言うてるけどさ、あの驚き方からすると翼アンタ、新作さんに薰と付き合ってる事話してなかったの？」

「……話す訳無いやろ、別に話す必要も無いし、アイツと本気で付き合つとる訳でも無いし……」

「だったら半分以上はアンタが悪いよ」

「そつだそつだー、翼が悪いー！」

「何や何や揃いも揃って開き直つて人のせいにしよつて、ウチのせいかいな！？　ウチが悪いんか！？　ああそうかいなそうかいな、オトンが死にかけたんは全部ウチが悪いと、男と交際しとるのを親に黙つとる事がそない極悪行為やとオマエらは言っんやな！？　そうかいなそうかいなようわかつたわオマエらの心中、せやせや全部ウチのせいやこない状況になつたんも日本が不景気なんもどこぞの大地震も地球温暖化もみんなみんなウチのせいやどうせウチは悪の中枢や諸悪の根源や世界に災い引き寄せる疫病神の権化……」

「わかつた、わかつたから、そんなにひねくれるなっつーの！　アンタは悪くない、私達が全部悪かつたつて、本当にごめん！」

「せやつたら最初からそうやって素直に謝ればええものをそれをオマエらがうんたらかんたら……」

「わかつた謝る、ごめん！　だから五分黙れ、いい加減うるさい」

「ハア？　何やそれ！？　『謝るから黙れ』って何ちゅう滅茶苦茶な謝罪や！？　オマエ言つとる事が理不尽過ぎやぞ、一体どないな頭の構造しとんねん……！」

「ハイハイ、ここは病院ですよ、静かにしましょう、いいから黙れ」

「せやからおかしいつちゅうとんねん、オマエの言うとする事は……！」

「黙れ」

「……まったく、何やねんな、今日はホンマに最悪の一日やわ……」

やはり夜七時にもなると診察時間も終わり辺りに患者は誰一人居なく、照明の灯りも必要な分以外はほとんど落とされ、待合室に響き渡るのは私達の話し声とたまに近くを通る医師か看護婦の靴の足音だけ。さすがの翼もお疲れモードか、黙れと言われるまでもなくそれ以降はすっかり口数が減り、周囲は外を走る車のタイヤの轍の音が聞こえてくるほど静か。通路の先にある緊急搬送口のクルクル回る赤いランプが少し不気味だ。

「……ふあ……」

「アレレー、みータンおねむかなー？」

「うっん、暇なだけー」

「何が暇やねん、今オトンがエライ事になつとるつちゅうんに、そもそもは岬、オマエがここに来てからこないドタバタになったんや、どれもこれもあれもそれもみんなオマエが悪いねん」

「やれやれ、これだから人に責任擦り付ける事しか出来ないお子ちゃまは困りますねー、こんなダメ娘が長女じゃパパの心配は募るば

かりで、治る病気も一向に治らないって話です」

「オマエええ加減にその生意気口閉じんと泣くまでシバき倒したる……！」

「いや、今は翼が悪いよ、先にケンカ売ったのはアンタの方だし」

「そうだよ、翼が悪いよー！」

「ああもう、那奈も小夜も二人して同じ事言わんでもわかつとるがな！ イライラすんねん、オトンの容態がどないなんかな全然わからんし、それなのにここで呑気にあくびブッコいとるアホは居るし、何かもう……」

「新作さんなら大丈夫だって、だからちよつと落ち着こう！ 美香さんもいるしいづみさんも一緒だし、それに私達に出来る事は待つ以外他に無いんだからさ……」

「わかつとる、わかつとるがな……」

「あと、翼」

「何や？」

「黙れ、ペナルティで十分追加」

「……わかつとるがな……」

……十分経過。聞こえてくるのはイライラしながら通路をウロウロ



する翼の靴のパタパタ音と、ソファ―にうつ伏せになりバタ足泳法の様に足を動かして暇を持て余す岬のパタパタ音だけ。本当に落着きの無い姉妹だ。この辺はさすがに同じ血を分けた姉妹だけに良く似ている。

「みータンもう待ちくたびれたー、つまんなーい、早く家に帰ってDSやりたーい」

「さつきからバタバタやつかましいなあオマエは、せやつたら一人で帰ればええねん！ 親の一大事につまらんとか暇とか言うてるオマエみたいな親不孝もん、さつさとここから居なくなつて貰た方が清々するわ！」

「その親をこんな状態に追い込んだ張本人に親不孝もんだなんて言われたくもないですねー」

「せやからそれはウチのせいやないやろが！ いくらウチが薫との事を内緒にしとった言うたつて、小夜が黙つとればオトンかて味噌汁噎せんで済んだし、オマエがここに来るまではホンマに病室内は和やかな空気やったんや！ それをオマエは……！」

「やれやれ、また責任転換ですかー？ もうウンザリです、自分の過ちも省みず『オマエのせい、オマエのせい』と同じ事しか言えない単細胞さん、ガツカリですね、何て惨めで愚かな人間なんでしょう、本当に残念な姉です、みータンはもう呆れや怒りを通り越して同情しちゃいますよ、ああ可哀想可哀想、何て可哀想なお姉タン」

「オマツ……、何やとゴラァ！ ホンマ可愛くないわコイツ！ 一家で一番立場の低い人間の分際で、オマエは逐一ウチに噛みつかん

と気が済まなのか！？ 何が残念や、愚かなのはオマエや、身分弁えて発言せいやこの狂犬病娘……！」

「ねえねえお姉タン」

「今度は何や！？」

「バーカ」

「……オマエ、ええ加減せえよホンマに！！」

頭の切れる飼犬つてのはその飼われている家庭の人間を細かに格付けしてらしく、餌をくれる人、遊んでくれたり散歩に連れて行ってくれたりする人など自分にとって必要不可欠な存在にはまず逆らわないが、何もしないのに偉そうにしている人間に対しては『番犬をしている自分以下の役立たず』と判断してナメてかかるそう。で正に今、この状況がそうと言える。しつけがなっていないね、本当に残念な姉です。でも、いくら何でもこれは駄目でしょ。

「はいそこまで、今のは岬が悪いよ」

「そうだよ、みータンが悪いよー！」

「えっー、どうしてー？」

「何がどうであれアンタは妹なんだから、どんなに姉が残念でも少しは敬意を払いなよ、今のは同じ残念な姉を持つ妹の私の立場からしても正直ムカついた」

「那奈の言う通りだよ、お姉ちゃんに『バカ』はダメー！ みータンがそんな言葉言ったなんて聞いたらきつと瑠璃ちゃんもショックだよー！ 今回はちゃんと翼に謝らないとあたしも怒るよ、みータン！」

「……むうう、お姉タン、ごめんなさい……」

「よう言ってくれたわご兩人！ やっぱり持つべきものは友やな、ウチの言いたい事代弁して貰て久々に胸がスツキリしたわ！ 全くや、二人が怒るのも当然やで、姉にバカやなんて何ちゅう態度や、謝る羽目になるなら最初っからそない素直にしとればええねん！ それをこのガキはいつもいつもアホの子みたいにああ言えばこう言う……！」

「でも、だからといって素直に謝ってる相手にさらに追い討ちかけるのはもつとムカつく、っーかこの姉妹喧嘩の大半は翼、姉という身上の立場にクセに妹のちよつとした悪戯心が許せないアンタが悪いよ」

「そうだよ、翼が悪いよー！ 『アホ』はダメー！ ちゃんとみータンに謝らないとあたしも怒るよー！」

「何でえ！？ オマエら一体どつちの味方やねん！？」

「そして黙れ、二度目の警告、レッドカードで時間無制限沈黙制裁」

「ああもつ、わかつとるがな！」

……それから二十分が経過。静かだ。誰も喋ろうとしない。そしてまだ美香さんもいづみさんもここに姿を見せない。暇を持て余した岬は靴を脱いで一列に並ぶソファをピョンピョン飛び越えて遊び始め、小夜は岬より先におねむになったのかさつきから私の横でウトウトと頭をコックリコックリ。翼は相変わらずウロウロと落ち着き無く歩き回っている。私もちょっと心配になってきた。じっと座ってるのも何か辛い。新作さん、大丈夫だろうか……。

「ねえ」

「……？」

「何か喋ってよ」

「……ハア？ 『黙れ』って言うたのはオマエやるが？」

「いや、何か喋ってないと不安になってきちゃって……」

「オマエ身勝手やなあ、理不尽過ぎやぞ、親や姉貴の事言えへんがな、そない身勝手やと将来友達無くすでホンマに？」

理不尽なのは百も承知。何せあの両親居てこの子有りですから、生まれつき身に付いている才能でございますよ。友達たら心配いりません、ここに一生付き合っていける最高の仲間がいるじゃありませんか。持つべきものは友、なんでしょ？

「でも、何か今日はいつも以上に静かな方だよね私達、普段はわざ

わざ『喋って』なんて頼まなくてもウンザリするほど喋くりまくってるのに」

「そりゃそうやで、今日は下手なハリウッドゴシップ誌より無駄な情報満載な、ウチより余計なお喋り娘がここに居らんからな」

あつ、そうだった。何か物足りない、どうもしっくりこないと思ったら、今日はあのファッションうんちくのうるさいセレブ気取り女が居ないんだ。どうりで会話にカタカナや英単語が少ないと思ったまあ、今日は居なくて正解だったかも。こんな非常事態に『shit!』やら『Fuck!』やら連発されたら病院追い出されちゃうよ、マジで。

特にさっきのあの写真集なんて、どんなにやめておけて止めてあげても、あの興味心の塊みたいな人間の事だから『アタシも見たあゝい!』とか駄々こねて、見た後に結局『Unbelievable!』とか『Noooooo!!』とかギャーギャー大騒ぎして大変だったろうなあ。想像しなくてもすぐに目に浮かぶよ、そんな光景が……。

……しまった。思い出しちゃった、あの写真集。少し忘れかけてただけどなあ、完全に脳裏に焼き付いちゃってる。うわあ、一気に憂鬱な気分になってきた……。

「……ねえ、さっきの写真集さ、あれ、どこの国の写真だったのかな……?」

「……さあ、どこやるか、ウチも生まれる前のオトンの仕事はよう知らん事が多いねん、昔オトンに相方のカメラマンがおったなんて

今日が初耳やったしな」

「新作さんは最初、新聞社に入ってその後フリージャーナリストになったんだっけ？ 主にどんな種類の取材をしていたのか、世界の大体どこら辺の地域で活動していたのか、聞いた事無いの？」

「まあ、駆け出しの頃は経済政治その他諸々と調べとつたらし  
いんやけど、それらの混乱の原因は全て人種や民族の違いから来る  
軋轢や衝突にあると悟ってからは、ずっと世界中飛び回って各地の  
内戦やら紛争中心の取材活動になったって言うてたかな？ 二十代  
半ばでフリーになるってこの業界じゃかなり珍しい事やったらしく  
て、当初は仕事が無くて結構苦労したとも言うてたっけ」

「内戦、紛争……、じゃあやっぱり、あの写真はどこかの戦場の……」

「間違いないやろな、オトンが良う教えてくれる話って、何やらヨ  
ーロッパ圏の旧社会主義国の内戦とか、貧困で苦しんだるアフリカ  
圏の人種差別問題とか……、ウチが生まれる前の話ばかりで全然  
わからんわ」

冷戦、国家崩壊、民族対立、人種差別、宗教問題……。全部学校の  
授業で習った事や、テレビのドキュメンタリー番組で聞いた言葉ば  
かりだ。でも、聞いた事、教えて貰った事はあっても私達はそれら  
を知らない。その時代に生まれていない。全ては過去、すでに終わ  
った話だと私は思い込んでいた。

しかし、新作さんは言った。まだ何も終わってない、未だに世界中  
の各地で争いは続いていると。それによりたくさんの人々の命が失わ  
れ、苦しい生活を余儀無くされている人々がいると。私達が住むこ

の島国の海の方こうで、絶えず戦火が燃えたぎり無駄な血と涙が流れていると。

「……多分、あの写真は八十年代半ばの、レバノンでの取材の写真だったんじゃないかな」

「あつ、いづみさん」

「ほら小夜、寝るんだつたらちゃんと横になって寝な、さつきから見えて前のめりに倒れちゃいそうで心配だよ」

「……ほえ？」

私と翼が話をしている内に、いつの間にかいづみさんが私の背後に立っていた。そして少し疲れた様に溜め息を一つ吐くと、今にも頭から転げ落ちそうな小夜の頭をコツンとつついて私の隣に腰を掛けた。

「なあ、翔太のオカン、オトンは……！？」

「大丈夫よ、もう落ち着いた、心拍数も安定したし、今も美香が付きつきりで看病してる、心配しなくていいわ」

「ホンマに！？ 良かった」

「でもね、今日一日は絶対安静だから、私達の出番はこれでおしまい、美香ももう少し様子を見ていくって言ってたから、翼と岬は先

に帰りなさい、私が責任もって家まで送り届けてあげるからさ」

いづみさんの言葉を聞いて翼は安心したのか、ペタンと力無く床に座り込んでしまった。さっきまでの気丈な様子からはとても想像出来ない光景。本当はかなり緊張してたのかな、だったら少しは弱音でも吐いて私達に寄りかかればいいのに。調子良い事ばかり言うてるからどこまで本音なんだかわからないじゃない、全くもう……。

「……ところでいづみさん、レバノンって？」

「何よ那奈アンタ、レバノンって国の名前も知らないの？ バカだねー」

「知ってますよ、国の名前ってくらいは！ あとは良く知らないけど……」

「バカはダメー！ ……ムニヤムニヤ……」

「……？ 何、今の小夜、寝言？」

「……無視して貰って結構です……」

「……あっそ、えっーと、レバノンの話だっけ、どうやらそこが新作が最後に報道記者として取材拠点にしていた場所らしいんだよね、昔、美香に聞いた話なんだけどさ」

「レバノンの場所って……、確か中東アジア地域ですよね」



「そつ、今話題のあの中東地域よ、あの地域の問題は今に始まった事じゃないけどね、アンタ達どころか、私達が生まれるもつと前からあそこはずつーとムツチャクチャ」

中東アジア。毎日の様に空爆、銃撃戦、自爆テロのニュースがテレビで流れ、その度何人も人が亡くなったと報じられる世界で最も危険な場所と言われる地域。そんな所にまで新作さんは取材に行っていたのか、いくら仕事とはいえ命知らずもいいところだ。

「本当に命知らずよあのバカは、前に一度ね、本気で殺されかけた事あんのよアイツ、取材中にスタッフもろとも現地の過激派武装集団に拉致されちゃってさ」

「ええっ！ マジで!？」

「それ、ウチも知らん話や！ で、どないして助かったんやオトンは!？」

いづみさんの話によると、当時なかなか救出活動に踏み切れない日本政府や国連軍の代わりに、現地で活動していたNPO団体の人々が過激派集団のリーダーや彼らと繋がりのある有力者達と根気よく交渉を行い、その結果新作さん達は奇跡的にも身柄を解放して貰えたそうだ。しかも偶然にもその武装集団の中には以前から新作さんと交流のあった人物がいたらしく、それが効を奏したのではないかとの見方もあるらしいのだが……。

「その時、奇しくもそのNPO団体の日本支部に所属していて、人一倍救出活動に奮闘したのが何を隠そうあの美香よ」

「あつ、せや！ オカンは本書いたり教育委員会のなんたらになる前はずっとボランティア活動やつとんたんや！」

「大変だったんだからあの時は、美香は当時こっちにいたんだけどさ、新作が捕まったって聞いた途端に『自分も現地に行く！』って弾丸みたいに飛び出して行っちゃってさ、私は二人が生きて帰ってこれるか心配で心配で、先に日本に帰ってきた美香の無事な姿を見て、迎えに行った成田空港のロビーで二人で抱き合って大号泣したのをまだ昨日の様に覚えてるよ」

偶然の一致か、はたまた運命の導きか。どんなに遠く離れていようと、どんな困難が待ち構えていようと、決して切れる事の無い、誰も切る事が出来ない二人の赤い糸。愛する人が命の危険に晒されたその時、自らの身を呈してまで救出に向かうだなんて何てロマンチックな話なんだろう……

……いやいやいや待て待て待て全然ロマンチックなんかじゃない。むしろデンジャラス、いくら何でも危険過ぎる。そういう事はお上に任せなさいって。真似しちゃ駄目、っーか真似出来ないよこんなの。真似出来ない人第二号発見。美香さんって雰囲気や言葉使いだけだと大人しそうに見えるのに、目的の為にかなり無茶な行動する人なんだなあ……。

「……何か、色々と人生波瀾万丈過ぎだよね、新作さんと美香さんって……」

「生きて帰ってこれたから良かったけど、下手したらウチも岬も生まれて来れへんかったかもしれへんのやなあ……、おっかないわあ、そう思うと何か身震いしてきたわ」

「おっかないどころの騒ぎじゃないよ、私だって当時は虎太郎達と奥井財閥のゴタゴタに巻き込まれて大変だったのにさ、そんなこっちの苦勞も知らずにアンタの両親は地球の裏側で愛の逃避行、ロマンチックだなんて冗談じゃないわよ本当に、あんな危険な真似されるのはもう懲り懲り、二度と御免よ……」

いづみさんの昔話を聞きながら、私達は夜八時を過ぎてやっと帰路に着く事になった。美香さんは病院に居残り。私達はちよつと遅くなった夕食を取る為、その途中に一軒のファミレスに立ち寄った。費用はどうやらいづみさんが美香さんからさっきのお菓子代のお返しとして数額預かってるみたい。美香さん、ご馳走様です。

「よしつ、じゃあアンタ達何でも好きなもん頼めー、……って言いいたいところだけど、あんまり高いもん注文しないでよね、予算オーバーしたらまた私の支払いになっちゃうからさ」

「そんな事言っていづみさん、まさか余った食費、ガメるつもりじゃ……」

「……シッ……」

「図星かい！」

「えっーとね、みータンはイタリアンハンバーグのライスとサラダとスープのセッター！」

「そない頼んでそのちっこい体のどこにしまい込むねんオマエは？ ホンマ最近良う食うなあ、そない食ったらあつという間に肥満児一直線になるで？」

「みータンは今、食べ盛りのお年頃〜！ お姉タンみたいな貧相な体になりたくないも〜んだ、いっぱい食べて、いっぱい運動して、ママみたいなボンキュッボンなナイスボディになるんだも〜ん！」

「言うつとれアホ！」

「……メニューに釜飯が無いよー……」

食事の場でも未だに口喧嘩をし続ける困った姉妹と、目当ての食品が無くてガツクリと意気消沈する小夜を横目で見ながら、私は今日、新作さんと交わした会話の事を頭の中で思い返していた。たわいなし雑談として聞き流してならない、お姉や歌月さんの話なんかより、何か大切な事を教えられた気がしたので……。

「……レバノンでの、取材記録か……」

私達が生まれるもつと前の時代、中東アジア地区周辺では大規模な紛争が各地で勃発していたそうだ。その一因として挙げられるのは、今現在でも世界情勢の一問題として存在し続けるイスラム圏アラブ諸国とイスラエル国との確執。特に新作さんが取材をしていたとい

うレバノン周辺はかなり戦火に晒された地区らしく、今も国内にはその爪痕が残る場所が数多く残っているそうだ。

近年こそは国家レベルでの大きな衝突や軍隊進行などのニュースは少なくなつたが、それでも未だにイスラエル国境付近では銃声、空爆、それに対する爆破テロ、またそれに対する制裁攻撃といった『悲痛』の音が繰り返し絶えず続いている。そしてその度、多くの人の血が流れ、たくさんの命が失われている。遠い国の話とはいえ、私達が暮らすこの世界の、同じ地球の裏側で。

『争いは、悲しみは、何も終わってなどいない、これが世界の真実の姿や』

思い返してみればそうだ。新作さんの言う通り、戦争と混沌の二十世紀が終わり新たな時代に突入した今も、人類は争いがみ合っている。平穏な毎日に慣れ、年月が過ぎ去ると忘れがちになる。ついこの前までアフガニスタンやイラクで戦争があつた事を。その発端となつた9・11アメリカ同時多発テロがあつた事を。そして、それにより世界中の人々に与えた深い傷は未だ何一つ癒されていない事を。

人は苦痛を感じるものから目を背ける。見たくない、関わりたくない、自分には関係ないと。そして出来事は風化する。そんなものは過去の話だと、終わった事だと、昔の人間がやつた事で、現在を生きる自分達には関係ないと。

だから人は、何度も同じ過ちを繰り返す。自分が痛くないから、自分が苦しんでいないから、自分自身が苦痛を感じないとその過ちを理解出来ないから。

これは何も戦争や殺戮に限った事じゃないと思う。私達の普段の生活だってそうなんじゃないだろうか。他人に対して大した理由も無く暴力を振るったり、陰険なイジメをしたりするのは、自分自身がそれらをされた経験が無いから、その苦しみや辛さを知らないから平気でしてしまうんじゃないだろうか。知っていれば、そんな事はしない、出来ない。痛いのは誰だって嫌、する方だって心が痛いはずだもの。

関係なくなてない。私達だってそうなんだ。平和なこの国に住む私達だって、軽い冗談程度の言葉や行為によって、いつ他人を傷つけ、苦痛を与え、場合によっては死に至らしめるかわからないんだ。戦争と比べれば遥かに規模が小さくても、それはどちらも人がする事。人を傷つけるのは人なんだ。誰だって、私達だっていつ、『戦犯者』と歴史に名を残す過去の人物達と同類の人間になってしまうかわからないんだ……。

「……だから新作さんは、何も知らない私達に、命懸けで『真実』を伝えてきたのかな……」

『世界の真実』、それは『人間の真実』。誰もが持つ深層心理の暗黒の部分。それから目を背けてはいけない。常に自分で自身のその部分をしっかりと把握して、コントロールしなくてはならない。でも、それはとても難しい事。人間は基本、自分に甘い。好き好んで自ら忍苦を受け入れる人などそうはいない。世の中、そんなに新作さんみたいな強い人ばかりじゃない。

ならば、どうすればいい？ どうすれば人を傷つける事なく、自分自身も傷つく事なく日々の生活を過ごしていける？

『手加減すな！ 本気で生きろ！ 腹一杯ってくらい思いつ切り笑顔で楽しんで、人生を謳歌するんや！』

その答えも、新作さんは教えてくれた。自分だけが笑っていても、周りの誰か一人が悲しんでいれば切なくなる。でも、周りが全員笑っていれば自分が悲しくても自然に笑顔になれる。誰か一人が悲しんでいては駄目、全員が笑顔でないといけない。自分だけ楽しんでちゃ駄目、全員が楽しくないといけない。

だから、私達一人一人が自分の人生を大切に思い、毎日悔いの無いように目一杯楽しんで生きる事が大事なんだ。自分自身を大切に思えば、自然と他人にも優しくなれると思う。身勝手な保身とは違う、他人の生命も自分の体に流れる生命と同じもの。ならば自分の命同様、他人の命だって大切に出来るはずだ。

自分の心にもある暗闇の部分をしつかりと理解していれば、人の身になってその痛みや苦しみを共感する事が出来れば、他を無闇に攻撃する事がどれだけ愚かな事に気づけるはず。誰だってお互い憎み合っていたって辛いだけでちつとも楽しくない。仲良く、寄り添っていられば一番楽しいはずなのだから。

だから、自分自身に一切手加減しない。

自分の人生を思いつ切り生きる。

自分の心に嘘をついたり、偽ったりしない。

優しくされたいから、仲良くしたいから、自分も人に優しくなる。

絶えず砲火の続く戦場では通用しない戯言かもしれないけど、少なからず私達の生活の範疇なら、決して出来ない事じゃない。いや、それがもしかしたら今の私達でも唯一出来る、世界平和の第一歩だったりして。

だから笑おう！　いつも笑顔で、いつでも微笑みを！　大切な友達と一緒に、目一杯遊んで、恋愛して、たまにはしんどい勉強もして、本当にお腹一杯くらいい人生を楽しまないと！　私達が普通だと思っているこの生活を、望んでいても出来ない人達が世界にはたくさんいるんだ。

だから今、私達は人の優しさを感じて、苦しみを分かち合つて、様々な経験を積んで知識や強さを身に付けないといけない。いつかそんな不遇に置かれている人達に救いの手を差し伸べてあげられる様な、強く優しい人間になる為に……！

「何や岬、オマエさつきから顎にご飯粒付いとるで？」

「えっー、どこどこー？」

「ったく、何やかんや言うてもここら辺はやっぱりまだまだお子ちゃまやなあ、ホレ、ウチが取ったるわ」

「あつ、ありがとーお姉タン！　でもお姉タンも顔に何か付いてるよー？」

「何がいな、どこどこ？」

「口でしたー！　プププ」

「オマエー、ええ加減にせえよホンマにいー！」

「キャハハハ」



先程と良く似た二人の会話。でも、美味しい食事を前にしてか、その表情はお互い満面の笑みだった。妹を気遣う姉、その姉に素直に感謝を述べる妹。この喧嘩ばかりの幼い姉妹にだってこうして仲良く、優しくなれるんだ。出来ない人間がいるはずが無い。

「じゃあ、今日は私も思いつ切り食べて楽しんじゃおうかな！ えつと、デザートでこのケーキとコーヒーのセットも追加注文しちゃおうと！」

「ちよつと、冗談でしょ那奈！？ アンタ、そんなもんまで追加されたら食費ガメるどころか完全に予算オーバーしちゃうよ！」

「ごめんなさいいづみさん、私今、食べ盛りのお年頃！」

「じゃあみータンもケーキ食べるー！」

「せやったらウチもケーキ食べるー！」

「嘘でしょ、勘弁してよ！ ……この食費、絶対に『松本美香』と『渡瀬麗奈』の名前で領収書切って採算取ってやる！」

「……かまめしー……」

「で、この後和食店で釜飯も食べよう！ ねっ、小夜！」

「ホント！？ やったー！」

「……『サンライズ・ファクトリー』宛にも領収書切らなきゃね、それでも収支マイナスになるかも、ハア……」

良く食べ、良く寝て、良く笑う！　せつかく生まれてきたんだもん、たくさん笑って、たくさん楽しまないとね！　みんな楽しく、誰一人悲しませない！　悲しんでいる人がいるなら、私の笑顔で笑顔にしてみせる！

それくらい在意気込みで、そんな前向きな気持ちで、明日の笑顔の源になるんだ！　新作さん、いつも有り難いご指導感謝します！　一切手加減なんてしないよ、私はこれからの人生、悔いなく思いっきり生きてみせる！　いつか世界中の人達も全員、笑顔になれるように！

「……すっかり忘れてた、夕飯の準備……」

……なんて決意が維持出来たのも家に帰るまでの間。玄関のドアノブに手をかけた時、私といづみさんはほぼ同時にある事を思い出した。キッチンには、水に浸かったままスイッチの入っていない炊飯器のお米。この扉の向こうからは、何やら血に飢え腹を空かした凶暴な肉食獣の匂いがプンプン……。

「……誰一人悲しませない、だあ？　てめーらだけ美味いもんたらふく食ってきて、米も炊かずにあたし一人を寂しく家に置き去りにしといて良く言うぜ、おいコラ」

「……いや、あの、その……」

「だったらよ、是非ともこの優歌様もその笑顔とやらで幸せ一杯腹

一杯にして戴きたいもんだなあ？ 今更夕飯の準備しても納得しねーぞ、あたしには一体何をご馳走してくれんだ？ ハンバーグか？ ケーキか？ 釜飯か？ 何だったら三ツ星フランス料理フルコースでも良いぜ、シェフもウエイトレスも店ごと丸々飲み込んでやるよ」

「……あのー、美香さんから貰った食費、すでに私達で全部使い切っちゃったんですけど……」

「だったらてめーをまるごと食ってやろうかあ！ ガオツー！！」

「まっ、待ってお姉！ 顔に何かついてる！」

「あ？ 何がだよ？」

「……鼻でしたー、なんちゃって、プププ……」

「……ほう、てめー、姉様に対して随分と良い度胸してんじゃねーか、ああそうかい、よーし決めたぜ、てめーは生きたまま丸焼きにして食い殺す！！」

「顔がマジだつて！ 冗談だつてばお姉、笑顔笑顔！ 笑って許して！ 優歌の『優』は優しいの『優』でしょ！？ いつでも笑みをく！」

「怒るのも人間の真実、腹が減るのも世界の真実だあ！ 一切手加減しねーぞ、今日という今日は思いつ切りてめーを料理してやるぜ！！」

「ぎゃああああああ！！」

「ウツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ！ 人生とはいつも楽しいもんだなあ、そうだろ那奈！！」

……人を笑顔にする、って難しいな。人生を謳歌し過ぎるのも良くない、他人から恨まれない程度に加減する必要があるみたいですね、ハア……。

## 第79話 Hallelujah

「……痛、いたたた……」

滲みる。お風呂上がりの体のあちこちが燃えたぎる様に熱くヒリヒリ痛む。打撲に擦り傷に締められ跡の炎症に挙げ句は噛み傷。これぞ満身創痍。あのバカ姉め、いくら空腹だったとはいえマジで人に噛みつくか普通？ 冗談じゃないよ本当に、私はアンタの非常食じゃないんだっつーの！

そんなに腹減ったんなら米くらい自分で炊け！ つーかコンビニで弁当でも買ってこい！ 犬や猫だってその気になれば自分の餌ぐらい自分で確保するのにさ、こっちがいちいち用意してあげないとなーんにもしないんだもん、あの人。まるで生贄を捧げないと天変地異を引き起こす祟り神だね。誰かお祓いして追っ払ってくれないかなあ、あの忌まわしき疫病神……。

「いづみさーん、お風呂先に戴きましたー」

「あいよー、那奈、今日は色々とお疲れ様、ゆっくり休みな」

「……あれ？ あの人食獣……、いや、もとい、お姉は？」

「優歌？ さつき出掛けたわよ、夕飯作ってやろうと準備してる間も待ちきれずに犬みたいによだれダラダラ垂らしながらウーウー唸ってうるさくてさ、何かそれ見てたら私も食事作るのが嫌になっちゃ

「つたんで、食費として二千円渡してやったら『ヒヤッハー！』って喜び跳ねてブツ飛んでいったわよ」

「……二千円も？」

「あの様子だと多分、居酒屋行つてイート・アフター・アルコールって感じね、二千円なんてあつという間に使い切るんじゃない？  
アイツなら一万円だって五分もあれば飲み干すわよ」

「……人から食事代貰うつて、あの人、もう立派な社会人なのに……」

「あーあ、今日だけで一体どれだけ出費したのよ私？ アンタ達と  
いい優歌といい、みんな金のかかるガキばかり！ いかに翔太が  
手のかからない孝行息子かつて事を今日改めて痛感したわ……」

何を仰いますか、大切な友人が好意で渡してくれた外食費のお釣りを丸々ガメようとしていた意地汚い守銭奴はこの誰ですか？  
これこそ正に『悪銭身に付かず』、因果応報、良からぬ企みは後々身を滅ぼす事になるのです。自業自得ですよ、いづみさん。

「まあ、炊いたお米は明日に回すとして、私は優歌分に少し作っちゃったおかずをつまみにして晩酌した後、風呂に入って寝るとするよ、どうやら虎太郎達は今日も帰ってきそうにないし、あの分だと優歌もいつ帰ってくるかわからないしね」

「じゃあ私、先に休ませて貰います、お休みなさい」

「はい、お休みー」

……痛たたた、階段を上って自分の部屋に行こうと体を動かすだけでもあちこちの関節がギシギシと嫌な音を立てて激痛が走る。噛まれるどころか日頃の格闘技の練習で会得したとかいう新しい関節技の実験台にもされたもんだから、膝や肘や首筋が脱臼でもしたみたいにズキズキ痛む。お陰様で就寝前の良いストレッチになりました。優しい優しいお姉様、いつもいつも可愛がってくれて本当に有難うございます……。

……いつかやり返してやるからな、覚えとけよ、あのヤロー……。

「はぁー、疲れたー!」

ドアを開けて部屋に入った私は、そのまま力尽きる様にベッドに倒れ込み体を布団でグルグル巻きにした。色々あって忙しかった今日という一日も終わり、やっと訪れた安息の時間。すぐに寝付く訳でもなく、かといってテレビを見ても読者する訳でもなく、ただ頭を真っ白にしてゴロゴロと横になって微睡む、何だかんだ言っても落ち着けるこの一時が一番好きだ。

許されるなら毎日ずーとこうして一日中ゴロゴロしていたいなあ。勉強するのも空手の稽古に行くのも正直しんどい、家事するのも他人の世話を焼くのも本当はかつたらい。責任感が強い方だから良く人に頼りにされたりして頑張っちゃうけど、私は基本、面倒臭がり人間なんです。自分で言うのも何だけどねー。こんなんじゃないづみさんから『だらしがない!』って怒られちゃうね。将来の嫁失格駄目女まっしぐらだなあ、こりゃ。

「あーあ、駄目だとはわかってても、やっぱりこうして布団にくるまってるこの時が生きてて一番幸せっ！　どうか神様、栄光も勲章も地位も名誉もいらないから永遠に私にゴロゴロさせて下さい！」

……でも、そうも言ってもらえないんだよね。何も考えずに、頭を真っ白に、って言っても私の頭の中には常に様々な悩み事が渦巻いていて、近頃は時間があるとしても物思いに耽ってしまう。特に最近はその傾向が強い。今月ぐらいからだったかな、一癖も二癖もある難解な問題が私の周辺でヒョコヒョコ顔を出し、頭痛の種を植え付けてくるようになったのは。

しかも毎日の様に新しいイベントが発生してハイスピードで記憶が更新されていくもんだから、その悩み事の原点が一体何だったのかすらも見失いかけてたりする。何でこんなに悩んでいるのか自分でわからずに悩んでいるゴチャゴチャな状態、こんなんじゃないのかに悩んだって何一つ問題が解決する訳がない。これが青春時代のもどかしさってヤツなのかな、全くもって面倒なものだ。

「……せつかくだし、今日はちょっと頭の中、しっかり整理整頓してみんな……」

私の苦悩。それが始まったのは多分、先週のゴールデンウィークの最終日に、父さんの代理として翔太達と一緒に行ったサーキット場での出来事からだったと思う。あの日、貴之さんの告別式以来の再会だった父さんの異父兄で母さんの伯父、私にとっては伯父であると同時に大伯父でもある、複雑な血縁関係の奥井財閥の長・幹ノ介



氏との一悶着から私の周辺の時の流れが一気に加速し始めた。

私が生まれる前、父さん達と奥井家は根深い確執によって対立し、それぞれの分野である経済界やモータースポーツ界、それだけでは収まらず各メディアや世界中の様々な関係者達までもを巻き込む大騒動を引き起こした。

騒動に巻き込まれ被害を被った者の中には会社が倒産するなどの財産を失った人や家庭の崩壊、ヒドいケースではそれが原因と思われる自殺者や行方不明者まで出たという。今現在でも日本のマスコミでは、この一件に触れる事はタブーになっていると前に新作さんが話していたのを聞いた記憶がある。

生まれる前の話、過去の話とはいえ、母さんが大財閥の一族の血を引く人間だつて事、父さんがそれらの事情の責任取りと過去のレース中での度重なる転倒で出来た脳の腫瘍によって若くしてプロライダーの世界の一線から身を引いたつて事、私も小さい頃から薄々ながらそれを知ってはいた。

二人から直接聞いた訳じゃないけど、どんなにタブーとはいえそれだけの出来事、どうしたつてどこかしらから話が漏れてくるもの。特に貴之さんの告別式の時、周りの参列者の人達の話題はその一件で持ち切りだった。もちろん、それらの会話はしっかりと私の耳にも届いている。

聞いた当初はかなりショックだった。何せ親である当事者達ですら何も話してくれていない上に、当時の私はまだ小学四年生の子供の身分。予想だにしない過去の話を耳にして、どう頭の中でこの事実を整理していいのかわからず混乱したものだつた。各参列者の大人の方々、もう少し周囲に居る小さい子達にも気を使って雑談して欲しかったなー、と私は今も少し残念に思っていたりする。

でも、そんな他人の陰口や批評など一切気にせず、自由奔放強引グ

マイウェイで人生を謳歌している父さんと母さんの姿を見ていたら、私の不安や悩みは自然と薄らいでいった。そりゃ嫌でもそうなる、気にしている方が馬鹿馬鹿しくなる。当の本人達が全くと言って良いほどどこ吹く風で、それらを目撃してきたお姉も知らん顔して私の側で好き勝手やって笑って毎日を過ごしているのだから。

ならば、当時まだ生まれてもいなかった私が気にしたってしょうがない。この話はすでに過去の話で、全ては終わった事。その頃にはもう父さん達と奥井家の間では和解が交わされていて、迷惑をかけた関係者にも謝罪や賠償が済んでいた。これらも私の不安を取り去ってくれる一役を担ってくれた。

それと、そもそも昔から『渡瀬虎太郎と麗奈の娘』と言われてもあまりピンと実感が湧かないほど私と両親の生活感の距離は他の家庭と比べて離れていたのも、実の親の話ながら何か他人の空事のようにも思えてきたつてもある。そしてそれは私が次第に成長していくにつれ実感性が増し、今に至っては『親は親、私は私、二人で好き勝手やってる！』と開き直れる様になった。

でも、もし家族の誰か一人がいつまでもこの過去を引きずってクヨクヨとしていたならば、私もきっと世間の目を気にしてビクビクするような人間になっていたかもしれない。そう考えると、言動態度生き様存在全てが迷惑だらけのあの両親の娘で良かったのかな、とも思う。私に対して余計な事を言う輩を有無言わず排除してくれてたお姉のお陰もあるのかな。まあ、単純に私が親に似て無神経だつてもあるかもしれないけどね。

……話が長くなっちゃったけど、うーんと、つまりはあの日、幹ノ介氏に会うまでは奥井家の存在をすっかり忘れてた、って事です。いくら和解が済んで尚且つ親戚とはいえ、別に毎年正月やお盆に顔を合わせる間柄でもなかったし、第一、幹ノ介氏本人が毎日の様に多忙極まりない人なので、例えば姪っ子でも一般の女学生ごときが滅

多に会える人物じゃないし。

幹ノ介氏と度々会っているのは母さんぐらいかな？　それでも大体は仕事の話での対面ばかりらしいので、本当に渡瀬家と奥井家は親戚付き合いがほとんど無いと言って良い。たまーに会ったりするのは幹ノ介氏の娘である裕美さんと、その婿養子でこれまた父さんとは異母兄弟になる新悟さん、そしてその二人の間に生まれたあの忌まわしき魔女……。ゲフンゲフン（咳払い）。失礼、私と奥井家の繋がりは強いて挙げればそれくらいか。

……それより、いい加減『幹ノ介氏』って呼ぶのはやっぱり失礼かな？　橋本さん達の悪口の影響であまり良いイメージが無かったからつつい他人行儀な呼び方になってしまふ。私にとっては伯父である事には変わりない。よし、次からは『幹ノ介伯父さん』と呼ぼう。幹ノ介伯父さ……。何か馴染めないなあ、すつきりしない……。

「……っか、あれ？　私、一体何が原因で悩んでるんだっけ……？」

何か話が脱線しまくってるような気がする。やっぱり頭の中が大混乱してるね。えっーと、だからつまりまとめると、私は別に幹ノ介伯父……。やっぱり気持ち悪いな。だーから、別に奥井の件に関しては大して悩んでない、って事だよ。だよ？　そうだよね？　うん、そうだそうだ。そういえばこの件はこの前父さんと母さんが珍しく揃って家に居た時に話をしてすでに解決してたんだっけ。そうだったそうだった、忘れてた。たかだか一週間しか経ってない話なのに、何ですっかり忘れてるかなあ、私も？

……でも、言い訳がましいかもしれないけどそりゃ忘れるって、その後色々あって大変だったんだもん、私。久し振りに母さんとお姉

と一緒に風呂入ったらお姉からセクハラされるわ、翔太に風呂上がり姿見られちゃうわ、挙げ句には母さんと父さんが大喧嘩し始めて家をボロボロに破壊しまくるわ……。

他にもまだあるよ。学校では無言無趣味無関心、無念無想の塊の様なあの航が突然、訳わかんないギターの才能が開花しちゃってバンドメンバーに加入しちゃうし、翼がサッカー女子日本代表に選出されたとか何かでギャーギャー騒いで大喧嘩になるし、新作さんのお見舞いに担ぎ出されたと思えばキツつい写真集見せられるし……。中でも一番しんどかったのはお姉の総合格闘技の試合に付き合わされた事かな。お姉の世話だけでも大変なのに、会長さんはあんなキヤラが濃ゆい人だし、彰宏さんは相変わらずヘタレだし、特にあの胡桃ちゃん……。あれはしんどかったなあ、小夜の相手するよりキツかった。小夜よりしんどい人間がいるだなんて夢にも思わなかったな。世界は広いんだなあ、まだまだ私の知らない世界がたくさんありそう。そういえばあの日も、寝起きで機嫌の悪いお姉にコテンパンに痛めつけられたっけ。そしてあの歌月さんの写真に……。

「……………あつ」

……そうだ、思い出した。私を苦しめる悩みの原因。その根底。奥井の一件は関係ないだなんてそんな事なかった。それがきっかけだった、始まりだった。あの日の、幹ノ介伯父さんと会話から……。

『君には、真実を知る権利がある』

『自分の知らない過去を、知りたいのdarou?』

……私には、知らない事が多過ぎる。自分の親なのに、姉妹なのに、家族なのに、私はその人達の事を、過去を、真実を、何も知らない……。

奥井家との一件だつて私が知つてゐる経緯は全て人伝で、大まかな話ばかり。当時、父さんと母さんがどうやってその騒動をくぐり抜けてきたのか、一体どんな心境でその困難に立ち向かつていったのか、何も知らない。思い切つて父さんと母さんに話を切り出したあの日も、二人に上手く丸め込まれただけで私は未だに何も詳しい話を教えて貰えてはいない。

それどころじゃない、私は普段とても愛し合つてゐるとは見えないあの二人がどうして結婚したのか、一体どんな経緯で夫婦になつたのか、私は何も知らない、教えて貰えてはいない。あと、私が生まれるよりも前に、二人が実の娘ではないお姉を養女として引き取つた経緯すらも……。

『この人が、あたしの本当のお母さんだ』

そして、お姉の本当のお母さんだという歌月さんと、まだ名前すらわからないお姉の本当のお父さんの事も。父さんと母さん、歌月さん達と私の両親、この両夫婦の間に何があつたのか、私はそれも知らない。新作さんは父さんと歌月さんが自分達と同じ孤児院で一緒に育つた関係だと言つていた。でも、それだけじゃないと思う。きっと、もつと深い真実が裏に隠されてる。

もしかすると奥井家との話とお姉が父さんと母さんの養女になつた話は、全て繋がっているんじゃないだろうか？ だとすれば、歌月さんもその騒動に巻き込まれた一人で、その話の鍵を握つていた

人物で、すでに亡くなった人までもこれ以上騒動に巻き込みたくない、だから父さんと母さんは、お姉は、ずっと歌月さんの存在を隠してきたのかな……？

「……また、何の根拠も無い余計な事を考えちゃってるな、私は……」

私が過去の話を持ち出すと、父さんも母さんも、お姉も新作さんもいづみさんも、みんな揃って口を閉ざして黙り込んでしまう。そりゃあ人が自殺にまで追い込まれるほどの壮絶な修羅場、表には出ない相当ショッキングな事実もあっただろう。そんな悲劇に自分の両親がわずかどころか、中心人物として関わっていたとなればその娘として辛い思いをしないで済む訳がない。

『それを知っても、お前が傷つくだけ』

父さんと母さんが結婚したのはそれらの話が解決した後だという。つまり、少なからずその騒動がきっかけとなって二人は一緒になった可能性が高い。だとすれば私が全てを知った時、『そんな紆余曲折があつて、様々な犠牲と痛みの元に私が生まれたのか』と自己嫌悪に陥ってしまう可能性もあるかもしれない。多分みんな、それを恐れて私に何も教えてくれないのだろう。

『それを知っても、お前が……』

……でも、やっぱり知りたい。自分がどうして生まれてこれたのか、私を産んでくれた両親がどんな人生を歩んでいたのか、そして、粗暴なやり方とはいえこれまでずっと私を守ってきてくれたお姉がどうして私の義理の姉になったのか。知りたい、知りたいよ。赤の他人の事情だって知るのには難しいのに、一番身近で親しいはずの家族の事情すらわからないなんて、そんなの辛いもん、悲しいもん……。

「……よし、決めた……！」

新作さんやいづみさんから聞き出そうとしたり、あれこれ探って自分自身で答えを見つけようとしたって駄目だ。結局、遠回りしてるだけでとても目的地には辿り着けない。自問自答したって何の解決にもならない、その場で足踏みしてるだけのタダの予想の範疇ではないもの。

『人から又聞きしようなんて卑怯な真似するなや、そない知りたきや直接聞けや！』

翼もそう言ってたっけ。そうだね、こうなったら直接聞く、聞き出す、何が何でも聞き引き出す！ 奥井財閥騒動を引き起こした重要人物であり、そして歌月さんともただならぬ人間関係だったと予測される、実際にお姉を養女として向かい入れた張本人！ 父さん、渡瀬虎太郎に突撃尋問を決行する！

多分そう簡単に口は割らないと思うけど、例え嫌がられようが、殴られようが蹴られようが、バイクで轢かれようが崖から投げ飛ばされようが、全てを聞き出すまでは絶対に引かない！　どんなに血まみれになったってその足元にしがみついてやる！　怖いだなんて言ってられるか、最初からそうすべきだったんだもん！　触れちゃいけない、嫌な事思いつかせたらいけない、なんて言い訳並べて逃げたのは私の方なんだ！

もう逃げない、私だって渡瀬家の家族の一員なんだ！　しかも実の娘なんだ！　もう高校生になって物事の分別くらい出来る年齢になったんだ！　いつまでも子供扱いされてたまるか！　どんな壮絶な修羅場でも、どんな残酷な愛憎劇でも、私は全ての真実をしっかりと受け止めてみせる！　今度こそ絶対に、絶対にはぐらかされたりなんてしない、逃がさない！　決めた、絶対に決行する、絶対に！！

「……………って、せっかく決意が固まったっていうのに、一体全体どこで油売ってんのよ、あのバカ親父はー！？」

………そうなんだよねー、マジで一昨日から全然帰って来ないんだけど、一体何なのあの夫婦？　出来ればすぐにでも話がしたいのに、明日になってもしこの決意が揺らいじゃったりしたらどうすんのよっ！？（意志弱っ！）　いくら同居人で友人夫婦の息子とはいえ、余所様の子供を半ば拉致同然に引きずり回して何一つまともな連絡すらも寄越さないだなんて、これっていづみさんがその気になって警察に通報したら立派な誘拐罪が成立しちゃうんじゃないの！？

「翔太が居てくれたら相談するなり愚痴聞いて貰うなり出来たのに、全くもーう！」



「つか、放任しているいづみさんもいづみさんだけど、あの二人に一切抵抗しない翔太も翔太だよ。実際は抵抗出来ない、したらタダじゃ済まない、ってところなんだろうけどさ、学校まで休まされて本当に大丈夫なのかなあ？ マジでプロのライダーになれなかったらどうすんの？ マジで二ート一直線じゃん！？ 絶対嫌だよ私、そんなお先真つ暗な人間と一緒になんてなりたくない！ 娘の将来までお先真つ暗にするなっつーの、あのバカ両親め！

「……誰でも良いから早く帰ってこーい、騒がしいのは御免だけど、さすがに私といづみさんだけじゃちょっと寂しいぞー……」

父さん不在、母さん不在、まあこの二人は普段から滅多に家に居ないけど、翔太も不在で更にはお姉まで不在。これだけ人が居ないと毎日近所の犬が釣られて吠え出すほどやかましい渡瀬家が、さっきの病院の待合室みたいに恐ろしく静か。部屋の掛け時計の秒針の音がコチコチ聞こえてくるなんていつ以来の事だろう。今日は交通量も少ないのか、近くを走る車の轍の音すらしてこない。

「……ふあゝ、眠いよあゝ……」

色々あれこれと考え方をしていたら眠くなってきた。仕方もないか、頭どころか体もクタクタで疲労困憊、しかも風呂上がりで体も火照ってるから尚更ダルい。まだ髪が乾いてないけどどうしようかな、もう十一時回ってるし、寝ちゃおうかなあ？ 父さん達

帰ってきそうにないし、お姉も今頃食後の一杯が二杯五杯十杯百杯とベロンベロンになって多分帰ってこないだろうし……。

「……眠い……」

ピンポン

「……えっ、帰ってきた!？」

深夜の静寂の渡瀬家に突然、玄関のチャイムの音が響き渡った。私は最初、家族の誰かが帰って来たのかと思ったが、よくよく考えてみるとそれはおかしい。みんなそれぞれ玄関の鍵を持ってるんだからチャイムなんて鳴らす必要はないはず。あるいはお姉が酔ってイタズラしてんのかな? とも思ったが、こんな御時世、真夜中の訪問者なんてちよつと物騒。いづみさんなら一人でも大丈夫だろうとは思うけど、念の為、私も部屋を出て玄関まで下りてみる事にした。

……が、その心配は階段半ばまで下りた時に聞こえてきたいづみさんの驚き声と、その後に聞こえたついさっきまで聞き馴染んでいたおしとやかな声であつという間に消え去った。

「……美香!? どうしたのよアンタ、こんな時間に!？」

「……ごめんねいづみ、夜分遅くに連絡もしないで、いきなりお邪魔しちゃって……」

突然の訪問者、それは体調を崩した新作さんに付き添い一人病院に残って看病をしていた美香さんだった。眼鏡を外していたのでパツと見では一瞬誰だかわからなかったけど、その服装は病室に居た時と同じスーツ姿のまま。どうやら自宅には寄らずに病院からこちらに直行してきた様子。

「……とりあえずさ、そんな所に突っ立ってないで上がりなよ、遠慮なんてしないでいいから」

「……うん、有難う、それじゃあ、お邪魔します……」

「ああ那奈、起こしちゃった？ ごめんね、静かにするからさ」

「いえ、大丈夫です、まだ寝てなかったんで」

「……那奈ちゃん、こんな遅くにごめんなさいね、すぐに引き上げますから……」

「……いえ、お気になさらずに、ごゆっくり……」

常にどんな時でも身なりを整え、一糸の乱れも見せる事の無い美香さん。でも、この時は珍しく肩から少しスーツの上着がずり落ち加減で、ブラウスの襟の片方は中途半端に立ち上がり、胸元のネクタイに至っては結び目が完全に緩みだらしく垂れ下がっていた。それに、近くで見た訳ではないからはっきりとは言えないけど頬は赤く紅潮していて目は虚ろ、若干だがお酒の匂いもした。

「丁度良かったよ、今日はあのバカ夫婦とそのバカ長女が家に居なくてさ、私も一人で晩酌すんのも何か物足りないし、少し付き合いなよ」

「……居ないんだ、麗奈さん、ちょっと残念……」

「……アンタ、本当に麗奈が好きだねー？ あんな崇り神みたいな癩癩女、何でえ？」

……やっぱり、何かおかしい。いづみさんに先導されて廊下からリビングへと歩いていくその足取りはどこか辿々しくて、喋る言葉もあまり呂律も回っていない。明らかにいつもの美香さんじゃない。それよりむしろ、美香さんがお酒を飲んで酔っているという状況に少し驚いた。あんなにしつかりした人でも、こういう時があるんだ……。

「……あー、やっぱり眠い……」

チャイムの音で一瞬は緊張が高まり目が覚めたけど、それが解けるやいなや強烈な『睡魔』と言う名の新撰組一同が私に対して総討ち入りを仕掛け始めた。ヤバイ、那奈屋陥落寸前。このままだとここで寝ちゃいかねない。こんな所で寝たら間違いなく酔って帰ってきたお姉に蹴り落とされて階段落ちの刑に処されてしまう。そんな事になったら風間杜夫や平田満どころじゃない、松坂慶子やつかこうへいもビツクリだ。

「…………銀ちゃん、カッコいい…………」

薄れていく意識を何とか繋ぎ止め、蒲田行進曲のワンシーンの様に階段を這い上がった私は、今度はゾンビの様に床を這いずって自分の部屋に辿り着いた。つーか何で私は蒲田行進曲とかゾンビとか古い映画知ってたんだ？ 私、確か平成生まれだよな？ まあいいや。ああ、あれに見えるはフカフカのベッドに暖かな布団の楽園、遂にこの険しく長き旅路も終焉を迎える……。

「…………くか…………」

秒殺だった。横になってもものの三秒もしないで寝てしまったと思う。起きてから気付いた事だが、布団も羽織らず枕もそちのけで大爆睡してしまったみたい。このまま朝まで寝てたら間違いなく風邪を引いたか、あるいは首を寝違えていただろう。床を這いずったりベッドで大の字になってたり、本当にだらしない女だなあ、私は。翔太が居なくて良かった、とてもこんな姿見せられないよ。でも、やつぱり眠れるって幸せ。睡眠サイコー！

「一体何やってんだよ、アンタは！？」

「…………ほえっ！？」

……が、そんな幸せな時間ものの三十分ほどだった。闇夜を切り裂く雷の様な突然の怒号に、私の穏やかな安眠の一時は一瞬にして吹き飛ばされてしまったのだ。

「えっ、えっ、えっ！？ 何ナニなにー！？」

夢から現へ強引に引き戻された私は、何が何だか訳がわからず驚きのあまりベッドから転げ落ちてしまった。少し経ってしつかりと目が覚めた後、その声が下の一階から聞こえてきた事だけはうっすらと理解出来た。

「……今の声、いづみさん……？」

気がつくと、床に正座する私の膝元にはなぜか学校用のカバンがあり、中にはなぜかクシャクシャに丸め込んだ制服と、これまたなぜか枕がギューギュー詰めになっていた。寝ぼけて学校に遅刻するとも思ったのか、それとも火事か地震があつたと勘違いしたのか、今思い返しても自分でさっぱりわからない。完全に意識が戻ってない数秒間、一体何をしようとしてたんだ、私は……？

「……何？ 何なの、今の……？」

とりあえずカバンから制服と枕を取り出した私は、事の真相を確かめるべく一階に下りてみる事にした。あの声の主は間違いなくいづ

みさん、声のトーンからしてかなり怒ってる様子だ。一体誰に対してそんなに怒ってるんだろうか、私にじゃないのは確かだが、もしかしてベロベロになって帰ってきたお姉にかな？

「だからあれほど言ったじゃない！ 本当に、今の今まで何やってたんだよ！？」

「……うわっ、まだ怒ってる……」

部屋を出て階段のふもとまで来てみると、さらにその怒鳴り声は迫力を増し家中にビリビリと響き渡った。これはちよっと普通に間に入るのは怖いな、私まで怒られてしまいそうだ。ここは状況を見極める為にさっきみたいに階段半ばで待機して少し様子を伺う事しよう。我が家の階段は足場が踏み板だけで側面が吹き抜けているタイプなので、身を隠しながら覗き見るにはちょうど良い。逆に、下にいる人間からスカートの中を覗かれる危険性も孕んでいるのだが。

「……いい歳して未だいづみさんに叱られて、うちのお姉も何やってんだか……、って、あれ？」

ふと玄関の方に目をやると、あると思っていたお姉の靴はそこには無かった。あるのは私といづみさん、それと普段見慣れないハイヒールの靴が置いてあるだけ。って事は、まだお姉はここに帰ってきていない。ならば、いづみさんが激怒して怒鳴り散らしている相手って、まさか……？

「アンタがすっかりしなきゃ、アンタが説得しなきゃアイツが決断しない事はずっと前からわかってた話じゃない！ それをグダグダ言い訳並べてズルズル引き延ばして……！」

「……ごめん……」

「そして結局、こうして取り返しのつかない事になっちゃったんじゃないか！ 本当何やってんだよ、アンタが居て何でこんな事になっちゃったんだだよ、美香！」

「……ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

いづみさんの怒鳴り声の後に、かすかに聞こえてきた今にもかき消されてしまいそうな弱々しくかすれた声。同時に、何度も鼻をすする音も聞こえてきた。私がいる場所からだとりビングの中にいる二人の姿までは見えないのではつきりとは言えないが、もう一人の声の主は多分美香さん、そして……。

「……美香さん、泣いてる……？」

信じられなかった。昔は気が弱く頼りなかった性格だったとはいえ、危険も省みずに愛する人を救う為に奔走し、今では国の教育機関の礎を支えるほどの強く逞しく健気な女性。そんな美香さんが今、お酒に酔って『らしさ』を失っているところか、親友に説教をされて涙を流している。一体、美香さんに何があったんだろうか……？



「アイツを失って何より一番辛いのは、娘達よりアンタなんじゃないの!? だったら、何でもつと長く一緒に居られる努力をしてこなかったんだよ!？」

「…………ごめんなさい…………」

「アンタの愛情、間違ってるよ! 例え怒られようとも嫌われようとも、意地でもアイツを説得すべきだったんだよ!」

話の節々を聞く辺り、どうやらいづみさんが言っている『アイツ』というのは新作さんの事っぽい。失うとかいなくなるとか一緒に居られないとか……、あれ? ちょっと待って、嘘でしょ? さっきの病院での新作さんのセクハラ行為に、あと美香さんが泣いているのを考えると、まさか美香さん、本当に新作さんと……?」

「…………ついに離婚決意!？」

うわぁ、これは一大事だ! そんな事になったら翼と岬はどうなっちゃうんだろう!? 親権は養育費は慰謝料は!? まさか法廷の場までもつれ込み!? 翼はオトン大好きっ子だから新作さんについていくだろうとしても、岬はこの先学費やら生活費を考えると治療で仕事が出来ない新作さんより美香さんと一緒の方が良いのかな? って、そんなの私が心配する事じゃねーし! 一体何を考えてんだ、私は!？」

でも、でもさ、もし調停が上手くいかずに泥沼化したら渡瀬家にも

何かしら影響出ちゃうんじゃないの、これ？ 父さんは間違いなく新作さんの味方だし、母さんは多分美香さん側でしょ？ 下手すりゃ渡瀬家まで折り合い悪くなつて離婚の危機！？ うわぁ、何かヤバイよヤバイよ、昼間のメロドラマの様なドツロドロでギッスギッスな修羅場の予感がプンプンするー！

……なーんて、余計なお世話的な事を考えていた私だったが、それがあまりに場違いで愚かだった事を次のいづみさんの話で思い知らされた。そんなもんじゃなかった、そんな子供がワクワクしながら想像するような幼稚で軽い話では、決してなかったのだ。

「あの馬鹿男、これまで何度も手術するなり移植するなりして助かるチャンスがあつたつていうのに、それを变なプライドに固執して拒絶し続けて、本当に馬鹿だよ！ 何が定められた運命よ、何が命の尊厳よ！ 他人の心臓を奪つてまで生きてたくない、これは天から定められた運命だ、だって！？ 何様よ、どっかの偉人にでもなつたつもり！？ そんなセリフ抜かして格好良いとも思つてんの！？ 人間なんだからもつと生きる事に貪欲になつたつて誰も責めやしないのに……！」

『……えっ？ いづみさん、今何て……？』

「美香も美香だよ！ 自分の命より大切な男だったんでしょ！？ だったらそんな馬鹿な言い分に付き合つてないで、アイツをさつさと海外でもどこでも連れて行って有無言わず手術させちゃえば良かったんだよ！ それを『個人の意志を尊重したい』だなんて甘やかして放つといたから、結局こうして泣きを見る事になつちやつたんじゃない！ 遅かれ早かれこうなるのはわかつてた事でしょ！？ これじゃアンタがアイツを見殺しにしたと一緒だよ、美香……！」

『……………！？』

頭が真っ白になった。詳しい事までははっきりと言ってはいなかったが、このいづみさんの言葉が何を意味しているのか、幼稚な思考力しかない私でもさすがに理解出来た。でも、理解したくなかった。信じたくなかった。嘘だと、夢だと思いたかった。

「……………ごめん、全部私が悪いの、本当にごめんなさい……………」

「……………美香……………」

「……………私が悪いの、私が……………、私が、全部……………」

「……………アンタが殺しただなんて言い過ぎたよ、ごめん美香、だからもう、そんなに泣かないで……………」

新作さんに、『その時』が迫っている……………。

これは後々、いづみさんが私に教えてくれた話だが、すでにこの頃の新作さんの心臓の筋肉は破裂しかねないほど極限まで膨張してほとんど機能を果たしていない事が検査結果で判明し、同時に血流が滞る事で体内に十分な栄養や酸素が行き渡らず、心臓から遠い下肢や毛細血管が多い臓器などの様々な部位に極度の機能障害がある事も判明した。特に肺は水が溜まり通常の三分の一くらいしか酸素を取り込めていなかったらしい。

それによりすでにその身体は突発性拡張型心筋症の治療法である心

臓移植手術やバチスタ手術に耐えられないほど衰弱しており、もう投薬での治療もほとんど効果を得られないほど病状は悪化していたそうだ。本来なら歩いたり食事を取るのすらままならない状態で、それどころか生きていられるのが不思議なくらいだと担当医は驚いていたという。改めて凄い生命力だと思った。でも新作さん、いつも私達の前では元気に振る舞っていたけど、実際は毎日苦痛と呼吸困難で相当辛かったはず……。

「……で、医者はおとれくらいって言ったの？」

「……………」

「……美香？」

「……保って、一ヶ月……………」

「……ふざけんじゃないよ、何でそんな急に……………」

更なる衝撃が私の体中を走る。言葉にしにくい、何か心を尖ったな針で一本一本突き刺されていくような辛く痛苦しい感情が胸の中に渦巻いていた。あの日以来、翔太のお父さん・貴之さんが事故死した時と似た痛み。でも、今回は比べものにならないくらい痛い。あの頃の私はまだ小さく、人の死を完全に理解するには幼かったからあまり感じなかったのかもしれないが……。

『俺はもうじき、死ぬ』

いつかの新作さんの言葉を思い出す。その時すでに新作さんは自分に残された時間があと僅かなのをわかっていたのかもしれない。いつ死んでもおかしくない病氣、それは私もわかっていた。いつかは訪れる運命、それもわかっていた。でも、それはまだまだ先の話だと思い込んでいた。だって、今日だってあんなに楽しそうに翼達と話をして、ふざけた事したりして、笑顔を振りまき、みんなを笑わせてくれた人が、もうすぐ死んでしまうだなんて、あと一ヶ月、たった一ヶ月でいなくなってしまうだなんて、私にはとても信じる事が出来なかった……。

「……この話、娘達には、まだ……？」

「……………」

「……うん、絶対言わない方がいい、黙ってな、岬はもちろん、翼だってまだそんな事実に耐えられる年頃じゃないよ……」

私の脳裏に、病室で新作さんと楽しそうに話していた翼の笑顔が浮かぶ。誰よりも新作さんが大好きで、心から尊敬して、叶えられなかった夢を代わりに叶えてあげようと一生懸命練習して、やっとサッカー日本代表に選ばれるまで頑張ってきたのに、ユニフォーム姿だけじゃなく、いつかは綺麗なウェディング姿も見せてやりたい、って話をしたばかりなのに、これじゃ翼が哀れ過ぎる。こんなのではないよ、こんな、こんな……。

「……こんな運命、あんまりだ……！」

自然と涙が込み上げてきた。悔しかった。やり切れなかった。世の中には平気で人を殺したり物を略奪したりして、生きている価値も無い悪い人間がたくさいるっていうのに、どうしてこんなに家族や他人までもを思いやり、強いては世界中の人々の平和まで願っている良い人間が早死にしなければならないのか。とても平等なんかじゃないよ、おかしいよ、こんな間違ってる……！

「……ねえいづみ、お願いがあるの……」

瞼を瞑って今にも溢れ出そうな涙を堪える私に、更なる追い討ちをかける美香さんの哀願の言葉。その願いとは、あまりに甘く、切なく、純粋なものだった。

「……ほら、私と新作クンって、正式には結婚式挙げてないでしょ？ あの時、色々あって日本にはいらなかったから……」

「そういえばそうだったね、アンタ達まで奥井のゴタゴタに巻き込んで、ほとぼり冷めるまで二人でイタリアに行っちゃったんだもんね、結婚式挙げたい？ いいよ、協力するよ！ 式場なんてどこでもいいじゃん！ みんな呼せ集めて壮大にパツとやろうよ！」

「……ううん、実はね、まだ翼が産まれる前にイタリアの教会で二人だけの結婚式をしたの、教会の神父さんに立ち会って貰って……」

「へえー、そうなんだ、教会で二人だけの結婚式かあ、何かいかにもロマンチストなアンタらしい話だね」

「……でね、二人で祈ったの、いつまでも一緒に居られますように、この先どんな運命が待っているとも、二度と二人が離れ離れになりませんように、って……」

「……美香……」

「……だから……」

「……だから、何？」

「……だ、だから、もし新作くんが天に召される時が来るならば、どうか私も一緒に連れて行って下さい、って……」

「……なっ……！？」

ガタンと何かが倒れる音がした。灯りに照らされ写る影で、いづみさんが座っていた椅子から立ち上がったのがここからでもわかった。多分、その勢いで椅子が倒れたのだろう。そして再び、いづみさんの怒号が家中に響き渡る。

「アンタまさか、新作が死んだら後を追おうなんて馬鹿な事考えてんじゃないだろうね！？ 冗談じゃないよそんなの、そんなの絶対に許さないよ、私は！ー！」

「……ち、違うの、そうじゃなくて……」

「アンタさ、貴之に先立たれて私が倒れた時、何て言ったか覚えてる！？『辛くても、苦しくても、残された子供の為に、私達の為に生きて欲しい』って言ったんだよ！！泣きながら病室のベッドの私にしがみついてそう言ったんだよ！！だから私も立ち直って今だって辛くてもこうして生きてるっていうのに、なのにアンタ……！！」

「……違っの、自分で命を絶とうなんて事考えてない、でも……」

「でも、何よ！？何だって言うのよ！？」

「……その時、神様にお願いしたの、もし、新作クンの寿命が私よりも短いのなら、私の寿命を分け与えて同じ長さにしてあげて下さい、って……」

「……あのね、そんな馬鹿げた話……！ハア……」

再びガタンと物音が聞こえてきた。立ち上がっていたいづみさんの影が小さくなる。椅子を起こして座り直したのだろう。それからはいづみさんはほとんど喋らなくなり、代わりに美香さんの小さな話し声がかすかに聞こえてきた。

「……自分でも馬鹿げた事だと思う、そんな事ありえない、もし本当に神様が居て、願いを叶えてくれたりするのなら、世の中に不幸な人なんて一人もいる訳がないもの……」

「……………」



「……でもね、これまで新作クンは何度も危険な状態になっても奇跡的に持ち直してきたし、当時医師からはあと三年ほどの命だって言われていたのに、もうそれから十五年近く経つんだもん、これはもしかしたら本当に神様が私の願いを聞き入れてくれて、私達を見守ってくれているのかなって、どうしてもそう思えて仕方ないの……」

「……………」

「……でも、今回ばかりはきつともう無理、これ以上奇跡が起きても、辛くて苦しいのは新作クンだもの、毎日痛みを我慢して無理して明るく振る舞っている彼を見るのは、私だってもう辛いの……」

「……で、私へのお願いって何よ？ 私は神様でも医者でもじゃないからね、アイツの寿命引き延ばすとか痛みを和らげるなんて出来ないよ」

「……わかってるよ、わかってる……、あのねいづみ、もし本当に、本当によ？ その願い通り、私が新作クンと一緒に天に召された時は……」

「……………」

「……残された子供達を、翼と岬の事を、お願い……」

美香さんはそう言うと、それまで堪えていた感情が抑えきれないように声を上げて泣き出してしまった。聞いているこちらまで胸が締め付けられそうな、悲しげな嗚咽だった。私も限界だった。堪えき

れない涙が頬を伝って口元に流れ落ちる。苦く切ない味がした。鼻をすすりたかったが、音を立てると二人に盗み聞きをしているのがバレてしまうので必死になって我慢した。

「……あのね美香、アンタのその神様だとか宗教的な話はさ、アンタみたいな専門職じゃないから私にはさっぱり理解出来ないし、第一、私は神様なんてもんがこの世に存在するなんてこれっぽっちも信じていないけどさ、でも……」

「……………」

「私は居るか居ないかわからないいい加減な神様と違って、間違いなくアンタの目の前にいる親友なんだ、間違いなくアンタの願いを叶えてあげられる存在なんだ、それでアンタの不安や苦しみが少しでも解消するなら、アンタが少しでも楽になるなら、わかったよ、その願い、私が責任持って聞き入れてやるよ」

「……………いづみ……………」

「但し、今言った通り私はそんな馬鹿げた戯言、一切信じてないからね！ そんなに子供達が心配なら、残していく事よりもこれから先どうやって女手一人で二人を育てていくか考えな！ 新作と離れ離れになるのが嫌なら、一緒に墓に入る事よりもどれだけ長く濃密な時間をアイツと一緒に暮らしていけるか努力しな！ 『自分が死んだら』なんてそんな馬鹿な事は二度と口にしない、例えその時が来ても絶対に後追い自殺なんてしない、約束して！」

「……………うん、約束する、絶対にしない……………」

「約束だよ！ 破ったらアンタ、タダじゃおかないからね！ 一生絶交だよ、死んだって許さないよ！ 私もアンタの後を追って、あの世で嫌ってほどその頬をひっ叩いてやるからね！」

「……ありがとう、本当にありがとう、ごめんね、いづみ……」

「謝んなくて！ アンタのごめんはもう懲り懲りだよ！ 全く、もう……！」

最後はいづみさんも鼻声になっていた。これ以上は辛くて聞いていけない、私は息を殺して静かに部屋に戻ると、ベッドに倒れ込んで泣き声が聞こえないように枕に顔を埋めた。

「……何で、何でこんな話、聞いちゃったんだろう……」

後悔した。あのまま寝てしまっていれば良かった。興味本位で盗み聞きしなければ良かった。知らなければ良かった。こんな話知らなければ、これからもいつもの様に新作さんや美香さんと顔を合わせる事が出来たのに、笑顔で会話を交わす事が出来たのに……。

「……私は……」

それに、私はこれからどんな顔をして翼と向き合えばいいのだろうか？ 世界一大好きな父親が余命一ヶ月、それをまだ翼は知らない。いずれ訪れる別れの時が来るまで、それを教えては貰えない。でも、

私は聞いてしまった。知ってしまった。彼女よりも先に、待ち受ける残酷な未来を、秘密を、真実を知ってしまった。

私はこの真実を胸に秘めたまま、今まで通り翼と付き合っていていけるのだろうか？ 沈黙を貫いても、かといって真実を打ち明けても、どちらにしろそれは翼を傷つける事になる。もし自分が翼の立場だったら、きつと自分より先に真実を知ってしまった私に対して怒りを抱くだろう……。

「……私は、私はどうしたらいいの……？」

新作さんは教えてくれた、真実を知るには覚悟が必要だと。真実とはいつも残酷で、人を傷つけるものばかりなのだと。父さんも母さんもお姉も好きで私に隠し事をしているのではない、知らない者の苦しみより知っていてもそれを話してあげられない者の苦しみの方が辛いのだと。

それを今日、私は身をもって痛感した。私も人に話せない、辛く残酷な真実を一つ、胸に秘めて生きていかなくはならなくなってしまった……。

「……誰か、誰か教えて、私はどうしたら……」

先程までの眠気など、もうすっかり覚めてしまっていた。結局、私は朝まで寝付く事が出来なかった。深夜の一時ぐらいたったか、家の前に一台の車が停まったのがエンジンの音でわかった。その後玄関で物音がした事を考えると、多分美香さんがタクシーを呼んで自

宅に帰っていったのだろう。

「……ねえいづみ、私ね、その時神様にもう一つお願いをしたの、もし二人に最期の時が訪れたら、私に十秒だけ時間を与えて下さいって、新作クンに最後のキスをする時間だけ……」

どうして、こんなに愛し合っている二人がこんな悲しい結末を迎えなければならぬのだろうか。どうして、幸せというものは永遠に続いてくれないのだろうか。誰にもいつかは来る別れの時、そんなもの無くなってしまうばいいのに。そうなれば、ずっとみんな笑顔でいられるのに。私が部屋に戻る前、いづみさんがポツリと吐き捨てるように言った一言が、ずっと頭にこびり付いて離れない……。

「……何で私達だけ、好きな人とずっと一緒に居たいってささやかな願いすら、叶ってくれないんだろうね……」

……その日、私は学校を休み部屋に閉じこもった。小夜が家に迎えに来たのも無視した。だって、学校で翼に会うのはもちろん、一晩中泣き続けて真っ赤に目を腫らしたいいづみさんの顔すらも、見るのが辛くて仕方なかったから……。

## 第80話 Over

「おめえ、何か俺に聞きてえ事があるんじゃないのか？」

「……えっ！？　ってグハツツッ！！」

……迂闊だった。プロ投手顔負けの豪速球がまともにみぞおちに突き刺さり息が出来ない。空手の組み手なら相手の突きや蹴りが急所に入っても身構えしてるから多少我慢は出来るけど、完全に棒立ち状態で硬球直撃は洒落にならない。ボールが胸を貫通したんじゃないかと思ってしまうほどの激痛が体中を走る。私、情けなくもその場でのたうち回って七転八倒。

「オイオイ、何やってんだおめえはよ？　マヌケ面してボケーンとしてっからそんな様になるんだぜ、相手が投げる時は危ねえから常にボールから目を離すなって昔から口酸っぱくなるほど言ってるんだろが、このバカたれが」

「……と、父さんが投げる直前にいきなり鋭い指摘するから、ゲホッ……！！」

「だからといってキャッチしようと構えた両手を下ろして棒立ちになるバカがいるかボケナスがあ！　だらしねえなあ、親よりデカい図体してしかも空手まで習ってるクセに、この程度の球をどてっ腹に食らったくらいでウーウーうずくまってる様じゃちっともお話に

ならねえな、それでもおめえはこの渡瀬虎太郎様の娘かよ？ 少しは偉大なる姉を見習え、優歌は以前、ボールが顔面直撃して鼻骨が折れて鼻血ブーブー噴き出してても高揚した表情で目えキラキラさせてたぜ」

「……私が普通、正常な人間のリアクション！ アンタ達親子の頭がおかしいの！ 痛みの神経伝達回路が壊れてんじゃないの？ ゲホゲホッ、あー、苦しい……」

「あーあ、姉様に比べてみつともねえ限りだな妹君様は、二番目だからってちいとばかり甘やかして育てたのがマズかったのかもしれないな？ よし、なら今から育児方針転換してビッシビシいくぜ、そんな様じゃわざわざ手にキャッチャーミットはめてる意味ねえからいつそ取っちまえ！ ミット無しで全球素手で受け止める、これが本当の『ミットもねえ』、なんてナ？ アッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

「……しょーもないダジャレぬかしてないで少しは娘の体を心配しろ、この児童虐待親父め……！」

昨晚の美香さんの突然の訪問から一夜明け、衝撃の事実を聞いてしまいシヨックで学校を休んだ私はなぜか今、近所の公園で父さんとキャッチボールをしている。なぜか、と言うよりも昼過ぎ頃に帰ってきた父さんに部屋に引きこもっていたところを無理矢理外へ連れ出されたので完全に不可抗力な運命だったんですね。

ノックもせず突然扉蹴り破って部屋に入ってきたと思いきや、いきなり胸ぐら掴まれ階段ズルズル引きずり下ろされ有言無言わず強制連行。嗚呼、ついに私も借金か何かの肩代わりでどこかの不健全なお店にでも身売りされるのか、と一瞬覚悟したほどの活殺自在っ振

りだった。私は何だ、アンタの家畜か？ 『ドナドナ』の世界かつーの。相変わらず人の都合や心境なんてちつとも考えない自分勝手な人ですよ、全くもう……。

「で、こんだけ準備運動すりやもう大丈夫だな？ じゃあもう肩慣らしはこれで終わりだ、次はいつもの通り座って構えな、本気で投げるから死ぬ気で捕らねえと本気で死ぬぞ」

「……ちょ、ちょっと待って！ まさかまた昔みたいに投球練習場のキャッチャーみたいな真似を私がしなきゃいけないの！？ 待って待って待ってヤダヤダヤダ、父さんとキャッチボールするの随分と久し振りなんだからさ、もうしばらくは普通に投げてよ！ 私、まだ完全にボールに目が慣れてないんだから！」

「ああん？ 目が慣れねえだ？ 甘ったれてんじゃねえよオイ、何の為にわざわざ月謝払ってまでおめえに空手習わせて動態視力鍛えさせてると思っただ？ そんな弱気な事で本気でメジャーリーグの舞台に立てるとでも思っただのか！？ あつちじゃ平気で160キロ投げるピッチャーなんてザラなんだぜ、俺様のストレートぐらいで目が慣れねえなんて女々しい事言っただじゃねえぞバカ野郎！」

「女々しいって私、普通に女だし！ しかもメジャーリーガーになりたいなんて夢語った覚え一度も無いし！」

「うるせえグダグダ文句言っただけでさっさと座って構えろクソつたれがあ！ でねえと次は容赦なく頭にボール直撃させてその頭蓋骨ベッコリ陥没させんぞゴラァー！！」



……どう見てもキャッチボールなんかじゃないよ、何コレ？ 完全にタダの投球練習、自分が思う存分投げたいだけのワガママ親父。普通、親子のキャッチボールってお互い捕りやすいゆるーいボールを投げ合って楽しむものだよ？ なのにこの男ときたら、昔から私やお姉を公園に連れ出してはキャッチャーみたいに座らせて大人気なくオーバースロー腕フルスイングで全力投球。

ちなみに当時、私達姉妹はまだ小学生、私に至ってはやっと小学校に馴染んでこれたかどうかのピカピカの一年生。まだ永久歯すら生え揃ってない幼くか弱い小さな幼女。やっぱり頭おかしいですこの人、これが男の子相手ならまだともかく、何で女の子にこんな危険極まりない真似をさせるかなあ、この非常識親父様は？

しかもねこのオッサン、その投げるボールのスピードがとても尋常じゃない。高校時代に球速だけなら即戦力で通用するとプロのスカウトマンからお墨付きを貰った事のあるほどのバカ強肩の持ち主で、以前私達を連れて参加した地元プロ球団のファン感謝デーではスピードガン競技で軽く150キロ台をスカズ力連発、遠投競技ではホームベースから投げたボールを外野のバックスクリーンの看板に直撃させて観客や本職の選手達を顔面蒼白させた過去を持つてたりする。

「そんじゃいくぞ、構えたところに真っ直ぐ投げっから、逃げずにしっかり捕れよー！」

そんなピッチングマシン顔負けの豪速球が自分目掛けて飛んでくる訳だから、受け止めるこちらは常に命懸けであって……。

「……っ！ いったあいつ！！」

「よし、何が目が慣れねえだよ、やりやあちゃんと捕れるじゃねえか！ 良いねえ良いねえ、この『バシッ！』っていうミットの音が心地良いんだよなあ、いやあたまんねえなオイ」

「……本当にミットはめてても意味がない！ 相変わらず痛い、手のひらが痛い！！ 何で！？ まだ子供の頃の話ならともかく、体も成長して色々痛みにも慣れた今になってもこんだけ痛いってどういう事……！？」

「日々成長してるのはおめえだけじゃねえのさ、この前バッティングセンターのオヤジに頼んでスピードガン測ったら球速上がったからな、俺様のストレートはまだまだ進化するぜ、人類前人未到の170キロ台も夢じゃねえな！」

「何で四十過ぎたいい歳のオッサンが今になっても日々スクスクと順調に成長してんのよ！？ アンタには四十肩とか腰痛とか老化現象一切無いの！？ 日本人の平均身体能力どころか生物の限界まで凌駕し過ぎ！ 一体何者！？ 宇宙人！？」

そんな未知の生命体がお相手だから、いつも私とお姉は家に帰る頃には腕、足、体中が青アザだらけ。本当にマジで殺される、死にたくないから必死で二人で捕球技術を磨いたもんです。おかげでどんなに速い物でも目が追いつく様になりました。新幹線はカタツムリ、ジェット戦闘機はハ工程度、今は光の速度すら手に取る様にわかります。空手の組み手でも相手の動きが止まって見えます。極みの境地です。私とお姉の強さの秘密はこんなところにもあり。もちろん嘘です。つかこの人、確か昔はプロのバイクレースーだったはずだよな？ 野球関係ないよね？ 今も昔も別に投球技術磨く必要な

んて全然無くない？

「まったくもう、こんな遊びみたいな事、私相手じゃなくて職場の休み時間とかで橋本さんや竹田さんとかにやらせればいいのに……！」

「仕方ねえだろ、実際この前昼休みに竹田にキャッチャーやらせたら、アイツ手の中指骨折して仕事にならなくなっちまったんだからよ」

「何やってんのアンタ！？ まともに仕事してないとはいえ仮にも肩書きは社長でしょ！？ 自分の会社の大事な社員を労災適応外のバカな理由で負傷させんなっ！ しかも竹田さんは自分のバイクチームの大切なメカニックなのに、これでチームの運営に支障が出て翔太の成績悪くなったらどうすんの！？」

「そうだなあ、言われりや確かにそうだな、チームに支障きたしちやマズいわな、これじゃ社長どころかチーム代表としても失格だな、イカンイカン、反省反省」

「本当だよ全く、ちゃんと心から反省して、社長としてもチーム代表としてもみんなに迷惑かけないように心掛けないと……」

「よし、じゃあそれを踏まえて今度は翔太にキャッチャーをやらせるとするか」

「わかってねえ！ 全っ然わかってねえ！！ 肝心の所属ライダーを負傷させてどうする！？ アンタ本気で翔太の人生をオシヤカにするつもり！？」

あつそうだ、実はその翔太なんだけど、なんとか無事に生還を果たす事が出来ました。私は朝からずっと部屋にこもっていたから直接会ってはいないんだけど、父さんに外へ連れ出される時に部屋のドアが開いてたので中を覗いたらベッドにうつ伏せになって倒れてた。全く生気が感じられなかったけど、多分生きてると思う。多分。でも、あの様子だと明日も学校に復帰するは難しいかな？ 何か雪山が無人数から奇跡的に救出された遭難者みたいにげっそり痩せ細っていたし。病院でメディカルチェック、あとメンタルケアも受けた方が良さかも。あの様子じゃ余程怖い目にあつたんだろうなあ、精神に異常を来すぐらいの悪夢の様な壮絶な拷問地獄が何かを……。

「ストレートばかり投げるのも飽きたな、じゃあ次はフォークでも投げてみるか、死にたくなけりゃしっかりと捕れよ」

「……えっ？ いやそれは止めようよ、無理だよ無茶だよ無謀だよ、父さんの変化球ってどこ飛んで行くか予測出来ないから、結構高校卒業した後も球団からスカウトされずにプロ野球選手諦めたんじゃないかって……？」

「それは何十年も昔の話だ、今さっき言っただろ？ この渡瀬虎太郎様は常に成長し進化を遂げているんだ、今の俺ならフォークなんてそんなもん豆を箸で摘む程度の朝飯前、ガクンと落ちたボールが手前で地面にめり込んでズッポリ埋まるほどの超絶魔球を披露してやんぜ」

「……それ、野球のルールだと確かワイルドピッチってヤツだよね？ キャッチャーミットにボールが収まってないんだから……」

それどころかボールが地面から取り出せなくなってランナーがいたらガンガン進塁されまくると思うんですが？　なるほどねえ、どうりでいかに150キロ投げる怪物球児だろうと当時のスカウトマンがプロ契約を見送る訳だ。この人全然ルール理解してない。つーか多分ルールブックなんてもんがある事すら知らない。知つても承知しない。自分がセーフだと思つたら例え審判を力づくでねじ伏せてもセーフにするだろう。

これじゃ毎試合退場処分だ、とても選手として使いものにならないよ。とても子供の憧れになるようなスター選手になれないよ。むしろなっちゃダメ、真似しちゃダメ。こんな身勝手人間が今まで社会という複雑なルールの入り組む世界で今まで生きてこられた事自体が不思議でならない。もしかしたらこの人は日本国憲法すら全く理解してない可能性もある。確かにこれまでの人生、犯罪スレスレな真似事を平気でやらかしては警察のお世話になってきたみたいだしなあ……。

でも、そう考えてみるとこの天上天下唯我独尊男をチーム代表兼監督としてしっかりと管理育成指導調教し、ロードレース界の世界王者の座にまで登り詰めさせた母さん、渡瀬麗奈の功績つてもものすごい偉業なんだなあ。やっぱりこの二人なるべくして夫婦になったのかな？　父さんを上手く扱える女性なんて世界中探したとしても母さん以外絶対務まらないだろうし、かといって母さんみたいな残虐鬼嫁と一緒にまともに生きていられるのは父さん以外考えられないし、本当に世界最凶の夫婦だなあ、この二人は……。

「いいか娘よ、今からおめえに本当の消える魔球つてヤツを見せてやるよ、人類未踏の世紀の瞬間だ、瞬きしてたら見逃すぜ、よく目えかつぽじってしつかりその脳裏に焼き付けな！」

「……あーあ、何でこんな最悪の両親の間に生まれてきちゃったんだろう、私って……」

……何か、世紀の瞬間っつーかもっとヒドい光景、未曾有の大惨事を脳裏に焼き付けられそうな予感が、ボールが落ちて消えるどころかとんでもない方向に変化して異次元に消えていきそうな予感がプンプンする。近くの民家の窓ガラスとか大丈夫かなあ？ 周りに歩行者とか遊んでる子供いないよね？ 瞬きどころか目を覆いたくなる鮮血現場を見る羽目になりそう。そんな私の不安もどこ吹く風で投球動作に入る暴走親父。どうかお願いですから関係ない第三者には被害が及ばぬように……。

「ときに、娘よ」

「……？」

「俺に聞きてえ事ってのは、歌月の話なんだろう？」

「……へっ！？ ってガハッ！！」

……迂闊だった。いや別に今回は鋭い指摘に驚きミットを下げてた訳じゃない。迂闊だったのは自分の気構え。第三者を心配してる場合じゃなかった。一番危険だったのは自分の身だった。父さんの投げたボールは変化して落ちるところか真っ直ぐ一直線に地面に当たり、有り得ない強烈スピンで有り得ない角度にバウンドして加速しながら構えていた私のミットを避けるように額を強襲、激突。頭の



られんのアンタは！？ アンタの指と肩、絶対におかしい！！ 指で挟むのは正解だけど、フォークはボールを回転させずに投げて変化させるもののはずでしょ！？」

「何い！ そうだったのか！ 新たな発見だ、これで俺はまた一つ賢く進化したぜ！ 何だよ興味ねえとか言つときながらおめえ野球詳しいじゃねえか、さすがは史上初の女子メジャーリーガーを目指しているこの俺様の娘だけあるな、見直したぜ！」

「だから目指してないしそれほど詳しくもないしっ！ つーかそんなの結構常識だしその程度の知識も無しで野球をやるなっ！ そしてまずは亥の一番に嘘でも建前でも良いから少しは苦しんでる自分の娘の体を心配しろっ！！」

…… 幸い、額の方は出血する事も無く少しタンコブが出来た程度で済んだ。いや、出血が無いと脳に深刻なダメージが響いている可能性があるって言うからむしろ血が出た方が良かったかも。さつきミシッって音したけど骨大丈夫かな？ 今度翔太と一緒に病院で検査して貰おうかな、この前もお姉に壁に投げつけられて頭がち割られたばかりだし。本当にこの一家と生活しているといくつ命があっても足りないよ、まさかマジで頭蓋骨陥没させられかける羽目になるとは思ひもなかった……。

「そうだなあ、この世に生を与えた偉大なる親様に対してろくな言葉使いも出来ないおバカな無礼者は一度、頭のとっぺんこじ開けて脳みその細部までじっくり調べて悪いところ治して貰った方が良くかしんねえな」



「言葉使いどころか四十過ぎても人間として最低限のモラルすら身に付けられていないアンタにだけはそんな事言われたくない!!」

そんな私のズバリな正論もちつとも耳に入っていないのか、目の前の保護者失格男は涼しい顔でこちらに歩み寄り地面に転がっているボールをスツと拾うと、右手でポンポンとお手玉をしながらニヤリと笑みを浮かべ私の顔を横目で覗いた。

「だがしかした、今とさっきのおめえの反応からすると、どうやらおめえがイジイジ悩んで塞ぎ込んでる理由ってのは俺様の予想通り、図星だったみてえだな」

「……えっ？ いや、あの……」

「この期に及んでしらばつくれんじゃねえよ、おめえが最近アレコレと俺達の昔の事を嗅ぎ回ってんのは調べがついてんだ、家に帰ってきて早々に優歌から話は聞いているし、今さっきも新作から電話がかかってきたばかりなんだぜ」

「……お姉が!? 酔っ払って朝帰りしてきてから、今までずっと自分の部屋で爆睡してたはずなのに……!」

「バカタレが! おめえは自分の姉貴を何だと思っていやがる? アイツはな、いづみからおめえが部屋に引き籠もって出てこねえって聞いてから、どうしたら良いかわからず相談しようって俺が帰ってくるのをずっと待ってたんだ、もしかしたら自分が余計な話吹き込んだせいで苦しんでるんじゃないかねえか、自分のせいでおめえと俺の親子の関係を悪化させちまったんじゃないかねえか、って酔いも飛んじまう

ほど深刻におめえの事を心配して悩んでたんだよ」

「…………お姉…………」

「おめえがそれを知らねえのは今まで部屋に閉じ籠もって一步も外に出てねえから、今アイツが爆睡してんのは昨日の夜から一睡もしてないから、当たり前だろうが、違うか？」

「……………」

「ったく、本当に手のかかる困った妹君だなおめえはよ、しかも優歌といい新作といい、こんな面倒なクソガキに余計な事をべらべらと喋ってくれたもんだぜ、やれやれ…………」

父さんは一瞬顔をしかめて一つ溜め息をつくと思ひもしなかった事実には呆然とする私に歩み寄りながらポイツとボールが挟み込まれた状態のグローブを投げてきた。私が慌ててそれをキャッチすると、今度は私に手にはめていたキャッチャーミットを取り上げ無言のままクルリと背を向けると、再び元居た位置へと歩き出し腰を下ろしてこちらにミットを構えた。

「次はおめえがピッチャーの番だ、容赦はいらねえ、全力込めて思いつ切り投げてこい」

「…………えっ？ あ、今の話の続きは？」

「そんなもん投げながらも出来んだろ、ほれ、真っ直ぐド真ん中、俺が構えた場所一直線にストレートをブチ込んでこい、手加減すん

な、全力だぞ」

「……い、いや、でも私、さっきも言っただけキャッチボールするの本当に久し振りだから、捕るのはまだしも思いつ切り投げたりなんてしたらどこに飛んでいくかわからないよ……？」

「投げる前から余計な事を気にすんな、おめえなら出来る、それに多少の暴投ぐらい俺が全部逸らさずしっかり受け止めてやる、今てめえの目の前にいる人間が誰だと思ってるんだ？ おめえの世界でたった一人の親父様、渡瀬虎太郎様だぞ、俺を信じて思いつ切り投げてこい！」

「……でも……」

「でももへちまもねえ、さっさと投げる！ それとも何か、まだ俺様の魔球が受け足りねえってのか？ おおそうかいならいいぜ、じゃあ今度はナックルボールってヤツをてめえの眉間目掛けて思いつくぞズドンと」

「あーもうそれはヤダヤダヤダ！ だからそれとも思いつ切りズドンと投げる変化球じゃねえっつーの！ ったくもーう！ わかったわよ、投げりゃ良いんでしょ投げりゃ！」

左手にはめているミットを右の拳でバンバン叩き、必要以上にやる気満々の父さんに対して、私はどうもいまいちその気になれないでいた。やっぱりおかしいもん、何度も言うけど私は別に野球が好きでも何でもないのに、何で女の私が父親と一緒にこんなキャッチボールとは程遠い投球練習みたいな事をしなきゃいけないのか。

しかも昨晚『何が何でも！』と決意しながらも美香さんの話を盗み

聞きして意気消沈し、一度は諦めてしまった『真実』を聞き出す最高のチャンスを目の前にしてるというのに、少しは話に集中させてよ、本当にもう！ 投げれば良いんでしょ、正拳突きイメージで踏み込んで腕振って、変なところ飛んで行ったってそんなの知るもんか！

「……………えいつ！」

「……………うっしやあ！ 少しストライクゾーンから外れたが、良い球だ！ よーし、昔教えた通りちゃんと肩を入れて全身の使って投げれてるじゃねえか、投げ方忘れて情けねえ女投げで山なりボールなんぞ放つたりしやがったらひっ叩いてたところだったぜ、腕の振りという腰の回転といい悪くねえな、良いバネしてるぜ、フィジカル的には理想的な体つきの女に成長したみたいだな、おめえは」

「フィジカル的？ 何ソレ、体力だけって意味？ そんなの褒められてもちつとも嬉しくないよ！ 成長した娘を褒めるならもつと女性らしい部分を、もつと気の利いた言葉で、少しは無いの？」

「チッ、女はいちいち褒め言葉一つにうるせえ生きもんだなあ、なら『唸りをあげて壊れた脱水機みてえにグルグル回る素敵なお腰が超セクスイーで、振り下ろされるパイナップルも叩き割りそうなゴツくてむしゃぶりたくなるお手手が超プリチー』とでも言ってるやあ良いのか？」

「……………アンタさ、本当は人を褒めようなんて気、これっぽっちも無いだろ？」

……でもまさか、父さんの方からこうして話を切り出してきてくれるだなんて思ってもみなかったなあ。こっちから踏み込まないと絶対話してくれないだろうと予想していたから、父さんの口から『歌月さん』の名前が出た時は正直びっくりして飛んでくるボールに集中出来なかったよ。

そのおかげで私の額には大きなコブが出来たけど、こうして巡ってきたチャンスの方がコブより遥かに大きいよね。これが怪我の功名ってヤツなのかな？　ちよつと違うか。棚からぼた餅？　それも違うな。まあいいや、私を心配してくれたお姉と体調しんどいのにわざわざ電話をしてくれた新作さんのおかげだね、後でちゃんとお礼を言わなきゃ。それとこの額に出来た大きなコブにもね。

「……で、父さん、さっきの話の続きなんだけどさ……」

「次はもっと大きく腕を振って体全身で押し出す様に投げてこい、まだまだフォームに余裕がある、おめえのその恵まれた体でこれが全力だとはとても思えねえな、そうすりゃもつと強く速く誰にも打てねえ球が投げれるはずだぜ」

「だーかーらー！　私は別に野球が上手になりたいなんてこれっぽっちも思っていないから！　何度も同じ事言わせないでよ！　つか今、ちゃんと人の話聞いてた！？」

「だあゝかあゝらあゝ！　じゃねえよさっきからグダグダつべこべうるせえな、みつともなくオロオロドタバタ焦んじゃねえよ、やりながらちゃんと話してやるからさつさと投げるこのクソ野郎が！　そんなに投げんのが嫌ならこのミットをバットに持ち替えて、今からてめえを地獄の千本ノックの刑に晒してやつても良いんだぞゴラア！！！」

「はいはいはいわかったわかった、わかりましたよ！ 投げます投げます！ 投げれば良いんでしょ投げれば！ あーもおう！！」

そういえば中学入ってすぐの頃だったかなあ、学校の体育の授業でクラス対抗のソフトボールの試合をやった時、サードを守ってた私が打球を捌いて思いつ切りボールを投げたら、ファースト守ってた同じクラスの女子の顔面にボールぶつけて病院送りにしちゃった事があったつけ。あまりにスピードが速すぎてとても捕れなかったみたいで。加減して投げるつもりだったんだけどさ、その時のランナーが足の速い千夏だったからつい力が入っちゃって……。

間近で惨事を目撃した千夏や周りにいたクラスメイトはみんな顔面蒼白。翼は大爆笑して小夜もなぜか『アウトー！』とか叫んで大喜び、先生も哑然としてたつけ。それ以来私は学校でバケモノ女子扱い、さらに空手をやってる事や『渡瀬優歌の妹』である事も全部バレて、それ以降の体育でソフトボールの時はだーれも私とキャッチボールしてくれなくなっちゃったんだよね。もうちょつとおしとやかな乙女になりたかったのに、こんな女に一体誰がした？ ええ、間違いない目の前にいるこの体育会系バカ親父のせいですよ。

「いやあしかし久々にキャッチボールしてみりやおめえも知らんうちに随分と良い球を投げるようになったもんだ、たまにはこうして親子のコミュニケーション深めんのも悪くねえな、おめえも優歌同様俺様の計画通り、順調に俺好みの女に成長してるぜ」

「……俺好みって、私個人の理想や将来像は完全無視っすか？ 自分の私利私欲の為に娘を改悪するのは立派な虐待行為の一つだと思いますよ父上様？ まあそんな事よりさ、そろそろさっきの話の続

きを……」

「んじゃあ次はアレだな、おめえの更なる進化を求めて大リーグボール養成ギブスを装着して火の玉ノックでもやってみるとするか」

「アンタどこのちゃぶ台ひっくり返し親父！？ 何で私が巨人の星を目指さなきゃなんないのよ！？ しかも渡瀬家の場合、心配して庇ってくれる役の姉まで一緒に血も涙も無い鬼コーチになりかねないし！」

「嫌なのか？ おつかしいなあ、その姉である優歌は喜んで付けたんだかなあ、大リーグ養成ギブス」

「嘘おー！？」

「だったらいつそ虎の穴にでも入門させるか、猛虎の眼をしたリングの王者を目指すのも悪くねえかもな」

「今度はどこの覆面レスラー！？ それもう野球全然関係無いし！ しかもわざわざそんなところ行かなくなつて渡瀬家そのものが虎の穴みたいな生き地獄じゃん！」

「おつかしいなあ、優歌は喜んで付けたんだかなあ、黄金の虎の仮面」

「マジでえー！？」

「おめえなかなか良いバネしてんな、俺と一緒に拳闘やってみねえか？ 立て、立つんだジョー！」

「今度はどこの眼帯ボクシングジム会長よ!? 燃え尽きろってか!? 真っ白な灰になれってか!? どれだけ時代遅れの昭和之魂思想なのよ、アンタ間違いないく梶原一騎信者だろ!?!」

「おつかしいなあ、優歌は喜んで燃え尽きて真っ白な灰に」

「びっくりいー!? ってコラッー! なってねーし! 燃え尽きてないよ、お姉まだ灰になってない! つーかいつもいつもアンタ達は親子揃って一体何やってんだ!? アンタの理想とする自分好みの女性像って一体どんな人間!?!」

……確信した。お姉があんな獰猛な野獣女になってしまったのは間違いないこのオッサンのせいだ。調教されてる、洗脳されてる! 明らかにこの人のせいで人生の歩みを大きく踏み外している! じゃあそんなお姉を小さい頃から目標にしまった私はどうなるの!?! 二の舞!? 悪夢再び!? もしかしてそれも見越してこのオッサンの策略!? やっぱり計画通り!? どんなにもがいても結局、私の人生ってこの男の手のひらの上で転がされる運命!? 私、着実に真っ白な灰へ猛烈爆進中ですかあ!?!

ダメだダメだダメだ、目指す将来見誤ってるよ私! 軌道修正しなきゃ、今からでも遅くない、もつとまともな人間を見習って道標とすべきだ! じゃあ誰なら良い? まともで身近な人間……、母さん? イヤイヤあれもう人間じゃないし! 完全に魔女だし! 悪魔だし! じゃあいづみさんは? イヤイヤイヤあの人も性根は相当獰猛だし! 野獣だし! むしろ過去の悪行の数々はお姉より質が悪いし! うわあダメじゃん、最悪じゃん! やっぱり私の周りには、人生の道標に出来るような立派な人間が一人もいなあーい!!



「……うつつ、不遇だあ、私ってことごとく恵まれない環境に生まれてきてしまった可哀想な子供なんだあ……」

「オイオイ、何を急に跪いてガツクリ沈み込んでんだよ？ 座ったまま待つてるこっちの足が痺れてくるじゃねえか、いつまでも突っ伏してねえでさっさと投げろこのボケカスが」

「……こんなならいつそどっかに身売りされた方がマシだよ、ドナドナドゥナドゥナア……」

「そんな易々とグズってる様じゃ、おめえはとても俺ら一族が目指す『穏やかな心を持ちながら、激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士』にはなれねえなあ？ オッス、オラ父さん！」

「それ何て宇宙一凶暴で好戦的かつ残忍冷酷な戦闘民族！？ 何がオッスよ、私には尻尾なんか生えてないし、ましてや満月の日に大猿になったりしないから！」

「なら俺と一緒に偉大なる航路を目指そうぜ！ 海賊王に、俺はなる！」

「今度はどこぞの少年誌漫画ラッシュ！？ 黙れ麦藁ゴム人間！ 海賊王にならんでもアンタは十分に迷惑王！ あーもうさすがにイライラしてきた、いい加減に話の続きをさせてよ！ こんなしょーもないツツコミをいちいち娘にさせるな、このダメ親父！」

「父親より優れた娘など存在しねえ！ ケンシロウ、俺の名前を言ってみろ！」

「いい加減にしろっつーの！！ 私は北斗神拳伝承者でもなければ

胸に七つの傷もなあーい！！ それより父さん、さっきの話！！  
話してくれないならもう帰るよ！ そんなにキャッチボールしたい  
なら一人で壁相手にやって！！」

「……エッー、そんなあ、久々に娘と遊べてパパちよつとはしゃい  
じやっただけじゃん……」

「……な、何よ急にそんな寂しそうな顔して……、そんな顔したつ  
てダメなものはダメだよ、元々は無理矢理外に連れてこられて、会  
話しながらって言ったから付き合っただけなんだから、そ  
んなに私とキャッチボール続けたいなら話の続きをしてよ」

「は、話をすれば……、歌月の事を話せば……、ほ、本当に俺とキ  
ャッチボールを……、続けてくれるのか？」

「……なーんかどつかで聞いたようなセリフ……、まあいいや、は  
いはい！ 約束します！ 話の続きとの引き換えのギブアンドテイ  
クだよ！ さあ話して！ 父さんと歌月さんとの、そしてお姉との  
真相を私に教えて！」

「だが断る」

「ナニツツツ！！」

「……この渡瀬虎太郎の一番好きな事は、真相を知りたくてもがき  
苦しんでいる奴に『NO！』と言ってやる事だ……」

「言うと思った！ 絶対言うと思った！！ 苦しんでる相手に『N  
O！』って、最低の人間じゃねーかアンタは！ 一体これまで何人  
の人間の好意をそのくだらないネタの為に犠牲にしてきたんだ！？」

「お前は今までに食ったパンの枚数を覚えているのか？」  
W R Y Y  
Y Y Y Y Y Y Y Y ! ! ! ! !

「……うわああああああ……!!!! アツタマきたあー!!!  
てめーは私を怒らせた! 全力でスタープラチナぶち込むぞオラオ  
ラオラオラァー!!!」

「とか言っておいておめえも随分ノリノリのノリツッコミ全開じゃね？」 野球どころか漫画のネタまで詳しいとは、さすがはこの渡瀬虎太郎様の娘だな、よしよしパパがそんな可愛い那奈ちゃんにご褒美のチューをしてあげよう」

「うぜえ触るな唇尖らせて気持ち悪い顔近寄らせるなこのセクハラ親父！！全然話が前に進まねえ！！もういい帰る！！話もキヤッチボールも全部やめじゃあー！！そんなもんやつてられつかバツキヤロー！！」

もう限界、堪忍袋の緒が切れた！ 何なのよこの頭の中が幼稚園児以下のド腐れ変態バカ親父、自分から話を切り出す振りをして、ぬか喜びしてる私の反応を見てからかってただけじゃん！ 本当は『真実』を語ってくれるつもりなんてこれっぽっちも無いんだ、これまで通りくだらない事をべらべら並べて、また私との話をはぐらかして逃げようとしてるだけなんだ！ もう付き合つてられない、帰って寝る！ 期待するんじゃないかった、こんないい加減な人間を頼ろうとしていた私が間違ってたんだ！

「まったく、この程度の冗談で何をそんなにカッカしてんだよ？」 つ

まんねえ女だなあ、おめえのそのクソ真面目で融通きかねえ性格は本当母親そっくりだな、優歌ならこれくらい笑いながらサラツと軽く受け流してボケ返してくるのによ」

「あーはいはいそうですか！　だったら私じゃなくてお姉とキャッチボールしたらどうですか？　どうせ私はクソ真面目でつまらない女ですよ、どうせ！」

「おーおーツンツンしてやがる、義理の姉妹とはいえ同じ家庭で育つてこつとも性格が違うつてのは、やっぱり母親の遺伝子が影響してるせいなのかねえ？」

私は怒りの感情そのままにグローブを地面に叩きつけ、家に帰ろうと父さんに背を向けズバズバと公園の出口に向かって歩き出した。しかし、数歩進んだ次の瞬間には、後ろから聞こえてきたさり気ない独り言につい足が止り振り返ってしまった。今思うところまで全部、真相が知りたくていきり立つ私をあえて一度頂点までカツとさせて落ち着かせる、私の心境や性格全てを見抜いていた父さんの計算された小芝居だったのかもしれない。

「……確かにアイツの母親は、俺がどんなにバカやつてもいつもニコニコして許してくれた、仏様みてえな女だったしなあ……」

「……えっ？」

私が振り向いたその目線の先には、数々のライバル達との激戦の末にロードレース界の頂点に登り詰め、その後も数々の栄光や挫折を

繰り返しながら、過酷且つ壮絶な人生を全力で駆け抜けてきた一人の『男』の姿があった。表情はキリツと引き締まり、さっきまでのおちゃらけ全開の空気は完全にどこかへ消えていた。

先程まで壊れた機関銃の様に無差別乱射されていた無駄口をグツと閉じ、こちらを見つめて静かに佇むその圧倒的な気迫を前にして、腹わた煮えくり返っていたはずの私の怒りもすっかりどこかに吹き飛ばされてしまっていた。決める時はキメる伝説のカリスマ『渡瀬虎太郎』の本気モード、いつもはふざけてるクセに時たま急にこんな風にカッコ良くなったりするから本当に困る。だったら普段からそうしててよ、全くもう……。

「……血は争えねえとは良く言ったもんだぜ、母親と娘でやってる事は正反对でちつとも面影ねえけどよ、俺を上手く扱うその部分だけはしっかり受け継いでいるのかもしれない……」

喋りながら右手に視線を落とし握るボールをジツと眺める父さんの目は、いつものガン付け一つでヤクザや警察官ですら震え上がらせてしまう鋭く尖ったものではなく、まるでじゃれてくる子犬を愛しむような優しい目になっていた。しかも口元に浮かべる笑みすら優しく見える。常にアウトローな獣道を我が物顔で爆進してきたこの人がこんな表情を見せるなんて、実の娘である私ですら意外な発見だった。嘘みたい、こんな穏やかな笑顔、出来る人だったんだ……。

「……歌月か、最高の女だったな、俺がどんなバカやって道を踏み外しても、アイツはいつも笑って許してくれて俺を見放したりしなかった、あんな良く出来た女は世界中捜しても二人もいねえ、二度と巡り会える事はねえだろうなあ……」

父さんはボソツとそう言うと、しばらく黙ったまま空を仰いで一つ深い溜め息を吐いた。多くを語った訳ではない、はつきりと詳しく全てを述べた訳ではない。でも、この時の父さんの言葉、その表情で、私の心の中に抱いていた一つ目の疑問は揺るぎない確信へと変わった。

『……やっぱりそうだ、新作が言ってた通り、父さんと歌月さんは昔、恋人同士だったんだ……！』

今まで語られなかった、厚いベールに隠されていた知られざる不良親父の淡い青春時代の記憶。私を知りたかった生まれる前の過去の真相。その重く閉ざされていた『真実』の扉が今、少しずつ音を立てて開いていく。私の体中に電気のように緊張が走り、次第に鼓動が高鳴っていくのを感じた。

「……産んだ母親の顔も捨てた父親の顔もわからずに、一体何の為に誰の為に生まれてきたのかもわからずに、イラついてグレて荒れ果てた毎日をダラダラ過ごしてた俺を救ってくれたのは、この世界に生まれてくれた喜びってヤツを俺に教えてくれたのは、俺を母親代わりに育ててくれた森川鈴子でもなく、俺の才能を花開かせてくれた滝澤一義でもなく、俺の唯一無二の相棒だった風間貴之でもなく、間違いなくアイツ、歌月だった……」

「……父さん……」

「……話してやるよ、これがずっとおめえが知りたがっていた俺と歌月の過去の『真実』だ」

父さんは再びこちらを見つめてそう言うと、今度は途中でふざける事なく真面目にちゃんと、歌月さんとの馴れ初めや数々の思い出を静かに語り始めた。

物心つく前の幼き頃に母親を亡くし、孤児院『森川の里』へと預けられた直後に父親まで失踪し、家族の愛情や温もりなど知らぬまま育ち毎日喧嘩や悪さに明け暮れる問題児だった父さんにとって、後に自分同様に実の両親に捨てられ虐待を繰り返す里親から救出される形で森川家の養女にやってきた歌月さんは、まるで出口の見えない暗闇のトンネルに差す一筋の光の様な存在だった。とても可愛らしい顔立ちに透き通るような白い肌、美しくキラキラと輝く銀色の長い髪に一瞬にして心を奪われてしまったそうだ。

でも、可憐であると同時に同じ日本人とは到底思えない異様過ぎるその容姿が、アルビノという先天性の遺伝子疾患によるもので、それにより彼女が心無い大人達から毎日の様にいわれ無き差別をされる悲惨な幼少時代を過ごし、他人と接触するどころか自分の姿すら見られるのを恐怖に感じるほど人間不信に陥っていた事など、当時そんな疾患が存在する事すら知らない父さんが知る由もなかった。初めて詳細を鈴子さんから聞かされた時は、さすがの怖いもの知らずの不良少年もショックでとても胸が痛んだそうだ。

「イチャイチャしてえなあ、せめて話がしてえなあと思って怖がられて部屋の中に籠もっちゃうしよ、俺一人だから警戒されるのか、じゃあ大人数ならどうだって啓介や新作と一緒に誘ってみてもやっぱりダメ、なら同じ女ならどうだってわざわざ歩美姉ちゃんに頭下

げて協力して貰っても全然ダメでよ、つれねえヤツだな、俺達よほど嫌われてんのかなってガツカリしてたら、鈴子のババアから色々アイツの生い立ち聞かされてなあ……、言葉が出なかったぜ、アイツにの不遇さに比べりゃ俺の不満なんてゴミクズみてえなもんだつたからなあ……」

事情を知った父さんはその後、一切の邪念や下心を捨て一心不乱形振り構わず歌月さんの為に尽くすようになった。学校の登下校の際には紫外線防止の日傘を両手で差せる様に代わりにカバンを持ってあげたり、道中にある長い階段を昇る際には虚弱体質だった歌月さんをおんぶして登ってあげたりした。

身の回りの世話だけじゃない。昨日病院で新作さんも話していたが、アルビノの障害をからかった人間達は相手がクラスメイトだろうと大人の教師だろうと容赦なく片っ端からとつちめ、歌月さんを傷つける存在からその身を守る盾にもなった。自分が人からどう思われようと構わない、全ては彼女の為に、一緒に笑って過ごせる毎日を送って欲しいが為だけに。

「まるでモンスターや魔王からお姫様を助け出す勇者様みたいだね、この時の父さんは……」

「まあな、か弱い女を守るのは真の男の務めってもんだろ」

「……なら、何でその有り余るほどの絶大な愛情、今の家族に対しても同じ様に振る舞えないかなあ……？」

「あん？ 何か言ったか？」



「……いーえ、何にも……」

そんな父さんの純粹混じりっ氣無しの熱い誠意に、固く閉ざされていた歌月さんの心も徐々にその扉を開いていき、いつしか父さん達以外の人々とも笑顔で会話を交わせるようになるまで明るい性格へと変わっていった。そして、悪ぶってても性根はとても優しい父さんの姿に歌月さんも心惹かれるようになり、日を重なる毎に二人の距離は次第に接近、一年も経った頃には周囲からも色々と噂をされる親密な仲に発展していった。

「中学生で男女交際とか、随分とマセた子供だったんだね父さんは？ それとも昔の子供達の方が今の私達より若干早熟傾向だったのかな？」

「当時は二十歳で所帯持つてて当たり前、独身貴族だの結婚晩年化だの今のお前らがガキでゆとりなんだよ、つうかな、小学生の頃から親の目も気にせず翔太とイチヤイチヤしまくって、いざ正式に付き合い出した早々いづみとダメ嫁だの鬼姑だの毎日ギャーギャーやってるマセガキ全開のおめえにアレコレ言われる筋合いはこれっぽっちもねえよな」

「……すいません、以後自重します……」

「つたく、これだから最近の若えもんは身の程知らずで参っちまうぜ」

「……でも、父さんだっていつも私に『早く結婚しちまえ』とか『孫はまだか』って散々急かしてるじゃん……」

「ああん？ 何か言ったか？」

「……いーえ、なーんにも……」

学校でも孤児院でも、どこでも二人はいつも側にいた。出会ったばかりの頃は怖がりで出不精だった歌月さんも、父さんの底知らずのポジティブな性格に触発されて頻繁に外へ出歩くようになったという。夏は近所の海水浴場へ、冬は雪の日に雪合戦、もちろん紫外線対策も万全にして。そして二人の両隣りには啓介さんと新作さんも一緒。お姉と新作さんが持っていたあの写真は、そんな頃に撮った楽しい少年時代の四人の姿だった。

「あの写真の歌月さんの笑顔、スゴい可愛かったなあ……、女の私でも見とれちゃうくらい綺麗だった、啓介さんや新作さんまで歌月さんに惚れちゃう理由、何かわかる気がするよ……」

「確かにあの笑顔は人を虜にする凶器か魔術だな、恋は魔法なんて言うくらいだよ、つっても、俺同様に魔法にかかったヤツは片っ端から鉄拳制裁かまして強制的に目え覚まさせてやったけどな」

「……前言撤回、やっぱりこの人勇者様なんかじゃねーよ大魔王だよ、可哀想に、歌月さんは魔王にさらわれた悲劇のお姫様だったんだ……」

「ああん！？ 何か言ったかあ！？」

「いーえ！ なーんにも！」

父さんが学校とかで何かしら問題を起こした時は、まず一番最初にその件が歌月さんに伝えられていたそうだ。担任の教師や母親代わりの鈴子さんの説教には一切聞く耳持たないが、相手が歌月さんとなればそれは別。日頃の行いも学業の成績も完璧に近いほど優秀だった歌月さんは、当時の父さんにとって絶対に頭の上がない存在だった。体力以外に勝てると思える部分が何一つ無かったらしい。

「あの頃はよく喧嘩をして相手に怪我させりやあ毎度毎度歌月に説教されたもんだな、人が泣いたり痛がつたりするのを見るのは嫌、自分だけじゃなく他の人達にもそれ以上に優しく接してあげて欲しいってな、他人が泣くのが嫌だって言つたいてそのくせ言ってる本人が泣いてせがってくるもんだからたまったもんじゃねえ、とんでもねえ破壊力だったぜ、マジで洒落になんねえよ全く」

「……へえ……」

「まあそれでも、平謝りして反省する俺を最後はいつもあの笑顔で許してくれたけどな、片や非の打ち所のねえ可憐なお姫様、片や救いようのねえ最低な大魔王、こんな釣り合わねえ無様な男でもアイツは俺を一度も見放したりはしなかった、中学卒業すら危うかった俺が何とか高校に進学出来たのも、アイツが啓介や新作達と一緒に同じ学校へ行こうって言うてくれて、必死になって俺に勉強を教えしてくれたおかげだしな……」

しかし、運命は残酷にも二人の仲を引き裂いた。四人揃って高校への進学が決まった矢先、歌月さんは新しい里親の籍へ移る事になり、

それまで過ごしていた森川の里を離れざるを得なくなったのだ。その里親とはお姉や新作さんの話でも出てきた大企業の重役の男性。男性と森川家との話し合いの末、歌月さんの先々の将来を考えての決断だったという。それまでずっと一緒だったのに、同じ一つの屋根の下で暮らしていたのに、突然家柄の厳しい大富豪の養女となつてしまった彼女を、父さんは引き留める事も追いかける事も出来なかったらしく……。

「……でも、何も別れる必要なんてなかったんじゃないの？ どんなに家柄が厳しくたって隠れて二人で会う事ぐらい出来たんじゃ……？？」

「どこのロミオとジュリエットだ？ アホ拔かせ、そんなシェイクスピアみてえな戯言が通用するような事情じゃねえんだよ、頭の中がお花畑のめでてえヤツめ、ハナクソみてえな少女漫画の見過ぎだこのバカタレが」

「……で、でも、何かそんなのやっぱり父さんらしくないっていうか……」

「それまで家族つてもんに恵まれなかったアイツが、やっと人並みに安定した生活を手に入れる事が出来たんだけ、一生衣食住に困らず、疾患の治療費も心配なくなったしな、親無し金無し才能無しの俺がしゃしゃり出る幕などどこにも無かったのさ」

「……でもお……」

「でももへちまもねえんだよっせえなあ、そんな話はどうでもいいんだよ、てめえが今さら俺にグダグダ説教抜かしたって別に過去

が変わる訳じゃねえし、第一てめえが一番知りてえのは俺と歌月の愛別離苦話じゃなくて、何故何時如何にして俺が歌月の娘である優歌を養女として預かったかって事だろ？ 違うか？」

「……そうだけど……」

「だからそれを今から説明してやる、さっきまでの話は余興、ただのあらすじだ、ここからが本題だぜ、余計な探り入れねえで黙って聞けよ、いいな？」

「……………」

「ったく、これだから年頃の女ってヤツは他人様の秘め事ばかり覗き見たがりやがつてよ、やっぱり突っ立ったまま話すのはしんどいな、おめえには一切物言わす猶予を与えねえ方が良さそうだ、ほれ、グローブ拾えよ」

いまいち納得出来ずにふてくされる私をよそに、父さんは淡々と一方的にその後日からお姉を養女として向かい入れるまでの間の経緯を語り始めた。私に横槍を入れる余裕を与えぬように、距離を置いて再びキャッチボールをしながら。但し今回は普通のキャッチボール。さつきみたいにキャッチャーをやれとか言われたけどそれは全力で丁重にお断りさせて貰った。あんな豪速球受け続けてたら竹田さんじゃないけどこっちの手の指が全部折られちゃうよ……。

「ありゃあ確かアレだ、俺が奥井と揉めてた頃、暇を持て余して嫌々病院へ診察に行った日だったなあ……」

国内でのプロデビューから僅か一年足らずで世界の並み居る強豪を押し付け中型クラスの頂点に登り詰め、その後も数年に渡り最強無敵の絶対王者として王座に君臨し続けてきた父さんも、奥井家との騒動が原因で一時的にロードレース界から半ば『追放』に近い状況下に追いやられ、さらに長年蓄積したレース中の度重なる転倒のダメージで脳に腫瘍を患っている事も検査で判明し、全くサーキットを走る事が出来ない謹慎状態に陥った時期があった。今から十八年ぐらい前、父さんが現役を引退する一年前の頃の話だ。

身の危険も省みない強引なライティングスタイルが仇となった。精密検査の結果、緊急に摘出手術を施さなければならないほどではなかったそうだが、このまま何の治療もせず放っておけば後々は脳神経系列に障害を起こす可能性があり、ましてや再び頭を強打しかねないロードレースに出場するなど自殺行為だと医者から通告される重大な病状だった。その為、父さんはその時期は治療に専念する事に決め、毎週一回の定期診察を受けに通院を重ねる日々を過ごしていたそうだ。

「突然目眩がして目の前真っ暗になったと思えば次の瞬間にはもう病室のベッドの上でよ、さらに目が覚めた途端に医者から『あなたの頭の中エラい事になってますよー、次転んだら脳みそ破裂して死んじゃいますよー』だもんな、失神してぶっ倒れる事自体が今まで経験無かったもんだから無敵の俺様もこの時ばかりはさすがにビビったぜ」

「怖いなあ、いきなり『死ぬかもしれない』って医者から伝えられるなんて……、でも父さん、さっきの説明で『通院してた』って言うってだけさ、倒れて病院に運び込まれた後、すぐさま『しばらく入院』って話にはならなかったの？」

「その日に脱走した」

「……ハア！？」

「入院しろって言われたけど院内禁煙だっつうから冗談じゃねえって思ってたな、本当は精密検査すんのも面倒臭かったんだがいづみのヤツが無理矢理俺を病院まで連行しやがってよ、頭に変な吸盤付いたコードみてえのペタペタ貼り付けられて生きた心地がしなかったぜ、しかも一回検査受けちまったもんだから病院側から勝手に次の予約入れられて毎週必ず通院しろって念押されて、おかげで診察サボろうと思っても時間になると病院から催促の電話がかかってきてうるせえの何の」

「……何やってんのアンタ！？ 死にたいの！？ いづみさんいなかったらアンタ今頃死んでるよ！ 真面目に通院しろ！ つーかむしろ入院しろ！ そういう病氣って一番喫煙がダメなんじゃないの！？ 自分の病状しつかり理解してる！？ 確か現在も治療中だよね父さんの腫瘍、最近はちゃんと真面目に病院行ってるの！？」

「そついやこの前会社の留守電に四十件ほど伝言が残ってたなあ、ありや多分」

「行け！ 今からでも良いからダッシュで病院行けっ！ 何とかならないかなあこの人の病院嫌いは、いづみさん！ 出番でーす！」

しかし、父さんの身に降りかかったこの突然の災いは予想もしなかった形で福と転じた。父さんはその病院である人物の手ほどきに導かれ、一度は諦め繋いでいた手を離れた愛しき人と運命的な再会を

果たす事が出来たのである。

「……まさかと思ったぜ、心の片隅でそう願いながらも、もう叶わぬ望みだと自分に言い聞かせていた時期だったからな……」

ふとしたきっかけで立ち寄った入院病棟のある病室の一部屋、そこには背もたれを上げたベッドに寄りかかり窓の外を眺める一人の美しい女性がいた。真夏の日差しよりも眩しく透き通るような白い肌と、空いた窓から吹くよそ風になびいて光輝く銀色の長い髪、一度見れば忘れる事の出来ない深く吸い込まれそうな赤い瞳。月日が経過し大人になり若干容姿が変わったが、父さんはすぐに目の前にいるのが誰なのかわかった。偶然にも父さんが通院していたその病院に、あの歌月さんも入院していたのだ。

「……本当、人生つてのは何が起こるかわかったもんじゃねえよ、前日まで治療なんて面倒臭え、どうせ死んだって構わねえなんて自暴自棄になってたのにな、そんなガキみてえな威勢や戯言、一瞬にしてどこかに吹っ飛んじまったぜ……」

まるで誰かが筋書きを書いたドラマの様な劇的な再会。いつかまたどこかで必ず会える、出会えなくても必ず捜し出す、その時までには立派な成功者になって今度こそ彼女と一緒にいる、別れたあの日にそう決意していた父さんは喜びのあまり衝動的に歌月さんを抱き締めてしまったそうだ。歌月さんも父さんの姿を見た途端、大粒の涙を流し感激していたという。



だが、しかし……。

十数年の月日の流れは二人の置かれる状況を急激に変えてしまっていた。一度切れた糸を結び直すには深くそして遠すぎる、大きな溝が二人の間にポツカリと広がっていたのだ。

「……今でも残ってる、忘れねえ、忘れられねえ、あの時の両腕の感覚、あれで嫌でも悟ったぜ、もう何もかもが全て『遅過ぎた』ってな……」

抱き締めた体が、嘘みたいに細い。元々小柄でスレンダーな体格だったとはいえ、まるで綿か藁を持ち上げたみたいに体が軽い。軽過ぎる。細くやつれた白い腕には、治療の為に何度も打ったと思われる注射と点滴の針の痕。その時すでに歌月さんはアルビノの影響で発症した皮膚ガンが体中に転移して体内の臓器を蝕み、幾度の手術と抗がん剤の副作用によって限界に近いほど体重が激減していたのだ。

「……天国から一転、地獄に叩き落とされた気分だった、俺がどうなってもいいなんてバカ考えていた頃に、アイツはあんなに小さい体で生きる事に全力で、忍び寄ってくる死の影に必死になって抗っていた、愚かな自分が情けなくなっただぜ……」

父さんを打ちのめした現実はそれだけではなかった。歌月さんの握り締めたら今にも折れてしまいそうなその細い左手の薬指には、白銀に輝くリングの『刻印』があった。それを見た父さんは全てを理

解した。もう戻れない、もうあの頃には二度と戻れないんだ、と……。

「……歌月さんはその時もう、すでに結婚してたんだね……」

「……まあ、自分で言うのも何だが自業自得だな、俺がいつまでも煮え切らずに自分誤魔化してチャラチャラしてたのが悪いのさ、おめえの言う通り、本気でアイツを自分の『もの』にしたかったんなら、あの時ボロボロになろうが地の果てまでも追いかけていきやあ良かったんだしな、情けねえ、本当、つくづく情けねえ話だ……」

「……父さん……」

「オイオイオイオイ！ おめえがそんな湿気た面すんじゃないよ、娘に同情されるなんてみっともねえ恥を親にかかせんこのバカ野郎が！ 俺が歌月にフラれたおかげでおめえはこの世に生まれてくれたんだぞ、嘘でも良いからちったあ喜べよコラ」

それでも父さんは歌月さんのお見舞いの為に毎週サボる事なく病院へと通い続けた。自分の診察を終えた後は担当医の『自宅安静』の忠告も全く聞く耳持たず真っ直ぐ歌月さんの元へと向かった。最初は診察日だけの面会だったのがいつしかそれ以外の日、ついには毎日の日課となり、立ち上がるのも不自由になった彼女の代わりに昔の様に身の回りの雑用を買って出た。喉が渴けばお茶を汲んであげたり、少しでも食べやすくなるよう食膳のおかずを箸で小さく切つてあげたり、薬の影響で嘔吐した時は嫌な顔一つせず汚れた衣類を洗濯してあげたりした。

体調の良い日にはいづみさんや新作さん達と協同して病院の目を盗

み外へと連れ出し、娯楽施設や観光スポットに連れて行ってあげたり、啓介さんが用意したシークレットゲリラライブに招待してあげたりした。逆に体調が良くない時やガンの治療や検査などで疲れている時は周りを気にせずゆっくり眠れるように気遣い、そつと病室を出て院内禁煙のマナーを守って外にある公園のベンチで一服。そして彼女が目覚める頃には、不安にならぬよう病室へと戻り手を握り側に付き添ってあげた。

過ぎてしまった時間が二度と戻らない事も、どんなに尽くしても決して報われない事もわかっていた。でも、父さんはそれだけで満足だった。全ては歌月さんの為に、病魔に苦しむ歌月さんに再び、見た人を幸せな気分にしてくれる魔法の様な笑顔を取り戻して貰う為に。あの満面の笑顔がもう一度見たい、それだけの為だけに……。

「俺の都合なんてもうどうでも良かった、アイツがどうしたら毎日笑って過ごしていけるか、思い残す事のねえ最高の人生を送っていけるか、あの時は毎日そればかりを考えてたな、そう考えてる時だけは、俺も奥井の事や自分の頭ん中の『爆弾』の事も全部、忘れる事が出来たしな……」

想い続けた愛しき人と共に人生を歩んでいく望みは潰えた。ならば、こんな自分でも自分なりに何か彼女の役に立てる事はないだろうか。彼女が抱えている苦悩や不安を少しでも取り除いてやる事は出来ないだろうか。いつか彼女が天に召される時、この世界に大切な宝物を残していかなければならない不安を……。強い日差しが照りつける暑い真夏日、歌月さんが眠っている時間にいつもの様に公園のベンチに座りタバコをくわえ、痛む恋心を押し殺し、いつしかそう思うようになった父さんの目には、その傍らで虫取り網を振り回し楽

しそうにはしゃぐ一人の少女の姿が写っていた。

『やったー！ 見て見て虎太郎ちゃん！ あたし、こんなにデッカいセミ捕まえたぜー！』

通院当初、毎週お決まりの診察と検査に嫌気が差して悪態ついてベンチでタバコをふかしていたところを突然『暇なら仕事で来てくれないお父さんの代わりに遊んでよー！』とベツタリ懷いてきた当時六歳の馴れ馴れしい少女。鬼ごっこをさせられ、肩車をさせられ、アイスやジュースを買ってくれと散々振り回され、挙げ句の果てには『お礼にお母さんに会わせてあげる！』と無理矢理腕を引いて全く用の無い内科入院病棟へと連れて行つた無邪気な少女。

少女が誘うその先には、父さんがずっと捜し求めていた女性の姿があった。驚いて啞然とする父さんの腕を、少女は嬉しそうに飛び跳ねてグイグイと引っ張る。その少女の瞳の色は母親と同様に赤く、髪の毛は風にたなびきキラキラと銀色に輝いていた。

『なっ、なっ！ あたしのお母さんって、すっげー美人でキレイだろー！？』

少女の名前は優歌。出産に耐えうる体力が無い事を覚悟で歌月さんが命懸けで産んだ、世界でたった一つの大切な宝物。そして、世界でたった一人の大切な私の義理の姉。彼女が二人を引き寄せた。運命の再会を手ほどきした人物、父さんを歌月さんの元へと導いてくれたのはお姉だった。もしもお姉がいなければ、もしもあの時父さ

んの前にお姉が現れなければ、二人は永遠に再会を果たす事は出来なかった。再び心を通わす事は叶わなかった……。

「……歌月の病状が日に日に悪くなるにつれ、アイツは譫言の様に優歌の将来を悲観して泣き言を漏らしてたな、もし自分がいなくなったらあの子はどうなるのか、自分と同じ障害を生まれ持つてしまつて、自分と同じ実の母親と共に暮らせない幼少期を過ごす事になつて、本当にこの先上手くやっていけるのか、将来幸せになれるのかつて、てめえの体の苦痛そちのけでボロボロ涙を流して泣いてたっけな……」

「……父さん……」

「……本当、強え女だったよアイツは、俺なんかよりも百倍も一千倍も強え女だった、正直、あの時の俺は身も心もボロボロでよ、奥井の策略で窮地に追い込まれ、積み上げてきたもん全てを失つて、拳げ句の果てには自分の体もボロボロになつてな、本音言つとな、自ら命を絶つ事まで考えてたくらい衰弱しきつてたんだ」

「……!?!」

「でも、そんな俺を再び歌月は救つてくれた、アイツがいたから俺は立ち直れた、アイツの死を乗り越えられたから俺は強くなれた、そして貴之達と共に再び逆境に立ち向かい、全ての因縁に決着をつける事が出来たんだ」

「……」

「そんな感謝してもしきれねえ愛する恩人が残していった唯一の忘

れ形見だ、別に歌月から直接養子に貰ってくれなんて頼まれた訳じゃねえ、アイツの事だ、俺からそんな話を持ちかけたって迷惑かけられないって断っただろうしな、でも俺は歌月がこの世の去った時、この俺の全てを懸けても責任持つて優歌を守る、幸せにしてみせるって決めたんだ、それが俺のアイツへの想い、俺なりのせめてもの恩返しなんだ」

「……お姉も、父さんを救ってくれた愛する恩人の一人……？」

「……かもな、もしあの時、俺が優歌と出会わなければ、俺と歌月が再会する事はなかっただろう、そしてあの時、俺が歌月と再び出会わなければ、今ここにいる俺はいなかっただろう、いや、それどころか今のこの平穏な生活も平和な日々も、決して訪れる事はなかっただろうな……」

「……それが、父さんがお姉を養女として迎え入れた本当の理由……」

「どうだ、納得出来たか妹君様よ？ それとも、これだけじゃこんなとても子育てに向いてねえぶっきらぼうなクソ男が人様の娘を我が子同様に育ててる理由としては不十分か？」

「……ううん、そんな事はない。そう言いたかったけど、胸がいつぱいになって言葉に詰まった私は笑顔で首を横に振り、気持ちを込めて父さんの胸目掛けてボールを投げてその問い掛けに答えた。ボールをキャッチして私の顔を見た父さんもニヤリと笑い、いつもの悪ガキの様な明るい表情に戻ってこちらにボールを投げ返し……。」

「……いったあああい！！！！」

「オイオイ何だ何だあ？　今は八分の力でしか投げてねえぞ、これ程度の球で大袈裟に痛がつてんじゃねえよ、だらしねえなてめえは本当に」

「ハチブ！？　今の豪速球が八分！？　じゃあさっきまでの球は一体何分だったのよ！？　マジでグローブはめてる意味ない、五本の指どころか手のひらの骨まで砕かれちゃう、もう拷問だよコレ、児童虐待だよ！」

「やれやれ、おめえが歌月や優歌みてえな強え女になれるのはまだまだ先の話みたいだな、実のところおめえが生まれてこれたのもその二人のおかげだったのによ」

「……えっ？　何それ、どういう意味？」

「『そういう』意味だ、これが優歌がおめえの姉貴になった経緯、ここまでが今、おめえに話してやれる過去の『真実』だ、後のわからねえ話はてめえの足りないオツムで一生懸命悶々と妄想するんだな、これは俺からの『宿題』だ」

「……何よ、宿題って……」

「それと！　こうして一つ疑問が晴れたからにはウジウジ引き籠もってしてねえで明日からは元氣良く学校行けよ、それがおめえに『真実』を話してやった俺からの等価交換条件だぜ」

「……こつちの了承も無しに交換条件とか、相変わらず身勝手っつか理不尽っつか……」

「なら、明日の朝までずっと俺様の魔球を受け続けるか、ああん！  
？ 交換条件としてその左腕一本頂くぜ、学校行くのと片腕生活、  
てめえの望みはどっちだゴラァ！！」

「行きます行きます！ 明日からちゃんと学校行きますーすー！」

「ようし、それでいい、合格だ！」

父さんはそう言うと、私が投げ返したボールを背面キャッチしてニヤニヤと笑っておちゃらけてみせた。その表情はまるで悪戯好きの少年の様な爽やかな笑顔。娘である私ですら今まで見た事の無い、あの写真の歌月さんみたいな陰り一つ無い満面の笑みだった。かく言う私はこれまでの疑問が晴れて胸の支えが取れ悪い気分ではなかったが、新たな『宿題』を押しつけられて未だ頭の中は混乱したままだった。

『……私が生まれてこれたのは歌月さんとお姉のおかげ？ どういう事？ そういえば今の父さんの話の中に母さんの名前って一度も登場しなかったなあ、当時母さんと歌月さんは面識あったのかな？ つーか、自分の夫の心の中にこれだけ大きな存在の女性がいて、母さんは知っているのかなあ……？』

何か更に複雑な心境になってきた。これは父さんだけじゃなく母さんにも突撃取材する必要、アリ？ でも、それは何か禁断の扉、パンドラの箱を開けてしまうのと同じくらいの恐怖を感じる。もし母さんが歌月さんの存在を知らなかったら、浮気やら不倫やら不健全



な事柄が大嫌いなあの人はぜっーたいブチ切れて夫婦喧嘩になるに決まってる。また訳わかんない改造銃やロケットランチャー撃たれたらたまったもんじゃないよ。どうしようかなあ、いづみさんに相談してクツシヨン役になって貰おうかなあ……。

「しかしまあ何だ、おめえも知らねえ内におめえなりに成長してきてんだな、随分と『良い球』を投げる様になったし、俺の『全力投球』もしっかり受け止められる様になった」

「だからー、私は別に野球選手になんてなりたくないし……」

「チツ、わかってねえな、体力の事言ってるじゃねえよ、『精神的に』って話だ、何もキャッチボールは『ボール』じゃなくても出来るんだぜ」

「……？」

「ふう、やっぱりわかってねえな、ここら辺はまだまだ頭がガキ、こんなんじゃあ心にプリキュアの種が芽生えるなんてのはまだまだ先の話だな」

「オイちよつと待てえー！ アンタまさか低年齢女子向けアニメまで視聴してんのかあー！？」

「ハピネストーンを集めておとぎの国を救うなんて夢のまた夢」

「日曜朝からテレビ釘付けかあああー！？ せめて見るならドラゴンボールとかワンピースにしてえー！！」



そうだよ、私がずっと心の中に抱え込んでいたもう一つの疑問。例え母親が亡くなったとしてもお姉にはまだ実の父親の存在があったはず。なのに、どうしてお姉は渡瀬家の養女として籍を移す事が出来たのか。普通なら有り得ない話だ。両親共に亡くなっているのならわかるが、お姉の話や新作さんやいづみさんの話からも父親に関しては何一つ語られていない。一体、その人と父さんの間には何があったんだろうか……？

「……ねえ父さん、お姉のお父さんってどんな人だったの？ もちろん会った事あるんでしょ？ 父さんとはどんな関係だったの？そして、今もその人は……？」

「……………」

「……父さん……？」

今も元気なのか、どこかで生きているのか、他にも色々と聞きたい事がたくさんあったが、私はそれ以上喋る事が出来なくなってしまった。お姉のお父さんの話を持ち出した途端、一瞬にして父さんの雰囲気が一変したからだ。まるでここから先は踏み込めないバリアを張られた様に張り詰めた空気が周囲を漂い、その目つきは先程まで歌月さんとの思い出話をしていた時の穏やかなものではなく、明らかに敵意を持った鋭く冷たいものに変わっていた。

「……父さん、あの……」

「……蓑田、優人……」

「……えっ？」

「……『悪意』に取り憑かれた、哀れな男の名前さ」

「……アク、イ……？」

その時突然、携帯電話の着信音が私達の会話を遮った。父さんは面倒臭そうに舌打ちをしてズボンのポケットから電話を取り出すと、その着信の主と会話を交わし始めた。仕事関係者と話しているとは思えない馴れ馴れしい言葉使いにかつたるような顔、それから察するに相手はどうやら勝手知ったる人物っぽい。

「……誰から？」

「いづみだ、大事な話があるから仕事帰りに合流して久し振りに外で晩飯食わねえか、だってよ」

「いづみさんが？」

「とても大事な話だから絶対に来いって念まで押されたぜ、何だアイツ、アイツが俺に飯奢るなんて珍しいな、電でも降るんじゃないかこりゃ？　しかもおめえらガキ共は留守番で麗奈とあづみの姉ちゃんまで誘ってるつつし、一体何だっつてんだ大事な話ってよ」

「……大事な話……」

私はそれが一体何を表しているのかすぐに察しがついた。それはきつと昨夜の話、新作さんの病状の件だ。父さんはまだ知らない、一つ屋根の下で寝食を共にし、兄弟同然で育ってきた大切な親友の命の炎が、あと僅かの時で消え去ってしまう事を。あづみさんまで誘った理由は多分、仕事で海外にいる啓介さんの代理か、あるいはその話をするのに心細かったいづみさんがお姉さんを頼ったのか……。

「晩飯の時間か、そういや長話しすぎてすっかり日が暮れちゃったな、俺はこのままいづみとの待ち合わせ場所に行くから、おめえはグローブとボール持って家に帰って優歌と翔太の飯の準備してやれよ」

「……………うん、わかった……………」

「ふう、何か急にしみつたれた気分になっちまったな、おめえとの歌月の件といい翔太との貴之の件といい、あまり死んだ人間の過去の話はしたくねえもんだぜ、何か昨日も危うく死にかけたって新作が電話で言ってたし、親しい輩に先立たれるのは決して気分の良いもんじゃねえからよ……………」

「……………」

「それと、今さっき俺が言った事は忘れろ、ただの独り言だ、気にするな……………、明日はちゃんと学校行けよ、いいな、逃げんなよ」

それだけ言っと、父さんは私にボールの入ったグローブを渡して背

を向け公園の出口へと歩いていった。両手をズボンのポケットに突っ込み俯き加減で歩くその背中では少し寂しげで、この後いづみさんから知らされる非情な現実をすでに予感している様にすら見えた。

『……………逃げんなよ……………』

父さんの最後の言葉が胸に刺さる。確かに、この人はどうしようもなく身勝手に理不尽でいい加減な人間だけど、歌月さんの為にお姉を守り、貴之さんの為に翔太を育て、心半ばで倒れていった仲間や親友、愛する人達の様々な遺志を背負って生きている人なんだと、今日話してみても少し実感した。この人は、どんなに辛い現実に対しても目を逸らさずに逃げてなんていない。

ならば、私だって逃げてちゃ駄目だ。しっかりと現実を見つめ、それを受け止める強さを身に付けなければならない。明日はちゃんと学校へ行こう、そして翼と会おう。いつも通りの会話が出来るかどうかわからないけど、でもいつまでも逃げ回っている訳にはいかなんだ、もっと辛い現実がこの先待ち受けているのかもしれないんだ、もっと強い人間にならなきゃ駄目だ。でないと、父さんはまだ私に『真実』の全てを語ってはくれない……………。

「……………蓑田、優人……………」

初めて判明したお姉の父親の名前。忘れろと言われたけど、忘れられない。あの父さんの殺意に近い尖った雰囲気からして、お互いの関係は決して穏やかなではない、何か因縁めいた危険なものなのだろう。ただ一瞬だけ、憐れむ様に悲しげな目をした父さんの表情

が、なぜか脳裏に焼き付いて離れなかった……。

## 第81話 逃亡者

「ついに、ついに待ちに待ったこの日が来たでえ！ 来たるべき二週間後の女子サッカー日本代表戦に備えて、ウチは明日からチーム合同練習が行われる現地の合宿先へといざ出発進行や！」

「へえ」

「全国民を狂乱させる新たなスーパーヒロイン誕生の瞬間、全人類を震撼させる強く美しきファンタジスタの武勇伝！ 次期サッカー女子日本代表不動の司令塔・松本翼伝説の第一章、それが明日ついに、ついについに幕を開けんねん！ 夢と希望に満ち溢れたまだ見ぬ黄金の海原へと繰り出すウチの大冒険劇は、今まさにここから、全てここから始まんのや！」

「ふうん」

「聞こえるでえ聞こえるでえ、ウチの登場を待ち望んでいた全国民の期待の声が！ ウチを称えるスタンドの蒼きサポーター達の歓喜の声が！ 栄光を掴めと、頂点を掴めと、ウチのこの神の右足が華麗なる勝利を掴めと蠢き叫ぶうううう！！」

「そうなんだあ、それはそれは大変ねえ、どうかせいぜい頑張ってきてねえ」

「……ってか千夏、オマエちっともウチの話聞いてへんやろ？」



何か全っ然興味無いけどそうらしいんだって。そういえばそんな話してたっけ以前。六月に入ってこれからどんどん蒸し暑くなってるっていうのに、そんな中をわざわざ汗まみれになって練習しなきゃいけないだなんて翼も大変よねえ？ 何か一人で熱くなっちゃってもうお疲れ様って感じ、せいぜい熱くなり過ぎて熱中症にならない様にお気をつけあそばせってとこかしら。

まあねえ、彼女も必死みたいだから相手をしてあげたいのはやまやまでもあるんだけど、残念ながら今はアタシもとってもVery busyなのよねえ。六月といえば衣替え、やつと重苦しい冬服のブレザーから解放されて、これからは今まで以上に腕や脚や胸元とか肌が露出しやすくなる、男の子達の視線が気になる薄着のSeason到来でしょ？

今のうちにインターネットや芸能人のブログで流行りのNewコスメをチェックしてスキンケアをしとかないと、この先のHotなSummer timeで他の女の子達に一歩リード出来ないもん。夏の恋のBattleはもう始まっているのよ。絶対に負けられない戦いがそこにはあるの。だから構ってあげられないのよ、ゴメンね？ ああゝ忙しい、忙しいったらありやしないわ、全くもう。

「何か一人で空回りして虚しいピエロみたいやないかウチ、オイコラ千夏！ ちゃんと真面目にウチの話を聞かんかい！」

「聞いている聞いているうゝ、聞いているってば、超聞いているうゝ」

「嘘つけこのどアホ！ 何が『聞いている聞いているうゝ』や！ 聞いている言うてオマエの視線はさっきからケータイの画面に釘付けになつとるやないかい！ 人と話す時は相手の目え見て話せて親や教師から習わんかったんか、このボケツ！」

「そうよねえ、ホント梅雨って嫌な季節よねえ？ 何かスツゴいジメジメしてて、ロンドンと違って雨がCrazyにザーザー降るし、じっとしていると体中にカビが生えちゃいそうでホント不快よねえ？」

「……やっぱり話聞いてへんがな、飄々と人様トコトンおちよくリやがって、オマエはホンマに……」

しかしこの国って何でもバカみたいに雨が降るのかしらねえ？ 天気予報見ても梅雨前線がどうか停滞気圧がどうか、あと台風とかもウザい。わざわざ日本に向かって飛んでくる理由がわからない。週間予報で全国丸一週間雨マークとか付いてるとホント気分が悪くなるわ。そんな時は決まってロンドンが恋しくなっちゃう。だってあそこの雨はこと違って、とてもステキでRomanticなんだもん。

「日本の四季の移り変わりってみんな素敵でBeautifulだけど、どうしてもこの季節だけは全っ然好きになれないわね、カワイイブーツ履いてもすぐグチョグチョになって中が蒸れるし、ファンドンでもすぐ湿気や汗で簡単に崩れやすくなるし、オシャレするには最悪の季節よね、ホントもうイヤになっちゃう」

「……あのなあ千夏、余計な事かもしれんだけど一言言わせて貰ってええか？ オマエのそのファッション至上主義は今に始まった事じゃないやろうけどな、オマエかて一応は陸上選手としてオリンピックク目指しとる御大層なご身分なんやろ？ せやったらこうしてウチが先に国際舞台デビューの悲願を果たしてやで、少しは焦ったり悔

しがったり『なにくそっ!』って奮起したりせえへんのかいな?  
あまりに人生計画がお気楽ご気楽過ぎるとちやいまつか、オシヤレ  
に忙しい千夏お嬢はん?」

「Why? どうしてえ? だつてアタシはFootball p  
layerなんか全然目指してないし、それにアタシはFootb  
allなんて全然興味ないし、そもそもやってるスポーツが違うの  
に先越したとか自慢されても全然筋違いな話で『ハア?』って感じ  
だし」

「イヤせやからサッカーに興味有る無しの問題やのうてな、つまり」

「それに第一、Footballっていうのは本場のGreat B  
ritainでは紳士が嗜むスポーツなのよ? Ladyが淫らに  
足を振り上げるなんてみつともないわ、本来は淑女がするスポー  
ツなんかじゃないの、邪道も良いとこだわ」

「イヤイヤせやからサッカー批判や風習はええとして同じスポーツ  
アスリートとして何かしら触発されるもんがないんかって聞いとん」

「それともなあに? 翼はそんなにアタシに自慢がしたいのお?  
『キイツー!』って地団駄踏んで悔しがって欲しいのお?」

「イヤイヤイヤせやからあのなら……」

「……いやあ〜ん! くう〜やあ〜しい〜い〜! 超悔しいっ!  
翼つたらもおう妬けちゃうわ、スッゴいジェラシー感じちゃう!  
アタシより先に世界へ羽ばたいていつっちゃうなんて、翼ってスッ  
ゴいのねえ〜! そのスコティッシュテリアみたいに短くてカワイ  
イ神の右足、アタシも欲お〜しい〜い〜っ! ……え〜と、コレで

いい？ どう翼、思う存分に満足して貰えたかしらあ？」

「……もうええ、オマエをまともに相手したウチが間違っと思った、もうウンザリや……」

ウフフ、わかれば良いのよわかれば。そうよ翼、アナタは完全に相手を間違えてるわ。それどころか自分とアタシの立場の違いを全然わかってなさ過ぎね。教えてあげるわ、可哀想な井の中の蛙さんに、アナタとアタシの目指すレベルの高さの決定的な差ってヤツをね。

Footballと陸上競技じゃ選手個人に問われる能力やセンスがまるで違うのよ。確かにFootballも各個の力が問われるスポーツだとは思うけど、団体競技っていうのはチームワークが全ての勝敗を左右する大切なキーポイント。それに対して陸上競技は個人の能力が全て、誰にも負けない強靱な力を身につけないと勝てないの。まあ、リレー競技なんかは別としてだけどね。

相手より脚が遅ければ勝てない。相手より高く跳べなきゃ勝てない。ミスをしたって誰も助けてなんてくれないし、周りのライバル達は容赦なく心理的に揺さぶりをかけてくる。フィジカルだけじゃなく孤独に打ち勝つメンタルが備わってないとあつという間に置き去りにされるシビアな世界、アナタの大好きなワーワーキヤーキヤー仲良しこよしスポーツとは全然訳が違うのよ。

それに第一、この日本国内でfootballやってる同世代の女の子ってどれくらいいるのかしら？ ここ数年、日本でも結構Footballがブームみたいだからそこそこぐらいいいるのかもしれないけど、それでも陸上と比べたら微々たるもの、全く話にならない程度なんじゃないの？

Footballと陸上じゃ競争率だつて全然違うわ。確かにFootballも世界中で競技人口の多い方のスポーツかもしれないけど、陸上のそれとは雲泥の差、天地の差よ。そんな激戦区の中で簡単に一つの国の代表選手になんてなれない、なれる訳が無いわ。更にその中でも頂点を極め栄光を掴める者はほんの僅かだけ、全人口六億人の中から神の一握りに選ばれた人間だけよ。

ねえ、アナタにわかるかしら翼？　それが『代表二十三人の中に選ばれれば別に控えても良い立場』であるアナタと、『たった一人であったた一人しか立てない世界の頂点に挑む立場』であるアタシとの絶対的なレベルの違いって事を。えっ、これでもまだわからない？　ならもつとわかりやすく簡潔に説明してあげるわ。

つまり、そんな至高の極みを目指す別次元の存在であるアタシに、アナタごとき玉蹴りピエロが偉そうに楯突くなんて勘違いも良いところ、身の程知らず、恐れ多い、百年早い、一昨日来やがれ、雑魚が騒ぐなこの犬野郎、豚は糞でも食ってさっさと寝てろFuck off！！　って事なのよ。

陸上競技とは人生を生きていく事と一緒に。そんなHardな競争社会で生き残っていくには、日々の飽くなき鍛錬と努力と忍耐が必要ね。でもそれにだつて限界があるわ。だつてアタシ達は人間だもん。毎日毎日走って跳んで、練習ばかりしてたら退屈で退屈で頭がどうになっちゃいそう。

体力だつて保たないわ。もしそれで大きな怪我でもしたらそれこそ一大事よ。継続に一番大切なのは根強い意思と栄養補給、そして何と言つてもリラクゼーションね。心にも栄養が必要不可能なの。どんな事をやり遂げるにもやっぱり、やってて楽しくないと続けないものっ！

「だからアタシは練習以外の時は思いつ切り遊んで思いつ切りオシヤレして思いつ切り恋愛して、ママと神様から与えて貰った美貌を武器にこのWonderful lifeを心ゆくまでEnjoyするのっ！ 誰もアタシを止められないわ、誰一人アタシに勝つ事なんて出来ないのよっ！ アハハ、アハハハハハッ！」

「……何かもうぎょうさんツッコんでやりたいところ満載やけど、最後はエラく強引にご都合主義な話になってへんかオマエ？ 確かにウチとオマエは立場どころか頭の構造も色々違うみたいやな、ってか一緒にして欲しくないわ、どうぞ勝手にどこにでも迷走爆進してくれや、誰もオマエを好き好んで止めたりせえへんで……」

うん、よろしい！ わかれば良いのよわ・か・れ・ばっ！ っていうか、那奈と小夜はまだ解放されないのかしらあ？ アタシ達のクラスなんてもう十分前ぐらいにチャイムと同時にホームルームも終わって、他の生徒もみんな帰っちゃって教室にはアタシと翼しかいなくなっちゃったっていうのに、あそこの担任って無駄に話が長いみたいなのよね。迷惑だわ、こっちまで帰りが遅くなっちゃうじゃない！

「お待たせー！ 翼、千夏、遅くなってごめんねー！ あたし達のクラス、やっと全部授業終わったよー！」

「まあーっ、二人とも遅おーい！」

「コラ小夜！ オマエんとこのクラスは相変わらず終わるのが遅すぎるんじゃ！ 誰もおらなくなっただ教室でオマエら待つとるこっちの身にもなれやこのボケッ！」

「えー？ 何であたしが怒られるのー？ 遅くなつたのは先生の話が長くなつたからであたしのせいじゃないよー！？」

「うつさい黙れ言い訳なんぞは要らんのや！ オマエのせいやろうが誰のせいやろうがそんなもん関係あらへん！ ウチは今な、この燃えたぎる明日への情熱と何とも言えんやり場の無いストレスに立って、様々な感情が入り混じつた何かよう訳わからん変な怒りに苛立って、何かもうイライラするってかムカムカするってかカリカリするってかオマエの顔見たら途端に腹が煮えくり返ってイライラしてきたんじゃゴラァ！」

「ねーねー、何で『イライラする』って二回言つたのー？」

「ええい黙れ黙れ黙れ！ 大事な事やから二回言つたんや！」

「でも『イラ』なら七回言つたよねー？ 『苛立って苛立ってイライライラ』って！ あつ、でも最初に『要らん』って言つたら八回かなー？ イランイラダッテイラダッテイライライライラー、ってあれー？ 今あたし『イラ』って何回言つたっけー？」

「つつつぐああ腹立ついちいちグダグダじゃかあしいんじやオマエはあー！ ホンマにイライラしてくるわ、そないなもんどうでもええから黙ってウチの話を聞けえー！ ええかあ、ウチは明日からついに合宿突入や！ わかるか？ この意味がオマエにわかるかあ！？ 世界の歴史が変わんねん！ この松本翼様の神の右足で、日本サッカーの新たなページが歴史に刻まれんねん！ わかるか、わかるかあ！？ オマエのパッパカパーのボケ頭にこのウチの偉大さがわかるかあ！？」

「うつん、ゼーんぜんわつかんない」

「……ギギギッ……！ 千夏に続きこないアホの子にまでこの屈辱……！ ほならわかるまで延々と言い聞かせてやるわこのどアホめえ！！ 帰りが遅うなった罰として、オマエは今からウチの嫌みと愚痴と自慢話とサッカーうんちくフルコース二十四時間耐久独演会の刑に処したるから、その耳の穴かつぽじって一言漏らさず脳裏に焼き付けろおおおおお……！！」

「うわーん！ 今日の翼、何かおかしいよー！？ テンション変だし目つき血走ってるし何かスゴい怖いよー！ イヤだよー、うるさいよー！ 那奈、千夏、助けてー！」

「……変ね、確かに変だわ。うつん、アタシが変だと思ったのは翼のこの壊れたテンションじゃなくて、この二人のいつものおちゃらけ漫才をジッと眺めているだけの彼女のテンション……」。

「……なうなっ！ ねえ、那奈ってばあ？」

「……えっ？」

「どうしたのよお？ さっきから元気無くボーッとしちゃってさ」

「……い、いや、あの、別に、うつん……」

「……うつん、やっぱり変ね。いつもだったらすぐ二人の間を割って翼に『五分黙れ』とか言って怒ったりするのに、なぜか今日は一言



も喋らず黙り込んだままそこに立っているだけ。明らかにテンションが低い、様子がおかしいの。今日どころじゃないわ、何かこの前学校を休んだ時からずっとおかしい。ちょっと風邪ひいて体調崩したって言ってたけど、ホントにそんな程度の理由だったのかしら……？

「もしかして、まだ風邪治ってないのお？ 熱っぽいのお？ もし具合悪いんだったら保健室行かう？」

「……う、ううん、大丈夫、何ともない、何でもないから……」

「でもねえ……、ん？ ウフフ、じゃあアレかしら？ もしかして翔太君とケンカした？ ダメよお仲良くしなきゃ、せつかくお互いSteadyな仲になれたんだからさあ」

「違うつて！ 何でもない、本当に何でもないって！」

「……あら、そお……」

……なあゝんか機嫌まで悪いわねえ。目も虚ろ。じゃあアレかしら、人には言えないアノ辛い日が来ちゃったのかしら？ まあ、女の子にはそういう日が来るのは仕方の無い話なんだけど、今まで那がこういった表情をあからさまに見せる事ってあまり無かったから妙に気になっちゃうのよね。

そんな簡単に風邪なんかひいて学校休むタイプじゃないし、色々悩み事あっても落ち込んだりじゃう様な弱い子でもないし、勿論、毎月のアノ苦しさに負けて寝込んだりじゃう様な痛がりでもないし。人間なんだから生きてて色々辛い事もあるんだろうけど、これまで様々な出

来事に先頭立つて頑張ってた姿を間近で見てきたから、アタシ尚更  
変に不安になっちゃうのよね……。

「ええか小夜！ イタリアのセリエAはそりゃあもう最高やでえ！  
昔ウチがイタリアにいた頃はようオトンがスタジアム連れて行っ  
てくれてなあ、ミラノにあるサンシーロ・スタジアムはACミラン  
サポーターからはそう呼ばれとるけど同じホームのインテルサポー  
ターからジュゼッペ・メアッツアって呼ばれとんねんでどうやホレ  
ホレめっさオモロい話やるおいつかはウチもあそこでプレーを」

「ヤダヤダもうヤダー！ さんしーろとかじゅぜなんとかとか言わ  
れてもあたし全然わかんないし話もちつとも面白くなーい！」

「スペインのリーガエスパニョーラも最高や！ リーガ言うたらそ  
りゃやつぱりバルサとレアルやクラシコやでクラシコ、クラシコ言  
うたらそりゃメッシにシャビにインiestaにカカにクリロナにイグ  
アインに出てくる選手は右も左もみんなスーパースターばかりや  
ファンタジスタ天国や年俸何億円オーバーだらけやスペイン経済火  
の車やってのにこの二つのクラブは一体どれだけ金持ってんねや闘  
牛も裸足で逃げ出すでサグラダファミリアも驚いて月まで飛んでく  
っちゅうねんこれホンマに」

「うるさいうるさいうるさーい！ バジリコとか飯とか栗モナコと  
かどうでもいいよー！ ねー那奈、翼があたしに抱きついて全然離  
してくれなーい！」

ああーあ、ついに始まっちゃったわね、翼の大量無差別弾幕爆撃が。  
一体いつ息継ぎリロードしてるのかしら、このストッパーの壊れた

爆音暴走マシンガンは？ スゴい肺活量、ちよつと羨ましいわ。でもうるさい、マジうるさい。いい加減この不快電波を何とかしないと周辺の機材に支障が出ちゃうわね。ケータイ圏外になっちゃった。はぁーい那奈ちゃん出番よお、そろそろこの超小型違法周波数アンテナをいつもの様に景気良くへし折ってやって下さぁーい！

「お願い那奈、助けてー！」

「……………」

「………… 那奈？ ねー那奈、那奈ってば！ お願いだから助けてよー！」

「………… えっ？ あっ、うん、そうだね……、ねえ翼、小夜も嫌がつてるしもうやめてあげなよ…………」

「アホかつ！ やめるかボケツ！ 小夜だけちゃうぞオマエもや那奈！ どいつもこいつも束になってウチとオトンの誇りであるサッカーをケチヨンケチヨンに貶してくれよってからに、オマエのそのノータリンな頭にも徹底的にこのスポーツの知識と素晴らしさってもんをザックザク植え付けて、スカパーやWOWOWに加入して毎日試合中継見いへんと発狂するぐらいのサッカー星人に改造したるやさかい、覚悟せいやゴラァ！」

「……………」

「オトンは言うつつたで、サッカー好きに悪いヤツはおらへん、サッカー好きは争い事なんてせえへんってな！ サッカーを学ぶ事はこの世界の情勢を学ぶ事と一緒に、サッカーを好きになる事はこの

星全ての人間を好きになる事と一緒にや！ サッカーの輪こそ平和の輪、この世の全人類がサッカー好きになれば戦争なんて全部なくなるんや！ それがウチが目指す理想の世界、それこそがオトンが夢見る理想の未来像なんやあ！」

「……新作さん……」

「……ん？ オ、オイ、何やその顔？ ウチ今何か変な事オマエに言ったか？ 急にウチから目え逸らしてそないシヨボくれた顔すんなや！ 唐突にベツコリへこみよって気味悪い、いつものオマエとちゃうぞ、何やどないしたんや？」

「……あれえ？ いつもならここで那奈の容赦ない制裁パンチや断罪チヨップ、一刀両断『悪・即・斬』ブラジリアンハイキックが次々と振りかざされて翼真っ二つ、事情を知らない第三者が見たらどう見ても『デカい女子高生が幼稚園児を虐待している』にしか見えないう兒童相談所真っ青の大惨劇が展開されるはずなのに……」。

「……ハハアンそうかいなそうかいな、オマエあれやな、明日からウチがいなくなるんがめっさ寂しいんやな？ 何や何やそうかいな心配やなあ、たかだか二週間程度の不在いうてもその間のオマエの様子が知れなくなるんはちよいと心残りやわ、オマエらホンマにウチがおらなくなって大丈夫かいな？ 寂しいからって夜泣きしたらアカンで？ 切ないからって後をついて来たらアカンのやで？ まあ、ついて来たくてもオマエら程度の技量じゃとてもウチみたいに一国の代表に招集されるなんぞ夢のまた夢みたいな話やけどなあ、ウツヒツヒツ！」

「……………」

「……せやから何やねん!? 何でさっきからずっと俯いて黙りっぱなしなんやオマエは!? オモロかったらゲラゲラ笑えや、つまらんかったらいつもみたいにツツコメや! 痒っ、ああ痒っ! 体中にじんましんが出るてくわ! 何や、しんどいんか? 腹でも痛いんか? 病気か? 死ぬんか? 余命僅かなんとちゃうか? 今からでも遅うないから病院行った方がええんとちやいまつか、死相の出とる那奈お嬢はん?」

「…………ごめん……………」

「……ハア!? イヤイヤイヤイヤ、何でえ!? いや、あの、えっ、ええっ!? 何でや、何でえ!? わからん、もう訳がわからん! 何で、何でオマエが謝るん!? ウチは別に何も怒ってへんし謝れなんて言うてへんし……………」

「……ダメね、何か妙なムードになってきちゃった。これ以上二人を絡めせると良くない、スゴく嫌な予感がするわ。那奈はこんな調子だし、翼もそんな彼女にスゴくイライラしてる感じ。このまま放つといたら間違いなくRed zoneに突入、マジでケンカになっちゃいそうなシチュエーション。マズいわね、何とかしてこのギスギスしたを空気を紛らわせないと、とつてもマズくて危険がDangerousだわ。」

「よぉーし、ならばっ! 今日のところは調子の悪い那奈に代わって、アタシがみんなのペースメーカーになってあげないとね! こんな空気になっちゃったのも少しはアタシに責任があるのかもしれない。えっ? 翼がイライラしてるのは全部アタシのせいですって?」

「What? Why? I don't know! 何の話?」

アタシそんなの全っ然わっかなあゝい！

「ハイハイそこまでえゝ！ 翼、それだけ喋ればもう充分気が済んだでしょ？ だったらそろそろ那奈と小夜を解放してあげたらどうかしらあ？ 二人とも担任の長つたらしいお話聞かされて参つてるんだからさ、ねっ？」

「うっさい千夏オマエは黙っとけ！ オマエがウチの話を聞かんかった身代わりとして、コイツらにはまだまだ喋り足りん話がぎょうさんあんねん！ ええかコラ小夜、本題はこっからや！ 次はプレミアリーグ各チームの勢力と歴史についてやな……！」

「Premier？ あら、随分と懐かしい響きじゃない？ そういえば昔ロンドンに居た頃、パパが一度だけHighburyまでFootballの観戦に連れて行ってくれた事があつたわ、あの年のあそこのホームのチームってスゴい強かったのよねゝ！ Thierry Henryって言うFrenchの選手がもう速くて上手くてカッコ良くて超ビックリしちゃったのを覚えてるわ！ 今はHighburyから別のホームグラウンドに移つたって聞いてちよつと残念だけど」

「……ハ、ハイバリー？ って事はつまりアーセナル！？ オ、オイ待てコラ、オマエまさかその目で、生で、間近で、全盛期のティエリ・アニリのプレー見たんか！？」

「プレー中だけじゃないわ、他にも色んな選手をスタジアム以外で見た事があるわよお？ Steven GerrardにFrank LampardにRio FerdinandにAlan Shearerに……、あつ、そうそう！ DavidとVicto

riaが子供達と家族揃って仲良く手を繋いで歩いているのも見たわ！ アタシがママと一緒にいた時、偶然Victoriaがママのお店へshoppingしに来てね、二人にハグされてついでにサインまで貰っちゃったのおゝ！ その後、二人を追いかけていくパパラッチの数がおもうスゴくってスゴくって超ビックリしちゃったのも覚えてるうゝ！」

「……ジェラード！？ ランパード！？ リオ・ファーディナントにアラン・シアラー！？ ってかちよつと待てえ！ デデデ、デイヴィッド！？ デイヴィッドとヴィクトリアやお！？ まさか、オマエまさかまさかまさか、ホンマにベツカム夫妻と生で会ってサイン貰たんかあ！？ ホンマにオマエ、ベツカム様の直筆サイン持つんのかあ！？」

「そんなに驚く事？ 普通でしょ？ だってアタシはBabyの頃からずつとロンドンに住んでた訳だし、それに何せアタシは世界有数のファッションデザイナー・三島千春と世界ロードレースチャンピオン・三島勇次朗の娘なんだもん、スーパーセレブ同士がこうして引かれ合うのは必然の運命じゃない？ ホントはアタシ、あの時Victoriaのサインだけ欲しかっただけなんだお、何か良くわかんないけどDavidまでニコニコ笑ってサインしてくれたのよね、頼んでもいないのに何でかしらあ？ きつとアタシのあまりの力ワイさに魅力されちゃったのね、だったら仕方ないわよね、別に悪い気はしなかったし、Good looking guysにチャホヤされちゃうのはこんな美貌に生まれてきてしまったアタシの罪過ぎる宿命なんだものおゝ！」

「……オ、オ、オマツ、オマエという女はホンマに……！ ウチかてイタリア居た時はスタンドの人ゴミからチラツとデルピエロ見れただけやっちゅうのに……！ ウチにとってベツカム様は神様やぞ、

ウチが理想像とするスーパーレジェンドやぞお！ あんな神的セクタリング上げたい、あんな神的フリーキック蹴りたい思うて毎日右足痛くなるまでボール蹴って練習しとんに、それをオマエ、よくも……！」

「あとさあ、随分とEasyにプレミアプレミアなんて言ってくれるけどさあ、正式な名称は『Barclays FA PREMIER-SHIP』って言うのよ？ だってScotlandのFootballリーグも『プレミアリーグ』って言うんだから、ただプレミアだけじゃどっちの事かはつきりと区別がつかないじゃない？ EnglandとかScotlandとか名称の頭にチョンとつければ良いってもんじゃないの、それに第一『Soccer』って何よ？ 『Football』でしょ『Football』！ 日本のはファンはもうちよつとEnglishについても熱心に勉強すべきよね、いい事？ 『ふれみや』じゃないの『Premier』、『いげりす』じゃないの『Great Britain』、『United Kingdom』なのよ、Understand？ オワカリデスカー、東方島国のチョンマゲサムライのミナサーン？」

「……………」

「で、翼はアタシに一体どんな『ぶうれええみいあ』の『るえええじえんど』を教えてくれるのかしらあ？ スッゴい楽しみだわ、ねえねえ早く教えてよお、黄金の国ジパング代表のサッカー博士さあん？」

「……………わざとらしい舌巻き発音しよってからに、オマエかてどっから見ても完全に日本人やろが……、もうええ、降参や、オマエの前でうつかりプレミア云々ほざいてしもうたウチの大失態やわ……………」



はあゝい論破完了、一丁上がりゝ！ んもおうチヨロいわね、ちょっと未熟な知識をボロったところをつついてやればすぐこれだもん。ホントFootball junkyって頭の中が単純明解でパ―プリンだから相手するのが簡単で楽だわ。偉そうにうんちく垂れてカッコつけてる日本の男の子達なんか特に。

ちよっとサッカー出来るくらいでユニフォーム着て外出歩いてるのとか見てるとスッゴいダサイわ。しかも何で他の国のチームのユニ？ 何で日本人がブラジル代表の黄色いユニ着てるの？ バカなの？ 死ぬの？ ヘディングのし過ぎで脳神経に支障が出るんじゃないかしら？ 何事もやりすぎは体に毒って事よね、若い男の子なんかはと・く・にっ！

えっ？ 何のやりすぎかって？ バカじゃないの！？ 死ぬの！？  
っていうか死ねっ！ アタシにそんな事言わせるなんて四半世紀早いわ！ これだから日本の男はキモいダサイクサイブサイYellow monkeyって言われるのよ！ エロ中年オヤジみたい  
にニヤニヤしてないで自重してなさい、このSUKEBE HEN  
TAI Fuckin' jap!!

「さあゝてと翼、もう気が済んだかしら？ よあゝし、じゃあもうそろそろ帰ろうよお？ アタシも待つてる間ずっと翼の相手してて疲れちゃった、那奈も小夜も久し振りにみんなと一緒に早く帰るおゝ！」

「うん！ 帰ろー帰ろー！ あたしも飯とか栗もなことが聞いててお腹すいちゃったー！ ねー那奈、早く帰ろー！」

「……ごめん、私、先に一人で帰る……」

「……ハア？　オイ、ちょっと待てって、何でえ？　何でやねんな那奈！？」

「えー！？　何で何でー！？　何で一人で帰っちゃうのー！？　ヤダヤダ置いてかないでよー！　ねー、ねーってば那奈ー！」

……Why？　What's happened？　もうホント訳がわかんない。那奈ったら、机の上に置いていたカバンを手に取るやアタシ達を避ける様にさっさと教室を出ていっちゃった。いつも心配で肌身離さない小夜の事まで置き去りにしていっちゃうだなんて……。やっぱアタシ達、何か彼女の気に障る事でもしたのかしら？

「……もう何やねんなアイツは、確かにウチもちとやりすぎたかもしれんけどもや、そない邪険に扱わへんでもええやないか……」

「別に翼が嫌であんな態度をしたんじゃないと思うけどなあ、きつと那奈にも色々と事情があるのよ、色々と」

「……ふう……、ああもうつまらん！　最悪の出発式になってしもたな今日は、せめて『頑張ってこい』の一言ぐらい欲しかったわ、虚しいなあ、ホンマ友達甲斐の無いヤツらやな、あの二人は」

「そんな事言っちゃダメよ、そんな憎まれ口叩くからみんな素直に見送ってくれなくなるの！　エールが欲しいならアタシが何度だってかけてあげるわ、翼、Hang in there！！」

……でも、やっぱりちょっと那奈が心配ね。あの様子だとかなりの重病よ、早急なカウンセリングが必要だわ。今度アタシのママ从那奈のママに相談して貰おうかしら？ 那奈のママ、まだ日本に居るみたいだし。おかげでアタシのママは飲み会の幹事や帰りの車の運転手とか毎晩グルグル振り回されちゃってるけど。ホント心配だわ、大した事じゃなければ良いんだけど。明日にはきっと彼女にも笑顔が戻ってくれる事を願わずにいられないわね……。

「……でもきつと、那奈ならきつと大丈夫よ！ そんな事より早く帰ろっ！ 今日はソフィーが他の用事で部活お休み、だからアタシも練習ズル休みしちゃうっつと！ 帰りにたくさん寄り道をして思いつ切り羽根を伸ばしたいわ、My best friendの翼ちゃん、もちろんアタシに最後まで付き合ってくれるわよねえ？」

「何も奢らんぞ？ むしろオマエがウチに何か奢れや、代表招集祝いつて事でな」

「OK！ 今日ぐらいアタシもガンガン太っ腹でいつちゃうわ！ ガストで何でも飲み放題、コーラもジュースもコーヒーマルキューも何杯飲んだって全然Don't worryよ！」

「たったドリンクバー一人分だけかい！ せめてケーキか何かセツトで付けろや、どんだけ意地汚い銭ゲバ女やこのどケチセレブめ！」

「だったら美味しいお肉をいっぱい食べさせてあげるわ！ 並でも大盛でも特盛でも卵にサラダ付けて何でも好きなもの食べて良いわよっ！ アタシ隣でお茶だけ飲んでるから」

「吉野家かいな！ しかもオマエお茶だけって、味噌汁でええから

何か食べ！　ウチ一人で食つとつたら何か恵まれへんひもじい子供が援助されとるみたいやないかあ！　オマエ、ホンマただけ守銭奴な泥恵比寿……！」

「……ヒツ！？」

「……ひっ？　オイ何や、どないしたん千夏？　オマエまで急にビクツとかしよつてからに……」

「……な、何か、背後に妙な殺気を……」

……アタシと翼がキャツキャツウフフしてたその時、まるで何かの呪いの魔術をかけられたみたいな、まるで藁人形に五寸釘を打ち込まれたみたいな、まるで邪悪な念力で心臓を鷲掴みにされたみたいなおぞましい悪寒をアタシの背後に感じたの……。

何か鋭い視線が背中グサグサ突き刺さってきて、全身がガタガタ震えてまともに立っていられない。命の危険すら感じるくらいの恐怖。何とか勇気を振り絞って恐る恐る後ろを振り向こうかと思つた時、目の前にいる翼の顔色まで見る見るうちに青ざめていくのがわかつたわ……。

「……やめとけ千夏、見たらアカン、振り向かん方がええ……」

「……何がいの？　ねえ翼、アナタからは見えてるんでしょう？　アタシの後ろに何がいのお！？　まさか貞子！？　富江！？　ジェイソン！？　フレディ！？　それともダミアン！？　ねえ何がいのよ、一体何なのよお！？」

「……そない生易しいもんやない、化け物や、教室の外から半身出してこつちを睨み付けとる怨霊がある、あれは嫉妬と憎悪の塊や、見たらアカン、触ったらアカン、危険過ぎるで……」

「……ひつ、ひいいつ!!」

「……でも、アイツの目的はオマエの命やない、ウチや、ウチの命や、ウチ一人が奴の犠牲になれば他の誰にも害は及ばへん……」

「……そんな、翼一人だけが犠牲になるなんて……、ダメよ、そんなダメツ！ 大切な親友を見殺しにするなんてそんな非情な真似、アタシには出来ないわっ！」

「ええねや、ええねやつ！ アレはウチがこしらえてしもうた化け物なんや、全てウチに責任があんねや！ ここはウチに任せとけ、オマエまで巻き込まれる事あらへん、あらへんのか……！」

「……翼あ……」

「ほな、これでサイナラやな千夏、どうかオマエだけは無事に愛する家族の元へ帰ってくれや……！」

……翼はそれだけ言うと、何かを覚悟した様に溜め息を一つ吐いてアタシの横を通り過ぎていったわ。ごめんなさい翼、アナタを生贄にして逃げるアタシをどうか許して。例え何があろうとアナタは永遠にアタシの大切な Best friend よ。でも怖い、怖いよ！ アタシはまだこの恐ろしい怨霊に呪い殺されたくないなんてないのよ……!!

「……おい綾、そないなとこ突つ立んとらんと早よ帰ろう、勿論二人きりでな、今日は久し振りにオマエの帰り道の方に付き合つたるで」

「えっー！ 本当にー！？ でもそれって翼にとつて遠回りになつちやわない？ 家に帰る時間が遅くなつちやわない？ それに今、一緒に帰るって約束してた千夏ちゃんに悪い事になつちやわなあーい？」

「……どうせ千夏と一緒に帰っても色々寄り道とかして遅くなるんや、ウチはもう日が変わる前に家に帰れりやそれでええがな……」

「アハ、アハハ、アハハハハ！ そうだよなそうだよなー！ どうせそんな自己中で他人の価値観を理解出来ない偏見女なんかより、翼の全てをしつかり理解してる私と一緒に帰った方が楽しくて話も盛り上がるよねー！ アハハハハそうだよそうだよ！ だって私達はずっと同じチームでコンビ組んできた親友同士だもんね、そしてついに明日から同じ代表選手として合宿に参加する相棒同士なんだもんねー！ やつと私達二人の夢が叶う時が来たよ翼、でも驚く程の事でもないよね、当然の結果だよな、だって今までずっと一緒に励まし合つて頑張ってきたもんねー！ 明日から私達はこの国の代表になるんだよ、背中に日の丸を背負うんだよ、蒼き魂を抱き世界を迎え撃つサムライジャパンになるんだよー！ それって凄い事だよな、どんな大金にも代えられない、とても名誉な事だよなー！」

「……オ、オイ綾、ちょっと落ち着こうや、ウチらは『サムライ』やのうて『なでしこジャパン』、ってか顔が近い、目え血走つとるがな、怖いわ、こっち見んな、鼻息が当たるがな」

「……それを、私と翼を繋いでくれた運命の赤い糸でもある誇り高いサッカーを、ただの仲良しスポーツだの所詮は玉蹴りピエロだの……！ 突然ヒョコヒョコ日本に来て金髪外人気取ってるクソツたれ売国野郎が偉そうにほざくセリフなんかじゃないよねー！ しかもイギリスに住んでてサッカーが嫌いだなんてそんなヤツ頭に砲丸ぶつけて死んじやえばいいのにねー！ でも仕方ないよね、所詮は県内の大会くらいで優勝して有頂天になってる愚かな陸上おバカさんなんだもん、その程度のミジンコ頭じゃ私達やサッカーの偉大さを理解出来る訳がないよねー！ もちろん私はわかるよ！ だって私は翼の全てを理解してるもん！ 翼の話ならもう何だって聞いちゃう！ あんな高慢ちき女や空手バカ一代やおつむの足りないクルクルパー子達に話すなんて勿体無いよ！ 私なら二十四時間耐久なんて全然平気、むしろご褒美、大好物！ 今日私は私とじっくりたつぷりお話しようね！ えっ？ そんなに話が盛り上がっちゃったら帰りが遅くなって明日寝坊しないか心配？ 大丈夫だよ大丈夫だよ、そんなに心配ならいつそそのまま私の家に泊まっていつちゃえばいいんだからさー！ ゼーんぜん問題無いよ、無問題！ 正しく発音すると、『モオウマアイタアイ』、なんちゃって！ アハ、アハハ、アハハハハ！」

「……あー……、あのー、あのなあ綾、ウチは一言もそないな事は言つてへんし、しかもそない勝手に話をズカズカ進められてもな……」

「そうだよねそうだよね、セリエAもリーグアもブンデスマもリーグアンもエールディヴィジもチャンピオンズリーグもJリーグもみんなみなサイコーだよねウフフフッ！ うんうんわかるよスッゴいわかるよ、だって私は翼の人格・思考・習慣・事情・身長・体重・スリーサイズ全てを知ってる、この世界で唯一無二で絶対絶好な最高のパートナーなんだもんねー！ ウフフ、アハハハ、

グウヒヤヒヤヒヤヒヤアアアアア！！」

「……うわぁ……」

「……ハア、ハアハア……、ねえ翼、今日はずっと二人つきりだよ、ずっと二人つきりで夜が明けるまでサッカー論議しようね、昔みたいに一緒のお布団で寝ようねウへへ、またこの前みたいに一緒にお風呂入ろうねウへへへ、私が翼のあんなとこやこんなとこや体の隅の隅まで全部綺麗にしてあげるねウへへへへへ！　ねえねえそうと決まったら早く帰ろうよハアハア、あんなインチキセレブビツチ女なんか放っておいて、早く『ワ・タ・シ・ト・イ・ツ・シ・ヨ・ニ』帰ろうよー！！　アヒヤヒヤヒヤ、アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッー！！！！！！」

「……うつつ、ウチは何でこないアブナイ女を相棒にしてしまうたんやるか……？　千夏、後生の頼みや、せめて骨だけは拾っておいてくれや……」

……これが日本に古くから伝わる鬼女に子供を捧げる生贄の儀式なのね。ああ可哀想に、なんて可哀想なんでしょう。あの分だと今宵の月はさぞ狂気を帯びた血の色に染まるんでしょうね。想像するだけで幼女の断末魔が聞こえてくるようだわ。何か悪い夢見そう。今日は耳栓とアイマスクして寝る事にしよう。あと、睡眠前のリラックスタイムにハーブティーとアロマも忘れずにね。

しかし女の執念って怖いわね。あれだけ無茶苦茶ボロカスにイヤミ言われても、腹が立つどころかむしろ鳥肌が立って恐怖すら感じたまん。これ以上こっちに矛先が向かない様に無意識装って背景に溶け込むのが精一杯。へびに睨まれたカエルの気持ちが悪くわかつ



たわ。どうせ舌を伸ばすならカメレオンになりたい気分だったけど。しかもこれは今日に始まった事じゃないわ。授業中でも休み時間でも、いつも翼と一緒にいると背後からあの子の視線がグサグサ突き刺さってくるの。『私の翼に近寄るなあ！』って無言のメッセー  
ジと共に。同じクラスで席も真後ろだから尚更よ。前から回ってくるテスト用紙渡すにも怖くて迂闊に振り向けない。目を合わせたら石にされそう、ホントに彼女の髪が無数のヘビに見える時があるもの。

そのせいか最近はあるの薫ちゃんですらこの教室に姿を現さなくなっちゃった。何か彼、靈感が人一倍強いみたいで教室中に怨念に満ちた悪霊達がたくさん蠢いてるのがわかるんだって。まあ、薫ちゃん自体がスケベな淫魔だからそれはそれで悪魔扱いとしてとても役に立っているんだけどね。毒には毒を、危険外来種には天敵生物を、みたいな感じで。

アタシ、明らかに彼女から敵対視されてるみたい。あれはただのヤキモチってレベルじゃないわね。って事はやっぱり、あの子ってレ……、いや百合っ子ちゃん系なのかしら？ しかも重度のヤンデレちゃんっぽい。えっ？　じゃあアタシ、いつか彼女に屋上呼ばれて鋸で首チョンパ！？　いやあゝん怖あい！　中に誰もいないわよっ！？　吉田綾、恐ろしい子……！

「……って言うかあ……、結局アタシ、一人置いてきぼりになっちゃったじゃない……」

んもおゝう、何でえ！？　何よ那奈も小夜も翼もみんなして、どういう事よお！？　どうしてこうなるのおゝ！？　さっきも話したけど今日はソフィーがお休みで部活サボるには絶好のチャンス、せっかくのSaturday night feverだっていうのに、

アタシ一人で寂しくブラブラしてろって言うのお！？　こんな日に限って薫ちゃんもお休みだし、翔太君も航ちゃんも全然捕まんない！　航ちゃんも軽音楽部の活動があるからしょうがないとしても、翔太君なんてバイクの練習とか明日にだって出来るじゃない！　那奈だつてあんな調子で心配なのに彼氏として失格よ、そんなにお師匠様である那奈のパパが怖いの！？　……話によると相当怖いらしいわね、アタシのパパも昔からずっとイジめられてたみたいだし……。でも、そんな弱気じゃパパみたいなスーパースパイダーになんてなれないわ、ホント腰抜け男よねっ！

薫ちゃんも薫ちゃんよ！　今日は自分の彼女の大切な Anniversary だつていうのに、どうしてあのエロバカ墮天使アブノーマル男は毎週土曜日だけ決まって学校を休むのよ！？　出席日数足りてるの？　進級出来るの？　一年目からいきなり留学確定つて、だつたらいつそ学校来るな、『おめーの席ねえから！』って感じだわ！　何なのよこのダメダメづくしの My men 達は、みんな部活とかで忙しいならともかく、メンバーほとんどが帰宅部の暇人なんだから一人ぐらいアタシに付き合いなさいよぉー！！

「……あれえ？　でも確か小夜つて軽音楽部のマネージャーに……。帰っちゃったみたいだけど、あれれえ？」

……まあそんな事どうでも良いわ。それよりどうするのよこの後、アタシ一人で街中彷徨いてたつてつまないし虚しいだけじゃない！　何なのこの放置プレイ、屈辱よ、あまりに屈辱的だわ！　やつと久し振りに出番が回ってきたと思つたらこの様！？　これ、イジメ？　イジメよね！？　アタシ、作者にとつていらぬ子！？　扱い難い！？　所詮アタシはギャグ回専用かヨゴレ役程度の扱いなの！？

冗談じゃないわ、アタシが悪いんじゃない！ アンタの小学生レベルの文章力とキャラ設定があまりにお粗末だから、こんなにも美しく魅力的な Pretty girl を大活躍させる事が出来ないのよっ！ このアタシも四人の主人公の一人だって、あらずじにもしつかり書いてあるじゃない！ 那奈達の話ばかりサクサク先に進めてないで、もっとアタシのエピソードも本腰入れて書きなさいよ、このキャラ頼り表現力ゼロのダメダメ作家！！

「ああんもおう最悪！ 仲間外れなんかイヤよ、このままじゃ帰れない、ぐっすり眠れない！ これじゃ違う意味で悪夢にうなされちゃうわ、って言うか今現在がすでに悪夢！ この悪夢の回廊から抜け出す方法を見つけないと、何とかしなきゃ、何とかしなきゃ……」

……あつ、そうだ。ウフフフ、ひらめいちゃったひらめいちゃった。この絶望的な状況を一発で打破出来る、最高のアイデアをアタシひらめいちゃったあゝ！ やっぱアタシって天才ね、格が違うのよ。えっ？ どんなアイデアか知りたい？ 教えて欲しいのお？ じゃあ最後までアタシに付き合ってくれたアナタだけコッソリ教えてあげるわ。誰にも喋っちゃダメよ、みんなの大好きな千夏ちゃんとの約束よっ！

「……それはね……、ヒ・ミ・ツ！ ウフツ」

ねえちょっと待ってよそんなに怒らないでよページ戻さないでよサイトのTOPに戻らないでよ謝るからお願いだからこれ以上アタシ

を一人にしないでJust moment, please!! じやあヒント、ヒント出しちゃう! ヒントはズバリ『逆転の発想』よ。わかんない? やっぱりバカねえアンタって。ううんウソウソジョークよジョーク! だからお願い、パソコンやケータイの電源切らずに最後までアタシの話を聞いてよプリーズ!!

「……そうじゃない、アタシにはまだ『アレ』がいるじゃない、翼や小夜、そして那奈なんかよりも楽しくて扱い易い、最高のMari onetteが!」

見てなさい、アタシを蔑ろにしてこんな寂しい目に合わせた裏切り者どもめ。アナタ達だけじゃないのよ、アタシにはとってもステキな遊び相手が他にもいるの。アタシは決して一人なんかじゃないんだからっ! こうなったら溜まりに溜まったストレスは全部『アレ』で発散してやるわ、欠片一つすら残らないくらい綺麗サッパリ愉快痛快になっ! ウフフ、アハハハハッ!!

## 第82話 天頂バス

全身を流れる心地良い汗と体中に響き渡る激しい鼓動。まだ呼吸は整わず胸の中は燃えたぎる様に熱くて、一気に喉を通り抜けていく冷たい水が火照った体温をクールダウンさせて一時の安らぎをアタシに与えてくれる。やっぱり体を動かすって最高のストレス発散よね。

お陰で頭の中も真っ白になって、イヤな事みんな忘れてもうすっかり気分爽快……、ってなる訳無いじゃない！ せっかく放課後用にバッチリ決めたメイクもヘアスタイルもみんな汗でグチャグチャになって全部台無し、ご覧の有り様よっ！

「……で、その逆転の発想とやらがこの様か、本末転倒と言うか惨めと言うか、お前らしい見事な一人芝居だな、三島」

……結局あの後、部活に出てバカみたいにトラック何十周も走りまくっちゃった……。何でアタシ、こんな力ビ臭い更衣室の中でこんな汗まみれのジャージを着替える羽目になってるんだろっ、Why？ 最悪、ホント最悪だわ。こんなストレス解消法しか思いつかないだなんて、アタシも着実にソフィーの思うがままの筋肉アスリート脳に改造されつつあるのかしら……？

「……うるさいわね、着替える時ぐらい黙ってさっさと着替えなさいよ、人が一生懸命練習してるのがそんなにミジメでおかしな事？」

「いやいやとんでもない、大の努力嫌いがここまでやるとは感心に値する、私はすっかり見直したぞ、三島」

「……『感心に値する』だって、偉そうに、『ちゅぼみ』のクセして……」

「……何か言ったか？」

「いゝえ全然？ それよりさあ、アナタのその堅っ苦しいウザい喋り方、いい加減に何とかしてくれないかしら？ 何かLadyと喋ってる気が全くないのよね、アナタだってそれでもヤマトナデシコでしょ？ だったらもうちよつとVarietyに富んだCharmingなTalkingをしないと、周りのイケメンBoysからチャホヤして貰えないわよお？」

「冗談ではない、私にはお前みたいに男に媚びて人気を得ようなど醜い邪念は微塵もない、それにそんな真似をしなくても私は充分周りに慕われているんだぞ、三島」

「……『慕われてるぞ！』だって、偉そうに、『めい』のクセして……」

「……何か言ったか？ 言ったよな？」

「いゝえ全然、何にもお？」

さつきからアタシの隣で淡々と着替えてるこの人、男みたいな可愛くない口調にアタシより高身長でトレーニングで鍛え上げた無駄の

無い逞しいアスリート体型、なのに出る所は出てるかなりのグッドスタイルの持ち主。それでも彼女、真正銘れっきとした現役ピチピチ女子高生なのよ。まあ、こうしてアタシと一緒に女子更衣室で着替えてんだから当然といえは当然の話なんだけどね。

決して裸を見られても許せる特別なボーイフレンドじゃないし、ましてや女装して不法侵入した変態でもないわ。だからアタシのファンのみんなは安心してね。嫉妬しないでね。絶望して自殺とかしないでね。だからといって『じゃあ俺も一緒に着替えた〜い』とか言っただけで女装して入ってこないでね。通報するわよ、殺すわよ？

「でもねえ、慕われてるって言ってもそれは『女の子限定』の話でしょ？ 今日の部活中もアナタ目的で見学してた女子生徒がたくさん居たし、他のクラスにもまるで宝塚ファンみたいにキヤーキヤー寄り添ってくる子達がいるみたいだもんね、あの子達といいアタシのBest friendの知り合いといい、最近の日本の女の子って何か色々ハジマっちゃってる感じよねえ、この国の将来はホントに大丈夫なのかしらあ？」

「近頃の男達がだらしないからこうなる、これも時代の傾向なのかもしれないが、そんなもの私には全く興味の無い話だがな、三島」

「……『興味の無い話だな！』だって、ププツ、偉そうに、『ちゅぽみめい』のクセして偉そうに……」

「……言ってるよな？ 今、間違いなく何か言ってるよな？」

「のお〜んノンノン、ぜんぜえ〜ん？ なあ〜んにも一言もこねればうちも言っていないわよお〜ん？」

「小癪な女め……」

「でもどうかしらねえ、アナタは興味ないって思っているも周りはそれを許してくれないんじゃないかしら？ いずれは寄つてたかつて身ぐるみ剥がされてウフフでアハハな百合色に染められちゃうわよ、お弁当に睡眠薬仕込まれて目が覚めたら体育館倉庫のマットの上で雁字搦めで禁断密味ロールケーキぐるぐるみたいなの、イケない立春欲情丸かぶり恵方巻でもいいけど」

「……平然な顔をして恐ろしい事を口にするなこの鬼め、彼女達は誠心誠意で私を慕ってくれているんだ、忌まわしい妄想は頭の中に留めておくんだな、三島」

「だってアナタには彼女達みたいなお姉様大好きっ子を惹きつけちゃう要素がたくさんあり過ぎだもん！ 中学時代に残した優秀なそのトラックレコード、どんな時もクールでカッコいい堂々としたそのスタイル、そこらのブサメンなんかより何倍も美形なそのフェイス！ なのに、なのによお？ これだけステキな要素がたくさん揃つておきながらその名前は、なんてつたつてアナタの名前は……！」

「またそれか！ さっきから小言で隠微にボソボソと、いい加減その話題はよさんか、三島……！」

「ちゅぼみつ！ めい！ ちゅぼみめいタンなんだもんねえ〜！？  
アハハ、アハハハハッ……！」

彼女の名前は四月朔日芽。四月朔日がセカンドネームで芽がファーストよ。四月朔日で『つぼみ』、芽で『めい』って読むんだって。普通読めないわよね、何よ『つぼみ』って？ 苗字でつぼみって何



それ意味わかんない。『蕾』って事？ やだ、何かスゴい可愛くてエッチでロリロリな感じ！ しかもファーストネームが芽って、『芽生え』って事？ やだあ、何かこっちもスッゴい可愛くって東京都知事や某日本ユニ○フ大使さんから怒られちゃいそうな感じがプンプンするわあ〜！

こんなぶっくらぼうで男勝りな性格してて？ こんな那奈みたいなクールで凛々しい姿してて？ こんなむさ苦しいオッサンみたいな喋り方して？ なのに名前が『つぼみめい』？ アハハハハ！ 何よそれ、超おかしいっ！ こんなジョークEasyに狙って出来るもんじゃないわ！ アタシ、超ウケまくりなんですけどお〜！？

「笑うな！ 何が可笑的い！？ 私の名前の何がそんなに可笑的いんだ、三島っ！？」

ハア〜お腹痛い。えっ〜と、とりあえず笑うのは後にして、まずは簡潔にめいタンのプロフィールを紹介するわね。彼女はアタシとクラスは違うけど同年同学年の高校一年生で同じ部活所属の陸上選手なの。アタシと彼女のファーストコンタクトはこの陸上部に入った初日の時。

あの日は練習を始める前から笑い疲れてヘトヘトになって色々大変だったわね。先輩や他の新入部員の前でキリツと直立して大声出して自己紹介する彼女の姿とその名前が、まともにアタシのツボにCritical hitしちゃって……。

…… あっ、そうだった。その前にアタシ達が所属するこの陸上部についてガイドしなきゃいけないわね。ここの学校の陸上部、実はこれまでにも何人もの才能溢れる期待のアスリートの卵達を名門大学や実業団へ輩出している素晴らしい実績を持ってたりするのよ。ス

ゴいでしょ？

将来有望と見込まれた選手には中等部の時から優秀なコーチ陣の徹底的な育成指導を受けさせ、他の学校に良い選手がいれば高等部への編入を薦めて次々とスカウトしていく。それがこの陸上部が創立されて僅か数年足らずで一気に全国有数の強豪校への仲間入りに大躍進した強さの秘訣らしいわ。

これは何も陸上部に限ってのパターンじゃないけどね。うちの学校は他の部活もみんなそう、野球部も体操部もどこも強豪ばかりよ。でも体育会系だけじゃないわ学力だってスゴいのよ。偏差値も高いし大学進学コースまであるもん、学習塾なんてわざわざ通う必要全く無し。文武両道ってヤツよね。

何十年学力強化頑張っても結果が出なくて諦めちゃう弱小校もたくさんあるのに、やっぱりスゴいわよねアタシ達の学校って。これも出資者として影で暗躍してるアタシのママの成せる業なのかしら？

きつとうちの学校がスゴいんじゃないかってママがスゴいのね。事業家として成功を納めただけじゃなくてその利益を惜しみなく公共施設にまで投資するだなんて、さすがアタシのママよね、Respectしちゃうわ！

でね、そのママが陸上部の更なる強化を目指して特別顧問として招致したのがご存知、七種競技ワールドチャンピオンの経歴を持つあのソフィーよ。えっ、誰だか忘れた？ あの人よあの人、毎日放課後アタシを校舎内隅々まで追い回してくるあの人。翼曰わく『ヘンテコ迷惑ストーカー外人』。

随分と失礼なニツクネームよね。あれでも彼女はアタシの大切なもう一人のママで、アタシが目標とする理想のスーパーアスリートなのよ？ それをヘンテコだとかストーカーだとか見た目で判断するなんてとんでもない偏見よね。確かにちよつとおかしい片言な日本語を喋ってアブナいくらいやたらテンションが高いけど、アタシの理想のヒーローなんかに比べたらよっぽどマシ。

何がベツカム様よ、バツカみたい。あんなのちよつとカッコ良くて

足が器用なだけのヘラヘラ男じゃない。ヴィクトリアの方がよっぽどファッションリーダーとして世界中で活躍してるわよ、ブーイングも多いけど。オリンピックどこるかワールドカップすら優勝した事無いダメダメ恐妻家と、アタシのソフィーと一緒にしないでくれるかしらあ？

……うん、でもあながち間違ってもいないのよね、翼の言い分も。確かにアタシも少し迷惑、迷惑ではあるのよ。トイレに隠れても掃除用具ロッカーに潜んでも学校の外でタクシー拾って逃げてモターミネータみたいになんて走って追いかけてくる、あのソフィーの恐ろしい程の執念深さは……。

……話題がコースアウトしちゃったわね、軌道修正。さて、その話は置いて。でねでね、そのソフィーは特別顧問として就任して早々、ワールドクラスのアスリート育成を目的としたエリートコースを新たに作ったのよ。ただでさえ全国よりすぐりの優秀な部員の中から、更にソフィーが自らチョイスして招集した超スペシャルチームってところかしらね。

短距離、長距離競走から高跳び幅跳び投擲競技まで種類問わず何でもOKの元メダリストコーチによるマンツーマンレッスン。その練習内容の濃さは基礎体力強化からコンディショニング管理まで各分野のスペシャリストも顔負け。こんなファンタスティックなスーパーコーチング、とても彼女じゃなきゃ出来ないわ。さすがはHeptathlonのゴールドメダリストよね、無敵のオールラウンダーの面目躍如って感じね。

そんな一高校の部活レベルとは思えないゴージャスなトレーニング環境だもの、この話が全員に伝えられた時は誰もがみんなソフィーのレッスンを受けたいと志願する人達が殺到したわ。でもね、頑張って練習でアピールしてた人はたくさんいたのに、所属してる部員数だけでも数え切れなくらいたくさんいるのに、その中で彼女

にスカウトして貰えたのは僅か十人！ しかも一年生部員に至ってはたったの二人だけよ、二人だけ！

Of course！ 当然アタシはそのたった二人しか選ばれなかった一年生部員の一人よっ！ えっ、わざわざそんなわかりきった事を説明する必要なんか無いって？ まあねえ、確かに今更アタシのスゴさを説明する必要なんて無いわよね。だってみんな知ってるもんね。キラキラ輝いてるもんね。全身からオーラが出てるもんね。やっぱりアタシって、生まれながら神に成功と名声を約束された特別な存在なのねっ！

だってえ、何せその世界有数の特別顧問様が向こうから毎日毎日部活に出る部活に出る、育てさせてくれ育てさせてくれって必死にお願いしてくるぐらいなんだもの。いやぁ～んもおう、どおうしゅう！ アタシったらスゴいソフィーに期待されてる、世界中の人々からその登場をスッゴい待ち望まれてるうゝ！

……うん、でもね、やっぱり実はちょっと迷惑。だってホントは七種競技なんてやりたくないんだもん……。『チナツは筋力不足デスネー！』とか言われていつつもいつつも腕立て伏せ百回とか重い円盤や槍とか何十回も投げさせられて……。

お陰で細くて自慢だったアタシの二の腕、段々と女子プロレスラーみたいに逞しくなってきた。これじゃ恥ずかしくてノースリーブ着れない。アタシ確か走り高跳びで世界の頂点目指してたはずなのに、これって一体、どういう事なの……？

「話の途中悪いが、一言良いか、三島？」

「何よお？ 邪魔しないでよ、今から丁度アナタの説明をしようとしてる時に……！」

「話が長い、三行でまとめろ、三島」

「まとまんないわよお！ アタシにはまだまだ話したい事がM a n y , m a n y いっぱいあるのよ！ それをたった三行ごときで……！」

「まとまる、

その選ばれた、

もう一人の一年生が、

私、

以上だ、三島」

……チツ、ホントつまんない子よね。そういう事よ、そのソフィーに選ばれたもう一人の一年生部員つてのが彼女、ちゅぼみめいタン。つ・ぼ・み・め・い。ププツ、平仮名で書くと更に変な名前よねえ？ Englishでも『Mei Tsu a o m i』って何かマヌケでダツサイもん。やつぱり名前つて大事よね、アタシなんて平仮名で書いてもEnglishでも超Coolよ？

『みしまちなつ』、ほらかッコいい。えつ、ダサイ？ じゃあこれならどう？ 『C h i n a t s u M i s h i m a』、ほらかッコいい！ 超Cool……、ってうるさいうるさいS h u t u p ! ! カッコいいのよ！ アタシがカッコいいって言ってるんだからカッコいいものはカッコいいのよつ！ アタシ自身も名付けたママもカッコいいんだから全部カッコいいのつ！ これだから日本名つて好きになれないのよ、アタシの主張に異論は一切認めないわ、外野は三步下がって豚小屋入ってB e q u i e t ! !

……ふう、またコースアウトしちゃったわね。さてと、その話も置いて。でもやっぱり変よね四月朔日芽って名前。彼女の両親は名前に似合う可愛い女の子になって欲しいと願って名付けたのかしら？ だったら今頃ガツカリしてるでしょうね、こんなオシャレ気の全く無いショートカットのおかっぱ頭娘さんに成長しちゃってね。同じショートでも小夜とはエラい違いよ。小夜は小さくて仕草も言葉使いも全部カワイイからどんなヘアスタイルでもカワイイけど、この子は顔と胸隠してスカート履いてないと後ろから見たら完全に男だもん。バレーボール選手並みに背が高いから尚更なのよね、せめて那奈ぐらい髪が長ければシルエットだけでも男女の分別ぐらいつくんだけど。

やっぱり名前と見た目のマッチングって大事よね、全然合ってないわ。そもそも日本人のネーミングセンスってちよつとおかしい。最近の新生児の名前ランキングとか見ても当て字で読めない変な名前ばかり。親の個人的な趣味でアイドルやアニメキャラの名前付けられて、それで生きていかなきゃならない子供の身にもなってあげて欲しいもんよね。ペットや競走馬じゃないんだから。

あつそうそう、この国でも Great Britain みたいに競馬が盛んみたいで、この前『この馬スゴいカワイイ！』って思ってた名前調べたら『アシタハシマウマ』だったってぐらい、彼女のこの名前はディープリンパクトだったわ。何よ『明日はシマウマ』って日本の競走馬だって純血のサラブレッドなんでしょ？ 何でシマウマ？ アタシが馬だったら絶対馬主恨むわよ、ヤダそんな名前……。

「……なぜ私の話から突然馬の話になる？ 長過ぎる脱線話ばかりだ、いい加減まとめてくれ、三島」

「ああ〜んもおう、いちいちうるさいわねえ！ わかったわかったわかったわよっ！ 三行でまとめれば良いんでしょ三行で！」

「そうだ、  
三行で頼む、  
三島」

「めいタンも、  
明日はきっと、  
シマウマよ」

「オイちよつと待て！ 三行は良いとしてそれでは全く私の紹介文  
になっていないぞ！ 私はどんなに走ってもシマウマにはならんぞ、  
三島！」

「アハハ、アハハハハ！ 何コレ、自分で言つて全然意味わかん  
ない！ やだヤダ笑い過ぎてお腹いたいイタイ痛い、ただでさえ部  
活で筋肉痛なのにこれ以上笑ったら腹筋壊れるうゝ！ こんなくだ  
らない話にマジで突っ込むめいタンも可愛いっ！ 何なら今日から  
そのジャージ白黒模様にしたら少しは足速くなるんじゃない？ な  
んちゃって、アハハハハハハハ！」

「オイ、いい加減に私の名前の後に『タン』をつけるな！ 『ちや  
ん』でも嫌なのに『タン』とは何事だ！ 私は最近の気味悪い男ど  
もが好んで使うそのふざけた呼称が一番嫌いなんだ、三島！」

「でも名前のイメージだけだとそんな感じじゃないアナタって、『  
蕾』に『芽生え』なんて赤いランドセルに黄色い通学帽被せて幼稚  
園児のスモッグ着て変なオジサンにイタズラされてるって光景が」

「冗談ではない！ さっきから襲われるだのイタズラされるだのお  
前の頭の中は一体どうなっているんだ！？ 第一何だ『ちゅぼみ』」

つて！？ 『ちゅ』ではない『つ』だ！ 子供言葉で馬鹿にしよつてからに、良い機会だ、この際だから説明してやろう、いいか良く聞け三島、私のこの苗字には古来からの由緒正しき意味と理由があつてだな……！」

「めいタン、

話が長いわ、

三行で」

「私の、

苗字は、

『ちゅぼみ』じゃないっ！」

「ちゅ・ぼ・みつ！ 言った！ ついに自分で言った！ ヤダメいタン超力ワイイ！ アハハ、アハハハッ！！ ダメ、もうダメ、死ぬ、死ぬ、笑い死ぬうゝ……！」

「だからあ！ 私の名前の一体どこが可笑しいんだ、三島っ……！」

ああゝおかしい。笑いすぎて内臓まで捻れてクラッシュしちゃいそうだね。ああそうだった、笑ってないで彼女の紹介の続きをしなきゃいけないわね。今度は脱線せずにちゃんと話を続けるから、嫌な顔しないで最後まで話を聞いてね。カワイイカワイイ千夏ちゃんからのお願いよっ！

このちゅぼみめいタン、いやこの四月朔日芽さんはね、アタシや那奈達のような中等部からの自動進級組と違って他の学校からの編入組なんだけど、中学の頃から女子の槍投げ選手として全国区でも結構注目されてる存在なんだって。苗字は四月朔日なのにな。



しかも、投擲競技だけじゃなくて足も速くてスタミナもあって、短距離走や長距離走、ジャンプ競技でもそこそ良い記録を出してたりする万能タイプだったりするの。つまりは七種競技をやるにはうってつけの才能の持ち主って事。名前は芽なのにな。

そんな恵まれた身体能力がこの陸上部のスカウト陣の目に留まって即座に推薦入学、更にはソフィーの目にも留まってアタシと共に晴れてエリートコースの仲間入り。ソフィーは彼女の将来性溢れる才能がとってもお気に入りらしくて、いつかはアタシと並んで国内、果ては世界に羽ばたくビックなトップアスリートに成長してくれる事を心から願っているらしいわ。

そんなスゴい選手がすぐお隣の地区に居たっていうのに、それを同じ陸上選手のはずのアタシが初めて顔を合わせるまで存在を知らなかったのはなぜかって？ だってアタシはアタシ、他人の記録や成績なんてちつとも興味なんか無いもん。どうやら彼女も去年アタシが走り高跳びで優勝した県大会で活躍してたらしいんだけど、出場した競技が違ったから会話どころか顔を合わせる機会すら全く無かったわね。

アタシってあまり他の選手と交流を深めるのって好きじゃないのよ。だってみんな結局、アタシと同じ目標を目指すライバル達じゃない？ お手々繋いで仲良くなってるってしたらいずれは闘争心に緩みが生じるわ。この前も言った通り陸上競技は孤独なスポーツ、信じられるのは己の力のみよ。頂点を極める為なら例え相手が親しい友でも容赦なく押し退ける、それが厳しいサバイバルレースを生き残る競争社会の掟であり、現役時代のアタシのパパのレーススタイルを見て悟った、アタシの人生の教訓なのよ。

ただ、今思い返すところとして同じ学校の同じ部活で、しかも同じ競技と一緒に練習する仲になるのがあの時わかっていたのなら、せめて一目会って名前ぐらいは聞いても良かったかなってちよっと思っ

たりするけどね。そうしとけば部活初日の腹筋崩壊を未然に防げたかも。聞いたら一発で覚えられたんだけどなあ、なんってつたってちゅばみめいタンなんだからねえ。

「あーあ、どうせならアタシもそんなインパクトがある名前をママから付けて貰いたかったなあ、何でパパは『三島』なんてつまんないセカンドネーム名乗ってるんだろ、何か急にめいタンが羨ましくなってきたわ」

「ああもうしつこい、しつこいぞ三島！ お前という奴は一体全体何なんだ！？ 話はいつも無駄に長いわ、初対面から無礼な態度を取るわ、毎度毎度私の名前で大爆笑するわ……、お前の辞書には他人に対する敬愛の念って言葉が存在しないのか？ どうなんだ、答えてみる三島！？」

でもね、少し残念な子でもあるのよね、彼女。フィジカルはとても優秀で何でも出来ちゃう万能タイプでも、メンタルがガチガチのワンプターンでまるつきり融通が利かないのよ。普段はクールでクレバーなのにちよつとでもからかうとすぐにカッとなってムキになっちゃう。

つまり、ジョークが一切通じないカツチカチのStone headって事。さつきまで『三行』とか言ってたのに頭に血が登った途端ご覧の有り様よ、ホント残念だわ。まあ、それが面白いからアタシも懲りずにいつもちよつかい出しまくってるんだけどねえ。

「んもおーう、そういうパパみたいな説教じみた話ってアタシ、大っきらあーい！ だってしょうがないじゃない、アタシのこの性格

はママから譲り受けた生まれつきのものだもん！ お喋り好きなのも生まれつき、態度がデッカいのも生まれつきいゝ！」

「醜くも開き直りよってからに、ならその諸悪の根源である母親をここに呼べ！ これ以上の忌まわしき遺伝子の悪連鎖を止める為に、今ここでこの手でまとめて修正してくれるわ、三島！」

「それに態度がデカいデカいって言ったってさあ、部活中の模擬形式試合の練習でいっつもアナタ、アタシに負けてんじゃいゝん？ 勝てば官軍、敗者が勝者に遜って頭を下げるのはこれまでの歴史の中でも当然の話でしょ？ なのにそんな身の程知らずな偉そうな意見アタシ信じらんないい！」

「……おい待て、いつ負けた？ 私がお前にいつ負けた！？ 私がお前に遅れを取ったのは跳び競技と走競技のみで、しかもいつも紙一重の僅差だぞ！？ 投擲競技なら常に私の圧勝、最終的な総得点では毎回私の勝ちじゃないか！ 七種競技とは全競技の結果で得た総得点で勝敗を競うものなんだぞ、三島！」

「へえゝ、そうなの？ アタシ七種始めたばかりだからそんなルール初めて知ったわあゝ！ 槍投げとか円盤投げとかやらなくても良いのにね、だってやってて全然つまんないんだもおゝん！」

「それがルールだつ！ そんな事も知らんで競技をするなつ！ それにそれらを含めているから七種競技なんだつ！ 槍投げと円盤投げを無くしたら七種じゃなくて五種になってしまうだろうが、三島つ！」

「ああゝそうかあ、言われてみればそうよねゝ？ へえゝスゴいスゴい、アナタって運動神経だけじゃなくてルールにまで詳しいの

ね、さっすがめいタン！」

「だからめいタンはやめろっ！ それより大至急ルールぐらいは覚えとけっ！ 失望した、こんな不真面目な性悪女が私の認めたライバルの本性とは、私は完全に失望したぞ、三島あつ！！」

へえ、そうだったんだ。アタシてつきり七競技の内、四つ以上勝てばオツケーだとばかり思い込んでいたわ。だってほら、メジャーリーグのワールドシリーズや日本のプロ野球の何とかシリーズでもそうじゃない？ 先に四勝したら優勝みたいな。でも、確かにそれじゃ二人以上の選手がいたら勝敗決められないわよね。何かルールが複雑過ぎて面倒だわ、他の競技みたいに最も良い記録出した選手が勝ちってルールが見てる方も一番わかりやすいのにね。

「私に対して偉そうに勝ち誇りたいのなら、せめてもう少し投擲の記録を伸ばして得点を稼ぐ努力をすべきだな、でなければ私とお前の差は一向に埋まらないぞ、三島！」

確かにこのめいタン、元は槍投げ専門だっただけあって投擲競技だけはスゴい記録が出るのよね。アタシは投擲に興味が無いし槍も円盤も重くてしんどいから手加減してあげてるんだけど、そのせいか彼女とはいつも最後はもつれた僅差の勝負になっちゃうの。そんな事もあって彼女はいつしかアタシをライバル視する様になっちゃったみたい。惨めよね、わざわざこっちからハンデあげてる事も知らずにさ。

「でもまあ結局、模擬の試合でアタシとアナタ二人だけの勝負だから、やっぱり七つ中五つ勝ってるアタシの勝ちいゝ！」

「お前、私の説明を聞いてたのか！？ だから七種は勝利数ではなく着順総得点が全てだと何度言わせれば……！」

「めいタン、

長いわ、

三行、三行」

「私は、

一切、

負けてないっ！」

「めいタン、

やれば、

出来るじゃない？」

「それと、

いい加減、

めいタンはやめろっ！」

「アハハ！ また言った、また自分でめいタンって言った！ 何だ

かんだ言ってアナタこの呼び名スゴく気に入ってなあい？ おかし

い、あゝおかしい！ アハハハハ！」

「みいしいまあーっ！」

まあ素敵、ホントめいタンって楽しいわ！ どんなジョークにも

返ってくるリアクションがいちいち必死で最高なのよね。実は彼女、アタシの最近一番のお気に入りだったりするの。だって翼が相手だと頭が柔軟で腹黒いから思わぬ反撃をされる事があるし、小夜だと想定外のUnbelievableな答えが返ってきて逆にこっちが啞然とさせられちゃうしね。

それと、那奈も彼女と似てて超真面目な性格だからおちよくると面白くて結構好きなんだけど、少し大人びてて冷めたところもあるからあまりしつこくするとシラけられて無視されちゃうしね。その点もえタンはいつも熱いわ。無駄に熱い。しかも超負けず嫌い。名前一つでこんなに反応してくれるなんてイジリ甲斐があり過ぎるわ、もおう大好き！

「……全く、最近は練習よりお前と話している方がよっぽど疲れる、もしも今の話をソフィーコーチが聞いたらお前、間違いない説教ものだぞ？　なぜあれほどの元名選手がお前みたいな人間にあそこまで尽くすのか、私にはさっぱり理解が出来んぞ、三島」

「……ねえ、ホントにそのウザい喋り方そろそろ何とかならない？　もおうスッゴイイライラするのよね聞いてて、ホント鬱陶しいの」

「無茶を言っな、お前の性格同様私のこの喋り方も生まれつきのものだ、それとも何か？　この喋り方に過去に嫌な記憶、嫌な人物でも思い当たるとでも言うのか、三島？」

「まあね……、まあどうでもいいわ、あんなの思い出したくもないし、それより部活も終わって着替えも済んだんだから早く帰ろっ！　部屋の電気消すわよ、今のブームは地球に優しいネイチャーガールなんだからっ！」

「待て待て待て！ 私はまだお前の話に付き合わされて全然着替えが済んでない！ と言うかお前いつどうやって着替えを全て済ませた？ 電気を消すな、もうしばらく待て、三島！」

「……ねえ、めいタン、その格好なんだけどさ……」

「……何だ？ 何か問題でもあるのか？」

言葉使いもそうだけど、そんな事よりアタシが気になったのはめいタンの着替えてるその服装姿。彼女、いつも制服のスカートの下に膝まで丈の切り詰めたボロボロのジャージズボンを履いてるの。教室や通学帰宅時もこの姿。やだぁダサイ、もうスッゴいダサイ。センスの欠片も無いわ。せつかくのママがデザインしたカワイイ制服が全部台無しだわ、問題あり過ぎよ。

「ねえ、アタシいつも思うんだけど、そのスカートの下に汚いジャージ履くのつてもうやめたら？ 何か水分飛んで萎れちゃった椎茸みたい、そんなみつともない格好してて恥ずかしいのぉ？」

「恥ずかしいだと？ 何を言うかとんでもない、履いてない方がよっぽど恥ずかしいじゃないか、色々と」

「What? 何でえ？」

「だから、こんな腰巻きタオルみたいな丈の短いスカートじゃ下に何か履かないと恥ずかしいじゃないか、色々と」

「Why? なぜ？」

「だ、だから、見えちゃうじゃないか、色々と……」

「……アツハアーン！？ バカ？ アンタってバカア！？ 何を言  
い出してんのよもつたいたい、そんなくだらない理由でそんなダッ  
サイジャージ、下に履いてたのお！？」

「ハア？ えっ？ オイちょっと待て、『もつたいたい』って何だ、  
どいう意味だ、三島！？」

もつたいたいわ、もつたいたいわよお！ 何の為にママがわざわざ  
こんな短いスカートをデザインしたと思っでんのぉ！？ 男のむさ  
苦しい毛だらけの脚ならともかく、Ladyの煌びやかで艶やかな  
脚線は芸術よ、神々が創り上げた奇跡のアートなのよ！？ それを  
こんなボロ布で隠すだなんてもつたいたい、MOTTAIMAIわ  
あ！

「めいタン、アナタは何の為に陸上なんてやってるのよ、何の為に  
毎日厳しい練習に耐えて頑張ってるのよ！？ 男どもに無駄なく引  
き締まった肉体を、美しく鍛え上げた脚線美を見せびらかす為にや  
っているんでしょう！？ なのにそれを恥ずかしいとか……、ああ  
もおうUnbelievableだわ、アナタは天をも恐れな  
大きな過ちを犯してるっ！」

「わからんわからん全く意味がわからん、だからお前と一緒にして  
くれるなと何度言えばわかる、私はそんな不純な理由で陸上をやっ  
ている訳ではないぞ、三島！」



「ダメダメダメダメ、全然ダメよっ！ わかってない、アナタは自分がこの世界に女として生まれてきた意味が全然わかってない！ アナタといい那奈といい、そんな恵まれた理想的なボディラインをしていてそれを恥じるだなんて、何それイヤミ？ アタシ達に対する当てつけか何か？ 世の中にはアナタみたいなスタイルになりたくてもなれない可哀想な女の子達がたくさんいるっていうのにつ！」

「私は決して望んでこんな体になった訳ではない！ と言うか那奈って誰だ？ 第一な、お前の母親がこんな非道徳的な穢らわしい制服を作ったりするからわざわざ下にこんなものを履かなければならなくなっただぞ、三島！」

「やっぱりわかってない、アナタも那奈もアタシのママの『女の子哲学』を全然わかってない！ 非道徳的？ 穢らわしい？ 冗談じゃないわ、こんな腰巻きタオルとか言うなんて土下座してママに謝って！ 女は度胸、女は露出！ 常にセックスアピールを主張してこそナンボなのよっ！」

「……セ、セ、セツ、お前、何て卑猥な言葉を……！ だから那奈って誰だ！？ それにナンボって何だ、どこの出身だ！？ お前の一族には生粋の露出狂遺伝子でも流れているのか、三島！？」

陸上に関しては誰にも負けない熱いファイティングスピリッツを持っているのに、オシャレや恋愛事になると極端に疎くて消極的。高校生にもなってこんな状態じゃめいタンの将来が思いやられるわねこのままじゃ彼女、数年後にはタダの筋肉ガチガチ男性ホルモン大分泌のアマゾネス女になっちゃう！

そんなの見過ごせない、見捨てられない！ アタシはママ同様この世界に『美』を振り撒く為に生まれてきた選ばれし存在なのよ！

そんなアタシの目前でそんな大暴挙、許さない、絶対に許さない！  
修正してやる、洗脳してやる！ こんな美学を冒瀆するダメ女、  
力ずくでも大改造ビフォーアフターしてやるわっ！！

「変わりなさい、悔い改めなさい、今すぐアナタに絡み付くその忌  
まわしいしがらみを全部脱ぎ捨てなさい！ 『美』の迷路に彷徨う  
全ての女性を救うのがこの退廃した世界に降臨したアタシに与えら  
れた絶対使命！ めいタン、アナタはこの『愛と美の伝道師』Ch  
inatsu Mishimaが直々に、誰もが羨む美しい女性へ  
と生まれ変わらせてみせるわ！」

「おい！ オイオイオイ何をする！？ せつかく着替えてる人の服  
を無理矢理勝手に脱がすな！ 何を考えているんだ、オイよせやめ  
ろ、やめるんだ、三島っ！？」

「Shut up！ 問答無用よ！ めいタン、アナタには特別に  
ママがアタシ専用にデザインしたお揃いのSpecialな夏期制  
服をコーディネートして差し上げますわ！ ホントは那奈に着させ  
るつもりだったんだけど予定変更よ、それと髪型にもやっぱりもう  
一つアクセントが欲しいわね、イケメンだからすっぴんも悪くない  
けど女の子なんだしメイクも施さなくちゃね！ 見てなさい、アタ  
シのこの魔法の手であつという間にアナタをステキなマイフェアレ  
ディに大变身させちゃうから！」

「だから那奈ってどこの誰だっ！？ それより待て、なぜお前のカ  
バンからもう一着替えの制服が出てくる！？ 制服どころじゃない  
お前のカバンには一体どれだけ服やら靴やら化粧品が入っているん  
だ！？ そのカバンは四次元ポケットか何かか！？ よせやめろ、  
私は生まれてこの方一度も化粧なんてものをした事が無いんだ、そ

んな恥ずかしい格好はしたくない、頼むやめてくれ、三島あー!!」

「めいターン!

三行、

さんぎょうう!」

「たす、

けて、

くれー!!」

ウフフ、覚悟なさいめいタン。世界の『Chiharu Mishima』であるママ直伝のアタシのファッションプロデュースは完璧よ。メイクだってお手の物、『百花繚乱』カルテットのリヨウちゃんやランちゃん達から学んだテクニクだってPerfectですうー! 垢抜けないボーイッシュ女子高生があつという間にカワイイ萌えっ子ギャルに大変身! さあどうかしらシンデレラ姫、生まれ変わった自分の姿を鏡で見た初対面のご感想は?

「……何だコレは、三島……?」

「んーと、ヘアスタイルはショートカットの利点を生かせてちよつと昔の堀北真希風にしてえ、メイクは元々肌がキレイだから少しチークをひいたくらいかなあ? 少しあっさりし過ぎたかしら、何ならもうちよつとガッツリいっとく?」

「人様の顔にベタベタと絵の具みたいなものを塗り付けよつてからに……、それよりこの制服は一体何だ!? 明らかに正規の物よりスカートの丈が短いし、それにこの膝まであるやたら長い黒靴下は

何なんだ！？　こんなもの履いていたら動きづらいだろうが、何の真似だ、三島！？」

「えっ、知らないのお？　黒ニーソよ黒ニーソ、今、日本の男の子達の『好きな女子高生制服スタイルランキング』で必須事項として挙げられるファッションアイテムなのよ？　何でも黒ニーソからミニスカートまでの間にチラチラ見える太ももの部分が絶対領域で大好物だとか何とか」

「ふざけるな！　何が絶対領域だ！　お前は履いてないのになぜ私にだけこんな物を！」

「だってめいタンってアタシより足太いし目立たせなくするにはこれしかないかなって、何か必死にジャージで隠してた理由がわかってちよつと悲しくなっちゃった」

「うるさい黙れ余計なお世話だ！　しかし何とかがわしい助平な制服だ、これは完全に校則違反ではないのか？　こんな短いスカート、少しでも激しく動いたり強い風が吹いたら簡単に捲れてしまう……！」

「それが良いのよお、チラリズムってヤツ？　それこそが男の子達をトリコにするキーポイントなの！　ほら、アタシのスカートだってお揃いの長さよ、パンツは見せ物、スカートなんて飾りだわ！　正規デザイナーであるママが作ったんだから、これだってれっきとした採用デザインだもん、大丈夫よ、何の問題も無いわ！」

「大丈夫じゃない、問題だらけだ！　このワイシャツだっておかしいだろ、なぜこんなに透け透けでパツンパツンなんだ？　ボタンが一番上まで止まらんぞ、これではネクタイもきちんと巻けんし

胸元だつて見られてしまう……！」

「アタシのサイズだからねえ、って言うか、そのサイズでパツツンパツツンならやつぱりめいタンっておっきいのねえ？　那奈もアタシよりおっきいからこんな事になるって予想してたけど、まさかアナタにまでこんなにJealousy感じるとは思ってたわ、ああもう悔しい、妬けちゃう！　悔しいから第二ボタンも外してアナタのアブナイ取り巻きの女の子達をもっと狂乱させてあげちゃう！」

「やめろ、やめんか！　人様の胸元を凝視するな、遠慮もせずに堂々と普通に触るな！　お前は他人にこんな格好をさせて二ヤけるのが趣味なのか！？　間違いないくお前が一番危ない、その女子生徒達より遥かに質が悪いぞ、三島！？」

アハハやだあカワイイ、めいタンったら顔どころか耳まで真っ赤っか！　超おかしい、超ウケるう！　普段は気が強くて堂々としてる子が、こういう格好をさせた途端に急にしおらしくなっちゃうのって何かスゴクキュンキュンしちゃう。ギャップ萌えてヤツ？　なあ、めいタンでもちゃんと萌えキャラになれるんじゃない！　イジツてて全然飽きがこないわ、正にアタシ好みの最高のキヤラねっ！

「……もう良いだろう三島、気が済んだか？　早く着替えさせてくれ、こんな姿では外にも出られん、この顔にこびり付いた化粧もさっさと落とさねば……」

「ダメよお、ダメダメ！　アタシがせっかくコーディネートした美

学をそんなすぐに直しちゃダメっ！ アタシだけじゃもったいないわね、もっと多くの人にこの素晴らしい作品を見て……」

……あっそうだ！ 良い事考えちゃった。もつと見たい、彼女がモジモジ恥ずかしがる姿、アタシもつと見たいの！ アタシの小悪魔本能が更に覚醒しちゃった。更に加速、大暴走よ！ こうなったらもう誰もアタシを止められないわ、Somebody don't stop me!!

「ねえ、めいタン？ せつかくだからこの姿のまま一緒に帰らない？ どうせアナタこの後ヒマでしょ？ 途中で色々たくさんカワイイお店に寄って、アナタにもつと似合う素敵なファッションをプロデュースしてあげるわ！」

「……じよ、冗談ではない！ こんなみつともない格好で外を連れ回されるなど末代までの恥、公開処刑ものだ！ お前は私を自害に追い込むつもりか、三島!？」

「良いじゃん良いじゃん！ 恥ずかしいのは最初だけ、慣れれば周りの人間の視線がだんだん心地良くなってくるわよ！ さあ行きましょアタシのライバルさん、二人で世界中の男の子達の視線をこの手に独占するのよっ！」

「やめろ、両親に合わせる顔が無くなる！ 頼むから着替えさせてくれ、せめて何か下に履かせてくれ！ 強引に手を引っ張るな、外に出すな、私の姿をこれ以上世間の晒し者にしてくれるなあー!!」

いやあゝん、たまんなあゝい！ もえタンってホントはとっても恥ずかしい屋さんで女の子っぱくて、スッゴいカワイイ！ これは那奈以上の貴重な逸材ね、今度はママのお店に連れて行ってもつとエロカワイイ服を試着させてみようかしら？

翼と綾じゃないけど、アタシ達ってきつと最高のコンビ、最高のパートナーになれる気がするわ！ やっぱリイバルはお互いを刺激し合う関係でいないとね、競技でもオシャレでもプライベートでもっ！

「……おい、あれって三島と四月朔日だよな……？」

「……何だ四月朔日のあの格好、ちょっとヤバくね……？」

ほらほら見て見てめいタン、まだ校庭のグラウンドで練習してる他の部活の男子生徒達、みんなアタシ達の姿を見てヒソヒソ噂してるわよ？ みんなアタシ達に夢中、みんなアタシ達の愛の奴隷よ！ 視線が熱いわ、ビンビン感じちゃう、もおうたまんなあゝい、最高だわあゝ！

「……もう駄目だ、限界だ、ここから消えてしまいたい……」

「やだあ、めいタンったらそんな恥ずかしがってモジモジするともっとカワイくってもつとエロゝい！ 良いわよ良いわよあ、そういう仕草が更に男心の本能をくすぐるのよ、アタシそんな仕草、フェイクでもこんなに上手く出来なあゝい！ もえタンって生まれながらの破壊力バツグン萌え萌えG i r lだったのね、ほら、もっと顔を赤らめて小さくカワイくモジモジしてえ！」

「煽るな、触るな、近寄るな！ 生まれながらのどスケベ変態腐れ  
ビッチに可愛いなどと言われたくは無い！」

「はいはいスカートの裾押さえない、胸元も手で隠さない！ ブラ  
が透けても気にしない、パンツ見えても死にはしないわ！ これは  
ご褒美なの、女の子にモテない可哀想な男子達へのアタシ達からの  
慈愛のご褒美なのよ！ こんなまだまだ序の口よ、街中出たらこ  
んなもんじゃ済まないんだからっ！」

「この悪魔、ケダモノ、鬼畜ドS女！ 飛んできた砲丸に当たって  
死んでしまえ、そして地獄に堕ちろ！」

ハァーイ皆さぁーん！ もっともつと熱い視線でこの子を見てあげ  
てえー！ 生まれ変わった四月朔日芽タンの美しい姿を、エロカワ  
イイキュートなグラマラスボディを、ギリギリチラチラの危険が危  
ない絶対領域を！ 一人ぼっちで最悪の放課後だと思ってたのが一  
転、最高の一日になってストレス発散出来たアタシはすっかり有頂  
天。那奈の異変や出番の少なさへの不満なんてどこかにキレイに消  
え失せちゃったわ！

作者さん、こんな素敵なオモチャを、いゝえ素敵なBest fr  
iendをアタシに与えてくれてどうもThank youねっ！  
これなら明日から翼がいなくなつて全然平気よ、ソフィーのしご  
きにだって全然耐えられるわ！ やっぱり生きてるって最高ね、や  
っぱり世界はアタシを中心に回ってるのよ！ アタシのBible  
にはEvery day, every time, 『Very h  
appy』しか存在してないのよっ！



「さあめいタン、この調子でアタシ達はこれから一緒に世界の頂点を目指すのよ！　まずは国内インターハイ制覇、そしてアジア大会、オリンピックの金メダルを掴み取るの！　でもNo.1になるのはアタシ、アナタは常に二番手止まりの引き立て役だけだねえ！　さあ早く帰ろつ、早く一緒に帰りましょ！」

「……ちよつと待ってくれ、そつちに行ったら体育館が……！　頼む待ってくれ、待ってくれ三島あつ！」

「えつ？　何よめいタン、真つ赤だった顔が一転して急に真つ青よ、どうしたのお？」

「……あわ、あわわわわ……、寄りによってこんな時に、あれは、あそこに居るのはあ！」

「……でもお、そんな破壊力バツグンのめいタンの萌え萌えパワーはアタシの最高の一日をぶち壊す一番望んでない余計な邪魔者まで呼び寄せちゃったのよ。スカートの裾を必死に押さえながら内股でヘナヘナ歩く彼女を無理矢理引っ張って体育館の真横を通り過ぎようとした時、中から出てきたくっさい柔道着を着た汗まみれの獰猛で野蛮な森のクマさんに出会ってしまったの。

「……ん？　何者と思いやお前、良く見れば四月朔日芽ではないか」

「……さ、澤村、澤村一茶あ！！」

そつ、アタシがこの世界で最も忌み嫌う最低の人間、アタシの為に

あるはずのこの世界の唯一の邪魔者、ガン細胞！ 頭の中まで筋肉ガチガチの柔道バカ、あの澤村一茶が突然ノコノコとアタシ達の目の前に現れたのよ！ ああもうヤダー気に不快、あともう少いで校門の外だつていうのに、何でここでコイツと顔を合わせなきゃならないのよお！？

「おい四月朔日、お前校内でそんな破廉恥な物を纏つて一体何事だ？ 気でも触れたか？ 物の怪にでも取り憑かれたか？ それとも自分の意志を曲げて道を踏み外したのか？」

「……い、いや、違うんだ、違うんだ澤村！ これには色々と紆余曲折あつてだな、だからその……」

「惨めなものだ、お前だけはそんな淫らな女ではないと思っていたがすっかりと落ちぶれたな、俺は失望したぞ、四月朔日萌」

「だあかあらあ！ 違うんだ！ 私は自ら好き好んでこんな格好をしてるんじゃない！ 頼む信じてくれ、違うんだ、澤村あ！！」

後日他の部員から話を聞いたんだけどお、どうやらめいタンとこの柔道ゴリラは小学校中学校とずっと同じだった昔からの同級生らしいのよ。何でもお互い小さい頃から将来有望なスポーツ少年少女として地域でも有名で、中学時代はそれぞれ男子女子を代表するインタージュニアハイ常連選手だったんだって。どうりで喋り方がよく似てると思つたわ。きつと堅物な教師が指導者に影響されて喋り方を写されちゃったのね。

「全く、近頃の若者の身なりの醜さは非常に嘆かわしいものだ、  
いとも簡単に周囲に流され男はズボンをずらして腰から下着を晒し、  
女は恥も弁えずこれ見よがしに胸元や下腹部を強調したがる、古き  
良き時代の日本人の奥ゆかしさとは一体何処に消えてしまったのや  
ら、ブツブツ……」

「ちょっと、ちょっと待ちなさいよそのバカゴリラ！  
アタシを無視して勝手に話を進めんじゃないわよ、そのくっさい息  
でアタシのめいタンに馴れ馴れしく話しかけるんじゃないわよ！  
アンタみたいなブサ男がアタシ達学園のスーパーアイドルと仲良く  
お喋りするなんて一万光年早いだよ、Go home！」

「またお前か」

「またとは何よまたとは！ 悪い！？ またアタシで何か問題でも  
お！？ ホントアンタって人に対する礼儀や言葉使いが全然なっ  
てないわねっ！ 少しはGreat britain gentlemanを見習ってLadyに対するマナーでも学習したらどうな  
の！？ これだから東方島国のYellow monkeyどもは  
……！」

「なるほどそういう事か、全て理解した、こんな淫魔に取り憑かれ  
るとはお前も随分と災難だったな、四月朔日」

「淫魔ですってえ！？ おいコラ表出るこのFuckin' bea  
st！！ 今日という今日はきっちりテメエと白黒決着つけてやる  
！！」

「すでにここは表だ、このクソビッチヒステリック淫魔野郎」

「キイッーーーー！！ Fuck / fuck / fuuuuck !  
！ ぶっ殺す！ テメエマジでぶっ殺してやるううう！！」

その時だったわ。アタシが新燃岳の様にいつもの大噴火寸前になっていると、隣にいるめいタンがグッタリと肩を落としてその場に力無くヘナヘナと座り込んだの。

「……終わった……」

「……えっ？ ヤダちよつとめいタン、どうしたの!？」

その顔は信号機みたいにさっきの真っ青からまた真っ赤に染まって、頭からはアタシよりも熱い湯気がモクモク立ってたわ。まるで熱中症にかかった様な想定外のリアクションにアタシ、目の前のゴリラに対する怒りも忘れてすっかり驚いちゃって……。

「……ねえ、大丈夫めいタン？ 具合悪いの？ この汚らしい男の臭いに気分でも悪くなったの？」

「……見られた、こんなみつともない姿を、澤村に……」

「えっ？」

「終わったあ！ 私の人生終わったあああ！！ うわあああああ  
ああん！！！！」

「ちょ、ちよつと！？　ちよつと待つてよめいターン！？」

突然、立ち上がったと思っただけ絶叫したまま走り去ってどこかに消えていつちゃった……。あんなにスカート捲れるの嫌がってたのに大股広げて全力疾走で。チリズムどころの騒ぎじゃない、スカート捲れて完全に丸出しよ。あんなのアタシでも恥ずかしくてとても出来ないわ。やるじゃない彼女、さすがはこのアタシのライバルを自称するだけあるわね。四月朔日芽、恐ろしい子……！

「……急に吹っ切れちゃってどうしたのかしら？　あんな変貌を遂げるまで何があの子をあそこまで追い詰めちゃったのかなあ？」

「明らかに前が原因だ、この魑魅魍魎の淫乱疫病神め」

「何だとコラテメエやっぱり今日こそきつちり白黒決着つけてやる表出るこのクソ野郎おおお！！」

「だからここはとくに表だと何度」

「Fuuuuuuuuuuuuck!!!!!!」

一転一転また一転、結果的に今日はアタシにとって最悪の一日になったわ。結局、あのクソゴリラとは日が暮れるまでずっと口喧嘩する羽目になっちゃうし、なぜか次の日からめいタンはアタシを見るなり顔引きつってソッコーで逃げ出しちゃうし、何でか良くわかんないけどソフィーからはスゴい剣幕でクドクド説教されちゃうしい！

一体アタシの何が悪いのよお！？ やっぱりこれはイジメよ、妬みよ、謂われ無き迫害行為だわ！ アタシがこんなにキレイのはそんなに罪な事だとも言うの！？ でも負けない、アタシ絶対に負けない！ この世界はアタシを中心に回ってるの、この物語の主役はアタシ以外有り得ないのよ！ だからいい事、無能作者！ これからももっとアタシの出演をM a n y , m a n yたくさん一杯カワイく増やさないよねっ！！

## 第82話 天頂バス（後書き）

突然ですがご報告とお詫びがあります。

約三年間ほど執筆を続け、私のライフワークの一環としてきました本作の連載ですが、今回をもちまして無期限の連載休止をさせて戴く事になりました。

理由は三つあります。

一つ目は長期の創作活動における作品方向性の迷走。

執筆開始序盤こそは事前に何話か書き上げ準備を整えられていたが、自身の私生活の多忙によりここ数年は早急に書き下ろした文章をそのまま投稿する粗末なものになってしまいました。

その為、強引に連載を継続する目的だけで当初予定していなかったシナリオや設定を次々と付け焼き刃の様に追加せざるを得なくなり、いつまで経っても作品完結の見えない悪循環に陥ってしまいました。最近では『自分が書きたかったのはこんな話だったのか』と自問自答する毎日を送っていました。この状況で自身が納得出来る作品を書き上げられるとは到底思えません。改めて長編小説の難しさを痛感しております。

なので、しばらくお時間を戴いてもう一度内容を練り直し推敲を重ね、改善を実施したいと考えております。現在のストーリー展開で連載を継続出来るなら一番良いのですが、もしかすると一度全てを白紙に戻し、改めて書き直すかもしれません。

二つ目の理由は自身の体調不良によるものです。

私ミラージュは今から一年ほど前に俗にいう生活習慣病の一つを発症してしまい、これまでは何とか投薬での治療で事無きを得てきましたが、先頃ついに担当医から『このままでは』という通告を受け新たな治療法を施される事になりました。

場合によっては入院、最悪だといつ身体各部に異常を来してもおかしくない状態だそうです。それでも私自身はあと十年ほどは生きていられるんじゃないかと樂觀してたりしますが、今現在病状が悪化すると私生活においても非常に困ってしまう事情が多い為、少しの間落ち着くまで治療に専念させて戴きたいのです。

自身の不摂生な生活によりこの様なご迷惑をかけてしまう事を大変情けなく思っております。逆に入院してしまった方が時間が作れてより執筆活動に専念出来るんじゃないかと頭によぎった時もありますが、さすがにそんな経済余裕はどこにも無いので……。皆様、清涼飲料水の飲み過ぎには十分ご注意ください。私ミラージュからの教訓です。

そして三つ目の理由。これはこの作品を読んで下さっている数少ない皆様には大変申し訳無い、土下座しても謝らなければならない事なんです……。

実は現在、私ミラージュの頭の中には本作『Be Ambitious!』以外にもう一つの作品が着々と構成されている状況であります。上記に述べた自身の体調から先にこちらを書き残しておきたいという身勝手な願望があります。先の通り本作の展開は現在迷走中で、果たして自身の体調が無事のまま完結まで辿り着けるかどうか微妙な状態なので……。

全くもって無責任且つ理不尽な都合ばかりで誠に申し訳ありません。



ただでさえ最近是不定期更新になってしまっていたにもかかわらず、それでもこの様な粗悪な作品に目を通して下さっていた読者の方がいらっしやったのはアクセス解析を見て確認しております。謝罪と同時に感謝の言葉しかありません。有難うございます。そして、本当に申し訳ありません。

しかし、私ミラージュはこの作品を完結させる事を決して諦めてはいません。懸命に治療に励み体調を整え、もう一つの創作を早々に片付け終わらせたら必ず本作の執筆を再開してみせます。それまで少しの間だけお時間を下さい。どうか宜しくお願い致します。

改めて、自身の都合によりこのような状況になってしまった事を心からお詫びさせて戴きます。本当に、本当に申し訳ありません。

2011年2月5日 ミラージュ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2537d/>

---

Be Ambitious!!

2011年3月11日09時15分発行